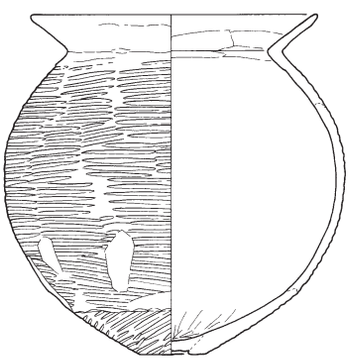
市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第24集

上総国分寺台遺跡調査報告 XXII

市原市中台（なかで）遺跡

（本文編）



２０１３

市 原 市 教 育 委 員 会

序　文

市原市は房総半島の中央部に位置し、市内を南北に貫流する養老川がもたらした肥沃な平野と緑豊かな山間部など、恵まれた自然環境にあり、貴重な遺跡が数多く残されています。特に「国分寺台」には、国指定史跡の上総国分僧寺・尼寺跡をはじめ、東京湾東岸域を代表する大型貝塚である西広貝塚や根田祇園原貝塚、東日本最古の古墳として知られる神門古墳群、「王賜」銘鉄剣が出土した稲荷台1号墳など、全国的にも著名な遺跡が存在する地域となっています。

土地区画整理事業により数多くの遺跡が失われた「国分寺台」ではありますが、現在は閑静な住宅地となり、中門や回廊が復元され、ガイダンス施設も併設された上総国分尼寺跡などは、市民の学習の場としてはもとより、憩いの場としても利用されております。

中台遺跡は上総国分僧寺跡と同一地に位置し、僧寺創建以前に形成された遺構群を対象としております。遺跡からは、弥生時代の終わりから古墳時代のはじめ頃、いわゆる邪馬台国時代を中心とした時期の遺構が発見され、畿内や北陸などの特徴をもつ外来系土器が多く出土したことから、遠距離間交流の拠点としてかねてより注目されてまいりました。また、棟持柱をもつ大型建物とこれを取り囲む方形区画が新たに発見されるなど、貴重な調査成果を得ることができました。昭和50年代に行われました発掘調査から長い年月を要しましたが、各方面からのご助力を賜り、今回ようやく報告書刊行の運びとなりました。本書が、学術的な資料としてはもとより、高まりつつある市民の地域史研究、さらには埋蔵文化財保護意識向上の一助となれば幸甚に存じます。

最後に、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、多大なご尽力を賜りました、文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課、旧市原市国分寺台土地区画整理組合、旧上総国分寺台遺跡調査団、旧財団法人市原市文化財センターならびに地元関係者の皆様方に、厚く御礼申し上げます。

平成25年1月

市原市教育委員会
教育長　白鳥秀幸

例　言

1　本書は、千葉県市原市惣社4丁目6番地他に所在する中台（なかで）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は市原市教育委員会が国庫補助事業として計画し、上総国分寺台遺跡調査団（一部平野考古学研究所）が昭和49・50・53～58年に実施した。これに昭和41年～43年にかけて行われた早稲田大学と、平成元・2年に行われた財団法人市原市文化財センターによる調査成果を加えた。整理事業は市原市教育委員会が文化庁の国庫補助事業として採択を受け、埋蔵文化財調査センターが実施した。また、報告書刊行は市原市教育委員会が行った。

3　発掘調査で確認された遺構のうち、上総国分僧寺創建直前段階以降を「上層遺構」、それ以前を「下層遺構」としており、本書は「下層遺構」を対象としている。

4　本書に収録した各地区の調査組織、調査期間、面積、担当者は以下のとおりである。地番は区画整理以前のものを用いた。なお、上総国分寺址調査団および上総国分寺台遺跡調査団による発掘調査は、団長を務めた滝口 宏の指導のもと実施された。上総国分寺台遺跡調査団による調査はI次からIX次にわたる。

主要伽藍他　惣社字堂ノ前・堂ノ後他

昭和41年～43年　上総国分寺址調査団　担当　早稲田大学考古学研究室

I（南辺部）（2,000㎡）惣社字殿屋敷

昭和49年　平野考古学研究所　担当　谷島一馬・浅利幸一

II・III（寺域確認調査）（1,000㎡）惣社字太子堂812他

昭和49年～50年12月27日　上総国分寺台遺跡調査団　担当　須田　勉

IV（北辺部）（8,500㎡）惣社字上クボミ833他

昭和53年1月5日～54年3月31日　上総国分寺台遺跡調査団　担当　須田　勉・半田堅三

V（西辺部）（8,500㎡）惣社812他

昭和54年5月1日～55年3月31日　上総国分寺台遺跡調査団　担当　須田　勉・谷川章雄

VI（東南部・南辺部・殿屋敷地区）（30,000㎡）惣社字アラク1002番地他・惣社995地先

昭和55年5月1日～56年3月31日　上総国分寺台遺跡調査団　担当　須田　勉・米田耕之助

VII（南辺部）（8,000㎡）惣社字殿屋敷他

昭和56年～57年　上総国分寺台遺跡調査団　担当　須田　勉・田村明義・鈴木英啓・永野康夫

VIII（北辺部・東南部）（10,000㎡）惣社845番地他・惣社893番地他

昭和56年5月1日～57年3月31日　上総国分寺台遺跡調査団　担当　須田　勉・浅利幸一

IX（北辺部）（4,000㎡）惣社847他

昭和57年4月1日～58年3月31日　上総国分寺台遺跡調査団　担当　須田　勉

東辺部（2,000㎡）惣社899－2地先他

昭和58年5月1日～59年1月31日　上総国分寺台遺跡調査団　担当　須田　勉

セ103（薬師堂地区）（470㎡）惣社911他

平成元年7月1日～10月11日　財団法人市原市文化財センター　担当　浅利幸一

セ116地区（410㎡）惣社字壱町畑

平成２年２月19日～3月31日　財団法人市原市文化財センター　担当　宮本敬一

セ117地区（440㎡／4,400㎡）惣社字壱町畑1,787

平成２年４月１日～8月31日　財団法人市原市文化財センター　担当　高橋康男

セ118（薬師堂地区）（260㎡）惣社911他

平成２年４月２日～5月31日　財団法人市原市文化財センター　担当　忍澤成視

本書に収録した調査対象地の総面積（実測値）は69,782㎡で、その内訳は以下のとおりである。

早稲田大学調査地区	1,331㎡	平野調査地区（南辺部）	744㎡
寺域確認調査	1,717㎡	北辺部	20,520㎡
東辺部	4,050㎡	東南部	19,625㎡
南辺部	9,705㎡	殿屋敷地区	1,760㎡
西辺部	8,935㎡	セ103・118（薬師堂地区）	404㎡
セ116地区	434㎡	セ117地区	522㎡
市原市教育委員会試掘	35㎡		

5　整理作業の期間と担当、内容は以下のとおりである。

平成19年４月23日～20年３月24日　担当　小橋健司

平成20年４月15日～21年３月27日　担当　大村　直・牧野光隆

平成21年４月13日～22年３月26日　担当　大村　直・櫻井敦史

平成22年４月13日～23年３月28日　担当　櫻井敦史・鶴岡英一

平成23年４月13日～24年３月28日　担当　鶴岡英一・櫻井敦史

平成24年４月13日～25年１月18日　担当　鶴岡英一

なお、上総国分寺台遺跡調査団の調査地区については、発掘調査と併行して、担当者による基礎整理が実施されている。これについては調査概要報告書が刊行されているので、本書末尾の関係書籍一覧を参照されたい。

6　本書の原稿執筆は、第１章と第２・３章の遺構部分を櫻井・鶴岡、これ以外を鶴岡が担当し、編集は鶴岡が行った。なお、各遺構の時期決定は大村の協力を得て行い、貝類の同定・計測は当センターの忍澤成視が行った。

7　本書に掲載した出土資料及び調査記録は、早稲田大学調査地区部分を除き、市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。

8　本書の執筆にあたり、以下の方々からご指導、ご協力をいただいた。記して謝意を表します。

小笠原永隆　白井久美子　西川博孝　比田井克仁　広瀬和雄　領塚正浩（敬称略）

凡　例

1　各調査地区は、上総国分僧寺の伽藍地を中心に、北側を「北辺部」、北東から東側を「東辺部」、東側から南東側を「東南部」、南側を「南辺部」、南西側を「殿屋敷地区」、西側から北西側を「西辺部」と呼称しており、本書でもこの名称を用いた。

2　本書で使用した遺構番号は、発掘調査時に使用されたものを踏襲した。ただし、番号が付けられていなかった遺構や整理作業段階で遺構と認定したものについては、各遺構種の最終番号に続く数字を新規に付与した。

3　各調査地区の掲載順は遺構番号を優先させ、北辺部、西辺部、殿屋敷地区、東南部、南辺部、セ116・117地区の順とした。ただし、地区によっては複数回の調査が行われており、新規に遺構番号を付与したものもあるため、すべてが番号順とはなっていない。

4　遺構図面中の標高は海抜高、方位は真北である。

5　本書で使用した遺構実測図の縮尺は、竪穴建物・掘立柱建物 1／80、炉穴・土坑 1／60、古墳 1／100、溝 1／150 を基本とした。

6　遺物実測図の縮尺は、土器1／4・1／3、石器1／2・2／3、土製品1／2・1／3、石製品2／1・2／3、骨角製品2／3を基本とした。

7　遺構一覧（Tab.1）を除く表関係は、すべて添付DVD−ROMのみの収録とした。DVD−ROMのフォーマットはWindows、Macに対応する。ファイル形式はXLS、CSV、TXT（タブ区切り）形式で、ファイル形式ごとにフォルダに格納している。本編についてもPDF形式で収録した。PDF設定は、Adobe Acrobat 8による「標準」を基本とする。閲覧のためにはAdobe Acrobat Reader5.0以降（無償版）ないしAdobe Acrobat（製品版）が必要である。また、遺物写真図版についてはRGBカラー版のPDFを追加した。詳細は巻末を参照されたい。

8　弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期区分は、当該地域編年案（大村 2004・2009）により行った。地域形式名は以下のとおりである。

弥生時代後期　中葉　山田橋1式　後葉　山田橋2式

弥生時代終末期（古墳時代早期）　前半　中台1式　後半　中台2式

古墳時代前期　前葉　草刈1式　中葉　草刈2式　後葉　草刈3式

9　遺跡の基本層序は以下のとおりである。

Ia 現代の撹乱表土層　黒褐色土　暗褐色土を多量、ローム粒をわずかに含む

Ic 中・近世以降の撹乱表土層　黒褐色土　暗褐色土を多量、ローム粒をわずかに含む

IIa 古代の表土層　黒褐色土

IIb 富士新規テフラ　暗茶褐色土

IIc 黒褐色土

IId ローム漸移層

III ソフトローム層

IV ハードローム層

本 文 目 次

序　文
例　言
凡　例
第１章　調査の経緯と概要 ……1
　第１節　調査に至る経緯 ……1
　第２節　遺跡の立地と概要 ……1
第２章　縄文時代の遺構と遺物……20
　第１節　炉　穴……20
　第２節　土　坑……69
　第３節　遺構外出土の遺物……81
　　（１）　土　器 ……81
　　（２）　土製品 ……92
　　（３）　礫 ……94
第３章　弥生・古墳時代の遺構と遺物 ……100
　第１節　竪穴建物 ……100
　第２節　掘立柱建物 ……509
　第３節　土　坑 ……509
　第４節　古　墳 ……514
　第５節　溝 ……534
　第６節　遺構外出土の遺物 ……536
　　（１）　土　器 ……536
　　（２）　石製品 ……541
　　（３）　土製品 ……541
　　（４）　骨角製品 ……541
　　（５）　石　器 ……541
第４章　貝層サンプルの分析 ……560
　第１節　貝層の概要と分析方法 ……560
　第２節　分析結果 ……560
第５章　総括 ……563
　第１節　縄文時代早期の遺構分布 ……563
　第２節　竪穴建物の規模と平面形態 ……563
　　（１）　床面積 ……563
　　（２）　平面形態 ……568
　第３節　外来系土器の分布状況 ……569
　　（１）　タタキ甕 ……569
　　（２）　有段口縁甕 ……572
　　（３）　Ｓ字状口縁甕 ……572
　　（４）　受口状口縁甕 ……573
　第４節　弥生時代後期から古墳時代前期の遺構変遷 ……573
　　（１）　弥生時代後期後半 ……573
　　（２）　弥生時代終末期 ……578
　　（３）　古墳時代前期 ……579
　第５節　方形区画と近接棟持柱建物 ……579
　　（１）　遺構の時期 ……579
　　（２）　遺構の性格 ……581

挿図目次

Fig. 1　中台遺跡位置図 ……2
Fig. 2　中台遺跡現状位置図 ……3
Fig. 3　国分寺台地区と周辺の遺跡群 ……5・6
Fig. 4　中台遺跡と周辺遺跡全体図 ……7・8
Fig. 5　各調査地区割図 ……10
Fig. 6　中台遺跡グリッド配置図 ……11・12
Fig. 7　北辺部遺構配置図 ……13・14
Fig. 8　西辺部遺構配置図 ……15・16
Fig. 9　殿屋敷地区、南辺、東南部遺構配置図 ……17・18
Fig. 10　セ116・117地区遺構配置図 ……19
Fig. 11　縄文遺構配置図 ……21
Fig. 12　北辺部縄文遺構配置 ……22
Fig. 13　西辺部（1）縄文遺構配置 ……23
Fig. 14　西辺部（2）、セ116・117地区縄文遺構配置 ……24
Fig. 15　殿屋敷地区、南辺部（1）縄文遺構配置 ……25
Fig. 16　南辺（2）、東南部（1）縄文遺構配置 ……26
Fig. 17　東南部（2）縄文遺構配置……27
Fig. 18　炉穴1564号遺構、炉穴1565号遺構、炉穴1567号（1）遺構、炉穴1568号（1）遺構 ……29
Fig. 19　炉穴1567号（2）遺物、炉穴1568号（2）遺物、炉穴1574号遺構遺物、炉穴1575号遺構遺物 …30
Fig. 20　炉穴1864号遺構、炉穴1865号遺構 ……31
Fig. 21　炉穴0270号・1868号・1885号遺構遺物、炉穴0299号遺構遺物、炉穴0300号遺構遺物 ……33
Fig. 22　炉穴0303号遺構遺物、炉穴0304号遺構遺物 …35
Fig. 23　炉穴0321号遺構遺物 ……36
Fig. 24　炉穴1869号遺構、炉穴1871号遺構、炉穴1872号遺構 ……37
Fig. 25　炉穴0586号遺構遺物、炉穴0587号遺構遺物 …39
Fig. 26　炉穴0588号（1）遺構遺物 ……40
Fig. 27　炉穴0588号（2）遺物 ……41
Fig. 28　炉穴0589号遺構遺物、炉穴0590号遺構、炉穴0591号（1）遺構遺物 ……43
Fig. 29　炉穴0591号（2）遺物 ……44
Fig. 30　炉穴0592号（1）遺構遺物 ……46
Fig. 31　炉穴0592号（2）遺物、炉穴0601号遺構遺物、炉穴0602号遺構、炉穴0626号遺構遺物 ……47
Fig. 32　炉穴0603号遺構、炉穴0604号遺構、炉穴0616号遺構遺物、炉穴0619号遺構遺物 ……49
Fig. 33　炉穴0623号遺構遺物、炉穴0625号遺構遺物、炉穴0629号遺構遺物、炉穴1839号遺構遺物 ……51
Fig. 34　炉穴0635号遺構、炉穴0638号遺構、炉穴0647号遺構遺物 ……52
Fig. 35　炉穴0653号遺構、炉穴0663号遺構、炉穴0718号遺構、炉穴0843号遺構 ……54
Fig. 36　炉穴0540号遺構遺物、炉穴0541号遺構遺物 …56
Fig. 37　炉穴0779号遺構、炉穴0780号遺構、炉穴1217号遺構遺物 ……57
Fig. 38　炉穴1223号（1）遺構遺物、炉穴1224号（1）遺構 ……59
Fig. 39　炉穴1223号（2）遺物、炉穴1224号（2）遺物 ‥60
Fig. 40　炉穴1246号遺構遺物、炉穴1248号遺構遺物 ‥62
Fig. 41　炉穴1249号遺構遺物、炉穴1251号遺構遺物、炉穴1847号（1）遺構遺物 ……64
Fig. 42　炉穴1847号（2）遺物 ……65
Fig. 43　炉穴1848号遺構遺物、炉穴1849号遺構遺物、炉穴1850号遺構遺物 ……66
Fig. 44　炉穴1851号遺構遺物、炉穴1852号遺構遺物 …67
Fig. 45　炉穴1783号遺構、炉穴1786号遺構 ……68
Fig. 46　土坑1569号遺構遺物 ……70
Fig. 47　土坑0244号遺構遺物、土坑0302号遺構遺物 …71
Fig. 48　土坑0526号遺構遺物、土坑1870号遺構 ……72
Fig. 49　土坑0614号遺構遺物、土坑0615号遺構遺物 …74
Fig. 50　土坑0637号遺構、土坑0986号遺構 ……75
Fig. 51　土坑1179号遺構遺物、土坑1189号遺構遺物、土坑1193号遺構 ……76
Fig. 52　土坑1218号遺構、土坑1244号遺構遺物、土坑1853号遺構 ……78
Fig. 53　土坑1854号遺構遺物、土坑1855号遺構遺物、土坑1856号遺構遺物 ……79
Fig. 54　土坑1857号遺構遺物、土坑1858号遺構 ……80
Fig. 55　土坑1882号遺構、土坑1883号遺構 ……81
Fig. 56　遺構外出土縄文土器　北辺部 ……83
Fig. 57　遺構外出土縄文土器　西辺部（1） ……85
Fig. 58　遺構外出土縄文土器　西辺部（2） ……86
Fig. 59　遺構外出土縄文土器　西辺部（3） ……87
Fig. 60　遺構外出土縄文土器　殿屋敷地区 ……88
Fig. 61　遺構外出土縄文土器　東南部 ……89
Fig. 62　遺構外出土縄文土器　南辺部（1） ……90
Fig. 63　遺構外出土縄文土器　南辺部（2） ……91
Fig. 64　遺構外出土縄文土器　南辺部（3） ……92
Fig. 65　遺構外出土縄文時代　土製品（1） ……93
Fig. 66　遺構外出土縄文時代　土製品（2） ……94
Fig. 67　グリッド別縄文土器（早期）出土重量 ……95
Fig. 68　グリッド別縄文土器（前期）出土重量 ……96
Fig. 69　グリッド別縄文土器（中期）出土重量 ……97
Fig. 70　グリッド別縄文土器（後期）出土重量 ……98
Fig. 71　グリッド別縄文土器（礫）出土重量 ……99

Fig. 72　弥生・古墳遺構配置 ……101
Fig. 73　北辺部（1）弥生遺構配置 ……102
Fig. 74　北辺部（2）弥生遺構配置 ……103
Fig. 75　北辺部（3）弥生遺構配置 ……104
Fig. 76　西辺部（1）弥生遺構配置 ……105
Fig. 77　西辺部（2）、セ116・117地区（1）弥生遺構配置 ……106
Fig. 78　西辺部（3）、セ116・117地区（2）弥生遺構配置 ……107
Fig. 79　セ116・117（3）、殿屋敷地区弥生遺構配置 …108
Fig. 80　南辺、東南部（1）弥生遺構配置 ……109
Fig. 81　東南部（2）弥生遺構配置 ……110
Fig. 82　竪穴0001号遺構遺物 ……111
Fig. 83　竪穴0003号遺構遺物 ……112
Fig. 84　竪穴0005号遺構遺物 ……113
Fig. 85　竪穴0006号遺構遺物、竪穴0035号遺構 ……114
Fig. 86　竪穴0007号遺構遺物 ……115
Fig. 87　竪穴0008号（1）遺構遺物 ……117
Fig. 88　竪穴0008号（2）遺物 ……118
Fig. 89　竪穴0009号遺構遺物、竪穴0010号遺構遺物‥119
Fig. 90　竪穴0012号遺構遺物 ……121
Fig. 91　竪穴0015号（1）遺構遺物 ……122
Fig. 92　竪穴0015号（2）遺物 ……123
Fig. 93　竪穴0016号遺構遺物 ……124
Fig. 94　竪穴0019号遺構遺物 ……125
Fig. 95　竪穴0021号遺構遺物 ……126
Fig. 96　竪穴0022号遺構遺物、竪穴0023号遺構遺物‥128
Fig. 97　竪穴0025号遺構遺物 ……129
Fig. 98　竪穴0026号遺構遺物 ……130
Fig. 99　竪穴0027号遺構遺物 ……131
Fig.100　竪穴0028号遺構遺物 ……132
Fig.101　竪穴0036号遺構遺物 ……133
Fig.102　竪穴0037号（1）遺構遺物 ……134
Fig.103　竪穴0037号（2）遺物 ……135
Fig.104　竪穴0038号遺構遺物 ……137
Fig.105　竪穴0040号遺構遺物、竪穴0041号遺構遺物‥138
Fig.106　竪穴0043号遺構遺物 ……139
Fig.107　竪穴0045号遺構遺物 ……140
Fig.108　竪穴0046号遺構、竪穴0047号遺構遺物、竪穴0049号遺構 ……142
Fig.109　竪穴0050号遺構遺物 ……143
Fig.110　竪穴0051号遺構遺物 ……144
Fig.111　竪穴0052号遺構遺物 ……146
Fig.112　竪穴0053号遺構遺物 ……147
Fig.113　竪穴0055号遺構遺物 ……148
Fig.114　竪穴0056号遺構遺物 ……149
Fig.115　竪穴0057号遺構遺物 ……150
Fig.116　竪穴0059号遺構遺物 ……151
Fig.117　竪穴0060号遺構遺物、竪穴0061号（1）遺構遺物 ……153
Fig.118　竪穴0061号（2）遺物、竪穴0062号遺構遺物、竪穴0063号遺構 ……155
Fig.119　竪穴0064号遺構遺物、竪穴0065号遺構……156
Fig.120　竪穴0069号（1）遺構、竪穴0070号（1）遺構 ……157
Fig.121　竪穴0069号（2）遺物、竪穴0070号（2）遺物 ……158
Fig.122　竪穴0072号遺構遺物 ……160
Fig.123　竪穴0073号遺構遺物、竪穴0077号遺構遺物‥161
Fig.124　竪穴0087号遺構遺物、竪穴0090号遺構……162
Fig.125　竪穴0091号遺構遺物 ……164
Fig.126　竪穴0093号遺構遺物 ……165
Fig.127　竪穴0105号遺構遺物 ……166
Fig.128　竪穴0106号（1）遺構 ……167
Fig.129　竪穴0106号（2）遺構遺物 ……168
Fig.130　竪穴0111号遺構遺物、竪穴0117号遺構遺物‥170
Fig.131　竪穴0118号遺構遺物 ……171
Fig.132　竪穴0119号遺構遺物 ……172
Fig.133　竪穴0123号遺構遺物、竪穴0145号遺構 ……174
Fig.134　竪穴0149号遺構、竪穴0150号（1）遺構遺物‥176
Fig.135　竪穴0150号（2）遺物、竪穴0151号遺構遺物‥177
Fig.136　竪穴0152号遺構遺物、竪穴0153号遺構……179
Fig.137　竪穴0154号遺構、竪穴0155号遺構 ……180
Fig.138　竪穴0157号遺構遺物 ……181
Fig.139　竪穴0159号遺構遺物 ……182
Fig.140　竪穴0160号遺構遺物 ……183
Fig.141　竪穴0161号遺構遺物、竪穴0168号遺構遺物‥185
Fig.142　竪穴1301号遺構遺物、竪穴1302号遺構、竪穴1387号遺構 ……187
Fig.143　竪穴1304号遺構遺物 ……188
Fig.144　竪穴1307号遺構遺物、竪穴1308号遺構……189
Fig.145　竪穴1311号（1）遺構……191
Fig.146　竪穴1311号（2）遺物……192
Fig.147　竪穴1312号（1）遺構遺物 ……193
Fig.148　竪穴1312号（2）遺物……194
Fig.149　竪穴1314号遺構遺物 ……195
Fig.150　竪穴1317号（1）遺構 ……196
Fig.151　竪穴1317号（2）遺物 ……197
Fig.152　竪穴1319号（1）遺構遺物 ……198
Fig.153　竪穴1319号（2）遺物、竪穴1327号遺構遺物、竪穴1329号遺構 ……199
Fig.154　竪穴1336号遺構遺物 ……201

Fig.155　竪穴1337号遺構遺物 ……202
Fig.156　竪穴1340号遺構遺物 ……203
Fig.157　竪穴1341号遺構遺物 ……204
Fig.158　竪穴1346号遺構遺物 ……205
Fig.159　竪穴1347号遺構、竪穴1350号遺構遺物 ……206
Fig.160　竪穴1352号遺構遺物 ……208
Fig.161　竪穴1355号遺構遺物 ……209
Fig.162　竪穴1357号遺構遺物 ……210
Fig.163　竪穴1360号遺構遺物 ……211
Fig.164　竪穴1362号遺構遺物、竪穴1363号遺構遺物‥212
Fig.165　竪穴1365号遺構、竪穴1366号遺構遺物 ……214
Fig.166　竪穴1367号（1）遺構 ……215
Fig.167　竪穴1367号（2）遺物 ……216
Fig.168　竪穴1370号遺構遺物 ……217
Fig.169　竪穴1412号遺構遺物 ……219
Fig.170　竪穴1447号遺構遺物 ……220
Fig.171　竪穴1486号遺構遺物、竪穴1541号遺構遺物、竪穴1542号遺構遺物 ……221
Fig.172　竪穴1551号（1）遺構遺物 ……223
Fig.173　竪穴1551号（2）遺物 ……224
Fig.174　竪穴1552号（1）遺構遺物 ……225
Fig.175　竪穴1552号（2）遺物、竪穴1553号遺構 ……226
Fig.176　竪穴1555号遺構遺物 ……227
Fig.177　竪穴1556号（1）遺構 ……228
Fig.178　竪穴1556号（2）遺物 ……229
Fig.179　竪穴1556号（3）遺物 ……230
Fig.180　竪穴1556号（4）遺物 ……231
Fig.181　竪穴1558号遺構遺物 ……232
Fig.182　竪穴1566号遺構 ……233
Fig.183　竪穴1570号遺構遺物 ……234
Fig.184　竪穴1571号遺構遺物 ……235
Fig.185　竪穴1572号遺構 ……236
Fig.186　竪穴1573号遺構遺物 ……238
Fig.187　竪穴1578号遺構遺物 ……239
Fig.188　竪穴1580号遺構遺物 ……240
Fig.189　竪穴1581号（1）遺構遺物 ……241
Fig.190　竪穴1581号（2）遺物 ……242
Fig.191　竪穴1581号（3）遺物 ……243
Fig.192　竪穴1581号（4）遺物 ……244
Fig.193　竪穴1583号遺構遺物 ……245
Fig.194　竪穴1584号遺構遺物、竪穴1585号遺構 ……247
Fig.195　竪穴1586号（1）遺構遺物 ……248
Fig.196　竪穴1586号（2）遺物 ……249
Fig.197　竪穴1587号遺構遺物、竪穴1590号遺構 ……250
Fig.198　竪穴1592号（1）遺構遺物 ……251
Fig.199　竪穴1592号（2）遺物 ……252
Fig.200　竪穴1604号遺構遺物 ……253
Fig.201　竪穴1605号（1）遺構 ……255
Fig.202　竪穴1605号（2）遺物 ……256
Fig.203　竪穴1605号（3）遺物 ……257
Fig.204　竪穴1606号遺構遺物、竪穴1619号遺構遺物‥258
Fig.205　竪穴1607号遺構 ……259
Fig.206　竪穴1616号遺構遺物 ……260
Fig.207　竪穴1636号遺構遺物 ……261
Fig.208　竪穴1637号遺構遺物 ……262
Fig.209　竪穴1704号遺構、竪穴1705号遺構 ……263
Fig.210　竪穴1706号遺構、竪穴1710号遺構 ……264
Fig.211　竪穴1711号遺構遺物、竪穴1867号遺構 ……266
Fig.212　竪穴0180号遺構遺物、竪穴0181号遺構遺物‥267
Fig.213　竪穴0183号遺構、竪穴0189号（1）遺構 ……269
Fig.214　竪穴0189号（2）遺物、竪穴0190号遺構遺物、竪穴0205号遺構遺物 ……270
Fig.215　竪穴0206号遺構遺物 ……272
Fig.216　竪穴0207号（1）遺構遺物 ……273
Fig.217　竪穴0207号（2）遺物、竪穴0208号（1）遺構遺物 ……274
Fig.218　竪穴0208号（2）遺物 ……275
Fig.219　竪穴0209号遺構遺物 ……276
Fig.220　竪穴0210号遺構遺物 ……278
Fig.221　竪穴0212号遺構遺物 ……279
Fig.222　竪穴0213号遺構遺物 ……280
Fig.223　竪穴0214号遺構、竪穴0215号遺構遺物 ……281
Fig.224　竪穴0216号（1）遺構遺物、竪穴0217号（1）遺構 ……283
Fig.225　竪穴0216号（2）遺物、竪穴0217号（2）遺物‥284
Fig.226　竪穴0217号（3）遺物 ……285
Fig.227　竪穴0218号遺構遺物 ……287
Fig.228　竪穴0220号遺構遺物 ……288
Fig.229　竪穴0221号遺構遺物 ……289
Fig.230　竪穴0222号（1）遺構、竪穴0223号（1）遺構、竪穴0224号（1）遺構 ……291
Fig.231　竪穴0222号（2）遺構、竪穴0223号（2）遺構、竪穴0224号（2）遺構 ……292
Fig.232　竪穴0222号（3）遺物、竪穴0223号（3）遺物‥293
Fig.233　竪穴0224号（3）遺物 ……294
Fig.234　竪穴0226号（1）遺構遺物 ……295
Fig.235　竪穴0226号（2）遺物 ……296
Fig.236　竪穴0227号遺構遺物 ……297
Fig.237　竪穴0228号遺構遺物 ……298
Fig.238　竪穴0229号遺構遺物 ……299
Fig.239　竪穴0230号遺構遺物 ……300
Fig.240　竪穴0231号遺構遺物 ……302

Fig.241　竪穴0232号（1）遺構遺物 ……303
Fig.242　竪穴0232号（2）遺物 ……304
Fig.243　竪穴0233号（1）遺構、竪穴0234号（1）遺構、
竪穴0235号遺構 ……305
Fig.244　竪穴0233号（2）遺物、竪穴0234号（2）遺物‥306
Fig.245　竪穴0238号（1）遺構遺物 ……308
Fig.246　竪穴0238号（2）遺物 ……309
Fig.247　竪穴0239号（1）遺構 ……310
Fig.248　竪穴0239号（2）遺物 ……311
Fig.249　竪穴0240号（1）遺構、竪穴0241号（1）遺構‥313
Fig.250　竪穴0240号（2）遺物、竪穴0241号（2）遺物‥314
Fig.251　竪穴0241号（3）遺物 ……315
Fig.252　竪穴0241号（4）遺物、竪穴0242号遺構遺物‥316
Fig.253　竪穴0243号遺構遺物 ……318
Fig.254　竪穴0245号遺構遺物 ……319
Fig.255　竪穴0246号（1）遺構遺物 ……320
Fig.256　竪穴0246号（2）遺物 ……321
Fig.257　竪穴0247号遺構遺物、竪穴0248号（1）遺構、竪穴
0305号（1）遺構、貯蔵穴0311号（1）遺構 ‥‥323
Fig.258　竪穴0248号（2）遺物、竪穴0305号（2）遺物、
貯蔵穴0311号（2）遺物 ……324
Fig.259　貯蔵穴0311号（3）遺物 ……325
Fig.260　竪穴0252号遺構遺物 ……326
Fig.261　竪穴0253号遺構遺物 ……327
Fig.262　竪穴0254号（1）遺構、竪穴0255号（1）遺構、竪穴
0256号（1）遺構、竪穴0257号（1）遺構 ……329
Fig.263　竪穴0254号（2）遺構、竪穴0255号（2）遺構、竪穴
0256号（2）遺構、竪穴0257号（2）遺構 ……330
Fig.264　竪穴0254号（3）遺物 ……331
Fig.265　竪穴0255号（3）遺物、竪穴0256号（3）遺物‥332
Fig.266　竪穴0257号（3）遺物 ……333
Fig.267　竪穴0258号（1）遺構、竪穴0259号（1）遺構‥334
Fig.268　竪穴0258号（2）遺物 ……335
Fig.269　竪穴0259号（2）遺物 ……336
Fig.270　竪穴0261号（1）遺構、竪穴0262号（1）遺構‥338
Fig.271　竪穴0261号（2）遺構遺物、竪穴0262号（2）遺構
……339
Fig.272　竪穴0261号（3）遺物、竪穴0262号（3）遺物‥340
Fig.273　竪穴0264号遺構 ……341
Fig.274　竪穴0265号遺構遺物 ……342
Fig.275　竪穴0266号遺構遺物 ……344
Fig.276　竪穴0267号（1）遺構、竪穴1874号遺構 ……345
Fig.277　竪穴0267号（2）遺物 ……346
Fig.278　竪穴0268号遺構遺物、竪穴0269号遺構遺物 ‥347
Fig.279　竪穴0273号遺構、竪穴0274号遺構遺物 ……349
Fig.280　竪穴0275号（1）遺構、竪穴0285号遺構 ……350
Fig.281　竪穴0275号（2）遺物 ……351
Fig.282　竪穴0276号（1）遺構遺物 ……353
Fig.283　竪穴0276号（2）遺物 ……354
Fig.284　竪穴0277号遺構遺物、竪穴0278号（1）遺構‥355
Fig.285　竪穴0278号（2）遺物 ……356
Fig.286　竪穴0279号（1）遺構、竪穴0280号遺構 ……358
Fig.287　竪穴0279号（2）遺物 ……359
Fig.288　竪穴0282号（1）遺構 ……360
Fig.289　竪穴0282号（2）遺構遺物 ……361
Fig.290　竪穴0282号（3）遺物 ……362
Fig.291　竪穴0282号（4）遺物、竪穴0283号遺構遺物‥363
Fig.292　竪穴0284号（1）遺構遺物 ……365
Fig.293　竪穴0284号（2）遺物、竪穴0288号遺構遺物‥366
Fig.294　竪穴0290号遺構遺物 ……367
Fig.295　竪穴0330号遺構遺物 ……368
Fig.296　竪穴0332号（1）遺構遺物 ……370
Fig.297　竪穴0332号（2）遺物 ……371
Fig.298　竪穴0332号（3）遺物 ……372
Fig.299　竪穴0354号（1）遺構遺物 ……373
Fig.300　竪穴0354号（2）遺物、竪穴0361号遺構遺物‥374
Fig.301　竪穴0362号遺構遺物 ……375
Fig.302　竪穴0366号遺構遺物、竪穴0368号遺構……377
Fig.303　竪穴0367号遺構遺物 ……378
Fig.304　竪穴0369号遺構遺物 ……379
Fig.305　竪穴0371号（1）遺構 ……380
Fig.306　竪穴0371号（2）遺物 ……381
Fig.307　竪穴0390号（1）遺構、竪穴0391号（1）遺構‥383
Fig.308　竪穴0390号（2）遺構遺物、竪穴0391号（2）遺構
……384
Fig.309　竪穴0390号（3）遺物、竪穴0391号（3）遺物‥385
Fig.310　竪穴0396号遺構遺物 ……386
Fig.311　竪穴0409号遺構遺物 ……387
Fig.312　竪穴0411号遺構遺物 ……388
Fig.313　竪穴0413号遺構遺物 ……390
Fig.314　竪穴0414号（1）遺構 ……391
Fig.315　竪穴0414号（2）遺物 ……392
Fig.316　竪穴0414号（3）遺物 ……393
Fig.317　竪穴0414号（4）遺物 ……394
Fig.318　竪穴0415号遺構遺物 ……395
Fig.319　竪穴0419号（1）遺構遺物 ……396
Fig.320　竪穴0419号（2）遺物 ……397
Fig.321　竪穴0421号遺構遺物、竪穴0430号遺構 ……399
Fig.322　竪穴0434号（1）遺構 ……400
Fig.323　竪穴0434号（2）遺物 ……401
Fig.324　竪穴0436号（1）遺構 ……402
Fig.325　竪穴0436号（2）遺物 ……403

Fig.326　竪穴0439号遺構遺物 ……404
Fig.327　竪穴0441号（1）遺構、竪穴0442号遺構、竪穴1880号遺構 ……405
Fig.328　竪穴0441号（2）遺物 ……406
Fig.329　竪穴0441号（3）遺物 ……407
Fig.330　竪穴0443号（1）遺構、竪穴1866号遺構 ……409
Fig.331　竪穴0443号（2）遺物 ……410
Fig.332　竪穴0443号（3）遺物 ……411
Fig.333　竪穴0447号（1）遺構遺物 ……412
Fig.334　竪穴0447号（2）遺物 ……413
Fig.335　竪穴0448号遺構遺物 ……414
Fig.336　竪穴0455号遺構遺物 ……415
Fig.337　竪穴0456号遺構遺物 ……416
Fig.338　竪穴0458号遺構遺物、竪穴0459号（1）遺構‥417
Fig.339　竪穴0459号（2）遺物 ……418
Fig.340　竪穴0461号遺構遺物 ……419
Fig.341　竪穴0462号（1）遺構遺物……420
Fig.342　竪穴0462号（2）遺物 ……421
Fig.343　竪穴0463号（1）遺構 ……422
Fig.344　竪穴0463号（2）遺物 ……423
Fig.345　竪穴0464号（1）遺構、竪穴0465号（1）遺構‥425
Fig.346　竪穴0464号（2）遺物 ……426
Fig.347　竪穴0464号（3）遺物、竪穴0465号（2）遺物‥427
Fig.348　竪穴0466号遺構 ……428
Fig.349　竪穴0470号遺構遺物 ……429
Fig.350　竪穴0472号遺構遺物 ……430
Fig.351　竪穴0473号（1）遺構 ……431
Fig.352　竪穴0473号（2）遺物 ……432
Fig.353　竪穴0473号（3）遺物 ……433
Fig.354　竪穴0474号（1）遺構、竪穴0475号（1）遺構、竪穴0476号（1）遺構 ……435
Fig.355　竪穴0474号（2）遺物、竪穴0475号（2）遺物、竪穴0476号（2）遺物 ……436
Fig.356　竪穴0477号（1）遺構、竪穴0478号（1）遺構、竪穴0479号遺構 ……438
Fig.357　竪穴0477号（2）遺物 ……439
Fig.358　竪穴0478号（2）遺物 ……440
Fig.359　竪穴0480号（1）遺構遺物、竪穴0481号（1）遺構、竪穴0482号（1）遺構 ……442
Fig.360　竪穴0480号（2）遺物、竪穴0481号（2）遺物‥443
Fig.361　竪穴0481号（3）遺物、竪穴0482号（2）遺物‥444
Fig.362　竪穴0483号（1）遺構遺物、竪穴0484号（1）遺構 ……446
Fig.363　竪穴0483号（2）遺物、竪穴0484号（2）遺物‥447
Fig.364　竪穴0486号（1）遺構遺物 ……448
Fig.365　竪穴0486号（2）遺物 ……449
Fig.366　竪穴0488号（1）遺構、竪穴0490号遺構、竪穴0491号（1）遺構 ……450
Fig.367　竪穴0488号（2）遺物 ……451
Fig.368　竪穴0488号（3）遺物 ……452
Fig.369　竪穴0491号（2）遺物 ……453
Fig.370　竪穴0489号遺構遺物 ……455
Fig.371　竪穴0492号遺構遺物 ……456
Fig.372　竪穴0496号遺構遺物 ……457
Fig.373　竪穴0500号遺構遺物、竪穴0501号遺構遺物‥459
Fig.374　竪穴0503号遺構遺物 ……460
Fig.375　竪穴0504号遺構遺物 ……461
Fig.376　竪穴0507号（1）遺構遺物、竪穴0509号遺構‥462
Fig.377　竪穴0507号（2）遺物 ……463
Fig.378　竪穴0511号遺構遺物 ……464
Fig.379　竪穴0512号遺構、竪穴0513号遺構遺物、竪穴0514号遺構遺物 ……466
Fig.380　竪穴0521号遺構遺物 ……467
Fig.381　竪穴0531号遺構遺物、竪穴0533号遺構、竪穴1875号遺構 ……468
Fig.382　竪穴0535号遺構遺物、竪穴0536号遺構 ……470
Fig.383　竪穴1739号遺構、竪穴1740号遺構……472
Fig.384　竪穴1749号遺構遺物 ……473
Fig.385　竪穴1846号遺構、竪穴1881号遺構……474
Fig.386　竪穴1863号遺構 ……476
Fig.387　竪穴0571号（1）遺構遺物……477
Fig.388　竪穴0571号（2）遺物 ……478
Fig.389　竪穴0572号遺構遺物 ……479
Fig.390　竪穴0598号遺構遺物 ……480
Fig.391　竪穴0606号遺構遺物 ……481
Fig.392　竪穴0609号遺構遺物 ……482
Fig.393　竪穴0610号遺構遺物、竪穴0611号遺構遺物、竪穴1843号遺構 ……483
Fig.394　竪穴0650号遺構遺物 ……485
Fig.395　竪穴0651号遺構遺物、竪穴1073号遺構 ……486
Fig.396　竪穴1727号遺構、竪穴1844号遺構……488
Fig.397　竪穴1165号（1）遺構遺物 ……489
Fig.398　竪穴1165号（2）遺物 ……490
Fig.399　竪穴1166号遺構遺物 ……491
Fig.400　竪穴1167号遺構遺物 ……492
Fig.401　竪穴1172号遺構 ……494
Fig.402　竪穴1201号遺構遺物、竪穴1206号遺構遺物‥495
Fig.403　竪穴1205号遺構遺物、竪穴1214号遺構遺物‥496
Fig.404　竪穴1215号遺構遺物 ……497
Fig.405　竪穴1756号遺構、竪穴1757号遺構遺物、竪穴1758号遺構、竪穴1759号・1760号・1761号遺構 ……499

Fig.406　竪穴1762号遺構、竪穴1879号遺構、竪穴1766号遺構、竪穴1767号遺構 ……501
Fig.407　竪穴1768号遺構遺物、竪穴1876号遺構 ……502
Fig.408　竪穴1771号遺構、竪穴1775号遺構遺物 ……503
Fig.409　竪穴1776号遺構、竪穴1778号・1779号遺構、竪穴1780号・1781号遺構 ……505
Fig.410　竪穴1785号遺構、竪穴1792号遺構、竪穴1794号遺構、竪穴1795号遺構 ……507
Fig.411　竪穴1831号遺構、竪穴1878号遺構、竪穴1886号遺構 ……508
Fig.412　掘立柱建物3196号遺構 ……510
Fig.413　土坑1554号遺構遺物、土坑1559号遺構遺物‥511
Fig.414　土坑0356号遺構遺物、土坑0519号遺構遺物‥512
Fig.415　土坑0525号遺構遺物 ……513
Fig.416　土坑1194号遺構、土坑1207号遺構 ……514
Fig.417　古墳0438号遺構 ……515・516
Fig.418　古墳0520号（1）遺構 ……518
Fig.419　古墳0520号（2）遺構遺物 ……519
Fig.420　古墳0520号（3）遺物 ……520
Fig.421　古墳0527号遺構 ……521
Fig.422　古墳0530号（1）遺構 ……523・524
Fig.423　古墳0530号（2）遺物 ……525
Fig.424　古墳1845号遺構 ……526
Fig.425　古墳2022号（1）遺構 ……527
Fig.426　古墳2022号（2）遺構遺物 ……528
Fig.427　古墳2025号（1）遺構 ……529
Fig.428　古墳2025号（2）遺構 ……530
Fig.429　古墳1726号遺構 ……531
Fig.430　古墳1204号（1）遺構 ……532
Fig.431　古墳1204号（2）遺物 ……533
Fig.432　古墳1204号（3）遺物 ……534
Fig.433　古墳2406号遺構遺物 ……535
Fig.434　古墳1884号遺構 ……536
Fig.435　溝2416号遺構 ……537
Fig.436　遺構外出土弥生土器・土師器　北辺部（1）……539
Fig.437　遺構外出土弥生土器・土師器　北辺部（2）……540
Fig.438　遺構外出土弥生土器・土師器　西辺部（1）……542
Fig.439　遺構外出土弥生土器・土師器　西辺部（2）、南辺部 ……543
Fig.440　遺構外出土弥生土器・土師器　セ116・117地区、調査地区不明 ……544
Fig.441　遺構外出土弥生・古墳時代石製品・土製品・骨製品 ……545
Fig.442　遺構外出土石器（1）……547
Fig.443　遺構外出土石器（2） ……548
Fig.444　遺構外出土石器（3） ……549
Fig.445　遺構外出土石器（4） ……550
Fig.446　遺構外出土石器（5） ……551
Fig.447　遺構外出土石器（6） ……552
Fig.448　遺構外出土石器（7） ……553
Fig.449　遺構外出土石器（8） ……554
Fig.450　遺構外出土石器（9） ……555
Fig.451　遺構外出土石器（10） ……556
Fig.452　遺構外出土石器（11） ……557
Fig.453　遺構外出土石器（12） ……558
Fig.454　調査区外出土遺物と出土地点 ……559
Fig.455　時期別貝類組成 ……561
Fig.456　主要貝類殻長分布 ……562
Fig.457　縄文 炉穴分布状況 ……564
Fig.458　弥生後期～古墳前期の竪穴形態と出土土器（1） ……565
Fig.459　弥生後期～古墳前期の竪穴形態と出土土器（2） ……566
Fig.460　時期別遺構規模・平面形態分布 ……567
Fig.461　外来系土器分布状況（タタキ甕） ……570
Fig.462　外来系土器分布状況（受口系甕） ……571
Fig.463　中台遺跡の変遷 弥生後期 ……574
Fig.464　中台遺跡の変遷 弥生終末期 ……575
Fig.465　中台遺跡の変遷 古墳前期 ……576
Fig.466　中台遺跡周辺の遺跡群 ……577
Fig.467　中台遺跡と各地の方形区画・大型建物 ……580

表　目　次

Tab. 1　遺構一覧 ……xii
Tab. 2　遺構一覧（炉穴）
Tab. 3　遺構一覧（土坑）
Tab. 4　遺構一覧（竪穴建物）
Tab. 5　遺構一覧（掘立柱建物）
Tab. 6　遺構一覧（古墳）
Tab. 7　遺構一覧（溝）
Tab. 8　縄文土器観察表
Tab. 9　縄文土器出土量一覧
Tab.10　未加工礫出土量一覧
Tab.11　弥生土器・土師器観察表
Tab.12　土製品・石製品・鉄製品・骨角製品観察表
Tab.13　石器観察表
Tab.14　貝層サンプル一覧
Tab.15　出土貝類種名表
Tab.16　出土貝類一覧
Tab.17　出土微小貝類一覧
Tab.18　ハマグリ殻長計測値一覧
Tab.19　シオフキ殻長計測値一覧
Tab.20　アサリ殻長計測値一覧
※　Tab. 1 以外は、すべて DVD−ROM のみ収録

Tab.1 遺構一覧

＊帰属時期が不明確

遺構番号	遺構種別	本文	挿図	図版	地　区	グリッド	時　代
1564	炉穴	20	18	8	北辺部	UJ−68	縄文早期
1565	炉穴	20	18	8	北辺部	UJ−66	縄文早期
1567	炉穴	20	18	8	北辺部	UJ−73	縄文早期
1568	炉穴	20	18	8	北辺部	UJ−73	縄文早期
1574	炉穴	28	19	8	北辺部	UJ−75	縄文早期
1575	炉穴	28	19	8	北辺部	UJ−85	縄文早期
1864	炉穴	28	20		北辺部	UJ−57	縄文早期
1865	炉穴	28	20		北辺部	UJ−82	縄文早期
1887	炉穴	31		8	北辺部	UJ−65	縄文早期
0270	炉穴	31	21		西辺部	RG−19	縄文早期
0299	炉穴	32	21		西辺部	RH−28	縄文早期
0300	炉穴	32	21		西辺部	RH−18	縄文早期
0303	炉穴	32	22		西辺部	SH−42	縄文早期
0304	炉穴	34	22		西辺部	RH−17	縄文早期
0321	炉穴	34	23	8	西辺部	SH−97	縄文早期
1868	炉穴	32	21		西辺部	RG−20	縄文早期
1869	炉穴	34	24		西辺部	SG−90	縄文早期
1871	炉穴	37	24		西辺部	RH−31	縄文早期
1872	炉穴	37	24		西辺部	RG−48	縄文早期
1885	炉穴	32	21		西辺部	RG−19	縄文早期
0586	炉穴	37	25		殿屋敷	GH−98	縄文早期
0587	炉穴	38	25	8	殿屋敷	GH−88	縄文早期
0588	炉穴	38	26	8	殿屋敷	GH−77	縄文早期

遺構番号	遺構種別	本文	挿図	図版	地　区	グリッド	時　代
0589	炉穴	38	28		殿屋敷	GH−70	縄文早期
0590	炉穴	41	28		殿屋敷	GI−51	縄文早期
0591	炉穴	42	28	9	殿屋敷	FH−07	縄文早期
0592	炉穴	42	30	9	殿屋敷	GH−63	縄文早期
0601	炉穴	42	31		殿屋敷	FH−67	縄文早期
0602	炉穴	45	31		殿屋敷	FH−67	縄文早期
0603	炉穴	45	32		殿屋敷	HH−81	縄文早期
0604	炉穴	45	32		殿屋敷	HH−81	縄文早期
0616	炉穴	48	32	9	殿屋敷	FH−17	縄文早期
0619	炉穴	48	32	9	殿屋敷	GH−62	縄文早期
0623	炉穴	48	33		殿屋敷	GI−51	縄文早期
0625	炉穴	48	33		殿屋敷	FH−56	縄文早期
0626	炉穴	45	31		殿屋敷	FH−67	縄文早期
0629	炉穴	50	33	9	殿屋敷	FH−50	縄文早期
1839	炉穴	50	33	9	殿屋敷	FH−30	縄文早期
0635	炉穴	50	34	9	東南部	GM−30	縄文早期
0638	炉穴	50	34	9	東南部	GN−31	縄文早期
0647	炉穴	50	34	10	東南部	GM−90	縄文早期
0653	炉穴	53	35		東南部	FM−67	縄文早期
0663	炉穴	53	35		東南部	FN−61	縄文早期
0718	炉穴	53	35	10	東南部	IP−14	縄文早期
0843	炉穴	53	35	10	東南部	GN−51	縄文早期
0540	炉穴	55	36	10	南辺部	GJ−84	縄文早期
0541	炉穴	55	36	10	南辺部	GJ−63	縄文早期
0779	炉穴	55	37	10	南辺部	FI−30	縄文早期
0780	炉穴	55	37	10	南辺部	FJ−02	縄文早期
1217	炉穴	58	37	10	南辺部	EI−26	縄文早期
1223	炉穴	58	38	11	南辺部	EJ−54	縄文早期
1224	炉穴	58	38	11	南辺部	EJ−44	縄文早期
1246	炉穴	61	40	11	南辺部	DK−15	縄文早期
1248	炉穴	61	40	11	南辺部	DK−23	縄文早期
1249	炉穴	61	41	12	南辺部	DK−15	縄文早期
1251	炉穴	61	41	12	南辺部	EM−01	縄文早期
1847	炉穴	63	41		南辺部	EI−75	縄文早期
1848	炉穴	63	43		南辺部	EI−77	縄文早期
1849	炉穴	63	43		南辺部	EJ−71	縄文早期
1850	炉穴	63	43		南辺部	EJ−82	縄文早期
1851	炉穴	65	44		南辺部	EJ−84	縄文早期
1852	炉穴	68	44		南辺部	EI−99	縄文早期
1783	炉穴	68	45		セ116・117	MH−96	縄文早期
1786	炉穴	69	45		セ116・117	MH−85	縄文早期
0001	竪穴建物	100	82		北辺部	RO−61	弥生終末期（古墳早期）
0003	竪穴建物	100	83	13	北辺部	RO−83	弥生後期
0005	竪穴建物	112	84	13	北辺部	RO−94	弥生終末期（古墳早期）
0006	竪穴建物	112	85	13	北辺部	QO−06	弥生終末期（古墳早期）
0007	竪穴建物	114	86	13	北辺部	QO−13	弥生後期
0008	竪穴建物	116	87	13	北辺部	RN−98	弥生終末期（古墳早期）
0009	竪穴建物	116	89	14	北辺部	QN−07	弥生後期
0010	竪穴建物	120	89	14	北辺部	RN−74	弥生後期
0012	竪穴建物	120	90	14	北辺部	RN−95	弥生終末期（古墳早期）
0015	竪穴建物	120	91	14	北辺部	QO−21	弥生終末期（古墳早期）
0016	竪穴建物	123	93	14	北辺部	QO−31	弥生後期
0019	竪穴建物	125	94	14	北辺部	QO−56	弥生終末期（古墳早期）
0021	竪穴建物	125	95	14	北辺部	QO−64	弥生終末期（古墳早期）
0022	竪穴建物	127	96		北辺部	QN−60	弥生終末期（古墳早期）
0023	竪穴建物	127	96	15	北辺部	QO−61	弥生後期
0025	竪穴建物	127	97	15	北辺部	QO−83	弥生後期
0026	竪穴建物	130	98	15	北辺部	QN−39	弥生終末期（古墳早期）

遺構番号	遺構種別	本文	挿図	図版	地　区	グリッド	時　代
0027	竪穴建物	131	99		北辺部	PO−02	弥生後期
0028	竪穴建物	131	100	15	北辺部	PO−14	弥生後期
0035	竪穴建物	114	85		北辺部	QO−07	弥生後期
0036	竪穴建物	132	101	15	北辺部	SN−80	弥生後期
0037	竪穴建物	133	102	15	北辺部	SO−71	弥生終末期（古墳早期）
0038	竪穴建物	136	104	15	北辺部	SO−81	弥生後期
0040	竪穴建物	136	105	16	北辺部	SO−94	弥生後期
0041	竪穴建物	136	105	16	北辺部	SO−54	弥生終末期（古墳早期）
0043	竪穴建物	137	106	16	北辺部	SO−77	弥生後期
0045	竪穴建物	139	107	16	北辺部	SP−82	弥生後期
0046	竪穴建物	141	108	16	北辺部	RO−19	弥生終末期（古墳早期）
0047	竪穴建物	141	108	16	北辺部	RO−10	弥生後期
0049	竪穴建物	141	108	16	北辺部	PO−22	弥生後期＊
0050	竪穴建物	141	109	16	北辺部	PO−32	弥生後期
0051	竪穴建物	143	110	17	北辺部	PO−21	弥生終末期（古墳早期）
0052	竪穴建物	145	111	17	北辺部	PN−50	弥生終末期（古墳早期）
0053	竪穴建物	145	112	17	北辺部	PN−10	弥生後期
0055	竪穴建物	145	113	17	北辺部	QO−91	弥生終末期（古墳早期）
0056	竪穴建物	146	114	17	北辺部	PN−08	弥生後期
0057	竪穴建物	149	115	17	北辺部	QN−79	弥生後期
0059	竪穴建物	149	116	18	北辺部	QN−97	弥生終末期（古墳早期）
0060	竪穴建物	152	117	18	北辺部	QN−77	弥生終末期（古墳早期）
0061	竪穴建物	152	117	18	北辺部	QN−67	弥生終末期（古墳早期）
0062	竪穴建物	152	118	18	北辺部	QN−66	弥生終末期（古墳早期）
0063	竪穴建物	154	118	18	北辺部	QN−47	弥生後期
0064	竪穴建物	154	119	18	北辺部	QN−27	弥生後期
0065	竪穴建物	154	119	18	北辺部	QN−87	不明
0069	竪穴建物	156	120	19	北辺部	QN−44	弥生終末期（古墳早期）
0070	竪穴建物	156	120	19	北辺部	QN−44	不明
0072	竪穴建物	159	122	19	北辺部	QN−65	弥生終末期（古墳早期）
0073	竪穴建物	159	123	19	北辺部	QN−74	弥生後期
0077	竪穴建物	159	123	19	北辺部	QN−62	弥生後期
0087	竪穴建物	162	124	19	北辺部	QM−89	弥生後期
0090	竪穴建物	163	124	19	北辺部	QN−12	弥生終末期（古墳早期）
0091	竪穴建物	163	125	19	北辺部	QM−10	弥生後期
0093	竪穴建物	163	126	20	北辺部	RN−51	弥生後期
0105	竪穴建物	163	127	20	北辺部	RN−02	弥生後期
0106	竪穴建物	164	128	20	北辺部	SN−72	弥生終末期（古墳早期）
0111	竪穴建物	166	130	20	北辺部	QM−30	弥生終末期（古墳早期）
0117	竪穴建物	169	130	20	北辺部	QM−03	弥生後期
0118	竪穴建物	169	131	20	北辺部	QM−33	弥生後期
0119	竪穴建物	169	132	20	北辺部	QM−59	弥生後期
0123	竪穴建物	173	133		北辺部	QM−56	弥生後期
0145	竪穴建物	173	133	20	北辺部	TK−40	不明
0149	竪穴建物	173	134	21	北辺部	TK−25	弥生後期
0150	竪穴建物	173	134	21	北辺部	TK−25	弥生終末期（古墳早期）
0151	竪穴建物	175	135	21	北辺部	UK−94	古墳前期
0152	竪穴建物	175	136	21	北辺部	UK−92	弥生終末期（古墳早期）
0153	竪穴建物	178	136	21	北辺部	UK−74	弥生終末期（古墳早期）
0154	竪穴建物	178	137	21	北辺部	UK−56	弥生後期＊
0155	竪穴建物	178	137		北辺部	UK−48	弥生後期＊
0157	竪穴建物	178	138	21	北辺部	UL−72	弥生終末期（古墳早期）
0159	竪穴建物	180	139	21	北辺部	RO−89	弥生後期
0160	竪穴建物	180	140	21	北辺部	RO−59	弥生終末期（古墳早期）
0161	竪穴建物	183	141	22	北辺部	RP−52	弥生終末期（古墳早期）
0168	竪穴建物	184	141	22	北辺部	UJ−27	古墳前期
1301	竪穴建物	184	142	22	北辺部	PN−89	弥生後期＊
1302	竪穴建物	184	142	22	北辺部	PN−77	弥生後期＊

遺構番号	遺構種別	本文	挿図	図版	地　区	グリッド	時　代
1304	竪穴建物	186	143	22	北辺部	PN−23	弥生終末期（古墳早期）＊
1307	竪穴建物	186	144	22	北辺部	PN−53	弥生後期
1308	竪穴建物	188	144	22	北辺部	PN−72	弥生後期＊
1311	竪穴建物	190	145		北辺部	QJ−46	弥生終末期（古墳早期）
1312	竪穴建物	190	147		北辺部	QJ−69	弥生終末期（古墳早期）
1314	竪穴建物	190	149	23	北辺部	QK−82	古墳前期
1317	竪穴建物	194	150	23	北辺部	QK−35	弥生終末期（古墳早期）
1319	竪穴建物	194	152	23	北辺部	PJ−55	古墳前期
1327	竪穴建物	197	153	23	北辺部	PK−22	弥生終末期（古墳早期）
1329	竪穴建物	197	153		北辺部	PK−25	弥生後期＊
1336	竪穴建物	200	154	23	北辺部	OK−28	弥生終末期（古墳早期）
1337	竪穴建物	200	155	24	北辺部	PL−65	弥生終末期（古墳早期）
1340	竪穴建物	200	156	24	北辺部	PL−36	弥生後期
1341	竪穴建物	202	157	24	北辺部	PL−78	弥生後期
1346	竪穴建物	202	158	24	北辺部	PM−41	弥生後期
1347	竪穴建物	204	159	24	北辺部	PL−40	弥生終末期（古墳早期）＊
1350	竪穴建物	204	159	24	北辺部	PM−95	弥生後期
1352	竪穴建物	207	160		北辺部	PM−64	弥生後期
1355	竪穴建物	207	161		北辺部	PM−45	弥生後期
1357	竪穴建物	207	162		北辺部	QM−86	弥生後期＊
1360	竪穴建物	208	163	24	北辺部	PL−14	弥生後期
1362	竪穴建物	209	164		北辺部	QK−57	不明
1363	竪穴建物	210	164	24	北辺部	QK−58	弥生後期＊
1365	竪穴建物	213	165		北辺部	QL−67	不明
1366	竪穴建物	213	165	24	北辺部	QK−75	弥生終末期（古墳早期）
1367	竪穴建物	213	166	25	北辺部	PM−02	弥生後期
1370	竪穴建物	216	168	25	北辺部	PM−19	弥生後期
1387	竪穴建物	186	142	22	北辺部	PN−77	弥生後期＊
1412	竪穴建物	218	169		北辺部	QL−72	弥生後期
1447	竪穴建物	218	170	25	北辺部	PJ−95	古墳前期
1486	竪穴建物	218	171		北辺部	OL−26	弥生後期＊
1541	竪穴建物	219	171		北辺部	QJ−40	古墳前期＊
1542	竪穴建物	219	171		北辺部	QJ−40	古墳前期＊
1551	竪穴建物	222	172	25	北辺部	RL−63	弥生後期
1552	竪穴建物	222	174	25	北辺部	TK−66	弥生後期
1553	竪穴建物	222	175	26	北辺部	TK−45	弥生後期＊
1555	竪穴建物	222	176	26	北辺部	TK−42	弥生後期
1556	竪穴建物	224	177	26	北辺部	UK−81	弥生終末期（古墳早期）
1558	竪穴建物	231	181	26	北辺部	TJ−39	弥生後期
1566	竪穴建物	231	182		北辺部	UJ−55	不明
1570	竪穴建物	232	183	26	北辺部	UI−100	弥生後期
1571	竪穴建物	233	184	27	北辺部	TK−92	古墳前期
1572	竪穴建物	236	185	27	北辺部	TK−93	弥生後期＊
1573	竪穴建物	236	186	27	北辺部	TJ−89	古墳前期
1578	竪穴建物	237	187	27	北辺部	TJ−15	古墳前期
1580	竪穴建物	237	188	27	北辺部	SK−97	弥生後期＊
1581	竪穴建物	239	189	28	北辺部	RK−28	弥生終末期（古墳早期）
1583	竪穴建物	244	193	28	北辺部	RL−41	弥生後期
1584	竪穴建物	244	194	29	北辺部	RL−32	弥生後期
1585	竪穴建物	246	194	29	北辺部	RL−44	弥生後期＊
1586	竪穴建物	246	195	29	北辺部	RL−67	弥生後期
1587	竪穴建物	246	197	29	北辺部	RL−13	弥生後期＊
1590	竪穴建物	246	197	29	北辺部	TK−62	不明
1592	竪穴建物	249	198	29	北辺部	RK−23	古墳前期
1604	竪穴建物	252	200	30	北辺部	RK−68	弥生終末期（古墳早期）
1605	竪穴建物	254	201	30	北辺部	RK−86	古墳前期
1606	竪穴建物	254	204	30	北辺部	RK−57	弥生後期＊
1607	竪穴建物	257	205	30	北辺部	RK−05	不明

遺構番号	遺構種別	本文	挿図	図版	地　区	グリッド	時　代
1616	竪穴建物	257	206		北辺部	RL−100	弥生後期
1619	竪穴建物	254	204		北辺部	RK−58	古墳前期
1636	竪穴建物	259	207	30	北辺部	QK−19	弥生後期
1637	竪穴建物	259	208	30	北辺部	RK−70	弥生後期＊
1704	竪穴建物	260	209		北辺部	QM−08	弥生後期＊
1705	竪穴建物	260	209	20	北辺部	QM−70	弥生後期＊
1706	竪穴建物	264	210		北辺部	RM−62	不明
1710	竪穴建物	264	210		北辺部	RL−96	弥生後期＊
1711	竪穴建物	265	211		北辺部	RM−81	弥生後期＊
1867	竪穴建物	265	211		北辺部	RO−39	不明
0180	竪穴建物	265	212	31	西辺部	TI−41	弥生後期
0181	竪穴建物	265	212	31	西辺部	TI−74	弥生後期＊
0183	竪穴建物	268	213	31	西辺部	TI−95	弥生後期＊
0189	竪穴建物	268	213	31	西辺部	SI−12	弥生終末期（古墳早期）
0190	竪穴建物	268	214	31	西辺部	SI−11	不明
0205	竪穴建物	268	214		西辺部	TH−22	弥生後期＊
0206	竪穴建物	271	215	31	西辺部	TH−24	弥生後期
0207	竪穴建物	271	216	31	西辺部	TH−41	弥生後期
0208	竪穴建物	271	217	32	西辺部	TG−60	弥生終末期（古墳早期）
0209	竪穴建物	272	219	31	西辺部	TH−61	弥生後期＊
0210	竪穴建物	277	220	32	西辺部	TH−63	弥生終末期（古墳早期）＊
0212	竪穴建物	277	221	32	西辺部	TH−81	弥生後期
0213	竪穴建物	277	222	32	西辺部	TH−83	古墳前期
0214	竪穴建物	278	223		西辺部	TG−99	弥生後期＊
0215	竪穴建物	280	223	32	西辺部	SG−18	弥生終末期（古墳早期）＊
0216	竪穴建物	282	224	32	西辺部	SG−09	古墳前期
0217	竪穴建物	282	224	32	西辺部	SG−19	弥生終末期（古墳早期）
0218	竪穴建物	285	227	33	西辺部	SH−03	弥生終末期（古墳早期）＊
0220	竪穴建物	286	228	32	西辺部	SH−21	古墳前期
0221	竪穴建物	286	229		西辺部	SH−31	古墳前期
0222	竪穴建物	290	230	33	西辺部	SG−48	古墳前期
0223	竪穴建物	290	230	33	西辺部	SG−59	古墳前期
0224	竪穴建物	290	230	33	西辺部	SG−49	古墳前期
0226	竪穴建物	294	234		西辺部	SH−24	古墳前期
0227	竪穴建物	297	236	33	西辺部	SH−15	古墳前期
0228	竪穴建物	298	237	33	西辺部	SH−27	古墳前期
0229	竪穴建物	298	238	33	西辺部	SH−26	弥生終末期（古墳早期）
0230	竪穴建物	300	239	33	西辺部	SH−51	弥生後期＊
0231	竪穴建物	300	240	33	西辺部	SG−70	古墳前期
0232	竪穴建物	301	241	33	西辺部	SH−47	古墳前期
0233	竪穴建物	301	243	33	西辺部	SH−59	古墳前期
0234	竪穴建物	304	243	33	西辺部	SH−60	弥生終末期（古墳早期）＊
0235	竪穴建物	307	243		西辺部	SI−51	弥生後期＊
0238	竪穴建物	307	245	34	西辺部	SG−77	古墳前期
0239	竪穴建物	307	247	34	西辺部	SH−83	古墳前期
0240	竪穴建物	309	249	34	西辺部	SH−76	弥生終末期（古墳早期）
0241	竪穴建物	312	249	34	西辺部	SH−85	古墳前期
0242	竪穴建物	312	252	34	西辺部	SH−67	弥生終末期（古墳早期）＊
0243	竪穴建物	317	253	34	西辺部	SH−88	古墳前期
0245	竪穴建物	317	254	35	西辺部	SH−79	古墳前期
0246	竪穴建物	317	255	35	西辺部	SI−71	弥生終末期（古墳早期）
0247	竪穴建物	321	257		西辺部	SI−63	弥生後期＊
0248	竪穴建物	321	257		西辺部	SI−73	弥生終末期（古墳早期）＊
0252	竪穴建物	322	260		西辺部	SI−93	古墳前期
0253	竪穴建物	325	261	35	西辺部	SI−91	弥生終末期（古墳早期）
0254	竪穴建物	325	262	36	西辺部	SH−99	古墳前期
0255	竪穴建物	328	262	36	西辺部	RH−09	古墳前期
0256	竪穴建物	328	262	36	西辺部	RH−19	古墳前期

遺構番号	遺構種別	本文	挿図	図版	地　区	グリッド	時　代
0257	竪穴建物	328	262	36	西辺部	RI−11	弥生後期
0258	竪穴建物	330	267	36	西辺部	RH−05	弥生終末期（古墳早期）
0259	竪穴建物	333	267		西辺部	SH−95	古墳前期
0261	竪穴建物	337	270	36	西辺部	RH−22	古墳前期
0262	竪穴建物	337	270	36	西辺部	RH−13	弥生後期
0264	竪穴建物	337	273		西辺部	RG−20	不明
0265	竪穴建物	339	274	36	西辺部	RG−28	古墳前期
0266	竪穴建物	341	275	37	西辺部	RG−36	古墳前期
0267	竪穴建物	343	276	37	西辺部	RG−17	古墳前期
0268	竪穴建物	343	278		西辺部	RG−07	古墳前期＊
0269	竪穴建物	344	278		西辺部	SG−97	弥生後期＊
0273	竪穴建物	346	279		西辺部	RG−59	古墳前期＊
0274	竪穴建物	346	279		西辺部	RH−63	弥生後期＊
0275	竪穴建物	348	280	37	西辺部	RH−54	古墳前期
0276	竪穴建物	348	282	37	西辺部	RH−45	弥生終末期（古墳早期）
0277	竪穴建物	352	284	37	西辺部	RH−26	古墳前期
0278	竪穴建物	352	284	37	西辺部	RH−26	弥生後期＊
0279	竪穴建物	356	286	37	西辺部	RH−46	弥生後期
0280	竪穴建物	357	286		西辺部	RH−66	不明
0282	竪穴建物	357	288	37	西辺部	RH−69	古墳前期
0283	竪穴建物	357	291		西辺部	RH−49	古墳前期
0284	竪穴建物	364	292	38	西辺部	RI−41	弥生終末期（古墳早期）
0285	竪穴建物	348	280		西辺部	RH−55	不明
0288	竪穴建物	364	293		西辺部	RI−34	古墳前期
0290	竪穴建物	364	294	38	西辺部	RI−53	古墳前期
0305	竪穴建物	322	257		西辺部	SI−72	古墳前期
0330	竪穴建物	368	295		西辺部	RH−88	弥生後期＊
0332	竪穴建物	368	296		西辺部	QH−18	弥生終末期（古墳早期）
0354	竪穴建物	369	299		西辺部	QH−78	古墳前期
0361	竪穴建物	369	300		西辺部	QH−55	弥生終末期（古墳早期）
0362	竪穴建物	372	301		西辺部	QH−63	弥生後期
0366	竪穴建物	376	302	38	西辺部	QH−97	古墳前期
0367	竪穴建物	376	303	38	西辺部	QH−95	弥生後期＊
0368	竪穴建物	376	302	38	西辺部	PH−17	弥生後期＊
0369	竪穴建物	376	304	38	西辺部	PH−18	古墳前期
0371	竪穴建物	378	305	38	西辺部	PH−36	古墳前期
0390	竪穴建物	381	307	38	西辺部	PF−70	古墳前期
0391	竪穴建物	382	307	38	西辺部	PF−80	弥生後期
0396	竪穴建物	382	310		西辺部	OG−14	古墳前期
0409	竪穴建物	382	311	38	西辺部	OG−19	弥生終末期（古墳早期）
0411	竪穴建物	386	312	39	西辺部	OG−37	弥生終末期（古墳早期）＊
0413	竪穴建物	387	313	39	西辺部	OG−48	弥生後期＊
0414	竪穴建物	387	314	39	西辺部	OG−96	弥生終末期（古墳早期）
0415	竪穴建物	389	318		西辺部	OH−52	弥生終末期（古墳早期）
0419	竪穴建物	389	319	39	西辺部	NG−48	弥生終末期（古墳早期）
0421	竪穴建物	398	321		西辺部	NH−42	弥生後期＊
0430	竪穴建物	398	321		西辺部	NG−70	不明
0434	竪穴建物	398	322	39	西辺部	NG−79	弥生終末期（古墳早期）
0436	竪穴建物	398	324	39	西辺部	NG−77	弥生終末期（古墳早期）
0439	竪穴建物	401	326	39	西辺部	NG−99	弥生終末期（古墳早期）
0441	竪穴建物	401	327	40	西辺部	NG−96	弥生終末期（古墳早期）
0442	竪穴建物	407	327	40	西辺部	MG−06	古墳前期
0443	竪穴建物	407	330	40	西辺部	MH−01	弥生終末期（古墳早期）
0447	竪穴建物	408	333	40	西辺部	NG−71	弥生終末期（古墳早期）
0448	竪穴建物	409	335	40	西辺部	MG−03	弥生終末期（古墳早期）
0455	竪穴建物	413	336	40	西辺部	MG−28	弥生終末期（古墳早期）
0456	竪穴建物	413	337		西辺部	MG−40	弥生終末期（古墳早期）
0458	竪穴建物	415	338	40	西辺部	MG−39	弥生終末期（古墳早期）

遺構番号	遺構種別	本文	挿図	図版	地　区	グリッド	時　代
0459	竪穴建物	415	338	40	西辺部	MG−48	弥生終末期（古墳早期）
0461	竪穴建物	418	340	40	西辺部	MH−51	弥生終末期（古墳早期）
0462	竪穴建物	419	341	41	西辺部	MH−61	弥生終末期（古墳早期）
0463	竪穴建物	421	343		西辺部	MG−68	弥生終末期（古墳早期）
0464	竪穴建物	423	345	41	西辺部	MG−66	弥生終末期（古墳早期）
0465	竪穴建物	424	345	41	西辺部	MG−65	古墳前期
0466	竪穴建物	424	348	41	西辺部	MG−63	弥生終末期（古墳早期）＊
0470	竪穴建物	424	349	41	西辺部	MG−84	弥生終末期（古墳早期）
0472	竪穴建物	427	350	41	西辺部	MG−87	弥生終末期（古墳早期）
0473	竪穴建物	428	351	41	西辺部	MG−90	古墳前期
0474	竪穴建物	434	354		西辺部	MG−97	弥生終末期（古墳早期）＊
0475	竪穴建物	434	354	41	西辺部	LG−07	弥生終末期（古墳早期）
0476	竪穴建物	434	354	41	西辺部	MG−97	弥生終末期（古墳早期）＊
0477	竪穴建物	437	356	41	西辺部	MG−98	弥生終末期（古墳早期）
0478	竪穴建物	437	356	41	西辺部	LG−08	弥生終末期（古墳早期）
0479	竪穴建物	437	356		西辺部	LG−09	不明
0480	竪穴建物	439	359	41	西辺部	MG−99	古墳前期
0481	竪穴建物	441	359	42	西辺部	LG−10	弥生終末期（古墳早期）
0482	竪穴建物	441	359	42	西辺部	LH−11	弥生終末期（古墳早期）
0483	竪穴建物	441	362	42	西辺部	LG−20	弥生終末期（古墳早期）
0484	竪穴建物	445	362	42	西辺部	LG−29	弥生終末期（古墳早期）
0486	竪穴建物	445	364	42	西辺部	LG−27	弥生終末期（古墳早期）
0488	竪穴建物	445	366	42	西辺部	LG−04	弥生終末期（古墳早期）
0489	竪穴建物	449	370	42	西辺部	LG−02	古墳前期＊
0490	竪穴建物	449	366	42	西辺部	LG−24	古墳前期＊
0491	竪穴建物	453	366	42	西辺部	LG−23	弥生後期＊
0492	竪穴建物	454	371	42	西辺部	LG−35	弥生終末期（古墳早期）＊
0496	竪穴建物	454	372	43	西辺部	LH−51	弥生終末期（古墳早期）
0500	竪穴建物	454	373		西辺部	LG−55	弥生終末期（古墳早期）
0501	竪穴建物	455	373	43	西辺部	LG−64	弥生終末期（古墳早期）＊
0503	竪穴建物	458	374	43	西辺部	LG−53	弥生後期＊
0504	竪穴建物	458	375		西辺部	LG−61	古墳前期
0507	竪穴建物	458	376	43	西辺部	KG−13	弥生終末期（古墳早期）
0509	竪穴建物	461	376		西辺部	KG−04	弥生後期＊
0511	竪穴建物	463	378	43	西辺部	KG−05	弥生終末期（古墳早期）
0512	竪穴建物	464	379		西辺部	LG−95	不明
0513	竪穴建物	465	379	43	西辺部	LG−95	弥生終末期（古墳早期）
0514	竪穴建物	465	379	43	西辺部	LG−86	弥生終末期（古墳早期）＊
0521	竪穴建物	465	380	43	西辺部	LH−91	古墳前期
0531	竪穴建物	467	381	44	西辺部	NG−11	弥生終末期（古墳早期）＊
0533	竪穴建物	467	381	44	西辺部	NF−20	不明
0535	竪穴建物	469	382	44	西辺部	OF−89	弥生終末期（古墳早期）＊
0536	竪穴建物	469	382	44	西辺部	OF−90	不明
1739	竪穴建物	469	383	44	西辺部	PG−100	古墳前期＊
1740	竪穴建物	471	383		西辺部	OH−23	不明
1749	竪穴建物	471	384		西辺部	RI−22	弥生終末期（古墳早期）
1846	竪穴建物	471	385		西辺部	OH−81	不明
1863	竪穴建物	474	386		西辺部	NG−28	不明
1866	竪穴建物	408	330	40	西辺部	MH−12	不明
1874	竪穴建物	343	276		西辺部	RG−27	不明
1875	竪穴建物	469	381	44	西辺部	NF−20	不明
1880	竪穴建物	407	327		西辺部	NG−97	不明
1881	竪穴建物	475	385		西辺部	OG−89	不明
0571	竪穴建物	475	387	45	殿屋敷	GH−69	弥生終末期（古墳早期）
0572	竪穴建物	475	389	45	殿屋敷	GH−45	弥生終末期（古墳早期）
0598	竪穴建物	476	390	46	殿屋敷	GH−64	弥生終末期（古墳早期）
0606	竪穴建物	478	391	46	殿屋敷	FH−17	不明
0609	竪穴建物	480	392		殿屋敷	HH−97	弥生終末期（古墳早期）

遺構番号	遺構種別	本文	挿図	図版	地　区	グリッド	時　代
0610	竪穴建物	481	393		殿屋敷	GH−01	古墳前期＊
0611	竪穴建物	481	393		殿屋敷	GH−01	古墳前期
1843	竪穴建物	482	393		殿屋敷	GH−10	不明
0650	竪穴建物	484	394	47	東南部	FM−50	弥生終末期（古墳早期）
0651	竪穴建物	484	395	47	東南部	FM−59	弥生終末期（古墳早期）
1073	竪穴建物	484	395		東南部	HQ−01	不明
1727	竪穴建物	484	396		東南部	HQ−30	不明
1844	竪穴建物	487	396		東南部	EQ−19	不明
1165	竪穴建物	487	397	47	南辺部	EL−15	弥生終末期（古墳早期）
1166	竪穴建物	487	399	48	南辺部	FL−81	弥生終末期（古墳早期）
1167	竪穴建物	490	400	48	南辺部	EM−11	弥生終末期（古墳早期）
1172	竪穴建物	491	401	48	南辺部	EL−29	不明
1201	竪穴建物	493	402	48	南辺部	EL−35	弥生終末期（古墳早期）
1205	竪穴建物	493	403		南辺部	FK−87	弥生終末期（古墳早期）
1206	竪穴建物	493	402	48	南辺部	EL−35	不明
1214	竪穴建物	493	403		南辺部	EK−38	不明
1215	竪穴建物	494	404	48	南辺部	EK−26	弥生終末期（古墳早期）
1756	竪穴建物	495	405	50	セ116・117	NH−04	不明
1757	竪穴建物	497	405	50	セ116・117	NH−33	弥生終末期（古墳早期）
1758	竪穴建物	497	405	50	セ116・117	OH−57	不明
1759	竪穴建物	498	405	50	セ116・117	OH−97	不明
1760	竪穴建物	498	405	50	セ116・117	NH−07	不明
1761	竪穴建物	498	405	50	セ116・117	NH−06	不明
1762	竪穴建物	498	406		セ116・117	NH−38	不明
1766	竪穴建物	500	406	50	セ116・117	MH−66	不明
1767	竪穴建物	500	406	50	セ116・117	MH−77	不明
1768	竪穴建物	500	407	50	セ116・117	MH−70	弥生終末期（古墳早期）
1771	竪穴建物	500	408		セ116・117	MH−43	不明
1775	竪穴建物	503	408		セ116・117	KH−09	古墳前期
1776	竪穴建物	504	409	50	セ116・117	KH−69	不明
1778	竪穴建物	504	409		セ116・117	LH−16	不明
1779	竪穴建物	504	409		セ116・117	LH−18	不明
1780	竪穴建物	504	409		セ116・117	LH−20	不明
1781	竪穴建物	504	409		セ116・117	LH−20	不明
1785	竪穴建物	506	410		セ116・117	MH−85	不明
1792	竪穴建物	506	410		セ116・117	HH−58	不明
1794	竪穴建物	506	410	50	セ116・117	IH−09	不明
1795	竪穴建物	506	410		セ116・117	JH−94	不明
1831	竪穴建物	506	411		セ116・117	MH−94	不明
1876	竪穴建物	500	407		セ116・117	MH−90	不明
1878	竪穴建物	507	411		セ116・117	LH−23	不明
1879	竪穴建物	498	406		セ116・117	NH−37	不明
1886	竪穴建物	508	411		セ116・117	OI−52	不明
3196	掘立柱建物	509	412	44	西辺部	RG−47	弥生終末期（古墳早期）
1554	土坑	509	413		北辺部	TK−62	弥生・古墳＊
1559	土坑	509	413	30	北辺部	SK−07	弥生・古墳＊
1569	土坑	69	46	12	北辺部	UJ−64	縄文早期
0244	土坑	69	47		西辺部	SH−58	縄文早期
0302	土坑	69	47		西辺部	SH−53	縄文早期
0311	土坑（貯蔵穴）	322	257	35	西辺部	SI−82	古墳前期
0356	土坑	512	414		西辺部	QH−58	弥生・古墳＊
0519	土坑	512	414		西辺部	LH−81	弥生・古墳＊
0525	土坑	513	415		西辺部	MH−81	弥生・古墳＊
0526	土坑	70	48		西辺部	LG−85	縄文早期
1870	土坑	70	48		西辺部	PH−27	不明
0614	土坑	70	49	12	殿屋敷	GH−94	縄文中期
0615	土坑	73	49	12	殿屋敷	GH−84	縄文中期
0637	土坑	73	50		東南部	GM−38	不明

遺構番号	遺構種別	本文	挿図	図版	地　区	グリッド	時　代
0986	土坑	73	50	12	東南部	EO−38	縄文早期
1179	土坑	73	51		南辺部	GK−50	縄文早期
1189	土坑	75	51	12	南辺部	FL−41	不明
1193	土坑	75	51		南辺部	EK−19	縄文早期
1194	土坑	513	416	48	南辺部	EK−29	不明
1207	土坑	514	416		南辺部	EL−50	不明
1218	土坑	75	52		南辺部	EJ−56	不明
1244	土坑	77	52		南辺部	FL−90	縄文早期
1853	土坑	77	52		南辺部	EJ−91	不明
1854	土坑	77	53		南辺部	DJ−02	縄文早期
1855	土坑	77	53		南辺部	EJ−93	縄文早期
1856	土坑	79	53		南辺部	EJ−83	不明
1857	土坑	80	54		南辺部	EJ−83	縄文早期
1858	土坑	80	54		南辺部	EJ−93	不明
1882	土坑	80	55		セ116・117	LH−16	不明
1883	土坑	81	55		セ116・117	LH−16	不明
0438	古墳？	514	417	39	西辺部	NG−65	古墳前期＊
0520	古墳	517	418	44	西辺部	KG−18	古墳前期
0527	古墳？	517	421	43	西辺部	KG−23	不明
0530	古墳？	520	422	44	西辺部	NF−20	古墳前期
1845	古墳？	521	424	32	西辺部	TH−61	不明
2022	古墳？	522	425		西辺部	SG−48	不明
2025	古墳？	522	427	32	西辺部	TH−43	不明
1726	古墳？	522	429		東南部	GP−94	不明
1204	古墳？	530	430	48	南辺部	FK−66	弥生終末期（古墳早期）
2406	古墳？	531	433	50	セ116・117	IH−31	不明
1884	古墳？	533	434		市教委試掘	LI−58	不明
2416	溝	534	435		西辺部	SG・RG・RH・QH	弥生終末期（古墳早期）

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査にいたる経緯

昭和40年代から市原市の臨海部埋め立て地は工業地帯化が進み、これら企業の社宅、あるいは首都圏のベッドタウンとして、東京湾岸の街道筋の宅地開発が急速に進んだ。開発の波は海岸平野に接した台地上にも及び、現在の市庁舎周辺でも昭和46年（1971）に市原市国分寺台土地区画整理組合が設立され、3,803,369㎡に及ぶ区画整理が実施されることとなった。しかし、事業対象地内には上総国分寺や西広貝塚、祇園原貝塚などの重要遺跡が存在していたため、開発と遺跡保護を、どのように調和をはかるかが問題となった。文化庁・県・市と区画整理組合とで協議を重ねた結果、上総国分二寺の主要部分は保存し、その他は発掘調査による記録保存が実施されることになった。

このため同年内に上総国分寺台埋蔵文化財調査会が立ち上げられ、そのもとに結成された上総国分寺台遺跡調査団（団長は早稲田大学滝口 宏教授）が実際の発掘調査にあたった。また、調査団の作業量を超える部分については、私的調査組織である平野考古学研究所が実施している。

当初は、昭和47年（1972）から３ヶ年で調査を終了させる見通しであったが、予想をはるかに越える遺跡の発見により計画を見直さざるを得ず、昭和63年（1988）度まで17ヶ年にわたる長期の調査となり、調査遺跡数は43、調査面積は53,270㎡に達した。調査会・調査団は昭和60年（1985）３月に解散し、その後の調査・整理作業は財団法人市原市文化財センターが引き継いだ。また、平成18年（2006）３月の同センター解散後は、市原市埋蔵文化財調査センターがその責を引き継ぎ、現在に至っている。

調査方法については、上層編として平成20年度に刊行した『上総国分僧寺跡Ⅰ』（櫻井2009）に詳しいので、ここでは簡単に記載しておく。発掘区の設定は、公共座標に基づくグリッドにより行った。まず30m方眼の大グリッドを設定し、南から北にA・B・C…、西から東にA・B・C…とアルファベットによる名称を付けた。大グリッドは3m方眼の小グリッドに100分割し、北西隅から東に01・02・03…、北西隅から南に01・11・21…と算用数字による名称を付けた（Fig.6）。ただし、早稲田大学調査地区・寺域確認調査・平野考古学研究所調査地区（南辺部）では任意のトレンチないし磁北を基準とした任意のグリッド、北辺部の東側では磁北を基準とした片仮名表記グリッド（Fig.7）が設定されていたため、すべて公共座標グリッドに合わせた。なお、西辺部・東南部・南辺部・殿屋敷地区では、南に0.2m、東に2mずれた位置にグリッド杭が設定された状態で調査が行われたため、整理作業段階で遺構平面図等の位置を修正している。ただし、グリッド出土扱いの遺物については、取り上げ時の表記のままで処理せざるを得ず、北辺部の片仮名表記グリッド部分とともに誤差が生じている。

第２節　遺跡の立地と概要

中台遺跡は国分寺台遺跡群のひとつで、養老川の沖積平野と東京湾の海岸平野に面した標高25mから29mの洪積台地上に立地する（Fig.1）。この地域には縄文時代から中世にかけて多数の複合遺跡が展開しており、中台遺跡においても縄文時代早期と弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした遺構群が形成され、さらには国指定史跡として著名な上総国分僧寺跡とも重複する。

昭和23年（1948）には、県が「市原台総合調査」の一環として早稲田大学に調査を委託し、上総国





Fig.1　中台遺跡位置図



市原市基本図より作図

0　200m
（1／4,000）

Fig.2　中台遺跡現状位置図

分僧寺主要伽藍と神門古墳を対象とする確認調査が実施されたが、この段階では僧寺下層にあたる「中台遺跡」の遺構群は捕捉されていない。その後、国分寺台土地区画整理事業による大規模開発が決まると、昭和48年（1973）には事業区域内における遺跡分布調査が実施され、上総国分僧寺跡と重複する下層の遺跡についてはこれと区別し、「中台遺跡」として周知された。分布調査により、縄文前期から古墳前期にかけての複合遺跡であることが判明し、採取された土器も東海地方の影響が強いことなどが報告されている（田中・宮本1974）。

本格的な発掘調査が実施されると、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴建物跡が数多く発見された。調査で得られた膨大な資料は、基礎整理作業が進められる段階で概報として報告されたが、上総国分僧寺跡の資料公開に重点が置かれ、下層遺構については簡単な成果が触れられたに過ぎない。そのようななかでも、北辺部における竪穴建物群の存在が初めて紹介され、5の字状（有段）口縁をもつ（北陸系）甕形土器が多いことから「同一の開析谷に面する南中台遺跡と関連した一連の集落」と位置づけられるなど、注目される指摘もなされていた（須田1979）。このほか、中台遺跡からまとまって出土した北陸系・畿内系といった外来系土器を取り上げた研究成果も、多数発表されている（比田井1987・菊池1990・西川1991）。

近年では、南中台遺跡・蛇谷遺跡・中台遺跡・草刈遺跡を対象に、弥生時代終末期から古墳時代前期における当該地域土器編年を整備し、弥生時代終末期を中台式、古墳時代前期を草刈式とする型式名を提起し、この間の集落の動向について詳細な検討を加え、明らかにしている（大村2009）。

以下、発掘調査成果に基づく遺構の概要を述べることにしたい。

中台遺跡で最初に人々の営みが台地に刻まれるのは、縄文時代早期後半の炉穴群で、64基が検出されている。谷をはさんだ南側台地上に位置する東間部多遺跡（西田他1974）と天神台遺跡からも炉穴群が多数検出されており、天神台遺跡からは同時期と考えられる長台形の大型竪穴建物や貝塚も形成されている。

早期後半以降、前期後半・中期後半・後期初頭～中葉と断続的に包含層は散見されるが、具体的な生活の痕跡は認められず、中期末葉の埋甕2基が検出されたに過ぎない。遺跡東側に近接する南中台遺跡では、後期前葉に小規模な集落が形成されるが、その後は継続しない。近隣では西広貝塚（鶴岡他2007）や祇園原貝塚（忍澤1999）などの大規模貝塚が同時期に形成されており、晩期まで継続するこれらの大規模集落に集約されたものと考えられる。

縄文時代中期末葉以降、中台遺跡で土地利用の痕跡が認められるようになるのは弥生時代後期中葉のことで、その後の古墳時代前期にかけて350棟の竪穴建物が検出され、天神台遺跡・蛇谷遺跡（市毛他1977）とともに中核的な集落を形成する。いっぽう周辺では、天神台遺跡で中期後半から方形周溝墓群からなる大規模な墓域を形成し、根田代遺跡（大村2005）・台遺跡（半田2003）などの東京湾岸平野部に直接面する台地縁辺では環濠集落が成立し、水田開発拠点としての集住化が進んでいる。これら集落の環濠は短期間で維持されなくなるが、集落の衰退を意味するものではなく、居住域としての継続が認められる。後期、特に後半以降は遺跡数も増加し、中台遺跡のほか、天神台遺跡・御林跡遺跡（木對2008）などに集落が展開する。さらに弥生時代終末期（古墳時代早期）には、中台遺跡・南中台遺跡（大村2009）・長平台遺跡（小橋2006）などで、北陸系・畿内系・東海系・北関東系など、各地の外来系土器の集中が見られ、遠距離間交流の拠点地域となっており、東日本最古の前方後



Fig.3　国分寺台地区と周辺の遺跡群



『市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点』2009　市原市教育委員会 に加筆

Fig.4　中台遺跡と周辺遺跡全体図

円墳（纒向型）として知られる神門古墳（墳丘墓）群の存在とともに注目されている。なお、神門5号墳で見られる北陸系土器と東海西部系土器に注目し、地域内において集中出土が認められる南中台遺跡・中台遺跡北辺部集落（北陸系）と長平台遺跡（東海西部系）を成立基盤とし、4号墳出土土器群についても東海系と畿内系の要素が認められ、葬送儀礼に広域からの人々の参画が想定されている（田中1991）。出土遺物の点からも、中台遺跡を神門古墳（墳丘墓）群の母村と捉える考え方は定着しており、中台2式期の間に相次いで造墓されたと考えられている（大村2009）。

古墳時代前期以降、中台遺跡からは生活の痕跡が途切れ、上総国分寺創建期までの空白期間が続いている。この時期の国分寺台地区では、居住域が急速に減少する傾向が認められ、中期まで継続すると考えられた御林跡遺跡でも断絶する期間をはさむ可能性がでてきた。天神台遺跡では居住域の衰退とともに墓域化が進み、諏訪台古墳群が成立する。古墳時代中期以降は、東向原遺跡（高橋2002）・加茂遺跡（浅利2005）で大規模集落が営まれ、墓域としては「王賜」銘鉄剣が出土した稲荷台古墳群や古墳時代後期の南向原古墳群、6世紀末に埼玉県鴻巣市生出塚埴輪生産遺跡から埴輪を搬入した山倉1号墳を含む山倉古墳群（小橋他2004）が展開する。

以上述べてきたとおり、国分寺台地域は縄文時代後・晩期、弥生時代中期末から古墳時代にかけて、著名な重要遺跡が密集し、古代においては古くから文化密度の高い特殊地域として推移したことがわかり、後の上総国府・国分二寺造営の歴史的・政治的な前提として理解しうる。



西辺部全景（昭和54年度）　南西方向から。

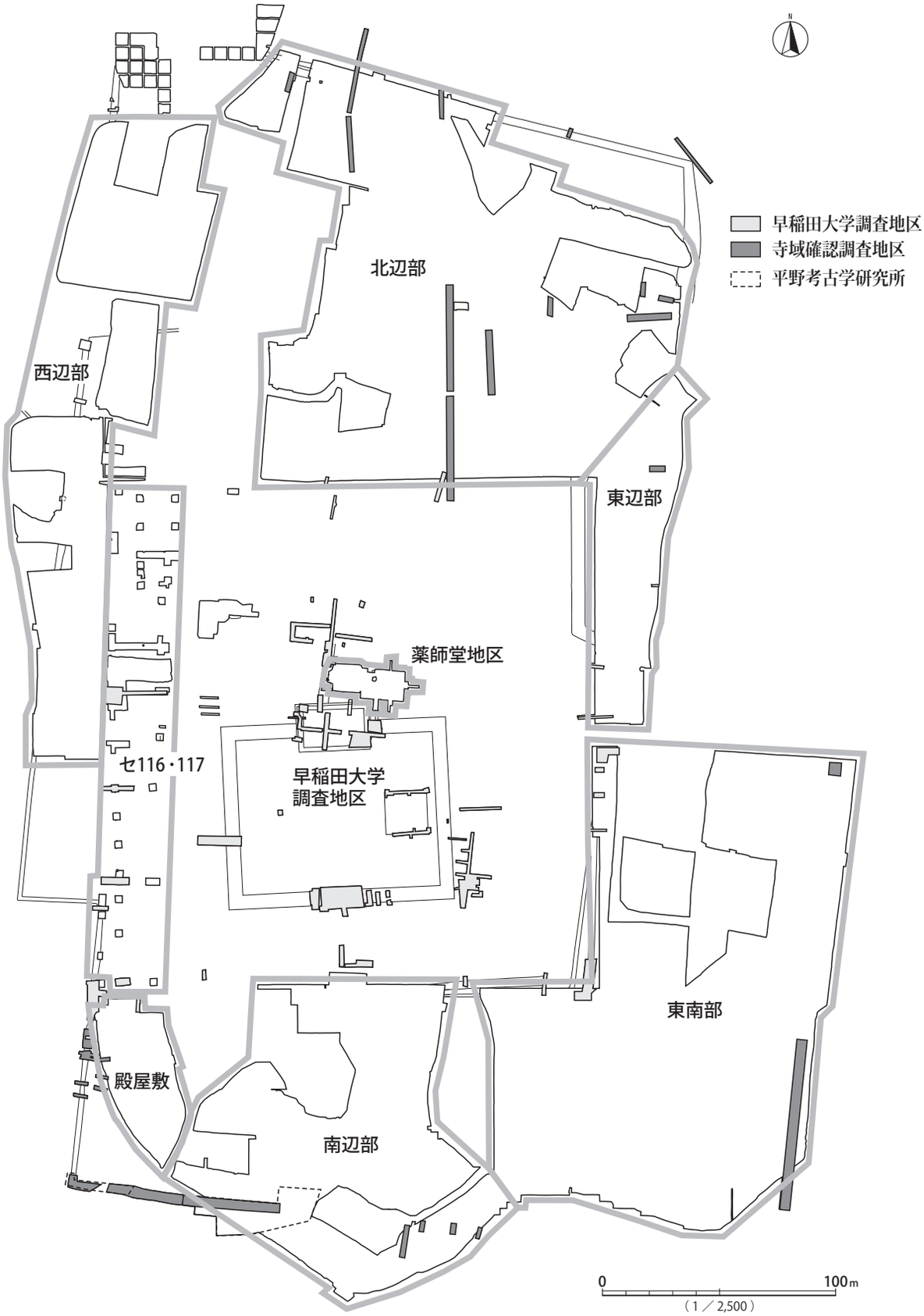


Fig.5　各調査地区割図

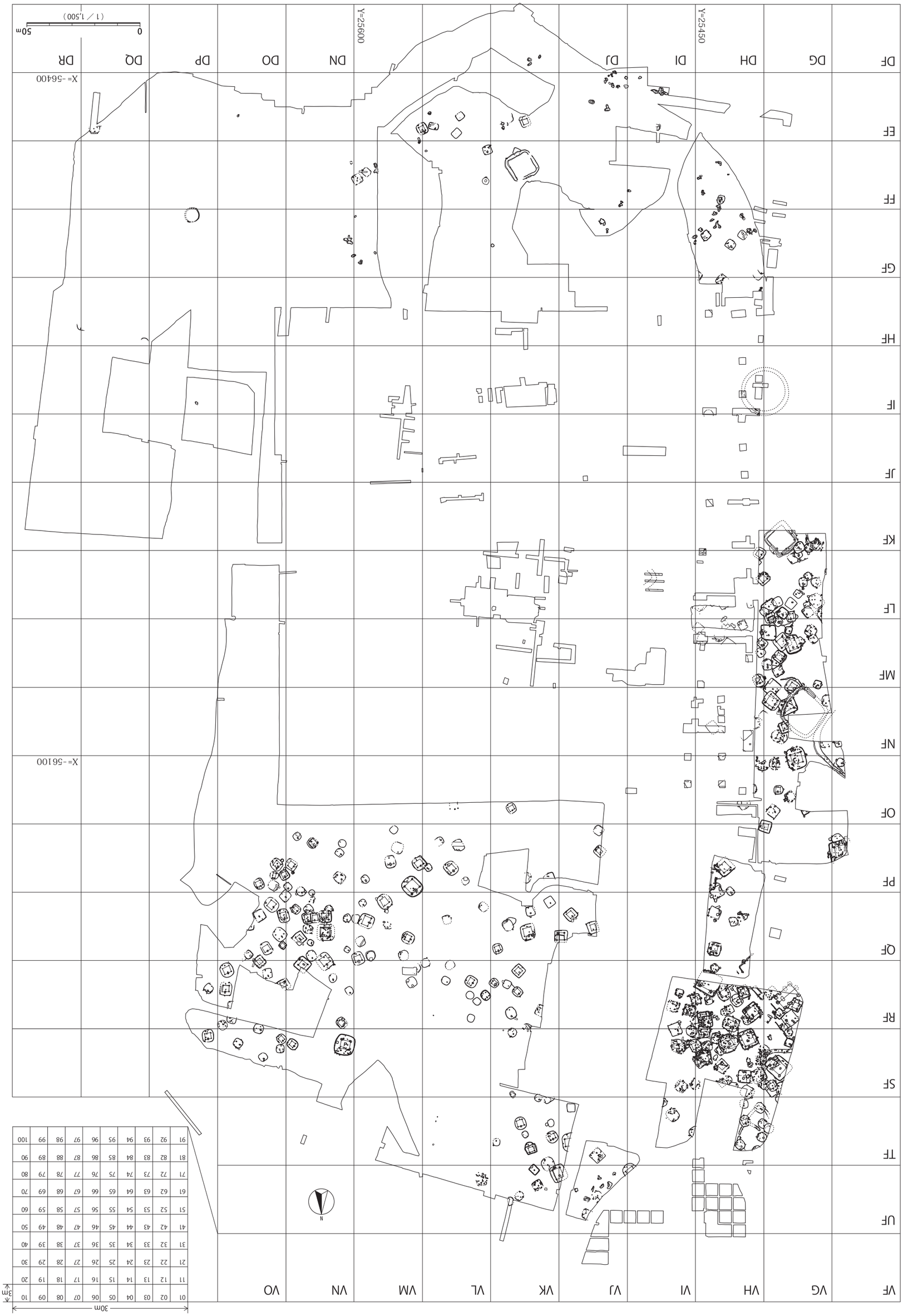


Fig.6 中台遺跡グリッド配置図

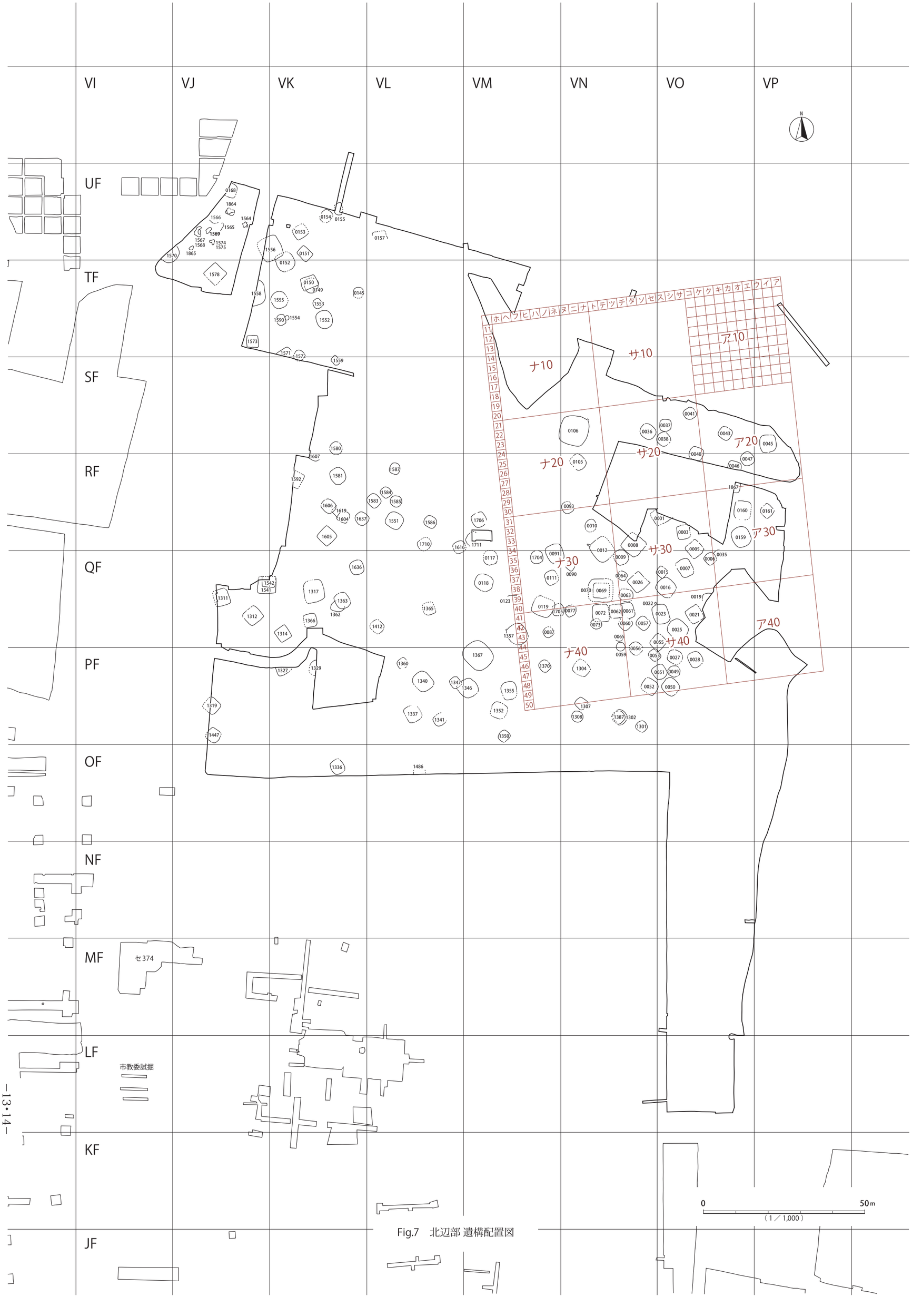


Fig.7　北辺部 遺構配置図



Fig.8　西辺部 遺構配置図

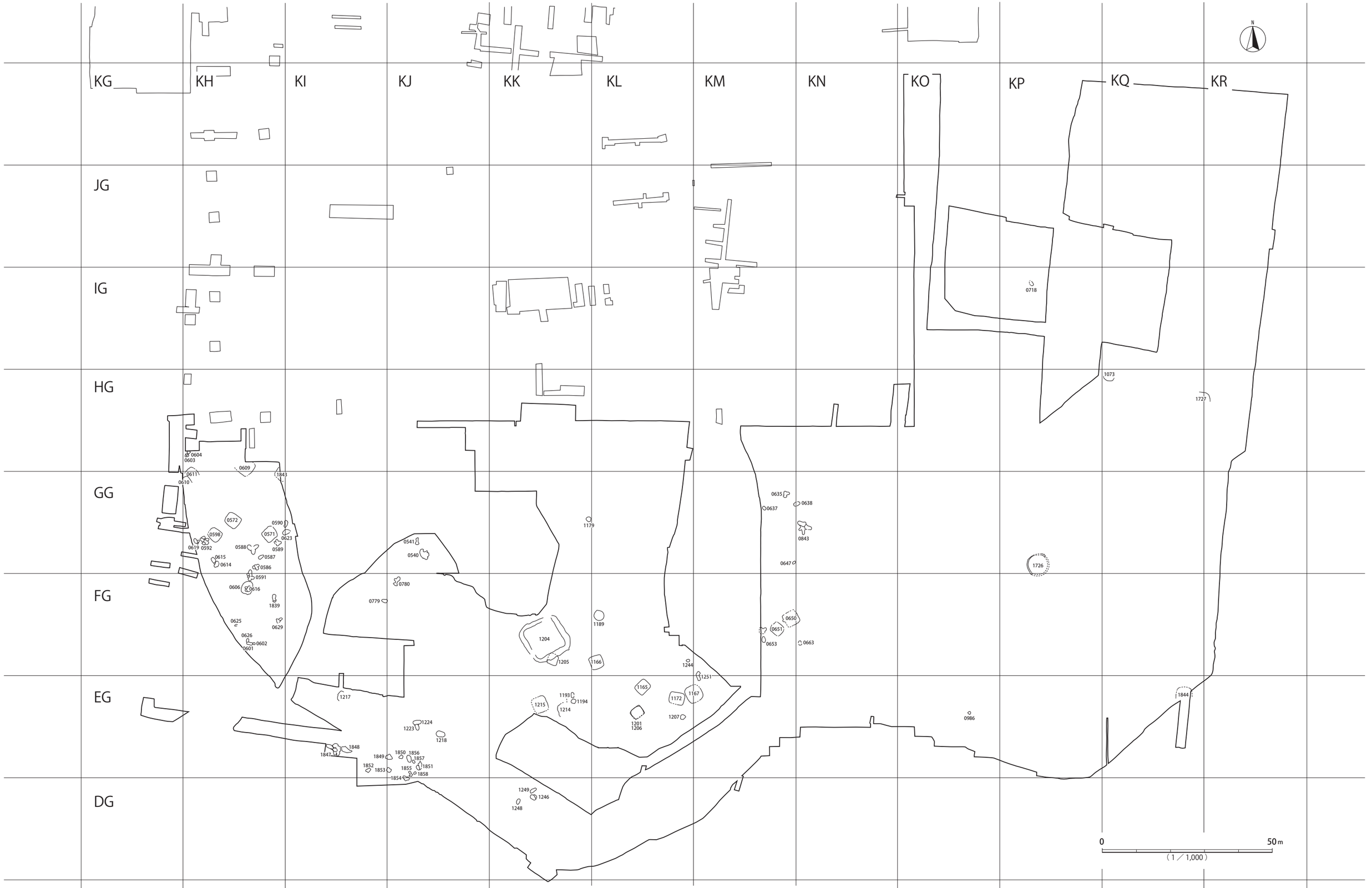


Fig.9　殿屋敷地区、南辺、東南部 遺構配置図

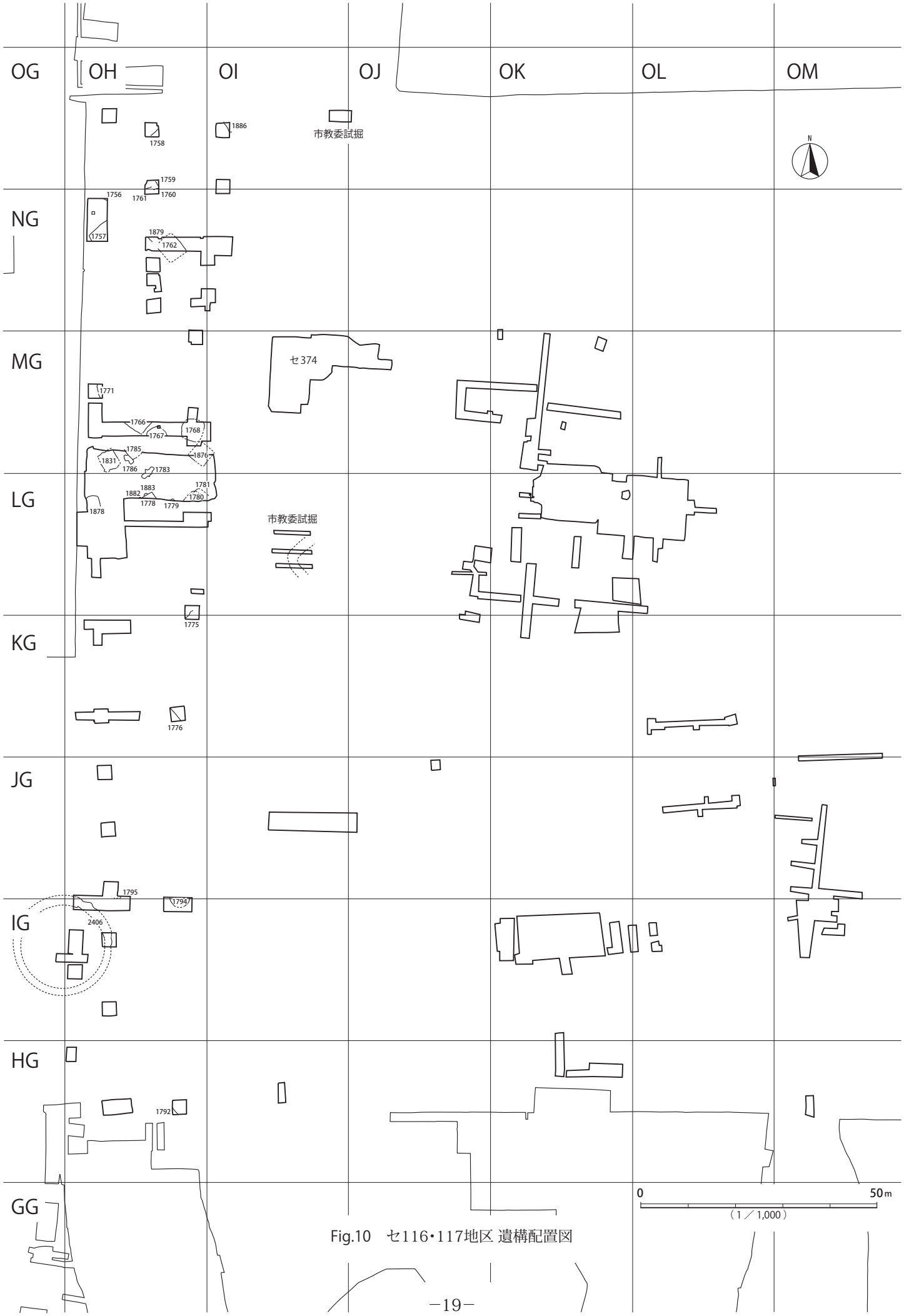


Fig.10　セ116・117地区 遺構配置図

第２章　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、炉穴64基と土坑22基が検出されている。

炉穴は早期後半条痕文土器前半期のもので、地区ごとの内訳は、北辺部９基、西辺部11基、殿屋敷地区18基、東南部７基、南辺部17基、セ116・117地区２基である。土坑も早期後半が主体で、火床部が明確でない炉穴が含まれる可能性がある。また、中期末葉の埋甕２基を含む。地区ごとの内訳は、北辺部１基、西辺部４基、殿屋敷地区２基、東南部２基、南辺部11基、セ116・117地区２基である。

第１節　炉　穴

北辺部

炉穴 1564 号　（Fig.18、PL.8）

UJ−68に位置する。北西側で土坑（遺構番号なし）と重複する。新旧関係は、本遺構が土坑よりも古い。重複する土坑については、出土遺物がなく根拠に乏しいが、上層遺構（上総国分僧寺創建期以降）と思われる。

火床面の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.15mを測る。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴 1565 号　（Fig.18、PL.8）

UJ−66を中心に位置する。北側で溝2226号（上層）と重複し、西側は未掘のままとなっている。新旧関係は、本遺構が2226号よりも古い。

長楕円形を呈し、規模は長軸長2.33m、主軸方位はN−19°−Eである。a・bの２基が重複しており、aは確認面からの深さは0.69mを測り、火床面は良く焼けている。bはaの埋没後に再度掘り直されたもので、確認面からの深さは0.47mを測る。最下層（８層）に焼土を含むものの、明確な火床面は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴 1567 号　（Fig.18・19、PL.8・98）

UJ−73を中心に位置する。西側で炉穴1568号と重複する。新旧関係は、本遺構が1568号よりも新しい。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は1.49×0.69m、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN−178°−Eで、ほぼ真南を向く。

実測可能遺物は、1は尖底部、2は口縁部破片である。2の外面には擦痕を残し、胎土に繊維を含む。早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

炉穴 1568 号　（Fig.18・19、PL.8・98）

UJ−73を中心に位置する。西側で炉穴1567号と重複する。新旧関係は、本遺構が1567号よりも古い。

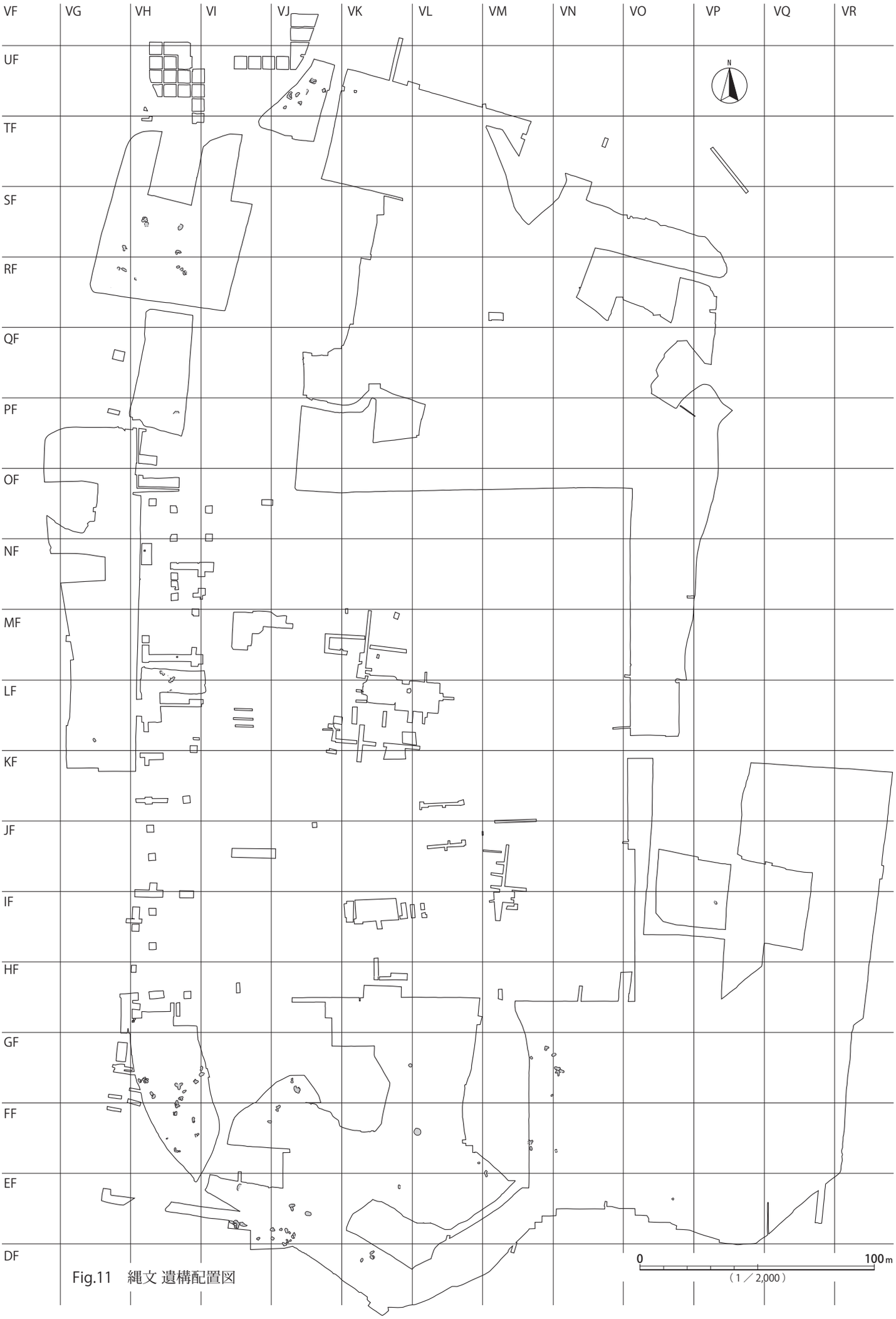


Fig.11　縄文 遺構配置図

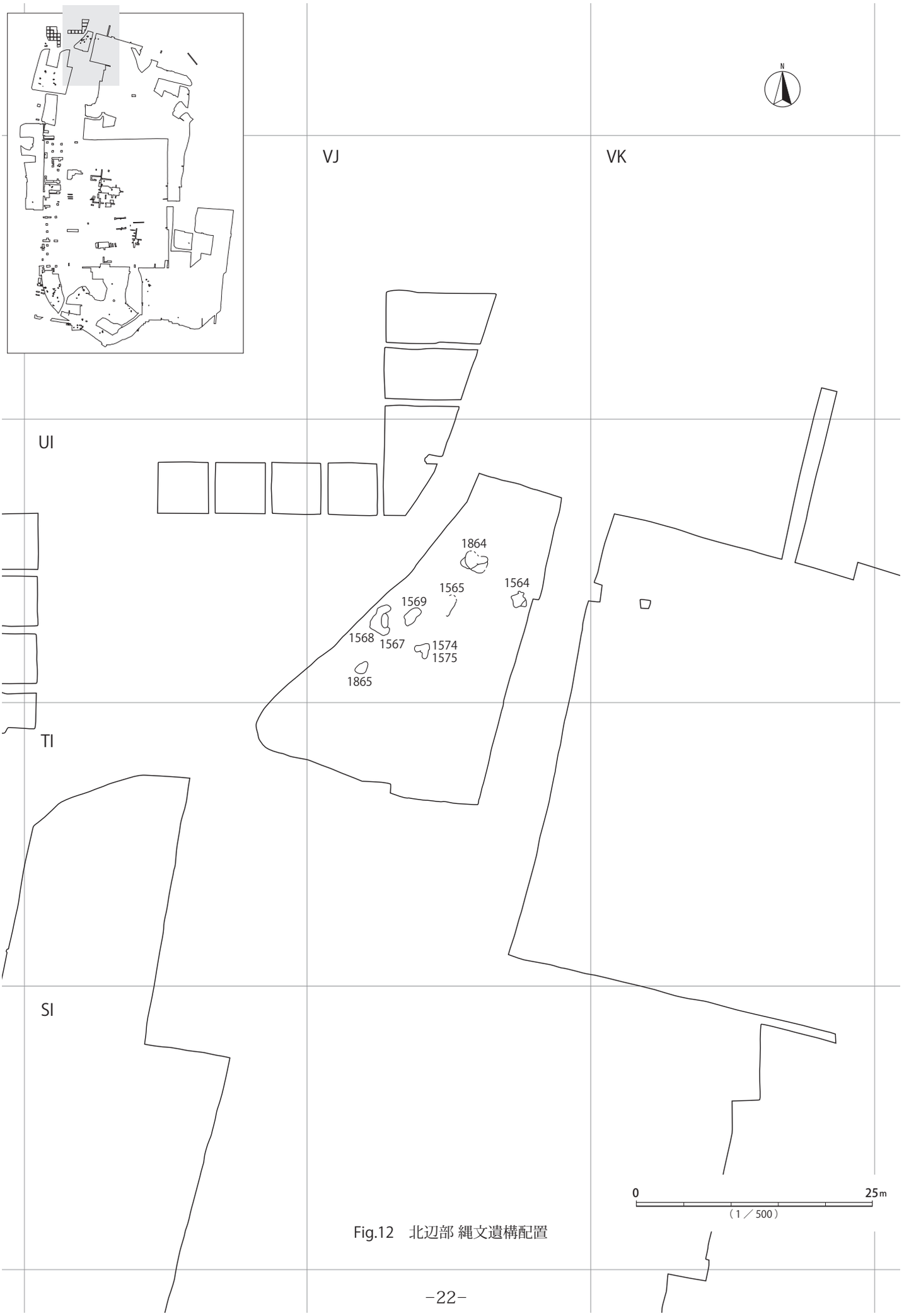


Fig.12　北辺部 縄文遺構配置



Fig.13　西辺部(1) 縄文遺構配置

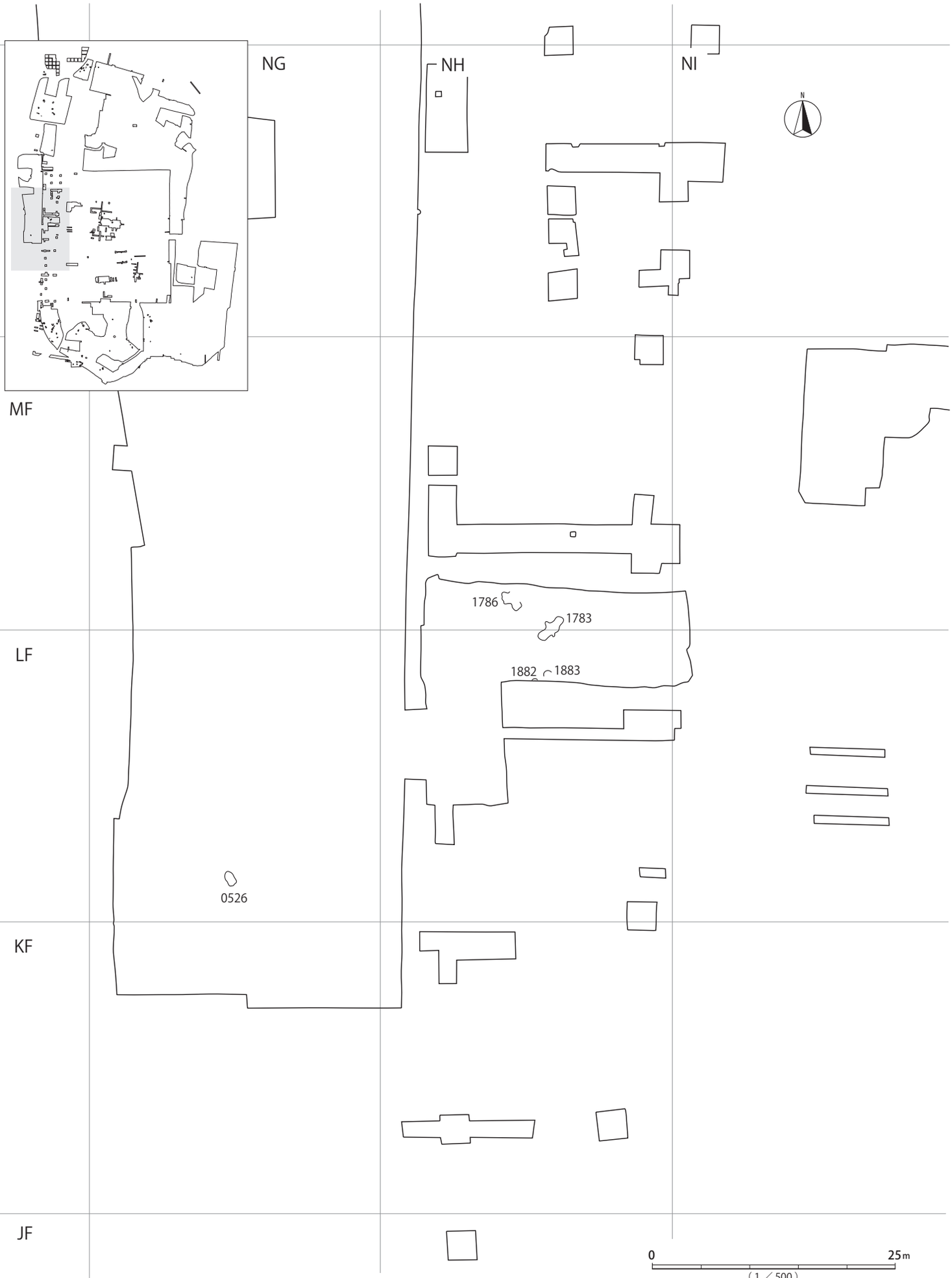


Fig.14　西辺部(2)、セ116・117地区 縄文遺構配置

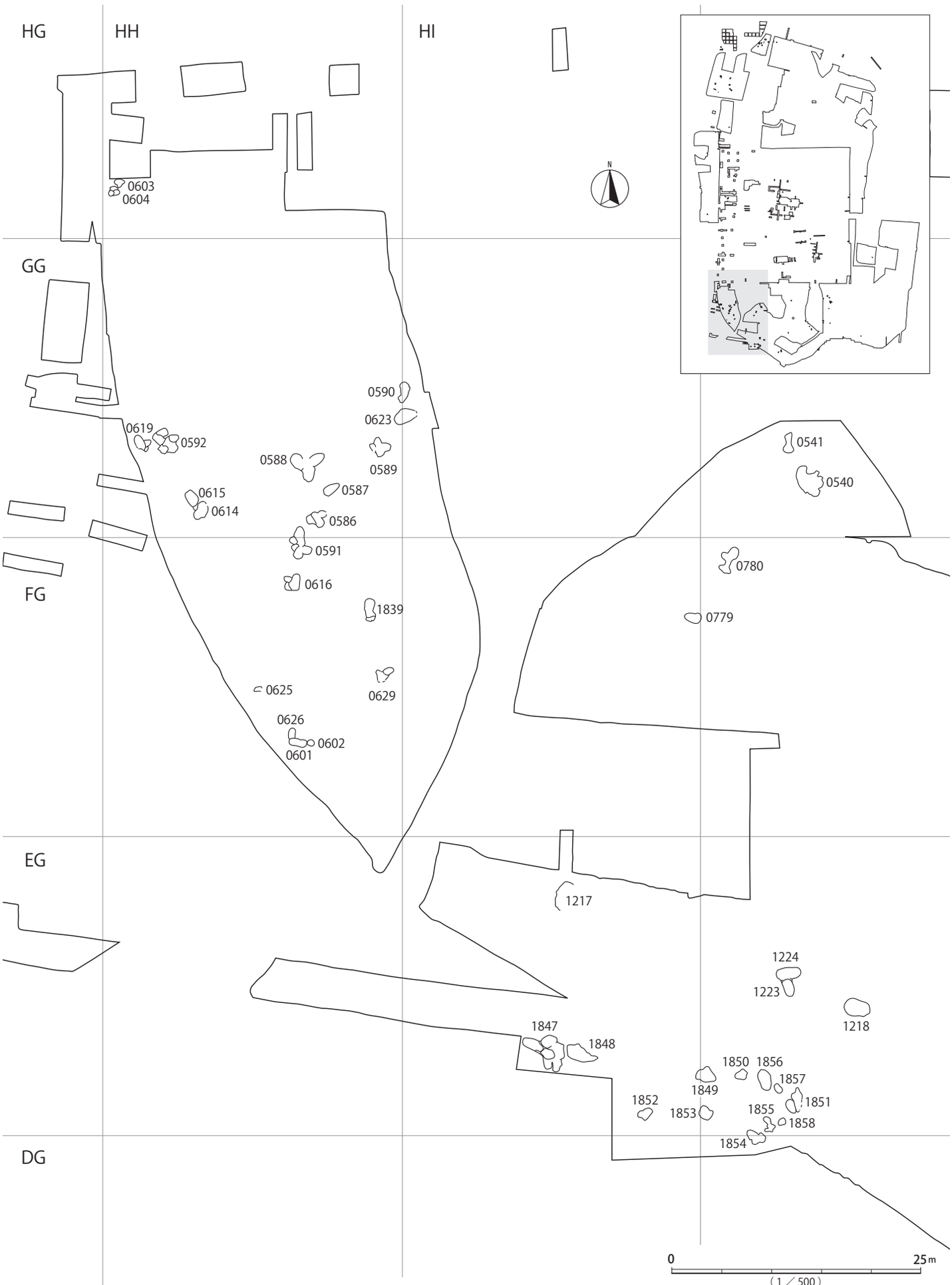


Fig.15　殿屋敷地区、南辺部(1) 縄文遺構配置

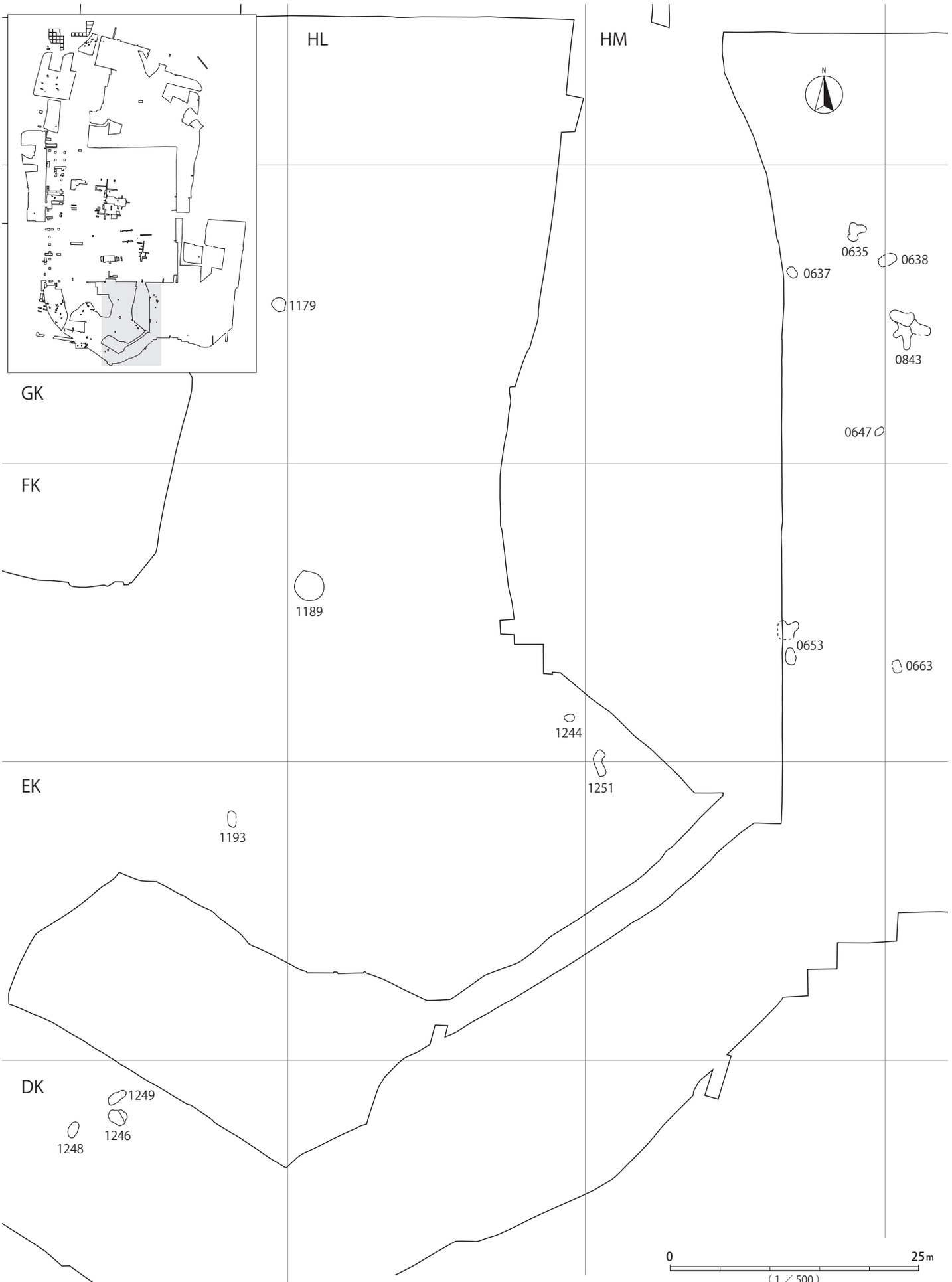


Fig.16　南辺(2)、東南部(1) 縄文遺構配置

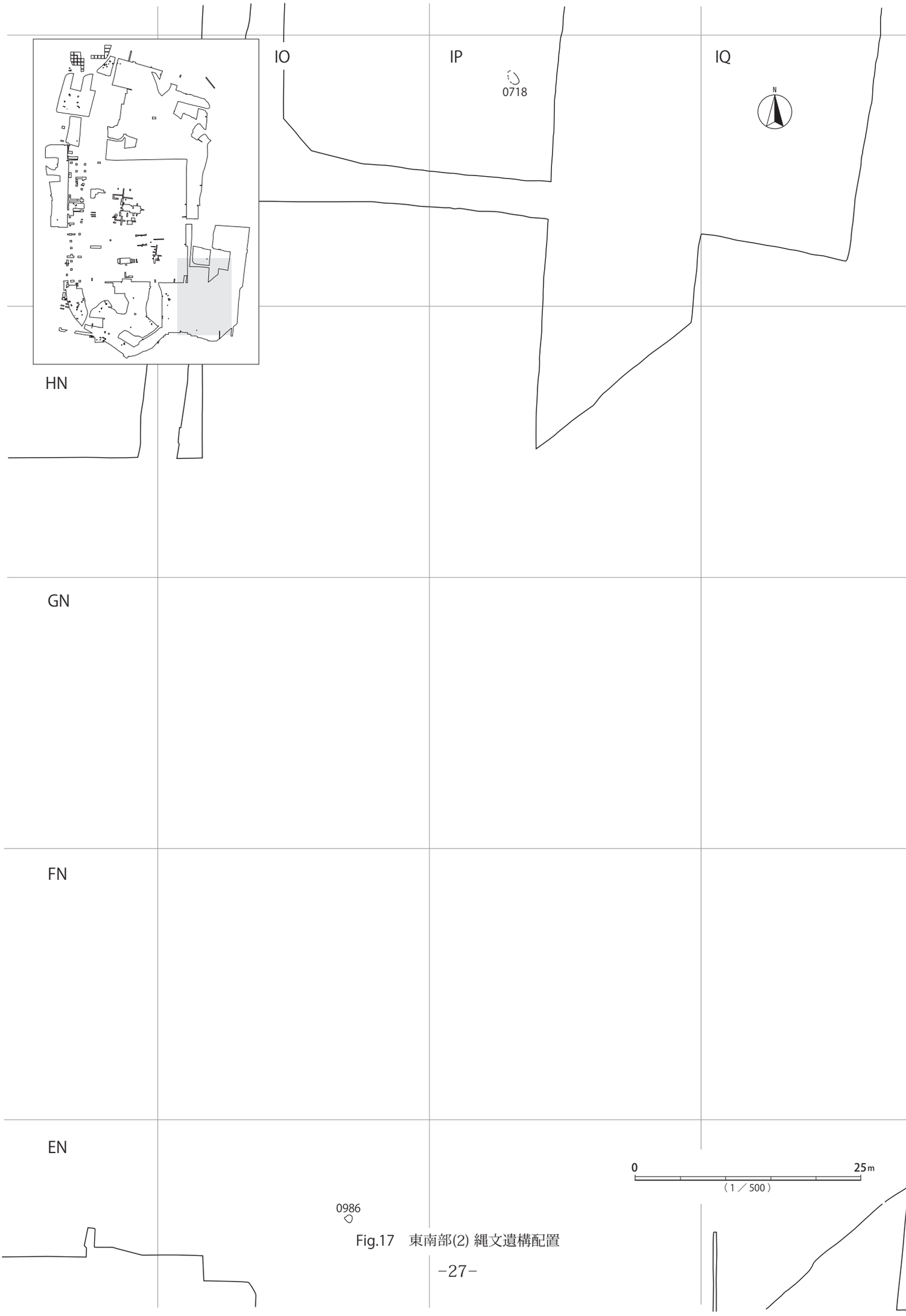


Fig.17　東南部(2) 縄文遺構配置

平面形態はL字形を呈し、2基ないし3基が重複するものと考えられるが、火床面は1ヶ所しか検出されておらず、いずれに帰属するものか明確でない。規模は3.04×1.02m、確認面からの深さ0.19mを測る。主軸方位はN−140°−WとN−50°−Wである。

実測可能遺物は1の口縁部破片のみで、内外面に貝殻条痕文を施し、胎土に繊維を含む。口縁端部には弱い刺突を加えた可能性がある。

早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

炉穴1574号 （Fig.19、PL.8・133）

UJ−75を中心に位置する。東側で炉穴1575号と重複する。新旧関係は、本遺構が1575号よりも新しい。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は1.59×0.67m、確認面からの深さは0.29mを測る。主軸方位はN−102°−Wである。

実測可能遺物は1の大型の磨石・敲石のみで、帰属時期は明確でない。

炉穴1575号 （Fig.19、PL.8・98）

UJ−85を中心に位置する。北側で炉穴1574号と重複する。新旧関係は、本遺構が1574号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は1.50×0.61m、確認面からの深さは0.38mを測る。主軸方位はN−167°−Wである。

実測可能遺物は1〜4の貝殻条痕文を施す胴部破片で、3・4は胎土に繊維を含む。

早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

炉穴1864号 （Fig.20）

UJ−57を中心に位置する。北側で溝（上層・遺構番号なし）、西側で溝2227号（上層）と重複し、南東側は撹乱により一部壊される。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は不整形を呈し、規模は2.66×1.75mを測る。a〜cの3基が重複し、bが最も新しいが、aとcの新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく不明である。確認面からの深さは、aが0.19m、bが0.18m、cが0.23mを測る。主軸方位はaがN−31°−W、bがN−82°−E程度と思われ、cは不明である。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

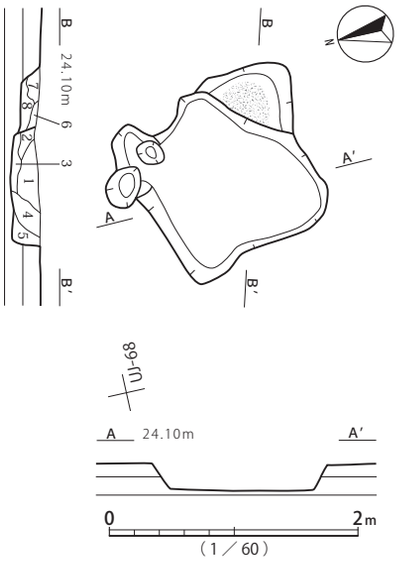
炉穴1865号 （Fig.20）

UJ−82を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整長楕円形を呈し、規模は1.56×1.04m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位はN−138°−Wである。調査図面には火床面の記載がなかったが、航空写真から判断しておよその位置を記した。

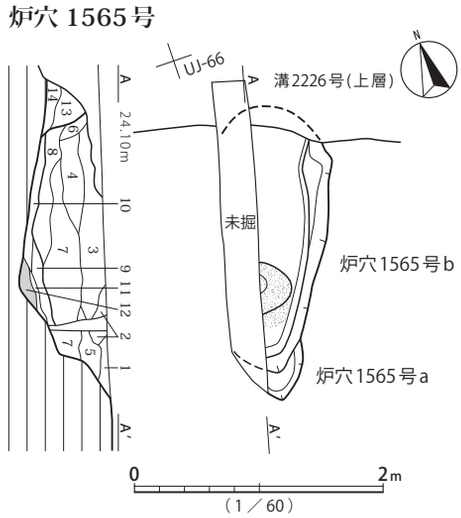
出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴 1564号



1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　黒褐色土　焼土粒を少量含む。
3　暗褐色土　ローム粒を含む。
4　暗褐色土　ローム粒を少量含み、焼土粒もわずかに混じる。
5　暗褐色土
6　暗褐色土　焼土粒を含む。7層より明るい。
7　暗褐色土　焼土粒をわずかに含む。
8　褐色土　焼土粒を含む。

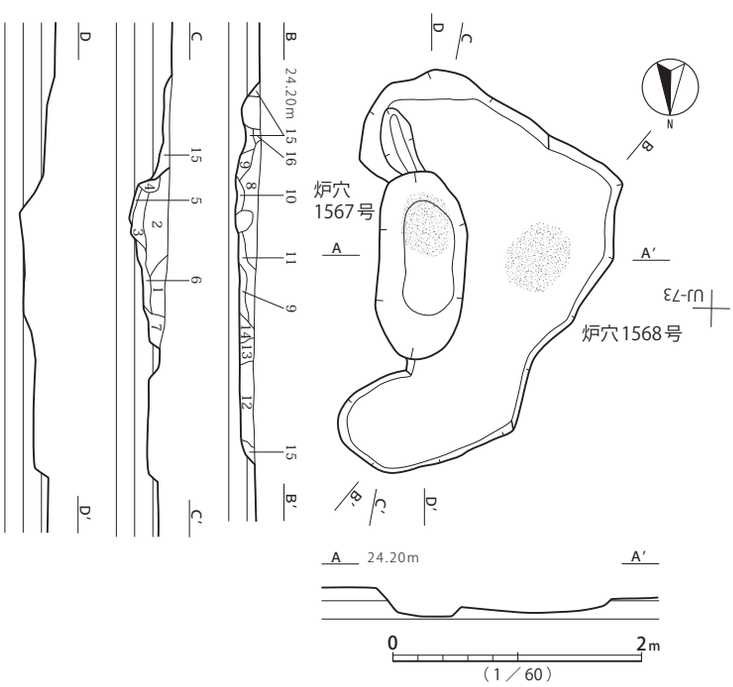
炉穴 1565号



1565号a
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
2　暗褐色土　ローム粒を含む。
3　黒褐色土　焼土粒を少量含み、ローム粒も混じる。
4　黒色土　焼土粒を少量含む。7層よりもやや明るい。
5　黒褐色土　焼土粒をわずかに含む。
6　黒褐色土　ローム粒を含む。
7　黒色土　焼土粒を含み、ローム粒も少量混じる。
8　黒色土　焼土粒を含む。

1565号b
9　暗褐色土　焼土ブロックを少量含み、焼土粒も混じる。
10　暗褐色土　焼土粒が混じる。
11　暗赤褐色土　焼土粒を含む。
12　淡赤褐色土　焼土層。焼土ブロックが少量混じる。
13　黒褐色土　焼土粒を少量含む。
14　暗褐色土　ローム粒を少量含み、焼土粒も混じる。

炉穴 1567・1568号

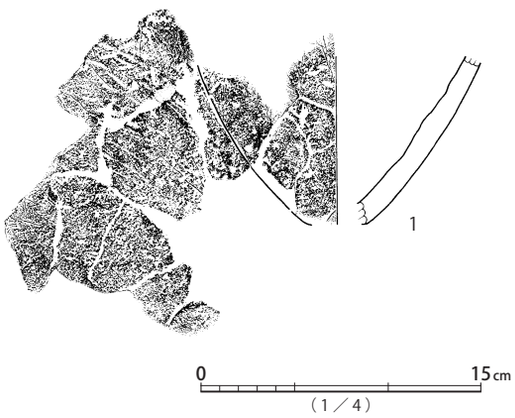


1567号
1　黒色土　ローム粒を含む。
2　黒褐色土　焼土粒を少量含み、ローム細粒も混じる。
3　黒褐色土　焼土粒を含む。
4　暗褐色土　焼土粒を少量含む。
5　淡赤褐色土　焼土粒を含む。
6　暗褐色土　焼土粒を少量含み、黒褐色土も混じる。しまりあり。
7　暗褐色土　ローム粒を含む。

1568号
8　黒褐色土　焼土粒を少量含む。
9　暗褐色土　10層より明るい。
10　暗褐色土　焼土粒を含む。
11　黒褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む。8層より明るい。
12　暗褐色土　14層より暗い。
13　黒褐色土
14　暗褐色土　ローム粒・黒褐色土を含む。
15　褐色土
16　黒褐色土　8層より明るい。

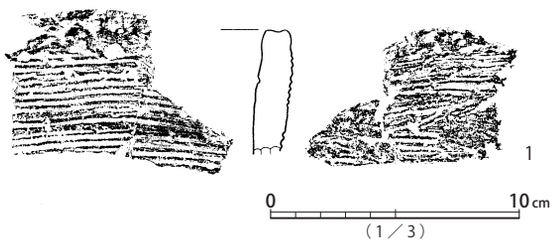
Fig.18　炉穴1564号 遺構、炉穴1565号 遺構、炉穴1567号(1) 遺構、炉穴1568号(1) 遺構

炉穴 1567号

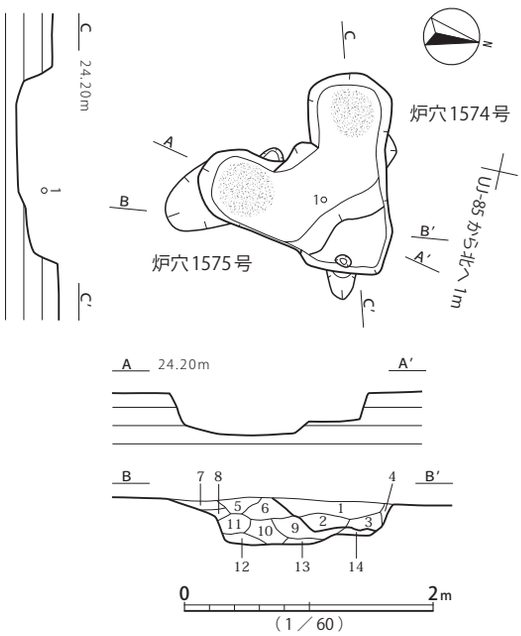




炉穴 1568号



炉穴 1574・1575号



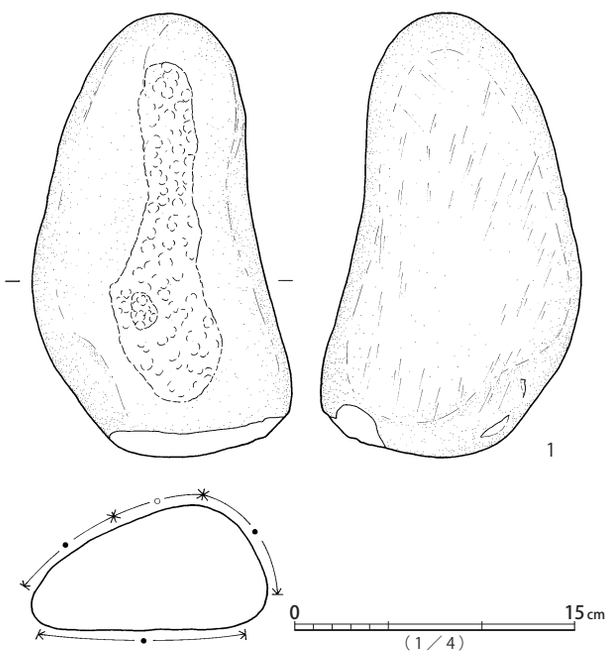
1574号

1　黒褐色土　　焼土粒を少量含み、ローム細粒も混じる。
2　黒色土　　ローム粒を少量含む。
3　黒褐色土　　焼土粒・ローム粒を少量含む。
4　暗褐色土

1575号

5　黒色土
6　黒褐色土　　ローム細粒を少量含む。
7　暗褐色土
8　褐色土
9　黒褐色土　　焼土粒を含む。
10　黒褐色土　　焼土粒を少量含む。9層より明るい。
11　暗褐色土　　10・12層より明るい。
12　暗褐色土　　焼土粒を含む。
13　暗褐色土　　ローム粒を含む。
14　暗黄褐色土

炉穴 1574号



炉穴 1575号

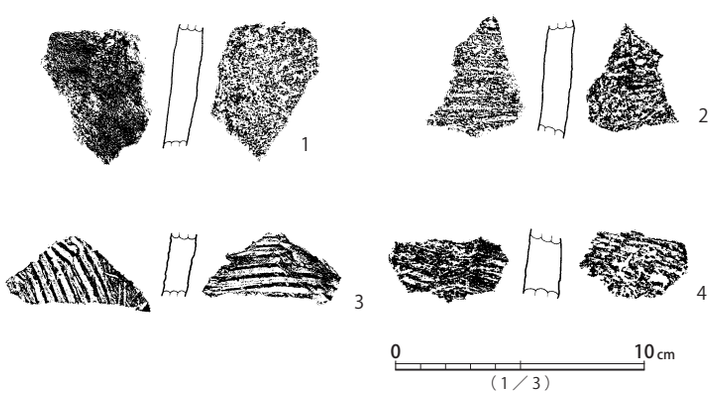


Fig.19　炉穴1567号(2) 遺物、炉穴1568号(2) 遺物、炉穴1574号 遺構遺物、炉穴1575号 遺構遺物

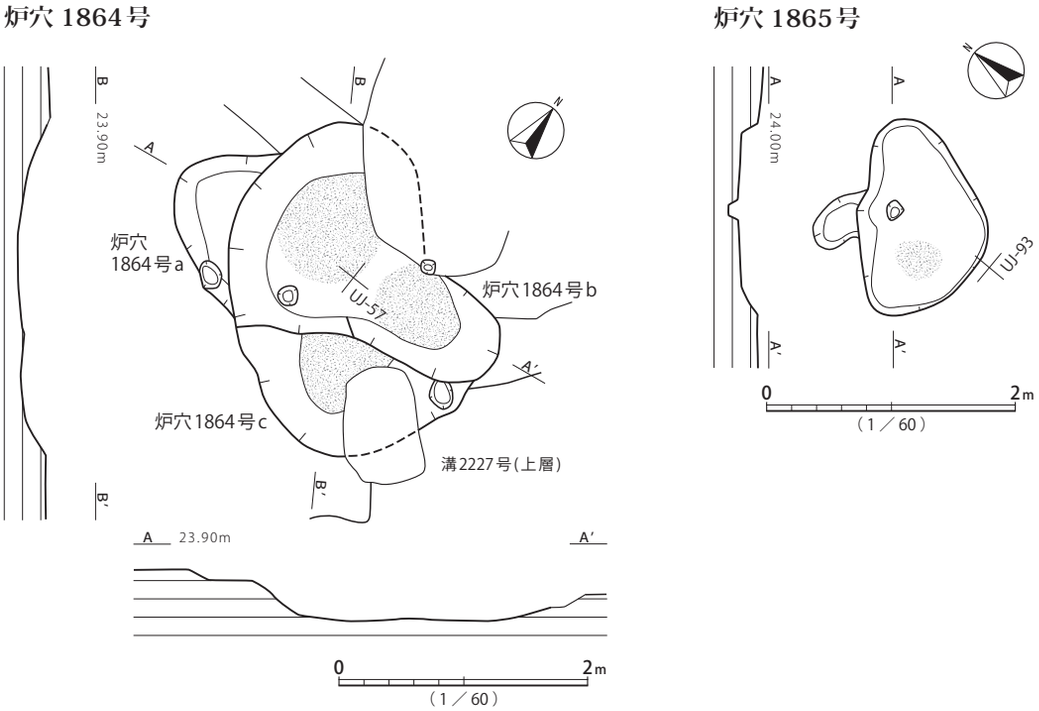


Fig.20　炉穴1864号 遺構、炉穴1865号 遺構

炉穴1887号　（PL.8）

調査時は遺構として認識されていなかったが、火床を思わせる遺構面に土器が埋設されている状況写真から判断し、整理作業段階で新規に追加したものである。

UJ−65を中心に位置する。明確でないが、北側で竪穴1566号と重複する。新旧関係は本遺構が1566号よりも古い。

調査図面の記載がなく、掘り込みをもたないために、航空写真測量図からも平面形態を捉えることができないことから、遺構写真のみ掲載している。写真では土器が埋設されているが、遺物を特定することができず、帰属時期は明確でない。

西辺部

炉穴0270号　（Fig.21、PL.98）

RG−19を中心に位置する。北東隅で炉穴1885号、南側で竪穴0265号と重複する。新旧関係は本遺構が0265号よりも古い。1885号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく明確でないが、本遺構範囲の上に火床面が載ることから、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は長楕円形を呈すものと思われるが、南側が壊されているため、詳細は不明である。規模は短軸長1.05m、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位はN−9°−Eである。火床面は2ヶ所検出されているが、新旧関係は不明である。

実測可能遺物は、1は口縁部破片、2は胴部破片である。1は端部を面取りし、外面に丸頭状工具による条痕文を施す。2は貝殻条痕文ののち、外面に斜行太沈線文を加える。

早期後半、茅山下層式期の所産であろうか。

炉穴1868号 （Fig.21）

RG−20を中心に位置する。北側で竪穴0264号、南側でピット271号（上層）、東側で溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は2.32×0.92m、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−121°−Eである。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴1885号 （Fig.21）

RG−19を中心に位置する。西側で炉穴0270号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく明確でないが、本遺構火床面が0270号に載ることから、本遺構のほうが新しいと思われる。

火床面のみ検出されたため、炉穴とは断定できないが、位置関係から0270・1868号とともに炉穴群を構成した可能性が高い。確認面からの深さは0.12mを測る。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴0299号 （Fig.21、PL.98）

RH−28を中心に位置する。北側で竪穴0255号、東側で竪穴0256号と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

a・bの2基が重複し、平面形態はいずれも長楕円形を呈す。断面図など記録上の根拠がないが、aがbを壊して構築されたものと思われる。規模はaが1.54×0.79m、bが長軸長1.65m、確認面からの深さはaが0.16m、bが0.21mを測る。主軸方位はaがN−168°−E、bがN−157°−Eである。

実測可能遺物は1・2の口縁部破片で、胎土に繊維を含む。1は外面に細隆起線文、内面に貝殻条痕文を施す。2は波状口縁で、端部に斜方向のキザミを加える。外面は貝殻条痕を地文とし、平行細隆起線による襷状文を加え、区画内に集合沈線を充填する。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

炉穴0300号 （Fig.21、PL.98）

RH−18に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整形を呈し、火床面の分布から2〜3基が重複している可能性が高い。南西側の壁が検出されていないため、詳細は不明である。現存規模は短軸長1.10m、確認面からの深さは0.17mを測る。

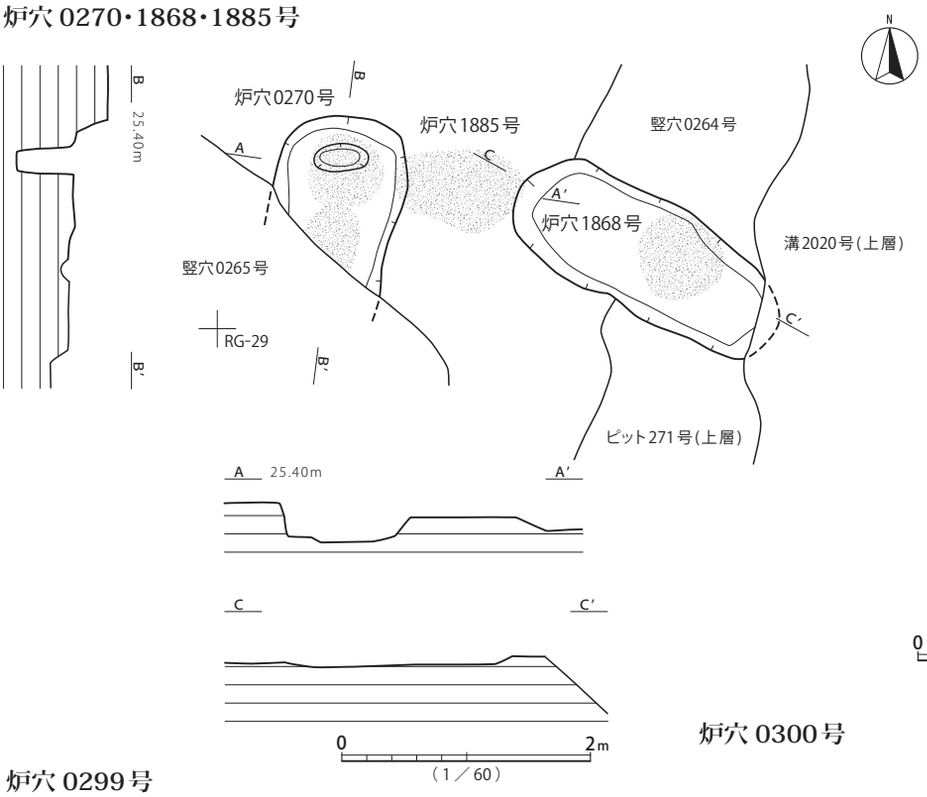
実測可能遺物は、1は口縁部破片、2は胴部破片である。いずれも貝殻条痕を地文とし、1は細隆起線区画内に斜格子状の沈線文を充填、2は平行細隆起線による襷状文ののち、区画内に集合沈線を充填する。胎土に繊維をわずかに含み、同一個体の可能性がある。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

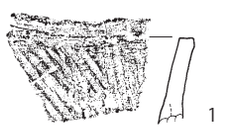
炉穴0303号 （Fig.22、PL.98・142）

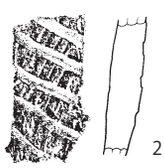
SH−42を中心に位置する。他遺構との重複はない。

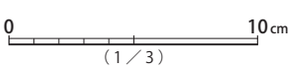
炉穴 0270・1868・1885号



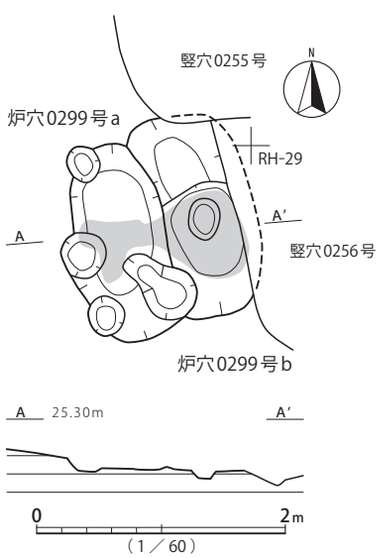
炉穴 0270号



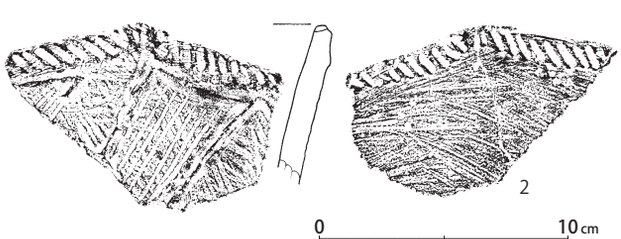


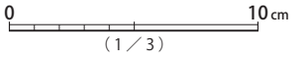


炉穴 0299号

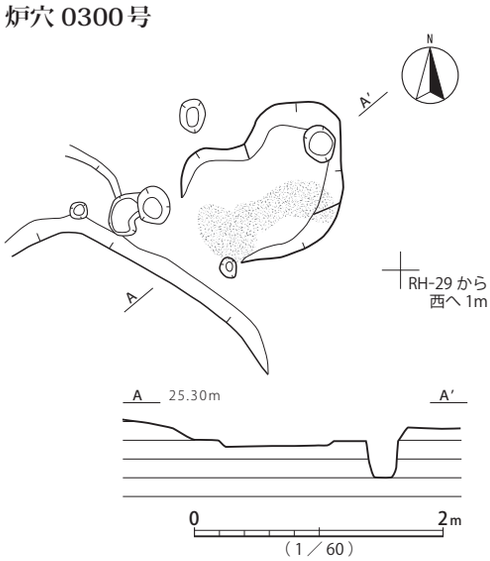


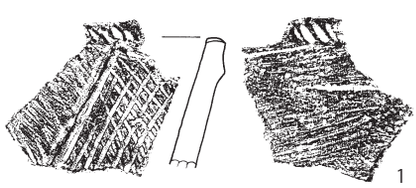






炉穴 0300号







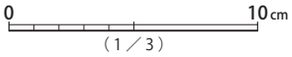


Fig.21　炉穴0270号・1868号・1885号 遺構遺物、炉穴0299号 遺構遺物、炉穴0300号 遺構遺物

a～cの３基が重複し、平面形態は不整形を呈す。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。推定規模はaが2.60×1.07m、cが短軸長1.18m、確認面からの深さはaが0.36m、bが0.27m、cが0.33mを測る。主軸方位はaがN－126°－W、cがN－142°－Eである。

実測可能遺物は、1・2は口縁部破片で、胎土に繊維を含む。内外面に擦痕を残す。3は土器円盤で、周縁は打欠いたままである。外面に貝殻条痕文を施し、内面に擦痕を残す。

早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴0304号　（Fig.22、PL.98）

RH－17を中心に位置する。西側で竪穴260号（上層）と重複するが、底面までは達していない。新旧関係は、本遺構が260号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は1.45×0.99m、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN－80°－Eである。火床面はよく焼けている。

実測可能遺物は、1は口縁部破片、2は胴部破片で、胎土に繊維を少量含む。1は口縁端部に斜方向のキザミを施し、貝殻条痕を地文に、斜行沈線文を加える。2は内外面に貝殻条痕文を施す。

早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴0321号　（Fig.23、PL.8・98）

SH－97を中心に位置する。北側で竪穴0243号と重複する。新旧関係は、本遺構が0243号よりも古い。

a・bの２基が重複し、平面形態はL字形を呈すと思われるが、北西側で南北に延びる掘り込みも本遺構に関連する可能性がある。新旧関係は、aがbよりも新しい。調査図面には火床面は１ヶ所しか記載されていなかったが、aの土層断面図では西側からも焼土の堆積を確認することができ、1～6・12層と7～11層の２基に分かれる可能性がある。規模はaが2.07×0.94m、bが短軸長1.05m、確認面からの深さはaが0.50m、bが0.35mを測る。主軸方位はaがN－94°－E、bがN－15°－Eである。

実測可能遺物は、1・2は尖底部、3は波状口縁部破片、4～7は胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。3・4は平行細隆起線による襷状文ののち、区画内に集合沈線を充填する。1・5は擦痕で、これ以外はすべて貝殻条痕を地文とする。1と5、3と7、4と6はそれぞれ同一個体と考えられ、いずれもbからの出土と思われる。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

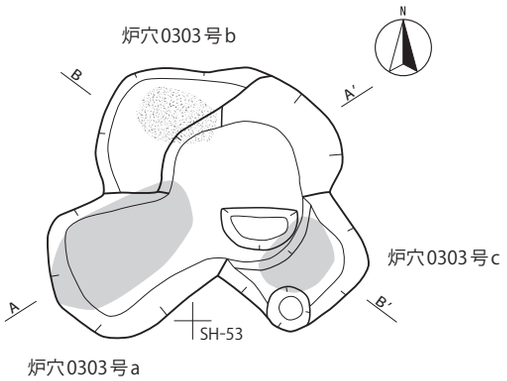
炉穴1869号　（Fig.24）

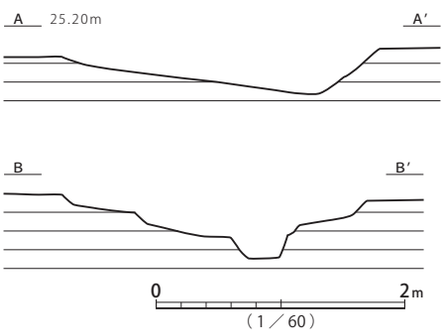
SG－90を中心に位置する。南東側で土坑324号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構のほうが古い。

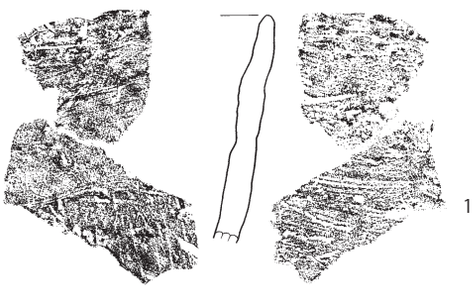
平面形態は不整長楕円形を呈し、２基の重複の可能性がある。規模は2.36×1.36m、確認面からの深さは0.14mを測る。主軸方位はN－157°－E程度と思われる。

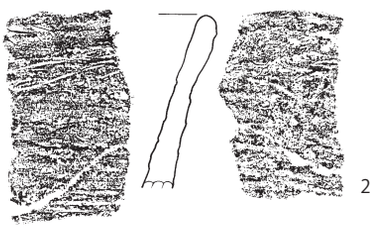
出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

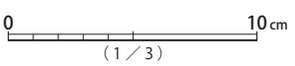
炉穴 0303号



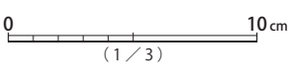




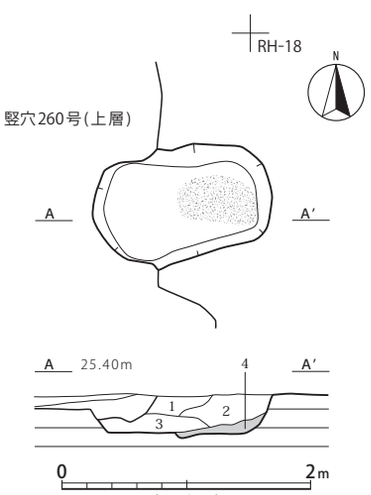




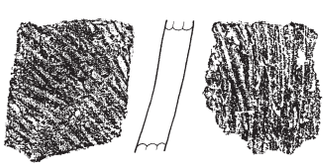


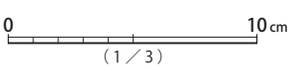


炉穴 0304号





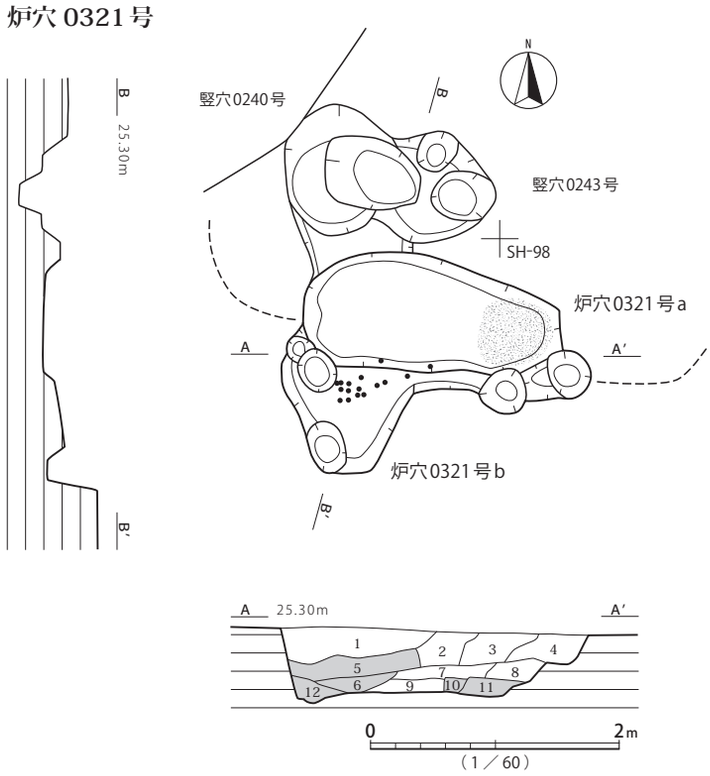




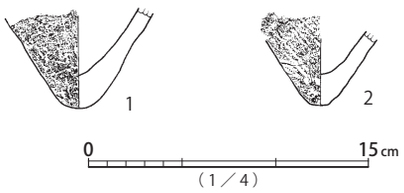
1　暗褐色土　　ローム粒を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
2　暗褐色土　　ローム土を斑状に多く含む。粘性なし、しまりあり。
3　黒褐色土　　ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりあり。
4　暗赤褐色土　焼土粒・ローム粒を多く含む。粘性・しまりあり。

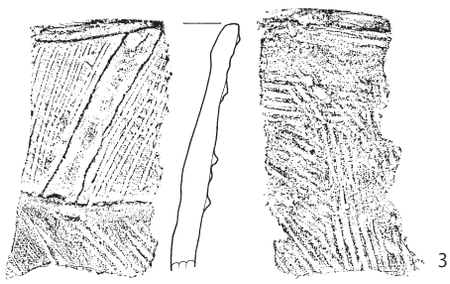
Fig.22　炉穴0303号 遺構遺物、炉穴0304号 遺構遺物

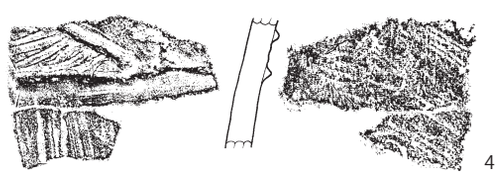
炉穴 0321 号



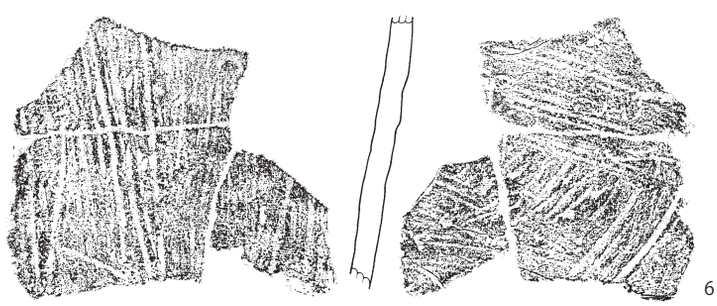
1 暗褐色土　砂粒を含み、ローム粒もわずかに混じる。しまりあり。
2 明暗褐色土　ロームを多く含む。粘性あり、しまり強い。
3 黒褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む。粘性・しまりあり。
4 黒褐色土　ローム粒を少量含む。粘性・しまりなし。
5 黒褐色土　焼土粒・焼土ブロックを多く含み、ロームブロックも混じる。粘性あり、しまり強い。
6 暗明褐色土　焼土粒、被熱した小ロームブロックを多く含む。 粘性なし。
7 明褐色土　ロームブロックを多く含み、黒色土も混じる。 粘性・しまり強い。
8 黒褐色土　焼土ブロックを含む。粘性・しまりなし。
9 黒褐色土　焼土ブロックを含む。粘性・しまりあり。
10 褐色土　ロームと焼土ブロックからなる。
11 焼土
12 焼土　被熱したロームを主体とする。











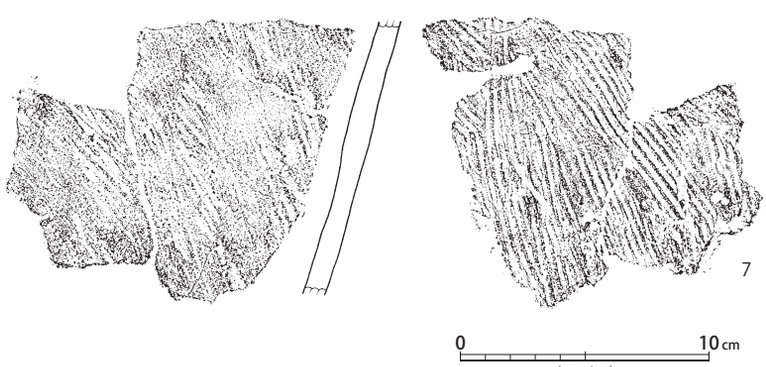


Fig.23　炉穴0321号 遺構遺物

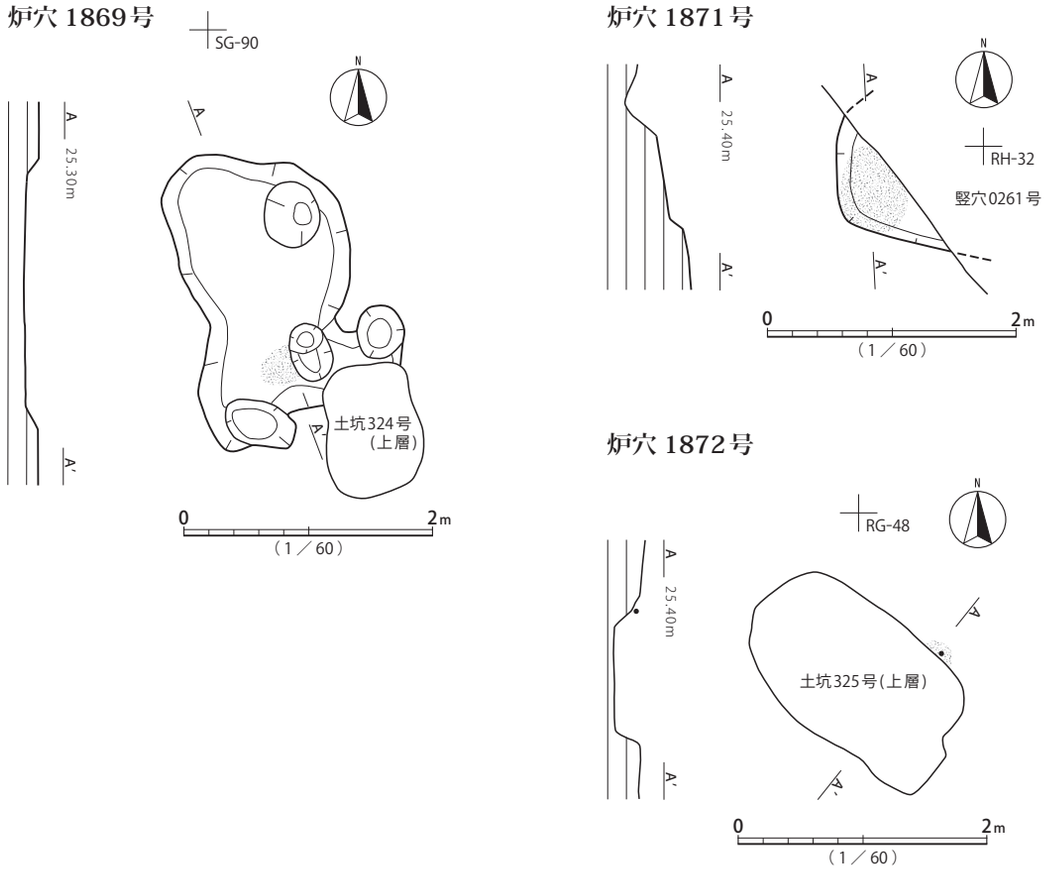


Fig.24　炉穴1869号 遺構、炉穴1871号 遺構、炉穴1872号 遺構

炉穴 1871 号　（Fig.24）

RH−31 を中心に位置する。北東側で竪穴0261 号と重複する。新旧関係は、本遺構が0261 号よりも古い。

南西側の一部と火床面が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.28mを測る。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴 1872 号　（Fig.24）

RG−48 に位置する。南西側で土坑325 号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が325 号よりも古い。

火床面が検出されたのみで、詳細は不明である。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

殿屋敷地区

炉穴0586号　（Fig.25、PL.98）

GH−98 を中心に位置する。他遺構との重複はない。

a〜cの３基が重複し、平面形態は不整形を呈す。新旧関係は、c→a→bの順に構築されたものと思われる。推定規模はaが1.67×0.87m、bが短軸長0.75m、cが1.70×0.95m、確認面からの深さは

aが0.40m、bが0.31m、cが0.27mを測る。主軸方位はaがN−143°−E、bがN−70°−E、cがN−85°−W程度と思われる。

実測可能遺物は、1は口縁部破片、2〜5は胴部破片で、1・3・5は胎土に繊維を含む。1は口縁端部に丸頭状工具によるキザミを施す。2・3は平行細隆起線による襷状文ののち、三角形区画内に沈線文を加えるが、2の沈線は細く鋭い。4は擦痕調整で、これ以外は貝殻条痕を地文とする。1〜3・5はa、4はbからの出土である。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

炉穴0587号 （Fig.25、PL.8・98）

GH−88に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は1.77×0.90m、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位はN−59°−Eである。

実測可能遺物は1の口縁部破片のみで、口縁端部は丸く収まる。内外面に貝殻条痕文を施したのち、弱いナデを加える。

早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴0588号 （Fig.26・27、PL.8・98）

GH−77を中心に位置する。北側で土坑594号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が594号よりも古い。

a〜cの3基が重複し、平面形態はY字形を呈す。新旧関係は、aが最も古いと思われるが、bとcの関係は明確でない。規模はaが短軸長1.21m、bが短軸長1.05m、cが短軸長1.28m、確認面からの深さはaが0.29m、bが0.38m、cが0.24mを測る。主軸方位はaがN−4°−W、bがN−54°−E、cがN−60°−Wである。

実測可能遺物は、1〜4・10は口縁部破片、5〜9・11は胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。1は内外面に擦痕を残し、これ以外はすべて貝殻条痕を地文とする。3・10は同一個体で、口縁端部に丸頭状工具押引きによるキザミを付ける。6・9も同一個体で、細太2種の貝殻条痕文が残る。7の外面には細く鋭い横沈線文を施す。3・10・11はaからの出土である。

早期後半、野島式期の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

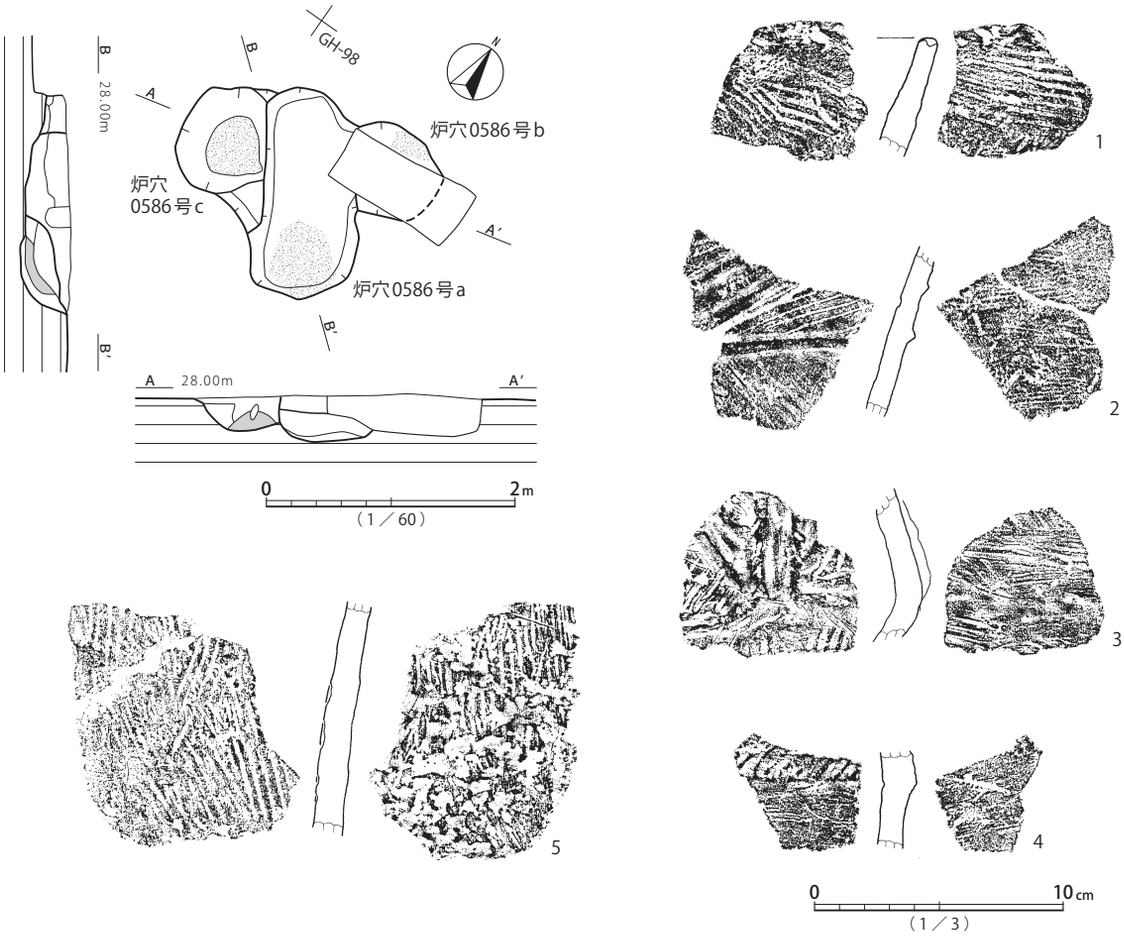
炉穴0589号 （Fig.28、PL.98・99）

GH−70を中心に位置する。他遺構との重複がない。

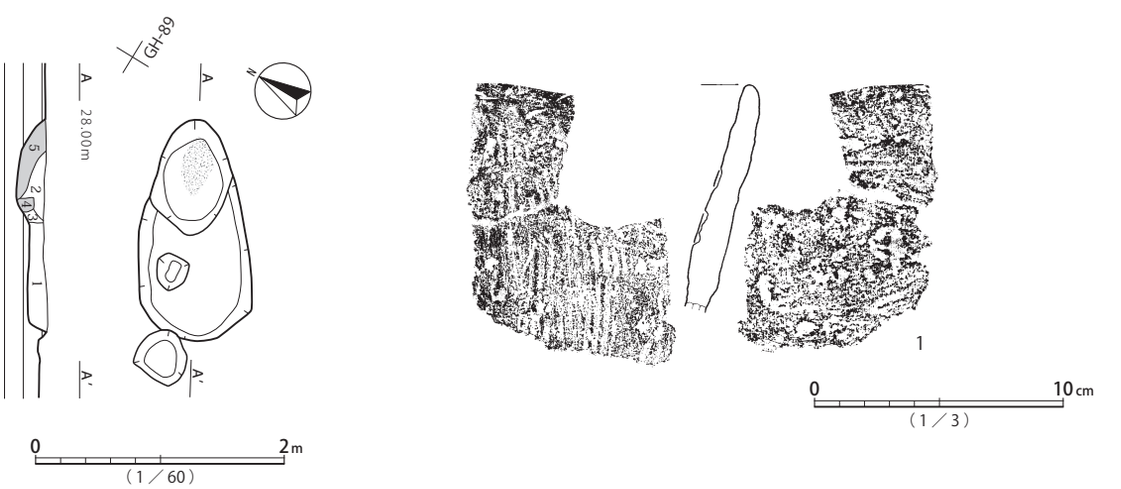
a〜cの3基が重複し、平面形態は十字形を呈す。bはcに切られ、火床面のみ残存したものと思われる。新旧関係は、cが最も新しいと考えられるが、aとbの関係は明確でない。規模はaが1.91×0.84m、cが2.06×0.82m、確認面からの深さはaが0.21m、bが0.15m、cが0.26mを測る。主軸方位はaがN−15°−W、cがN−91°−Eである。

実測可能遺物は、1は口縁部破片、2〜4は胴部破片で、1・3は胎土に繊維を含む。いずれも貝殻条痕を地文とし、1は口縁端部にキザミを施し、外面には斜格子状の沈線文を加える。

炉穴 0586 号



炉穴 0587 号



1　褐色土　　焼土粒を含む。粒子細かい。
2　暗褐色土
3　褐色土　　ロームブロックを含む。
4　　被熱したロームブロック。
5　焼土

Fig.25　炉穴0586号 遺構遺物、炉穴0587号 遺構遺物

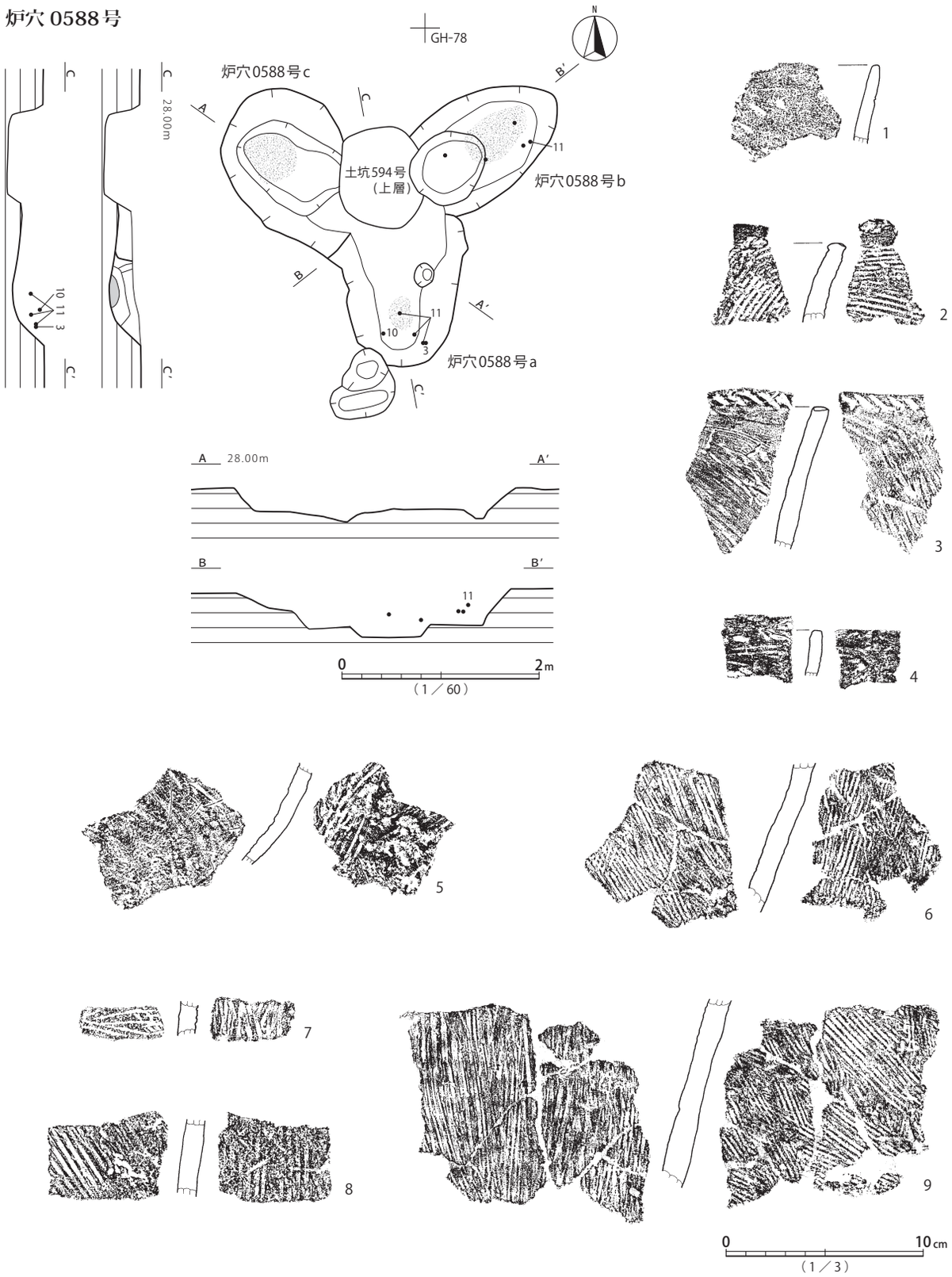


Fig.26　炉穴0588号(1) 遺構遺物

炉穴 0588 号

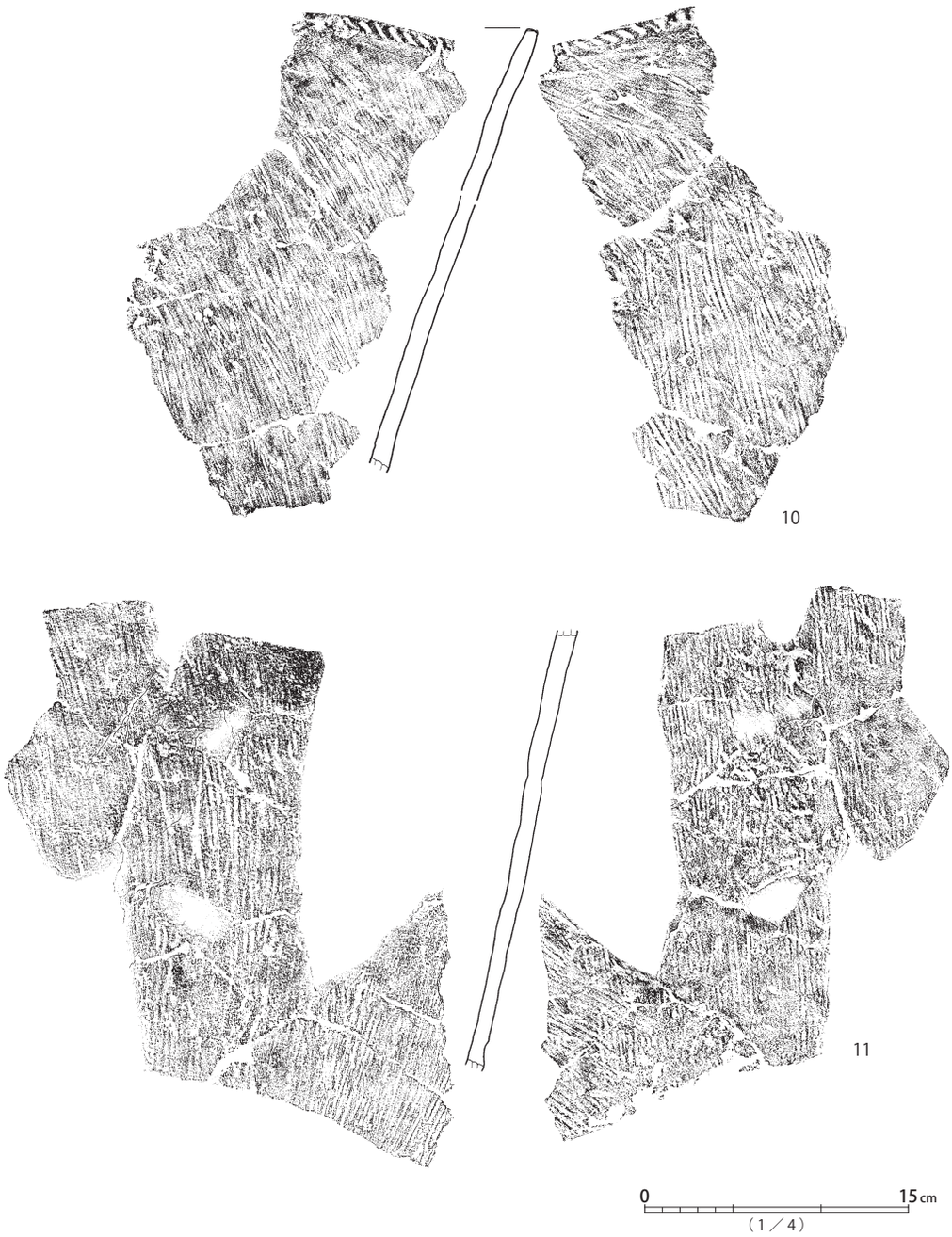


Fig.27　炉穴0588号(2) 遺物

早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴 0590 号　（Fig.28）

GI−51 を中心に位置する。他遺構との重複はない。

火床面は認められないため明確でないが、形態から炉穴と判断したものである。平面形態は長楕円形を呈し、規模は2.08×1.00mを測る。確認面からの深さは、図面不備のため不明である。主軸方位はN−10°−Eである。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴0591号 （Fig.28・29、PL.9・99・133）

FH−07を中心に位置する。南東側で掘立柱建物3050号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3050号よりも古い。

a〜eの5基が重複し、平面形態は不整形を呈す。新旧関係は、a→b→c・d・eと遡ることができるが、c〜eの関係は明確でない。推定規模はaが1.54×0.93m、bが2.00×1.04m、cが主軸長1.58m、eが短軸長0.83mを測る。確認面からの深さはaが0.40m、bが0.37m、cが0.30mを測り、d・eは図面不備のため不明である。主軸方位はaがN−158°−W、bがN−5°−W、cがN−70°−W、eがN−103°−Eである。

実測可能遺物は、1・4〜6は口縁部破片、2・3は胴部破片、7は尖底部で、いずれも貝殻条痕を地文とし、胎土に繊維を含む。4・5はゆるい波状口縁で、4は襷状文ののち、三角形区画内に細く深い集合沈線文を加える。5は菱形区画文に太集合沈線文を施し、区画内に細隆起線方形区画を配して、区画内を磨り消す。7は尖底部から段をもって立ち上がるが、段部以下は被熱の度合いが低く、埋設による使用痕跡と考えられる。土器以外では8の大型の磨石・敲石が出土している。1・2・6はc、3・4はb、5はe、7はaからの出土である。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

炉穴0592号 （Fig.30・31、PL.9・99・133）

GH−63を中心に位置し、炉穴0619号に近接する。他遺構との重複はない。

a〜eの5基が重複し、平面形態は不整形を呈す。新旧関係は、b→a→c、e→dと遡ることができるが、bとeの関係は明確でない。推定規模はaが1.45×0.88m、bが1.52×1.16m、cは短軸長0.75m、dが1.63×0.76m、eが短軸長0.87m、確認面からの深さはaが0.45m、bが0.44m、cが0.30m、dが0.64m、eが0.30mを測る。主軸方位はaがN−45°−E、bがN−125°−E、dがN−67°−E、eがN−125°−Eである。

実測可能遺物は、1〜3・6は口縁部破片、4・5・7は胴部破片、8は尖底部である。4のみ擦痕で、これ以外はすべて貝殻条痕を地文とする。4・7以外は胎土に繊維を含む。1〜3は同一個体で、ゆるい波状口縁の端部には斜方向のキザミを施す。外面は粗い貝殻条痕文ののちナデを加え、内面には繊維束によると思われる擦痕が残る。6は口縁端部にキザミを加え、平行細隆起線による襷状文ののち、区画内に太集合沈線文を施す。土器以外では9の磨石・敲石が出土している。1・4・6はc、2・5はe、7はaからの出土である。

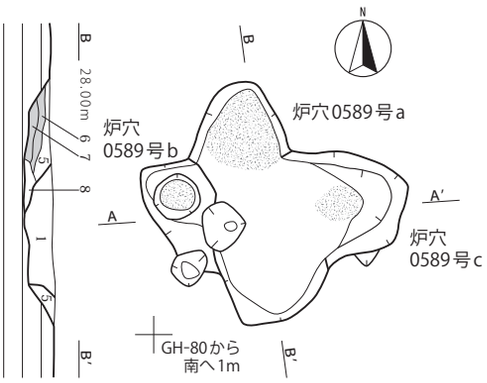
早期後半、野島式期の所産と考えられる。

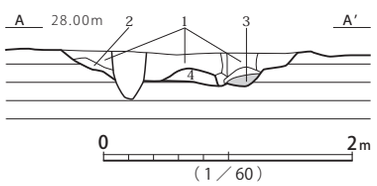
炉穴0601号 （Fig.31、PL.99・133）

FH−67に位置する。北西隅で炉穴0626号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は1.77×0.78m、確認面からの深さは0.40mを測る。主軸方位は

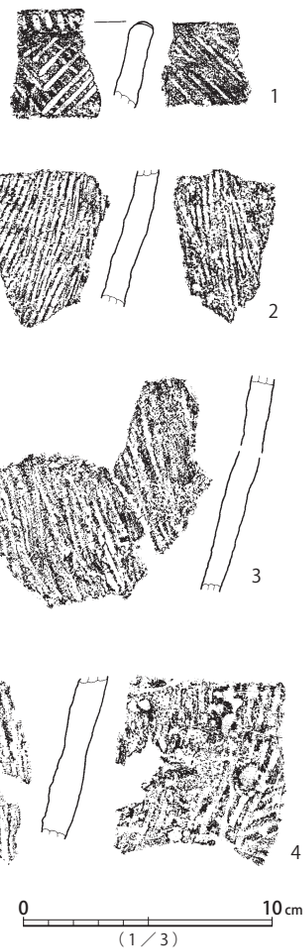
炉穴 0589 号



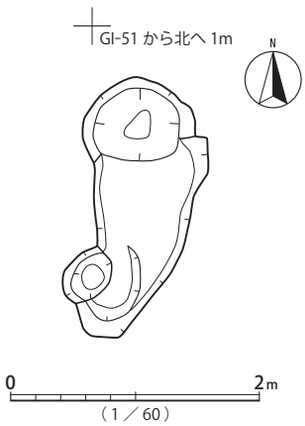


A-A'
0589号c
1　暗褐色土　焼土粒を含む。
2　茶褐色土　ロームを少量含む。
3　焼土
0589号a
4　褐色土　焼土粒を少量含む。

B-B'
0589号a
5　褐色土　焼土粒を含む。
6　焼土　被熱したソフトローム。
7　焼土　被熱したハードローム。
8　褐色土　ソフトロームを主体とする。



炉穴 0590 号



炉穴 0591 号

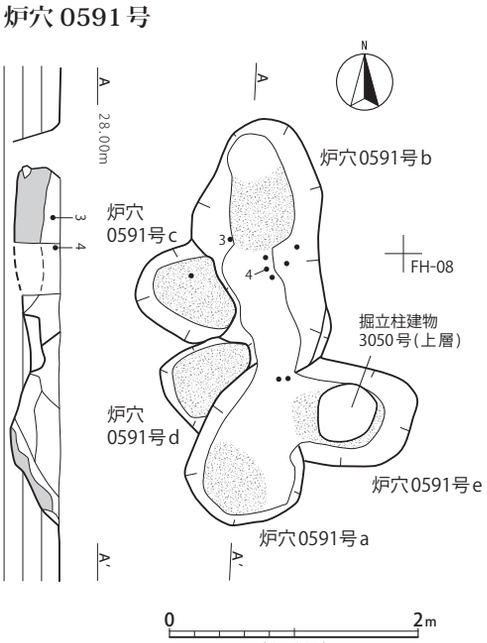




Fig.28　炉穴0589号 遺構遺物、炉穴0590号 遺構、炉穴0591号(1) 遺構遺物

炉穴 0591 号

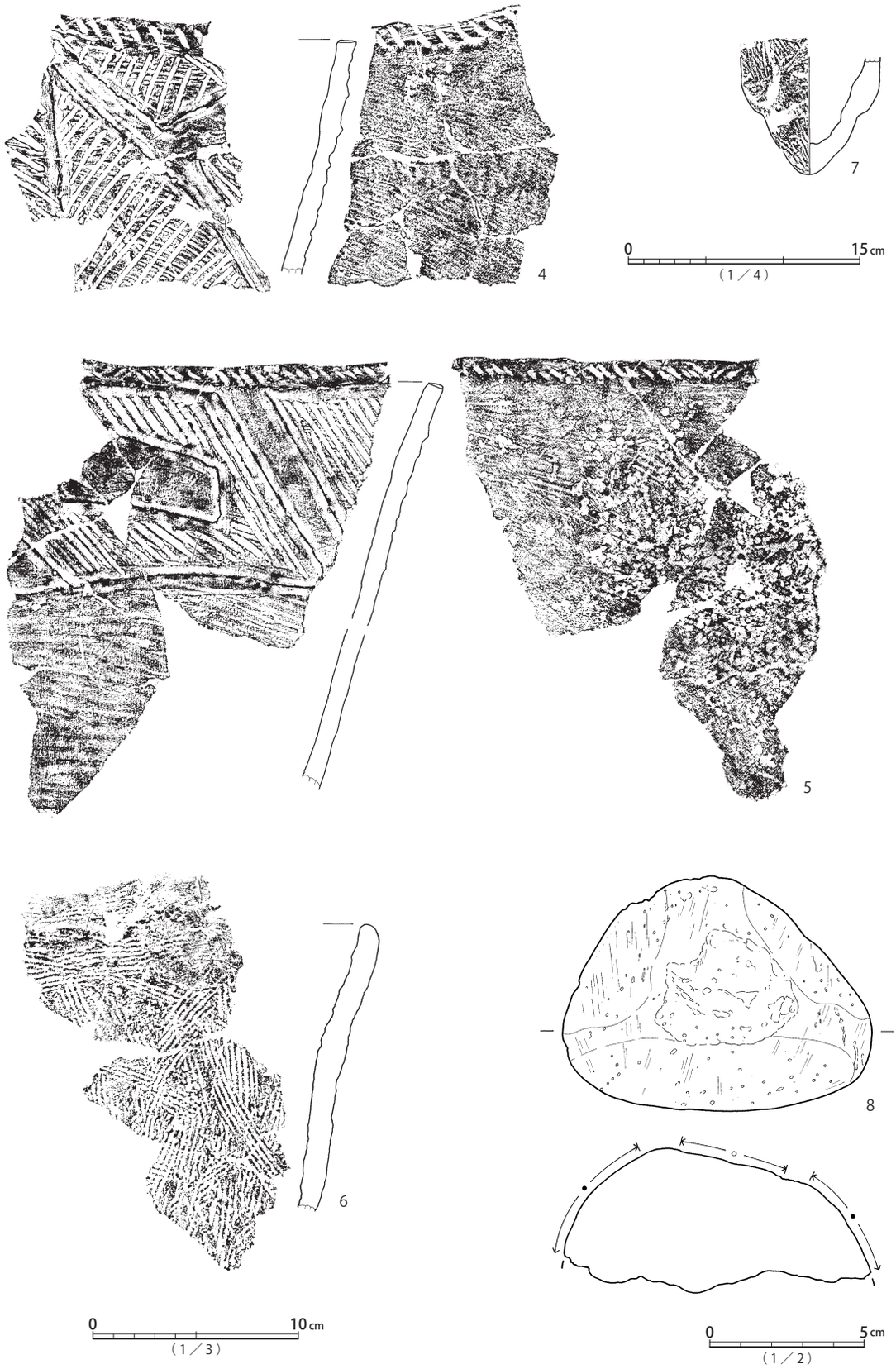


Fig.29　炉穴0591号(2) 遺物

N−100°−Eである。

実測可能遺物は、1は口縁部破片、2は胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。1はゆるい波状口縁で、口唇部に細隆起線を巡らせ、波頂部からは斜方向のキザミをもつ太隆起線2条を垂下させる。区画内にもキザミを持つ太隆起線と曲線状の細隆起線を貼り付けたのち、集合沈線を充填する。2は平行細隆起線による襷状文と曲線文を施したのち、区画内に細太2種類の集合沈線を充填する。土器以外では3の磨石が出土している。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

炉穴0602号 （Fig.31）

FH−67を中心に位置する。遺構が確認された範囲では、他遺構との重複はない。

平面形態は円形を呈し、火床部のみが残存したものと思われる。規模は0.72×0.63m、確認面からの深さは0.23mを測る。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、近接する炉穴0601・0626号とともに炉穴群を形成したものと考えられる。

炉穴0626号 （Fig.31、PL.99）

FH−67に位置する。南側で炉穴0601号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は1.14×0.67m、確認面からの深さは0.11mを測る。主軸方位はN−2°−Eである。

実測可能遺物は1〜3の胴部破片で、1・2は繊維を含む。いずれも貝殻条痕を地文とし、2は右下がりの細隆起線を貼り付けたのち、区画内に集合沈線を充填する。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

炉穴0603号 （Fig.32）

HH−81に位置する。他遺構との重複はない。

a・bの2基が重複し、平面形態は不整形を呈す。新旧関係は、aがbよりも新しい。推定規模はaが0.93×0.81m、bが1.06×0.80m、確認面からの深さはaが0.21m、bが0.18mを測る。主軸方位はaがN−83°−E、bがN−151°−Wである。

実測に至らない条痕文土器が出土しており、早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

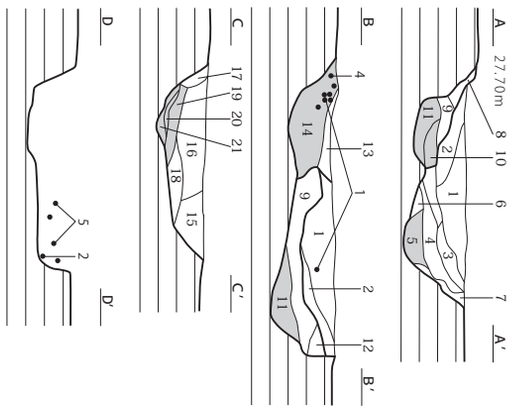
炉穴0604号 （Fig.32）

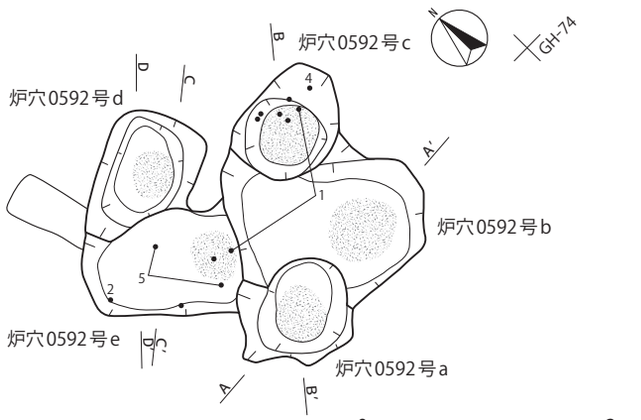
HH−81に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は楕円形を呈し、火床部のみが残存したものと思われる。規模は1.02×0.87m、確認面からの深さは0.16mを測る。

実測に至らない擦痕調整を施す土器細片が出土しており、早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴 0592 号





A-A'
0592号b
1 黒褐色土 焼土をわずかに含む。
2 黒褐色土 焼土・ローム粒を含む。
3 暗褐色土 焼土を含む。
4 暗褐色土 焼土をわずかに含む。
5 焼土
6 褐色土
7 茶褐色土 ハードロームを含む。
0592号a
8 暗褐色土 ロームを含む。
9 暗褐色土 焼土粒・ローム粒含む。
10 焼土 しまりなし。
11 焼土 燃焼面。焼けたロームブロックを主体とする。

B-B'
0592号a
12 暗褐色土 ロームを若干含む。
0592号c
13 暗褐色土 焼土を含む。
14 焼土

C-C'
0592号d
15 褐色土 焼土を含む。
16 暗褐色土 焼土を含む。
17 暗褐色土
18 暗褐色土 焼土を少量含む。
19 焼土 褐色土を含む。
20 焼土
21 焼土 焼けたハードロームを主体とする。

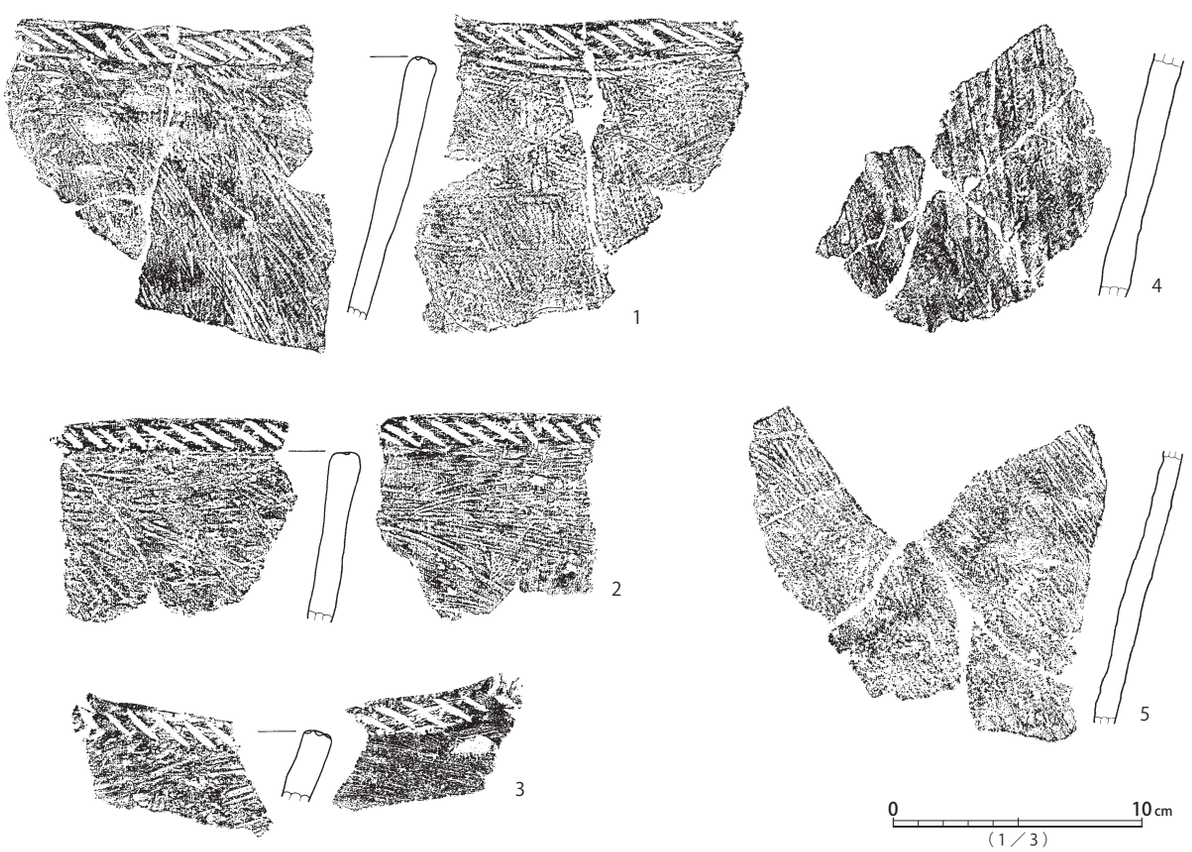
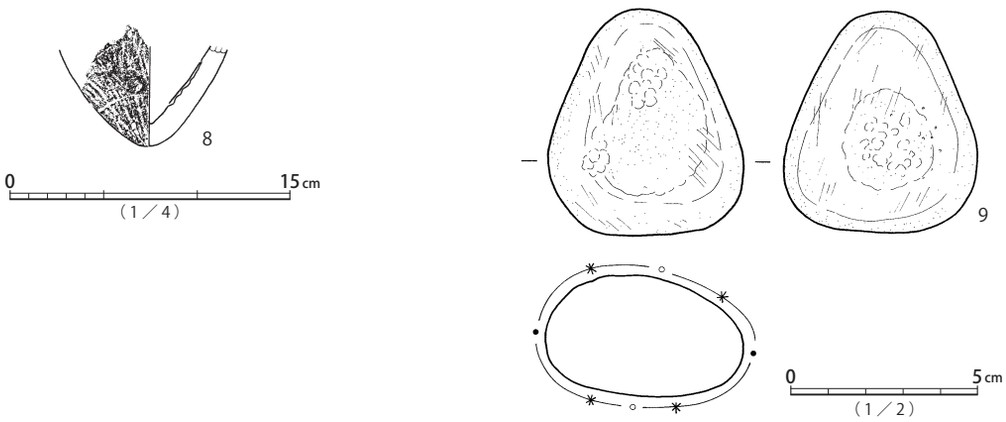
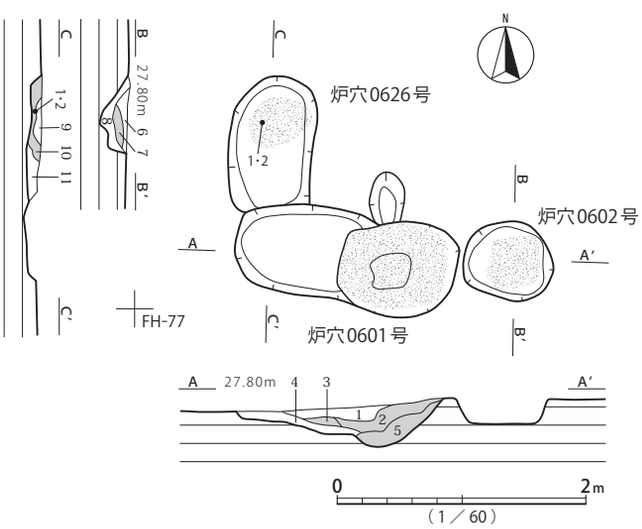


Fig.30 炉穴0592号(1) 遺構遺物

炉穴 0592号



炉穴 0601・0602・0626号

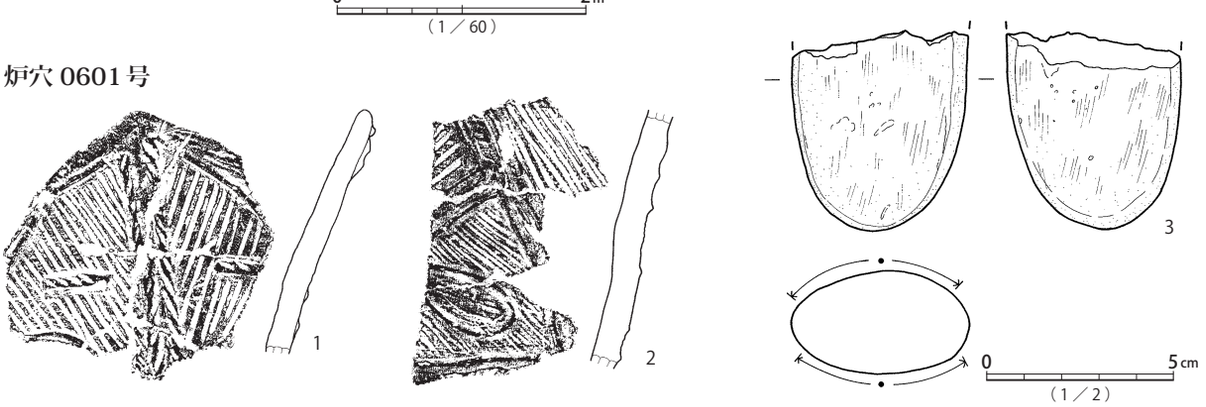


A-A'
0601号
1 暗褐色土
2 褐色土　焼土を多く含む。
3 焼土　砂質粘土を含む。
4 褐色土　粒子細かい。
5 焼土

B-B'
0602号
6 褐色土　焼土を含む。
7 焼土
8 褐色土　焼土を含む。

C-C'
0626号
9 褐色土　ロームを主体とし、焼土を含む。
10 焼土
11 褐色土

炉穴 0601号



炉穴 0626号

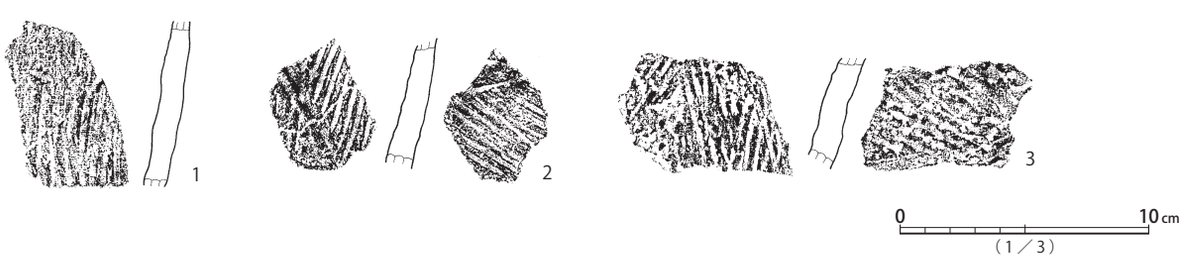


Fig.31　炉穴0592号(2) 遺物、炉穴0601号 遺構遺物、炉穴0602号 遺構、炉穴0626号 遺構遺物

炉穴0616号 （Fig.32、PL.9・99）

FH−17に位置する。竪穴0606号と重複し、床面下から検出された。

a〜cの3基が重複し、平面形態は不整形を呈す。新旧関係は、a→b→cの順に構築されたものと考えられ、aとcは火床部のみ検出されている。規模はbが1.72×1.07m、cが0.76×0.57mを測る。確認面からの深さはbが0.24m、cが0.20mを測るが、aは図面不備のため不明である。主軸方位はbがN−7°−Eである。

実測可能遺物は1の口縁部破片のみで、貝殻条痕を地文とし、胎土に繊維を含む。ゆるい波状口縁を呈し、平行細隆起線による襷状文ののち、三角形区画内に集合沈線を充填する。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

炉穴0619号 （Fig.32、PL.9・99）

GH−62を中心に位置し、炉穴0592号に近接する。中央で溝2410号（上層）と重複するが、底面までは達していない。新旧関係は、本遺構が2410号よりも古い。

a〜cの3基が存在するが、cは火床面のみの検出のため、重複は確認できない。平面形態はT字形を呈す。新旧関係は、a→bの順に構築されるが、cとの関係は不明である。推定規模はaが短軸長0.67m、bが1.50×0.94m、確認面からの深さはaが0.22m、bが0.37mを測る。主軸方位はaがN−61°−E、bがN−21°−Wである。

実測可能遺物は1・2の胴部破片である。貝殻条痕を地文とし、1は胎土に繊維を含む。2は細隆起線区画内に細沈線文を充填する。1はc、2はaからの出土である。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

炉穴0623号 （Fig.33、PL.99）

GI−51を中心に位置する。東側で竪穴622号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が622号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は2.34×1.38mを測る。確認面からの深さは、図面不備のため不明である。主軸方位はN−69°−Eである。

実測可能遺物は1・2の胴部破片で、同一個体の可能性がある。貝殻条痕を地文とし、胎土に繊維を含む。1・2ともに右下がりの平行細隆起線文を施し、2は斜位の押捺を加える細隆起線で口縁部文様帯を区画する。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

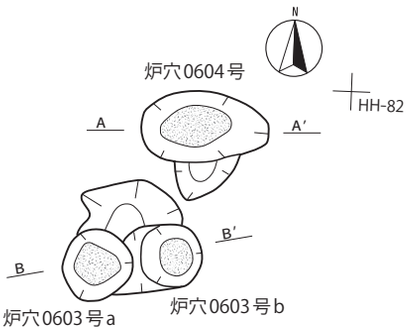
炉穴0625号 （Fig.33、PL.99）

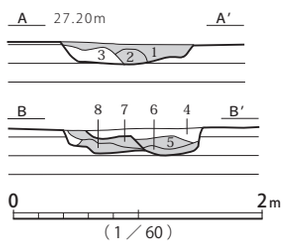
FH−56に位置する。東側で柱穴（遺構番号なし）と重複する。新旧関係は、本遺構のほうが古い。

平面形態は小型の長楕円形を呈し、火床部のみが残存したものと思われる。規模は短軸長0.48m、確認面からの深さは0.06mを測る。主軸方位はN−92°−W程度と思われる。

実測可能遺物は1の胴部破片のみで、胎土に繊維を少量含む。外面は貝殻条痕文、内面はナデ調整を施す。

炉穴 0603・0604 号





A-A'
0604号

1	焼土	被熱した褐色土を含む。
2	焼土	被熱したロームを含む。
3	褐色土	被熱した地山。

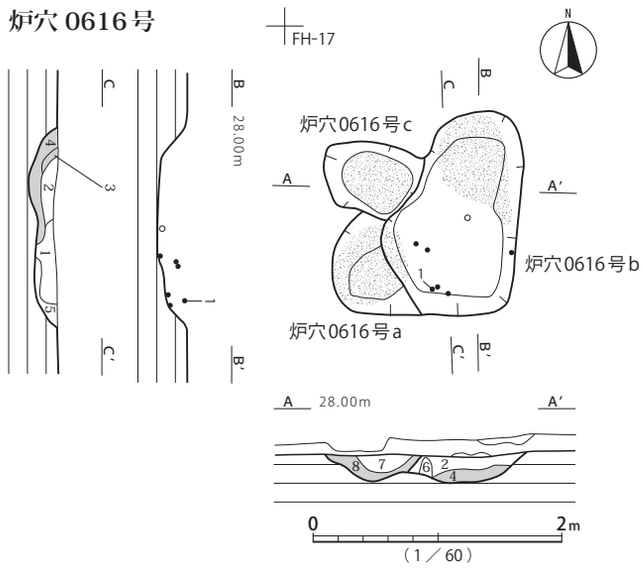
B-B'
0603号b

4	褐色土	焼土を若干含む。
5	焼土	褐色土を含む。
6	焼土	被熱したロームを含む。

0603号a

7	焼土	茶褐色土を含む。
8	焼土	被熱したロームを含む。

炉穴 0616 号



C-C'
0616号b

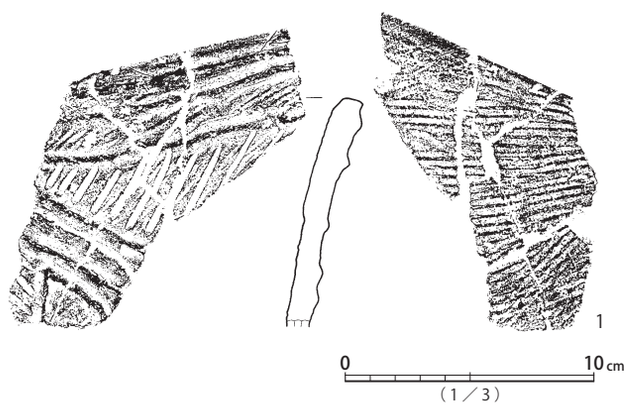
1	褐色土	焼土粒が混じる。
2	褐色土	焼土粒が若干混じる。
3	褐色土	焼土粒を含む。
4	焼土	
5	茶褐色土	焼土を若干含む。

A-A'
0616号b

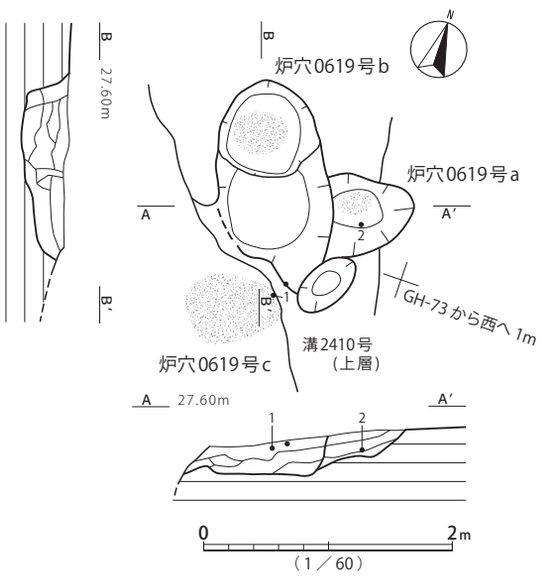
6	暗褐色土	

0616号c

7	褐色土	焼土粒が若干混じる。
8	焼土	茶褐色土を含む。



炉穴 0619 号



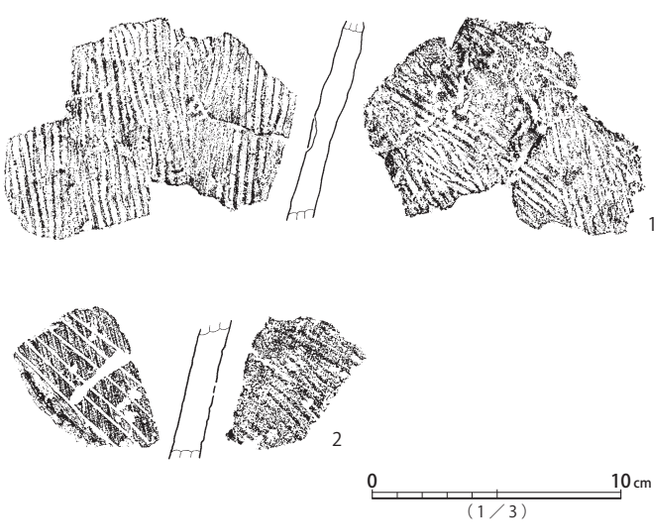


Fig.32　炉穴0603号 遺構、炉穴0604号 遺構、炉穴0616号 遺構遺物、炉穴0619号 遺構遺物

早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴0629号 （Fig.33、PL.9・99）

FH−50に位置する。他遺構との重複はないが、南側は撹乱により壊される。

2基の火床面が存在するが、平面形態は不整形を呈し、さらに1基程度重複している可能性がある。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。

推定規模はaが1.83×0.81m、bが主軸長1.29mを測る。確認面からの深さは、図面不備のため不明である。主軸方位はaがN−64°−Eで、bはN−59°−W程度と思われる。

実測可能遺物は1の胴部破片のみである。内外面貝殻条痕文ののちナデ調整を施す。

早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴1839号 （Fig.33、PL.9・132）

FH−30を中心に位置する。他遺構との重複はないが、南側で柱穴状の掘り込みと接する。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は1.87×1.04mを測る。確認面からの深さは0.38mを測る。主軸方位はN−0°である。

実測可能遺物は1の磨製石斧のみである。砂岩製で刃部が破損する。

周辺の炉穴同様に、早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

東南部

炉穴0635号 （Fig.34、PL.9）

GM−30を中心に位置する。他遺構との重複はない。

a・bの2基が重複し、平面形態はL字形を呈す。新旧関係は、aがbよりも新しい。規模はaが1.83×0.94m、bが1.68×0.86m、確認面からの深さはaが0.27m、bが0.29mを測る。主軸方位はaがN−174°−W、bがN−94°−Eである。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴0638号 （Fig.34、PL.9）

GN−31を中心に位置する。中央で溝2077号（上層）と重複するが、底面までは達していない。新旧関係は、本遺構が2077号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は1.92×1.14m、確認面からの深さは0.47mを測る。主軸方位はN−115°−Wである。

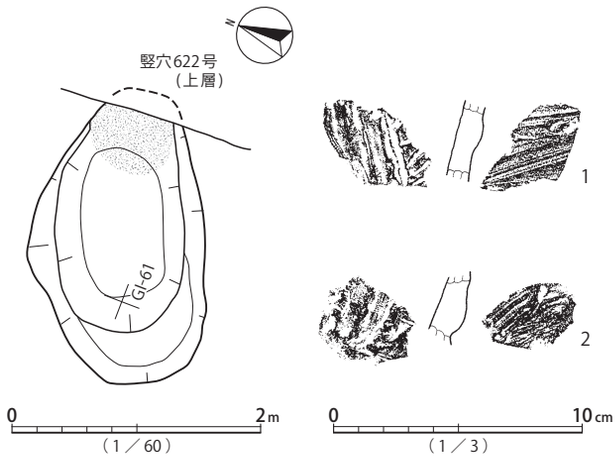
実測に至らない条痕文土器が出土しており、早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴0647号 （Fig.34、PL.10・139）

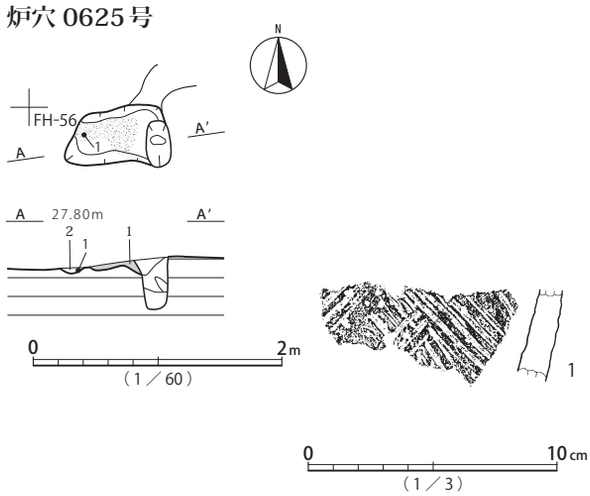
GM−90を中心に位置する。中央で溝2077号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2077号よりも古い。

平面形態は小型の長楕円形を呈し、火床部のみが残存したものと思われる。現存規模は1.04×

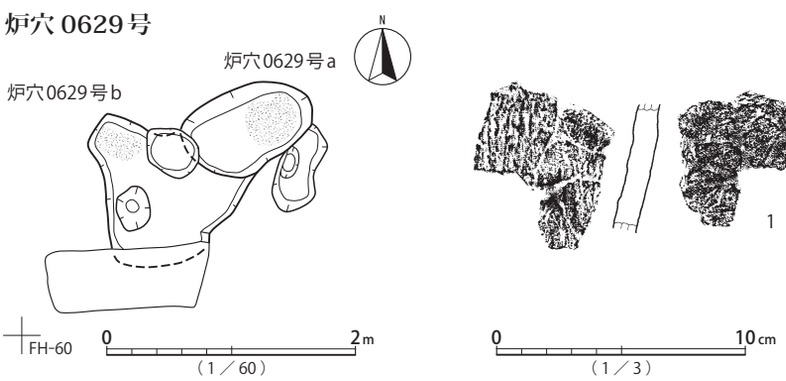
炉穴 0623号



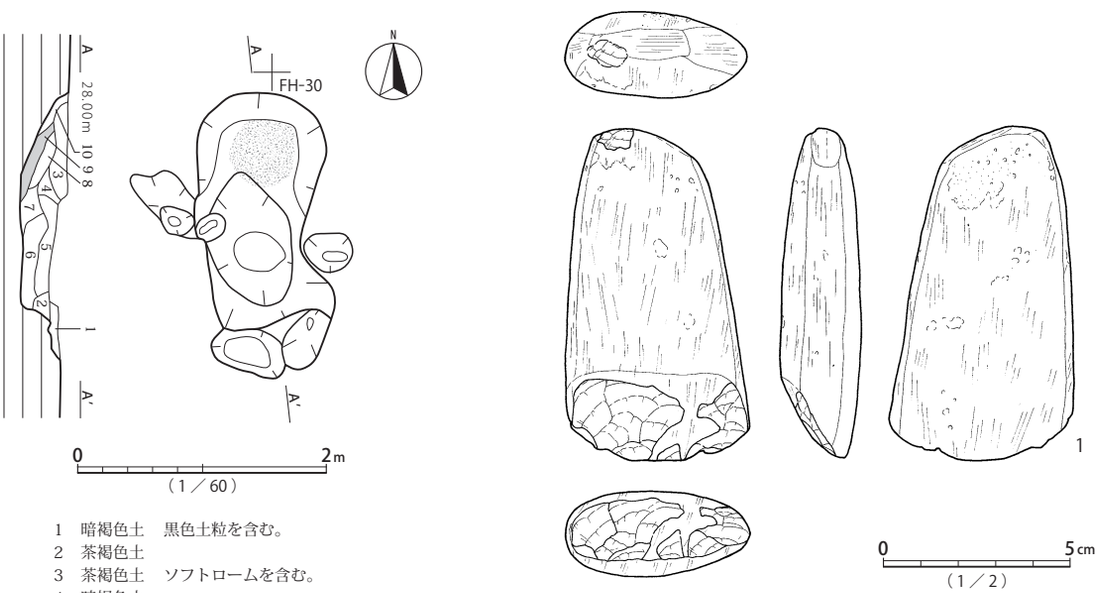
炉穴 0625号



炉穴 0629号



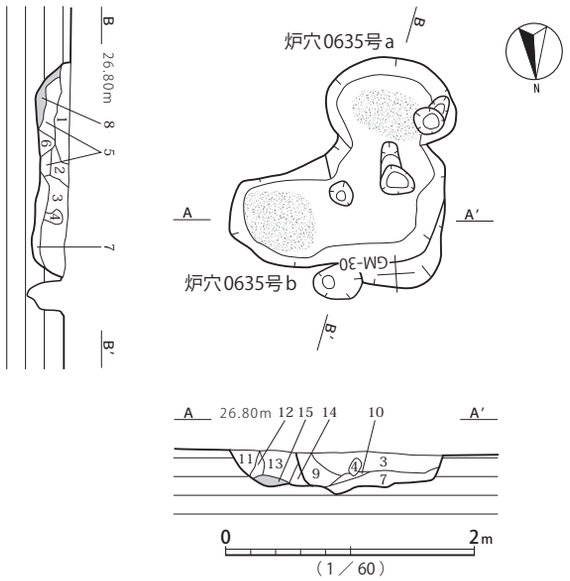
炉穴 1839号



1 暗褐色土 黒色土粒を含む。
2 茶褐色土
3 茶褐色土 ソフトロームを含む。
4 暗褐色土
5 褐色土 ローム粒を含む。
6 暗褐色土 ローム粒を含む。
7 暗褐色土 焼土粒を含む。
8 褐色土 焼土粒を含む。
9 焼土
10 褐色土 ロームを主体とする。

Fig.33 炉穴0623号 遺構遺物、炉穴0625号 遺構遺物、炉穴0629号 遺構遺物、炉穴1839号 遺構遺物

炉穴 0635 号



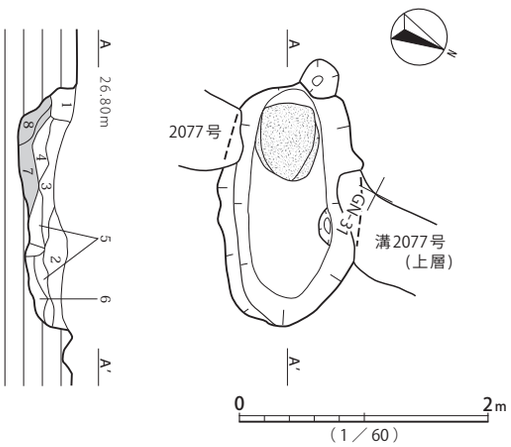
0635号a

1	褐色土	焼土を少量含む。
2	暗褐色土	
3	黒褐色土	
4	茶褐色土	ローム粒を含む。
5	褐色土	ローム粒・焼土粒を含む。
6	暗褐色土	
7	褐色土	ソフトロームを含む。しまり強い。
8	焼土	
9	暗褐色土	
10	黒色土	

0635号b

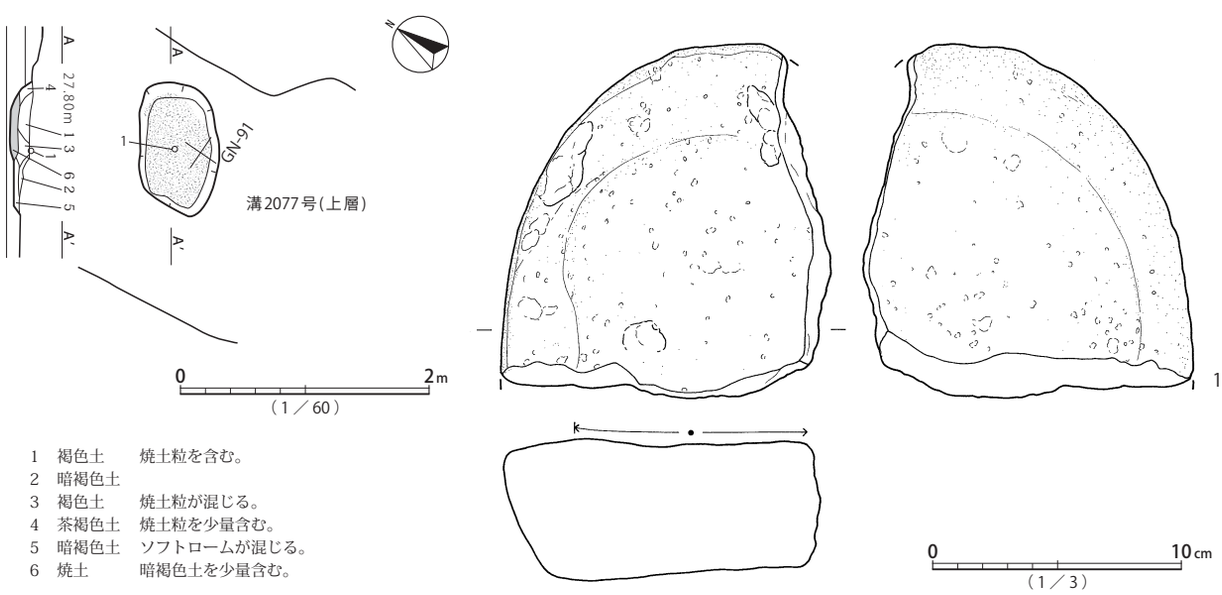
11	褐色土	ローム粒を少量含む。
12	暗褐色土	
13	黒褐色土	ローム粒・焼土粒を少量含む。
14	褐色土	
15	焼土	

炉穴 0638 号



1	茶褐色土	ソフトロームを多く含む。
2	黒褐色土	焼土粒・ローム粒を含む。
3	黒褐色土	焼土粒を少量含む。
4	暗褐色土	焼土を含む。
5	暗褐色土	焼土粒を少量含む。
6	黒褐色土	焼土粒を少量含む。しまり強い。
7	焼土	暗褐色土を含む。
8	焼土	

炉穴 0647 号



1	褐色土	焼土粒を含む。
2	暗褐色土	
3	褐色土	焼土粒が混じる。
4	茶褐色土	焼土粒を少量含む。
5	暗褐色土	ソフトロームが混じる。
6	焼土	暗褐色土を少量含む。

Fig.34　炉穴0635号 遺構、炉穴0638号 遺構、炉穴0647号 遺構遺物

0.64m、確認面からの深さは0.27mを測る。

実測可能遺物は1の石皿のみで、覆土中からの出土である。このほか、実測に至らない擦痕文と堀之内1式の土器細片が出土しているが、堀之内式期のものは混入であろう。

早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴0653号 （Fig.35）

FM−67を中心に位置する。b・cは南側で溝2108号（上層）と重複し、cの西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が2108号よりも古い。

a〜cの3基が存在し、平面形態はY字形を呈す。aとb・cとは直接重複しないが、関連する遺構と考えられる。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。aは火床部のみの検出と考えられ、規模は1.71×1.07m、bは短軸長0.91mを測る。確認面からの深さは、aが0.29mを測るが、b・cについては図面不備のため、不明である。主軸方位はaがN−13°−W、bがN−54°−E程度と思われる。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴0663号 （Fig.35）

FN−61を中心に位置する。中央で溝2108号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2108号よりも古い。

火床面や焼土範囲は記録されておらず根拠に乏しい。土坑の可能性も高いが、炉穴として調査されていたことから、ここで報告しておく。

平面形態は長方形を呈し、推定規模は1.24×0.85m、確認面からの深さは0.13mを測る。主軸方位はN−13°−Wである。

実測に至らない条痕文土器の細片が出土しており、鵜ヶ島台式を含むと考えられることから、早期後半の所産であろう。

炉穴0718号 （Fig.35、PL.10）

IP−14を中心に位置する。北西側で掘立柱建物3189号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3189号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は1.68×0.94m、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位はN−147°−Eである。

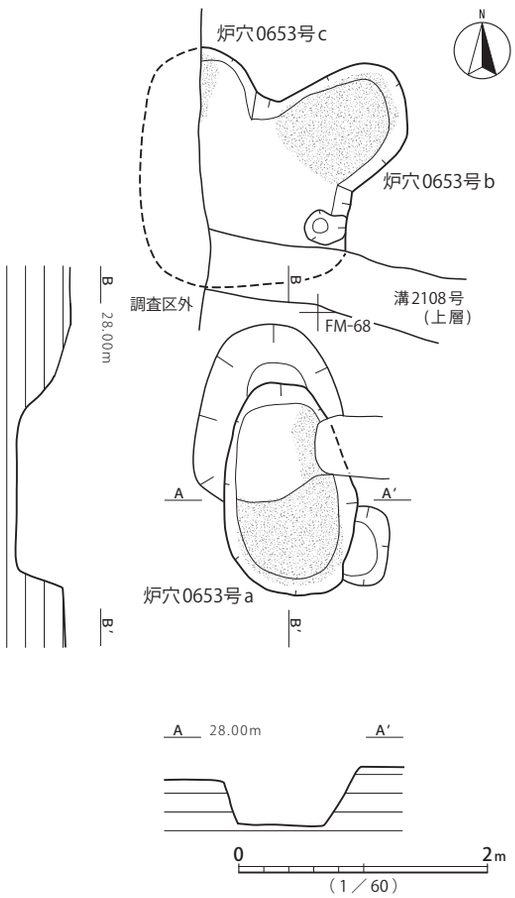
遺構底面から未加工礫1点が出土しているが、帰属時期は明確でない。

炉穴 0843 号 （Fig.35、PL.10）

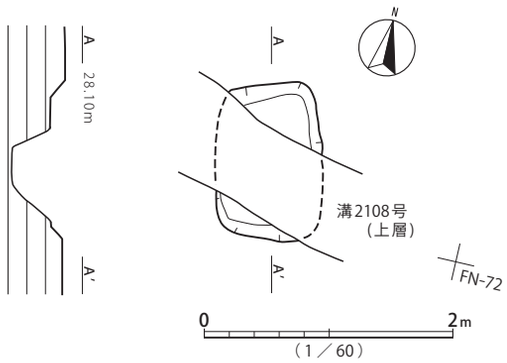
GN−51を中心に位置する。南東側で土坑639号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が639号よりも古い。

a〜gの7基が重複し、平面形態は不整形を呈す。新旧関係は、e→c→aと遡ることができるが、これ以外の関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。推定規模はaが短軸長0.65m、bが2.35×1.20m、cが2.12×0.92m、dが1.85×0.96m、eが1.72×1.13m、fが短軸長0.91mを測る。

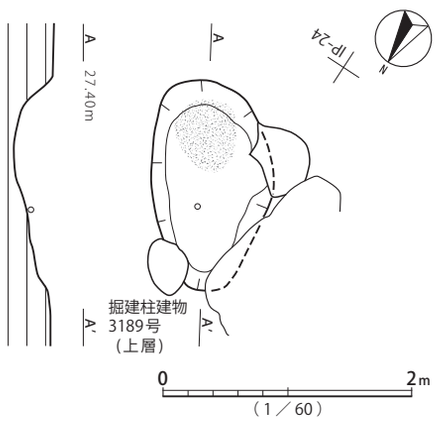
炉穴 0653号



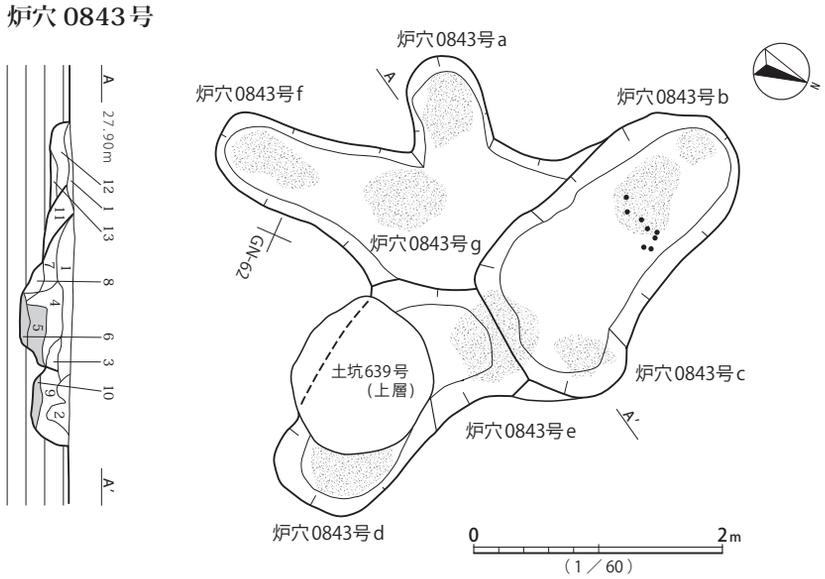
炉穴 0663号



炉穴 0718号



炉穴 0843号



0843号e

1	暗黄褐色土	ソフトロームを含む。
2	暗茶褐色土	1層より暗色。
3	暗褐色土	ローム微粒を含む。
4	暗褐色土	ローム粒・焼土粒を含む。
5	黒褐色土	焼土粒を多量に含む。
6	暗茶褐色土	焼土粒を多量に含む。
7	暗黄褐色土	ローム微粒・黒色土粒を含み、ロームブロックも少量混じる。
8	暗黄褐色土	ソフトロームと暗褐色土が混じりあう。

0843号c

9	暗黄褐色土	ソフトロームを含む。
10	淡赤褐色土	焼土を含む。
11	黄褐色土	ソフトロームを主体とし、暗褐色土が混じる。

0843号a

12	黄褐色土	11層に似るが、焼土を含む。
13	褐色土	ソフトロームと焼土が混じりあう。

Fig.35　炉穴0653号 遺構、炉穴0663号 遺構、炉穴0718号 遺構、炉穴0843号 遺構

確認面からの深さはaが0.17m、cが0.30mを測る。これ以外は図面不備のため不明である。主軸方位はaがN−127°−W、bがN−68°−W、cがN−33°−E、dがN−97°−E、eがN−42°−W、fがN−177°−Eである。

bの火床部で遺物の出土が記録されているが、その所在を確認することができない。また、実測に至らない貝殻条痕文や擦痕文を施す土器細片が出土しており、早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

南辺部

炉穴0540号 （Fig.36、PL.10・99・133）

GJ−84を中心に位置する。他遺構との重複はない。

4基が重複しているものと考えられるが、それぞれの形態を復元することはできず、断面図など記録上の根拠がなく、新旧関係も不明である。平面形態は不整形を呈し、最大規模は3.38×2.40m、確認面からの深さは0.24mを測る。

実測可能遺物は、1〜3は口縁部破片、4は胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。口縁端部が尖る3のみ外面擦痕調整で、これ以外はすべて貝殻条痕を地文とする。土器以外では5の磨石が出土している。

早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴0541号 （Fig.36、PL.10・99）

GJ−63を中心に位置する。南側で溝2039号（上層）とわずかに接する。

平面形態は長楕円形を呈すが、南側は円形に広がっており、他遺構が重複している可能性も考えられる。規模は2.08×1.02m、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位はN−2°−Wである。

実測可能遺物は1の胴部破片のみである。内外面に擦痕を残し、胎土に繊維を含む。

早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴0779号 （Fig.37、PL.10）

FI−30を中心に位置する。他遺構との重複はない。

火床面が認められないため明確でないが、形態と覆土中に焼土を含むことから炉穴と判断した。

平面形態は長楕円形を呈し、東側は1段深く掘り込まれる。規模は1.66×1.06m、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−105°−Eである。

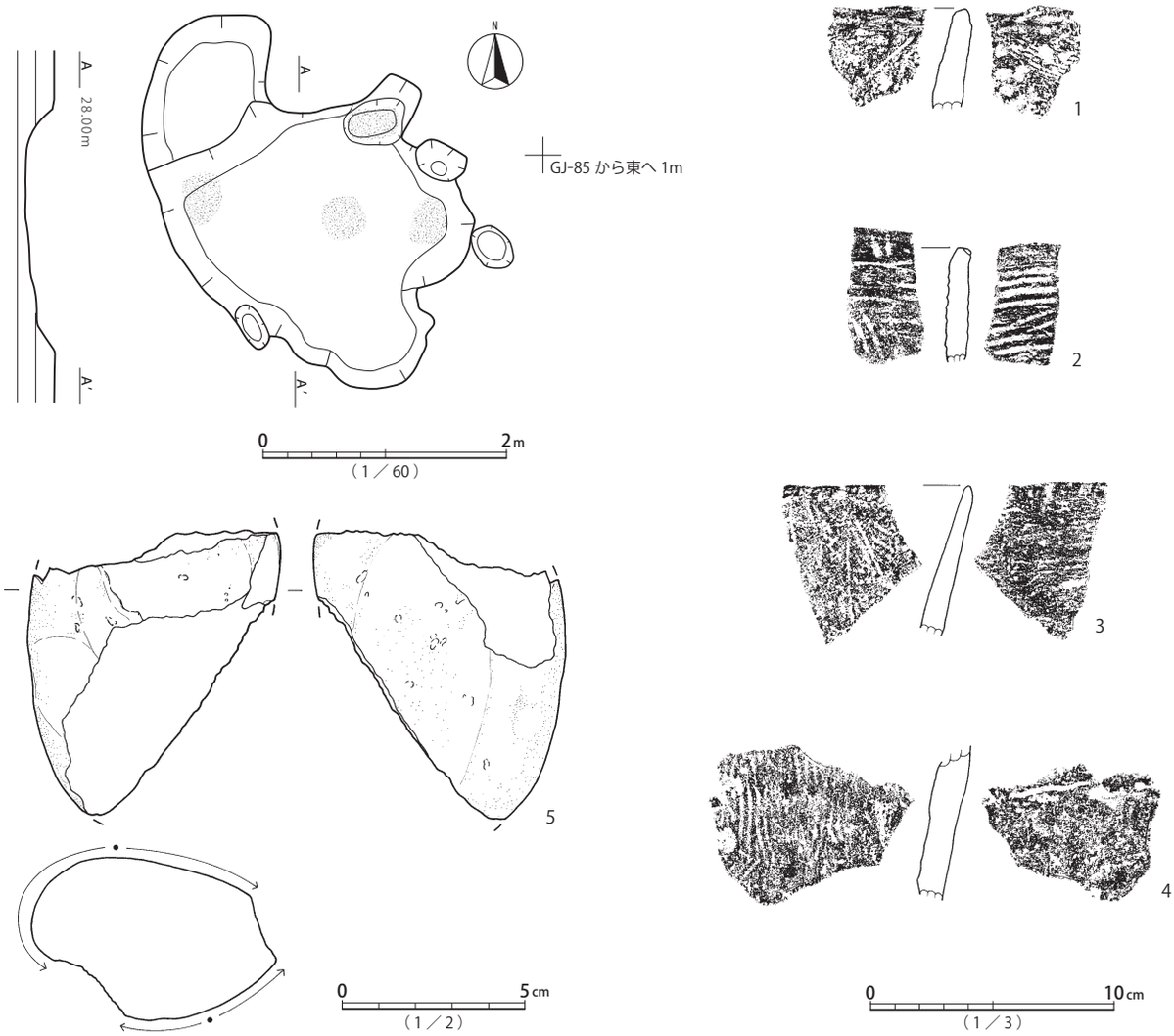
出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴0780号 （Fig.37、PL.10）

FJ−02を中心に位置する。他遺構との重複はない。南側に延びる掘り込みは、底面の凹凸が著しいことから、撹乱の可能性が考えられる。

平面形態はL字形を呈し、2基が重複する可能性があるが、火床面は1ヶ所しか検出されていないため、明確でない。規模は1.70×1.04m、確認面からの深さ0.50mを測る。主軸方位はN−53°−E程

炉穴 0540 号



炉穴 0541 号

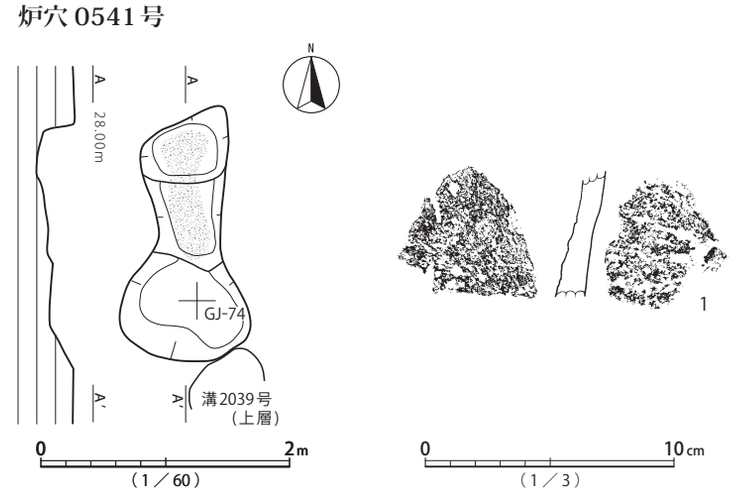
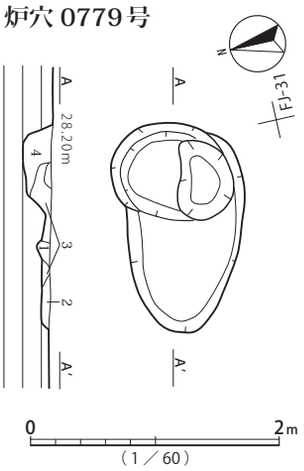


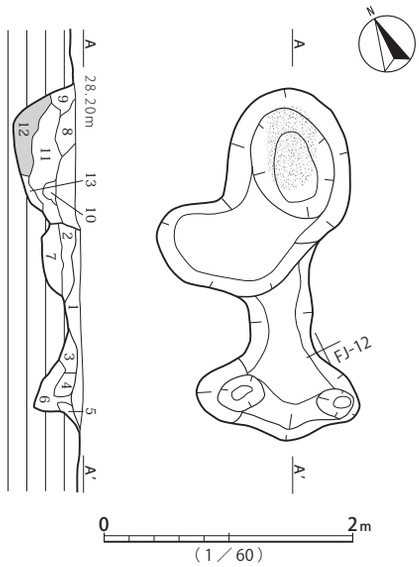
Fig.36　炉穴0540号 遺構遺物、炉穴0541号 遺構遺物

炉穴 0779号



1　黒褐色土
2　褐色土　　暗褐色土が混じる。
3　褐色土　　全体に薄く焼土を含む。
4　褐色土　　ソフトロームを主体とし、部分的に暗褐色土が混じる。

炉穴 0780号



1　黒褐色土　焼土を少量含む。
2　茶褐色土　ソフトロームが混じる。
3　褐色土
4　黒褐色土
5　褐色土
6　茶褐色土
7　褐色土　　ソフトロームが混じる。
8　褐色土　　ソフトロームを含む。
9　茶褐色土　ソフトロームが混じる。
10　暗褐色土
11　黒褐色土　焼土粒を少量含む。
12　焼土　　暗褐色土を含む。
13　暗褐色土　焼土粒を含む。

炉穴 1217号

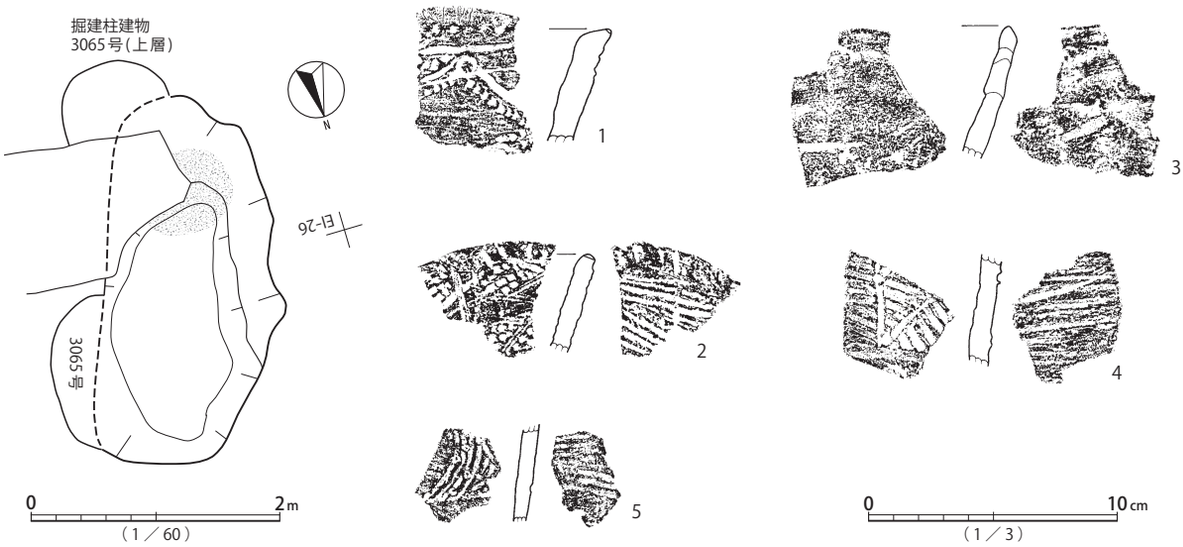


Fig.37　炉穴0779号 遺構、炉穴0780号 遺構、炉穴1217号 遺構遺物

度と思われる。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴1217号 （Fig.37、PL.10・11・99）

EI−26を中心に位置する。東側で掘立柱建物3065号（上層）と重複し、一部は撹乱によって壊される。新旧関係は、本遺構が3065号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は2.92×1.46m、確認面からの深さ0.59mを測る。主軸方位はN−163°−Wである。

実測可能遺物は、1〜3は口縁部破片、4・5は胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。1は口唇部に単沈線を巡らせ、単沈線と押引き沈線による三角形区画文を施したのち、交点に円形刺突文を加える。3は無文で、内外面に擦痕を残す。4は貝殻条痕を地文に、集合沈線を充填する三角形区画文を配し、交点に円形刺突文を加える。5は弧状の沈線文に、円形刺突をランダムに加える。

早期後半、鵜ヶ島台式期の所産と考えられる。

炉穴1223号 （Fig.38・39、PL.11・100・139）

EJ−54を中心に位置する。北側で炉穴1224号aと重複する。新旧関係は、本遺構が1224号aよりも新しい。

平面形態は、本遺構単独では長楕円形を呈し、推定規模は2.36×1.00m、確認面からの深さ0.42mを測る。主軸方位はN−20°−Wである。

実測可能遺物は、1は口縁〜胴部破片、2は口縁部破片、3〜6は胴部破片で、1〜4は胎土に繊維を含む。1は内削ぎ状の口唇部をもつ無文土器で、擦痕調整を施す。2〜4はくの字状の段部をもち、貝殻条痕を地文とする。2・3は押引き刺突文、4は斜格子状沈線文と段部への円形刺突文を施す。5は擦痕調整ののち、三角形区画に押引き刺突文を充填し、沈線交点に円形刺突を加える。6は撚糸文が施される。土器以外では7の石皿が出土している。1・6は覆土上層からの出土である。

早期後半、鵜ヶ島台式期の所産と考えられる。

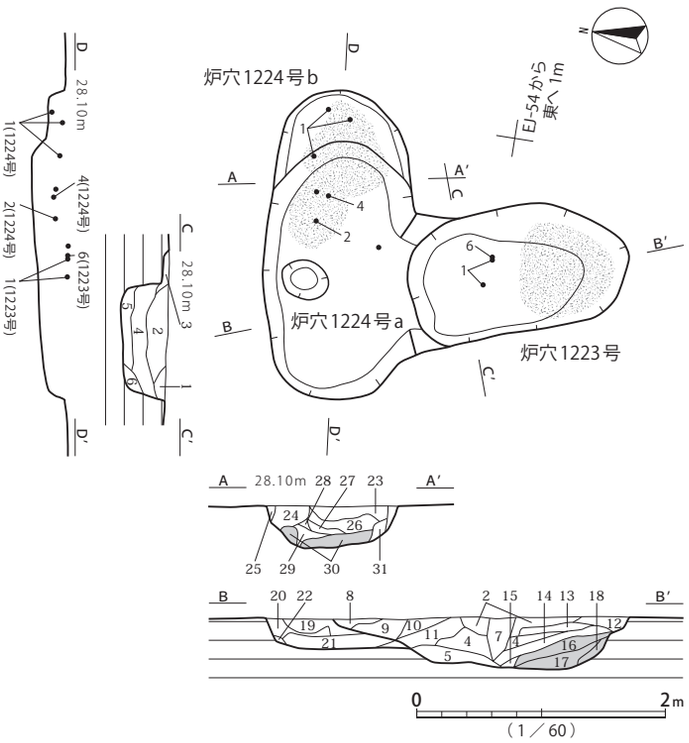
炉穴1224号 （Fig.38・39、PL.11・100）

EJ−44を中心に位置する。南側で炉穴1223号と重複する。新旧関係は、本遺構が1223号よりも古い。

a・bの2基が存在し、平面形態は長楕円形を呈す。新旧関係は、土層断面図でははっきりしないが、bの火床面がaの上に載っていることから、a→bの順に構築されたものと考えられる。規模はaが2.08×1.22m、bは短軸長1.22m、確認面からの深さはaが0.13m、bが0.32mを測る。主軸方位はいずれもN−82°−Wとなる。

実測可能遺物は、1〜3は口縁部破片、4は胴部破片で、2以外は胎土に繊維を含む。いずれも貝殻条痕を地文とする。1はくの字状の段部を2段もつ。口縁部から垂下させた平行沈線区画内に、鋸歯文と押引き刺突文・磨消文・押引き刺突文を交互に施し、交点に円形刺突を加える。3は三角形区画内に刺突文を充填する。1・2・4は火床部範囲から検出され、bの底面に相当する高さから検出されている。

炉穴 1223・1224 号



A-A'

1224号a

23	暗褐色土	ローム粒を少量含む。
24	暗褐色土	焼土粒をわずかに含む。
25	褐色土	暗褐色土を少量含む。
26	黒褐色土	焼土粒・暗褐色土を含む。
27	暗褐色土	焼土粒をわずかに含む。
28	暗褐色土	焼土粒を含む。
29	暗褐色土	焼土粒を含み、焼土ブロックも少量混じる。
30	暗褐色土	焼土粒を多量に含み、褐色土も混じる。
31	暗褐色土	

B-B'

1223号

7	黒色土	暗褐色土を含む。
8	暗褐色土	焼土粒を少量含む。
9	暗褐色土	焼土粒・黒褐色土を少量含む。
10	暗褐色土	褐色土・焼土粒を少量含む。
11	暗褐色土	焼土粒・小ロームブロックを少量含む。
12	暗褐色土	褐色土を含み、焼土粒も少量混じる。
13	黒褐色土	焼土粒を少量含む。
14	暗赤褐色土	焼土粒を含む。
15	暗褐色土	焼土粒を含み、褐色土も少量混じる。
16	赤褐色土	焼土粒を多量に含む。
17	赤褐色土	焼土粒を多量に含み、焼土ブロックも少量混じる。
18	赤褐色土	焼土ブロック・焼土粒を多量に含む。

1224号a

19	黒褐色土	暗褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
20	暗褐色土	褐色土を含む。
21	黒褐色土	焼土粒を少量含む。
22	褐色土	暗褐色土を少量含む。

C-C'

1223号

1	暗褐色土	褐色土を少量含む。
2	暗褐色土	焼土粒を少量含む。
3	暗褐色土	褐色土を少量含む。
4	暗褐色土	焼土粒・焼土ブロックを少量含む。
5	黒褐色土	焼土粒を少量含む。
6	暗褐色土	焼土粒を少量含む。

炉穴 1223 号

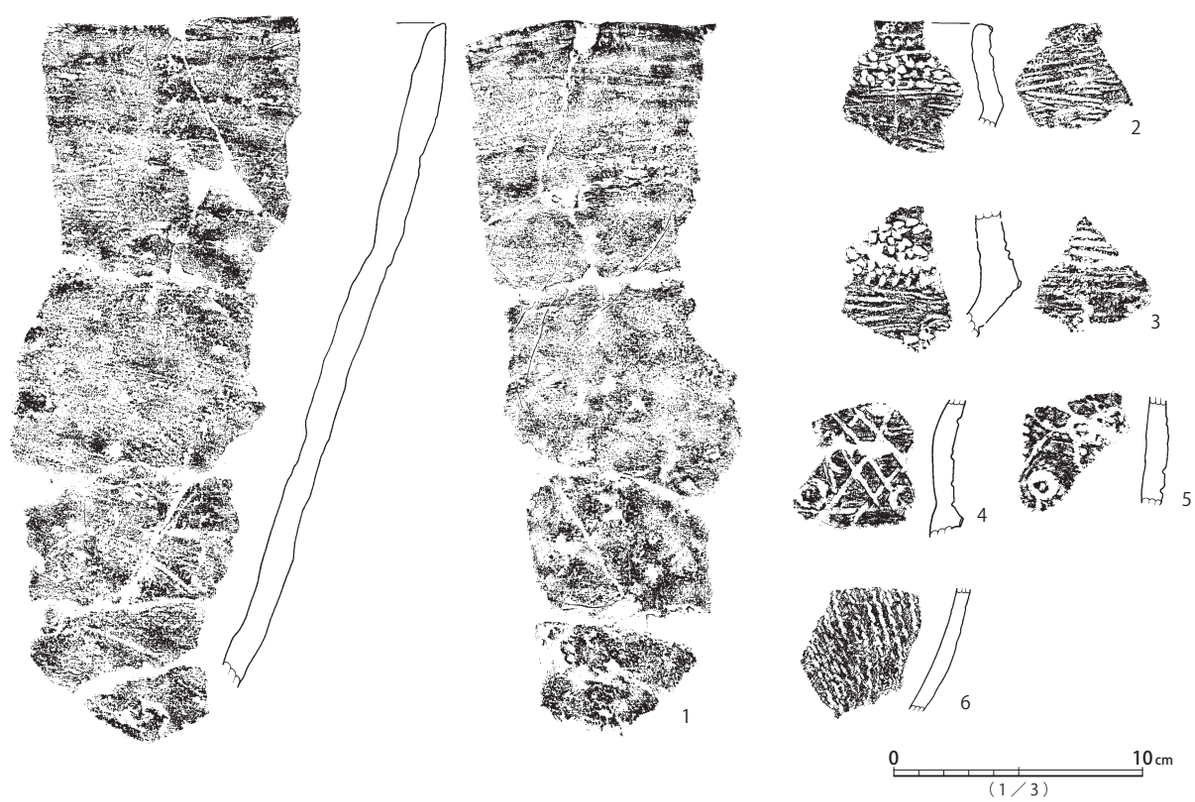
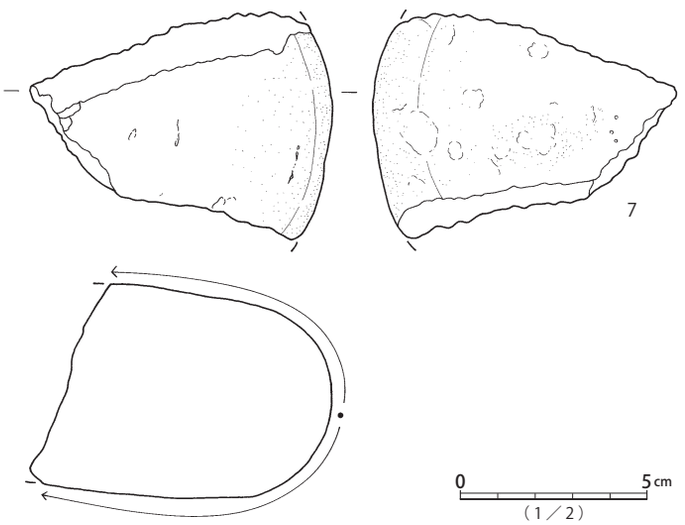


Fig.38　炉穴1223号(1) 遺構遺物、炉穴1224号(1) 遺構

炉穴 1223号



炉穴 1224号

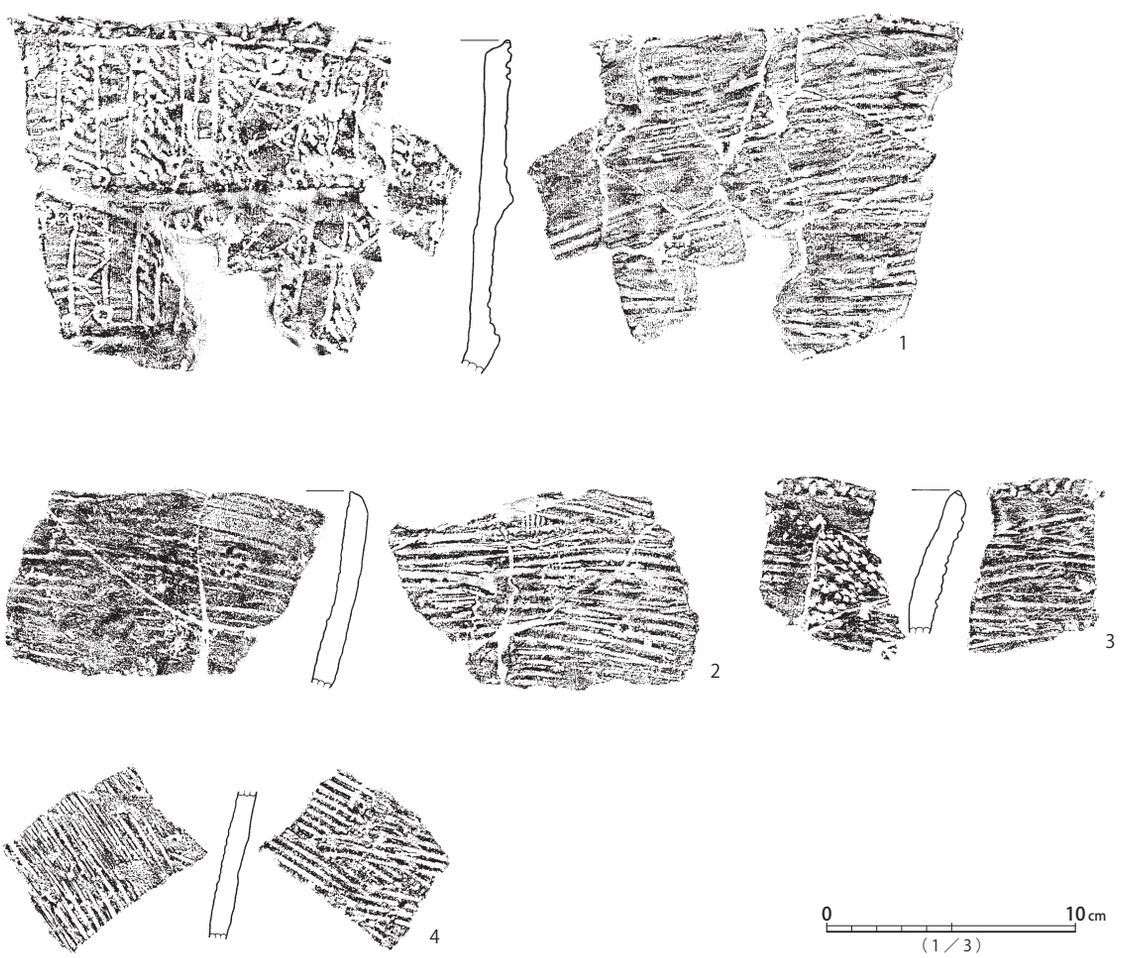


Fig.39　炉穴1223号(2) 遺物、炉穴1224号(2) 遺物

早期後半、鵜ヶ島台式期の所産と考えられる。

炉穴1246号　（Fig.40、PL.11・12・100）

DK−15を中心に位置する。南東側で溝2156号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2156号よりも古い。

a・bの２基が存在し、平面形態は不整楕円形を呈す。bがaを壊して構築されており、aは火床部の一部が検出されたのみである。規模はbが1.87×1.25mを測る。確認面からの深さは、bは0.61mを測るが、aは図面不備のため不明である。主軸方位は、bはN−132°−Eである。

実測可能遺物は１の胴部破片のみである。胎土に繊維を含み、外面に貝殻条痕文、内面に擦痕調整を施す。

早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

炉穴1248号　（Fig.40、PL.11・100）

DK−23を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は1.65×0.94m、確認面からの深さは0.37mを測る。主軸方位はN−157°−Wである。

実測可能遺物は、1は口縁部破片、2は胴部破片、3は口縁〜胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。1は擦痕調整ののち斜格子状沈線を施す。3は無文で、口縁部はゆるい波状を呈すと思われる。内外面に擦痕調整を施す。3は覆土中層、焼土上面からの出土である。

早期後半、鵜ヶ島台式期の所産と考えられる。

炉穴1249号　（Fig.41、PL.12・100）

DK−15に位置する。北東側で溝2163号（上層）と重複するが、底面までは達していない。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は2.07×0.95m、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位はN−57°−Eである。

実測可能遺物は１の胴部破片のみである。外面に撚糸文を施し、胎土に繊維を含まない。

周辺の炉穴同様に早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

炉穴1251号　（Fig.41、PL.12・100）

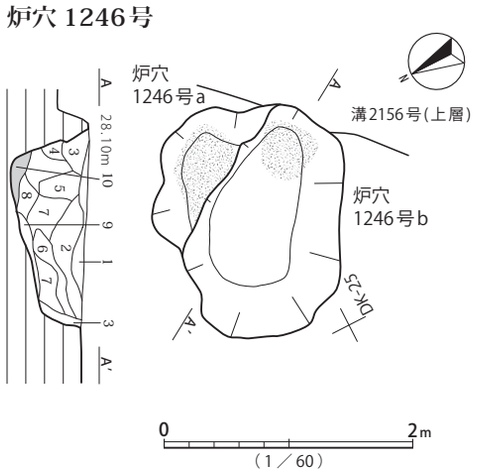
EM−01を中心に位置する。他遺構との重複はない。北東側に延びる掘り込みは、底面の凹凸が著しいことから、撹乱の可能性が考えられる。

平面図に火床面や焼土範囲の記載はなかったが、断面図に焼土の堆積が認められたことから、炉穴と判断した。平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は2.37×0.80m、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位はN−20°−Wである。

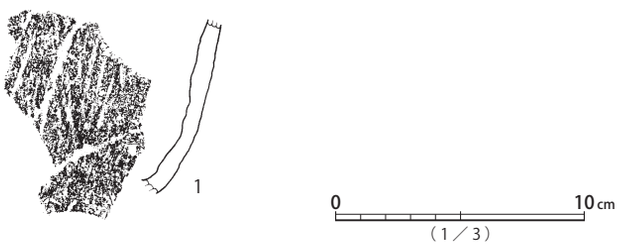
実測可能遺物は１の胴部破片のみである。外面に擦痕調整、内面に貝殻条痕文を施し、胎土に繊維を含まない。

早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

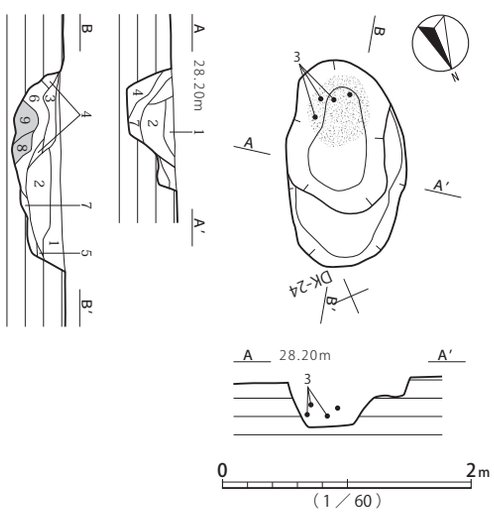
炉穴 1246号



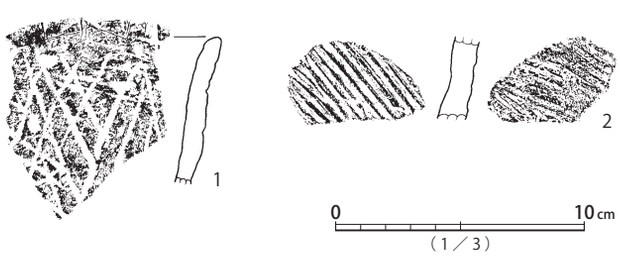
1　黒褐色土
2　黒褐色土　暗褐色土粒を含む。
3　暗褐色土　ローム粒を多量に含み、焼土微粒も混じる。
4　暗褐色土　ローム粒・焼土粒・焼けた壁の崩落土を多量に含む。
5　黒褐色土　暗褐色土粒を多量に含み、焼土微粒・小ロームブロックも混じる。
6　黒褐色土　暗褐色土粒・焼土粒を含む。
7　黒褐色土　褐色土粒を含み、粗い焼土粒と小焼土ブロックも混じる。
8　暗褐色土　7層にローム粒とロームブロックが混じる。
9　暗褐色土　小焼土ブロックを含む。
10　焼土　焼けたロームブロックからなる。



炉穴 1248号



1　暗褐色土　粗いローム粒と焼土粒を少量含み、ロームも混じる。
2　黒褐色土　暗褐色土が混じる。
3　暗褐色土　1層に似るが、ローム粒を多量に含む。
4　暗褐色土　ロームが混じる。
5　暗褐色土　ロームを多量に含む。
6　暗茶褐色土　焼土・ローム・暗褐色土を含む。
7　褐色土　ロームと暗褐色土を含む。
8　暗赤褐色土　焼土とやや焼けたローム粒が混じる。
9　赤褐色土　焼けたロームからなる。



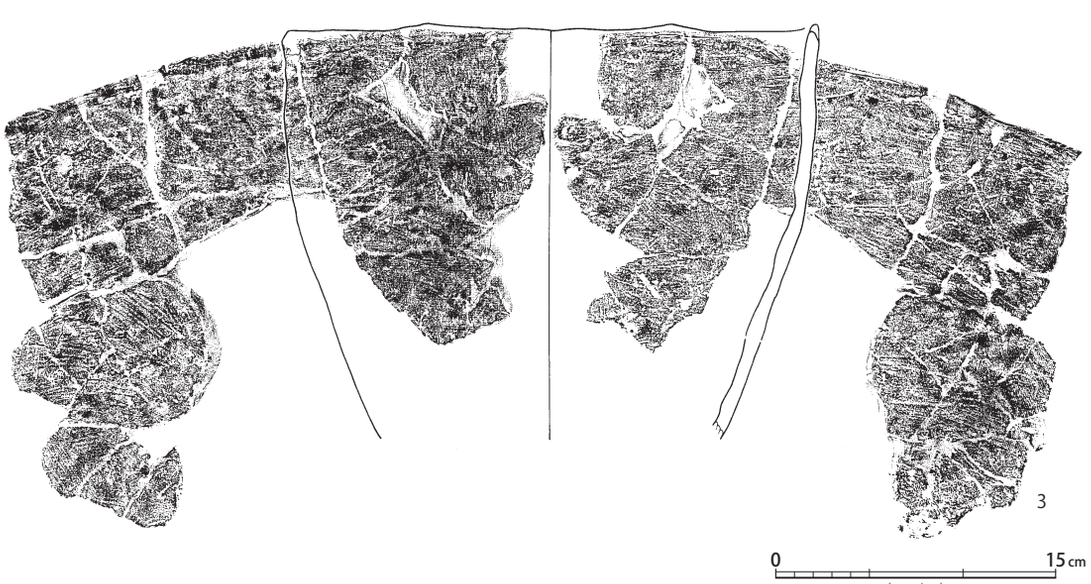


Fig.40　炉穴1246号 遺構遺物、炉穴1248号 遺構遺物

炉穴1847号 （Fig.41・42、PL.100・133）

EI−75を中心に位置する。他遺構との重複はない。

a〜fの6基が重複する。平面形態は不整形を呈し、全体規模は最大長4.40、最大幅3.38mを測る。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。推定規模はaが2.19×1.05m、bが1.52×1.12m、cが1.38×1.02m、dが短軸長0.80m、eが短軸長0.89mを測る。確認面からの深さはaが0.42m、bが0.48m、cが0.42m、dが0.33m、eが0.28m、fが0.39mを測る。主軸方位はa・cがN−115°−E、bがN−57°−E、dがN−178°−E、eがN−176°−Eである。

実測可能遺物は、1は底部破片、2・4は口縁部破片、3・5・6は胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。1は平底で、内外面に貝殻条痕文を施す。2・4は内削ぎ状の口唇部をもち、押引き沈線文を施す。5はくの字状の段部をもち、くびれ部に曲線状の斜格子状沈線文を施し、沈線交点と段部に指頭によると思われる刺突文を加える。土器以外では7〜9の磨石類が出土しており、7と8は被熱し赤色化する。2・4・8はaから検出され、底面からの出土。5・7・9はbから検出され、5は底面付近からの出土である。

早期後半、鵜ヶ島台式期の所産と考えられる。

炉穴1848号 （Fig.43、PL.100）

EI−77を中心に位置する。他遺構との重複はない。

火床面は遺構中央に位置し、底面に段差をもつことから、2〜3基が重複している可能性があるが、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。現状での平面形態は不整長楕円形を呈し、規模は3.22×1.62m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN−73°−Wである。

実測可能遺物は、1・2は口縁部破片で、胎土に繊維を含む。1は内外面に粗い貝殻条痕文を施し、口縁端部には深いキザミを加える。2は無文で、内外面に擦痕調整を施す。

早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

炉穴1849号 （Fig.43、PL.100）

EJ−71を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整形を呈し、規模は1.91×1.54mを測る。調査図面には遺構と火床面の範囲のみ記載されており、掘り込みの有無は不明である。壁面はすべて失われ、底面部分のみが残存していた可能性も考えられる。

実測可能遺物は、1は口縁部破片、2〜4は胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。1・3・4は貝殻条痕を地文とする。2はくの字の段部をもち、くびれ部に押引き刺突による三角形区画文を施す。

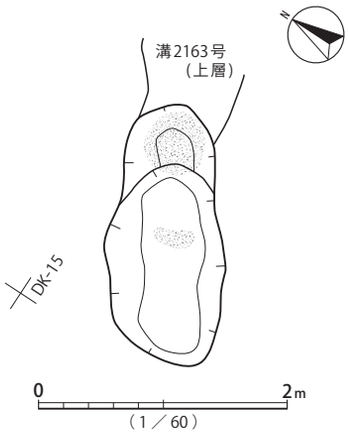
早期後半、鵜ヶ島台式期の所産と考えられる。

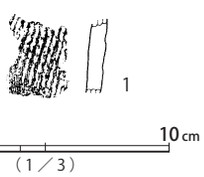
炉穴1850号 （Fig.43、PL.100・133）

EJ−82を中心に位置する。他遺構との重複はない。

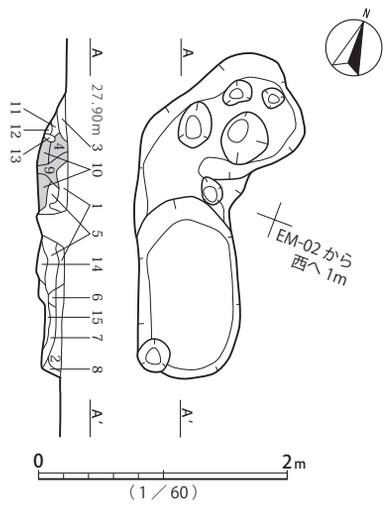
平面形態は不整形を呈す。周囲に径15cm・深さ10cm前後の小柱穴が巡り、遺構に伴う可能性があるが、明確でない。規模は1.15×1.08m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN−89°−E

炉穴 1249号

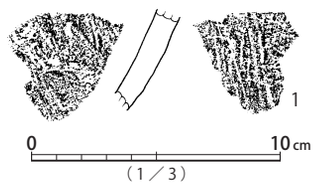




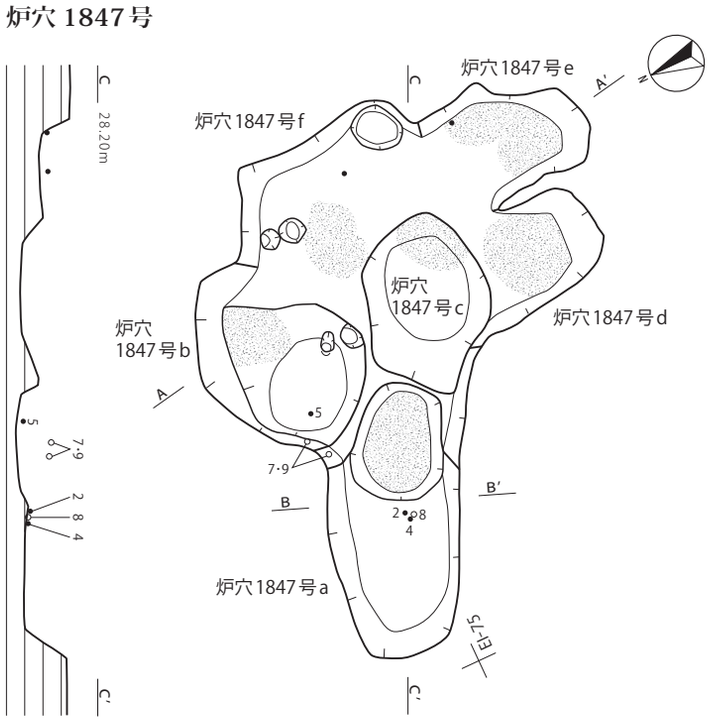
炉穴 1251号



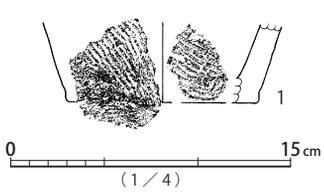
1 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロックを少量含む。
2 黒褐色土 暗褐色土・焼土粒を少量含む。
3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
4 暗赤褐色土 焼土粒を多量に含む。
5 暗褐色土 黒褐色土・焼土粒・焼土ブロックを少量含む。
6 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。
7 暗褐色土 褐色土・ローム粒を少量含む。
8 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
9 暗赤褐色土 焼土粒を多量に含み、暗褐色土も混じる。
10 赤褐色土 焼土粒を多量に含み、焼土ブロックも少量混じる。
11 暗褐色土 焼土粒を含む。
12 暗褐色土 黒褐色土・焼土粒を少量含む。
13 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
14 暗褐色土 褐色土・焼土粒を少量含む。
15 褐色土 ロームブロック・ローム粒を少量含む。



炉穴 1847号



1 黒色土 ソフトローム・焼土粒が混じる。砂質を帯びる。
2 黒色土 ローム粒・炭化物が混じる。
3 茶褐色土 ローム粒・焼土粒が混じる。
4 黒褐色土 焼土粒が混じる。
5 明茶褐色土 焼土粒を多量に含む。下層には焼土が堆積する。





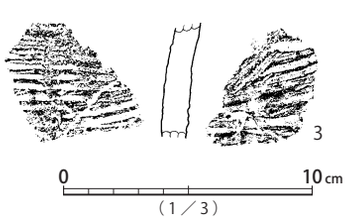


Fig.41 炉穴1249号 遺構遺物、炉穴1251号 遺構遺物、炉穴1847号(1) 遺構遺物

炉穴 1847 号

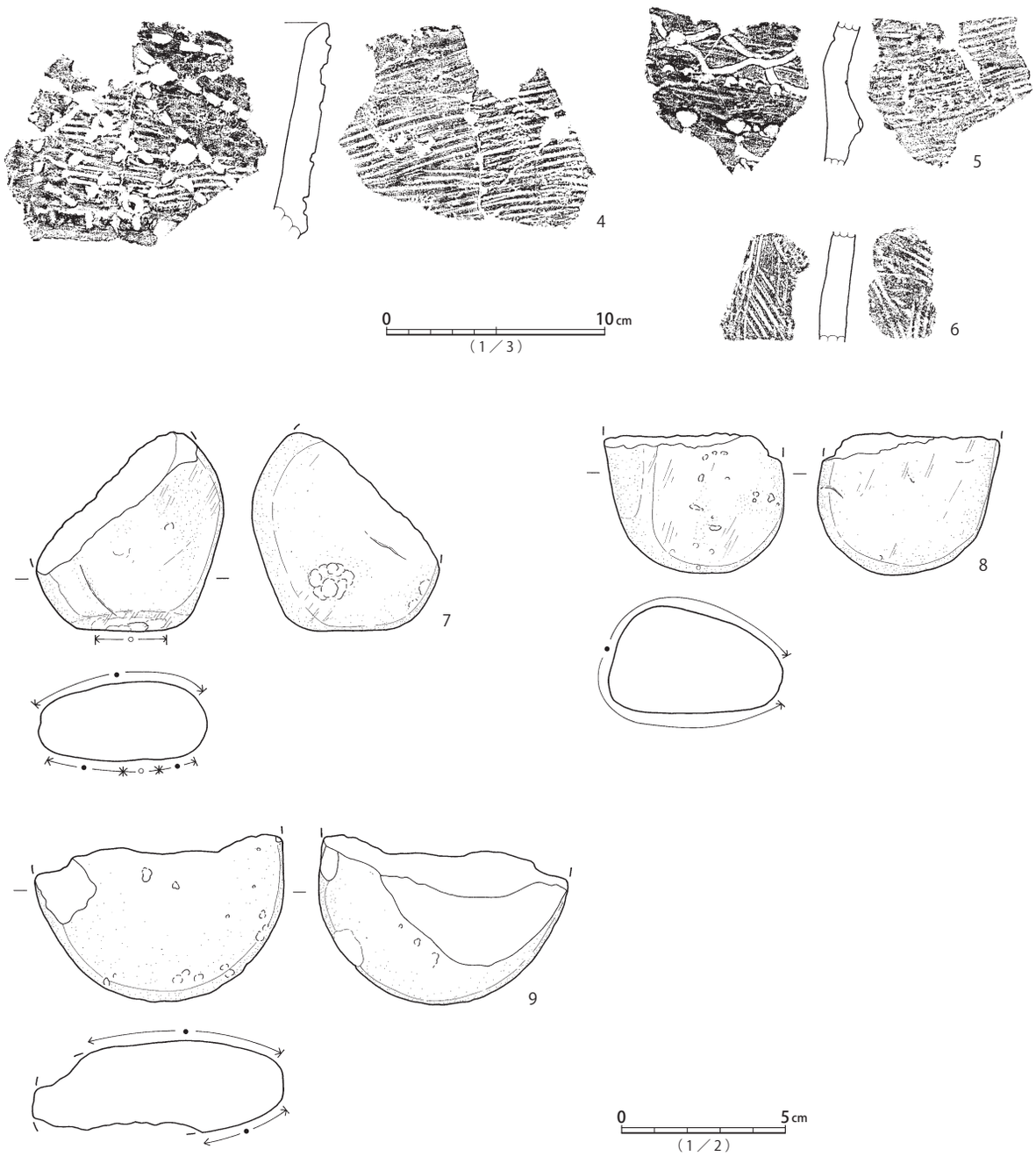


Fig.42　炉穴1847号(2) 遺物

である。

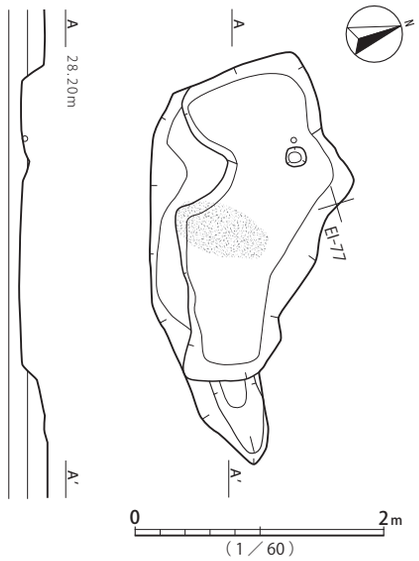
実測可能遺物は１の胴部破片である。内外面に貝殻条痕文を施し、胎土に繊維を含む。口縁部寄りには細隆起線の貼り付けが確認できる。土器以外では、被熱しやや赤色化する２の磨石が出土している。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

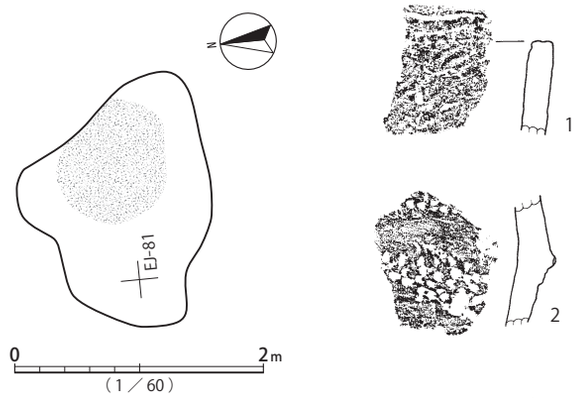
炉穴1851号　（Fig.44、PL.100）

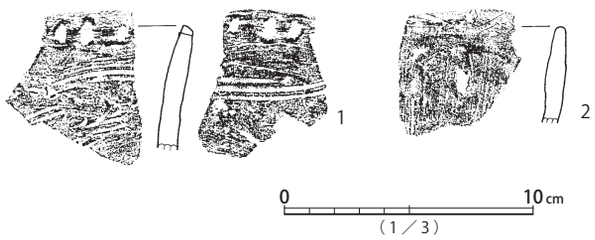
EJ−84を中心に位置する。南西側で浅い掘り込みの土坑（遺構番号なし）と接し、南東側は撹乱に

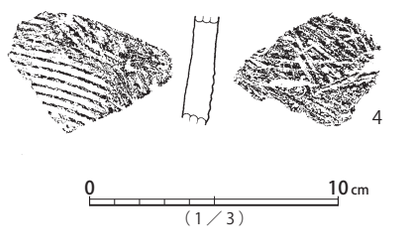
炉穴 1848号



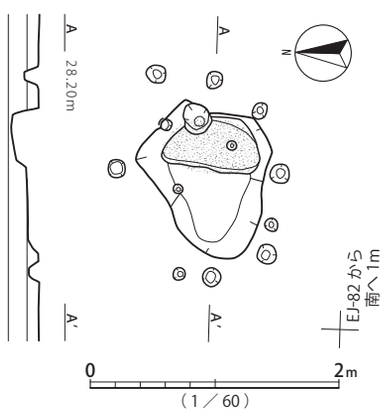
炉穴 1849号







炉穴 1850号



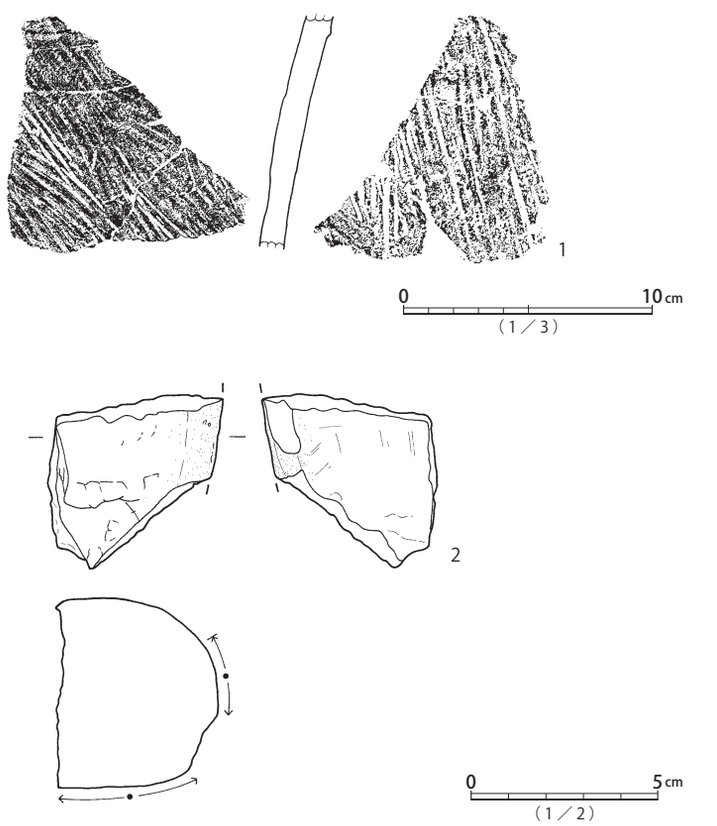
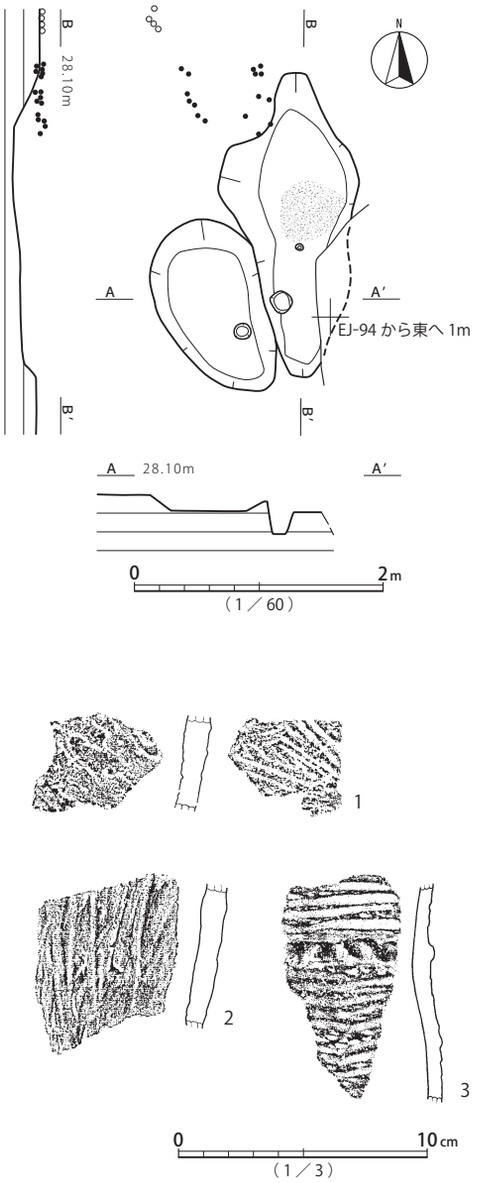


Fig.43　炉穴1848号 遺構遺物、炉穴1849号 遺構遺物、炉穴1850号 遺構遺物

炉穴 1851号



炉穴 1852号

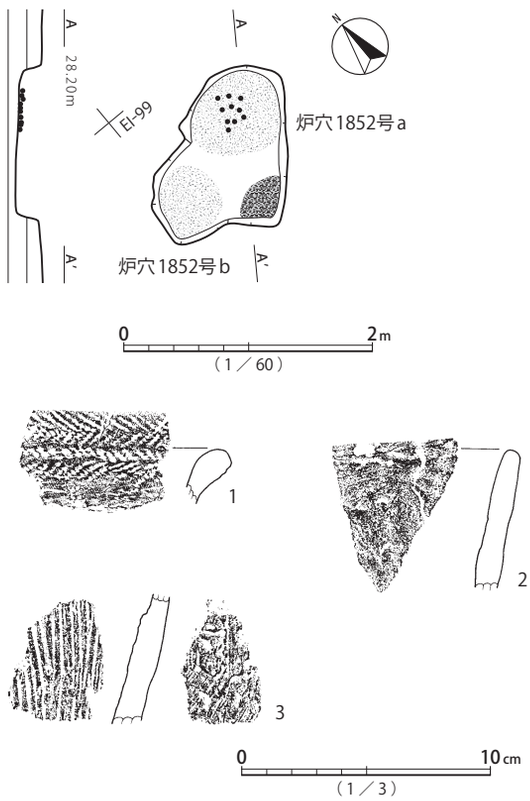


Fig.44　炉穴1851号 遺構遺物、炉穴1852号 遺構遺物

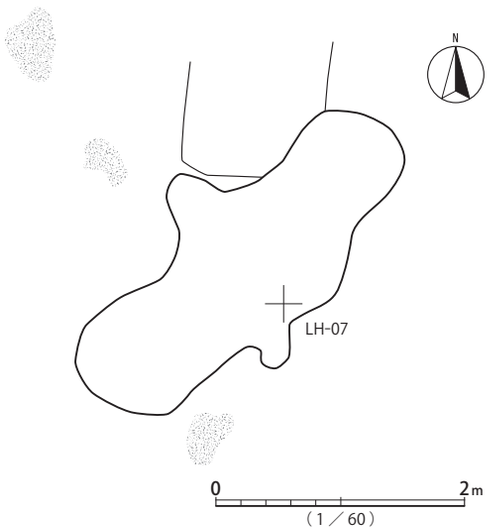
より壊される。

平面形態は不整長楕円形を呈し、規模は2.42×1.12m、確認面からの深さは0.11mを測る。主軸方位はN−1°−Wである。

実測可能遺物は1〜3の胴部破片である。1は外面に擦痕調整、内面に貝殻条痕文、2は外面にケズリ状の擦痕調整を施す。3は横位の条線文と紐線文を施す加曽利B式の粗製土器で、混入である。遺構北西側には多数の遺物が分布し、調査図面に「鵜」のメモ書きが残ることから、鵜ヶ島台式の土器が存在した可能性があるが、これらの遺物の所在は確認できない。

早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

炉穴 1783号



炉穴 1786号

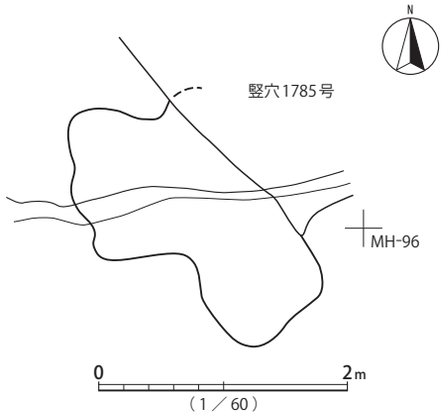


Fig.45　炉穴1783号 遺構、炉穴1786号 遺構

炉穴1852号　（Fig.44、PL.100）

EI−99を中心に位置する。他遺構との重複はない。

a・bの２基が存在し、平面形態は不整形を呈す。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。規模はaが1.27×0.86m、bが短軸長0.73m、確認面からの深さはa・bともに0.24mを測る。主軸方位はaがN−40°−E、bがN−90°−Wである。aの南隅からは炭化物の分布が確認されている。

実測可能遺物は、1・2は口縁部破片、3は胴部破片である。1は肥厚した口唇部に4段の単節縄文を施す。早期前半の井草式であろう。2は無文で、内外面に擦痕調整を施す。3は胎土に繊維を含み、外面に貝殻条痕文、内面に擦痕調整を施す。aの火床部からは、複数の土器片の出土が記録されているが、遺物を特定することはできない。

早期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

セ116・117地区

炉穴1783号　（Fig.45）

MH−96を中心に位置し、セ116調査区の中央から検出されている。他遺構との重複はないが、全面が国分寺の参道建設工事によって削平される。

調査図面には遺構範囲のみ記載されており、掘り込みの有無は不明である。火床面や焼土範囲の記載もないが、調査段階から炉穴と認識されている。平面形態は不整長楕円形を呈し、その形状から複数の炉穴が重複している可能性が高い。現存規模は3.17×1.16mを測る。長軸方向の方位はN−50°−Eとなる。遺構の周囲からは、火床面と思われる焼土の分布が確認されており、本遺構とともに炉穴群を形成した可能性が考えられる。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

炉穴1786号 （Fig.45）

MH−85を中心に位置し、セ116調査区の北側から検出されている。北東側で竪穴1785号と重複し、南側は国分寺の参道建設工事によって削平される。新旧関係は、本遺構が1785号よりも古い。

調査図面には遺構範囲のみ記載されており、掘り込みの有無は不明である。火床面や焼土範囲の記載もないが、調査段階から炉穴と認識されている。平面形態は不整形を呈し、その形状から複数の炉穴が重複している可能性が高いが、詳細は不明である。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

第2節　土　坑

北辺部

土坑1569号 （Fig.46、PL.12・100）

UJ−64を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整長楕円形を呈し、炉穴の可能性もあるが、火床面が認められず、覆土中に焼土も含まないことから、土坑と判断した。規模は2.12×1.15m、確認面からの深さは0.29mを測る。主軸方位はN−48°−Eである。

実測可能遺物は1・2の胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。1は無文で内外面に擦痕調整を施す。2は外面に貝殻条痕文、内面に繊維擦痕を施す。

早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

西辺部

土坑0244号 （Fig.47、PL.100）

SH−58を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整長楕円形を呈し、規模は2.60×1.56m、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN−31°−Eである。

実測可能遺物は、1は口縁部破片、2・3は胴部破片で、1・3は胎土に繊維を含む。1は内削ぎ状の口唇部をもち、外面に擦痕、内面にナデを施す。3は外面に太く深い縦位の貝殻条痕文、内面に弱い横位の貝殻条痕文を施す。

早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

土坑0302号 （Fig.47、PL.100）

SH−53を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は隅丸方形を呈すと思われるが、南側の壁面が検出されないため、詳細は不明である。2基が重複する炉穴の可能性も考えられるが、遺構の形状と焼土が覆土中から検出されていることから、土坑と判断した。規模は短軸長1.55m、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−3°−Wである。

実測可能遺物は1の胴部破片のみである。胎土に繊維を多く含み、外面に貝殻条痕文、内面にナデないし擦痕調整を施す。

土坑1569号

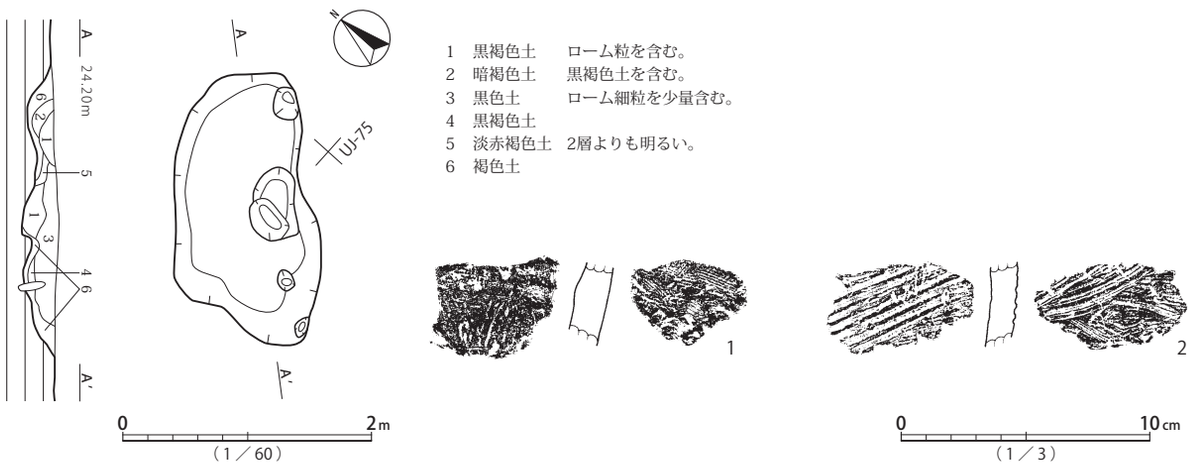


Fig.46　土坑1569号 遺構遺物

早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

土坑0526号　（Fig.48、PL.100）

LG−85を中心に位置する。南東側で竪穴0514号と重複する。新旧関係は、本遺構が0514号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は1.57×0.91m、確認面からの深さは0.16mを測る。主軸方位はN−29°−Wである。

実測可能遺物は、1は尖底部破片、2は口縁部破片、3は胴部破片で、すべて同一個体である。胎土に繊維を含み、内外面ともに貝殻条痕文を施したのち、外面は一部、内面は全体にナデ調整を加える。

早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

土坑1870号　（Fig.48）

PH−27を中心に位置する。南東側で土坑370号（上層）、南西側で竪穴0371号と重複する。新旧関係は、本遺構が370号よりも古い。0371号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

平面形態は不整形を呈すが、北側が検出されたのみで、詳細は不明である。覆土下層に焼土を含み、炉穴の可能性もあるが、火床面や焼土範囲の記載がなかったことから、土坑と判断した。確認面からの深さは0.30mを測る。

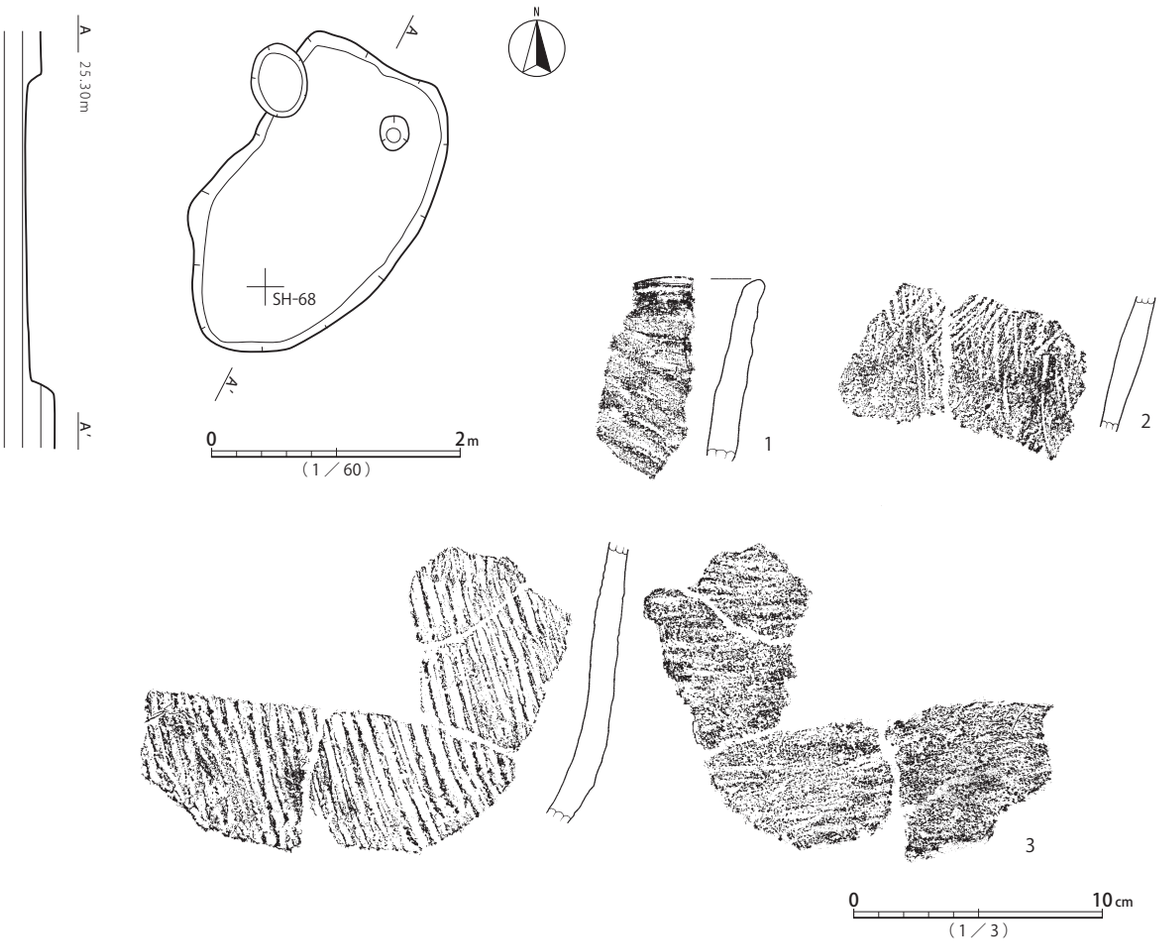
縄文時代の遺構と判断したが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

殿屋敷地区

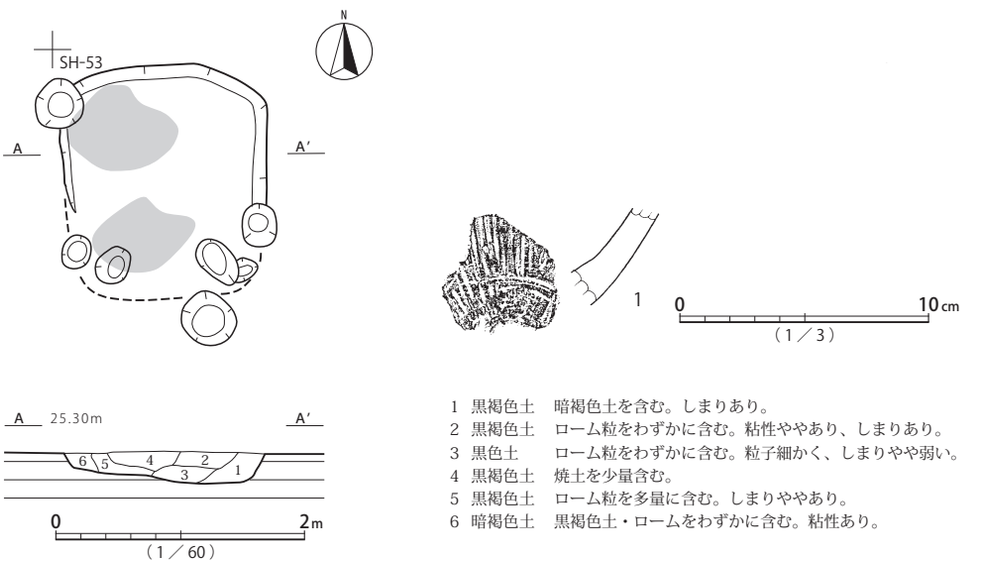
土坑0614号　（Fig.49、PL.12・51・101）

GH−94を中心に位置する。他遺構との重複はないが、北側の一部は撹乱により壊される。また、北西側で土坑0615号と近接する。

土坑 0244 号



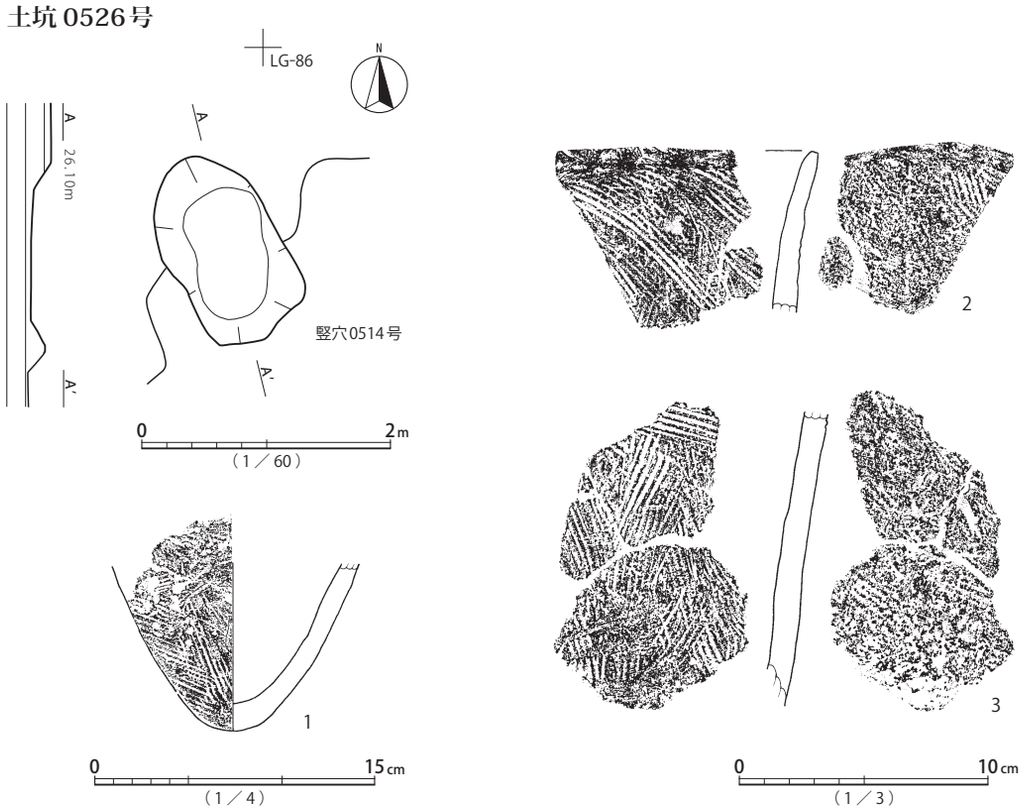
土坑 0302 号



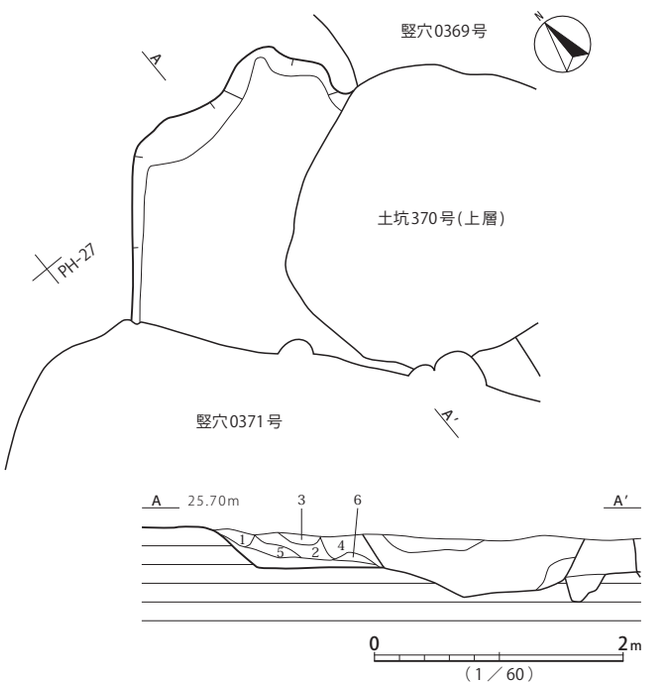
1 黒褐色土　暗褐色土を含む。しまりあり。
2 黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。粘性ややあり、しまりあり。
3 黒色土　ローム粒をわずかに含む。粒子細かく、しまりやや弱い。
4 黒褐色土　焼土を少量含む。
5 黒褐色土　ローム粒を多量に含む。しまりややあり。
6 暗褐色土　黒褐色土・ロームをわずかに含む。粘性あり。

Fig.47　土坑0244号 遺構遺物、土坑0302号 遺構遺物

土坑 0526号



土坑 1870号



1　明褐色土　粘性あり、しまり弱い。
2　灰褐色土　しまり強い。
3　暗褐色土　ローム粒を含む。しまりややあり。
4　黒褐色土　ロームをわずかに含む。しまりややあり。
5　暗褐色土　粘性あり、しまりなし。
6　黒褐色土　焼土を含む。

Fig.48　土坑0526号 遺構遺物、土坑1870号 遺構

平面形態は不整長楕円形を呈し、遺構ほぼ中央を掘り込み、深鉢形土器を埋設する。規模は1.79×1.04m、確認面から最深部までの深さは0.38mを測る。主軸方位はN−42°−Eである。

実測可能遺物は、1は胴部から底部がほぼ完存する深鉢形土器、2は胴部破片である。1は口縁部に微隆起帯を巡らせ、胴部に単節縄文を施す。口縁部をわずかに北西に傾けた状態で出土しており、埋甕として利用されたものであろう。2は単節縄文ののち、幅広で曲線状の磨消懸垂文を施す。

中期末葉、加曽利EIV式期の所産と考えられる。

土坑0615号 （Fig.49、PL.12・51・101）

GH−84を中心に位置する。他遺構との重複はないが、南東側で土坑0614号と近接する。

平面形態は長楕円形を呈し、南東隅を掘り込み、深鉢形土器を埋設する。規模は1.55×1.09m、確認面から最深部までの深さは0.27mを測る。主軸方位はN−41°−Wである。

実測可能遺物は、1はほぼ完形の深鉢形土器、2は胴部破片である。1は4ヶ所の張り出しをもつ微隆起線で口縁部無文帯を区画し、胴部に単節縄文を施す。口縁部をわずかに南西に傾けた状態で出土しており、埋甕として利用されたものであろう。2は単節縄文ののち下端側にミガキを加える。

中期末葉、加曽利EIV式期の所産と考えられる。

東南部

土坑0637号 （Fig.50）

GM−38を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は1.19×0.83m、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−42°−Wである。

縄文時代の遺構と判断したが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

土坑0986号 （Fig.50、PL.12）

EO−38を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整楕円形を呈し、規模は0.86×0.78m、確認面からの深さは0.12mを測る。覆土中からはハマグリを主体とする貝層が検出されており、分析結果は第4章に記載している。

実測に至らない条痕文土器細片が出土しており、鵜ヶ島台式を含む早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

南辺部

土坑1179号 （Fig.51、PL.101）

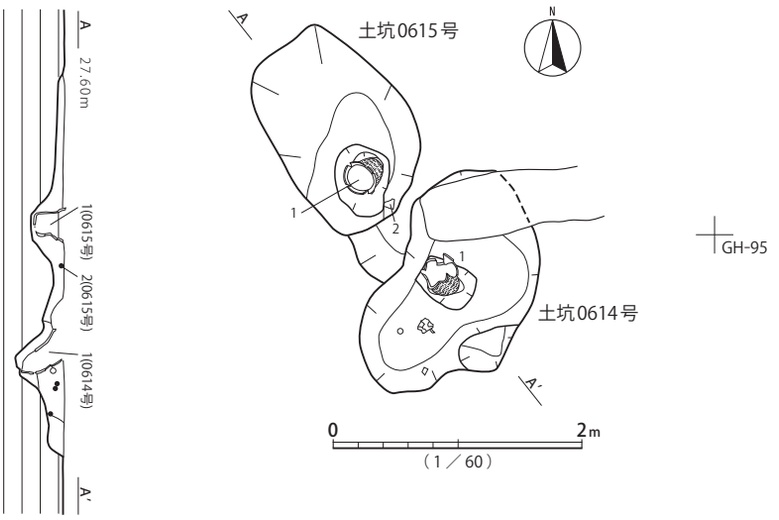
GK−50に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整円形を呈し、規模は1.48×1.34m、確認面からの深さは0.28mを測る。

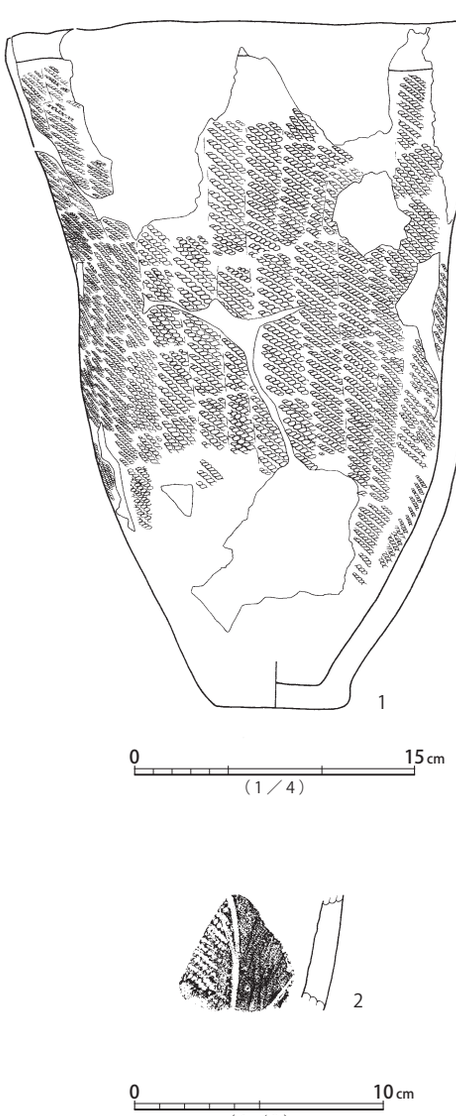
実測可能遺物は1の胴部破片のみである。胎土に繊維を多く含み、貝殻条痕を地文に、細隆起線による区画文を施す。

早期後半、野島式期の所産と考えられる。

土坑 0614・0615 号



土坑 0614 号



土坑 0615 号

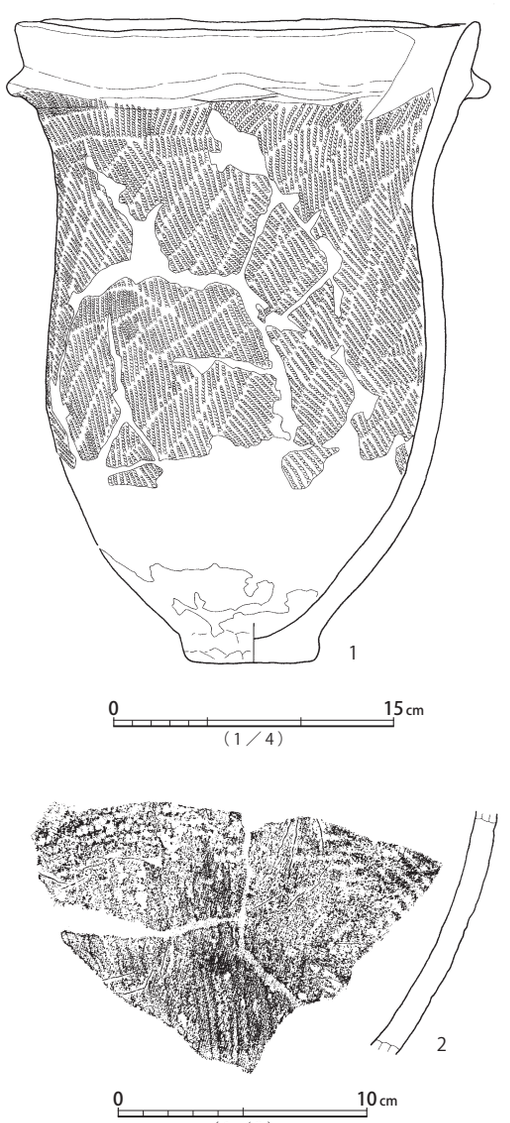
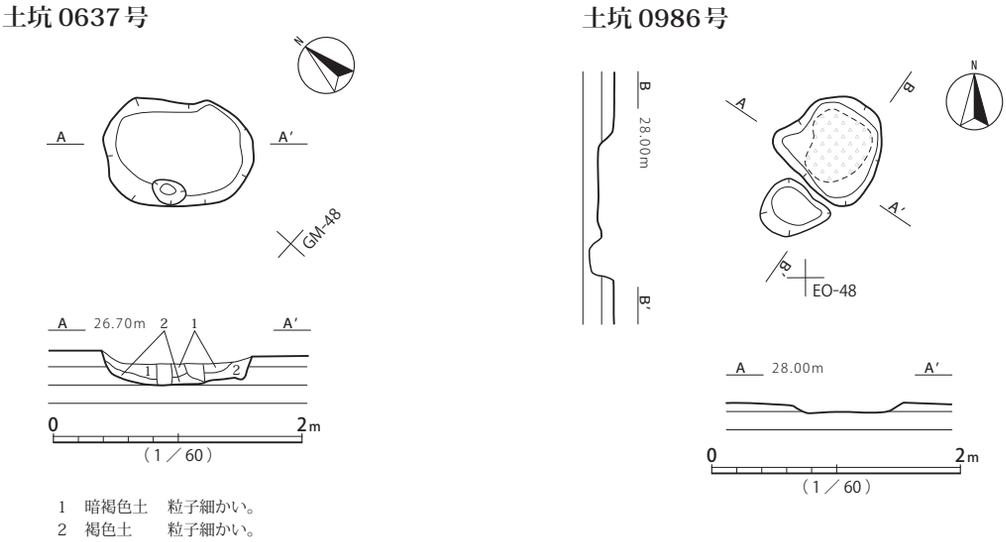


Fig.49　土坑0614号 遺構遺物、土坑0615号 遺構遺物



1　暗褐色土　粒子細かい。
2　褐色土　　粒子細かい。

Fig.50　土坑0637号 遺構、土坑0986号 遺構

土坑1189号　（Fig.51、PL.12・101）

FL−41を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は円形を呈し、規模は2.95×2.88m、確認面からの深さは1.46mを測る。覆土中にはローム粒やロームブロックを多く含む層が認められ、人為的に埋め戻された可能性がある。規模が大きく、上総国分僧寺に関連する土採掘坑などの可能性も考えられるが、上層の遺物が含まれないことから、下層遺構と判断した。

実測可能遺物は1〜3の胴部破片である。1・2は胎土に繊維を含み、内外面に擦痕を残す。3は撚糸文を施す。

縄文時代の遺構と思われるが、帰属時期は明確でない。

土坑1193号　（Fig.51）

EK−19を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整長方形を呈し、規模は1.49×0.83m、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位はN−2°−Eである。

実測可能遺物はないが、条痕文土器の細片が出土していることから、早期後半の可能性が考えられる。

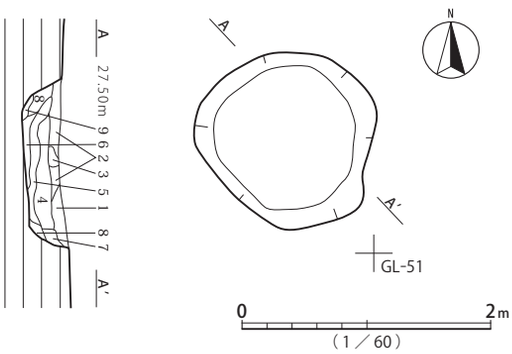
土坑1218号　（Fig.52）

EJ−56を中心に位置する。他遺構との重複はない。

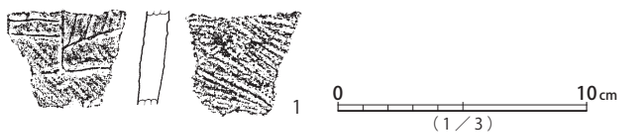
平面形態は長楕円形を呈し、規模は2.58×1.50m、確認面からの深さは0.60mを測る。主軸方位はN−66°−Wである。

縄文時代の遺構と判断したが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

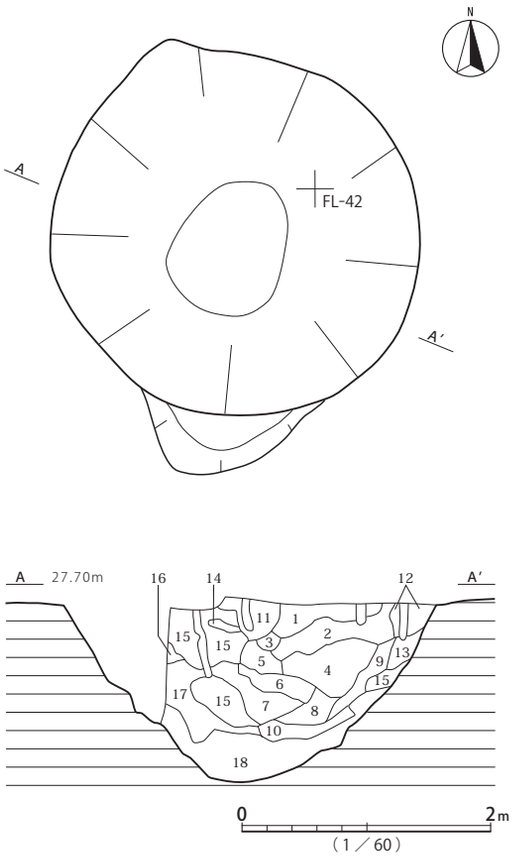
土坑 1179号



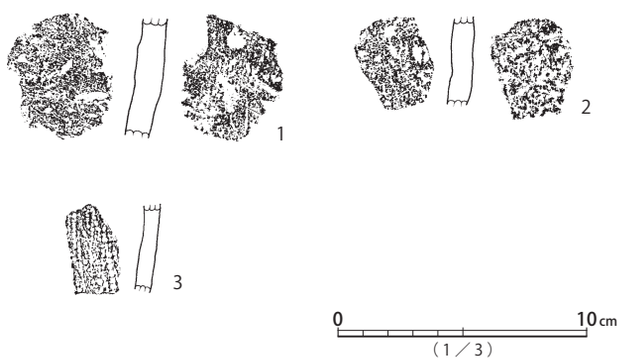
1　黒褐色土　暗褐色土を含む。
2　黒褐色土
3　暗褐色土
4　黒褐色土　ローム粒を含む。
5　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
6　黒褐色土　ローム粒を含み、ソフトロームも少量混じる。
7　暗褐色土
8　褐色土
9　明褐色土



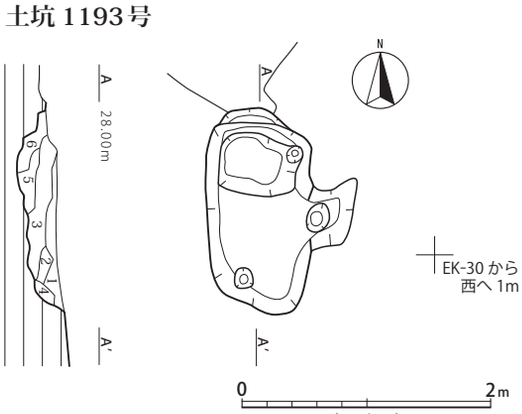
土坑 1189号



1　暗褐色土　黒褐色土を含む。
2　黒褐色土
3　暗褐色土　黒色土ブロックを含む。
4　黒色土
5　暗褐色土　黒褐色土を少量含む。
6　黒褐色土　ロームブロックを含む。
7　褐色土　ローム粒を多く含み、ロームブロックも混じる。
8　黒色土　ローム粒を少量含む。
9　黒褐色土　ローム粒を含む。
10　黒褐色土　ローム粒を含み、ロームブロックも少量混じる。
11　明褐色土　ソフトロームを含む。
12　暗褐色土
13　褐色土　ソフトロームを含む。
14　黒褐色土
15　黄褐色土　ロームブロックを少量含む。
16　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。
17　褐色土　ローム粒・ロームブロックを主体とする。
18　褐色土　ロームブロックを主体とする。



土坑 1193号



1　黒褐色土　ロームブロックを含む。
2　暗褐色土　ローム粒を含む。
3　褐色土　ソフトローム・ロームブロックを含む。
4　黒褐色土　ロームブロックを含む。しまりあり。
5　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。
6　黒褐色土　ロームブロック・黒色土ブロックを含む。

Fig.51　土坑1179号 遺構遺物、土坑1189号 遺構遺物、土坑1193号 遺構

土坑 1244 号 （Fig.52、PL.101）

FL−90に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は楕円形を呈し、規模は1.00×0.75m、確認面からの深さは0.12mを測る。

実測可能遺物は、1・2・5は口縁部破片、3・4・6は胴部破片で、5以外は胎土に繊維を含む。1は貝殻条痕を地文に細隆起線文を施す。3は曲線状の沈線区画内に押引き刺突文を施す。4は貝殻条痕に沈線文を施し、刺突文を加える。5は外面に貝殻条痕文、内面に擦痕調整を施すが、楕円形を呈し、周縁部を打ち欠いた土器円盤の可能性がある。

早期後半、野島式〜鵜ヶ島台式期の所産と考えられる。

土坑 1853 号 （Fig.52）

EJ−91に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整方形を呈し、規模は1.33×1.15m、確認面からの深さは0.11mを測る。主軸方位はN−59°−Wである。

調査図面には遺物の出土が記載され、「鵜ヶ島台」のメモ書きが残るが、該当する遺物を確認することができなかった。早期後半、鵜ヶ島台式期の可能性があるが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

土坑 1854 号 （Fig.53、PL.101）

DJ−02を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整形を呈し、数基の重複や炉穴の可能性が考えられるが、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。また、底面に段差や小柱穴状の掘り込みをもち、風倒木などの撹乱の可能性もある。規模は1.97×1.11m、確認面からの深さは0.17mを測る。

実測可能遺物は、1は平底部破片、2・3は口縁部破片、4は胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含む。2は斜格子状に沈線文を施し、交点の一部に押引き刺突を加える。3は内外面ともに、口縁部にナデ、胴部に貝殻条痕文を施し、口唇部にキザミを加える。4は帯状の沈線区画内に集合沈線文を施す。

早期後半、鵜ヶ島台式期の所産と考えられる。

土坑 1855 号 （Fig.53、PL.101）

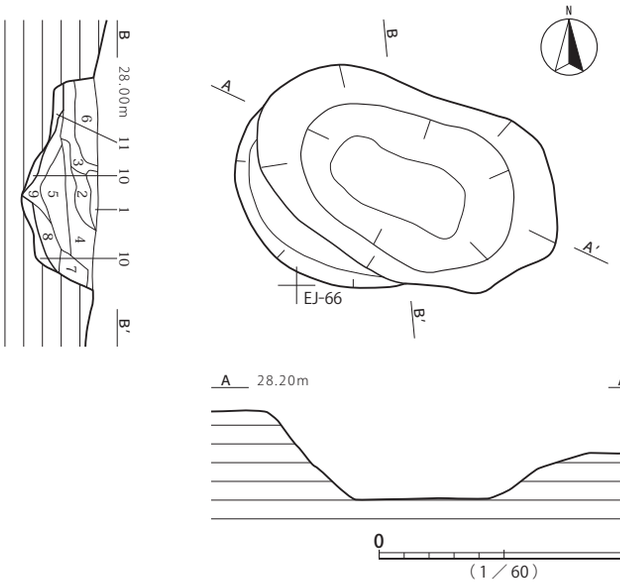
EJ−93に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整形を呈し、数基の重複や炉穴の可能性が考えられるが、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。規模は1.48×0.72m、確認面からの深さは0.17mを測る。主軸方位はN−39°−Wである。

実測可能遺物は1の胴部破片のみである。胎土に繊維を含み、外面に貝殻条痕文、内面に擦痕調整を施す。

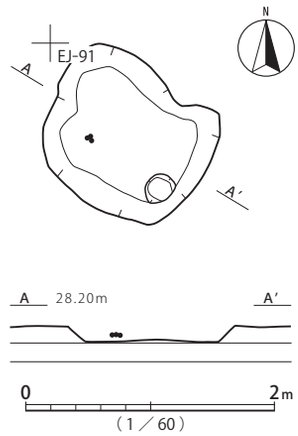
早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

土坑 1218号

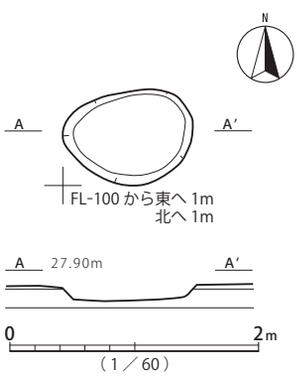


1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。しまり強い。
2 黒褐色土
3 黒褐色土 褐色土を少量含む。
4 暗褐色土 黒褐色土を含む。
5 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
6 暗褐色土 褐色土を少量含む。
7 暗褐色土 褐色土を多量に含む。
8 黒褐色土 暗褐色土を含む。
9 暗褐色土
10 褐色土 暗褐色土を含む。
11 褐色土 暗褐色土を少量含む。

土坑 1853号



土坑 1244号



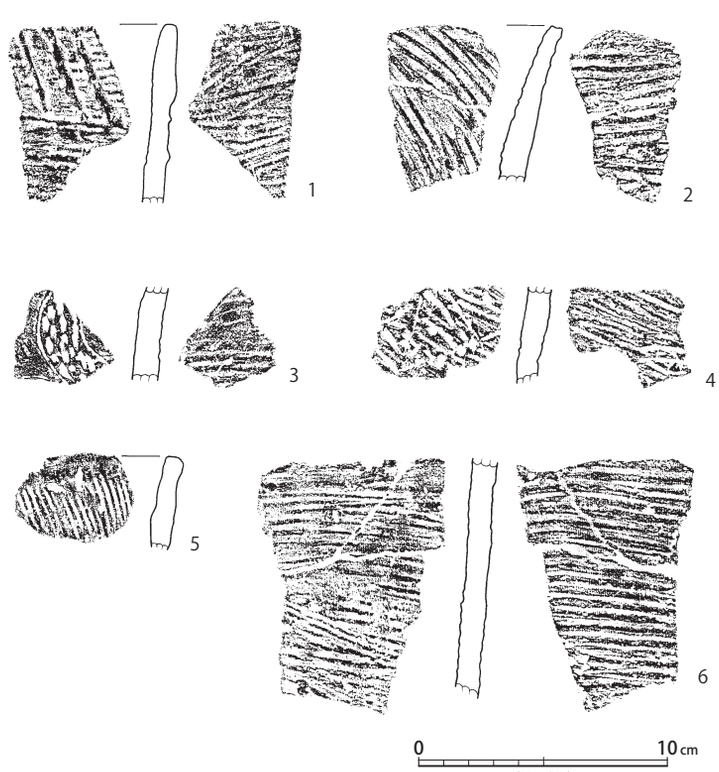
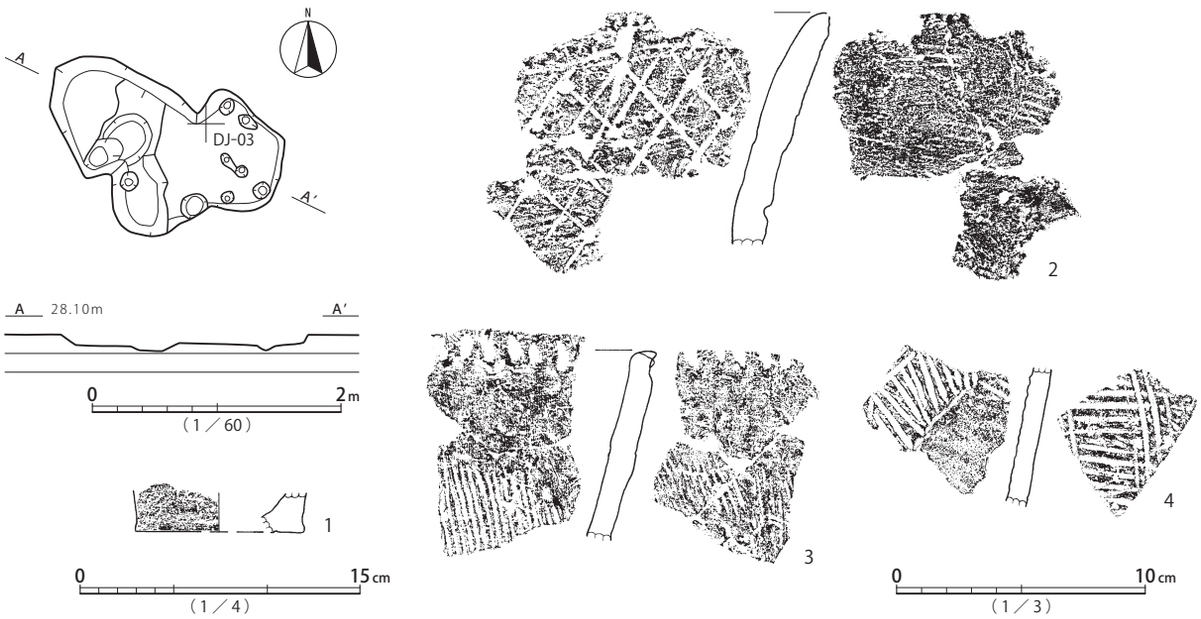
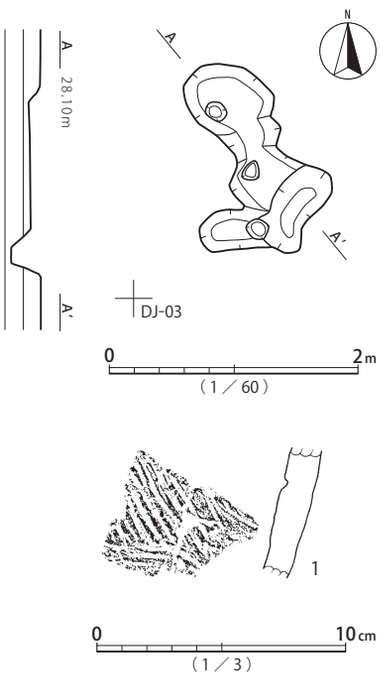


Fig.52 土坑1218号 遺構、土坑1244号 遺構遺物、土坑1853号 遺構

土坑 1854号



土坑 1855号



土坑 1856号

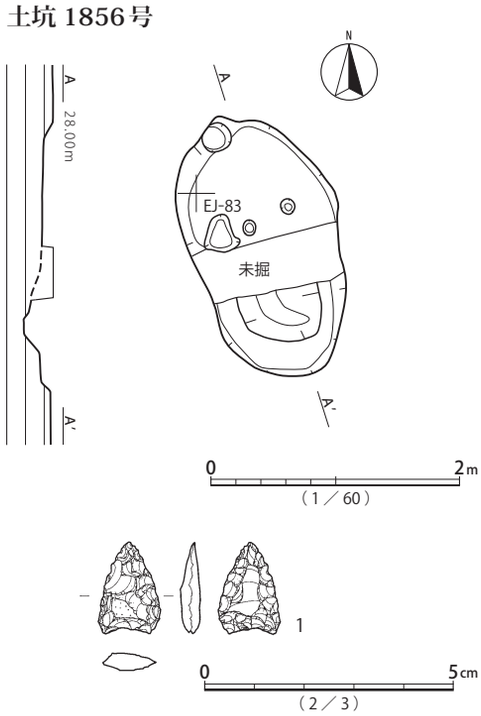


Fig.53　土坑1854号 遺構遺物、土坑1855号 遺構遺物、土坑1856号 遺構遺物

土坑1856号　（Fig.53、PL.132）

EJ−83に位置する。他遺構との重複はないが、遺構中央は未掘のままとなっている。

平面形態は長楕円形を呈し、南側に浅い掘り込みをもつ。規模は2.09×1.26m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位はN−28°−Wである。

実測可能遺物は、1のチャート製の無茎石鏃のみである。このほか、実測に至らない貝殻条痕文や

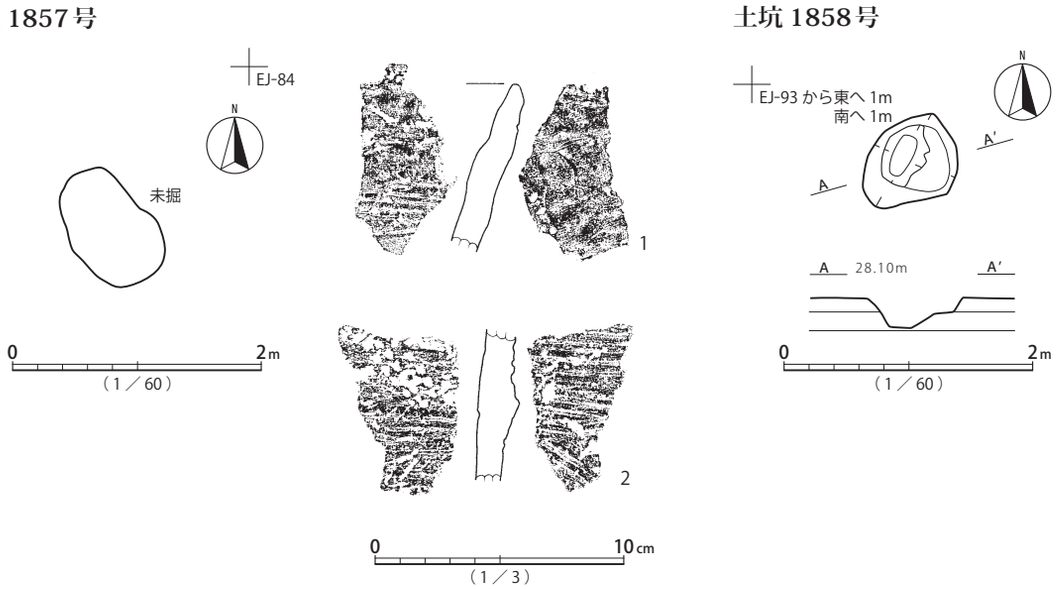


Fig.54　土坑1857号 遺構遺物、土坑1858号 遺構

擦痕調整を施す土器細片が出土しており、早期後半の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

土坑1857号　（Fig.54・PL.101）

EJ−83に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は長楕円形を呈すが、遺構確認段階の図面しか残されておらず、詳細は不明である。確認面における規模は1.01×0.65mを測る。主軸方位はN−37°−Wである。

実測可能遺物は、1は口縁部破片、2は胴部破片で、いずれも胎土に繊維を含み、貝殻条痕を地文とする。1は外削ぎ状の口唇部をもち、内面にはナデ調整を施す。2はくの字状の段部をもち、帯状の押引き刺突文に円形刺突文を加える。

早期後半、鵜ヶ島台式〜茅山下層式期の所産と考えられる。

土坑1858号　（Fig.54）

EJ−93に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は楕円形を呈し、規模は0.78×0.64m、確認面からの深さは0.26mを測る。

周囲に早期後半の遺構が集中することから縄文時代の所産と判断したが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

セ116・117地区

土坑1882号　（Fig.55）

LH−16に位置する。セ116調査区の南側から検出され、南東側で竪穴1778号と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が1778号よりも古い。

平面形態は円形ないし楕円形を呈すと思われるが、北側の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。

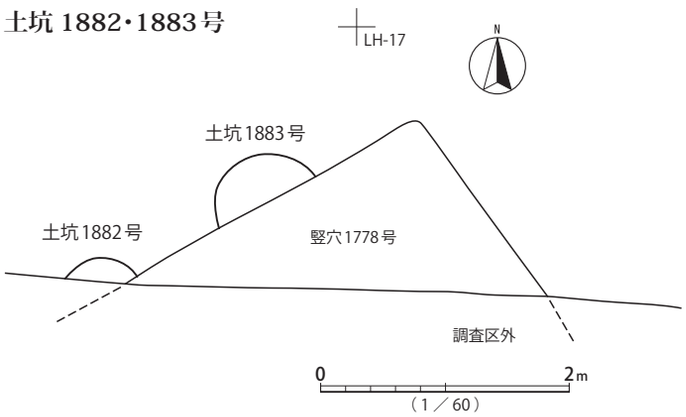


Fig.55　土坑1882号 遺構、土坑1883号 遺構

弥生～古墳時代の竪穴建物に切られることから、縄文時代の遺構と判断したが、出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

土坑1883号　（Fig.55）

LH−16に位置する。セ116調査区の南側から検出され、南東側で竪穴1778号と重複する。新旧関係は、本遺構が1778号よりも古い。

平面形態は円形ないし楕円形を呈すと思われるが、北西側の半分程度が検出されたのみで、詳細は不明である。

弥生～古墳時代の竪穴建物に切られることから、縄文時代の遺構と判断したが、出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

第３節　遺構外出土の遺物

（1）　土　器

210,954gが出土し、このうち時期が特定できたのは147,815gで、全体量の70%に相当する。早期中葉から後期中葉までの土器が確認されたが、最も多いのは早期で、113,597gを測り、77%を占める。後半期の条痕文土器が主体である。これに次ぐのが中期で、23,862gを測り、16%である。後半期の加曽利E式が主体である。このほか、後期が6.5%、前期が0.5%となっており、後期は初頭の称名寺式から中葉の加曽利B式があり、前期は後半期の浮島式が主体である。

Fig.67～70は、各時期の土器出土量を大グリッドごとにまとめ、分布状況を示したものである。早期は殿屋敷地区GHグリッドの8,337gが最も多く、近接するFH・FIグリッド、南辺部のEIグリッドを合わせると17,902gとなる。このほか、西辺部SHグリッドで7,677g、東南部のGNグリッドで7,441g出土しており、炉穴の分布に対応した状況が認められる。前期は北辺部SOグリッド周辺の限られた範囲に集中する。中期は北辺部PMグリッドで3,165g、西辺部LGグリッドで2,136g、東南部EPグリッドで2,132g、東辺部NOグリッドで2,149g出土しており、部分的に集中する地点が認められる。なお、殿屋敷地区GH−94からは、加曽利EIV式期の埋甕が２基（土坑0614・0615号）検出されている。後期は東南部HNグリッドと隣接するGNグリッドで、それぞれ1,332gと957g、南辺部

のELグリッドで734g出土しており、遺跡南東側に集中する傾向が認められる。

以下、調査区ごとに出土遺物の記載を行う。

北辺部（Fig.56、PL.101）

1は早期中葉、沈線文土器である。爪形のキザミを加えた隆帯で区画文を施す。田戸上層式であろう。

2・3は早期後半、条痕文土器である。2はわずかに外反する口縁部をもち、縦位と梯子状の細隆起線区画文を施したのち、細隆起線に沿って赤彩を加える。野島式である。3は胎土に繊維を含み、貝殻条痕文ののち、竹管による刺突文を巡らす。

4～11は前期中葉、黒浜式である。いずれも胎土に多量の繊維を含む。4は口縁部に斜位と横位の貝殻腹縁文を施す。5・6は5本ひと組の櫛描文が施され、同一個体である。5は小突起状の波状口縁を呈し、口縁部下に櫛描横線文を巡らせ、胴部には櫛描波状文を施す。7は押引き沈線文を2条巡らせ、平行沈線を垂下させたのち、区画内に斜行沈線文を充填する。8・9も同一個体で、9は頸部が強くくびれる。ゆるい単節縄文ののち平行沈線を巡らせ、沈線内に爪形文を加える。11は押引き沈線文と波状の平行沈線文を巡らす。

12～14は前期後半から末葉の土器である。12は半截竹管による波状文と押引き沈線文を施す。11と同様の文様構成をとるが、胎土に繊維を含まないことから、諸磯a式と思われる。13はまばらな撚糸文を地文に、平行沈線によるくずれた山形文と横位の爪形文を施す。浮島式であろう。14は口縁部に条線文と指頭状押捺による凹凸文を施し、口縁端部にはキザミを加える。興津式であろう。

15は中期後半、加曽利E式である。波状口縁を呈し、太沈線による楕円形区画内に単節縄文を施す。加曽利EII式であろう。

16～18は後期前葉、堀之内式である。16は浅鉢形土器で、くびれる頸部に太沈線を巡らせ、胴部は単節縄文ののち沈線による曲線文を施す。堀之内1式である。17・18は同一個体で、細かい単節縄文ののち沈線文を施し、沈線間を磨り消す。堀之内1式の浅鉢形土器と思われる。

19～23は後期中葉、曽谷式である。19～21は精製土器で、19は深鉢形、20・21は浅鉢形土器である。19・20は口縁部下に平行沈線を巡らせ、単節縄文ののち、19は上向き、20は下向きの弧線文を施す。21は口縁部にノの字状の小突起を貼り付けたのち、沈線を巡らす。22・23は粗製深鉢形土器で、横位の条線文を施す。22は口縁部に2条の刺突列を巡らせ、23は押捺を加える粘土紐を貼り付ける。23の口縁部内面には、浅い沈線が巡る。

西辺部（Fig.57～59、PL.101・102）

2は早期前半、撚糸文土器である。肥厚する口唇部をもち、撚糸文ないし無節縄文が施される。

3は早期中葉、沈線文土器である。口縁端部は面取りされ、平行太沈線文に貝殻腹縁文を加える。田戸下層式であろう。

1・4～27は早期後半、条痕文土器である。ほとんどの個体が胎土に繊維を含む。1はゆるい波状口縁を呈し、波頂部から細隆起線を垂下させ、口縁部に巡るキザミを加えた細隆起線と連結させる。4は擦痕調整ののち、押引き沈線文を施す。6～17は細隆起線ないし細沈線で、梯子状や襷状の区画文を施す。襷状区画文には集合沈線が充填され、口縁端部には斜位のキザミを加えるものが多い。7は

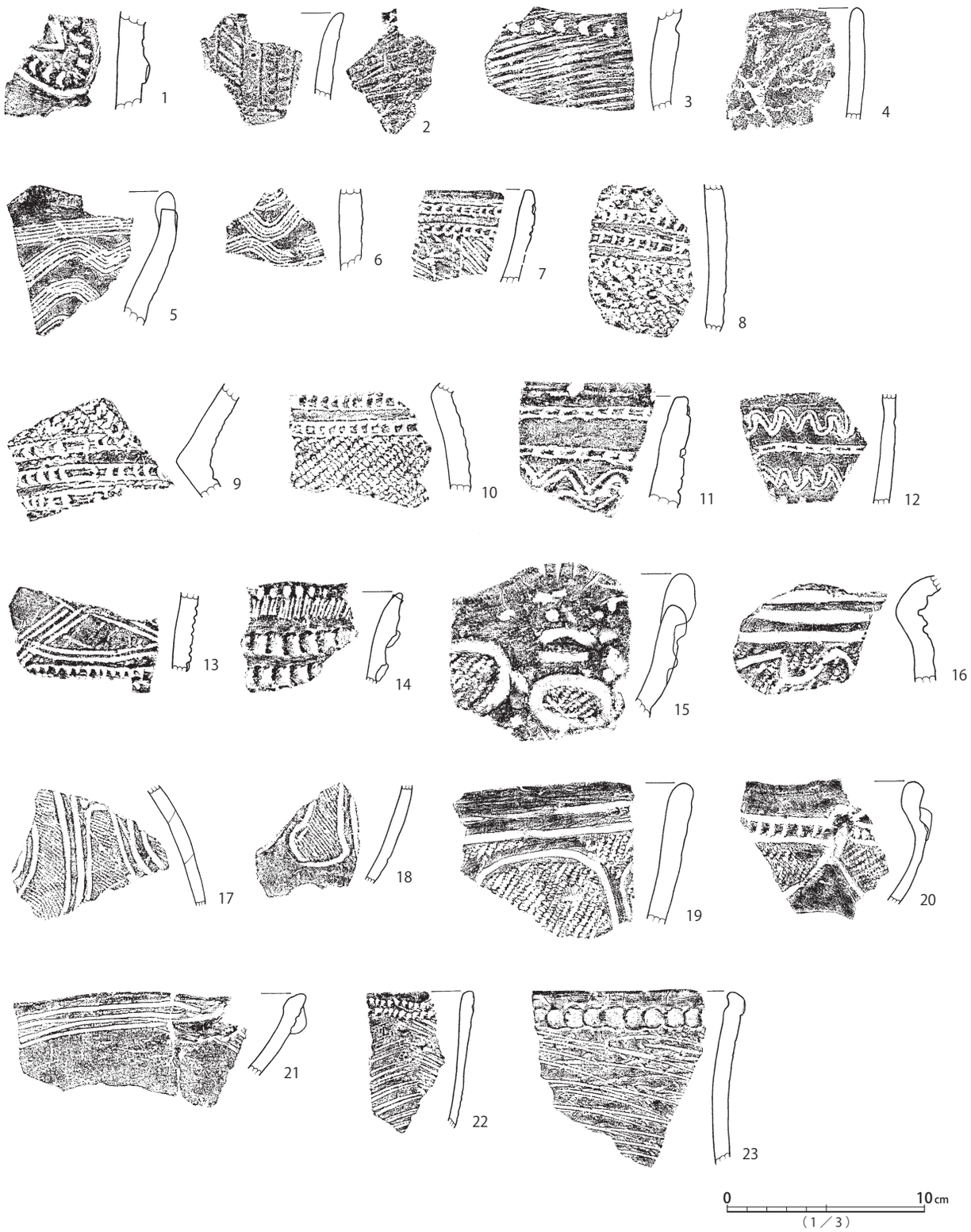


Fig.56　遺構外出土縄文土器 北辺部

細隆起線が口縁端部まで施される。15は波頂部から垂下させたと思われる斜方向のキザミを加える平行隆帯と細隆起線を組み合わせる。18～20・22は口縁端部が内削ぎ気味となり、18・22はくの字状の段部をもつ。18は口縁端部両側と段部にキザミが加えられる。19は平行沈線を斜行させ、区画内に集合沈線を充填する。口縁端部には貝殻腹縁によると思われるキザミを加える。20は沈線区画の交点に円形刺突文を加える。23は段部の上に平行沈線文、下に押引き刺突文を施す。26は尖底部である。1は子母口式ないし野島式、6～17は野島式、18・20は鵜ヶ島台式であろう。

28は外削ぎ状の口唇部をもち、粗い撚糸文が施される。胎土に繊維を少量含み、早期後半の所産であろうか。

29～31は前期末葉の土器である。29は貝殻腹縁文を平行沈線で区画し、区画外を磨り消す。興津式である。30・31は同一個体で、折返し状の肥厚する口縁部をもつ。単節縄文原体の圧痕文を巡らせ、単節縄文を地文に、押引き刺突文による三角形の意匠を加える。茨城県稲敷郡美浦村興津貝塚や茨城県取手市向山貝塚など、利根川下流域で類例が認められ、興津式土器に共伴する（西村1984）。

32～48は中期後半、加曽利E式である。32・33は波状口縁を呈し、33は波頂部に沈線による渦巻文を施す。加曽利EI式であろう。34～38は太沈線による渦巻文と楕円形区画文を施す。加曽利EII式である。39は複節縄文、40は撚糸文を地文とし、口縁部に太沈線を巡らせ、沈線間に2条の刺突列を加える。41も同様の文様構成で、いずれも連弧文系土器であろう。42・43は縦位の沈線文ののち隆帯を垂下させる。曽利系土器である。

49・50は縦位の条線文が施され、49は尖頭状の口唇部をもつ。中期後半の所産であろうか。

51は後期初頭、称名寺1式である。太い隆帯と沈線で、J字状の意匠を表す。

52～54は後期前葉、堀之内1式である。52・53は単節縄文を地文に蛇行沈線を垂下させる。54はまばらな条線文が施される。

55は後期中葉、加曽利B3式である。単節縄文ののち、波状の口縁部に沿って沈線を巡らせ、キザミを加える。

殿屋敷地区　（Fig.60、PL.103）

1は早期前半、撚糸文土器で、口唇部がわずかに肥厚する。2は擦痕を残す無文土器で、胎土に繊維を含み、早期後半の所産と思われる。

3～14・21・22は早期後半、条痕文土器で、3以外は胎土に繊維を含む。3・4は細隆起線による区画文に集合沈線を充填する。3の口縁端部には細く鋭い斜方向のキザミが施される。いずれも野島式である。5・7～9はくの字状の段部をもつ。5は内削ぎ状の口唇部をもち、口唇部外面と段部にキザミを加える。押引き沈線による三角形区画内に押引き刺突文を充填する。6・7は沈線、8は細隆起線による襷状文を施し、6は集合沈線、押引き刺突文を区画内に充填する。また、6は区画交点、8は隆起線上に円形刺突を加える。9は半截竹管による平行押引き刺突で区画文を表し、円形刺突を加える。5～8は鵜ヶ島台式、9は鵜ヶ島台式ないし茅山下層式であろう。21は尖底、22は平底である。

16は前期後半、浮島式である。口縁部に縦位の貝殻腹縁文を施す。

17～19は中期末葉、加曽利EIV式である。微隆起線で口縁部無文帯と胴部磨消懸垂文を区画する。

20は後期中葉、加曽利B式の精製浅鉢である。単節縄文ののち、体部下端に沈線を巡らす。

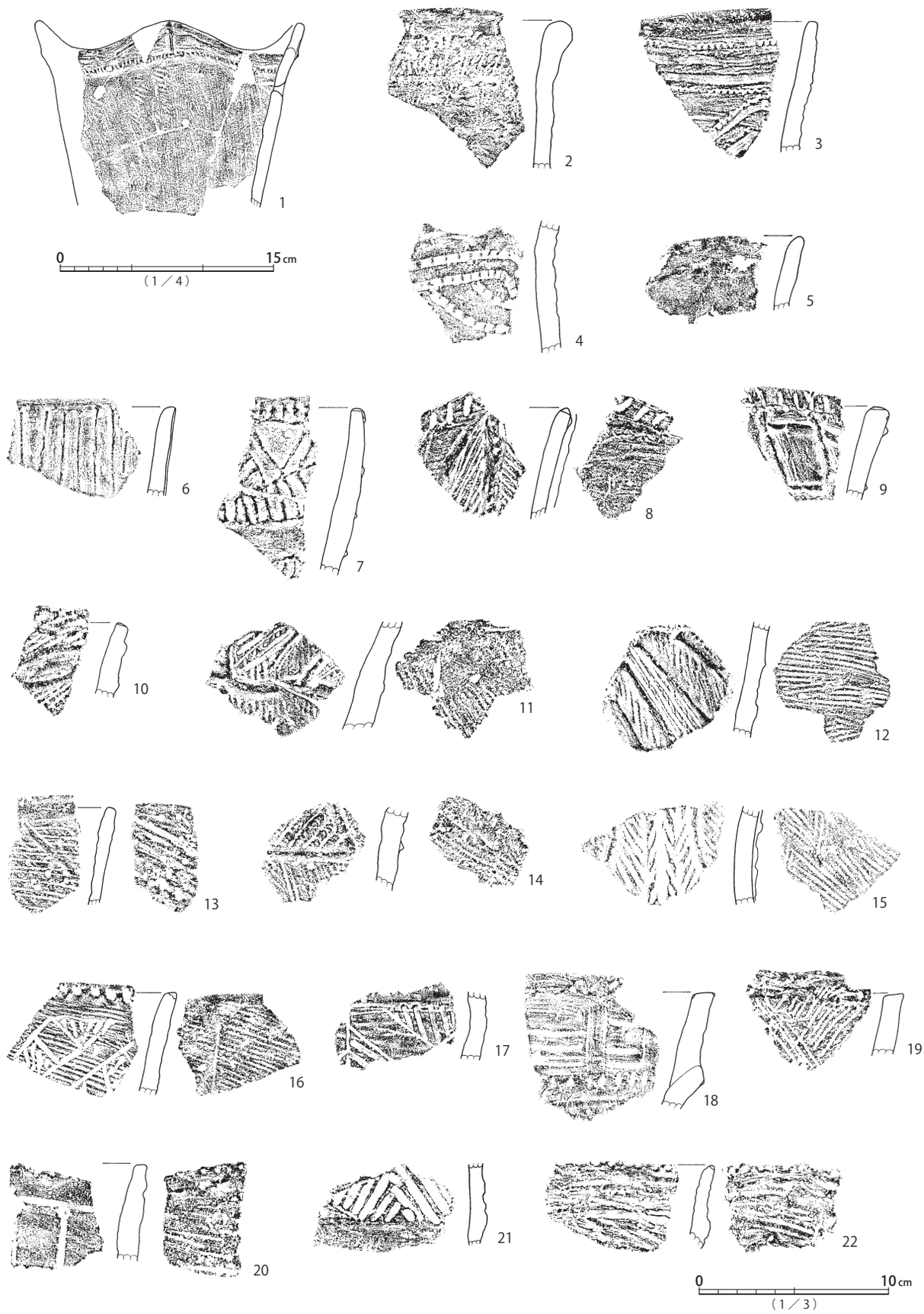


Fig.57　遺構外出土縄文土器 西辺部(1)

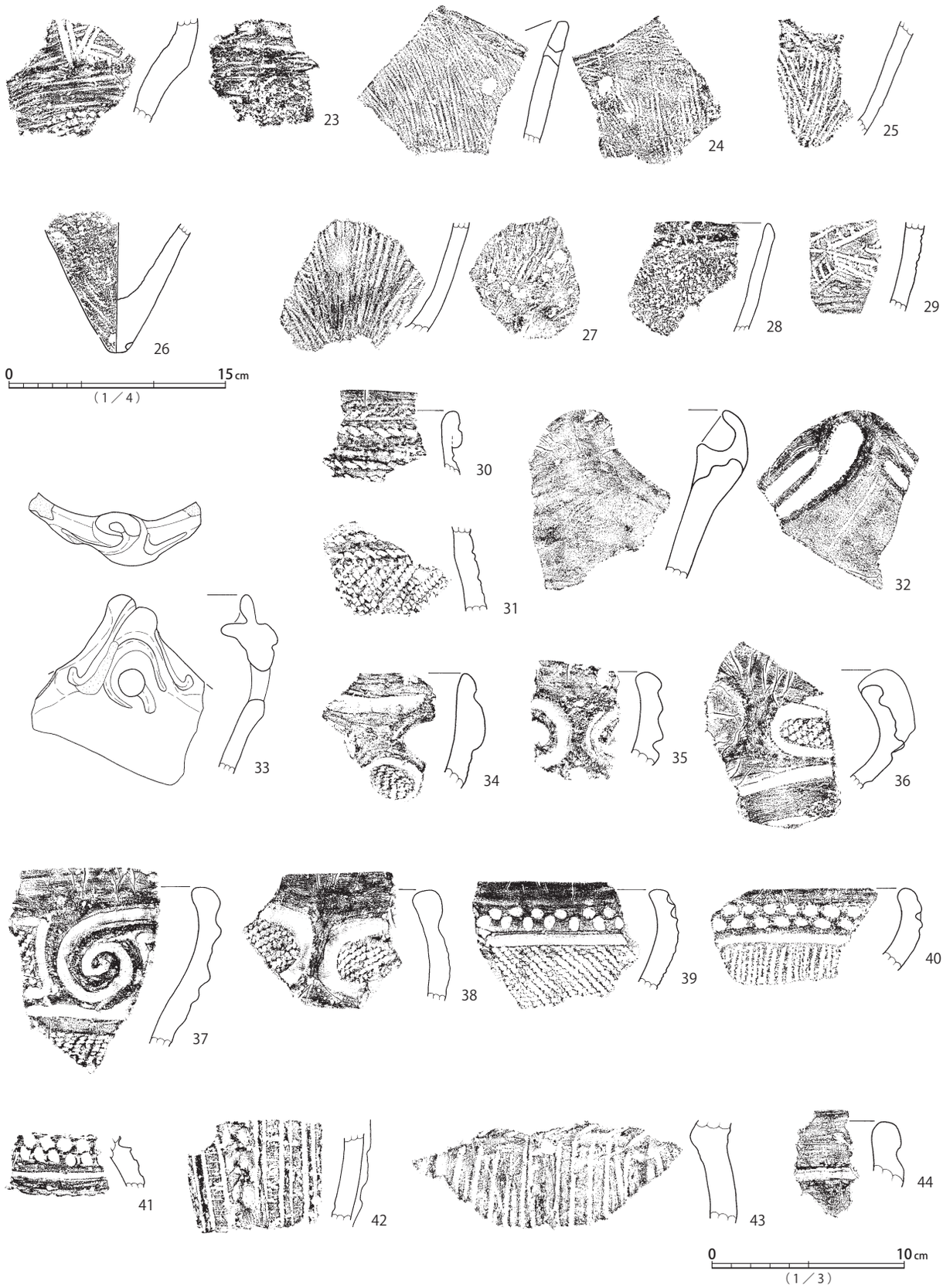


Fig.58　遺構外出土縄文土器 西辺部(2)

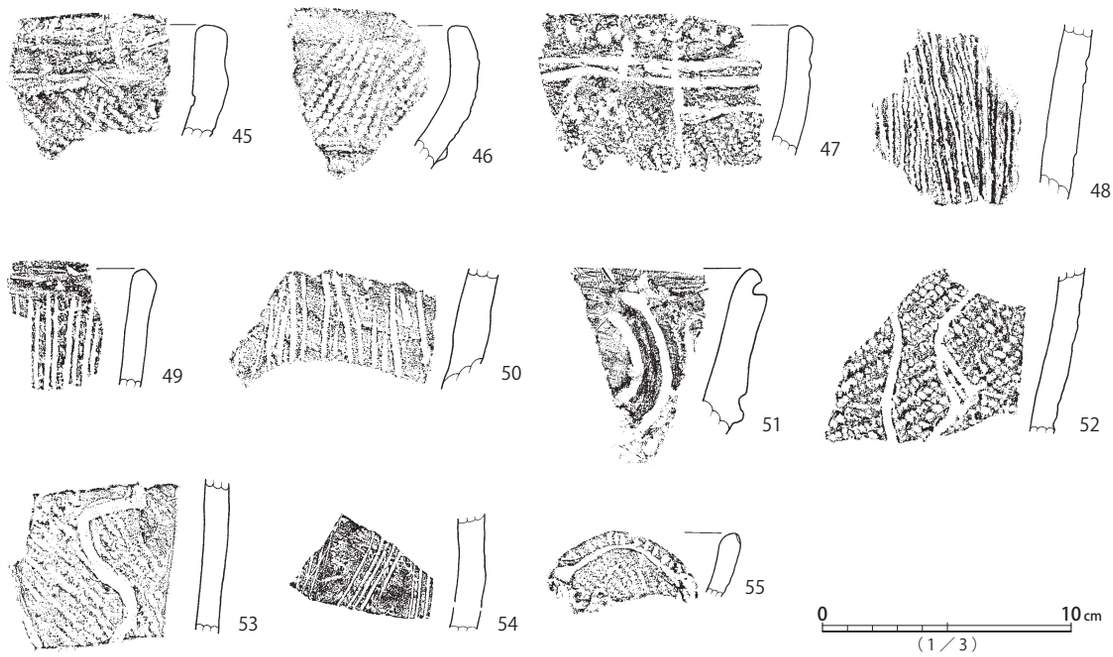


Fig.59　遺構外出土縄文土器 西辺部(3)

23は時期不明の平底部である。

東南部　（Fig.61、PL.103）

1・5は早期後半、条痕文土器である。1は擦痕を地文に、細隆起線による意匠を施す。野島式である。5は尖底部である。

2は中期後半、加曽利EII式である。太沈線による渦巻文と長楕円形区画文を施し、区画内に単節縄文を加える。

3・4は後期前葉、堀之内式である。3は弱い波状口縁を呈し、単節縄文を地文に太沈線による蕨手文と懸垂文を施す。堀之内1式である。4は口縁部に刺突列を巡らせ、破損する把手部の下に8の字状貼付文を施す。堀之内2式である。

南辺部　（Fig.62～64、PL.103・104）

1は単節縄文を施し、早期前半と思われる。

2～44は早期後半、条痕文土器である。2～7・9は細隆起線による襷状と梯子状区画文を施し、2・3を除き、区画内に集合沈線を充填する。8は繊維痕を残す平行太沈線を施し、区画内に集合沈線を充填する。10は擦痕調整ののち、弧状の集合沈線文を施す。11・12は同一個体で、口縁端部に弱いキザミを施し、斜格子状沈線文の交点に円形刺突文を加える。13～17は押引き沈線文に円形刺突文を加える。14・17は同一個体で、くびれ部に円形刺突文を施す。18も同一個体と思われる。21は太沈線による半円形区画内に押引き沈線文を充填し、交点に円形刺突文を加える。22は沈線区画内に集合沈線文を施し、無文帯に円形刺突文を加える。23・24は斜行沈線区画文を施し、23は区画内に押引き沈線文、24は区画内に太沈線文を充填する。2～9は野島式、10～21は鵜ヶ島台式である。

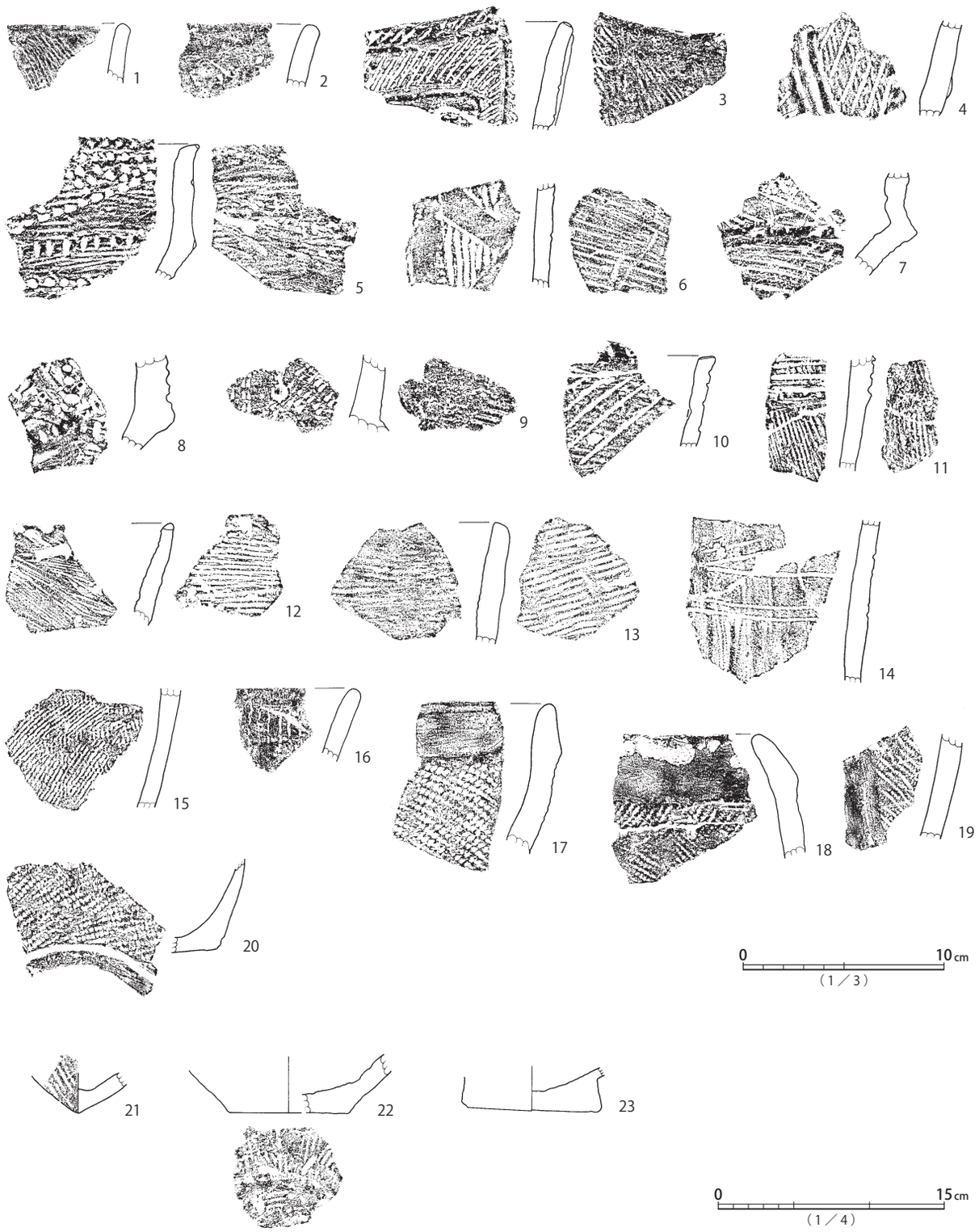


Fig.60　遺構外出土縄文土器 殿屋敷地区

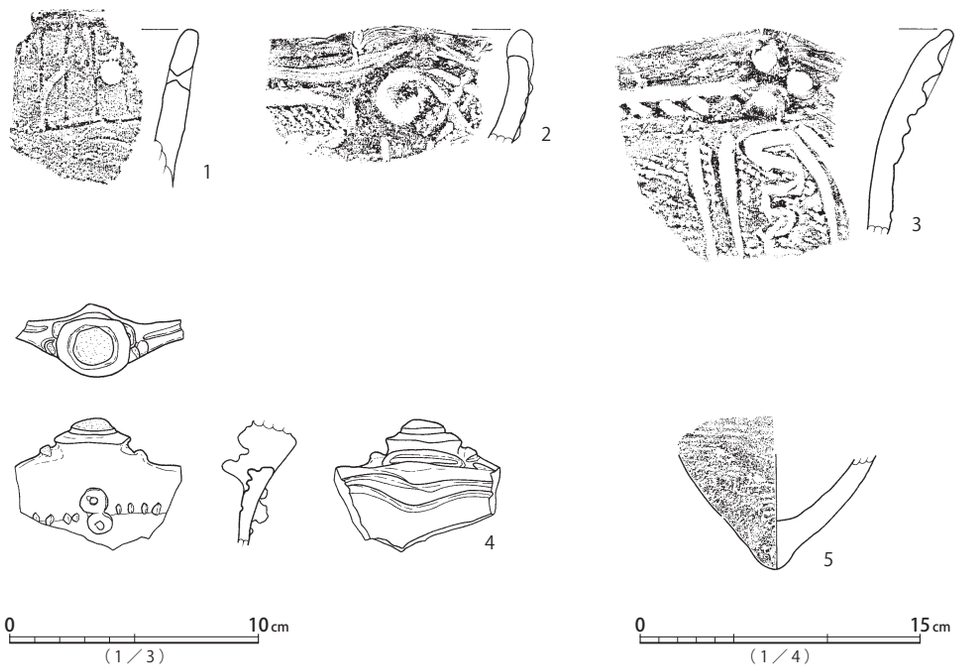


Fig.61　遺構外出土縄文土器 東南部

22～24は鵜ヶ島台式ないし茅山下層式であろう。

45～51は擦痕を残す無文土器で、胎土に繊維を含み、早期後半の所産と思われる。

52・53は中期後半、加曽利E式である。52は単節縄文ののち幅広の磨消懸垂文を施し、加曽利EIIIないしEIV式、53は微隆起線文で口縁部無文帯を区画し、中期末葉の加曽利EIV式であろう。

54～61は後期初頭、称名寺式である。54～60は単節縄文ののち太沈線区画文を施し、区画外を磨り消す。称名寺1式である。61は沈線区画内に列点文を施す。称名寺2式である。

62は後期前葉、堀之内1式で、3条の太沈線を垂下させる。

63～72は後期中葉、加曽利B式である。63～68は精製深鉢形土器で、63・65は肥厚する波頂部をもつ。口縁部に沿って沈線や刺突文を巡らせ、口縁部文様帯には63は条線文、64～67は単節縄文を施す。68はくびれ部に刺突を加える平行沈線を巡らせ、胴部には上向き弧線文を施す。69は精製浅鉢形土器で、体部単節縄文ののち、口縁部に刺突を加える平行沈線を施す。70～72は粗製深鉢形土器で、ゆるい縄文を地文に条線文を施す。71は胴部に指頭押捺を加えた紐線文を貼り付け、紐線の上は横位、下は斜位の条線文とする。63は加曽利B2式、64～69は加曽利B3式である。

73～75は平底部で、73・74は胎土に繊維を含み、早期後半の所産と思われる。

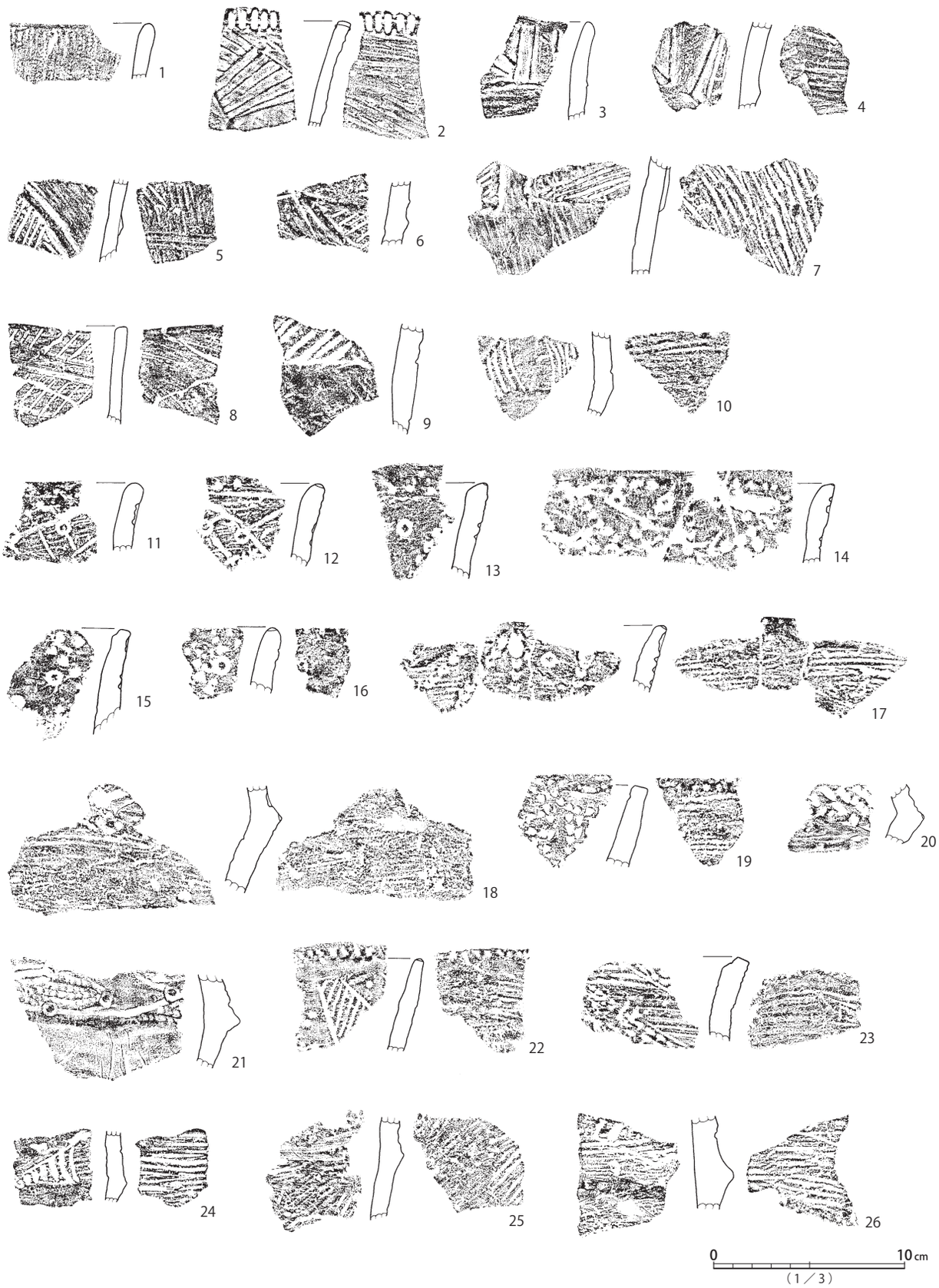


Fig.62　遺構外出土縄文土器 南辺部(1)

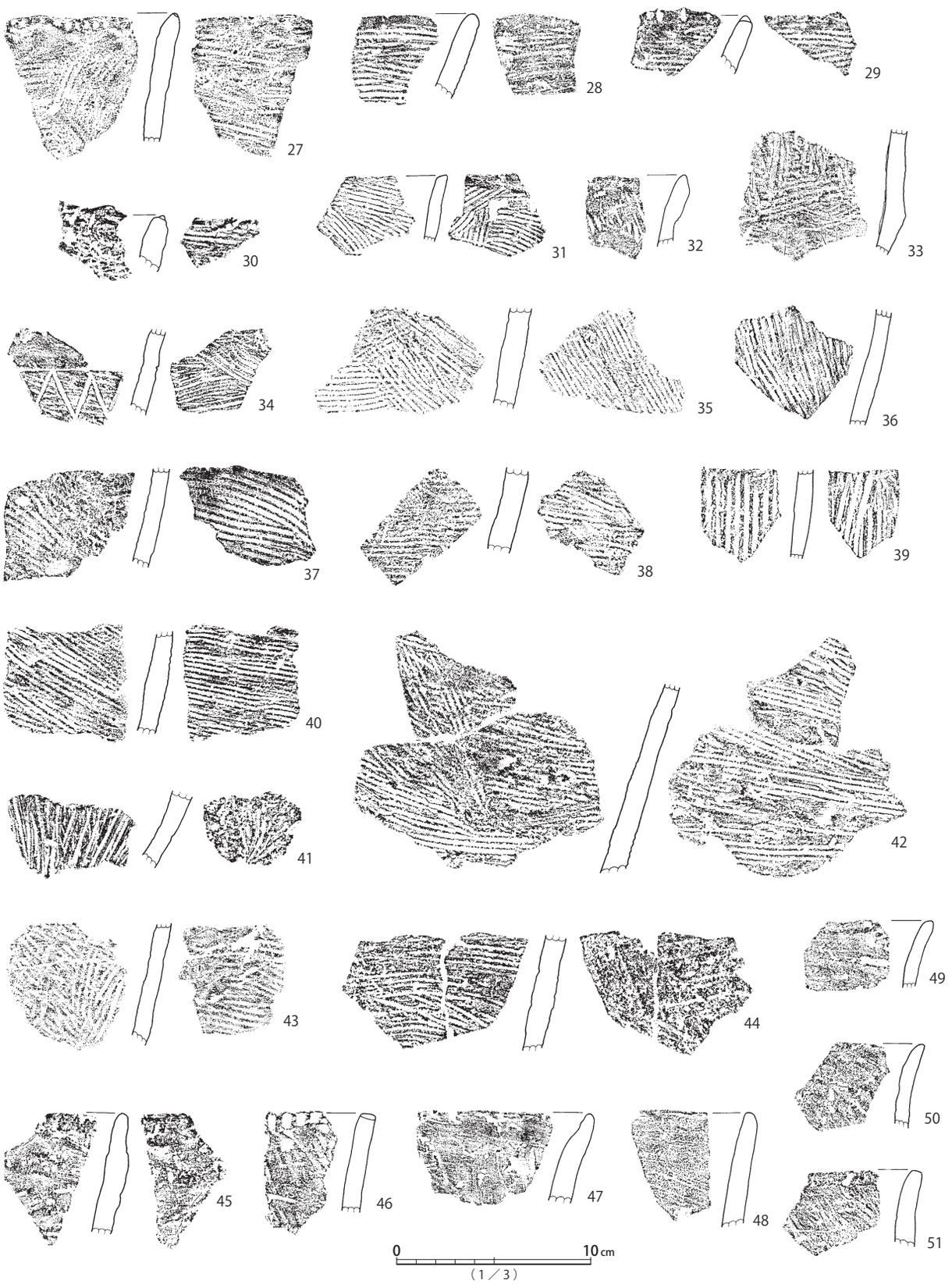


Fig.63　遺構外出土縄文土器 南辺部(2)

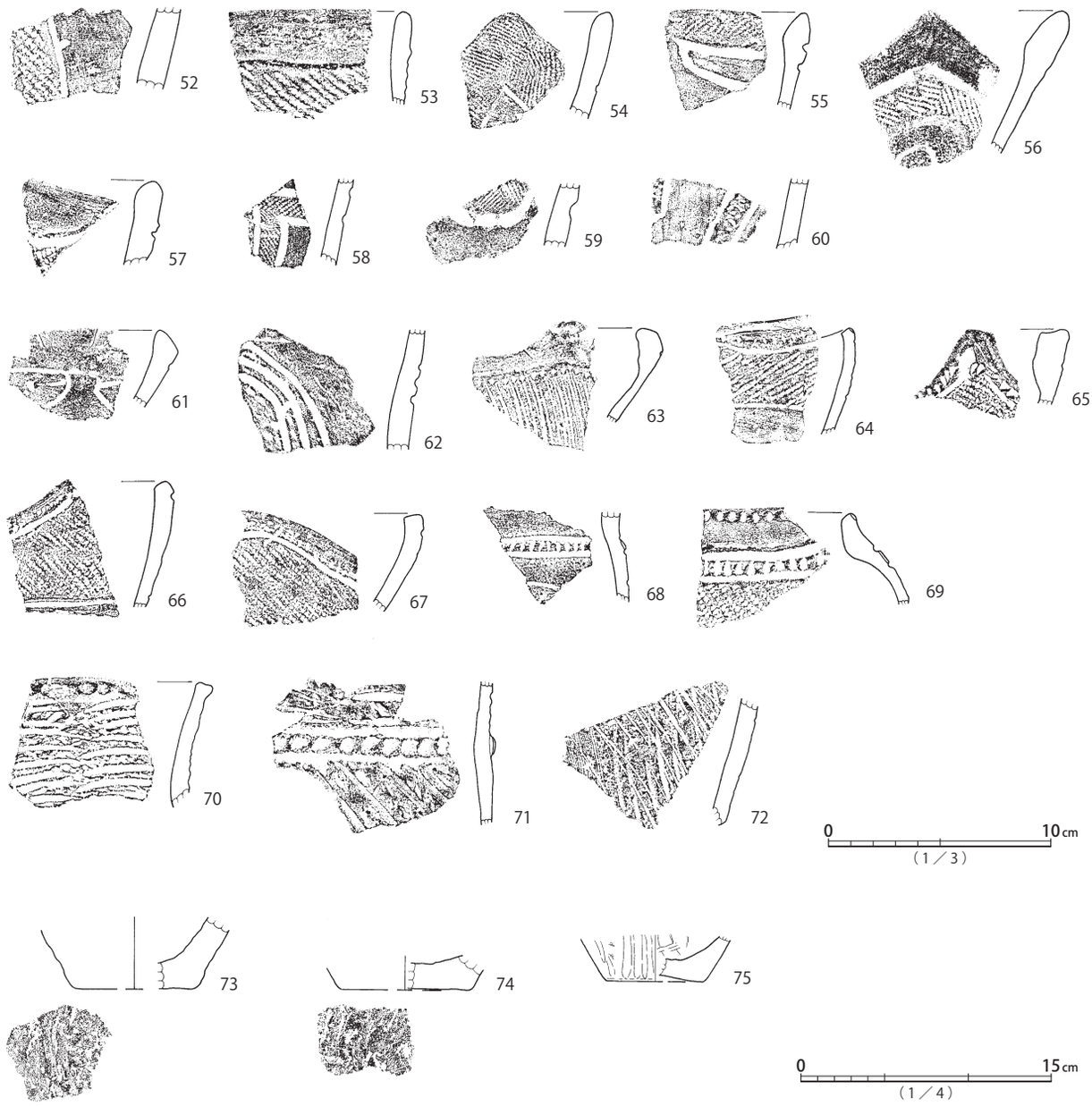


Fig.64　遺構外出土縄文土器 南辺部(3)

（2）　土製品

1　土器片錘　（Fig.65、PL.141・142）

土器片を打ち欠いて楕円形ないし方形に整え、軸の端部に切り込みを施す。打欠き後に周縁に研磨を施す個体も多い。26点が検出され、1～9は北辺部、10～14は西辺部、15～19は東南部、20～22は南辺部、23～25は東辺部、26はセ118地区からの出土である。

1・17・21・26は早期後半の条痕文系、2・5・6・10・15・18・23～25は中期後半の加曽利E式、19は後期初頭の称名寺1式の土器を素材とする。これ以外は特徴を示す文様がなく、帰属時期が明確でないが、中期後半のものが多く含まれると考えられる。

土器片錘

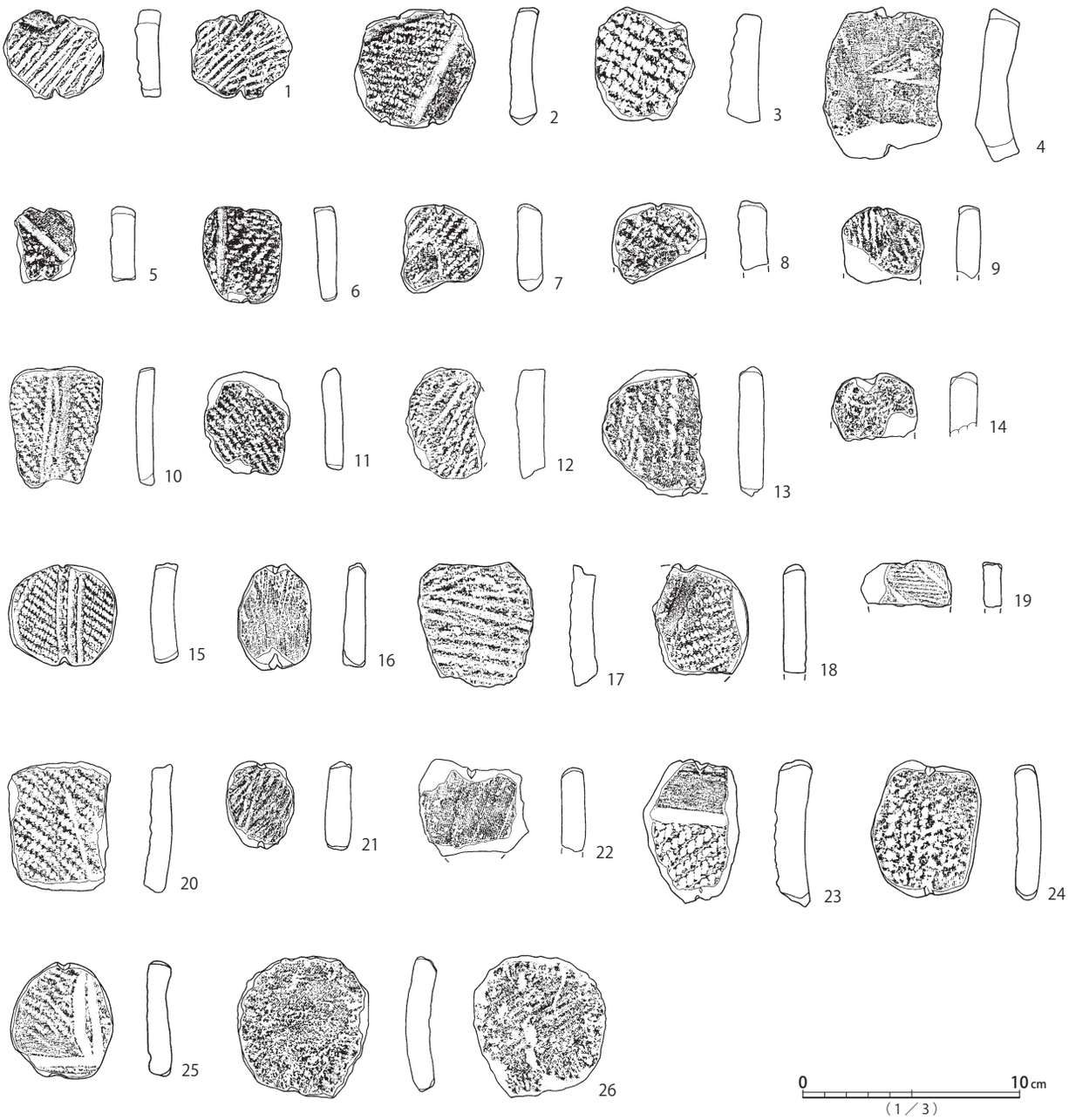


Fig.65　遺構外出土縄文時代 土製品(1)

2　土器円盤　（Fig.66、PL.142）

土器片を打ち欠いて、円形に整えたものである。6のみ打欠き後に周縁を研磨した痕跡が認められるが、これ以外はすべて打欠いたままである。9点が検出され、1は北辺部、2～5は東南部、6～9は南辺部からの出土である。

1は単節縄文、2・5・8は貝殻条痕文、3・4・6・7・9は擦痕文を地文とする。このうち3には押引き沈線文が認められ、鵜ヶ島台式ないし茅山下層式の所産と思われる。これ以外は特徴を示す文様がなく、帰属時期が明確でないが、ほとんどの個体が胎土に繊維を含むことから、早期後半の所産と考えられる。

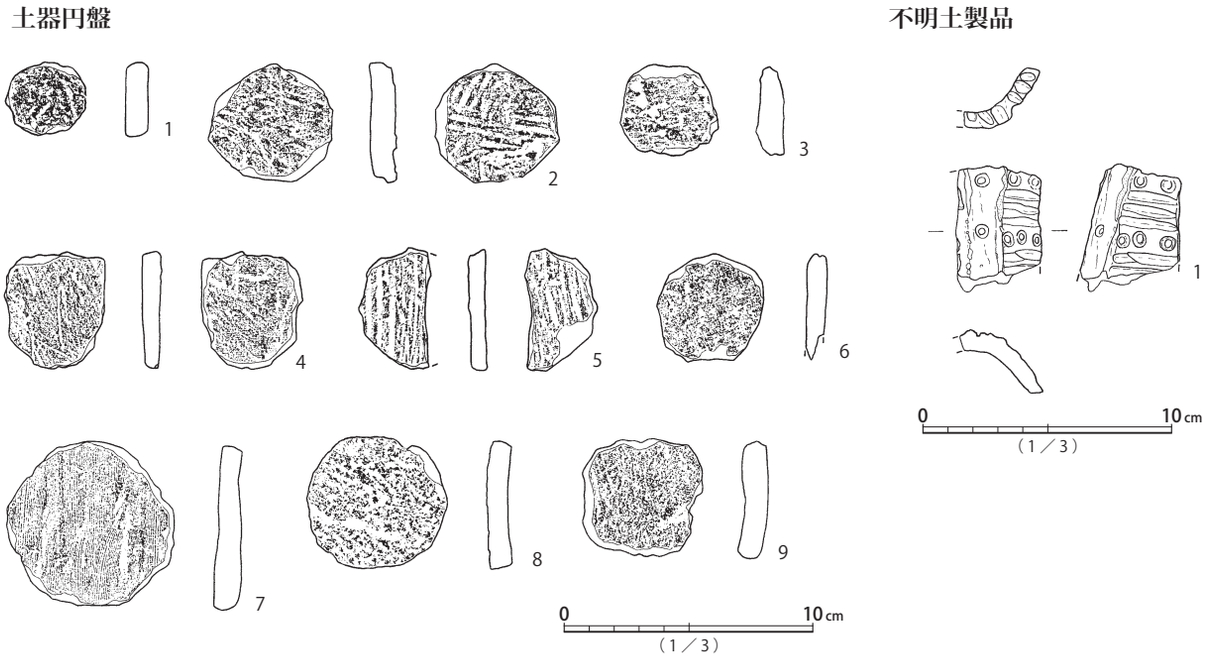


Fig.66　遺構外出土縄文時代 土製品(2)

3　不明土製品　（Fig.66、PL.142）

東南部のHP−43グリッドから検出された。

端部2面が残存し、半円筒形を呈すものと思われる。表面は、長軸方向に平行する細隆起線を貼り付け、短軸方向に円形刺突列と3条の沈線を交互に巡らす。また、短軸端部には幅広のキザミが施される。裏面は無文で、胎土に繊維を含む。

早期後半、鵜ヶ島台式の所産であろうか。

（3）　礫

加工痕が認められない礫で、遺跡全体で487,364gが検出されている。大きさは砂利程度のものから握りこぶし大のものまでさまざまである。

Fig.71は大グリッドごとに出土量をまとめ、分布状況を示したものである。地区別では東南部の194,985gが最も多く、全体量の40%を占める。グリッド別では、同じく東南部のGNグリッドが46,062gで最も多く、全体量の9.5%を占める。このほか10,000gを超えるグリッドをあげると、北辺部RLグリッドの12,564g、東南部EOグリッドの12,339g・FNグリッドの18,319g・FOグリッドの17,140g・GOグリッドの16,897g、南辺部HKグリッドの18,017g・HLグリッドの12,350gとなっている。

被熱し、赤色化・灰色化・黒色化するものが319,564g含まれ、その比率は全体量の65.6%に相当する。遺跡から多数検出されている炉穴との関連が考えられる。

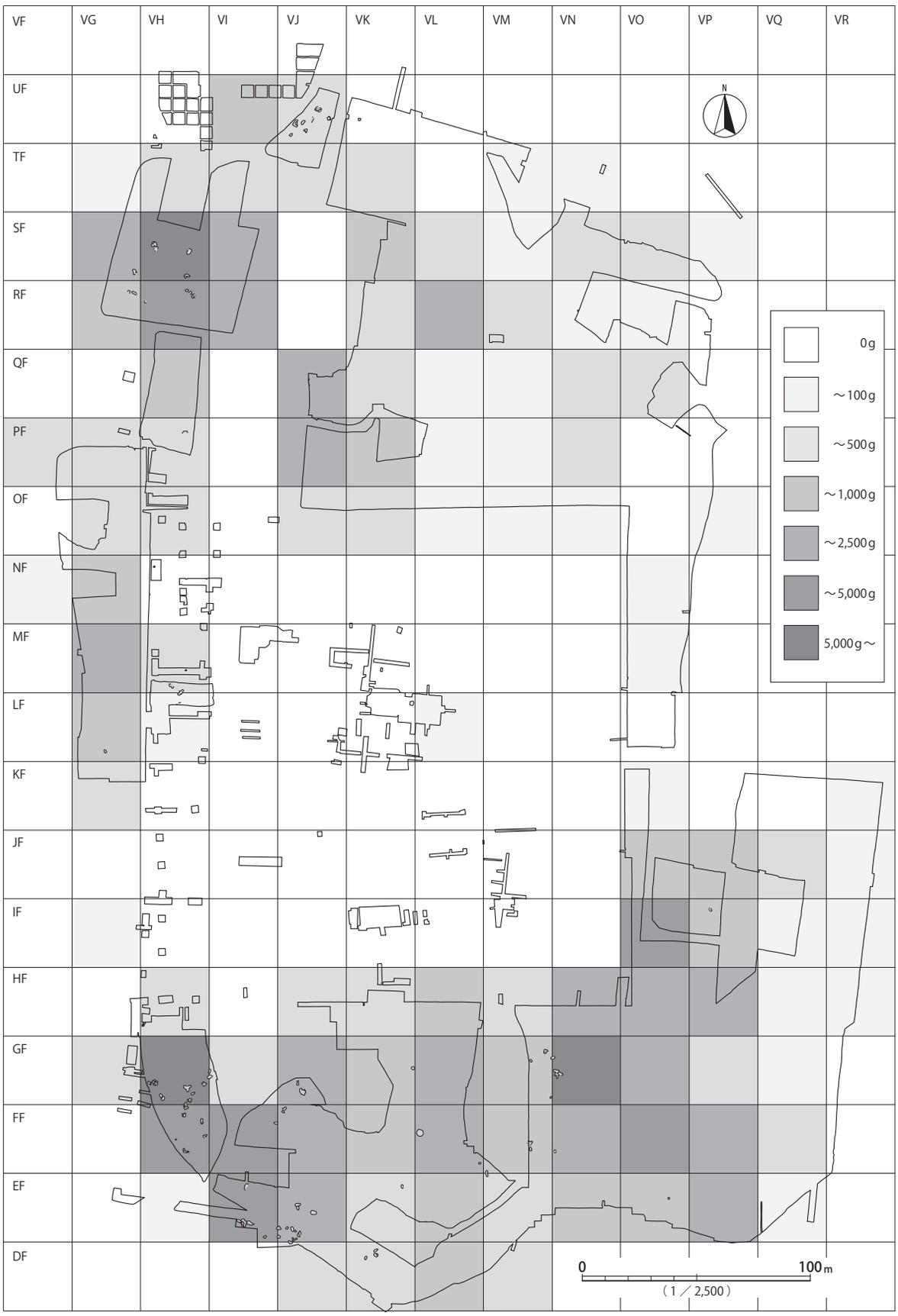


Fig.67　グリッド別 縄文土器(早期)出土重量

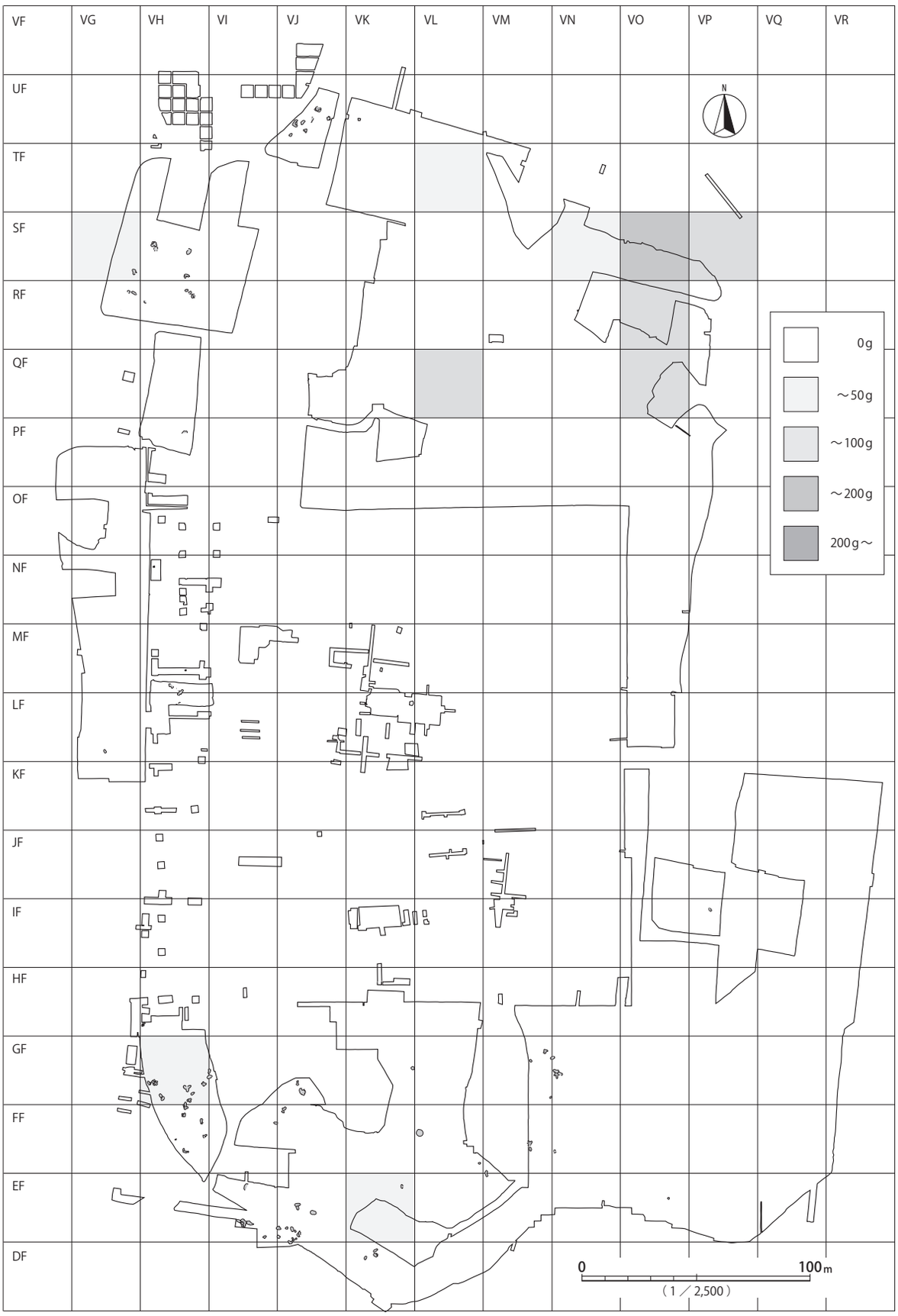


Fig.68　グリッド別 縄文土器(前期)出土重量

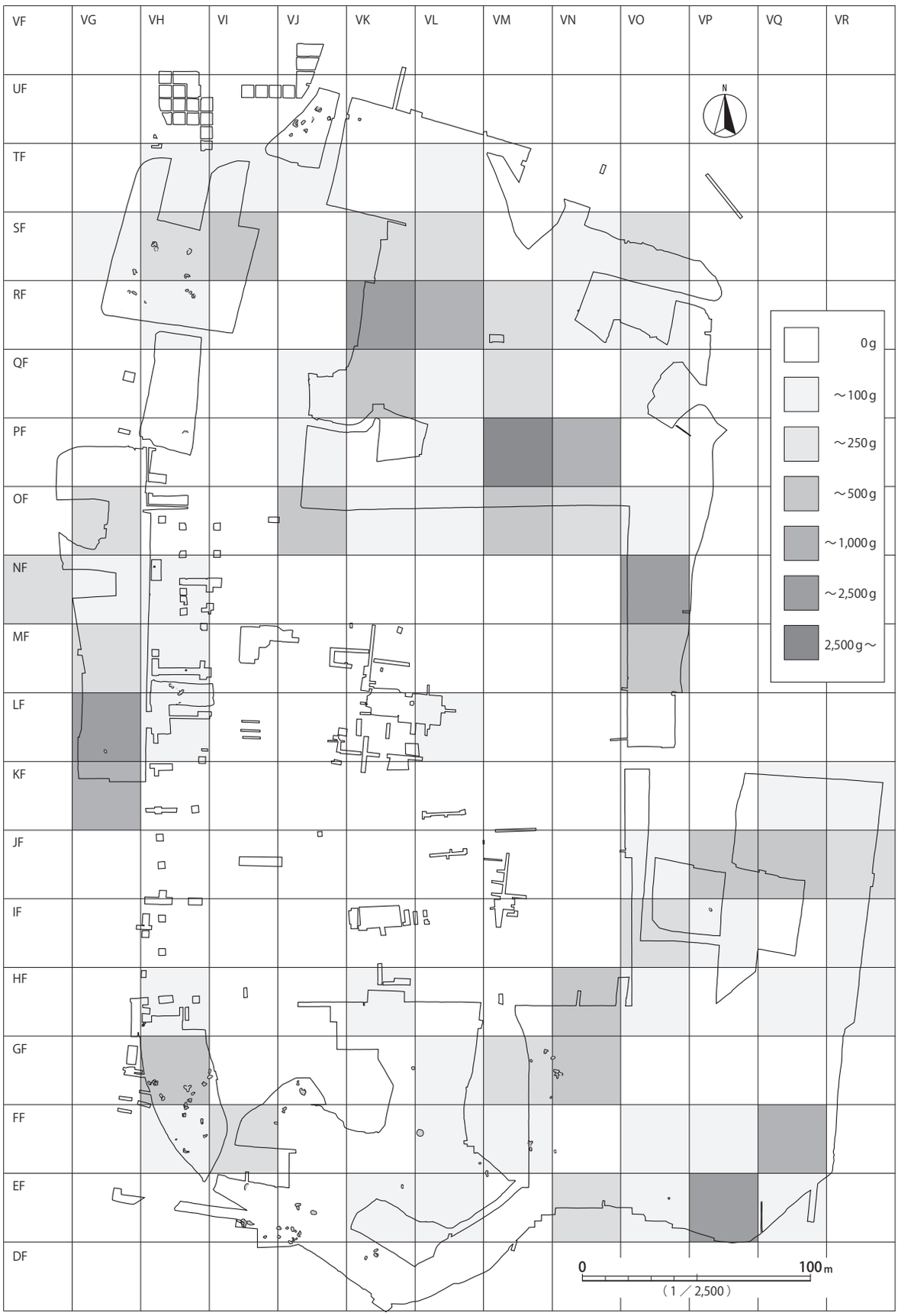


Fig.69　グリッド別 縄文土器(中期) 出土重量

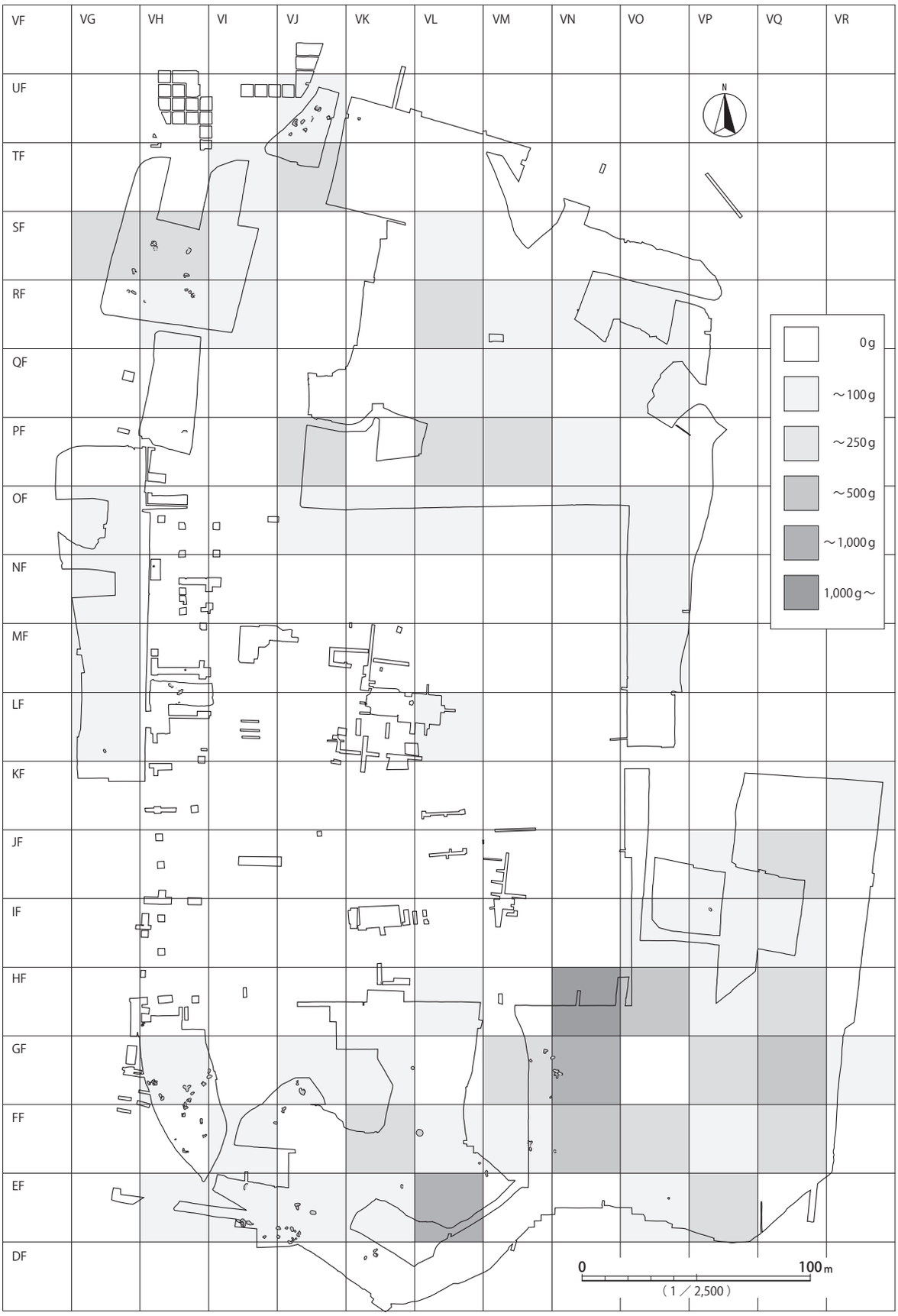


Fig.70　グリッド別 縄文土器(後期)出土重量

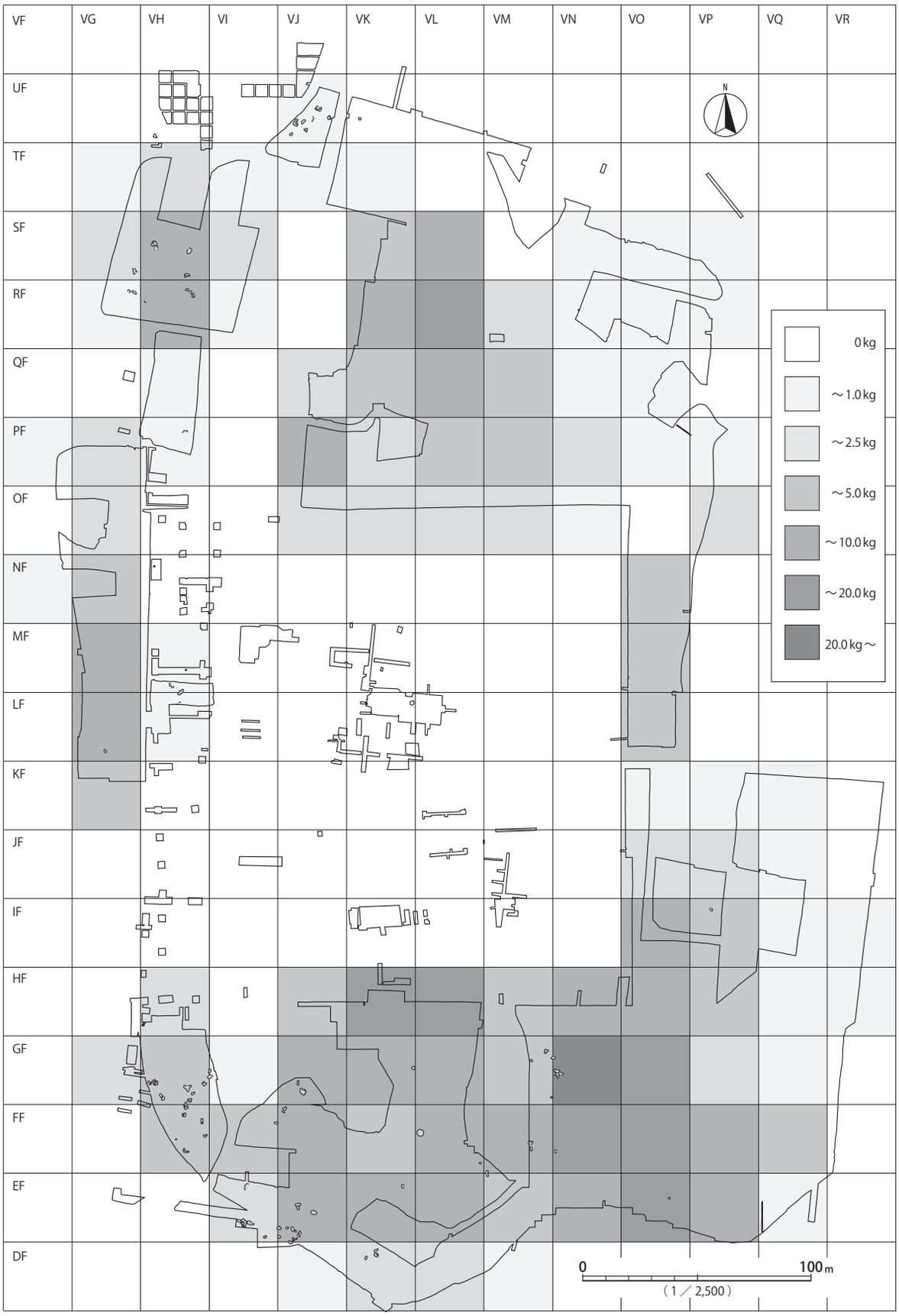


Fig.71　グリッド別 礫出土重量

第３章　弥生・古墳時代の遺構と遺物

弥生時代から古墳時代の遺構は、竪穴建物350棟、掘立柱建物１棟、土坑８基、古墳（墳墓）11基（不確実なものを含む）、溝２条が検出されている。

竪穴建物は弥生時代後期中葉から古墳時代前期まで継続するが、主体は弥生時代終末期（古墳時代早期、以下省略）で、地区ごとの内訳は、北辺部143棟、西辺部159棟、殿屋敷地区８棟、東南部５棟、南辺部９棟、セ116・117地区26棟である。

掘立柱建物は１棟のみ検出された。西辺部に位置し、棟持柱を伴う。方形区画施設と考えられる２条の溝は、掘立柱建物と軸を揃えることから、同時期に存在した可能性が高い。帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と考えられる。

土坑は竪穴建物と同時期の所産と考えられるが、帰属時期が明確でないものが多い。地区ごとの内訳は、北辺部２基、西辺部４基、南辺部２基である。

古墳（墳墓）は方墳主体で、前期が主体と考えられる。地区ごとの内訳は西辺部７基、東南部１基、南辺部1基、セ116・117地区1基、市教育委員会試掘調査区1基である。ただし、周溝の規模や形態から、確実に古墳（墳墓）と捉えられるものは0520・1204号の２基のみで、これ以外は部分的な検出のため、明確でない。

第１節　竪穴建物

北辺部

竪穴0001号　（Fig.82、PL.105・143）

RO−61を中心に位置する。南隅の一部で溝2232号（上層）と重複し、北東側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が2232号よりも古い。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈すものと考えられる。南東辺壁周溝と南西辺壁の一部が検出されたのみで、規模は不明である。南東辺壁周溝を基準とした場合、主軸方位はN−61°−Eである。確認面からの深さは、南西辺壁で0.12mを測る。壁周溝は南東辺からのみ検出され、壁柱穴をもつ。炉跡や貯蔵穴などの屋内施設は、遺構確認範囲からは検出されていない。

実測可能遺物は、1・4〜7は甕形土器、2は台付甕形土器、3は高杯形土器、8・10〜13は壺形土器、9は椀形土器である。1は5の字状有段口縁の北陸南西部系、2は脚台部にタタキ整形が施される。土器以外では14の焼成粘土塊が出土しており、ヘラナデと指頭押圧による凹部が認められる。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0003号　（Fig.83、PL.13・51・105）

RO−83を中心に位置する。北辺壁で溝2232号（上層）、東辺壁の一部で竪穴004号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈し、推定規模は4.28×3.98m、推定遺構下場面積は14.9㎡、確認面からの深さは0.29mを測る。主軸方位はN−9°−Wである。炉跡は中軸線上の北西寄りから検出されている。P1は貯蔵穴の可能性がある。主柱穴や出入口施設、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。



Fig.72　弥生・古墳 遺構配置

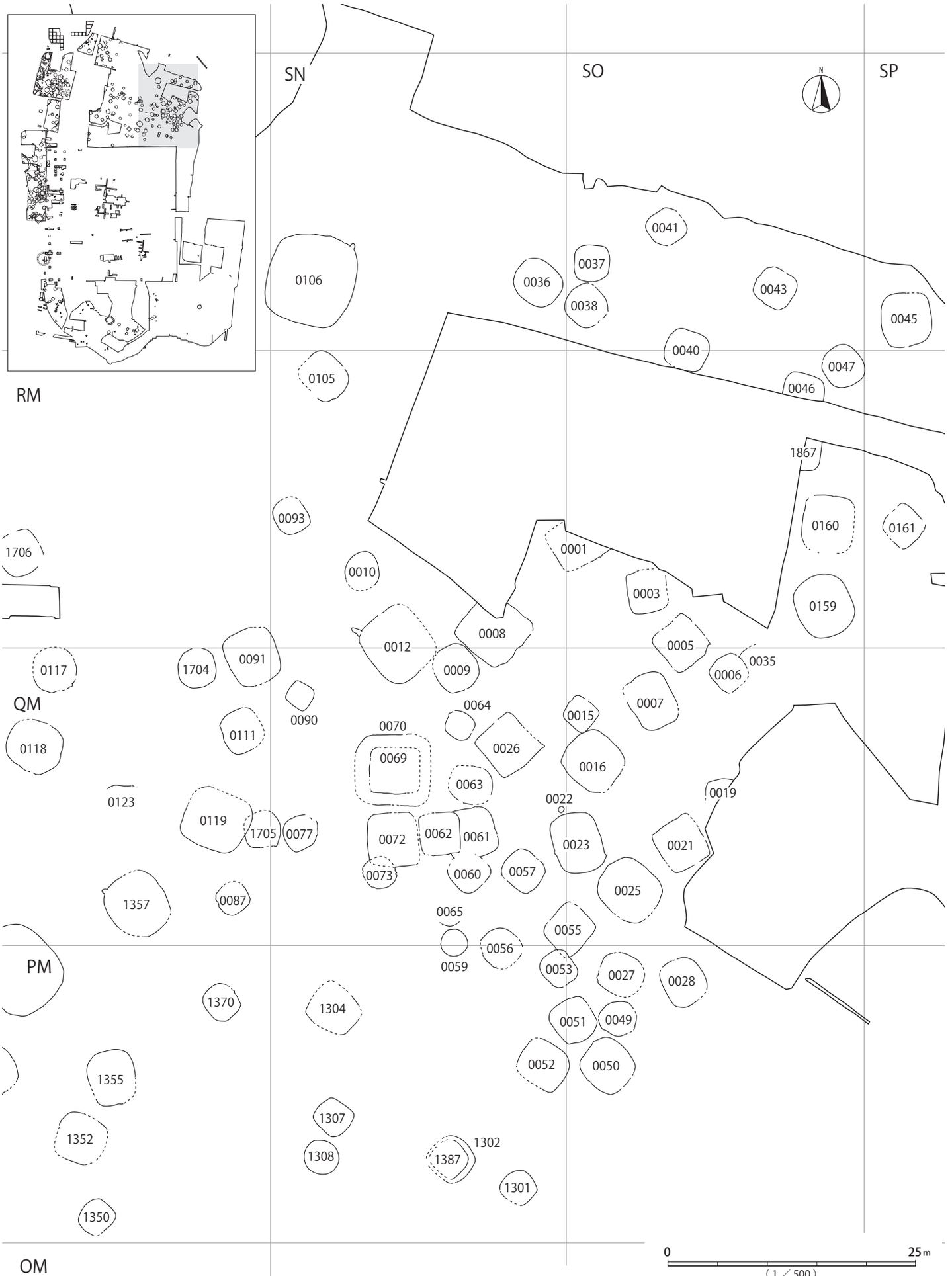


Fig.73　北辺部(1) 弥生遺構配置

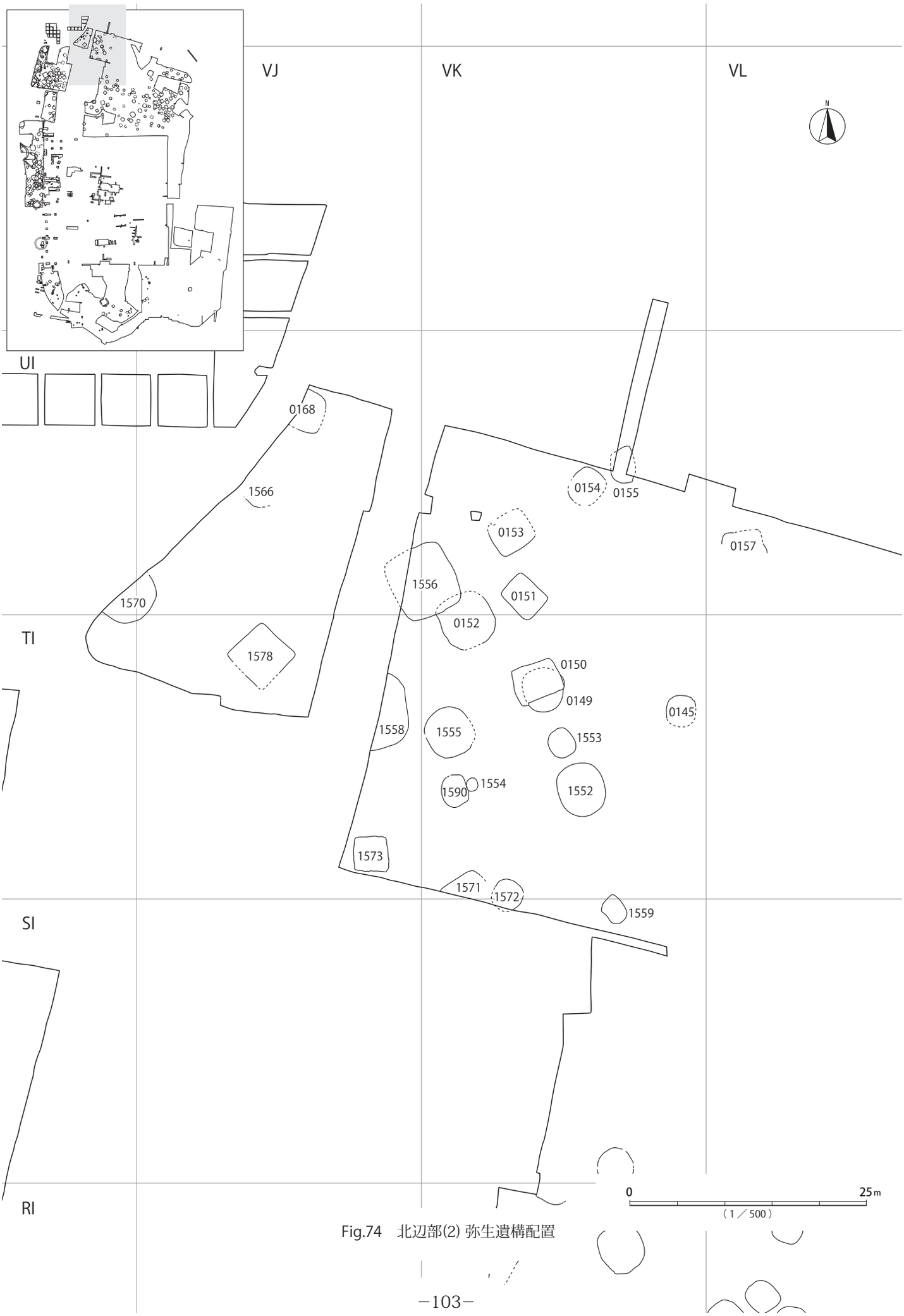


Fig.74　北辺部(2) 弥生遺構配置

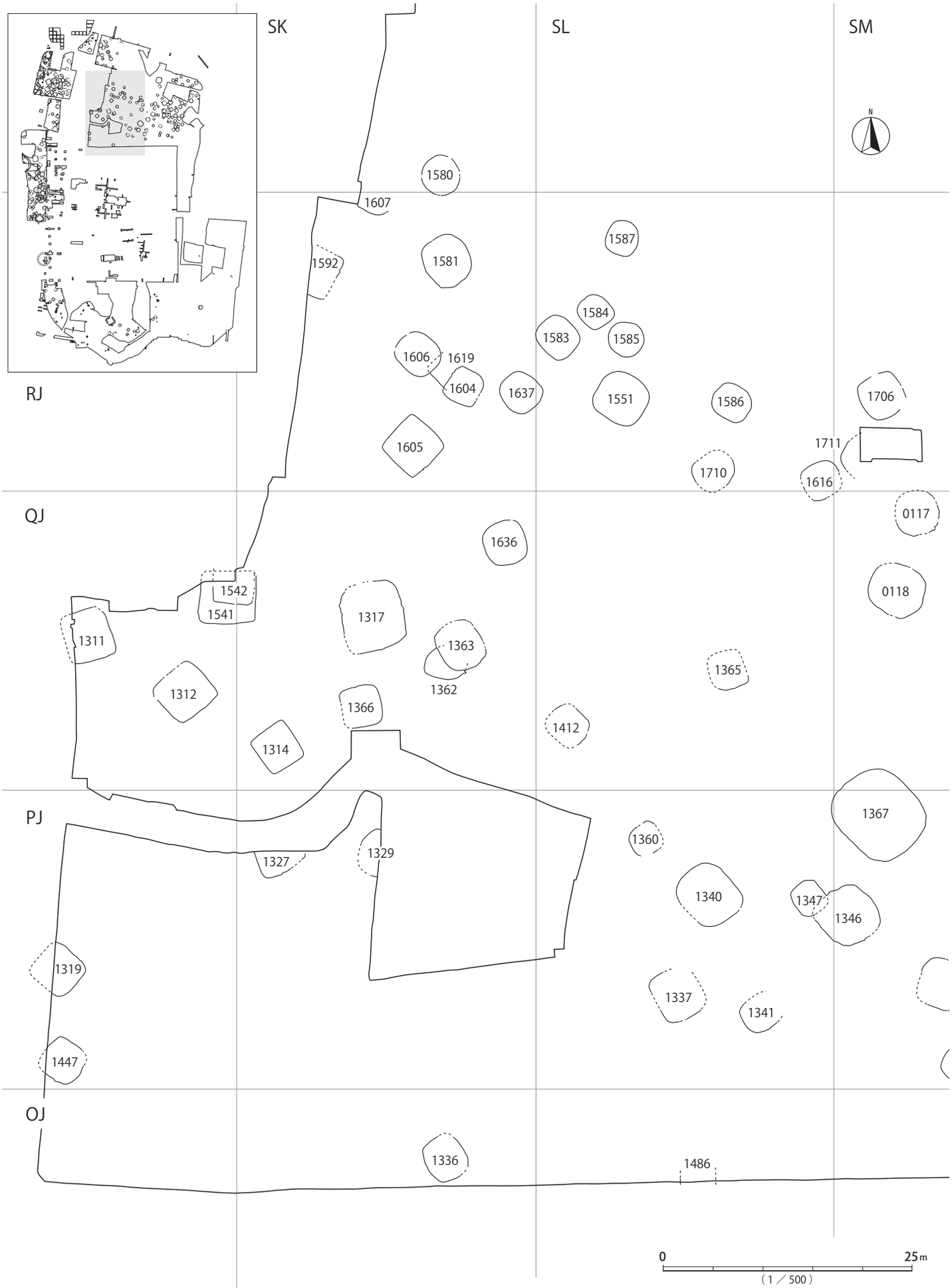


Fig.75　北辺部(3) 弥生遺構配置

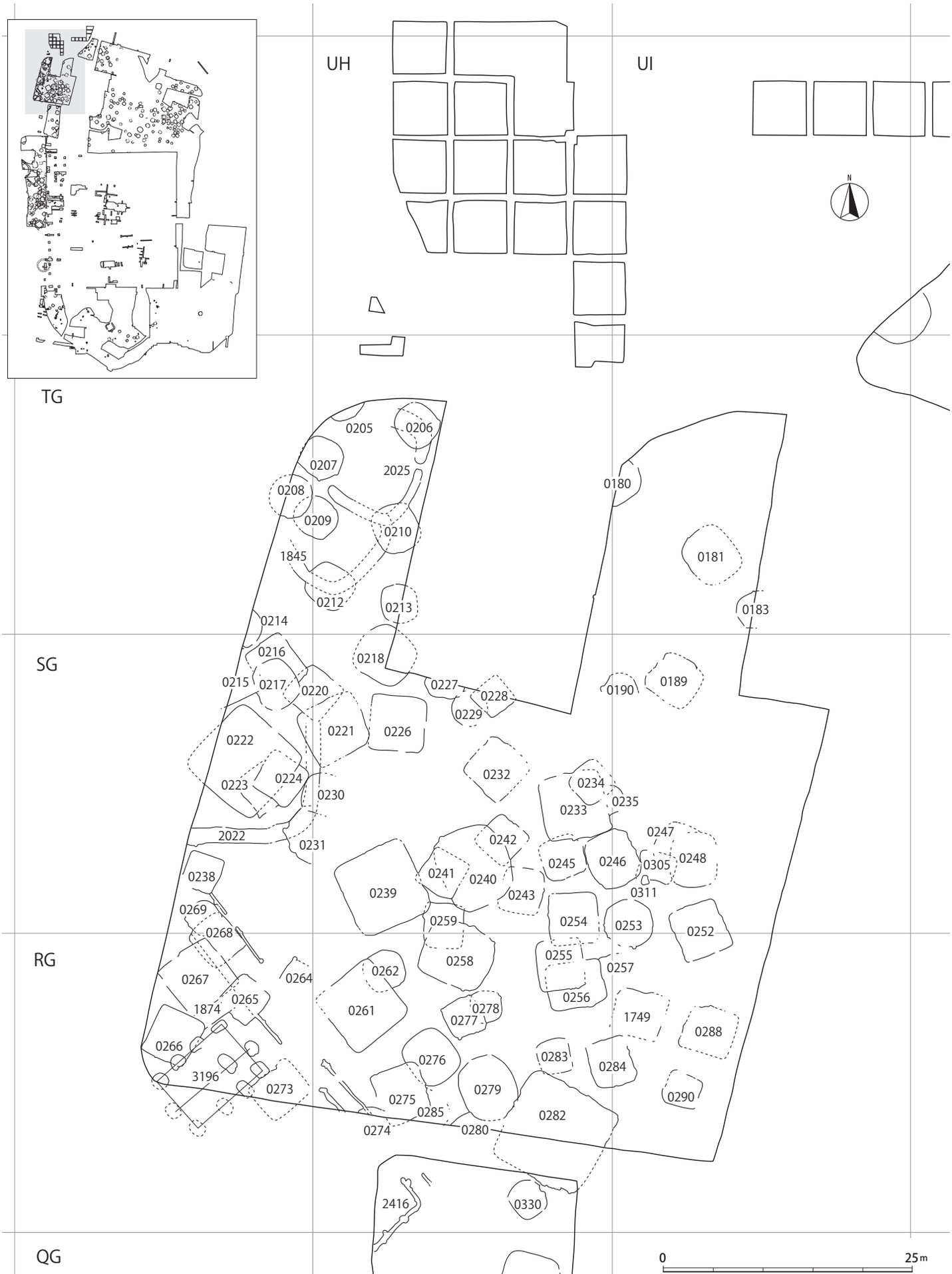


Fig.76　西辺部(1) 弥生遺構配置

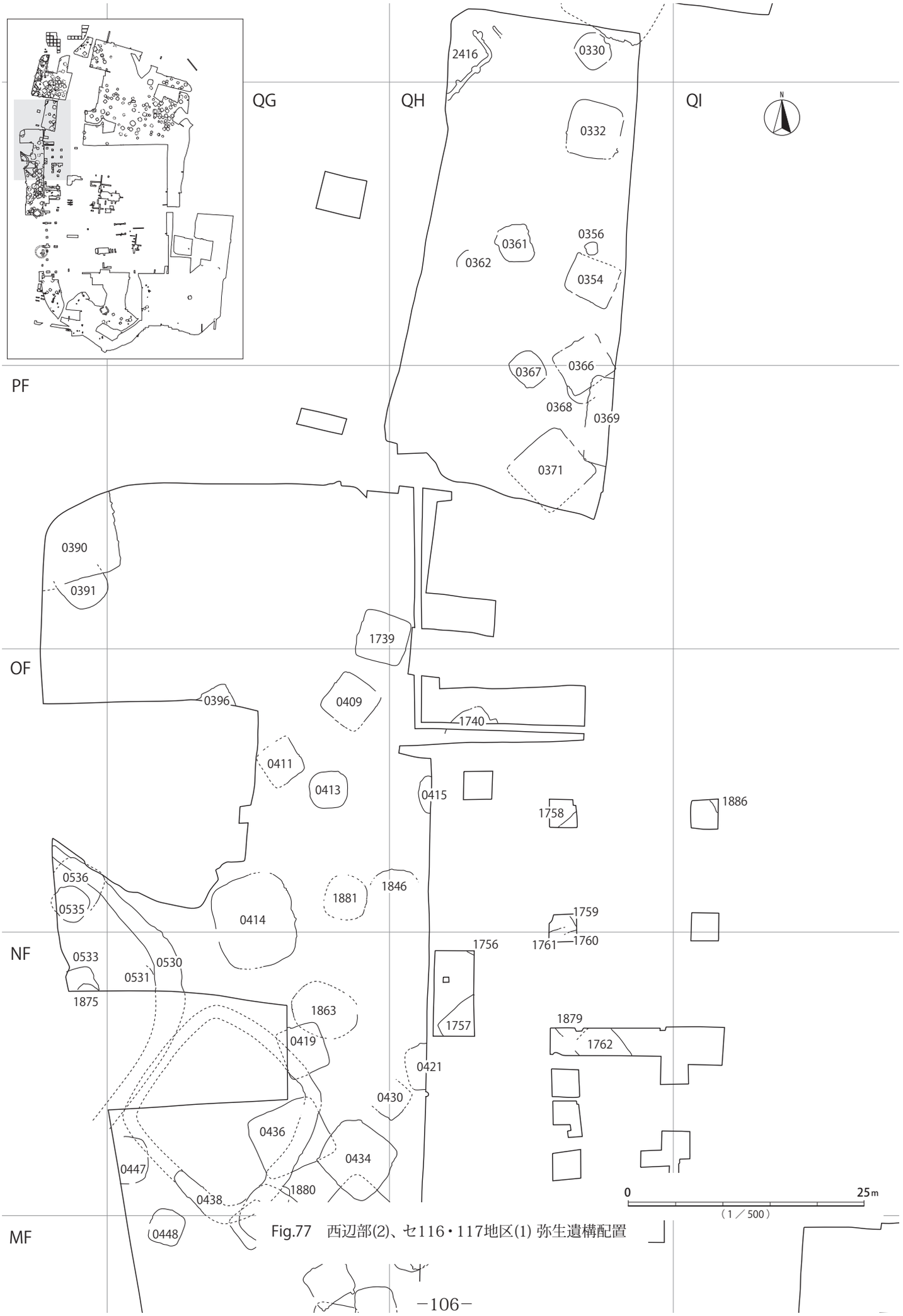


Fig.77　西辺部(2)、セ116・117地区(1) 弥生遺構配置

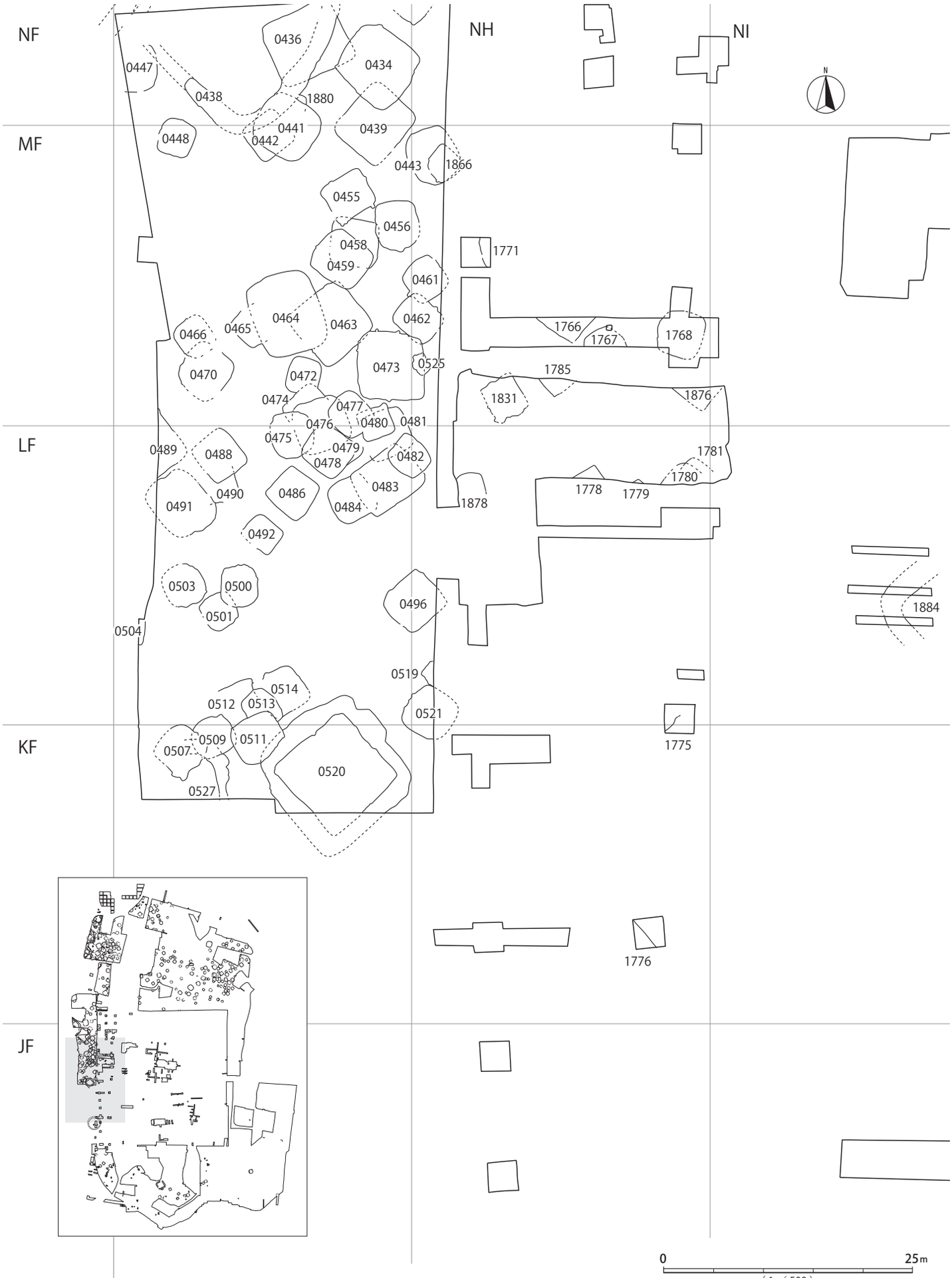


Fig.78　西辺部(3)、セ116・117地区(2) 弥生遺構配置

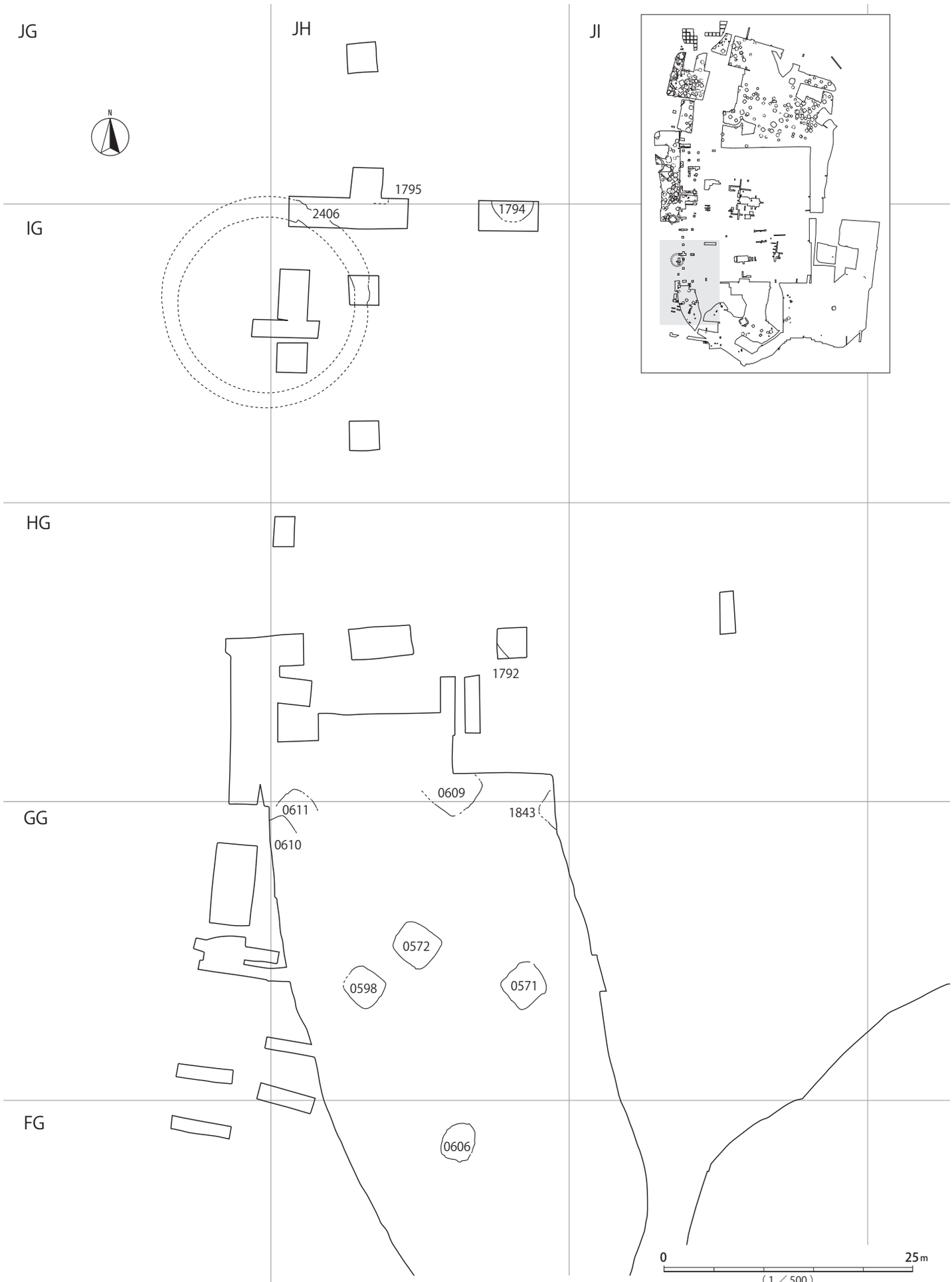
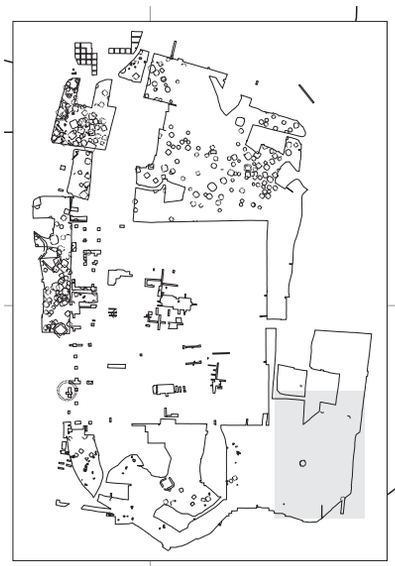


Fig.79　セ116・117(3)、殿屋敷地区 弥生遺構配置



Fig.80　南辺、東南部(1) 弥生遺構配置



IP
IQ
IR
HO
GO
FO
EO
1073
1727
1726
1844
N
0
25m
（1／500）

Fig.81　東南部(2) 弥生遺構配置

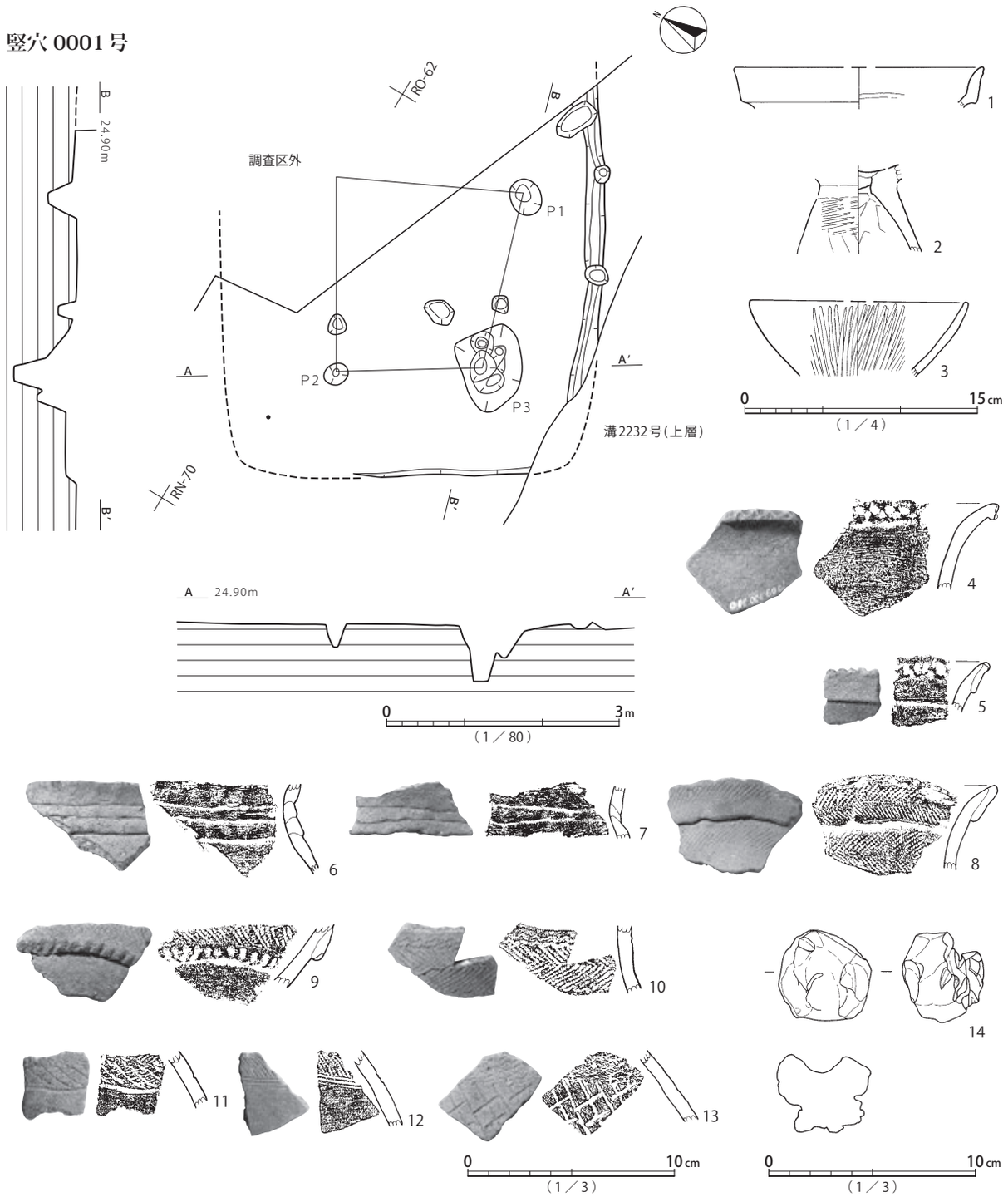


Fig.82　竪穴0001号 遺構遺物

実測可能遺物は、1・4は甕形土器、2は甑形土器、3・5は壺形土器である。2の底部穿孔は焼成後に行われる転用品で、底部側には未貫通孔が認められる。4は指ナデにより、多段の粘土紐積み上げ痕が不明瞭となる。2は北壁際の床面上、3は南壁際のP1脇からの出土である。

弥生時代後期後半の所産と思われる。

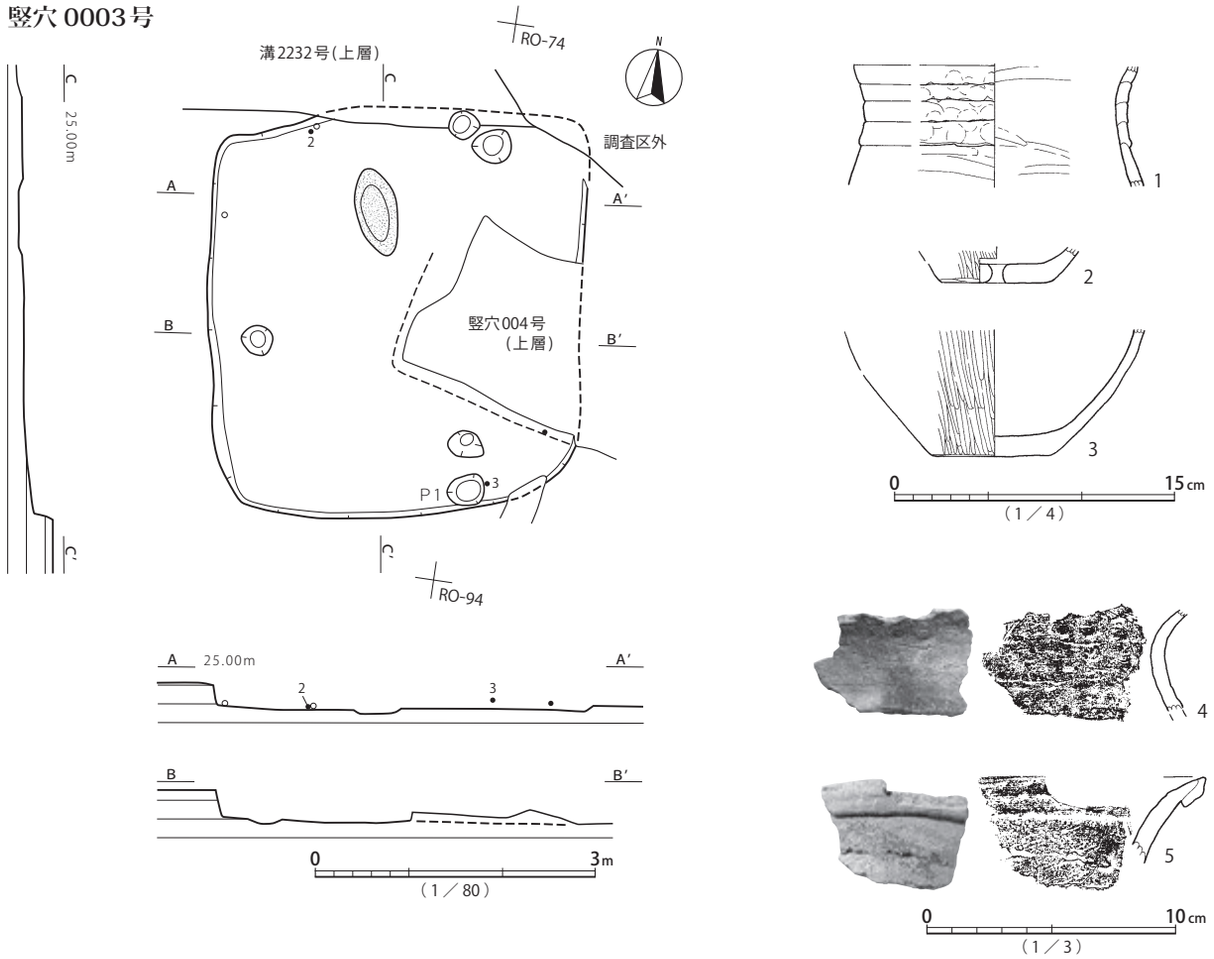


Fig.83　竪穴0003号 遺構遺物

竪穴0005号　（Fig.84、PL.13・51・105）

RO−94を中心に位置する。西側で掘立柱建物跡701号a（上層）と重複し、壁の一部は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が701号aよりも古い。

平面形態は方形を呈し、規模は4.60×4.49m、推定遺構下場面積は17.2㎡、確認面からの深さは0.09mを測る。主軸方位はN−40°−Wである。炉跡は遺構中央のやや北西寄りから検出されている。P1〜4は主柱穴である。P5は位置的に貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。壁周溝は全周するものと思われる。焼土と炭化材が分布し、火災に遭った可能性がある。

実測可能遺物は、1・2・7は椀形土器、3は高杯形土器、5は底部焼成前穿孔を施す甑形のミニチュア土器、6は5の字状有段口縁の甕形土器である。4は器台形土器と思われる。1は南東辺中央の壁際、3はP3付近から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0006号　（Fig.85、PL.13・105）

QO−06を中心に位置する。東側で竪穴0035号、西側で掘立柱建物701号b（上層）と重複し、壁の一部は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が701号bよりも古い。0035号との関係は、断

竪穴 0005 号

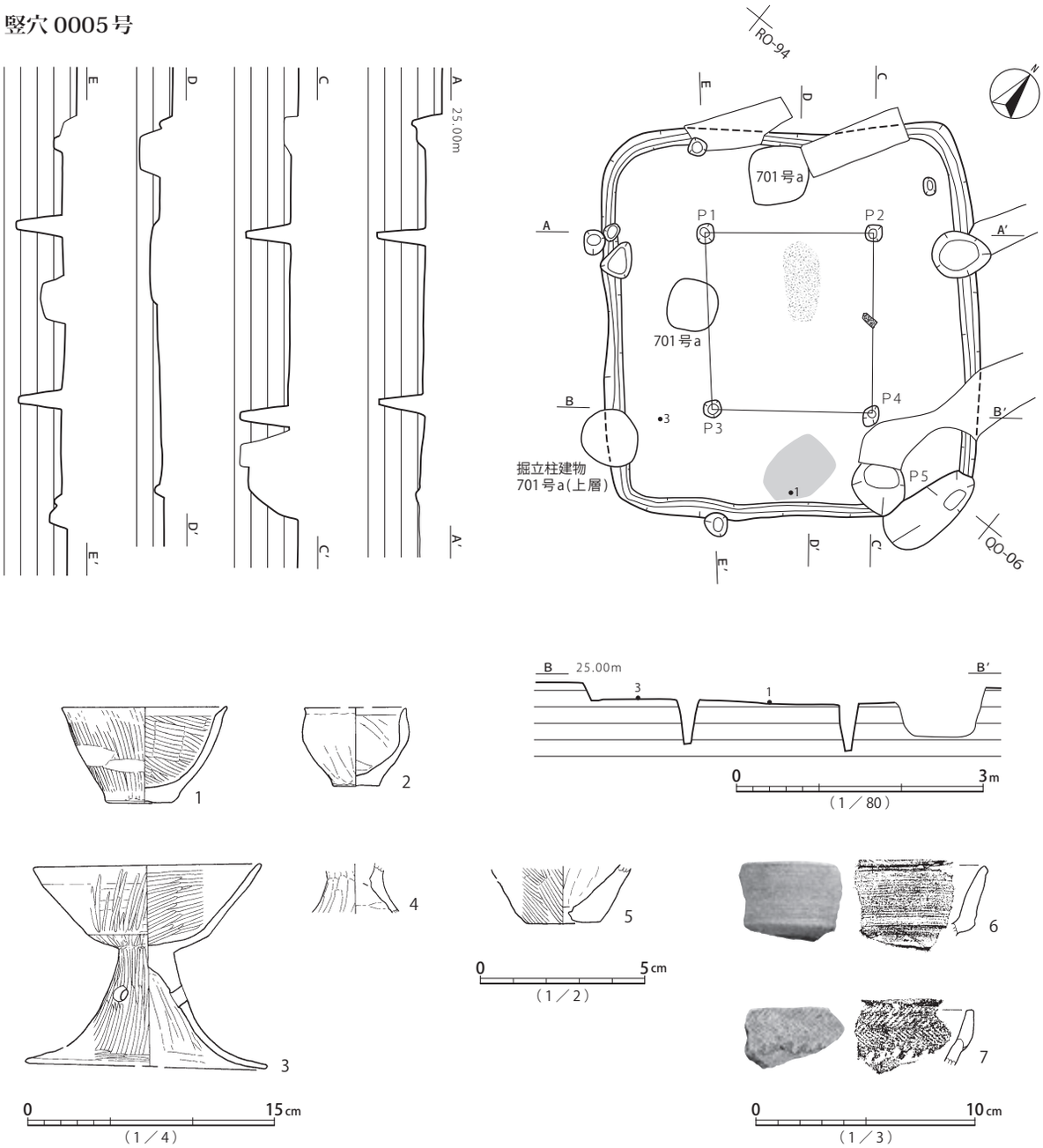


Fig.84　竪穴0005号 遺構遺物

面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から本遺構のほうが新しいと考えられる。

平面形態は小型の胴張隅丸方形を呈し、推定規模は3.48×3.48m、推定遺構下場面積は8.8㎡、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN−42°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。P1は出入口施設である。壁周溝は全周するものと思われる。南西辺壁際には焼土の堆積が認められた。

実測可能遺物は、1・4は高杯形土器、2は炉器台形土器、3は壺形土器である。1は内面に櫛描横線文と櫛刺突斜線文が施される。大粒の砂礫を多量に含み、搬入品であろうか。

山田橋式と中台式の土器が混在するが、3・4は竪穴0035号からの混入と考えられ、弥生時代終末

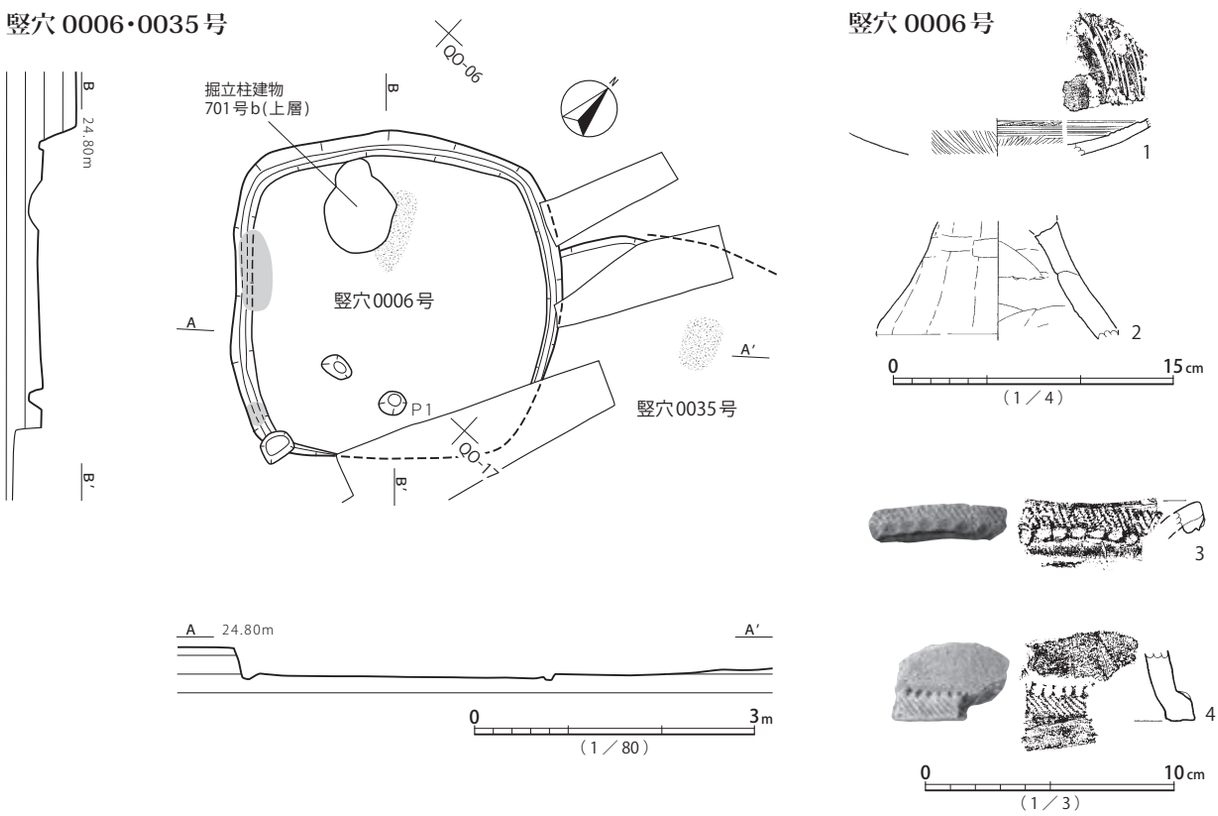


Fig.85　竪穴0006号 遺構遺物、竪穴0035号 遺構

期後半の所産と思われる。

竪穴0035号　（Fig.85）

QO−07を中心に位置する。西側で竪穴0006号と重複し、一部は撹乱により壊される。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく明確でないが、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は楕円形を呈すものと思われるが、炉跡と北西壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。遺構確認面からの深さは0.07mを測る。北壁寄りから検出された炉跡の長軸を基準とした場合、主軸方位はN−18°−Wとなる。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、重複する竪穴0006号3・4は本遺構からの混入と考えられ、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0007号　（Fig.86、PL.13・51・94・105・143）

QO−13を中心に位置する。中央で道路602号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が602号よりも古い。

平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は5.64×4.43m、推定遺構下場面積は21.4㎡、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−30°−Wである。炉跡は中軸線上の北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜3は主柱穴で、南東側は道路602号により壊されたものと考えられる。内部から粘土が検出されたP4は貯蔵穴であろう。壁周溝は検出されていない。

竪穴 0007 号

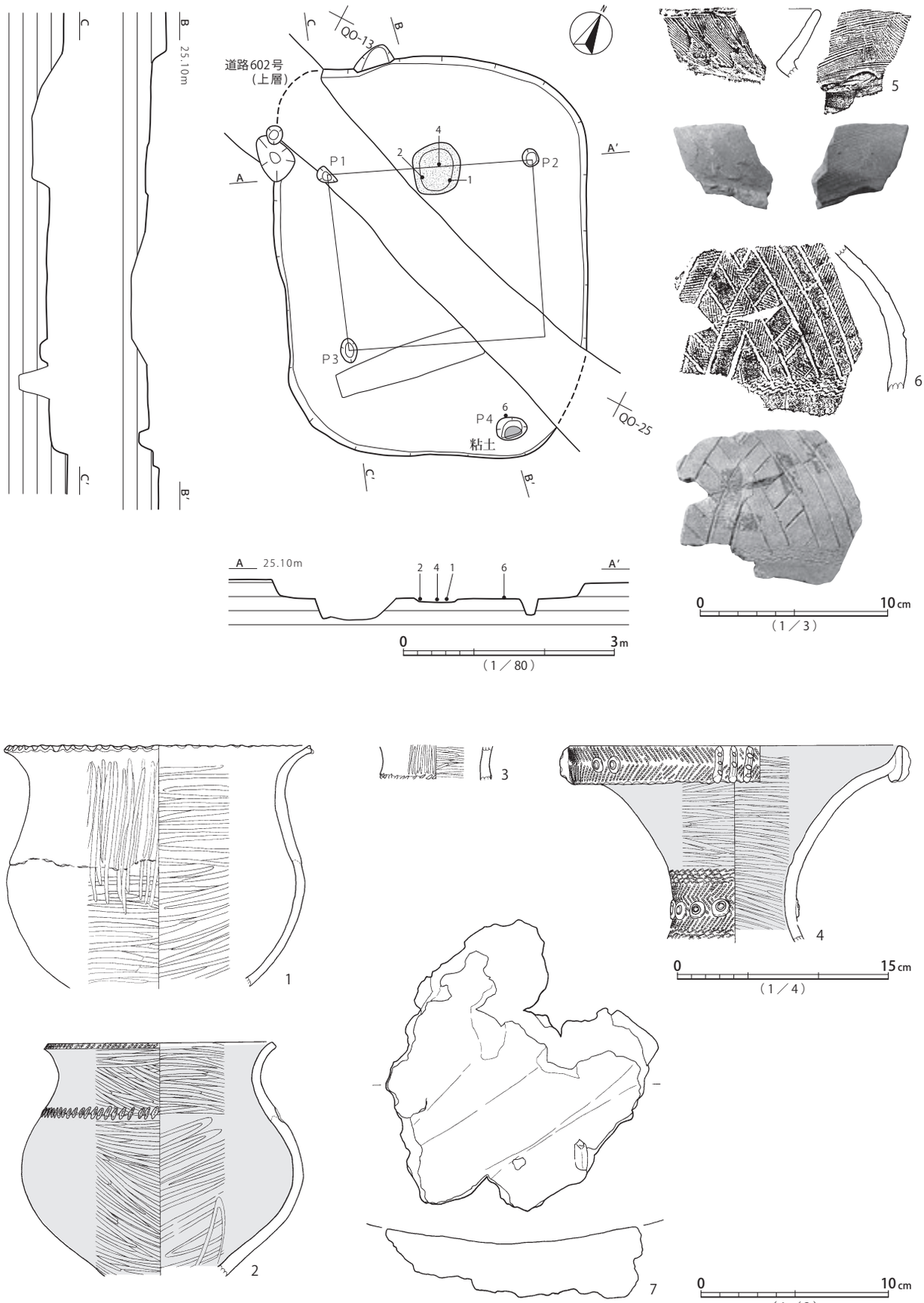


Fig.86　竪穴0007号 遺構遺物

実測可能遺物は、1・5は甕形土器、2は内外面に赤彩を施す広口壺形土器、3・4・6は壺形土器である。土器以外では、7の弱い擦痕の残るヘラナデを施す焼成粘土塊が出土している。1・2・4が炉内、6がP4脇の床面上からの出土である。4は口縁部を下にして出土しており、支脚に転用された可能性が高い。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴0008号　（Fig.87・88、PL.13・51・52・94・105・143）

RN−98を中心に位置する。中央で道路602号（上層）と重複し、北隅は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が602号よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈し、規模は6.20×6.10m、推定遺構下場面積は31.0㎡、確認面からの深さは0.69mを測る。主軸方位はN−51°−Wである。炉跡は遺構中央のやや南西寄りから検出されている。P1〜3は主柱穴で、柱は抜き取られた可能性がある。北側の柱穴は調査区外に位置するものと考えられる。南東辺壁際から検出されたP4は貯蔵穴で、蓋受け状の方形の掘り込みをもつ。壁周溝はほぼ全周するが、P4脇のみ途切れる。

実測可能遺物は、1〜5・7〜9・11・23・26は甕形土器、6・13〜17・24・25は壺形土器、10は甑形土器、12は鉢形土器、18は直口縁壺形土器、19〜21は高杯形土器、22は手焙形土器である。1・4は頸部がくの字状に屈折し、尖る口縁端部に刺突を加える。また、1の胴部にはタタキ整形ののちハケ調整が施される。7・8・21は北陸系で、漆町6群まで下る可能性が指摘されている（田嶋2011）。10は胎土の特徴から、竪穴0015号14と同一個体の可能性がある。17・19・20は東海系で、廻間Ⅱ式前半に比定されよう。土器以外では27の土製勾玉が出土している。3・4は西隅、1・11・12・15・21は南隅から検出され、床面上からの出土である。18・19はP4の蓋受け状の段部からの出土である。

本遺構の土器は過去に公表されており（比田井1987）、比田井論文第4図27は本報告7、28は8、29は不明、30は21、31は18、32は20、33は15、34は19、35は17、36は11、37は12、38は2、39は3、40は1、41は4に該当すると思われる。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0009号　（Fig.89、PL.14・52）

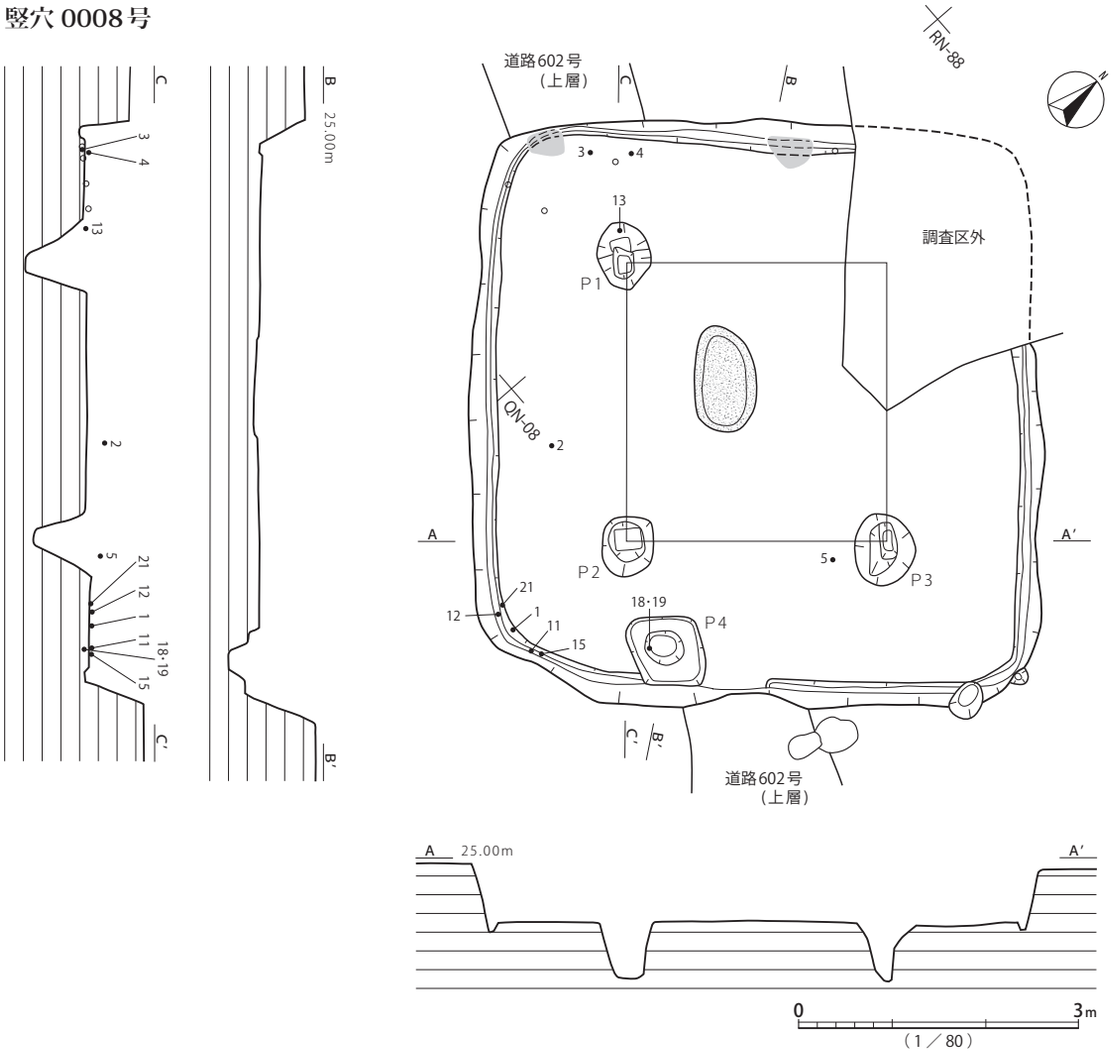
QN−07を中心に位置する。西隅で溝2400号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2400号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈し、規模は4.69×4.34m、遺構下場面積は15.6㎡、確認面からの深さは0.44mを測る。主軸方位はN−31°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。P1は柱穴、P2は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1の甕形土器のみである。口縁端部に一方向からの押捺を加え、頸部に多段の粘土紐積み上げ痕を残す。

弥生時代後期中葉の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴 0008 号



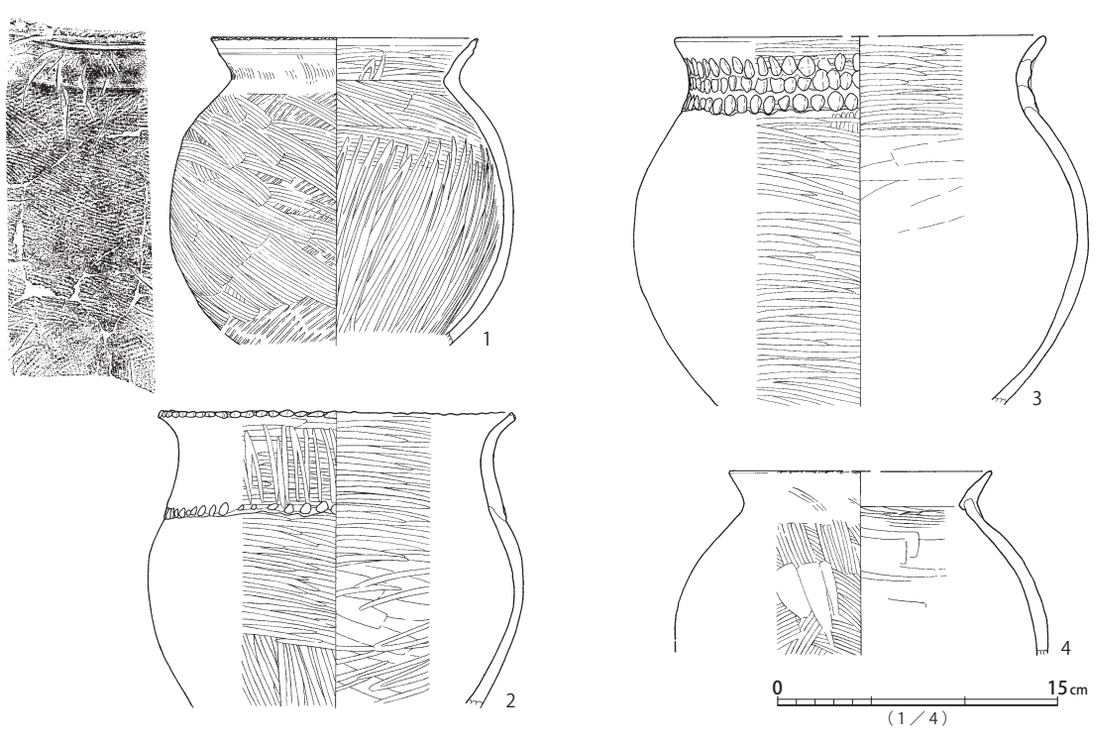


Fig.87　竪穴0008号(1) 遺構遺物

竪穴 0008 号

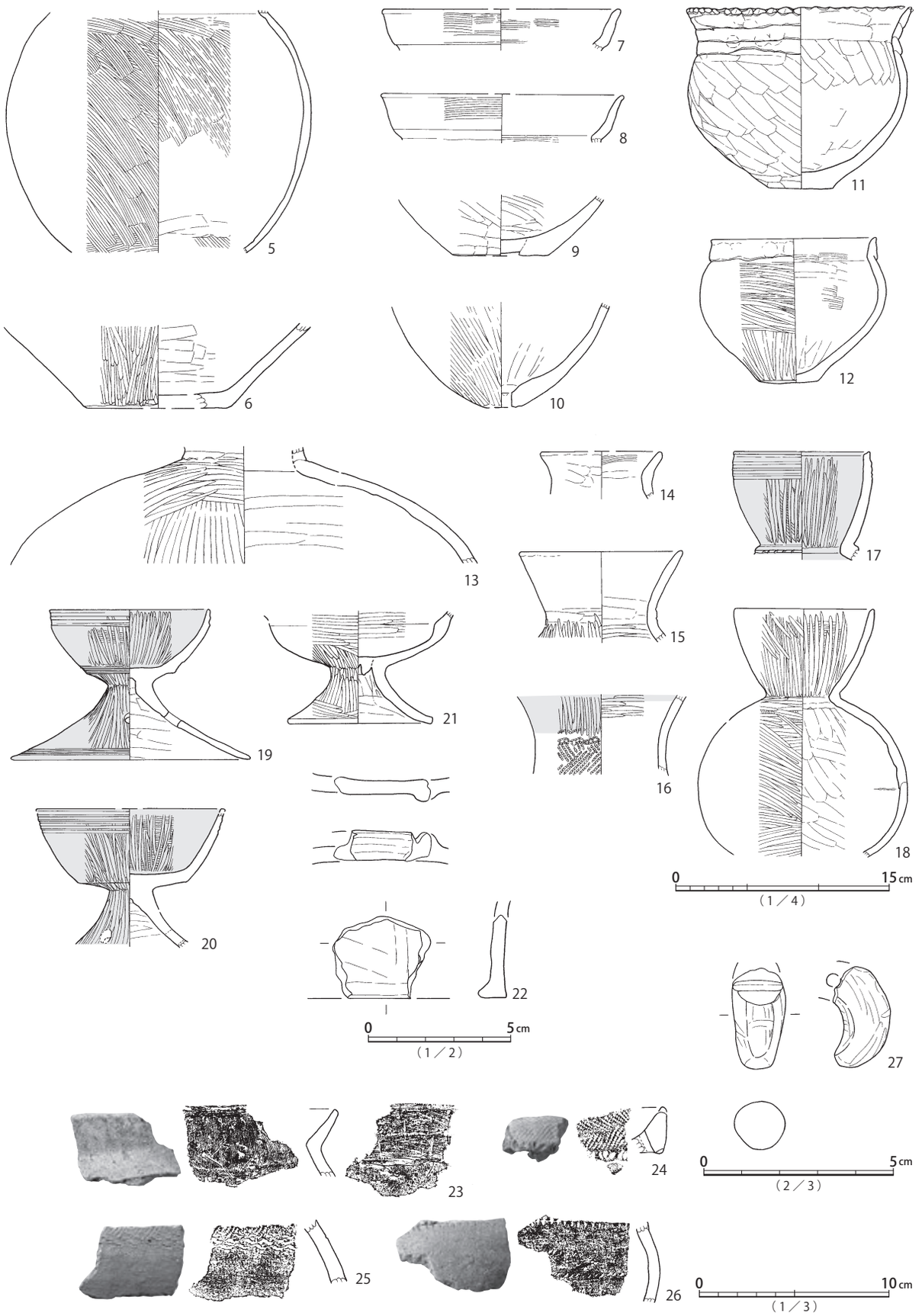
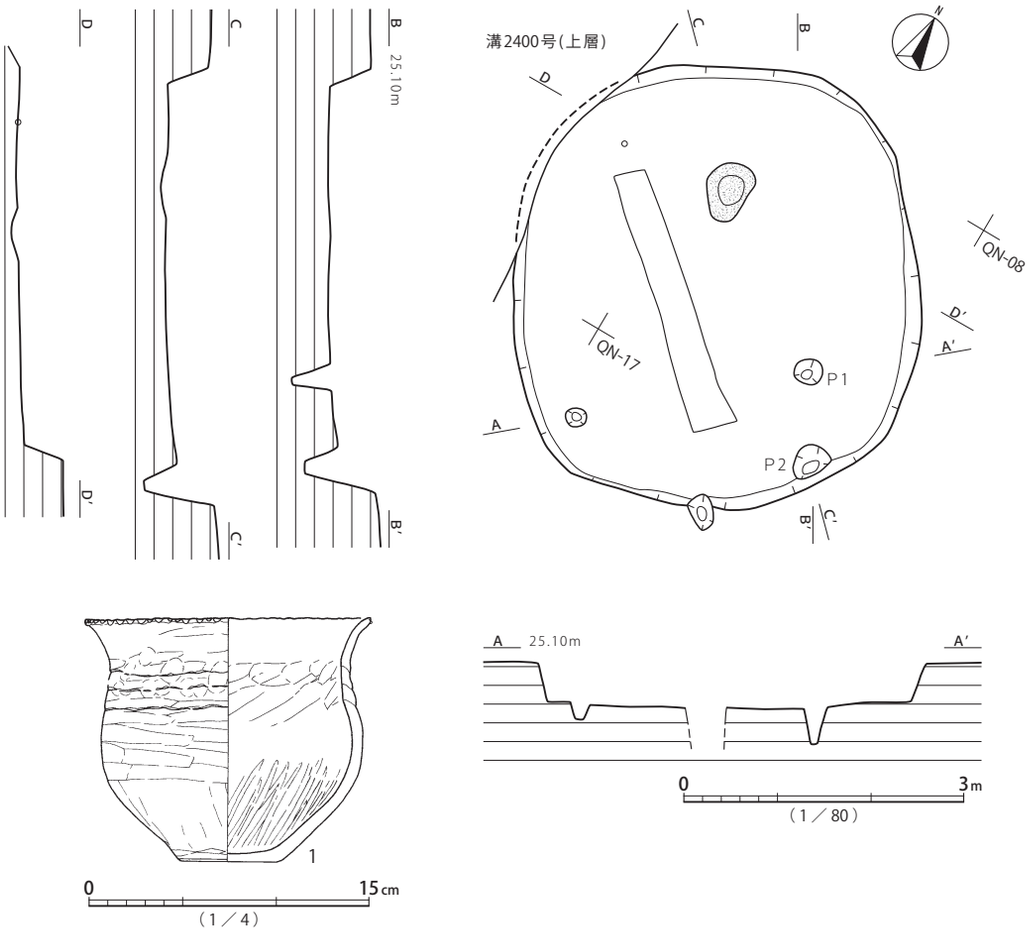
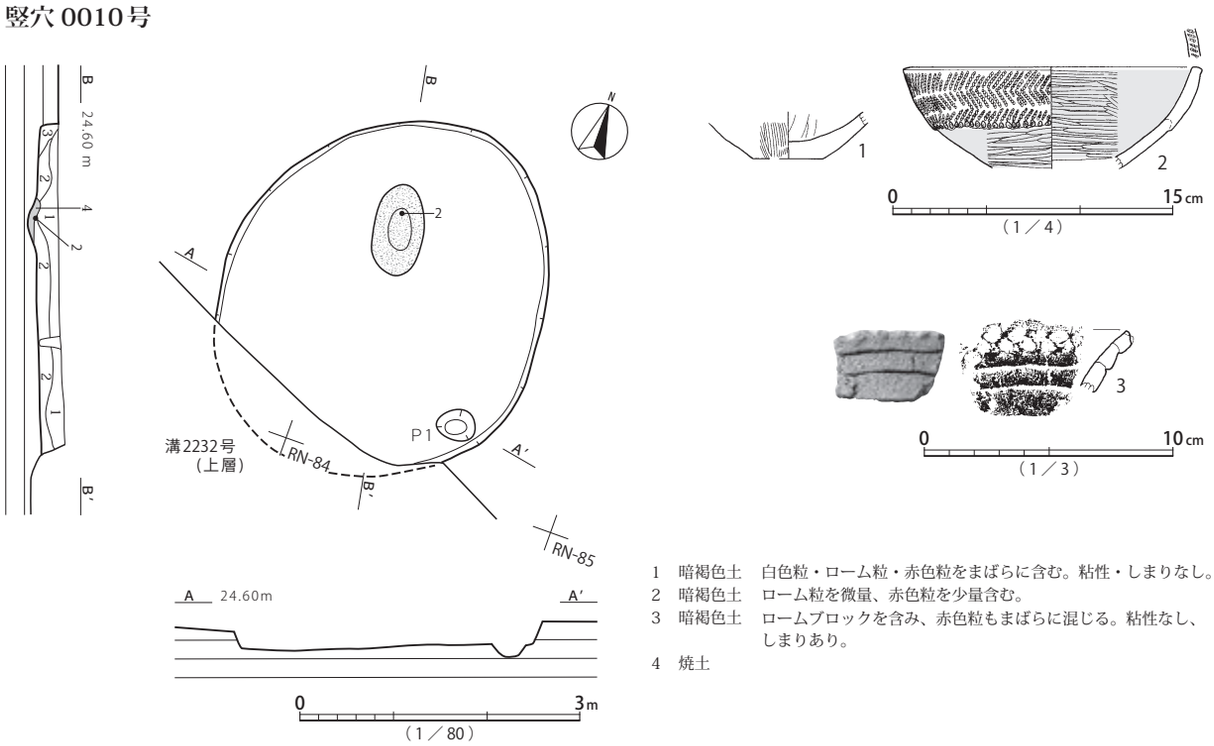


Fig.88　竪穴0008号(2) 遺物

竪穴 0009 号



竪穴 0010 号



1　暗褐色土　白色粒・ローム粒・赤色粒をまばらに含む。粘性・しまりなし。
2　暗褐色土　ローム粒を微量、赤色粒を少量含む。
3　暗褐色土　ロームブロックを含み、赤色粒もまばらに混じる。粘性なし、しまりあり。
4　焼土

Fig.89　竪穴0009号 遺構遺物、竪穴0010号 遺構遺物

竪穴0010号 （Fig.89、PL.14・52・94・105）

RN−74を中心に位置する。南側で溝2232号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2232号よりも古い。

平面形態は小型の楕円形を呈し、推定規模は3.72×3.47m、推定遺構下場面積は10.0㎡、確認面からの深さは0.25mを測る。主軸方位はN−18°−Wである。炉跡は中軸線上北寄りから検出されている。P1は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。主柱穴や出入口施設、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1・3は甕形土器、2は椀形土器である。2は炉内からの出土である。

弥生時代後期中葉の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴0012号 （Fig.90、PL.14・52・105）

RN−95を中心に位置する。南隅で竪穴013号（上層）と土坑082号（上層）、北隅で溝2232号（上層）、東隅で溝2400号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈し、推定規模は7.00×6.40m、推定遺構下場面積は38.0㎡、確認面からの深さは0.29mを測る。主軸方位はN−37°−Wである。炉跡は中軸線上の北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設である。貯蔵穴や壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・3〜7は甕形土器、2・10は壺形土器、8は台付甕形土器、9は高杯形土器である。1は口縁端部が面取りされる北陸北東部系、2〜6は5の字状有段口縁の北陸南西部系で、北陸系土器が主体となる。

弥生時代終末期後半の所産と思われる。

竪穴0015号 （Fig.91・92、PL.14・52・105・106）

QO−21を中心に位置する。西隅で竪穴014号（上層）、南隅で竪穴0016号と重複する。新旧関係は、本遺構が014号よりも古い。0016号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から本遺構のほうが新しいと考えられる。

平面形態は小型の方形を呈し、規模は3.16×2.97m、遺構下場面積は7.0㎡、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN−49°−Wである。遺構中央北寄りで焼土の分布が記録されており、炉跡と思われる。P1〜3・5は主柱穴で、掘り込みは浅く、各隅寄りに配置する。P5は本来別にあった主柱穴と貯蔵穴を掘り抜いてしまったものであろう。壁周溝は東隅で途切れる。

実測可能遺物は、1〜7、12〜14、17・37は甕形土器、9〜11・16は小型の甕形土器、27・28・31は台付甕形土器、29・30・38は壺形土器、15は小型の壺形土器、32〜36は高杯形土器である。8は壺形土器であろうか。1・2は頸部がくの字状に屈折する。1は口縁端部が面取り拡張され、北陸北東部系であろう。4〜16は5の字状有段口縁の北陸南西部系で、口縁部が外形気味になるものが多い。14は直径・傾きともに不確実であるが、胎土の特徴から竪穴0008号10と同一個体の可能性がある。18〜26は器種不明の底部で、このうち23〜25は尖底気味になっており、北陸系土器に由来するものと考えられる。4・18は遺構中央付近、17は北隅寄りの覆土上層、33は南東辺壁際の床面上、36はP5（貯蔵穴部分）からの出土である。

竪穴 0012号

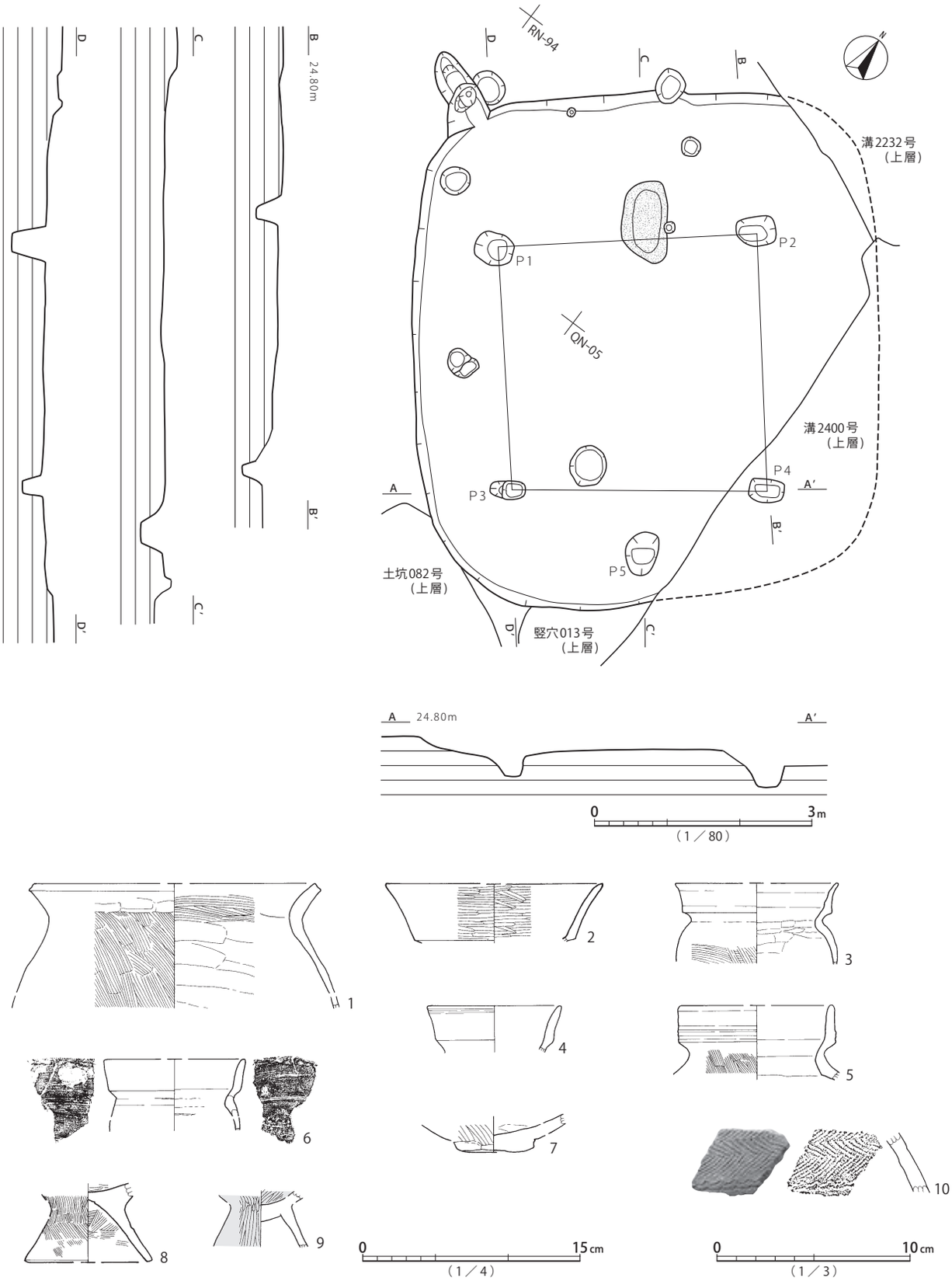


Fig.90　竪穴0012号 遺構遺物

竪穴 0015 号

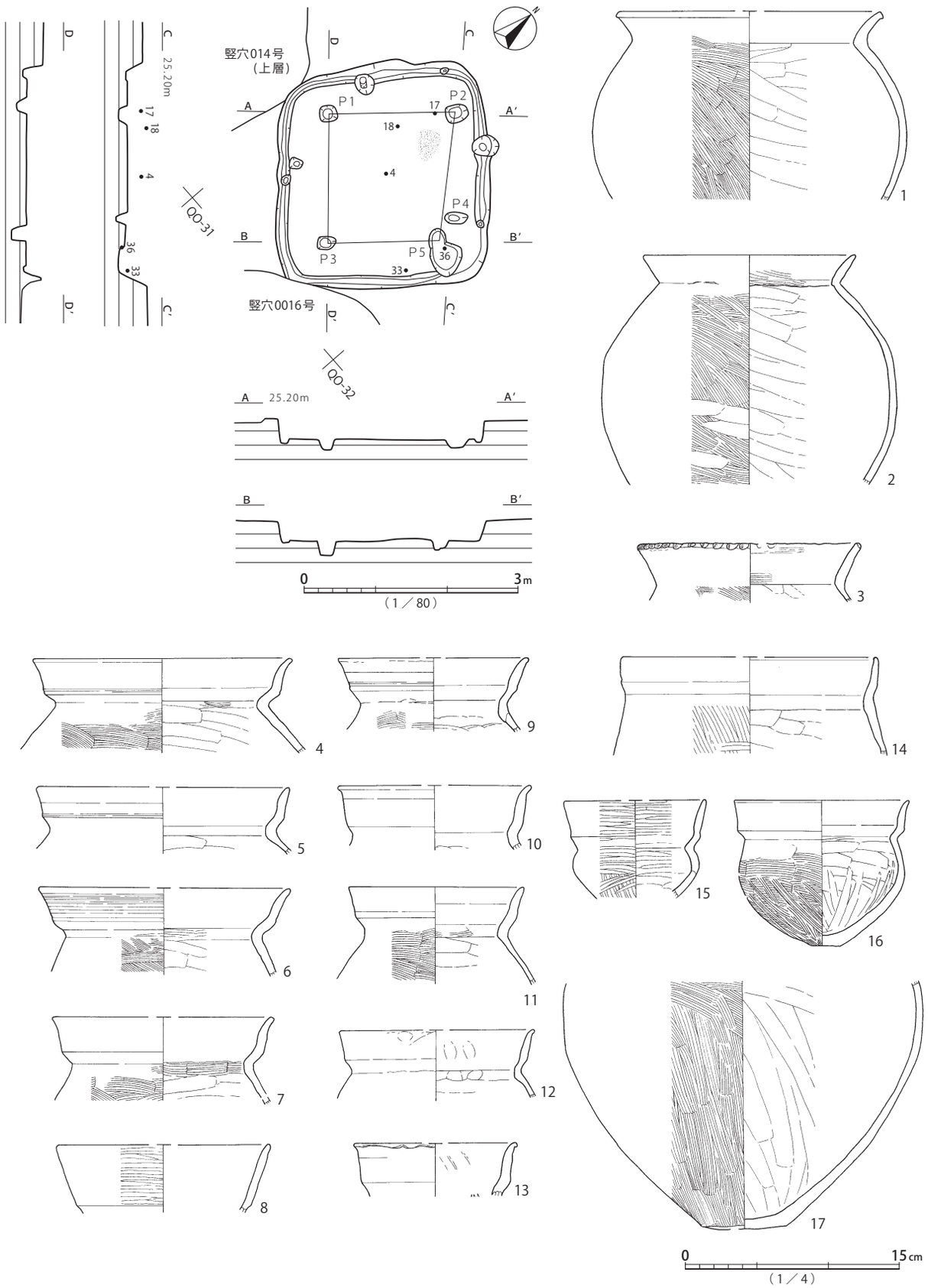


Fig.91　竪穴0015号(1) 遺構遺物

竪穴 0015 号

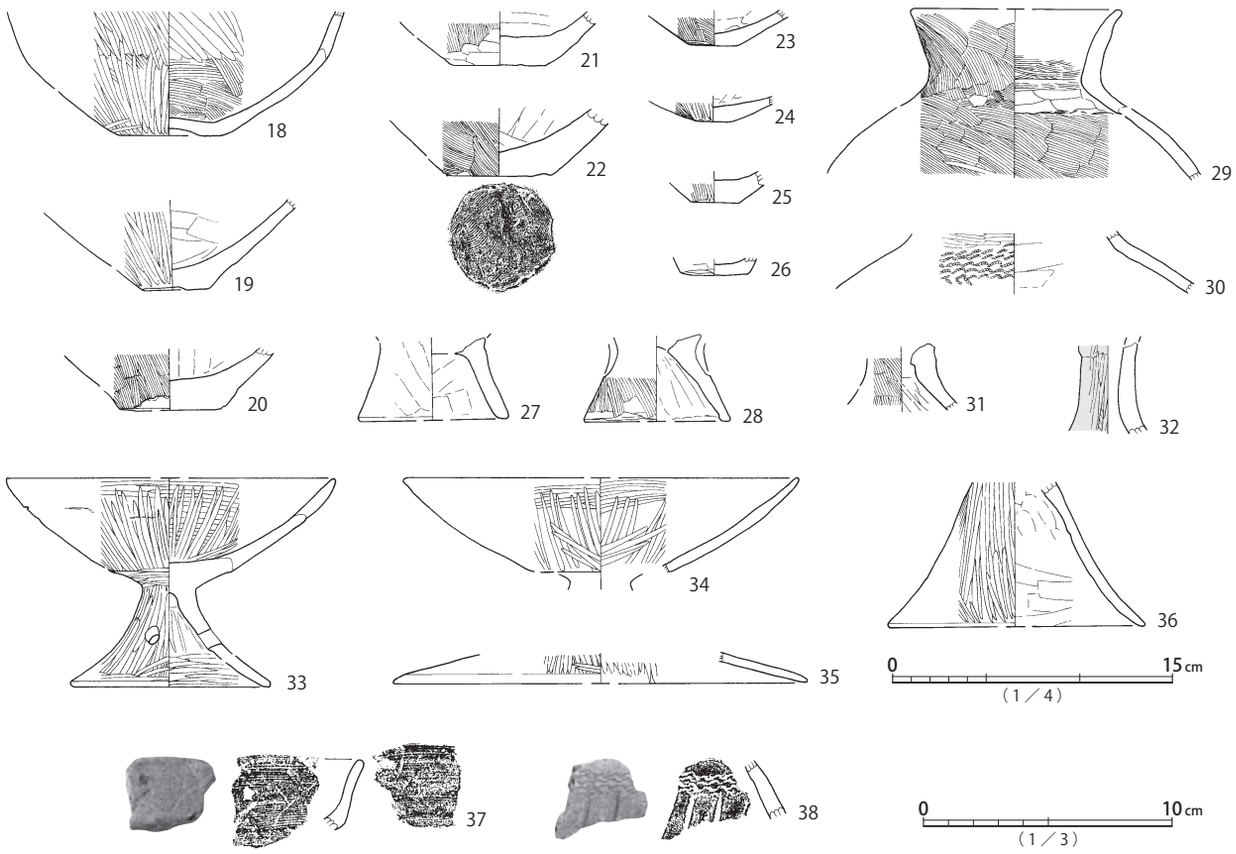


Fig.92　竪穴0015号(2) 遺物

本遺構の土器は過去に公表されており（比田井 1987）、比田井論文第５図 48 は本報告 4、49 は 6、50 は 7、51 は 5、52 は 37、53 は 14、54 は 11、55 は 10、56 は 9、57 は 15、58 は 16、59 は 24、60 は 23、61 は 32、62 は 8、63 は 1、64 は 2、65 は 35 か、66 は 31、67 は 33 に対応すると思われる。なお、比田井論文第５図 74・79 は 37 号住出土土器として紹介されているが、遺物注記番号は 015−xxxx となっていることから、本遺構からの出土と判断した。比田井−74 は本報告 29、79 は 18 にそれぞれ対応する。

大村は中台編年の基準資料としてこれらの土器を用いており、中台２−２式に位置付け、漆町５群から６群を含む幅で捉えている（大村 2009）。弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴 0016 号　（Fig.93、PL.14・52・106・133）

QO−31 を中心に位置する。北隅で竪穴0015号、南東隅で竪穴017号（上層）、掘立柱建物702号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が017号、702号よりも古い。0015号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から本遺構のほうが古いと考えられる。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は 5.75×5.39m、遺構下場面積は 28.1 ㎡、確認面からの深さは 0.44m を測る。主軸方位は N−48°−W である。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2 間から検出されている。P1〜4 は主柱穴である。P5 は出入口施設であろうか。貯蔵穴と壁周溝は検出されていない。

竪穴 0016号

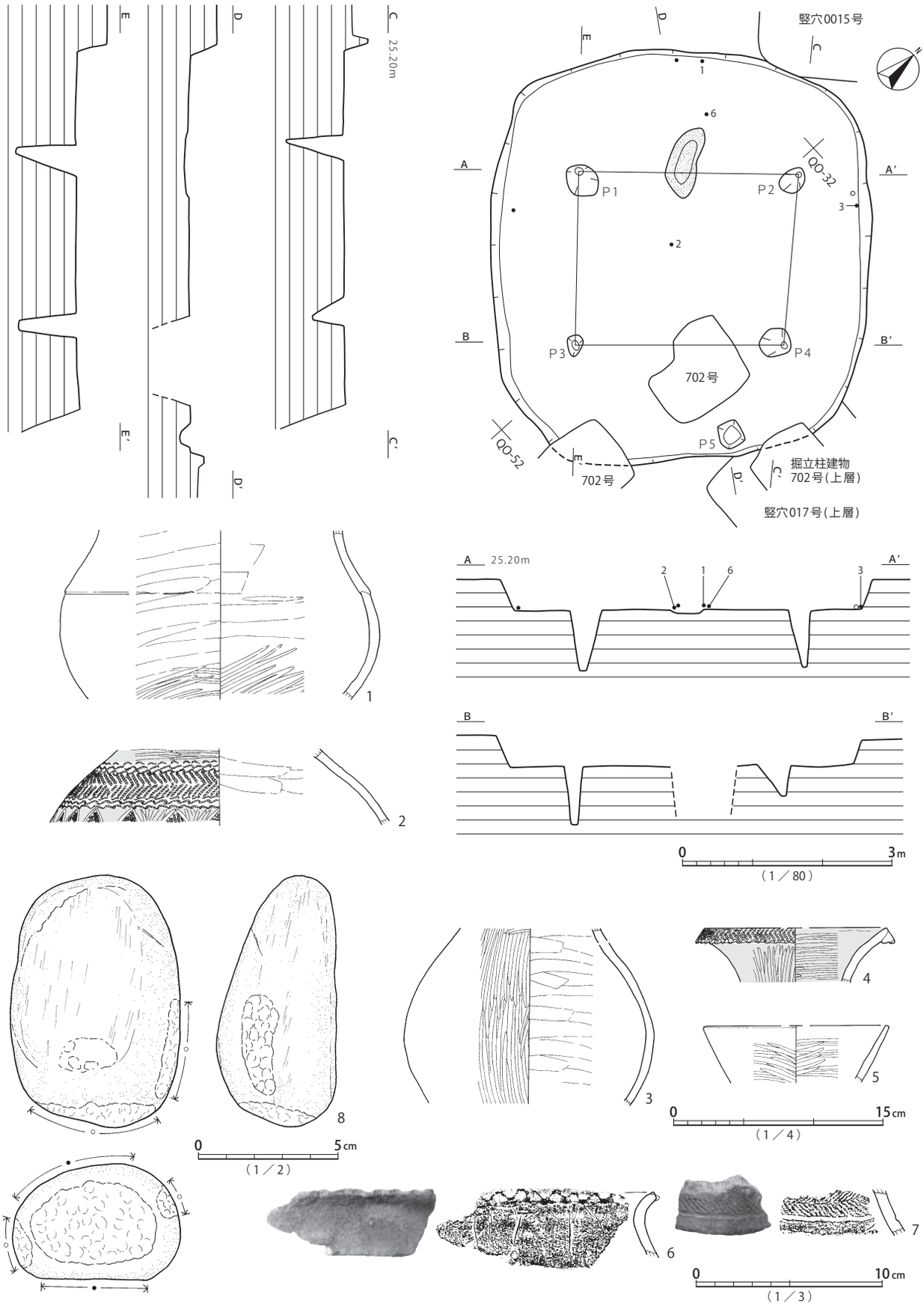


Fig.93　竪穴0016号 遺構遺物

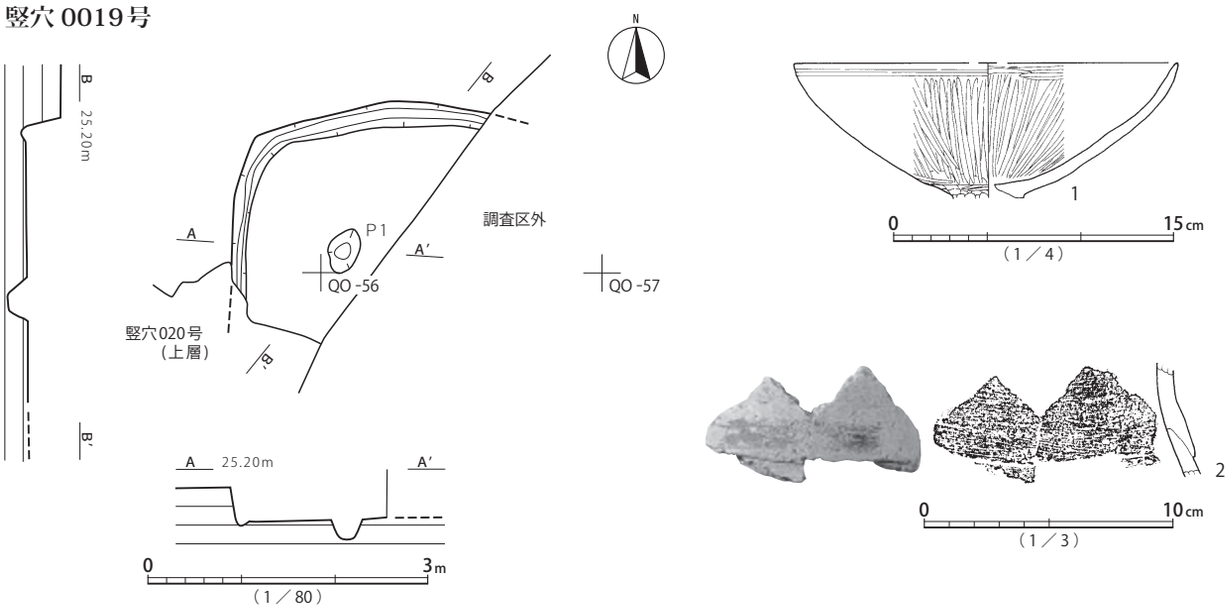


Fig.94　竪穴0019号 遺構遺物

実測可能遺物は、1・6は甕形土器、2～5・7は壺形土器である。1は胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残し、段部への押捺は省略される。土器以外では8の磨石・敲石が出土している。1は北西辺壁際、2は遺構中央、3は北東辺壁際、6は炉跡北側から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴0019号　（Fig.94、PL.14・106）

QO−56を中心に位置する。南西側で竪穴020号（上層）と重複し、東側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が竪穴020号よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈すと思われるが、北西隅が検出されたのみで、詳細は不明である。西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−1°−Eである。確認面からの深さは、0.35mを測る。P1は主柱穴の可能性があるが、掘り込みは浅く、明確でない。壁周溝は全周するものと考えられる。炉跡や貯蔵穴などの屋内施設は、遺構確認範囲からは検出されていない。

実測可能遺物は、1は高杯形土器、2は甕形土器である。1は杯部が浅く、直線的に開く。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴0021号　（Fig.95、PL.14・53・106）

QO−64を中心に位置する。北隅で竪穴020号（上層）、西側で掘立柱建物702号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態はやや不整な方形を呈し、規模は4.95×4.61m、遺構下場面積は18.4㎡、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−30°−Wである。炉跡は遺構ほぼ中央から検出され、壁周溝が全周する。主柱穴や貯蔵穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1は台付甕形土器、2・3は甕形土器、4・7は椀形土器、5は器台形土器、6・8は

竪穴 0021 号

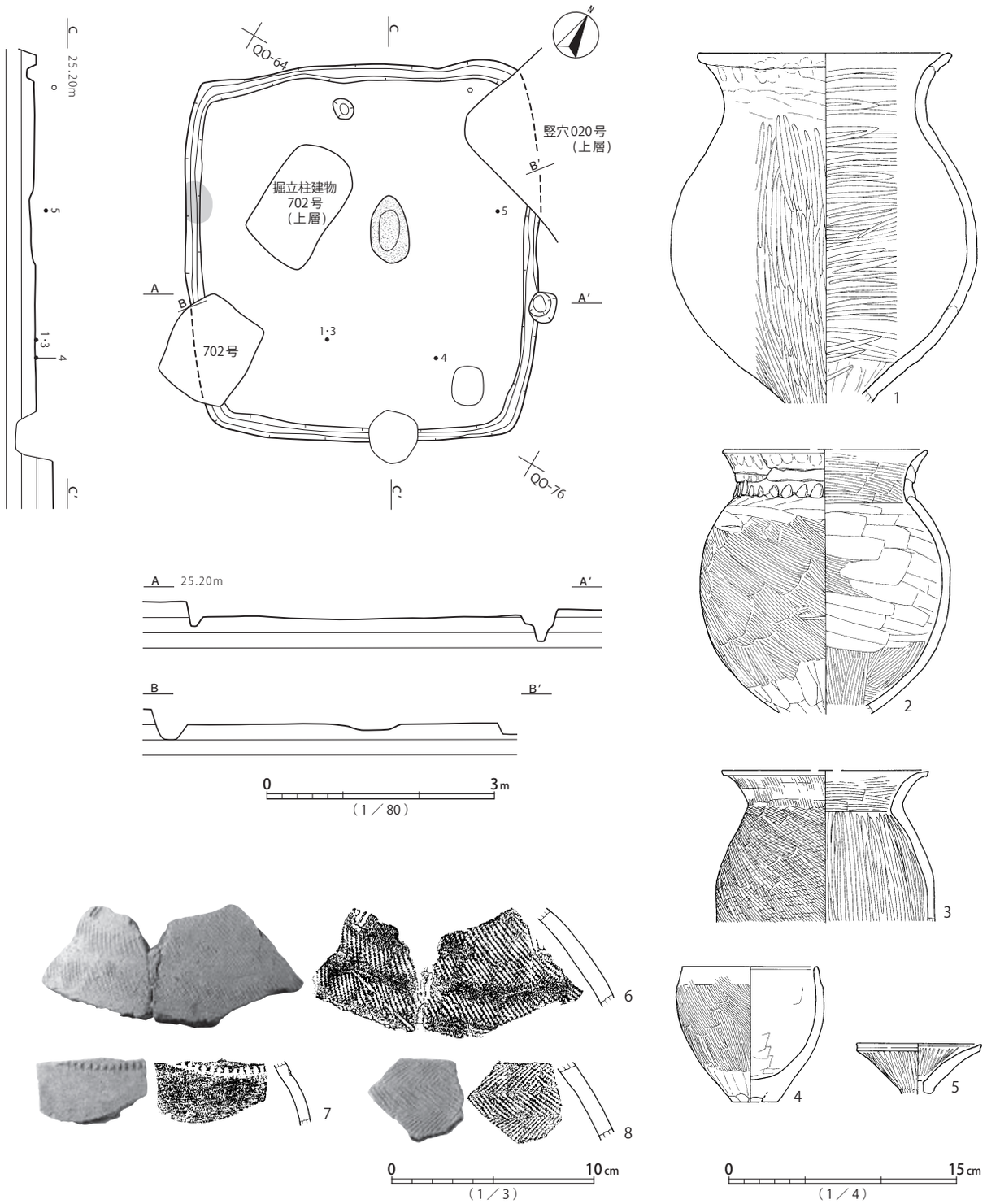


Fig.95　竪穴0021号 遺構遺物

壺形土器である。3は口縁端部を面取りし、胴部はタタキ整形ののちハケ調整を施す。1・3・4は遺構中央南側の床面上、5は東辺壁際の覆土中層からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0022号 （Fig.96、PL.106）

QN−60を中心に位置するものと思われる。南側で竪穴0023号竪穴と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

炉跡の可能性がある火床面が検出されたことから、竪穴建物跡として扱ったが、詳細は不明である。本遺構に伴うと考えられる柱穴や貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物には1・2の壺形土器があるが、本遺構に伴うものかは明確でない。

弥生時代終末期後半頃の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0023号 （Fig.96、PL.15・53・106）

QO−61を中心に位置する。北側で竪穴0022号、東側で竪穴030号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が030号よりも古い。0022号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、規模は6.20×4.80m、遺構下場面積は24.2㎡、確認面からの深さは0.25mを測る。主軸方位はN−17°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は貯蔵穴である。東辺壁際からは柱穴が検出され、壁柱穴の可能性があるが、明確でない。南西隅からは粘土の分布が確認されている。

実測可能遺物は、1は小型の壺形土器、2〜5は高杯形土器、7は台付甕形土器、10は甕形土器、11は広口壺形土器、12は壺形土器、6・8・9は器種不明の底部である。3は厚い器面から高杯形土器としたが、内面にもミガキが施され、壺形土器口縁部の可能性がある。尖底気味の6は内外面赤彩の可能性があり、椀形土器と思われる。

重複する竪穴0022号の遺物を含む可能性があり、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期中葉の所産と思われる。

竪穴0025号 （Fig.97、PL.14・15・53）

QO−83を中心に位置する。北隅で竪穴030号（上層）、西側で掘立柱建物702号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、規模は6.35×5.61m、遺構下場面積は29.1㎡、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位はN−52°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は貯蔵穴である。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2・4・7〜11は壺形土器、3は高杯形土器、5・6は甕形土器である。1・2はP4脇の東辺壁際から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代後期後半の所産と思われる。

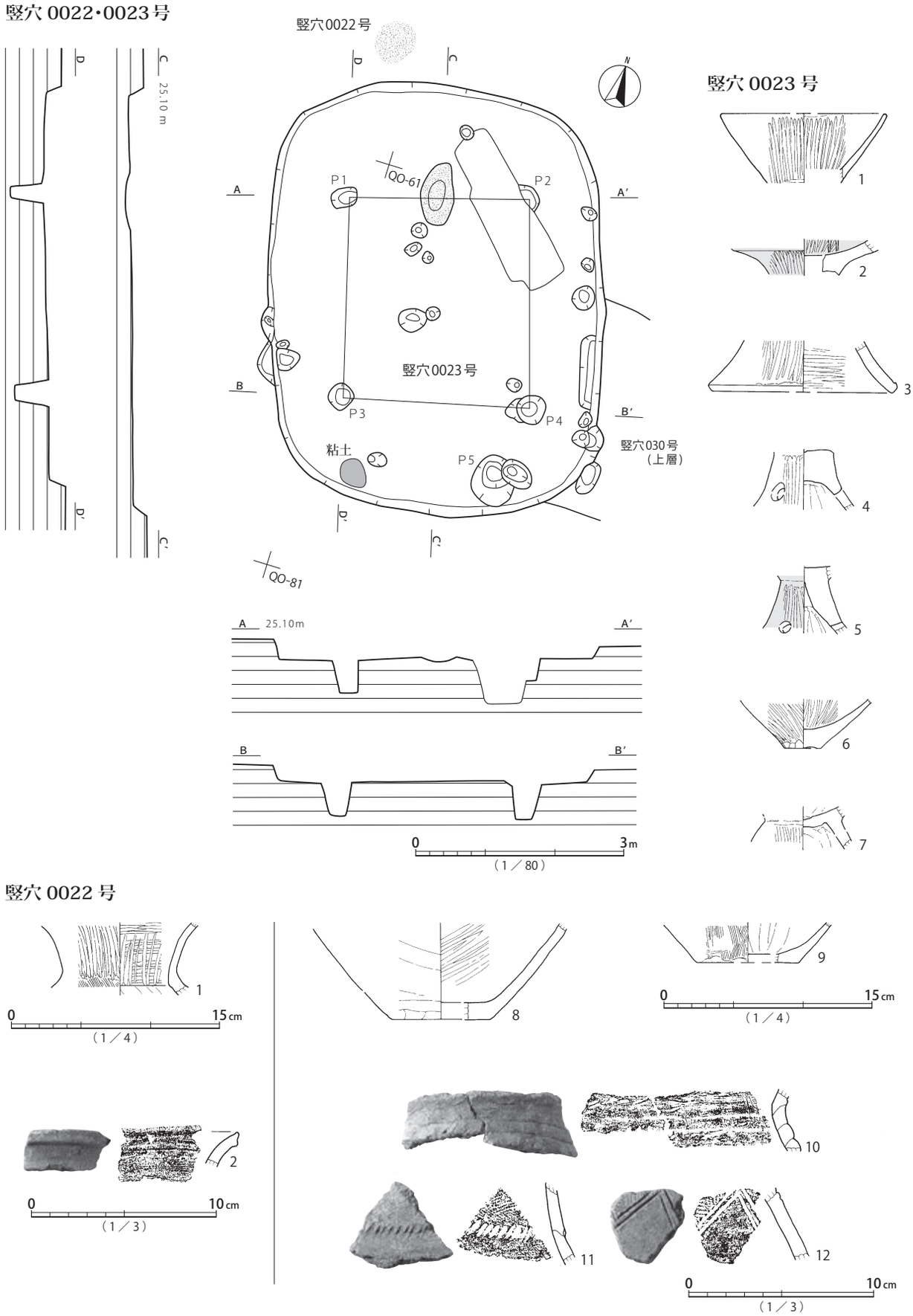


Fig.96　竪穴0022号 遺構遺物、竪穴0023号 遺構遺物

竪穴 0025 号

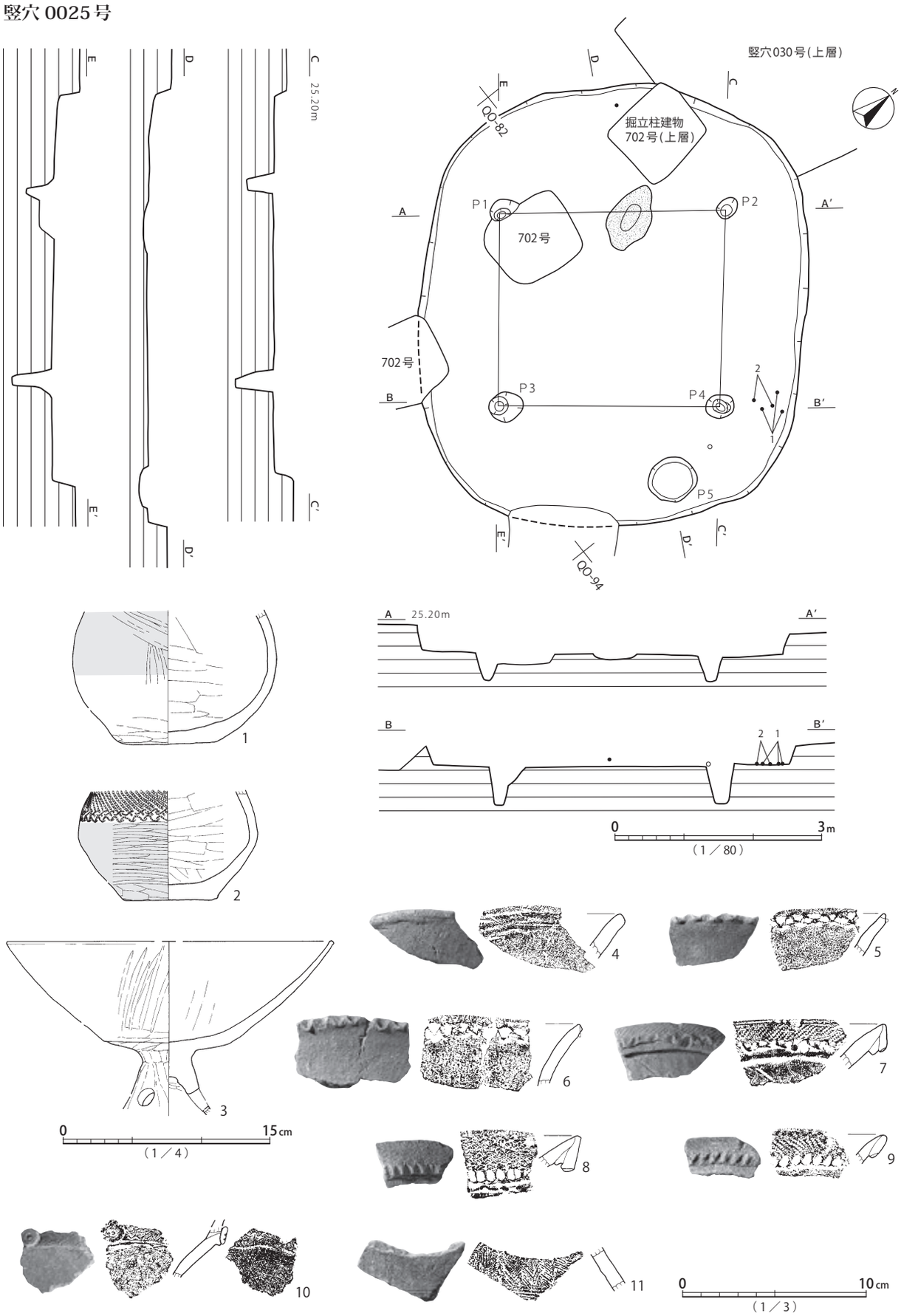


Fig.97　竪穴0025号 遺構遺物

竪穴 0026号

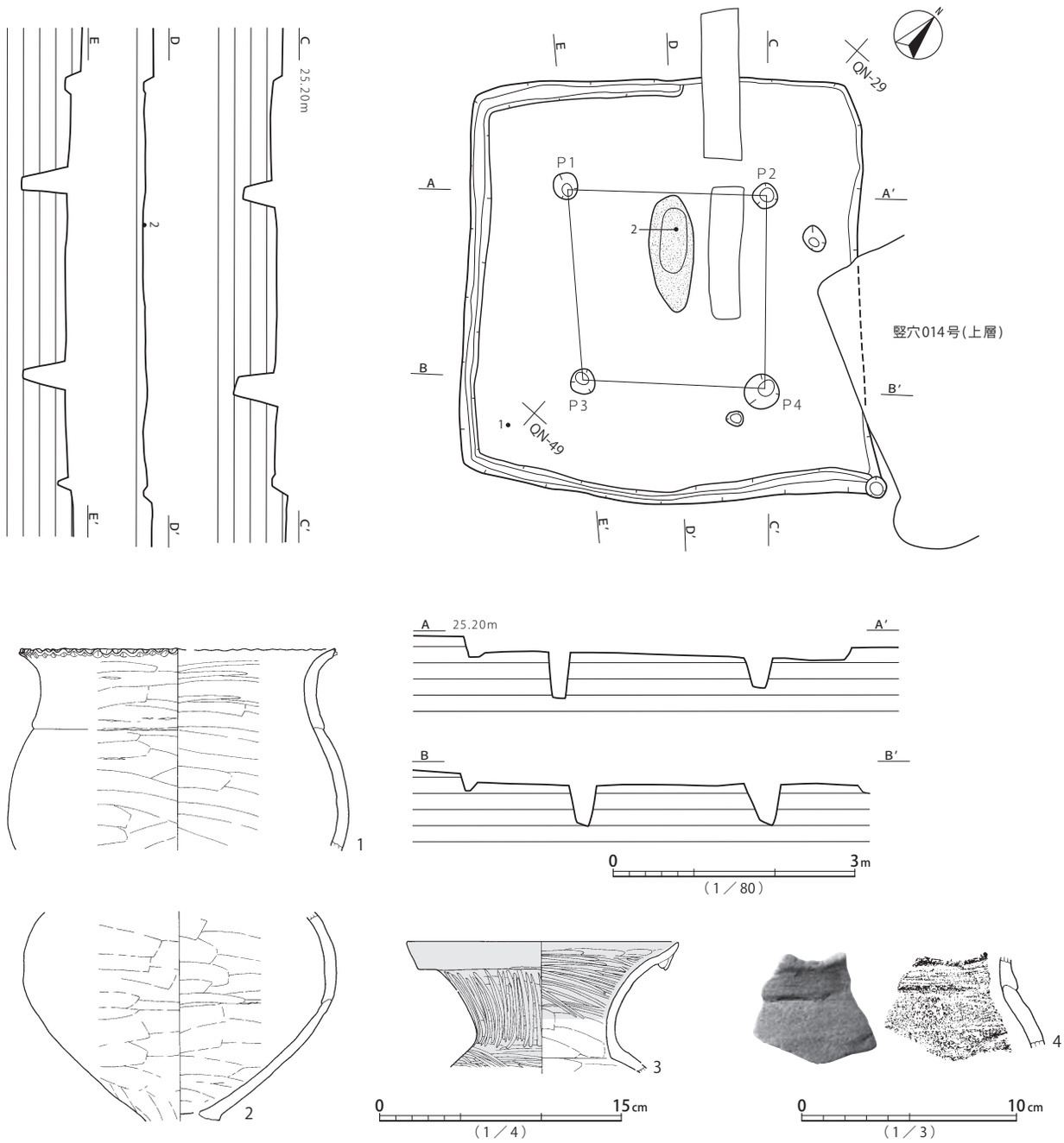


Fig.98　竪穴0026号 遺構遺物

竪穴0026号　（Fig.98、PL.15・53・106）

QN−39を中心に位置する。北東辺壁の一部で竪穴014号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が014号よりも古い。

平面形態は方形を呈し、規模は5.22×4.79m、遺構下場面積は21.9㎡、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位はN−42°−Wである。炉跡は長い掘り込みをもち、遺構のほぼ中央から検出されている。P1〜4は主柱穴である。壁周溝が巡るが、北隅から北東辺では途切れている。貯蔵穴は検出されていない。

竪穴0027号

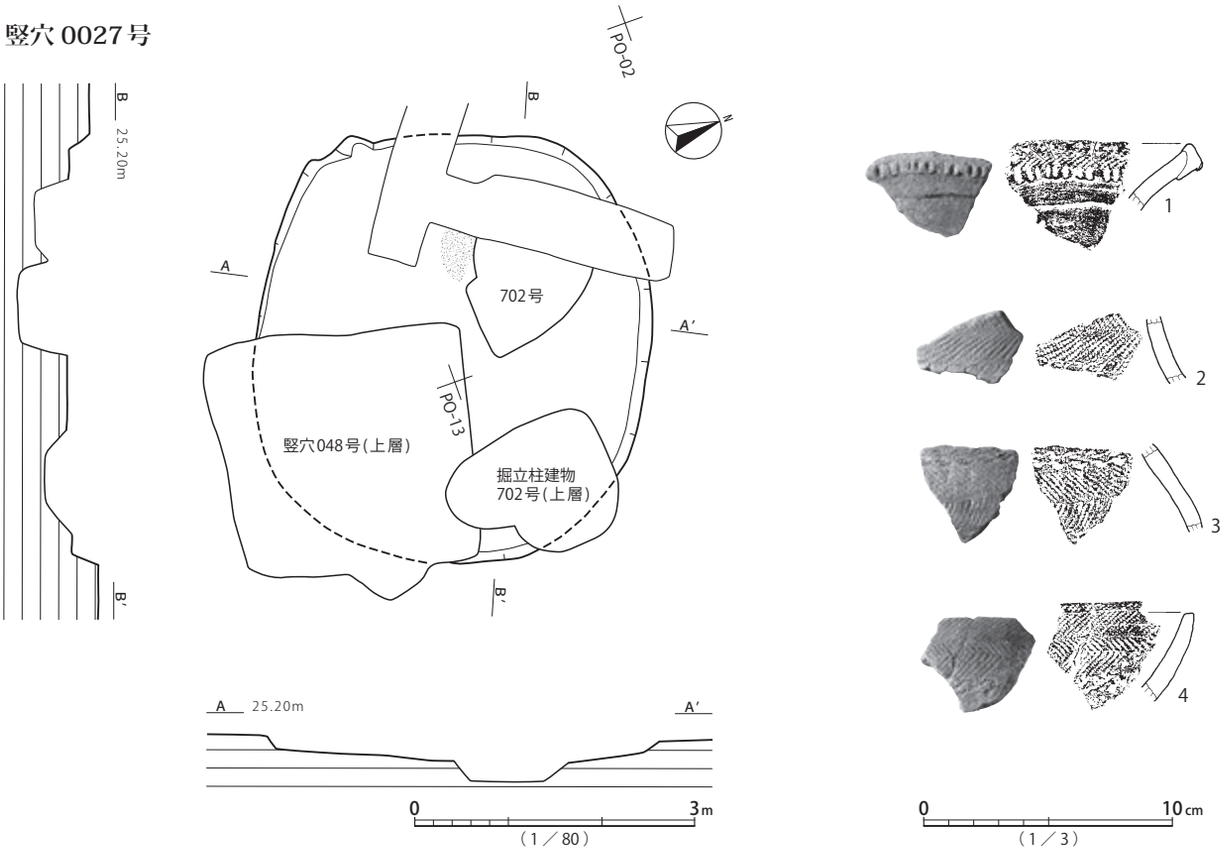


Fig.99　竪穴0027号 遺構遺物

実測可能遺物は、1・4は甕形土器、2は台付甕形土器、3は壺形土器である。1は口縁端部に交互押捺を施し、胴肩部の段部への押捺は省略される。1は南隅の覆土下層、2は炉内からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0027号　（Fig.99）

PO−02を中心に位置する。南東側で竪穴048号（上層）、北側で掘立柱建物702号（上層）と重複し、北西側は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は楕円形を呈し、推定規模は4.54×4.22m、推定遺構下場面積は14.6㎡、確認面からの深さは0.41mを測る。主軸方位はN−70°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。主柱穴や壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜3は壺形土器、4は椀形土器で、いずれも帯縄文が施される。

弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0028号　（Fig.100、PL.15・53・106）

PO−14を中心に位置する。北側で掘立柱建物702号（上層）、南東側で掘立柱建物704号a（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は4.75×4.19m、遺構下場面積は15.0㎡、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位はN−28°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りの、P1・2間から検出され

竪穴 0028 号

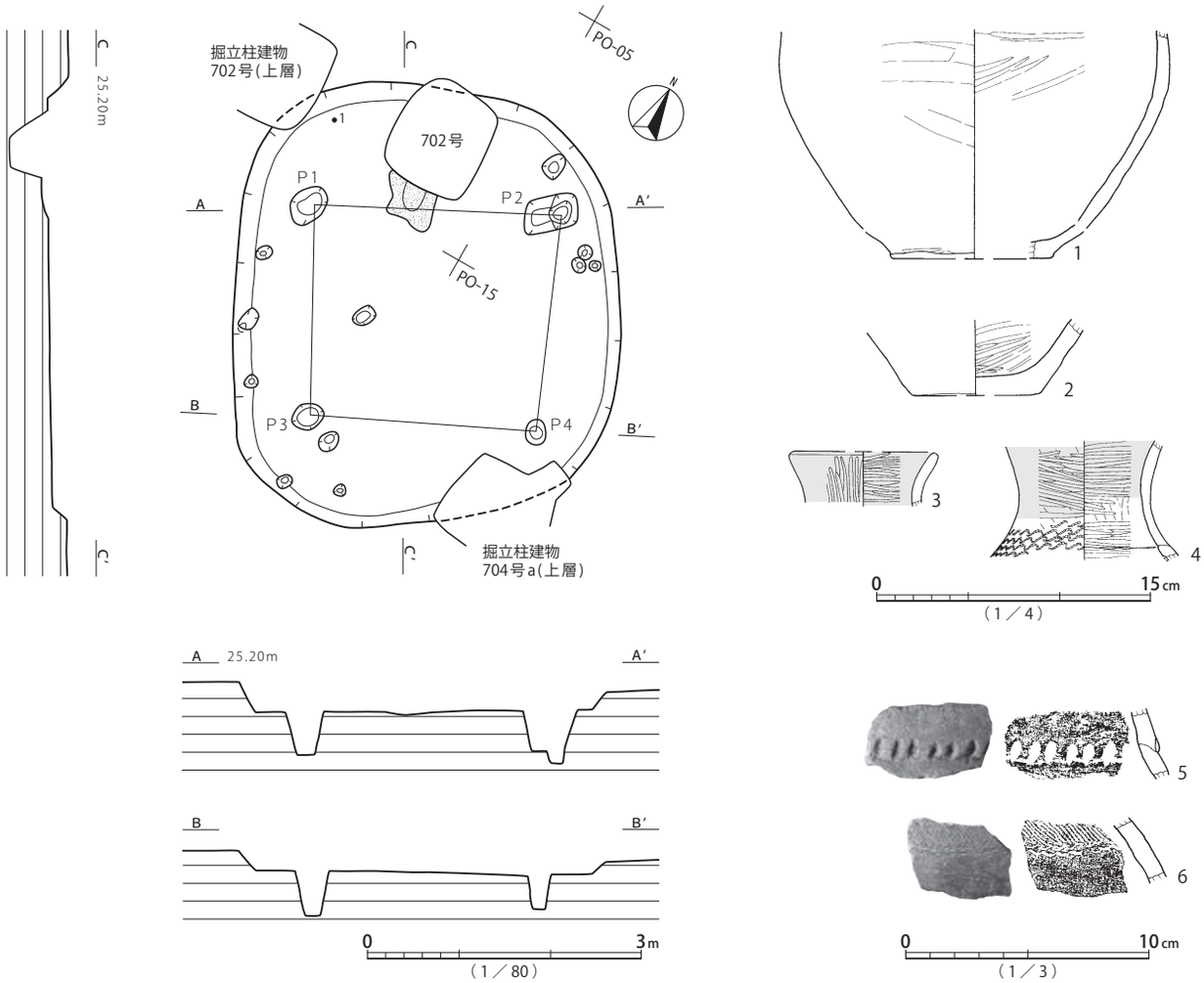


Fig.100　竪穴0028号 遺構遺物

ている。P1～4は主柱穴で、P2では柱の抜き取りないし据え替え痕が認められる。貯蔵穴や出入口施設、壁周溝などの屋内施設は検出されないが、南西辺壁際の小柱穴は、壁柱穴の可能性がある。

実測可能遺物は、1・5は甕形土器、2は器種不明の底部、3・4・6は壺形土器である。1は北西隅からの出土であるが、垂直位置は不明である。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴0036号　（Fig.101、PL.15・106）

SN−80を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は4.86×4.32m、遺構下場面積は15.0㎡、確認面からの深さは0.41mを測る。主軸方位はN−52°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りの、P1・2間から検出されている。P1～4は主柱穴、P5は貯蔵穴である。壁周溝が全周する。

実測可能遺物は、1は壺形土器、2は椀形土器、3は甕形土器である。1は北西壁際から検出され、床面上からの出土である。

竪穴 0036 号

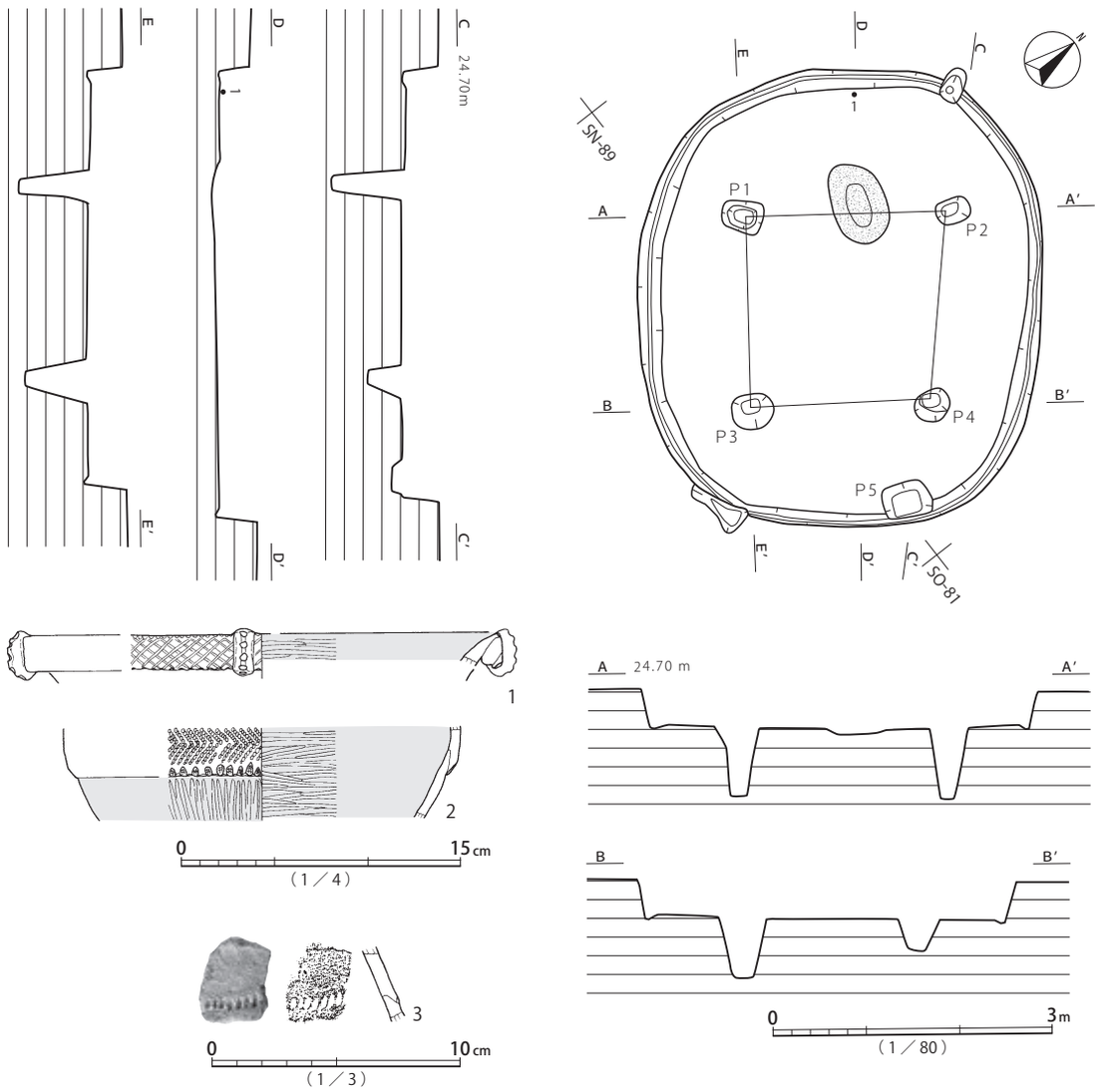


Fig.101　竪穴0036号 遺構遺物

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴0037号　（Fig.102・103、PL.15・53・54・106・107・133・140）

SO−71を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は小型の胴張隅丸方形を呈し、規模は3.70×3.54m、遺構下場面積は10.2㎡、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位はN−2°−Eである。炉跡は遺構のほぼ中央から検出されており、調査図面には記載がなかったが、写真から判断しておよその位置を記した。明確な主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜5・8・10〜14・16〜20・22・30〜43は甕形土器、6・9・15・23・24・44〜46は壺形土器、7は小型壺形土器、26・27は器台形土器、28・29は高杯形土器である。21は台付甕形土器、25は壺形土器と思われるが、25は直径が不確実で、上下逆の可能性もある。このうち2・3・

竪穴 0037 号

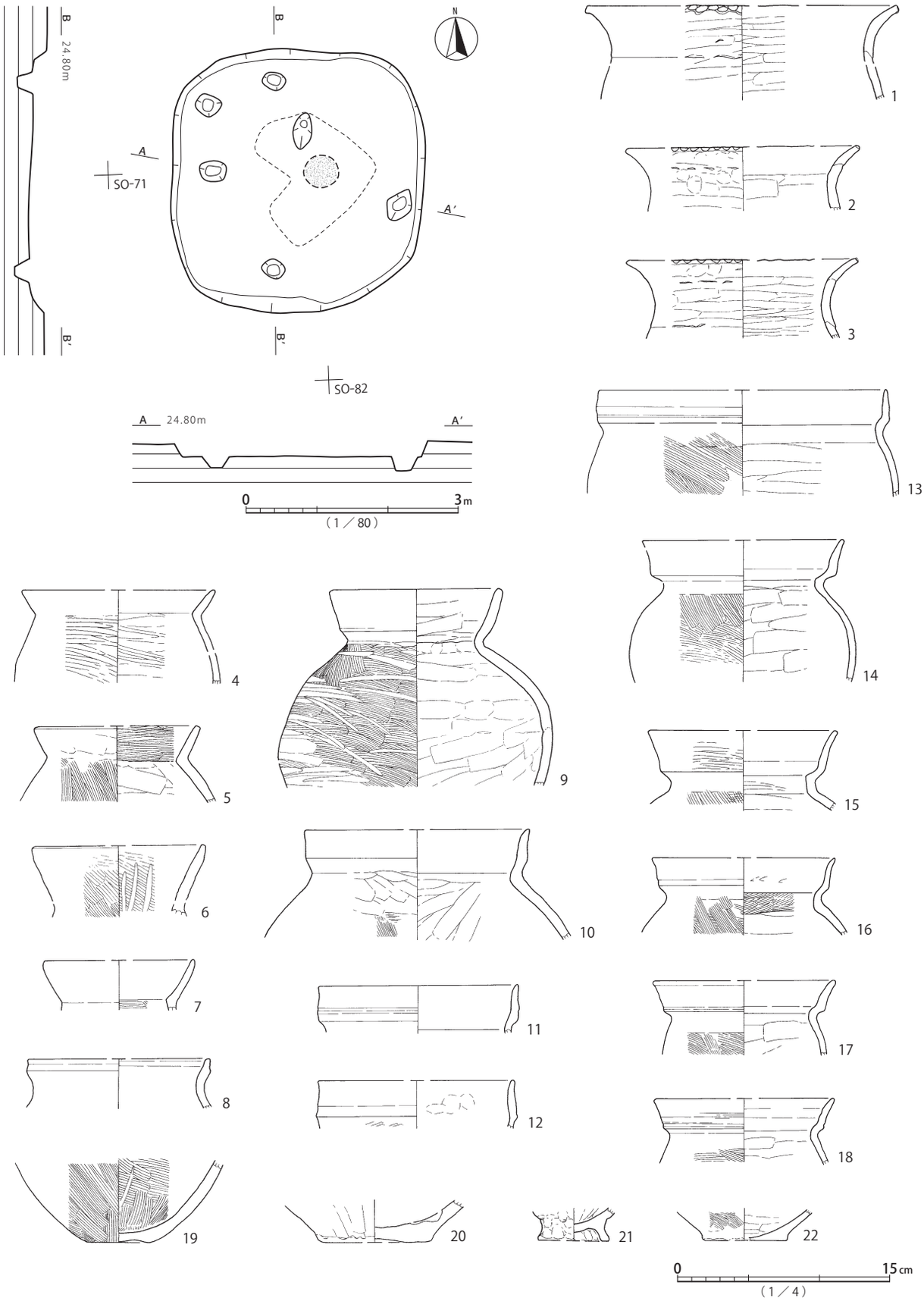


Fig.102　竪穴0037号(1) 遺構遺物

竪穴 0037号

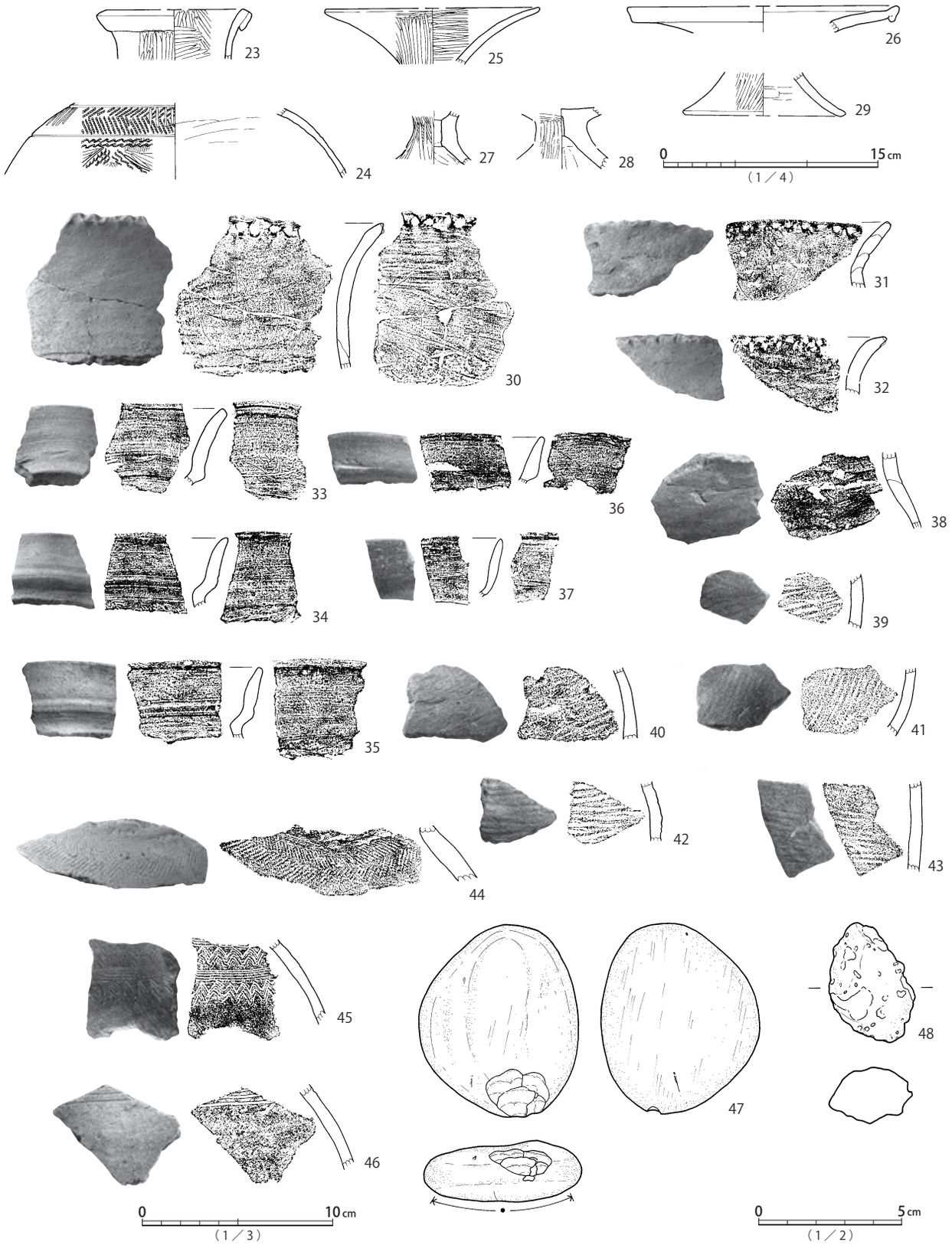


Fig.103　竪穴0037号(2) 遺物

31、5・19、17・18は、それぞれ同一個体の可能性がある。

出土遺物は外来系土器を主体とし、口縁端部に押捺を加える甕形土器や胴肩部に結節文区画の帯縄文を施す壺形土器など、在地系の土器がわずかに混じる。受口状口縁の8は近江系、5の字状有段口縁の9～18・33～37は北陸南西部系、タタキ整形が施される39～43は畿内系である。櫛描横線文と波状文が施される45も非在地系であろう。土器以外では47の磨石・敲石、48の軽石が出土している。

本竪穴の土器は過去に公表されており（比田井1987）、比田井論文第5図68は本報告14、69は16、70は12、71は33か、72は18、73は9、75は20か、76は23、77は21、78は28、80は27、81は30、82は1、83は3、84は4、85は26に対応すると思われる。なお、比田井論文中で本竪穴からの出土としている74の単口縁壺形土器と79の底部は、竪穴0015号の本報告29と18にそれぞれ対応する。

竪穴0015号とほぼ同時期と考えられ、平面形態は異なるものの、いずれも小型という共通点をもつ。大村は中台編年の基準資料としてこれらの土器を用いており、中台2−2式に位置付け、漆町5群から6群を含む幅で捉えている（大村2009）。弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴 0038 号　（Fig.104、PL.15・107・142）

SO−81を中心に位置する。他遺構との重複はないが、北隅の一部は撹乱により壊される。

平面形態は楕円形を呈し、規模は4.25×3.97m、遺構下場面積は12.9㎡、確認面からの深さは0.25mを測る。主軸方位はN−46°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1～4は主柱穴で、P5は貯蔵穴ないし出入口施設と考えられる。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2は甕形土器、3は椀形土器である。2は口縁端部を面取り、3は擬縄文を施す。土器以外では4の端部が丸い円柱状の土製品が出土している。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴 0040 号　（Fig.105、PL.16）

SO−94を中心に位置する。他遺構との重複はないが、南辺壁の一部が調査区外に延びる。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は4.32×3.94m、遺構下場面積は13.7㎡、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位はN−68°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。北辺壁際と出入口付近で焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。

実測可能遺物は、1は広口壺形土器、2・3は同一個体の壺形土器である。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後葉の所産と思われる。

竪穴 0041 号　（Fig.105、PL.16・54・107）

SO−54を中心に位置する。他遺構との重複はないが、中央を南北に撹乱により壊される。

平面形態は小型の隅丸方形を呈し、規模は3.50×3.65m、遺構下場面積は10.0㎡、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位はN−36°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出され、軸を東西方向に傾けて設ける。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

竪穴 0038号

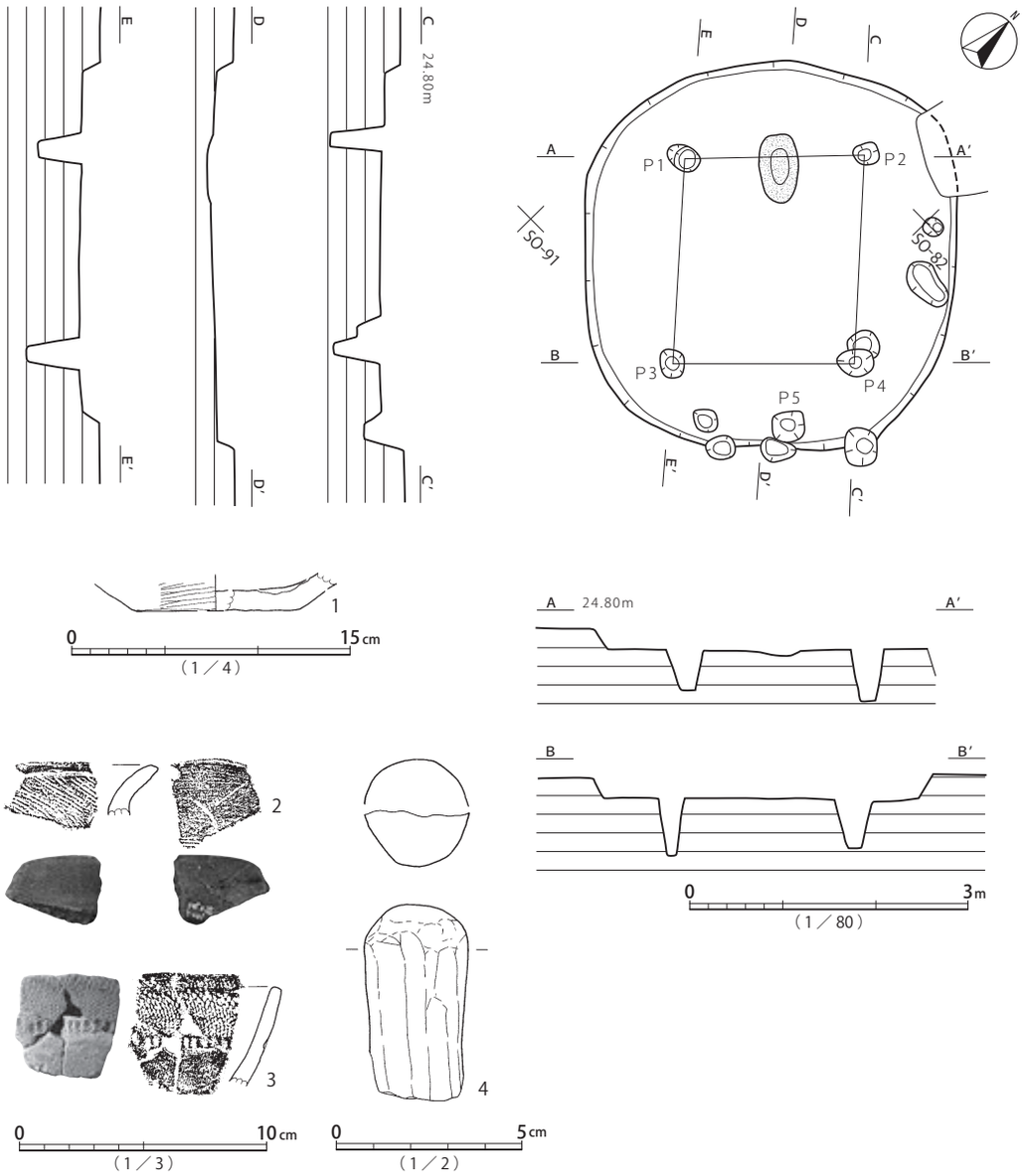


Fig.104　竪穴0038号 遺構遺物

実測可能遺物は、1は高杯形土器、2は器台形土器、3は椀形土器、4は壺形土器である。2の貫通孔は高さのない筒状を呈する。

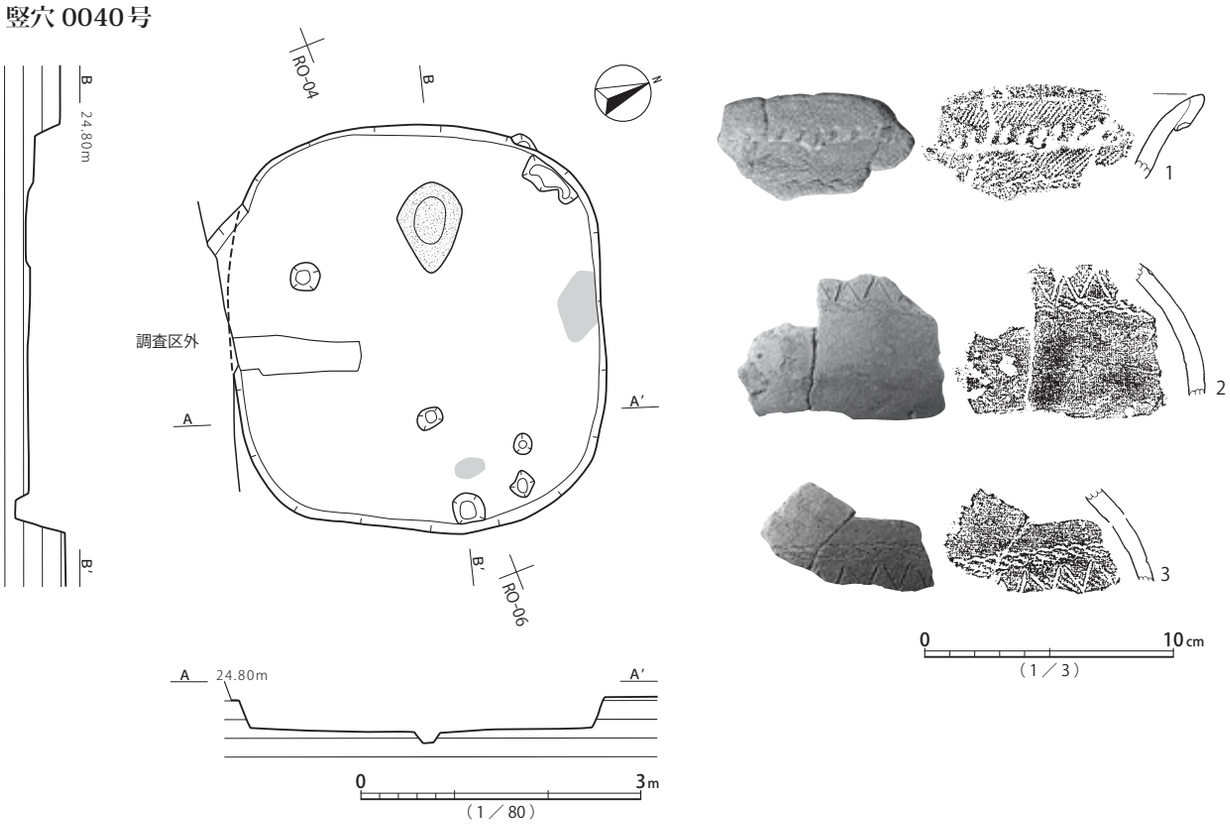
帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0043号　（Fig.106、PL.16・54・107）

SO−77を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、規模は3.93×3.82m、遺構下場面積は11.8㎡、確認面からの深さは0.34mを測る。主軸方位はN−54°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。南東辺壁際から検出されたP1は出入口施設と思われるが、その他の柱穴は本遺構に伴うも

竪穴 0040 号



竪穴 0041 号

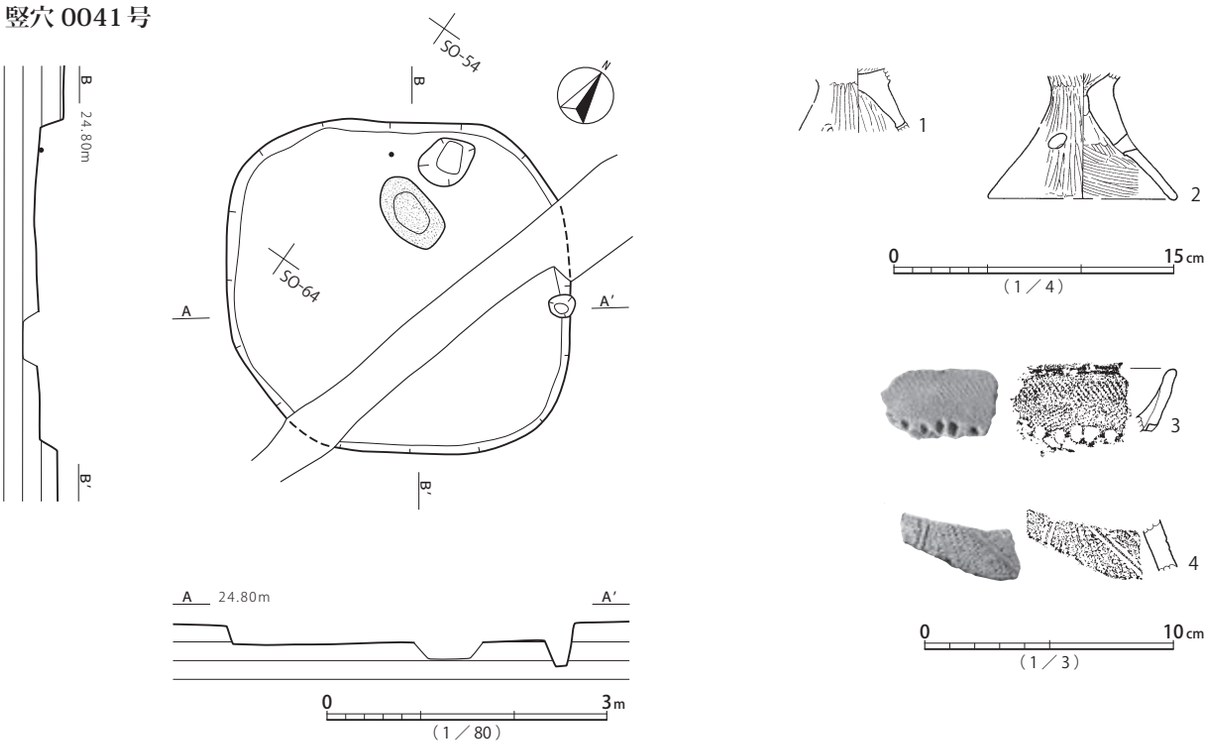


Fig.105　竪穴0040号 遺構遺物、竪穴0041号 遺構遺物

竪穴 0043 号

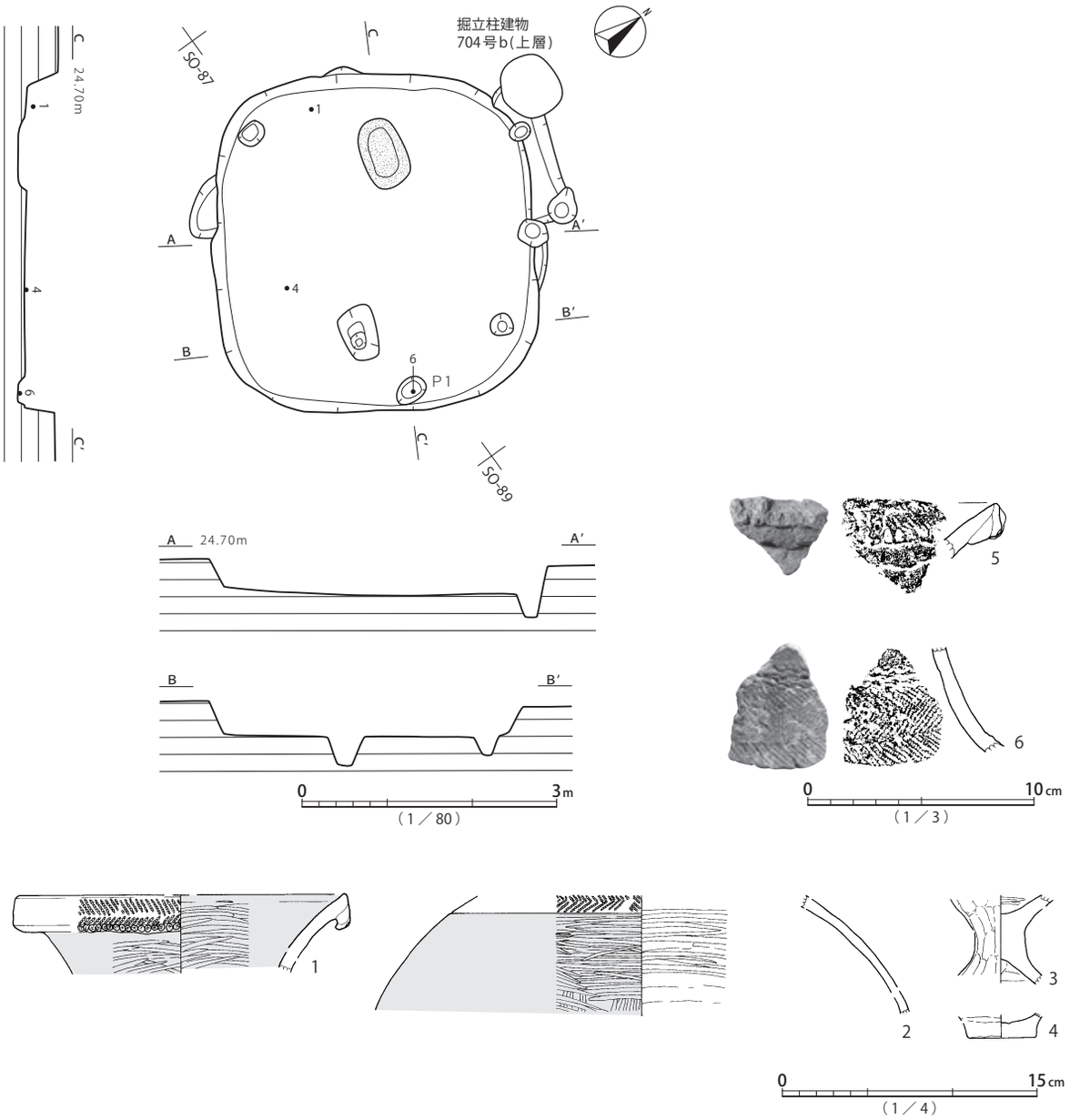


Fig.106　竪穴0043号 遺構遺物

のか、明確でない。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2・5・6は壺形土器、4は器種不明の底部である。3は高杯形土器であろうか。このうち、1と2は同一個体の可能性がある。壺形土器の帯縄文区画は、沈線と結節文とが混在する。1は西隅付近、4は遺構中央南寄りから検出され、いずれも床面上からの出土。6はP1内からの出土である。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴 0045 号　（Fig.107、PL.16・94・107）

SP−82を中心に位置する。北東隅から南辺壁中央にかけて直線的に並ぶ柱穴と重複し、北辺壁の

竪穴 0045 号

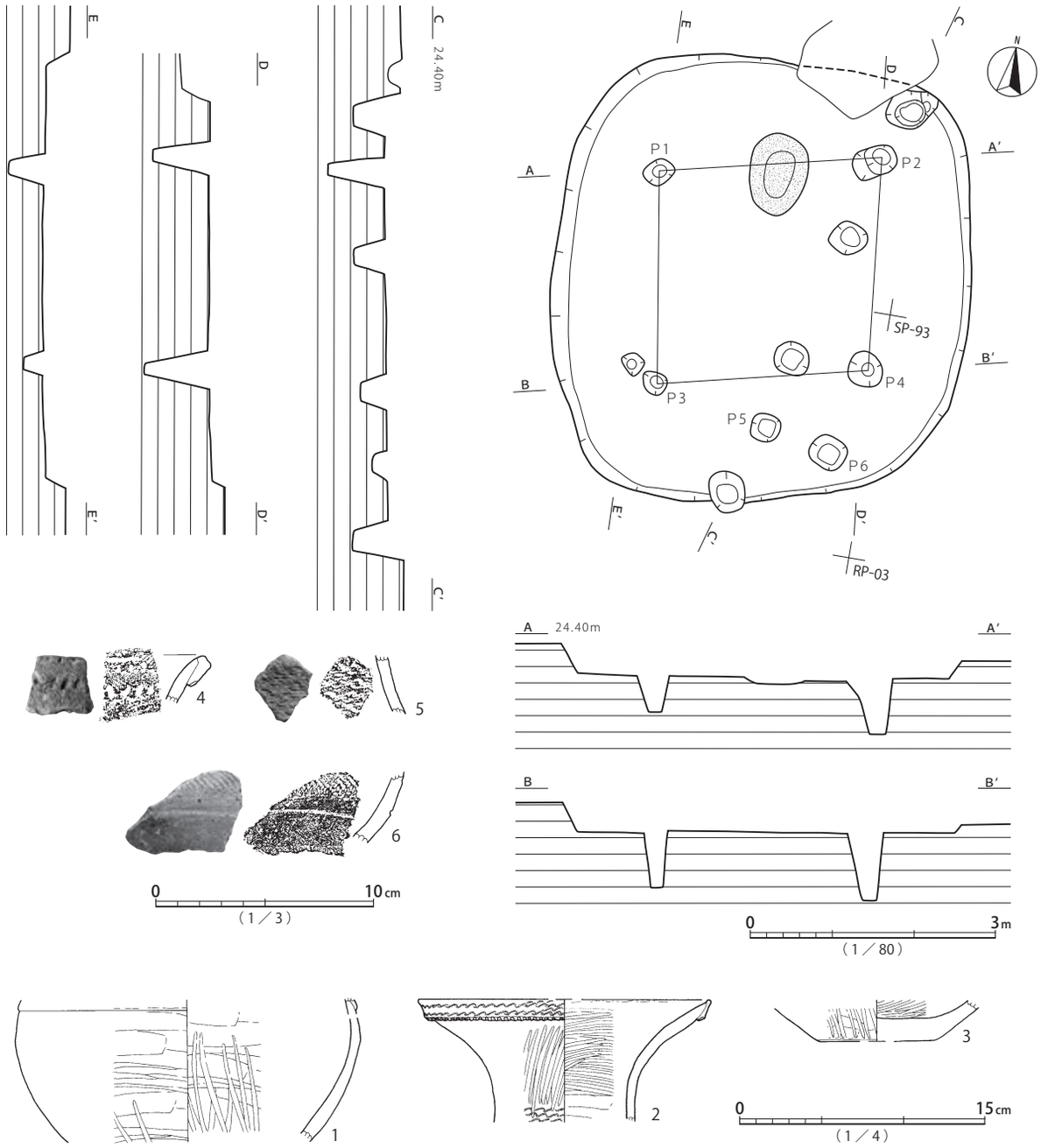


Fig.107　竪穴0045号 遺構遺物

一部は撹乱により壊される。柱穴は上層遺構に伴うものと思われる。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は5.34×5.11m、遺構下場面積は21.8㎡、確認面からの深さは0.25mを測る。主軸方位はN−9°−Wである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴で、配置は菱形気味となる。P5は出入口施設、P6は貯蔵穴であろう。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2・4・5は壺形土器、3は器種不明の底部、6は椀形土器である。

弥生時代後期後半の所産と考えられる。

竪穴0046号　（Fig.108、PL.16）

RO−19を中心に位置する。他遺構との重複はないが、南側は調査区外へ延びる。

平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、規模は副軸長4.17m、確認面からの深さは0.26mを測る。主軸方位はN−12°−Eである。炉跡は中軸線上北寄りから検出され、軸をやや東に傾けて設ける。P1・2は主柱穴の可能性があるが、掘り込みも浅く、明確でない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物がなく、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0047号　（Fig.108、PL.16・54）

RO−10を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は楕円形を呈し、規模は4.17×3.96m、遺構下場面積は13.2㎡、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位はN−35°−Wである。炉跡は中軸線上中央北西寄りから検出されるが、掘り込みは明確でない。遺構内からは複数の柱穴が検出されているが、明確な主柱穴は検出されず、貯蔵穴や出入口施設を特定することもできない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2・3は壺形土器である。1は東辺壁際から検出され、床面上からの出土である。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0049号　（Fig.108、PL.16）

PO−22を中心に位置する。北東・南東隅で掘立柱建物3173号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3173号よりも古い。

平面形態は小型の不整楕円形を呈し、規模は3.62×3.53m、遺構下場面積は9.6㎡、確認面からの深さは0.04mを測る。主軸方位はN−68°−Wである。P1〜4は主柱穴と思われるが、主軸と直交方向に長方形に配置される。炉跡や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0050号　（Fig.109、PL.16・54・107）

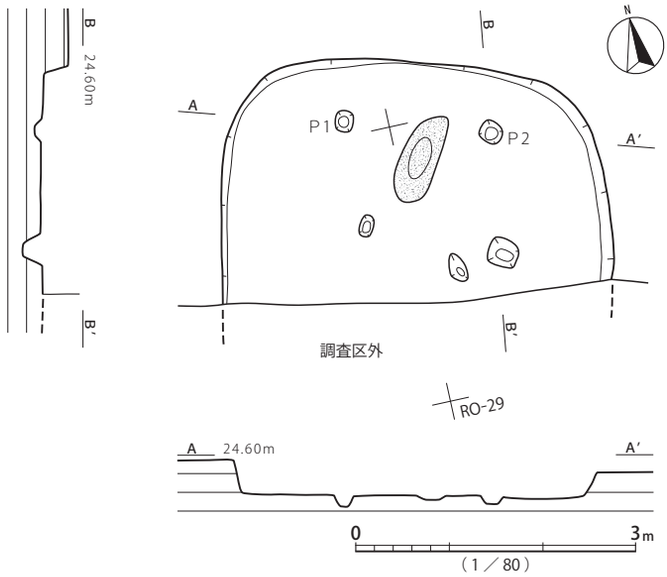
PO−32を中心に位置する。東側で掘立柱建物3170・3173号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は5.15×4.87m、遺構下場面積は20.7㎡、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位はN−48°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴である。壁周溝は検出されず、貯蔵穴と出入口施設の有無は明確でない。南西辺壁中央に接してU字状の浅い溝が検出されているが、本遺構に伴うものかは不明である。

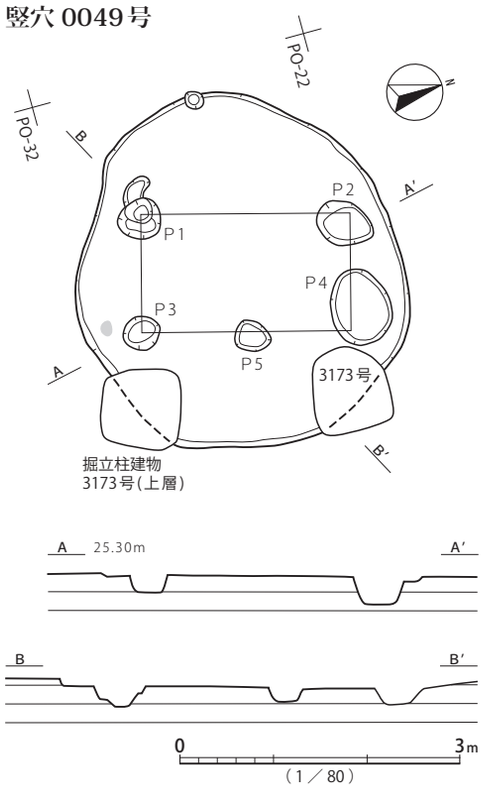
実測可能遺物は、1は壺形ないし椀形土器、2・3は器種不明の底部、4は器種不明のミニチュア土器、5は壺形土器である。4は単沈線の山形文が施される。

弥生時代後期後葉の所産と考えられる。

竪穴 0046号



竪穴 0049号



竪穴 0047号

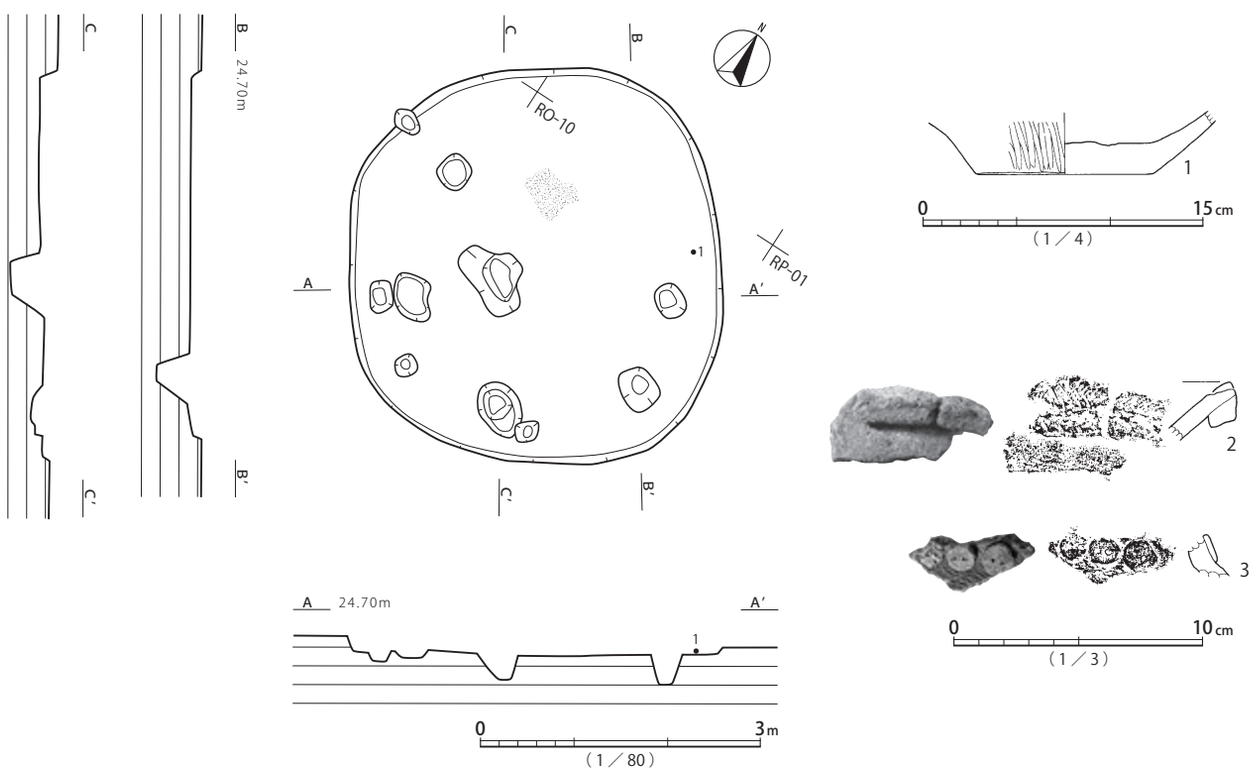


Fig.108　竪穴0046号 遺構、竪穴0047号 遺構遺物、竪穴0049号 遺構

竪穴 0050 号

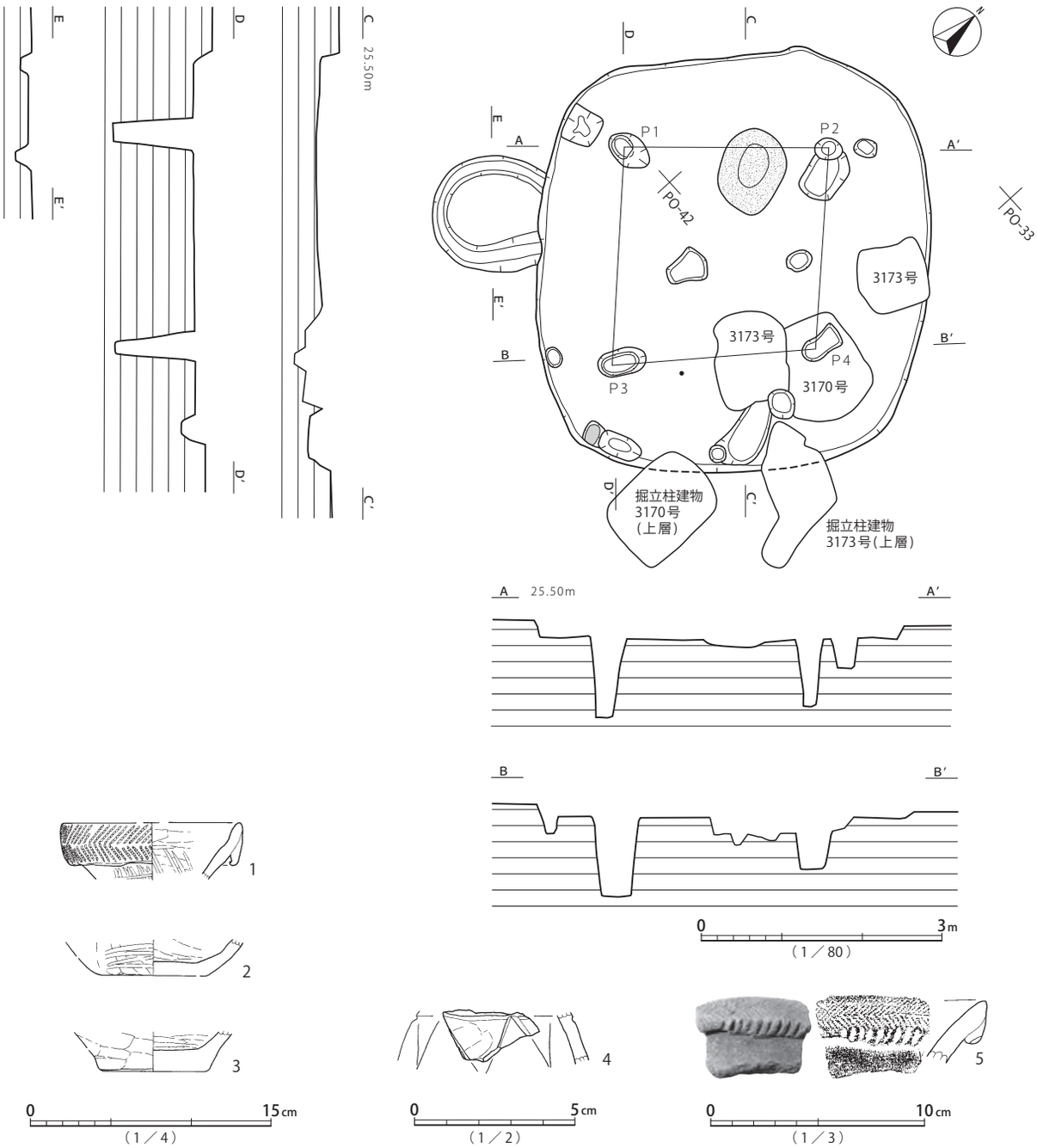


Fig.109　竪穴0050号 遺構遺物

竪穴0051号　（Fig.110、PL.17・54・94・107）

PO−21を中心に位置する。他遺構との重複はないが、中央と北東辺壁の一部は撹乱により壊される。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すが、出入口側が明瞭に張り出すのに対し、奥壁側は直線的になる。規模は4.43×4.15m、遺構下場面積は13.4㎡、確認面からの深さは0.37mを測る。主軸方位はN−29°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。壁周溝が巡るが、P6付近は途切れる。

竪穴 0051 号

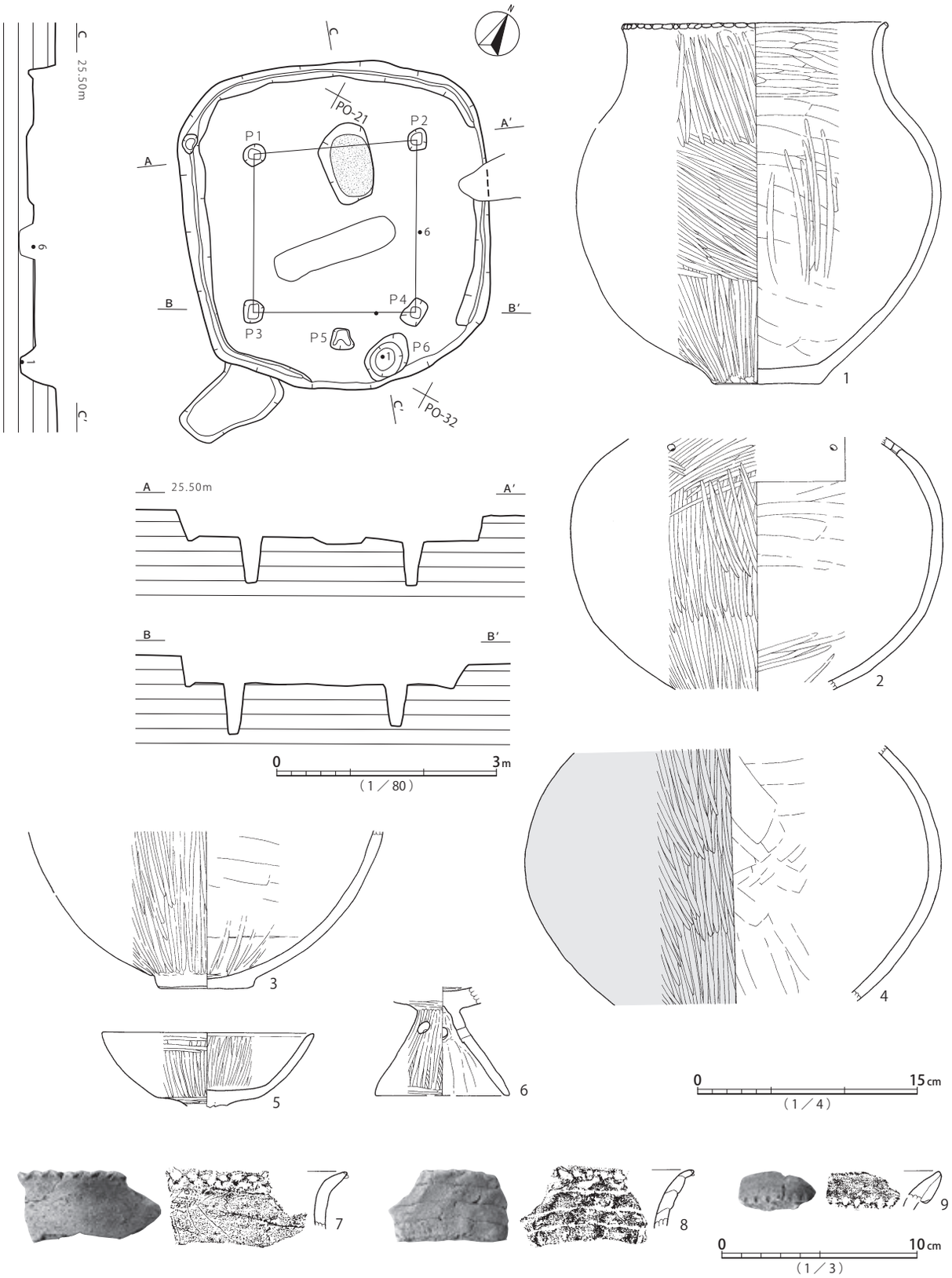


Fig.110　竪穴0051号 遺構遺物

実測可能遺物は、1・7・8は甕形土器、2～4・9は壺形土器、5・6は高杯形土器である。2は胴部上半に焼成後穿孔が施され、3は外面赤彩の可能性がある。1は貯蔵穴と考えられるP6の底面、6はP2・4間中央の床面上からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0052号　（Fig.111、PL.17・54）

PN−50を中心に位置する。他遺構との重複はないが、南西辺壁は調査年次が異なるため、検出することができなかった。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、推定規模は5.02×4.45m、推定遺構下場面積は19.1㎡、確認面からの深さは0.10mを測る。主軸方位はN−55°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1～4は主柱穴、P5は出入口施設である。すべての柱穴に柱の抜き取りないし据え替え痕が認められる。貯蔵穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1～4は甕形土器、5は壺形土器である。1は炉跡の西脇、2はP2の西側、3はP1の南東側から検出され、いずれも床面上からの出土。4は炉内からの出土である。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴0053号　（Fig.112、PL.17・54・94・107・143）

PN−10を中心に位置する。北隅で竪穴0055号と重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から本遺構のほうが古いと考えられる。

平面形態は小型の胴張隅丸方形を呈し、規模は3.55×3.23m、遺構下場面積は9.0㎡、確認面からの深さは0.41mを測る。主軸方位はN−34°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。P1は貯蔵穴と思われる

実測可能遺物は、1・6・7は壺形土器、2・3は椀形土器、4は鉢形土器、5は甕形土器である。4は混入であろう。土器以外では、片側に平坦面をもつ8の焼成粘土塊が出土している。1・2は北隅から検出され、覆土中層からの出土。3はP1内からの出土である。

弥生時代後期後葉の所産と考えられる。

竪穴0055号　（Fig.113、PL.17・54・55・107・108）

QO−91を中心に位置する。東側で竪穴054号（上層）、南隅で竪穴0053号と重複する。新旧関係は、本遺構が054号よりも古い。0053号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から本遺構のほうが新しいと考えられる。

平面形態は隅丸方形を呈し、規模は4.13×4.51m、推定遺構下場面積は16.4㎡、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位はN−47°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されている。P1は出入口施設である。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1～3は甕形土器、4・6・7・10・11は壺形土器、5は鉢形土器、9は広口壺形土器である。8は胴部下半に焼成後穿孔が施され、壺形土器であろうか。7は口縁部に凹線状の沈線文を施す東海系の瓢形壺である。1～3は炉跡周辺、5は北隅、4・6は東隅から検出され、いずれも床

竪穴 0052 号

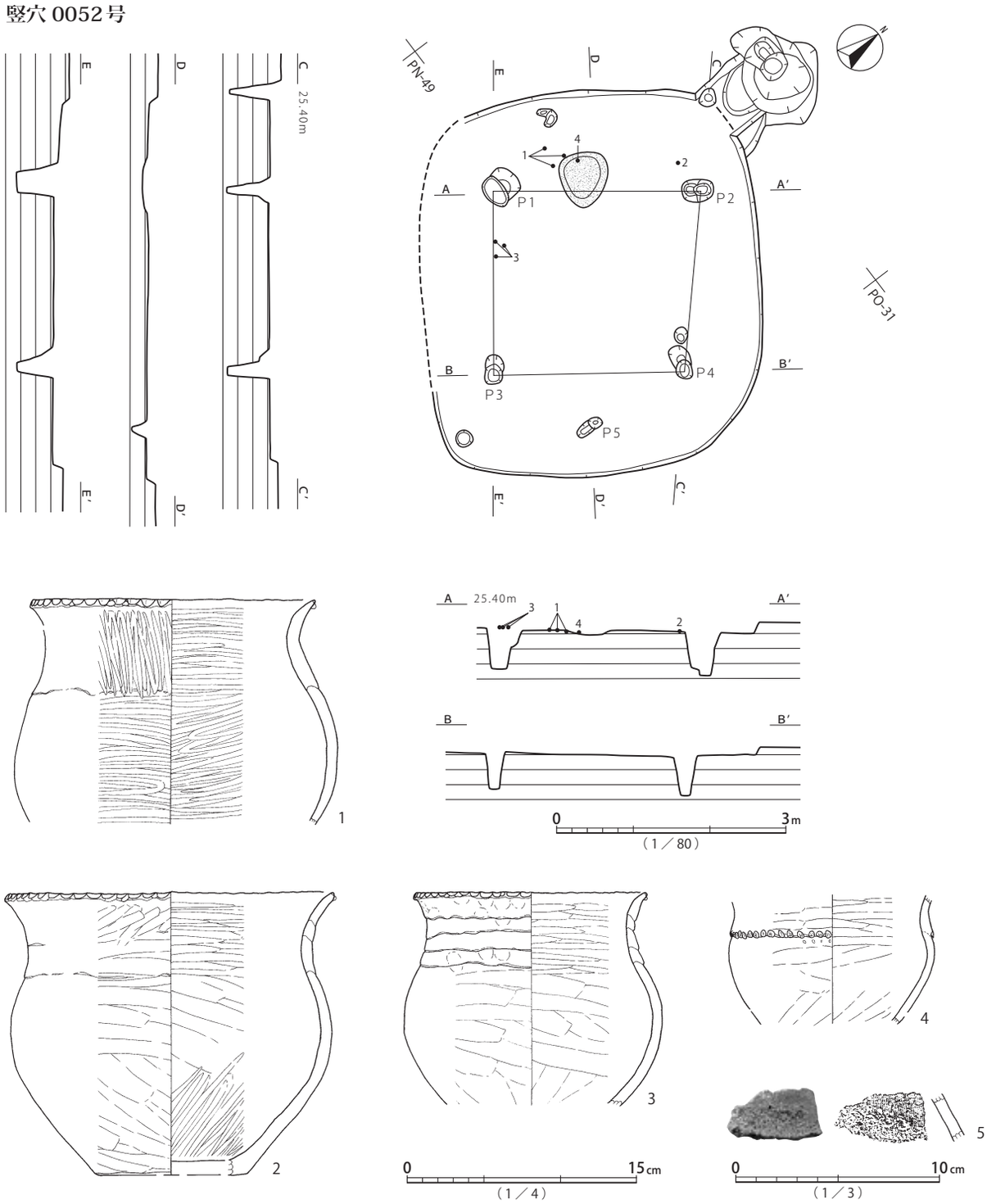


Fig.111　竪穴0052号 遺構遺物

面上からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0056号　（Fig.114、PL.17）

PN−08を中心に位置する。北東辺壁と西隅壁の一部で土坑（遺構番号なし）と重複する。また、南

竪穴 0053 号

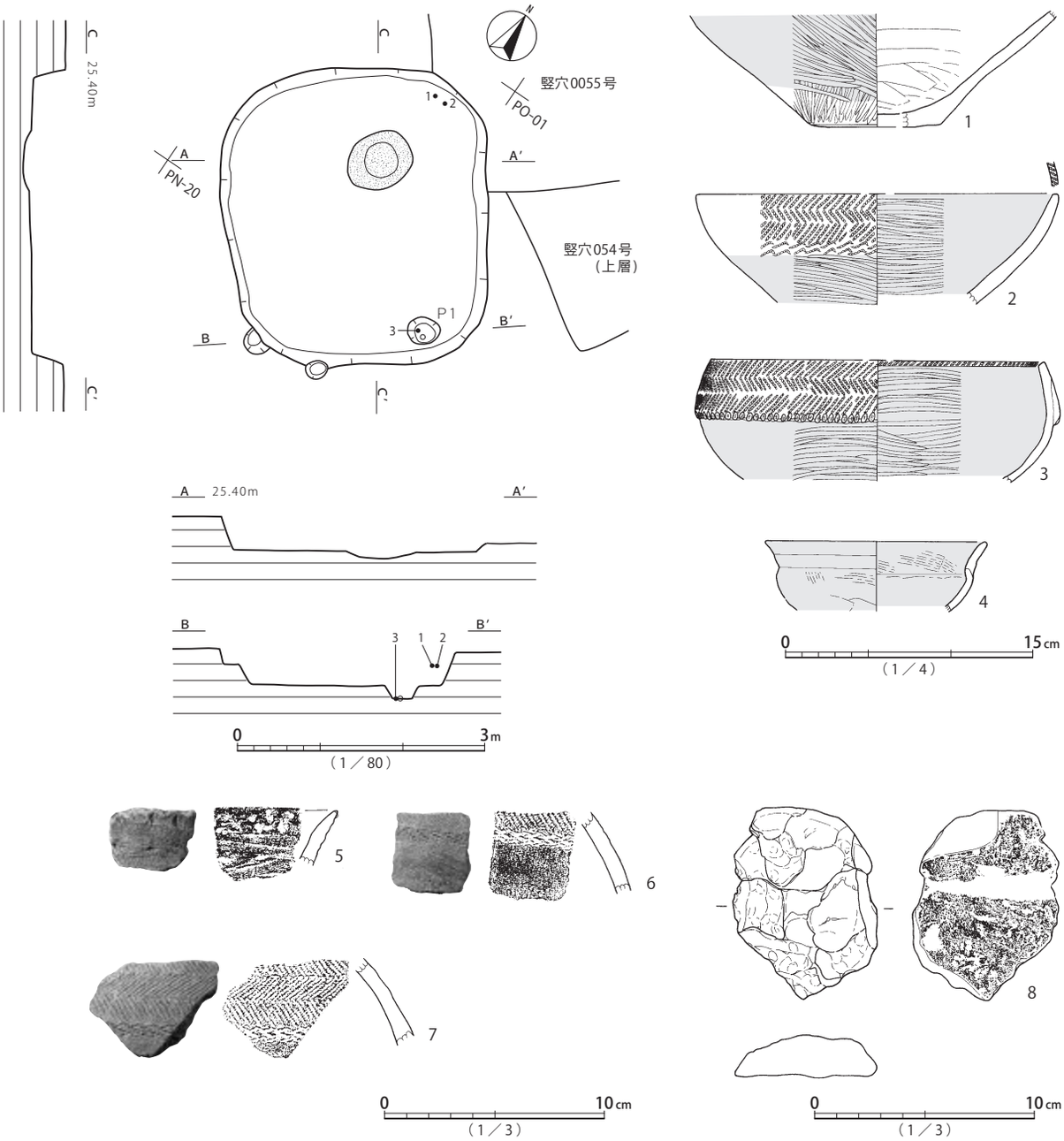


Fig.112　竪穴0053号 遺構遺物

壁の一部は検出することができなかった。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は楕円形を呈し、推定規模は4.05×3.82m、推定遺構下場面積は11.7㎡、確認面からの深さは0.17mを測る。主軸方位はN−45°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されている。遺構範囲からは柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。また、主柱穴や壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜3の壺形土器の破片のみである。

竪穴 0055 号

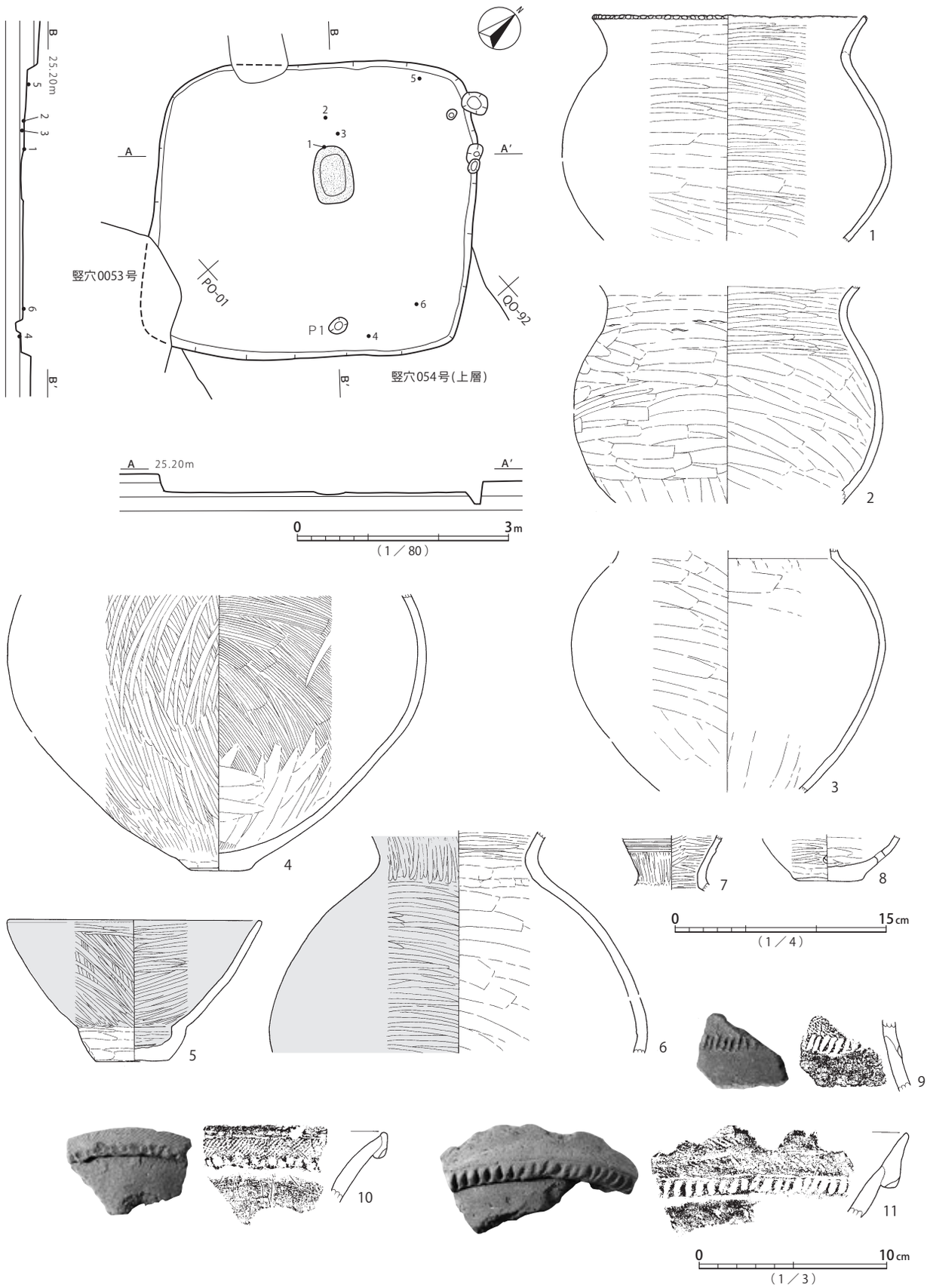


Fig.113　竪穴0055号 遺構遺物

竪穴0056号

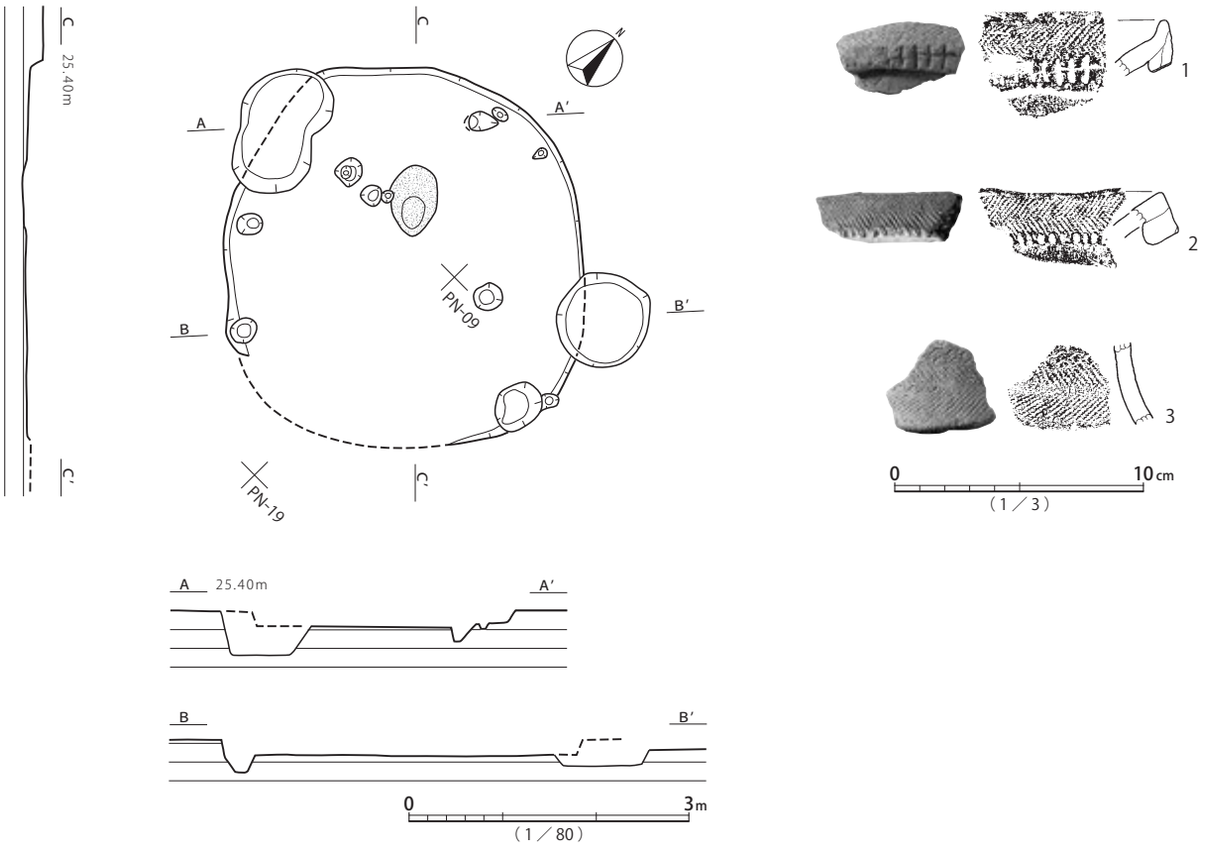


Fig.114　竪穴0056号 遺構遺物

出土遺物が少なく、帰属時期が明確でないが、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

竪穴0057号　（Fig.115、PL.17・55・108）

QN−79を中心に位置する。北東辺壁の一部で土坑（遺構番号なし）と重複し、南西辺壁の一部は撹乱により壊される。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は4.00×3.68m、遺構下場面積は12.3㎡、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位はN−48°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、主柱穴間から検出されている。P1〜3は主柱穴で、検出されていないが、西隅にも存在した可能性が高い。P4は出入口施設、P5・6は出入口付帯施設ないし貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2は壺形土器、3は甕形土器、4は椀形土器である。2は炉跡北側、4は東隅から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代後期後葉の所産と考えられる。

竪穴0059号　（Fig.116、PL.1・18・55・94・108）

QN−97を中心に位置する。西壁の一部で溝2400号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構のほ

竪穴 0057 号

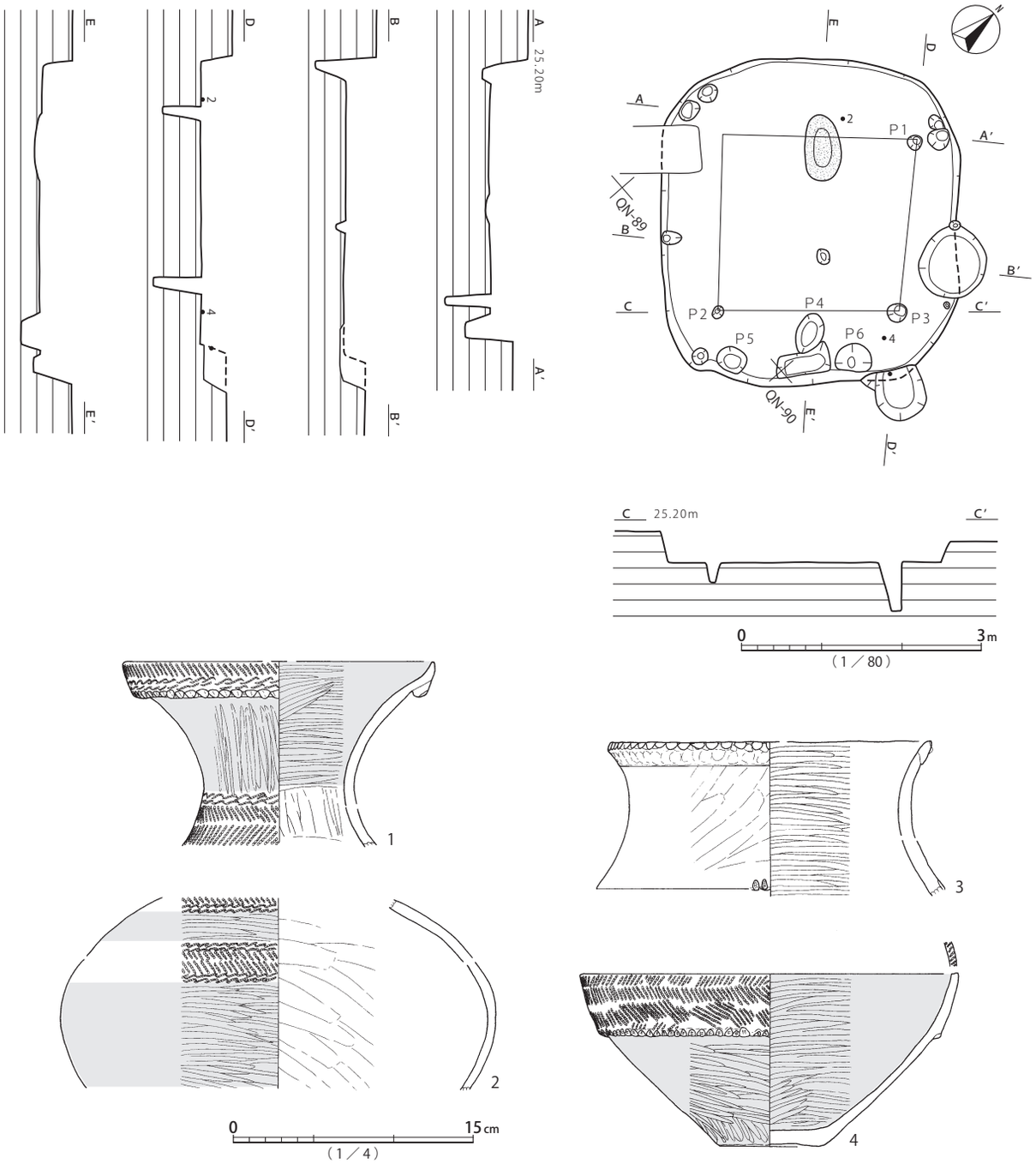


Fig.115　竪穴0057号 遺構遺物

うが古い。

平面形態は小型の楕円形を呈し、規模は2.66×2.67m、遺構下場面積は5.0㎡、確認面からの深さは0.34mを測る。主軸方位はN−47°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。遺構中央南西寄りからは焼土の堆積が確認され、火災に遭った可能性がある。

実測可能遺物は、1〜3・14・15は甕形土器、4・5・18・19は壺形土器、6〜11・16・17は椀形土器、

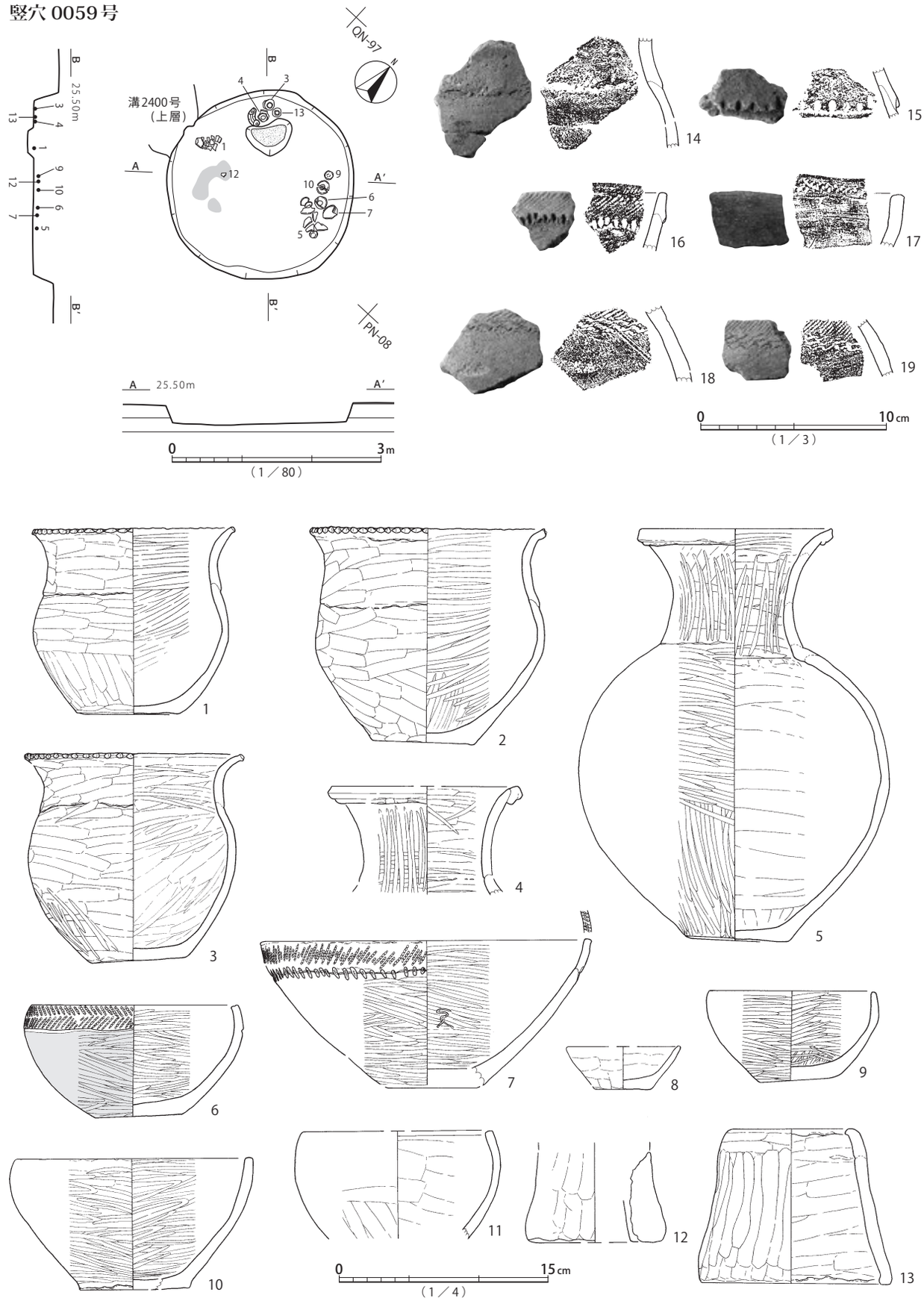


Fig.116　竪穴0059号 遺構遺物

12・13は炉器台である。3・4・13は炉跡脇、1は西隅壁際、12は焼土範囲、5～7・9・10は北東辺壁際から検出され、いずれも床面上からの出土である。出土位置から、甕形土器と炉器台、椀形土器と壺形土器からなる2つのグループに分けられ、器種（用途）ごとに置き場が決められていたと考えられる。3・6・9・10は逆位で伏せた状態、13は正位で置かれていた。1・5は横位の倒れた状態で出土しているが、本来は正位で置かれていたものと思われる。3の底部には破損後の2次的な被熱痕が認められ、13の被熱痕はあまり明確でない。甕形土器口縁端部は交互押捺を施すが、段部下端への押捺は省略される。椀形土器が多数検出される一方、高杯形土器・器台形土器は認められない。

大村は中台編年において、これらの土器群を中台1－1式に置いており、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

竪穴0060号　（Fig.117、PL.18・108）

QN－77を中心に位置する。北隅で竪穴0061号と重複し、一部は撹乱により壊される。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は3.90×3.75m、推定遺構下場面積は11.8㎡、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位はN－45°－Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。P1は出入口施設の可能性があるが、明確でない。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は1の胴部下半のみで、甕形土器であろうか。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0061号　（Fig.117・118、PL.18・55・108）

QN－67を中心に位置する。西側で竪穴0062号、南西隅で竪穴0060号と重複する。新旧関係は、本遺構が0062号よりも古い。0060号との関係については、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。

平面形態は隅丸方形を呈し、推定規模は5.00×5.00m、推定遺構下場面積は21.1㎡、確認面からの深さは0.19mを測る。主軸方位はN－12°－Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。P1～3は主柱穴で、北西隅は重複する竪穴0062号によって壊され、検出されていない。P4は貯蔵穴と思われるが、明確でない。壁周溝は北東隅から南東隅にかけて検出されている。

実測可能遺物は、1・4は甕形土器、2は椀形土器、3・5・6は壺形土器、7は器種不明の底部である。4は5の字状有段口縁の北陸系で、擦痕状の条線をわずかに残す。6・7は東辺壁寄り、P1・3間から検出され、床面上からの出土である。

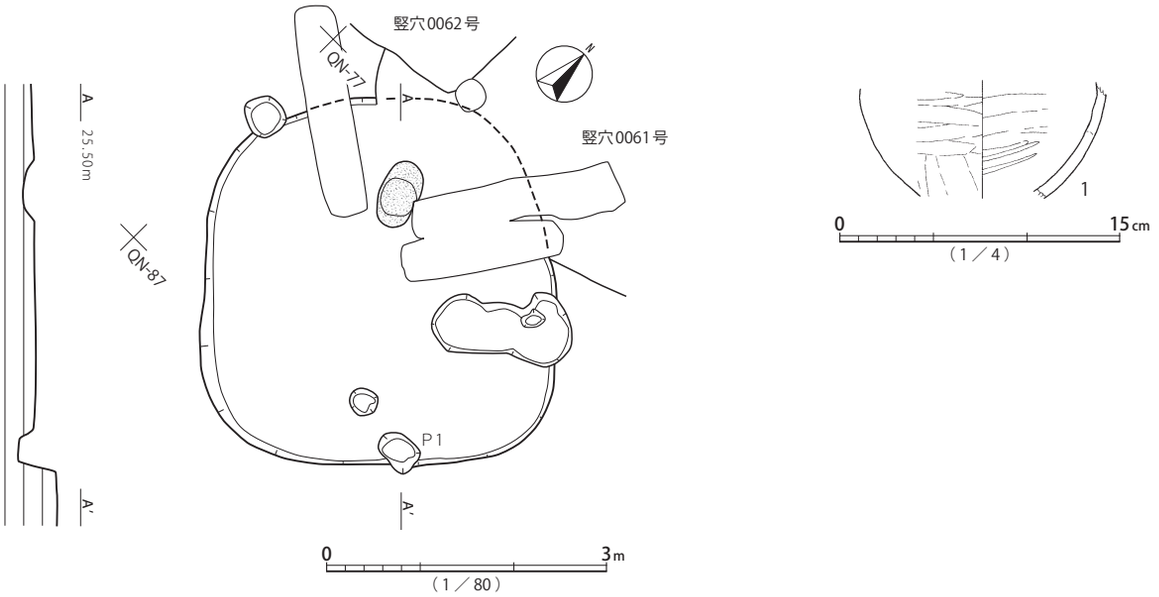
帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期後半の所産と思われる。

竪穴0062号　（Fig.118、PL.18・56）

QN－66を中心に位置する。東側で竪穴0061号、西側で溝2400号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0061号よりも新しく、2400号よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈し、規模は4.27×4.09m、推定遺構下場面積は14.2㎡、確認面からの深

竪穴 0060 号



竪穴 0061 号

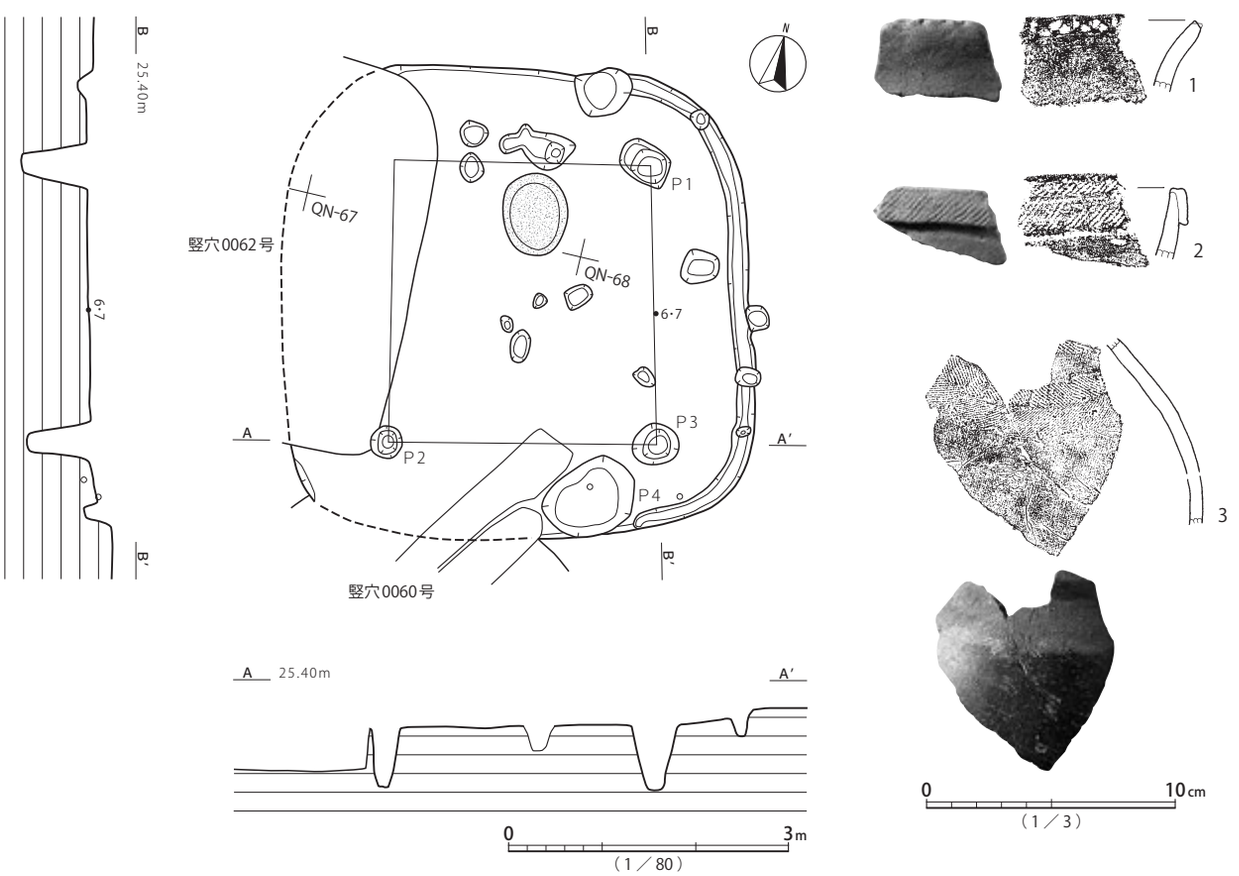


Fig.117　竪穴0060号 遺構遺物、竪穴0061号(1) 遺構遺物

さは0.28mを測る。主軸方位はN−4°−Wである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間から検出され、やや東側に寄せて設ける。P1〜4は主柱穴である。北東隅のP5は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。壁周溝は断続的に検出されている。東辺壁際には焼土と炭化材の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

実測可能遺物は、1は椀形土器、2・3は壺形土器である。1はP4上面から検出され、床面と同レベルからの出土である。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、重複する竪穴0061号との関係から、弥生時代終末期後半の所産と考えておきたい。

竪穴0063号　（Fig.118、PL.18）

QN−47を中心に位置する。北壁の一部で掘立柱建物3175号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3175号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈すものと考えられるが、北西隅から西壁が検出されないため、詳細は不明である。推定規模は4.43×3.85m、推定遺構下場面積は13.3㎡、確認面からの深さは0.09mを測る。主軸方位はN−99°−E程度を測るものと思われる。炉跡は中軸線上東寄りから検出されている。遺構範囲からは柱穴や土坑状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。主柱穴や壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0064号　（Fig.119、PL.18・56）

QN−27を中心に位置する。東辺壁で掘立柱建物3175号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3175号よりも古い。

平面形態は小型の楕円形を呈し、規模は2.81×2.71m、推定遺構下場面積は5.1㎡、確認面からの深さは0.20mを測る。主軸方位はN−65°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されている。壁周溝が巡るが、北西側で一部途切れる。炉跡南脇と北西隅から柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。主柱穴や貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は1の甕形土器のみで、炉跡からの出土である。口縁部から多段部下端まで幅をもつ。

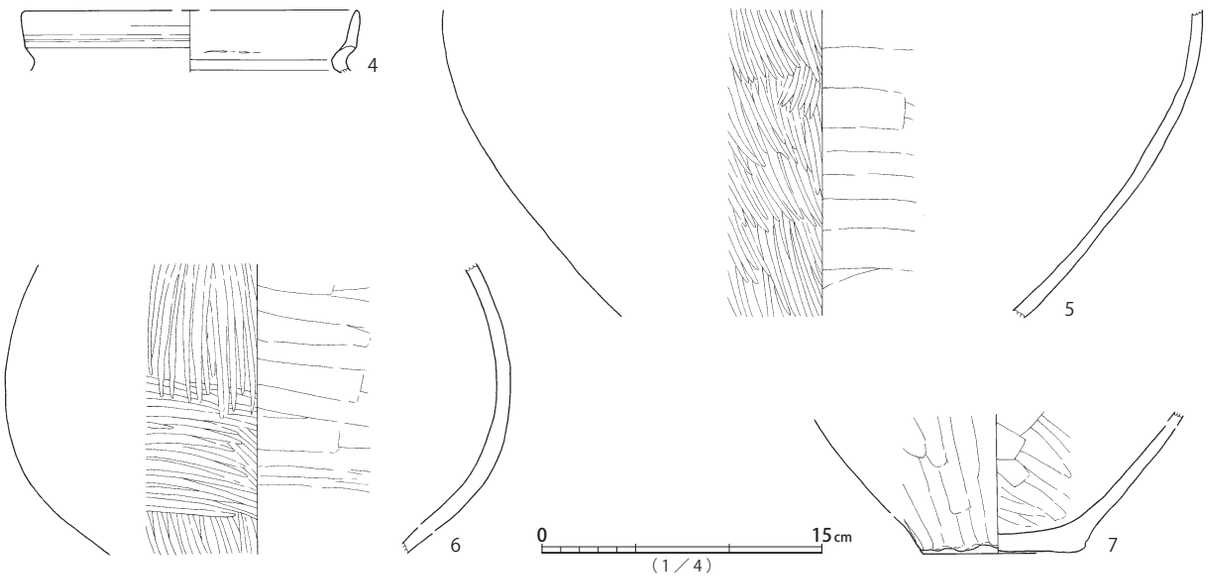
弥生時代後期中葉の所産と思われる。

竪穴0065号　（Fig.119、PL.18）

QN−87を中心に位置する。西側で溝2400号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2400号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、南壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.03mを測る。想定される遺構範囲からは複数の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。



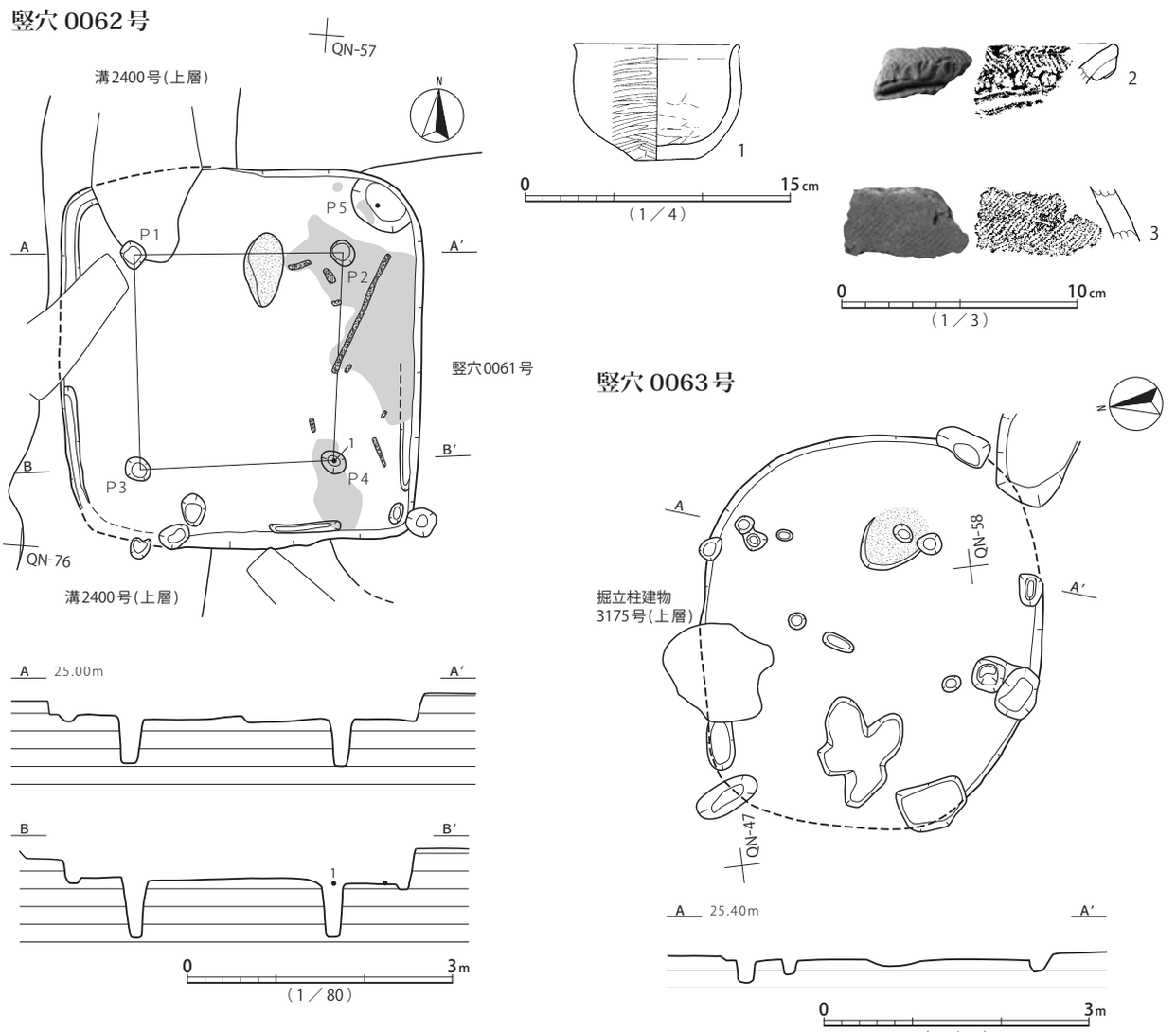
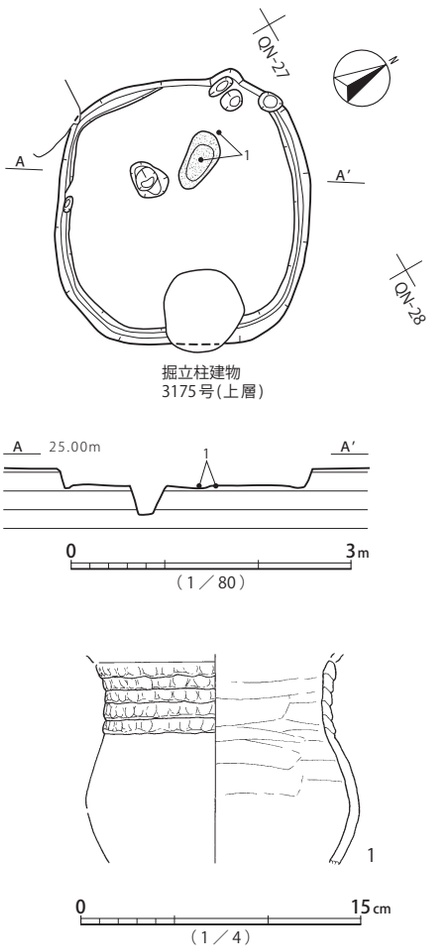


Fig.118　竪穴0061号(2) 遺物、竪穴0062号 遺構遺物、竪穴0063号 遺構

竪穴0064号



竪穴0065号

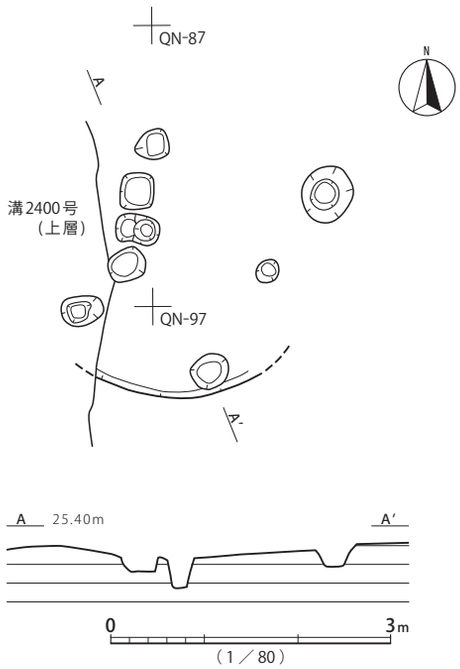


Fig.119　竪穴0064号 遺構遺物、竪穴0065号 遺構

竪穴0069・0070号　（Fig.120・121、PL.19・56・108・142）

QN−44を中心に位置する。東側で溝2400号（上層）、西側で竪穴071号（上層）と掘立柱建物3151号（上層）、中央で掘立柱建物3152号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

断面図など記録上の根拠がないことから、それぞれの遺構番号を残したままとするが、0070号とした範囲は0069号に付帯するベッド状遺構で、本来は同一の遺構と考えられる。

平面形態は大型の隅丸方形を呈する。東辺壁側を2400号に壊されるため、詳細は不明であるが、推定規模は7.25×7.04m、推定遺構下場面積は46.9㎡、確認面からベッド状遺構面の深さは0.09mを測る。0069号とした床面範囲の推定規模は5.03×4.67m、推定遺構下場面積は21.2㎡、ベッド状遺構面から床面の深さは0.10mを測る。主軸方位はN−85°−Wである。炉跡は遺構中央西寄りから検出されている。P1〜4は主柱穴で、床面範囲の四隅に設置され、建て替えの痕跡が認められる。壁周溝は検出されず、貯蔵穴も遺構確認範囲からは検出されていない。

竪穴0069号とした床面範囲から出土した実測可能遺物は、1〜3・10・12は甕形土器、4・5・11は壺形土器、6・8・9は高杯形土器、7は椀形ないし高杯形土器である。1〜3は5の字状有段口縁の北

竪穴 0069・0070 号

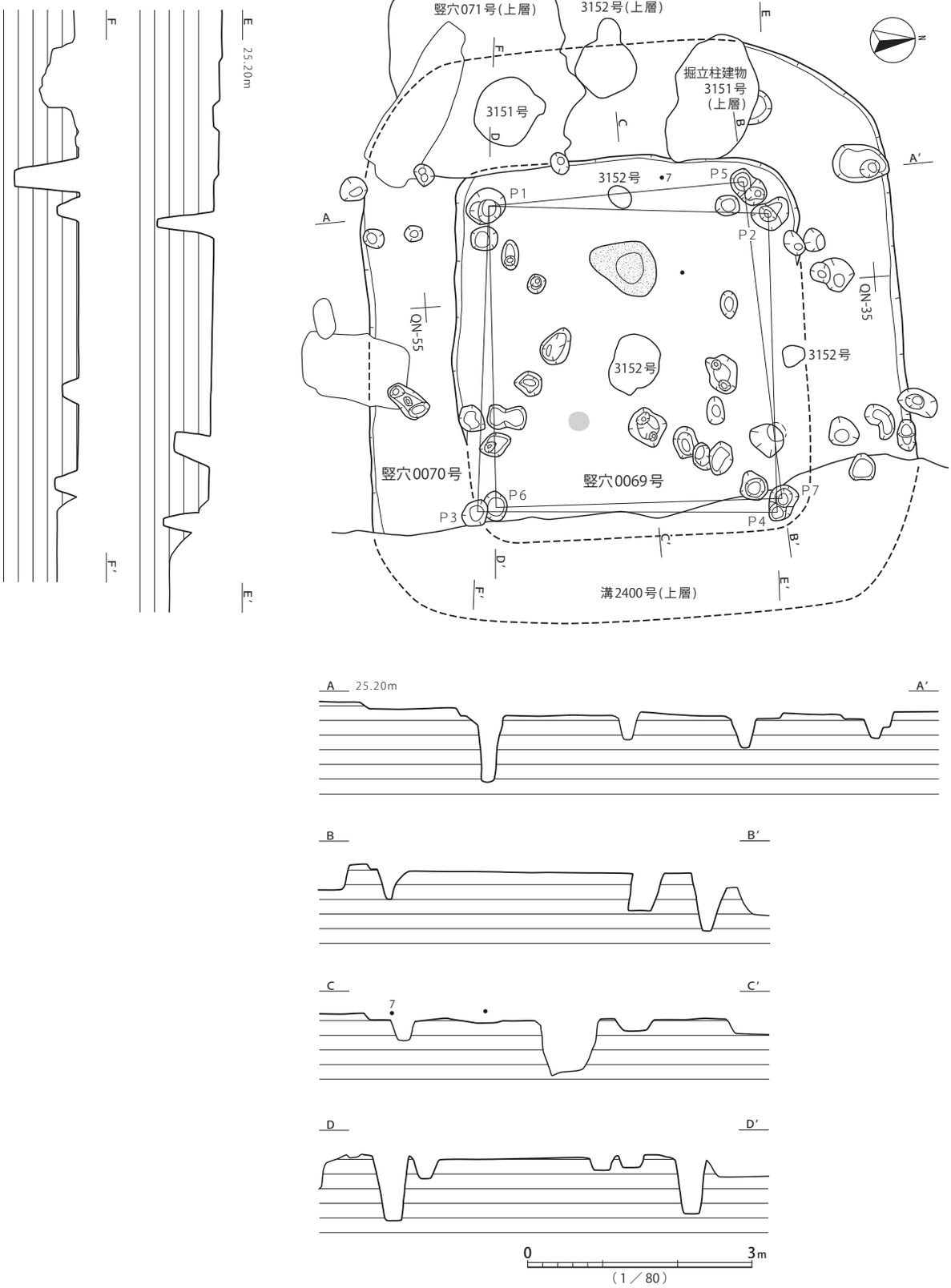
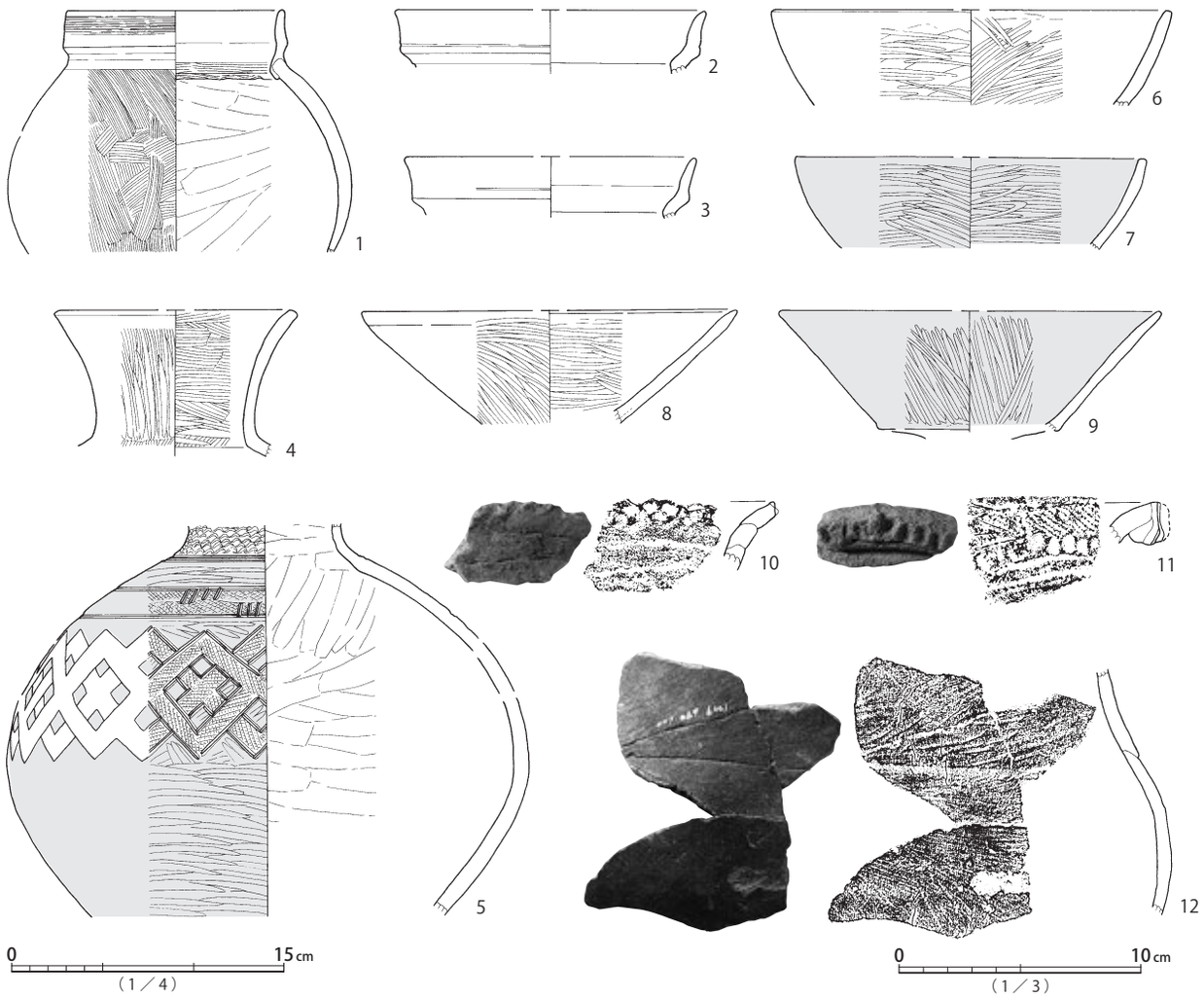


Fig.120　竪穴0069号(1) 遺構、竪穴0070号(1) 遺構

竪穴 0069 号



竪穴 0070 号

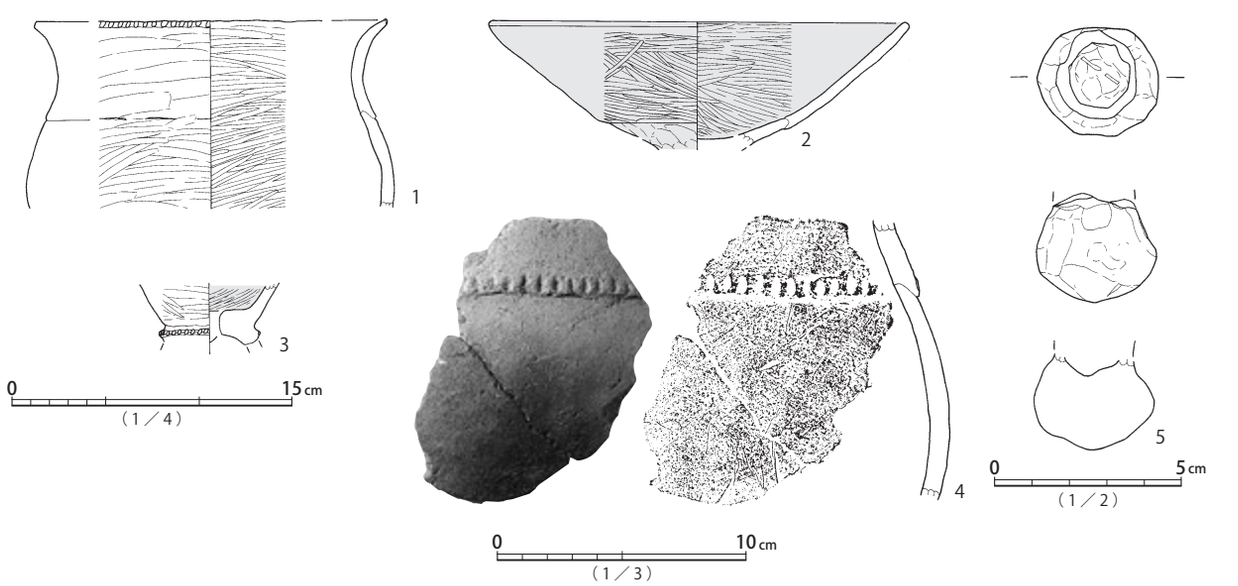


Fig.121　竪穴0069号(2) 遺物、竪穴0070号(2) 遺物

陸南西部系である。7は西壁際の床面上10cmほどの位置から出土している。

竪穴0070号としたベッド状遺構範囲から出土した実測可能遺物は、1・4は甕形土器、2・3は高杯形土器である。土器以外では、器面に凹凸を残す5の土製丸玉があるが、破損部は口縁状を呈しており、ミニチュア土器の可能性も考えられる。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0072号 （Fig.122、PL.19・56・109）

QN−65を中心に位置する。東辺壁で溝2400号（上層）、南東側で土坑076号（上層）、南西辺壁で竪穴0073号と重複し、中央と北東側の一部は、撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が076号と2400号よりも古い。0073号との関係については、断面図など記録上の根拠がなく、明確でないが、出土遺物の検討から本遺構のほうが新しいと思われる。

平面形態は隅丸方形を呈し、推定規模は5.46×5.15m、推定遺構下場面積は22.5㎡、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位はN−4°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから2基検出されている。P1〜4は主柱穴である。P5は貯蔵穴と考えられ、方形を呈する。壁周溝が巡るが、P5付近では検出されていない。遺構範囲からは複数の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1は台付甕形土器、2は器種不明の底部、3は器種不明のミニチュア土器、4・5・10〜12は壺形土器、6〜8は高杯形土器、9は甕形土器である。10〜12は網目状撚糸文と複沈線区画が施され、同一個体である。1・5・7は北西隅、8は北辺壁際中央、3は炉跡北脇から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0073号 （Fig.123、PL.19・56）

QN−74を中心に位置する。北側で竪穴0072号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、明確でないが、出土遺物の検討から本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は小型の楕円形を呈し、推定規模は3.19×3.19m、推定遺構下場面積は7.4㎡、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN−32°−W程度になるものと思われる。炉跡は北壁寄りから2基検出されている。遺構範囲からは複数の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、2〜4は壺形土器である。1は器種不明の底部で、小型の壺形土器であろうか。3・4は同一個体と考えられる。1は遺構北西側から検出され、床面上からの出土である。

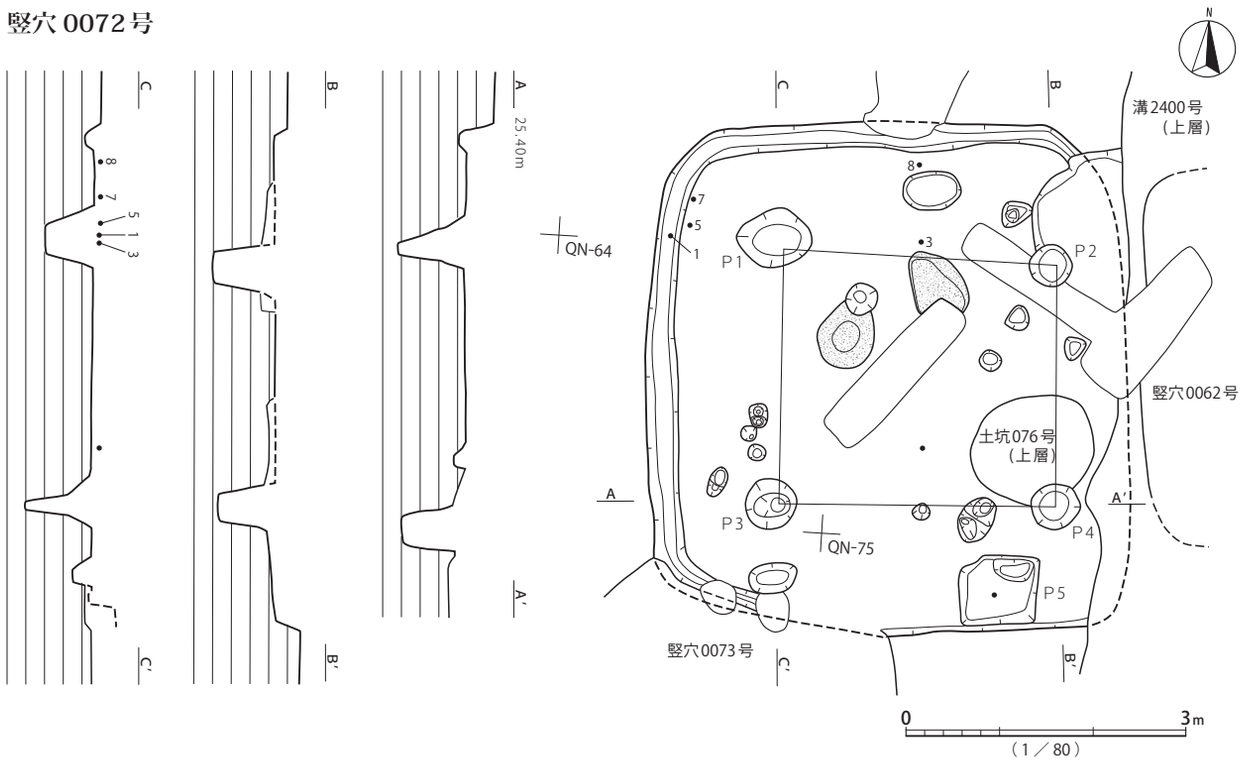
出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0077号 （Fig.123、PL.19・56・109）

QN−62を中心に位置する。南側で掘立柱建物3172号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3172号よりも古い。

平面形態は小型の不整楕円形を呈し、規模は3.29×3.33m、遺構下場面積は8.6㎡、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN−12°−Wである。炉跡は中軸線上北寄りから検出されている。

竪穴 0072 号



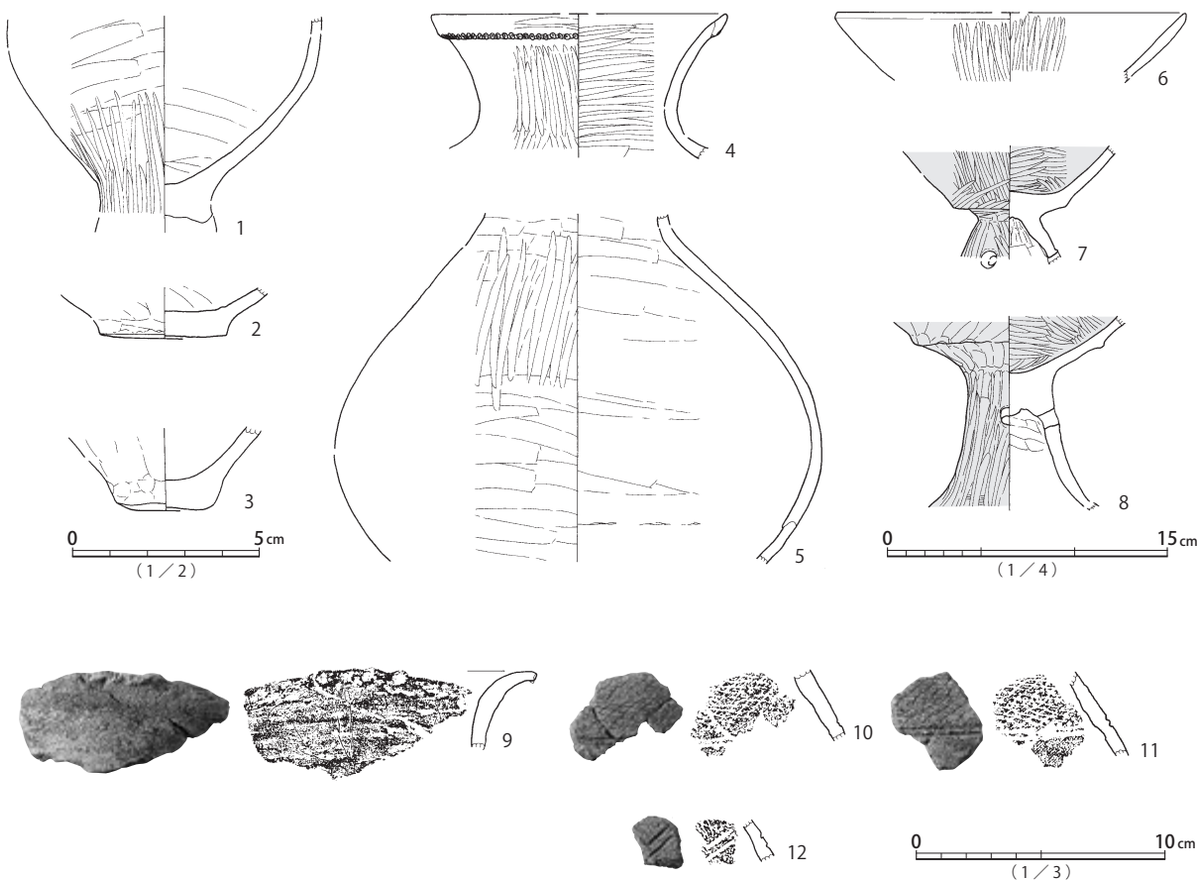
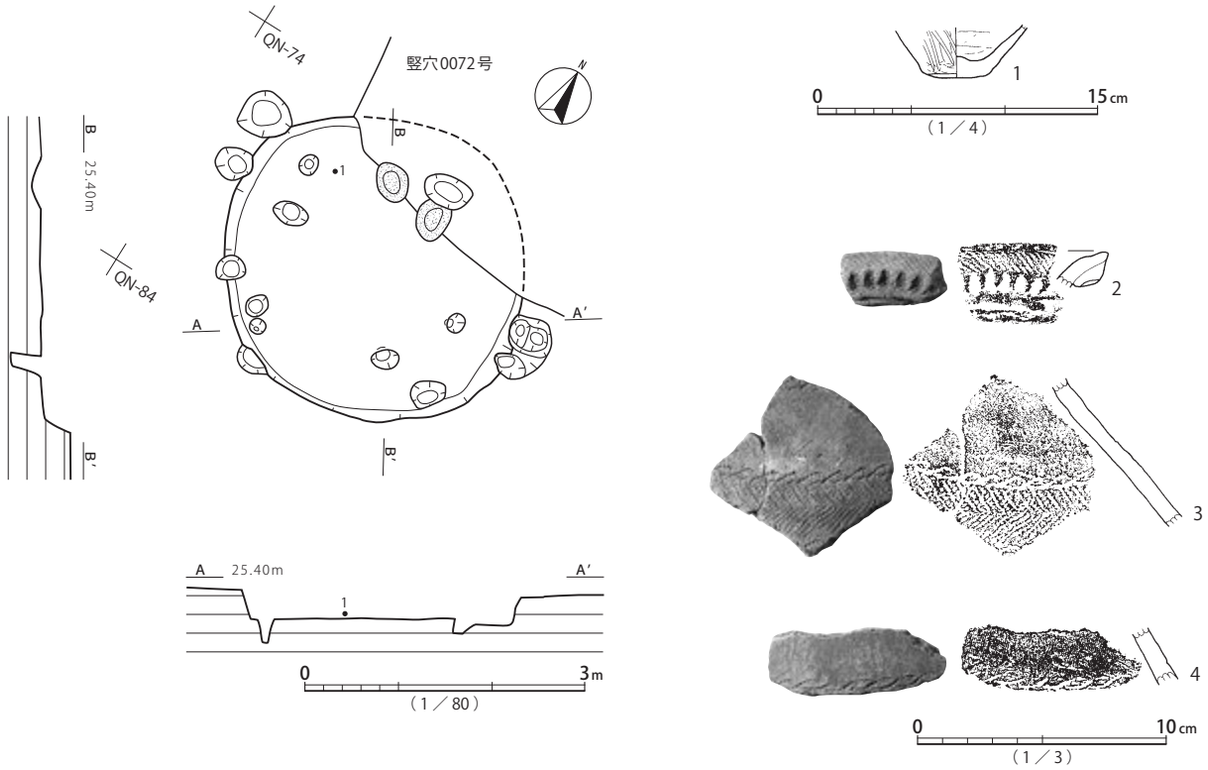


Fig.122　竪穴0072号 遺構遺物

竪穴 0073 号



竪穴 0077 号

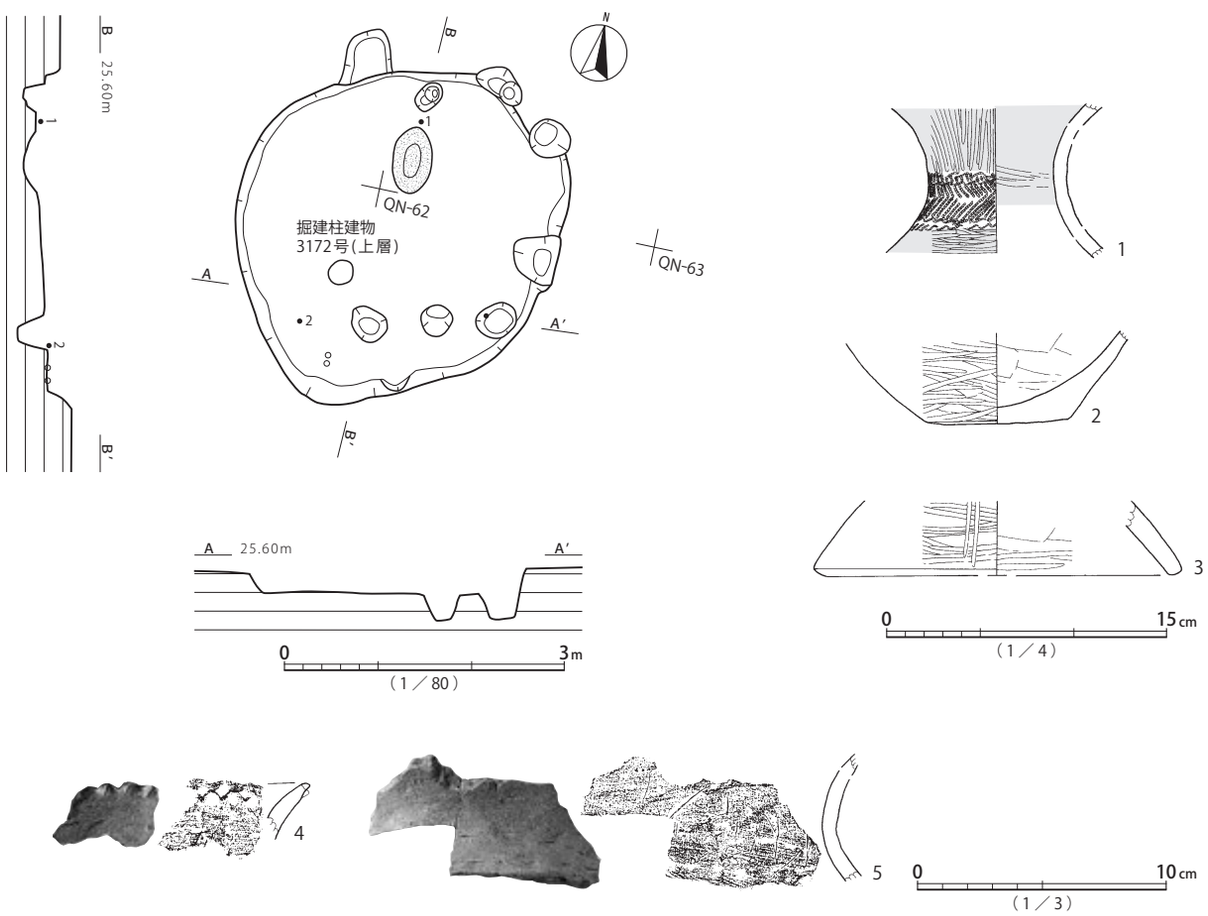


Fig.123　竪穴0073号 遺構遺物、竪穴0077号 遺構遺物

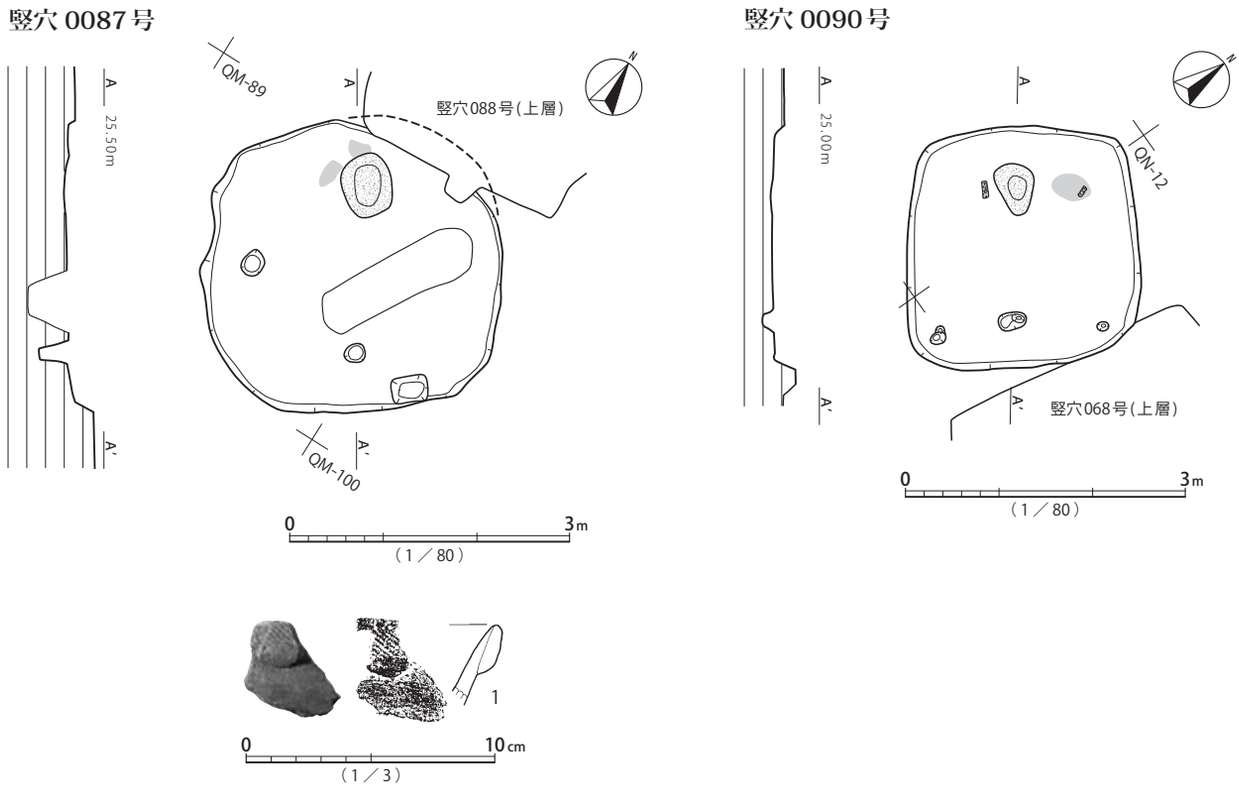


Fig.124　竪穴0087号 遺構遺物、竪穴0090号 遺構

遺構範囲からは柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は壺形土器、4・5は甕形土器である。2は壺形土器と思われる。3は器壁が厚く炉器台と思われるが、ミガキが施され、2次焼成痕も明瞭でないことから、口縁部の可能性もある。1は頸部に結節文区画の帯縄文が施される。1は炉跡北脇、2は南壁寄りから検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴0087号　（Fig.124、PL.19）

QM−89を中心に位置する。北隅で竪穴088号（上層）と重複し、中央は撹乱を受ける。新旧関係は、本遺構が088号よりも古い。

平面形態は小型の楕円形を呈し、推定規模は3.01×3.22m、推定遺構下場面積は7.2㎡、確認面からの深さは0.25mを測る。主軸方位はN−31°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。遺構範囲からは柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は1の椀形土器のみで、口縁部に縄文が施される。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0090号 （Fig.124、PL.19）

QN−12を中心に位置する。東隅で竪穴068号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が068号よりも古い。

平面形態は小型の胴張隅丸方形を呈し、規模は2.57×2.48m、推定遺構下場面積は5.1㎡、確認面からの深さは0.25mを測る。主軸方位はN−54°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。遺構範囲からは柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0091号 （Fig.125、PL.19）

QM−10を中心に位置する。中央を南北に、溝2222号（上層）が重複する。新旧関係は、本遺構が2222号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、規模は5.75×5.11m、遺構下場面積は24.3㎡、確認面からの深さは0.41mを測る。主軸方位はN−21°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、縄文が施される1・2の壺形土器のみである。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0093号 （Fig.126、PL.20・109）

RN−51を中心に位置する。北隅で土坑095号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が095号よりも古い。

平面形態は小型の長楕円形を呈し、規模は3.65×3.27m、推定遺構下場面積は9.2㎡、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN−32°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜4は甕形土器、5は壺形土器、6は椀形土器である。1・4は5の字状有段口縁の北陸南西部系で、いずれも小破片の混入である。3は南東隅付近から検出され、床面上からの出土である。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴0105号 （Fig.127、PL.20）

RN−02を中心に位置する。南側で土坑（遺構番号なし）と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、明確でないが、本遺構のほうが古いと思われる。

北西から南西辺壁が検出されないが、平面形態は胴張隅丸長方形を呈すものと考えられる。推定規模は4.86×4.06m、推定遺構下場面積は16.2㎡、確認面からの深さは0.26mを測る。主軸方位はN−43°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は器台形土器であろうか。1は口縁部がわずかに屈曲し、2は単

竪穴 0091 号

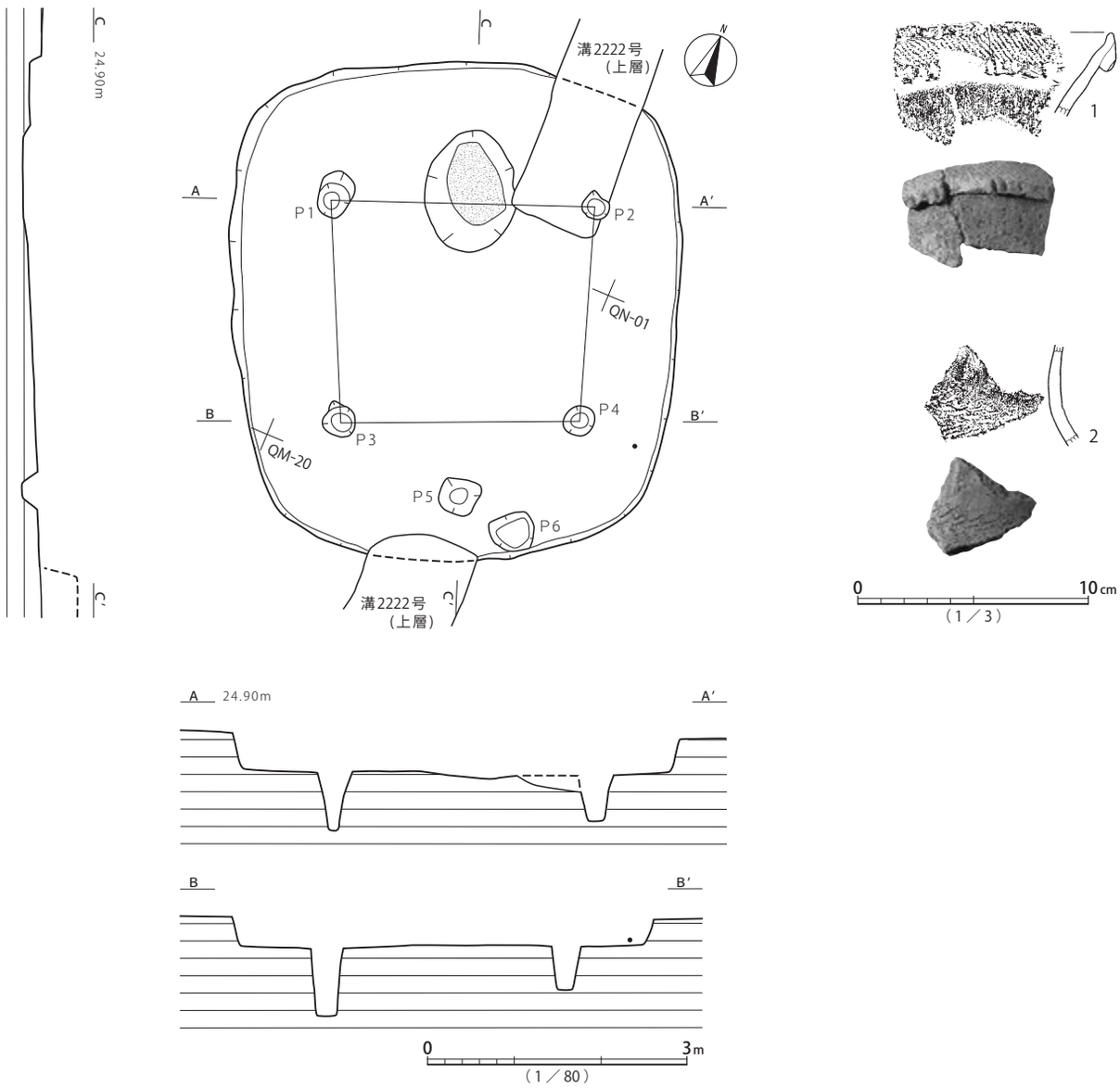


Fig.125　竪穴0091号 遺構遺物

沈線による鋭い凹線文が施される。いずれも北陸系の可能性が考えられる。

出土遺物が少なく、いずれも小破片であることから、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0106号　（Fig.128・129、PL.20・56・109）

SN−72を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は大型の胴張隅丸方形を呈し、規模は9.08×8.80m、遺構下場面積は62.2㎡、確認面からの深さは0.30mを測る。炉跡とP9を基準とした場合、主軸方位はN−80°−Wである。炉跡は遺構中央やや南寄りから検出され、長方形の掘り込みをもつ。P1〜8は主柱穴で、柱の抜き取り痕を含

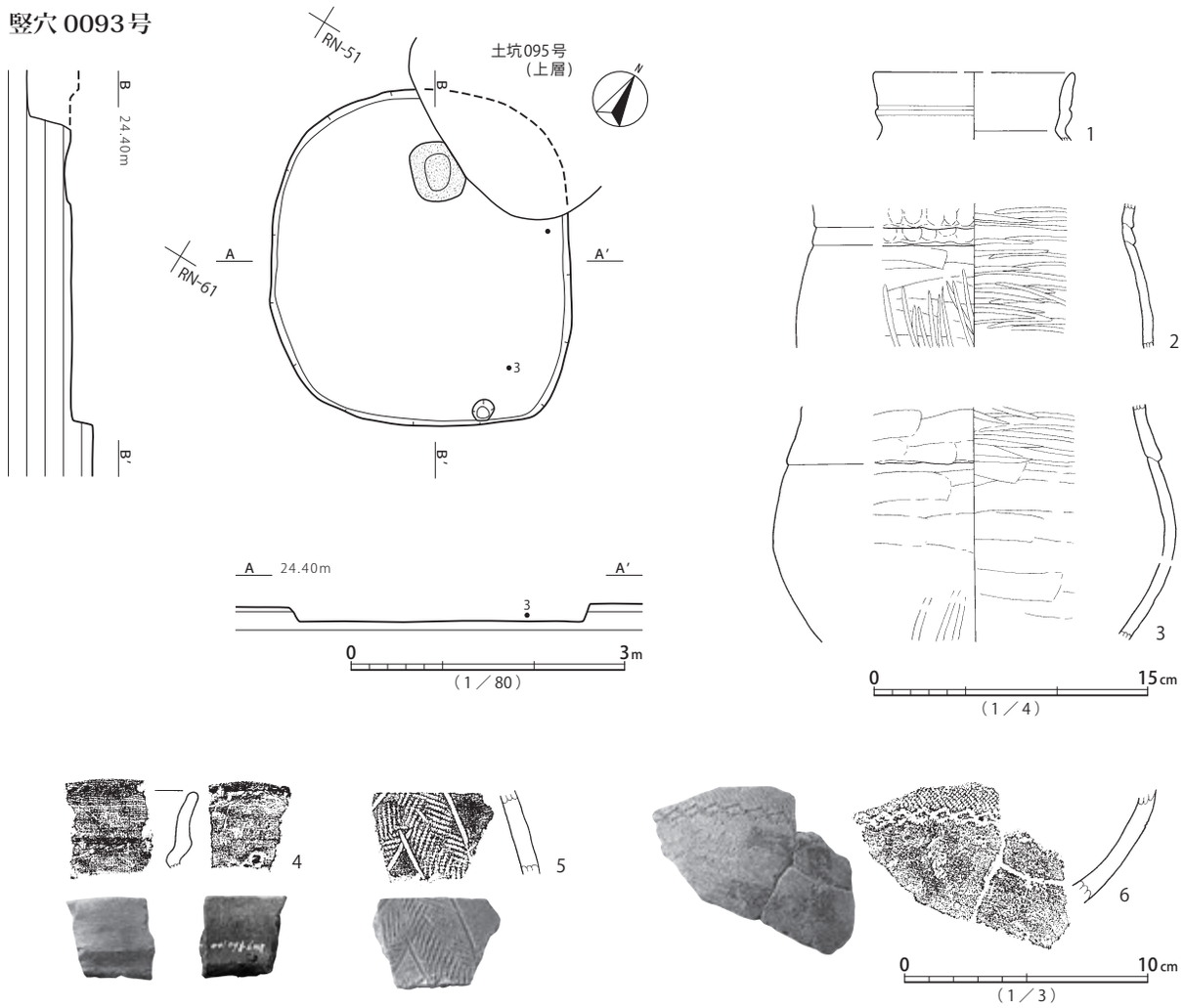


Fig.126　竪穴0093号 遺構遺物

む可能性がある。P9はほぼ正方形を呈し、掘り込みは浅いが、貯蔵穴であろう。北辺壁寄りには複数の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は全周する。北を除く3辺の壁際からは少量の焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性があるが、明確でない。

実測可能遺物は、1〜5・8は甕形土器、6は直口縁壺形土器、7は小型の鉢ないし壺形土器である。2〜5は5の字状有段口縁の北陸南西部系、頸部内面に屈曲線を持ち、口縁部が大きく外反する1は搬入品の可能性がある。2は2次的な被熱により変形する。1は炉跡東脇、6は北辺壁際から検出され、いずれも床面上からの出土。7はP4底面からの出土である。

本遺構の土器は過去に公表されており（比田井1987）、比田井論文第4図42は本報告3、43は5、44は2か、45は1、46は6に対応すると思われる。なお、比田井論文では114号住出土土器として紹介され、遺物注記番号も114−xxxxとなっているが、図面整理段階で遺構番号を106号に変更しており、114号は欠番となっている。

本遺構は横長の平面形態をとり、炉を中央、主軸線上に貯蔵穴を設けるなど、当該地域の一般的な竪穴と異なる。類例が近隣する南中台遺跡SI13にあり、北陸南西部系土器の多量出土と北陸地方のものと酷似する竪穴形態から、「直接的に人々が移民してきたことを示す有力な証拠」（比田井

竪穴0105号

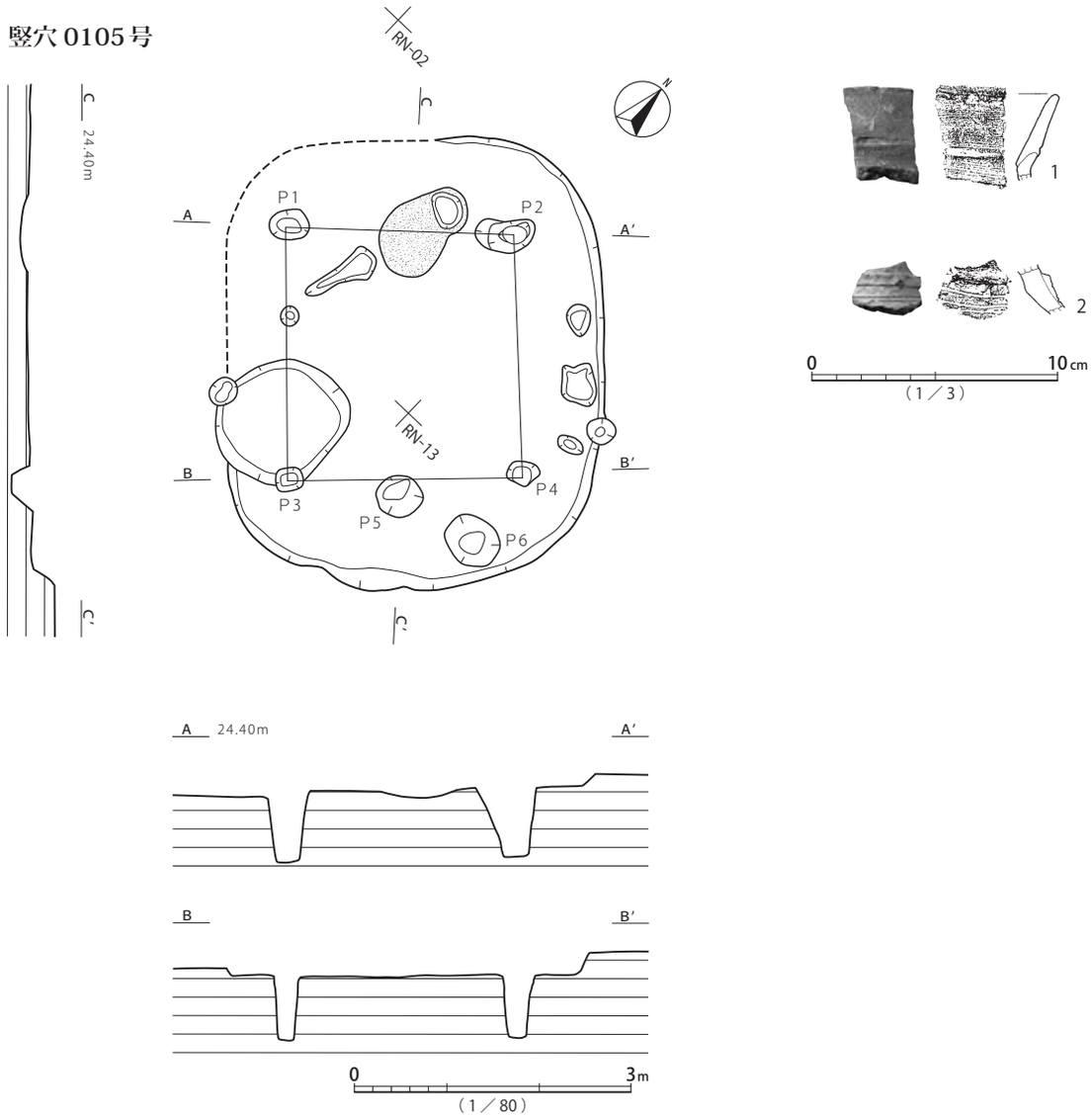


Fig.127　竪穴0105号 遺構遺物

1987）、「個人あるいは少人数の来訪者による定住を想定」（大村2009）と評価されている。本遺構についても、胴が張り、やや崩れた形態をとるものの、北陸地方との直接的な関係を強調しうるものである。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0111号　（Fig.130、PL.20・57）

QM−30を中心に位置する。東側で溝2222号（上層）と重複し、中央西寄りは、撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が2222号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、推定規模は4.27×4.06m、推定遺構下場面積は14.3㎡、確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方位はN−26°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2は口縁端部に交互押捺を加える甕形土器である。

竪穴 0106 号

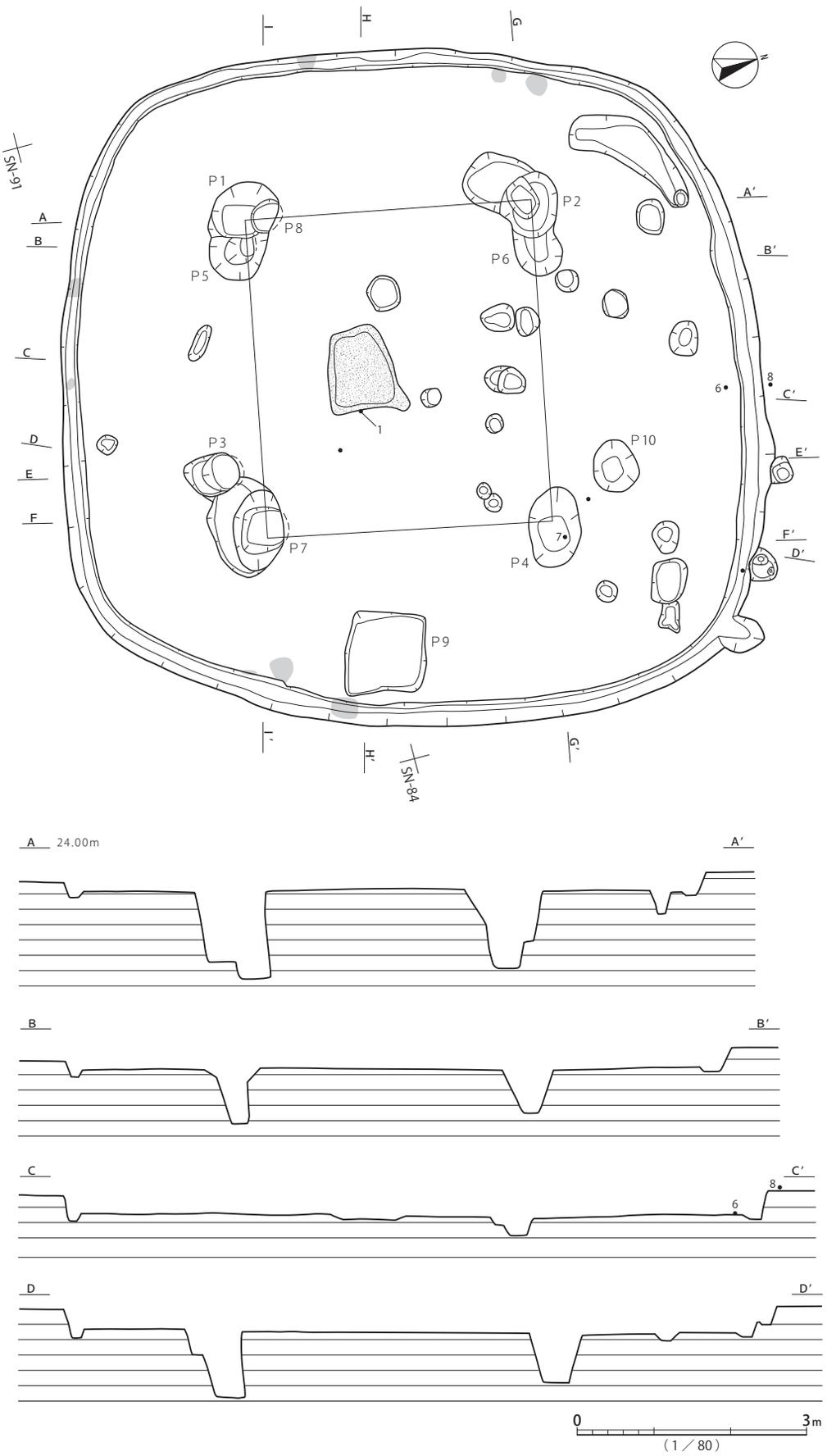
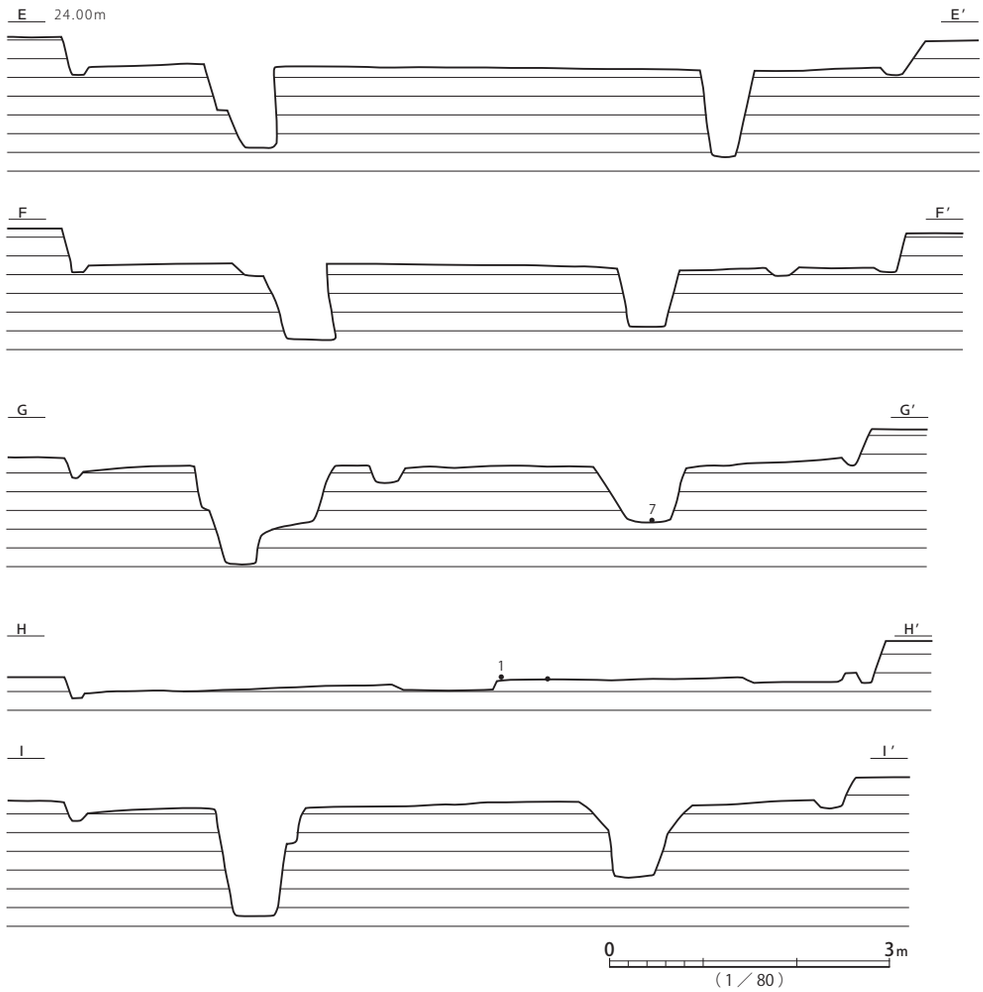


Fig.128　竪穴0106号(1) 遺構

竪穴 0106 号



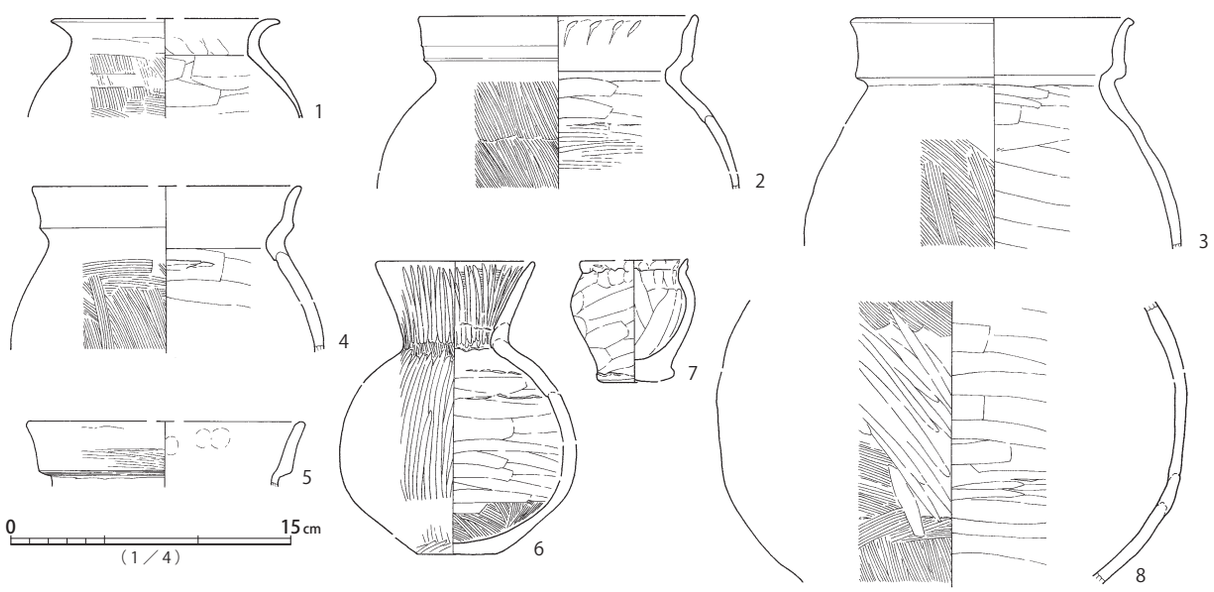


Fig.129　竪穴0106号(2) 遺構遺物

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0117号 （Fig.130、PL.20）

QM−03を中心に位置する。北西隅で井戸1640号（上層）、南西壁の一部で掘立柱建物3167号（上層）、東側で溝614号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

遺構北西側と南東側とで調査年次が異なり、北西側は竪穴建物として把握できていなかった。平面形態は楕円形を呈すものと考えられ、推定規模は4.45×4.45m、推定遺構下場面積は15.0㎡、確認面からの深さは0.11mを測る。主軸方位はN−14°−W程度を測るものと思われる。炉跡は検出されないが、重複する1640号により壊された可能性がある。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2の壺形土器である。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0118号 （Fig.131、PL.20・109）

QM−33を中心に位置する。中央で溝614号（上層）と重複するが、床面までは達していない。北隅の一部は掘立柱建物3167号（上層）の柱穴を残すため、未掘のままとなっている。新旧関係は、本遺構が614号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈し、規模は5.65×5.16m、推定遺構下場面積は22.1㎡、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位はN−64°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。出入口付近からは複数の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は検出されていない。調査図面に記載がなく出土位置は不明であるが、貝層サンプルが採取されており、分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1・2は器種不明の底部、3は椀形ないし高杯形土器、4〜6は甕形土器、7〜10は壺形土器である。

弥生時代後期後葉の所産と考えられる。

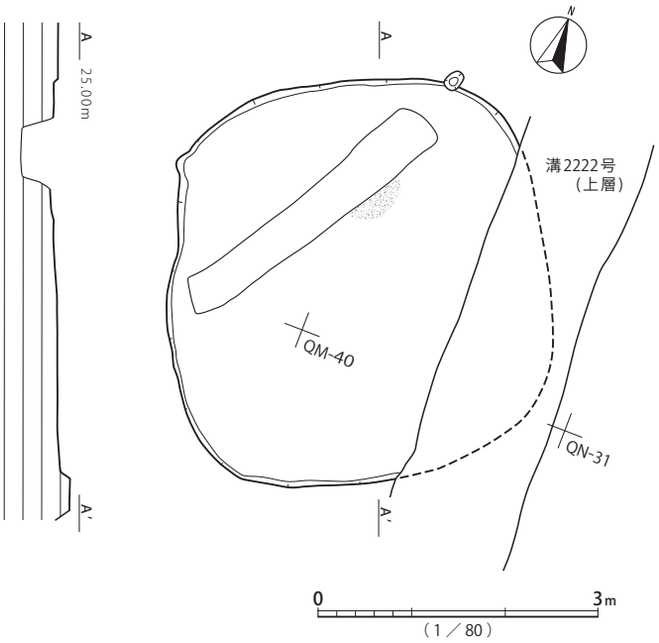
竪穴0119号 （Fig.132、PL.20・57・109）

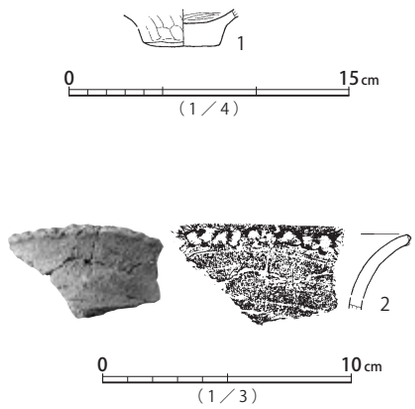
QM−59を中心に位置する。北東辺壁で竪穴112号（上層）、東隅で竪穴1705号、北隅の一部で掘立柱建物3162号a（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が112号と3162号aよりも古い。1705号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、推定規模は6.58×5.87m、推定遺構下場面積は32.1㎡、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位はN−67°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。壁周溝が巡るが、北隅では検出されていない。

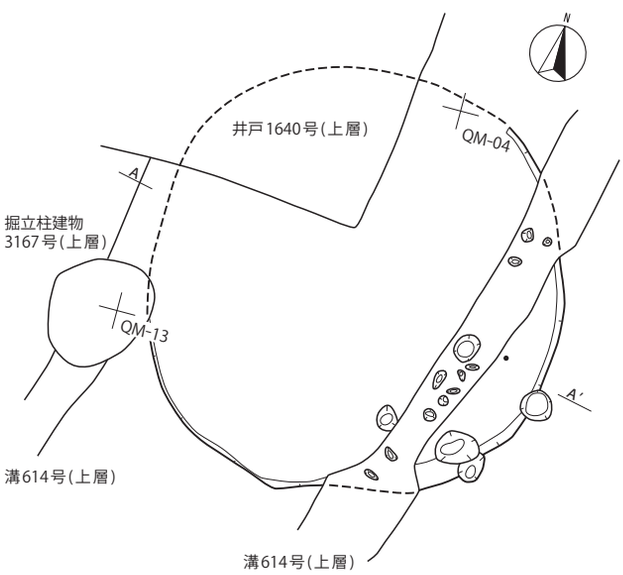
実測可能遺物は、1・3は甕形土器、2は壺形土器、4は椀形土器である。1は口縁端部に交互押捺を施し、段部下端への押捺は省略される。4は口縁有段部に多条の結節文を施す。無文部を赤彩し、段部にも径1cm程の円形朱文を加える。

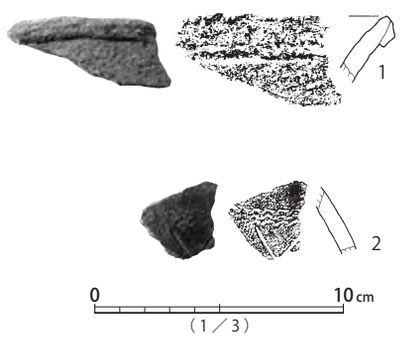
竪穴0111号





竪穴0117号





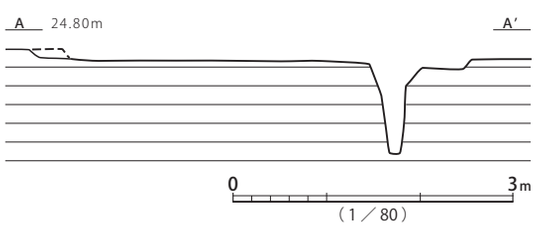


Fig.130　竪穴0111号 遺構遺物、竪穴0117号 遺構遺物

竪穴 0118号

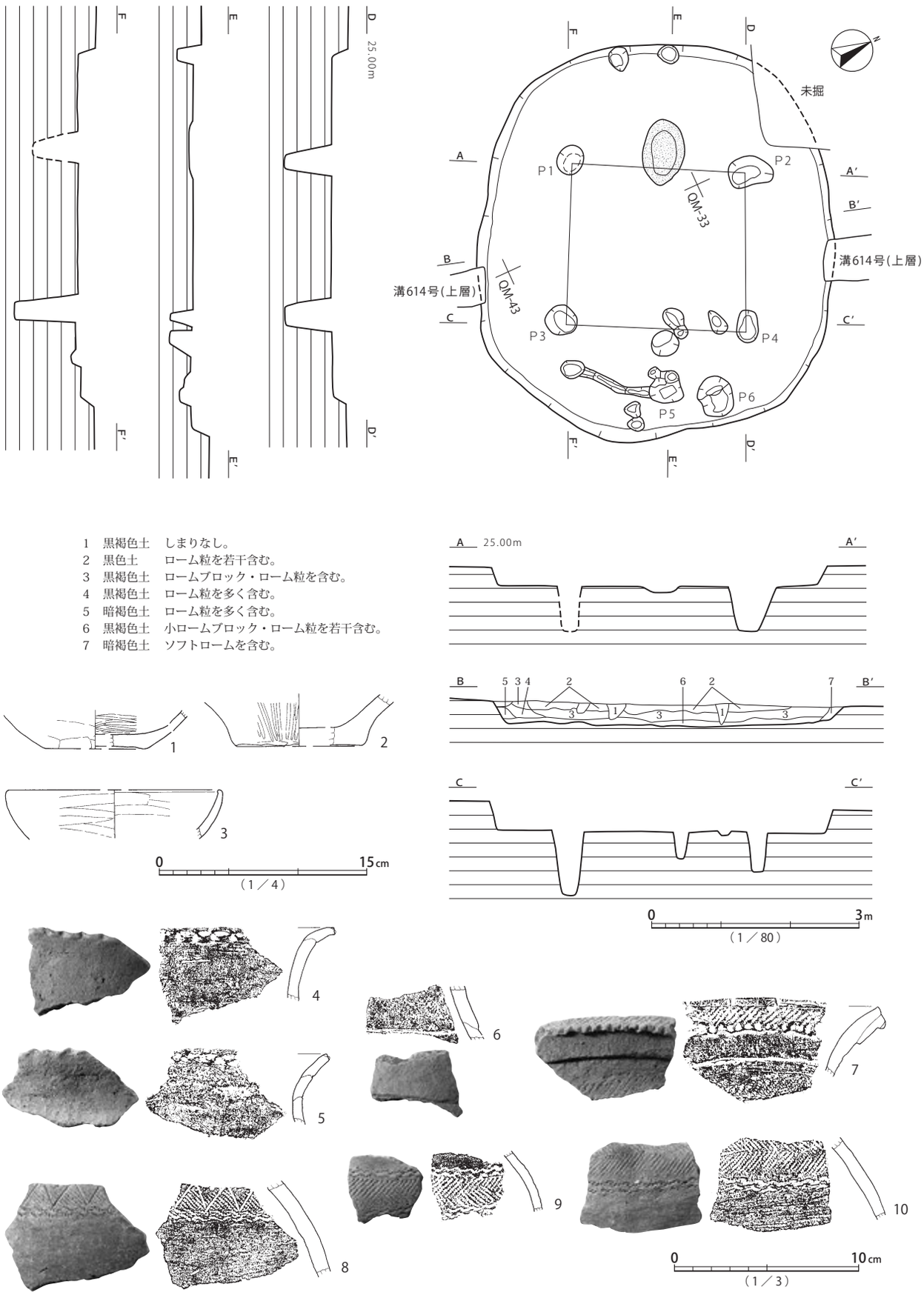


Fig.131 竪穴0118号 遺構遺物

竪穴 0119号

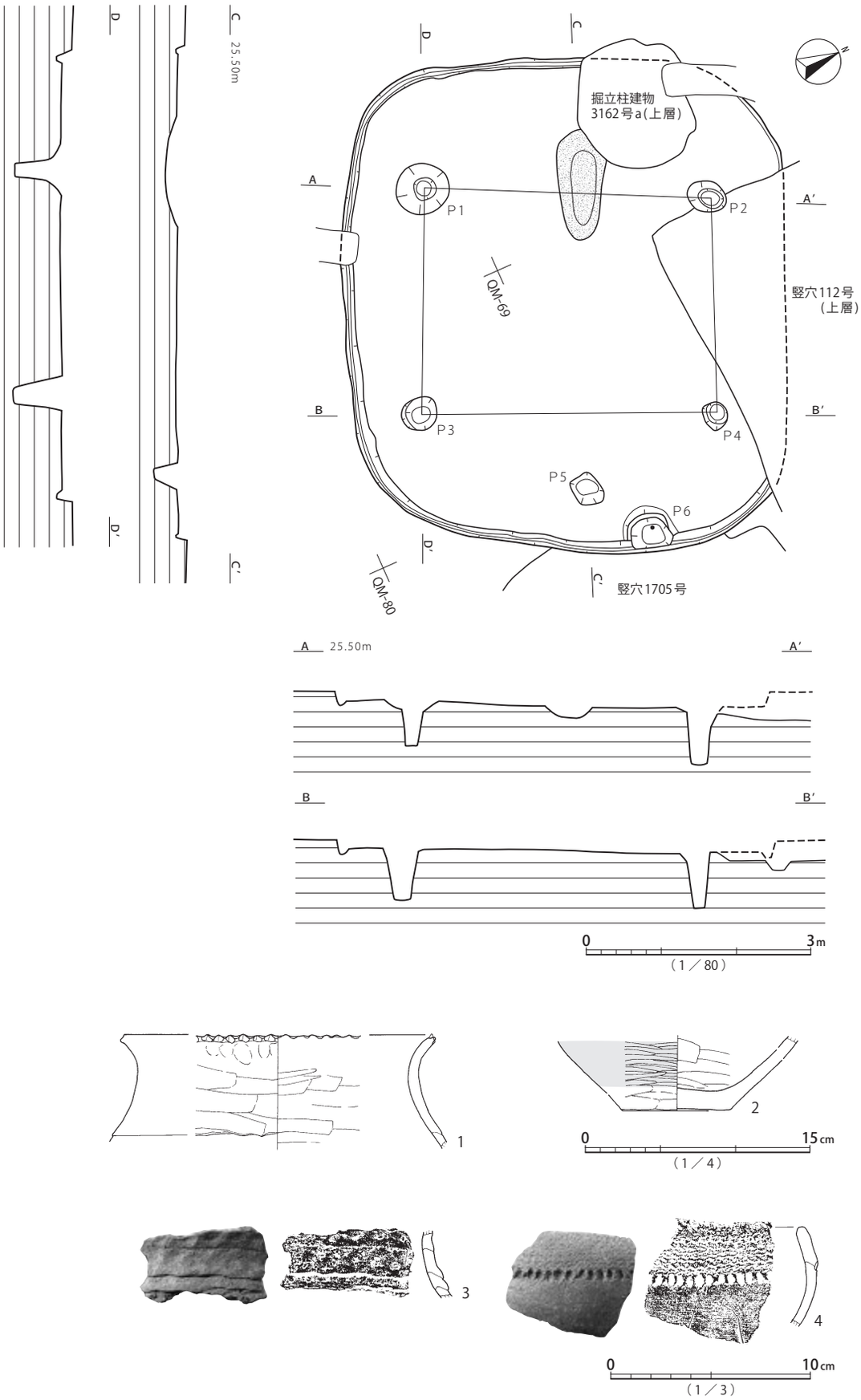


Fig.132　竪穴0119号 遺構遺物

弥生時代後期後葉の所産と考えられる。

竪穴0123号 （Fig.133）

QM−56を中心に位置する。掘立柱建物3160〜3163号（上層）、溝2225号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は隅丸方形ないし楕円形を呈すと思われるが、上総国分僧寺政所院東脇殿造営によって大きく壊され、北壁の一部と炉跡が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.05mを測る。北辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−4°−Wである。炉跡は北壁寄りから検出されている。遺構範囲からは柱穴や土坑状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は1・2の壺形土器のみである。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0145号 （Fig.133、PL.20）

TK−40を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は小型の楕円形を呈すと思われるが、南東側の壁を検出することができていないため、詳細は不明である。推定規模は3.31×3.09m、推定遺構下場面積は7.5㎡、確認面からの深さは0.07mを測る。主軸方位はN−2°−Eである。炉跡や主柱穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。遺構範囲からは柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴0149号 （Fig.134、PL.21）

TK−25を中心に位置する。北側で竪穴0150号と重複する。新旧関係は、本遺構が0150号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、遺構南側が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.41mを測る。炉跡や主柱穴は、遺構確認範囲からは検出されない。壁周溝は全周するものと思われる。遺構範囲からは柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

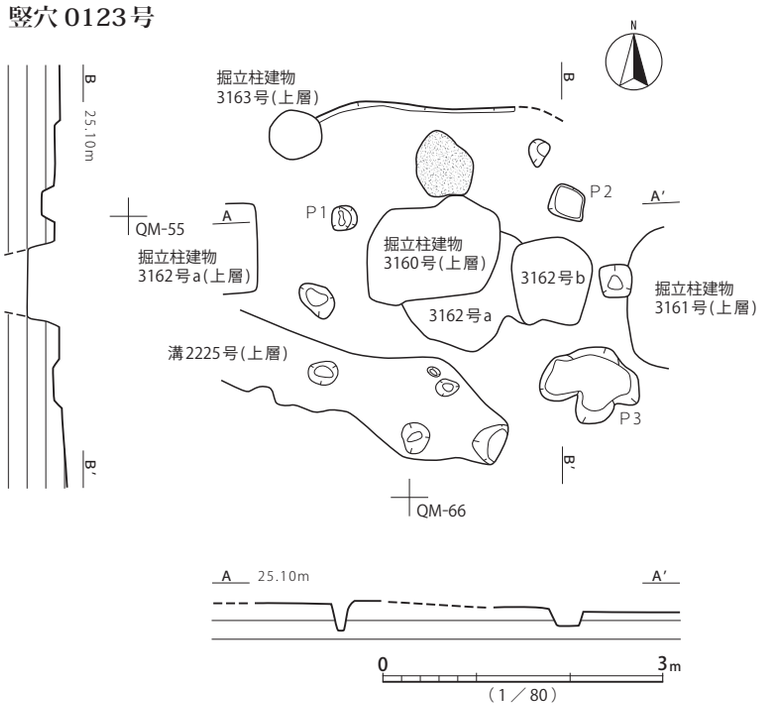
出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

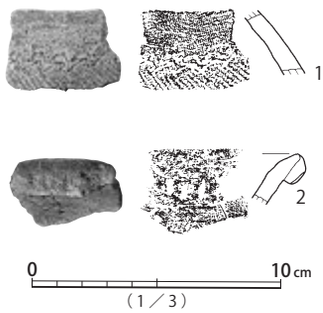
竪穴0150号 （Fig.134・135、PL.21・57・109）

TK−25を中心に位置する。南側で竪穴0149号と重複する。新旧関係は、本遺構が0149号よりも新しい。

平面形態は長方形を呈し、規模は3.90×5.05m、遺構下場面積は13.8㎡、確認面からの深さは0.41mを測る。炉跡が遺構中央に位置するため、主軸方位は明確でない。長軸を基準とした場合の方位はN−69°−E、短軸の場合はN−22°−Wである。P1〜4は主柱穴である。南辺と西辺の壁寄りからそれぞれ柱穴が検出されており、いずれかが出入口施設の可能性もあるが、本遺構に伴うものかも含めて明確でない。壁周溝はほぼ全周するが、東壁の一部で途切れる。南東隅周辺からは焼土の堆積

竪穴0123号





竪穴0145号

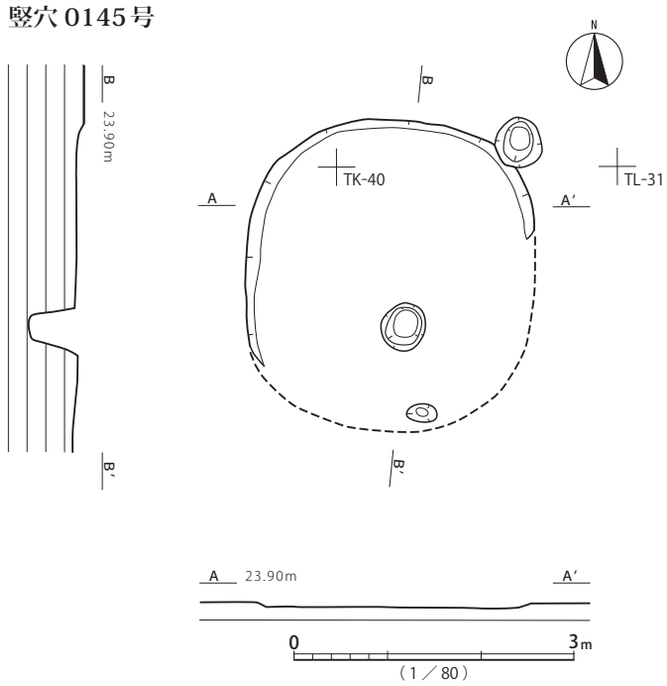


Fig.133　竪穴0123号 遺構遺物、竪穴0145号 遺構

が確認されており、火災に遭った可能性がある。

実測可能遺物は、1～4・7・9～11は甕形土器、5・6・15・20・21は壺形土器、13・14・16・17・22・23は高杯形土器、19は器台形土器である。8は甕形土器、12は鉢形土器、18は器台形土器であろうか。5は台付装飾壺と想定されている（比田井1987）。1・2は口縁端部が面取りされる北陸北東

部系、3〜5は5の字状有段口縁の北陸南西部系である。底部が尖底気味の7・10・11も北陸系土器に由来するものであろう。22・23は同一個体で、櫛描横線文に貝殻腹縁文を加える。4・6・8・11・16は南東隅周辺から検出され、いずれも床面上からの出土である。

本遺構の土器は過去に公表されており（比田井1987）、比田井論文第6図86は本報告4、87は3、89は5、90は1か、91は2、92は11、93は19、95は15に対応すると思われるが、第6図88・94は該当する遺物を確認できない。

本遺構は長方形の平面形態をとり、炉を中央に設けるなど、当該地域の一般的な竪穴と異なる。北陸系土器の多量出土とあわせて、竪穴0106号と同様の性格をもつものと考えられる。

大村は中台編年において、これらの土器群を中台2−1式に位置付け、典型的な月影式甕に対してやや後出すると考えている（大村2009）。弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0151号　（Fig.135、PL.21・57・109）

UK−94を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は小型の長方形を呈し、規模は4.25×3.35m、遺構下場面積は10.1㎡、確認面からの深さは0.33mを測る。炉跡が遺構中央に位置するため、主軸方位が明確でない。長軸を基準とした場合の方位はN−47°−W、短軸の場合はN−44°−Eである。炉跡は遺構中央から検出されている。主柱穴や貯蔵穴は検出されていない。南東辺壁際中央に、茶褐色土を0.10〜0.15m程盛った不定形の高まりが検出されているが、性格は不明である。南東壁際の盛土部により途切れているが、壁周溝は全周するものと思われる。北隅周辺からは少量の焼土の堆積が検出されている。

実測可能遺物は、1〜3・5は甕形土器、4は器種不明の底部である。1・2は同一個体の可能性がある。3は5の字状有段口縁の北陸南西部系である。1・3・5は東隅寄り、2は南東壁際の盛土部から検出され、いずれも床面上からの出土。4は南西辺壁周溝内からの出土である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0152号　（Fig.136、PL.21・57）

UK−92を中心に位置する。北西隅で竪穴1556号、中央で溝2204号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2204号よりも古い。1556号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが古いと考えられる。

北西辺壁が検出されないが、平面形態は楕円形を呈すと考えられ、推定規模は5.78×5.57m、遺構下場面積は25.6㎡、確認面からの深さは0.14mを測る。主軸方位はN−26°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。主柱穴や壁周溝は検出されていない。南東辺壁際に位置するP1・2は、出入口施設や貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。

実測可能遺物は1の甕形土器のみである。遺構中央南寄りから検出され、床面上からの出土である。胴部に最大径をもつが、段部下端までの口頸部高は低い。

弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴 0149･0150号

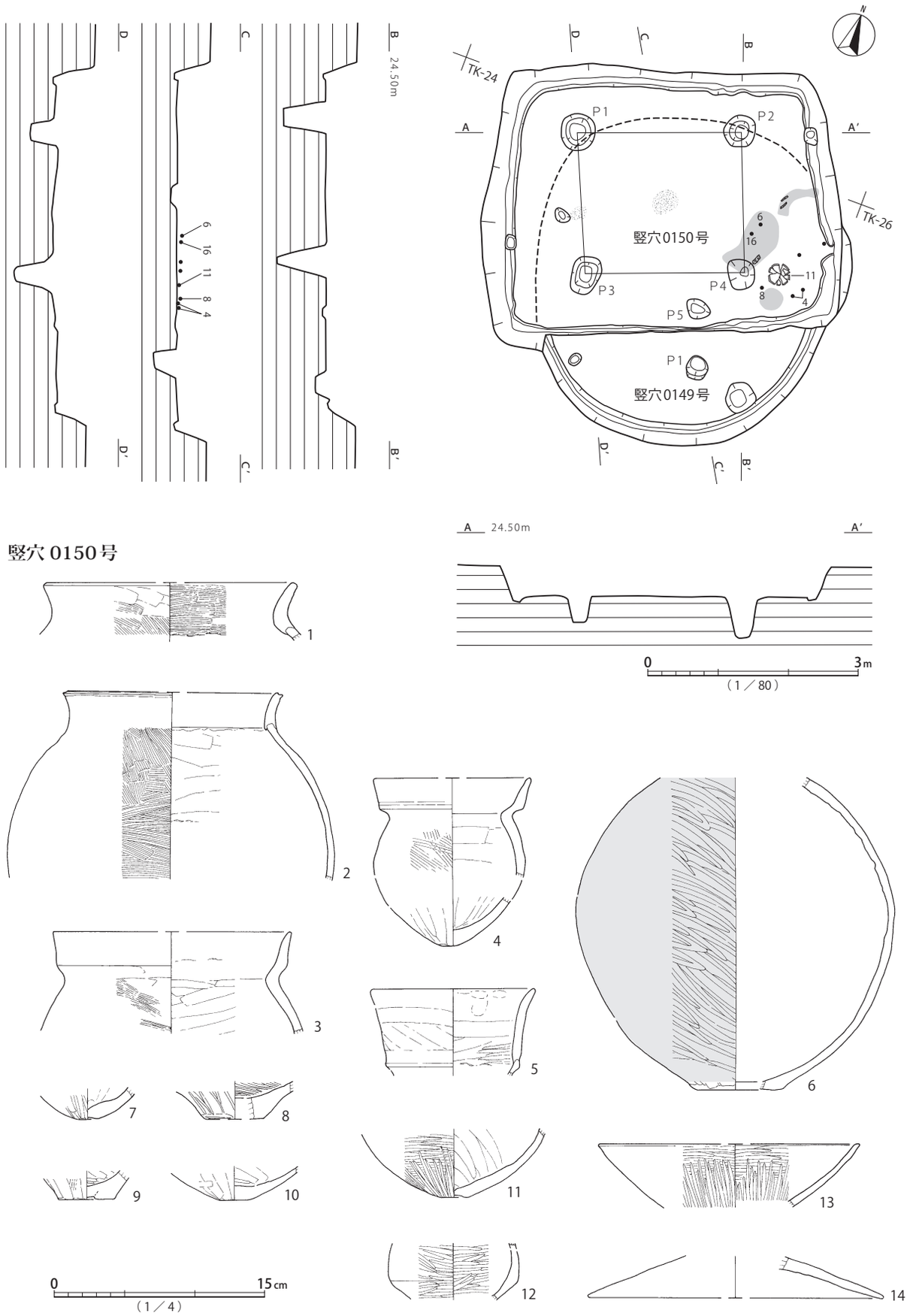
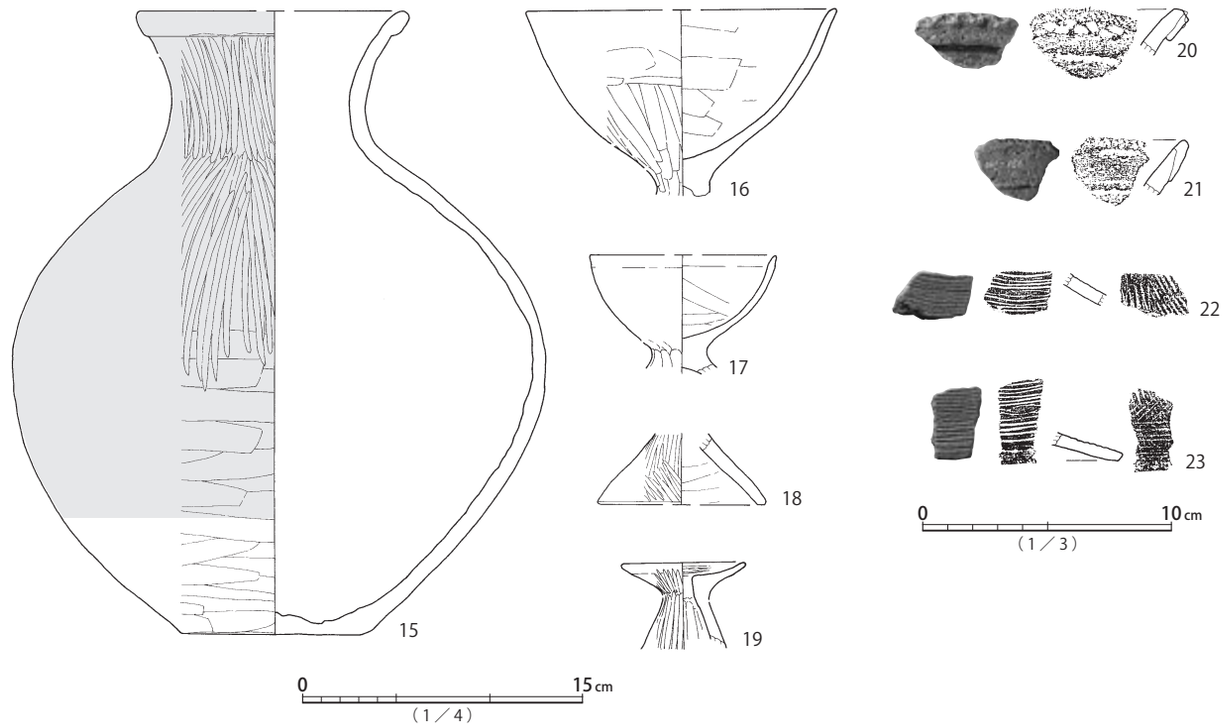


Fig.134　竪穴0149号 遺構、竪穴0150号(1) 遺構遺物

竪穴 0150 号



竪穴 0151 号

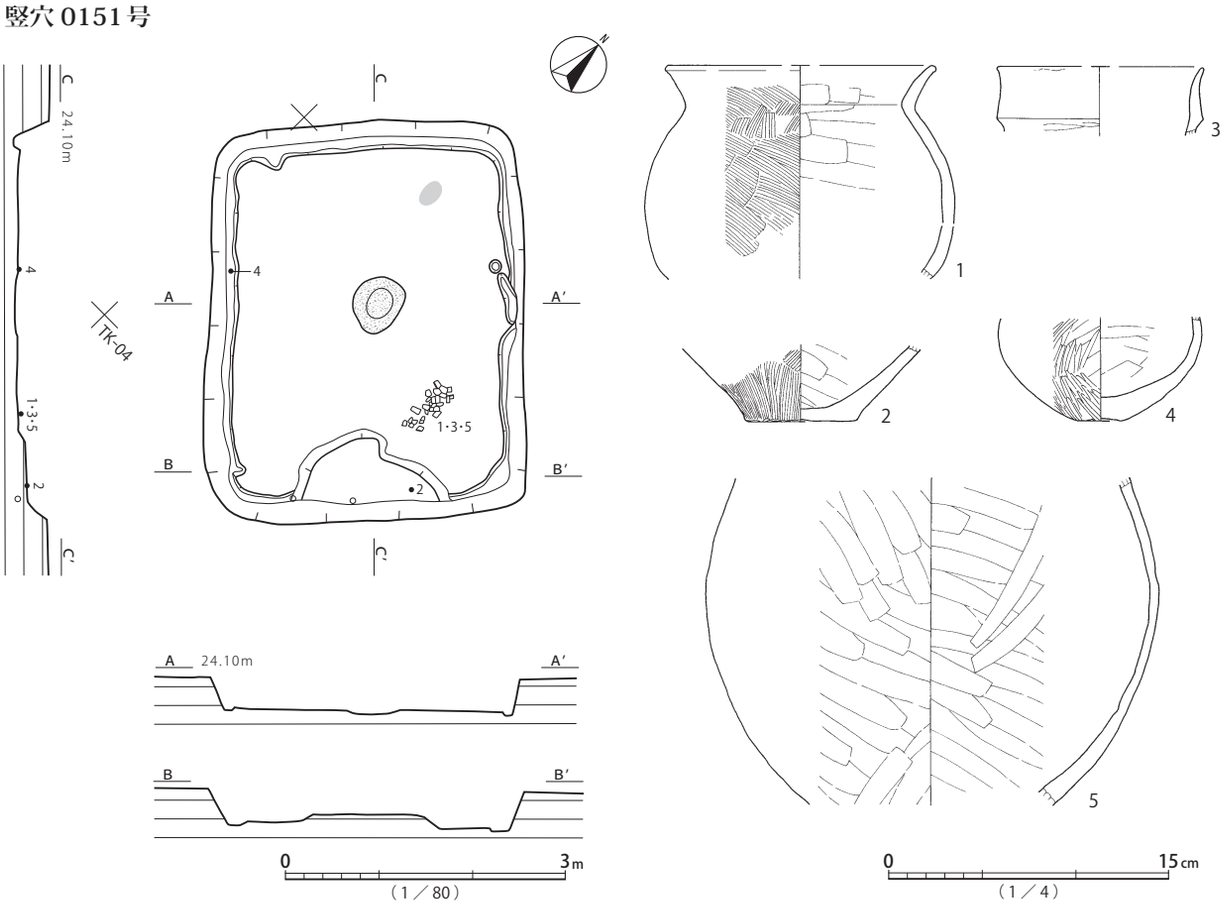


Fig.135　竪穴0150号(2) 遺物、竪穴0151号 遺構遺物

竪穴0153号 （Fig.136、PL.21）

UK−74を中心に位置する。北側で溝606号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が606号よりも古い。

平面形態はわずかに胴の張る隅丸方形を呈す。北側半分が上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝606号）により壊されるため、詳細は不明であるが、推定規模は3.99×4.38m、推定遺構下場面積は14.5㎡、確認面からの深さは0.05mを測る。主軸方位はN−32°−Wである。炉跡は遺構中央やや北西寄りに位置する。遺構範囲からは、柱穴や土坑状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は全周するものと思われる。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態と周辺の遺構の状況から、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0154号 （Fig.137、PL.21）

UK−56を中心に位置する。中央で溝606号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が606号よりも古い。

平面形態は小型の長楕円形を呈すと思われるが、北隅と南西壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は4.02×3.49m、推定遺構下場面積は10.3㎡、確認面からの深さは0.05mを測る。主軸方位はN−42°−Eである。炉跡は検出されていないが、重複する上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝606号）により壊された可能性がある。遺構範囲からは柱穴や土坑状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0155号 （Fig.137）

UK−48を中心に位置する。他遺構との重複はないが、東壁と西壁は調査区外に延びる。土坑とするには規模が大きいため、竪穴建物として報告する。

遺構の北側と南側で調査年次が異なり、位置関係や遺構形状は不明確である。復元提示した遺構図面も正確でない可能性があるが、平面形態は小型の不整長楕円形を呈し、推定規模は3.60×2.66m、推定遺構下場面積は6.5㎡、確認面からの深さは0.26mを測る。主軸方位はN−10°−W程度を測るものと思われる。炉跡や柱穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

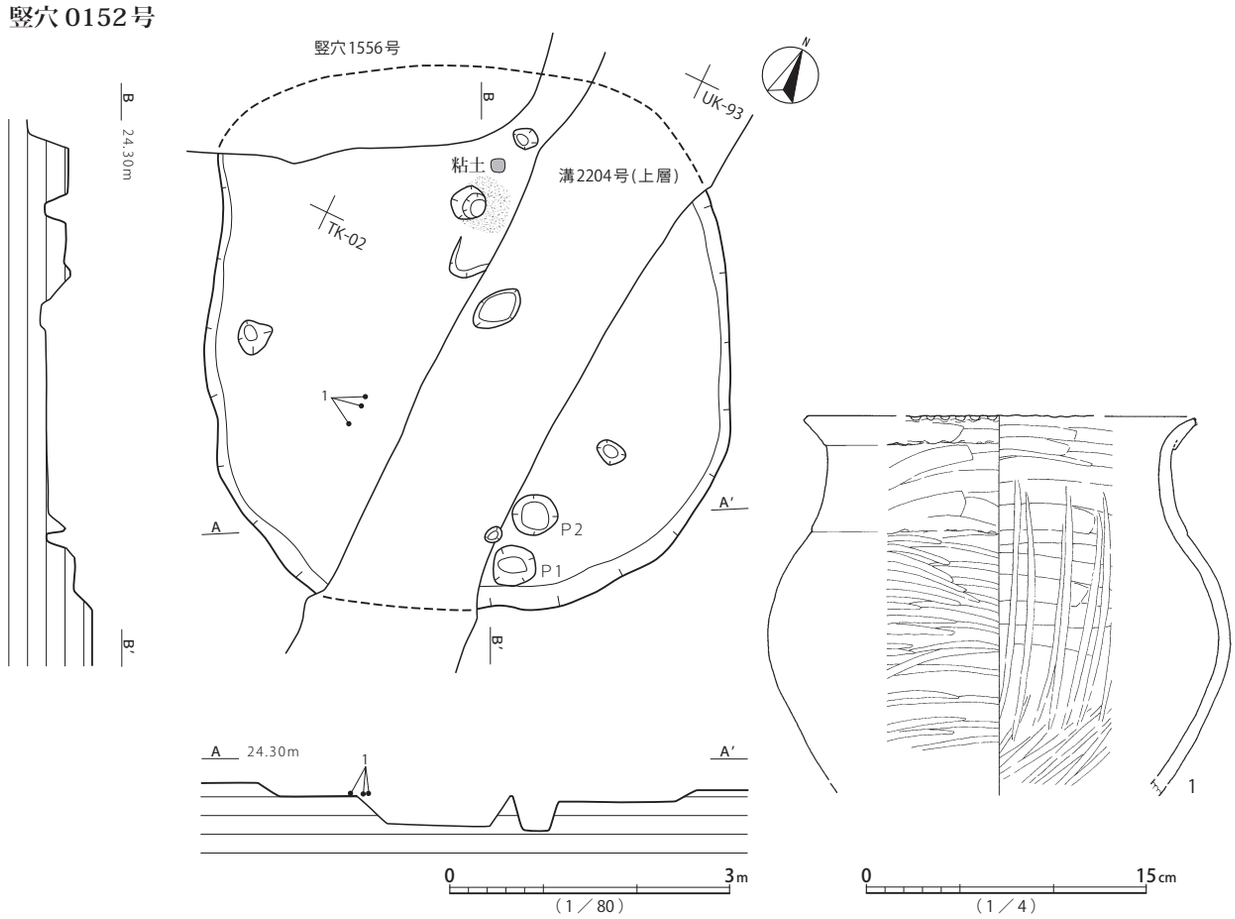
出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0157号 （Fig.138、PL.21・57・109）

UL−72を中心に位置する。北東隅と南側で溝606号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が606号よりも古い。

平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈すと考えられるが、上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝606号）により壊されるため、詳細は不明である。推定規模は副軸長4.46m、確認面からの深さは0.40mを測る。主軸方位はN−8°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。P1・2は主柱穴と考えられ、各隅寄りに配置される。南側の主柱穴は重複により壊されたものと思われる。遺構範囲からは、柱穴

竪穴 0152号



竪穴 0153号

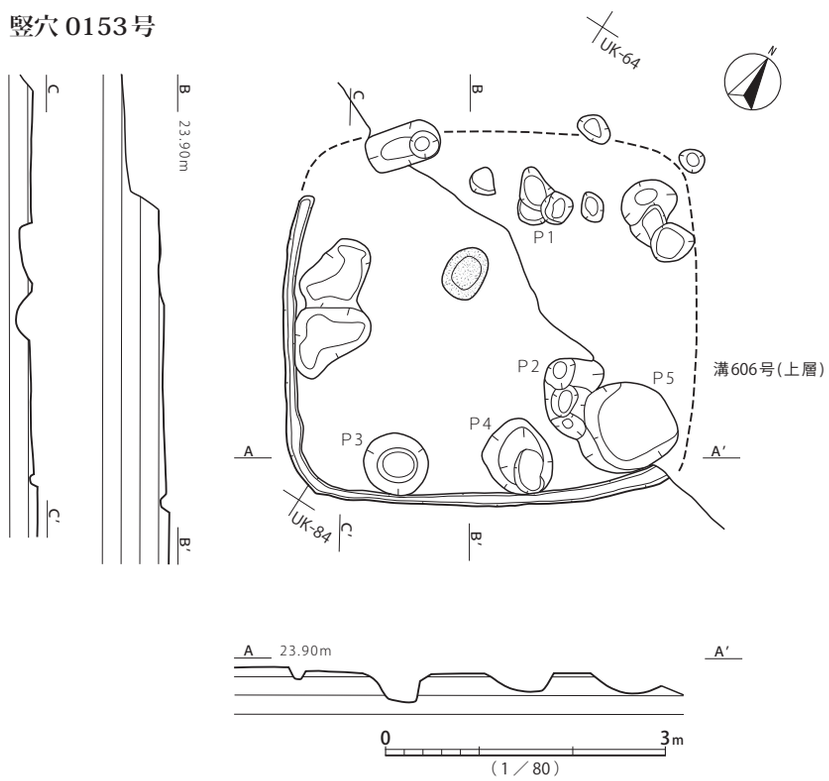
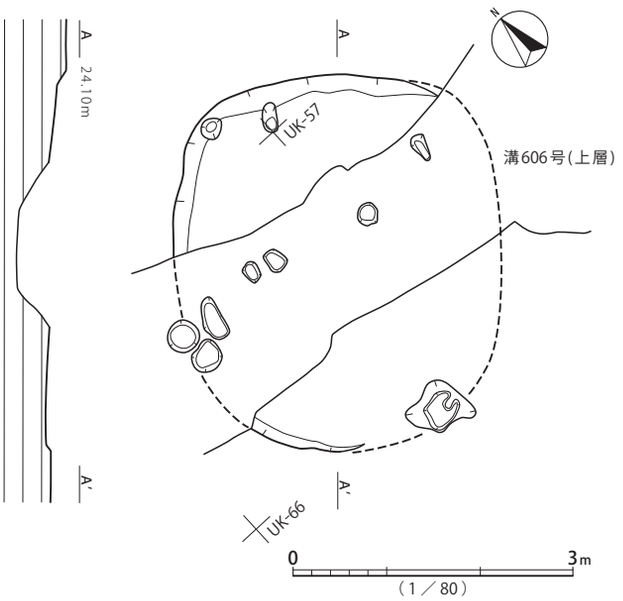


Fig.136　竪穴0152号 遺構遺物、竪穴0153号 遺構

竪穴0154号



竪穴0155号

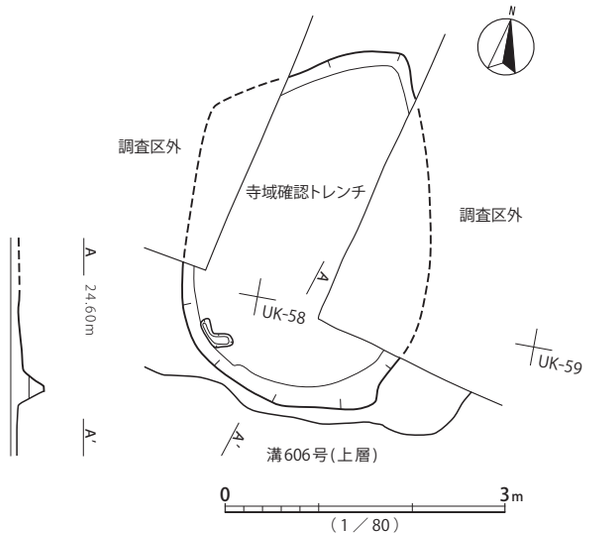


Fig.137　竪穴0154号 遺構、竪穴0155号 遺構

状の掘り込みが複数検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・4は甕形土器、2は椀形土器、3は高杯形土器である。5は胴部下位に段を残し、広口壺形土器であろう。4は接合時に変形しており、器形はやや不確実である。3は北西隅のP1脇、4・5は東壁際付近から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

竪穴0159号　（Fig.139、PL.21・57・109）

RO−89を中心に位置する。南隅で竪穴1720号（上層）とわずかに重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、本遺構が1720号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は6.32×5.57m、遺構下場面積は28.3㎡、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位はN−24°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設である。P5の掘り方は出入口側に向かって傾斜する。P6は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。壁周溝は西南辺壁からのみ検出されている。西隅の床面上からは焼土の堆積が検出され、火災に遭った可能性がある。

実測可能遺物は、1・2は器種不明の底部、3は甕形土器、4は広口壺形土器、5・6は壺形土器である。1〜3・5・6は南東隅から検出され、床面上からの出土である。

弥生時代後期中葉の所産と思われる。

竪穴0160号　（Fig.140、PL.21・57・58）

RO−59を中心に位置する。南壁で溝2232号（上層）と重複し、東辺壁は撹乱により壊される。新

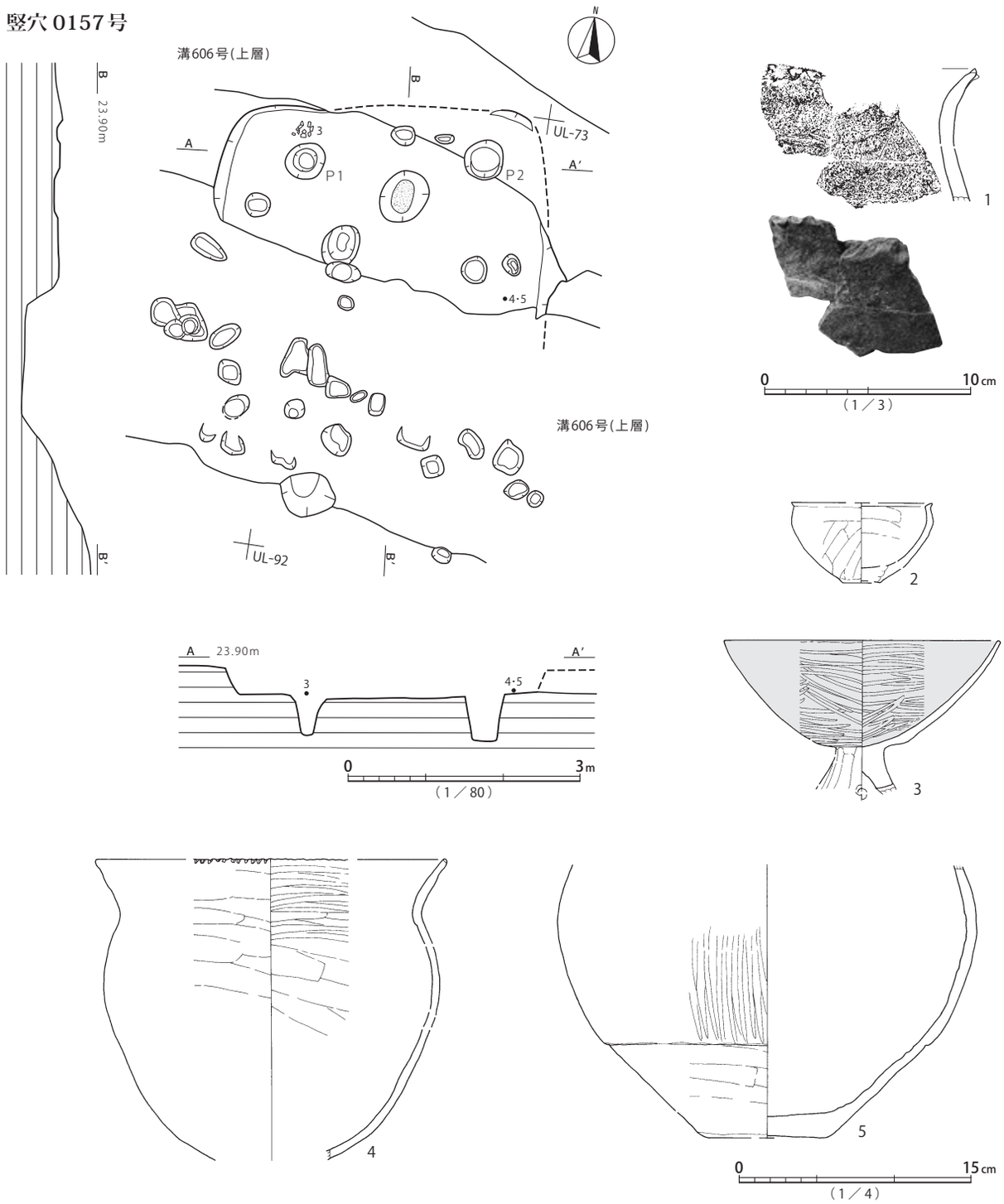


Fig.138　竪穴0157号 遺構遺物

旧関係は、本遺構が2232号よりも古い。

平面形態はやや胴の張る隅丸長方形を呈し、推定規模は5.81×5.12m、推定遺構下場面積は24.9㎡、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位はN−5°−Eである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間から検出されている。P1〜6は主柱穴で、P5・6は建て替えによるものと考えられる。南側が壊されるため、出入口施設と貯蔵穴の有無は不明である。

竪穴 0159号

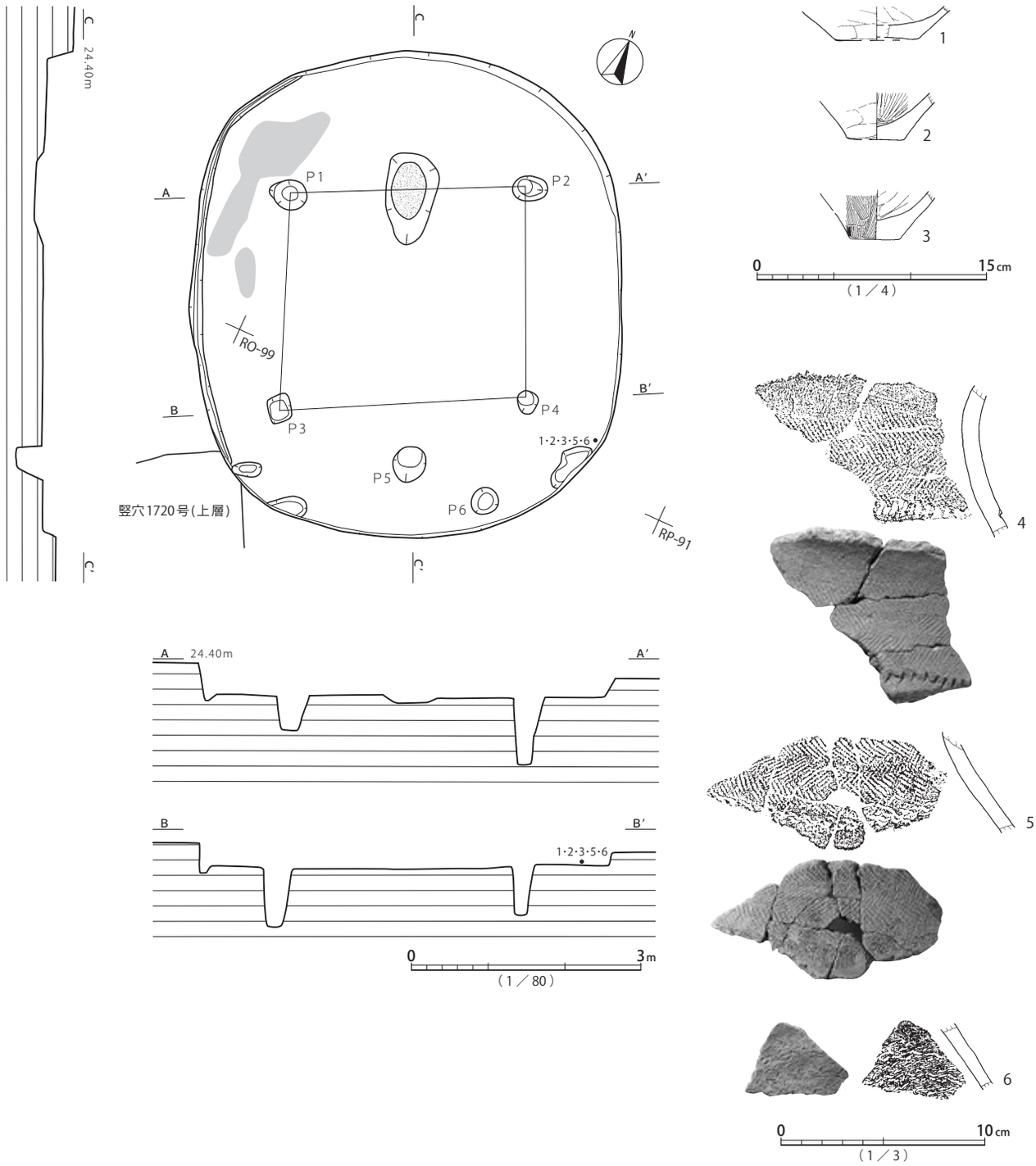


Fig.139　竪穴0159号 遺構遺物

実測可能遺物は、1は甕形土器、2・3は台付甕形土器、4は椀形土器、5は低脚付椀形土器、6・7は高杯形土器、8は壺形土器である。3の脚台部はタタキ整形と思われる。5・7は北辺壁際から検出され、床面上10cmほどの位置から出土している。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴 0160号

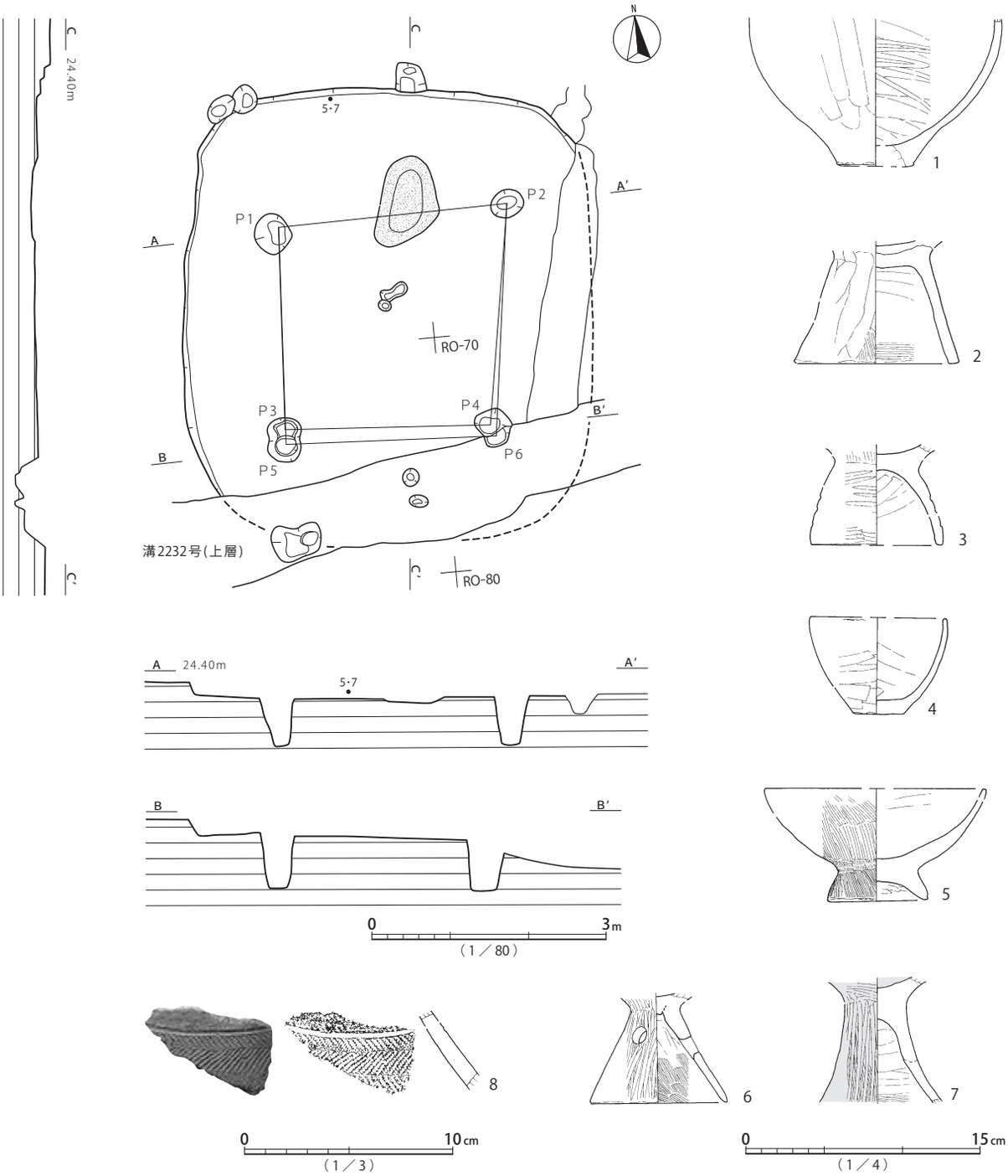


Fig.140　竪穴0160号 遺構遺物

竪穴0161号　（Fig.141、PL.22・109）

RP−52を中心に位置する。南西辺壁の一部で溝2232号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2232号よりも古い。

平面形態は小型の隅丸方形を呈し、規模は3.54×3.64m、遺構下場面積は11.0㎡、確認面からの深さは0.08mを測る。主軸方位はN−44°−Eである。炉跡は北隅寄りから検出されている。P1は出

入口施設の可能性があるが、明確でない。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、口縁端部が面取りされる1の甕形土器のみで、小破片のため復元口径値はやや不確実である。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期後半の所産と思われる。

竪穴0168号 （Fig.141、PL.22・58・109）

UJ−27を中心に位置する。南東辺壁で溝606号（上層）と重複し、遺構西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が606号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと考えられるが、詳細は不明である。南北方向の軸長は4.39m、確認面からの深さは0.30mを測る。北東及び南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−71°−W程度となる。主柱穴と壁周溝は検出されていない。炉跡と貯蔵穴は、遺構確認範囲からは検出されていない。

実測可能遺物は、1・2・5・6は甕形土器、3は小型の壺形土器、4は器台形土器である。2・5・6はタタキ整形に見えるが、条線の粗いハケ整形である。このうち、2・6は同一個体の可能性があるが、5は小型の別個体である。甕形土器は口縁端部が丸く、頸部はくの字状に屈折する。調査図面には記載がなかったが、写真では調査区境界付近から遺物が出土している状況が確認できたため、遺物を特定できないが、およその位置をドットで記した。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴1301号 （Fig.142、PL.22）

PN−89を中心に位置する。西隅の一部で掘立柱建物3132号（上層）と重複し、南西側は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が3132号よりも古い。

平面形態は小型の楕円形を呈し、規模は3.29×3.33m、推定遺構下場面積は8.6㎡、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−42°−Wである。炉跡は遺構中央北隅寄りから検出されている。P1・2は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は1の甕形土器のみで、調査図面には記載はないが、炉跡覆土中からの出土である。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

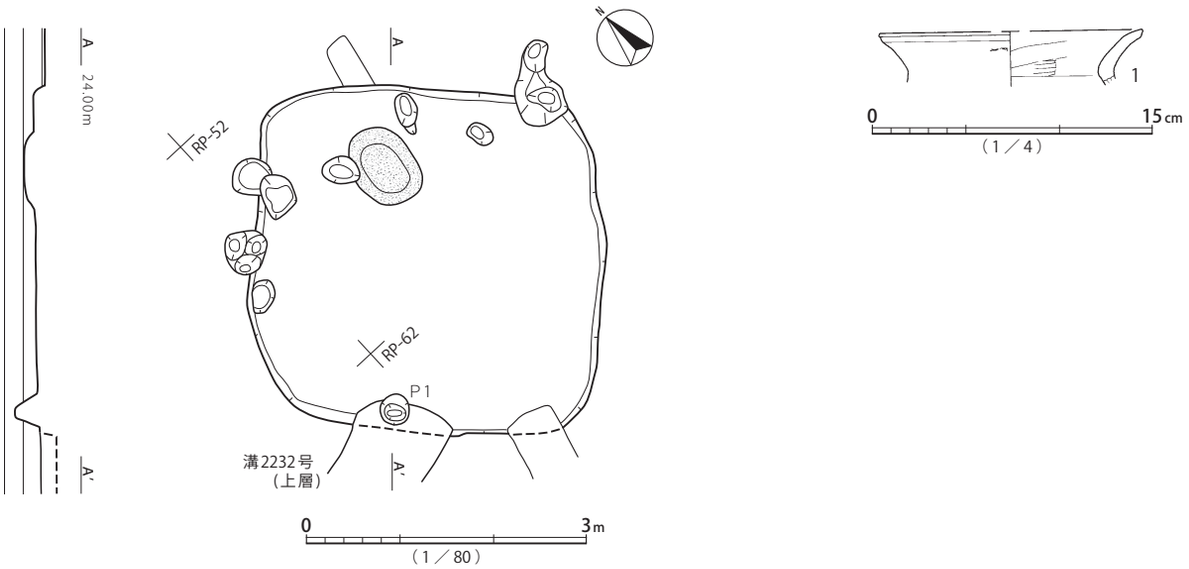
竪穴1302号 （Fig.142、PL.22）

PN−77を中心に位置する。西側で溝2400号（上層）と掘立柱建物3132号（上層）、中央で竪穴1387号と重複し、南隅は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が1387号よりも新しく、2400号と3132号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、推定規模は4.43×4.34m、推定遺構下場面積は15.9㎡、確認面からの深さは0.18mを測り、1387号覆土は本遺構の床面レベルで踏み固められる。炉1が本遺構に伴うもので、中軸線上北西寄りから検出されている。調査図面には、土層断面C−C’の1層が炉1の覆土と記録されている。主軸方位はN−44°−Wである。各隅から検出されたP1〜3は主柱穴の可能性があるが、明確でない。壁周溝は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴 0161号



竪穴 0168号

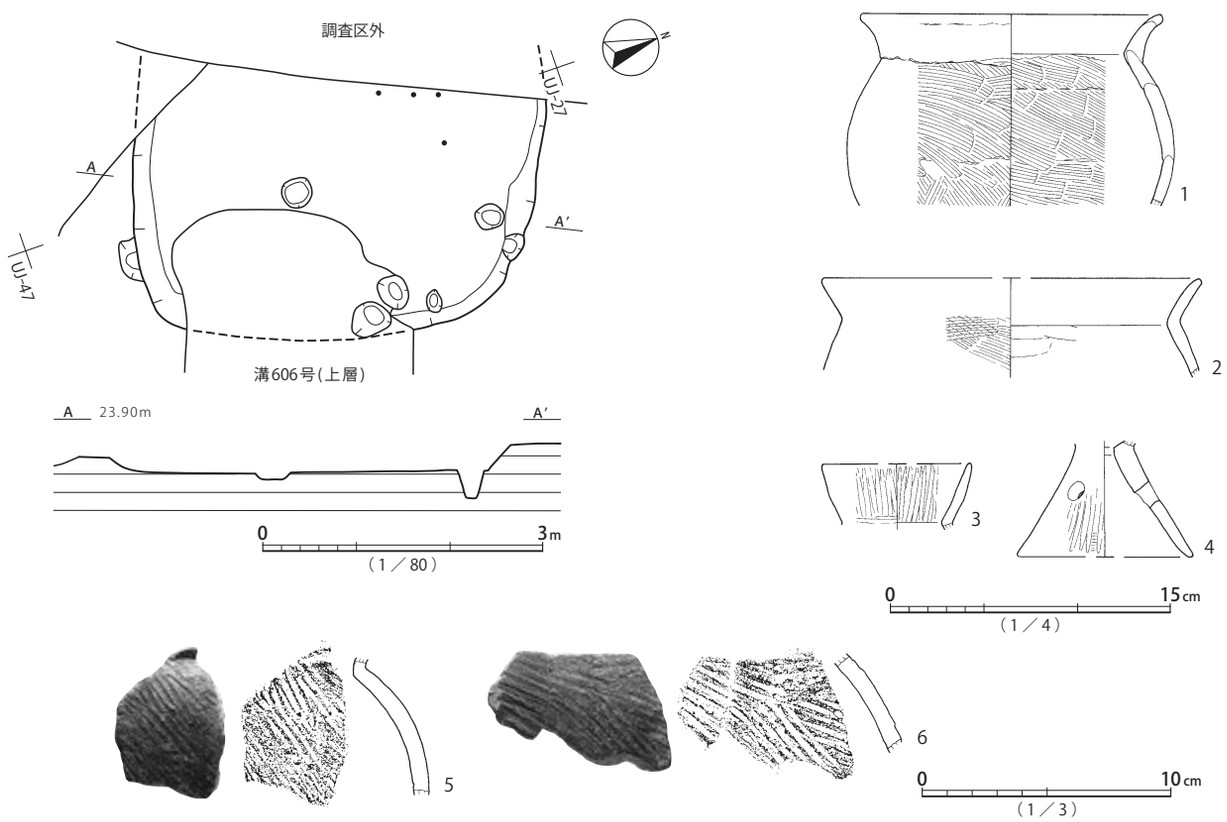


Fig.141　竪穴0161号 遺構遺物、竪穴0168号 遺構遺物

竪穴1387号 （Fig.142、PL.22）

PN−77を中心に位置する。西側で溝2400号（上層）と掘立柱建物3132号（上層）、中央で竪穴1302号と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりもよりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、推定規模は3.52×3.43m、推定遺構下場面積は9.7㎡、確認面からの深さは0.23mを測る。覆土上層は、1302号の床面レベルで踏み固められる。炉2が本遺構に伴うもので、中軸線上南東寄りから検出されている。主軸方位はN−145°−Eである。遺構範囲から柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝は検出されていない。

弥生時代後期後半の所産と思われるが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

竪穴1304号 （Fig.143、PL.22・58・109）

PN−23を中心に位置する。南西辺壁の一部で竪穴1305号（上層）と小鍛冶1629号（上層）、南東隅で土坑（遺構番号なし）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は隅丸長方形を呈すと思われるが、掘り込みが浅く、北隅と南西辺壁を検出することができていないため、明確でない。推定規模は5.08×4.62m、推定遺構下場面積は19.1㎡、確認面からの深さは0.09mを測る。短軸側の長さが異なり、炉跡が中軸線上北西寄りと南東寄りの2ヶ所で検出されていることから、土層断面の観察では分離できていないが、重複する2棟の建物の可能性も考えられる。主軸方位は、北西側の炉跡を基準とした場合はN−50°−W、南東側の炉跡を基準とした場合はN−133°−Eである。主柱穴と壁周溝は検出されていない。遺構範囲から複数の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、2は小型の壺形土器、3はタタキ整形の甕形土器である。1は外面赤彩の可能性があり、壺形土器と思われる。1・2は北西寄りの炉跡周辺から検出され、1は床面上、2は炉跡覆土上面からの出土である。3は南東隅寄りの柱穴状の掘り込みから検出されている。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴1307号 （Fig.144、PL.22・58・109）

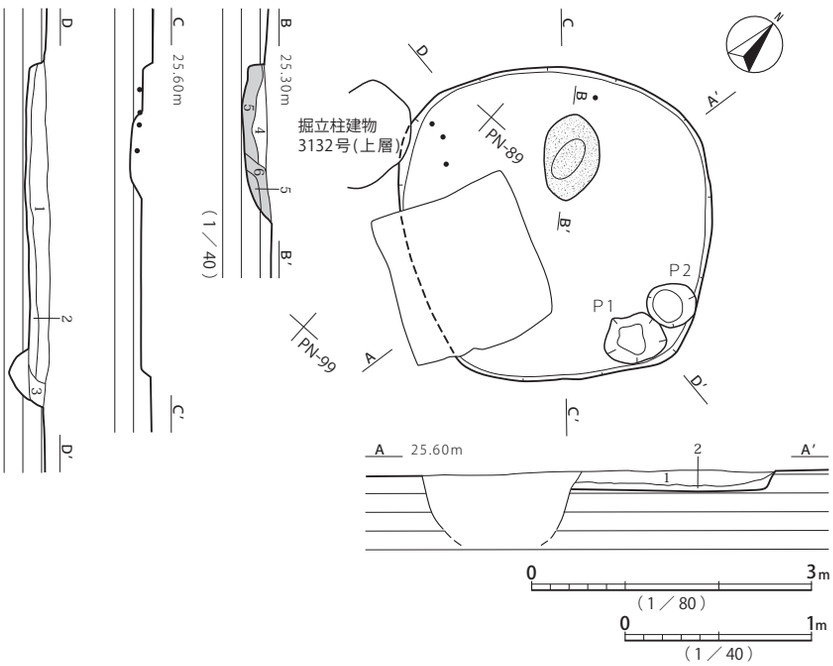
PN−53を中心に位置する。他遺構との重複はない。

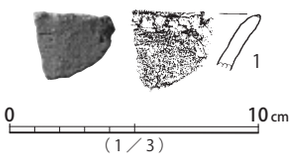
平面形態は小型の胴張隅丸方形を呈し、規模は3.62×3.52m、遺構下場面積は9.8㎡、確認面からの深さは0.46mを測る。主軸方位はN−46°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。主柱穴と壁周溝は検出されていない。P1〜3は本遺構に伴う柱穴の可能性があるが、明確でない。覆土はレンズ状に堆積するが、ローム粒・ロームブロックを多く含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2は高杯形土器、3は甕形土器、4〜7は壺形土器である。遺物は北隅からまとまって検出され、1・6・7はいずれも3層からの出土。2は遺構中央付近から検出され、1層からの出土である。

出土遺物は小破片が多く、帰属時期は明確でない。弥生時代後期中葉の所産と思われるが、後葉まで下る可能性がある。

竪穴 1301号





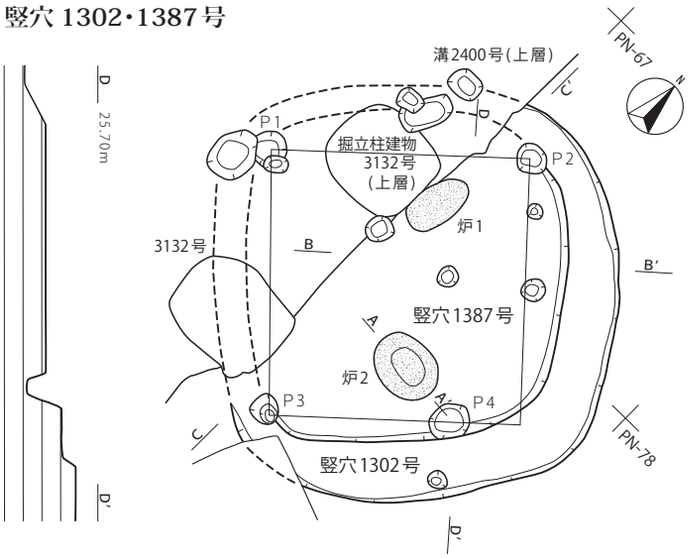
A-A'・D-D'

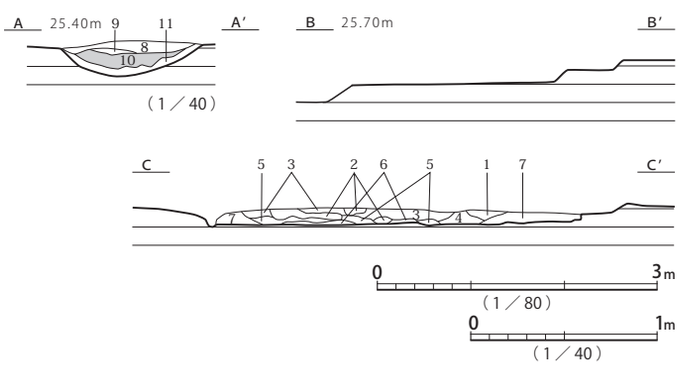
1	褐色土	ローム粒・スコリアを多量に含み、ロームブロックも少量混じる。しまりややあり。
2	暗褐色土	ローム粒・スコリア・焼土粒を多量に含む。しまり強い。
3	明褐色土	ロームブロックを少量含む。しまり弱い。

B-B'（炉跡）

4	暗褐色土	ローム粒・焼土粒を多く含む。しまりあり。
5	赤暗褐色土	焼土ブロック・硬質のロームブロックを多く含む。
6	赤褐色土	ローム粒・焼土粒を多く含む。しまりややあり。

竪穴 1302・1387号





1387号
C-C'

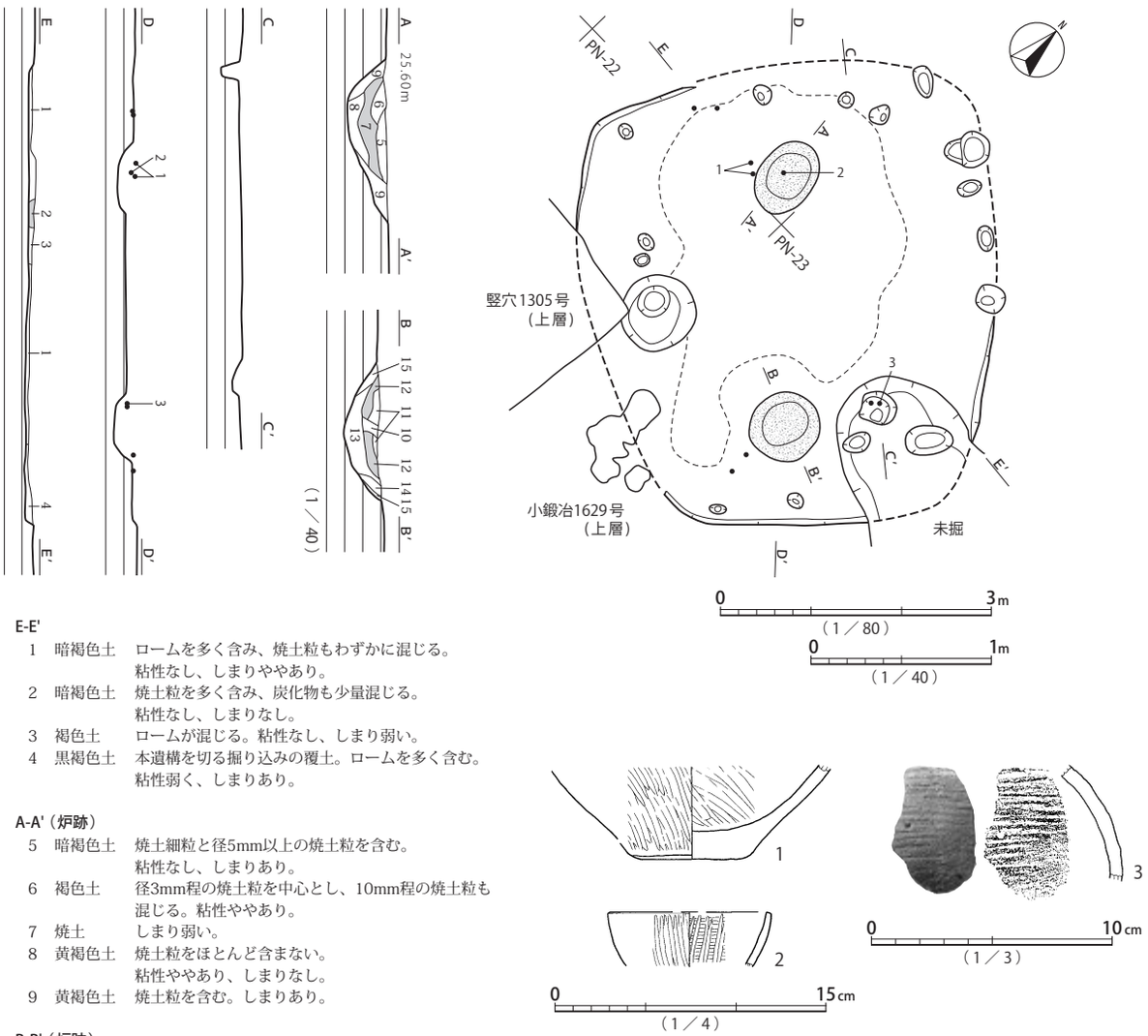
1	黒褐色土	焼土を含む。1302号炉跡か。
2	暗褐色土	ロームを含む。
3	黒褐色土	ローム粒・ソフトロームを含む。
4	黒褐色土	ローム細粒を含む。しまりやや弱い。
5	暗褐色土	ローム粒を含む。2層より暗い。
6	黒褐色土	ローム細粒を少量含む。しまりあり。
7	黒色土	ローム粒を含み、小ロームブロックも少量混じる。

A-A'（炉跡）

8	暗褐色土	ローム粒・焼土粒を多量に含み、炭化粒も混じる。粘性・しまりあり。
9	明褐色土	ローム粒・焼土粒を多量に含む。粘性・しまりあり。
10	焼土	鮮やかな濃い橙色。粘性なし、しまり強い。
11	暗褐色土	ロームブロック・ローム粒を多量に含み、焼土・炭化粒も混じる。粘性あり、しまりなし。

Fig.142　竪穴1301号 遺構遺物、竪穴1302号 遺構、竪穴1387号 遺構

竪穴 1304 号



E-E'
1 暗褐色土 ロームを多く含み、焼土粒もわずかに混じる。粘性なし、しまりややあり。
2 暗褐色土 焼土粒を多く含み、炭化物も少量混じる。粘性なし、しまりなし。
3 褐色土 ロームが混じる。粘性なし、しまり弱い。
4 黒褐色土 本遺構を切る掘り込みの覆土。ロームを多く含む。粘性弱く、しまりあり。

A-A'（炉跡）
5 暗褐色土 焼土細粒と径5mm以上の焼土粒を含む。粘性なし、しまりあり。
6 褐色土 径3mm程の焼土粒を中心とし、10mm程の焼土粒も混じる。粘性ややあり。
7 焼土 しまり弱い。
8 黄褐色土 焼土粒をほとんど含まない。粘性ややあり、しまりなし。
9 黄褐色土 焼土粒を含む。しまりあり。

B-B'（炉跡）
10 暗褐色土 焼土粒を含む。粘性なし、しまりあり。
11 黄褐色土 焼土粒を含む。粘性弱く、しまりあり。
12 焼土 しまり弱い。
13 黄褐色土 焼土粒を少量含む。しまりなし。
14 暗褐色土 粘性あり。
15 黄褐色土 焼土粒を少量含む。粘性ややあり、しまり弱い。

Fig.143 竪穴1304号 遺構遺物

竪穴1308号 （Fig.144、PL.22）

PN−72を中心に位置する。他遺構との重複はない。

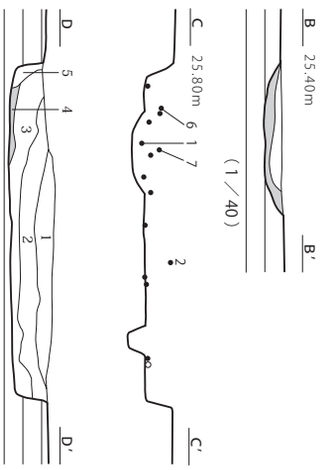
平面形態は小型の楕円形を呈し、規模は3.56×3.42m、遺構下場面積は8.8㎡、確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方位はN−126°−Eである。ややはっきりしない炉跡が、中軸線上南東寄りから検出されている。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

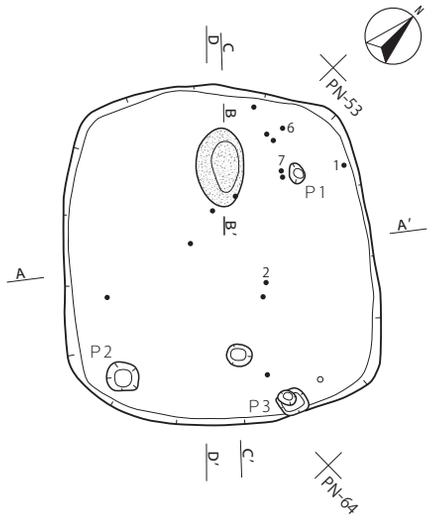
出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴1311号 （Fig.145・146、PL.58・94・109・110）

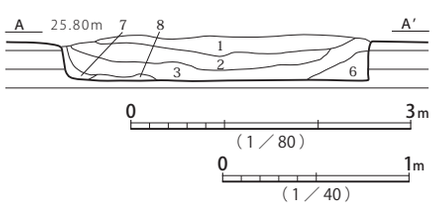
QJ−46を中心に位置する。他遺構との重複はないが、遺構西側は調査区外に延びる。

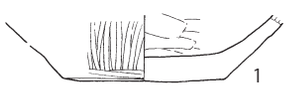
竪穴 1307号

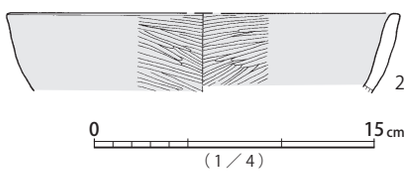


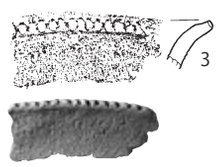


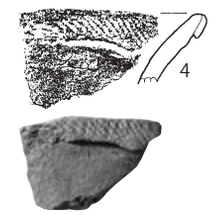
1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまり弱い。
2　明褐色土　ローム粒・ロームブロックを多く含む。しまりあり。
3　暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
4　黒色土　焼土粒を多く含み、ローム粒は3層より少ない。しまりあり。
5　明褐色土　ローム粒・ロームブロックを多く含む。2層より暗い。しまりあり。
6　明褐色土　5層と同じ。
7　明褐色土　5層に似る。しまりややあり。
8　褐色土　ローム粒を多く含む。粘性あり、しまり強い。



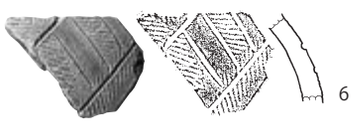


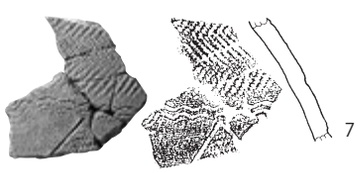


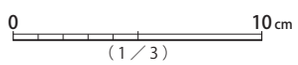




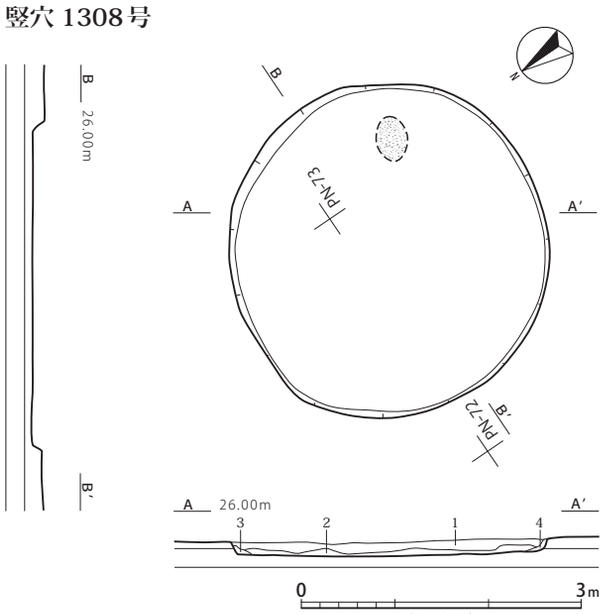








竪穴 1308号



1　黒色土
2　黒褐色土　ロームを含む。
3　暗黄褐色土
4　褐色土　ロームを含む。

Fig.144　竪穴1307号 遺構遺物、竪穴1308号 遺構

平面形態は隅丸方形を呈し、推定規模は5.13×4.67m、推定遺構下場面積は21.0㎡、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−16°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。P1〜4は主柱穴で、P5は貯蔵穴と思われる。壁周溝は検出されていない。東辺壁側からは焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。土層断面の1〜3・9〜12は貼床で、各壁際は溝状に1段掘り込まれる。

実測可能遺物は、1〜3・15は甕形土器、4は椀形土器、5〜9は壺形土器、12・14は高杯形土器、13・16〜18はS字状口縁台付甕形土器である。10・11は壺形土器であろうか。甕形土器口縁端部の押捺はほぼ認められない。13・16〜18は同一個体と思われる。遺物は南東隅から炉跡周辺にかけて多数検出され、ほとんどが覆土下層からの出土である。

弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴1312号　（Fig.147・148、PL.58・59・94・110）

QJ−69を中心に位置する。他遺構との重複はないが、北西辺壁の一部は撹乱により壊される。

平面形態は方形を呈し、規模は4.91×5.17m、遺構下場面積は21.1㎡、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN−42°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は貯蔵穴である。壁周溝が巡るが、北西辺壁の一部で途切れる。覆土中にはローム粒・ロームブロックを多量に含み、細かく分層されることから、人為的に埋め戻された可能性がある。

実測可能遺物は、1〜3・5〜7は甕形土器、4は台付甕形土器、8・9は壺形土器、10は広口壺形土器、11は椀形土器、12〜14は高杯形土器である。7の底部は意図的に外した可能性があるが、破断面に調整痕は認められない。遺物は遺構中央付近から多数検出され、ほとんどが覆土中からの出土。10はP5からの出土である。甕形土器口縁端部の押捺は省略されるものが多く、頸部の形態がくの字屈折傾向を示すものを含む。

弥生時代終末期後半の所産と考えられるが、古墳時代前期前葉を含む可能性もある。

竪穴1314号　（Fig.149、PL.23・59・60・94・110）

QK−82を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は方形を呈し、規模は4.27×4.07m、遺構下場面積は15.8㎡、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位はN−36°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されている。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

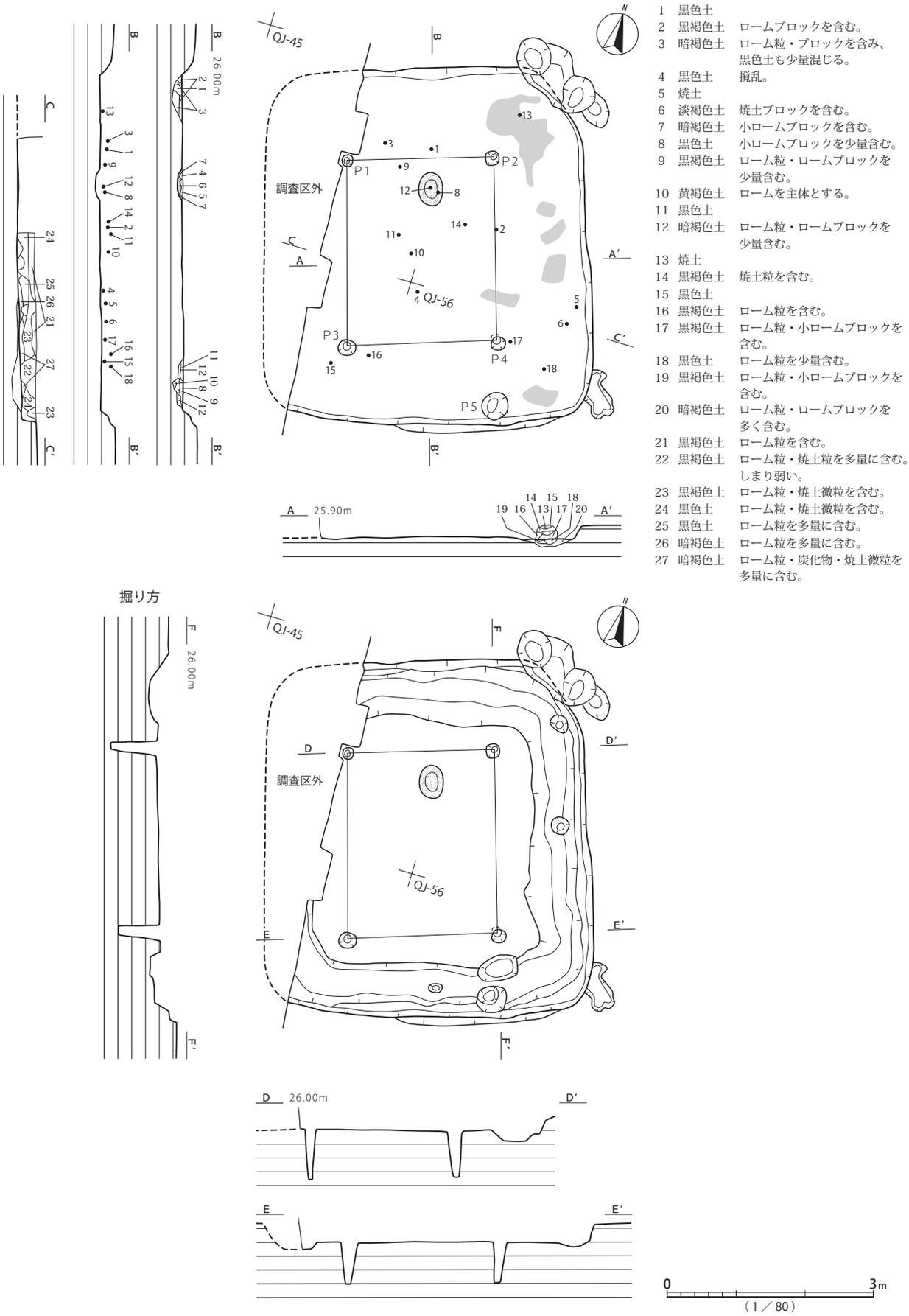
実測可能遺物は、1は甕形土器、3は壺形土器、4は鉢形土器、5は椀形土器、6は高杯形土器である。2は壺形土器と思われるが、脚台部の可能性もある。7は甕形土器であろうか。東隅にやや集中するが、遺物は遺構全体に散漫に分布し、いずれも覆土中からの出土である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴1317号　（Fig.150・151、PL.23・60・110）

QK−35を中心に位置する。西側で溝2204号（上層）、北側で溝2223号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

竪穴 1311号



1 黒色土
2 黒褐色土 ロームブロックを含む。
3 暗褐色土 ローム粒・ブロックを含み、黒色土も少量混じる。
4 黒色土 撹乱。
5 焼土
6 淡褐色土 焼土ブロックを含む。
7 暗褐色土 小ロームブロックを含む。
8 黒色土 小ロームブロックを少量含む。
9 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量含む。
10 黄褐色土 ロームを主体とする。
11 黒色土
12 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量含む。
13 焼土
14 黒褐色土 焼土粒を含む。
15 黒色土
16 黒褐色土 ローム粒を含む。
17 黒褐色土 ローム粒・小ロームブロックを含む。
18 黒色土 ローム粒を少量含む。
19 黒褐色土 ローム粒・小ロームブロックを含む。
20 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む。
21 黒褐色土 ローム粒を含む。
22 黒褐色土 ローム粒・焼土粒を多量に含む。しまり弱い。
23 黒褐色土 ローム粒・焼土微粒を含む。
24 黒色土 ローム粒・焼土微粒を含む。
25 黒色土 ローム粒を多量に含む。
26 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
27 暗褐色土 ローム粒・炭化物・焼土微粒を多量に含む。

Fig.145 竪穴1311号(1) 遺構

竪穴 1311 号

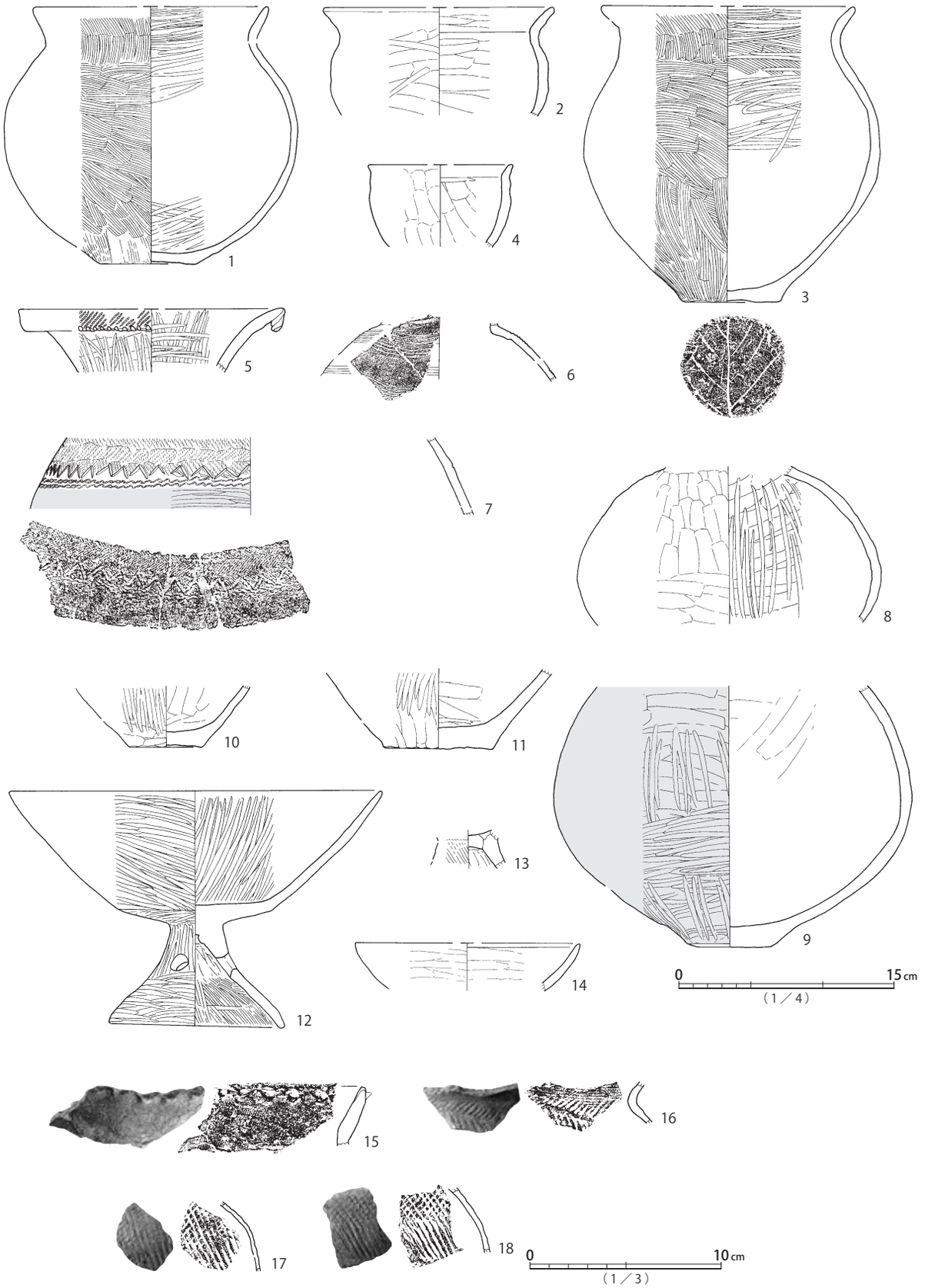
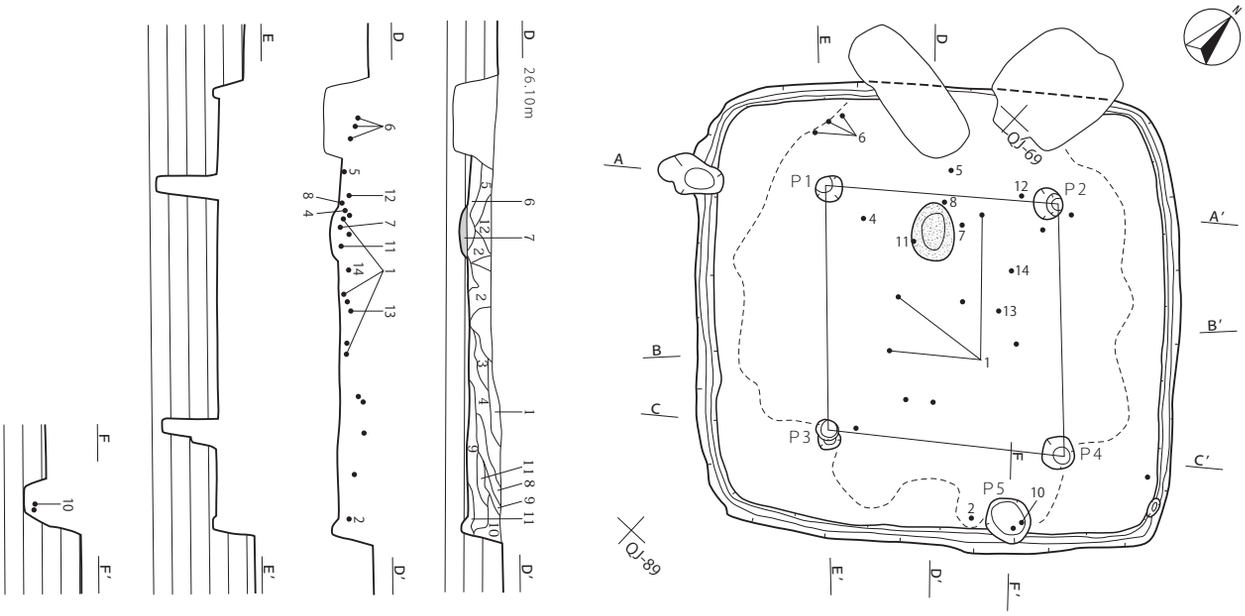
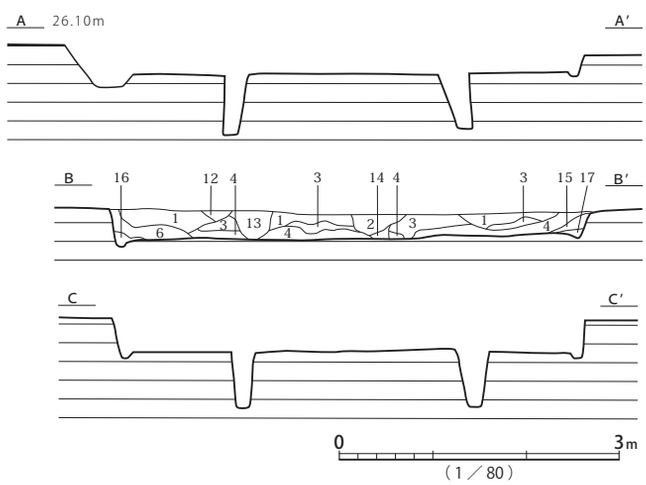


Fig.146　竪穴1311号(2) 遺物

竪穴 1312号



1　黒褐色土　ローム粒を含む。
2　黄褐色土　ローム主体。しまり強い。
3　黒褐色土　ローム粒をやや多く含む。
4　暗褐色土　ロームブロックを多量に含み、焼土微粒も少量混じる。
5　暗褐色土　ローム粒を含む。しまりなし。
6　黒色土　ローム微細粒を多量に含む。
7　焼土
8　黒褐色土　ローム粒を多量に含む。
9　黒色土　ローム粒を多量に含む。
10　暗褐色土　ソフトロームとの混合層。
11　暗褐色土　小ロームブロックを多量に含む。
12　黒色土　ロームとの混合層。
13　黒色土　撹乱。ローム粒を多量に含む。しまりなし。
14　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。しまり強い。
15　暗褐色土　ローム粒を含む。
16　黒褐色土　黒色土とロームの混合層。
17　暗褐色土　暗褐色土とロームの混合層。



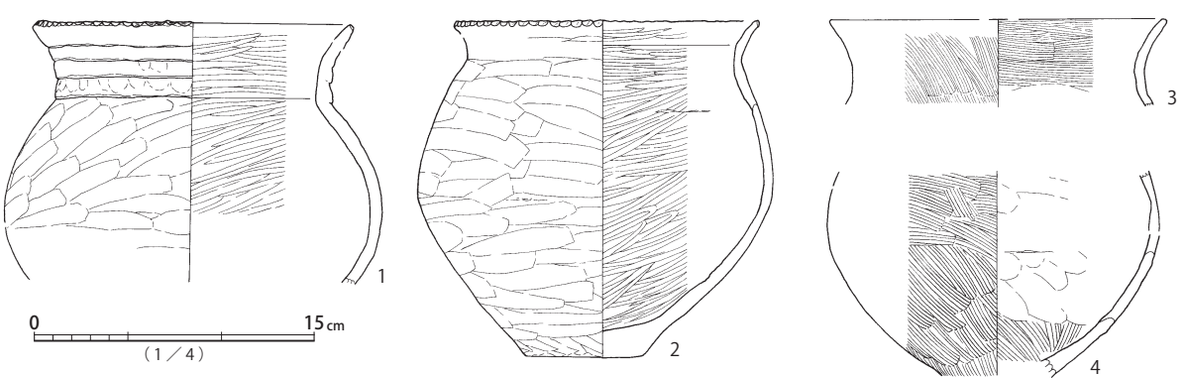


Fig.147　竪穴1312号(1) 遺構遺物

竪穴 1312号

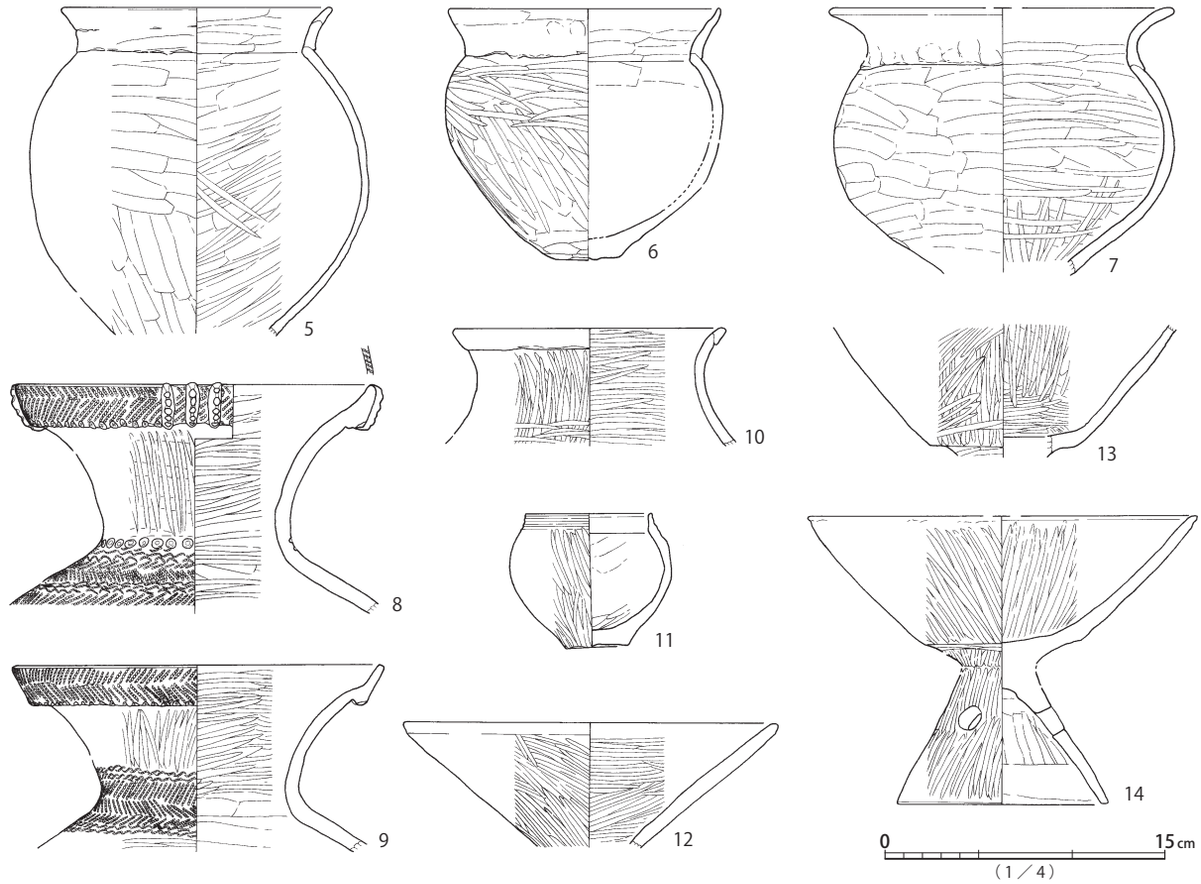


Fig.148　竪穴1312号(2) 遺物

平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は6.88×6.22m、推定遺構下場面積は35.3㎡、確認面からの深さは0.34mを測る。主軸方位はN−13°−Wである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴で、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴と考えられる。壁周溝は検出されていない。遺構範囲からは複数の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。調査図面に記載がなく出土位置は不明であるが、貝層サンプルがごく少量採取されている。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2は椀形土器、3・4は甕形土器、5・6は壺形土器である。2はP4脇から検出され、床面上からの出土である。

弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴1319号　（Fig.152・153、PL.23・60）

PJ−55を中心に位置する。北東辺壁の一部で掘立柱建物3202号（上層）と重複し、西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が3202号よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈し、推定規模は4.60×4.50m、推定遺構下場面積は17.4㎡、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN−49°−Wである。炉跡は中央北西寄りから検出されている。P1〜3は主柱穴である。P5は方形を呈し、2段の掘り込みをもつ貯蔵穴と考えられる。P4も貯蔵穴

竪穴 1314号

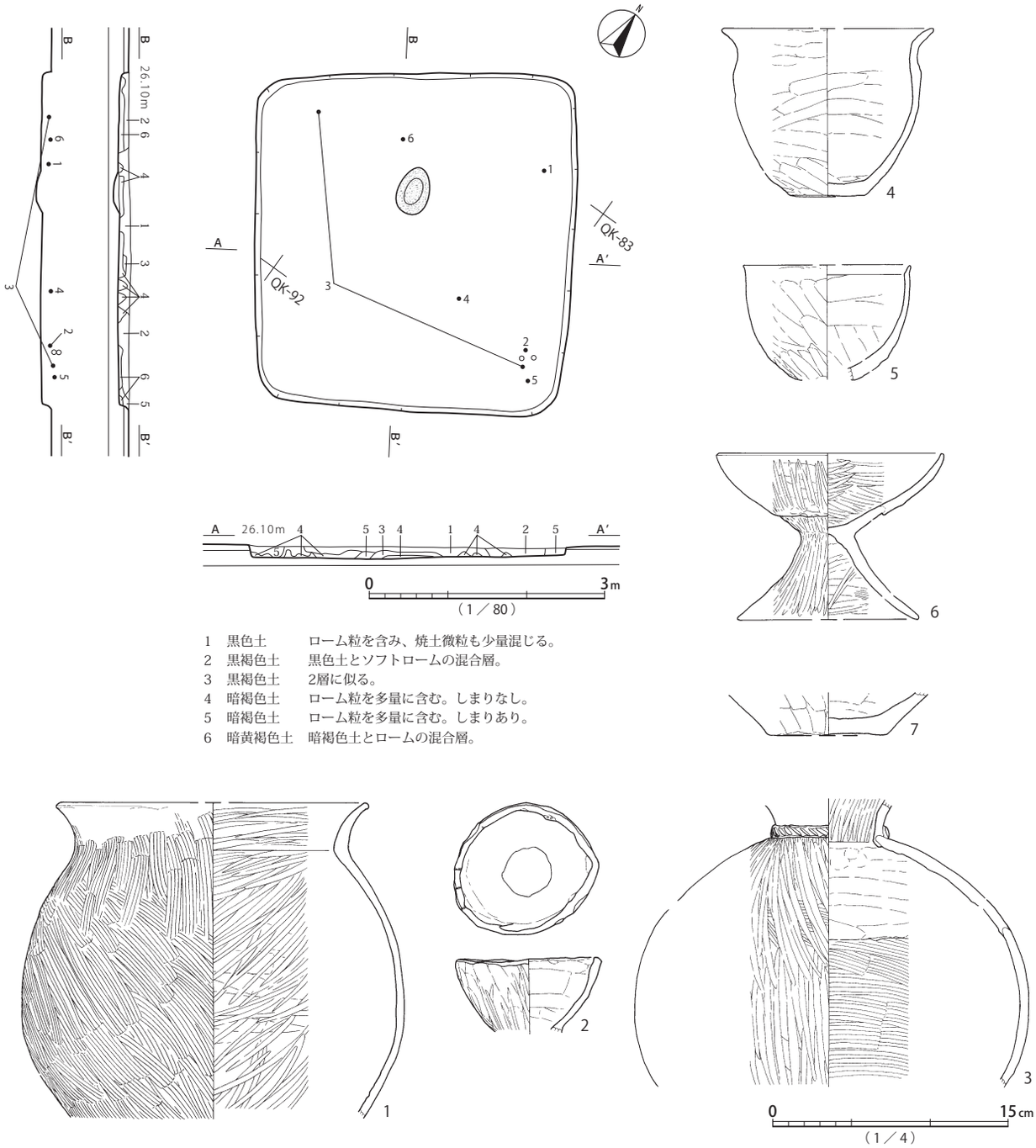
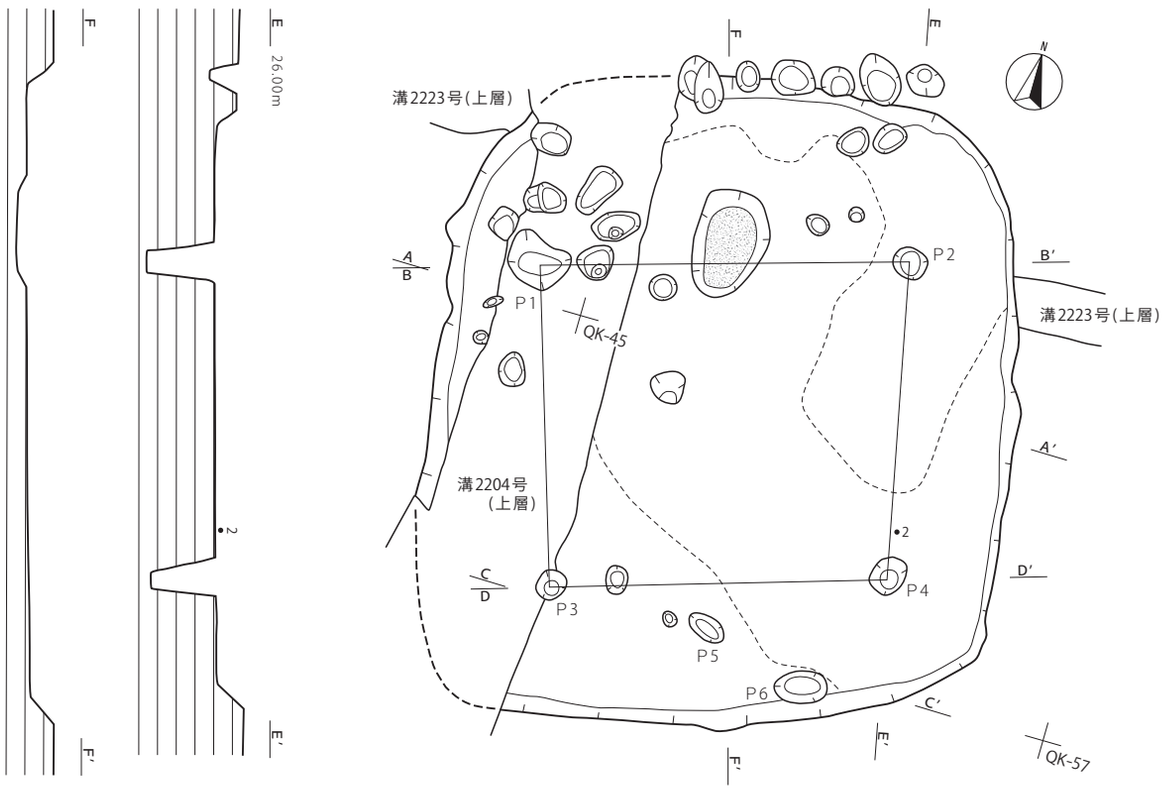


Fig.149 竪穴1314号 遺構遺物

の可能性があるが、明確でない。壁周溝は検出されていない。床面には焼土の堆積と炭化材が確認されており、火災に遭った可能性が高い。調査図面にはカヤ類の炭化物と記載される部分があり、屋根材の可能性が考えられるが、明確でない。

実測可能遺物は、1～5は甕形土器、6・7は高杯形土器である。1～5はP3脇の北東辺壁際からまとまって検出され、6はP2・3間から検出された。いずれもほぼ床面上からの出土である。甕形土器の頸部はくの字状に屈折し、球形の胴部にはヘラケズリ整形が特徴的に認められる。高杯形土器の脚

竪穴 1317号



1 暗褐色土 黒褐色土を少量含む。
2 暗褐色土 黒褐色土・褐色土をわずかに含む。
3 暗褐色土 褐色土・ローム粒を含む。
4 黒褐色土 暗褐色土を含む。
5 黒褐色土 暗褐色土を多量に含む。
6 暗褐色土 黒褐色土を多量に含み、ローム粒も混じる。
7 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を少量含む。
8 暗褐色土 黒褐色土を多量に含む。
9 暗褐色土 黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
10 暗褐色土 黒褐色土を含む。
11 暗褐色土 褐色土を含む。
12 黒色土 ローム粒を少量含み、焼土粒もわずかに混じる。
13 黒褐色土 ソフトロームを含み、ローム粒も若干混じる。
14 黒色土 焼土微粒を含む。1層に似る。
15 黒褐色土 ソフトロームを多量に含み、ローム粒も若干混じる。
16 黒色土 ローム微粒を若干含む。
17 黒色土 粗いローム粒を少量含む。 しまり強い。
18 黒褐色土 ロームブロックを多量に含み、ローム粒も若干混じる。しまり強い。

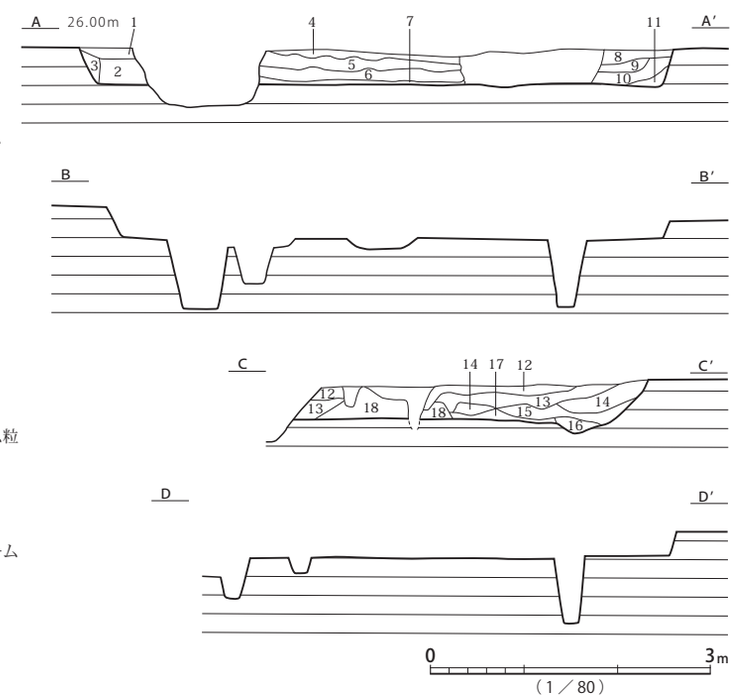


Fig.150 竪穴1317号(1) 遺構

竪穴 1317号

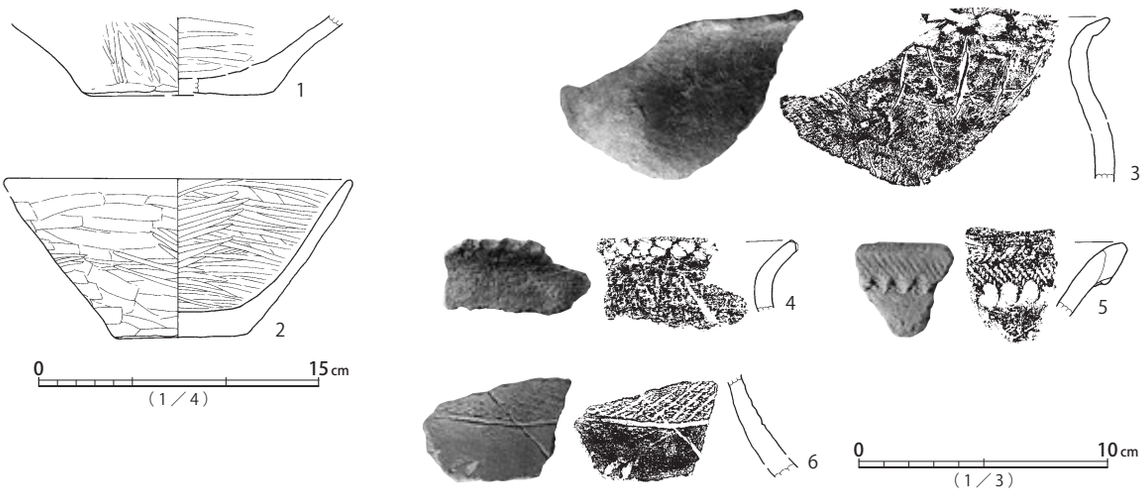


Fig.151　竪穴1317号(2) 遺物

部は低く、緩やかに外反する。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴1327号　（Fig.153、PL.23・60）

PK−22を中心に位置する。掘立柱建物3113・3115号（上層）と重複し、北側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が3113・3115号よりも古い。

上総国分僧寺の付属施設である講師院の双堂と重複し、遺存状態は悪い。平面形態は不整隅丸方形を呈すと思われるが、詳細は不明である。推定規模は副軸長4.32m、確認面からの深さは0.11mを測る。主軸方位はN−23°−W程度となろうか。炉跡や主柱穴、貯蔵穴は、遺構確認範囲からは検出されていない。壁周溝が巡るが、南東隅では途切れている。

実測可能遺物は1の器台形土器のみである。器受部は直線的に開き、端部は鋭角に面取りされる。南辺壁寄りから検出され、床面上から横位で出土している。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期後半の所産と思われる。

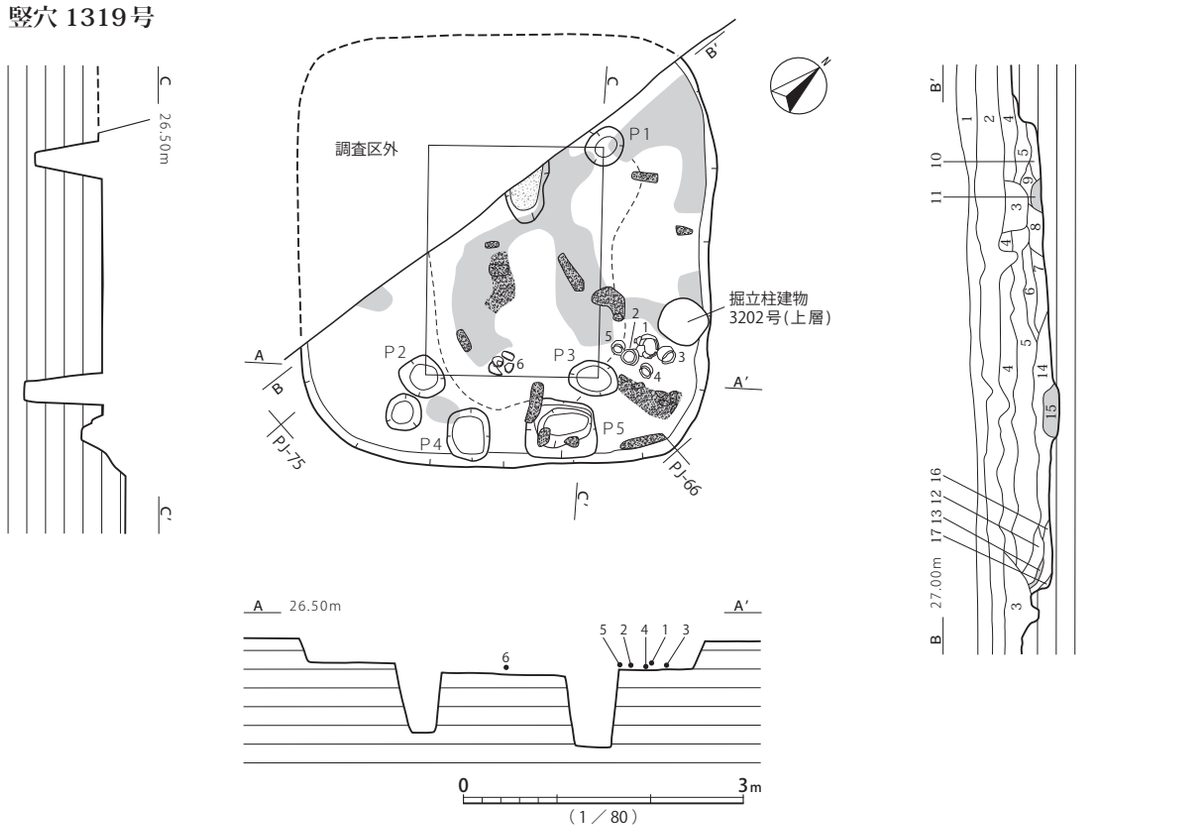
竪穴1329号　（Fig.153）

PK−25を中心に位置する。西側で掘立柱建物3133号（上層）と重複し、東側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が3133号よりも古い。

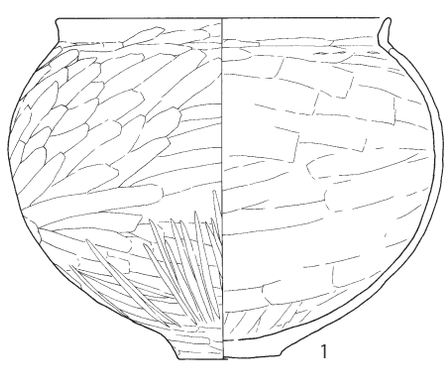
平面形態は楕円形を呈すと思われるが、詳細は不明である。確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位はN−26°−E程度となろうか。柱穴と壁周溝は検出されず、炉跡と貯蔵穴も遺構確認範囲からは検出されておらず、有無は不明である。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴 1319号



1　暗褐色土　　黒褐色土を多量に含み、ローム粒も混じる。しまりなし。
2　暗褐色土　　ローム粒・粘土粒を少量含む。しまり強い。
3　暗褐色土　　ローム粒・粘土粒を少量含み、黒褐色土もわずかに混じる。しまり強い。
4　黒褐色土　　暗褐色土を少量含む。
5　暗褐色土　　黒褐色土を含み、褐色土・ローム粒も少量混じる。
6　暗褐色土　　黒褐色土・ローム粒を少量含む。
7　黒褐色土　　ローム粒を含み、下部には褐色土含む。
8　黒褐色土　　暗褐色土を含み、炭化粒も少量混じる。
9　暗褐色土　　褐色土を少量含む。
10　黒褐色土　　暗褐色土を含む。
11　暗赤褐色土　焼土粒を多量に含み、黒褐色土も少量混じる。
12　黒褐色土　　焼土粒・ローム粒を少量含む。
13　暗赤褐色土　焼土を多量に含む。
14　黒褐色土　　暗褐色土・焼土を含み、黒色土・ローム粒・炭化粒も少量混じる。
15　明赤褐色土　焼土粒を多量に含み、黒褐色土も少量混じる。
16　暗褐色土　　黒褐色土・ローム粒を少量含む。
17　褐色土　　暗褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。



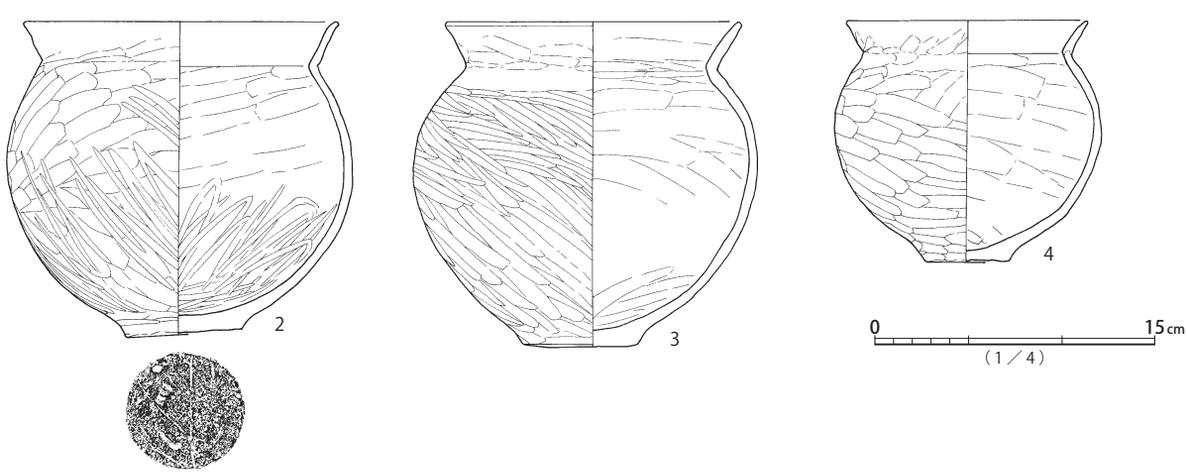
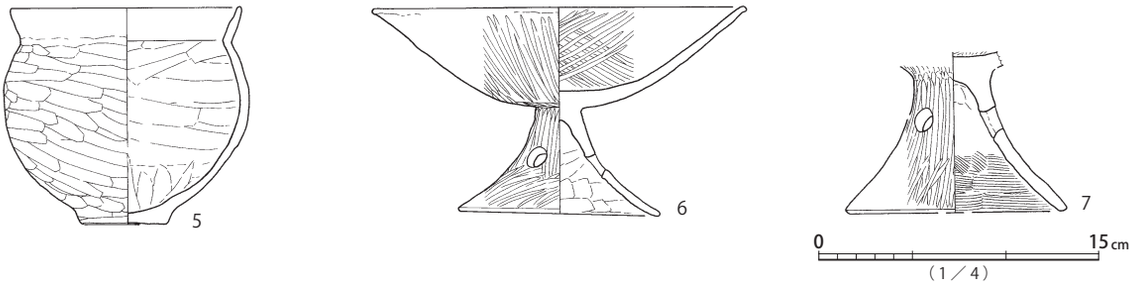
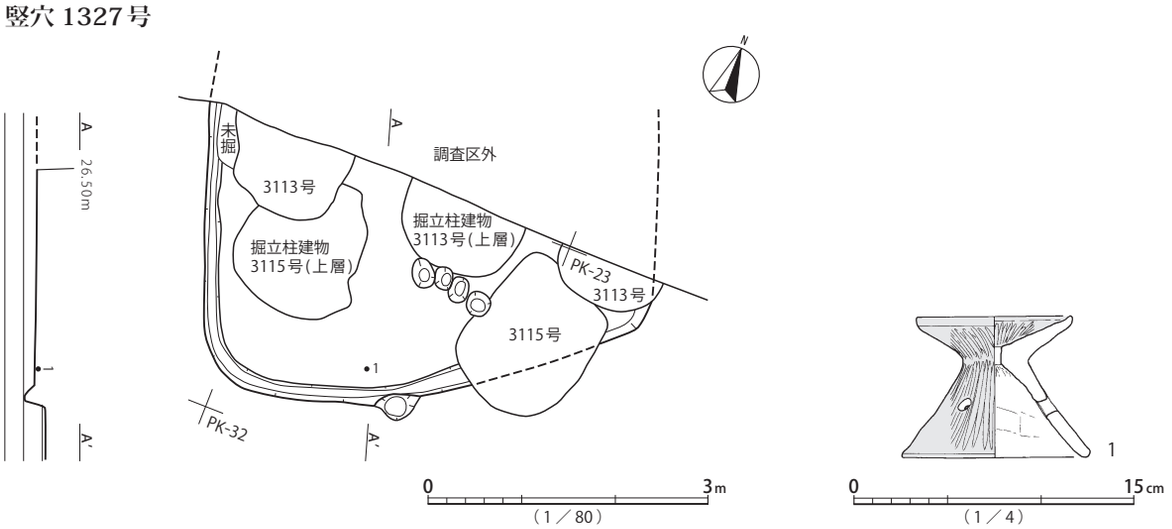


Fig.152　竪穴1319号(1) 遺構遺物

竪穴 1319号



竪穴 1327号



竪穴 1329号

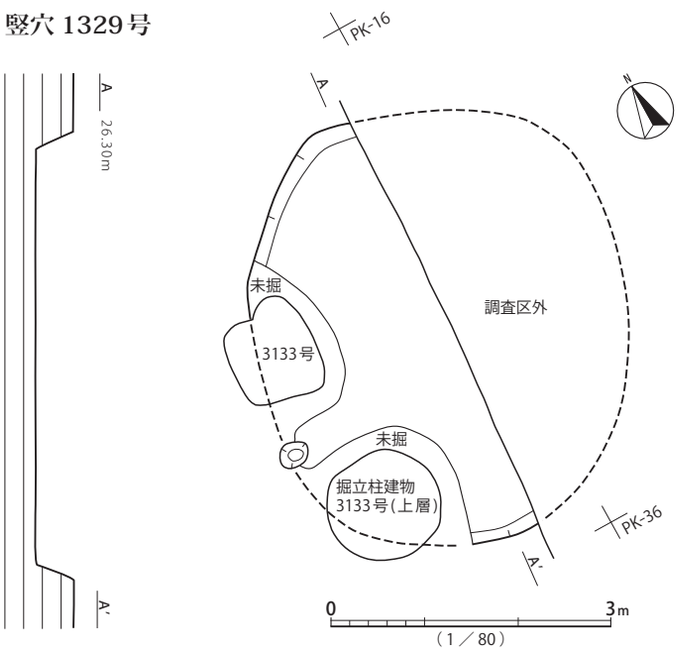


Fig.153　竪穴1319号(2) 遺物、竪穴1327号 遺構遺物、竪穴1329号 遺構

竪穴1336号　（Fig.154、PL.23・24・60・94・110）

OK−28を中心に位置する。北隅で土坑1472号（上層）、北側で掘立柱建物3134号（上層）、南側で溝2201号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は隅丸方形気味の長楕円形を呈し、規模は4.53×4.00m、遺構下場面積は14.4㎡、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位はN−31°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は貯蔵穴である。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜3・5・6は甕形土器、4は小型の壺形土器、7〜9は壺形土器である。8と9は同一個体の可能性がある。2は胴部に1段の粘土紐積み上げ痕を残すが、段部の厚みをほとんど持たない。3は部分的に粘土紐積み上げ痕を残す粗い成形で、胴部上半にハケ状の条線を残す。2は南東隅、4は北隅から検出され、いずれも床面上からの出土。3は炉内からの出土である。

弥生時代終末期前半の所産と思われるが、後期後葉を含む可能性がある。

竪穴1337号　（Fig.155、PL.24・110）

PL−65を中心に位置する。北隅で竪穴1433号（上層）、中央で掘立柱建物3128号（上層）、南辺壁の一部で土坑1440号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

北隅を欠く不整形を呈すが、1433号と接するため、掘り残された可能性が高い。1433号遺構図面に本遺構の北隅と考えられる掘り込みが記載されていたことから、これと結ぶ線が遺構範囲と考えられる。平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、推定規模は5.24×4.68m、推定遺構下場面積は20.5㎡、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位はN−28°−Wである。炉跡や主柱穴、壁周溝などの屋内施設は検出されず、P1も本遺構に伴うものか、明確でない。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2は甕形土器、3・4は壺形土器、5・6は椀形土器である。

出土遺物はいずれも小破片で、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴1340号　（Fig.156、PL.24・60）

PL−36を中心に位置する。北側で土壙墓1376号（上層）、南西側で土壙墓1375号（上層）、南東側で竪穴1339号・土坑1465号・土坑1466号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は6.20×5.33m、推定遺構下場面積は26.8㎡、確認面からの深さは0.39mを測る。主軸方位はN−40°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は1の器種不明の底部のみである。このほか、図示に至らない器台形土器器受部、甕形土器胴部の細片、砂岩製の砥石片が出土しているが、いずれも本遺構に伴うものか、明確でない。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後葉の所産と思われる。

竪穴1341号　（Fig.157、PL.24）

PL−78を中心に位置する。北東側で竪穴1342号・掘立柱建物3128号（上層）、東側で竪穴1343号・溝614号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

竪穴 1336号

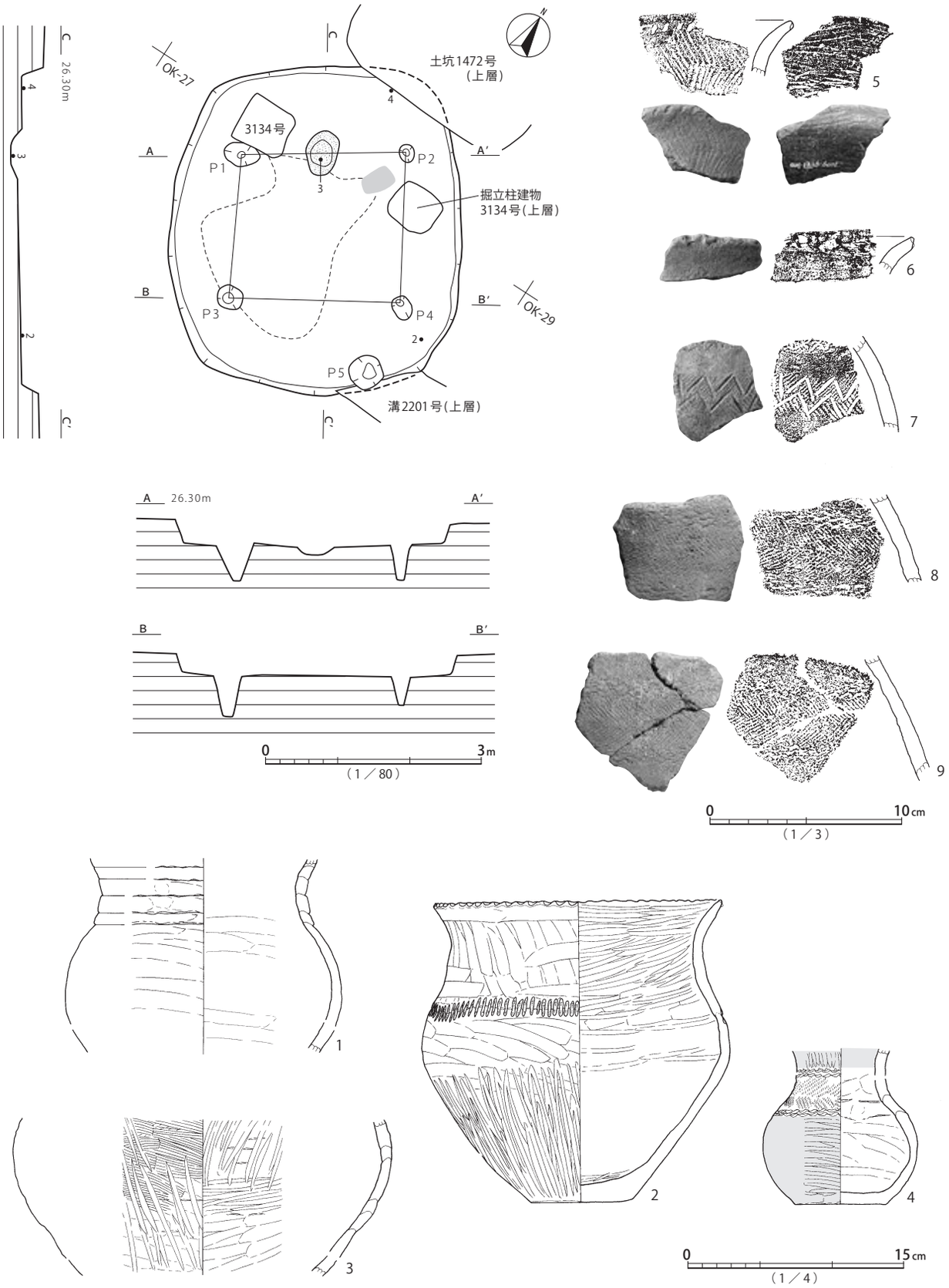


Fig.154　竪穴1336号 遺構遺物

竪穴 1337号

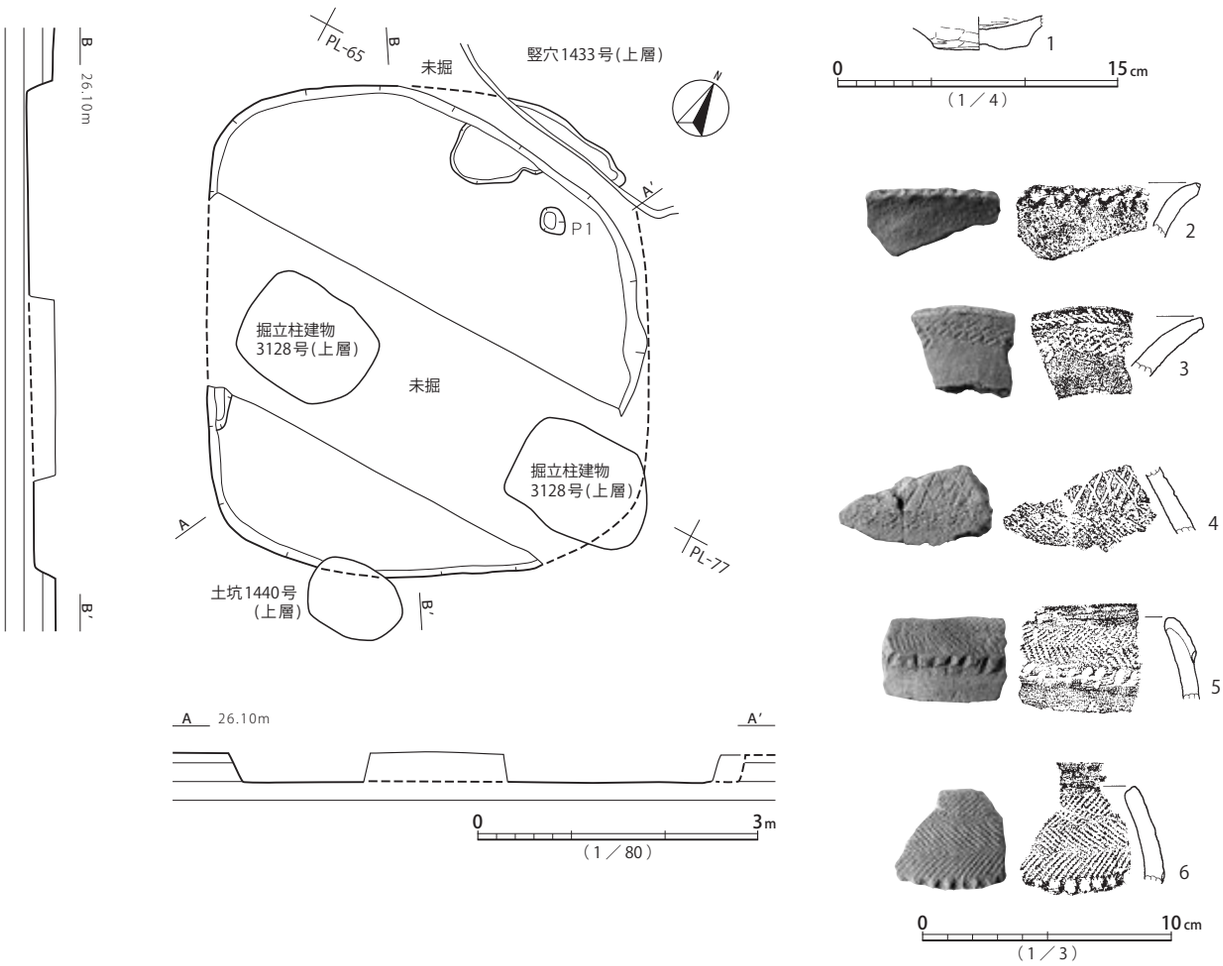


Fig.155　竪穴1337号 遺構遺物

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、詳細は不明である。推定規模は副軸長3.54m、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位はN−123°−Wである。炉跡は中軸線上南西寄りから検出されている。P1は主柱穴の可能性があるが、対応する柱穴が検出されておらず、明確でない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、帯縄文に結節文区画を施す1の壺形土器のみである。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後葉の所産と思われる。

竪穴1346号　（Fig.158、PL.24）

PM−41を中心に位置する。北東辺隅の一部で土坑1393号（上層）、南側で掘立柱建物3128号（上層）、北西辺壁の一部で竪穴1347号と重複する。新旧関係は、本遺構が1393号と3128号よりも古い。1347号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は5.87×5.63m、推定遺構下場面積は24.1㎡、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN−36°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜3は主柱穴であるが、3128号と重複する南隅は、掘り残された可能性が高く、

竪穴 1340号

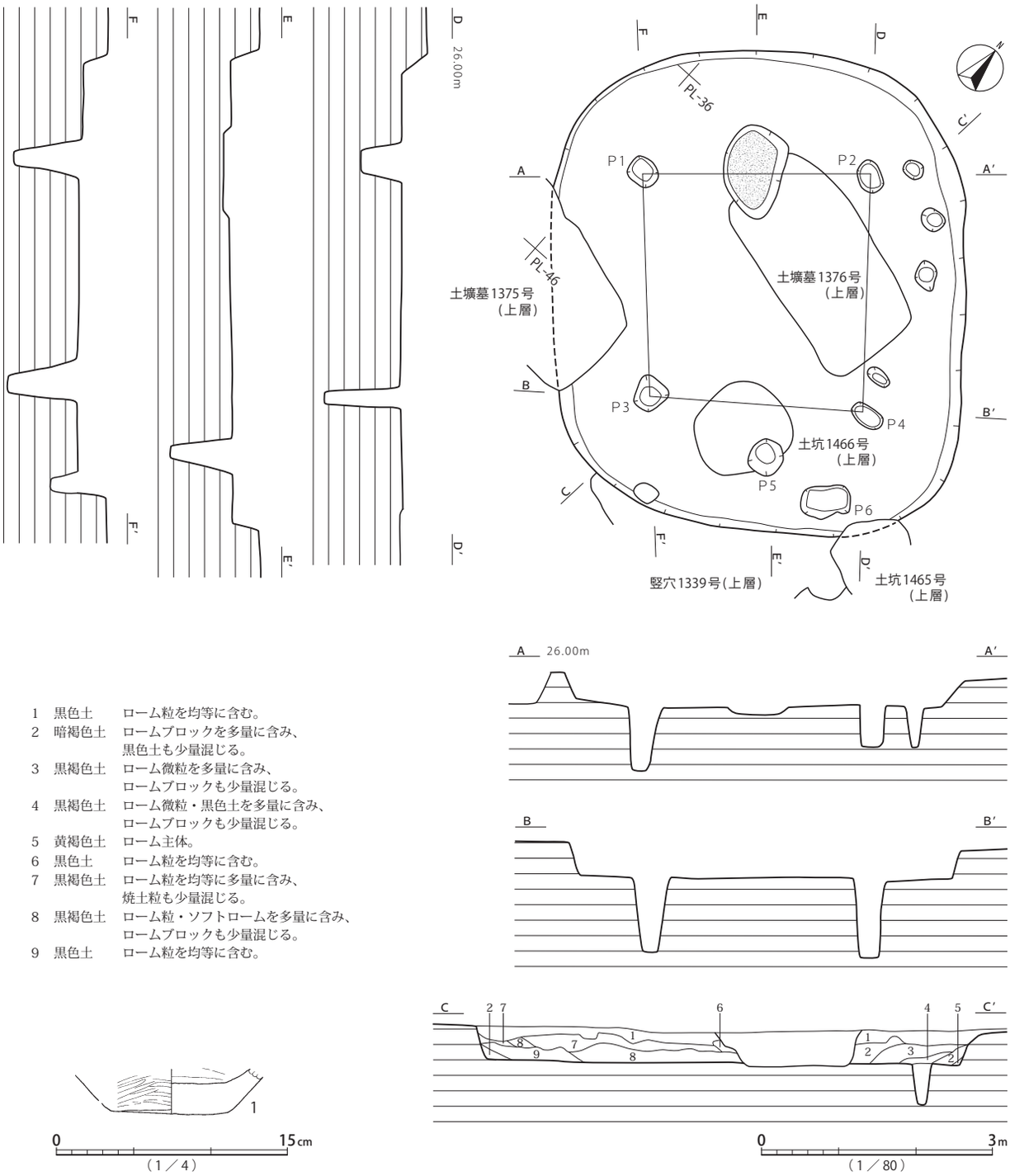


Fig.156　竪穴1340号 遺構遺物

検出されていない。P4は出入口施設である。貯蔵穴は検出されておらず、壁周溝は部分的に巡る。

実測可能遺物は、1・2は甕形土器、3は壺形土器である。3は網目状撚糸文を結節文区画し、施文部に円形朱文、無文部に赤彩を施す。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後葉の所産と思われる。

竪穴1341号

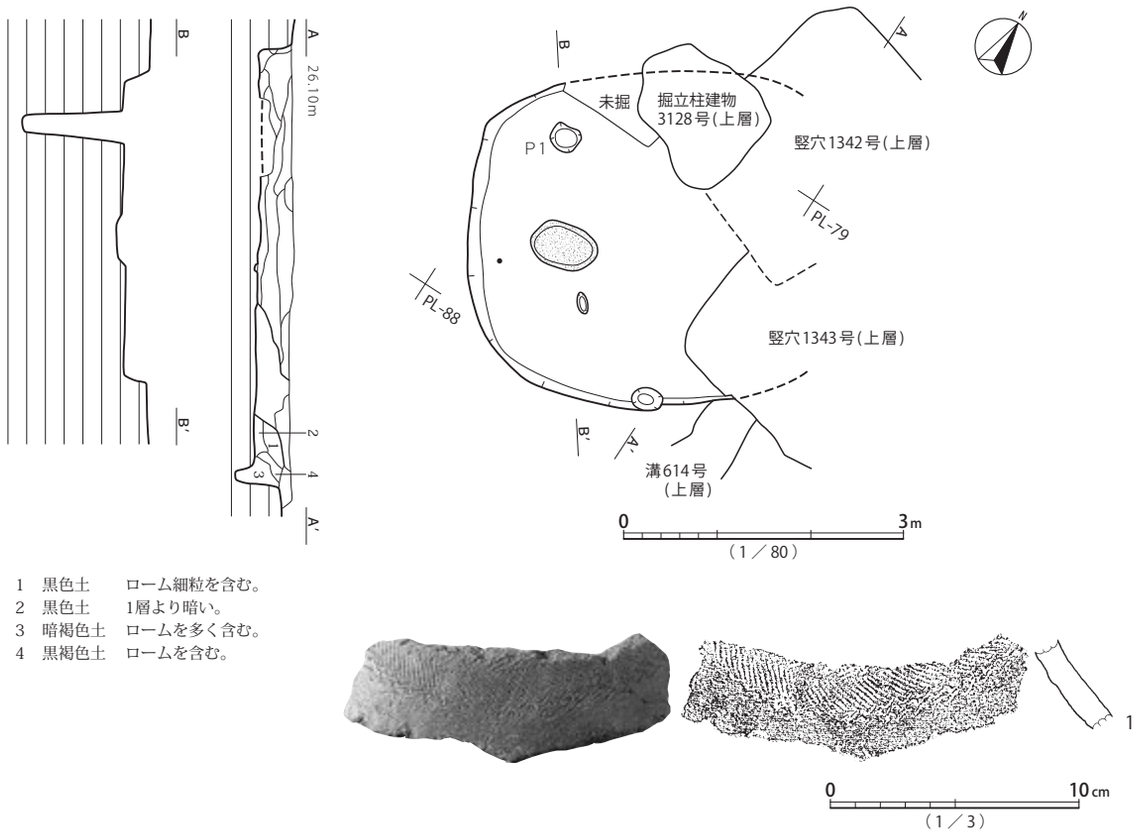


Fig.157 竪穴1341号 遺構遺物

竪穴1347号 （Fig.159、PL.24）

PL−40を中心に位置する。南東側で竪穴1346号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は小型の隅丸方形を呈し、推定規模は3.44×3.08m、推定遺構下場面積は7.6㎡、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN−32°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。P2は出入口施設と思われるが、P1は本遺構に伴うものか、明確でない。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

東側の半分以上は、昭和50年（1975）に実施した上総国分僧寺寺域確認調査004トレンチで調査されたものである。遺構平面形態から、弥生時代終末期の所産と思われるが、トレンチ出土遺物の所在が確認できず、帰属時期は明確でない。

竪穴1350号 （Fig.159、PL.24・110）

PM−95を中心に位置する。掘立柱建物3126・3127号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は小型の不整胴張隅丸方形を呈し、規模は3.49×3.24m、推定遺構下場面積は9.0㎡、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−43°−Eである。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

竪穴 1346号

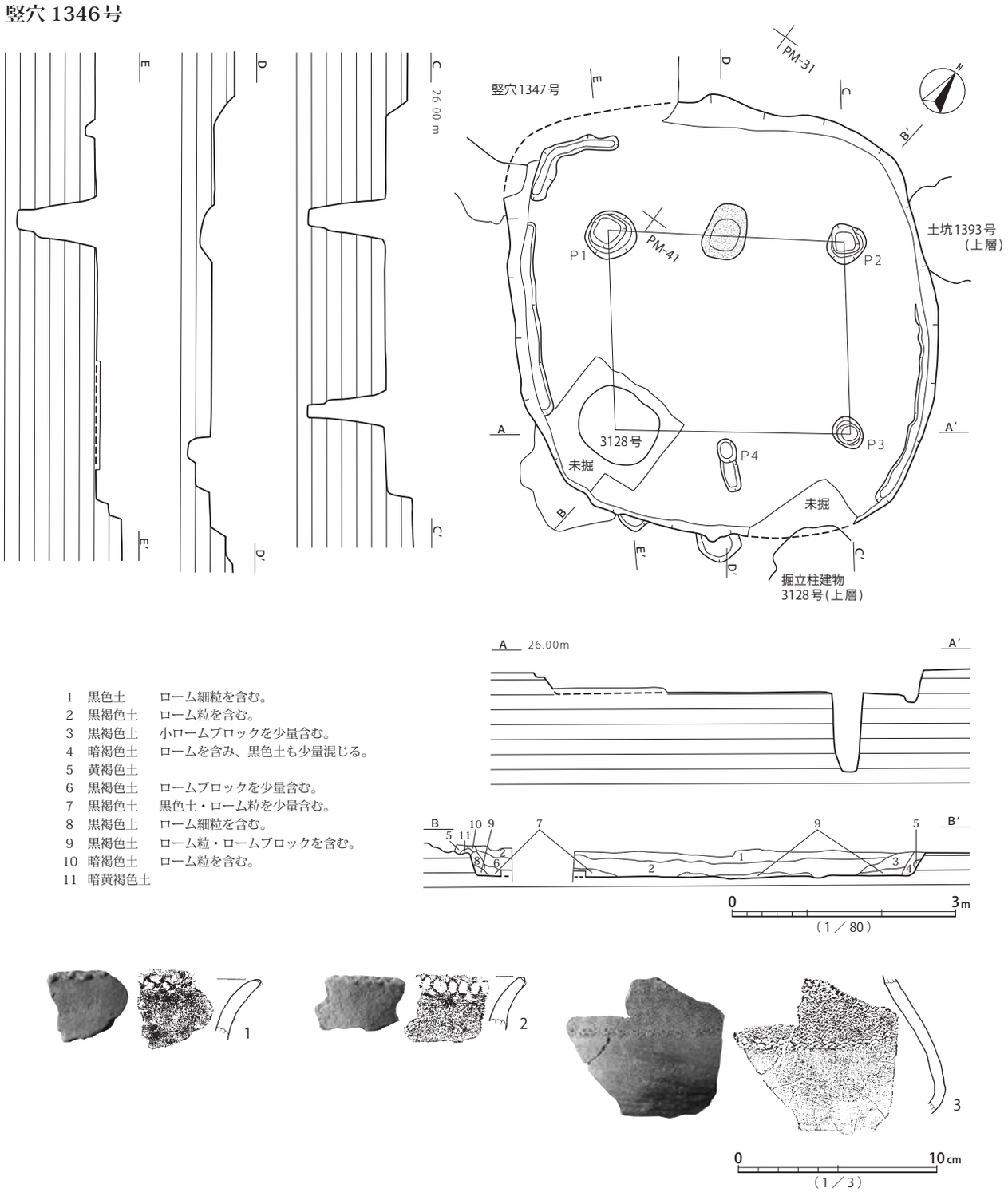
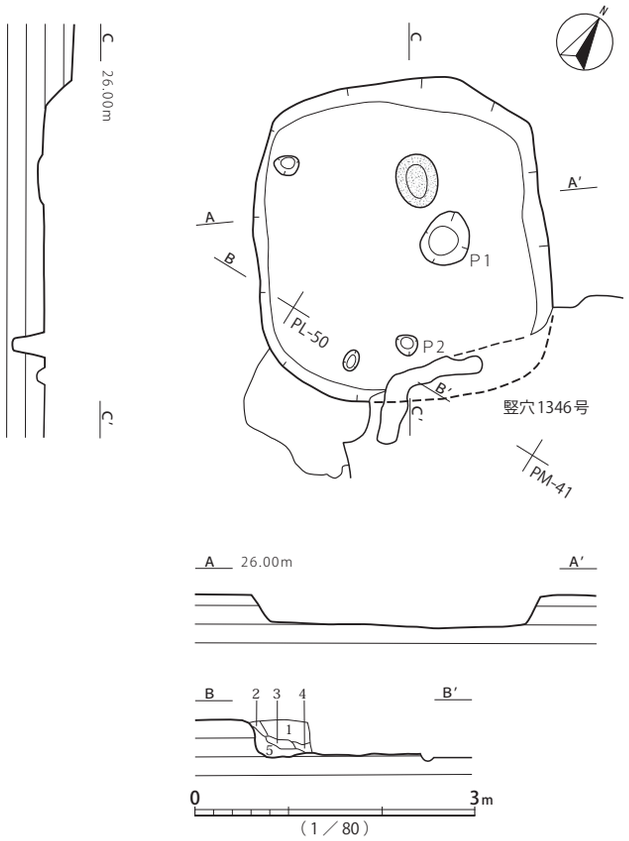


Fig.158 竪穴1346号 遺構遺物

実測可能遺物は、1・4・5は壺形土器、2は内外面赤彩の広口壺形土器、3は甕形土器である。2は胴部に1段の粘土紐積み上げ痕を残し、口縁端部から段部まで疑縄文を施す。

弥生時代後期後葉の所産と思われる。

竪穴 1347号



1　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。
2　黒褐色土　ロームを含む。
3　黒褐色土　ロームブロックを含む。
4　暗褐色土　小ロームブロックを少量含む。
5　暗褐色土　黒褐色土を含み、ロームブロックも少量混じる。

竪穴 1350号

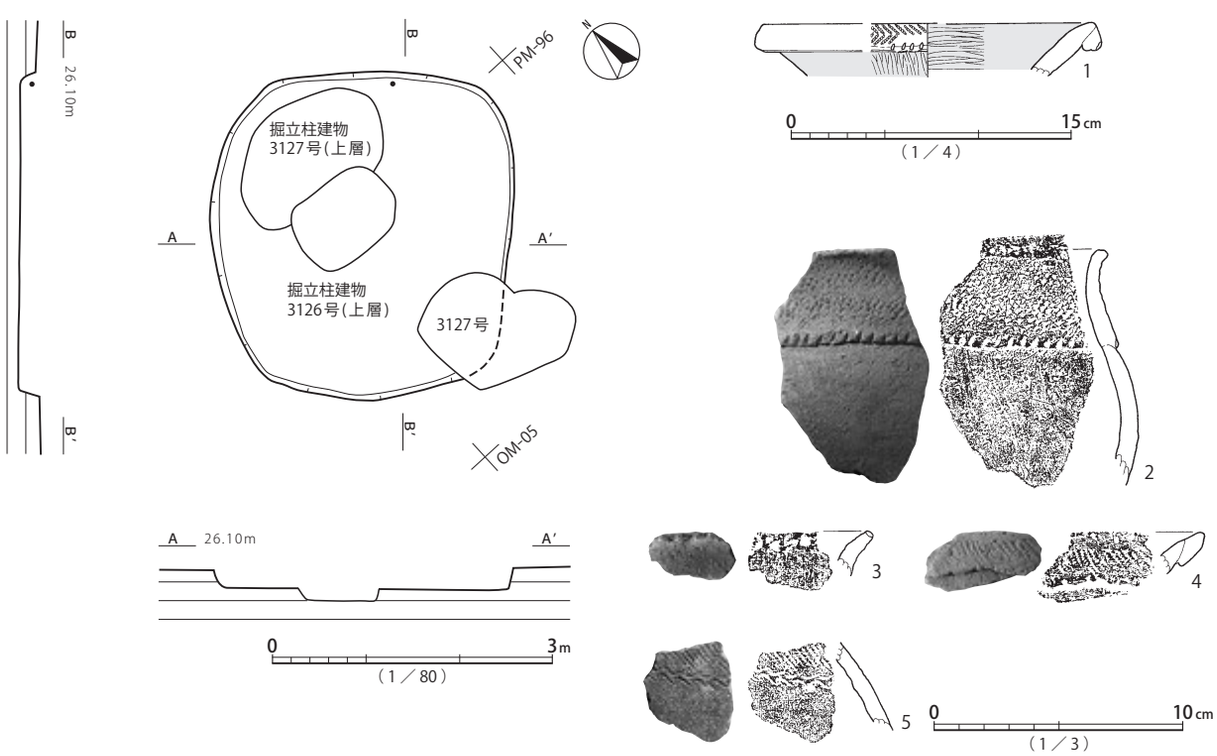


Fig.159　竪穴1347号 遺構、竪穴1350号 遺構遺物

竪穴1352号　（Fig.160）

PM−64を中心に位置する。西側で竪穴1353号（上層）、東側で土坑1344号、掘立柱建物3126・3127・3128号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、上総国分僧寺付属施設である掘立柱建物との重複部分は掘り残されたままとなっているため、詳細は不明である。推定規模は副軸長4.89m、確認面からの深さは0.37mを測る。主軸方位はN−66°−Wである。遺構確認範囲からは、炉跡や貯蔵穴、主柱穴は検出されていないが、有無は不明である。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2は壺形土器、3は椀形土器である。1の下端には押捺痕が認められ、有段口縁と思われる。口縁部には疑縄文を施す。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後葉の所産と思われる。

竪穴1355号　（Fig.161、PL.61・110）

PM−45を中心に位置する。北西隅で土坑1398号（上層）、遺構南側で掘立柱建物3127・3128号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、規模は5.48×4.79m、推定遺構下場面積は19.3㎡、確認面からの深さは0.39mを測る。主軸方位はN−12°−Wである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間から検出されている。P1・2は主柱穴、P3は出入口施設である。上総国分僧寺付属施設である掘立柱建物と重複する南側にも、P1・2に対応する主柱穴や貯蔵穴が存在する可能性が高いが、未調査のままとなっているため、明確でない。壁周溝は検出されていない。遺構南側の覆土は、人為的な埋め戻し等により、短期間に堆積した状況が考えられる。

実測可能遺物は、1は椀ないし鉢形土器、2・3・6は椀形土器、4は甕形土器、5は壺形土器である。

弥生時代後期後葉の所産と思われる。

竪穴1357号　（Fig.162、PL.110）

QM−86を中心に位置する。中央で掘立柱建物3123号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3123号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は6.53×5.87m、推定遺構下場面積は29.8㎡、確認面からの深さは0.60mを測る。主軸方位はN−38°−Wである。炉跡は検出されていないが、上総国分僧寺付属施設である3123号と重複するP1・2間、中軸線上北西寄りに存在した可能性が高い。P1〜3は主柱穴と考えられるが、P2は掘り込みが浅く、明確でない。また、南隅にはP1〜3に対応する主柱穴が存在した可能性が高いが、3123号との重複により、未調査のままとなっている。遺構範囲からは複数の柱穴が検出されるが、本遺構に伴うものか、明確でない。貯蔵穴と壁周溝は検出されていない。調査図面に記載がなく出土位置は不明であるが、貝層サンプルが採取されており、分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2は甕形土器である。2には胴部に厚みがほとんどない1段の粘土紐積み上げ痕を残す。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴 1352 号

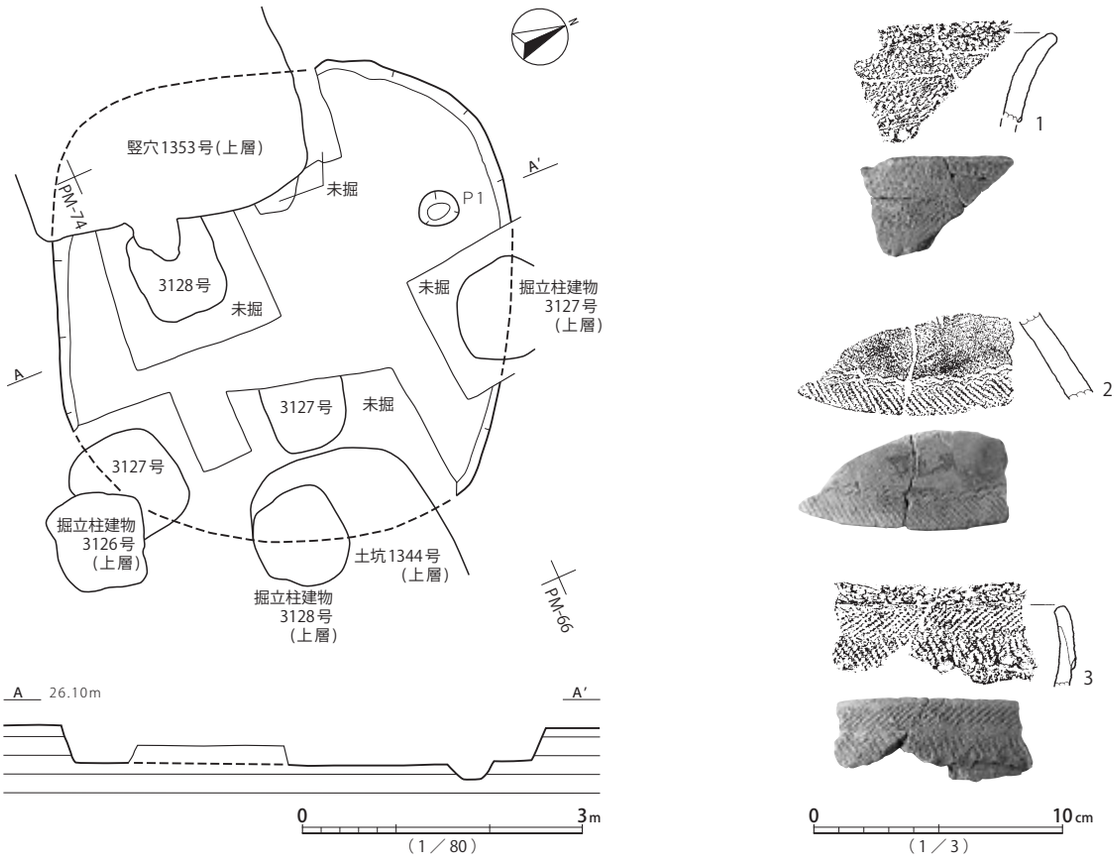


Fig.160　竪穴1352号 遺構遺物

竪穴1360号　（Fig.163、PL.24・60・61）

PL−14を中心に位置する。北西辺壁の一部で掘立柱建物3129・3148号（上層）、南側で土坑1415号（上層）と重複し、東辺壁は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は小型の胴張隅丸方形を呈し、推定規模は3.04×3.18m、推定遺構下場面積は7.9㎡、確認面からの深さは0.11mを測る。主軸方位はN−32°−W程度を測るものと思われる。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2〜8は壺形土器である。このうち6〜8は同一個体で、結節文区画の羽状縄文帯下に斜格子文を充填する鋸歯文を施す。1・4・7は遺構中央からまとまって検出され、いずれも床面上からの出土である。2・3は北西辺壁際から検出され、床面上から口縁部を下にした状態で出土している。

弥生時代後期後葉の所産と考えられる。

竪穴 1362 号　（Fig.164、PL.110）

QK−57を中心に位置する。北東側で竪穴1363号と重複する。新旧関係は、本遺構が1363号よりも古いと思われる。

竪穴 1355号

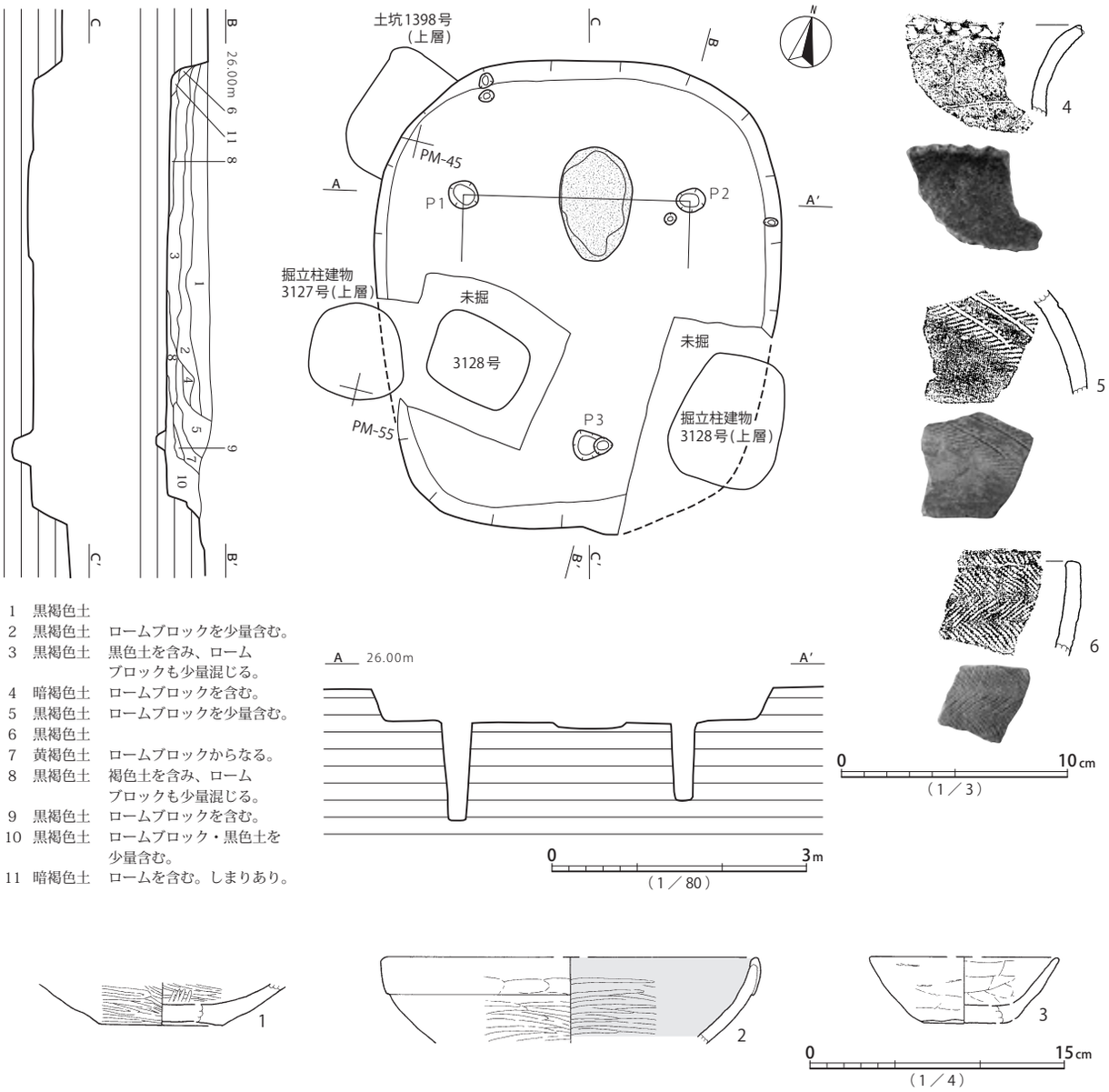


Fig.161　竪穴1355号 遺構遺物

平面形態は小型の不整楕円形を呈すと思われるが、北東側を大きく壊されるため、詳細は不明である。推定規模は主軸長4.03m、確認面からの深さは0.17mを測る。主軸方位はN−82°−W程度を測るものと思われる。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

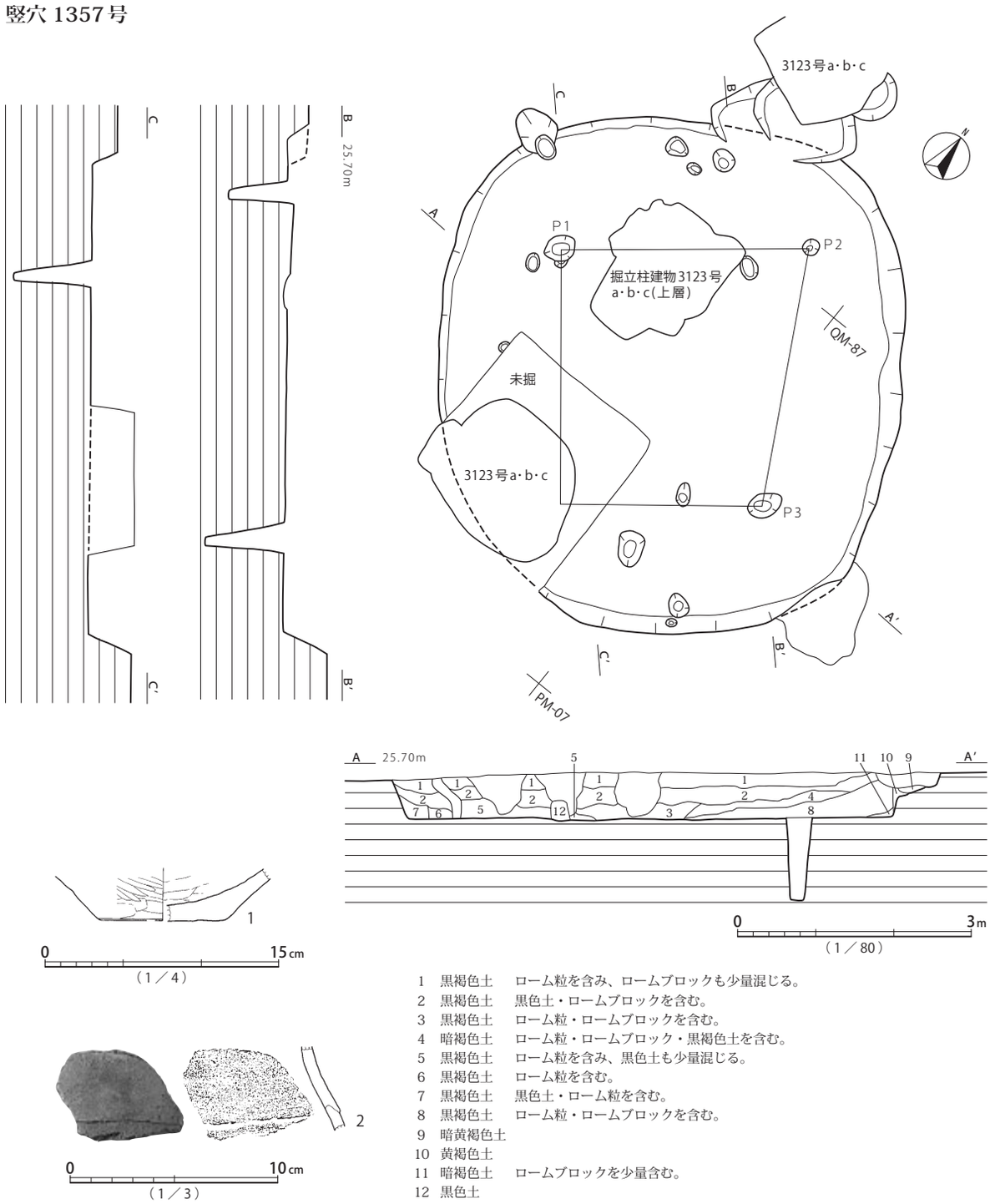
実測可能遺物は1の器種不明の底部のみで、外面にはハケ状の擦痕を残す。

出土遺物が少なく、帰属時期は不明である。

竪穴1363号　（Fig.164、PL.24・132）

QK−58を中心に位置する。南西側で竪穴1362号と重複し、北壁の一部と南側は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が1362号よりも新しいと思われる。

竪穴 1357号



1 黒褐色土 ローム粒を含み、ロームブロックも少量混じる。
2 黒褐色土 黒色土・ロームブロックを含む。
3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。
4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・黒褐色土を含む。
5 黒褐色土 ローム粒を含み、黒色土も少量混じる。
6 黒褐色土 ローム粒を含む。
7 黒褐色土 黒色土・ローム粒を含む。
8 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。
9 暗黄褐色土
10 黄褐色土
11 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
12 黒色土

Fig.162 竪穴1357号 遺構遺物

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は5.08×4.11m、推定遺構下場面積は17.4㎡、確認面からの深さは0.39mを測る。主軸方位はN−31°−Wである。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は打製石斧、3・4は磨製石斧である。1は段部下端に繊維圧痕を残す押捺が加えられる。2は縄文時代の遺物と考えられる。

竪穴 1360号

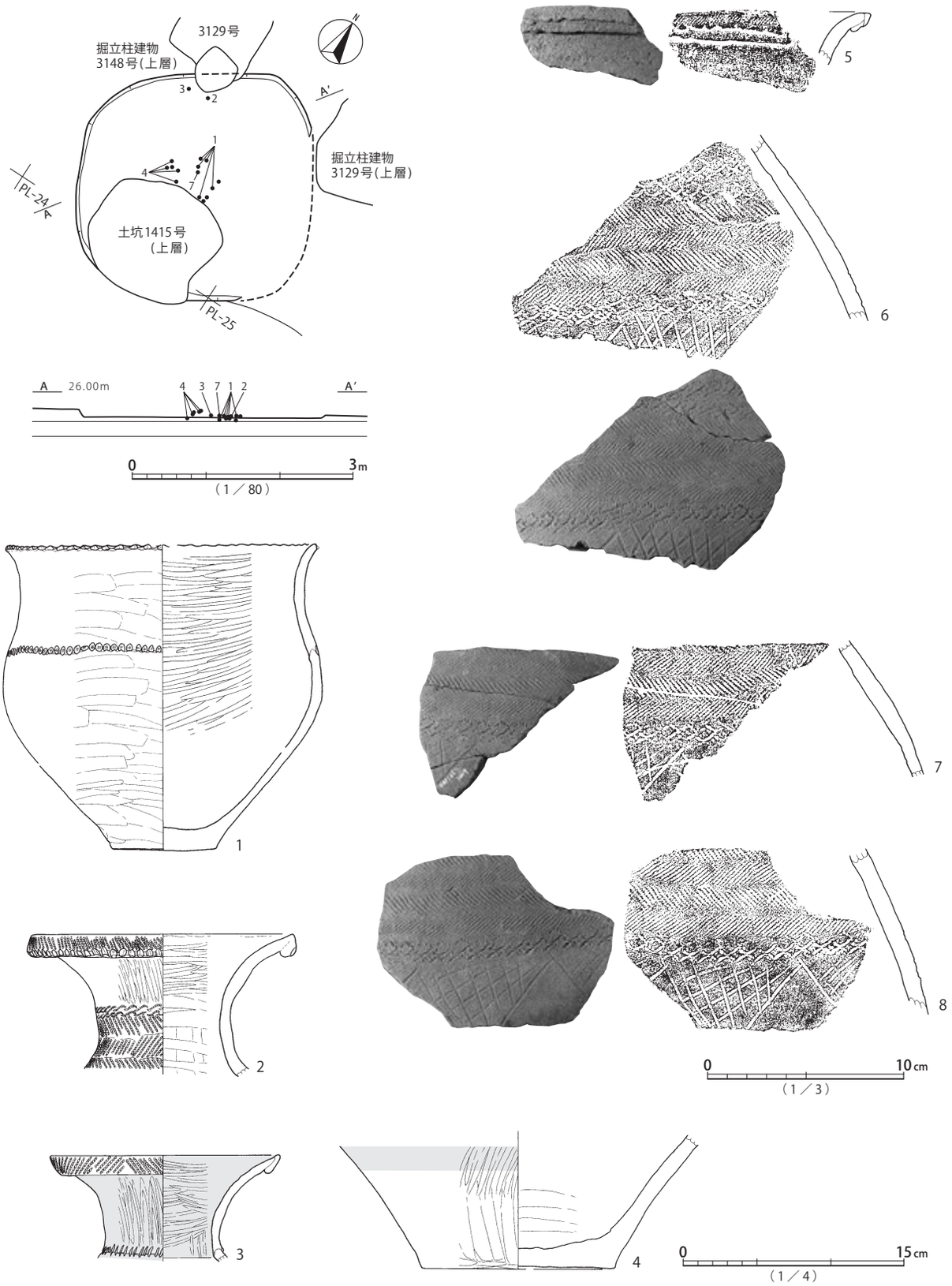
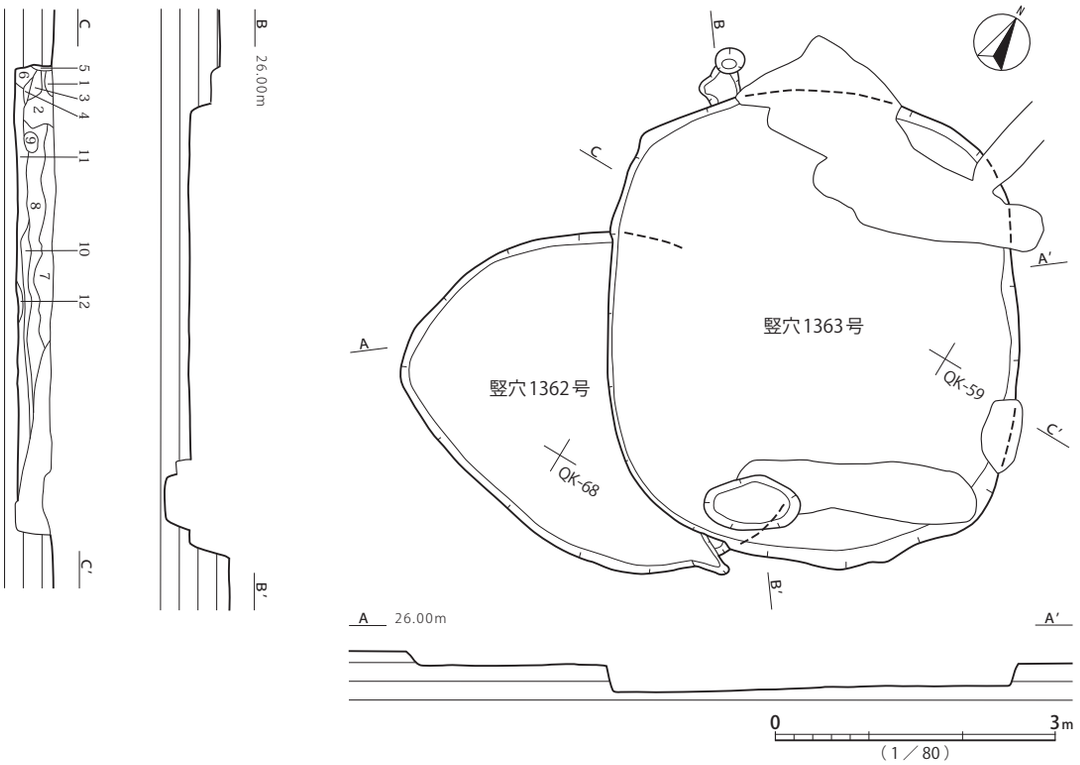


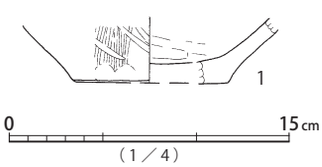
Fig.163　竪穴1360号 遺構遺物

竪穴 1362・1363 号



1363号
1　暗褐色土
2　暗褐色土　黒褐色土・褐色土・ローム粒を含む。
3　黒褐色土　暗褐色土を含む。
4　暗褐色土　黒褐色土を含み、褐色土を少量、ローム粒もわずかに混じる。
5　暗褐色土　しまりなし。
6　黒褐色土　暗褐色土を少量含む。
7　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒もわずかに混じる。
8　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含み、褐色土もわずかに含む。
9　暗褐色土　褐色土を多量に含む。
10　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含む。
11　暗褐色土　黒褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。
12　暗褐色土　黒褐色土を少量含み、炭化粒も混じる。

竪穴 1362 号



竪穴 1363 号

Fig.164　竪穴1362号 遺構遺物、竪穴1363号 遺構遺物

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴1365号 （Fig.165）

QL−67を中心に位置する。中央で掘立柱建物3122号（上層）、東側で溝2224号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は小型の隅丸方形を呈すと思われるが、南辺壁が検出されたのみで、詳細は不明である。北辺壁ラインは等高線の乱れから推定したもので、明確でない。推定規模は副軸長3.62m、確認面からの深さは0.07mを測る。南辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−17°−Wとなる。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1366号 （Fig.165、PL.24・61・94）

QK−75を中心に位置する。西側で溝2204号（上層）、南側で掘立柱建物3147号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈し、規模は4.11×4.03m、推定遺構下場面積は13.9㎡、確認面からの深さは0.46mを測る。主軸方位はN−11°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。P1は貯蔵穴と思われるが、明確でない。主柱穴は検出されず、壁周溝は南東隅からのみ検出されている。炉跡付近を中心に焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は小型の壺形土器、3は直口縁壺形土器、4は椀形土器である。1は口縁端部下端にハケ工具によるキザミを施す。2は頸部に竹管を押捺する。1は北東辺壁際から検出され、覆土下層からの出土、3は炉内からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴1367号 （Fig.166・167、PL.25・61・110）

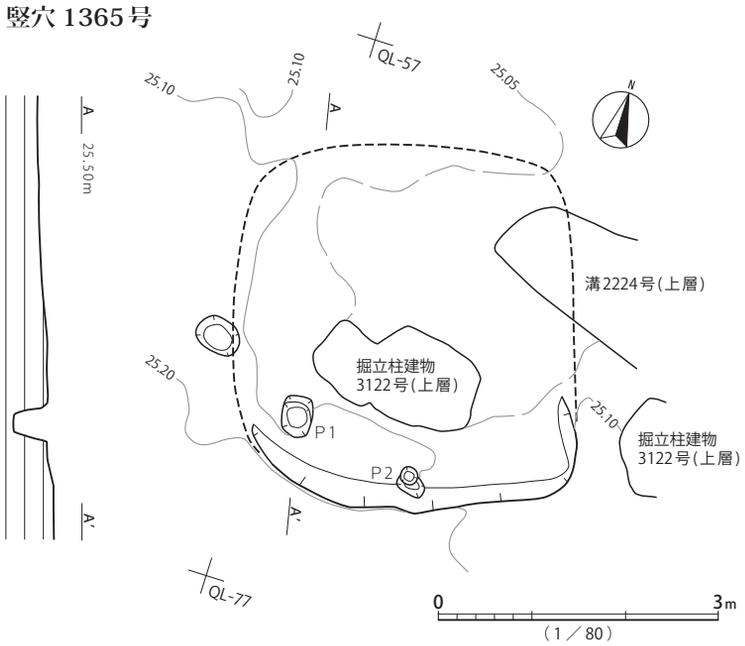
PM−02を中心に位置する。北東側で土坑1399号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が1399号よりも古い。北西隅からP1周辺は、昭和50年（1975）に実施した上総国分僧寺寺域確認調査004トレンチで、すでに調査されていた。

平面形態は大型の長楕円形を呈し、規模は9.01×7.81m、遺構下場面積は53.7㎡、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位はN−45°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴でしっかりとした掘り方をもつ。P5〜7は出入口施設と考えられ、支柱を伴う構造であったことが想定される。P8は貯蔵穴であろう。このほかにも、遺構範囲からは柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝が検出されているが、南東隅付近では途切れる。

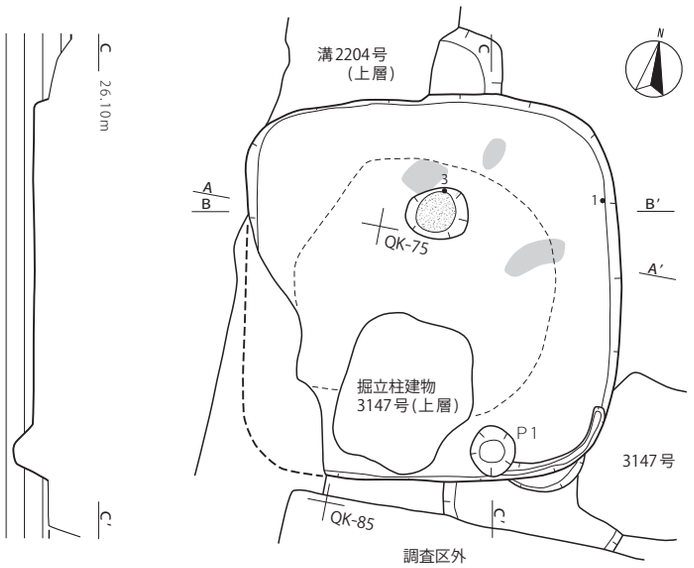
実測可能遺物は、1・13〜17は椀形土器、2は器種不明のミニチュア土器、4・5は甕形土器、6〜12は壺形土器である。3は外面赤彩の可能性があり、壺形土器と思われる。7は複合口縁部下端に、焼成前穿孔が施される。8は2次的な被熱により、表面がやや発泡する。

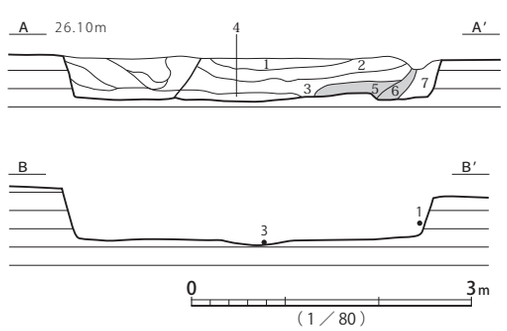
弥生時代後期後葉の所産と考えられる。

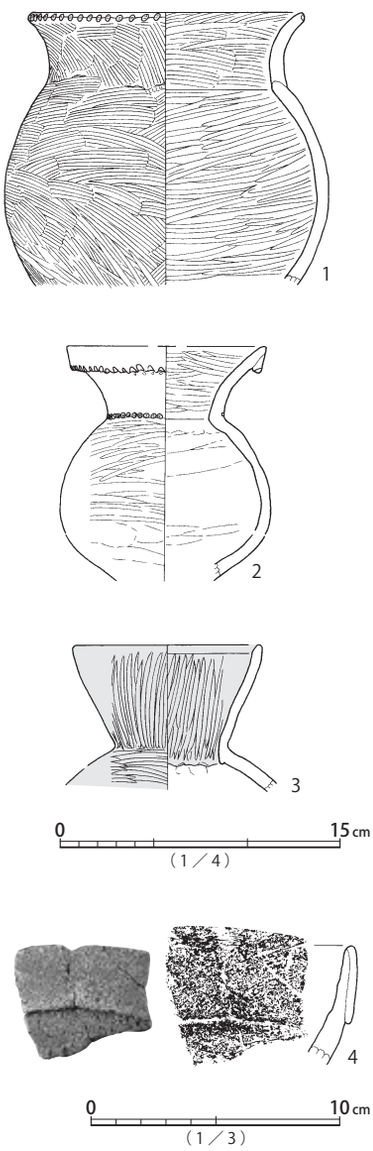
竪穴 1365号



竪穴 1366号



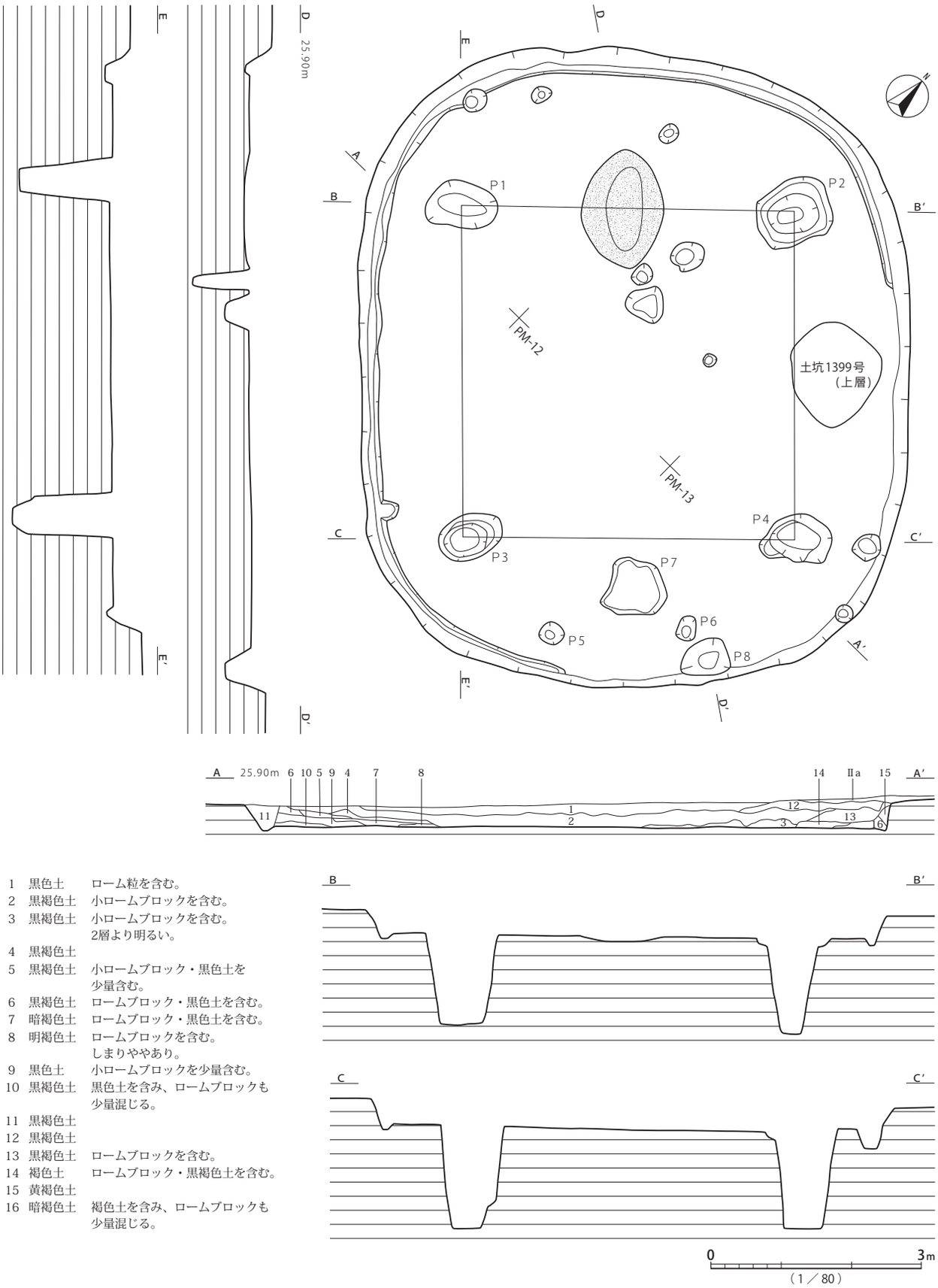




1　黒色土　　黒褐色土・ローム粒をわずかに含む。
2　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
3　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒・焼土粒もわずかに混じる。
4　黒褐色土　ローム粒を少量含み、小ロームブロックもわずかに混じる。
5　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、焼土・ローム粒も混じる。
6　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、焼土・ローム粒もわずかに混じる。
7　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含む。

Fig.165　竪穴1365号 遺構、竪穴1366号 遺構遺物

竪穴 1367号



1 黒色土 ローム粒を含む。
2 黒褐色土 小ロームブロックを含む。
3 黒褐色土 小ロームブロックを含む。2層より明るい。
4 黒褐色土
5 黒褐色土 小ロームブロック・黒色土を少量含む。
6 黒褐色土 ロームブロック・黒色土を含む。
7 暗褐色土 ロームブロック・黒色土を含む。
8 明褐色土 ロームブロックを含む。しまりややあり。
9 黒色土 小ロームブロックを少量含む。
10 黒褐色土 黒色土を含み、ロームブロックも少量混じる。
11 黒褐色土
12 黒褐色土
13 黒褐色土 ロームブロックを含む。
14 褐色土 ロームブロック・黒褐色土を含む。
15 黄褐色土
16 暗褐色土 褐色土を含み、ロームブロックも少量混じる。

Fig.166 竪穴1367号(1) 遺構

竪穴 1367 号

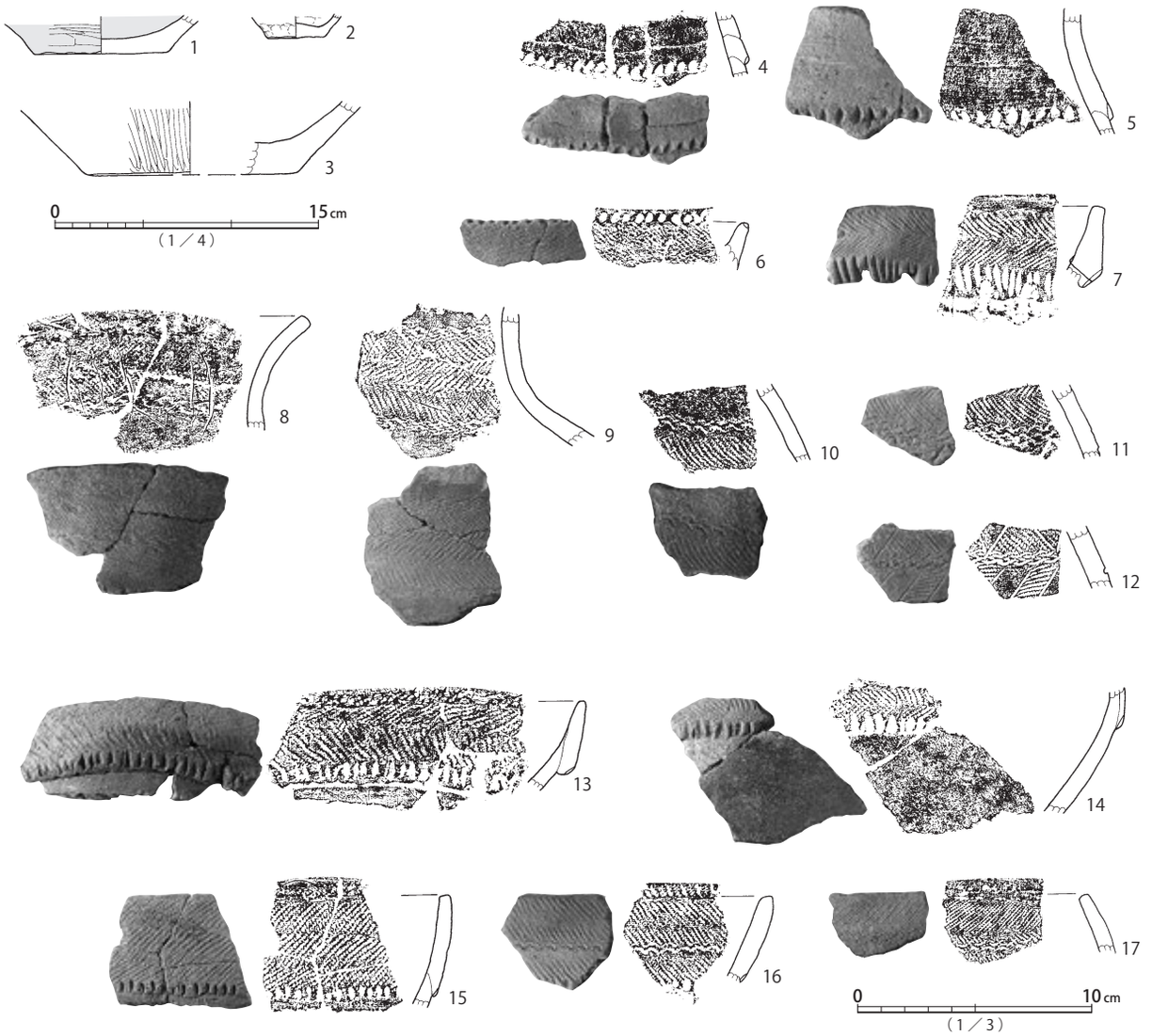


Fig.167　竪穴1367号(2) 遺物

竪穴 1370 号　（Fig.168、PL.25・61・110・140）

PM−19を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は小型の楕円形を呈し、規模は3.60×3.30m、遺構下場面積は9.2㎡、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位はN−40°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴である。壁周溝は検出されていない。

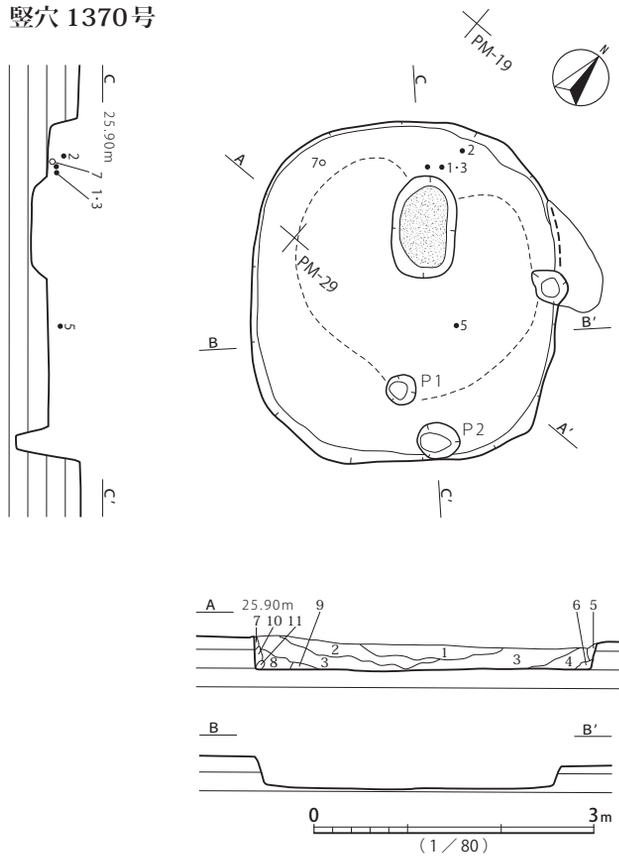
実測可能遺物は、1〜3は甕形土器、4・6は壺形土器、5は器台形土器である。土器以外では7の軽石がある。1〜3は北隅、5は遺構中央、7は北西隅から検出され、いずれも覆土中からの出土である。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

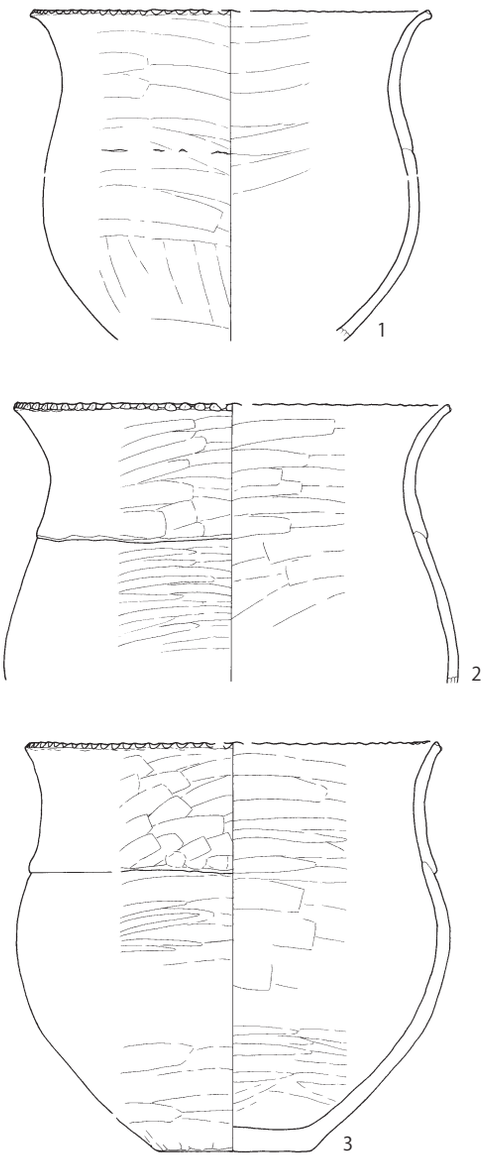
竪穴1412号　（Fig.169、PL.110・140）

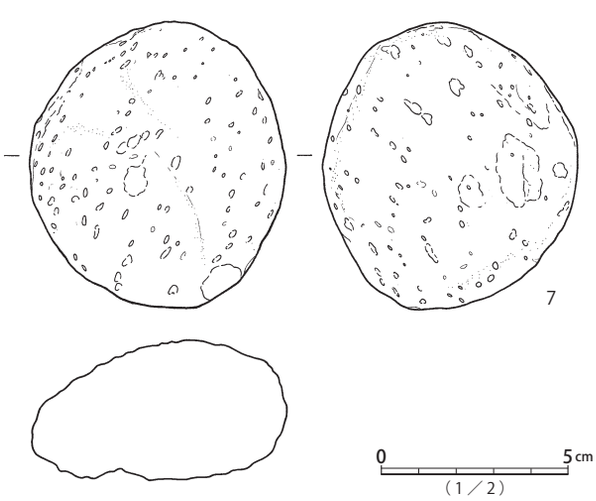
QL−72を中心に位置する。竪穴1411号（上層）、掘立柱建物3130・3131号（上層）と重複する。

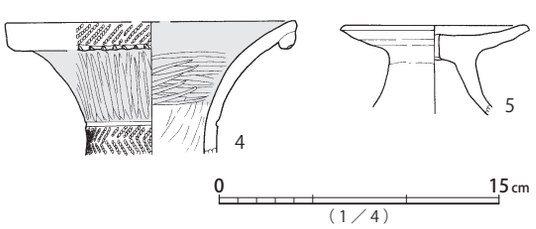
竪穴 1370号



1　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。
2　黒褐色土　ロームブロックを含み、黒色土も少量混じる。
3　黒色土　ローム小ブロックを少量含む。
4　黒褐色土　ローム小ブロックを少量含む。
5　暗褐色土　黒色土を少量含む。
6　褐色土　ローム粒を含む。
7　暗黄褐色土
8　黒色土　ローム粒を含む。
9　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。しまりあり。
10　黒色土　ローム粒を少量含む。
11　黄褐色土　ロームを含む。







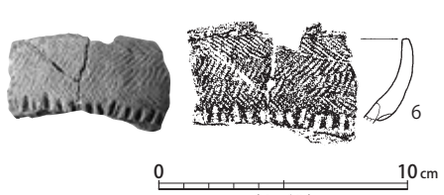


Fig.168　竪穴1370号 遺構遺物

新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は小型の長楕円形を呈すと考えられるが、上総国分僧寺創建以降の竪穴建物（1411号）と政所院脇殿（3130・3131号）との重複により、東側3分の1程度が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は4.18×3.60m、推定遺構下場面積は11.7㎡、確認面からの深さは0.34mを測る。主軸方位はN−45°−Wである。炉跡は検出されていないが、1411号と重複する中軸線上北西寄りに存在した可能性がある。P1は主柱穴、P2は出入口施設、P3は貯蔵穴と思われるが、明確でない。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は広口壺形土器、2・3は壺形土器、4は椀形土器である。1は胴段部下端への押捺と内外面赤彩を施す。土器以外では5の砥石が出土している。

弥生時代後期中葉の所産と思われる。

竪穴1447号　（Fig.170、PL.25・61・110）

PJ−95を中心に位置する。東隅で土坑1835号（上層）、中央で溝2211号（上層）と重複し、西隅は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は4.20×4.04m、推定遺構下場面積は13.4㎡、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位はN−40°−Wである。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。北側を中心に焼土の堆積が確認されているが、壁際にいわゆる三角堆積が認められることから、遺構の廃絶から時間差をもつと考えられる。調査図面にはカヤ類の灰層と記載される部分があるが、写真などの記録では確認できず、明確でない。

実測可能遺物は、1・4・5は甕形土器、2・6は壺形土器、3は高杯形土器である。1の頸部はくの字状に屈折し、4・5の口縁端部押捺は1方向と思われる。2は胴部中央に焼成前穿孔が施される。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴1486号　（Fig.171、PL.110）

OL−26を中心に位置する。東側で土坑1487号（上層）、北側で溝2201号（上層）と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

西辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.43mを測る。西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−1°−Wである。東辺壁は重複する1487号の範囲内に収まることから、副軸長は3.55m程度と考えられる。遺構確認範囲からは、炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は壺形土器である。1は段部にヘラ先等による刺突を加え、口頸部は高い。

弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴1541号　（Fig.171）

QJ−40を中心に位置する。北東側で竪穴1542号、溝2223号（上層）と重複し、北西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が2223号よりも古い。1542号との関係は、断面図など記録上の

竪穴 1412号

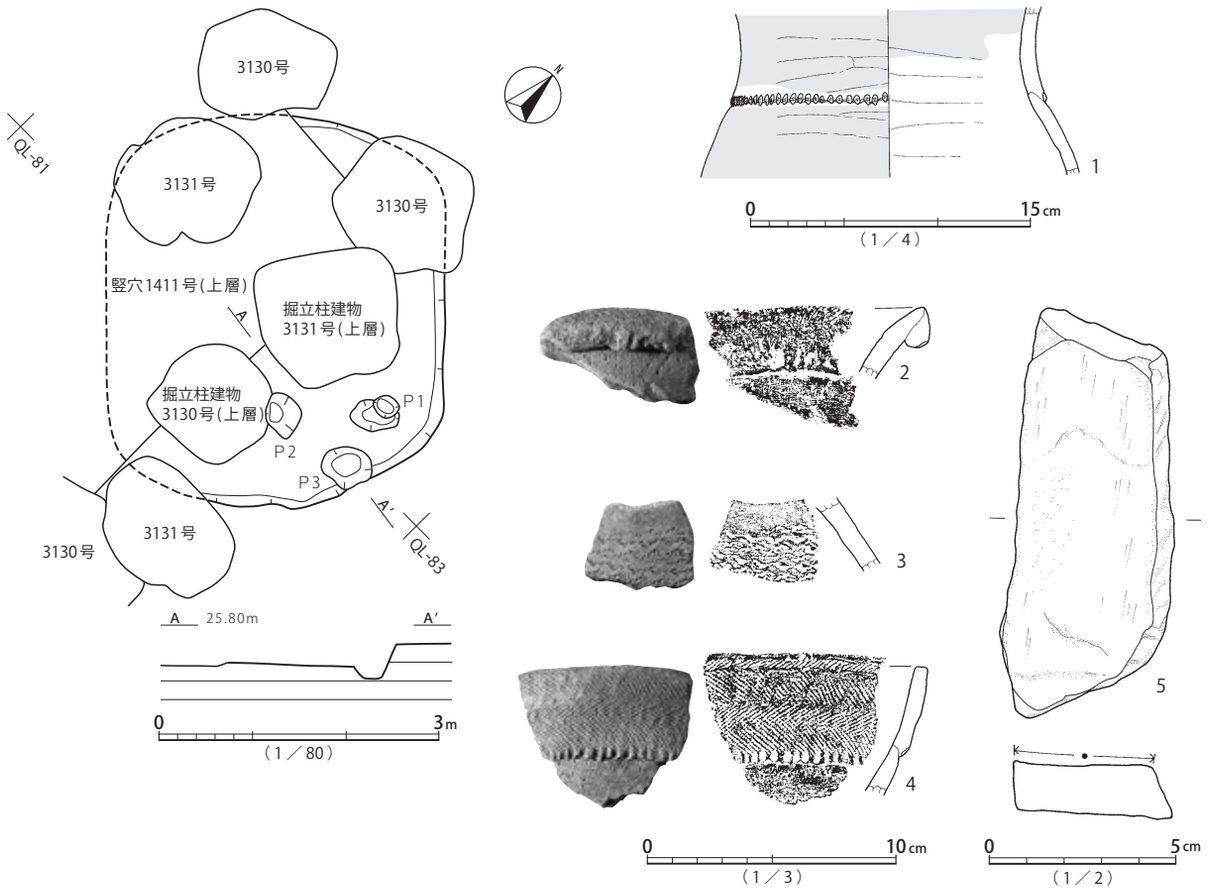


Fig.169　竪穴1412号 遺構遺物

根拠がないが、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は方形を呈し、推定規模は5.28×5.61m、推定遺構下場面積は25.8㎡、確認面からの深さは0.15mを測る。東西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−0°で、ほぼ真北を向く。炉跡は検出されていないが、1542号と重複する中軸線上北寄りに存在した可能性がある。P1〜4は主柱穴である。貯蔵穴は検出されず、壁周溝は南辺壁際東側からのみ検出されている。

実測可能遺物は、ハケ調整が施される1の甕形土器のみである。

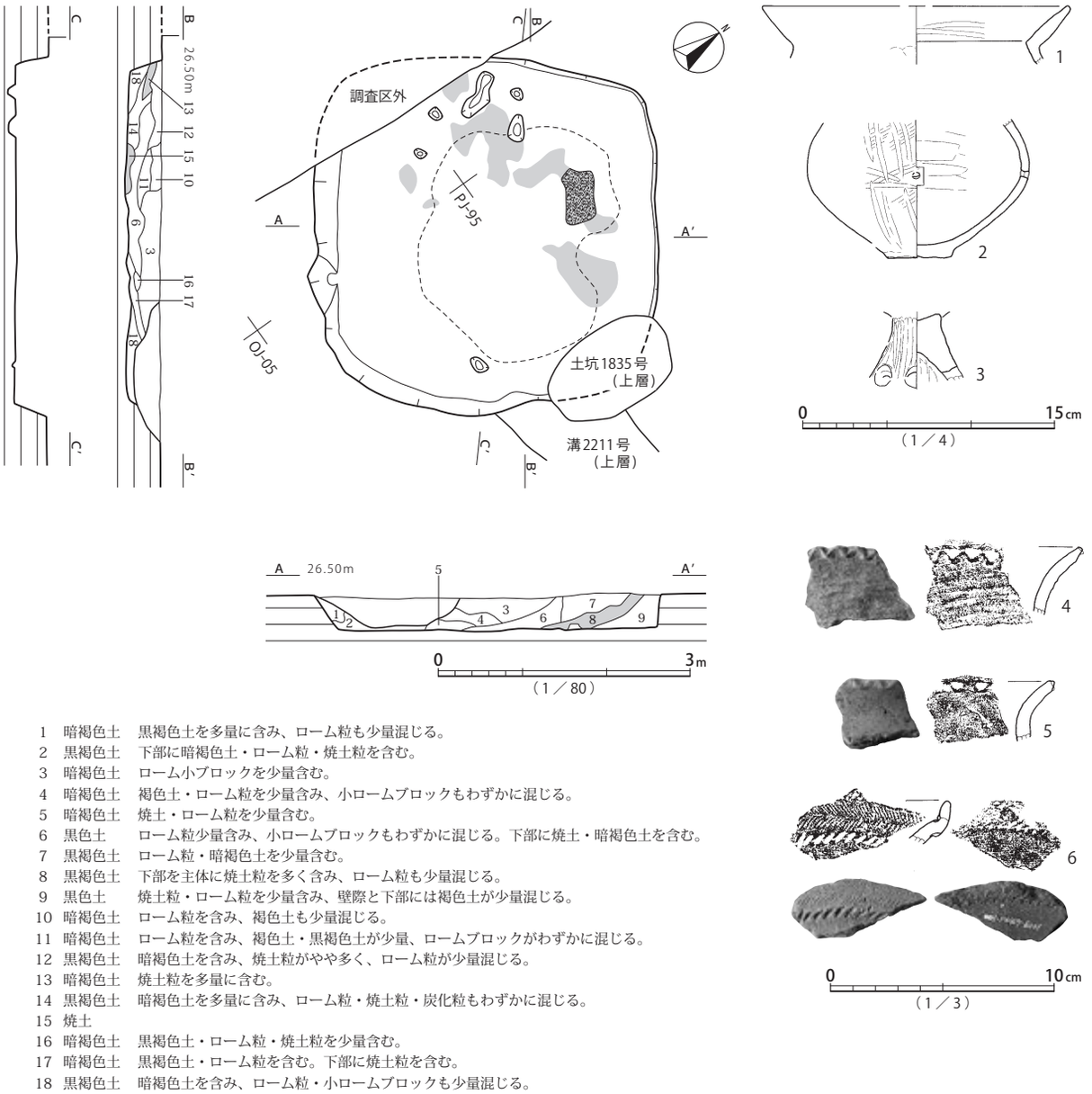
古墳時代前期の所産と考えられるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴1542号　（Fig.171）

QJ−40を中心に位置する。南側で竪穴1541号、北側で溝2223号（上層）と重複し、北西側は調査区外に延びる。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、1541号よりも新しく、2223号よりも古いと思われる。

平面形態は方形を呈すが、遺構南側の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。東西方向の規模は4.19m、確認面からの深さは0.15mを測る。南辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−7°−Eとなる。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。壁周溝が巡るが、

竪穴 1447号



1　暗褐色土　黒褐色土を多量に含み、ローム粒も少量混じる。
2　黒褐色土　下部に暗褐色土・ローム粒・焼土粒を含む。
3　暗褐色土　ローム小ブロックを少量含む。
4　暗褐色土　褐色土・ローム粒を少量含み、小ロームブロックもわずかに混じる。
5　暗褐色土　焼土・ローム粒を少量含む。
6　黒色土　ローム粒少量含み、小ロームブロックもわずかに混じる。下部に焼土・暗褐色土を含む。
7　黒褐色土　ローム粒・暗褐色土を少量含む。
8　黒褐色土　下部を主体に焼土粒を多く含み、ローム粒も少量混じる。
9　黒色土　焼土粒・ローム粒を少量含み、壁際と下部には褐色土が少量混じる。
10　暗褐色土　ローム粒を含み、褐色土も少量混じる。
11　暗褐色土　ローム粒を含み、褐色土・黒褐色土が少量、ロームブロックがわずかに混じる。
12　黒褐色土　暗褐色土を含み、焼土粒がやや多く、ローム粒が少量混じる。
13　暗褐色土　焼土粒を多量に含む。
14　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒・焼土粒・炭化粒もわずかに混じる。
15　焼土
16　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒・焼土粒を少量含む。
17　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を含む。下部に焼土粒を含む。
18　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒・小ロームブロックも少量混じる。

Fig.170　竪穴1447号 遺構遺物

東辺壁南側では途切れている。

調査図面には、壁周溝が途切れた範囲に「カマドか？」との記載があり、遺構範囲内から瓦が検出されることから、上層遺構の可能性もある。

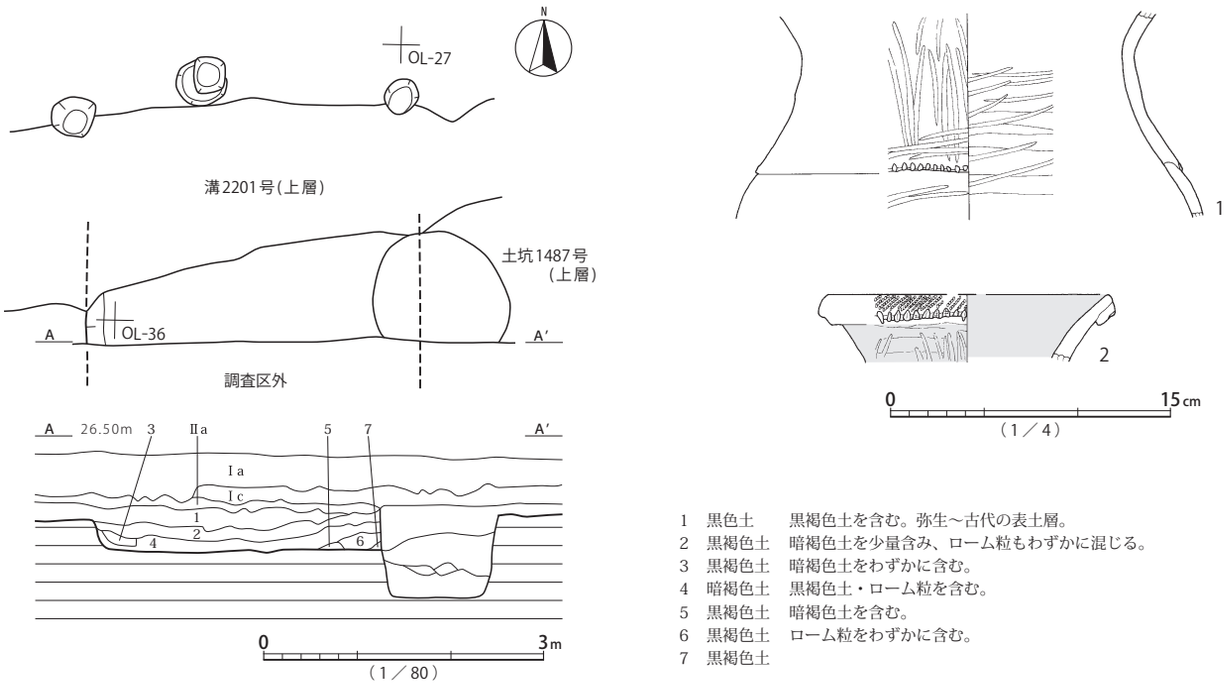
実測可能遺物は、頸部がくの字状に屈折する1の甕形土器のみである。

古墳時代前期の所産と思われるが、出土遺物は重複する竪穴1541号からの混入の可能性があり、帰属時期は明確でない。

竪穴1551号　（Fig.172・173、PL.25・61・110）

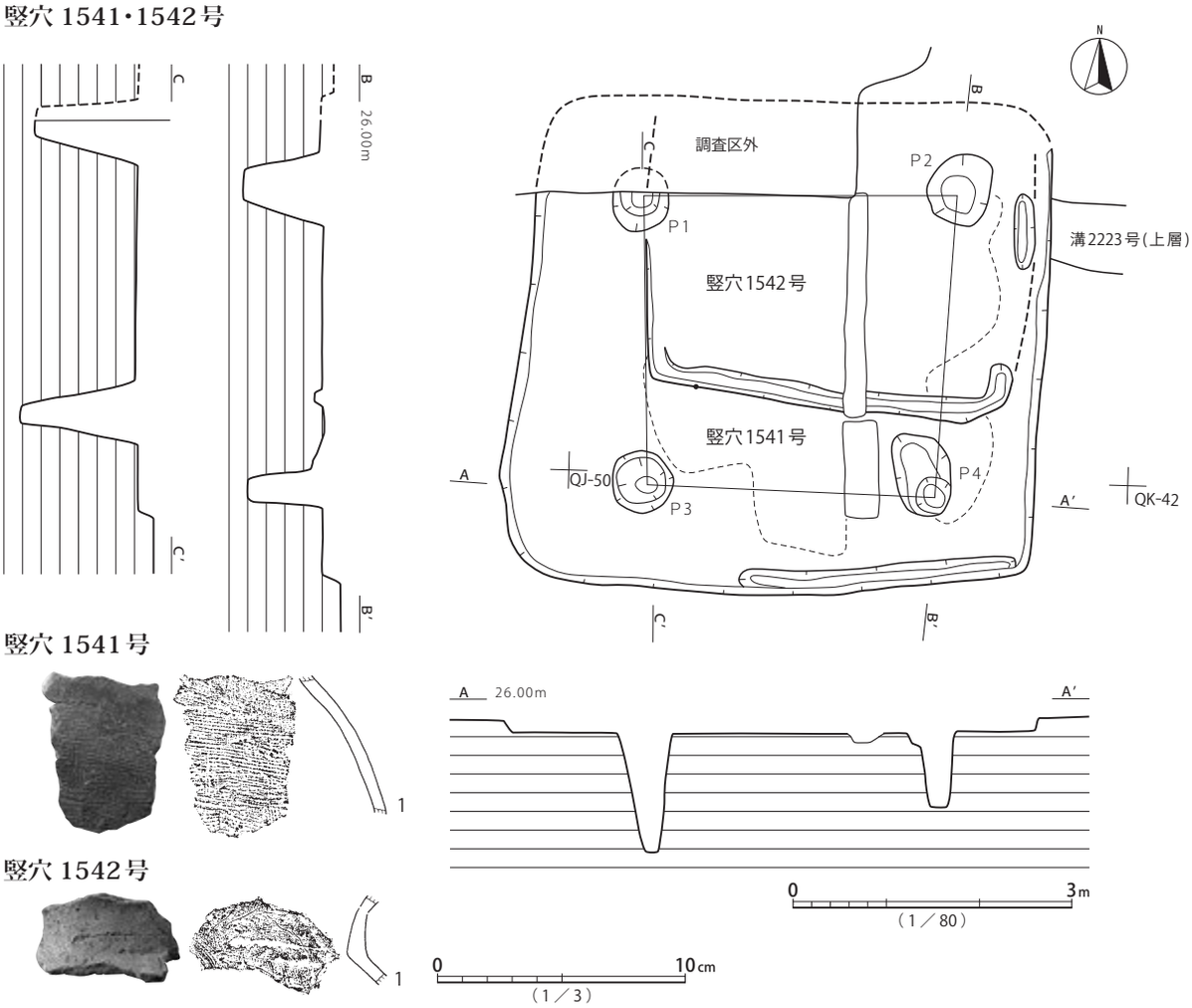
RL−63を中心に位置する。他遺構との重複はない。

竪穴 1486号



1　黒色土　　黒褐色土を含む。弥生～古代の表土層。
2　黒褐色土　暗褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
3　黒褐色土　暗褐色土をわずかに含む。
4　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を含む。
5　黒褐色土　暗褐色土を含む。
6　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
7　黒褐色土

竪穴 1541・1542号



竪穴 1541号

竪穴 1542号

Fig.171　竪穴1486号 遺構遺物、竪穴1541号 遺構遺物、竪穴1542号 遺構遺物

平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、規模は5.15×4.94m、遺構下場面積は19.8㎡、確認面からの深さは0.54mを測る。主軸方位はN−58°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴で、副軸方向の柱間を長く配置する。P5は貯蔵穴であろう。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2・7〜13は甕形土器、3〜5・14〜18は壺形土器、6は底部に焼成後穿孔を施す転用甑形土器、19は椀形土器である。2・6は北西辺壁際、3・5は南西辺壁際から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴1552号　（Fig.174・175、PL.25・61・110・133・140）

TK−66を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は5.65×4.91m、遺構下場面積は20.8㎡、確認面からの深さは0.46mを測る。主軸方位はN−17°−Wである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設である。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜3は甕形土器、4・6・7は壺形土器、5は高杯形土器で、1・2は同一個体の可能性がある。甕形土器は口縁部に最大径を持ち、古相を示す。7は帯縄文に縦横の沈線区画を施す安房形である。土器以外では8の磨石・敲石、9の砥石、10の軽石が出土している。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴1553号　（Fig.175、PL.25・26）

TK−45を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は小型の長楕円形を呈し、規模は3.00×2.63m、遺構下場面積は5.7㎡、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位はN−33°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されているが、調査図面に記載がなかったため、写真から判断し、およその位置を記した。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝は検出されていない。遺構範囲からは柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは、明確でない。覆土下層（11・12・14〜21）はローム粒を多量に含み、全体に堆積が乱れていることから、遺構西側から人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

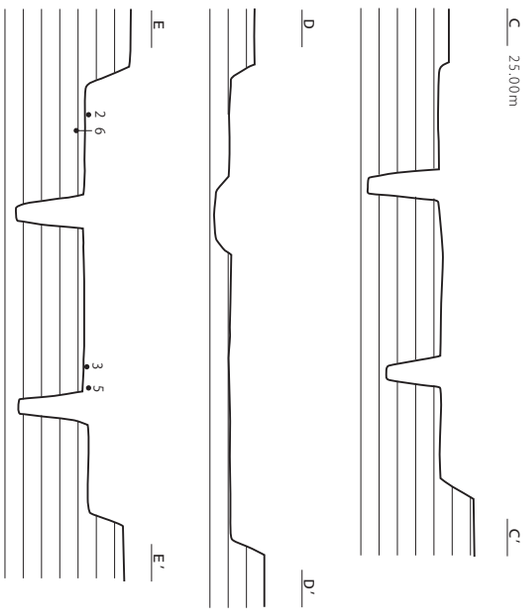
竪穴1555号　（Fig.176、PL.26）

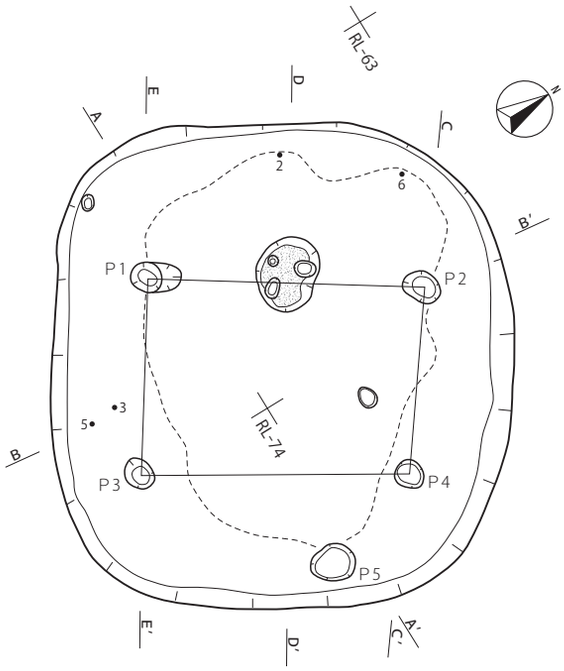
TK−42を中心に位置する。南東隅で溝2044号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2044号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈し、規模は5.22×4.94m、推定遺構下場面積は19.5㎡、確認面からの深さは0.52mを測る。主軸方位はN−27°−Wである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴で、副軸方向の柱間を長く配置する。P5は出入口施設、P6・7は貯蔵穴であろう。壁周溝は検出されていない。

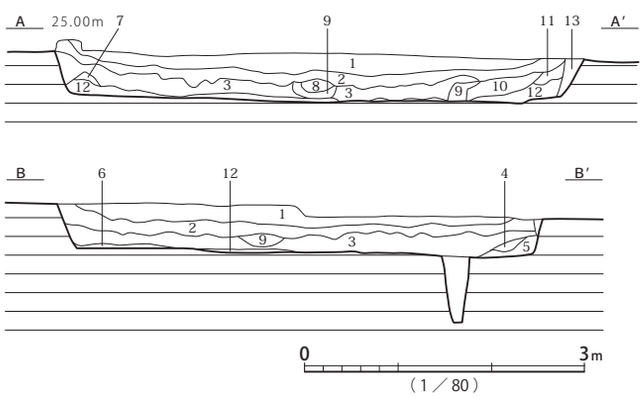
実測可能遺物は、1・2は甕形土器、3〜5は壺形土器である。

竪穴 1551号





1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
2　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
3　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を含み、褐色土・黒色土も少量混じる。
4　暗褐色土　焼土粒を含む。
5　暗褐色土　ローム粒を含み、一部に褐色土も少量混じる。
6　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。
7　暗褐色土　褐色土・黒褐色土・ローム粒を少量含む。
8　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒が少量、褐色土がわずかに混じる。
9　暗褐色土　褐色土を多量に含み、黒褐色土もわずかに混じる。
10　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
11　暗褐色土　黒褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。
12　暗褐色土　ローム粒を含み、褐色土も少量混じる。
13　暗褐色土　黒褐色土を少量含む。



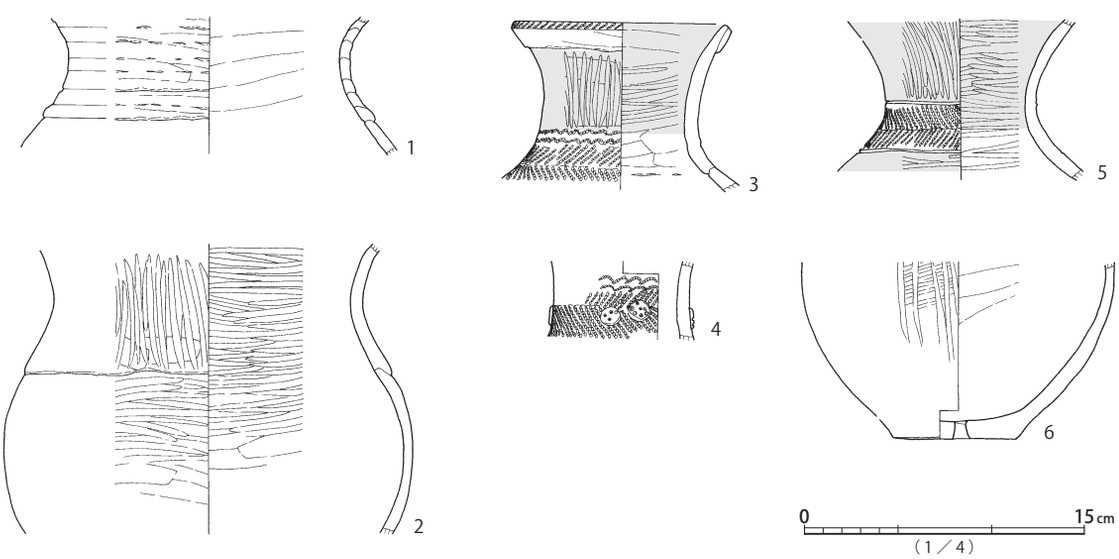


Fig.172　竪穴1551号(1) 遺構遺物

竪穴1551号

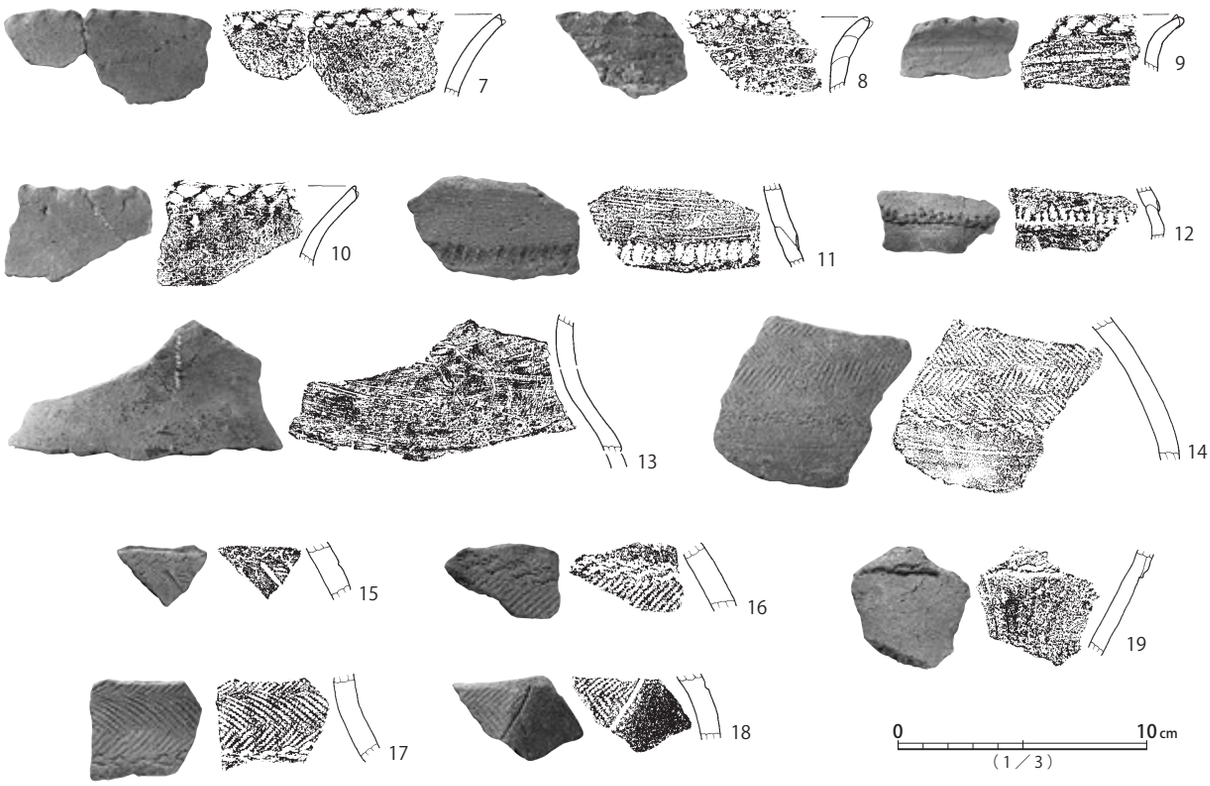


Fig.173　竪穴1551号(2) 遺物

出土遺物は小破片が多いが、弥生時代後期中葉の所産と思われる。

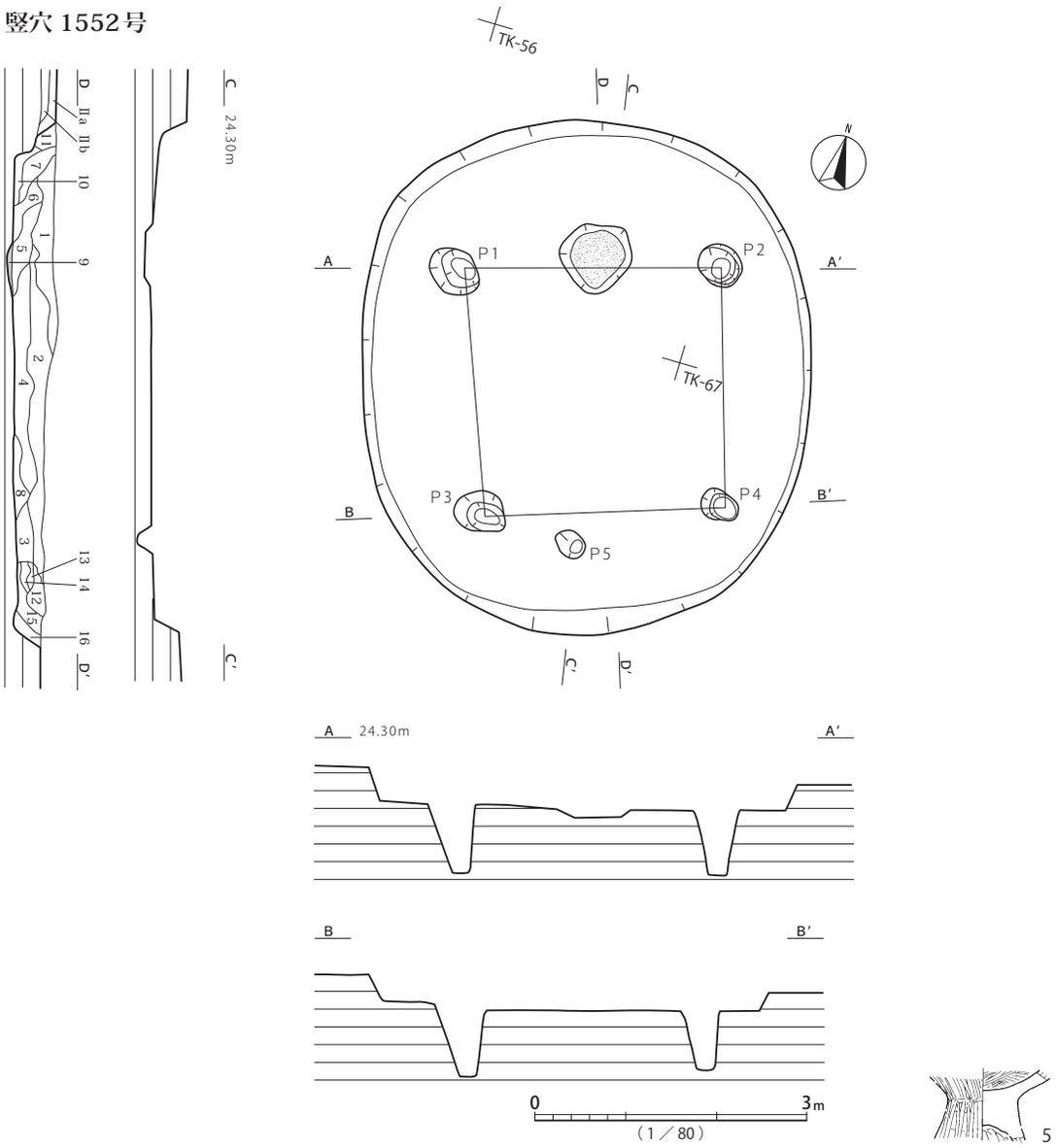
竪穴1556号　（Fig.177～180、PL.26・61・62・94・110・111・139・140）

UK−81を中心に位置する。南東隅で竪穴0152号と重複し、北西隅は調査区外に延びる。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構が0152号よりも新しいと考えられる。

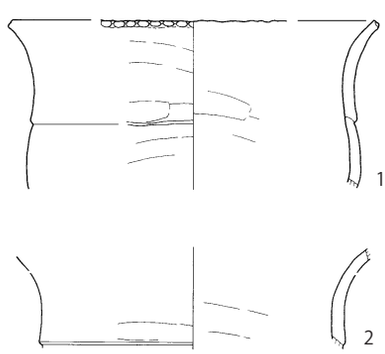
平面形態はやや胴の張る隅丸長方形を呈し、推定規模は7.46×6.70m、推定遺構下場面積は42.6㎡、確認面からの深さは0.61mを測る。主軸方位はN−24°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されている。P1～3は主柱穴で、主軸方向の柱間を長く配置する。調査区外となる北西隅にも、これと対応する主柱穴が存在するものと思われる。P4は出入口施設、P5は貯蔵穴であろう。壁周溝は検出されていない。P1・3を結ぶラインから壁寄りには、床面から15cm程高く地山を掘り残したベッド状遺構が検出されたほか、P5北側には床面から10cm弱を測る周堤帯が確認されている。

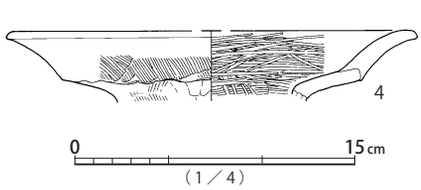
実測可能遺物は、1・7・25～28・30は甕形土器、2～6は台付甕形土器、8～13・31～44は壺形土器、14～23は高杯形土器、24は器台形土器、45・46は椀形土器である。29は内外赤彩の可能性があり、壺形土器であろうか。1・29・30は5の字状有段口縁の北陸南西部系、8は小破片で復元径が不明確であるが、複合口縁部に櫛描波状文と円形浮文が施され、畿内系であろう。13は網目状撚糸文ののち単沈線斜格子、結節文、横沈線区画を重ねる安房形である。15は開脚高杯で、口唇部に無節縄文を施し、回転結節文を重ねる。36・37は同一個体で、段部に縦方向の沈線を施し、高杯形土器脚部

竪穴 1552号



1　黒褐色土
2　黒褐色土　暗褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
3　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
4　黒褐色土　3層と同じ。
5　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒も少量混じる。
6　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒も混じる。
7　黒褐色土　暗褐色土を含む。
8　黒褐色土　暗褐色土・ローム粒を含む。
9　黒褐色土　暗褐色土・焼土粒を多量に含む。
10　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土・褐色土も少量混じる。
11　黒褐色土　暗褐色土を少量含む。
12　暗褐色土　黒褐色土を多量に含み、ローム粒もわずかに混じる。
13　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
14　黒褐色土　暗褐色土を含む。
15　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
16　褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒も混じる。





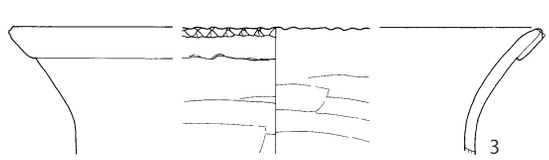
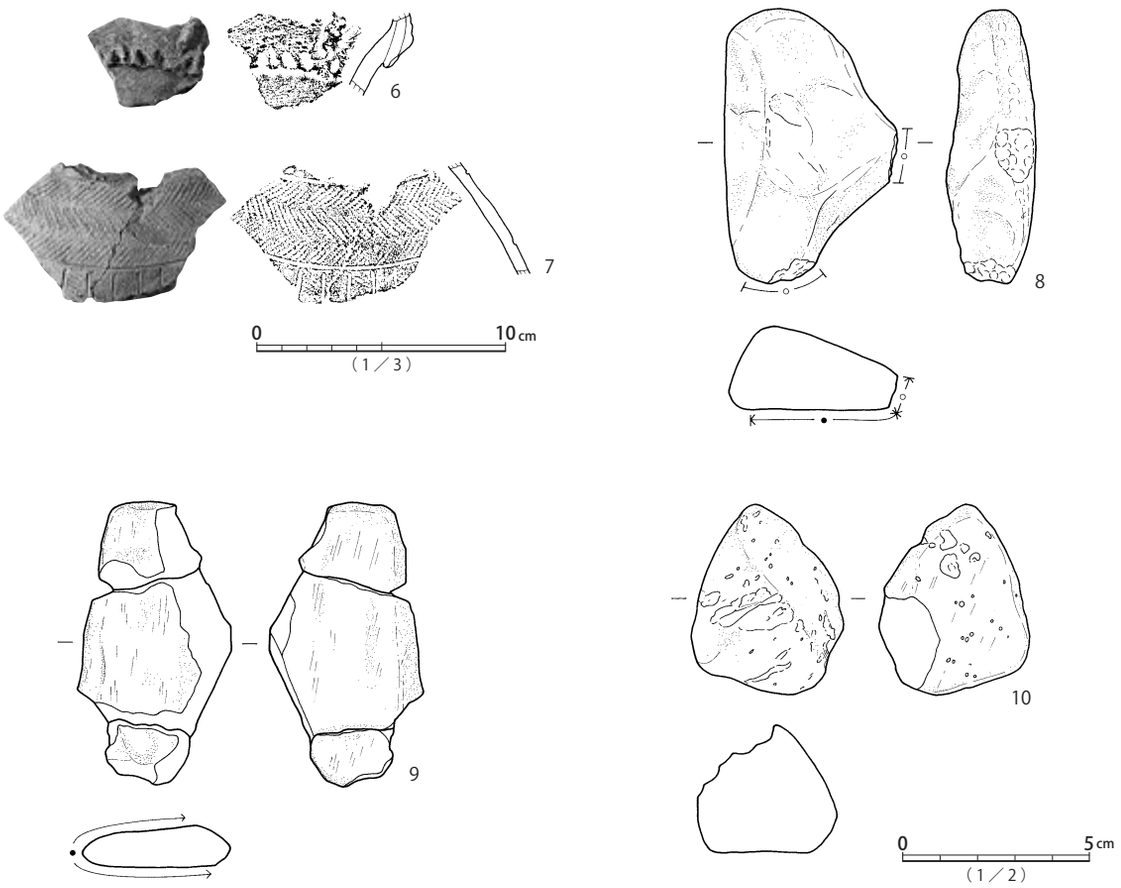
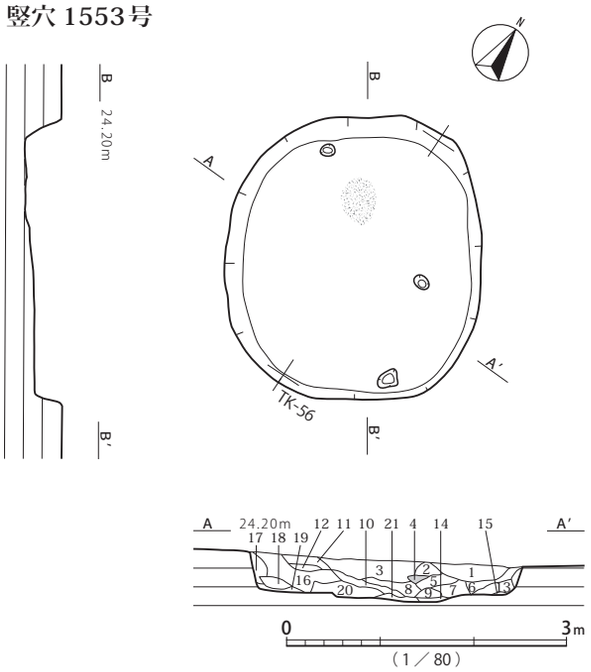


Fig.174　竪穴1552号(1) 遺構遺物

竪穴 1552号



竪穴 1553号



1 黒褐色土 暗褐色土・ローム粒を少量含む。
2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒をわずかに含む。
3 黒褐色土 暗褐色土を多量に含み、ローム粒も混じる。
4 黒褐色土 焼土粒を多量に含む。
5 黒色土 黒褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。
6 黒色土 ローム粒をわずかに含む。
7 黒褐色土 暗褐色土・ローム粒を含む。
8 黒褐色土 ローム粒を含み、暗褐色土も少量混じる。
9 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を含む。
10 暗褐色土 黒褐色土含む。ローム粒を多量、小ロームブロックもわずかに混じる。しまりあり。
11 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。
12 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、ロームブロックも少量混じる。
13 黒褐色土 ローム粒を含み、暗褐色土も少量混じる。
14 褐色土
15 褐色土
16 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、小ロームブロックも混じる。
17 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、褐色土も混じる。
18 黒褐色土 暗褐色土に含み、ローム粒・小ロームブロックもわずかに混じる。しまりあり。
19 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、黒褐色土も混じる。
20 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、ロームブロックも混じる。
21 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、小ロームブロックもわずかに混じる。しまりあり。

Fig.175 竪穴1552号(2) 遺物、竪穴1553号 遺構

竪穴 1555 号

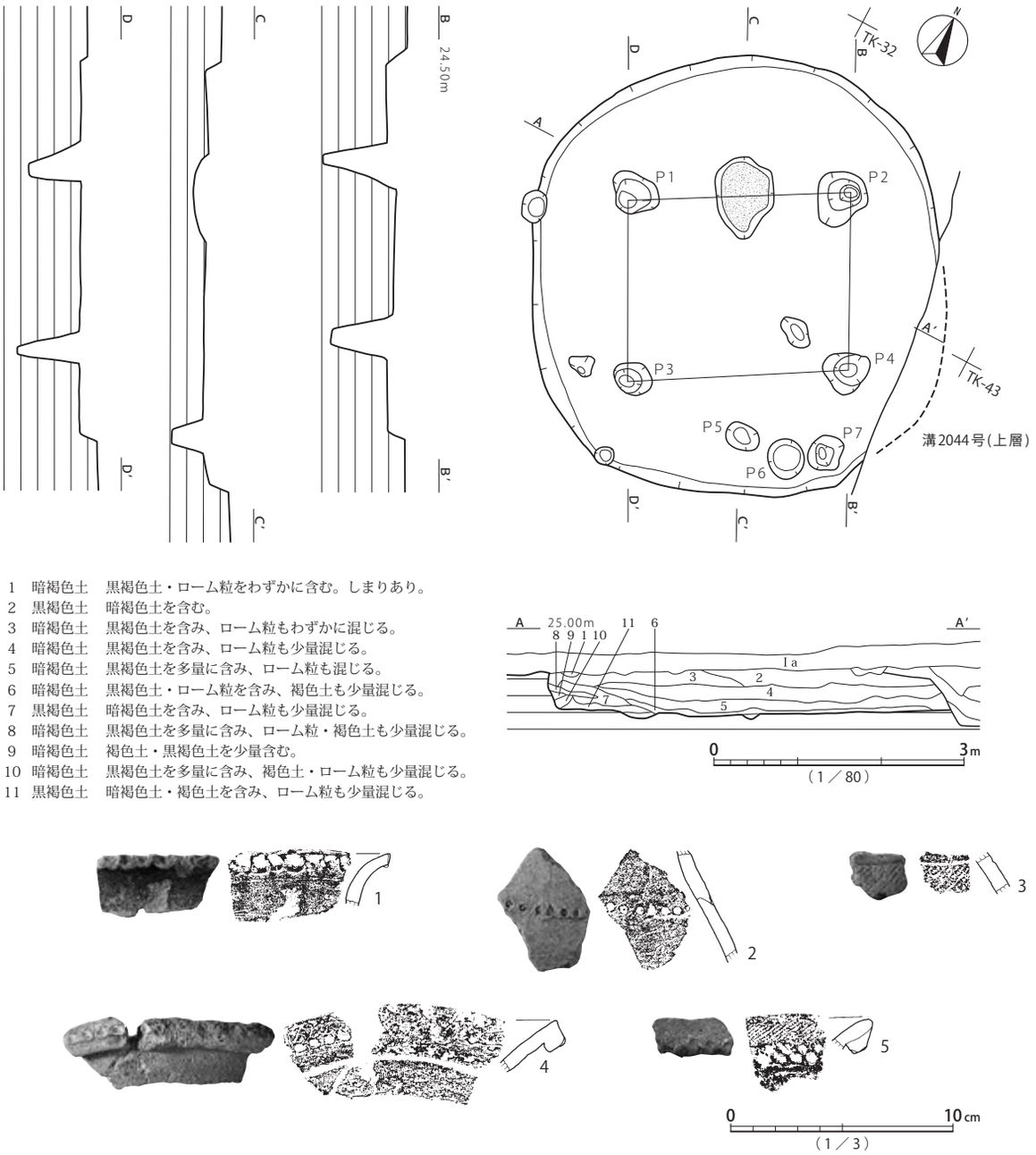


Fig.176　竪穴1555号 遺構遺物

の可能性がある。40・41も同一個体であろう。土器以外では47の砥石と48の石皿が出土している。

遺物は南東隅からP5周辺からまとまって検出されている。2は北隅、9・20は北西辺壁際、3・4・10・11・14・18は南東隅から検出され、いずれも床面上からの出土。15・21・48はP5内、7は炉跡上面からの出土である。

弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴 1556号

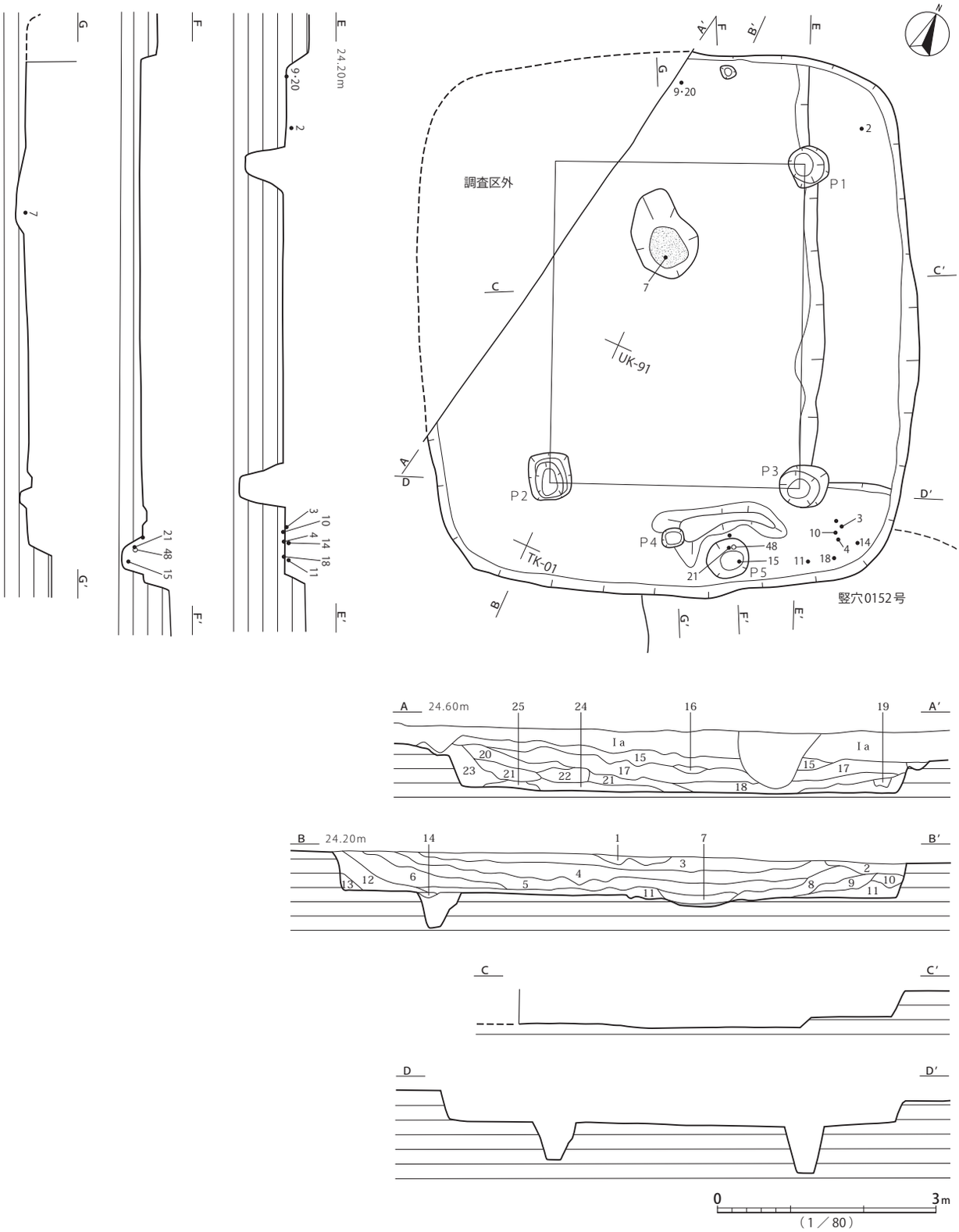


Fig.177　竪穴1556号(1) 遺構

竪穴 1556号

1　暗灰褐色土　黒褐色土を多量に含む。
2　暗褐色土　黒褐色土を多量に含み、ローム粒を少量含む。
3　黒褐色土　暗褐色土・ローム粒を少量含む。
4　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
5　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒も混じる。
6　暗褐色土　ローム粒を多量に含み、黒褐色土が少量、ロームブロックがわずかに混じる。
7　黒褐色土　暗褐色土・ローム粒を含み,小ロームブロック・焼土粒もわずかに混じる。
8　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土が少量、小ロームブロックがわずかに混じる。
9　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
10　暗褐色土　黒褐色土を多量に含み、ローム粒も混じる。
11　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土が少量、小ロームブロックがわずかに混じる。
12　黒褐色土　暗褐色土・ローム粒を含む。
13　暗褐色土　ローム粒を多量に含み、小ロームブロックもわずかに混じる。
14　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
15　暗灰褐色土　黒褐色土を含む。
16　黒褐色土　暗灰褐色土・ローム粒を含む。
17　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
18　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を含む。
19　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含む。
20　暗褐色土　黒褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
21　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
22　暗褐色土　ローム粒を含む。
23　暗褐色土　褐色土・ローム粒を少量含む。
24　暗褐色土　黒褐色土を含み、ローム粒が少量、小ロームブロックがわずかに混じる。
25　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。

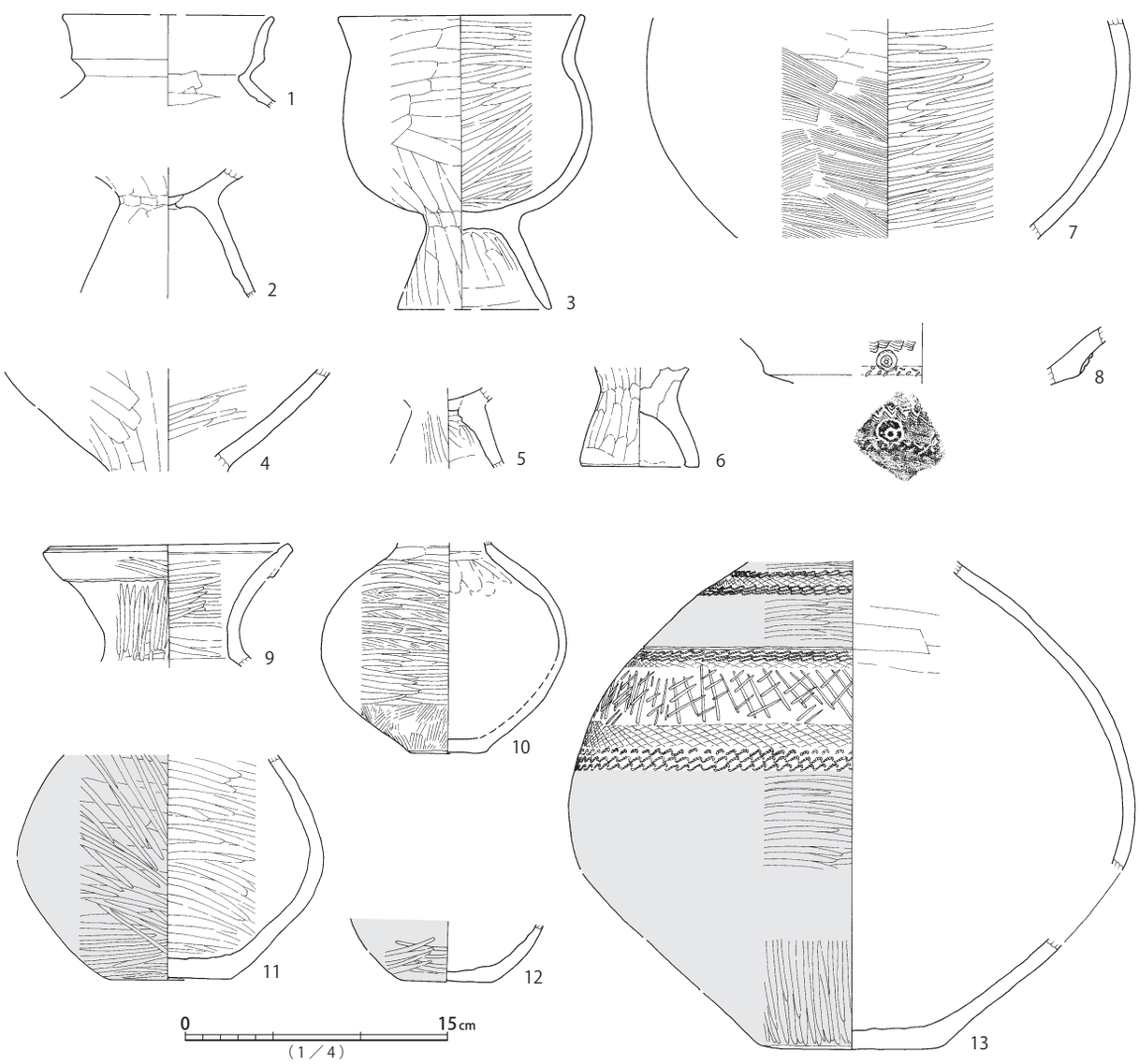


Fig.178　竪穴1556号(2) 遺物

竪穴 1556号

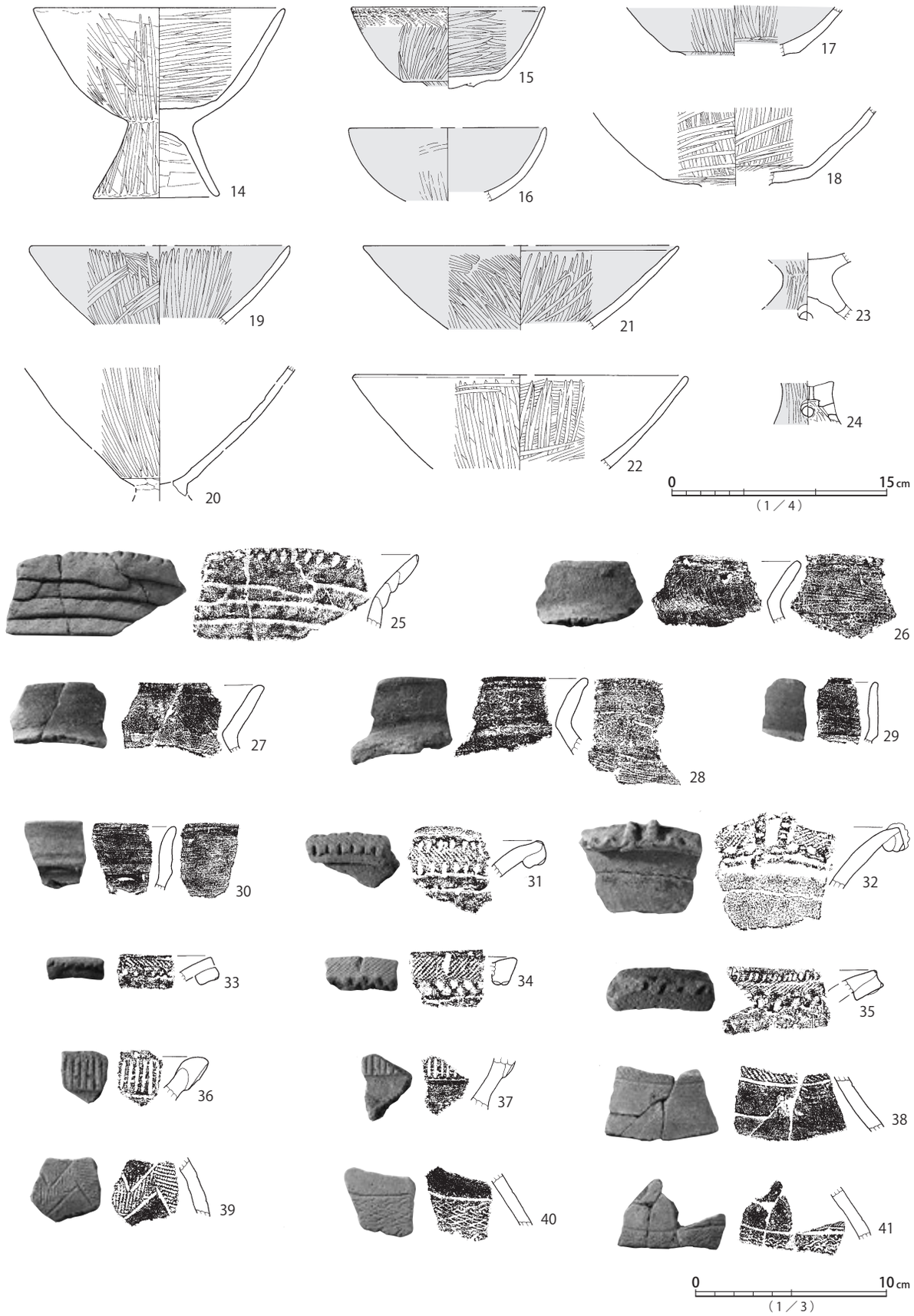


Fig.179　竪穴1556号(3) 遺物

竪穴 1556号

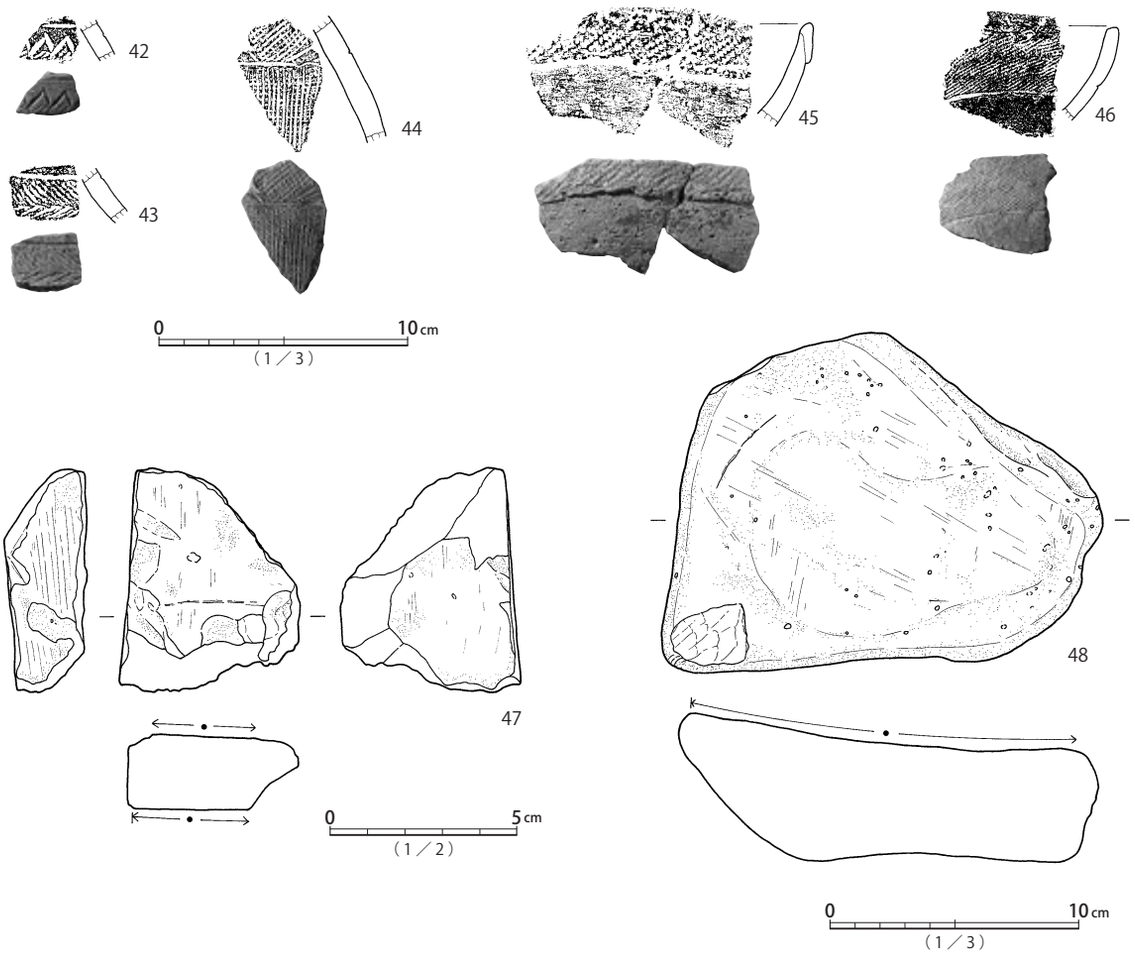


Fig.180　竪穴1556号(4) 遺物

竪穴1558号　（Fig.181、PL.26）

TJ−39を中心に位置する。他遺構との重複はないが、北西側は調査区外に延びる。

平面形態は大型の長楕円形を呈すと考えられるが、南東側半分程度が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は主軸長7.32m、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位はN−9°−Wである。P1・2は主柱穴、P3は貯蔵穴である。炉跡は検出されていないが、中軸線上北寄りに位置するものと思われる。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は1の甕形土器のみで、口縁部内面の有段部に布目痕を残す押捺を加える。

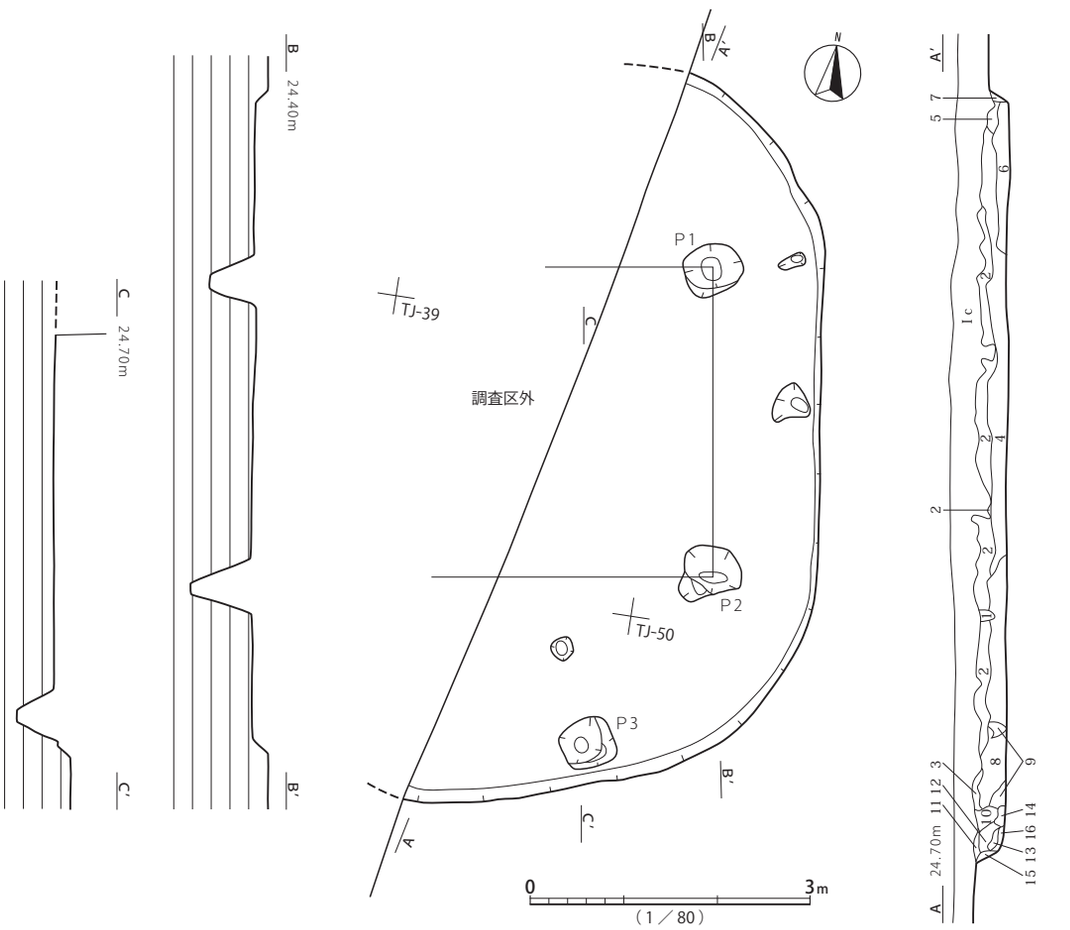
出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期中葉の所産と思われる。

竪穴1566号　（Fig.182）

UJ−55を中心に位置する。北側で道路2226号（上層）と溝・土坑（上層・遺構番号なし）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、南壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.13mを測る。想定される遺構範囲から、柱穴状の掘り込みが検出されているが、

竪穴 1558号



1　黒褐色土　暗褐色土・暗灰褐色土を少量含む。
2　黒褐色土　暗褐色土・ローム粒をわずかに含む。
3　褐色土　黒褐色土を含む。
4　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を含み、部分的に褐色土が混じる。
5　黒褐色土　黒褐色土層　暗褐色土を含み、暗灰褐色土もわずかに混じる。
6　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
7　褐色土　暗褐色土を含む。
8　暗褐色土　黒褐色土・褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
9　暗褐色土　黒褐色土を含む。
10　黒褐色土　暗褐色土を少量含む。
11　暗褐色土　黒褐色土を含む。
12　黒褐色土　暗褐色土を含む。
13　黒褐色土　暗褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
14　暗褐色土　黒褐色土を多量に含む。
15　褐色土　暗褐色土を含む。
16　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含む。

Fig.181　竪穴1558号 遺構遺物

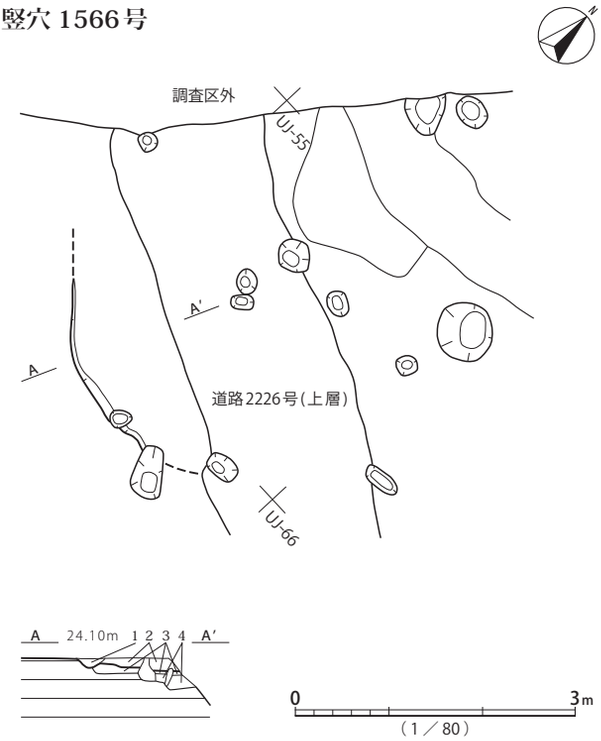
本遺構に伴うものかは明確でない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1570号　（Fig.183、PL.26・62・111）

UI－100を中心に位置する。他遺構との重複はないが、北西側は調査区外に延び、南西辺壁の一部は撹乱により壊される。

竪穴 1566号



1　暗褐色土
2　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
3　黒色土　　小ロームブロックを少量含む。貼床。
4　暗褐色土　ローム粒を多く含む。貼床。

Fig.182　竪穴1566号 遺構

平面形態は大型の長楕円形を呈すと考えられるが、南東側半分程度が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は副軸長6.35m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位はN−39°−Wである。P1・2は主柱穴、P3は出入口施設、P4は貯蔵穴である。壁周溝は検出されていない。遺構中央付近の床面からは、焼土と炭化材の分布が確認されており、火災に遭った可能性がある。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2は壺形土器、3は高杯形土器である。3は口縁部と底部に折返し状の段部をもち、底部には未貫通の小孔が焼成前に穿たれる。1はP4からの出土。3はP2脇から検出され、床面上からの出土である。

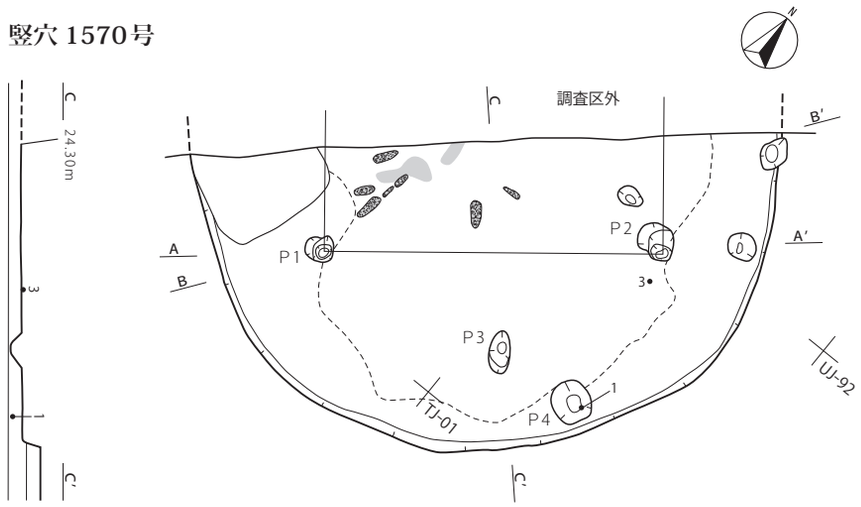
弥生時代後期中葉の所産と思われる。

竪穴1571号　（Fig.184、PL.26・27・62・63・111）

TK−92を中心に位置する。東側は溝2204号（上層）と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が2204号よりも古い。

平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈すと思われるが、北西側の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.31mを測る。北西辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−34°−Wである。床面からは焼土と炭化材の分布が確認されており、火災に遭った可能性がある。炉跡や主柱穴などの屋内施設は検出されていないが、焼土除去後の状態が調査図面に記載されておらず、有無は明確でない。

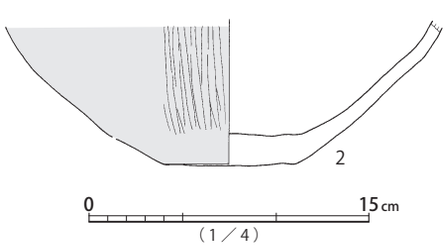
竪穴1570号



1　暗灰褐色土
2　黒褐色土　ローム細粒を多量含む。
3　黒褐色土
4　黒褐色土　ローム粒を含む。
5　黒色土
6　暗褐色土　焼土ブロック・小ロームブロックを含む。
7　黒褐色土　ローム細粒を含む。
8　黒褐色土　ローム粒を含む。他の同色層より明るい。
9　黒色土　小ロームブロックを少量含む。
10　黒褐色土　焼土細粒を含む。
11　焼土
12　暗褐色土　ローム粒を含む。
13　黒色土
14　暗褐色土







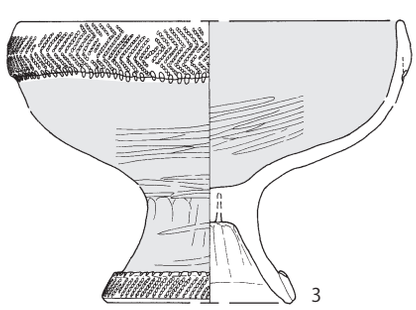
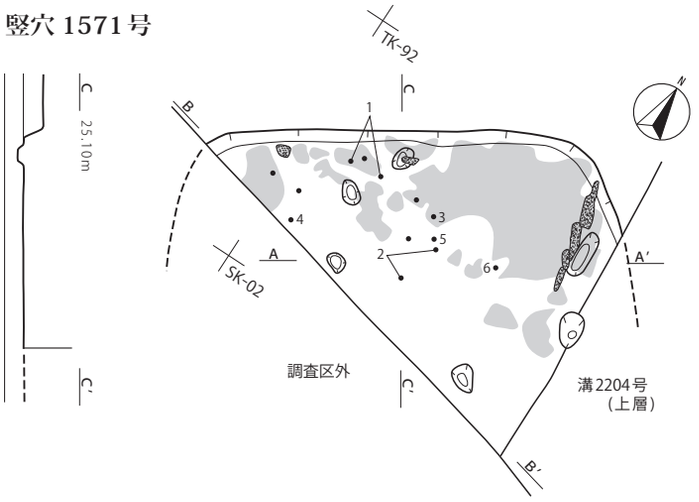
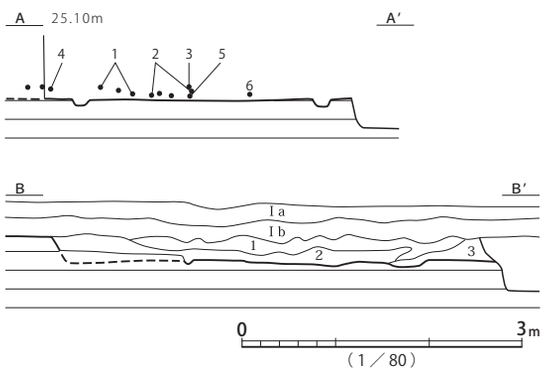


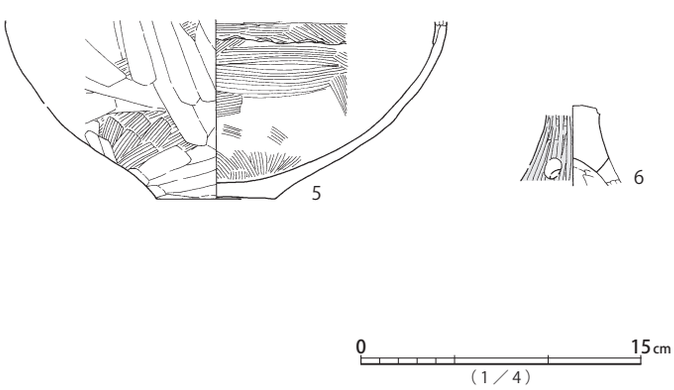
Fig.183　竪穴1570号 遺構遺物

竪穴 1571 号





1　黒褐色土　暗褐色土を含む。
2　暗褐色土　黒褐色土を多量に含み、褐色土・ローム粒・焼土粒もわずかに混じる。
3　暗褐色土　黒褐色土を多量に含み、ローム粒もわずかに混じる。



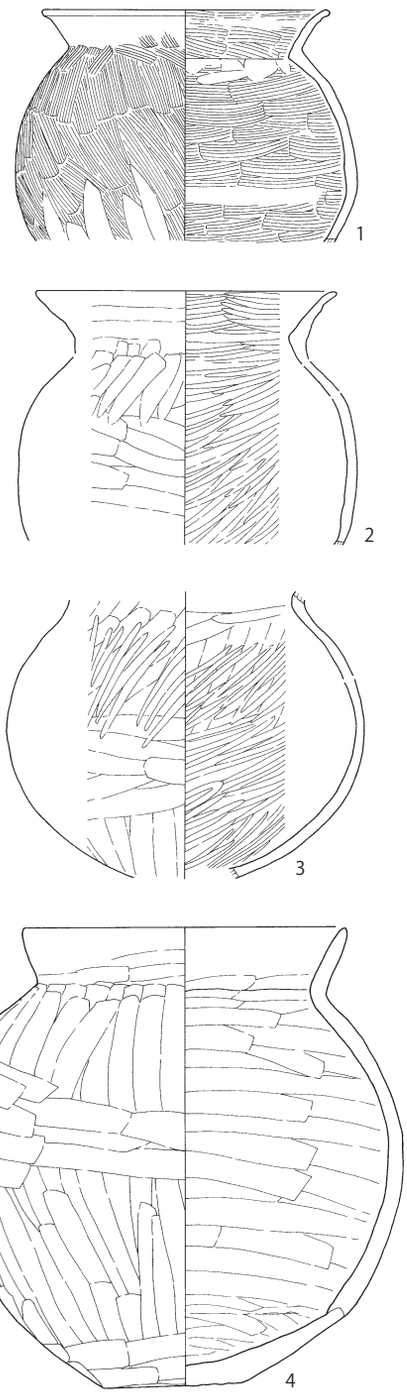
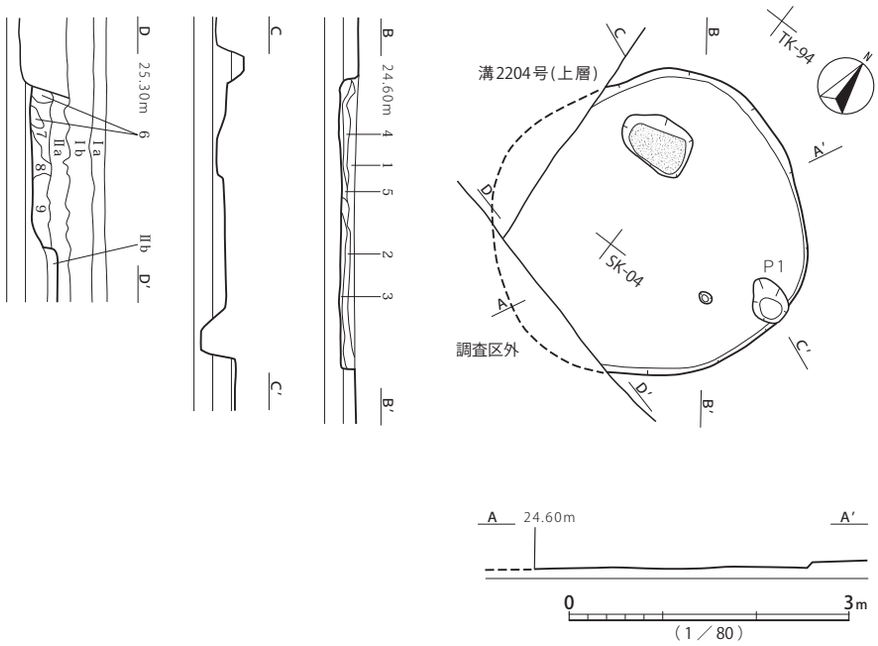


Fig.184　竪穴1571号 遺構遺物

竪穴 1572号



1　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。
2　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒も少量混じる。
3　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒も混じる。しまりややあり。
4　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。
5　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。しまりややあり。
6　褐色土　　暗褐色土を含む。
7　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒をわずかに含む。
8　暗褐色土　ローム粒を多量に含み、褐色土も少量混じる。
9　暗褐色土　黒褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。

Fig.185　竪穴1572号 遺構

実測可能遺物は、1～5は甕形土器、6は高杯形土器である。甕形土器の頸部はくの字状に屈折し、胴部は球形を呈する。出土遺物は、いずれも焼土層上面から検出されており、建物の廃絶からさほど時間をおかずに投棄されたものと思われる。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴1572号　（Fig.185、PL.27）

TK−93を中心に位置する。西側で溝2204号（上層）と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が2204号よりも古い。

平面形態は小型の楕円形を呈し、推定規模は3.24×3.32m、推定遺構下場面積は7.7㎡、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN−61°−W程度であろうか。炉跡は中軸線上北西寄り検出され、長軸は東西方向を向く。P1は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。主柱穴や壁周溝は検出されていない。

遺構平面形態から、弥生時代後期後半の所産と思われるが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

竪穴1573号　（Fig.186、PL.27・63・111・142）

TJ−89を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は方形を呈し、規模は3.61×3.63m、遺構下場面積は11.4㎡、確認面からの深さは0.21mを測る。東西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−1°−Wとなり、ほぼ真北を向く。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。床面からわずかに間層を挟んで、遺構中央から放射状に広がる炭化材と焼土の分布が確認されており、一定期間放置されたのち、上屋が焼け落ちたものと考えられる。覆土中には焼土粒・炭化粒などの混入物が多く、堆積も乱れることから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

実測可能遺物は、1・2・4・7は甕形土器、3・8は壺形土器である。5・6は器種不明の底部であるが、5は甕形土器、ミニチュア土器と思われる。1の頸部はくの字状に屈折し、胴部は球形化する。4は外面ケズリ整形ののちミガキを加える。1は東辺壁寄りから検出され、覆土中からの出土である。土器以外では9の土製有孔丸玉（土玉）が出土している。

古墳時代前期中葉の所産と思われる。

竪穴1578号　（Fig.187、PL.27・63・111）

TJ−15を中心に位置する。中央北西寄りで溝2227号（上層）、南西辺壁の一部で土坑1576号（上層）、南東辺壁の一部で土坑1577号（上層）と重複し、南隅は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は方形を呈し、規模は5.19×5.24m、推定遺構下場面積は26.5㎡を測る。掘り込みは浅く、確認面からの深さは0.05m、主軸方位はN−42°−Wである。P3は底面が焼けるため、炉跡の可能性があるが、通有の炉跡に比べて掘り込みが深く、その位置からしても明確でない。本来の炉跡は、重複する2227号によって壊された可能性も考えられる。P2は東隅に位置し、貯蔵穴である。P1は中軸線上からは外れるが、出入口施設と思われる。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は直口縁壺形土器、3・4は小型の壺形土器、5〜7は鉢形土器、8は壺形土器である。3〜6はいずれも小型丸底系で、3・4は口縁部高が胴部高を凌ぎ、5・6は口縁部が有段となる。1〜4・6・7は、いずれもP2からまとまって検出され、上層から中層にかけての出土である。

古墳時代前期中葉の所産と考えられる。

竪穴1580号　（Fig.188、PL.27・111）

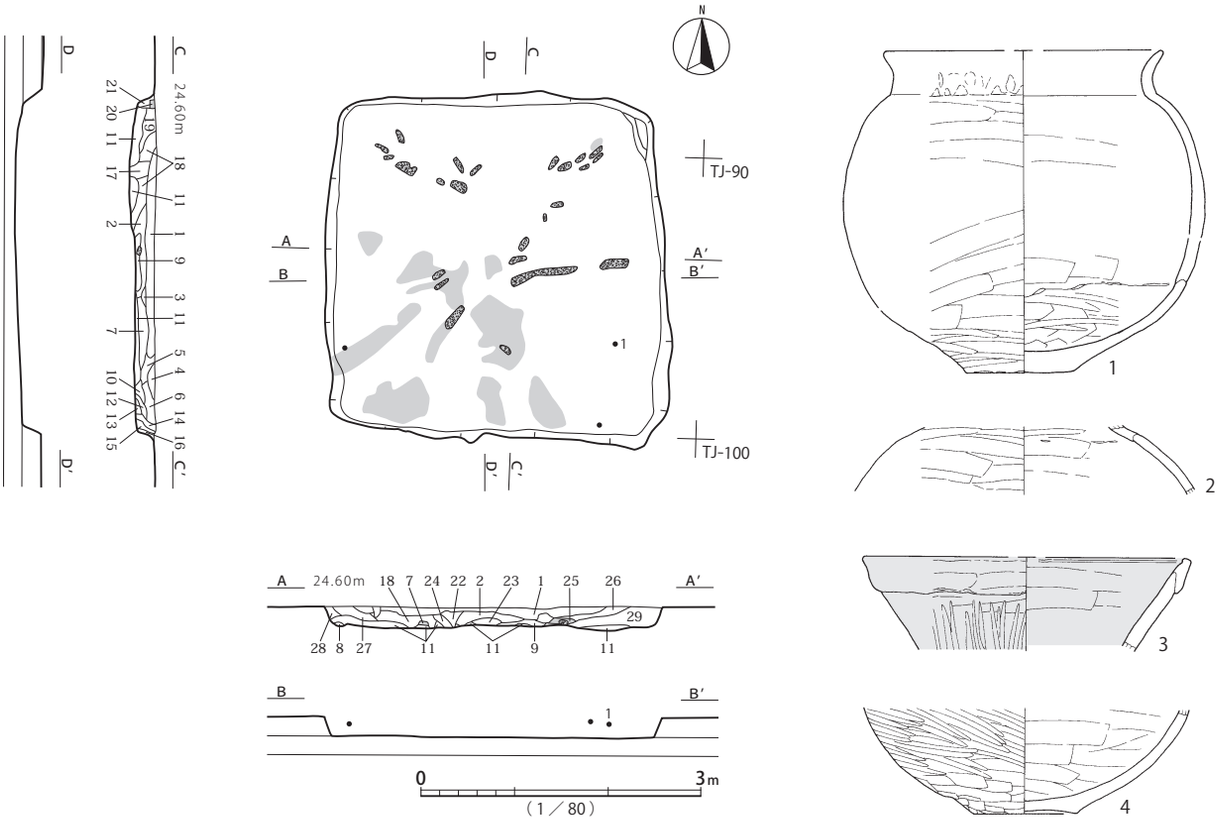
SK−97を中心に位置する。中央で溝2229号（上層）と重複するが、床面までは達していない。南壁の一部は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が2229号よりも古い。

平面形態は小型の楕円形を呈し、規模は3.94×3.83m、遺構下場面積は10.8㎡、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位はN−37°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。P1・2は出入口施設であろう。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・3は甕形土器、2は有段口縁の椀形土器である。

弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴 1573号



1 暗褐色土　黒褐色土を含み、焼土粒・炭化粒・ローム粒もわずかに混じる。
2 暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含み、炭化粒もわずかに混じる。
3 暗褐色土　焼土粒を含む。
4 黒褐色土　暗褐色土を含み、焼土粒もわずかに混じる。
5 暗褐色土　焼土粒・ローム粒を含む。
6 黒褐色土　暗褐色土を少量含み、焼土粒もわずかに混じる。しまりややあり。
7 暗赤褐色土　焼土を多量に含み、黒褐色土も少量混じる。
8 暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を含む。
9 暗褐色土　黒褐色土・炭化粒を含む。しまりなく、ポロポロする。
10 暗褐色土　黒褐色土を含み、焼土粒も少量混じる。
11 暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を含む。やや硬くしまる。
12 黒褐色土　暗褐色土・炭化粒を少量含み、焼土粒もわずかに混じる。
13 暗褐色土　褐色土・ローム粒を少量含む。やや硬くしまる。
14 暗褐色土　しまりなく、ポロポロする。
15 暗褐色土　黒褐色土を少量含む。
16 暗褐色土　ローム粒を含み、褐色土も少量混じる。
17 暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含み、炭化粒も混じる。
18 暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土・焼土粒もわずかに混じる。
19 暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含み、炭化粒・焼土粒もわずかに混じる。
20 暗赤褐色土　焼土粒を多量に含み、黒褐色土も少量混じる。
21 暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含む。
22 暗褐色土　黒褐色土・ローム粒をわずかに含む。
23 暗褐色土　黒褐色土・焼土粒を含み、炭化粒も少量混じる。
24 暗褐色土　ローム粒を多量に含み、炭化粒がわずかに混じる。
25 暗赤褐色土　焼土を多量に含み、暗褐色土も混じる。
26 暗褐色土　黒褐色土を含み、ローム粒・焼土粒が少量、炭化粒がわずかに混じる。
27 黒褐色土　暗灰褐色土を少量含む。
28 暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土・褐色土もわずかに混じる。
29 黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒が少量、焼土粒・炭化粒がわずかに混じる。

Fig.186　竪穴1573号 遺構遺物

竪穴 1578号

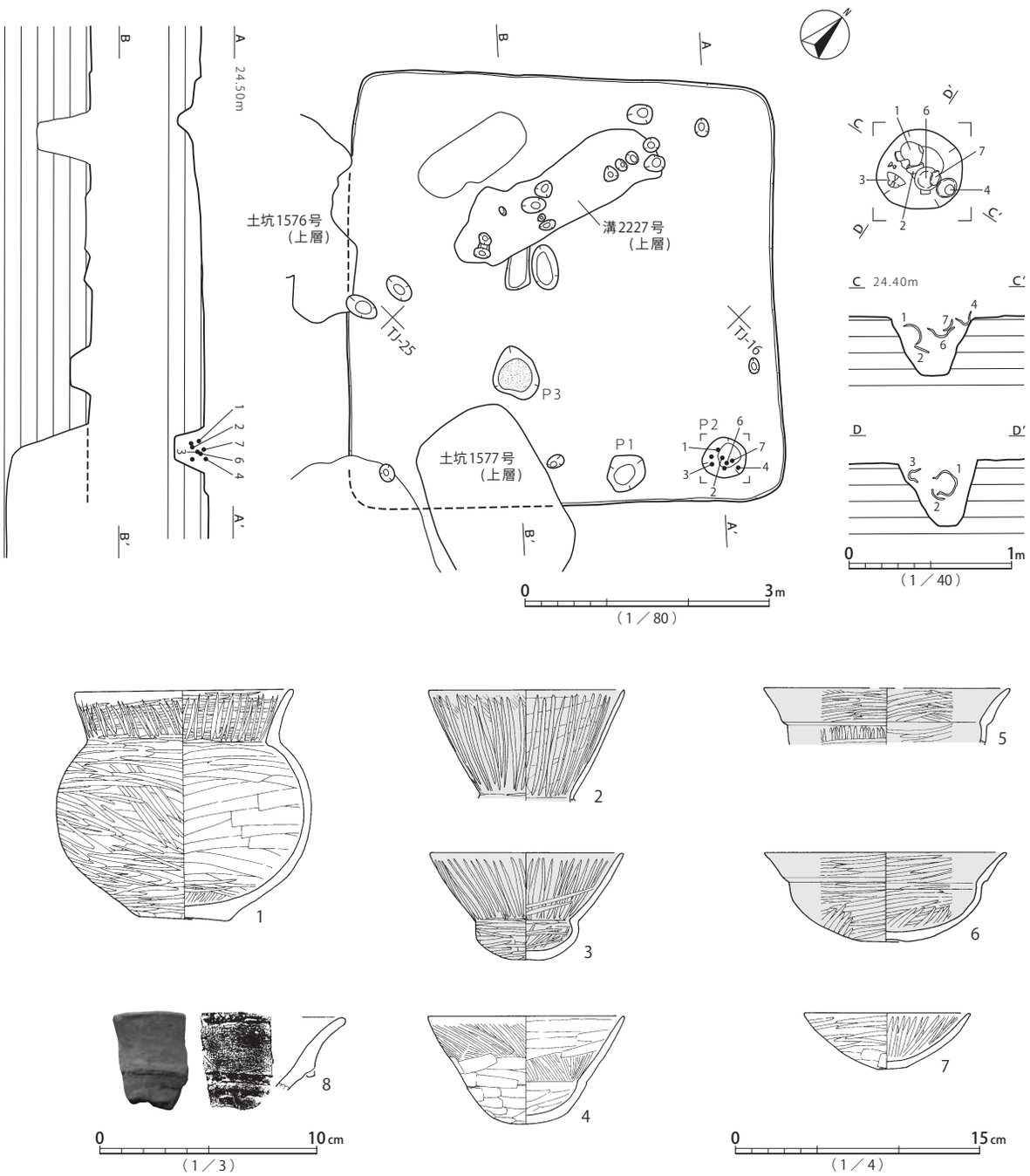


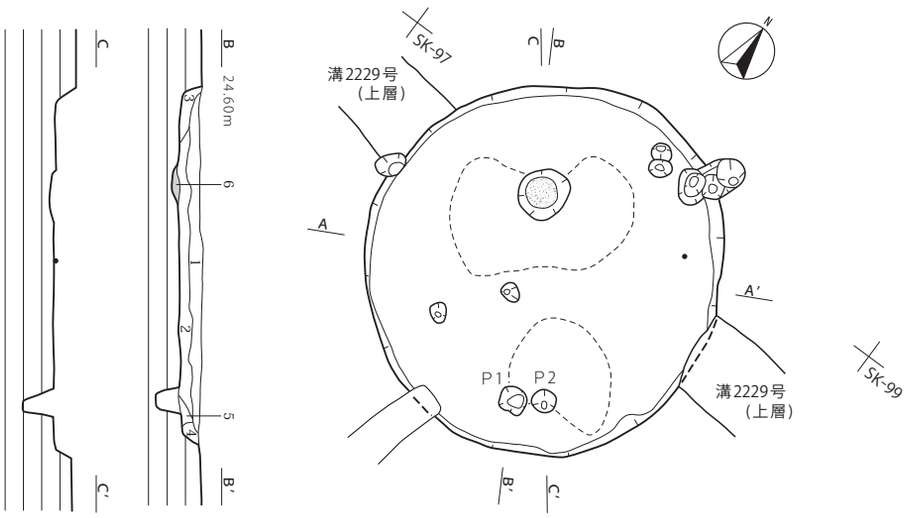
Fig.187　竪穴1578号 遺構遺物

竪穴1581号　（Fig.189～192、PL.1・28・63～65・94・95・111・132）

RK−28を中心に位置する。南西側で竪穴1593号（上層）、溝2228号（上層）と重複するが、いずれも床面までは達していない。北西壁の一部は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は4.97×4.66m、遺構下場面積は17.8㎡、確認面からの深さは0.57mを測る。主軸方位はN−31°−Wである。炉跡は中軸線上からやや東側にずれ、遺構北寄

竪穴 1580号



1　黒褐色土　暗褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
2　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒も少量混じる。
3　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含む。
4　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土・褐色土もわずかに混じる。
5　暗褐色土　黒褐色土を含む。
6　暗褐色土　焼土粒を多量に含む。
7　黒褐色土　暗褐色土・ローム粒を多量に含む。
8　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒が少量、少ロームブロックがごくわずかに混じる。
9　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土が少量、褐色土がわずかに混じる。
10　暗褐色土　褐色土・ローム粒を含み、黒褐色土もわずかに混じる。
11　褐色土　暗褐色土を少量含む。

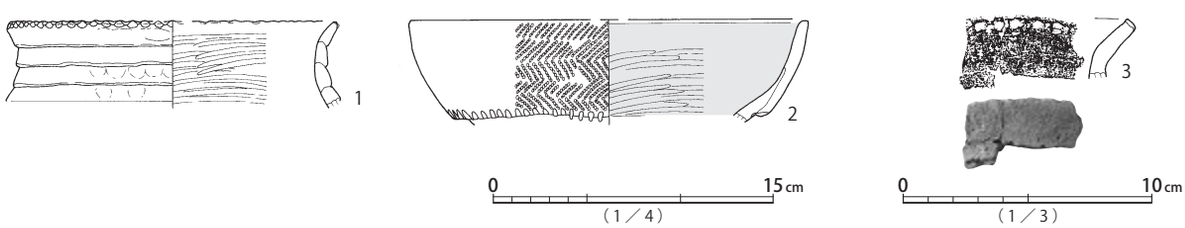
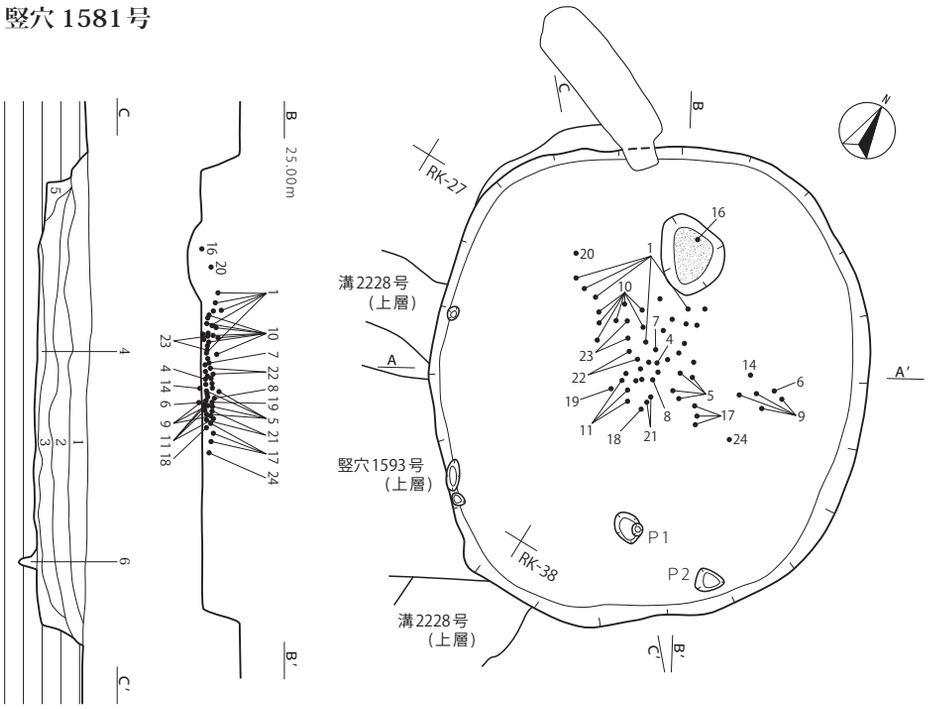


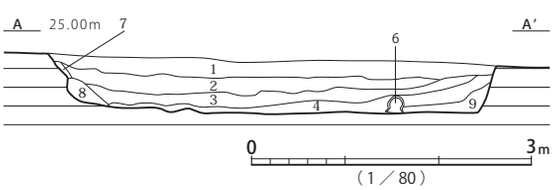
Fig.188　竪穴1580号 遺構遺物

りから検出されている。P1・2は位置関係から出入口施設と貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1～11・27・28は甕形土器、12は台付甕形土器、13・14・17・29・30は壺形土器、18～20・31は椀形土器、21～23・25は高杯形土器、24は器台形土器、26は炉器台形土器、15・16は器種不明の底部である。遺構中央付近から大量の遺物が検出され、1・4～11・14・16～24は、覆土下層の4層上面ないし3層中からの出土である。器形復元された甕形土器のうち、口頸部から胴肩部に多段の粘土紐積み上げ痕を残すものが7個体、胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残すものが2個体、段部を持たないものが2個体で、多段が主体となる。椀形土器は3個体すべて口縁部に最大径

竪穴 1581号





1　黒褐色土　暗褐色土を少量含む。
2　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。
3　暗褐色土　黒褐色土を多量に含み、ローム粒も少量混じる。
4　暗褐色土　ローム粒を多量に含み、褐色土も混じる。
5　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含む。
6　暗褐色土　ローム粒を多量に含み、褐色土も混じる。
7　褐色土　　暗褐色土を含む。
8　暗褐色土　黒褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。
9　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土・褐色土も少量混じる。

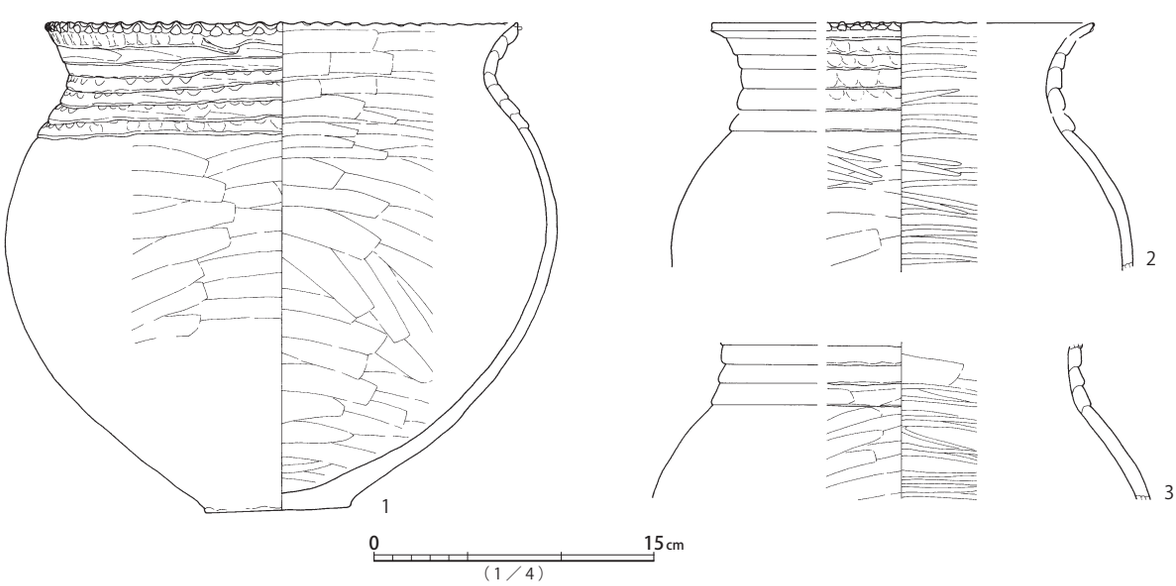


Fig.189　竪穴1581号(1) 遺構遺物

竪穴 1581 号

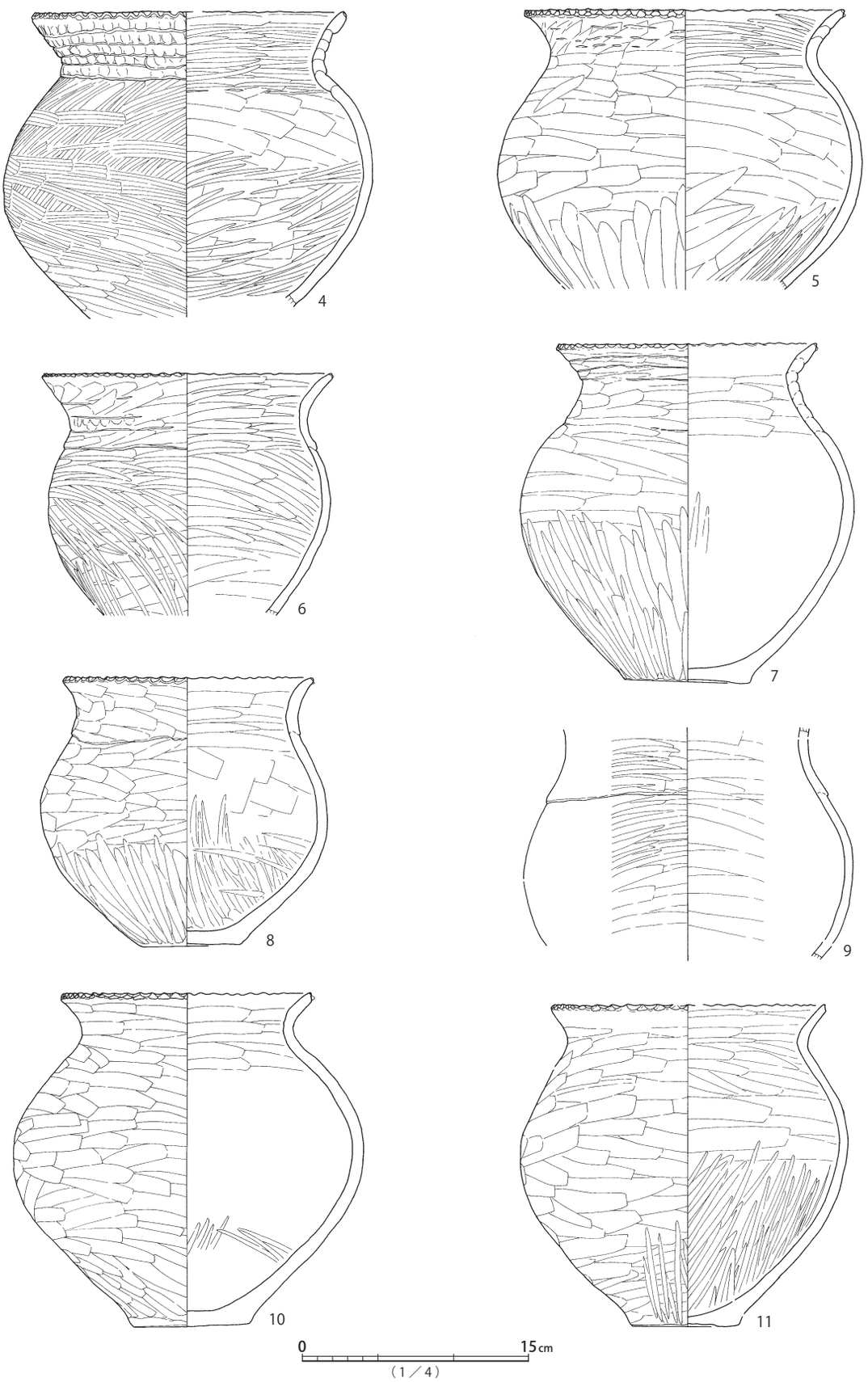


Fig.190　竪穴1581号(2) 遺物

竪穴 1581号

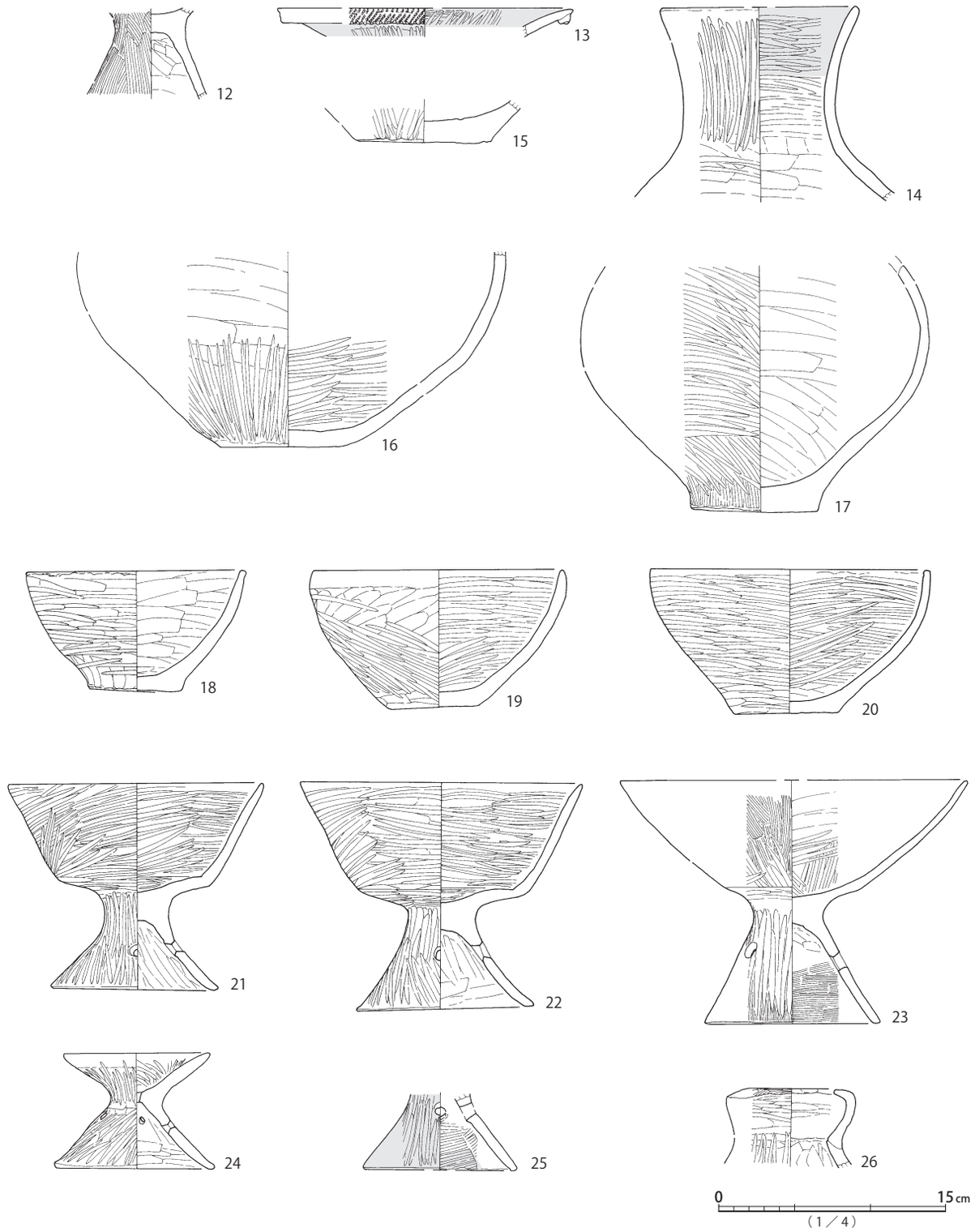


Fig.191　竪穴1581号(3) 遺物

竪穴 1581 号

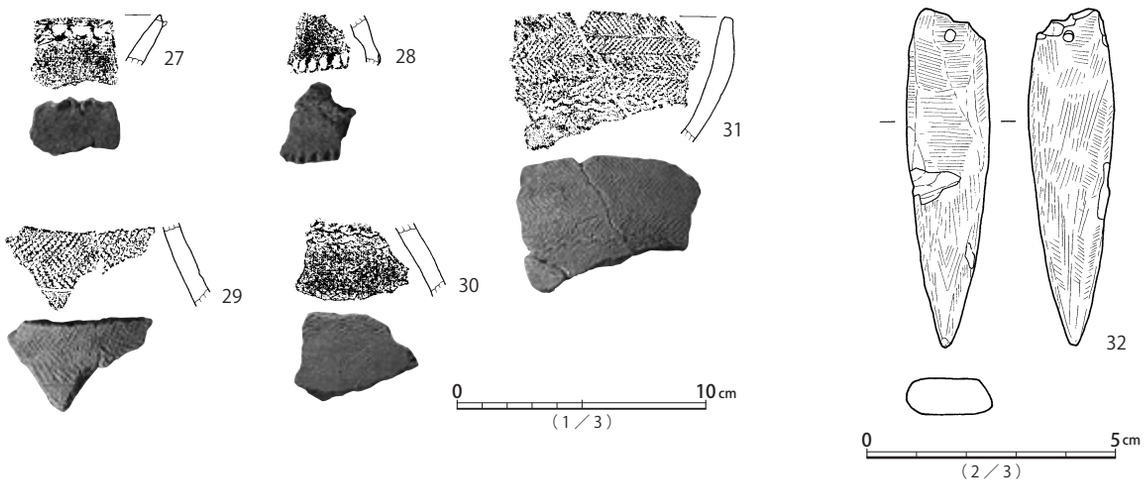


Fig.192　竪穴1581号(4) 遺物

をもつ半球形である。高杯形土器はいずれも杯底部に稜をもつが、底部径が大きく、杯部が箱型に深いものが２個体、底部径が小さいものが１個体ある。土器以外では、混入と考えられる32の剣形石製模造品がある。

大村は中台編年において、これらの土器群を中台1−2式に位置付けており（大村2009）、弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

竪穴1583号　（Fig.193、PL.28・111）

RL−41を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、規模は4.21×3.76m、遺構下場面積は11.7㎡、確認面からの深さは0.68mを測る。主軸方位はN−45°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴で、柱の抜き取りが行われたものと考えられる。P5は出入口施設の可能性があるが、不整形を呈し、明確でない。P6は貯蔵穴であろう。壁周溝は全周する。

実測可能遺物は、1・5〜8は壺形土器、2・3は甕形土器、9は椀形土器である。4は甕形土器の口縁部と思われるが、脚裾部の可能性もある。頸部が屈折傾向を示し、ハケ調整が施される3は混入であろう。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

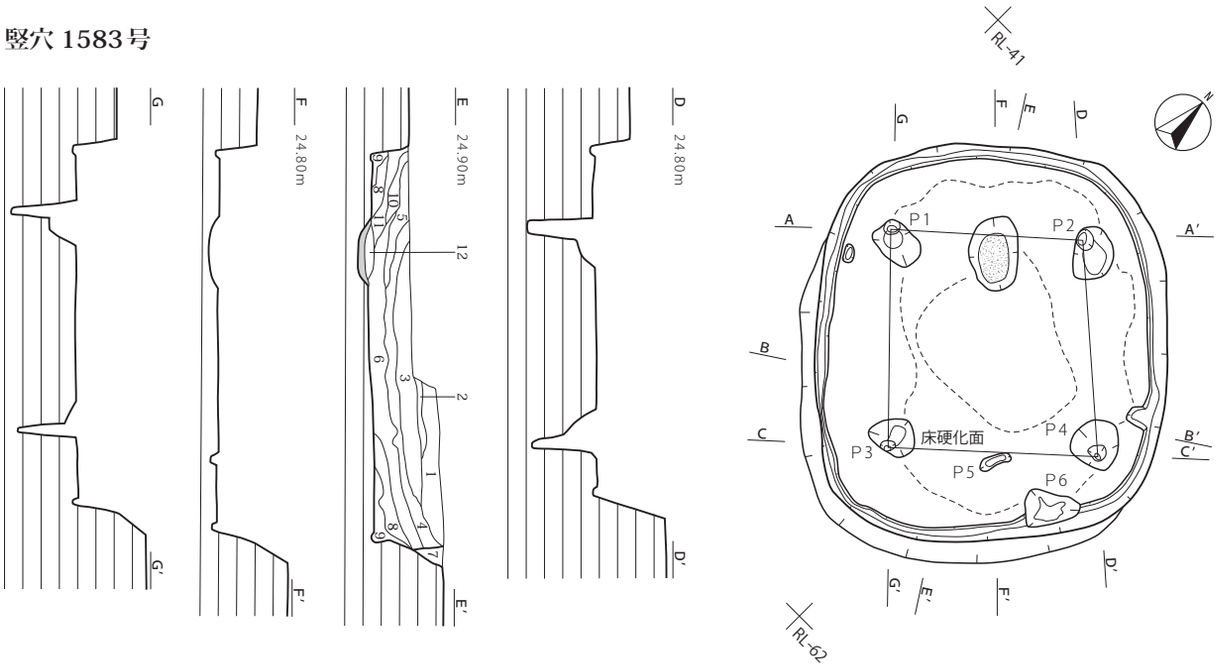
竪穴1584号　（Fig.194、PL.28・29・95・111）

RL−32を中心に位置する。他遺構との重複はない。

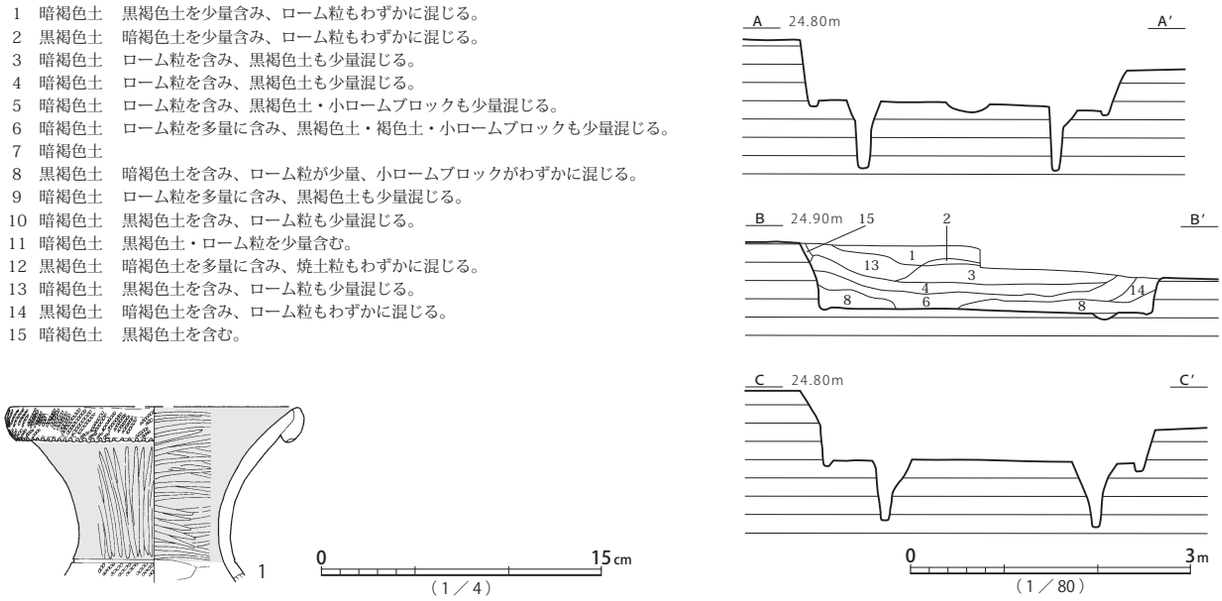
平面形態は小型の不整楕円形を呈し、規模は3.31×3.11m、遺構下場面積は7.6㎡、確認面からの深さは0.41mを測る。主軸方位はN−45°−Wである。写真では、遺構中央に焼土の堆積、中軸線上北西寄りに炉跡の可能性がある床面の変色が確認できるが、調査図面に記載がなく、詳細は不明である。柱穴や貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は広口壺形土器、2は高杯形土器、3は甕形土器である。

竪穴 1583号



1 暗褐色土 黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
2 黒褐色土 暗褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
3 暗褐色土 ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
4 暗褐色土 ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
5 暗褐色土 ローム粒を含み、黒褐色土・小ロームブロックも少量混じる。
6 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、黒褐色土・褐色土・小ロームブロックも少量混じる。
7 暗褐色土
8 黒褐色土 暗褐色土を含み、ローム粒が少量、小ロームブロックがわずかに混じる。
9 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、黒褐色土も少量混じる。
10 暗褐色土 黒褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
11 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を少量含む。
12 黒褐色土 暗褐色土を多量に含み、焼土粒もわずかに混じる。
13 暗褐色土 黒褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
14 黒褐色土 暗褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。
15 暗褐色土 黒褐色土を含む。



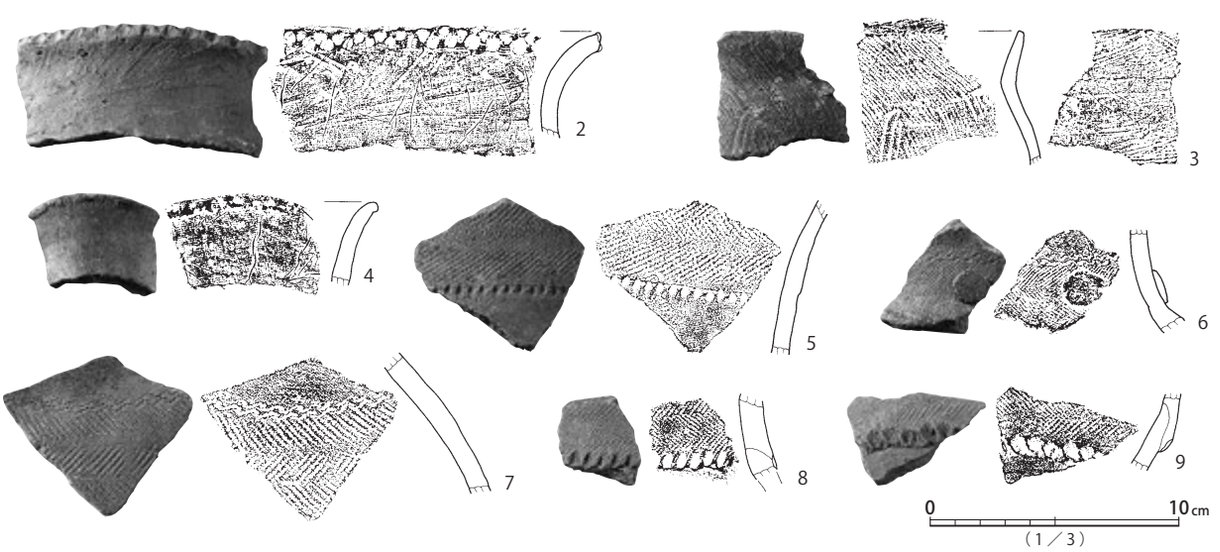


Fig.193 竪穴1583号 遺構遺物

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴1585号 （Fig.194、PL.28・29）

RL−44を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は小型の楕円形を呈し、規模は3.56×3.46m、遺構下場面積は9.1㎡、確認面からの深さは0.32mを測る。長軸方向の方位はN−77°−Eである。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴1586号 （Fig.195・196、PL.29・64・65・95・134・140）

RL−67を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は小型の長楕円形を呈し、規模は3.91×3.48m、遺構下場面積は10.2㎡、確認面からの深さは0.47mを測る。主軸方位はN−61°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されているが、小型ではっきりしない。P1は位置関係から出入口施設ないし貯蔵穴の可能性があるが、床面からの深さはわずか0.05mで、明確でない。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・5〜8は甕形土器で7は小型品、2は底部に焼成後穿孔を施す転用甑形土器、3・4・9〜12は壺形土器、13は椀形土器である。このうち、3と4は同一個体であろう。甕形土器は胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残すものが主体で、壺形土器の文様帯区画には沈線と回転結節文によるものとがある。1は炉跡の北西側、2・4は北東壁側、3は南西辺壁際から検出され、いずれも床面上からの出土である。土器以外では14の磨石と15の軽石が出土している。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴1587号 （Fig.197、PL.29・134）

RL−13を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は小型の楕円形を呈し、規模は3.45×3.25m、遺構下場面積は8.5㎡、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位はN−21°−Eである。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は壺形土器、2は磨石である。2は全体に劣化し、表面の剥離が見られる。

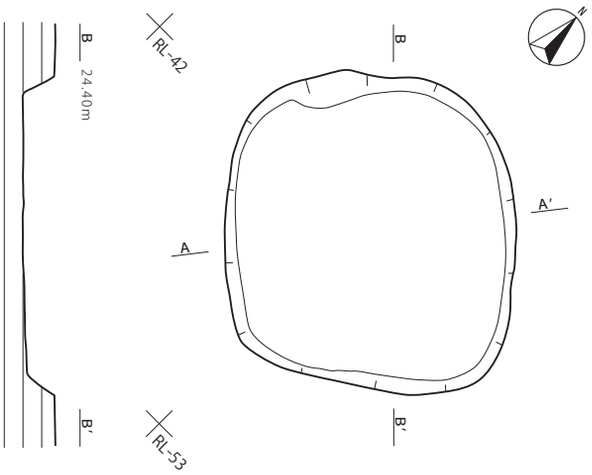
出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴1590号 （Fig.197、PL.29）

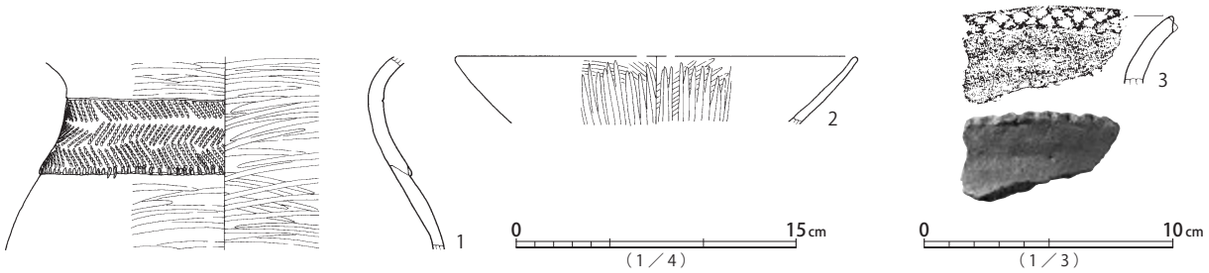
TK−62を中心に位置する。北西壁の一部で土坑1579号（上層）、東壁の一部で土坑1554号と重複する。新旧関係は、本遺構が1579号よりも古い。1554号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は小型の不整長楕円形を呈し、規模は3.28×2.77m、遺構下場面積は7.0㎡を測る。掘り込みは浅く、確認面からの深さは0.07mほどしかない。主軸方位はN−22°−Wである。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

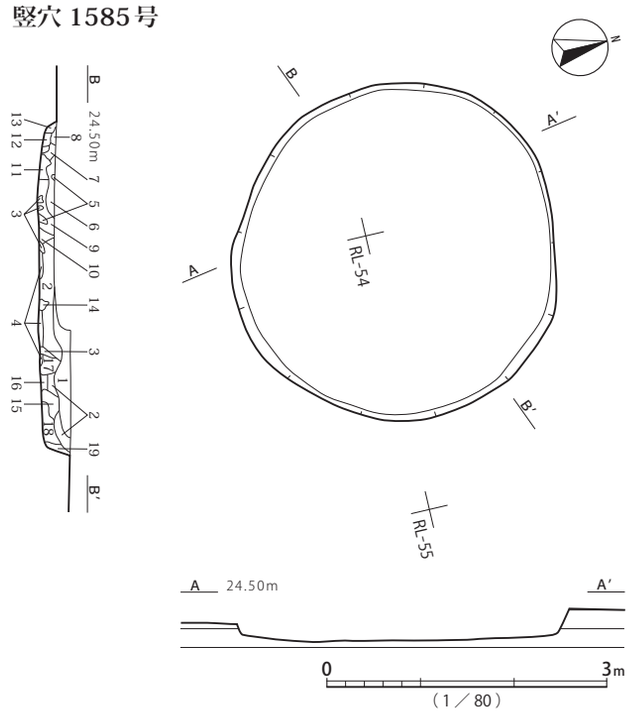
竪穴 1584号



1 黒褐色土 暗褐色土・ローム粒を少量含む。
2 黒褐色土 暗褐色土・ローム粒を少量含む。やや硬くしまる。
3 黒褐色土 暗褐色土・ローム粒をわずかに含む。
4 黒褐色土 暗褐色土をわずかに含み、ローム粒もごくわずかに混じる。
5 黒褐色土 暗褐色土を少量含み、ローム粒もごくわずかに混じる。
6 黒褐色土 暗褐色土を含む。
7 黒褐色土 暗褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
8 黒褐色土 ローム粒をごくわずかに含む。
9 暗褐色土 黒褐色土を含む。
10 暗褐色土 ローム粒を含み、黒褐色土・褐色土もわずかに混じる。
11 黒褐色土 ローム粒・暗褐色土を含む。
12 褐色土
13 暗褐色土 黒褐色土を多量に含み、ローム粒もわずかに混じる。しまりあり。
14 黒褐色土 暗褐色土を多量に含み、ローム粒もわずかに混じる。ややしまりあり。
15 暗褐色土 焼土粒を含み、黒褐色土もわずかに混じる。
16 暗褐色土 黒褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
17 黒褐色土 暗褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。
18 黒褐色土 暗褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
19 黒褐色土 暗褐色土を少量含む。
20 暗褐色土 黒褐色土を多量に含み、ローム粒もわずかに混じる。ややしまりあり。
21 黒褐色土 暗褐色土・ローム粒を少量含む。
22 暗褐色土 黒褐色土を少量含む。
23 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を多量に含む。



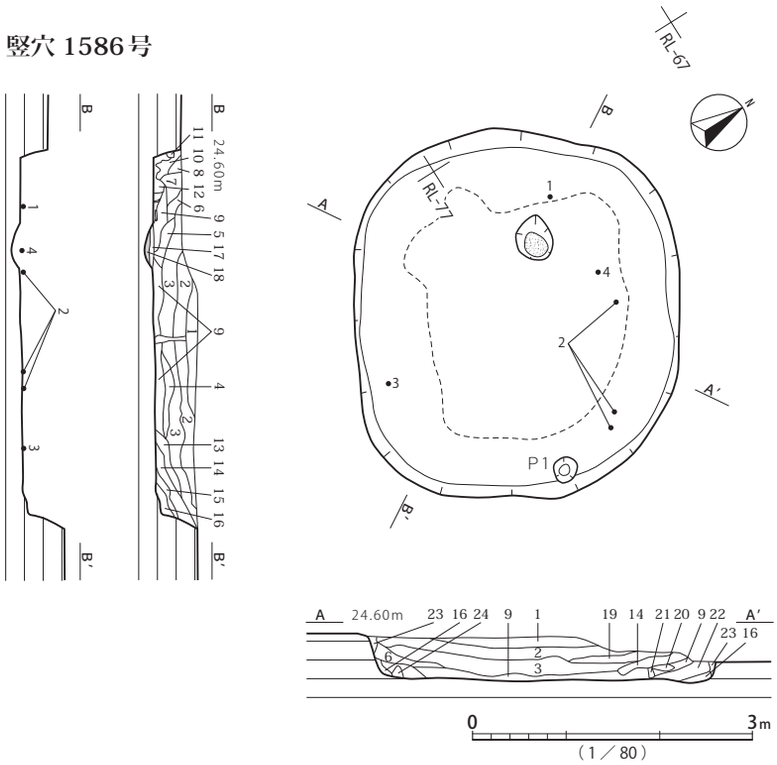
竪穴 1585号



1 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒をわずかに含む。
2 暗褐色土 黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
3 褐色土
4 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を少量含む。
5 暗褐色土 ローム粒を含み、焼土粒が少量、黒褐色土がわずかに混じる。
6 暗褐色土 黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
7 暗褐色土 6層に炭化粒がわずかに混じる。
8 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を少量含む。
9 黒褐色土 暗褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
10 暗褐色土 ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
11 暗褐色土 ローム粒を含み、黒褐色土が少量、焼土粒がわずかに混じる。
12 暗褐色土 黒褐色土を少量含む。
13 暗褐色土 黒褐色土を少量含む。
14 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を含む。しまりなし。
15 暗褐色土 黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
16 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。
17 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を少量含む。
18 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を少量含む。
19 暗褐色土 黒褐色土を少量含む。

Fig.194 竪穴1584号 遺構遺物、竪穴1585号 遺構

竪穴 1586号



1	暗褐色土	黒褐色土を少量含む。
2	暗褐色土	黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
3	暗褐色土	ローム粒を含む。
4	暗褐色土	ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
5	暗褐色土	ローム粒を少量含み、黒褐色土もわずかに混じる。
6	暗褐色土	黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
7	暗褐色土	ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
8	暗褐色土	黒褐色土・ローム粒を少量含む。
9	暗褐色土	黒褐色土を多量に含み、ローム粒も少量混じる。
10	暗褐色土	黒褐色土を多量に含み、ローム粒もごくわずかに混じる。
11	暗褐色土	黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
12	暗褐色土	ローム粒を多量に含み、黒褐色土・褐色土も少量混じる。
13	暗褐色土	ローム粒を含み、黒褐色土が少量、小ロームブロックがわずかに混じる。
14	暗褐色土	ローム粒を含み、ローム小ブロックもわずかに混じる。
15	暗褐色土	黒褐色土を多量に含む。
16	暗褐色土	ローム粒を含み、黒褐色土・褐色土も少量混じる。
17	暗褐色土	黒褐色土を少量含み、焼土粒もわずかに混じる。
18	明赤褐色土	焼土粒を多量に含み、褐色土・暗褐色土も少量混じる。
19	暗褐色土	黒褐色土・ローム粒をわずかに含む。
20	黒褐色土	暗褐色土を含む。
21	暗褐色土	ローム粒を少量含む。しまりなし。
22	暗褐色土	ローム粒を少量含み、黒褐色土もわずかに混じる。
23	暗褐色土	
24	褐色土	ローム粒を多量に含み、暗褐色土も混じる。

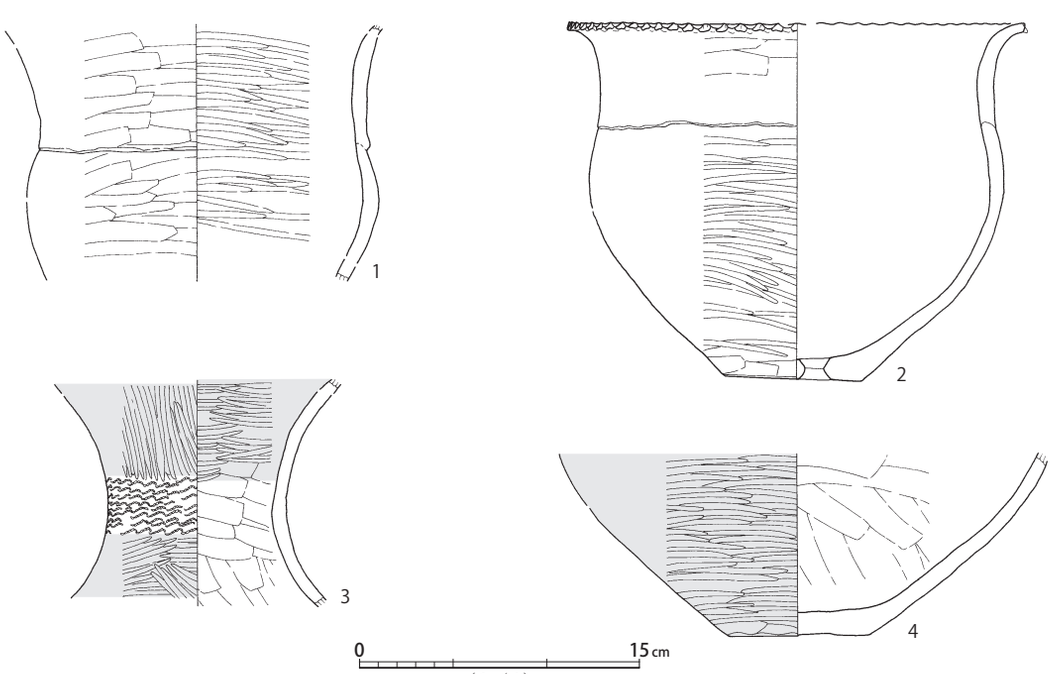


Fig.195　竪穴1586号(1) 遺構遺物

竪穴 1586号

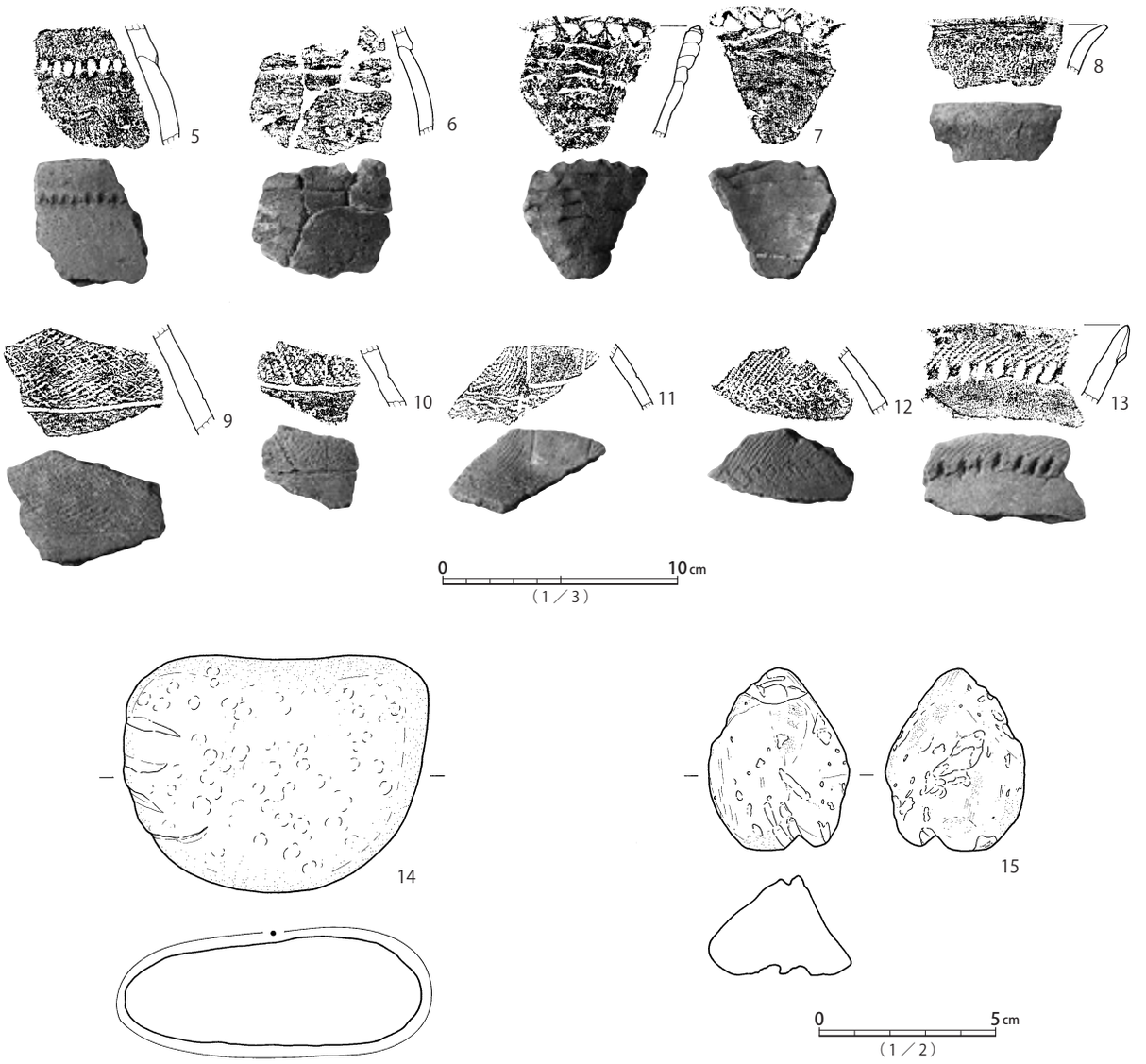


Fig.196　竪穴1586号(2) 遺物

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

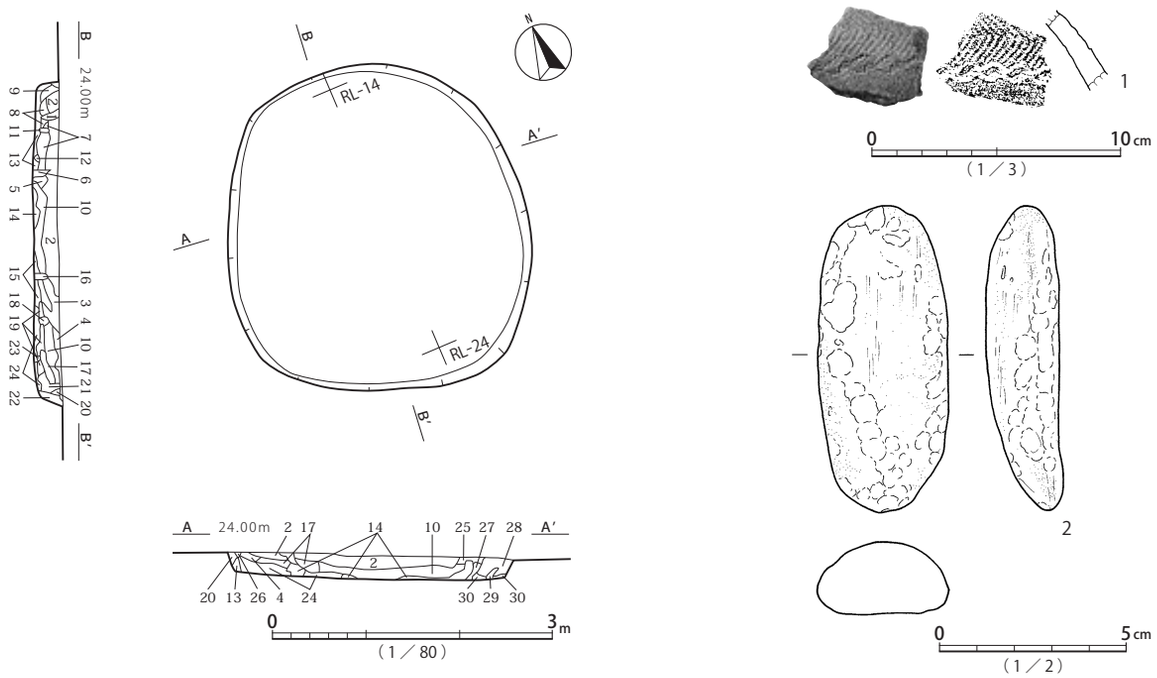
竪穴1592号　（Fig.198・199、PL.29・65・111・112）

RK−23を中心に位置する。北側で竪穴1597号（上層）、東側で溝2204号（上層）と重複し、西側は調査区外へ延びる。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は方形を呈すと考えられるが、遺構の半分ほどの検出で、重複により壊されることから、詳細は不明である。規模は副軸長4.32m、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位はN−52°−Wである。P1・2は主柱穴である。P3は位置関係から出入口施設の可能性があるが、明確でない。炉跡は検出されていないが、調査区外となる北西側に位置するものと考えられる。

実測可能遺物は、1〜9・11〜13は甕形土器、14・16・17は直口縁壺形土器、15・18・19は小型壺

竪穴 1587号



1 黒褐色土 しまりなし。
2 黒褐色土 暗褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
3 黒褐色土 暗褐色土を少量含む。
4 黒褐色土 暗褐色土を少量含む。
5 黒褐色土 暗褐色土を多量に含む。
6 暗褐色土 褐色土を多量に含む。
7 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
8 黒褐色土
9 暗褐色土 黒褐色土を多量に含む。
10 黒褐色土 ローム粒を少量含み、暗褐色土もわずかに混じる。
11 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、褐色土も混じる。
12 暗褐色土 褐色土・ローム粒を多量に含み、黒褐色土もわずかに混じる。
13 暗褐色土 褐色土・黒褐色土を含む。
14 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、黒褐色土・褐色土も少量混じる。
15 暗褐色土 黒褐色土を少量含む。
16 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、黒褐色土も少量混じる。しまりなし。
17 黒褐色土 暗褐色土をわずかに含む。
18 暗褐色土 黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
19 黒褐色土 暗褐色土を含む。ややしまりあり。
20 暗褐色土
21 黒褐色土 暗褐色土・ローム粒をわずかに含む。
22 暗褐色土 ローム粒を含み、褐色土・黒褐色土もわずかに混じる。
23 黒褐色土 暗褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。しまりなし。
24 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を少量含む。
25 黒褐色土 暗褐色土を含み、微細ローム粒もわずかに混じる。
26 黒褐色土
27 黒褐色土 暗褐色土・微細ローム粒を含む。
28 黒褐色土 暗褐色土・微細ローム粒を少量含む。
29 褐色土 黒褐色土をわずかに含む。
30 暗褐色土 ローム粒を含み、褐色土もわずかに混じる。

竪穴 1590号

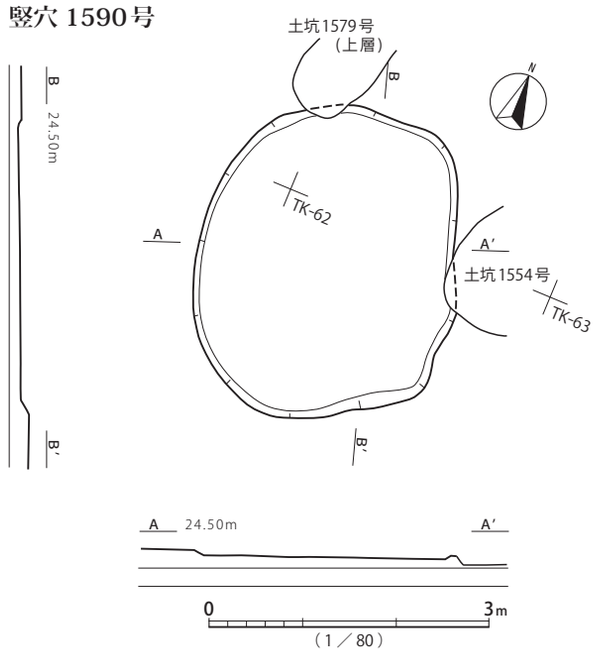


Fig.197 竪穴1587号 遺構遺物、竪穴1590号 遺構

竪穴 1592号

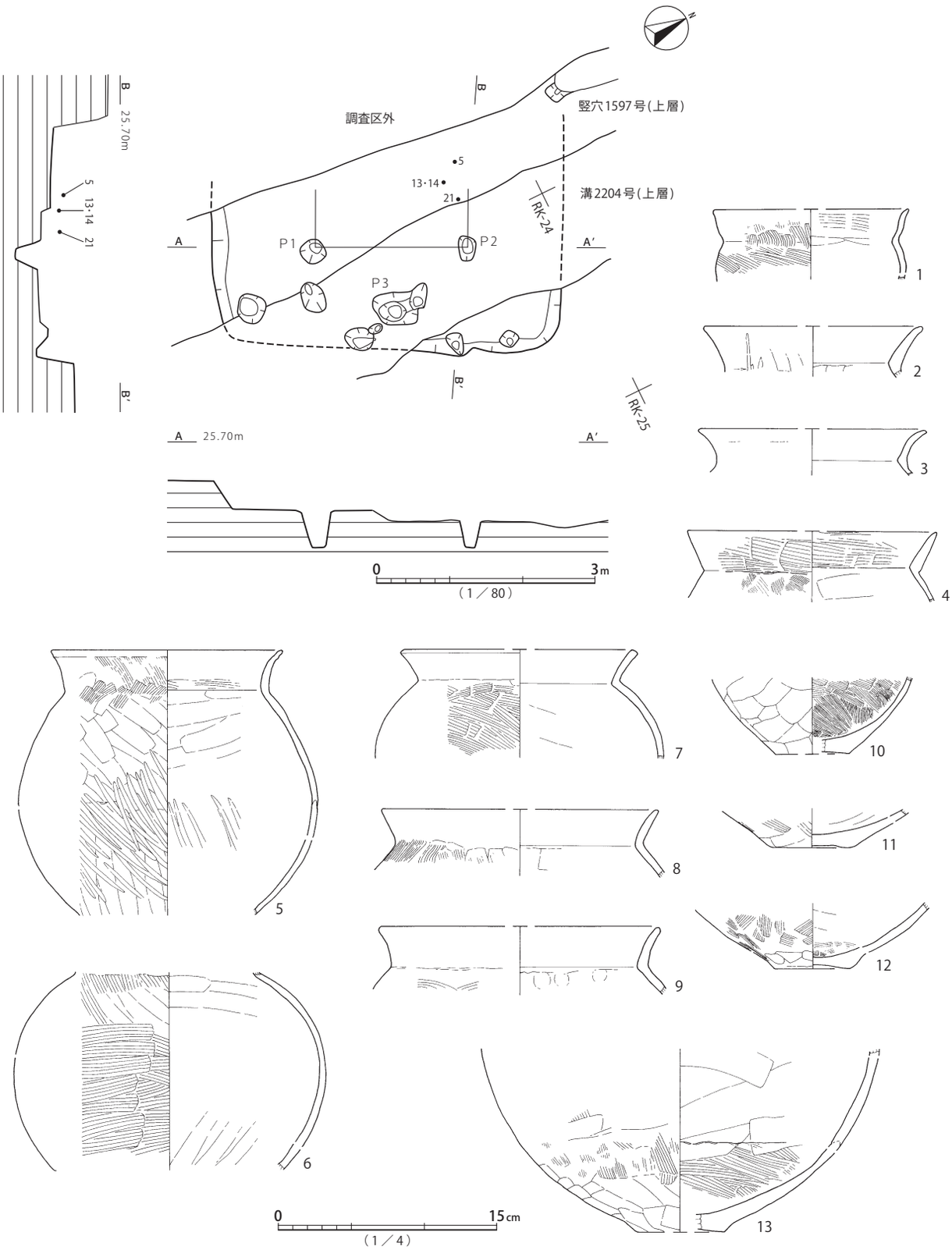


Fig.198　竪穴1592号(1) 遺構遺物

竪穴 1592 号

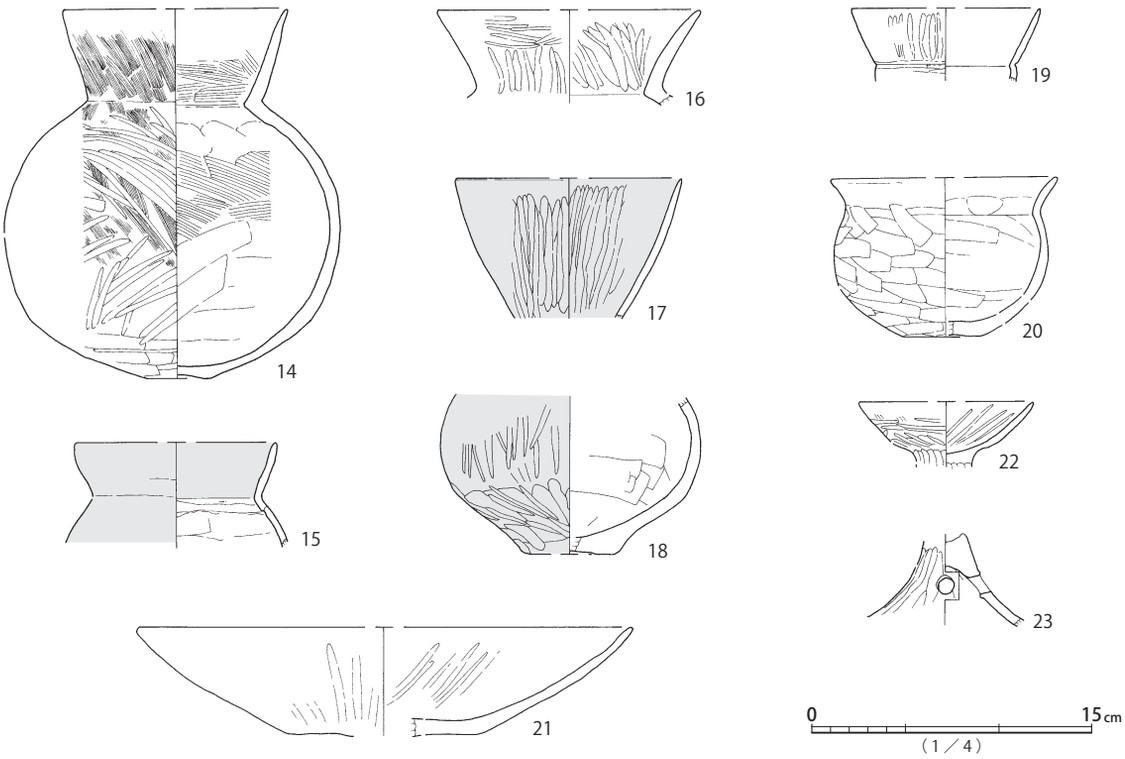


Fig.199　竪穴1592号(2) 遺物

形土器、20は鉢形土器、21は高杯形土器、22・23は器台形土器である。10は壺形土器であろうか。1は有段口縁気味となるが段部下端の屈折は弱い。頸部内面はヘラケズリが施される。7の頸部は明瞭に屈折し、口縁端部は面取りされ、やや肥厚する。

古墳時代前期中葉の所産と考えられる。

竪穴1604号　（Fig.200、PL.29・30・66・112）

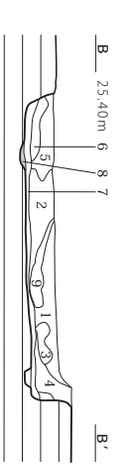
RK−68を中心に位置する。北西側で竪穴1619号と重複するが、床面までは達していない。南東辺壁の一部は撹乱により壊される。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、本遺構が1619号よりも古いと思われる。

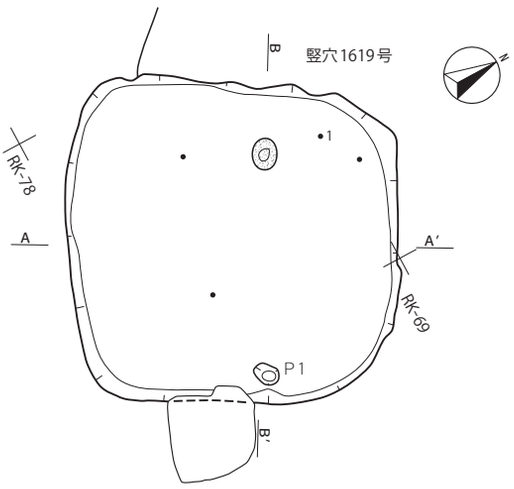
平面形態は小型の隅丸方形を呈し、規模は3.36×3.53m、遺構下場面積は9.9㎡、確認面からの深さは0.43mを測る。主軸方位はN−63°−Wである。炉跡は貧弱で、中軸線上からやや北側にずれ、遺構北西寄りから検出されている。P1は出入口施設の可能性があるが､明確でない。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

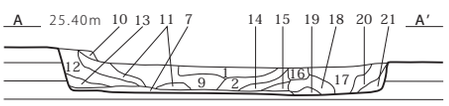
実測可能遺物は、1・5・6は甕形土器、2は小型平底の壺形土器、3・12は器台形土器、4は炉器台形土器、8はS字状口縁台付甕形土器、10・11は壺形土器である。7は小型の壺形土器、9は広口壺形土器であろうか。8はにぶい黄褐色を呈し、搬入品の可能性がある。12は竪穴1619号1と同一個体である。1は北隅から検出され、床面上からの出土である。

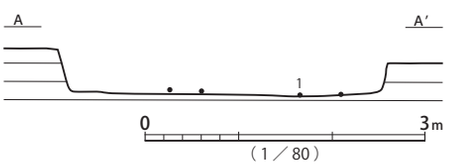
帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期後半の所産と思われる。

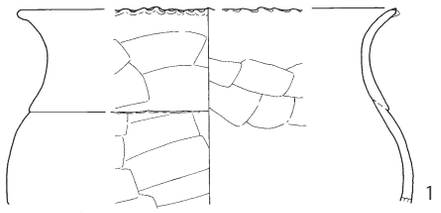
竪穴 1604号

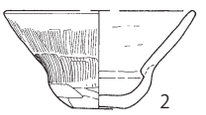


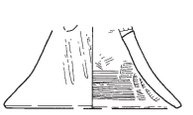


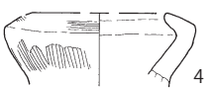


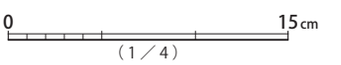


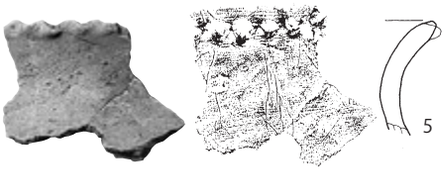


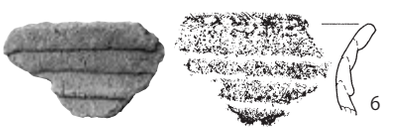


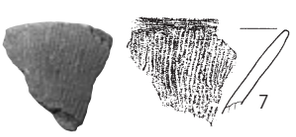


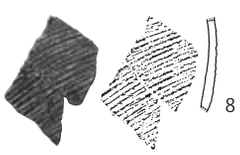




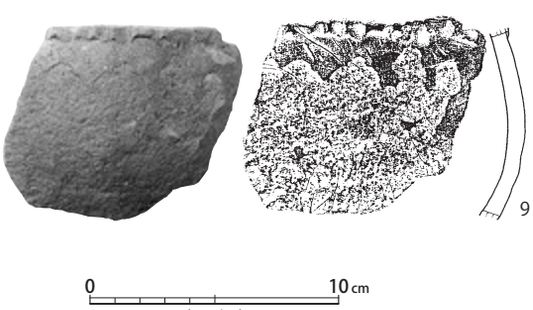








1　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
2　暗褐色土　ローム粒を含み、褐色土が少量、黒褐色土・小ロームブロックがわずかに混じる。
3　暗褐色土　ローム粒を少量含み、小ロームブロック・黒褐色土もわずかに混じる。
4　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒が少量、部分的に小ロームブロックが混じる。
5　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土が少量、ロームブロックがわずかに混じる。
6　暗褐色土　黒褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
7　暗褐色土　黒褐色土を多量に含み、ローム粒・褐色土も混じり、小ロームブロックがわずかに混じる。
8　焼土　炉跡。
9　暗褐色土　ローム粒を多量に含み、黒褐色土・褐色土・小ロームブロックもわずかに混じる。
10　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土・褐色土もわずかに混じる。
11　暗褐色土　ローム粒を多量に含み、褐色土も少量混じる。
12　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
13　黒褐色土　暗褐色土を含む。
14　暗褐色土　黒褐色土を含み、小ロームブロック・ローム粒もわずかに混じる。
15　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含み、ロームブロックもわずかに混じる。
16　暗褐色土　褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
17　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土が少量、小ロームブロックがわずかに混じる。
18　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
19　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
20　黒褐色土　暗褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
21　黒褐色土　暗褐色土を多量に含み、ローム粒も少量混じる。



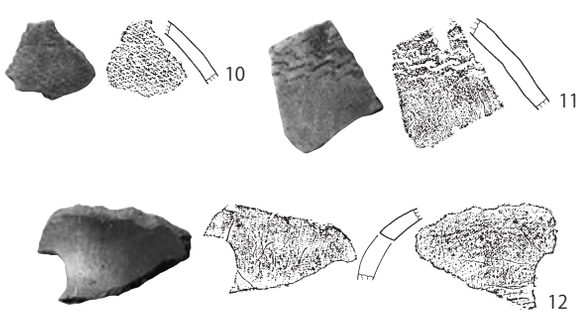


Fig.200　竪穴1604号 遺構遺物

竪穴1605号 （Fig.201～203、PL.30・66・67・95・112）

RK−86を中心に位置する。他遺構との重複はないが、昭和50年（1975）に実施した上総国分僧寺寺域確認調査のトレンチにより、一部壊されている。

平面形態は方形を呈し、規模は4.87×4.89m、遺構下場面積は20.4㎡、確認面からの深さは0.20mを測る。主軸方位はN−47°−Wである。炉跡は遺構中央のやや北西寄りから検出されている。P1～4は主柱穴である。壁周溝が巡るが、部分的に途切れている。南北隅付近の壁際からは、焼土の堆積がわずかに確認されている。貯蔵穴は検出されていない。覆土は堆積が乱れており、人為的に埋め戻された可能性がある。

実測可能遺物は、1～5・9・22～26は甕形土器、6は短頸壺形土器、7は台付甕形土器、8は炉器台形土器、10は器種不明の底部、11・13・27～32は壺形土器、12・14は直口縁壺形土器、15・16・19は高杯形土器、17・18・20・21は器台形土器である。甕形土器は口唇部への押捺がほぼ見られなくなり、面取りする個体が現れる。頸部はゆるく外反する個体が主体となるが、内面に弱い屈曲線をもつ個体も認められる。11の折返し状口縁の壺形土器は、胴肩部に櫛描の横線文とスリット文による区画が施される。遺物は遺構北半にまとまって分布し、北隅寄りに集中する。2・11・15・19・21は北隅のP2から炉跡周辺、7・8・16はP1周辺、5・12～14・17は遺構中央からP4周辺で検出され、いずれも床面上ないし覆土下層からの出土である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴1606号 （Fig.204、PL.30・67）

RK−57を中心に位置する。南東壁の一部で竪穴1619号と重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、本遺構が1619号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、規模は4.44×3.89m、遺構下場面積は13.5㎡、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位はN−46°−Wである。炉跡は遺構北西寄り、P1・2間から検出されている。P1～4は主柱穴である。P4は他に比べて著しく浅く、掘り足りていない可能性もあるが、明確ではない。P5は貯蔵穴であろう。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2は甕形土器のみである。1はP1・3の間から検出され、床面上からの出土である。2は口頸部に多段の粘土紐積み上げ痕を残し、口唇部に1方向からの押捺を加える。

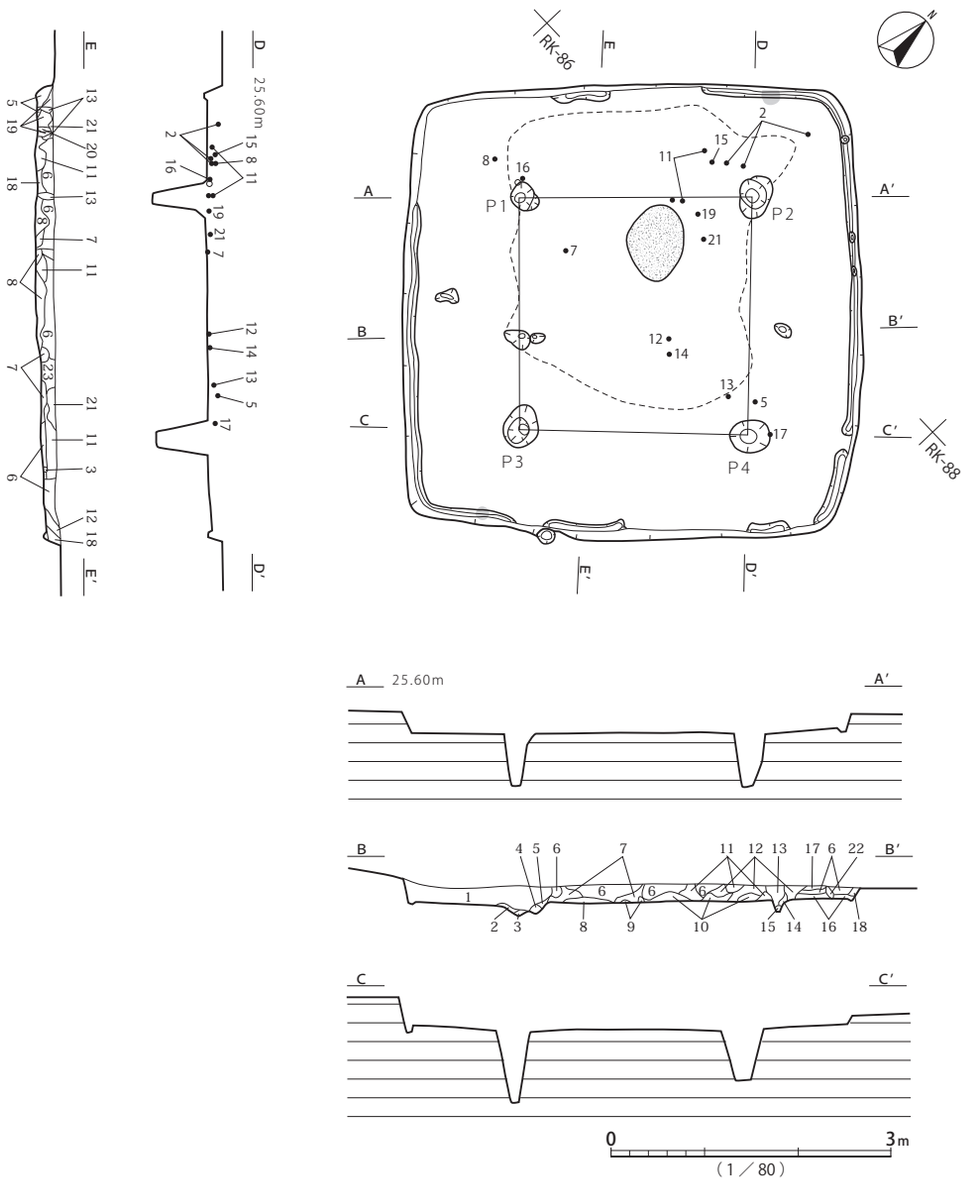
出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴1619号 （Fig.204、PL.112）

RK−58を中心に位置する。北西隅で竪穴1606号、南東側で竪穴1604号と重複する。新旧関係は、本遺構が1606号よりも新しい。1604号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、本遺構のほうが新しいと思われる。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈すと思われるが、南西壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.09mを測る。南西壁を基準とした場合、主軸方位はN−43°−Wである。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

竪穴 1605号



1　暗灰褐色土　寺域確認トレンチ跡。
2　暗褐色土　小ロームブロック・ローム粒を少量含む。
3　褐色土　暗褐色土を少量含む。
4　暗褐色土　ロームブロックを含む。
5　暗褐色土　ローム粒を少量含み、小ロームブロックもわずかに混じる。
6　暗褐色土　黒褐色土を多量に含み、ローム粒も少量混じる。
7　暗褐色土　ローム粒を含み、黒褐色土も少量混じる。
8　暗褐色土　ローム粒を少量含み、黒褐色土・小ロームブロックもわずかに混じる。
9　暗褐色土　褐色土を多量に含み、ローム粒・小ロームブロックもわずかに混じる。
10　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を少量含み、小ロームブロックもわずかに混じる。
11　暗褐色土　黒褐色土・ローム粒を含む。
12　暗褐色土　黒褐色土を含み、ローム粒もわずかに混じる。
13　暗褐色土　黒褐色土を多量に含む。ややしまりなし。
14　暗褐色土　黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
15　暗褐色土　ローム粒を含み、褐色土も少量混じる。
16　暗褐色土　褐色土を多量に含む。
17　暗褐色土　褐色土を少量含む。
18　暗褐色土　ローム粒を含み、褐色土も少量混じる。
19　暗褐色土　黒褐色土を多量に含む。
20　暗褐色土　褐色土・ローム粒を少量含み、黒褐色土もわずかに混じる。しまりなし。
21　暗褐色土　暗灰褐色土を多量に含む。
22　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。
23　暗褐色土　黒褐色土を含み、褐色土も少量混じる。しまりなし。

Fig.201　竪穴1605号(1) 遺構

竪穴 1605 号

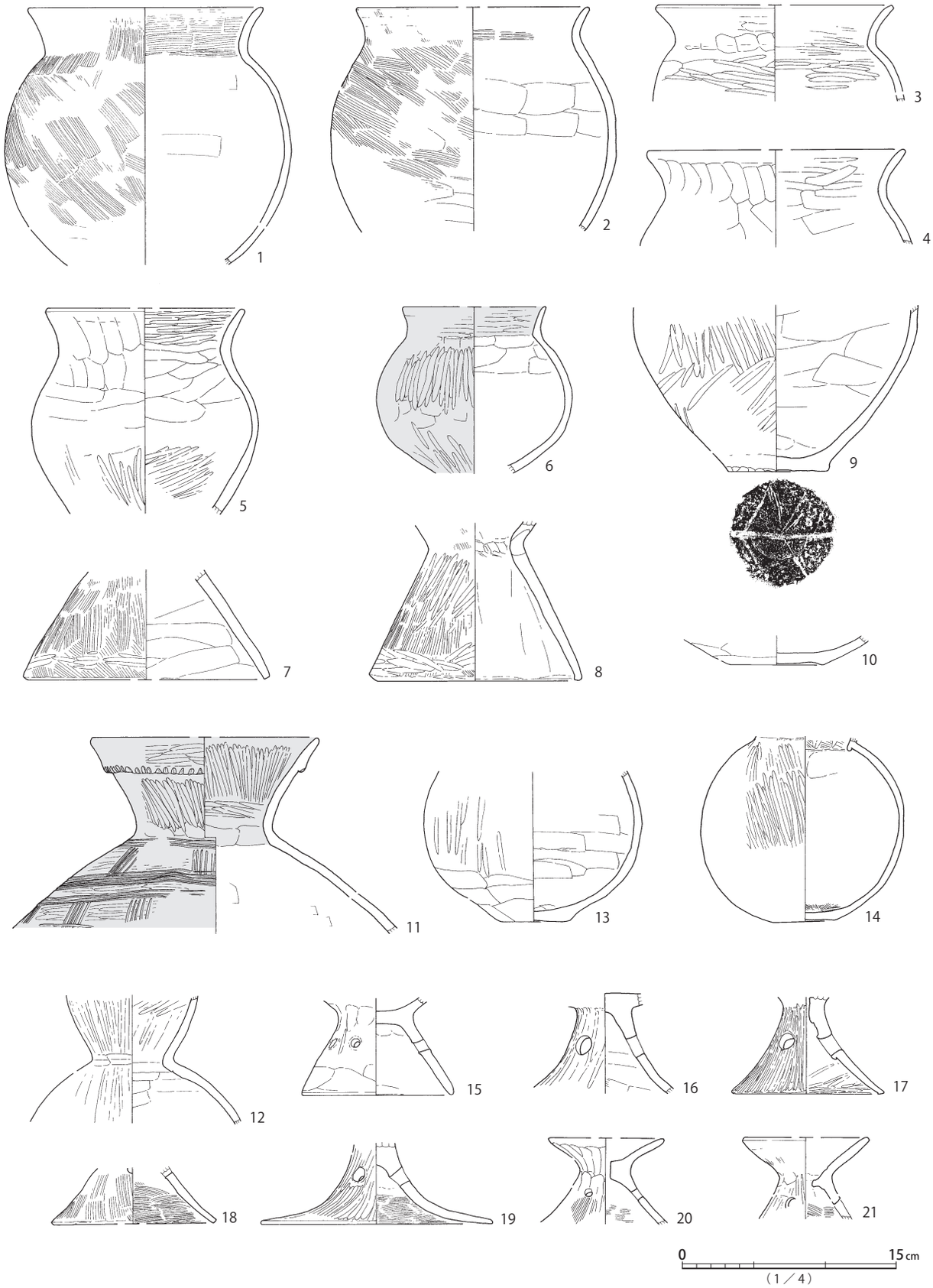


Fig.202　竪穴1605号(2) 遺物

竪穴 1605 号

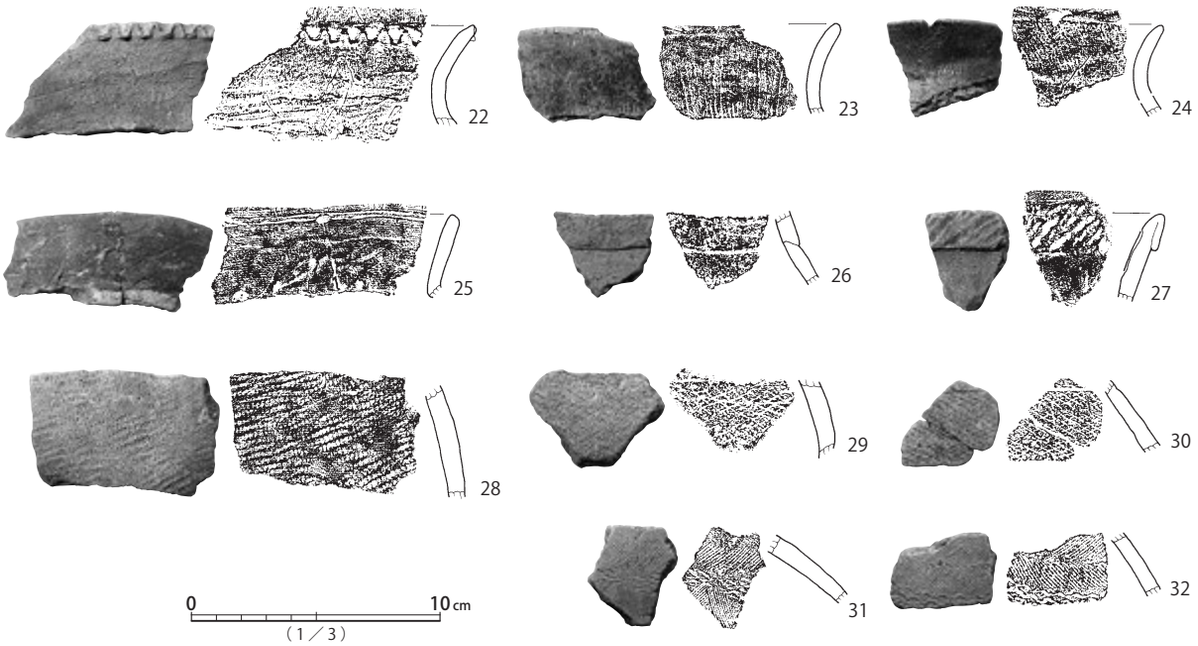


Fig.203　竪穴1605号(3) 遺物

実測可能遺物は１の器台形土器のみである。器受部には円形の透孔が配され、竪穴1604号12と同一個体である。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、古墳時代前期前葉の所産と思われる。

竪穴1607号　（Fig.205、PL.30）

RK−05を中心に位置する。北側で溝2229号（上層）、南側で土坑1582号（上層）と重複し、撹乱により一部壊される。北西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、南西壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.10mを測る。南西壁を基準とした場合、主軸方位はN−43°−Wとなる。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1616号　（Fig.206）

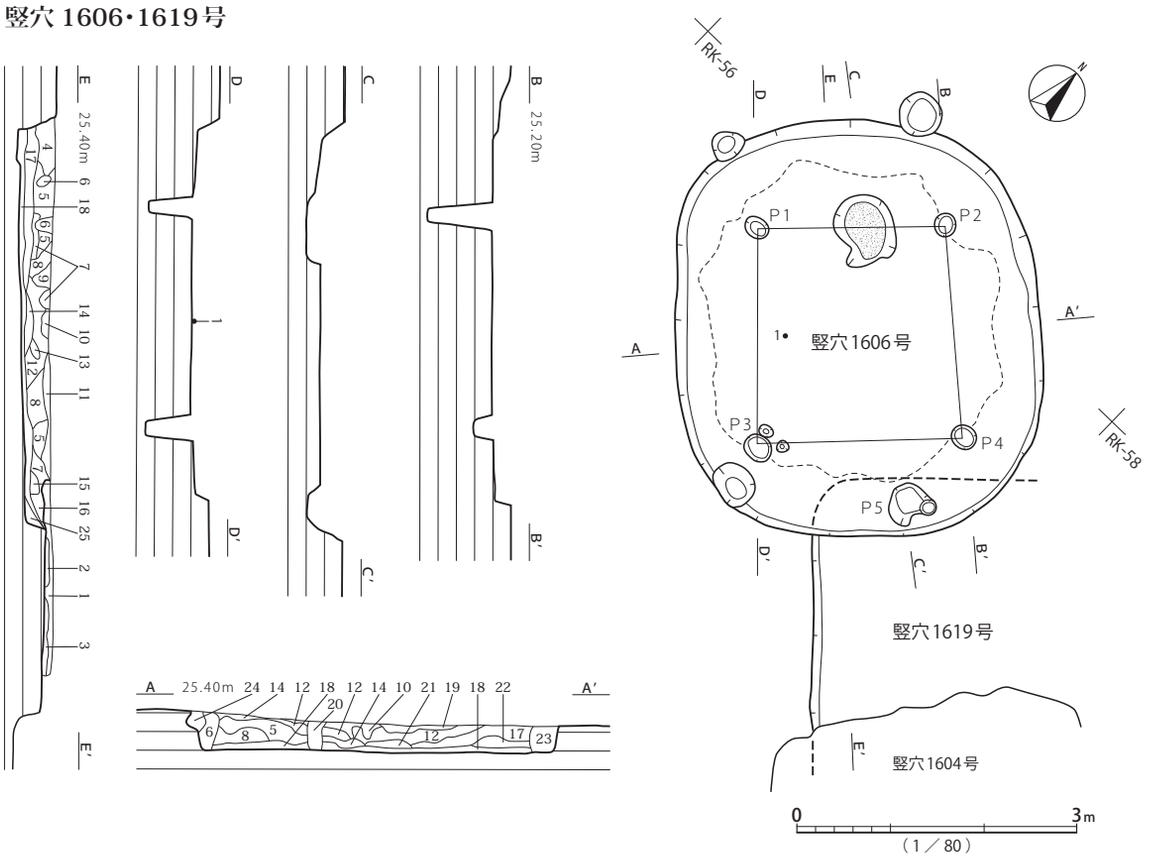
RL−100を中心に位置する。中央で溝2232号（上層）、南側で掘立柱建物3164〜3167号（いずれも上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、推定規模は3.80×3.60m、推定遺構下場面積は11.4㎡、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN−26°−Wである。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は１・２の壺形土器のみである。いずれも帯縄文を施す。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴 1606・1619号



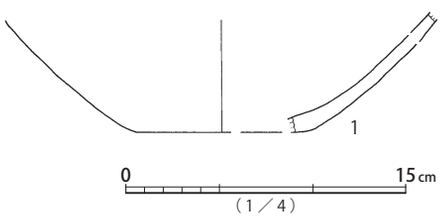
1619号

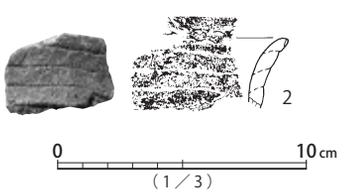
1 暗褐色土 黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
2 暗褐色土 黒褐色土・褐色土をわずかに含む。
3 暗褐色土 黒褐色土を少量含む。

1606号

4 暗褐色土 ローム粒を少量含み、黒褐色土・褐色土もわずかに混じる。
5 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、褐色土・小ロームブロックも少量混じる。
6 暗褐色土 ローム粒を含み、小ロームブロックもわずかに混じる。しまりなし。
7 暗褐色土 黒褐色土を多量に含み、ローム粒もわずかに混じる。
8 暗褐色土 ローム粒を少量含み、小ロームブロックもわずかに混じる。
9 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含み、黒褐色土も少量混じる。
10 暗褐色土 黒褐色土を少量含み、ローム粒もわずかに混じる。
11 暗褐色土 ローム粒を含む。
12 暗褐色土 ローム粒を含み、ロームブロックもわずかに混じる。
13 暗褐色土 褐色土・ローム粒を含む。
14 暗褐色土 黒褐色土・ローム粒を少量含む。
15 暗褐色土 ローム粒を含み、褐色土も少量混じる。
16 暗褐色土 黒褐色土を少量含む。
17 暗褐色土 ローム粒を含み、褐色土もわずかに混じる。
18 暗褐色土 ローム粒を少量含み、黒褐色土・小ロームブロックもわずかに混じる。
19 暗褐色土 ローム粒を含み、黒褐色土もわずかに混じる。
20 暗褐色土 黒褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。しまりなし。
21 暗褐色土 ローム粒を少量含み、黒褐色土もわずかに混じる。
22 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
23 暗褐色土 下部にローム粒・褐色土をわずかに含む。
24 暗褐色土 褐色土を多量に含む。
25 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。

竪穴 1606号





竪穴 1619号

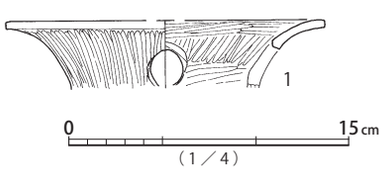


Fig.204 竪穴1606号 遺構遺物、竪穴1619号 遺構遺物

竪穴 1607号

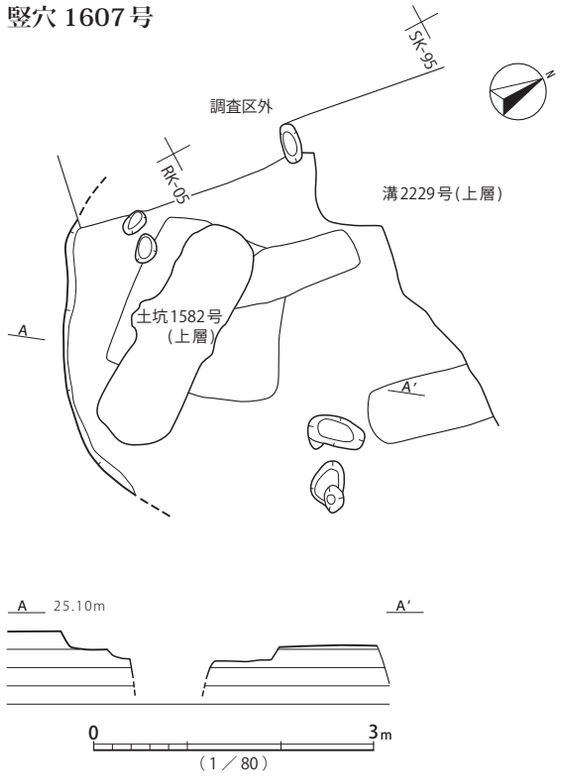


Fig.205　竪穴1607号 遺構

竪穴1636号　（Fig.207、PL.30・112）

QK−19を中心に位置し、上総国分僧寺政所院西脇殿である3176号建物基壇の下層にあたる。南壁の一部で溝2225号（上層）と重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は楕円形を呈し、規模は4.40×4.22m、遺構下場面積は14.8㎡、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN−22°−Wである。炉跡は遺構北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴である。P5は貯蔵穴であろう。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2〜4は壺形土器である。甕形土器は、口縁端部に交互押捺を施し、胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残す。壺形土器は帯縄文に結節文区画を施す。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴1637号　（Fig.208、PL.30・67・112）

RK−70を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は楕円形を呈し、規模は4.04×3.87m、遺構下場面積は12.1㎡、確認面からの深さは0.34mを測る。主軸方位はN−46°−Wである。炉跡は遺構北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴で、P4には柱の抜き取り痕が認められる。P6は出入口施設、P7は貯蔵穴と思われる。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は小型の壺形土器、2・3・10・11は椀形土器、4・6・7は甕形土器、8・9は壺形土器である。5は大型の壺形土器であろうか。4はタタキ整形で、口縁端部が面取りされる。混入

竪穴 1616号

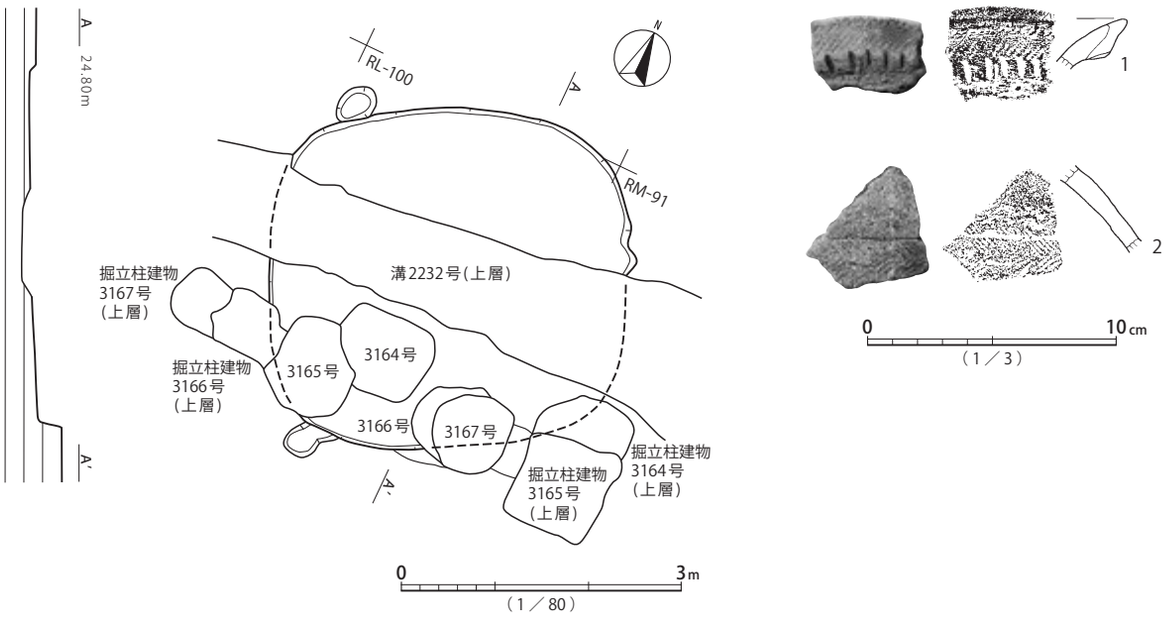


Fig.206　竪穴1616号 遺構遺物

であろう。

帰属時期は明確でないが、遺構平面形態などから弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴1704号　（Fig.209）

QM−08を中心に位置する。中央で掘立柱建物3161・3162号a（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は楕円形を呈し、推定規模は4.05×3.80m、推定遺構下場面積は11.3㎡、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN−10°−Wである。炉跡や主柱穴、壁周溝は検出されていない。P1は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。調査終了直前に撮影された航空測量図では、壁が段をもって開くように立ち上がるが、遺構調査時の平面図には描かれていないことから、本遺構調査終了後に崩落した範囲である可能性が高い。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

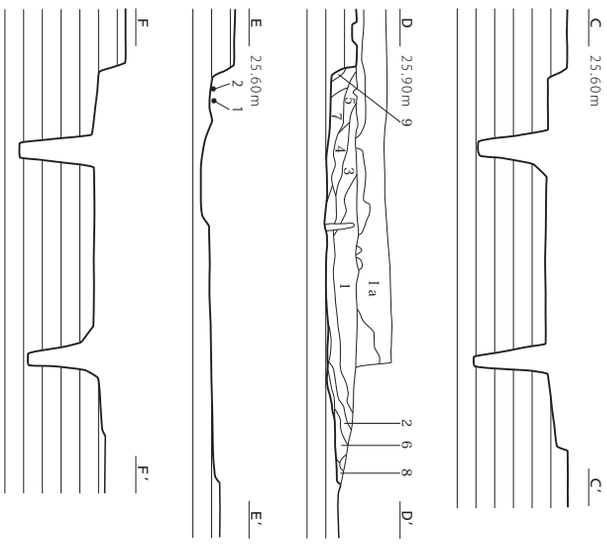
竪穴1705号　（Fig.209、PL.20）

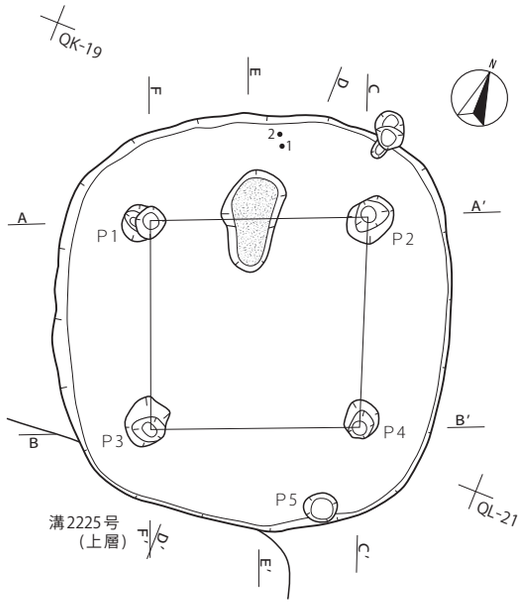
QM−70を中心に位置する。中央で溝2222号（上層）と掘立柱建物3172号（上層）、西壁の一部で竪穴0119号と重複する。新旧関係は、本遺構が2222号と3172号よりも古い。0119号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は、不整楕円形を呈すと思われるが、東壁と南西壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は副軸長3.66m、確認面からの深さは0.16mを測る。主軸方位はN−9°−W程度であろうか。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

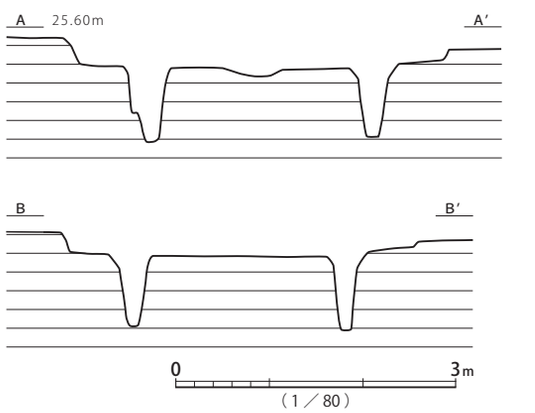
出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴 1636号





1　黒褐色土　　黒色土・ローム粒を含む。
2　黒褐色土　　ロームブロックを含む。
3　灰黒褐色土
4　黒褐色土　　ローム粒をわずかに含む。
5　黒色土　　ローム微粒を含む。
6　黒色土　　ローム粒を含む。
7　黒褐色土
8　暗褐色土　　ローム粒を多く含む。
9　褐色土　　ロームを主体とする。



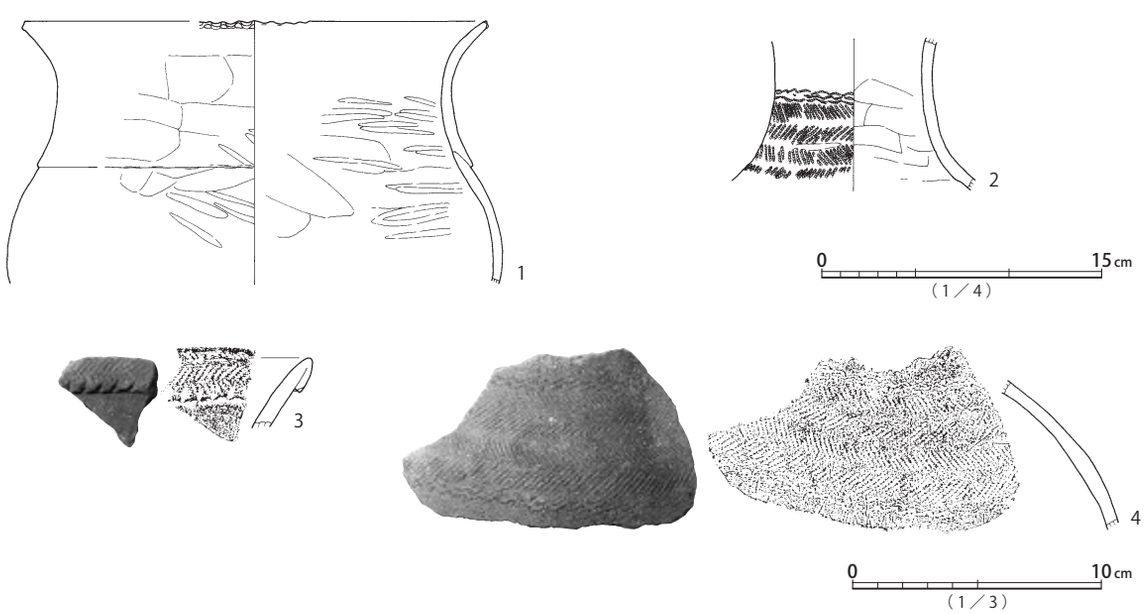


Fig.207　竪穴1636号 遺構遺物

竪穴 1637 号

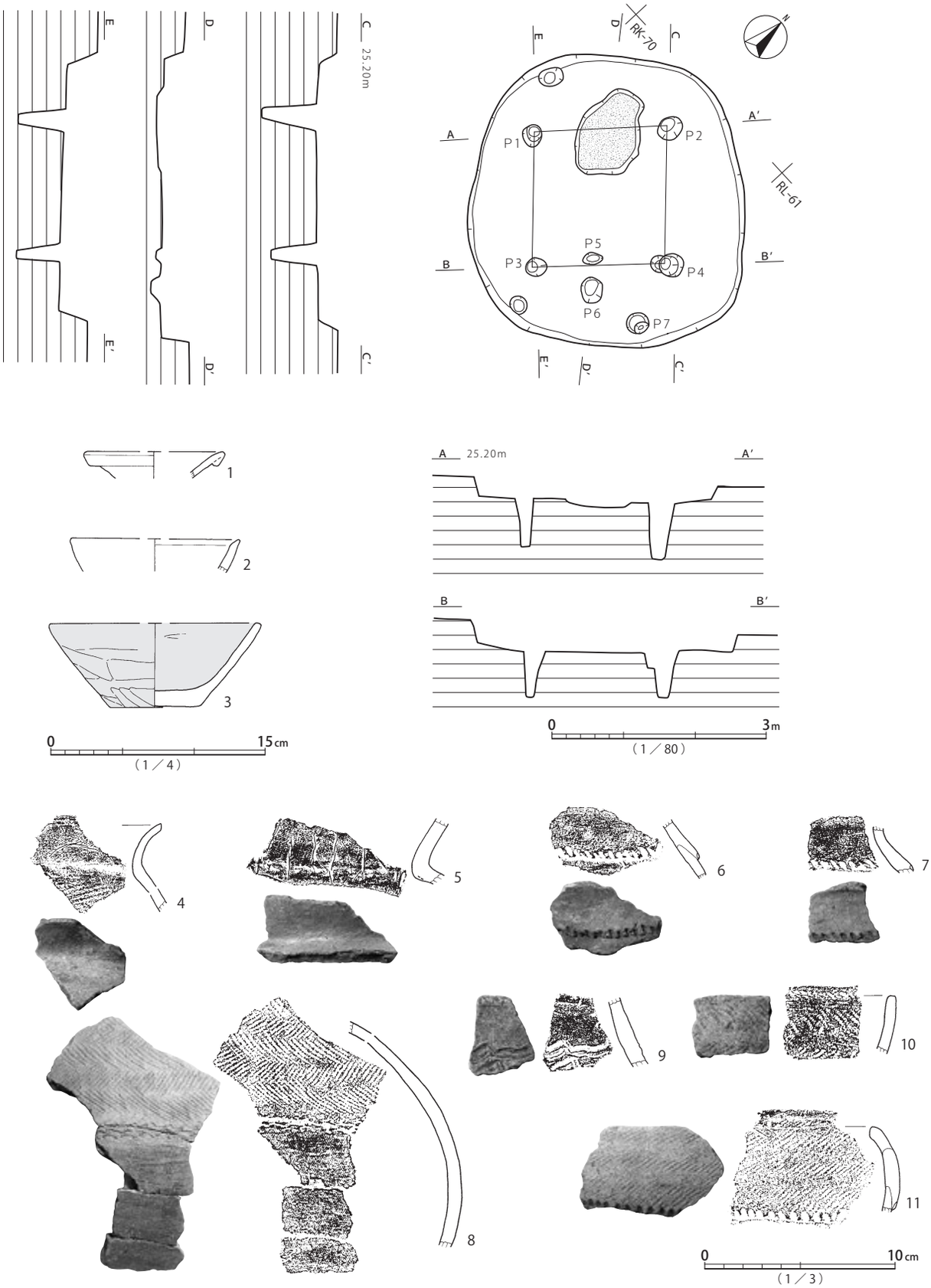
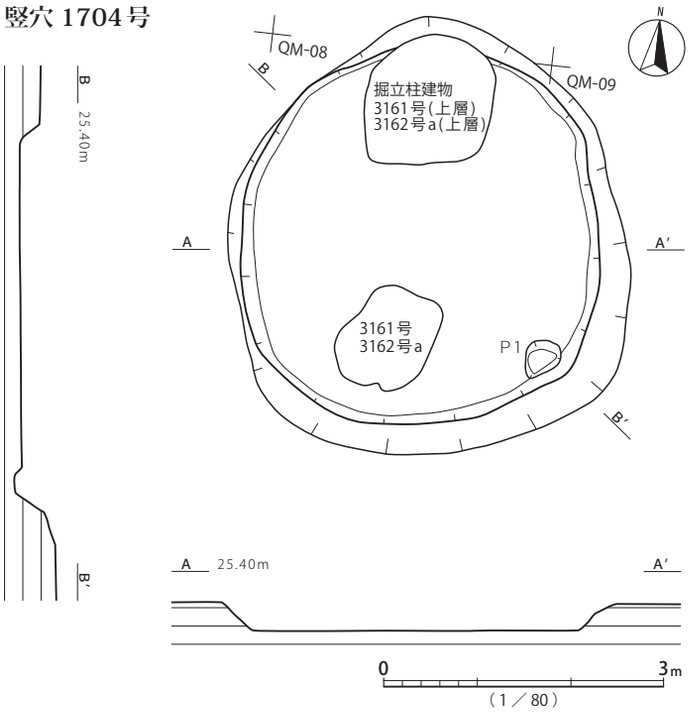


Fig.208　竪穴1637号 遺構遺物

竪穴 1704 号



竪穴 1705 号

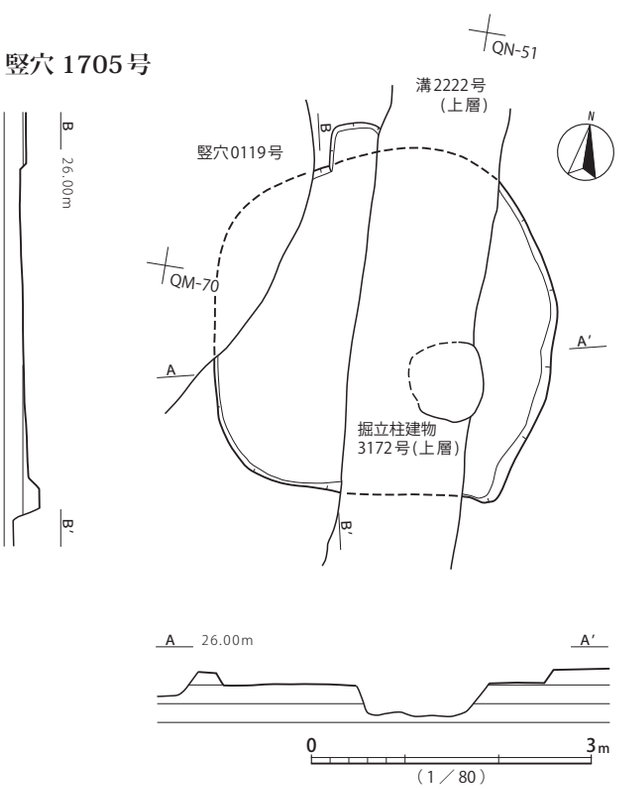


Fig.209　竪穴1704号 遺構、竪穴1705号 遺構

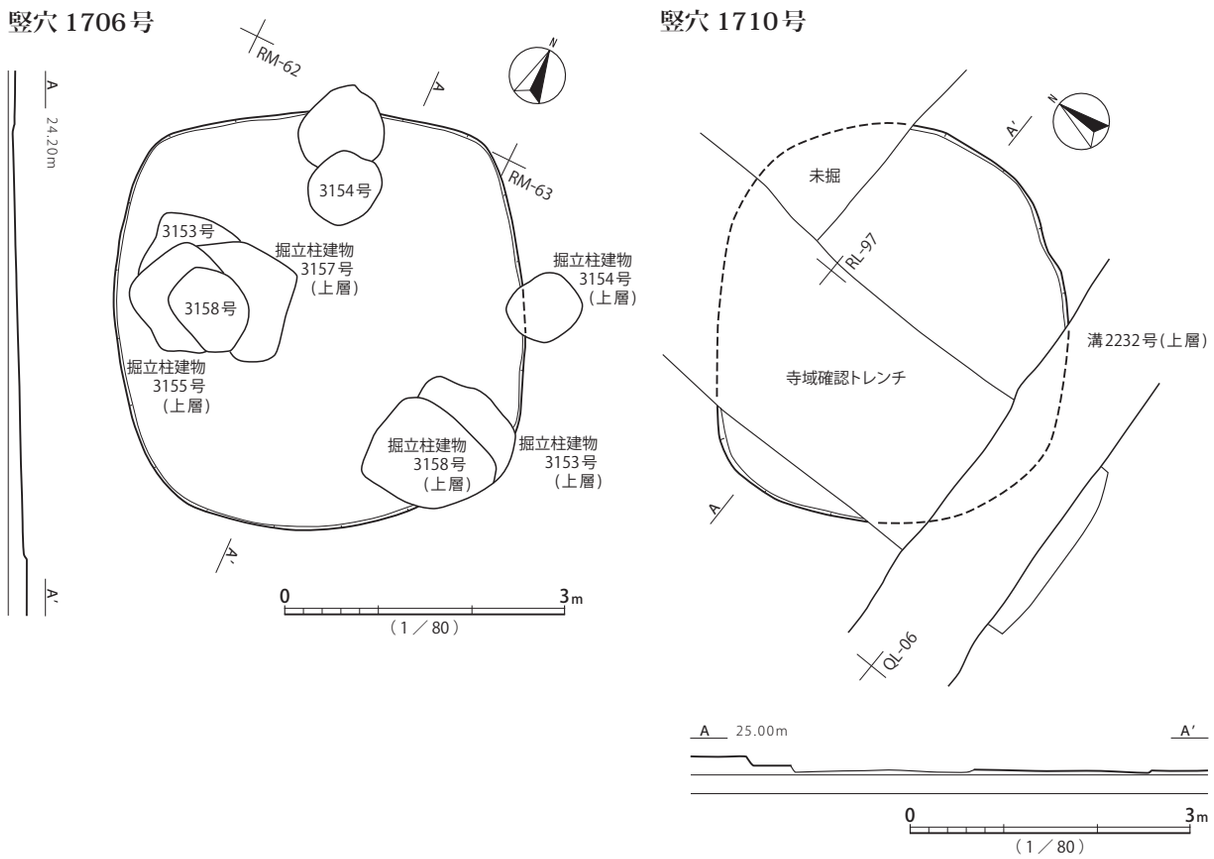


Fig.210　竪穴1706号 遺構、竪穴1710号 遺構

竪穴1706号　（Fig.210）

RM−62を中心に位置する。掘立柱建物3153〜3155・3157・3158号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、掘り込みが浅く、明確でない。規模は4.43×4.37m、推定遺構下場面積は16.2㎡、確認面からの深さは0.04mを測る。主軸方位はN−27°−Wである。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1710号　（Fig.210）

RL−96を中心に位置する。南隅で溝2232号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2232号よりも古い。東側は昭和50年（1975）に実施した上総国分僧寺寺域確認調査のトレンチにより壊されているが、調査概要中に本遺構についての記載はなく、トレンチは床面を掘り抜いていることから、遺構として認識されていなかった可能性が高い。

平面形態は不整長楕円形を呈すと思われるが、掘り込みが浅く、詳細は不明である。推定規模は4.25×3.77m、推定遺構下場面積は12.7㎡、確認面からの深さは0.04mを測る。主軸方位はN−51°−E程度であろうか。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴1711号 （Fig.211、PL.112）

RM−81を中心に位置する。南西側で溝2232号（上層）、南東側で井戸1640号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。西側の一部は、昭和50年（1975）に実施した上総国分僧寺寺域確認調査で、すでに調査が終了していた。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、重複する井戸1640号調査のために残された未掘地区と重なり、遺構西側が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は副軸長4.64m、確認面からの深さは0.49mを測る。主軸方位はN−50°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されているが、調査図面には記載がなかったため、航空写真から判断し、およその位置を記した。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・3は壺形土器である。折返し状口縁の2は椀形土器、端部に面をもつ4は高杯形土器であろうか。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴1867号 （Fig.211）

RO−39を中心に位置する。遺構確認範囲では他遺構との重複はないが、東壁の一部は撹乱により壊され、遺構の大部分は調査区外に延びる。

平面形態は隅丸方形を呈すものと思われるが、南東隅の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.12mを測る。東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−7°−Eとなる。P1は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。壁周溝は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

西辺部

竪穴0180号 （Fig.212、PL.31・67）

TI−41を中心に位置する。遺構確認範囲では他遺構との重複はないが、西側は調査区外に延びる。

平面形態は胴張隅丸方形ないし楕円形を呈すものと思われるが、南東側が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.35mを測る。南東辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−34°−Wとなる。P1は主柱穴の可能性があるが、掘り込みが浅く、明確でない。P2は出入口施設、P3は貯蔵穴と思われる。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は鉢形土器、2は甕形土器、3は壺形土器である。1は南東隅のP1付近から検出され、床面付近からの出土である。

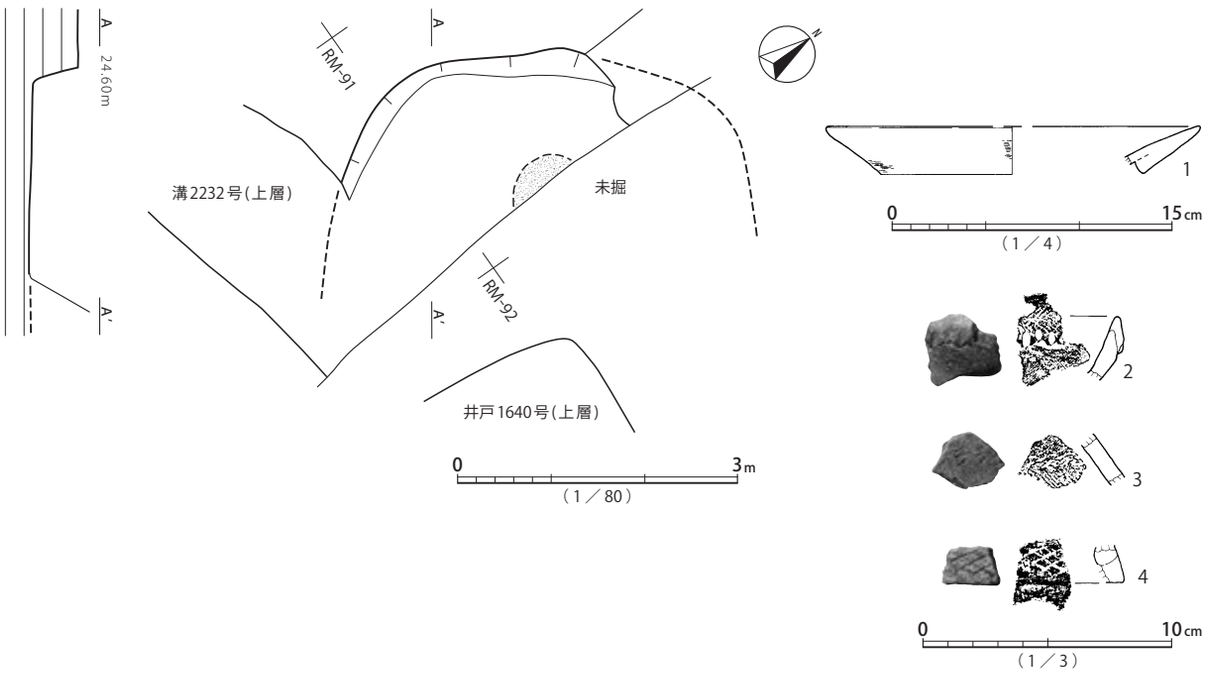
出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期中葉の所産と思われる。

竪穴0181号 （Fig.212、PL.31・67）

TI−74を中心に位置する。中央で竪穴182号（上層）、溝2024号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈すと思われるが、西隅が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.10mを測る。南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−37°−Wとなる。炉跡や主柱穴、

竪穴 1711 号



竪穴 1867 号

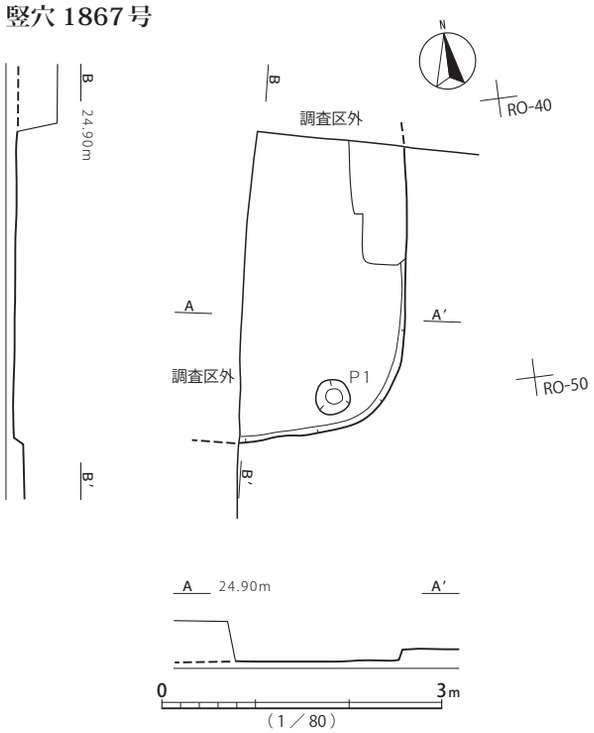
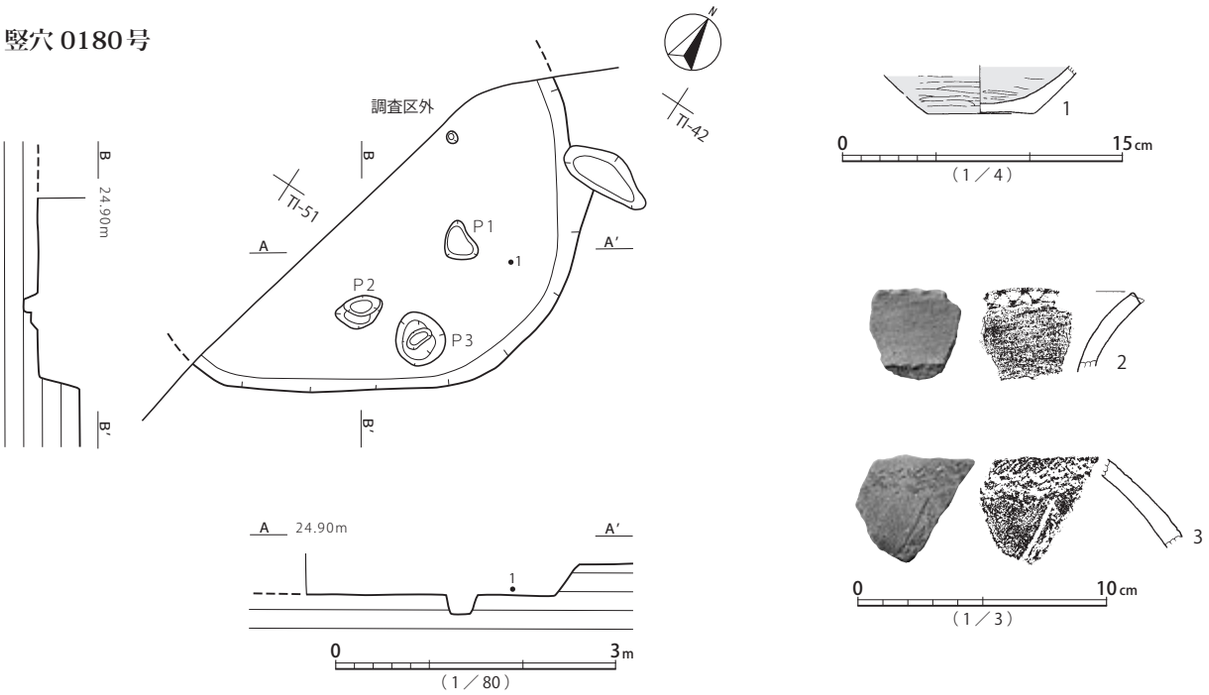


Fig.211　竪穴1711号 遺構遺物、竪穴1867号 遺構

竪穴 0180 号



竪穴 0181 号

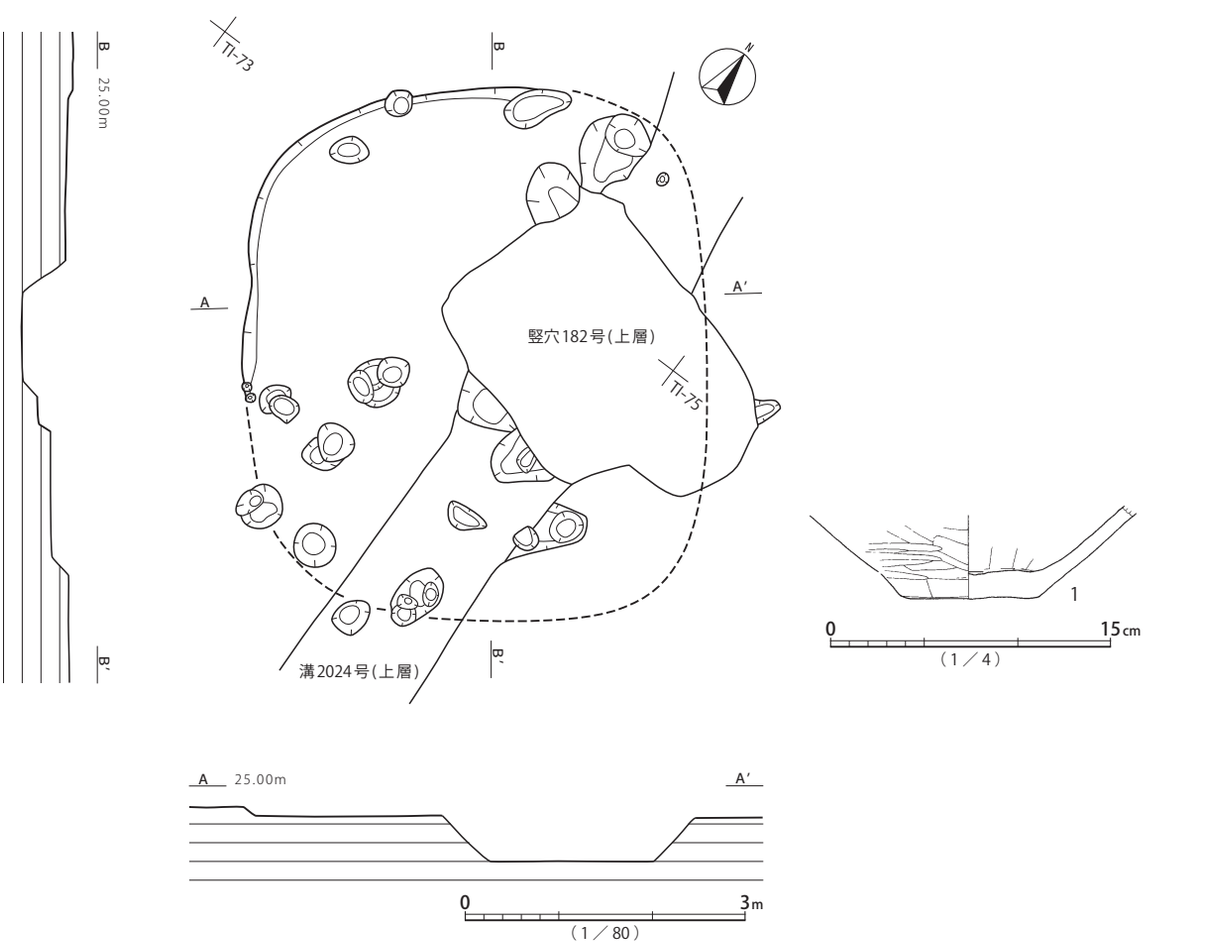


Fig.212　竪穴0180号 遺構遺物、竪穴0181号 遺構遺物

貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。遺構範囲からは、複数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は1の器種不明の底部のみである。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0183号 （Fig.213、PL.31）

TI−95を中心に位置する。遺構確認範囲では他遺構との重複はないが、東側は調査区外に延びる。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、西側の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.10mを測る。北西辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−28°−Wとなる。炉跡は遺構北西寄りから検出され、中軸線上の主柱穴間に位置すると考えられるが、明確でない。P1は主柱穴であろう。壁周溝は検出されていない。遺構範囲からは複数の柱穴が検出されるが、本遺構に伴うものかは明確でない。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0189号 （Fig.213・214、PL.31・67・112）

SI−12を中心に位置する。南西側で土坑195号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が195号よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈すと思われるが、掘り込みが浅く、北西辺壁が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.12mを測る。北西辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−53°−Wとなる。炉跡や主柱穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。想定される位置関係から、P1は貯蔵穴の可能性があり、遺構範囲からは複数の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1は台付甕形土器、2は壺形土器、3は炉器台形土器である。1・3は遺構中央北側から検出され、1は床面上、3は柱穴上面からの出土である。

帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴0190号 （Fig.214、PL.31・140）

SI−11を中心に位置する。土坑191〜194号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、北壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.19mを測る。炉跡や主柱穴などの屋内施設は検出されていない。遺構範囲からは複数の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

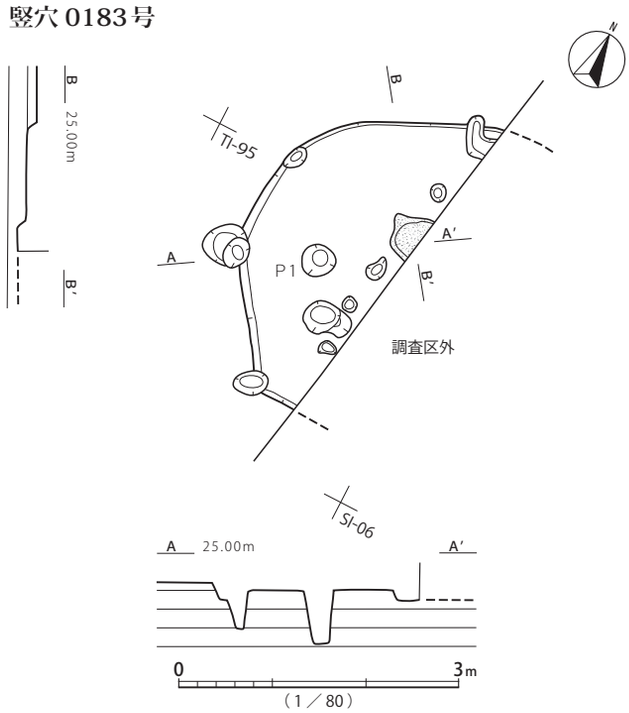
実測可能遺物は1の軽石のみで、帰属時期は不明である。

竪穴0205号 （Fig.214）

TH−22を中心に位置する。南壁の一部が検出されたのみで、大部分は調査区外に延びる。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、詳細は不明である。確認面からの深さは0.21mを測る。

竪穴 0183号



竪穴 0189号

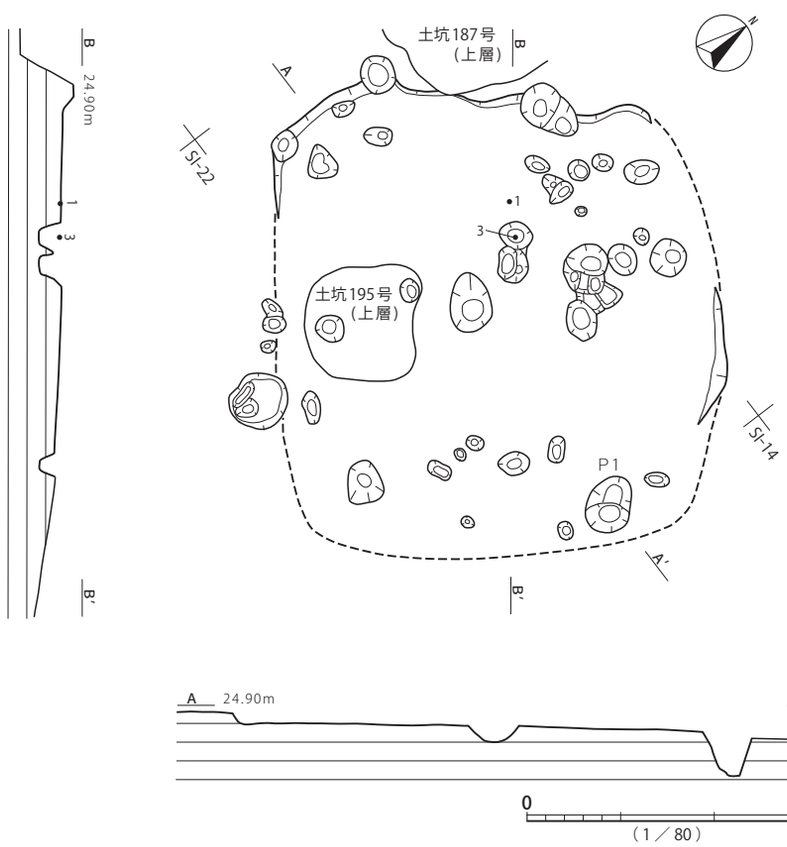
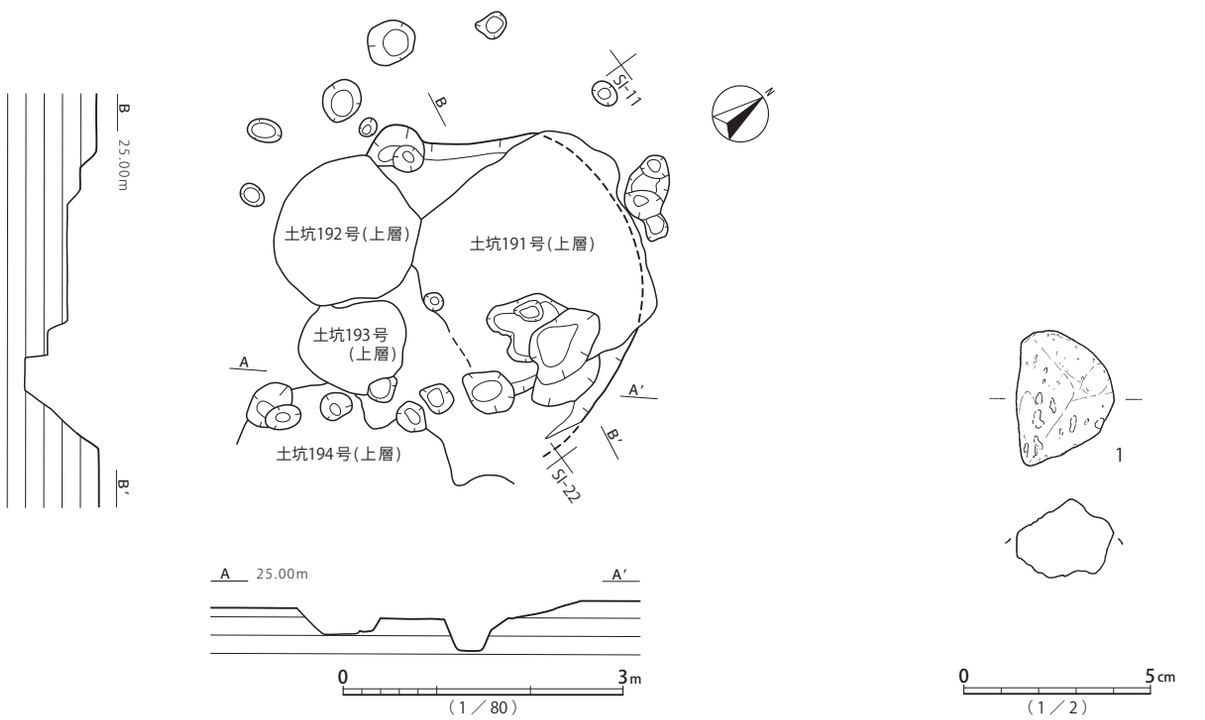


Fig.213　竪穴0183号 遺構、竪穴0189号(1) 遺構

竪穴 0189号



竪穴 0190号



竪穴 0205号

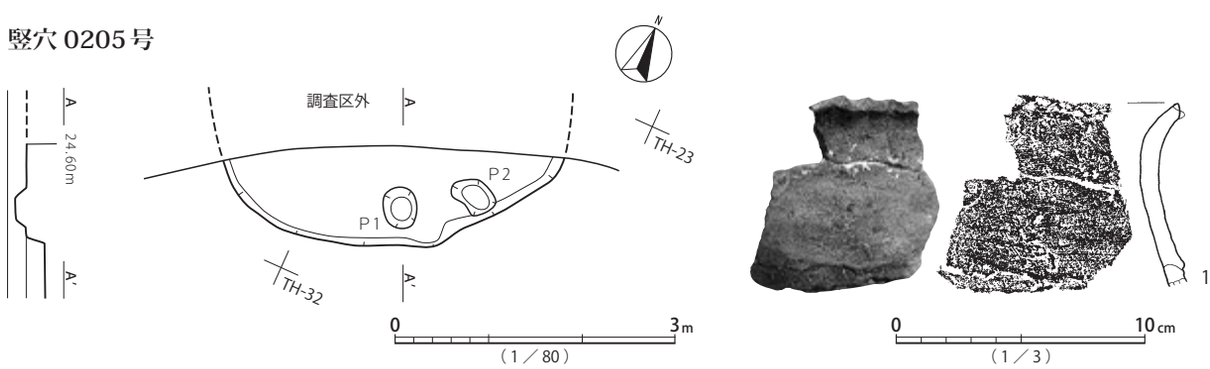


Fig.214　竪穴0189号(2) 遺物、竪穴0190号 遺構遺物、竪穴0205号 遺構遺物

主軸方位はN−24°−W程度を測り、P1は出入口施設、P2は貯蔵穴と思われる。

実測可能遺物は1の甕形土器のみである。口縁端部に交互押捺を加え、胴肩部には1段の粘土紐積み上げ痕を残す。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0206号　（Fig.215、PL.31・67）

TH−24を中心に位置する。中央で古墳2025号と重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、本遺構が2025号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈し、規模は4.36×4.05m、遺構下場面積は13.9㎡、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位はN−46°−Wである。炉跡は遺構北西寄りから検出されている。明確な主柱穴は検出されていない。P3は出入口施設、P4は貯蔵穴であろう。写真では、北東から南東辺壁にかけて、壁周溝らしき落ち込みが認められるが、明確でない。

実測可能遺物は1の広口壺形土器のみである。肩部にS字状回転結節文帯を施し、胴部は部分的に屈曲し、分割成形痕を残す。炉内からの出土である。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴0207号　（Fig.216・217、PL.31・67・112）

TH−41を中心に位置する。他遺構との重複はないが、北西壁の一部は調査区外に延びる。

平面形態は楕円形を呈し、推定規模は4.27×4.15m、遺構下場面積は12.5㎡、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−68°−Wである。炉跡は遺構北西寄りから検出されている。主柱穴と壁周溝は検出されていない。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴の可能性があり、遺構範囲からは複数の柱穴が検出されているが、いずれも本遺構に伴うものかは明確でない。焼土と粘土、貝層の分布が確認されているが、垂直位置は不明である。覆土中にはローム粒とロームブロックを多く含み、全体に堆積が乱れていることから、人為的に埋め戻された可能性がある。P2脇からの出土と思われる貝層サンプルが少量採取されており、分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1・9は甕形土器、2・12〜14は壺形土器、3は器種不明の底部、6はくびれ部に円形浮文を貼り付ける壺形のミニチュア土器、7・8は椀形ないし高杯形土器である。4・5・10・11は附加条1種を施す東関東系で、壺形土器であろう。10・11は同一個体である。14はS字状回転結節文を複数条巡らせ、竪穴0206号1と文様構成が共通するが、赤彩が施されており、別個体と思われる。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴0208号　（Fig.217・218、PL.31・32・67・68・95・112・134）

TG−60を中心に位置する。南東側で竪穴0209号、溝2021号（上層）と重複し、西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が0209号よりも新しく、2021号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すものと考えられ、推定規模は4.27×4.20m、推定遺構下場面積は13.3㎡、確認面からの深さは0.40mを測る。P1を出入口施設と想定した場合、主軸方位はN−20°−Eとなる。

竪穴0206号

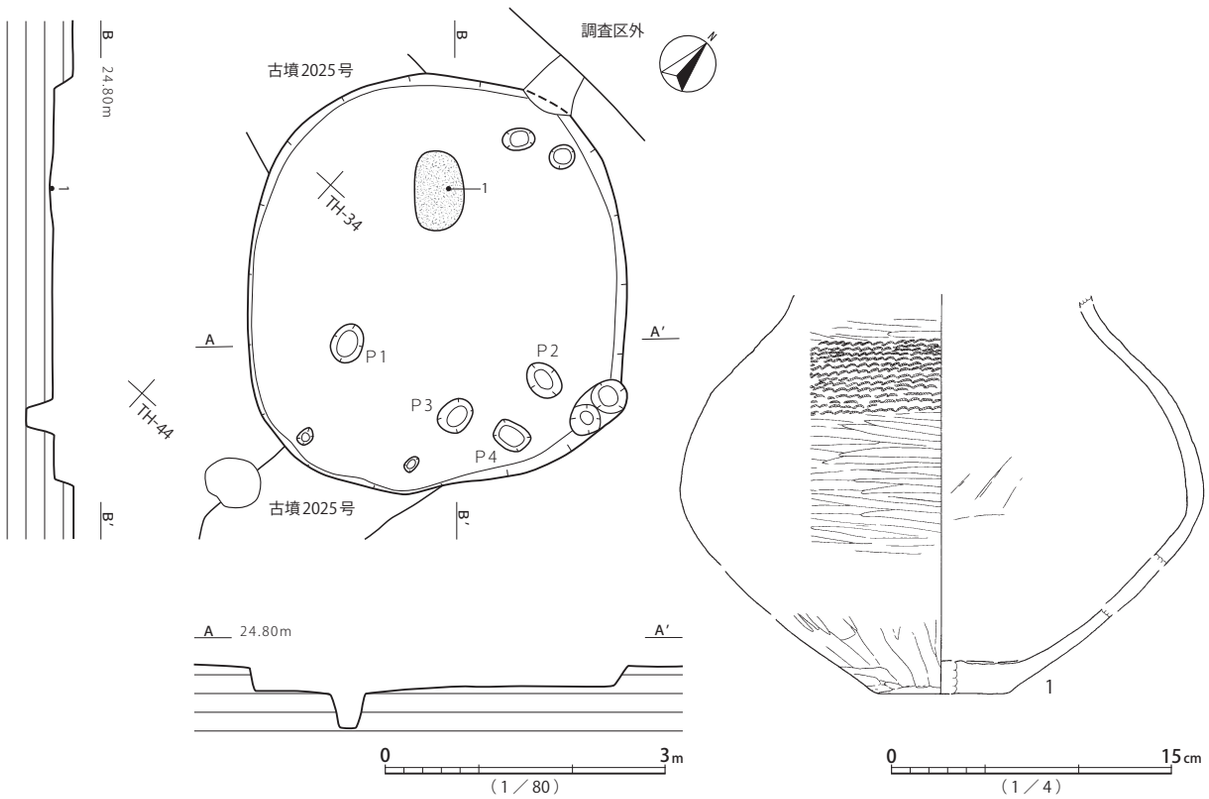


Fig.215　竪穴0206号 遺構遺物

炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2・5・17は甕形土器、3・4は台付甕形土器、6～11・18は壺形土器、12・19は椀形土器、13は高杯形土器、14・15は器台形土器、16は炉器台形土器である。甕形土器は頸部がゆるく外反し、口縁端部には1方向からの押捺を加える。1はハケ目、3は布目痕を残す。5は有段口縁の北陸南西部系である。壺形土器は無文主体となる。18は結節区画下に菱形ないし山形の幾何学文を施し、枠外の縄文を磨り消す。土器以外では20の磨石・敲石の破片が出土している。遺物は遺構中央付近からまとまって検出されており、いずれも覆土下層、床面付近からの出土である。

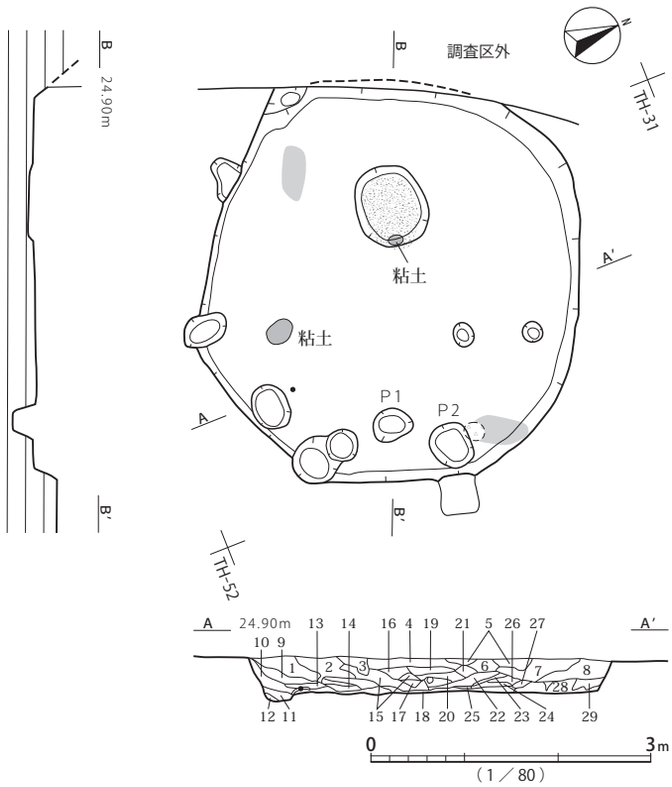
弥生時代終末期前半の所産と思われるが、後半を含む可能性がある。

竪穴0209号　（Fig.219、PL.31・112・113）

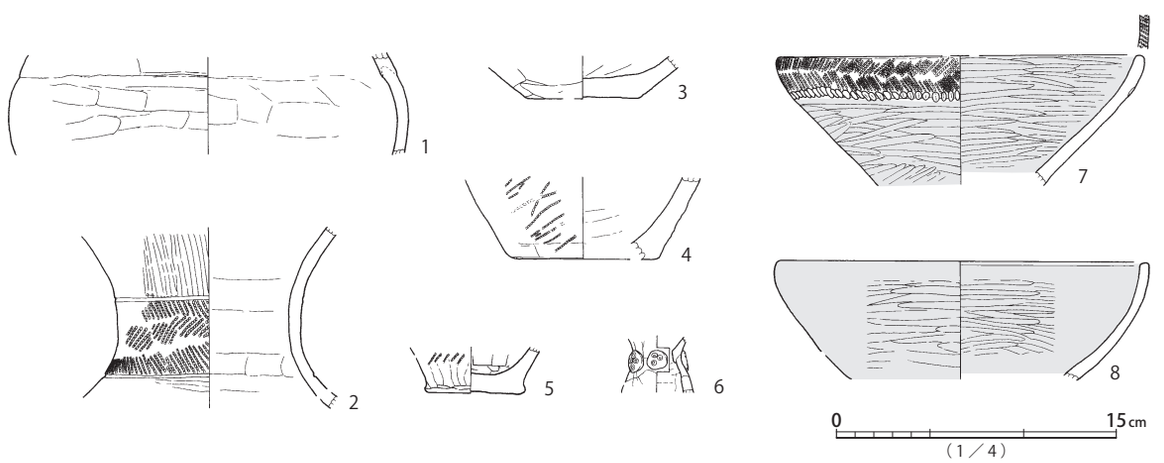
TH−61を中心に位置する。北西側で竪穴0208号、溝2021号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は楕円形を呈し、推定規模は4.33×3.94m、推定遺構下場面積は12.8㎡、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位はN−50°−Wである。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴の可能性があり、遺構範囲からは複数の柱穴が検出されているが、いずれも本遺構に伴うものかは明確でない。主柱穴と壁周溝は検出されていない。覆土中にはローム粒とロームブロックを多く含み、人為的に埋め戻された可能性がある。

竪穴 0207 号



1 黒褐色土 ローム微粒を含む。粘性・しまりなし。
2 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりなし。
3 黒褐色土 小ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりなし。
4 黒褐色土 ローム粒をまばらに含む。粘性・しまりなし。
5 黒褐色土 ローム粒を均等に含む。粘性・しまりなし。
6 黒褐色土 ローム微粒を均等に多く含む。粘性・しまりあり。
7 黒色土 ローム微粒を含む。粘性なし、しまりあり。
8 黒褐色土 ローム微粒を多く含む。粘性・しまりなし
9 黒褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
10 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘性・しまりなし。
11 暗褐色土 ローム・ローム粒を多く含む。粘性・しまりあり。
12 黄褐色土 ロームブロックを主体とし、黒色土がわずかに混じる。
13 黒色土 焼土粒を含む。粘性・しまりなし。
14 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
15 暗褐色土 粗いロームブロックを多く含む。粘性・しまりあり。
16 黒褐色土 ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
17 黒色土 ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
18 黒褐色土 5mm大のローム粒を多く含む。粘性・しまりあり。
19 黒色土 ローム粒を含む。粘性・しまりあり。
20 暗褐色土 微小ローム粒・赤色粒・焼土粒を含む。粘性・しまりなし。
21 黒褐色土 ロームをブロック状に多量に含む。
22 黒褐色土 ローム微粒と赤色粒をわずかに含む。
23 黒色土 ローム粒を多く含む。粘性なし、しまりあり。
24 黒褐色土 ローム微粒をまばらに含む。粘性なし、しまりあり。
25 黒褐色土 焼土粒を多く含む。粘性・しまりなし。
26 黒褐色土 ローム微粒を含む。粘性なし、しまりあり。
27 暗褐色土 ロームを多く含む。粘性あり、しまりなし。
28 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。粘性・しまりあり。
29 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりなし。



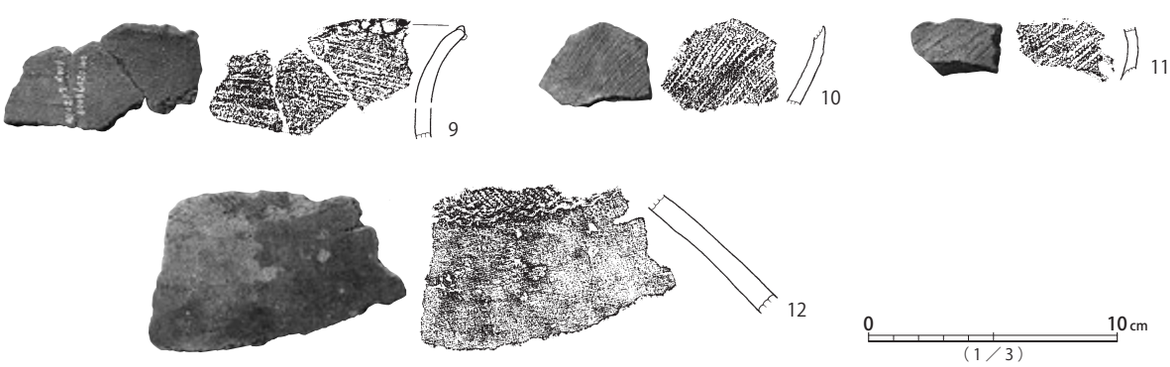
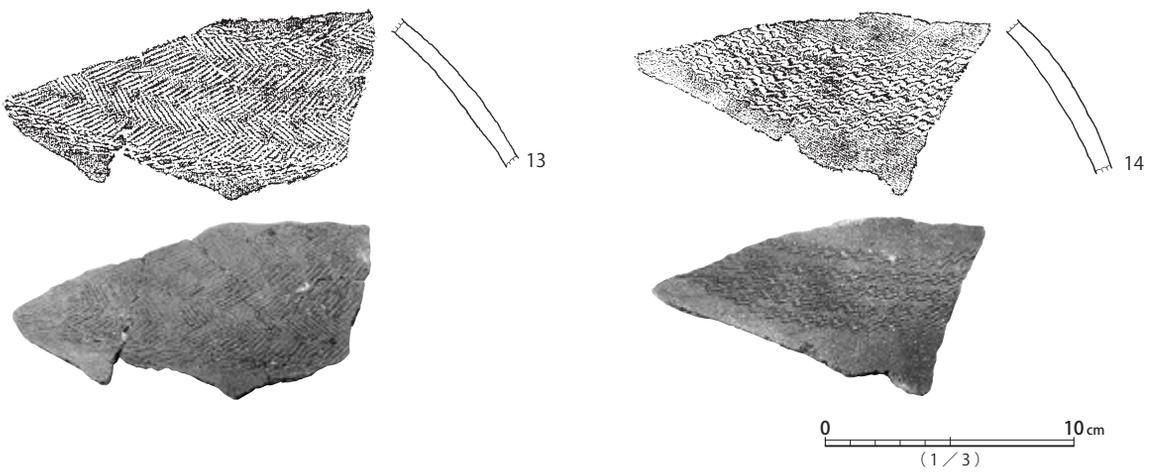
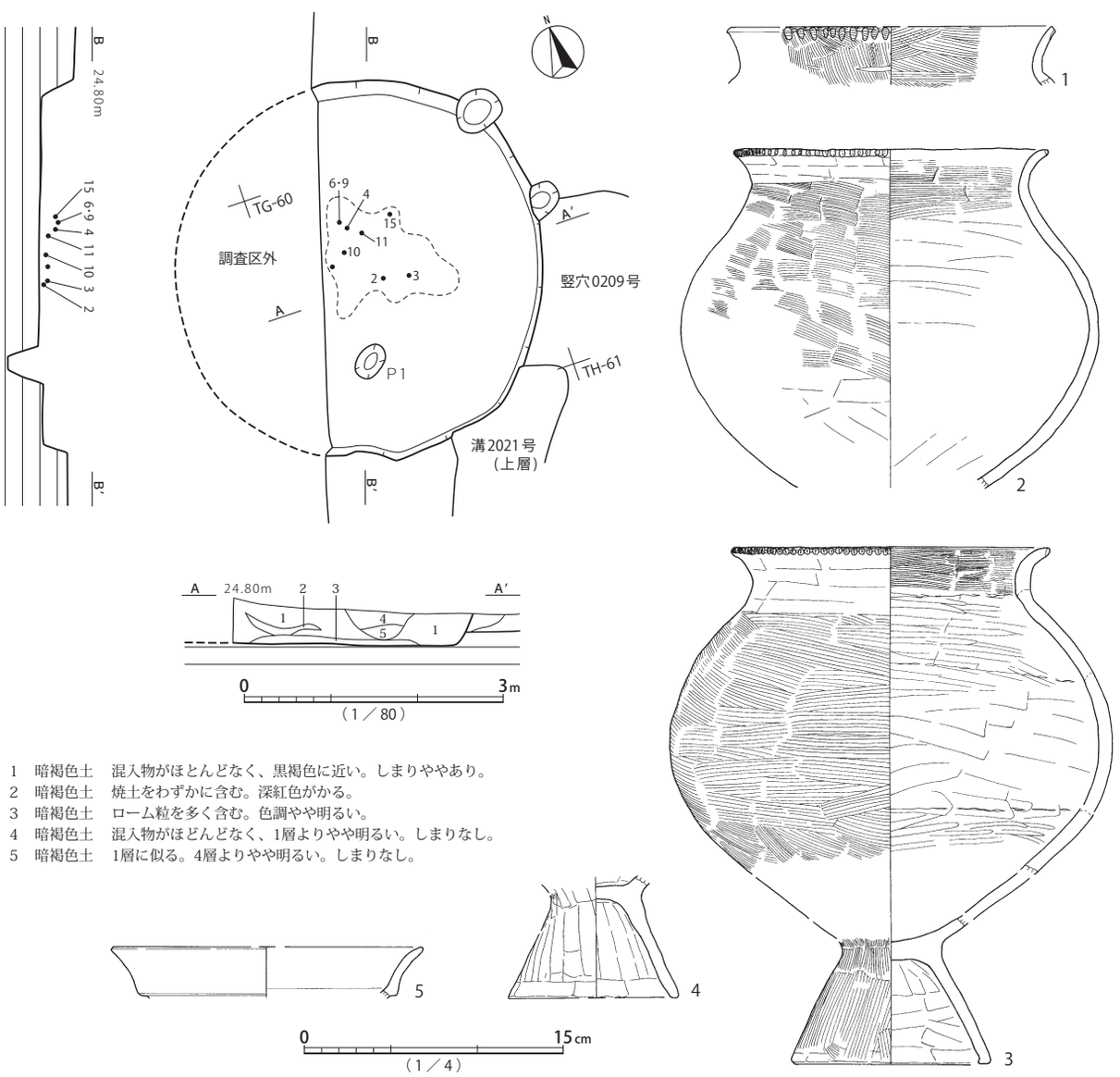


Fig.216 竪穴0207号(1) 遺構遺物

竪穴 0207 号



竪穴 0208 号



1　暗褐色土　混入物がほとんどなく、黒褐色に近い。しまりややあり。
2　暗褐色土　焼土をわずかに含む。深紅色がかる。
3　暗褐色土　ローム粒を多く含む。色調やや明るい。
4　暗褐色土　混入物がほどんどなく、1層よりやや明るい。しまりなし。
5　暗褐色土　1層に似る。4層よりやや明るい。しまりなし。

Fig.217　竪穴0207号(2) 遺物、竪穴0208号(1) 遺構遺物

竪穴 0208 号

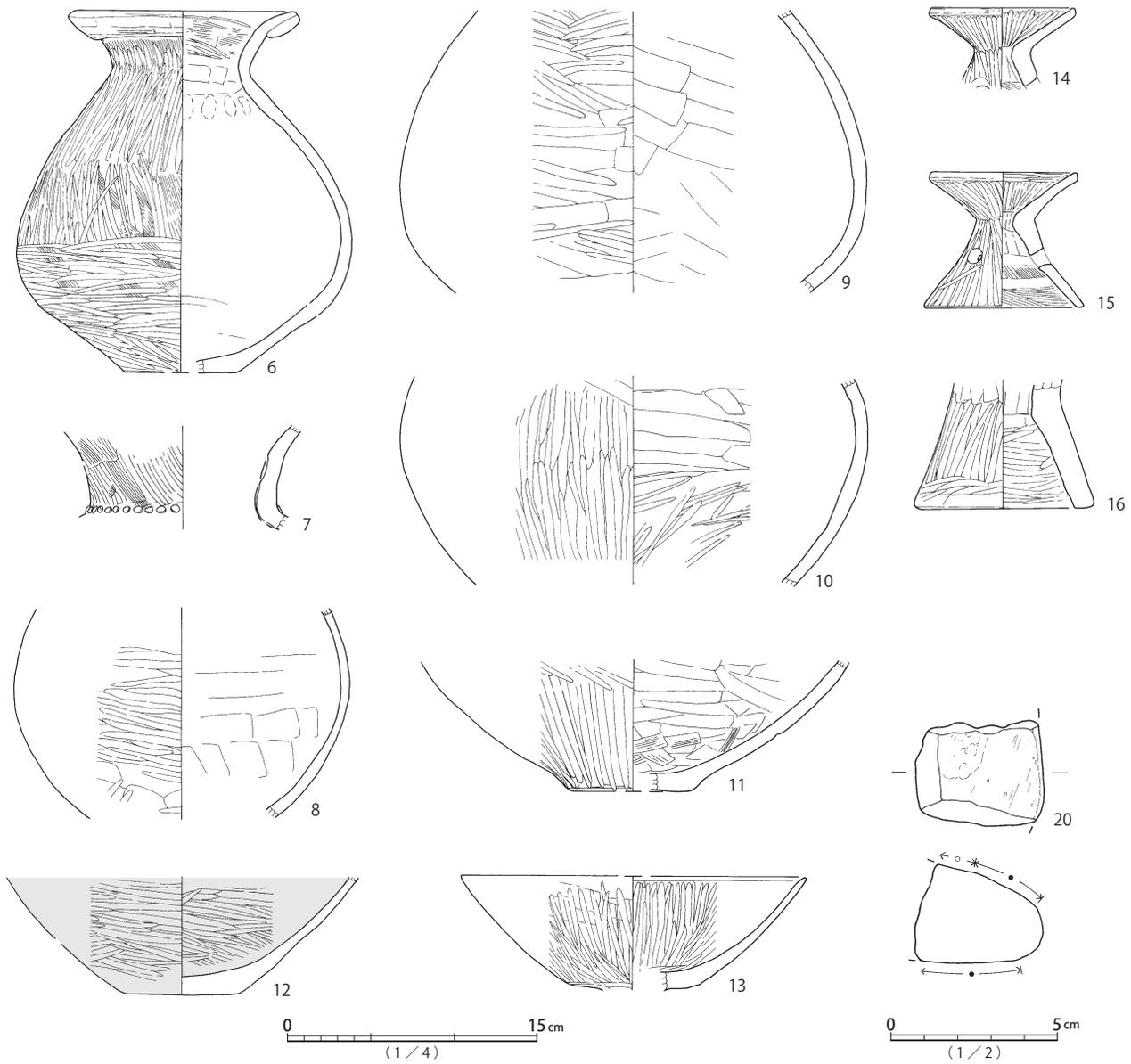
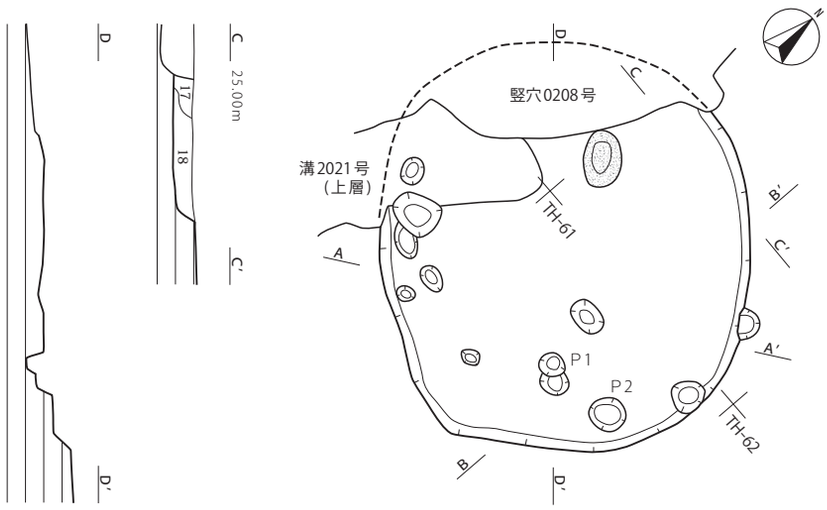
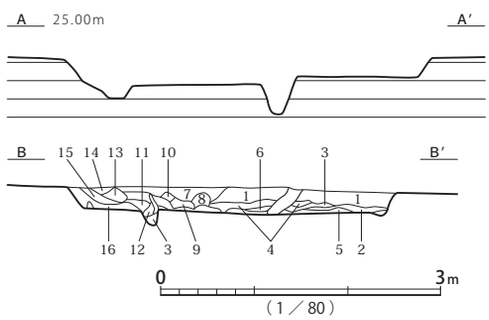
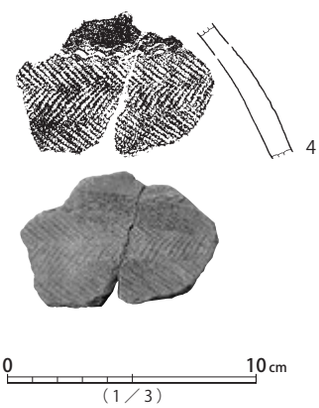


Fig.218　竪穴0208号(2) 遺物

竪穴 0209号







1　黒褐色土　微小ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
2　黒褐色土　ローム粒を均等に含む。粘性・しまりなし。
3　黄褐色土　ロームを主体とし、黒色土が混じる。
4　黒褐色土　ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
5　暗褐色土　ロームを含む。粘性・しまりあり。
6　黒色土　微小ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
7　黒褐色土　微小ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
8　黒色土　ロームブロックを多く含む。粘性・しまりなし。
9　黒色土　微小ロームブロックを含む。粘性・しまりなし。
10　黒色土　微小焼土粒を含む。粘性・しまりなし。
11　黒色土　微小ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
12　黒色土　粘性・しまりなし。
13　黒色土　2cm大のロームブロックを含む。しまりなし。
14　黒褐色土　ロームをわずかに含む。しまりなし。
15　黒褐色土　5mm大のローム粒を含む。粘性・しまりなし。
16　黒褐色土　微小ローム粒と赤色粒を含む。粘性・しまりあり。
17　黒褐色土　混入物がほとんどない。しまりあり。
18　暗褐色土　黒色土とロームがブロック状に散在する。しまりややなし。

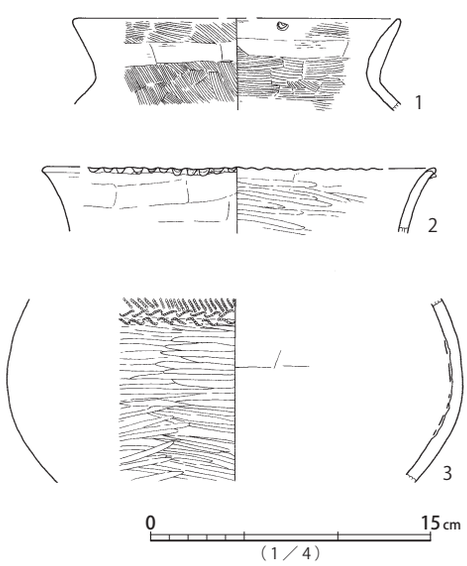


Fig.219　竪穴0209号 遺構遺物

実測可能遺物は、1・2は甕形土器、3・4は壺形土器である。

弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0210号 （Fig.220、PL.32・68・113）

TH−63を中心に位置する。中央で古墳1845・2025号、西隅で溝2020号（上層）と重複し、東隅は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は4.88×4.45m、推定遺構下場面積は17.1㎡、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位はN−23°−Wである。P1・2は主柱穴と思われるが、これに対応する柱穴が検出されておらず、明確でない。P3は出入口施設、P4は貯蔵穴である。南辺壁際からは、埋没途中の堆積と考えられる焼土が検出されている。

実測可能遺物は、1は台付甕形土器、2は器種不明の底部、3は有稜の高杯形土器、4はS字状口縁台付甕形土器である。

出土遺物は小破片が多く、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0212号 （Fig.221、PL.32・68・113）

TH−81を中心に位置する。中央で古墳1845号、東隅で溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は4.77×4.23m、推定遺構下場面積は15.7㎡、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位はN−53°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出され、南東側に拡張した可能性がある。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2・3は器種不明の底部、4は小型の壺形土器、5は椀形土器、6は椀形ないし高杯形土器、7・8は壺形土器である。9は椀形土器と思われるが、上下逆で壺形土器の可能性もある。

弥生時代後期中葉の所産と思われる。

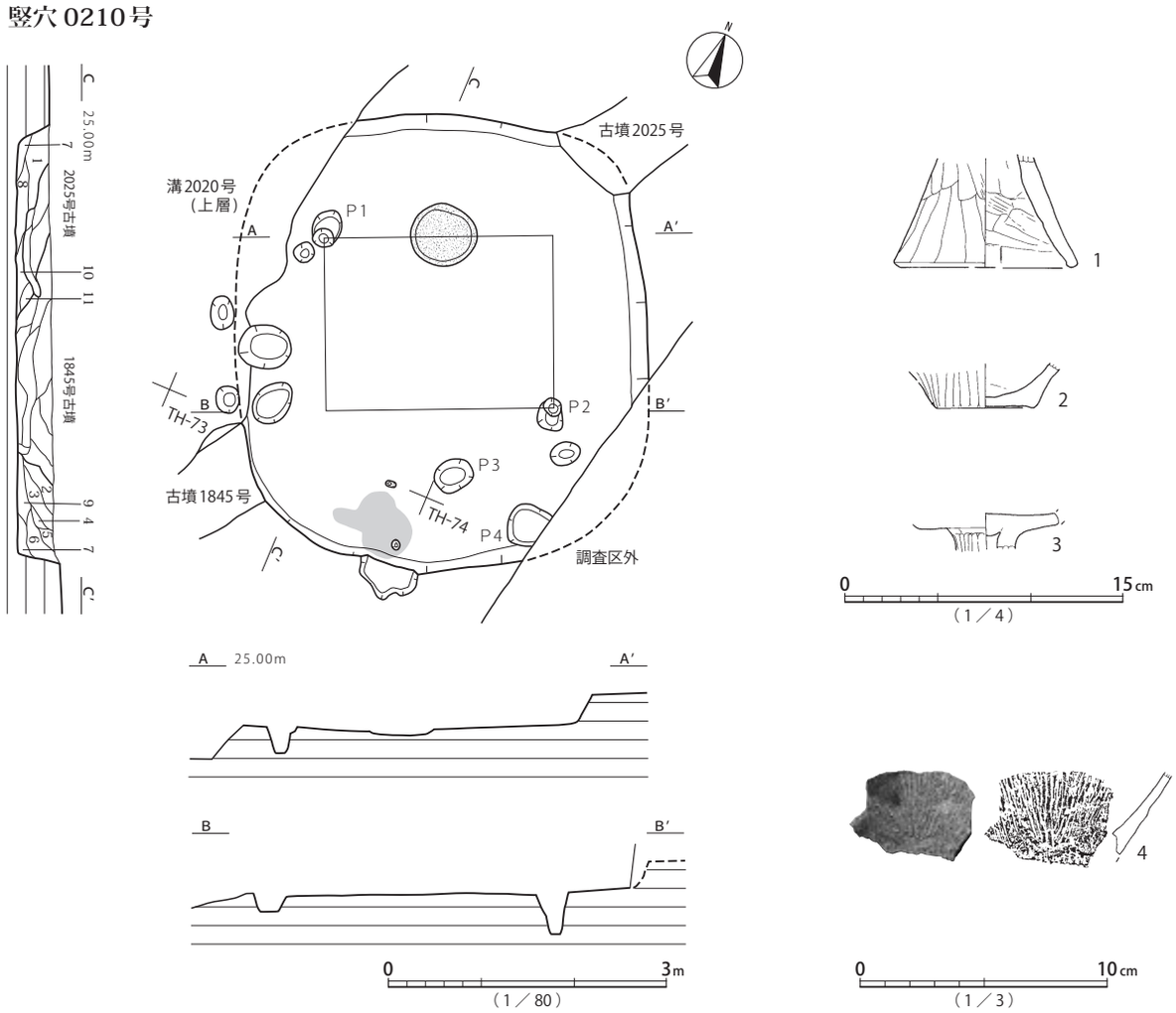
竪穴0213号 （Fig.222、PL.32・68・95・113・134）

TH−83を中心に位置する。遺構確認範囲では他遺構との重複はないが、東側は調査区外に延びる。

平面形態は楕円形を呈すと考えられるが、西側半分程度の検出であることから、詳細は不明である。推定規模は主軸長3.93m、確認面からの深さは0.14mを測る。主軸方位はN−4°−Wである。炉跡は中軸線上北寄りから検出されている。南西隅の床面からは焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性があるが、明確でない。主柱穴と壁周溝は検出されていない。調査図面に記載がなく、出土位置は不明であるが、貝層サンプルが採取されており、分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1・3〜5は甕形土器、2は台付甕形土器、6・7は器種不明の底部、8〜10は壺形土器である。甕形土器は、頸部内面に屈曲線を持ち、くの字傾向を示すものが多い。5は口縁端部を面取り拡張する。壺形土器はすべて無文の折返し状口縁で、口頸部高が低い。土器以外では11の磨石が出土している。

竪穴0210号



1　黒色土　　ローム粒を少量含む。しまりややなし。
2　黒褐色土　ローム粒を多量に含み、ロームブロックもわずかに混じる。しまりあり。
3　黒色土　　ローム粒・焼土をわずかに含む。しまりあり。
4　黒褐色土　ロームを少量含む。
5　暗褐色土　黒褐色土を含む。しまりややなし。
6　黒褐色土　暗褐色土を含む。
7　黒褐色土　ロームをわずかに含み、粒子細かい。粘性・しまり強い。
8　黒褐色土　しまりなし。
9　黒褐色土　ロームを少量含む。粘性・しまりあり。
10　黒色土　　1・6層に似る。ロームをわずかに含む。しまりあり。
11　暗褐色土　黒褐色土を含む。粘性・しまりなし。

Fig.220　竪穴0210号 遺構遺物

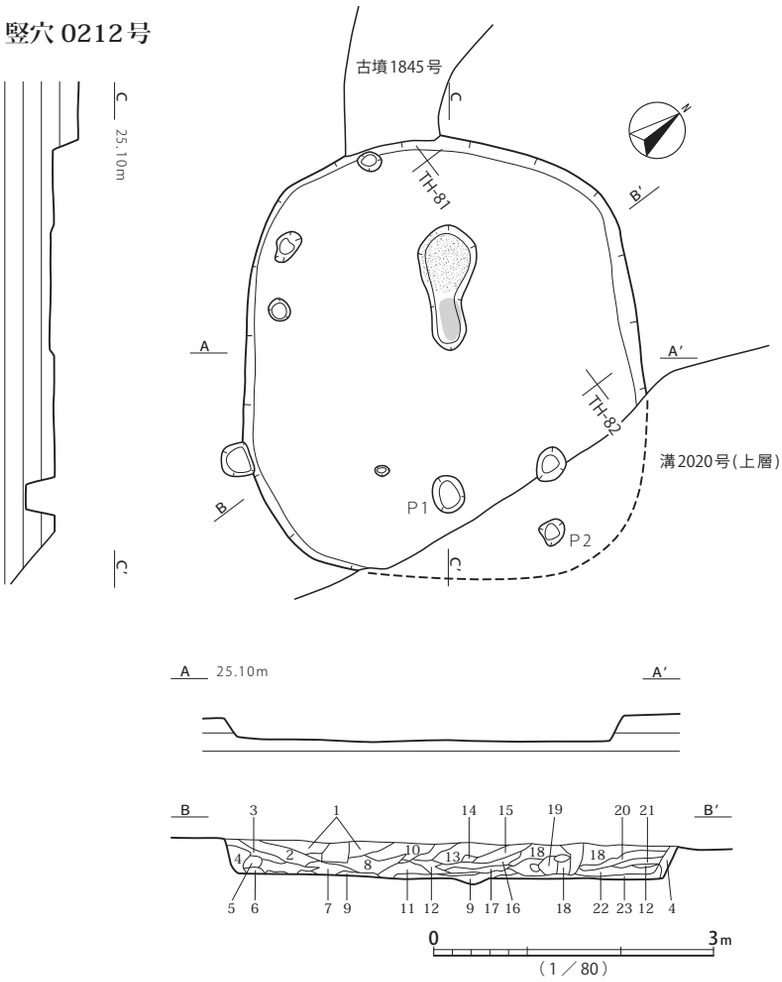
遺構平面形態は方形化しておらず、帰属時期は明確でないが、古墳時代前期前葉の所産と思われる。

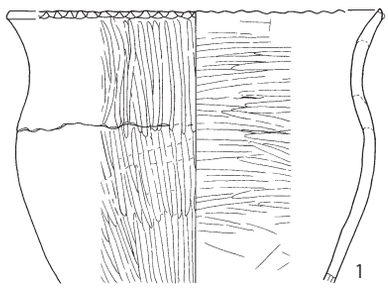
竪穴0214号　（Fig.223）

TG−99を中心に位置する。遺構確認範囲では他遺構との重複はないが、南西壁の一部は撹乱により壊され、北西側は調査区外に延びる。

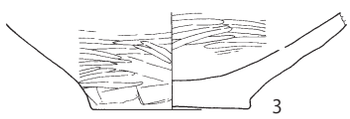
平面形態は楕円形を呈すと考えられるが、南東側の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.58mを測る。主軸方位はN−50°−W程度と思われるが、明確でない。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴と思われる。

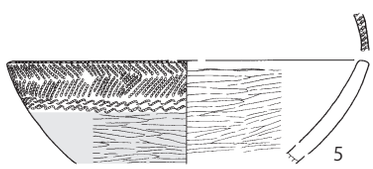
竪穴 0212号

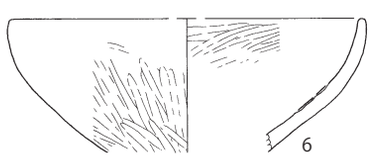


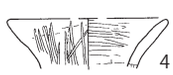


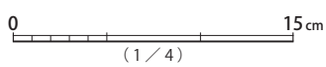












1 黒褐色土 赤色粒を均等に含む。しまりあり。
2 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘性・しまりなし。
3 黒褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
4 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土を多く含む。粘性・しまりなし。
5 黒褐色土 ローム粒を多く含む。しまりなし。
6 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりなし。
7 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘性・しまりなし。
8 黒褐色土 微小ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
9 暗褐色土 粘性・しまりなし。
10 黒褐色土 微小ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
11 黒色土 微小ローム粒を含む。粘性・しまりあり。
12 黒褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
13 黒褐色土 微小ローム粒をまばらに含む。しまりなし。
14 ロームブロック。
15 黒褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
16 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
17 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘性なし、しまりあり。
18 暗褐色土 微小ローム粒・赤色粒を含む。粘性・しまりなし。
19 黒色土 ローム粒・遺物を含む。粘性・しまりなし。
20 黒褐色土 微小赤色粒を均等に含む。粘性・しまりなし。
21 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりあり。
22 黒褐色土 微小ロームブロックを含む。粘性あり、しまりなし。
23 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまりあり。

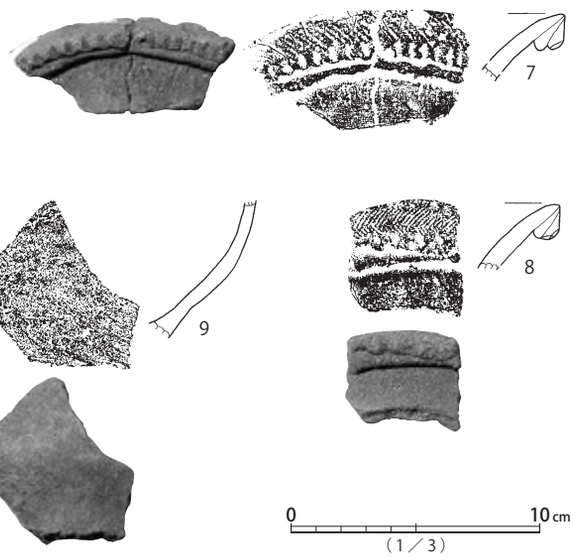


Fig.221 竪穴0212号 遺構遺物

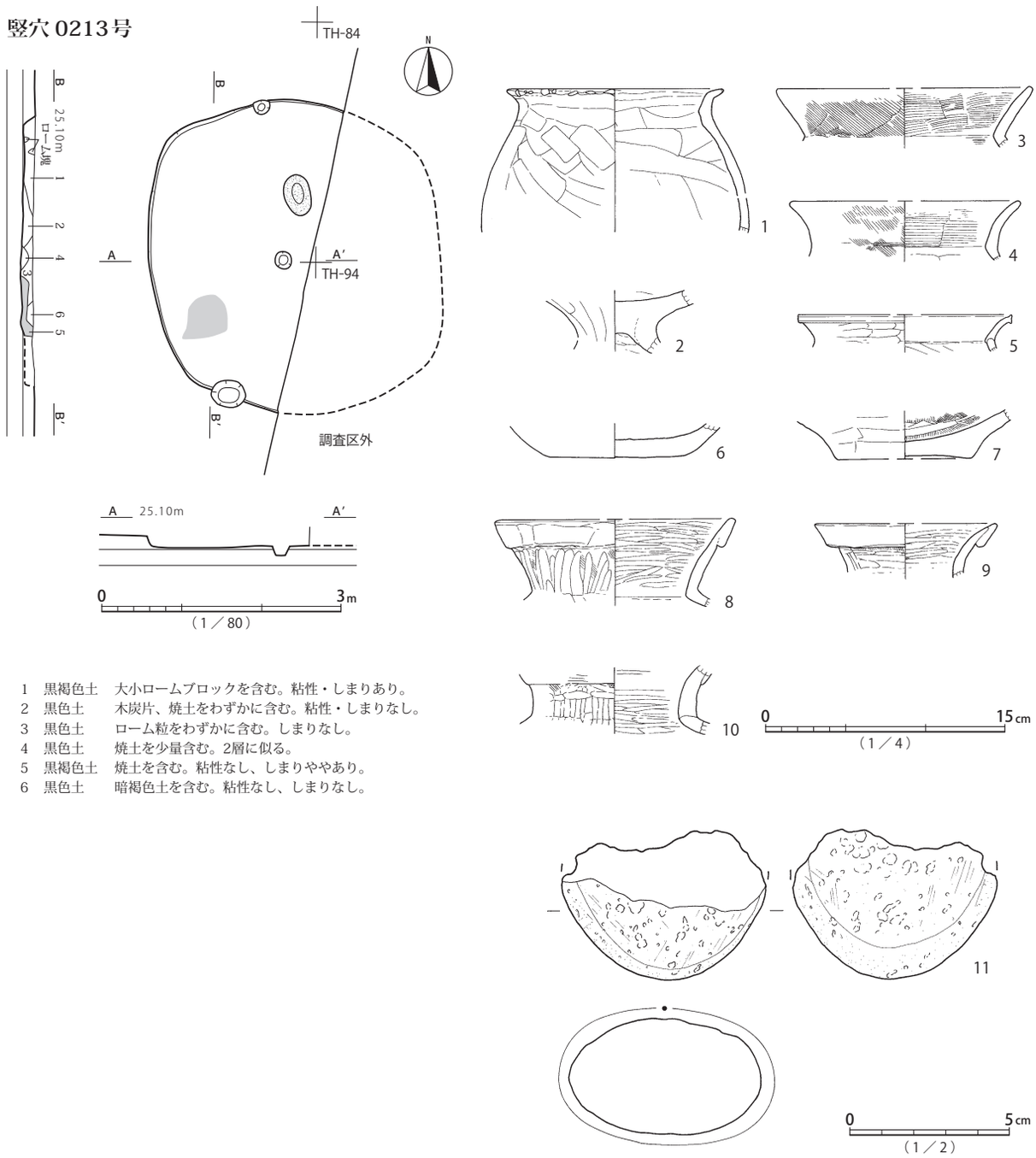


Fig.222　竪穴0213号 遺構遺物

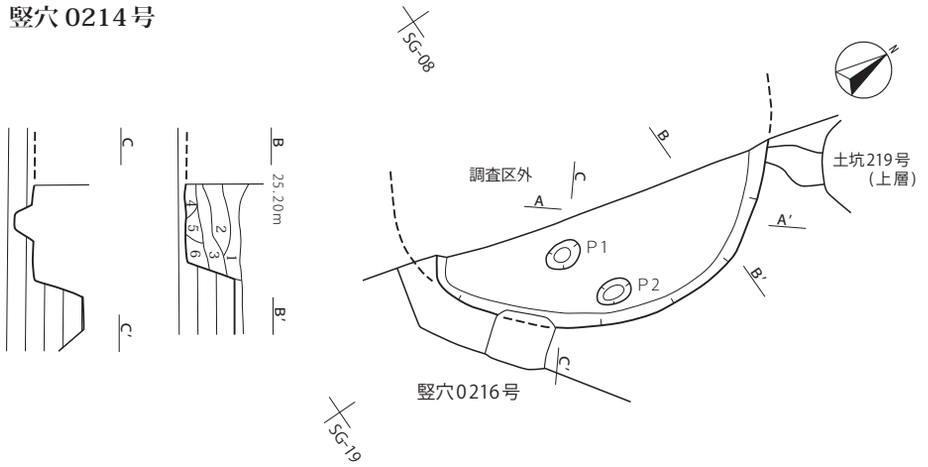
出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0215号　（Fig.223、PL.32・68・113）

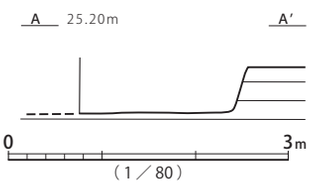
SG−18を中心に位置する。東側で竪穴0216・0217号と重複し、西側は調査区外に延びる。新旧関係は、遺構断面図では本遺構がいずれの遺構よりも新しいが、出土遺物の検討からは0216号のほうが新しいと考えられる。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈すと思われるが、遺構東側が部分的に検出されたのみで、詳細

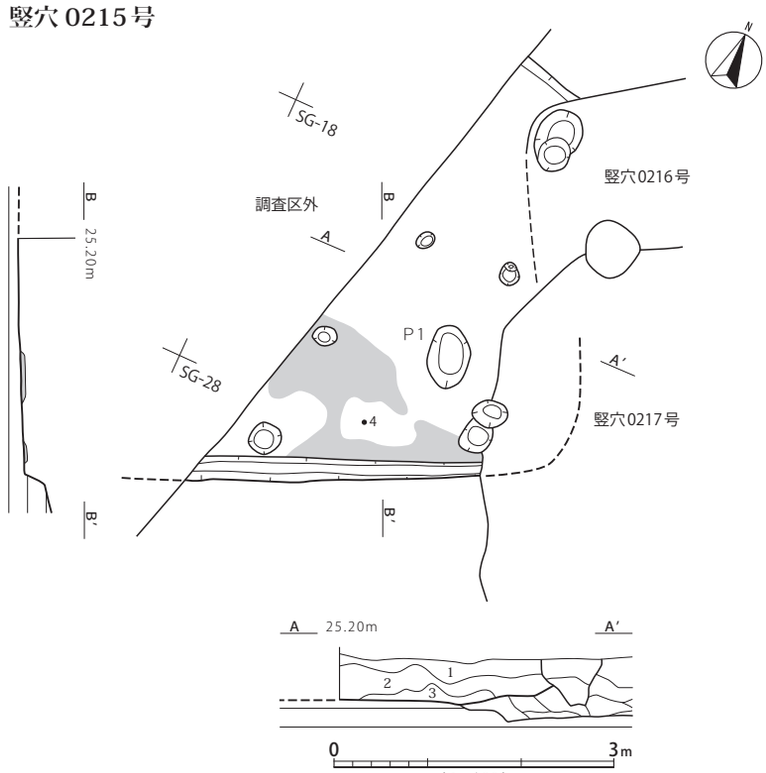
竪穴 0214 号

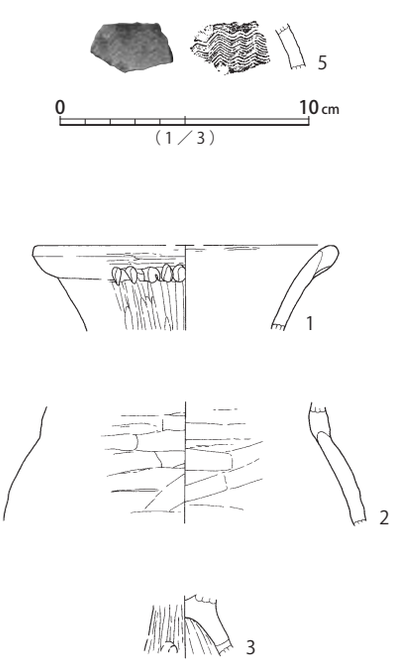


1　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりややあり。
2　明褐色土　ロームブロック・ローム・暗褐色土を多く含む。
3　明褐色土　ブロック状の黒色土を含む。
4　暗褐色土　ローム粒を少量含む、黒色土も混じる。
　　しまりややあり。
5　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
6　暗褐色土　混入物がほとんどない。色調やや明るい。



竪穴 0215 号





1　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
2　暗褐色土　ローム粒を多く含み、1層より褐色味が強い。
　　しまりややなし。
3　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
　　しまりややなし。

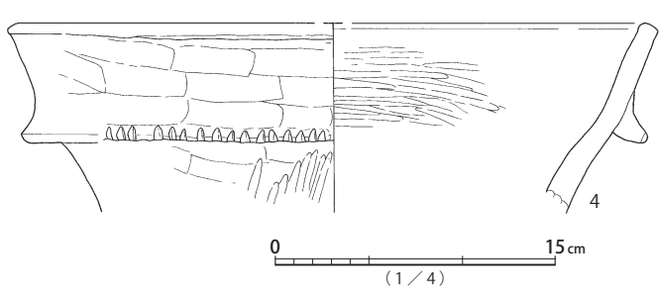


Fig.223　竪穴0214号 遺構、竪穴0215号 遺構遺物

は不明である。P1は主柱穴と考えられ、床面からの深さは0.55mを測る。南辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−21°−Wとなる。南辺壁際には周溝が巡る。床面には焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。覆土下層にはローム粒やロームブロックを多量に含み、しまりもやや弱いことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

実測可能遺物は、1・4・5は壺形土器、2は広口壺形土器、3は高杯形土器である。4は大型品で、口縁部に凸帯を貼り付けて複合口縁とする。南辺壁付近から検出されたが、垂直位置は不明である。

弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0216号　（Fig.224・225、PL.32・68・113）

SG−09を中心に位置する。西側で竪穴0215号、南側で竪穴0217号、南東側で竪穴0220号、中央で溝2021号（上層）と重複する。新旧関係は、土層断面では本遺構が0217号よりも新しく、その他の遺構よりも古くなるが、出土遺物の検討からは0215号よりも新しいと考えられる。

平面形態は長方形を呈すと思われるが、詳細は不明である。推定規模は5.39×4.48m、推定遺構下場面積は21.2㎡、確認面からの深さは0.39mを測る。主軸方位はN−36°−Wである。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。遺構範囲からは柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1〜5は甕形土器、6はS字状口縁台付甕形土器、7は広口壺形土器、8・13〜15・19は壺形土器、9〜12は器種不明の底部、16・20は椀形土器、17は器台形土器、18は高杯形土器である。3・4は受口状口縁甕で、頸部屈曲から稜をもってさらに外反したのち、直立気味に角度を変えて端部に至る。竪穴0215号からの混入であろうか。6は台部下端を折り返す。15は遺構南東隅寄りからの出土であるが、垂直位置は不明である。

古墳時代前期中葉の所産と思われるが、後葉まで下る可能性もある。

竪穴0217号　（Fig.224〜226、PL.32・68・113・114・134・140）

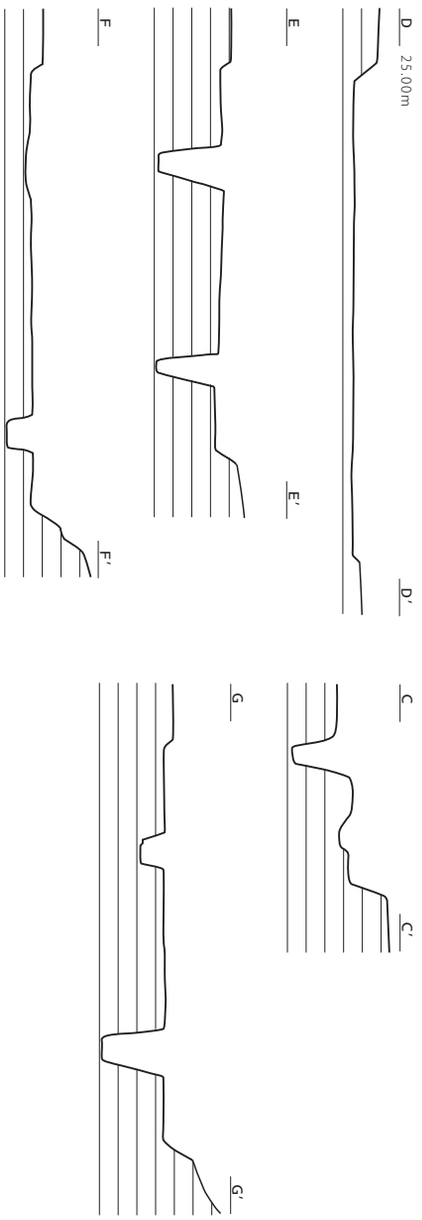
SG−19を中心に位置する。北側で竪穴0215・0216号、南東側で竪穴0220号、中央で溝2021号（上層）と重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

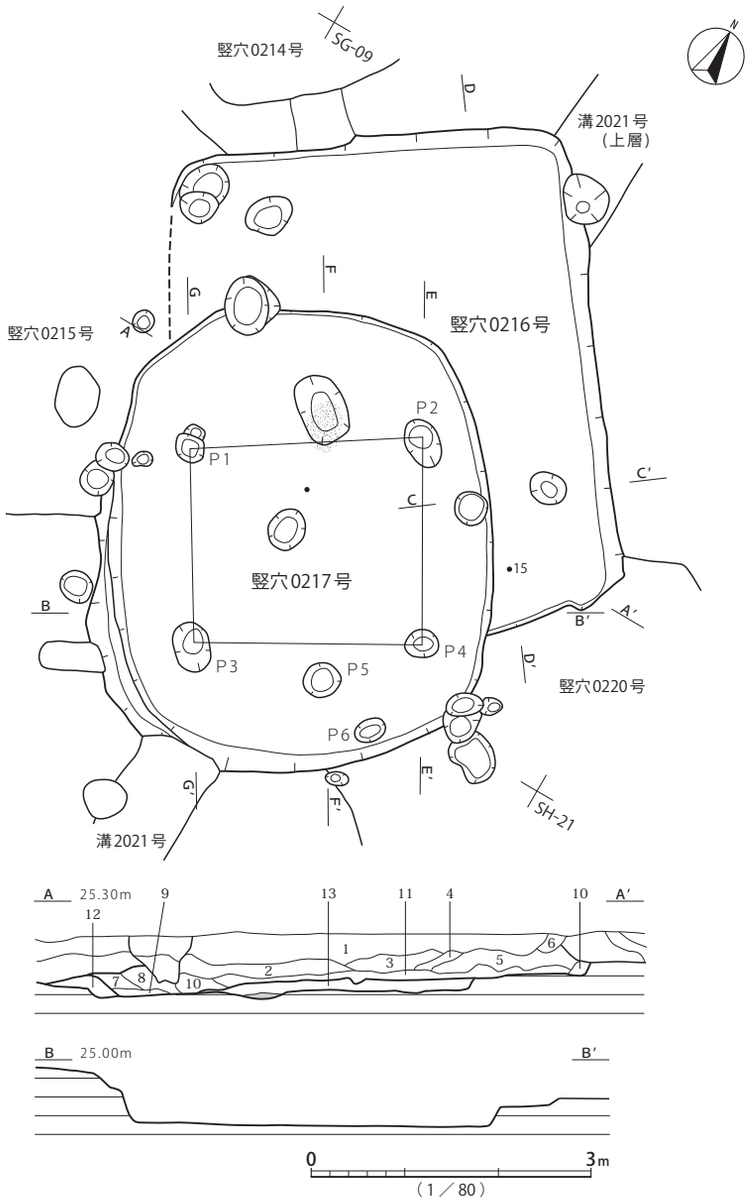
掘り込みが深いため、遺構の形状は完全に把握されたが、他遺構との重複により覆土の大半を失っている。平面形態は長楕円形を呈し、規模は4.85×4.05m、遺構下場面積は15.7㎡、確認面からの深さは0.57mを測る。主軸方位はN−32°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜3は甕形土器、4・5は台付甕形土器、6・14・15は壺形土器、7・8は器種不明の底部、9は直口縁壺形土器、10・16は椀形土器、11は小型の椀形土器、12は高杯形土器、13は器台形土器である。6は竪穴0220号14と同一個体である。12は脚柱状を呈し、明らかに混入である。土器以外では17・18の磨石・敲石、19の砥石が出土している。

弥生時代終末期前半の所産と思われるが、後期後半の可能性もある。

竪穴 0216・0217号





0216号

1 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
2 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。しまりややなし。
3 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。しまりなし。
4 暗褐色土 ローム粒をブロック状に含む。
5 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。しまりややなし。
6 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりあり。
7 暗褐色土 粗いローム粒を多く含む。しまりあり。
8 暗褐色土 ロームブロックを含む。しまりあり。
9 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。しまりあり。
10 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりあり。
11 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。しまりあり。

0217号

12 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。しまりあり。
13 黒褐色土 ロームブロックを含む。しまりあり。

竪穴 0216号

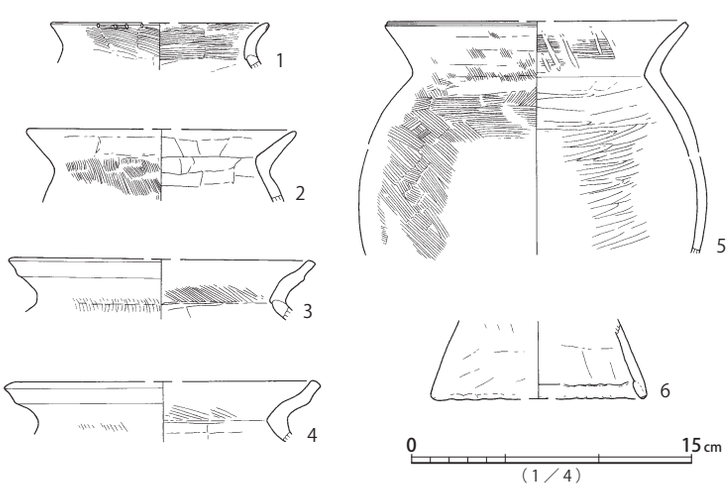
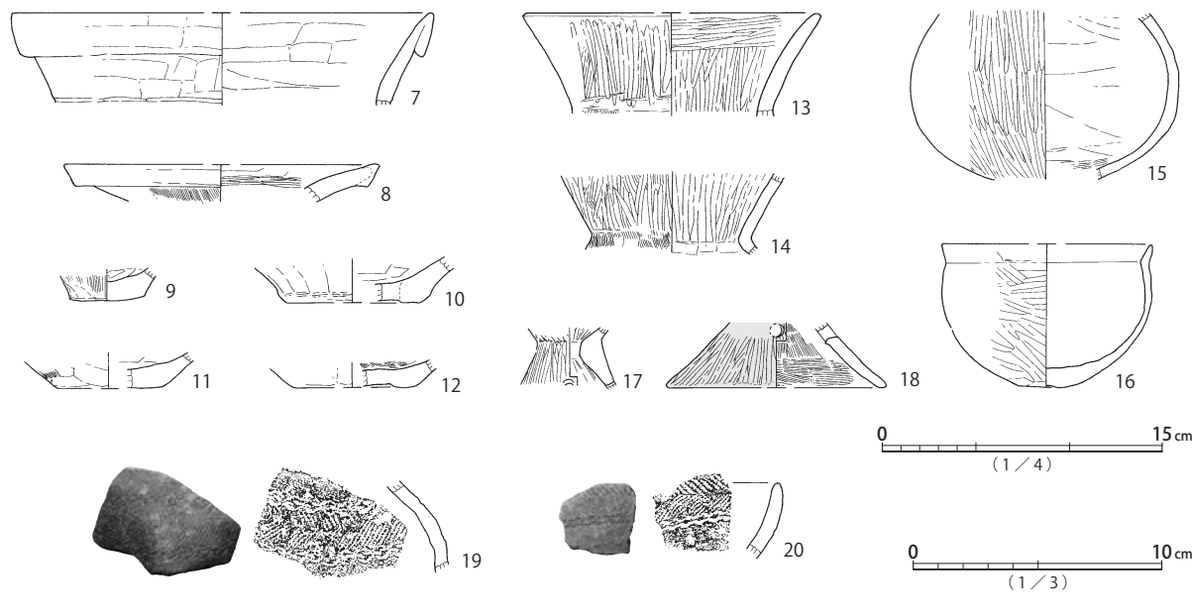


Fig.224 竪穴0216号(1) 遺構遺物、竪穴0217号(1) 遺構

竪穴 0216号



竪穴 0217号

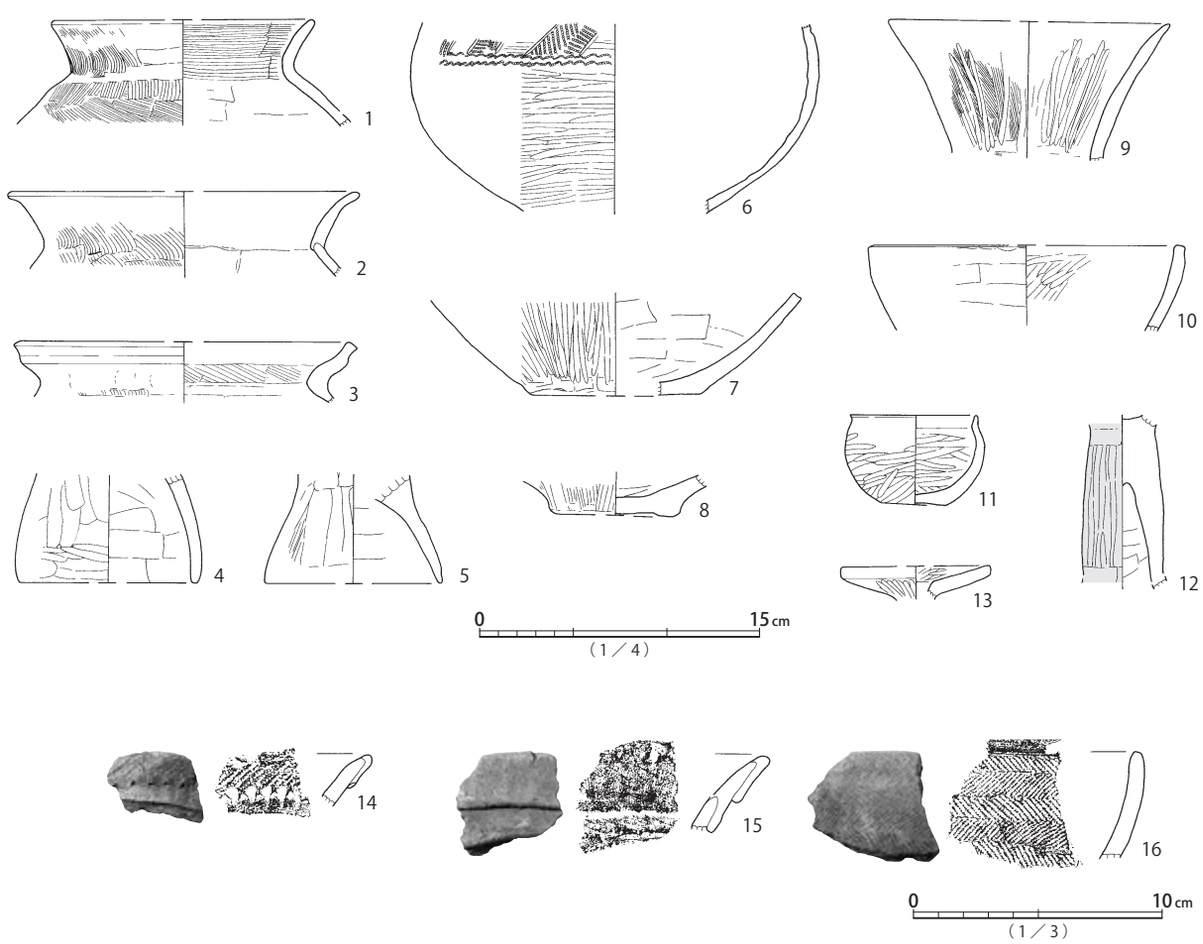


Fig.225　竪穴0216号(2) 遺物、竪穴0217号(2) 遺物

竪穴0217号

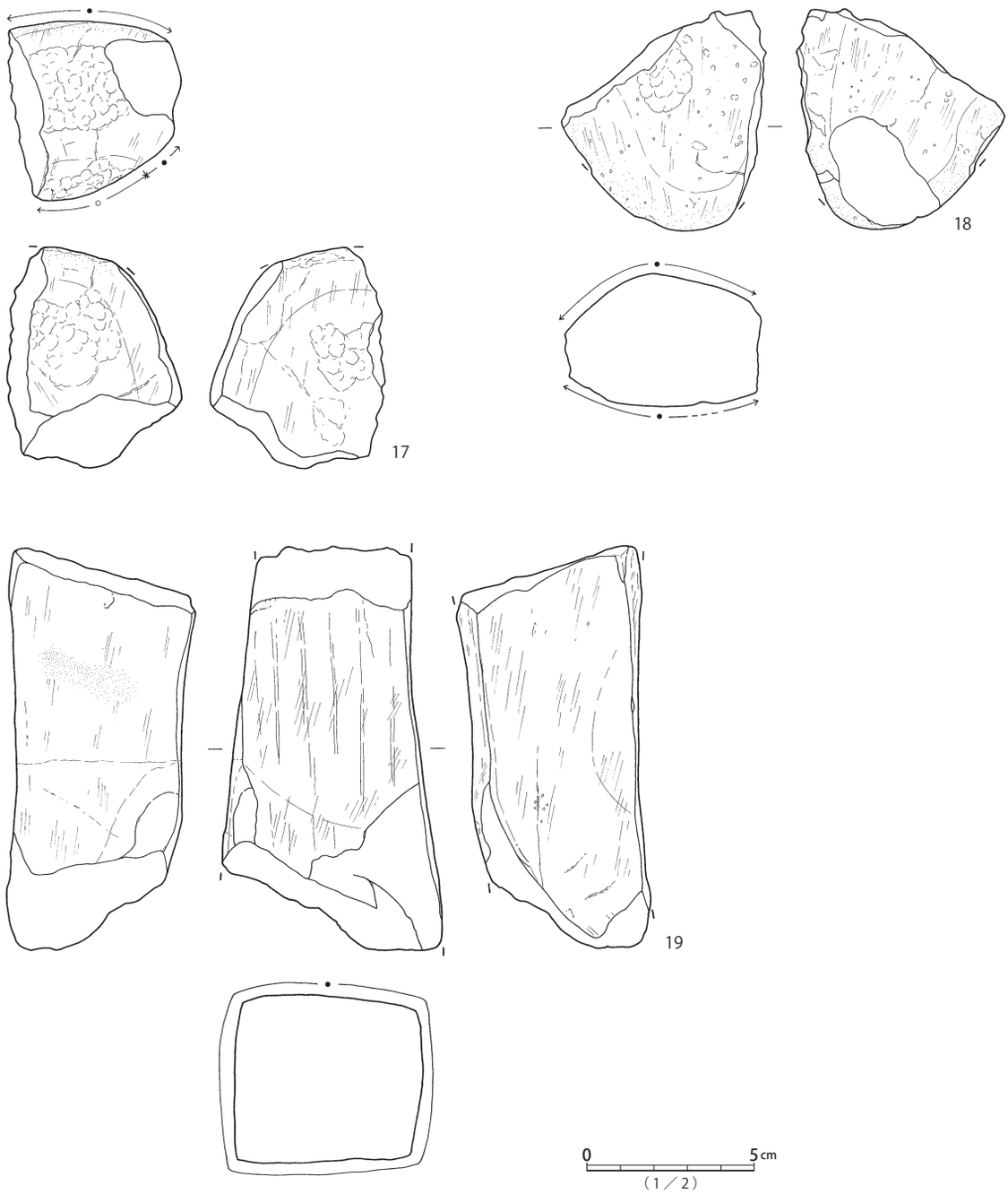


Fig.226　竪穴0217号(3) 遺物

竪穴0218号　（Fig.227、PL.33・68・95・114・142）

SH−03を中心に位置する。西隅で溝2020号（上層）と重複し、東側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が2020号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈し、推定規模は5.29×5.60m、推定遺構下場面積は25.9㎡、確認面からの深さは0.24mを測る。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1・2は主柱穴であるが、南隅からはこれに対応する柱穴が検出されていない。P1・2を結ぶ線を基準とした場合、これ

と直交する軸の方位はN−51°−Wとなる。壁周溝は検出されていない。調査図面に記載がなく、出土位置は不明であるが、貝層サンプルが採取されており、分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1・2は壺形土器、3は器種不明の底部、4・5は甕形土器である。1の頸部には刺突文と櫛描横線文が巡る。4は竪穴0220号3と同一個体で、混入と思われる。土器以外では6の土製有孔丸玉（土玉）が出土している。

弥生時代終末期の所産と思われるが、古墳時代前期前葉の可能性もある。

竪穴0220号　（Fig.228、PL.32・68・114）

SH−21を中心に位置する。西側で竪穴0216・0217号、南側で竪穴0221号、東側で溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0216・0217号よりも新しく、2020号よりも古い。0221号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく明確でないが、出土遺物の検討からは本遺構のほうが新しいと思われる。

平面形態は胴張隅丸方形ないし方形を呈すと思われるが、北東・南西辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。規模は一辺4.43m、確認面からの深さは0.22mを測る。南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−49°−Wとなる。炉跡や明確な主柱穴、壁周溝は検出されていない。遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1〜3・11・12は甕形土器、4は台付甕形土器、5は直口縁壺形土器、6・7は器種不明の底部、8・9は高杯形土器、13・14は壺形土器である。10は外面ハケ調整が施される厚手の土器で、炉器台形土器であろうか。2・3は頸部がくの字状に屈折し、直線的に開く口縁部の断面は三角形を呈する。3は竪穴0218号4、14は竪穴0217号6と同一個体である。

古墳時代前期中葉の所産と考えられる。

竪穴0221号　（Fig.229、PL.68・69）

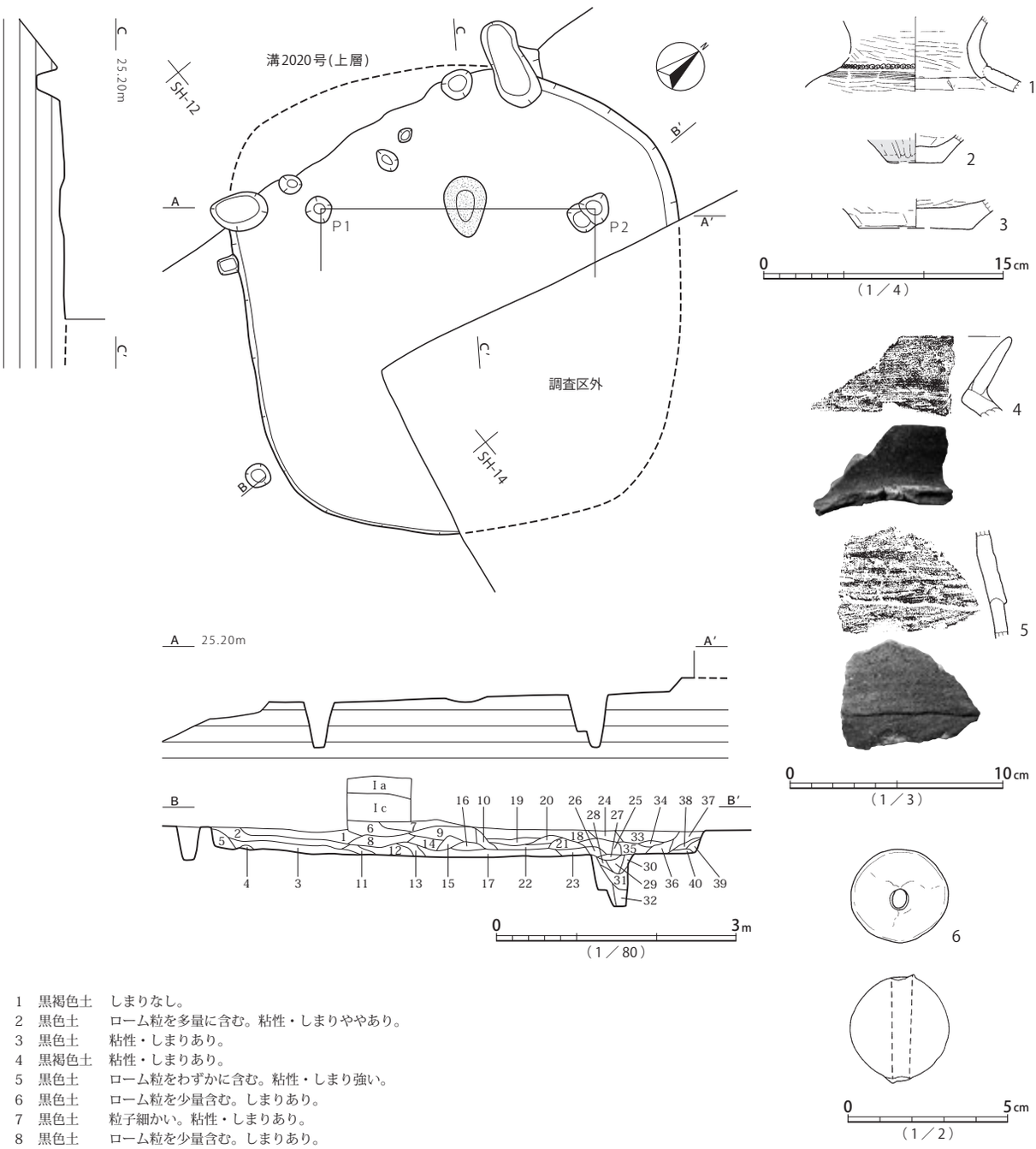
SH−31を中心に位置する。北西側で竪穴0220号、東隅で竪穴0226号、中央で溝2020号（上層）、西側で古墳2022号と重複する。新旧関係は、本遺構が0226号よりも新しく、2020・2022号よりも古い。0220号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく明確でないが、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は方形を呈し、推定規模は5.88×6.29m、推定遺構下場面積は31.1㎡、確認面からの深さは0.43mを測る。南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−27°−Wとなる。炉跡は検出されていないが、2020号に壊された可能性がある。主柱穴は検出されていない。遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。P1は貯蔵穴の可能性がある。壁周溝は南西辺からのみ検出されている。調査図面に記載がなく出土位置は不明であるが、貝層サンプルが採取されており、分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1は直口縁壺形土器、2は壺形土器、3は台付甕形土器、4は高杯形土器である。5は蓋形土器であろうか。1の頸部内面はケズリ状のヘラナデを施す。1〜3・5は北東辺壁付近から検出され、いずれも覆土中からの出土。4はP1脇からの出土である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

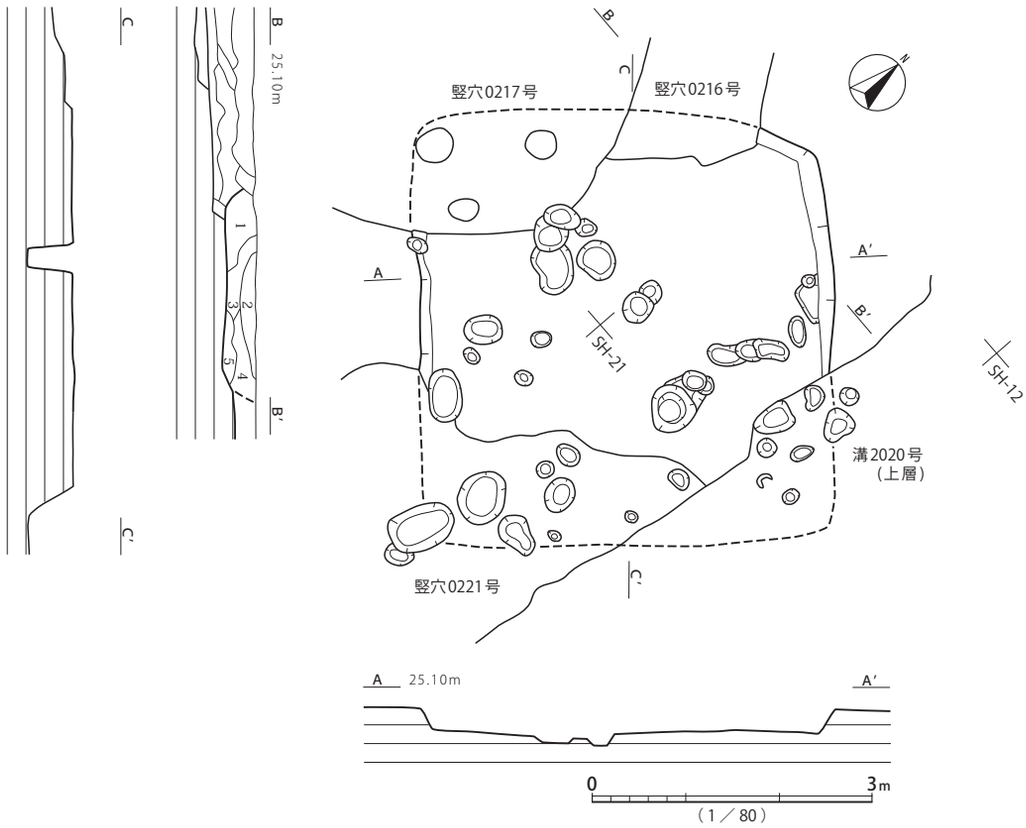
竪穴 0218号



1 黒褐色土 しまりなし。
2 黒色土 ローム粒を多量に含む。粘性・しまりややあり。
3 黒色土 粘性・しまりあり。
4 黒褐色土 粘性・しまりあり。
5 黒色土 ローム粒をわずかに含む。粘性・しまり強い。
6 黒色土 ローム粒を少量含む。しまりあり。
7 黒色土 粒子細かい。粘性・しまりあり。
8 黒色土 ローム粒を少量含む。しまりあり。
9 黒色土 黒褐色土を含む。粒子細かい。粘性強く、しまりあり。
10 黒褐色土 黒色土が混じる。しまりあり。
11 黒褐色土 黒色土を含み、ロームもわずかに混じる。粘性・しまりあり。
12 黒色土 ローム粒子を少量含み、しまりあり。
13 黒色土 暗褐色土を含む。粒子細かく、粘性・しまりあり。
14 黒色土 ローム粒を多く含む。
15 黒色土 小ロームブロックを少量含む。しまりあり。
16 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。
17 黒褐色土 ロームをわずかに含む。粘性・しまりあり。
18 黒色土 ロームを少量含む。しまりあり。
19 黒色土 ロームを少量含む。しまりあり。
20 黒褐色土 黒色土を少量含む。しまりややなし。
21 黒褐色土 暗褐色土を少量含む。粘性・しまりあり。
22 黒褐色土 ロームを少量含む。しまりややなし。
23 黒褐色土 暗褐色土を含む。粘性・しまりあり。
24 黒色土 ローム土を多量に含む。しまり強い。
25 黒褐色土 ローム粒・小ロームブロックを少量含み、黒色土も混じる。しまりややなし。
26 黒褐色土 暗褐色土を含む。しまりなし。
27 黒色土 小ロームブロックをわずかに含み、暗褐色土も混じる。粘性・しまりなし。
28 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。
29 黒褐色土 黒色土を含む。しまりなし。
30 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。
31 暗褐色土 粒子細かい。粘性・しまりあり。
32 黒褐色土 ロームを少量含む。しまりなし。
33 黒色土 ロームをわずかに含む。しまり強い。
34 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。
35 黒色土 しまりあり。
36 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。
37 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまりあり。
38 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまりあり。
39 黒褐色土 暗褐色土が混じる。しまりややなし。
40 黒褐色土 粒子細かい。しまりあり。

Fig.227 竪穴0218号 遺構遺物

竪穴 0220号



1　暗褐色土　ロームブロックを含む。しまりなし。
2　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
3　暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
4　暗褐色土　ローム粒を多く含み、やや褐色味が強い。しまりあり。
5　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。

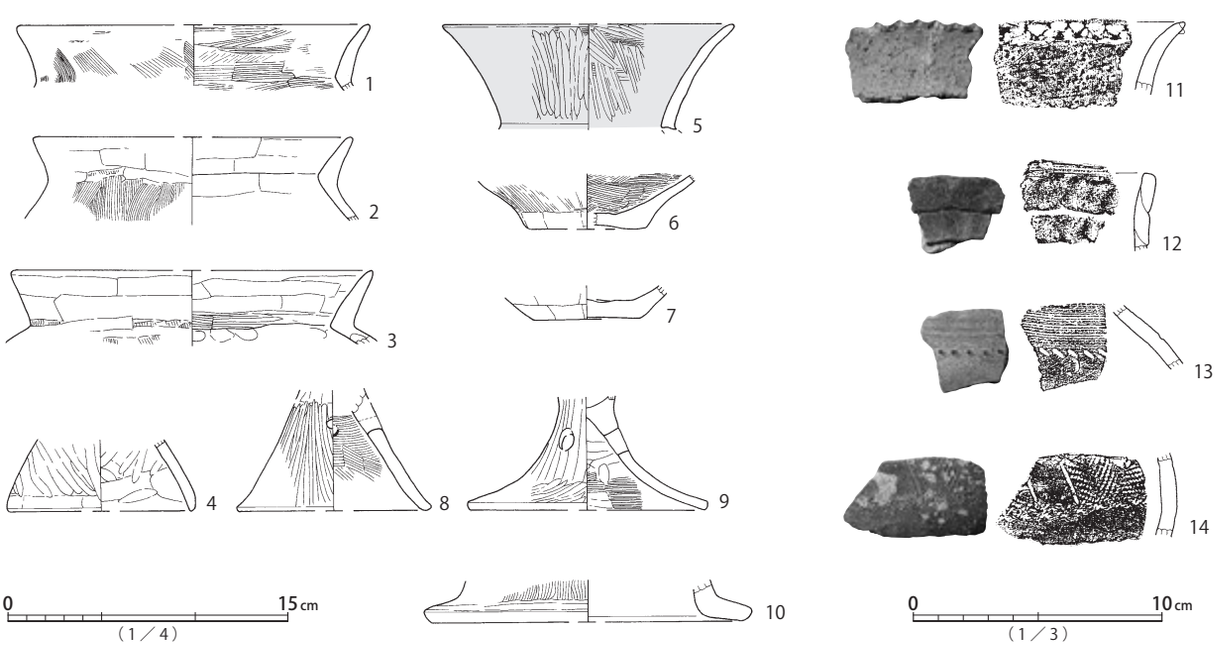
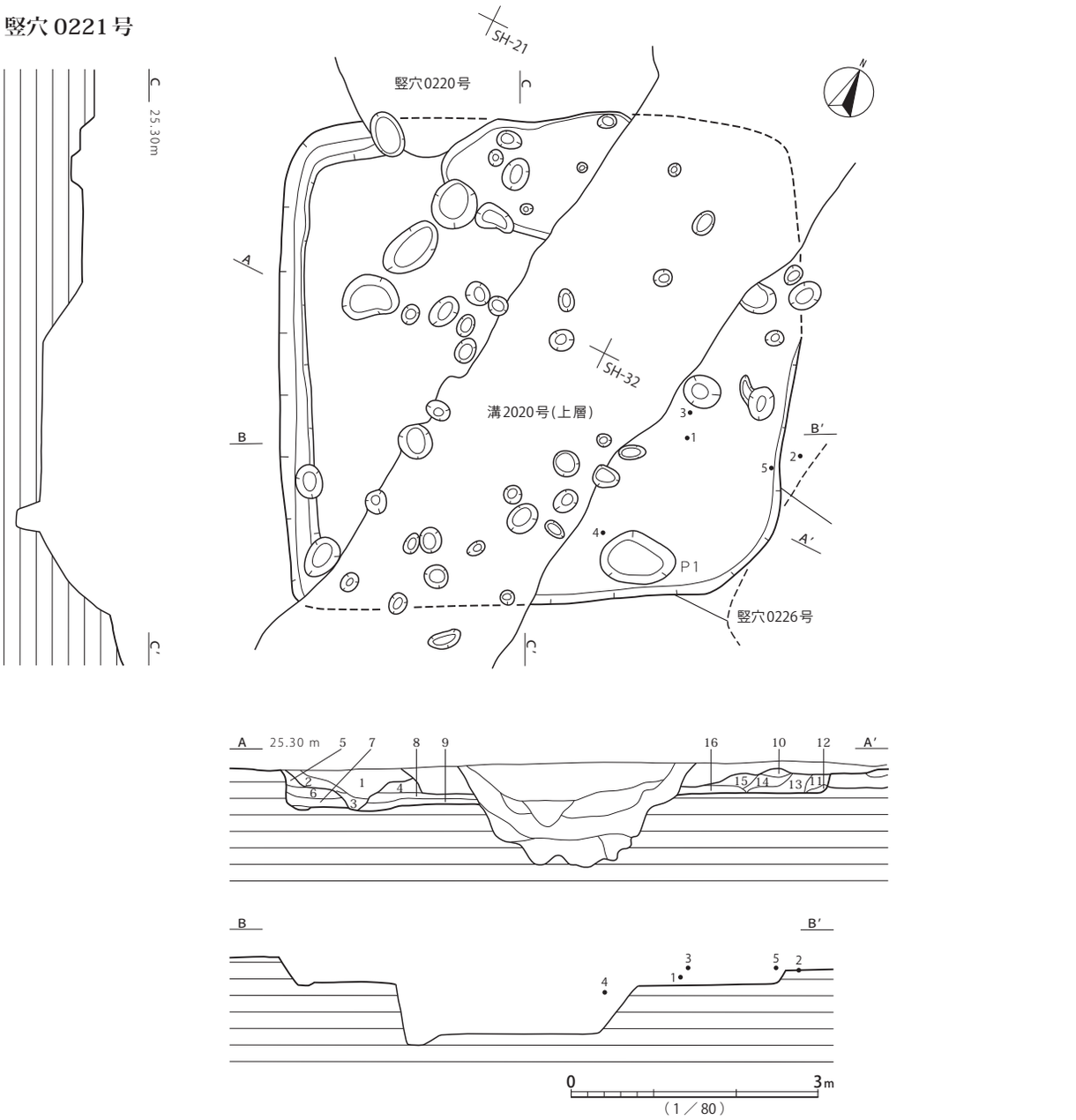


Fig.228　竪穴0220号 遺構遺物

竪穴 0221 号



1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりなし。古墳2022号覆土。
2　黒褐色土　ローム粒を多く含む。しまりなし。古墳2022号覆土。
3　黒褐色土　ロームを多く含む。しまりなし。古墳2022号覆土。
4　暗褐色土　小ロームブロックをわずかに含む。
5　黒褐色土　ロームを少量含む。しまりなし。
6　黒褐色土　ロームを少量含む。しまりあり。
7　暗褐色土　ローム土を多く含み、やや褐色味が強い。しまりややあり。
8　黒褐色土　ロームをわずかに含む。しまりなし。
9　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり強い。
10　暗褐色土　焼土をわずかに含む。
11　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
12　暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
13　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりなし。
14　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
15　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。やや黒色味を帯びる。
16　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりなし。

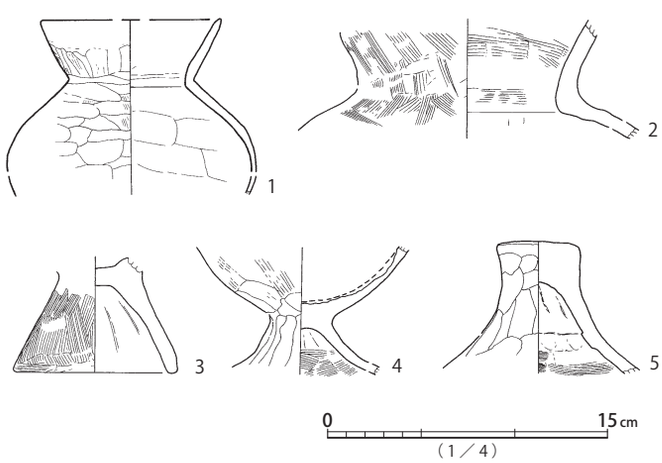


Fig.229　竪穴0221号 遺構遺物

竪穴0222号 （Fig.230～232、PL.33・68・69・114）

SG−48を中心に位置する。南東側で竪穴0223・0224号、溝2021号（上層）と重複し、西隅は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。土層断面の観察からは、0222号→0223号→0224号の順に構築されたものと考えられる。

平面形態は大型の方形を呈し、推定規模は8.81×8.65m、推定遺構下場面積は66.2㎡、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位はN−50°−Wである。炉跡は遺構中央やや北西寄りから検出され、周囲に粘土の堆積が確認されている。P1～4は主柱穴で、大型の掘り方をもつ。P5は本遺構に伴う貯蔵穴と考えられ、平面形態は隅丸長方形を呈す。壁周溝は全周するものと考えられる。

実測可能遺物は、1～3・14・15は甕形土器、4～11は器種不明の底部、12・13は高杯形土器、16は直口縁壺形土器、17・18は椀形土器である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0223号 （Fig.230～232、PL.33・69・114）

SG−59を中心に位置する。西側で竪穴0222号、東側で竪穴0224号、溝2021号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0222号よりも新しく、0224・2021号よりも古い。

平面形態は方形を呈すと思われるが、南隅以外は明確な壁面を検出することができていない。確認面からの深さは0.42mを測る。南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−32°−Wとなる。竪穴0224号よりもわずかに深い掘り込みをもち、炉跡や貯蔵穴などの屋内施設が残存していた可能性があるが、0224号床面を除去した後の調査図面が存在せず、詳細は不明である。P1は主柱穴、南西壁沿いピットは壁柱穴の可能性があるが、明確でない。覆土中には、ローム粒やロームブロックを多量に含み、人為的に埋め戻された可能性がある。

実測可能遺物は、2・5・6は甕形土器、3は高杯形土器、7～9は壺形土器である。1は口縁部に最大径をもち、甕形ないし鉢形土器。4はミニチュア土器で、椀形であろうか。

古墳時代前期前葉の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0224号 （Fig.230・231・233、PL.33・69・114・134）

SG−49を中心に位置する。北西側で竪穴0222号、南西側で0223号、西側で溝2021号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0222・0223号よりも新しく、2021号よりも古い。

平面形態は方形を呈し、推定規模は4.37×4.30m、推定遺構下場面積は15.8㎡、確認面からの深さは0.43mを測る。主軸方位はN−55°−Wである。炉跡は中軸線上からやや南側にずれ、遺構西寄りから検出されている。南隅から検出されたP1は貯蔵穴で、蓋受け状の方形の掘り込みをもつ。明確な主柱穴は検出されず、壁周溝は南東辺壁の一部を除き、全周したものと考えられる。覆土中には、ローム粒やロームブロックを多量に含み、人為的に埋め戻された可能性がある。

実測可能遺物は、1～4・13・14は甕形土器、5・6は台付甕形土器、7・9は器種不明の底部、8は壺形土器、10～12は高杯形土器である。甕形土器には頸部がゆるく外反するもの、くの字状に屈折するもの、くの字傾向で口唇部に押捺を加えるものがある。土器以外では15の磨石・敲石が出土している。

竪穴 0222・0223・0224 号

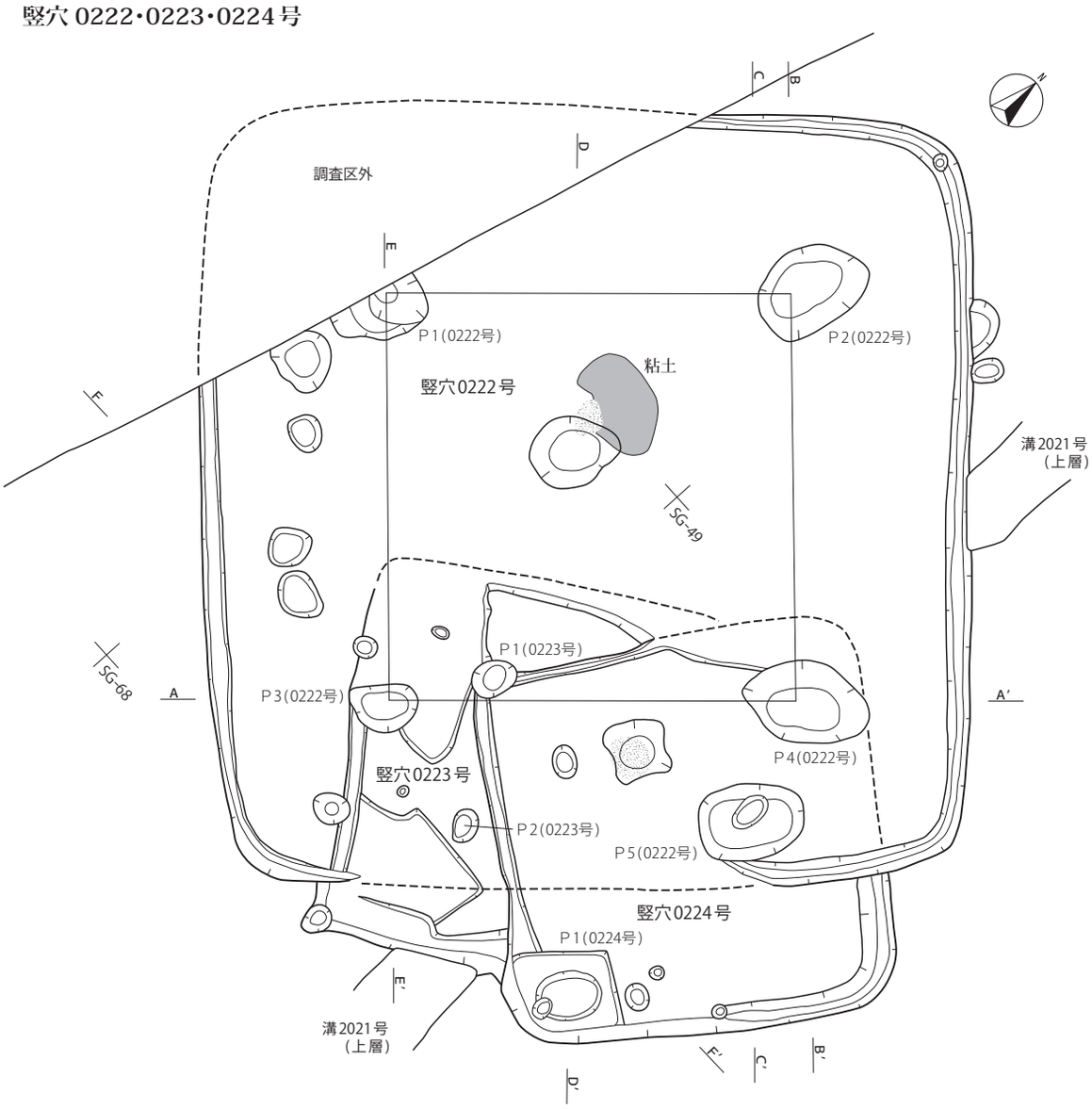
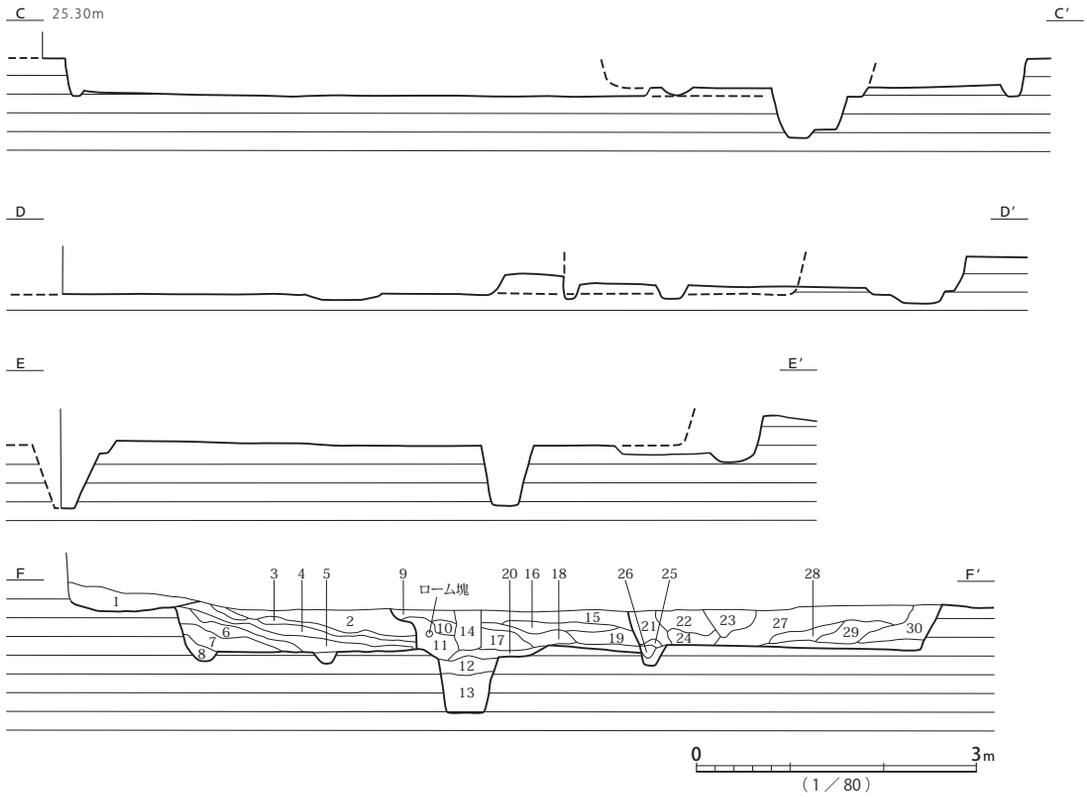


Fig.230　竪穴0222号(1) 遺構、竪穴0223号(1) 遺構、竪穴0224号(1) 遺構

竪穴 0222・0223・0224 号



0222号

1 黒褐色土 暗褐色土を少量含む。しまりあり。
2 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、黒褐色土も混じる。粘性・しまりあり。
3 黒褐色土 ローム粒・小ロームブロック・暗褐色土を少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒・小ロームブロックを多量に含み、黒色土・黒褐色土も混じる。粘性ややあり、しまりあり。
5 黒色土 ローム・小ロームブロックをわずかに含む。しまりあり。
6 黒褐色土 ローム粒を多量に含み、暗褐色土も混じる。粘性・しまりあり。
7 黒色土 ロームを少量含む。しまりあり。
8 暗褐色土 黒色土を少量含む。しまりなし。

0223号

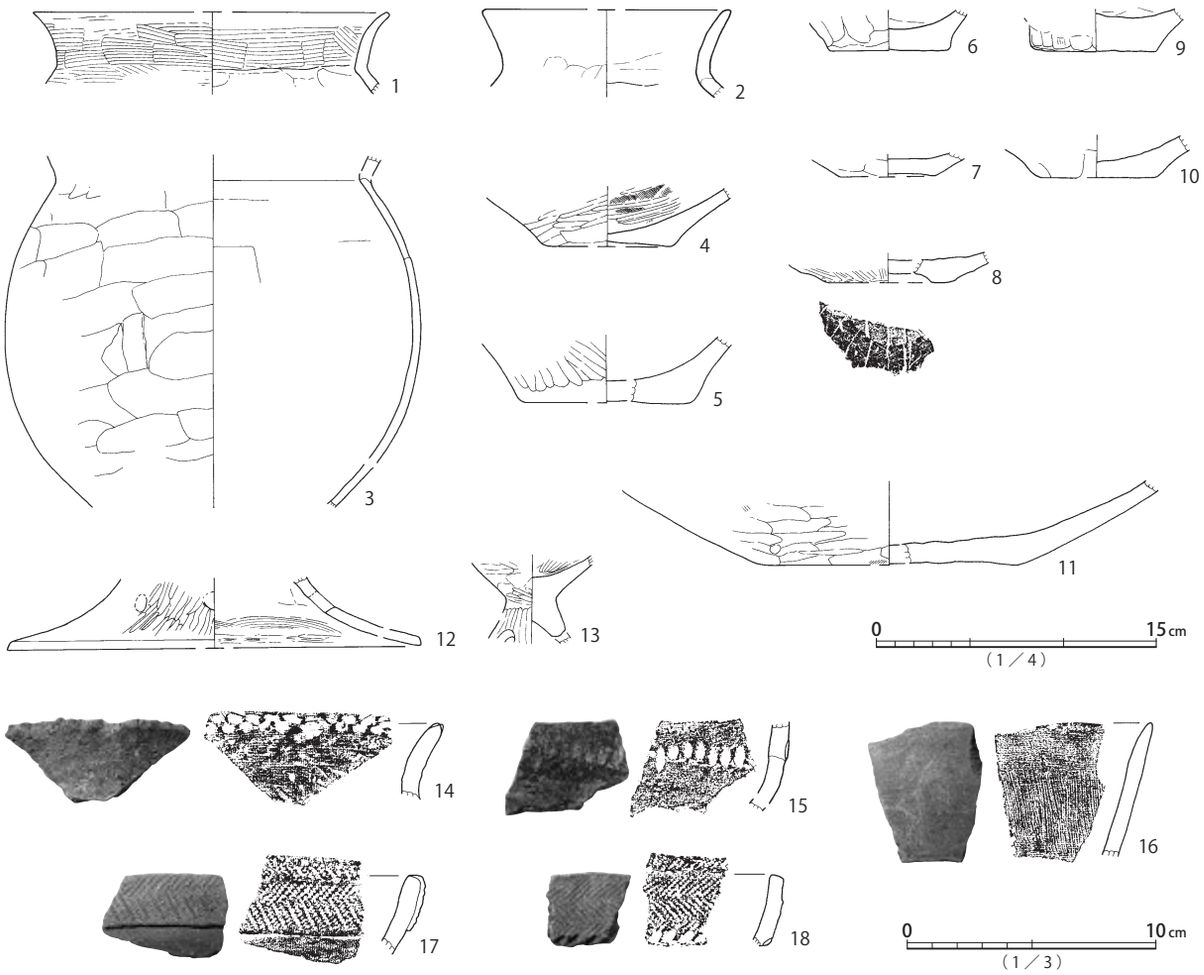
9 黒色土 ローム粒を多量に含み、小ロームブロックもわずかに混じる。
10 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。
11 黒褐色土 ローム粒・大小ロームブロックを少量含む。粘性ややあり、しまりあり。
12 黒色土 ローム粒・小ロームブロックを多量に含み、暗褐色土も混じる。しまりややあり。
13 暗褐色土 ロームを含み、黒色土もわずかに混じる。粘性・しまりなし。
14 黒色土 ローム粒を少量含む。しまりややなし。
15 暗褐色土 9層に似る。
16 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
17 黒褐色土 小ロームブロックを少量含む。しまりややあり。
18 暗褐色土 ローム粒・小ロームブロックを多量に含む。10層に似る。しまりあり。
19 黒褐色土 小ロームブロックをわずかに含む。
20 黒褐色土 小ロームブロックを多量に含み、ロームも混じる。粘性・しまり強い。

0224号

21 黒褐色土 ローム粒を多量に含み、小ロームブロックも少量混じる。
22 黒褐色土 ローム粒・小ロームブロックを多量に含む。しまりなし。
23 黒色土 ローム粒を多量に含む。しまりなし。
24 黒褐色土 焼土を少量含む。しまりあり。
25 暗褐色土 小ロームブロックを多量に含む。しまりあり。
26 黒褐色土 ロームを含む。しまりなし。
27 黒褐色土 ローム粒・小ロームブロックを多量に含み、黒色土ブロックも少量混じる。
28 暗褐色土 小ロームブロックを多量に含む。しまりあり。
29 暗褐色土 ロームを多量に含む。しまりあり。
30 暗褐色土 ローム粒・小ロームブロックを少量含む。しまりなし。

Fig.231 竪穴0222号(2) 遺構、竪穴0223号(2) 遺構、竪穴0224号(2) 遺構

竪穴 0222号



竪穴 0223号

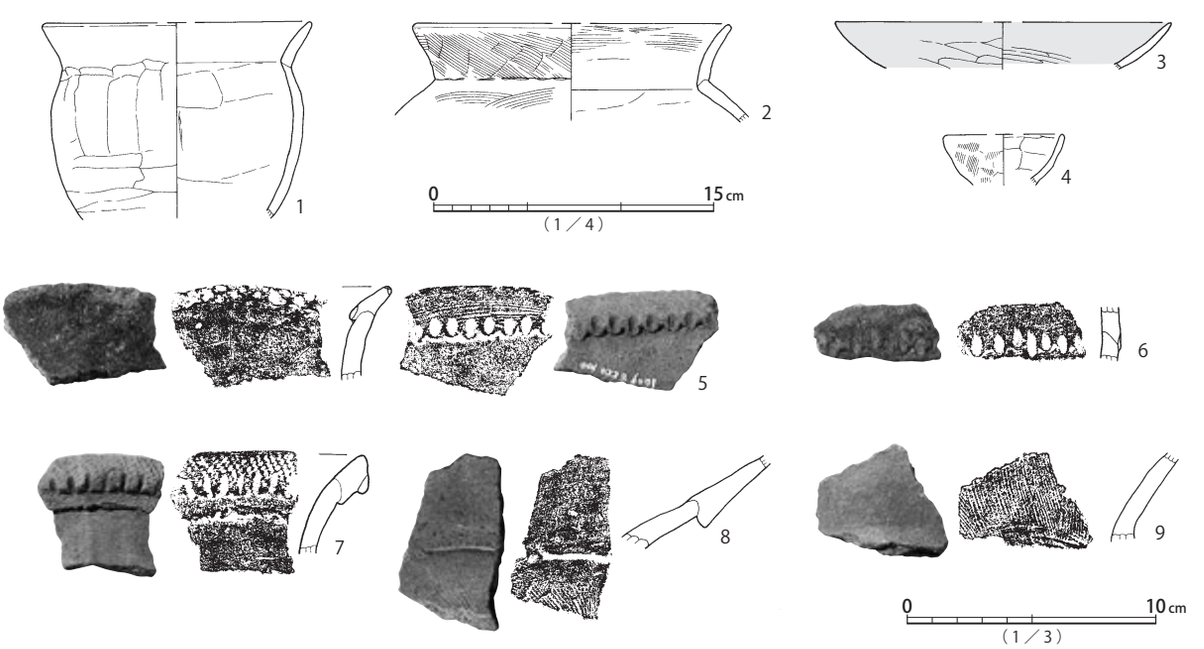


Fig.232　竪穴0222号(3) 遺物、竪穴0223号(3) 遺物

竪穴 0224 号

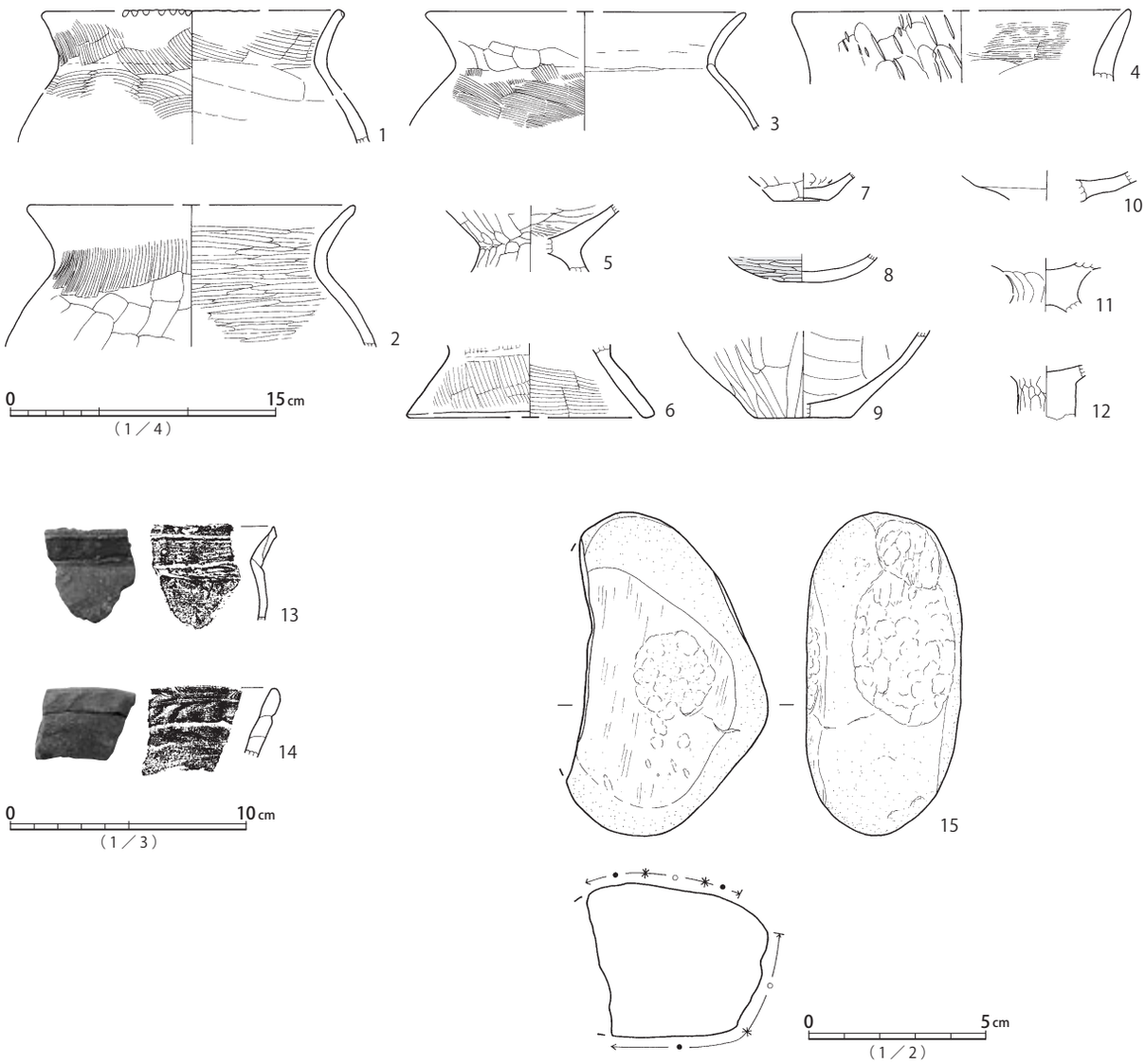


Fig.233　竪穴0224号(3) 遺物

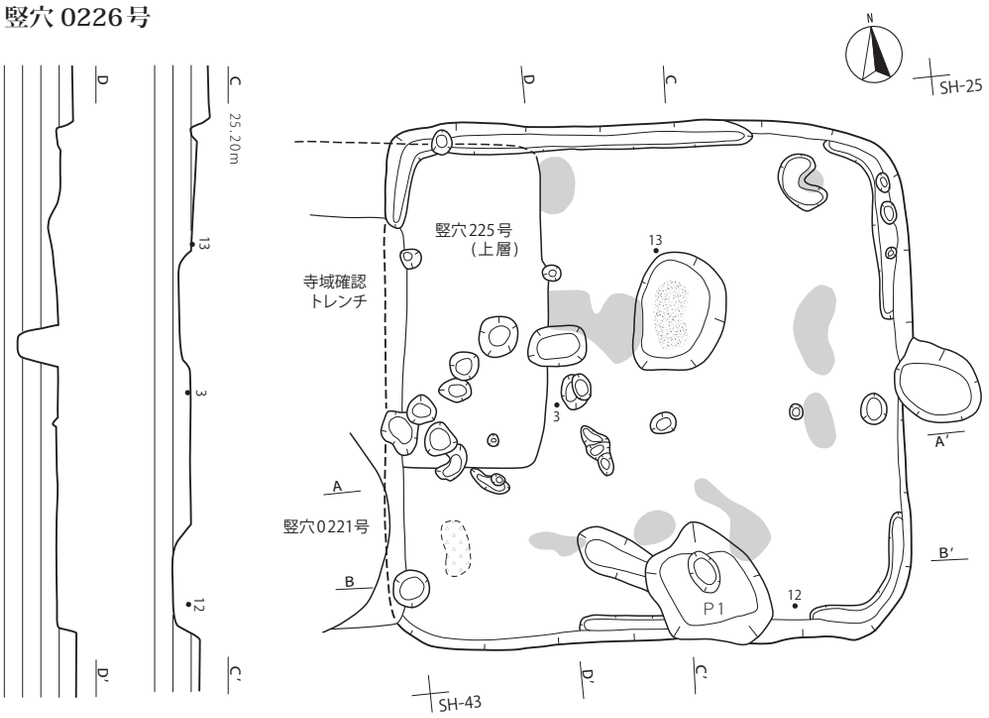
土層断面の観察では、本遺構がすべての竪穴を壊して構築されるが、出土遺物からは明確な時期差は認められない。貯蔵穴が遺構隅に位置する平面形態から古墳時代前期中～後葉の所産と思われるが、重複する遺構の遺物が混在する可能性が高く、帰属時期は明確でない。

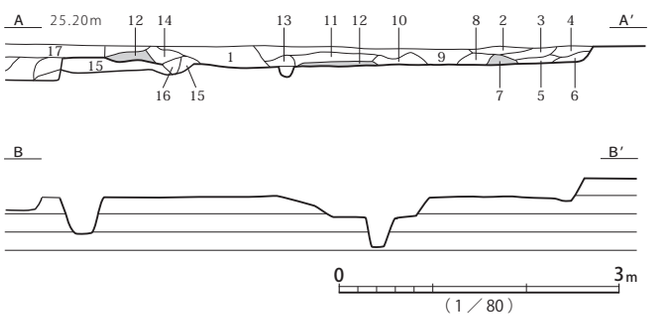
竪穴0226号　（Fig.234・235、PL.69・95・114・115・134・140）

SH−24を中心に位置する。北西側で竪穴225号（上層）、南西壁の一部で竪穴0221号と重複する。新旧関係は、本遺構が225号よりも古い。0221号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は方形を呈し、推定規模は5.49×5.62m、推定遺構下場面積は26.0㎡、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−3°−Eである。炉跡は遺構中央やや北寄りから検出されている。

竪穴 0226 号





1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
2　黒褐色土　混入物なし。
3　暗褐色土　ローム粒・焼土粒をわずかに含む。
4　黒褐色土　ローム粒を少量含む。しまり強い。
5　暗褐色土　混入物なし。ややしまりなし。
6　暗褐色土　ロームを多く含む。
7　暗褐色土　焼土を多く含む。しまりなし。
8　暗褐色土　ローム粒を少量含む。
9　黒褐色土　ローム粒を少量含む。しまりあり。
10　暗褐色土　ロームがブロック状に混じる。
11　黒色土　ローム粒をわずかに含む。しまり弱い。
12　暗褐色土　焼土を多く含む。
13　黒褐色土　ローム粒を多く含む。しまり弱い。
14　暗褐色土　焼土粒をわずかに含む。しまりあり。
15　暗褐色土　ローム粒を含む。しまりあり。
16　暗褐色土　混入物なし。しまりやや弱い。
17　暗褐色土　混入物ほとんどなく、やや茶色い。トレンチ覆土。

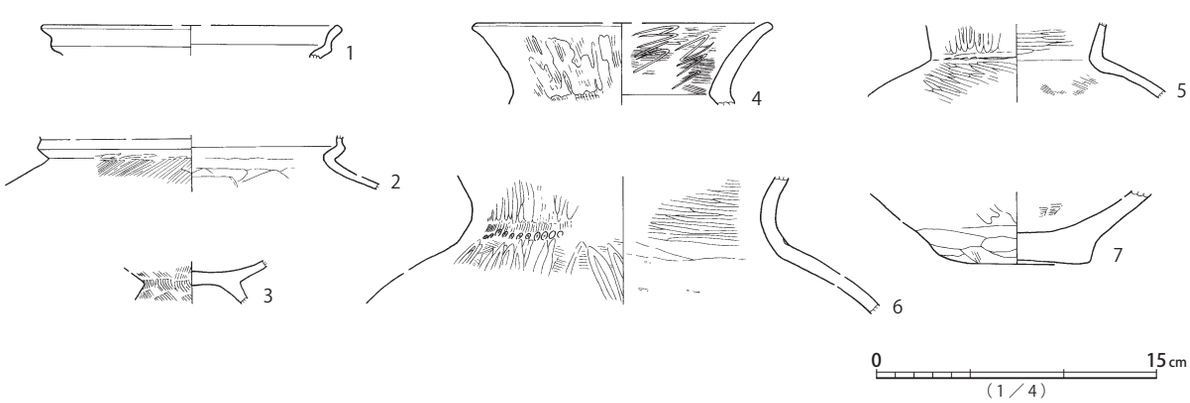


Fig.234　竪穴0226号(1) 遺構遺物

竪穴 0226号

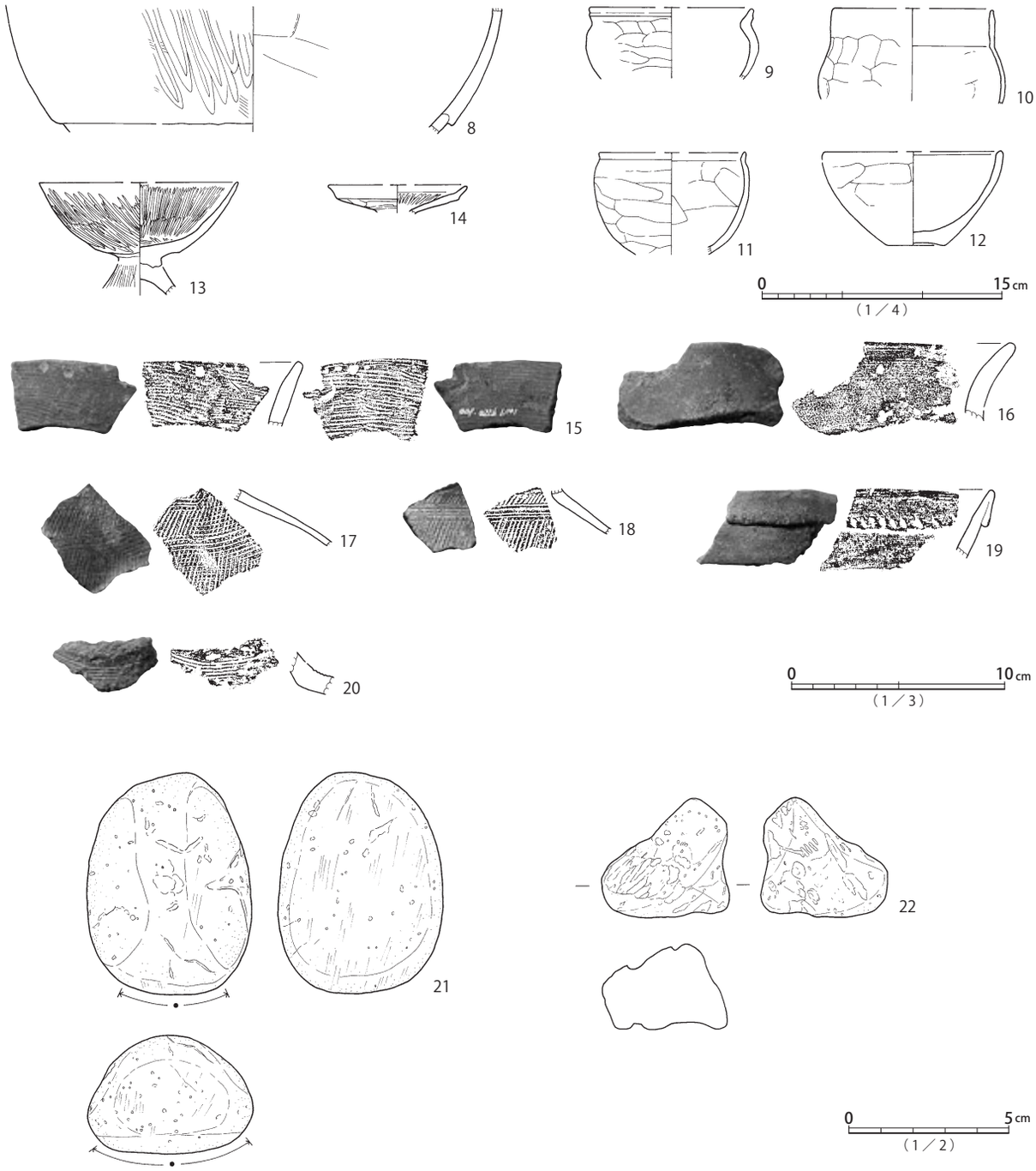
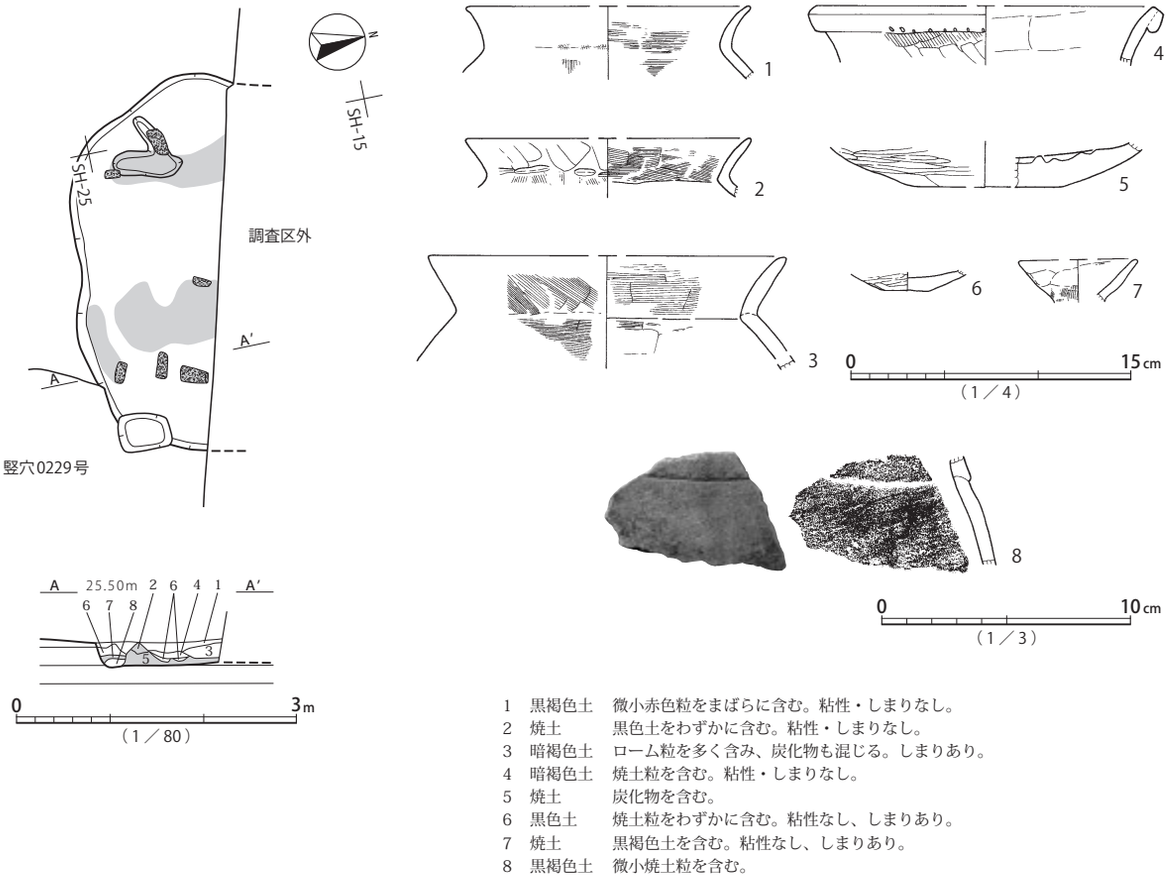


Fig.235　竪穴0226号(2) 遺物

南壁際から検出されたP1は貯蔵穴と考えられ、平面形態は方形を呈し、底面に柱穴状の掘り込みをもつ。壁周溝は断続的に巡る。主柱穴は検出されていない。床面からは焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。南西隅からは貝層が検出されており、分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1～3・17・18はS字状口縁台付甕形土器、4・5・20は壺形土器、6・8・19は広口壺形土器、7は器種不明の底部、9は受口状口縁の小型甕形土器、10は短頸壺形土器、11・12は椀形土器、13は高杯形土器、14は器台形土器、15・16は甕形土器である。1・2はS字甕B類で、別

竪穴 0227号



1　黒褐色土　微小赤色粒をまばらに含む。粘性・しまりなし。
2　焼土　黒色土をわずかに含む。粘性・しまりなし。
3　暗褐色土　ローム粒を多く含み、炭化物も混じる。しまりあり。
4　暗褐色土　焼土粒を含む。粘性・しまりなし。
5　焼土　炭化物を含む。
6　黒色土　焼土粒をわずかに含む。粘性なし、しまりあり。
7　焼土　黒褐色土を含む。粘性なし、しまりあり。
8　黒褐色土　微小焼土粒を含む。

Fig.236　竪穴0227号 遺構遺物

個体と思われるが明確でない。6～8は胎土の特徴から同一個体の可能性がある。3は遺構中央西寄り、12は南東隅付近、13は炉跡脇から検出され、いずれも床面上からの出土である。土器以外では21の磨石と22の軽石が出土している。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0227号　（Fig.236、PL.33・115）

SH－15を中心に位置する。南東側で竪穴0229号と重複し、北側は調査区外に延びる。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが新しいと考えられる。

平面形態は楕円形ないし隅丸方形を呈す可能性があるが、南側の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.24mを測る。南辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN－7°－Eとなる。遺構確認範囲からは、炉跡や貯蔵穴、主柱穴などの屋内施設は検出されていない。床面には焼土と炭化材が分布しており、火災に遭った可能性が高い。

実測可能遺物は、1～3は甕形土器、4は広口壺形土器、5・6は器種不明の底部、8は甕形土器である。7は小型品で、器台形土器ないし脚台部と思われる。甕形土器の頸部は、いずれもくの字状に屈折する。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0228号

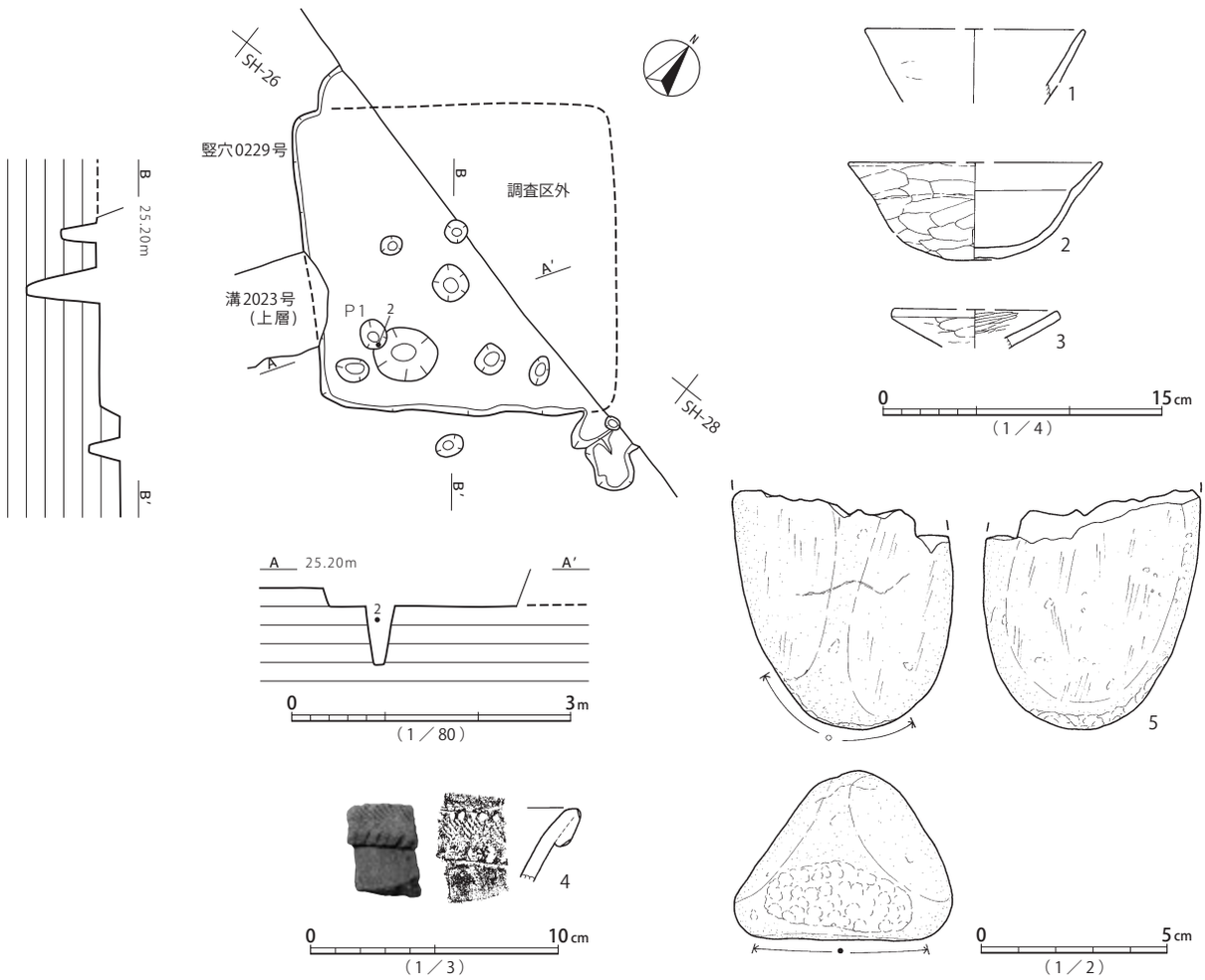


Fig.237　竪穴0228号 遺構遺物

竪穴0228号　（Fig.237、PL.33・69・115・134）

SH−27を中心に位置する。西側で竪穴0229号、中央で溝2023号（上層）と重複し、北側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が2023号よりも古い。0229号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが新しいと考えられる。

平面形態は小型の方形を呈し、推定規模は3.33×3.37m、推定遺構下場面積は10.0㎡、確認面からの深さは0.21mを測る。南東辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−39°−Wとなる。遺構確認範囲からは、炉跡や貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。P1は主柱穴の可能性があるが、その他の柱穴を含め、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1は直口縁壺形土器、2は鉢形土器、3は器台形土器、4は壺形土器である。2はP1からの出土である。土器以外では5の磨石・敲石が出土している。

古墳時代前期中〜後葉の所産と思われる。

竪穴0229号　（Fig.238、PL.33・69・95・115）

SH−26を中心に位置する。北西側で竪穴0227号、東側で竪穴0228号、南側で溝2023号（上層）

竪穴 0229号

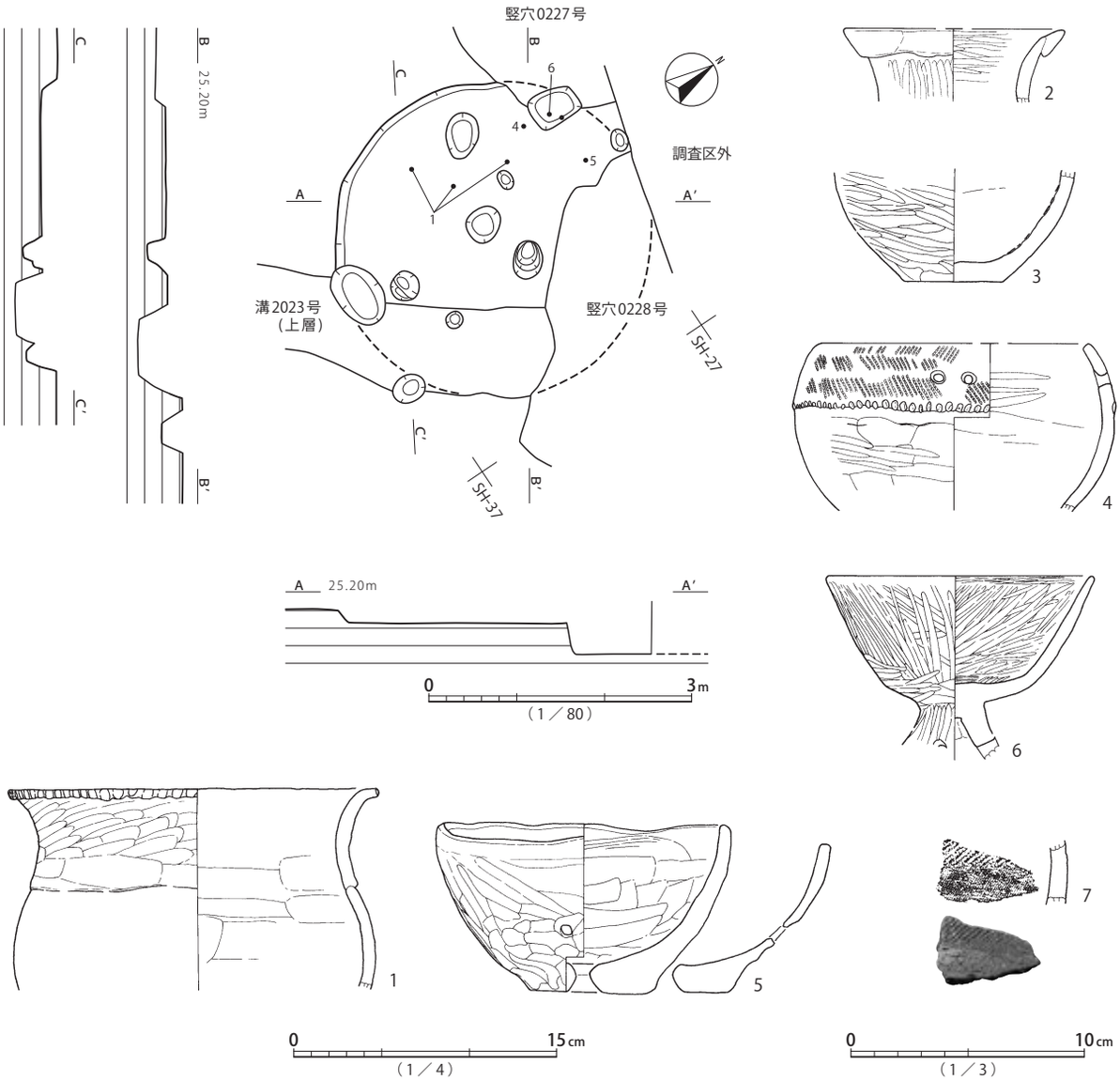


Fig.238　竪穴0229号 遺構遺物

と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構がいずれの遺構よりも古いと考えられる。

平面形態は小型の楕円形を呈すと思われるが、南西壁が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は直径3.58m、推定遺構下場面積は9.4㎡、確認面からの深さは0.17mを測る。遺構範囲からは複数の柱穴が検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。炉跡や貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2・3・7は壺形土器、4・5は椀形土器、6は高杯形土器である。2と3は同一個体と思われる。5は焼成前に底部穿孔を施し、体部下半の器面を抉り取る。体部下半の穿孔は焼成後のものである。6の杯部は深い箱形を呈す。1・4～6はいずれも遺構北西寄りから検出されているが、6は方形を呈す貯蔵穴状の掘り込み範囲からの出土で、本遺構に伴うものかは明確で

竪穴0230号

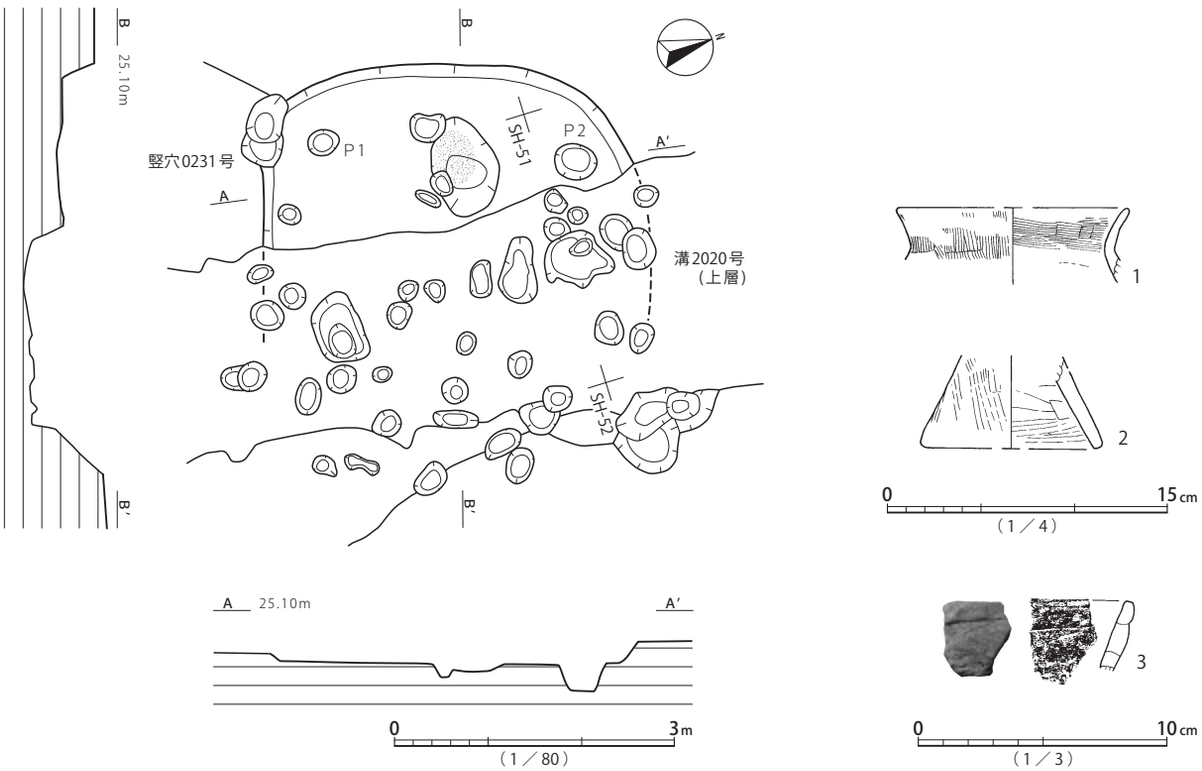


Fig.239　竪穴0230号 遺構遺物

ない。垂直位置は記録類が不備のため、不明である。

弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

竪穴0230号　（Fig.239、PL.33・115）

SH−51を中心に位置する。南側で竪穴0231号、東側で溝2020号（上層）、西側で古墳2022号（推定）と重複する。新旧関係は、本遺構が2020・2022号よりも古い。0231号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、遺構東側が上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝2020号）により壊されるため、詳細は不明である。確認面からの深さは0.29mを測る。主軸方位はN−74°−Wである。炉跡は中軸線上西寄りから検出されている。P1・2は主柱穴の可能性があるが、明確でない。また、遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものが含まれるかは不明である。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は台付甕形土器である。3は椀形土器と思われる。1の頸部は屈折傾向を示す。3は口縁端部を面取りし、粘土紐積み上げ痕を残す。

弥生時代後期後半の所産と思われるが、出土遺物からは古墳時代前期前葉の可能性がある。

竪穴0231号　（Fig.240、PL.33・69・115）

SG−70を中心に位置する。北側で竪穴0230号、東側で溝2020号（上層）、北西側で古墳2022号

と重複する。新旧関係は、本遺構が2020・2022号よりも古いと考えられる。0230号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は、現状不整楕円形を呈すが、切り合いが激しく、詳細は不明である。確認面からの深さは0.22mを測る。炉跡は遺構北西寄りから検出されている。炉跡の長軸を基準とした場合、主軸方位はN−49°−Wとなる。遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものが含まれるかは明確でない。

実測可能遺物は、1〜3・6・11は甕形土器、4・5・7・13は壺形土器、8・9は器種不明の底部、10は高杯形土器、12・14は広口壺形土器である。11はタタキ整形ののちヘラナデを施す。甕形土器の頸部はくの字状に屈折し、胴部は球形を呈す。

古墳時代前期前葉の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0232号　（Fig.241・242、PL.33・70・115・132・134）

SH−47を中心に位置する。東隅で土坑（遺構番号なし）と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。

平面形態は方形を呈すと考えられるが、掘り込みが浅く、東側の壁は検出されていない。推定規模は5.18×5.17m、推定遺構下場面積は23.7㎡、確認面からの深さは0.09mを測る。主軸方位はN−45°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されているが、焼土範囲のみで、掘り込みは認められない。P1〜3は主柱穴と思われるが、北隅からはこれに対応する柱穴が検出されていない。遺構南側が1段下がるのは、掘りすぎであろう。

実測可能遺物は、1〜7・9・12は甕形土器、8はS字状口縁台付甕形土器、10・11は器種不明の底部、13は直口縁壺形土器、14・15は鉢形土器、17は高杯形土器、18は器台形土器、19は壺形土器、20は椀形土器である。16は壺形土器の胴部と思われる。甕形土器の頸部はくの字状に屈折し、胴部は球形を呈す。土器以外では21の磨製石斧転用敲石と22の磨石・敲石が出土している。1は遺構中央南寄り、3・9・12はP3脇、10・20は炉跡付近から検出されている。垂直位置が床面より若干下がっているが、恐らく床面上からの出土であろう。

古墳時代前期中葉の所産と考えられる。

竪穴0233号　（Fig.243・244、PL.33・70・115・134・143）

SH−59を中心に位置する。北東隅で竪穴0234号・土坑319号（上層）、東辺壁中央で竪穴0235号、南西隅で竪穴0245号・土壙墓318号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0234・0235号よりも新しく、318・319号よりも古い。0245号との関係は、出土遺物が少なく明確でない。

平面形態は方形を呈し、推定規模は6.55×6.54m、推定遺構下場面積は33.2㎡、確認面からの深さは0.10mを測る。主軸方位はN−13°−Wである。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴と考えられ、建て替えが行われた可能性がある。北西・南東隅が1段下がるのは、掘り方まで掘削したためであろう。壁周溝が巡り、炉跡は検出されていない。

実測可能遺物は、1・6・7は甕形土器、2〜4は器種不明の底部、5は高杯形土器、8は壺形土器である。1は胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残し、6は頸部内面に弱い屈曲線をもつ。土器以外で

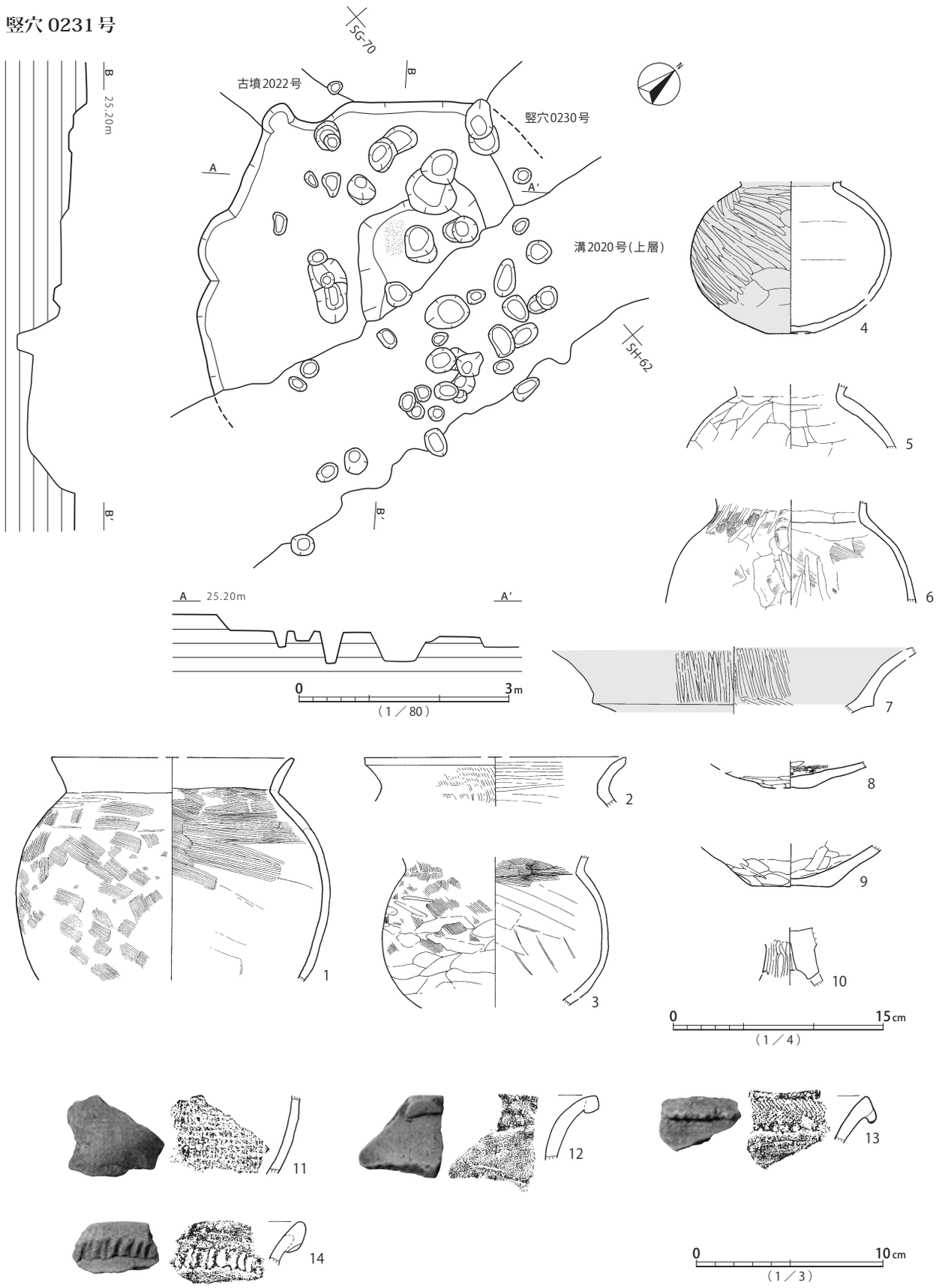


Fig.240　竪穴0231号 遺構遺物

竪穴 0232 号

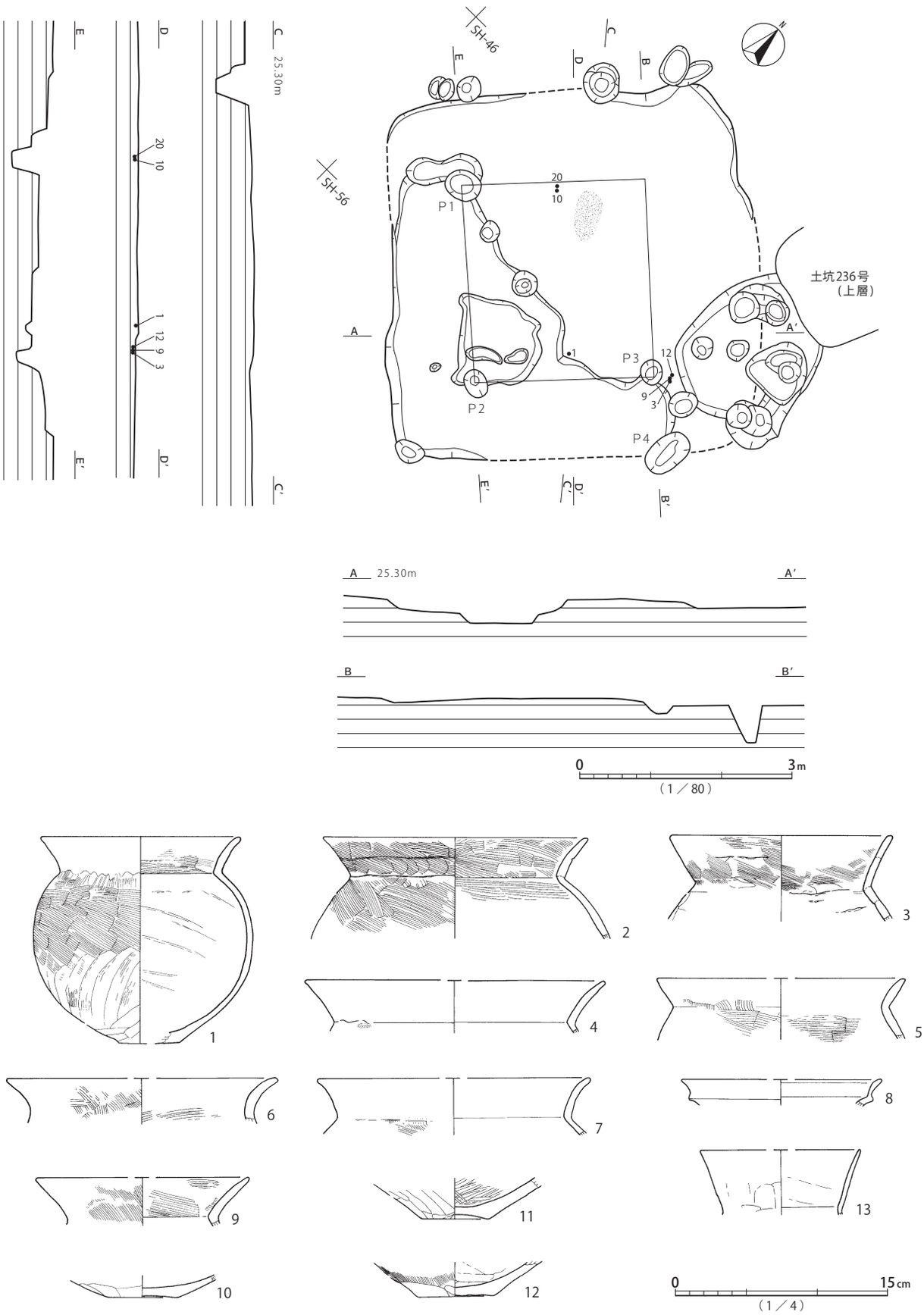


Fig.241　竪穴0232号(1) 遺構遺物

竪穴 0232号

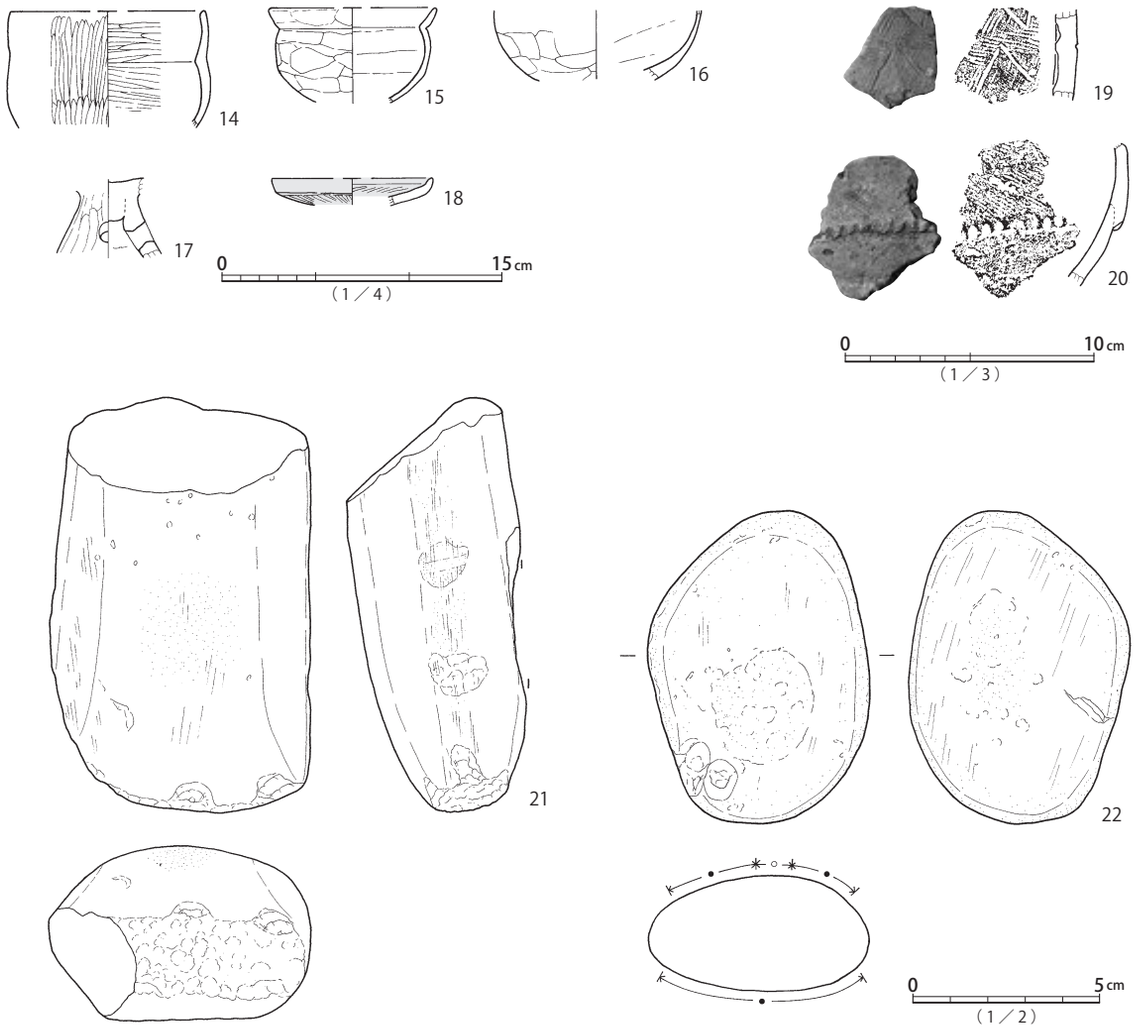


Fig.242　竪穴0232号(2) 遺物

は9の高杯形土器口縁部を転用した砥石と10の敲石が出土している。9にはV字状の溝が残り、溝部分から折れている。

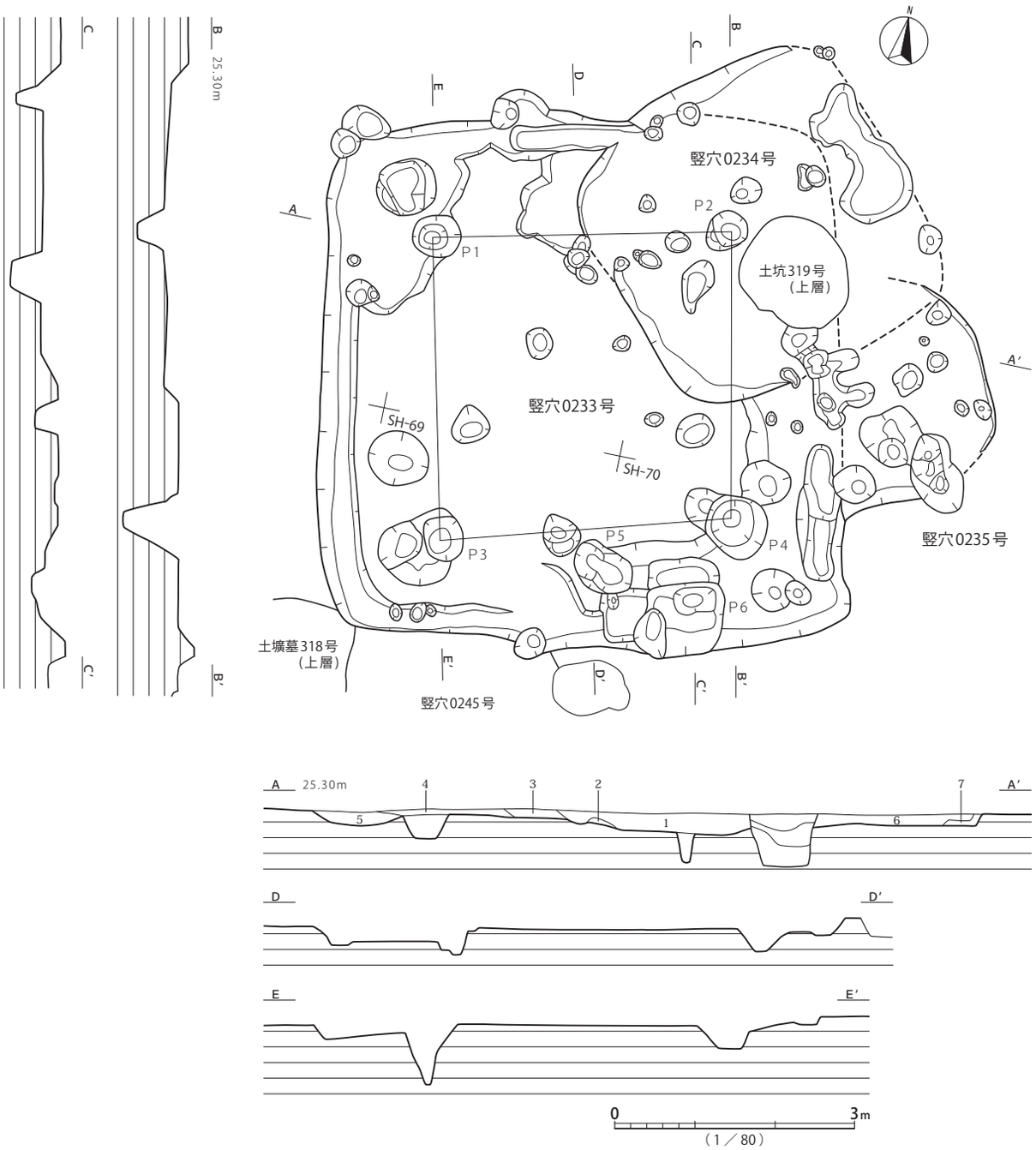
遺構平面形態から古墳時代前期前葉の所産と思われるが、弥生時代終末期後半の可能性もある。

竪穴0234号　（Fig.243・244、PL.33・115・116・143）

SH−60を中心に位置する。南西側で竪穴0233号、南東側で竪穴0235号・土坑319号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0233・319号よりも古い。0235号との関係は、土層断面の観察からは0234号→0235号の順になるが、明確でない。

平面形態は隅丸方形を呈すと考えられるが、東壁が検出されないため、詳細は不明である。推定規模は3.96×3.80m、推定遺構下場面積は11.8㎡、確認面からの深さは0.20mを測る。南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−42°−Wとなる。炉跡や貯蔵穴、主柱穴などの屋内施設は検出されていない。

竪穴 0233・0234・0235 号



0233号

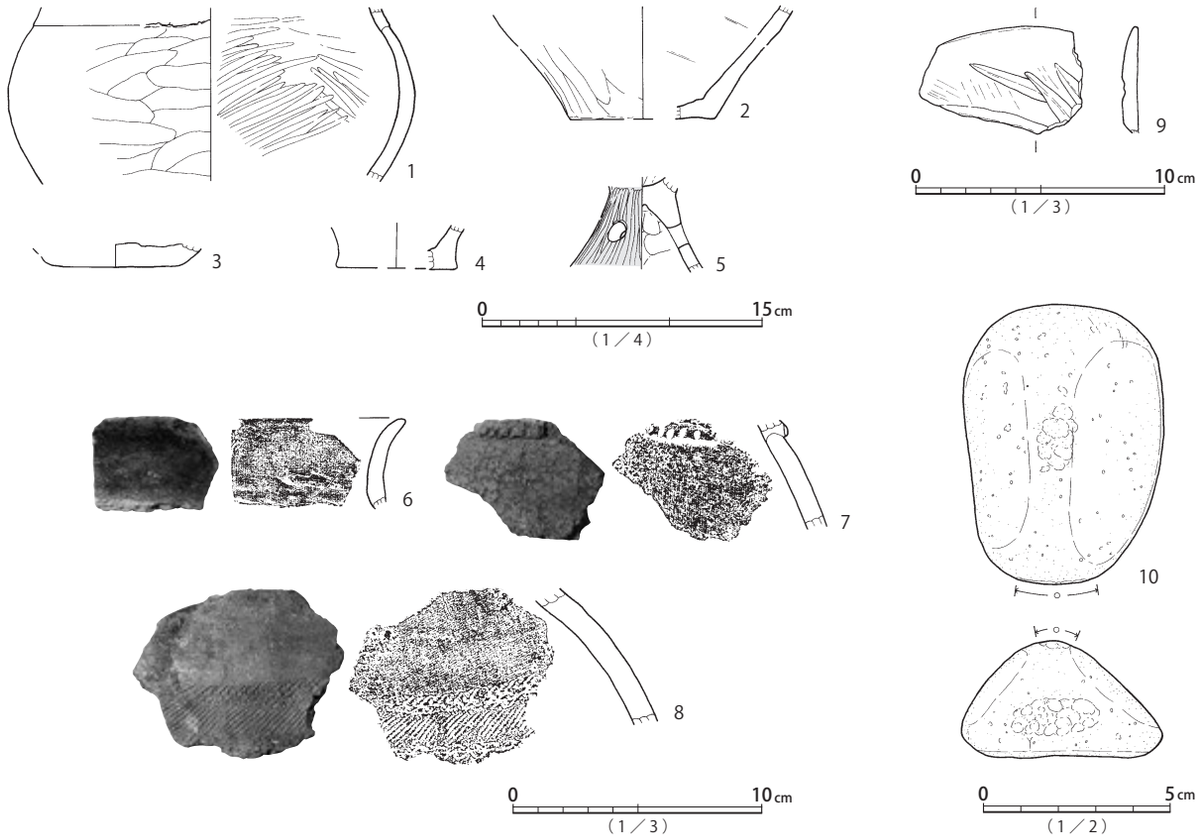
1　黒褐色土　ローム粒を少量含み、小ロームブロックもわずかに混じる。しまりあり。
2　暗褐色土　焼土を少量含む。しまりあり。
3　黒褐色土　ローム粒を多量に含み、小ロームブロックもわずかに混じる。しまりあり。
4　黒褐色土　ローム粒を少量含み、小ロームブロックもわずかに混じる。しまりあり。
5　黒褐色土　ロームをわずかに含み、暗褐色土も混じる。粘性・しまりあり。

0235号

6　黒褐色土　ローム粒を少量含み、小ロームブロックもわずかに混じる。しまりあり。
7　暗褐色土　ロームを少量含む。粘性やや弱い。

Fig.243　竪穴0233号(1) 遺構、竪穴0234号(1) 遺構、竪穴0235号 遺構

竪穴 0233 号



竪穴 0234 号

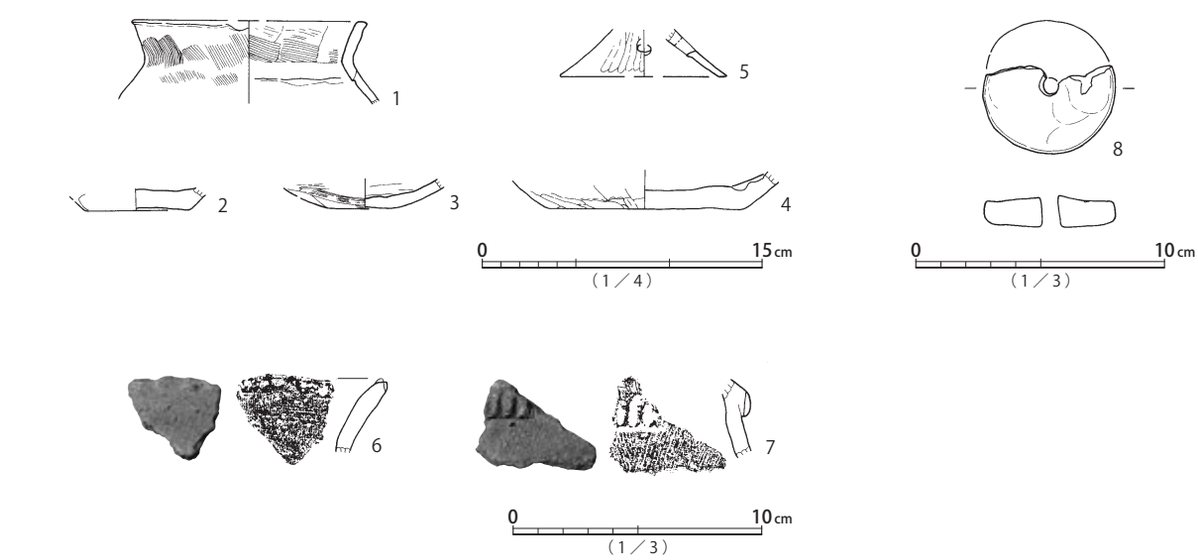


Fig.244　竪穴0233号(2) 遺物、竪穴0234号(2) 遺物

実測可能遺物は、1・6・7は甕形土器、2～4は器種不明の底部、5は器台形土器である。1の頸部はくの字状に屈折し、口縁部は直線的に開く。土器以外では8の土製紡錘車が出土している。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0235号 （Fig.243）

SI－51を中心に位置する。西側で竪穴0233・0234号と重複する。新旧関係は、本遺構が0233号よりも古い。0234号との関係は、土層断面の観察からは0234号→0235号の順になるが、明確でない。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、東壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.10mを測る。炉跡や貯蔵穴、主柱穴などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、土層断面図の観察と整合性も取れないが、遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0238号 （Fig.245・246、PL.34・70・71・95・116）

SG－77を中心に位置する。南西隅で土坑（遺構番号なし）、南東隅で溝2416号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は小型の方形を呈し、規模は3.59×3.57m、遺構下場面積は9.2㎡、確認面からの深さは0.35mを測る。主軸方位はN－67°－Wである。炉跡は遺構中央やや北寄りから検出されている。各壁際を中心に焼土と炭化材の堆積が確認され、火災に遭った可能性がある。P1～3は本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝が検出され、ほぼ全周する。

実測可能遺物は、1～5・7・8・12は甕形土器、6は短頸壺形土器、9はS字状口縁台付甕形土器、10・11は壺形土器、13～15は器種不明の底部、16～18は高杯形土器、19は器台形土器、20は椀形土器である。甕形土器の頸部はくの字状に屈折し、胴部は球形を呈する。高杯形土器には有稜と無稜とがあるが、杯部はいずれも浅い。遺物は覆土中・下層から多量に検出されており、1・3・6・10は西側、2・4・5・9・16・17は南側から、遺構埋没途中に投棄された可能性がある。

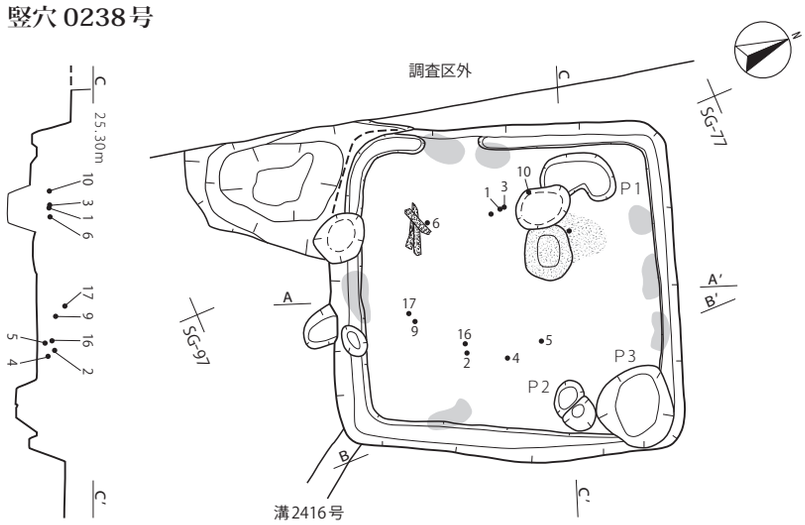
古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

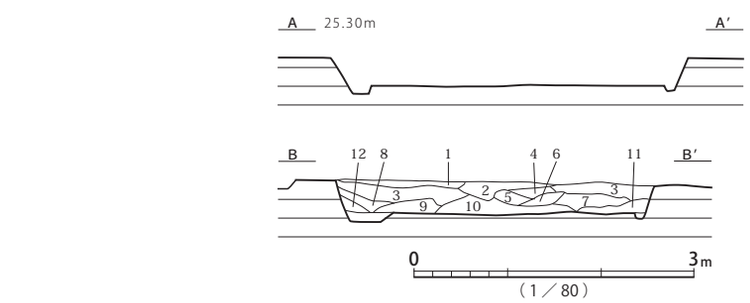
竪穴0239号 （Fig.247・248、PL.34・71・116）

SH－83を中心に位置する。中央で溝2023号（上層）、北東辺壁の一部で竪穴0241号、南東隅で竪穴0259号と重複するが、いずれも床面までは達していない。新旧関係は、本遺構が2023号よりも古い。0241・0259号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構がいずれの遺構よりも古いと考えられる。

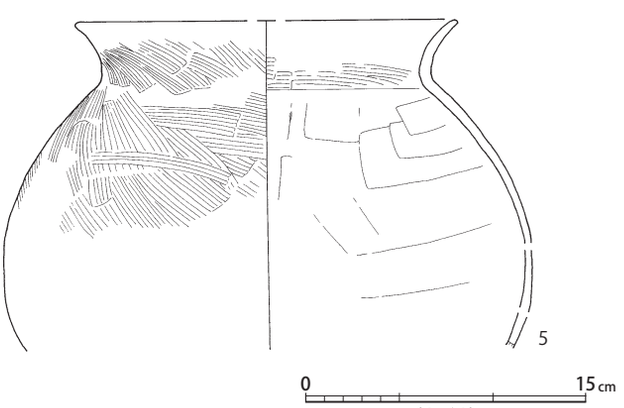
平面形態は大型の方形を呈し、規模は8.00×7.70m、遺構下場面積は48.4㎡、確認面からの深さは0.37mを測る。主軸方位はN－25°－Wである。炉跡は遺構ほぼ中央から検出されている。P1～4は主柱穴で、各隅寄りに配置される。P5は出入口施設の可能性があり、遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、いずれも本遺構に伴うものかは明確でない。焼土と炭化材の堆積が確認され、覆土中にも含まれることから、火災に遭った可能性がある。壁周溝が全周する。調査図面に記載がなく出土位置は不明であるが、貝層サンプルが少量採取されており、分析結果は第4章に

竪穴 0238号





1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。粘性・しまり強い。
2　暗褐色土　ローム粒を含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土　ローム粒を含む。粘性ややあり、しまり強い。
4　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。粘性・しまり強い。
5　茶褐色土　暗褐色土を多量に含む。粘性弱く、しまりなし。
6　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。粘性ややあり。
7　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。粘性なし、しまりあり。
8　暗褐色土　しまりなし。
9　暗褐色土　ローム粒・炭化粒をわずかに含む。しまりあり。
10　暗褐色土　粗いローム粒を含み、土器類も多い。粘性弱く、しまりややあり。
11　暗褐色土　ローム粒わずかに含む。しまり強い。
12　暗褐色土　ローム粒を多く含む。粘性弱く、しまりなし。



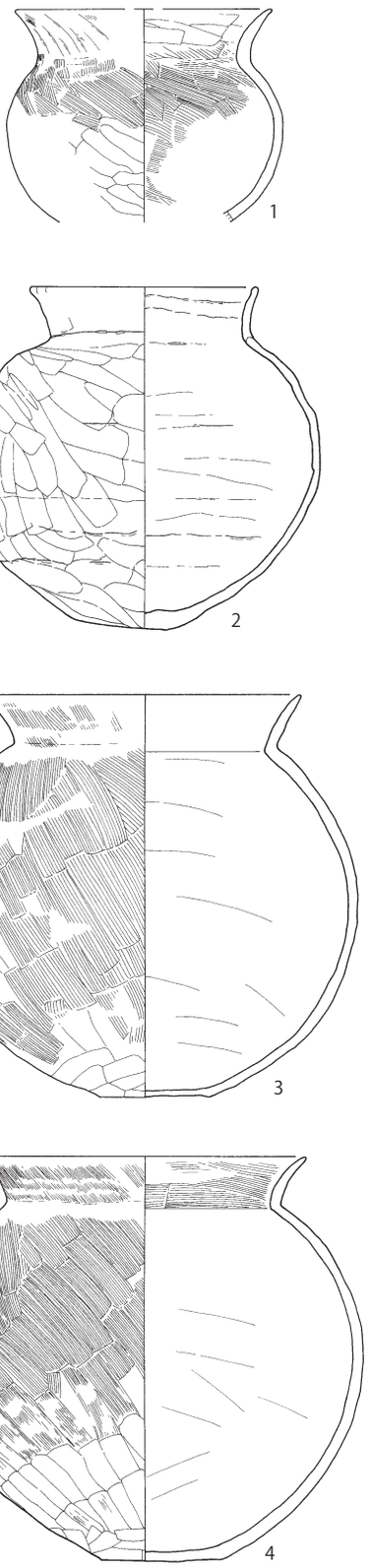


Fig.245　竪穴0238号(1) 遺構遺物

竪穴 0238 号

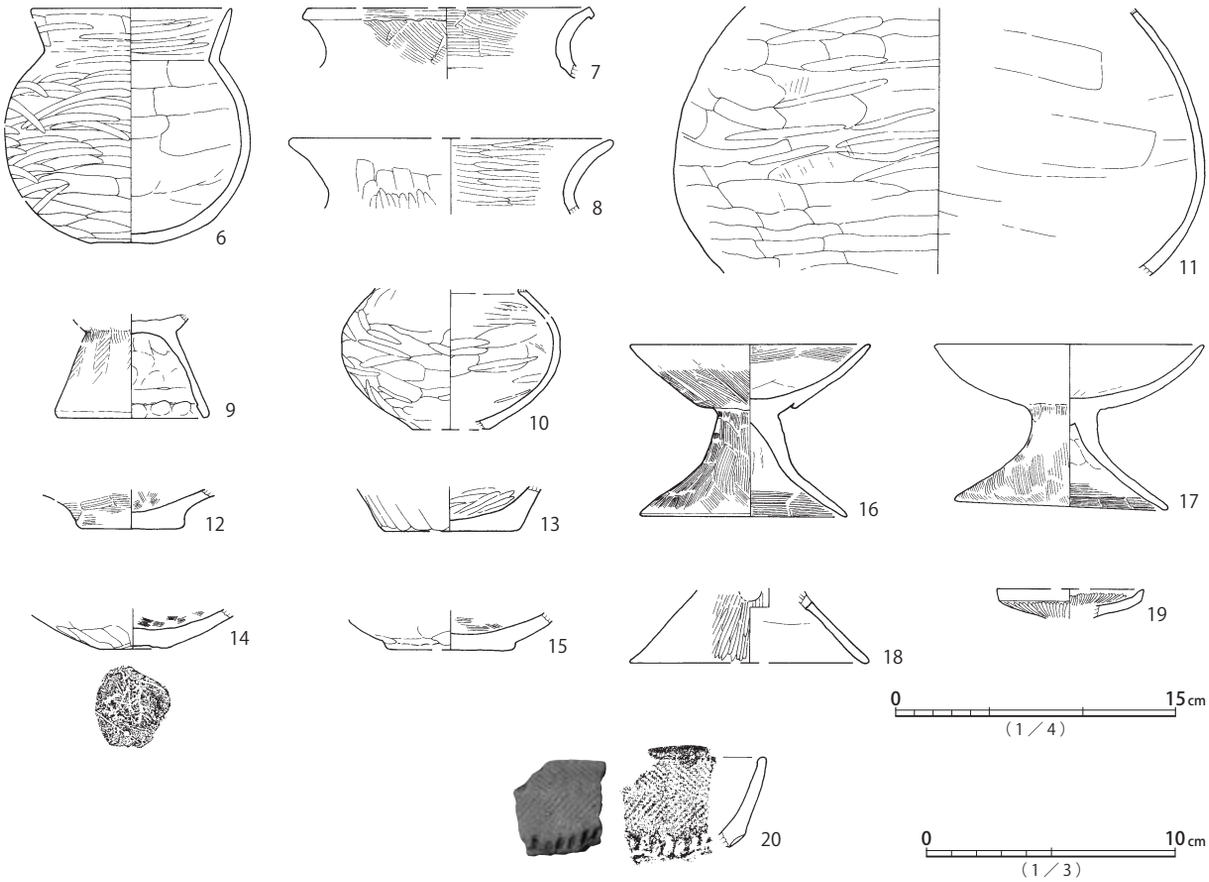


Fig.246　竪穴0238号(2) 遺物

記載している。

実測可能遺物は、1・13・22は甕形土器、2～5は台付甕形土器、6～11・16・17・23は壺形土器、12・14・15は器種不明の底部、18・20は高杯形土器、19は器台形土器、21は結合器台形土器である。1は大きく外反する口縁部の端部を摘み上げ、拡張面をもつ。庄内甕を祖形とするものであろう。20は柱脚状を呈する。8はP1付近、20は東辺壁際から検出され、いずれも覆土中からの出土である。

古墳時代前期後葉の所産と思われる。

竪穴 0240 号　（Fig.249・250、PL.34・71・116・134）

SH−76を中心に位置する。西側で竪穴0241号、北東側で竪穴0242号、南東側を竪穴0243号、南西隅で竪穴0259号と重複する。新旧関係は、本遺構が0241・0242号よりも古い。0243・0259号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構がいずれの遺構よりも古いと考えられる。

平面形態は大型の胴張隅丸長方形を呈し、推定規模は8.50×7.10m、推定遺構下場面積は44.0㎡、確認面からの深さは0.34mを測る。主軸方位はN−28°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1～4は主柱穴で、長軸辺壁寄りに配置される。P5は出入口施設、P6は

竪穴 0239号

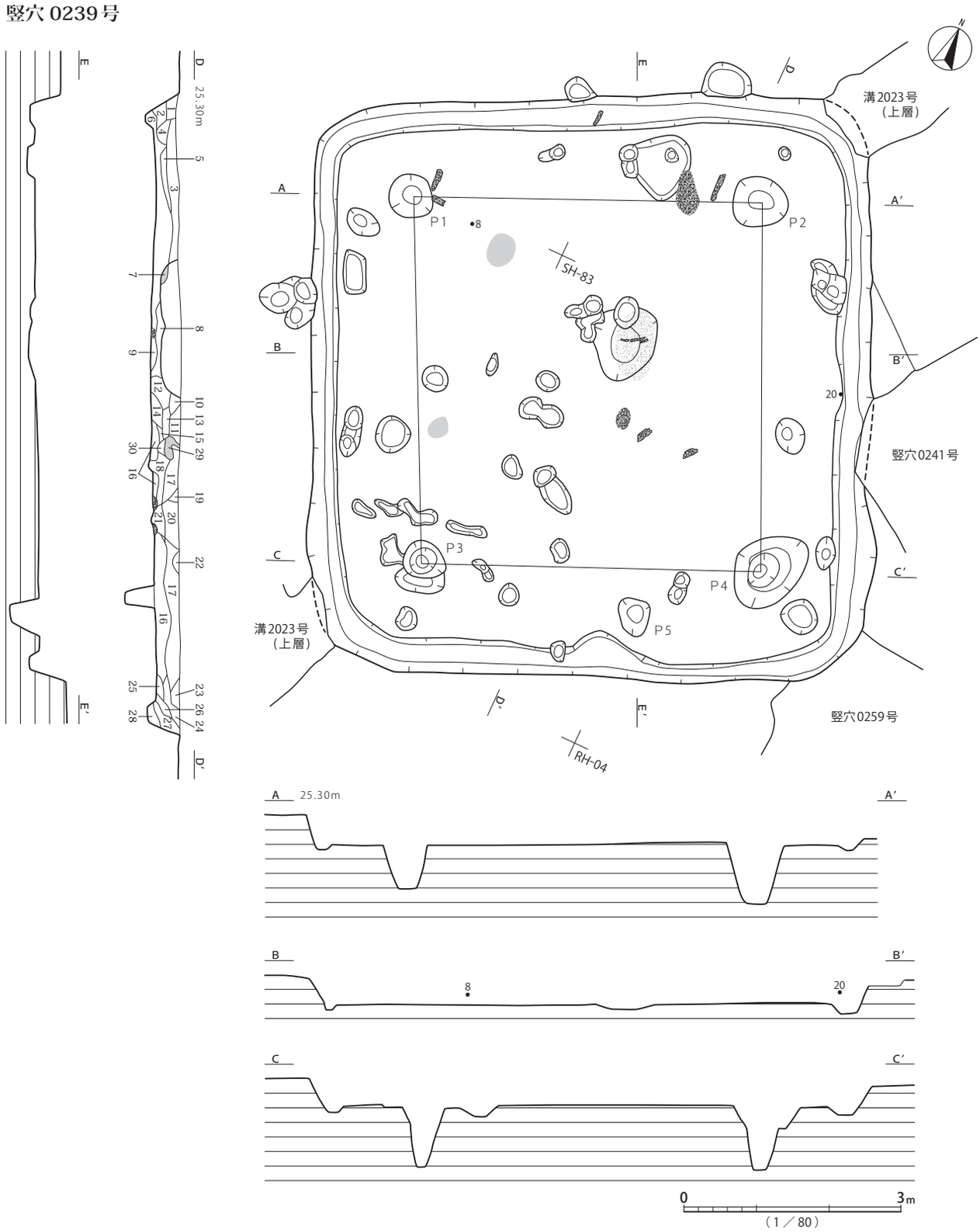


Fig.247　竪穴0239号(1) 遺構

竪穴 0239 号

1　黒褐色土　ロームを多量に含む。しまりややなし。
2　黒色土　ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりあり。
3　黒色土　焼土・炭化物をわずかに含む。粘性・しまりあり 。
4　黒色土　炭化物を若干含む。しまりあり。
5　黒色土　4層に似る。
6　黒褐色土　ロームをわずかに含む。粘性・しまり強い。
7　黒褐色土　焼土を多量に含む。しまりあり。
8　黒褐色土　焼土をわずかに含む。しまり強い。
9　黒褐色土　暗褐色土を含む。
10　黒褐色土　焼土を少量含む。粘性強く、しまりあり。
11　黒色土　3層に似る。
12　黒褐色土　ロームをわずかに含む。しまりあり。
13　黒褐色土　しまりあり。
14　黒褐色土　ロームを多量に含む。粘性・しまりあり。
15　暗褐色土　炭化物をわずかに含む。粘性あり、しまりややなし。
16　黒褐色土　炭化物・小ロームブロックをわずかに含む。粘性強く、しまりあり。
17　黒色土　焼土をわずかに含む。
18　暗褐色土　黒色土を多量に含む。しまりあり。
19　黒褐色土　焼土を少量含む。しまりあり。
20　黒色土　焼土をわずかに含む。粘性・しまり強い。
21　黒色土　炭化物を多量に含み、ロームも少量混じる。粘性・しまり強い。
22　黒褐色土　焼土を少量含む。
23　黒色土　粘性・しまり強い。
24　黒褐色土　ロームを少量含む。しまりあり。
25　黒色土　ロームをわずかに含む。粘性・しまり強い。
26　黒褐色土　しまりややなし。
27　黒褐色土　暗褐色土を含む。粘性・しまりあり。
28　黒褐色土　暗褐色土を含む。粘性・しまり強い。
29　焼土　黒色土含む。
30　暗褐色土　焼土を少量含む。粘性あり。

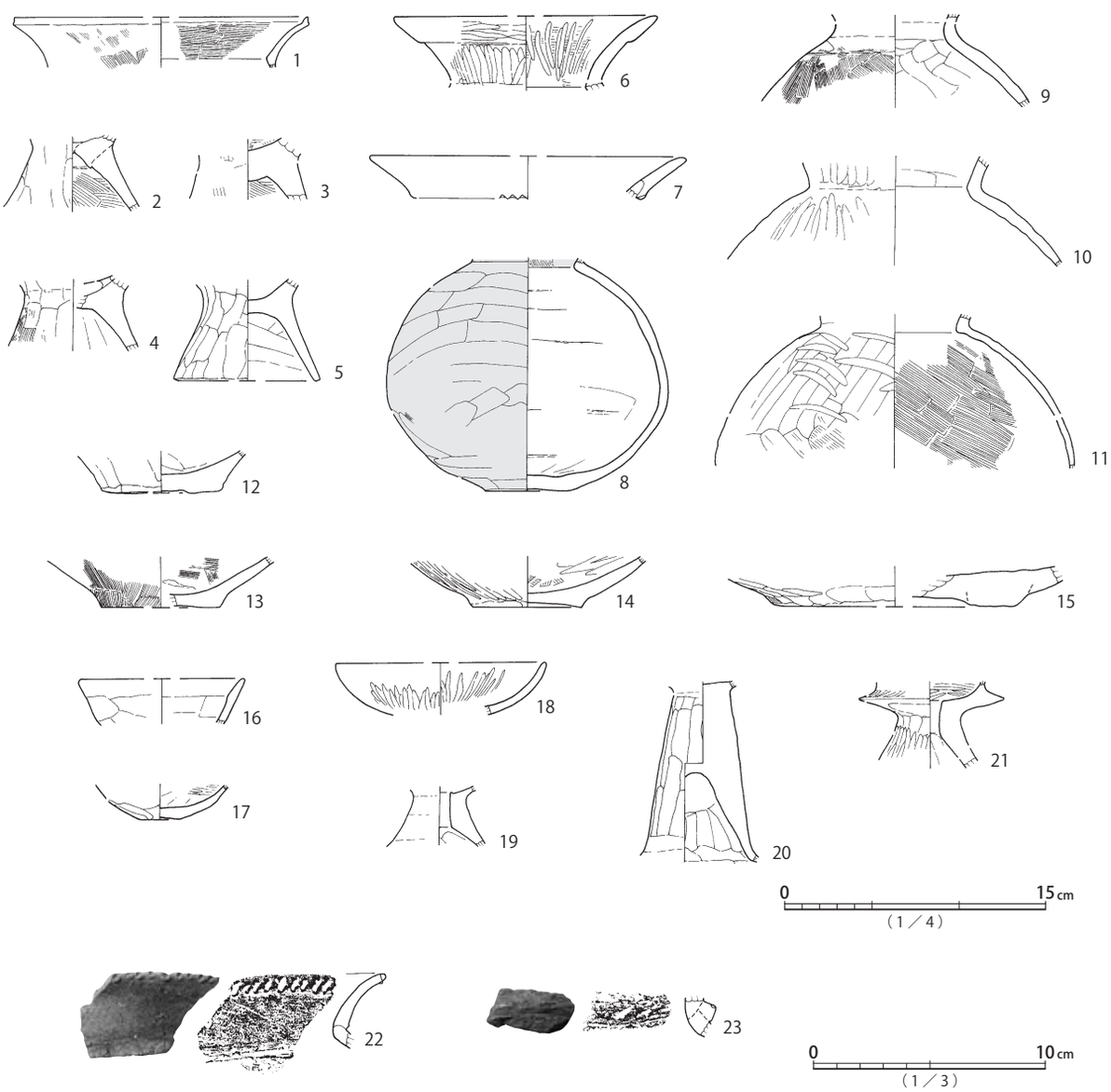


Fig.248　竪穴0239号(2) 遺物

貯蔵穴と思われる。遺構範囲からは多数の柱穴が検出されているが、いずれも本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝が巡るが、断続的に途切れている。

実測可能遺物は、1・2・13は甕形土器、3・12・14は壺形土器、4は器種不明の底部、5～7・9は椀形土器、10・11は椀形のミニチュア土器である。8は折返し状口縁で椀形土器であろうか。1は頸部がくの字状に屈折し、竪穴0241号からの混入であろう。2はS字状口縁甕に類似する受口状口縁甕で、竪穴0241号2・3もこれにあたる。土器以外では15の敲石のほか、図示に至らない磨石類など4点が出土している。

弥生時代終末期前半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0241号　（Fig.249～252、PL.34・71・72・116・140）

SH－85を中心に位置する。西隅で竪穴0239号、東側で竪穴0240号と重複する。新旧関係は、本遺構が0240号よりも新しい。0239号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが新しいと考えられる。

平面形態は方形を呈すと考えられるが、遺構東側は平面・断面ともに壁の立ち上がりを捉えることができていないため、詳細は不明である。推定規模は4.00×4.34m、推定遺構下場面積は14.8㎡、確認面からの深さは0.37mを測る。北西辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN－59°－Wとなる。P1・2は貯蔵穴の可能性があるが明確でない。炉跡と主柱穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。平面図中には分布範囲の記録がないが、覆土中に焼土の堆積が確認されている。

実測可能遺物は、1～3・6・7は甕形土器、4・5・18は器種不明の底部、8～10・12・24・25は壺形土器、11は器種不明の口縁部、13～15は直口縁壺形土器、16は短頸壺形土器、17・19は鉢形土器、20・26・27は椀形土器、21は高杯形土器、23は器台形土器である。2・3は受口状口縁甕である。11は外面ヘラケズリ、内面ハケ調整が施される粗い作りで、台付甕形土器の脚台部の可能性もある。22は庇状の拡張部を持ち、合子形土器であろうか。甕形土器の頸部は明瞭に屈折し、高杯形土器の脚部は中空の柱状となる。土器以外では28の軽石が出土している。10・13・16・17は北隅、6・7・14・15・19・21・23・28は西隅から検出され、10・13・14・16・17は床面上、これ以外は覆土中～下層からの出土である。

古墳時代前期後葉の所産と考えられる。

竪穴0242号　（Fig.252、PL.34・72・116）

SH－67を中心に位置する。南西側で竪穴0240号と重複する。新旧関係は、本遺構が0240号よりも新しい。

平面形態は方形を呈すと考えられるが、遺構南西側は壁の立ち上がりを捉えることができていないため、詳細は不明である。推定規模は4.05×4.05m、推定遺構下場面積は15.0㎡、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位はN－45°－Wである。炉跡は中軸線上からやや東側にずれ、遺構北寄りから検出されている。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。焼土の堆積が確認されており、覆土中にも焼土が混じることから、火災に遭った可能性がある。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

竪穴 0240・0241 号

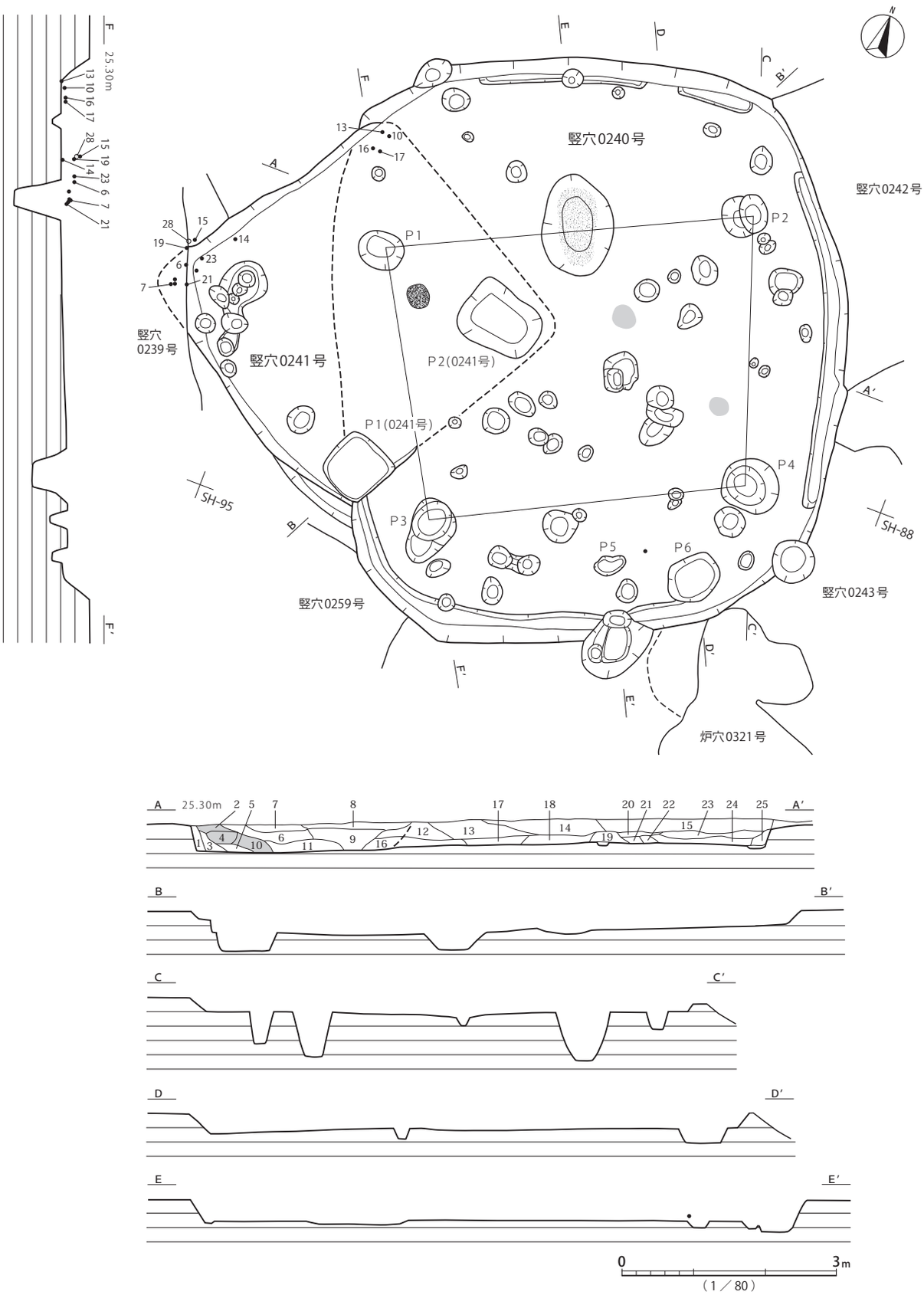


Fig.249　竪穴0240号(1) 遺構、竪穴0241号(1) 遺構

竪穴 0240･0241 号

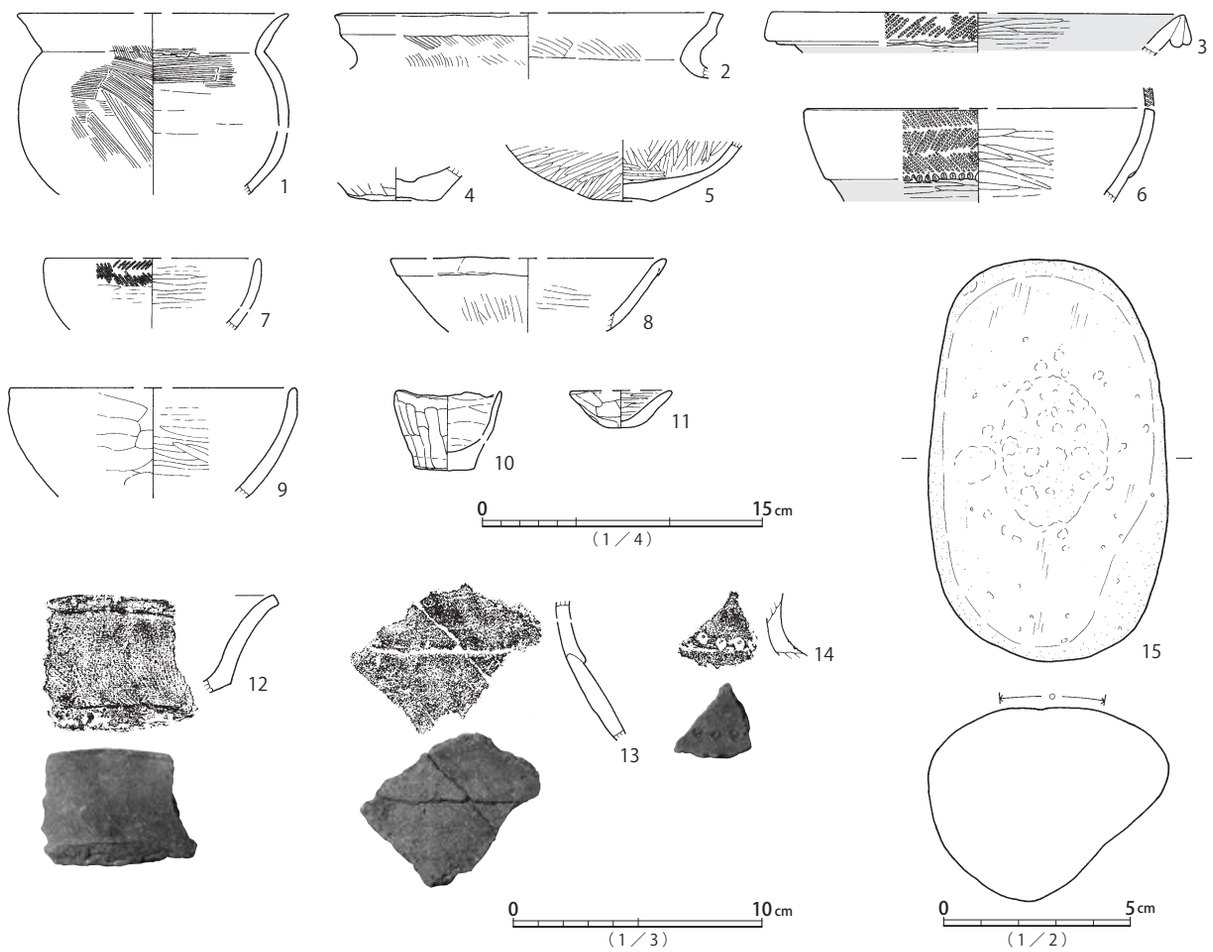
0241号

1　黄褐色土　ロームを主体とし、暗褐色土が混じる。
2　暗褐色土　焼土を多く含む。
3　暗褐色土　ローム粒を多く含み、焼土も少量混じる。
4　焼土　赤色粒・暗褐色土を含む。
5　暗褐色土　ローム粒を多く含み、焼土も少量混じる。
6　暗褐色土　ローム粒を多く含み、焼土も混じる。
7　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
8　暗褐色土　ローム粒をごくわずかに含む。
9　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。
10　暗褐色土　赤色焼土を多く含む。
11　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり強い。

0240号

12　暗褐色土　ローム粒をごくわずかに含む。
13　黒褐色土　ローム粒をごくわずかに含む。しまりややあり。
14　黒褐色土　ローム粒をごくわずかに含む。
15　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
16　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりややあり。
17　暗褐色土　ロームブロックを含む。
18　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
19　暗褐色土　ローム粒を全体に含む。
20　暗褐色土　ローム粒をごくわずかに含む。しまりややあり。
21　暗褐色土　ローム粒を全体に含む。しまりややあり。
22　暗褐色土　ローム粒をごくわずかに含む。しまりややあり。
23　暗褐色土　やや褐色味が強い。
24　暗褐色土　ローム粒を全体に含む。
25　明褐色土　ローム粒を含む。しまりなし。

竪穴 0240 号



竪穴 0241 号

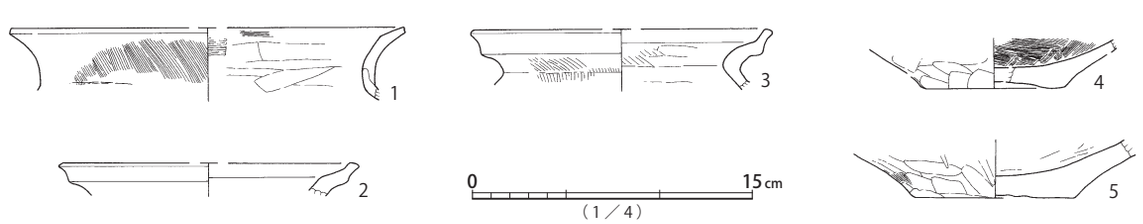


Fig.250　竪穴0240号(2) 遺物、竪穴0241号(2) 遺物

竪穴 0241 号

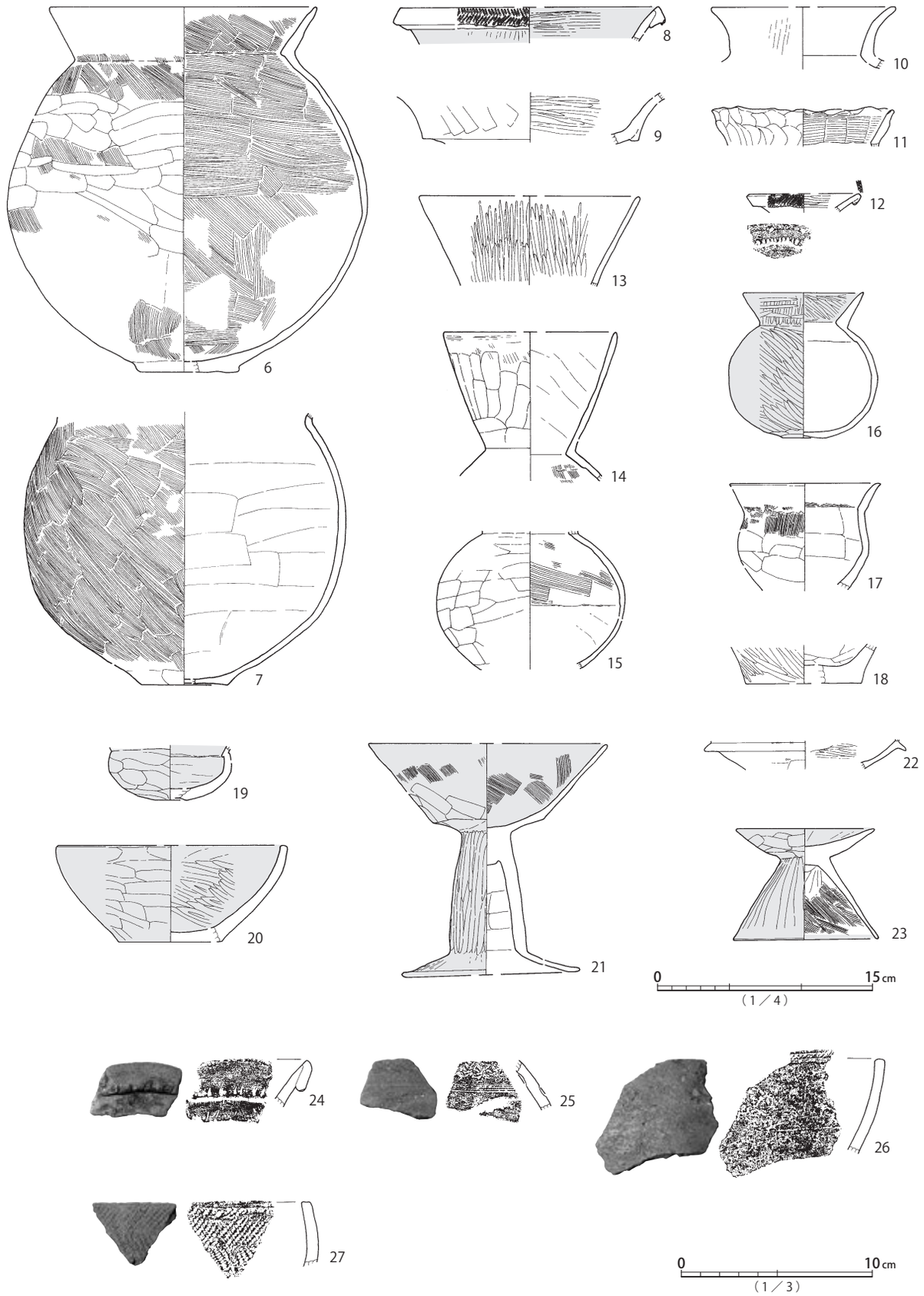
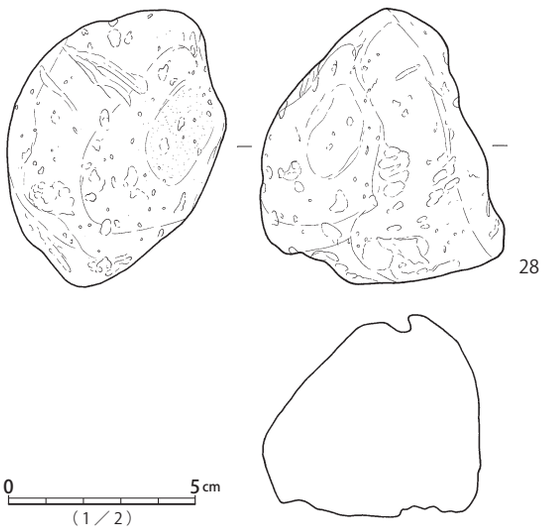
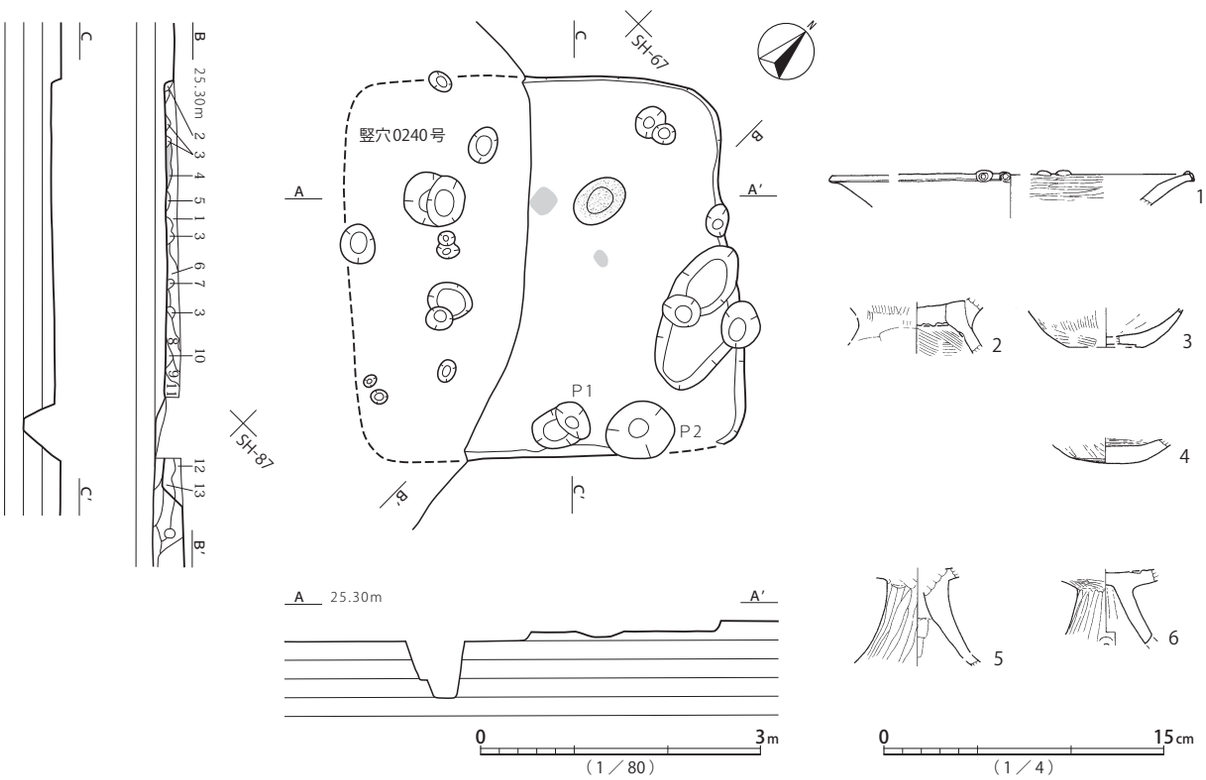


Fig.251　竪穴0241号(3) 遺物

竪穴 0241 号



竪穴 0242 号



1　黒褐色土　1cm大のロームブロックをわずかに含み、焼土粒も混じる。粘性・しまりなし。
2　黄褐色土　ロームを主体とし、黒色土もわずかに混じる。粘性・しまりあり。
3　　ロームブロック。
4　黒色土　焼土粒を多く含む。粘性・しまりなし。
5　暗褐色土　焼土粒を含む。粘性・しまりなし。
6　黒色土　2mm大のローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
7　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりなし。
8　黒褐色土　微小ローム粒・赤色粒を含む。粘性・しまりなし。
9　暗褐色土　微小ローム粒・焼土粒を含む。しまりなし。
10　暗褐色土　焼土粒を含む。粘性なし、しまりあり。
11　暗褐色土　ローム粒を多く含み、赤色粒もごくわずかに混じる。粘性・しまりあり。
12　黒褐色土　ローム粒をわずかに含み、焼土粒も混じる。粘性・しまりあり。
13　黒褐色土　1cm大のロームブロックを多く含む。粘性・しまりあり。

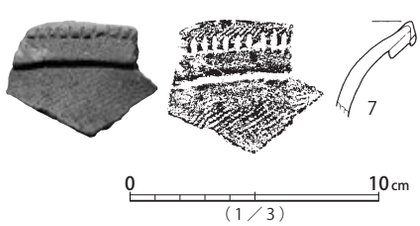


Fig.252　竪穴0241号(4) 遺物、竪穴0242号 遺構遺物

実測可能遺物は、1・7は壺形土器、2は台付甕形土器、3・4は器種不明の底部、5・6は高杯形土器である。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0243号 （Fig.253、PL.34・72・116・117）

SH−88を中心に位置する。西側で竪穴0240号、南側で炉穴0321号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構がいずれの遺構よりも新しいと考えられる。

平面形態は方形を呈すと考えられるが、遺構南西側は壁の立ち上がりを捉えることができていないため、詳細は不明である。確認面からの深さは0.16mを測る。主軸方位はN−10°−Eである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されているが、掘り込みは認められない。P1は貯蔵穴の可能性があり、遺構範囲からは多数の柱穴が検出されているが、いずれも本遺構に伴うものかは明確でない。西辺壁側からは焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。炉跡付近には少量の貝層が分布し、覆土下層から出土している。分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1〜3は甕形土器、4は台付甕形土器、5〜8・13は壺形土器、9は椀形土器、10は小型丸底系の鉢形土器、11・12は高杯形土器である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0245号 （Fig.254、PL.33・35・117・134）

SH−79を中心に位置する。北側で竪穴0233号、北西隅で土壙墓318号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が318号よりも古い。0233号との関係は、土層断面の観察では0245号→0233号の順になるが、遺構の掘り込みが浅く、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は隅丸方形を呈すと考えられるが、詳細は不明である。推定規模は4.14×4.40m、推定遺構下場面積は14.2㎡、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位はN−23°−Wである。炉跡は遺構中央やや北寄りから検出されている。P1は深さ0.90mを測り、本遺構に伴うものではない可能性が高い。P2は出入口施設、P3は貯蔵穴の可能性があり、遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、いずれも本遺構に伴うものかは明確でない。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、3は高杯形ないし椀形土器である。2は三角形の透かし穴をもち、器台形土器であろうか。3は内外面赤彩が施される。土器以外では4の敲石と5の磨石が出土している。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、古墳時代前期中葉の所産と思われる。

竪穴0246号 （Fig.255・256、PL.35・72・95・117）

SI−71を中心に位置する。南東隅で竪穴0305号と重複する。新旧関係は、本遺構が0305号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、規模は5.68×4.90m、遺構下場面積は22.2㎡、確認面からの深さは0.34mを測る。主軸方位はN−26°−Wである。炉跡とP5・6は調査図面に記載がなかったが、写真から判断し、およその位置を記した。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。

竪穴 0243 号

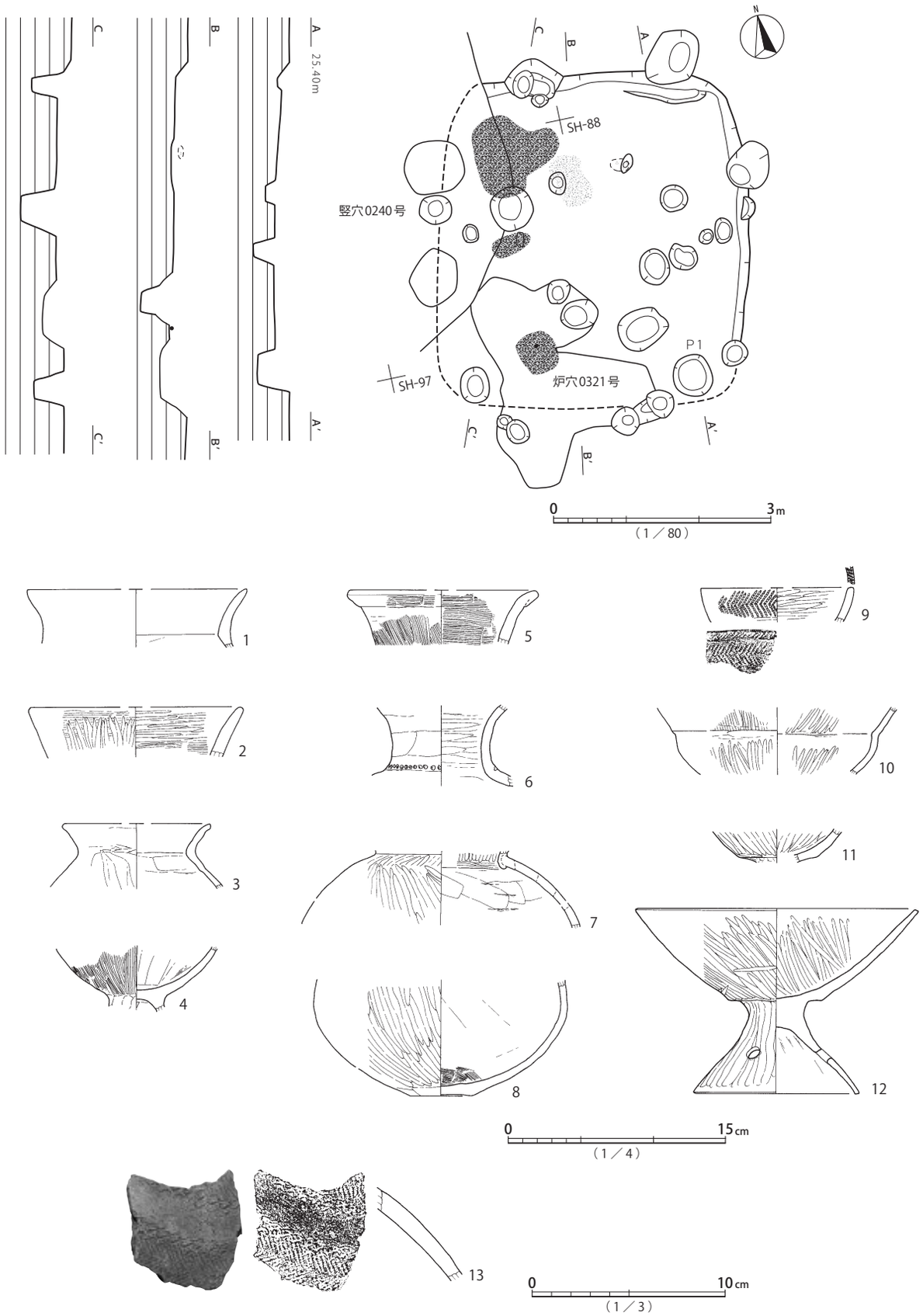
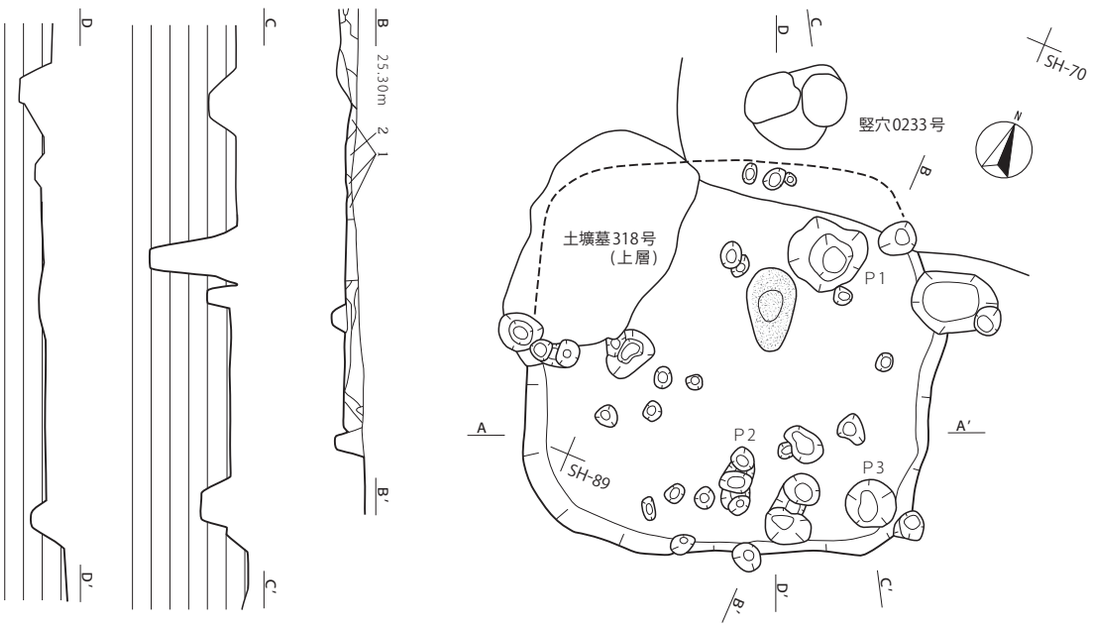
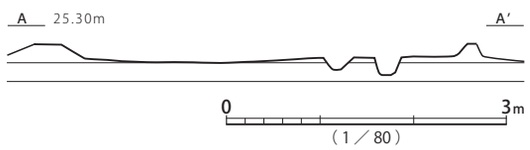


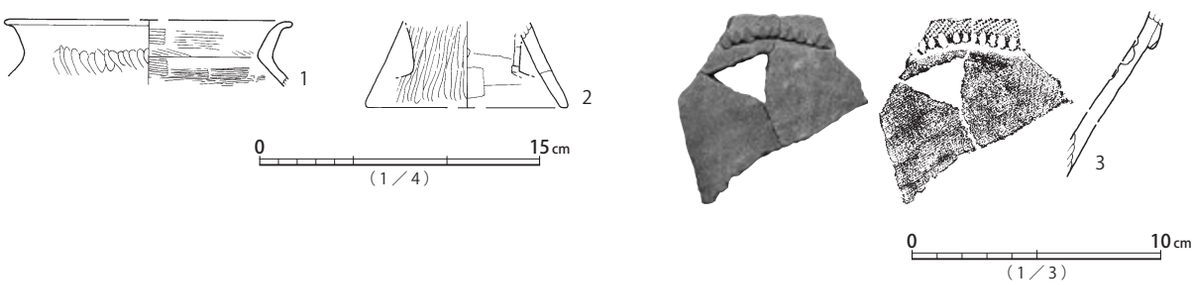
Fig.253　竪穴0243号 遺構遺物

竪穴 0245 号



1　黒色土　　微小ローム粒・赤色粒を含む。
　　粘性・しまりなし。
2　黒褐色土　ローム・ロームブロックを含む。
　　しまりあり。





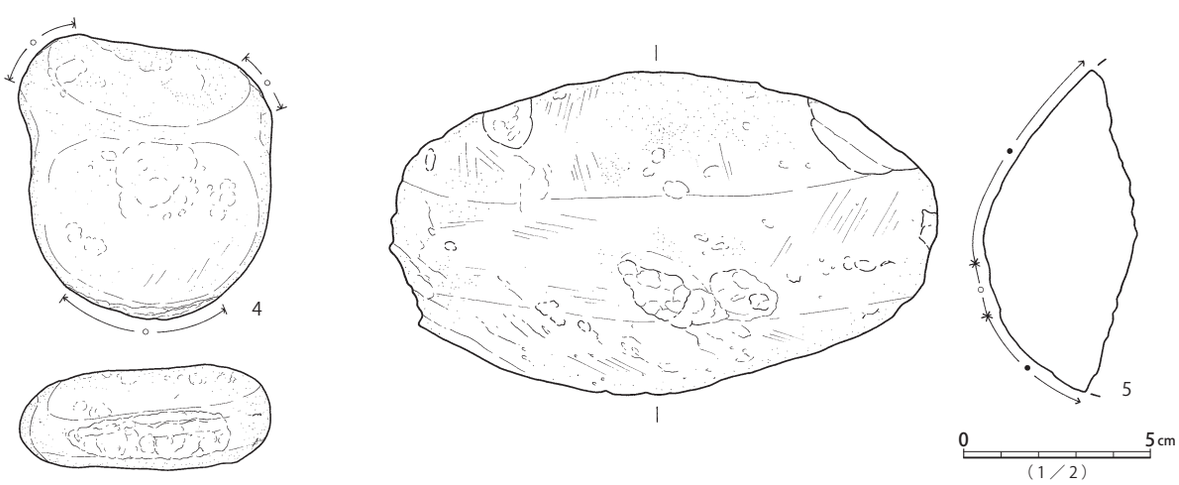
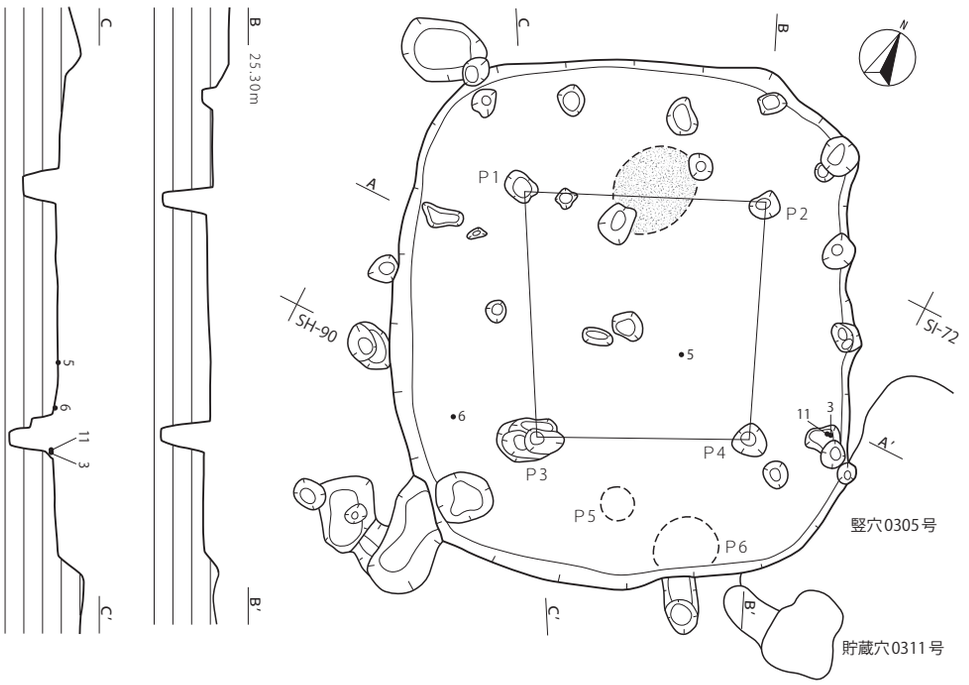
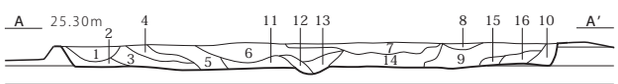


Fig.254　竪穴0245号 遺構遺物

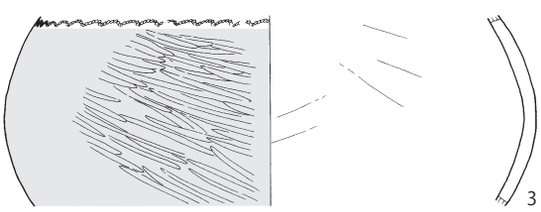
竪穴 0246号

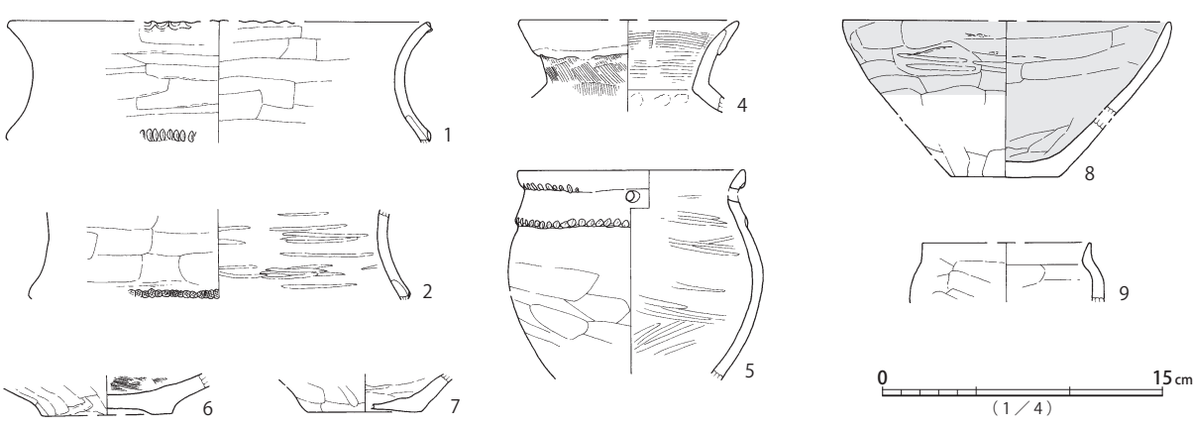




0 3m
（1／80）

1 暗褐色土　ロームを含まない。しまりなし。
2 暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。
3 暗褐色土　ローム粒を少量含む。
4 暗褐色土　ローム粒を少量含む。
5 暗褐色土　ロームをほとんど含まない。
6 暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む。
7 暗褐色土　ロームを含まない。しまりややあり。
8 暗褐色土
9 暗褐色土　ロームを含まない。
10 暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりややあり。
11 暗褐色土　ロームブロックを含む。
12 暗褐色土　小ロームブロック・黒色土を含む。
13 暗褐色土　ロームをわずかに含む。
14 暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。ややしまりあり。
15 暗褐色土　ロームを含まない。
16 暗褐色土　ロームブロックを少量含む。





0 15cm
（1／4）

Fig.255　竪穴0246号(1) 遺構遺物

竪穴 0246号

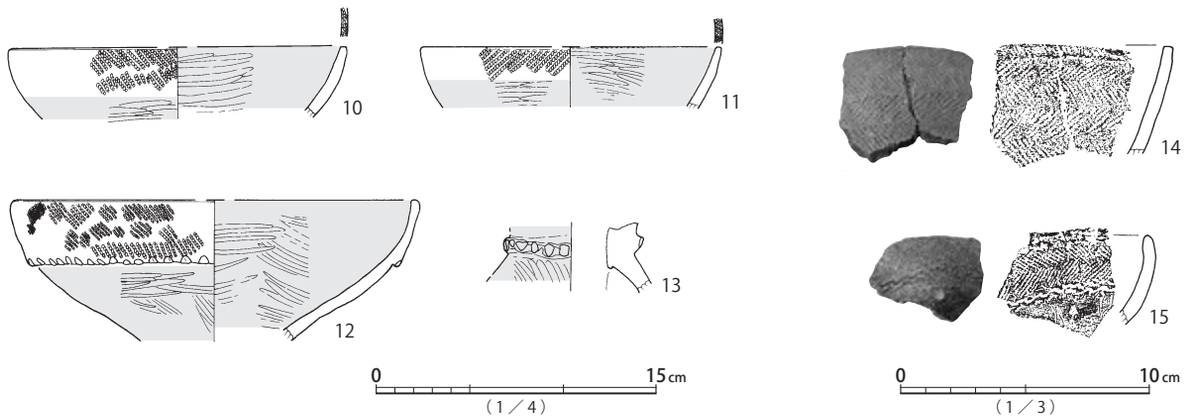


Fig.256　竪穴0246号(2) 遺物

P1～4は主柱穴で、P3には柱の抜き取り痕が認められる。P5は出入口施設、P6は貯蔵穴であろう。東辺壁沿いからは壁柱穴が検出されている。

実測可能遺物は、1・2は甕形土器、3・4は壺形土器、5は広口壺形土器、6・7は器種不明の底部、8～11・14・15は椀形土器、12・13は同一個体の高杯形土器である。甕形土器は胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残し、押捺を加える。椀形土器と高杯形土器は口縁部に帯縄文をもつものが主体となる。3・11は南東壁際、5は遺構中央付近、6はP3付近から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代終末期前半の所産と思われるが、後期後半の可能性もある。

竪穴0247号　（Fig.257、PL.72・95・117）

SI－63を中心に位置する。東側で竪穴0248号、南西側で竪穴0305号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈すと思われるが、北西隅と北西辺壁の各一部が検出されたのみで、詳細は不明である。炉跡や主柱穴などの屋内施設は検出されず、遺構範囲から検出されている柱穴状の掘り込みも、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1～3は器種不明の底部、4・6・7は壺形土器、5は甕形土器である。6と7は同一個体である。

帰属時期は明確でないが、弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0248号　（Fig.257・258、PL.117）

SI－73を中心に位置する。北西側で竪穴0247号、南西側で竪穴0305号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構が0247号よりも新しく、0305号よりも古いと考えられる。

平面形態は長楕円形ないし胴張隅丸方形を呈すと思われるが、南壁が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.17mを測る。P1～3は主柱穴、P4は出入口施設の可能性があり、遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、いずれも本遺構に伴うものかは明確で

ない。炉跡は検出されていない。調査図面に記載がなく出土位置は不明であるが、貝層サンプルがごく少量採取されており、分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1は台付甕形土器、2は壺形土器、3は炉器台形土器である。1は外面ハケ調整が施され、2は単口縁となる。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴0305号 （Fig.257・258、PL.76・121）

SI−72を中心に位置する。西側で竪穴0246号、北東側で竪穴0247・0248号、南辺壁で貯蔵穴0311号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構が0247・0248号よりも新しい。0311号は本遺構に伴う可能性がある。

平面形態は小型の不整隅丸方形を呈すと思われるが、北西隅と南辺壁が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.09mを測る。南辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−19°−Eとなる。長軸上に並ぶP1・2をはじめ、遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、いずれも本遺構に伴うものかは明確でない。炉跡は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜6・9は甕形土器、7は台付甕形土器、8は壺形土器、11は高杯形土器である。10は高杯形土器と思われる。甕形土器はいずれも単口縁で、頸部は屈折ないし屈折傾向を示す。

古墳時代前期中葉の所産と思われる。

貯蔵穴0311号 （Fig.257〜259、PL.35・90・97）

SI−82に位置する。北側で竪穴0305号と重複しており、0305号に伴う可能性がある。

平面形態は長楕円形を呈し、底面南側はさらに1段掘り込まれる。規模は0.97×0.67m、確認面からの深さは0.48mを測る。主軸方位はN−13°−Eである。

実測可能遺物は、1・8・9は同一個体の台付甕形土器、2は直口縁壺形土器、3・4は小型の壺形土器、5は鉢形土器、6は高杯形土器、7は器台形土器である。3〜5は小型丸底系である。

古墳時代前期中葉の所産と考えられる。

竪穴0252号 （Fig.260、PL.72・117・134）

SI−93を中心に位置する。東辺壁の一部で竪穴249号（上層）、南西隅で土坑（遺構番号なし）と重複する。新旧関係は、本遺構が249号よりも古い。土坑との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は方形を呈し、規模は5.30×4.90m、遺構下場面積は22.4㎡、確認面からの深さは0.40mを測る。東西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−22°−Wとなる。P1は遺構中央に位置し、本遺構に伴う可能性があるが、明確でない。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜3は器種不明の底部、4は台付甕形土器、6は椀形土器、7は鉢形土器である。5は胴部下半に段を持つ広口壺形土器ないし壺形土器口縁部と思われる。8は小型の短頸壺形土器であろうか。土器以外では9の磨石・敲石が出土している。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴 0247・0248・0305 号 , 貯蔵穴 0311 号

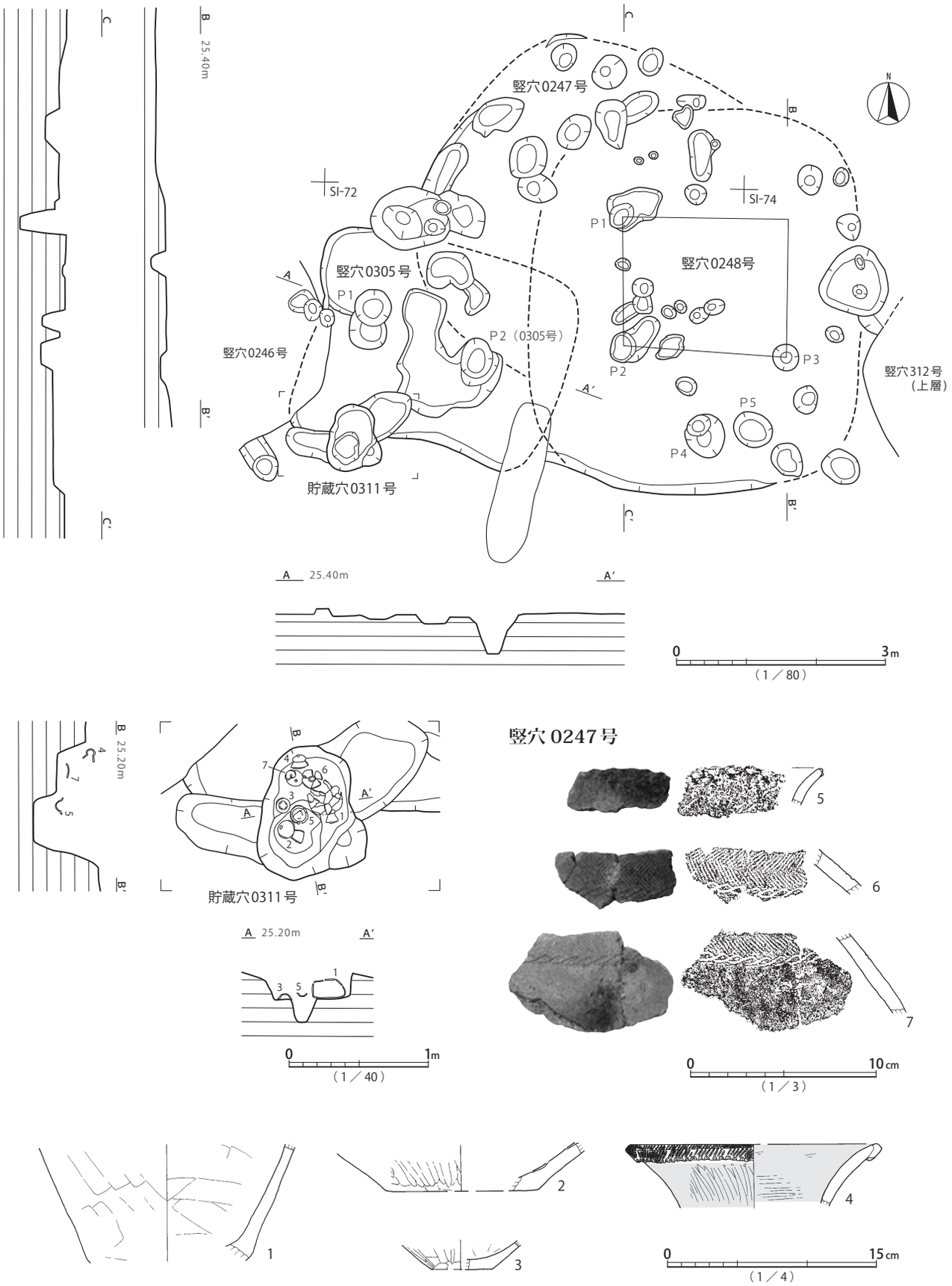
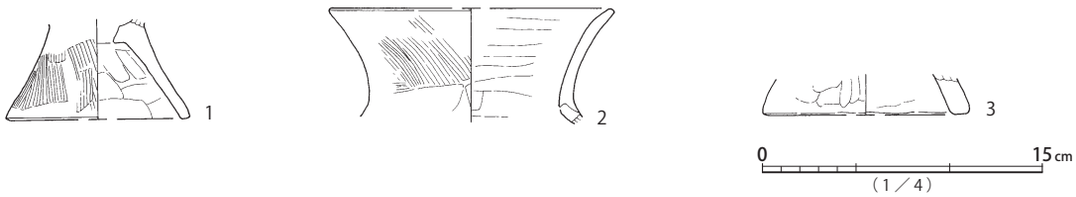
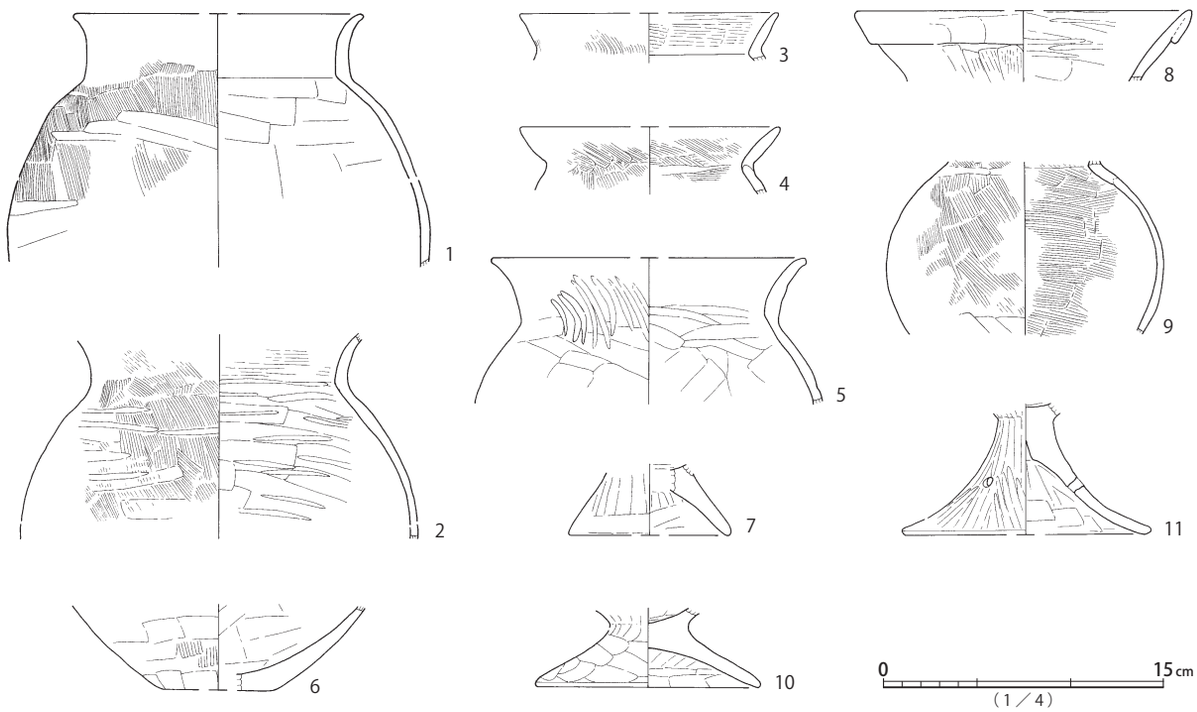


Fig.257　竪穴0247号 遺構遺物、竪穴0248号(1) 遺構、竪穴0305号(1) 遺構、貯蔵穴0311号(1) 遺構

竪穴 0248 号



竪穴 0305 号



貯蔵穴 0311 号

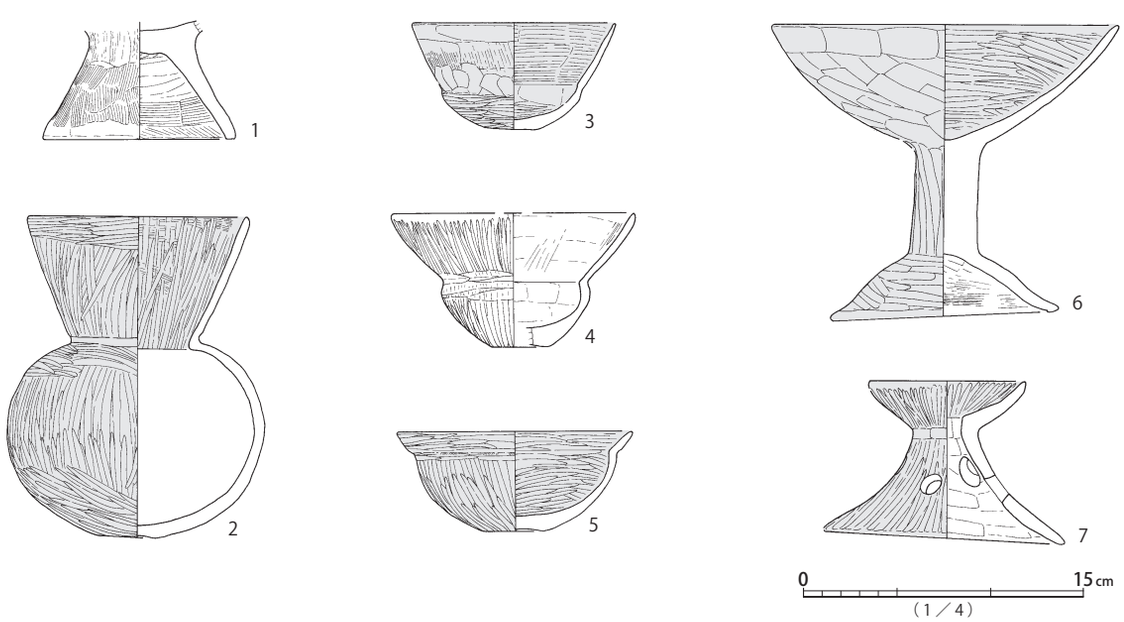


Fig.258　竪穴0248号(2) 遺物、竪穴0305号(2) 遺物、貯蔵穴0311号(2) 遺物

貯蔵穴 0311 号

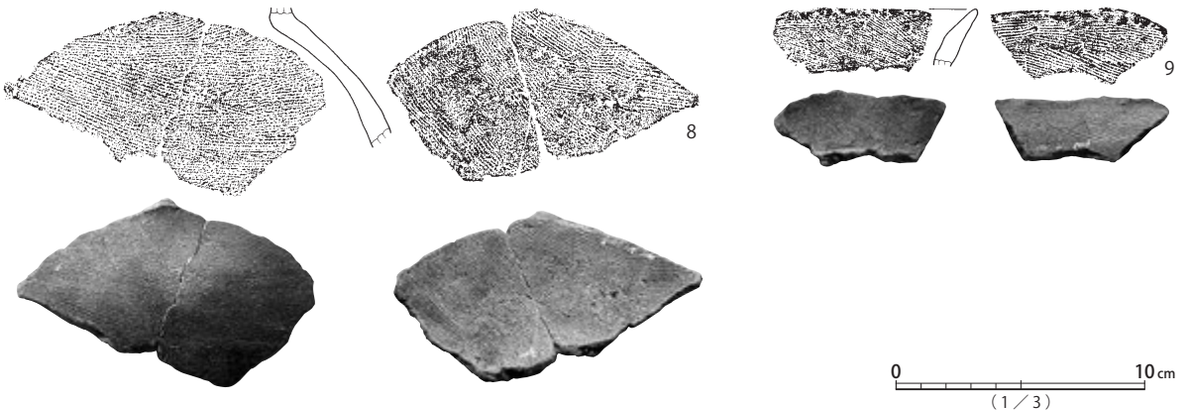


Fig.259　貯蔵穴0311号(3) 遺物

竪穴0253号　（Fig.261、PL.35・72・95・117・133）

SI−91を中心に位置する。南壁の一部で土坑（遺構番号なし）と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は円形を呈し、規模は直径4.85m、遺構下場面積は16.7㎡、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位はN−23°−W程度と思われる。炉跡は遺構北寄りから検出されている。遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。主柱穴や貯蔵穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜3は甕形土器、4・7・8は壺形土器、5は直口縁壺ないし小型平底壺形土器、9は椀形土器である。6は椀形土器であろうか。甕形土器は胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残すが、段部下端への押捺は省略され、頸部の収縮が進む。土器以外では10の磨製石斧片が出土している。

弥生時代終末期前半の所産と思われるが、後期後半の可能性もある。

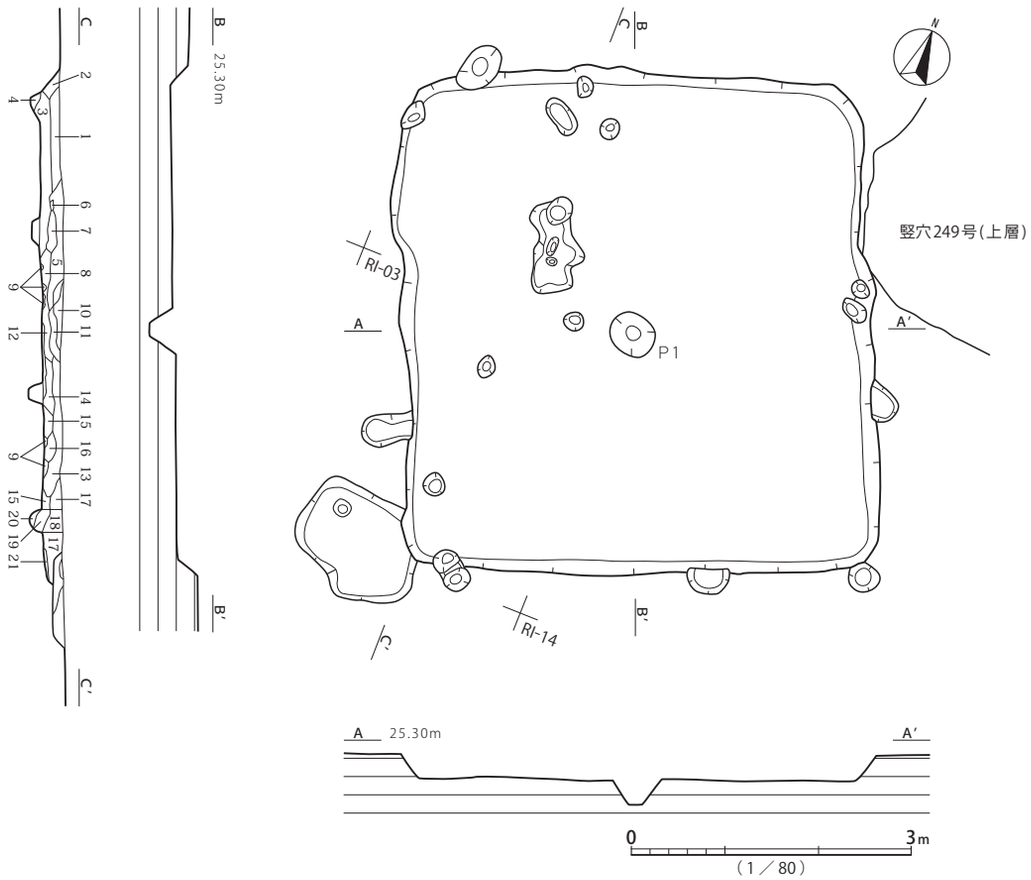
竪穴0254号　（Fig.262〜264、PL.35・36・73・95・117・134・140）

SH−99を中心に位置する。南西隅で竪穴0255号、北西隅でピット1741号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が1741号よりも古い。0255号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は方形を呈し、推定規模は5.12×4.93m、推定遺構下場面積は22.1㎡、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位はN−3°−Wである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間からやや内側で検出されている。P1〜4は主柱穴である。遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。貯蔵穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2・12・13は甕形土器、3は短頸壺形土器、4は台付甕形土器、5・6・8・9は器種不明の底部、7は内外面赤彩の椀形土器、10・11は高杯形土器、14〜16は壺形土器、17・18はS字状口縁台付甕形土器である。14・15、17・18は、それぞれ同一個体である。1はP1・3間から検出され、床面上からの出土であることから、確実に本遺構に伴う。頸部はくの字状に屈折し、大きく開く口縁端部は面取りを施す。土器以外では19の凹石・磨石、20の敲石、21の軽石が出土している。

竪穴 0252号



1　黒褐色土　微小ローム粒・炭化粒を含む。
2　暗褐色土　ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
3　黒褐色土　ローム粒を含む。
4　黄褐色土　ロームブロックを主体とし、暗褐色土が混じる。
5　暗褐色土　3mm大のローム粒を均等に含む。
6　暗褐色土　ローム粒を多く含む。粘性・しまりあり。
7　暗褐色土　ローム粒を均等に含む。
8　暗褐色土　ローム粒をまばらに含む。粘性・しまりなし。
9　黄褐色土　ロームブロックからなる。
10　黒褐色土　微小ローム粒を均等に含む。しまりあり。
11　暗褐色土　3mm大のローム粒を多量に含む。
12　黒色土　ローム粒をまばらに含む。
13　暗褐色土　1cm大のロームブロックを多く含む。粘性・しまりなし。
14　暗褐色土　5mm大のローム粒を含み、黒褐色土も混じる。粘性・しまりあり。
15　黄褐色土　ロームを主体とし、暗褐色土も混じる。
16　暗褐色土　5mm大のローム粒を均等に含む。
17　暗褐色土　微小ローム粒をまばらに含む。粘性・しまりあり。
18　黒褐色土　ローム粒を含み、比較的粒子粗い。しまりなし。
19　黒褐色土　微小ローム粒を均等に含む。
20　黒色土　1cm大のロームブロックを含む。
21　黄褐色土　ロームを主体とする。

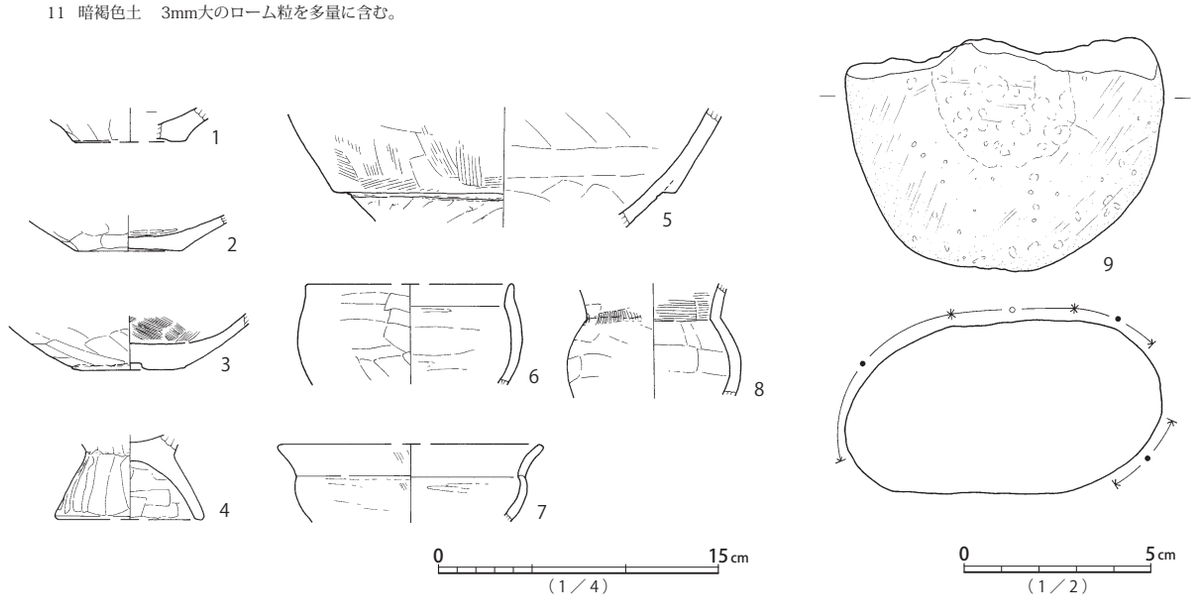
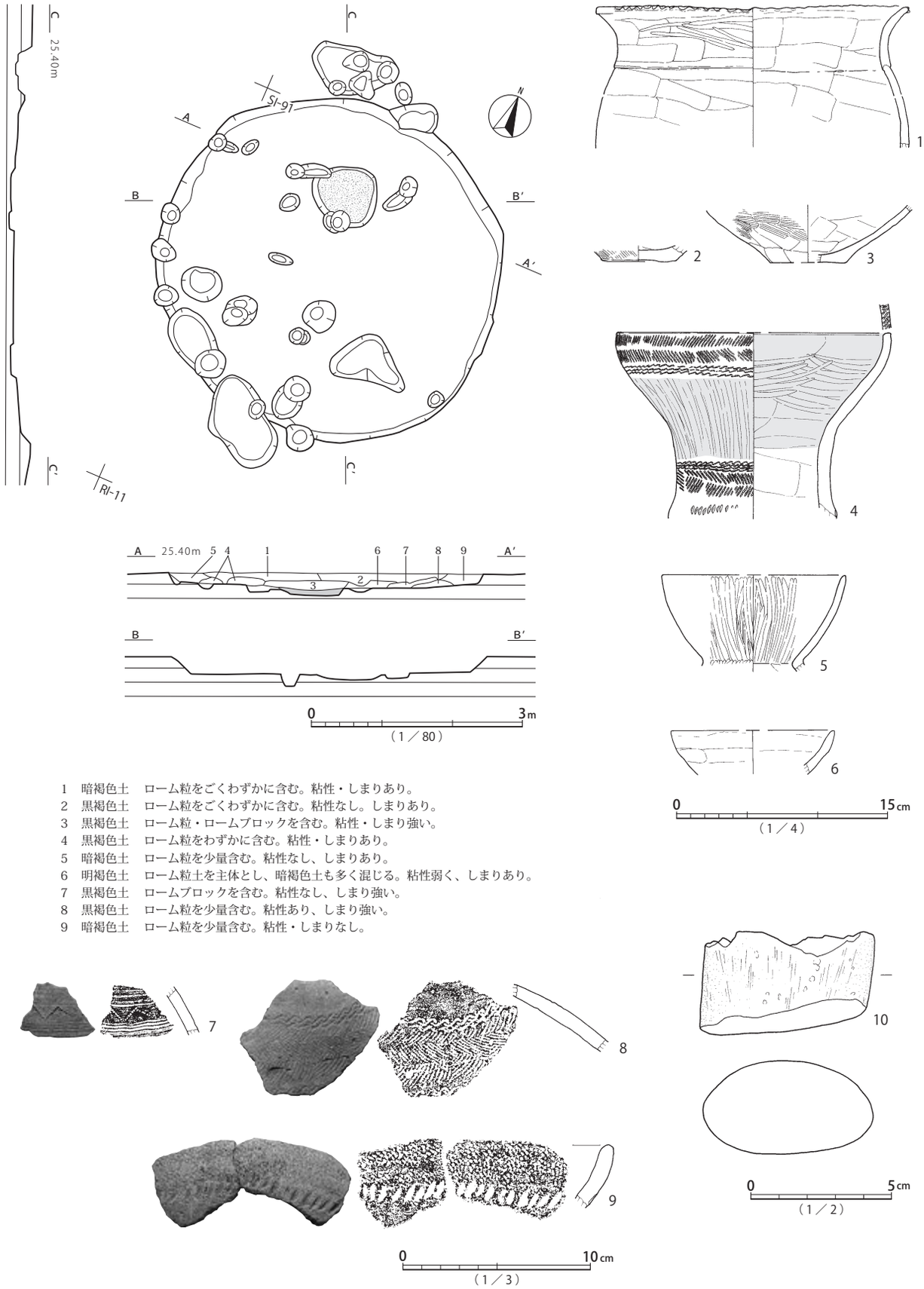


Fig.260　竪穴0252号 遺構遺物

竪穴 0253号



1　暗褐色土　ローム粒をごくわずかに含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土　ローム粒をごくわずかに含む。粘性なし。しまりあり。
3　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。粘性・しまり強い。
4　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりあり。
5　暗褐色土　ローム粒を少量含む。粘性なし、しまりあり。
6　明褐色土　ローム粒土を主体とし、暗褐色土も多く混じる。粘性弱く、しまりあり。
7　黒褐色土　ロームブロックを含む。粘性なし、しまり強い。
8　黒褐色土　ローム粒を少量含む。粘性あり、しまり強い。
9　暗褐色土　ローム粒を少量含む。粘性・しまりなし。

Fig.261　竪穴0253号 遺構遺物

出土遺物は弥生時代終末期が主体であるが、古墳時代前期前葉の所産と思われる。

竪穴0255号 （Fig.262・263・265、PL.35・36・73・118・143）

RH−09を中心に位置する。北東隅で竪穴0254号、南側で竪穴0256号と重複する。新旧関係は、本遺構が0256号よりも新しい。0254号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は方形を呈し、推定規模は5.04×4.67m、推定遺構下場面積は19.5㎡、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN−7°−Wである。炉跡は遺構中央やや西寄りから検出されている。P1・2をはじめ、遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、いずれも本遺構に伴うものかは明確でない。南東隅に位置するP3は貯蔵穴と思われるが、土層断面の観察では本遺構覆土を切って構築されており、別遺構の可能性を残す。壁周溝が巡るが、東辺壁からは検出されていない。焼土と炭化材の分布が認められるが、覆土上層に堆積したものである。

実測可能遺物は、1・2・5は甕形土器、3は壺形土器、4は直口縁壺形土器、6は台付甕形土器である。土器以外では7の甕形土器胴部破片を転用した砥石があり、V字状の溝が2条認められる。

出土遺物は古墳時代前期前葉を主体とするが、貯蔵穴が遺構隅に位置することから、前期中葉の所産と思われる。

竪穴0256号 （Fig.262・263・265、PL.35・36・73・118）

RH−19を中心に位置する。北西側で竪穴0255号、南西側で炉穴0299号、東側で竪穴0257号・土坑315号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0257・0299号よりも新しく、0255・315号よりも古い。

平面形態は長方形を呈し、推定規模は4.57×5.77m、推定遺構下場面積は18.7㎡、確認面からの深さは0.10mを測る。主軸方位はN−10°−Wである。P1〜3は主柱穴で、北西隅からはこれに対応する柱穴は検出されていない。炉跡は検出されていないが、竪穴0255号との重複により壊されたものと考えられる。貯蔵穴は検出されていない。壁周溝が巡り、全周していたものと思われる。焼土と炭化材の堆積が認められ、火災に遭った可能性がある。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は椀形ないし高杯形土器、3は椀形のミニチュア土器、4〜6は高杯形土器、7〜9は壺形土器である。9は縄文原体や胎土の特徴から、竪穴0257号4・6・7と同一個体と思われる。2は複合口縁で、段部下端に押捺を加える。6は東辺壁際から検出され、床面上からの出土である。

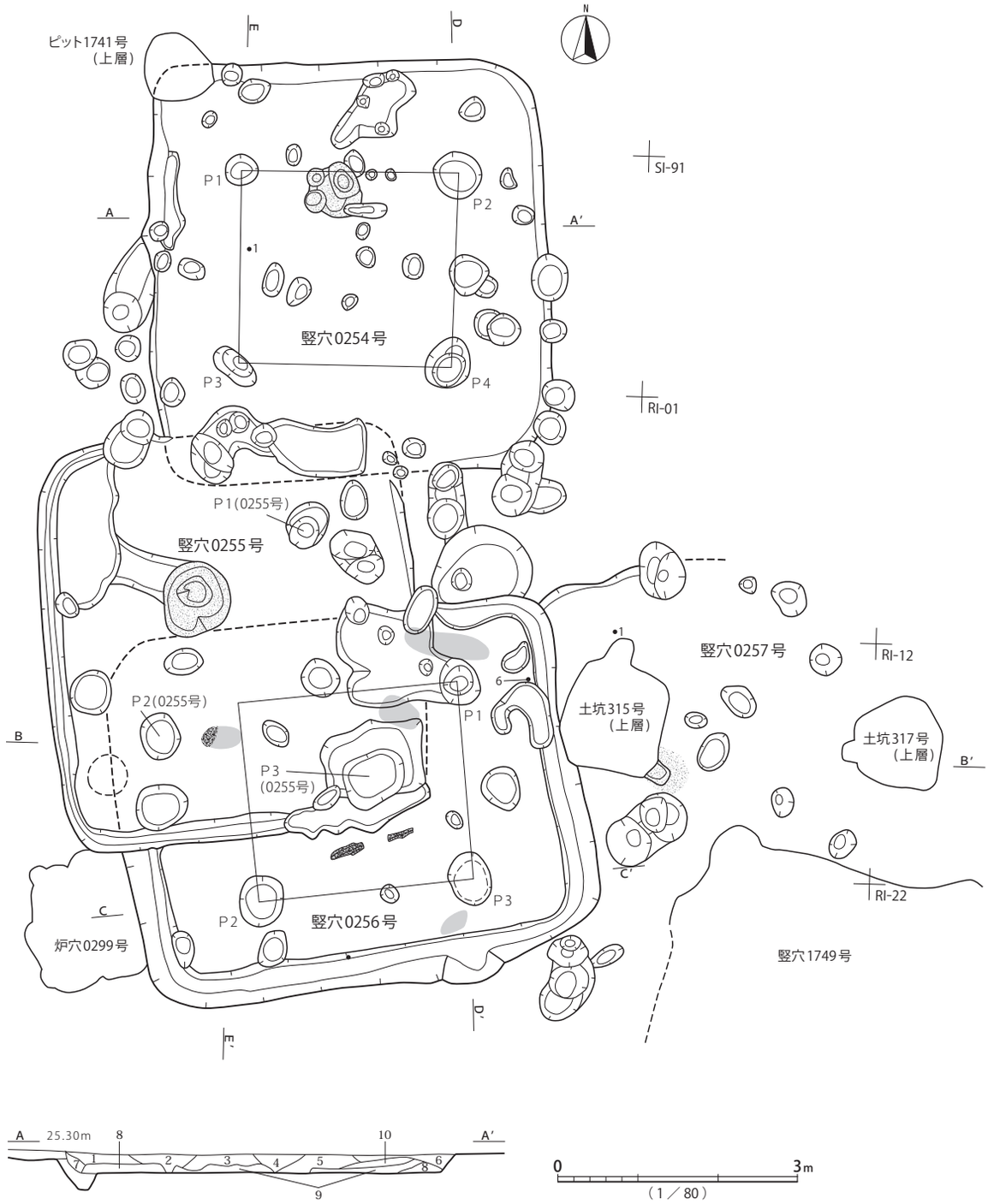
古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0257号 （Fig.262・263・266、PL.36・73・95・118）

RI−11を中心に位置する。西側で竪穴0256号と土坑315号（上層）、南側で竪穴1749号と重複する。新旧関係は、本遺構が0256・315号よりも古い。1749号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが古いと考えられる。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、北壁のごく一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.03mを測る。炉跡が検出されているが、掘り込みは明確でない。主柱穴や貯

竪穴 0254・0255・0256・0257 号

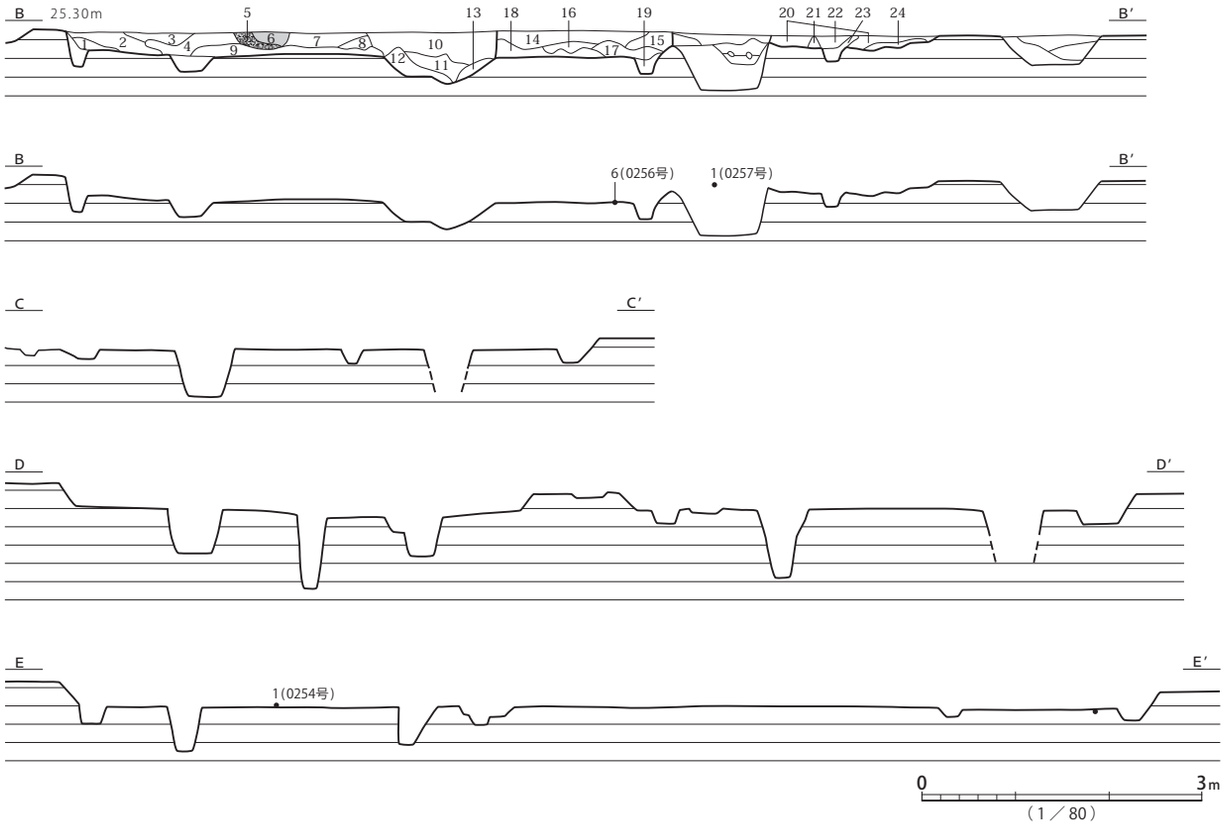


A-A'
0254号

1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。粘性あり、しまりややあり。
2　暗褐色土　ローム粒を少量含む。粘性・しまりあり。
3　暗褐色土　ローム粒を少量含み、土器片も混じる。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土　ローム粒を少量含む。粘性あり、しまり弱い。
5　暗褐色土　ローム粒を少量含み、褐色味が強い。粘性あり、しまり弱い。
6　暗褐色土　ローム粒・小ロームブロックを少量含む。粘性あり、しまり弱い。
7　褐色土　　ロームを含む。粘性弱い。
8　黒褐色土　ローム粒を少量含む。粘性あり、しまりなし。
9　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。粘性・しまりあり。
10　褐色土　　小ロームブロックを含む。粘性・しまりあり。

Fig.262　竪穴0254号(1) 遺構、竪穴0255号(1) 遺構、竪穴0256号(1) 遺構、竪穴0257号(1) 遺構

竪穴 0254・0255・0256・0257号



B-B'

0255号

1	暗褐色土	ロームを含み、褐色味が強い。粘性弱く、しまりあり。
2	暗褐色土	ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりあり。
3	暗褐色土	ローム粒をわずかに含む。粘性なし、しまりあり。
4	暗褐色土	ローム粒・小ロームブロックを多く含む。粘性なし、しまりあり。
5	木炭	
6	焼土	暗褐色土と炭化物を含む。
7	暗褐色土	焼土粒・ローム粒をわずかに混入。粘性なし、しまりあり。
8	黒褐色土	ロームブロックを含む。粘性・しまりあり。
9	黒褐色土	ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりあり。
10	暗褐色土	ローム粒・小ロームブロックをわずかに含む。粘性なし、しまりあり。
11	暗褐色土	ローム粒・小ロームブロックを含む。粘性なし、しまりあり。
12	暗褐色土	ローム粒・小ロームブロックを多く含む。粘性なし、しまりあり。
13	明褐色土	ロームブロック・暗褐色土を含む。

0256号

14	暗褐色土	ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりなし。
15	暗褐色土	ローム粒をわずかに含む。粘性弱く、しまりあり。
16	黒褐色土	ロームブロックを含む。粘性なく、しまり弱い。
17	暗褐色土	ローム・ローム粒を含む。しまりあり。
18	暗褐色土	ローム・ローム粒を含む。粘性・しまりあり。
19	明褐色土	ロームブロックを含む。粘性なし、しまりあり。

0257号

20	暗褐色土	ローム粒を少量含む。粘性・しまりあり。
21	明褐色土	暗褐色土を多く含み、焼土粒も混じる。粘性・しまり弱い。
22	暗褐色土	ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりあり。
23	黒褐色土	焼土粒をわずかに含む。しまりあり。
24	明褐色土	ローム・ロームブロックを含む。

Fig.263　竪穴0254号(2) 遺構、竪穴0255号(2) 遺構、竪穴0256号(2) 遺構、竪穴0257号(2) 遺構

蔵穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は台付甕形土器、3～7は壺形土器、8は椀形土器である。1は胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残し、口縁端部と段部下端に押捺を加える。北壁付近から検出され、床面上からの出土である。4・6・7は同一個体で、無節羽状縄文帯を結節文と列点文で区画する。竪穴0256号9と同一個体と思われる。5は平行沈線による重山形文区画に網目状撚糸文を充填する。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

竪穴0258号　（Fig.267・268、PL.36・73・118・134）

RH−05を中心に位置する。北側で竪穴0259号、南東側で竪穴260号（上層）、西側で土坑323号（上

竪穴 0254 号

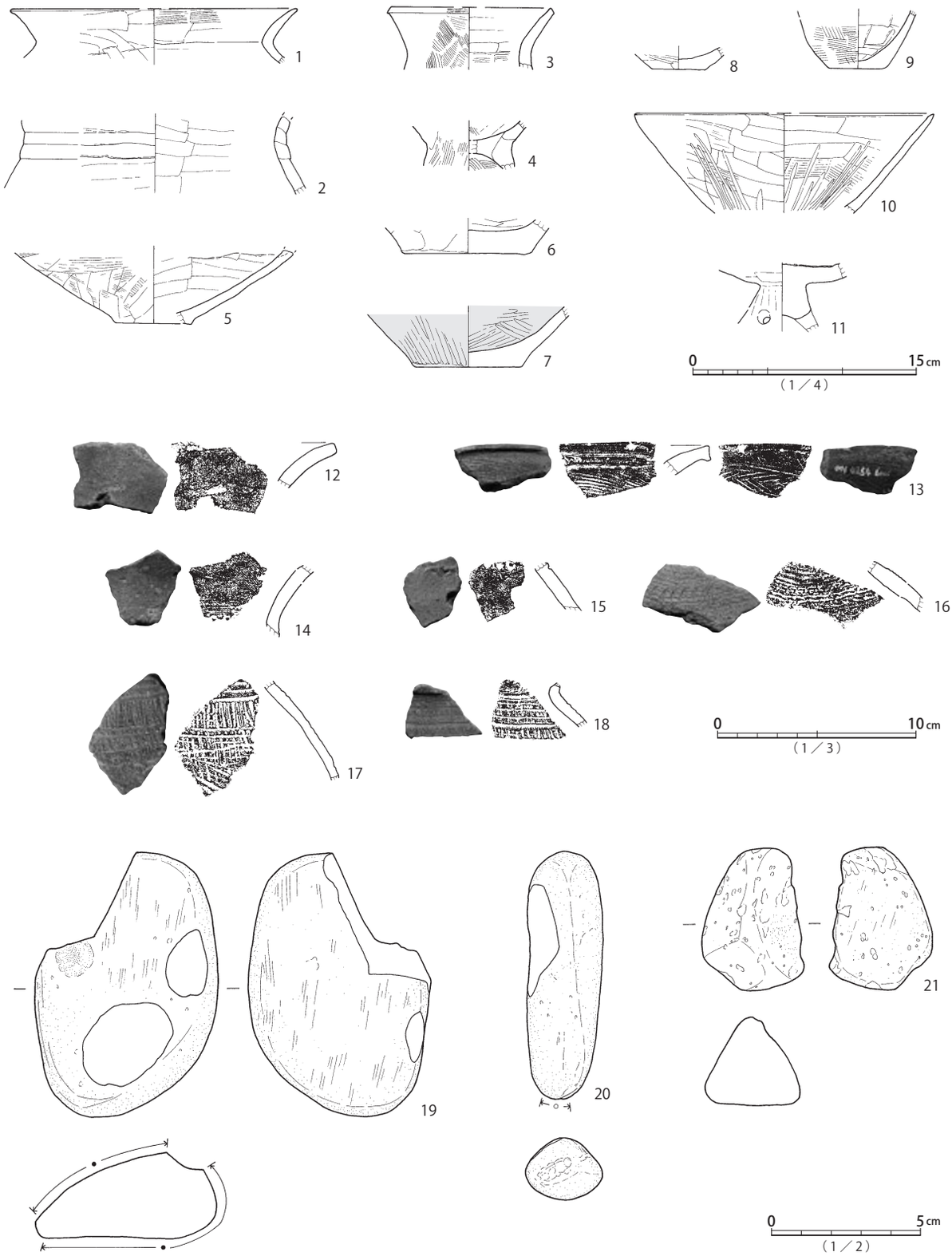
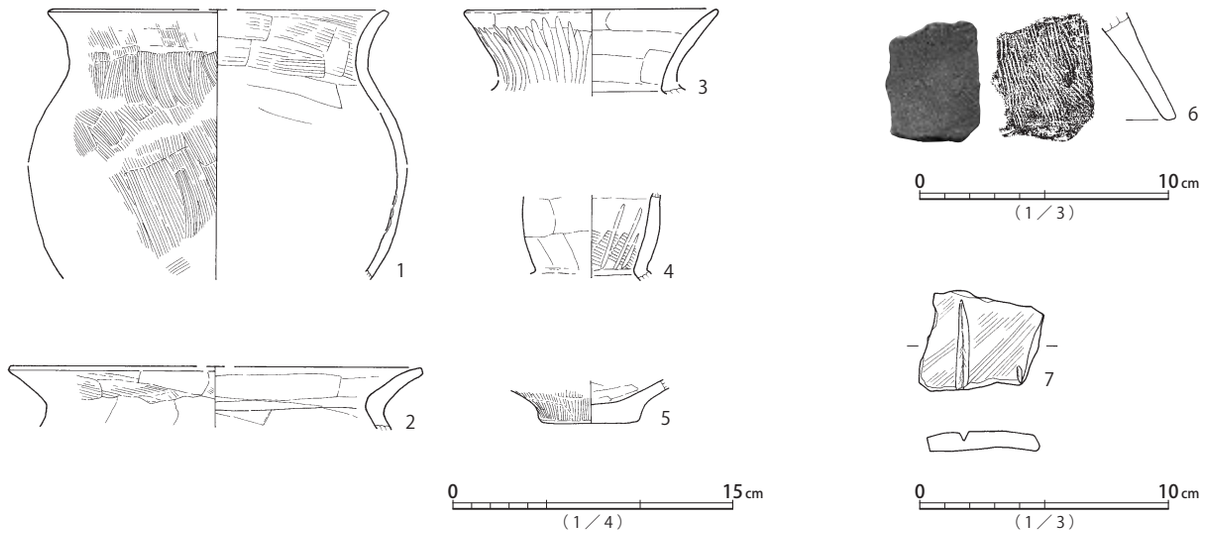


Fig.264　竪穴0254号(3) 遺物

竪穴 0255 号



竪穴 0256 号

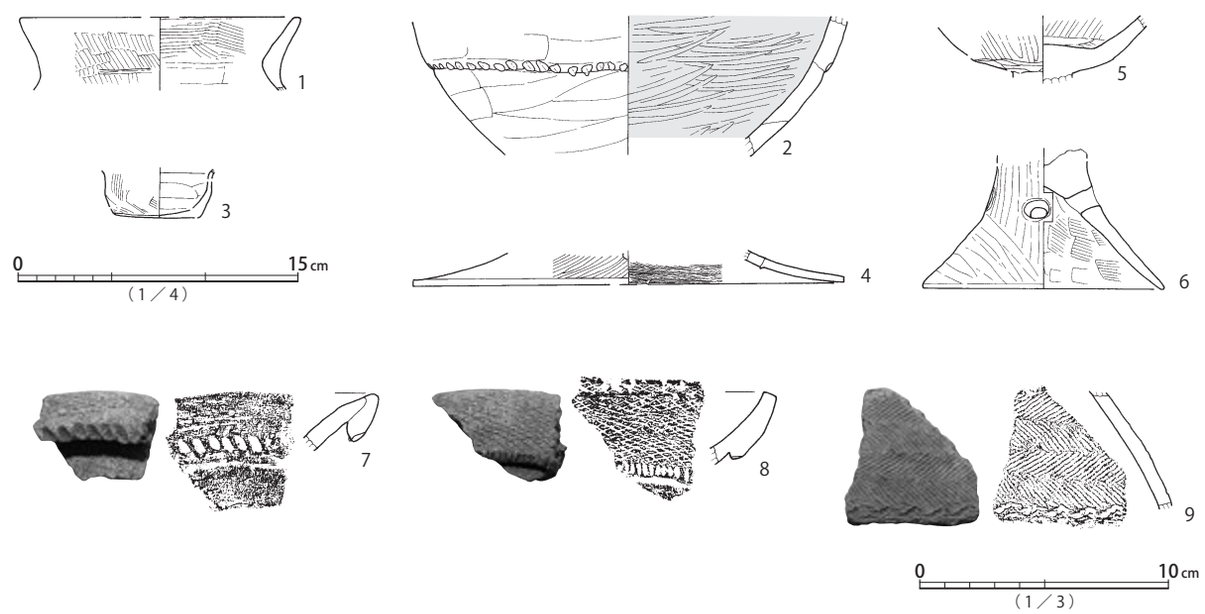


Fig.265　竪穴0255号(3) 遺物、竪穴0256号(3) 遺物

層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈すが、奥壁となる北西側は張り出しが弱く、隅丸方形気味となる。規模は7.10×6.24m、遺構下場面積は36.8㎡、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位はN−68°−Wである。P1〜4は主柱穴で、長方形に配置される。掘り方上部の拡張や複数の柱痕跡から、建て替えないし柱の抜き取りが行われたものと考えられる。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。調査図面には焼土範囲の記載しかなかったが、写真では浅い掘り込みを確認することができる。P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

竪穴 0257号

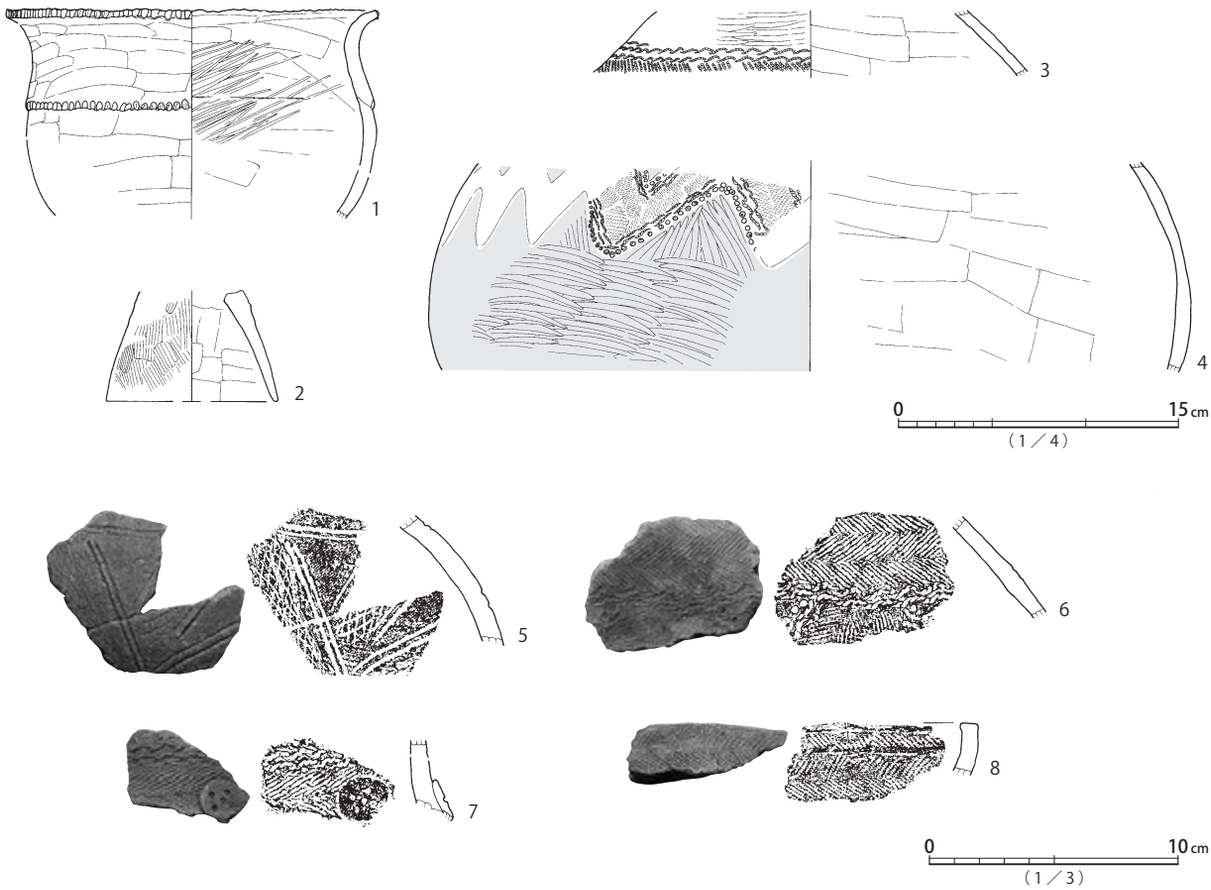


Fig.266　竪穴0257号(3) 遺物

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は台付甕形土器、3・4・8・10・11は壺形土器、5は器種不明の底部、6・7は高杯形土器、9は広口壺形土器、12は椀形土器、13は壺形のミニチュア土器である。1は口唇部に交互押捺を施し、胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残す。土器以外では14の磨石が出土している。

弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴0259号　（Fig.267・269、PL.73・74・118・134）

SH−95を中心に位置する。南側で竪穴0258号、北西隅で竪穴0239号、北東隅で竪穴0240号と重複する。新旧関係は、本遺構が0258号よりも新しい。0239・0240号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構がいずれの遺構よりも新しいと考えられる。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈すと考えられるが、0258号と重複する南側では壁面を検出することができておらず、詳細は不明である。規模は東西軸が3.91m、確認面からの深さは0.24mを測る。西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−0°となる。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1〜6は甕形土器、7・13は器種不明の底部、9・10は小型丸底系の壺形土器、

竪穴 0258・0259 号

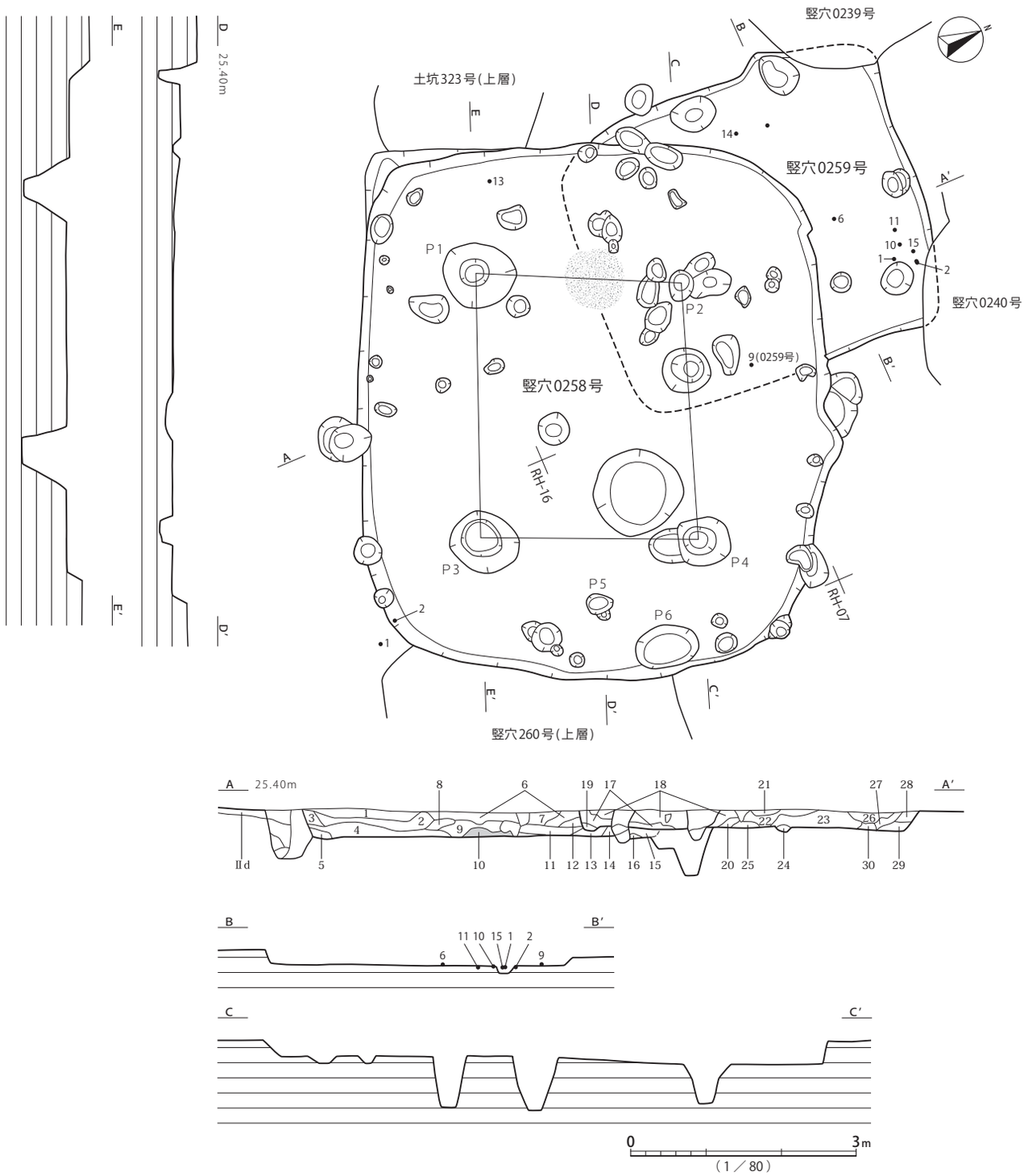


Fig.267　竪穴0258号(1) 遺構、竪穴0259号(1) 遺構

11・12は直口縁壺形土器、14は小型丸底系の鉢形土器、15は短頸壺形土器、16は椀形ないし高杯形土器である。8は広口壺形土器であろうか。1・2・10・11・15は北東隅付近からまとまって検出され、いずれも床面上からの出土である。土器以外では17の磨石・敲石が出土している。

古墳時代前期後葉の所産と考えられる。

竪穴 0258・0259号

0258号

1 黒褐色土 3cm大のロームブロックを含む。しまりあり。
2 黒褐色土 ロームを少量含む。
3 黄褐色土 ロームを主体とし、黒褐色土が混じる。粘性なし、しまりあり。
4 黄褐色土 ロームブロックを含む。粘性・しまりなし。
5 黄褐色土 ロームブロックを主体とし、黒色土が混じる。
6 黒褐色土 微小ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
7 黒褐色土 ローム粒を含む。しまりなし。
8 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
9 黒褐色土 微小ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
10 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を多く含む。粘性・しまりなし。
11 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
12 黒褐色土 ローム粒を含む。しまりあり。
13 黒褐色土 微小ローム粒を含む。しまりあり。
14 黒色土 ロームを多く含む。粘性なし、しまりあり。
15 黒褐色土 ローム粒を均等に含む。粘性・しまりなし。
16 暗褐色土 ローム粒を含む。しまりなし。

0259号

17 黒褐色土 微小ローム粒を含む。しまりなし。
18 黒褐色土 焼土粒・ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
19 黒褐色土 微小ローム粒を多く含む。しまりなし。
20 黒褐色土 微小ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
21 黒褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
22 黒色土 2mm大の砂粒を含む。粘性・しまりなし。
23 暗褐色土 ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
24 黒褐色土 ロームを少量含む。粘性・しまりなし。
25 暗褐色土 微小ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
26 黒色土 赤色粒を多く含む。
27 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりなし。
28 黄褐色土 ロームを主体とし、暗褐色土も多く混じる。粘性なし、しまりあり。
29 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
30 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土も混じる。しまりあり。

竪穴 0258号

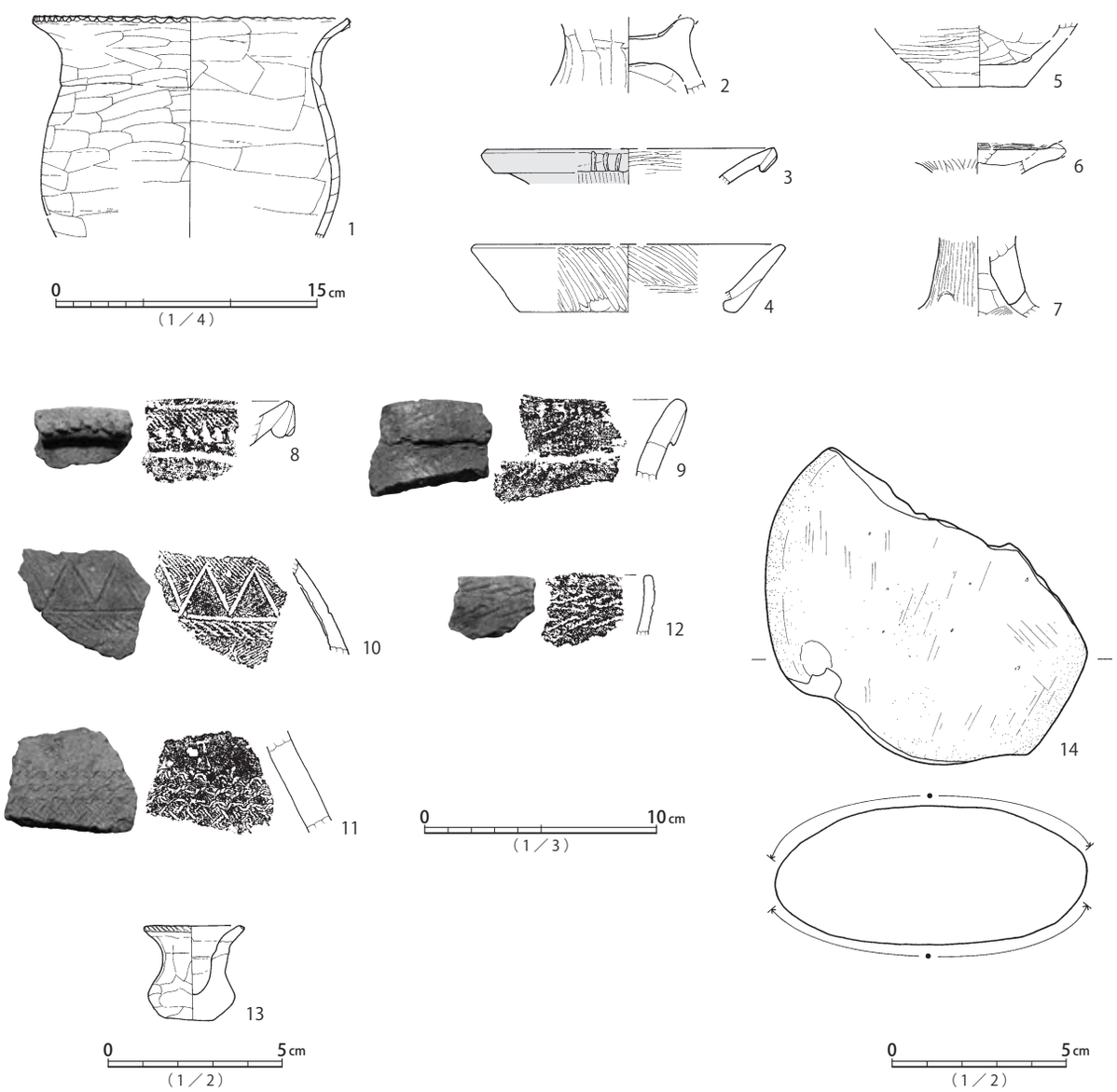


Fig.268 竪穴0258号(2) 遺物

竪穴 0259 号

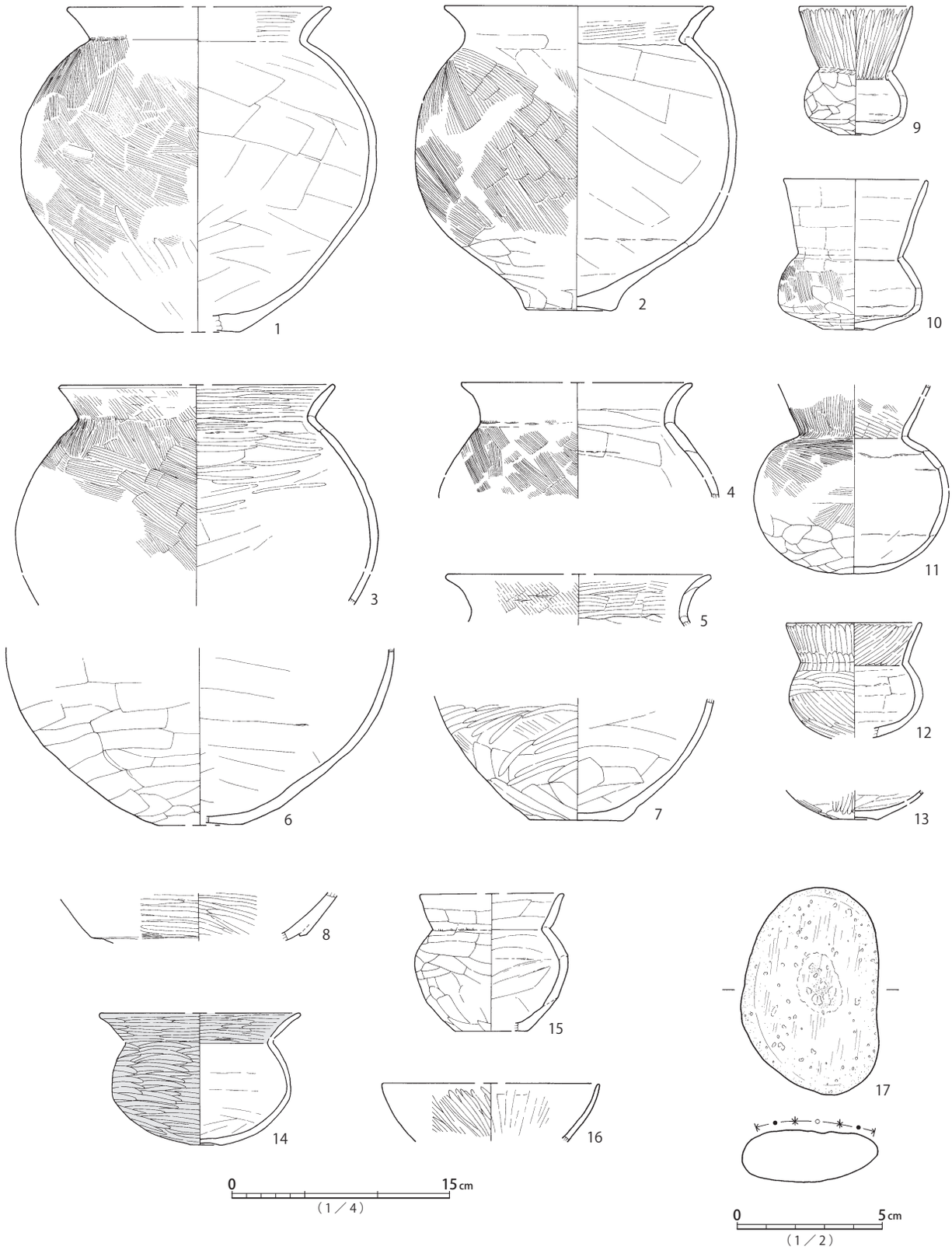


Fig.269　竪穴0259号(2) 遺物

竪穴0261号　（Fig.270～272、PL.36・74・118・134）

RH−22を中心に位置する。北東側で竪穴0262号、南西辺壁で炉穴1871号、西隅で溝2020・2023号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0262・1871号よりも新しく、2020・2023号よりも古い。

平面形態は方形を呈し、規模は7.02×6.90m、推定遺構下場面積は40.3㎡、確認面からの深さは0.43mを測る。主軸方位はN−40°−Wである。炉跡は遺構中央やや北寄りから検出されている。P1～4は主柱穴、P5は出入口施設である。P6は2段に掘り込まれる貯蔵穴で、長方形を呈し、炉跡と同軸上に配置される。壁周溝はほぼ全周する。覆土はレンズ状に堆積するが、ローム粒・ロームブロックを多く含み、人為的に埋め戻された可能性がある。

実測可能遺物は、1・2・11・14・15・17は壺形土器、4は鉢形土器、5～8・12は高杯形土器、10は甕形土器、13は短頸壺形土器、18は椀形土器である。3は小型の壺形土器、16は椀形土器であろうか。1は頸部が屈折し、口縁部は直線的に開く。土器以外では9の磨石が出土している。

古墳時代前期中葉の所産と考えられる。

竪穴0262号　（Fig.270～272、PL.36・74・118）

RH−13を中心に位置する。南西側で竪穴0261号と重複する。新旧関係は、本遺構が0261号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すが、南西側は重複により壊されるため、詳細は不明である。推定規模は3.84×4.10m、推定遺構下場面積は12.4㎡、確認面からの深さは0.34mを測る。焼土範囲の記載はないが、遺構北寄りの掘り込みが炉跡と考えられる。炉跡長軸を基準とした場合、主軸方位はN−10°−Wとなる。P1は貯蔵穴を思わせる位置にあるが、床面からの深さは1.06mを測り、これには該当しない。主柱穴や壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1～3は甕形土器、4は壺形土器、5・6は器種不明の底部、7は器台形土器、8は高杯形土器、9は内外面赤彩の鉢形土器である。甕形土器の頸部形状は、1はくの字状に屈折、2はゆるく外反する。竪穴0261号からの混入であろう。3は粘土紐積み上げ痕は認められないが、胴肩部に押捺を加える。4は肩部に小型の円形浮文を配し、東海東部系と思われる。3は遺構南東壁際からの出土であるが、垂直位置は記録類が不備のため、不明である。

遺構平面形態などから、弥生時代後期中葉の所産と思われる。

竪穴0264号　（Fig.273）

RG−20を中心に位置する。東側で溝2020号（上層）、南西側で炉穴1868号・ピット271号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が1868号よりも新しく、271・2020号よりも古い。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈す可能性があるが、上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝2020号）に大きく壊され、北西辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.12mを測る。北西辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位は、N−62°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴 0261・0262 号

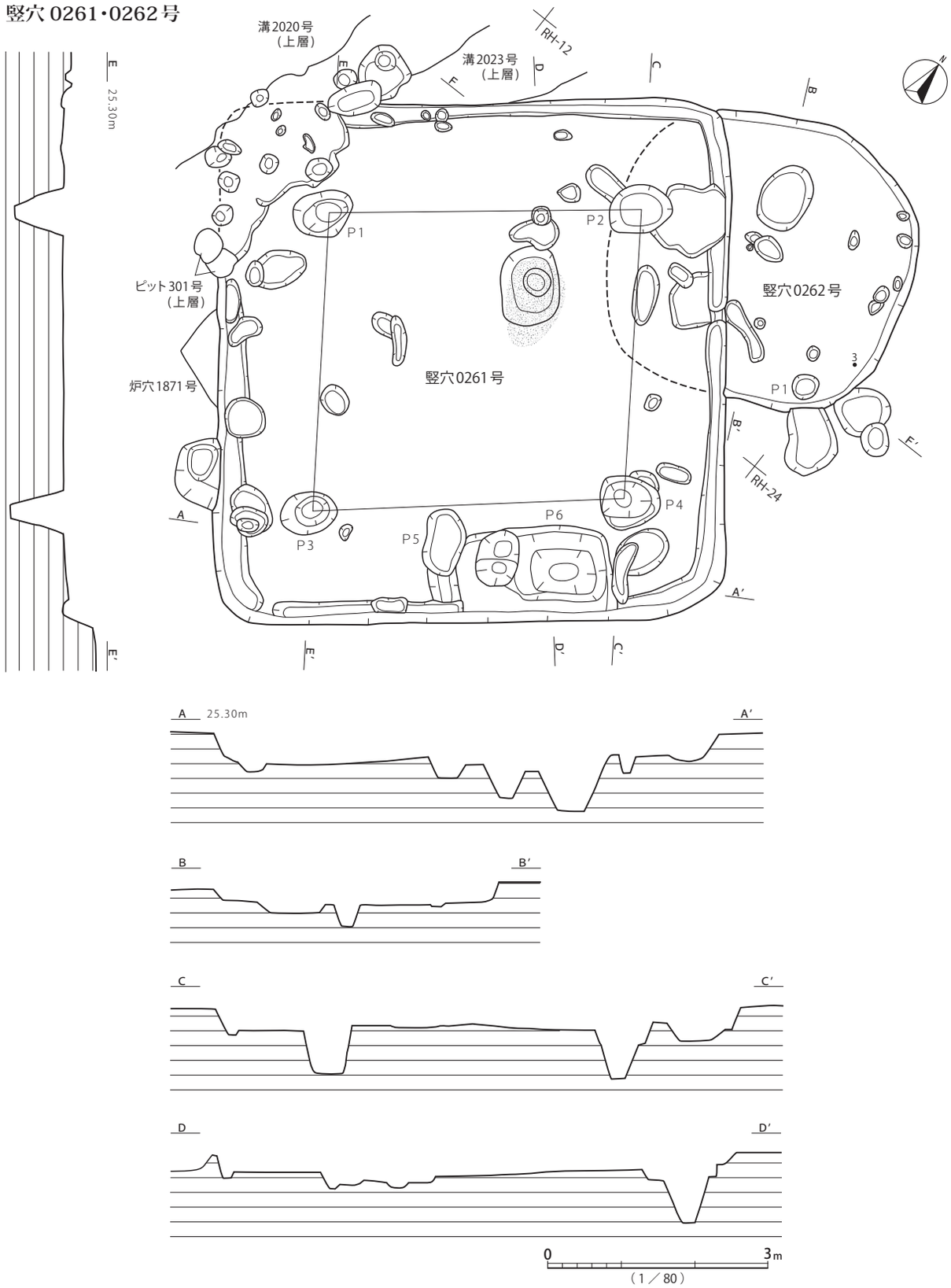
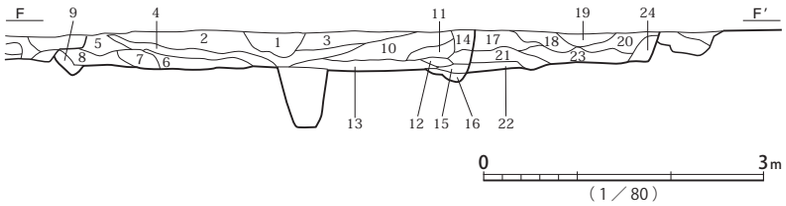


Fig.270　竪穴0261号(1) 遺構、竪穴0262号(1) 遺構

竪穴 0261・0262 号



0261号

1 黒褐色土 小ロームブロックを含む。粘性あり、しまり強い。
2 明褐色土 ローム・ロームブロックを多く含む。粘性あり、しまり強い。
3 暗褐色土 ローム粒を多く含み、ロームブロックも混じる。粘性なし、しまり強い。
4 黒褐色土 ローム粒を多く含む。しまり強い。
5 暗褐色土 ロームを多く含む。粘性弱く、しまりあり。
6 明褐色土 ローム・小ロームブロックを多く含む。粘性・しまり強い。
7 黒褐色土 ローム粒を少量含む。粘性・しまりなし。
8 黒褐色土 ローム粒をほとんど含まない。粘性なし、しまりあり。
9 明褐色土 ロームを多く含む。粘性なし、しまりあり。
10 暗褐色土 ローム粒・小ロームブロックを多く含む。粘性あり、しまり強い。
11 暗褐色土 ローム粒を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
12 暗褐色土 ローム粒わずかに含む。粘性なし、しまり強い。
13 黒褐色土 ロームブロックをわずかに含む。粘性・しまり強い。
14 黒褐色土 ロームをわずかに含む。粘性なし。しまりあり。
15 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘性・しまりなし。
16 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性弱く、しまり強い。

0262号

17 明暗褐色土 ローム粒を含む。粘性・しまり強い。
18 暗褐色土 小ロームブロックをわずかに含む。粘性・しまりあり。
19 明暗褐色土 ロームを含む。粘性・しまりあり。
20 暗褐色土 ローム粒を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
21 黒褐色土 ローム粒を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
22 明褐色土 黒褐色土を含む。粘性・しまりなし。
23 黒褐色土 ローム粒を少量含む。粘性強く、しまりややあり。
24 明暗褐色土 ロームを含む。粘性・しまりあり。

竪穴 0261 号

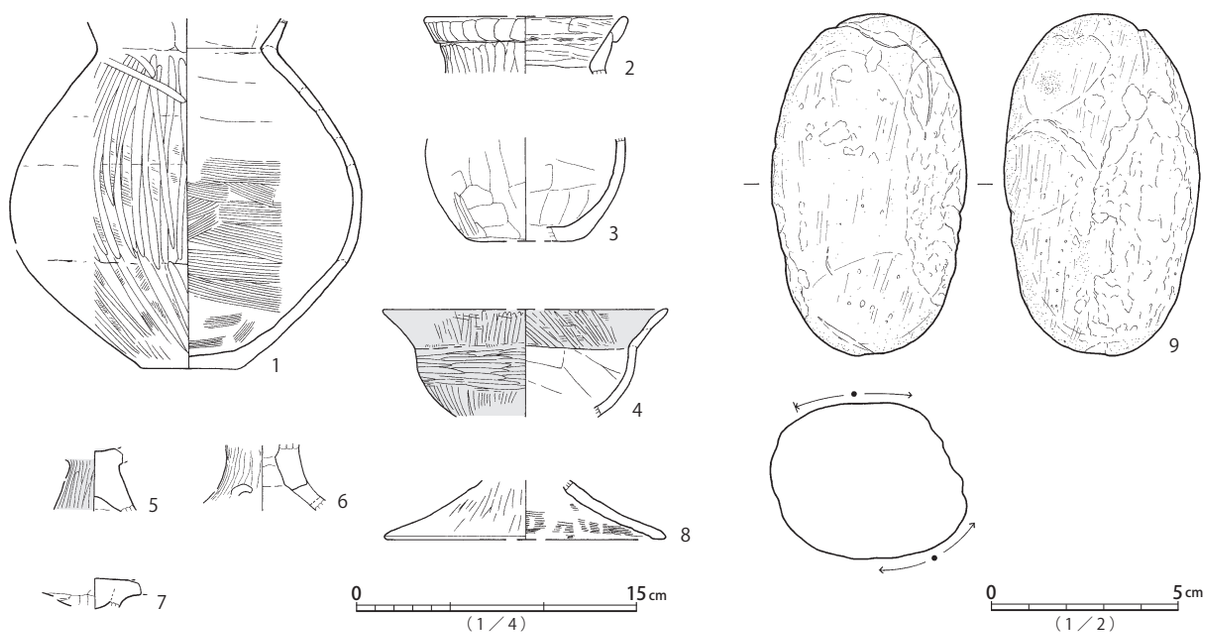


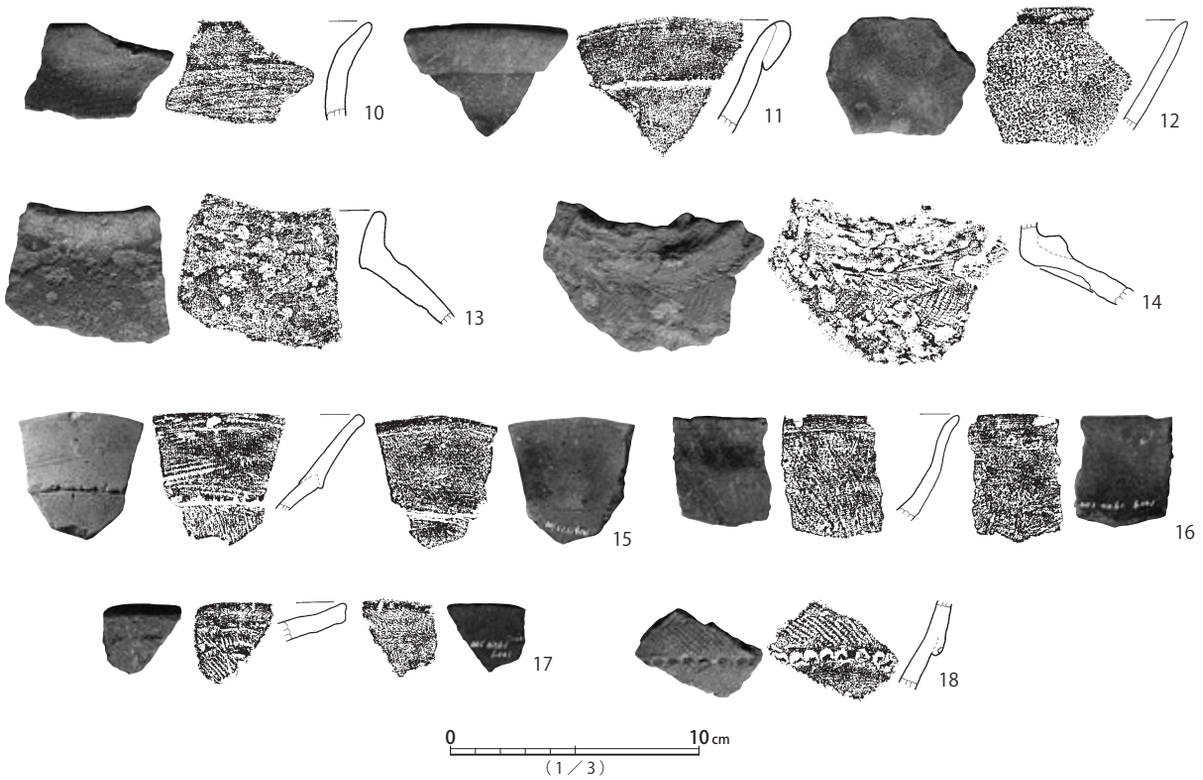
Fig.271 竪穴0261号(2) 遺構遺物、竪穴0262号(2) 遺構

竪穴0265号 （Fig.274、PL.36・74・118）

RG−28を中心に位置する。西側で竪穴0267・1874号、北東辺壁中央で炉穴0270号、南東辺壁中央で溝2416号と重複する。新旧関係は、本遺構が0270号よりも新しい。その他の遺構との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は方形を呈し、規模は3.98×3.98m、推定遺構下場面積は12.1㎡、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN−46°−Wである。炉跡は北隅寄りから検出されている。中軸線上にも

竪穴 0261 号



竪穴 0262 号

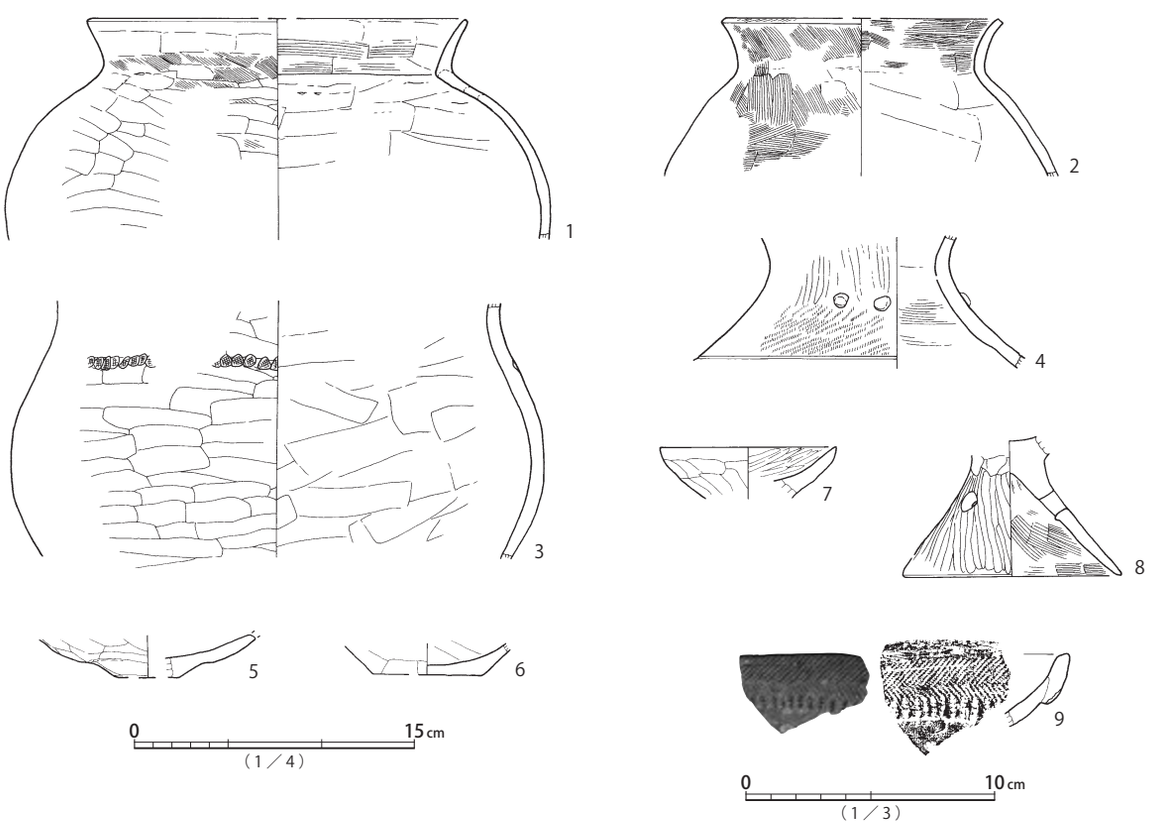
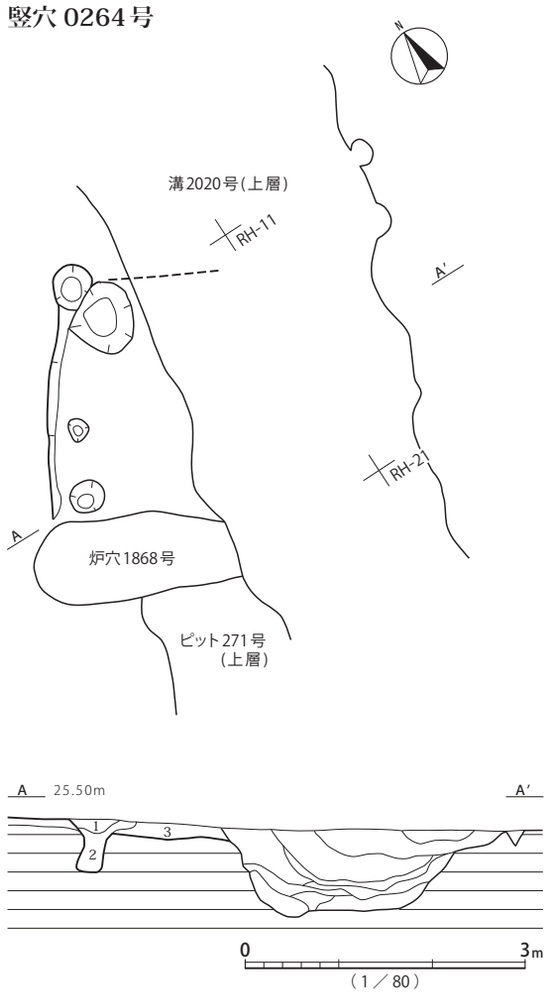


Fig.272　竪穴0261号(3) 遺物、竪穴0262号(3) 遺物

竪穴 0264 号



1　暗褐色土　やや褐色味が弱い。しまりなし。
2　明褐色土　粘性あり、しまりなし。
3　暗褐色土　ロームを少量含む。粘性なし。

Fig.273　竪穴0264号 遺構

浅い掘り込みが存在するが、焼けた痕跡は認められない。P2は出入口施設、P3は貯蔵穴と思われる。主柱穴は検出されておらず、壁周溝は全周する。

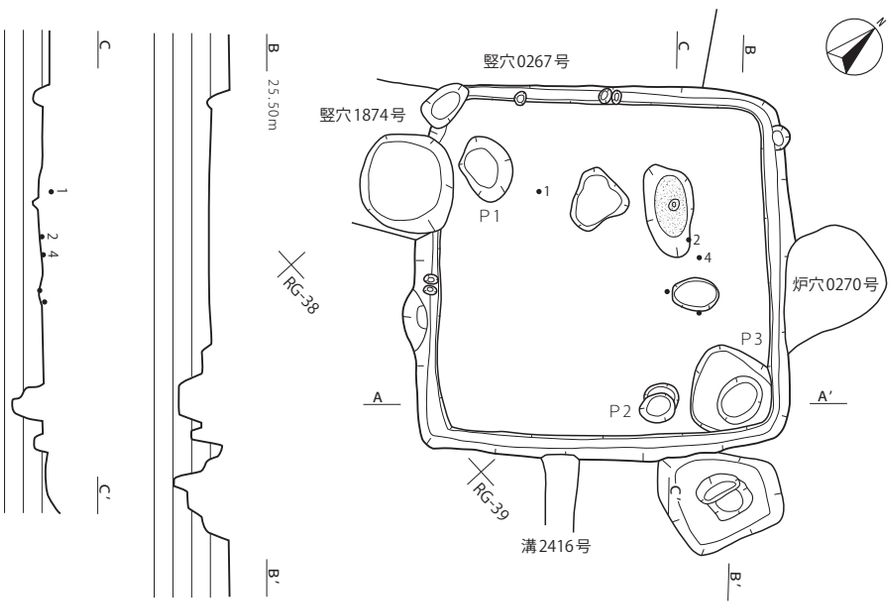
実測可能遺物は、1～3・6は甕形土器、4は壺形土器、5は器種不明の底部、7はS字状口縁台付甕形土器、8は高杯形土器で、このうち3と6は同一個体である。2・3は口唇部外面に面を持ち、口縁端部は鋭角になる。2の頸部は大きく外反し、口縁部はやや受口状となる。3の頸部はくの字状に屈折し、胴部器面は薄く仕上げられる。いずれも在地系には見られない特徴を持ち、庄内甕を祖形とするものと思われる。1は遺構中央西隅寄りの覆土下層、2・4は炉跡付近の床面上から出土している。

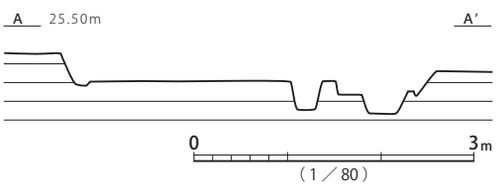
貯蔵穴が遺構隅に位置しており、前期中葉の可能性もあるが、古墳時代前期前葉の所産と思われる。

竪穴0266号　（Fig.275、PL.37・74・118）

RG－36を中心に位置する。東隅で竪穴1874号、南東辺壁で掘立柱建物3196号と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも新しいと思われるが、断面図など記録上の根拠や出土遺物がな

竪穴 0265 号





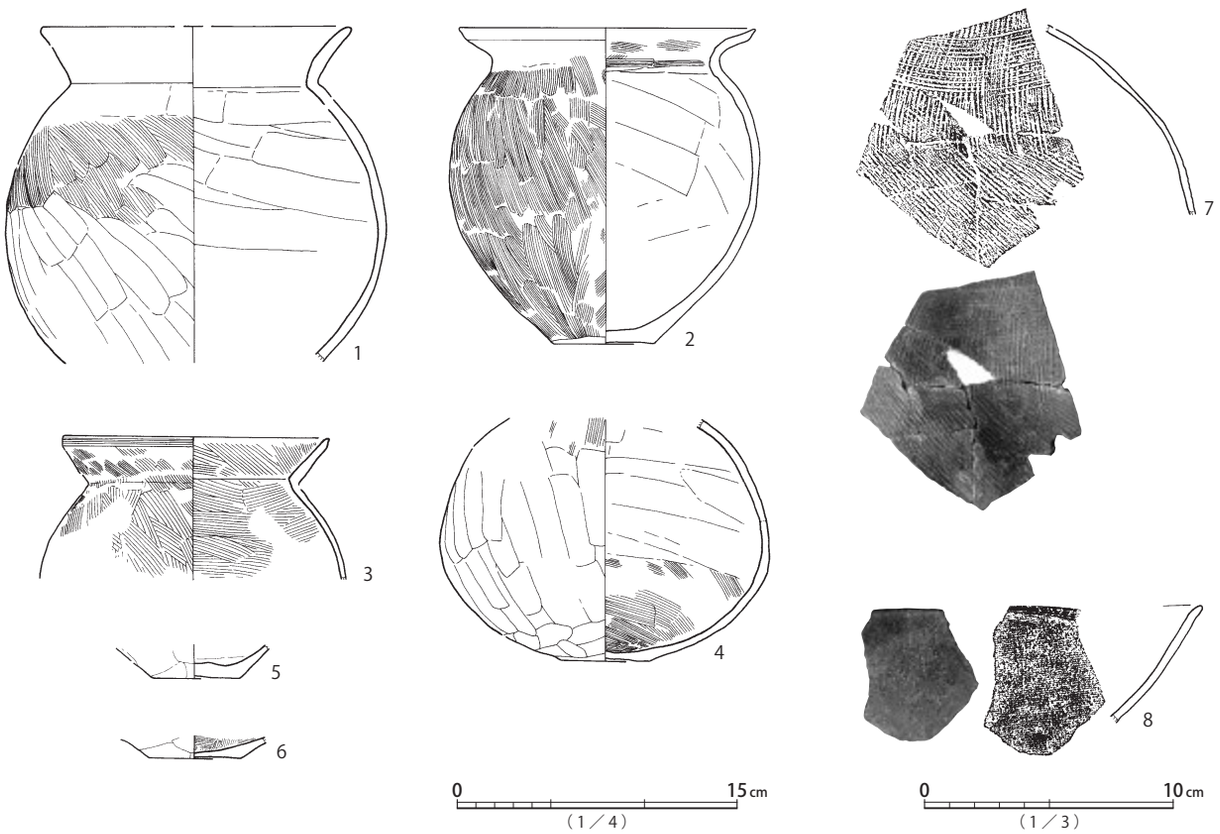


Fig.274　竪穴0265号 遺構遺物

く、明確でない。

平面形態は方形を呈し、推定規模は4.86×5.16m、推定遺構下場面積は21.0㎡、確認面からの深さは0.20mを測る。主軸方位はN−64°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されているが、掘り込みは明確でない。P1〜4は主柱穴、炉跡と同軸線上に並ぶP5は出入口施設と思われる。周溝は北東・北西辺壁際からのみ検出されている。西隅が方形に1段下がるのは、掘り方まで掘削したためであろう。貯蔵穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は壺形土器、3は器種不明の底部、4は高杯形土器である。複合口縁の2は、短い頸部の内面に屈曲稜をもつ。

古墳時代前期前〜中葉の所産と思われる。

竪穴0267号 （Fig.276・277、PL.36・37・118）

RG−17を中心に位置する。北側で竪穴0268号、南東側で竪穴0265号、南側で竪穴1874号と重複する。新旧関係は、本遺構が1874号よりも新しい。0265・0268号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は方形を呈し、規模は5.88×6.16m、推定遺構下場面積は33.4㎡、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN−40°−Wである。中軸線上北西寄りの掘り込みは炉跡の可能性があるが、被熱痕跡の記録はない。P1は出入口施設の可能性があるが、明確でない。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。覆土中にはローム粒やロームブロックを多く含み、人為的に埋め戻された可能性がある。

実測可能遺物は、ハケ調整がなされる1・2の甕形土器のみである。1の頸部はゆるく外反する。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、古墳時代前期前葉の所産と思われる。

竪穴1874号 （Fig.276、PL.37）

RG−27を中心に位置する。東側で竪穴0265号、西側で竪穴0266号、北側で竪穴0267号と重複する。新旧関係は、本遺構が0267号よりも古い。0265・0266号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

南東辺壁の一部がわずかに検出されたのみで、規模や形態は不明である。確認面からの深さは0.09mを測る。南東辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−36°−Wとなる。壁周溝は検出されていない。

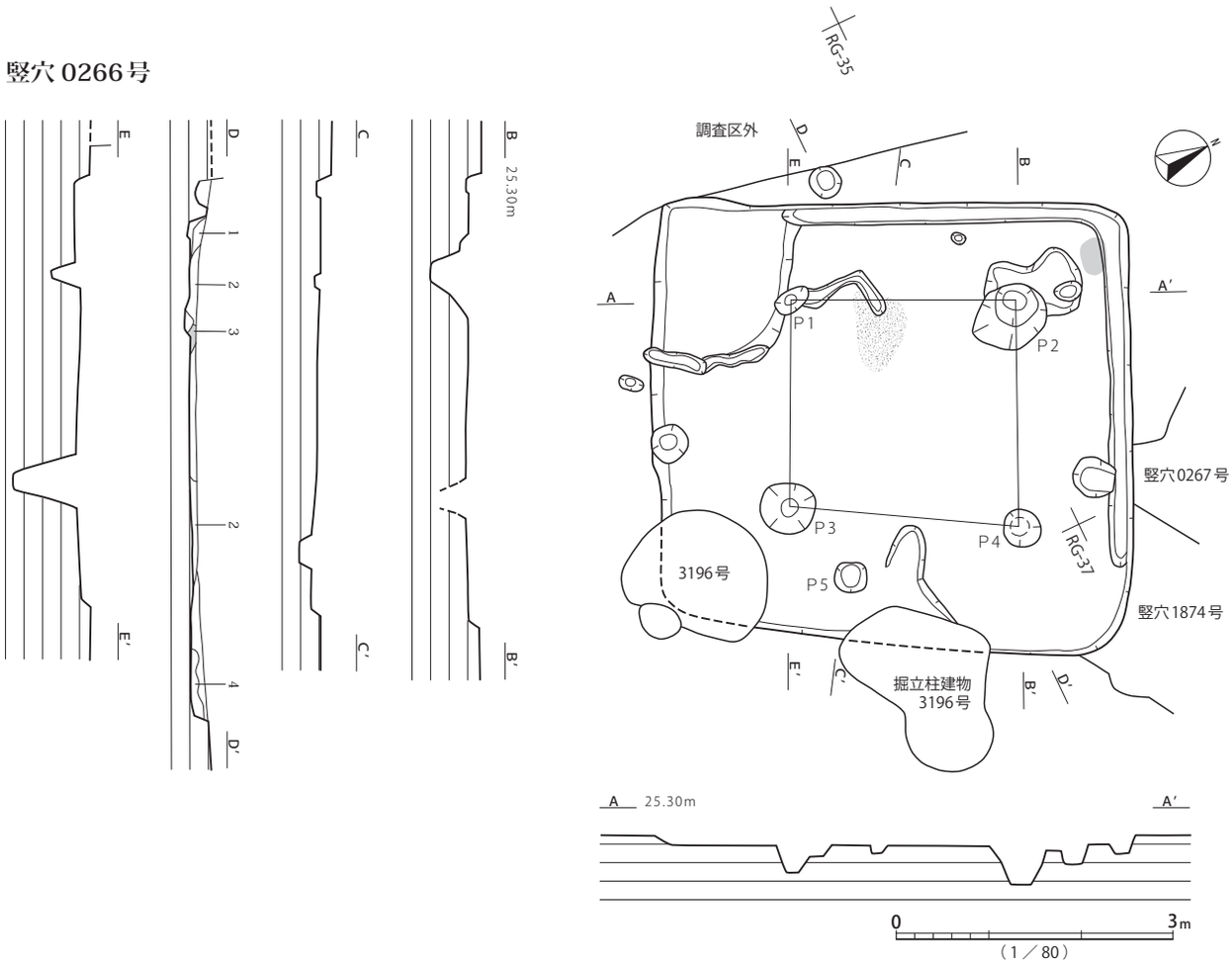
古墳時代前期前葉の所産と思われる竪穴0267号に切られることから、これ以前の所産であることは間違いないが、出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴0268号 （Fig.278）

RG−07を中心に位置する。南側は竪穴0267号、北西側で竪穴0269号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は胴張隅丸方形ないし方形を呈すと思われるが、北西隅と北東から南東辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は副軸長4.23m、確認面からの深さは0.11mを測る。

竪穴0266号



1　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。しまりやや弱い。
2　黒褐色土　ローム粒・小ロームブロックを少量含む。粘性・しまりあり。
3　黒褐色土　焼土を含み、ローム粒もわずかに混じる。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土　ローム粒を少量・黒褐色土をわずかに含む。粘性あり、しまりやや弱い。

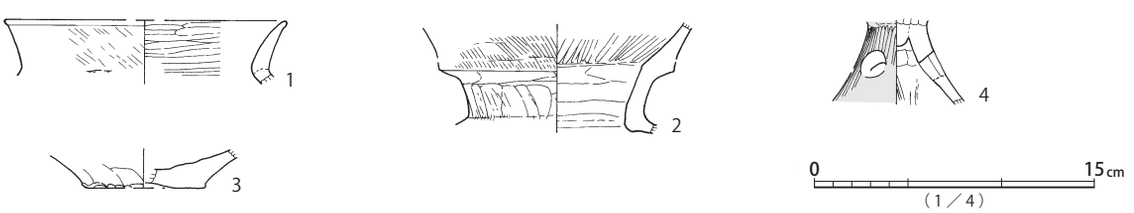


Fig.275　竪穴0266号 遺構遺物

主軸方位はN−38°−Wである。焼土の堆積のうちいずれかが炉跡、P1が貯蔵穴の可能性があるが、いずれも明確でない。北西辺壁際からは壁周溝が検出され、東隅のP1付近で広くなるが、これは掘り方まで掘削したことによると思われる。主柱穴は検出されていない。

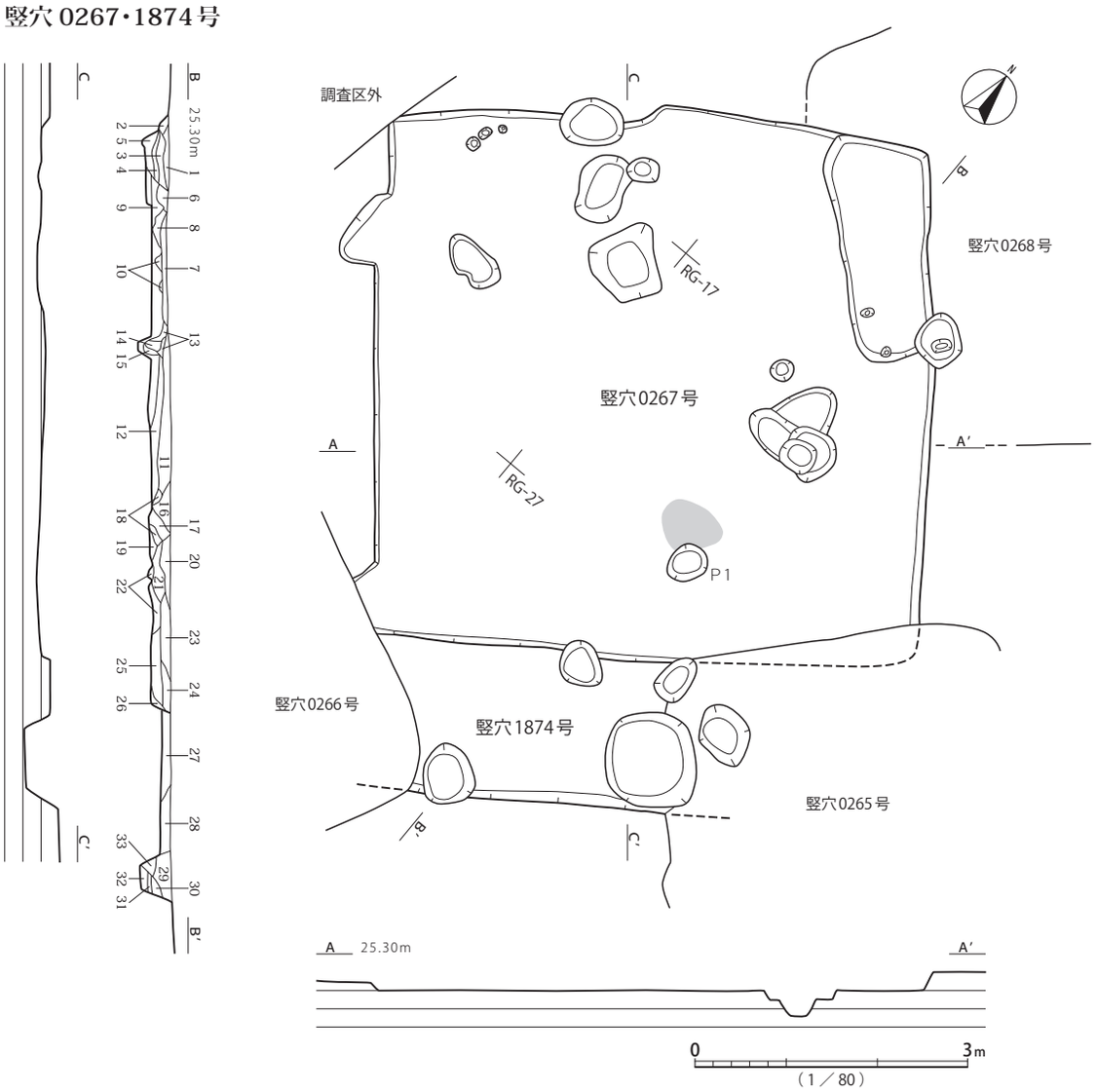
実測可能遺物は1の内外面赤彩が施される椀形土器細片のみである。

遺構平面形態から古墳時代前期の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0269号　（Fig.278、PL.74・96・119）

SG−97を中心に位置する。南側で竪穴0268号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠

竪穴 0267・1874 号



0267号

1 暗褐色土 粘土粒・小礫を含む。粒子細かく、粘性なし、しまり極めて強い。
2 明褐色土 ロームを主体とし、暗褐色土が混じる。粒子細かく、粘性あり、しまり極めて強い。
3 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。粒子細かく、粘性弱く、しまり強い。
4 暗褐色土 ローム粒を少量含む。粒子細かく、粘性ややあり、しまり強い。
5 暗褐色土 ロームを多く含む。粒子細かく、粘性強く、しまり極めて強い。
6 暗褐色土 粒子細かく、粘性強く、しまり極めて強い。
7 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。粒子細かく、粘性あり、しまり極めて強い。
8 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粒子細かく、粘性・しまり強い。
9 暗褐色土 ローム粒を多く含み、8層より褐色味が強い。粘性・しまり強い。
10 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまり極めて強い。
11 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。粒子細かく、粘性あり、しまり強い。
12 暗褐色土 ロームを多く含む。粒子細かく、粘性あり、しまり強い。
13 明褐色土 小ロームブロックを多く含む。粘性あり、しまり強い。
14 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。粒子粗く、粘性あり、しまり強い。
15 暗褐色土 小ロームブロックを含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。
16 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。粒子細かく、粘性なし、しまり強い。
17 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粒子細かく、しまり強い。
18 暗褐色土 粘土ブロックを含む。粒子細かく、粘性・しまり強い。
19 暗褐色土 ロームを多く含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。
20 暗褐色土 ほぼ11層と同じ。11層より粘性弱く、しまり強い。
21 暗褐色土 ローム粒を含む。粒子細かく、粘性・しまりあり。
22 暗褐色土 ロームを多く含む。粒子粗く、粘性なし、しまりあり。
23 暗褐色土 ローム粒を含む。粒子細かく、粘性あり、しまり強い。
24 暗褐色土 粒子粗く、粘性なし、しまりあり。
25 暗褐色土 ローム粒を少量含む。粒子粗く、粘性なし、しまりあり。
26 明褐色土 ロームブロックを含む。粒子粗く、粘性なし。

1874号

27 暗褐色土 ローム粒を含む。粒子細かく、粘性なし、しまり強い。
28 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。粒子細かく、粘性あり、しまり強い。
29 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性なし。
30 黒褐色土 小ロームブロックを含む。
31 明褐色土 ロームブロックを主体とする。
32 暗褐色土 ロームを多く含む。しまりあり。
33 黒褐色土 粒子粗く、粘性なし。

Fig.276 竪穴0267号(1) 遺構、竪穴1874号 遺構

竪穴0267号



Fig.277　竪穴0267号(2) 遺物

がなく明確でないが、出土遺物と遺構平面形態からは、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は小型の楕円形を呈し、規模は3.37×3.27m、推定遺構下場面積は8.6㎡、確認面からの深さは0.10mを測る。主軸方位はN−40°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出され、長軸を東西方向に傾けて設置する。主柱穴や貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。遺構範囲からは複数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1・4は甕形土器、2は椀形土器、3は台付甕形土器である。このうち1・4は、胎土の特徴から同一個体と考えられる。

弥生時代後期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0273号　（Fig.279）

既刊の上総国分僧寺跡報告書で竪穴273号として掲載済みであるが、帰属時期が明確でなかったことから再録するものである。

RG−59を中心に位置する。東側で溝2020号（上層）、北西側で掘立柱建物3196号と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が2020号よりも古い。3196号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でないが、本遺構のほうが新しいと思われる。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈すと思われるが、北西辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。規模は明確でないが、3196号の西側及び2020号の東側までは延びていないことから、主軸長5m以内、副軸長は6m以内に収まるものと考えられる。確認面からの深さは0.49mを測る。北西辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−37°−Wとなる。炉跡や主柱穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。粘土の分布が確認されているが、ここでは上層の遺物が集中していることから、奈良・平安時代のものが混入した可能性が高い。

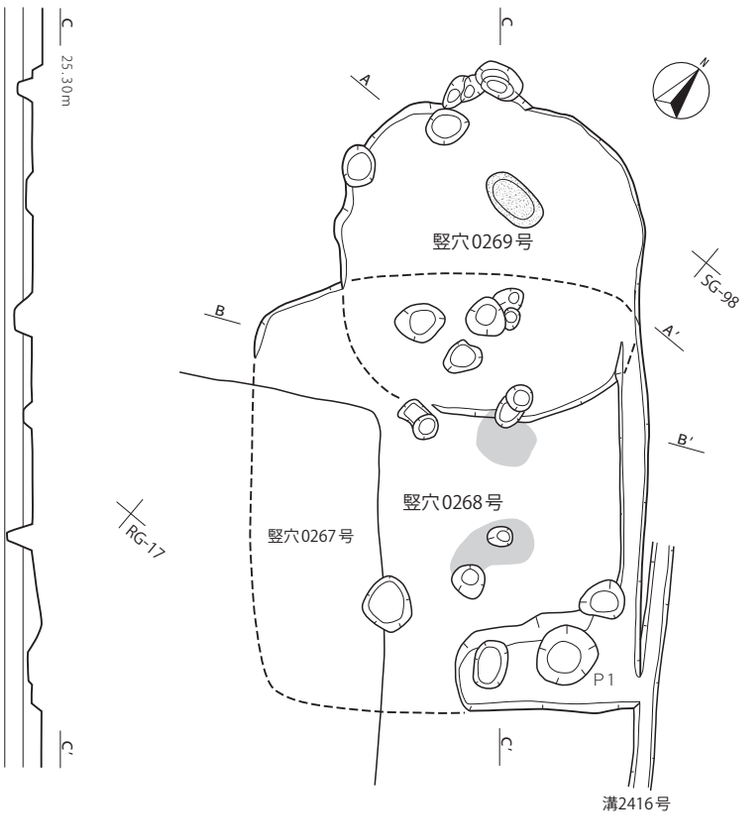
出土遺物は、実測に至らない器台形土器口縁部細片が出土するのみである。

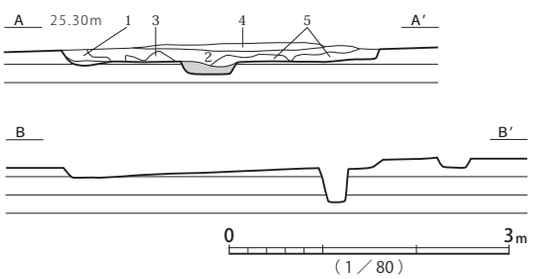
古墳時代前期の可能性があるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0274号　（Fig.279、PL.119）

RH−63を中心に位置する。東側で竪穴0275号、北西側で溝2416号と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

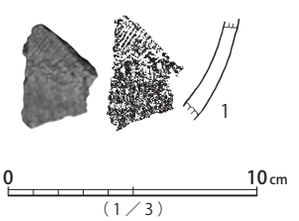
竪穴 0268・0269 号



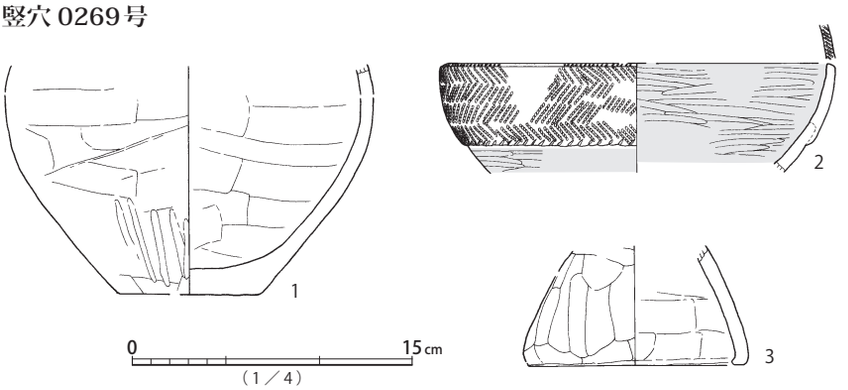


1　明褐色土　　やや汚れる。粘性強く、しまりあり。
2　黒褐色土　　ローム粒を含む。粘性強く、しまり極めて強い。
3　暗褐色土　　ロームをブロック状に含む。粘性・しまりあり。
4　暗褐色土　　砂粒・小礫を含む。しまり強い。
5　明暗褐色土　ロームを多く含み、ロームブロックも混じる。粘性強く、しまり極めて強い。

竪穴 0268 号



竪穴 0269 号



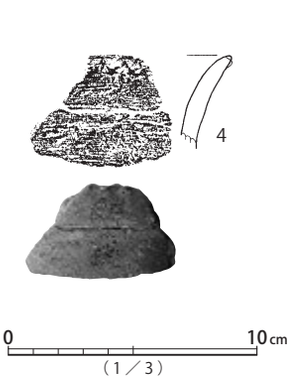


Fig.278　竪穴0268号 遺構遺物、竪穴0269号 遺構遺物

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、北西隅がわずかに検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.27mを測る。

実測可能遺物は1の壺形土器のみで、弥生時代後期後半の可能性があるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0275号 （Fig.280・281、PL.37・75・119・134）

RH−54を中心に位置する。南西側で竪穴0274号、北東側で竪穴0276号、南東側で竪穴0285号と重複し、南西隅は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が0285号よりも新しい。0274・0276号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構がいずれの遺構よりも新しいと考えられる。

平面形態は長方形を呈し、規模は5.42×5.02m、推定遺構下場面積は17.7㎡、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位はN−23°−Wである。炉跡は遺構中央やや北寄りから検出されている。掘り込みに段差が認められ、北側に作り替えた可能性がある。P1〜4は主柱穴で、竪穴の形態に合わせて長方形に配置する。P5・6のいずれかは出入口施設の可能性があるが、明確でない。幅広の壁周溝が全周し、壁柱穴の可能性がある柱穴が部分的に認められる。貯蔵穴は検出されていない。なお、東辺壁中央から検出された柱穴内からは貝層が確認されており、本遺構に伴う可能性もあるが、重複する竪穴0276号の帰属資料として分析を行っている。

実測可能遺物は、1〜3・5・17・18は甕形土器、4は小型のS字状口縁甕形土器、6・8・9・11は器種不明の底部、7は台付甕形土器、10・19〜22は壺形土器、12は小型丸底系の鉢形土器、13・14は高杯形土器、15・16は器台形土器である。甕形土器の頸部は、いずれもくの字状に屈折する。4は黄橙色を呈し、搬入品と思われる。11は筒状の器形を呈し、縄文土器の可能性がある。2はP4脇からの出土であるが、垂直位置は不明である。土器以外では23の磨石が出土している。

古墳時代前期中葉の所産と思われるが、前期前葉を含む可能性がある。

竪穴0285号 （Fig.280）

RH−55を中心に位置する。西側で竪穴0275号、東隅で土坑（遺構番号なし）と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が0275号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、東隅付近が検出されたのみで、掘り込みも浅いことから、詳細は不明である。確認面からの深さは0.08mを測る。北東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−46°−Wとなる。

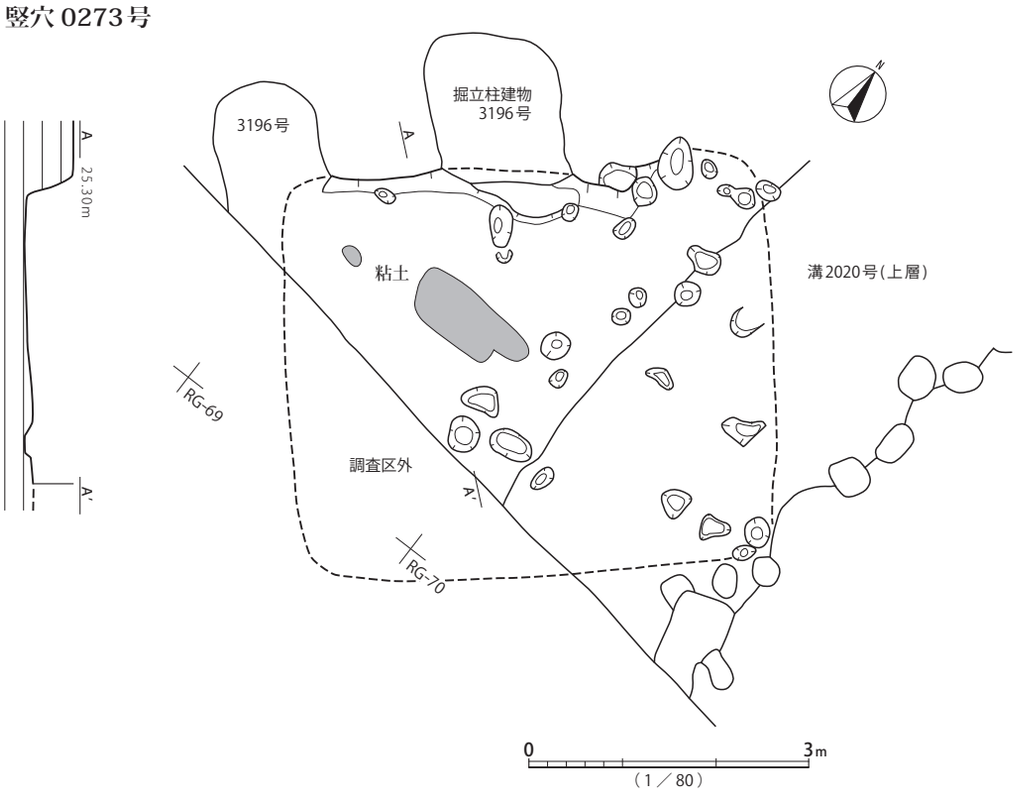
弥生時代後期後半の所産の可能性があるが、出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴0276号 （Fig.282・283、PL.37・119・134・135・140・143）

RH−45を中心に位置する。南西辺壁で竪穴0275号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構が0275号よりも古いと考えられる。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈すが、奥壁となる北西辺壁はやや直線的となる。推定規模は5.38×4.85m、推定遺構下場面積は21.3㎡、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位はN−37°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴で、出入口側の空間

竪穴 0273 号



竪穴 0274 号

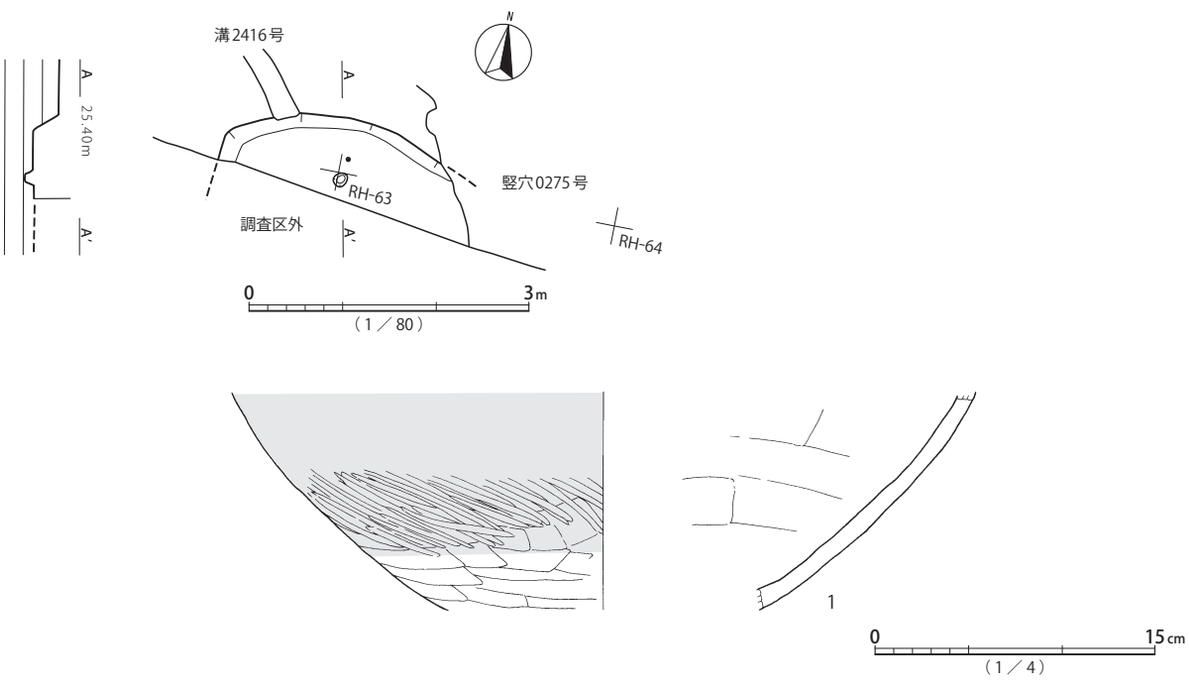
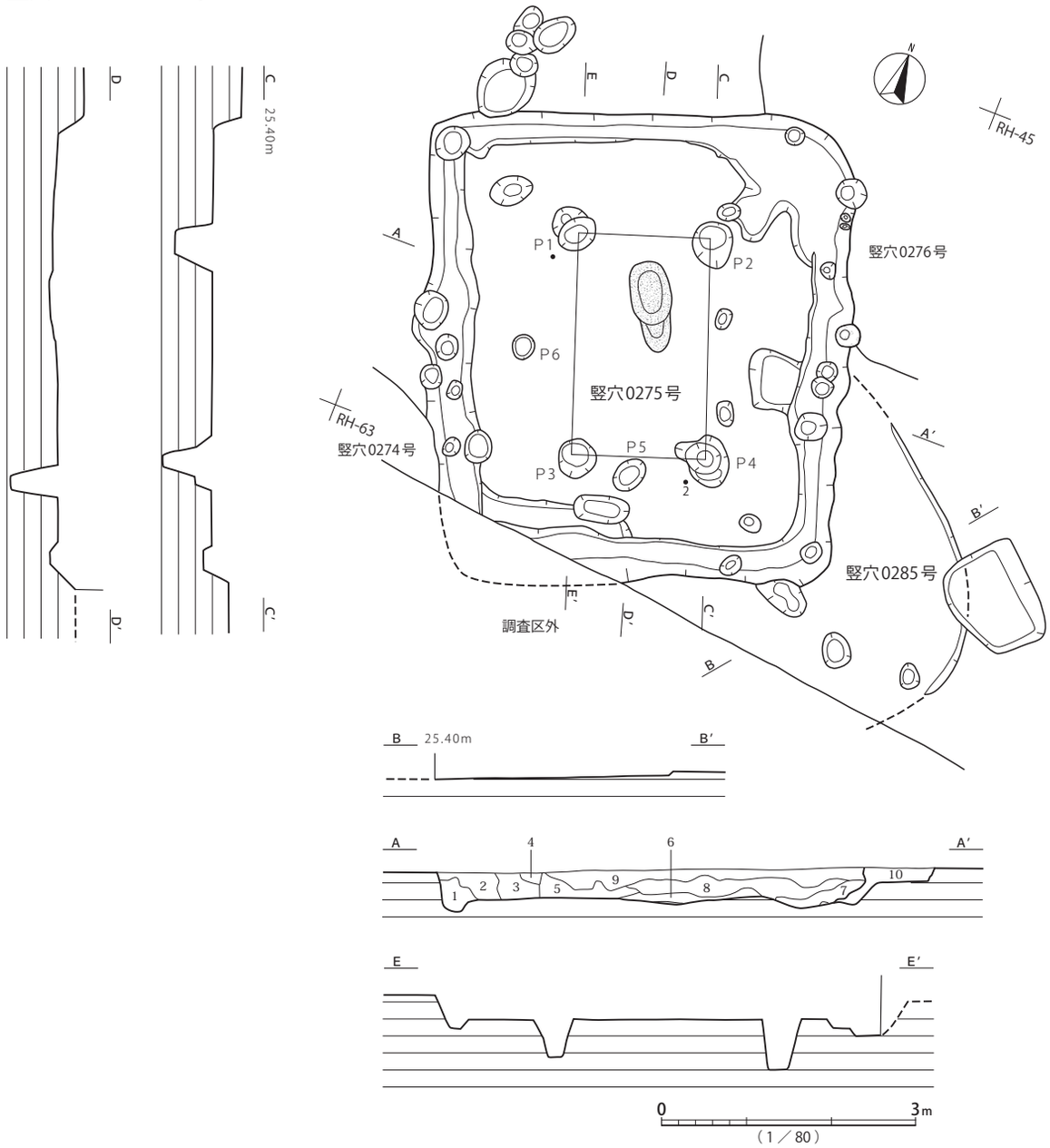


Fig.279　竪穴0273号 遺構、竪穴0274号 遺構遺物

竪穴 0275・0285 号



0275号

1　暗褐色土　ロームを多量に含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土　ロームを少量含み、ロームブロックもわずかに混じる。しまりややあり。
3　黒色土　ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土　微小ローム粒を少量含む。しまりなし。
5　黒褐色土　2層に似る。
6　黒褐色土　ローム粒を多量に含み、焼土もわずかに混じる。粘性・しまりあり。
7　黒色土　ローム粒を多量に含む。粘性・しまりあり。
8　黒褐色土　ローム・ローム粒を少量含む。粘性・しまりあり。
9　黒色土　ローム粒を少量含み、炭化物もわずかに混じる。しまりあり。

0285号

10　黒褐色土　ローム・小ロームブロックを多量に含む。しまりあり。

Fig.280　竪穴0275号(1) 遺構、竪穴0285号 遺構

竪穴 0275 号

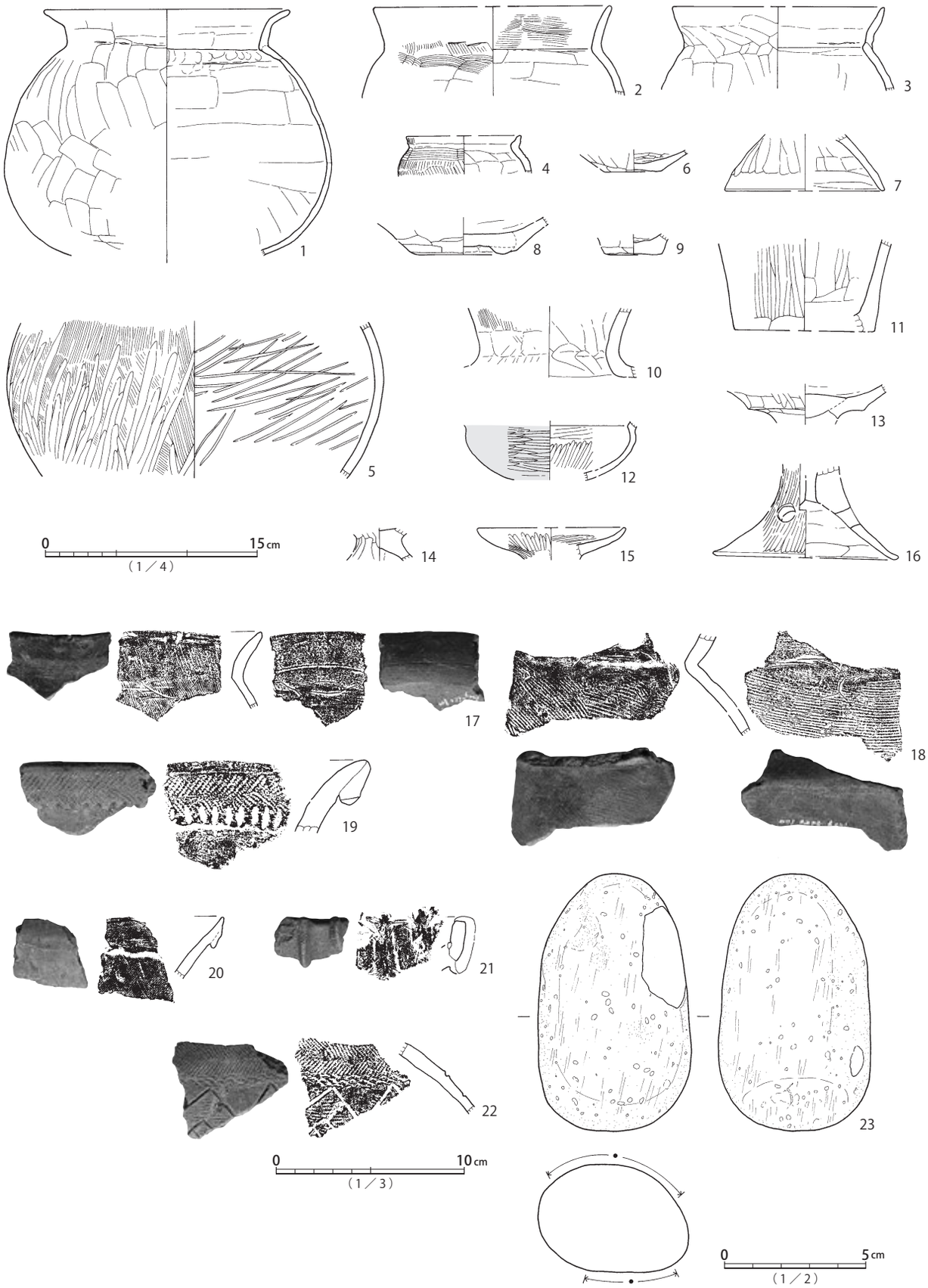


Fig.281　竪穴0275号(2) 遺物

をやや広くとって、台形気味に配置する。P5は貯蔵穴と思われる。遺構範囲からは複数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。なお、南隅から検出された柱穴内からは貝層が確認されており、重複する竪穴0275号に伴う可能性もあるが、本遺構の帰属資料として分析を行っている。分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1・2・8～11は甕形土器、3・5・13は椀形土器、4は器種不明の底部、6は鉢形土器、7・14は高杯形土器、12は壺形土器である。1は大きく外反する口縁の端部に面をもつ。2は受口状口縁甕で、頸部屈曲から稜をもって外反したのち、直立気味に角度を変えて端部に至る。土器以外では、15～17の磨石類、18の軽石、19の鉄製鎌刃が出土している。鉄製鎌刃は、現存長87mmを測り、刃部は内湾、先端側は外湾し、基部は手前側に折り返される。刃部の内湾は研磨によるものと考えられ、形状は直刃に近いものと思われる。

弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴0277号　（Fig.284、PL.37・75・119・142）

RH−26を中心に位置する。東側で竪穴0278号と重複する。新旧関係は、本遺構が0278号よりも新しいと思われるが、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は不整隅丸方形を呈し、規模は3.80×3.67m、推定遺構下場面積は11.5㎡、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN−26°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。四隅から検出された柱穴は上屋を支えた痕跡の可能性があるが、深度はまちまちで、遺構に伴うものかも不明である。P1は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。

実測可能遺物は、1・2は甕形土器、3・7は壺形土器、4は器種不明の底部、5・6は高杯形土器である。1は北西隅付近から検出され、床面上からの出土である。土器以外では、8の土製有孔丸玉（土玉）が出土している。

古墳時代前期中葉の所産と考えられるが、前期前葉の可能性もある。

竪穴0278号　（Fig.284・285、PL.37・75・96・119）

RH−26を中心に位置する。北辺壁で竪穴260号（上層）、南西側で竪穴0277号と重複する。新旧関係は、本遺構が260号よりも古い。0277号との関係は、本遺構のほうが古いと思われるが、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は小型の楕円形を呈し、推定規模は3.18×3.12m、推定遺構下場面積は7.1㎡、確認面からの深さは0.16mを測る。主軸方位はN−3°−Wである。炉跡は中軸線上北寄りから検出されている。主柱穴は検出されておらず、P1は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。

実測可能遺物は、1・13・14はS字状口縁台付甕形土器、2・4・5・17～19は壺形土器、3は器種不明の底部、7・16は椀形土器、9は鉢形土器、11・20は高杯形土器、12・15は甕形土器である。6・8はいずれも小型品で、6は台付甕形土器、8は鉢形土器であろう。10は高杯形土器と思われるが、径が大きく、別器種の可能性もある。1はS字甕B類で、にぶい黄橙色を呈し、搬入品の可能性がある。13は口唇部内面に明瞭な面をもつ。

弥生時代後期後半の所産と思われるが、古墳時代前期前葉の可能性もある。

竪穴 0276 号

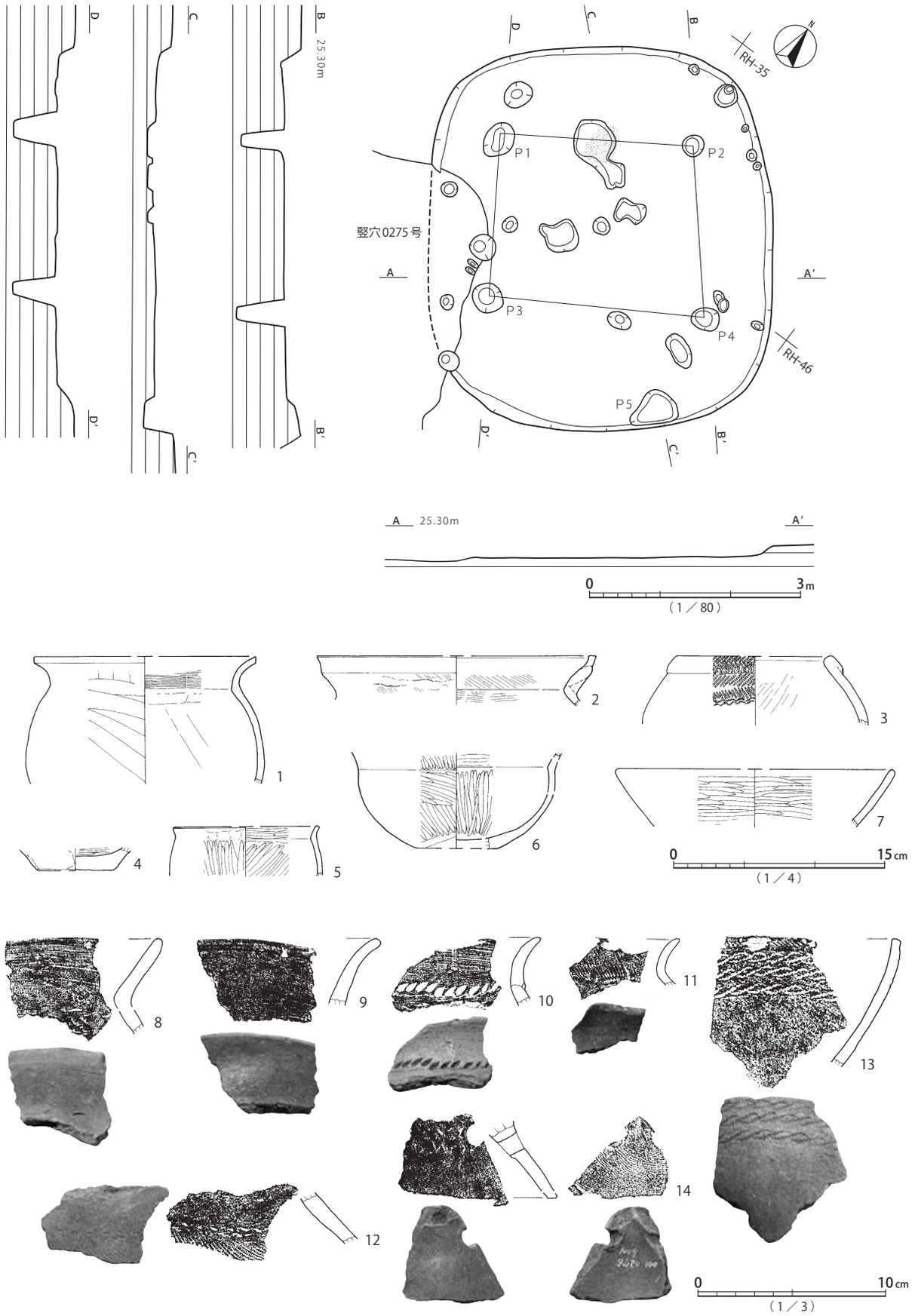


Fig.282　竪穴0276号(1) 遺構遺物

竪穴 0276 号

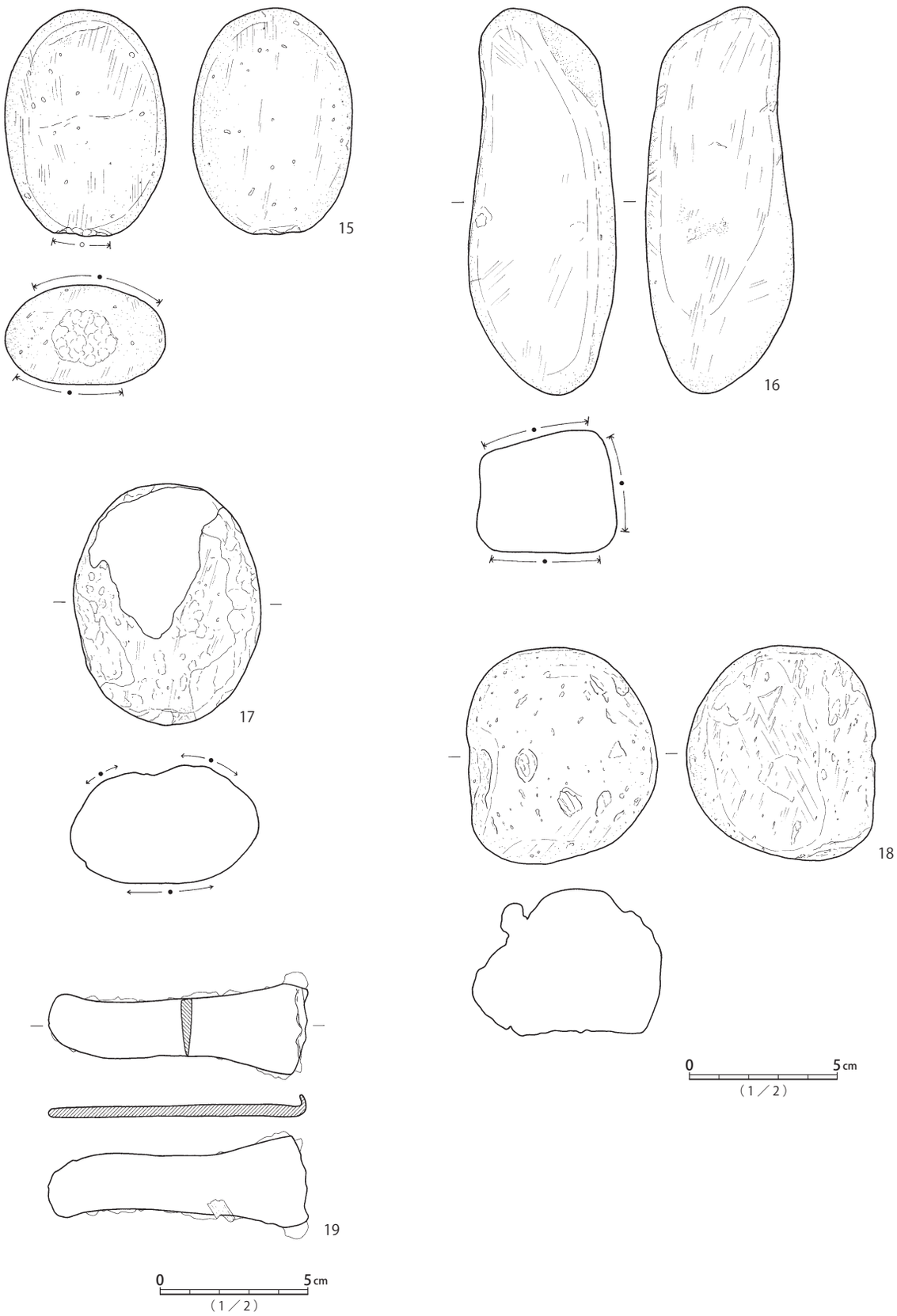
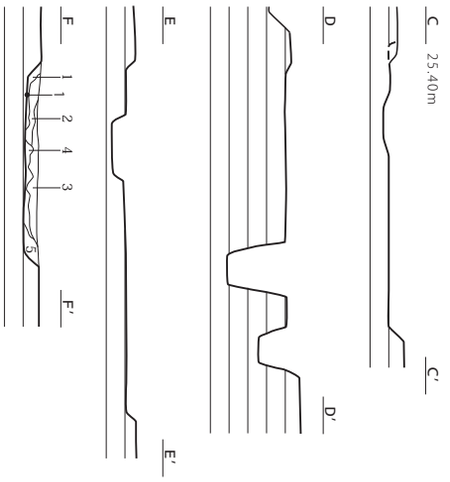
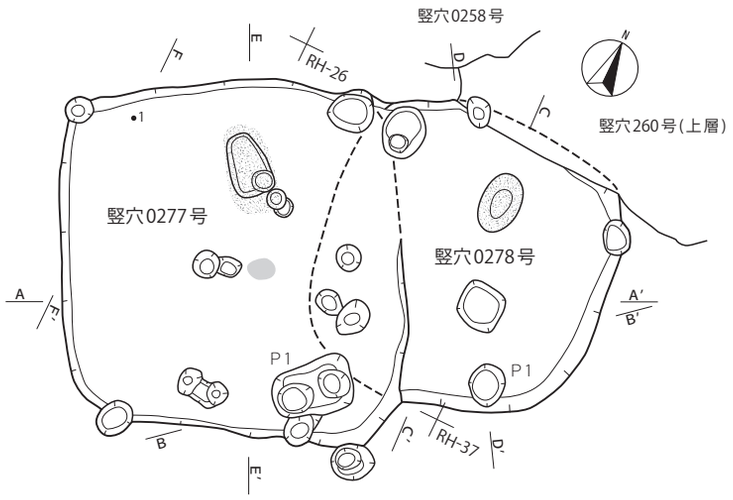


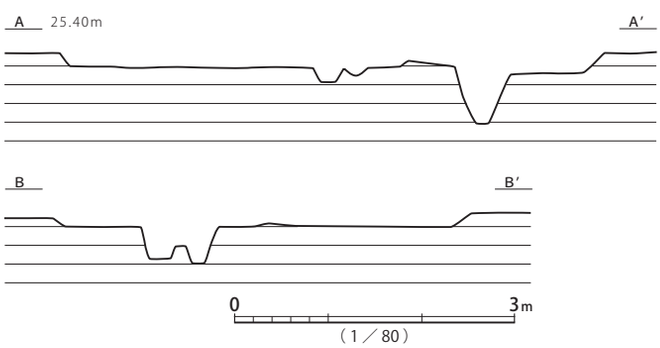
Fig.283　竪穴0276号(2) 遺物

竪穴 0277・0278 号

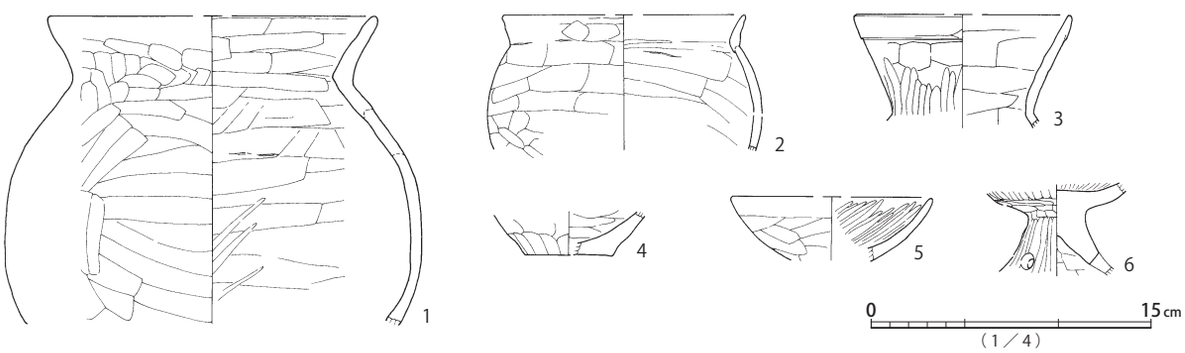




1　暗褐色土　粗いローム粒を含む。しまりあり。
2　黒色土　ロームブロックを含む。粘性・しまりなし。
3　黒色土　5mm大のローム粒を含む。粘性・しまりなし。
4　黄褐色土　ロームを主体とし、粒子の細かい黒色土が混じる。
5　暗褐色土　ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。



竪穴 0277 号



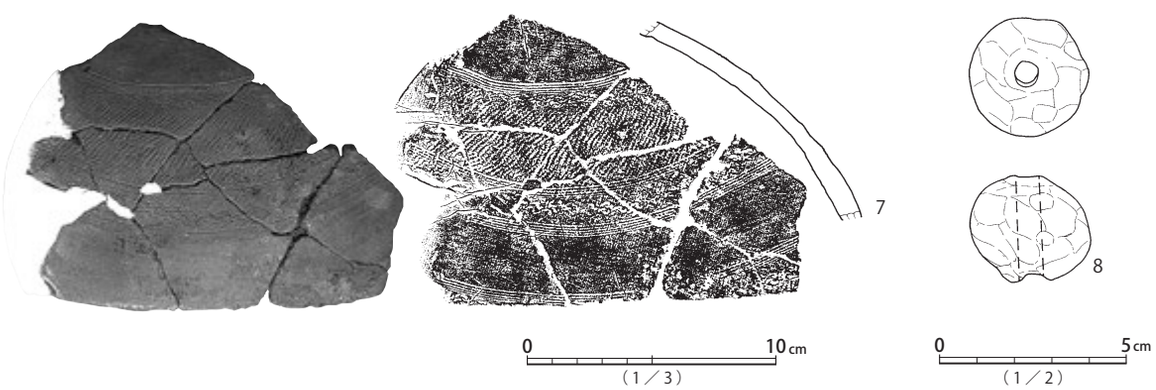


Fig.284　竪穴0277号 遺構遺物、竪穴0278号(1) 遺構

竪穴 0278 号

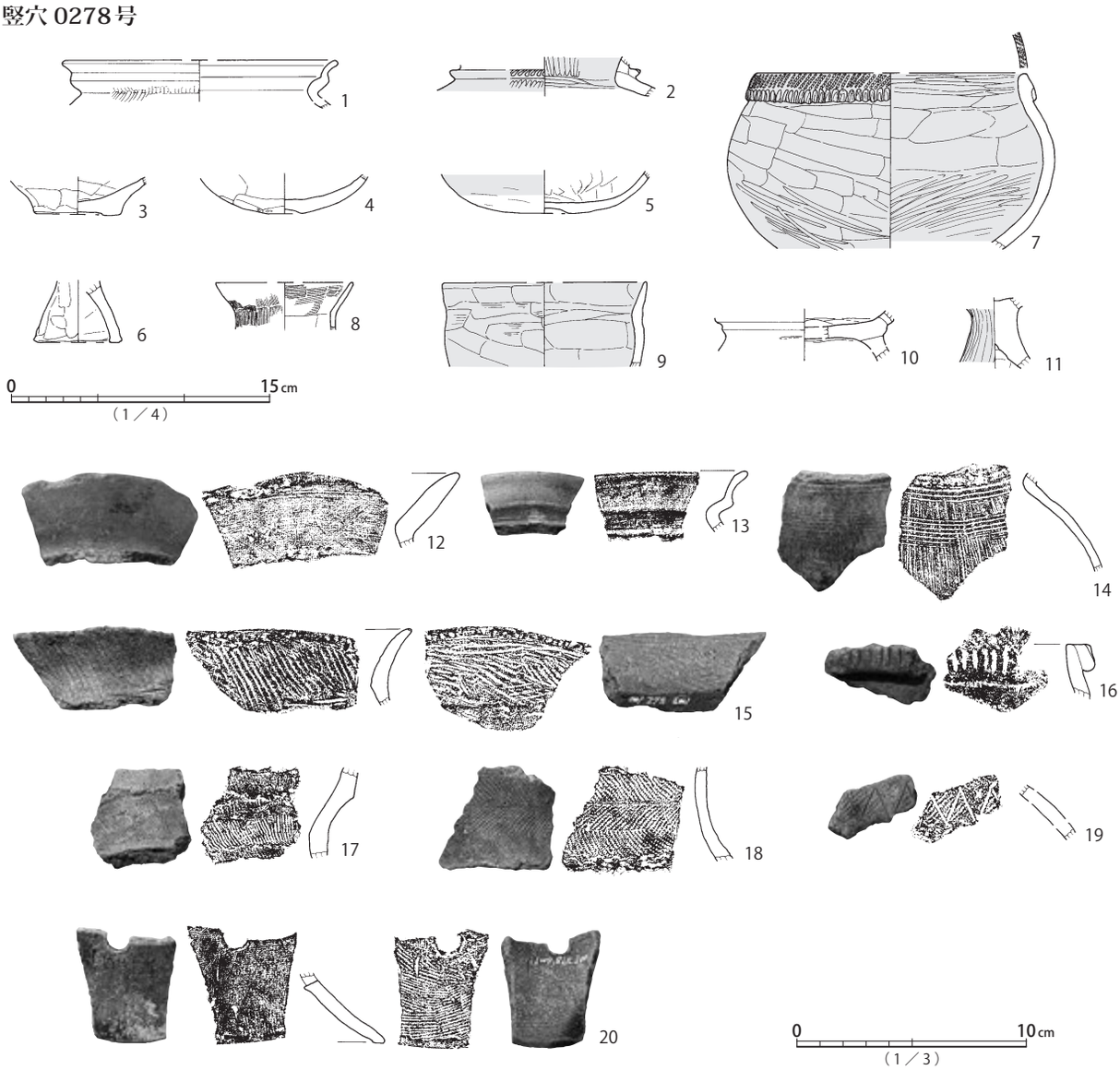


Fig.285　竪穴0278号(2) 遺物

竪穴0279号　（Fig.286・287、PL.37・75・119）

RH−46を中心に位置する。南側で竪穴0280・281（上層）・0282号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構が281・0282号よりも古いと考えられる。0280号との関係は、出土遺物がなく、不明である。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は6.64×5.47m、推定遺構下場面積は27.2㎡、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位はN−32°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間からさらに奥壁寄りで検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設である。明確な貯蔵穴は検出されていない。遺構範囲からは複数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。床面付近で焼土と炭化材の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

実測可能遺物は、1〜3・19・21は甕形土器、4〜6・11・22〜26は壺形土器、7〜10は器種不明の底部、12〜16・18は高杯形土器、17は器台形土器、20はS字状口縁甕形土器である。土器以外では

27の磨石・敲石が出土している。

遺構平面形態などから、弥生時代後期中葉の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0280号 （Fig.286）

RH−66を中心に位置する。北側で竪穴0279号、東側で竪穴281号（上層）と重複し、遺構の大部分は南側の調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が281号よりも古い。0279号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、北西壁の一部がわずかに検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.20mを測る。P1は主柱穴の可能性があるが、明確でない。P1脇からは焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴0282号 （Fig.288〜291、PL.37・75・76・120）

RH−69を中心に位置する。北西辺壁で竪穴0279・281号（上層）、東隅で竪穴291号（上層）と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が281・291号よりも古い。0279号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが新しいと考えられる。

平面形態は大型の方形を呈し、推定規模は10.06×9.80m、推定遺構下場面積は77.7㎡、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位はN−60°−Wである。炉跡は遺構ほぼ中央から検出されているが、遺構規模に比べて貧弱である。P1・2は主柱穴で、複数の掘り方をもち、建て替えや抜き取りが行われたものと考えられる。P3は貯蔵穴と思われる。壁柱穴と幅狭の壁周溝が検出されているが、周溝は全周しない。壁際からは焼土の堆積が確認されているが、火災に遭ったものかは明確でない。調査図面に記載がなく出土位置は不明であるが、貝層サンプルが採取されており、分析結果は第4章に記載している。

実測可能遺物は、1〜4・34〜38は甕形土器、5〜7は台付甕形土器、8〜10・18〜21は器種不明の底部、11は底部焼成前穿孔の甑形土器、12・17は直口縁壺形土器、13〜16・41〜45は壺形土器、22は椀形ないし鉢形のミニチュア土器、23は鉢形土器、24は器台形土器の器受部が独立した皿形土器、25〜33・46は高杯形土器、39・40は椀形土器である。16は複合口縁に棒状浮文を貼り付け、東海東部の大廓式系と思われる。

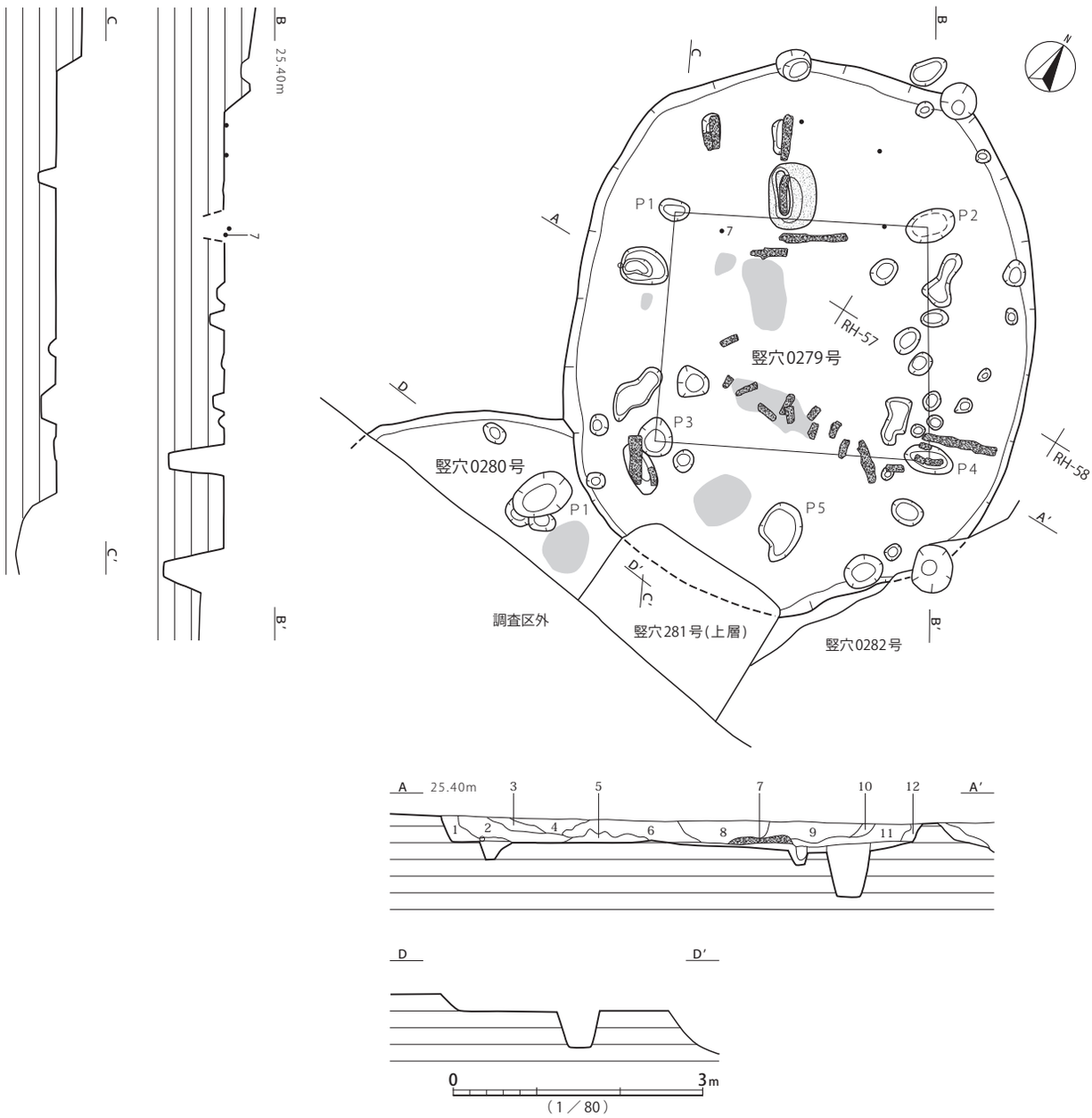
古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0283号 （Fig.291、PL.76）

RH−49を中心に位置する。南西隅で竪穴0282号と重複する可能性があるが、壁を検出できていないため、明確でない。

平面形態は小型の隅丸方形を呈し、推定規模は3.48×3.28m、推定遺構下場面積は9.6㎡、確認面からの深さは0.11mを測る。主軸方位はN−13°−Wである。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。遺構範囲からは複数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

竪穴 0279・0280 号



1　暗褐色土　ローム・小ロームブロックを多量に含む。粘性あり、しまりややあり。
2　黒色土　焼土をわずかに含む。11層に似る。
3　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土　ローム粒を少量含む。9層に似る。
5　黒褐色土　黒色土を含み、ローム・焼土も少量混じる。しまりあり。
6　黒褐色土　木炭細片をわずかに含む。9層よりも褐色味が強い。
7　黒色土　木炭片を多量に含み、ロームも少量混じる。しまりややあり。
8　黒褐色土　ローム粒を少量含み、焼土・木炭細片もわずかに混じる。
9　黒褐色土　ローム粒を少量含む。粘性・しまりあり。
10　暗褐色土　3層に似る。
11　黒色土　ローム粒を少量含み、木炭細片もわずかに混じる。粒子細かく、しまりあり。
12　黒褐色土　ロームを多量に含む。しまりやや弱い。

Fig.286　竪穴0279号(1) 遺構、竪穴0280号 遺構

竪穴 0279 号

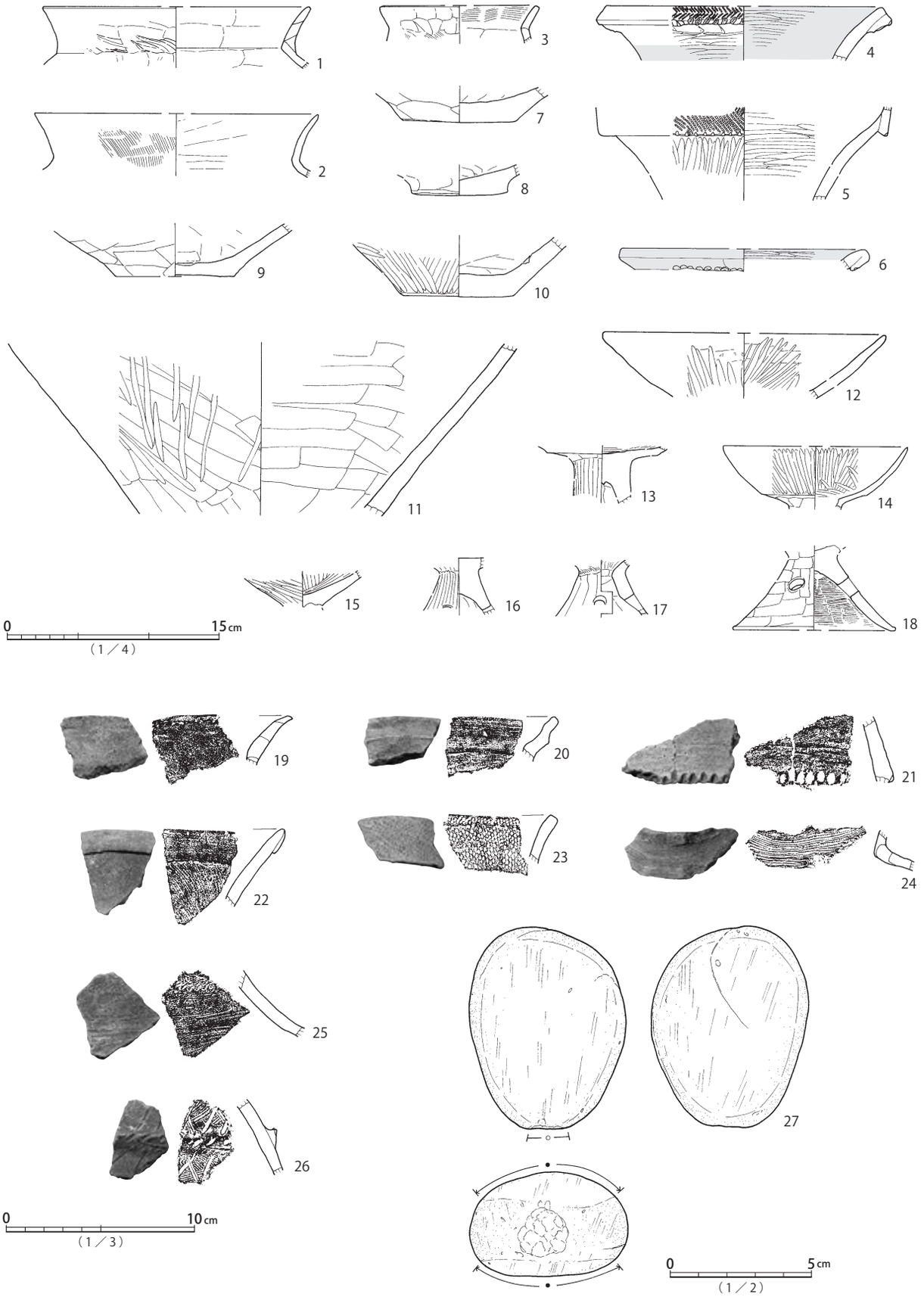


Fig.287　竪穴0279号(2) 遺物

竪穴 0282 号

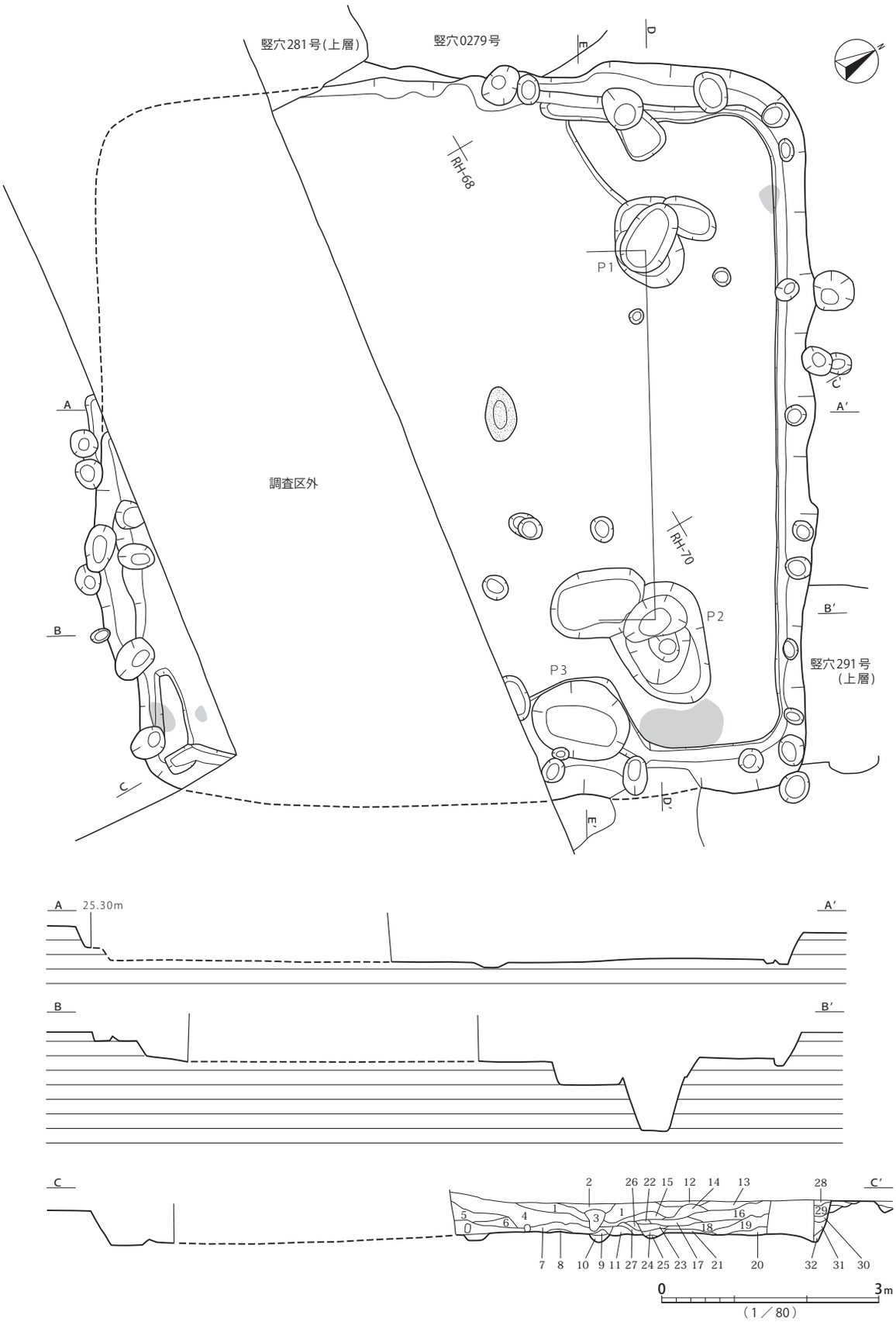
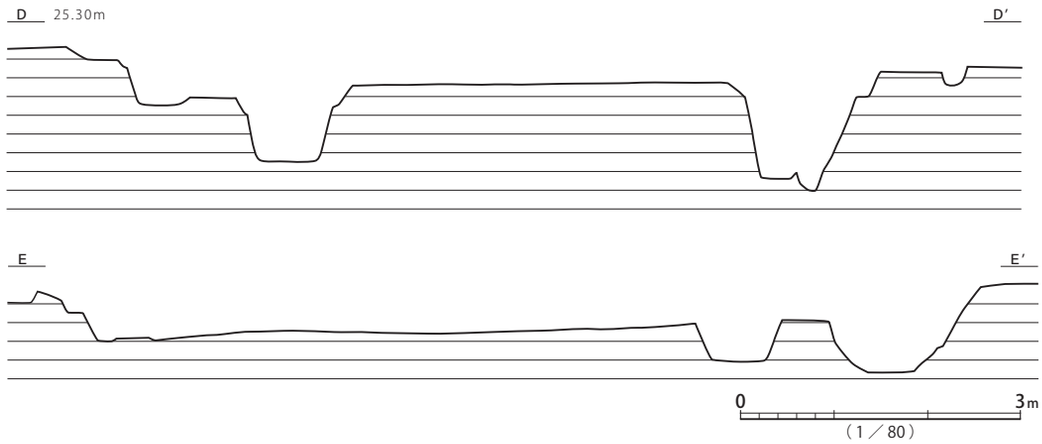


Fig.288　竪穴0282号(1) 遺構

竪穴 0282 号



1 黒褐色土 微小ローム粒・赤色粒を含む。しまりなし。
2 黒褐色土 1cm大のロームブロックを含む。粘性・しまりなし。
3 黒褐色土 1cm大のロームブロックを多量に含む。粘性・しまりなし。
4 黒色土 ロームブロック・赤色粒を含む。しまりなし。
5 黒色土 2cm大のロームブロックをまばらに含む。しまりあり。
6 黒褐色土 5mm大のローム粒をまばらに含む。
7 黒色土 1cm大のロームブロックをまばらに含む。
8 黒色土 焼土を含む。
9 暗褐色土 ロームブロックを含む。
10 黄褐色土 ロームブロックを主体とし、黒色土も混じる。
11 暗褐色土 1cm大のロームブロックを含む。粘性・しまり強い。
12 黒褐色土 5mm大のローム粒と赤色粒を含む。粘性・しまりなし。
13 黒褐色土 5mm大のローム粒をまばらに含む。しまりなし。
14 黒褐色土 5mm大のローム粒を均等に含む。粘性・しまりあり。
15 黒褐色土 微小ローム粒を均等に含む。粘性・しまりなし。
16 黒褐色土 5mm大のローム粒を均等に含み、焼土粒もごくわずかに混じる。
17 暗褐色土 大小ロームブロックを多く含む。しまりなし。
18 黒色土 1cm大のロームブロックをまばらに含む。
19 黒色土 3mm大のローム粒・炭化粒・焼土粒を含み、土器も混じる。
20 暗褐色土 1cm大のロームブロック、ロームを含む。粘性・しまりあり。
21 黒色土 2cm大のロームブロックを含む。粘性なし、しまりあり。
22 黒褐色土 微小粒を均等に含む。しまりあり。
23 暗褐色土 5mm大のローム粒を多量に含む。粘性・しまりなし。
24 黒褐色土 微小赤色粒を含む。粘性・しまりなし。
25 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土が混じる。粘性・しまりなし。
26 暗褐色土 土器を含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。
27 暗褐色土 ロームブロックを含む。しまりなし。
28 黒色土 砂粒・ローム粒を含む。粘性なし、しまりあり。
29 黒色土 2mm大のローム粒をまばらに含み、砂粒もごくわずかに混じる。
30 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性・しまりなし。
31 黒褐色土 微小ローム粒が点在する。
32 黒色土 ローム粒を含む。しまりなし。

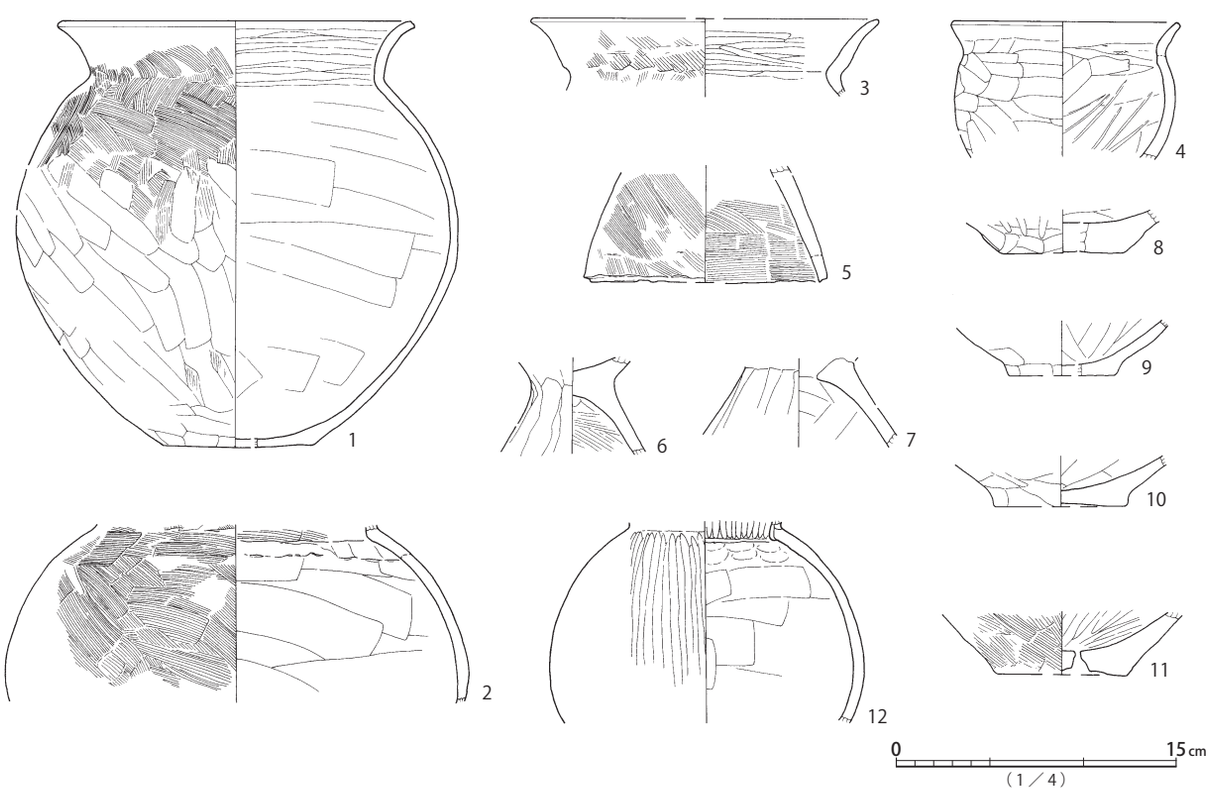


Fig.289 竪穴0282号(2) 遺構遺物

竪穴 0282 号

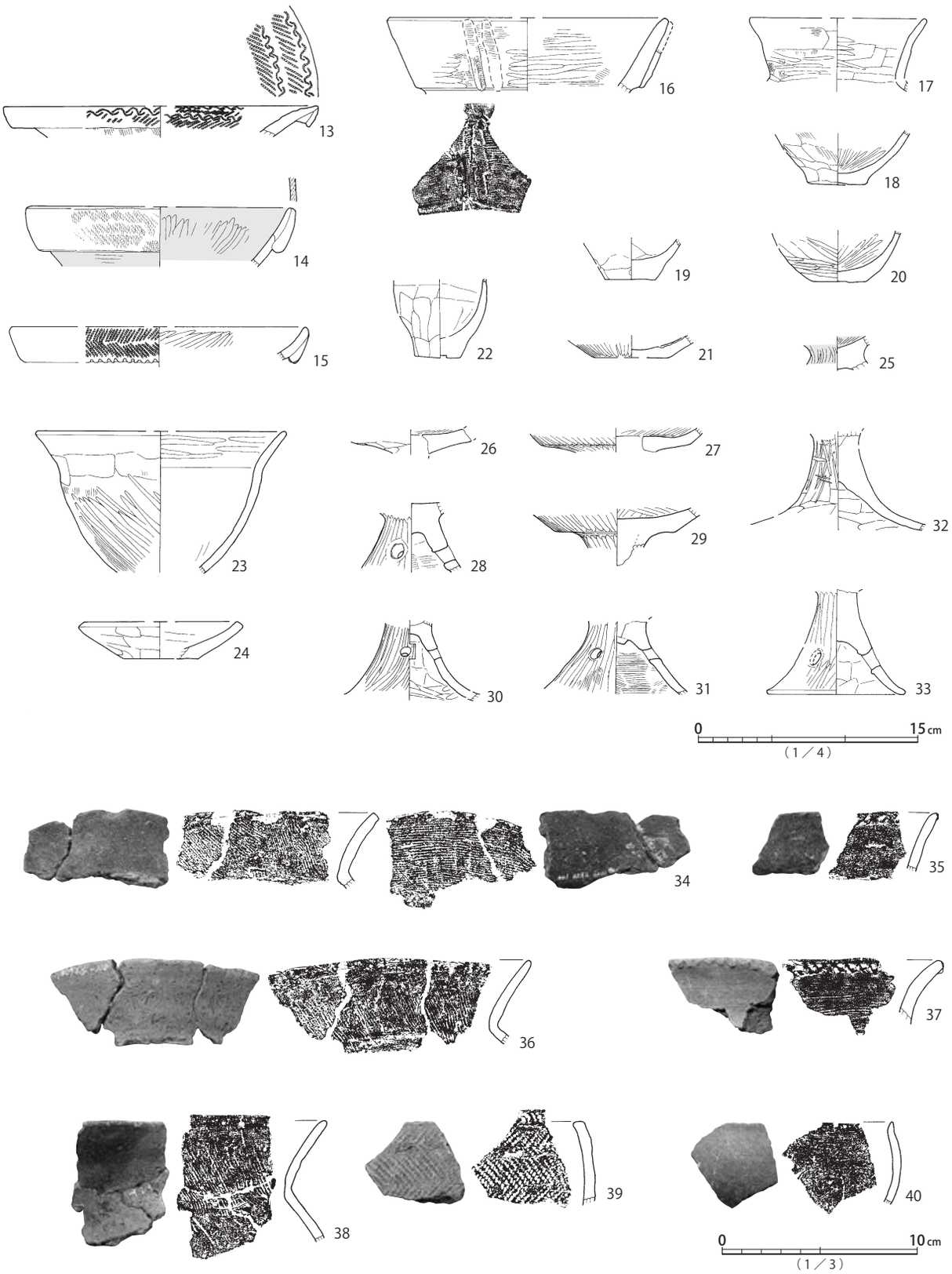
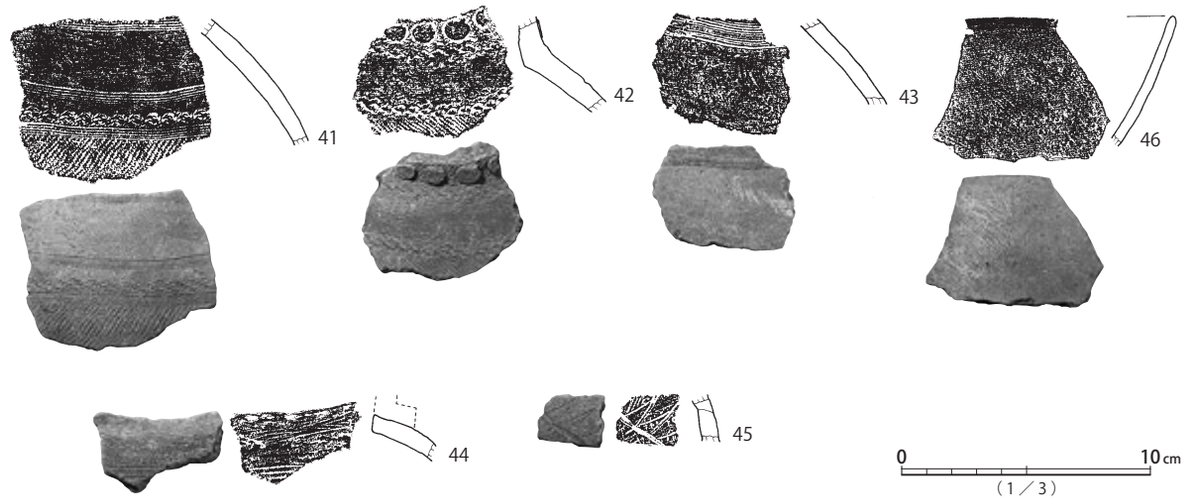
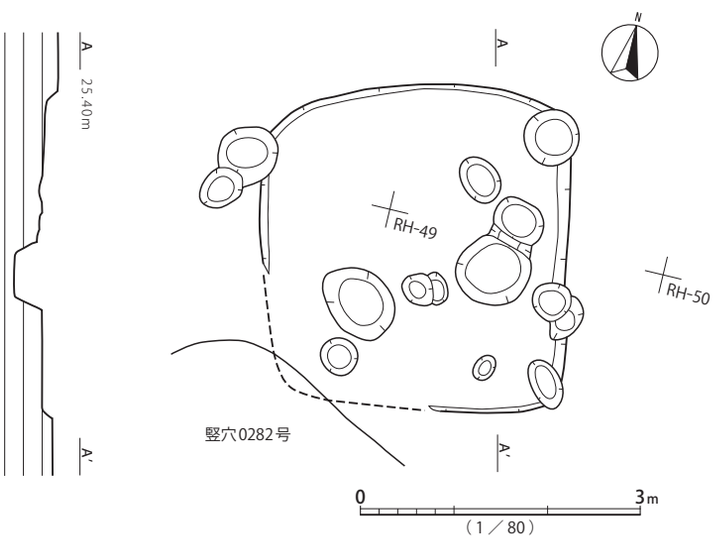


Fig.290　竪穴0282号(3) 遺物

竪穴 0282号



竪穴 0283号



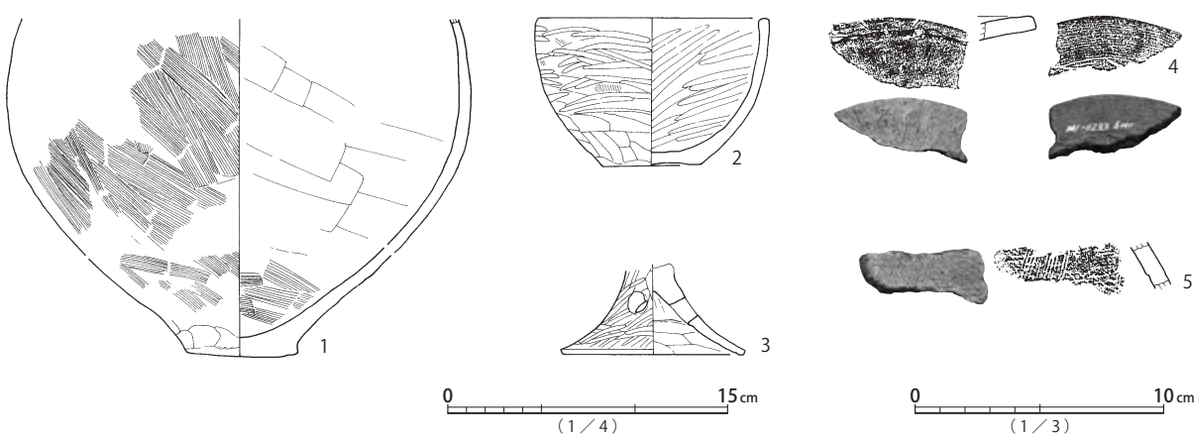


Fig.291　竪穴0282号(4) 遺物、竪穴0283号 遺構遺物

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は椀形土器、3は高杯形土器、4・5は壺形土器である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0284号 （Fig.292・293、PL.38・76・120）

RI−41を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は4.85×4.28m、遺構下場面積は16.0㎡、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN−17°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。明確な主柱穴は検出されておらず、遺構内や周辺から検出されている複数の柱穴状の掘り込みも、本遺構に伴うものかは明確でない。P1は貯蔵穴の可能性があるが、これも明確でない。

実測可能遺物は、1・8はS字状口縁台付甕形土器、2・3は甕形土器、5〜7は台付甕形土器、9〜12・20〜22は壺形土器、13〜15は器種不明の底部、16〜18は高杯形土器、19は受口状口縁甕形土器である。4は小型の甕形ないし広口壺形土器と思われる。1は口縁端部に面を持ち、ヨコハケは屈曲部から離れるが、段部はほぼ垂直に立ち上がる。8の脚台部は直立気味で、下端が折り返される。S字甕B類古段階であろう。19は口縁稜線部に刺突文を加える。10は北辺壁寄り、12は炉跡脇から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

竪穴0288号 （Fig.293、PL.76・135）

RI−34を中心に位置する。北東側でピット313号（上層）と重複する可能性がある。新旧関係は、本遺構が313号よりも古い。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈すと思われるが、北隅・北西壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.20mを測る。北西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−15°−Eとなる。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。遺構範囲から検出されている多数の柱穴状の掘り込みも、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は1の高杯形土器と2の磨石のみである。

古墳時代前期前葉の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴0290号 （Fig.294、PL.38・76・120）

RI−53を中心に位置する。明確な他遺構との重複はない。

平面形態は小型の不整方形を呈し、規模は3.49×3.27m、推定遺構下場面積は9.4㎡、確認面からの深さは0.13mを測る。主軸方位はN−77°−Wである。炉跡は遺構中央西寄りから検出されている。遺構範囲から複数の掘り込みが検出されているが、形態や深さが整わないことから撹乱の可能性が高い。

実測可能遺物は、1〜3・11は甕形土器、4〜6は器種不明の底部、7・13・15は壺形土器、8は椀形土器、9は高杯形土器、10は結合器台形土器、12は台付甕形土器、14は広口壺形土器である。1と11は同一個体で、頸部下端に押捺を施す。2は遺構中央、3は北東隅付近から検出され、いずれも床面上からの出土である。

竪穴 0284 号

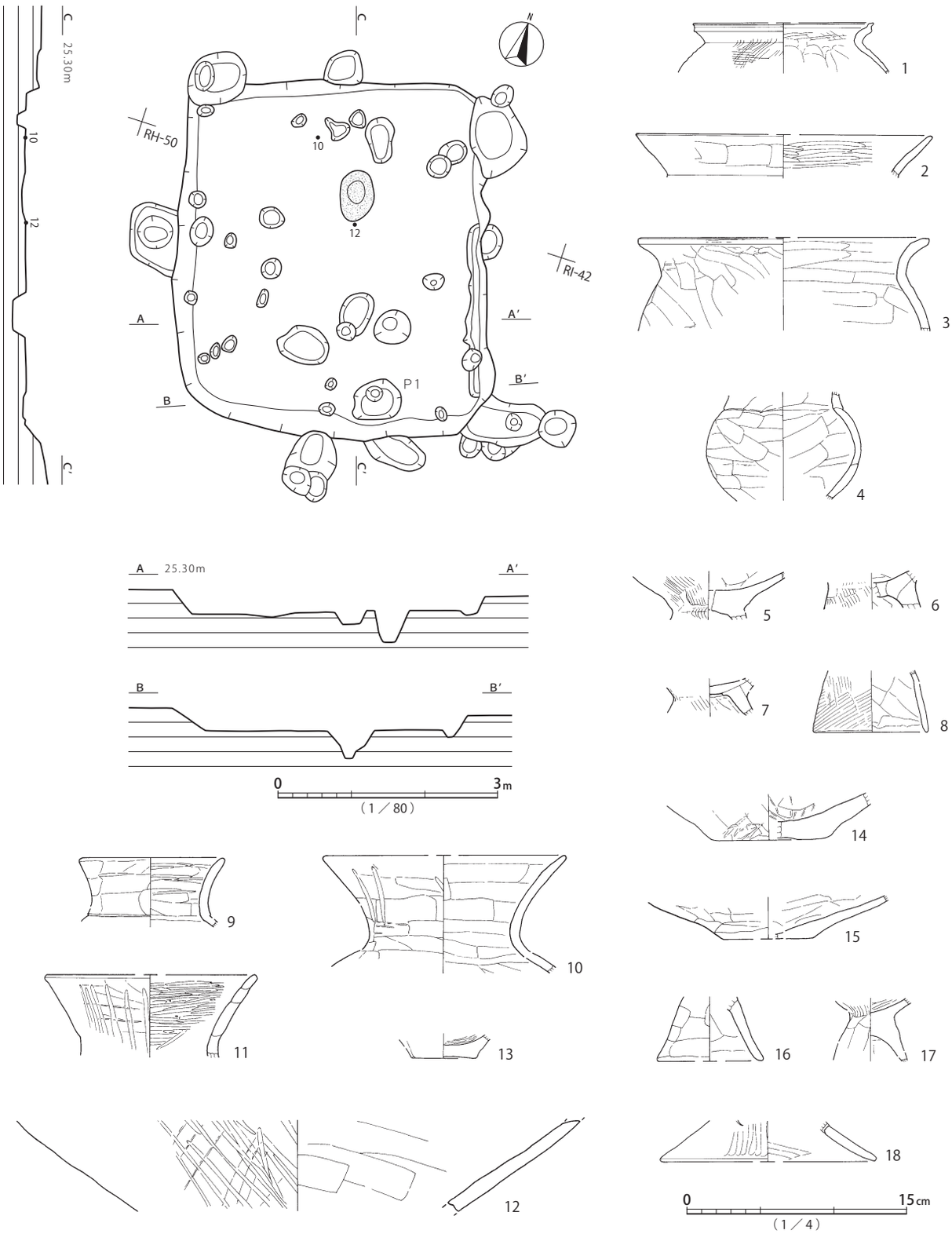
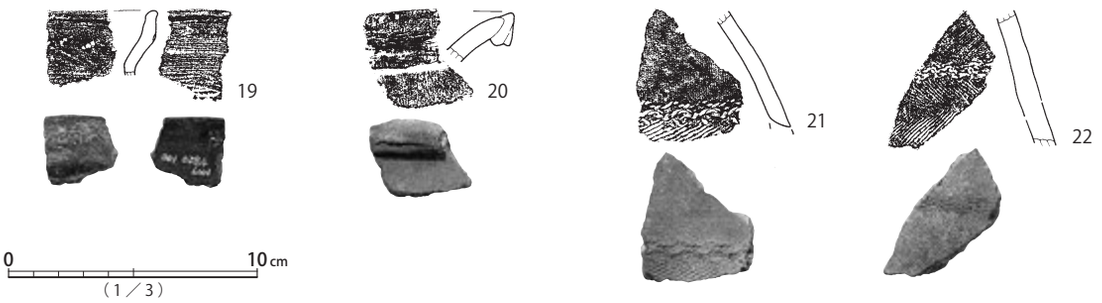
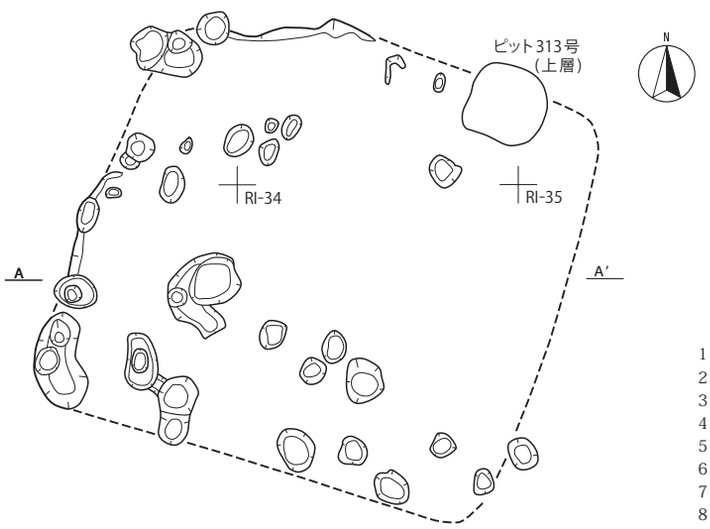


Fig.292　竪穴0284号(1) 遺構遺物

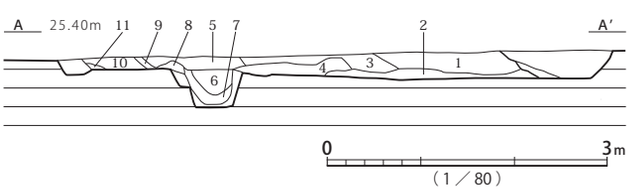
竪穴 0284 号

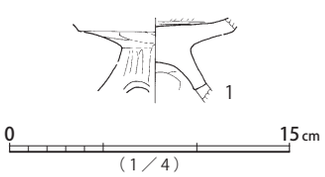


竪穴 0288 号



1　黒褐色土　小ロームブロックをわずかに含む。しまりあり。
2　暗褐色土　黒褐色土を含む。しまりなし。
3　黒褐色土　ローム粒を少量含む。粒子細かい。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土　暗褐色土を含む。粘性あり、しまりやや弱い。
5　黒褐色土　ローム粒を多量に含む。粘性・しまりあり。
6　黒色土　　ローム粒・炭化物をわずかに含む。粘性・しまりあり。
7　黒色土　　ローム粒・小ロームブロックを少量含む。
8　暗褐色土　黒褐色土を含む。粘性あり、しまりなし。
9　暗褐色土　黒褐色土を含む。粘性あり、しまりあり。
10　黒褐色土　ローム粒を多量に含む。しまりあり。
11　黒褐色土　ローム粒を少量含む。しまりなし。





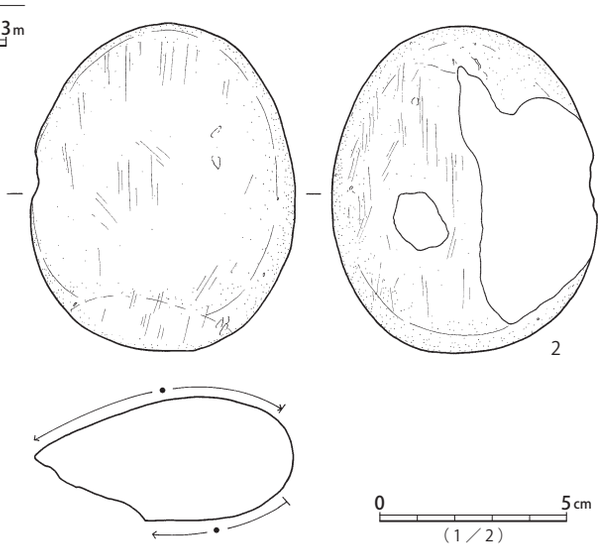
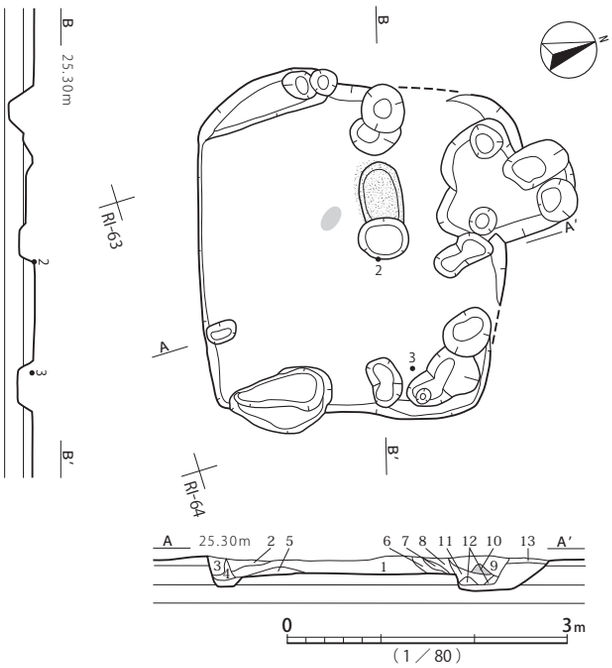
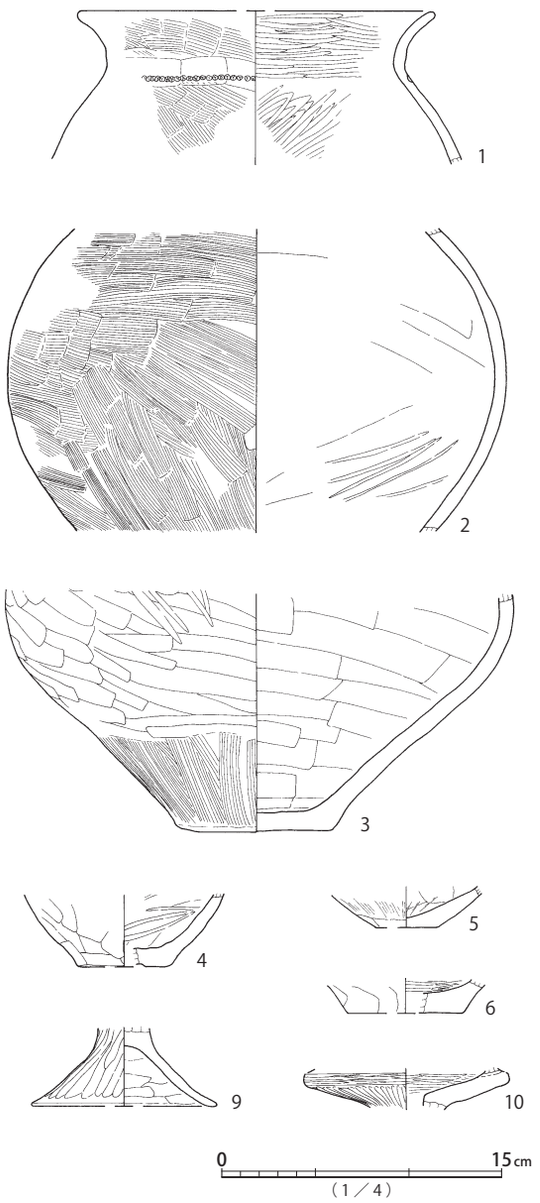


Fig.293　竪穴0284号(2) 遺物、竪穴0288号 遺構遺物

竪穴 0290 号



1 黒色土　焼土粒をまばらに含み、遺物も混じる。
2 黒色土　微小焼土粒を多く含む。しまりなし。
3 暗褐色土　4mm大のローム粒を多く含む。
4 黄褐色土　ロームを主体とし、黒色土が混じる。
5 黒色土　ローム粒を含む。しまりなし。
6 黒色土　ローム粒・焼土粒を含む。しまりあり。
7 黒色土　焼土粒・炭化物を含む。粘性・しまりあり。
8 黒色土　焼土粒をまばらに含む。粘性・しまりあり。
9 黒褐色土　微小ローム粒を含み、焼土粒もわずかに混じる。粘性・しまりあり。
10 黒褐色土　焼土粒を多量に含む。しまりあり。
11 黒褐色土　ローム粒を均等に含む。しまりあり。
12 黄褐色土　ロームブロックを主体とし、黒褐色土が混じる。しまりなし。
13 黄褐色土　ロームを主体とし、暗褐色土が混じる。



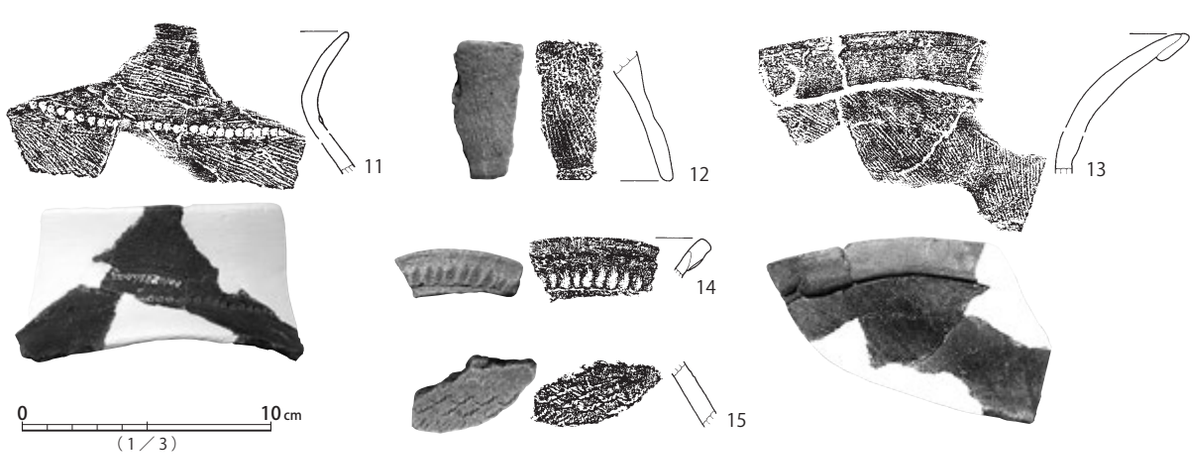
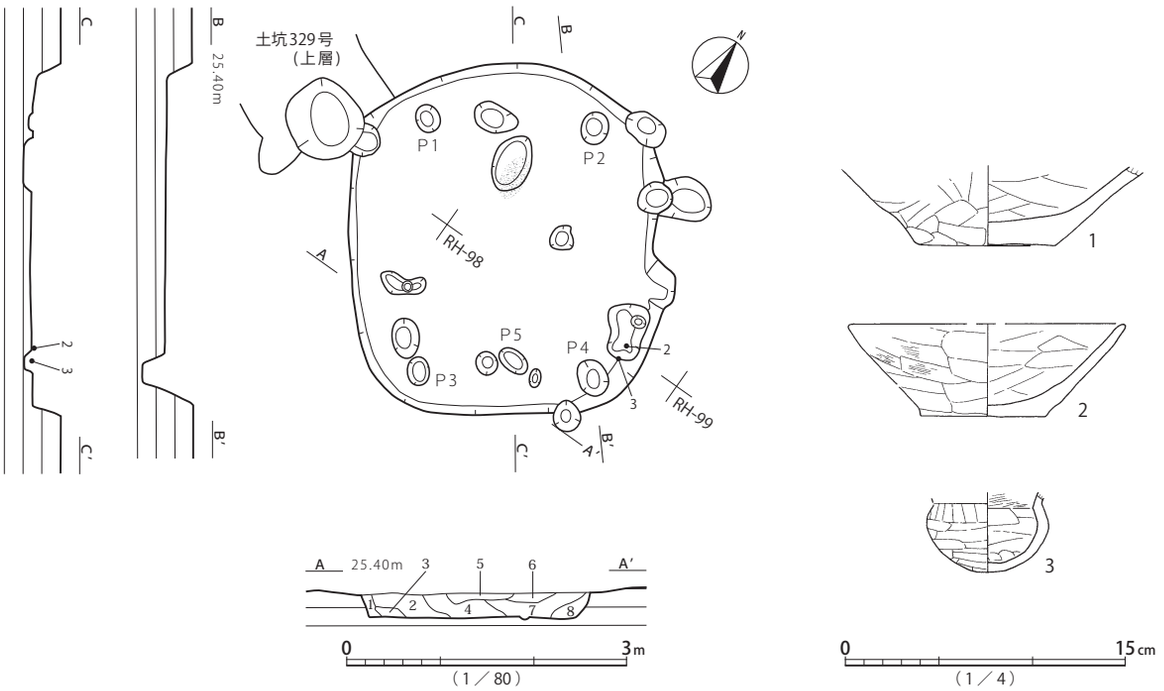


Fig.294　竪穴0290号 遺構遺物

竪穴0330号



1　黒褐色土　ロームを含む。しまり強い。
2　黒色土　ローム粒を含む。しまりややあり。
3　黒色土　しまり強い。
4　黒色土　ローム粒をわずかに含む。粘性弱く、しまり強い。
5　暗褐色土　5mm大のローム粒を多く含む。しまりややあり。
6　黒褐色土　ローム粒を多く含む。しまり強い。
7　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
8　黒色土　ロームを含む。粘性弱く、しまり強い。

Fig.295　竪穴0330号 遺構遺物

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0330号　（Fig.295、PL.77）

RH−88を中心に位置する。西隅で土坑329号（上層）と重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、本遺構が329号よりも古い。

平面形態は小型の長楕円形を呈し、規模は3.74×3.25m、遺構下場面積は9.5㎡、確認面からの深さは0.34mを測る。主軸方位はN−35°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。遺構範囲からは複数の柱穴状の掘り込みが検出されており、四隅に位置するP1〜4は主柱穴、P5は出入口施設、P4は貯蔵穴の可能性があるが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2は椀形土器、3は小型丸底系の壺形土器である。2・3はP4北側の掘り込み上から検出され、床面と同レベルからの出土である。

遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0332号　（Fig.296〜298、PL.77・121・135）

QH−18を中心に位置する。南側で土坑376号（上層）、溝2232号（上層）と重複する。新旧関係は、

本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈し、規模は5.86×5.64m、推定遺構下場面積は26.4㎡、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位はN−13°−Eである。炉跡は中軸線上北東寄り、P1・2間の遺構中央寄りから検出されている。P1〜4は主柱穴で、主軸方向の柱間を長くして長方形に配置する。P5は貯蔵穴であろう。

実測可能遺物は、1〜5・26・27・29・30は甕形土器、6〜8・11は壺形土器、9は直口縁壺形土器、10は器種不明の底部、12〜14・31は椀形土器、15〜22は高杯形土器、23〜25は器台形土器、28は広口壺形土器である。甕形土器の口縁端部には1方向と交互の押捺とがあり、口頸部多段甕も含む。2は大きく外反する口縁の端部を摘み上げ、拡張面をもつ。器面は薄く仕上げられ、庄内甕を祖形とするものと思われるが、タタキ整形や内面ヘラケズリは認められない。24は遺構中央東寄りから検出され、覆土上層からの出土である。土器以外では、32〜35の磨石・敲石が出土している。

弥生時代終末期後半の所産と思われる。

竪穴0354号　（Fig.299・300、PL.77・78・96・121・135）

既刊の上総国分僧寺跡報告書に掲載済みであるが、奈良・平安時代以前の遺物も多く出土しており、帰属時期が明確でないことから再録するものである。

QH−78を中心に位置する。北側で竪穴358号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が358号よりも古いと考えられる。

平面形態は長方形を呈すと考えられるが、掘り込みが浅く、北東辺壁が検出されていないため、詳細は不明である。推定規模は5.20×4.30m、推定遺構下場面積は20.4㎡、確認面からの深さは0.11mを測る。長軸となる南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−64°−Wとなる。炉跡や貯蔵穴、主柱穴などの屋内施設は検出されていない。北西辺壁寄りの隅丸方形を呈す掘り込みは、軸が異なることから別遺構と考えられる。

実測可能遺物は、1〜5は甕形土器、6〜8は台付甕形土器、9は壺形土器、10・12は器種不明の底部、13は椀形土器、14・15は高杯形土器、17は壺形土器である。11・16はいずれも小型品で、甕形ないし短頸壺形土器と思われる。土器以外では、18の磨石・敲石が出土している。6・10は北隅寄り、13は中央付近から検出され、いずれも覆土下層からの出土である。

古墳時代前期前葉の所産と思われる。

竪穴0361号　（Fig.300、PL.78・121）

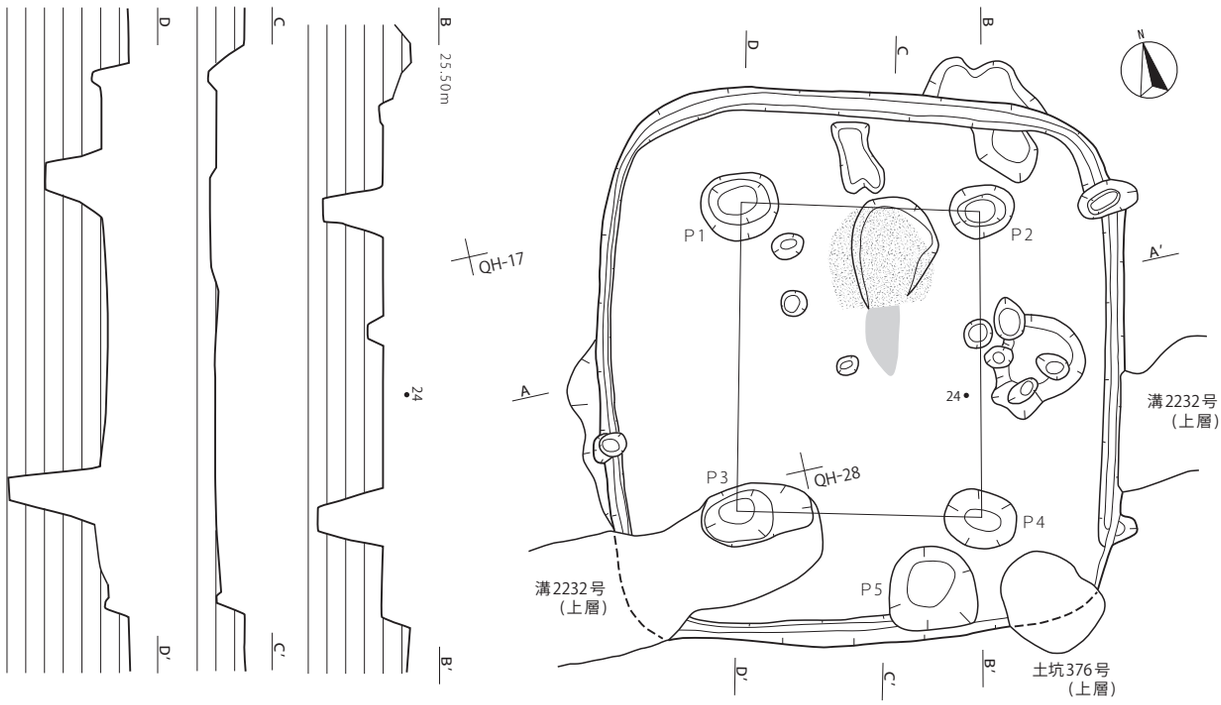
QH−55を中心に位置する。他遺構との重複はないが、北西隅は撹乱により壊される。

平面形態は小型の不整長楕円形を呈し、規模は4.00×3.40m、遺構下場面積は11.1㎡、確認面からの深さは0.20mを測る。直線的な東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−15°−Wとなる。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。東辺壁際からは、焼土の堆積が確認されている。

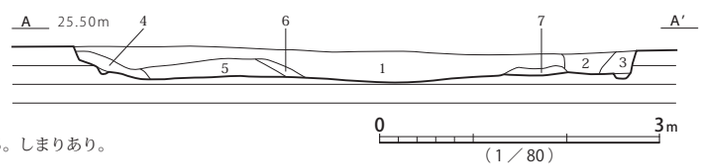
実測可能遺物は、1は甕形土器、2は椀形土器である。2は北辺壁寄りから検出され、覆土下層からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、古墳時代前期前葉の可能性もある。

竪穴 0332号



1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。粘性・しまりあり。
2　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。しまりあり。
3　黒褐色土　ロームをブロック状にわずかに含む。しまりあり。
4　黒褐色土　ローム・ローム粒を多量に含む。しまりやや弱い。
5　黒褐色土　ローム粒を多量に含む。粘性ややあり、しまりあり。
6　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりあり。
7　暗褐色土　ローム粒を多量に含み、小ブロックもわずかに混じる。しまりあり。



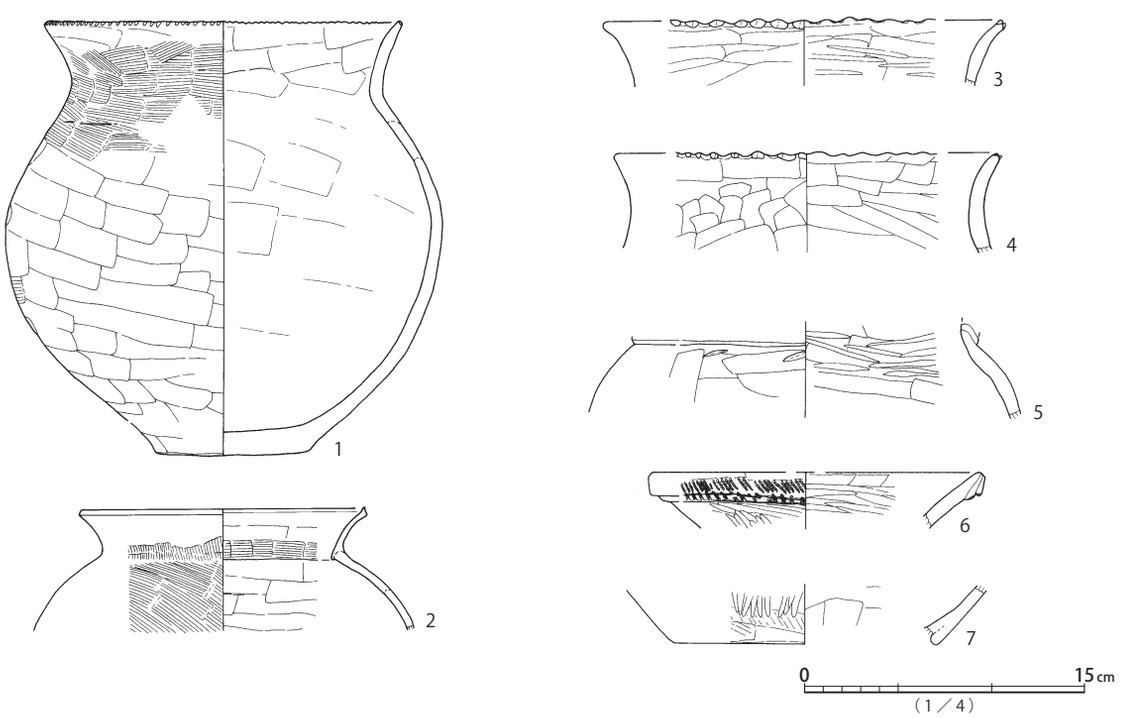


Fig.296　竪穴0332号(1) 遺構遺物

竪穴 0332 号

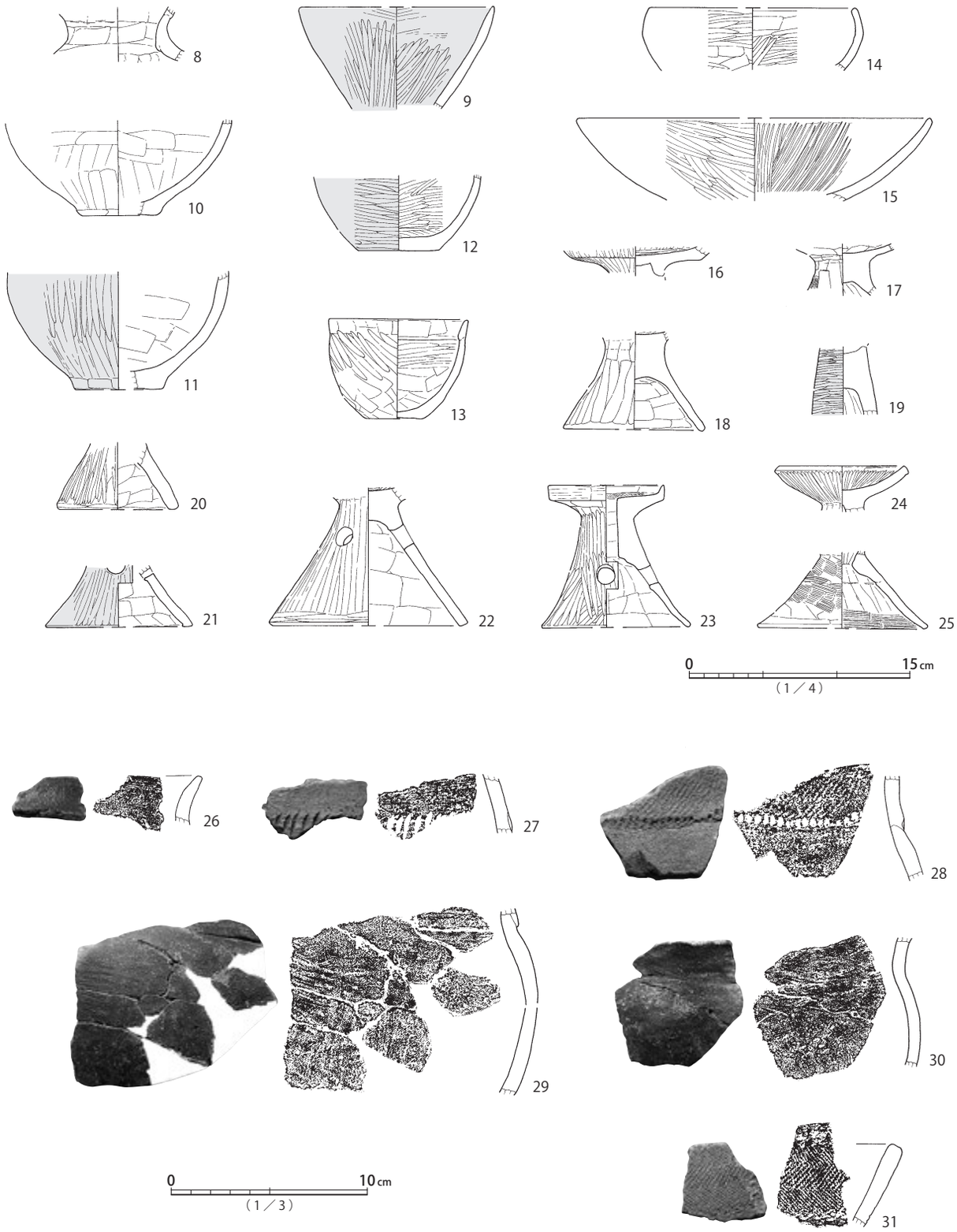


Fig.297　竪穴0332号(2) 遺物

竪穴 0332 号

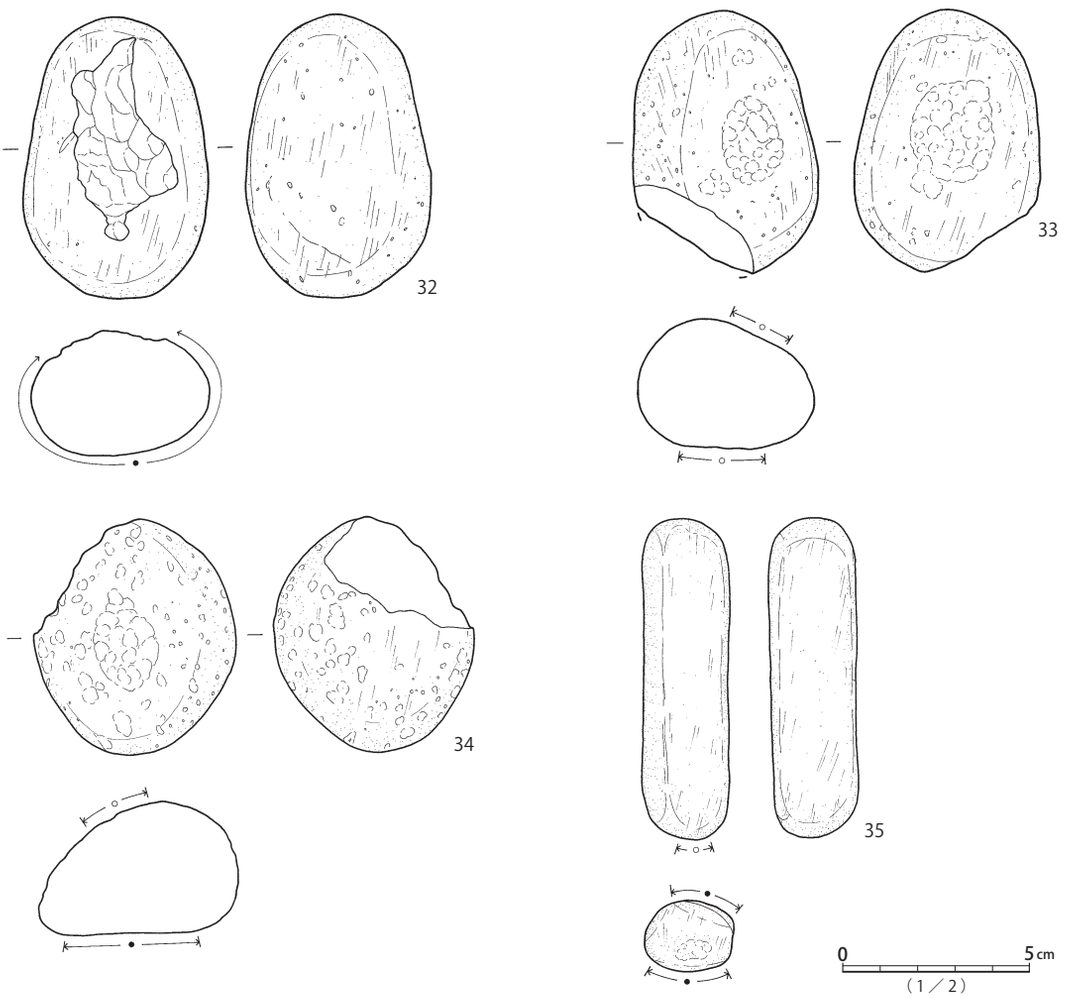


Fig.298　竪穴0332号(3) 遺物

竪穴0362号　（Fig.301、PL.78・96）

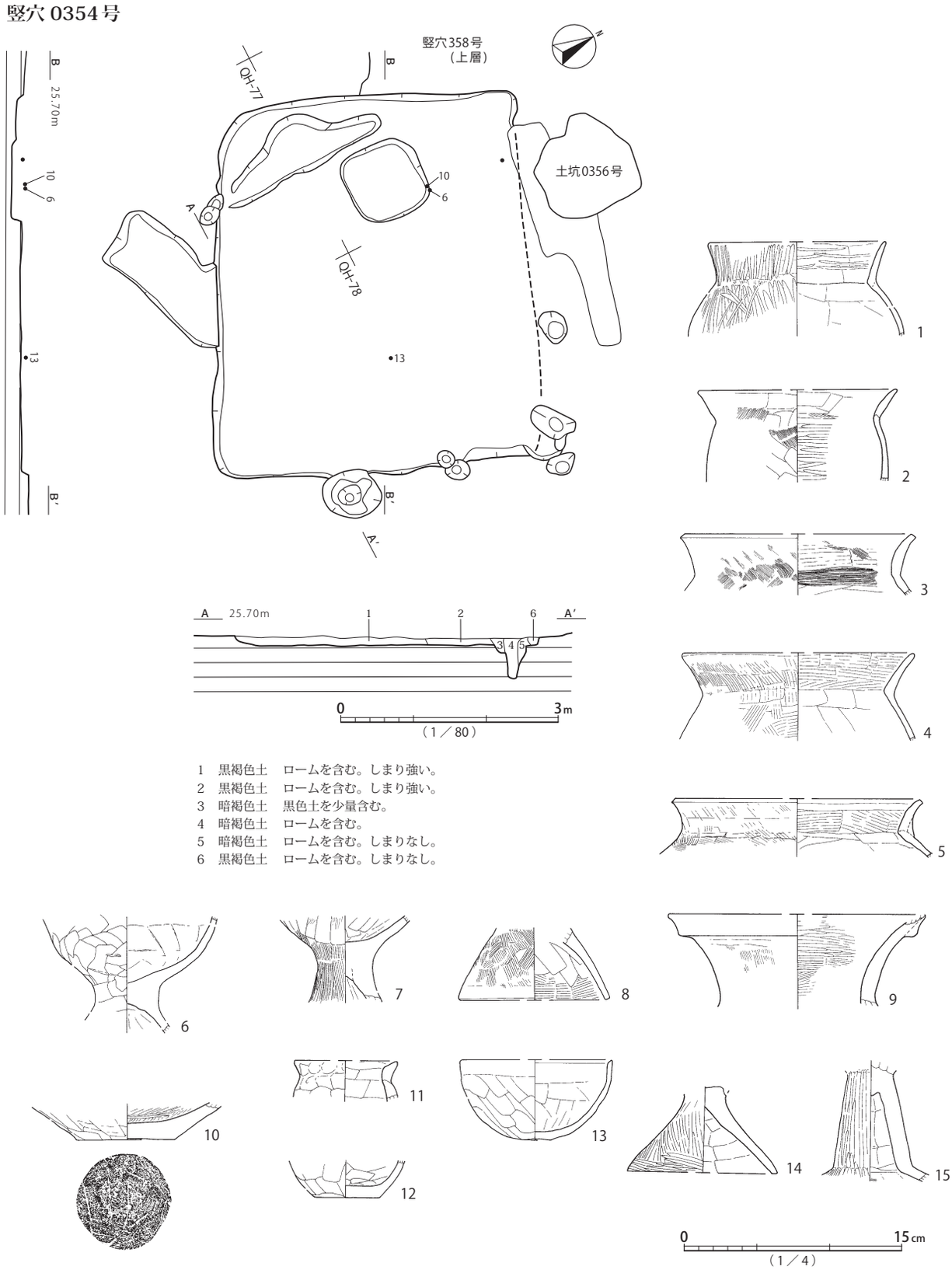
QH−63を中心に位置する。南側で土坑364号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が364号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、掘り込みが浅く、北西壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.04mを測る。主軸方位は明確でないが、北壁寄りから検出されている炉跡の長軸を基準とした場合、N−9°−Wとなる。主柱穴や貯蔵穴は検出されていない。遺構範囲からは、多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものが含まれるかは明確でない。

実測可能遺物は、1〜3は甕形土器、4〜6は壺形土器である。1・2・4は炉跡脇、3は北西壁寄りから検出され、いずれも床面付近からの出土である。甕形土器の胴肩部には1段の粘土紐積み上げ痕を残し、2・3は段部下端に押捺を加える。

弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

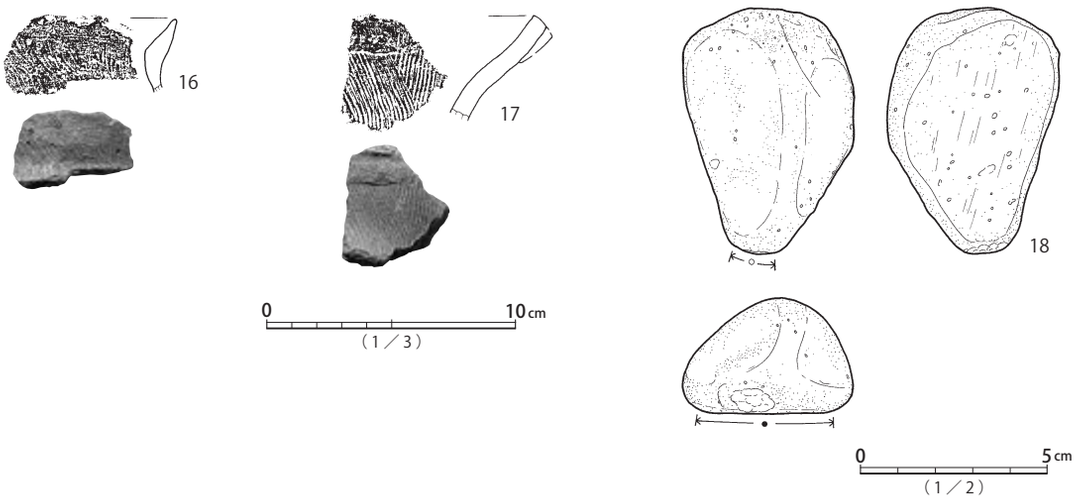
竪穴 0354 号



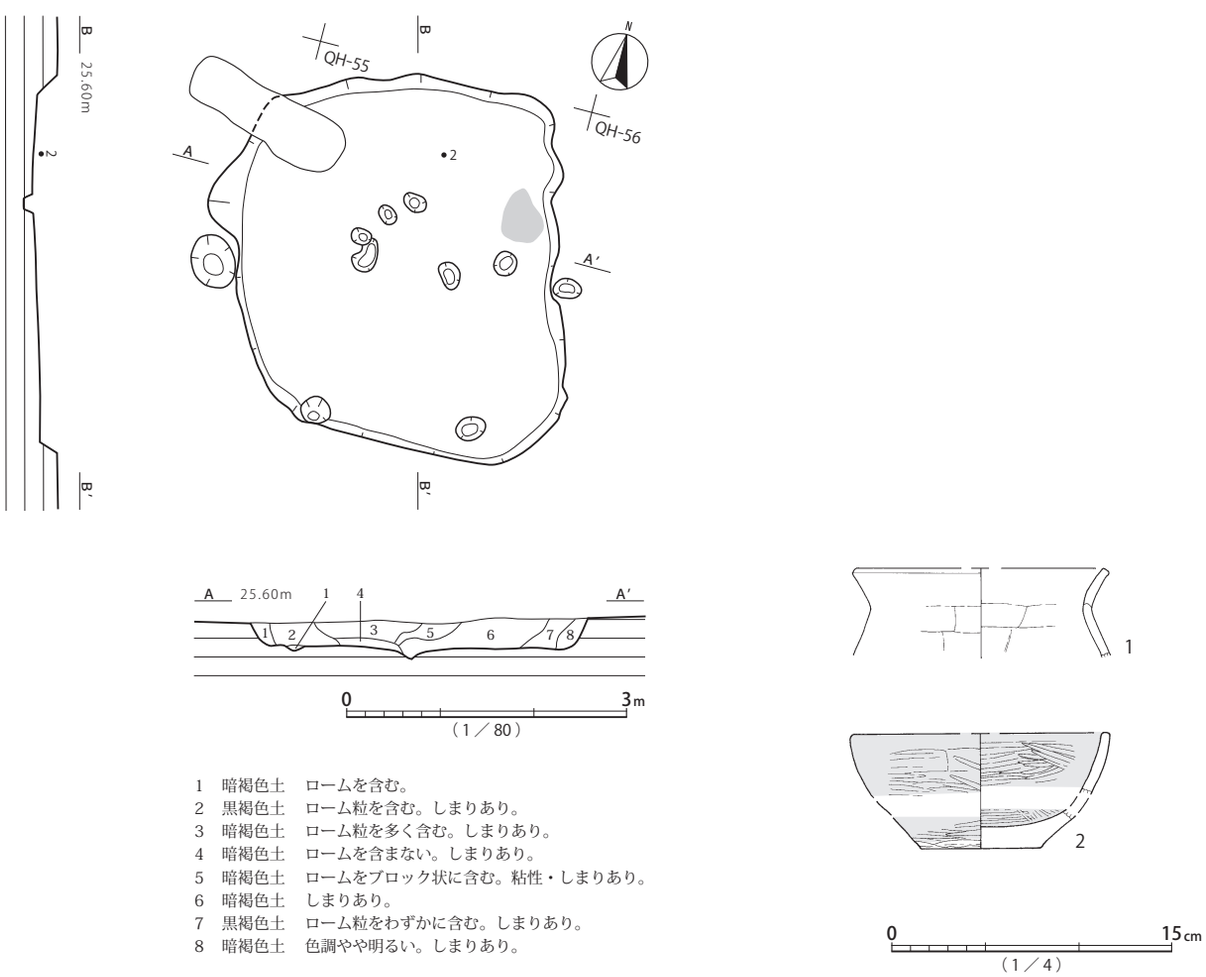
1　黒褐色土　ロームを含む。しまり強い。
2　黒褐色土　ロームを含む。しまり強い。
3　暗褐色土　黒色土を少量含む。
4　暗褐色土　ロームを含む。
5　暗褐色土　ロームを含む。しまりなし。
6　黒褐色土　ロームを含む。しまりなし。

Fig.299　竪穴0354号(1) 遺構遺物

竪穴 0354 号



竪穴 0361 号



1　暗褐色土　ロームを含む。
2　黒褐色土　ローム粒を含む。しまりあり。
3　暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
4　暗褐色土　ロームを含まない。しまりあり。
5　暗褐色土　ロームをブロック状に含む。粘性・しまりあり。
6　暗褐色土　しまりあり。
7　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
8　暗褐色土　色調やや明るい。しまりあり。

Fig.300　竪穴0354号(2) 遺物、竪穴0361号 遺構遺物

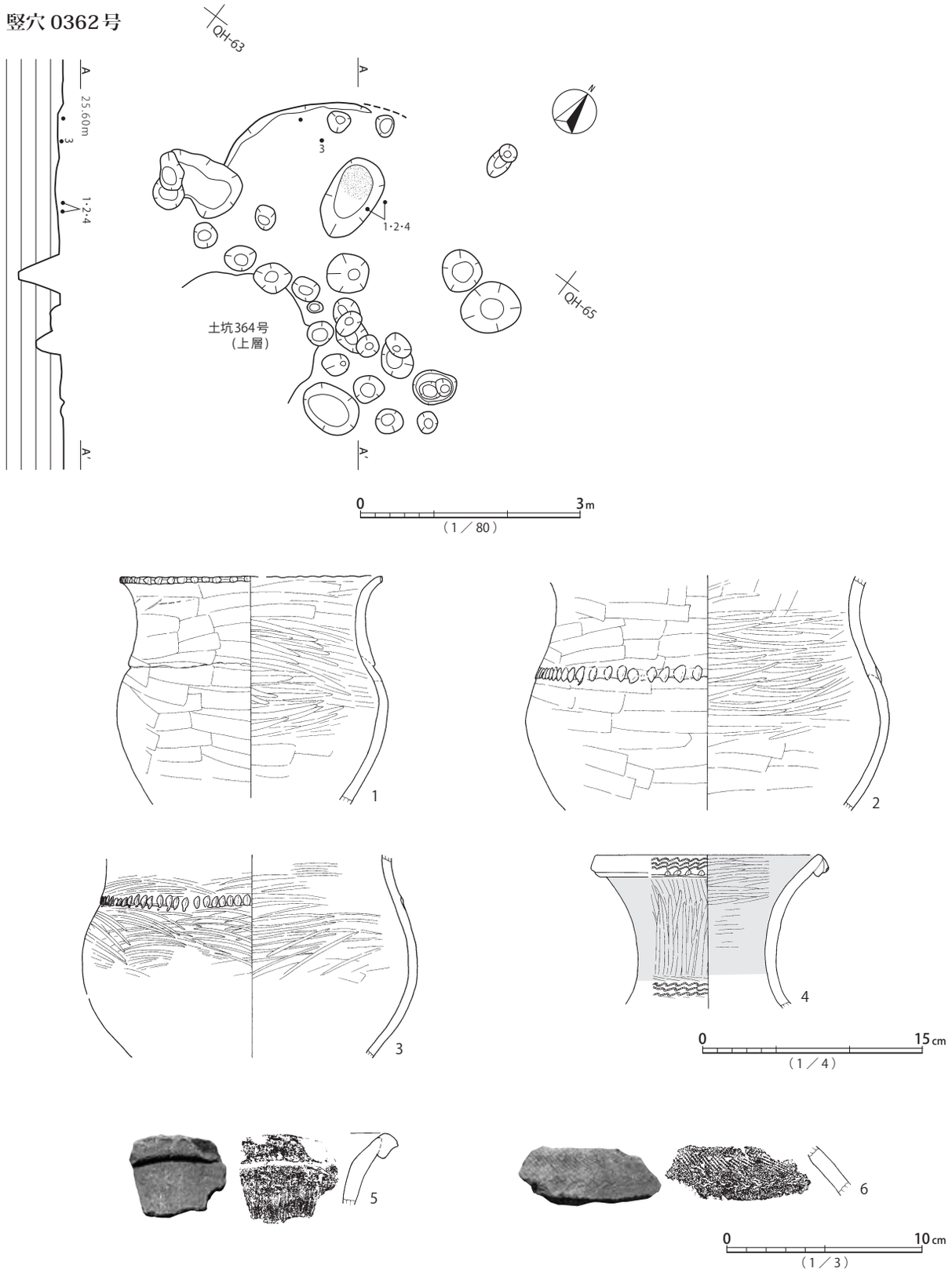


Fig.301　竪穴0362号 遺構遺物

竪穴0366号 （Fig.302、PL.38・78・121）

QH−97を中心に位置する。南側で竪穴0368・0369号と重複し、北壁の一部は複数の土坑（遺構番号なし）や撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が0368号よりも新しい。0369号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが新しいと考えられる。

平面形態は方形を呈し、規模は4.85×5.35m、遺構下場面積は21.9㎡、確認面からの深さは0.25mを測る。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていないため、主軸方位は明確でないが、南西辺壁を基準とした場合、N−30°−Wとなる。壁周溝は東隅からのみ検出されている。

実測可能遺物は、1〜3は甕形土器、4は壺形土器、5は鉢形土器、6〜8は高杯形土器である。高杯形土器の脚部は柱状で、中実と中空とがある。

古墳時代前期後葉の所産と考えられる。

竪穴0367号 （Fig.303、PL.38）

QH−95を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は小型の長楕円形を呈し、規模は3.82×3.18m、遺構下場面積は9.3㎡、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位はN−38°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されており、形状から作り替えが行われた可能性がある。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴である。

実測可能遺物は、内面に赤彩を施す1の椀形土器細片のみである。

弥生時代後期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0368号 （Fig.302、PL.38）

PH−17を中心に位置する。北側で竪穴0366号、東側で竪穴0369号と重複する。新旧関係は、本遺構が0366号よりも古い。0369号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がないが、遺構の平面形態から、本遺構のほうが古いと考えられる。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、南壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.21mを測る。

遺構平面形態から弥生時代後期後半の所産と思われるが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

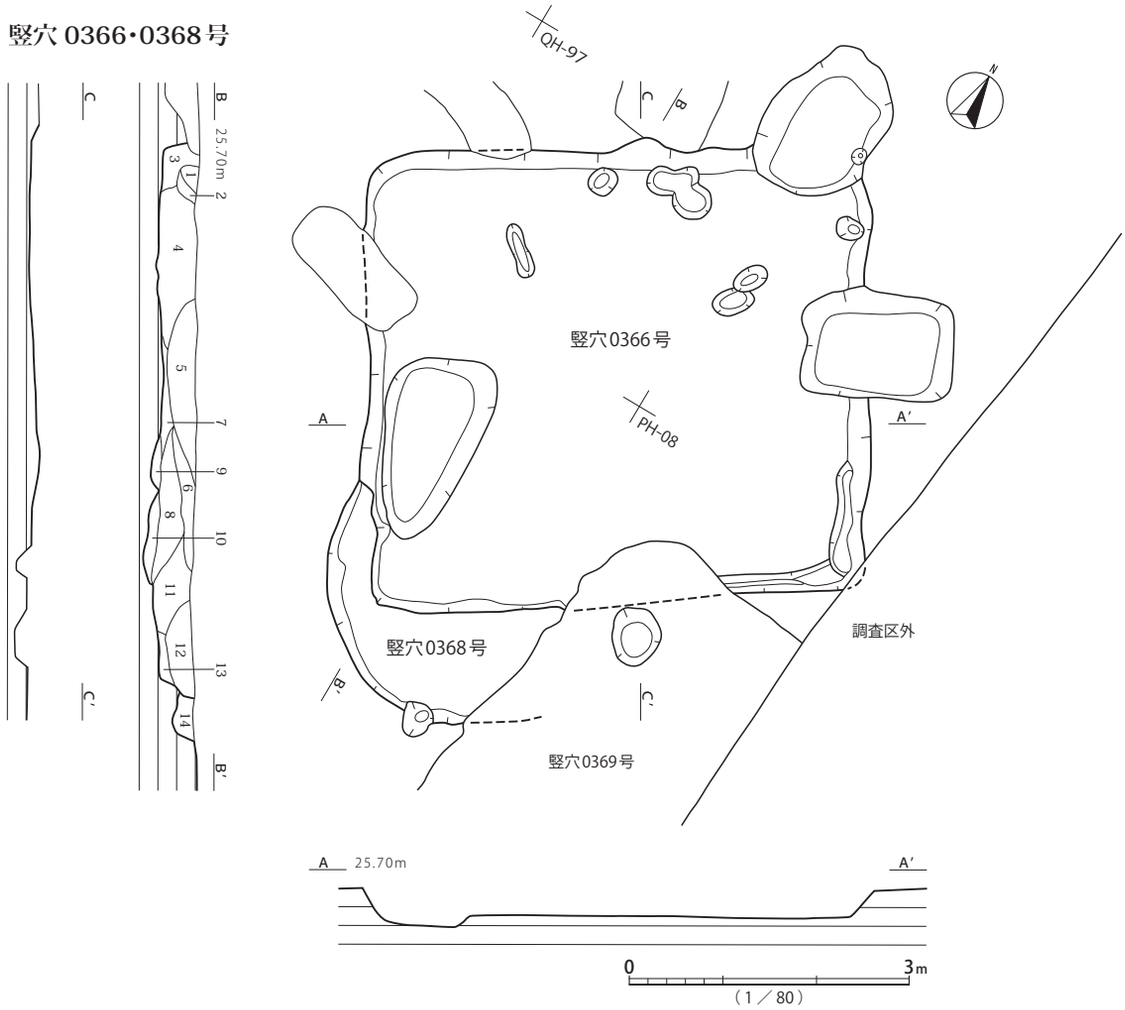
竪穴0369号 （Fig.304、PL.38・78・121）

PH−18を中心に位置する。北西隅で竪穴0366・0368号、南西隅で竪穴0371号、西辺壁で土坑370号（上層）と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構が0368号よりも新しく、0366・370・0371号よりも古いと考えられる。

平面形態は大型の方形を呈すと考えられるが、西辺壁周辺が検出されたのみで、詳細は不明である。規模は一辺9.40m、確認面からの深さは0.28mを測る。正方形と想定した場合の推定遺構下場面積は71.2㎡、西辺壁を基準とした場合の主軸方位はN−7°−Eとなる。P1・2は主柱穴であるが、深度に差が認められる。壁周溝が巡り、全周するものと考えられる。

実測可能遺物は、1・2は甕形土器、3・9は壺形土器、4・5は同一個体の小型壺形土器、6は器種不明の底部、7は椀形ないし高杯形土器、8は器台形土器、10は椀形土器である。甕形土器の頸部は屈

竪穴 0366・0368 号



0366号

1　暗褐色土　灰褐色に近い。しまり強い。
2　明褐色土　ロームを含む。粘性あり、しまり強い。
3　暗褐色土　ロームを含む。粘性あり、しまり強い。
4　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりなし。
5　黒褐色土　しまりやや弱い。
6　暗褐色土　しまりやや弱い。
7　明褐色土　5mm大のローム粒をわずかに含む。しまり強い。
8　暗褐色土　粘性あり、しまりなし。
9　黄褐色土　ロームを主体とし、黒褐色土が混じる。
10　暗褐色土　黒褐色土を含む。
11　暗褐色土　粘性ややあり、しまりあり。
12　暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む。しまりややあり。
13　暗褐色土　ロームを含む。

0368号

14　暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む。しまりややあり。

竪穴 0366 号

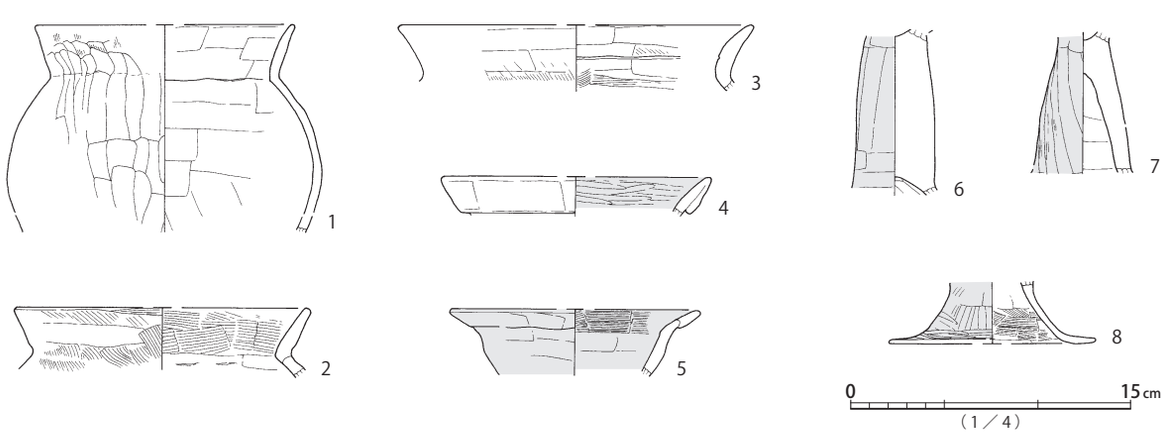
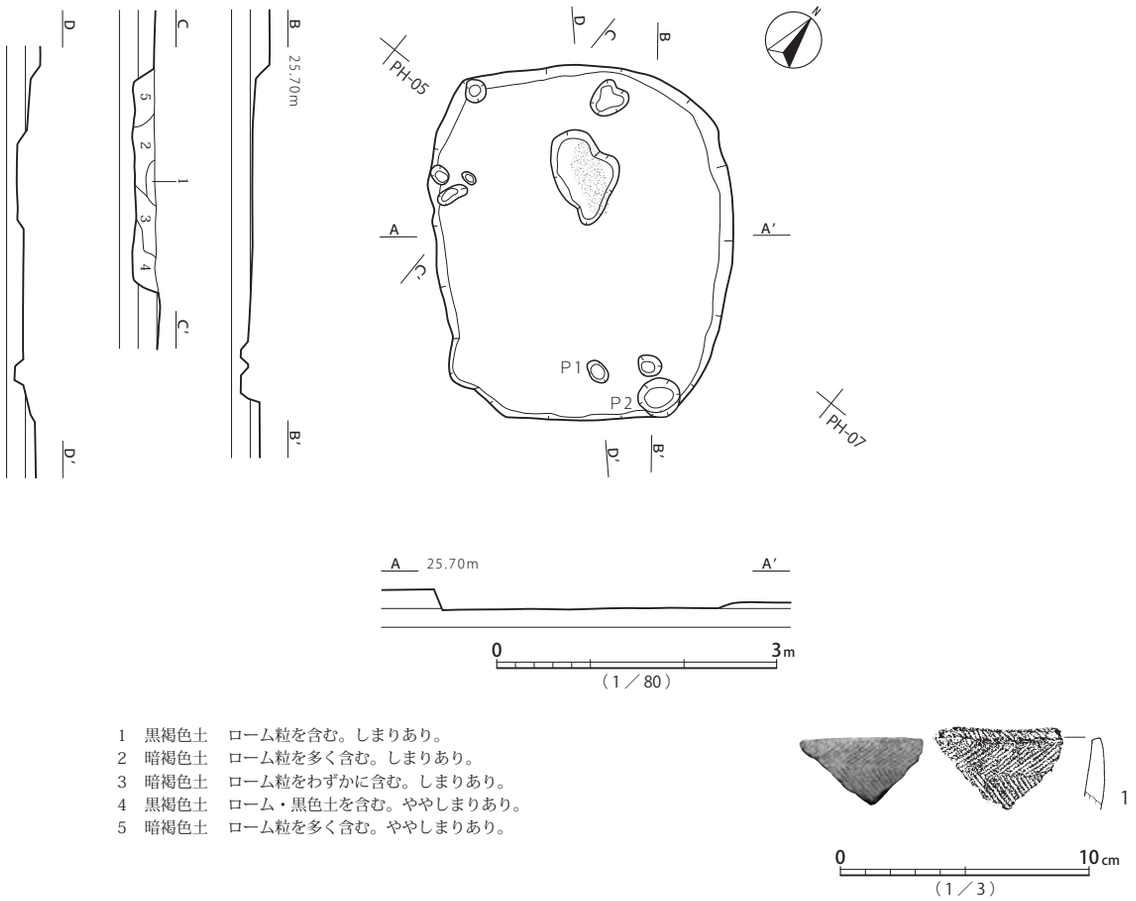


Fig.302　竪穴0366号 遺構遺物、竪穴0368号 遺構

竪穴0367号



1　黒褐色土　ローム粒を含む。しまりあり。
2　暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
3　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
4　黒褐色土　ローム・黒色土を含む。ややしまりあり。
5　暗褐色土　ローム粒を多く含む。ややしまりあり。

Fig.303　竪穴0367号 遺構遺物

曲傾向を示す。8は北西隅付近から検出され、床面上からの出土である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

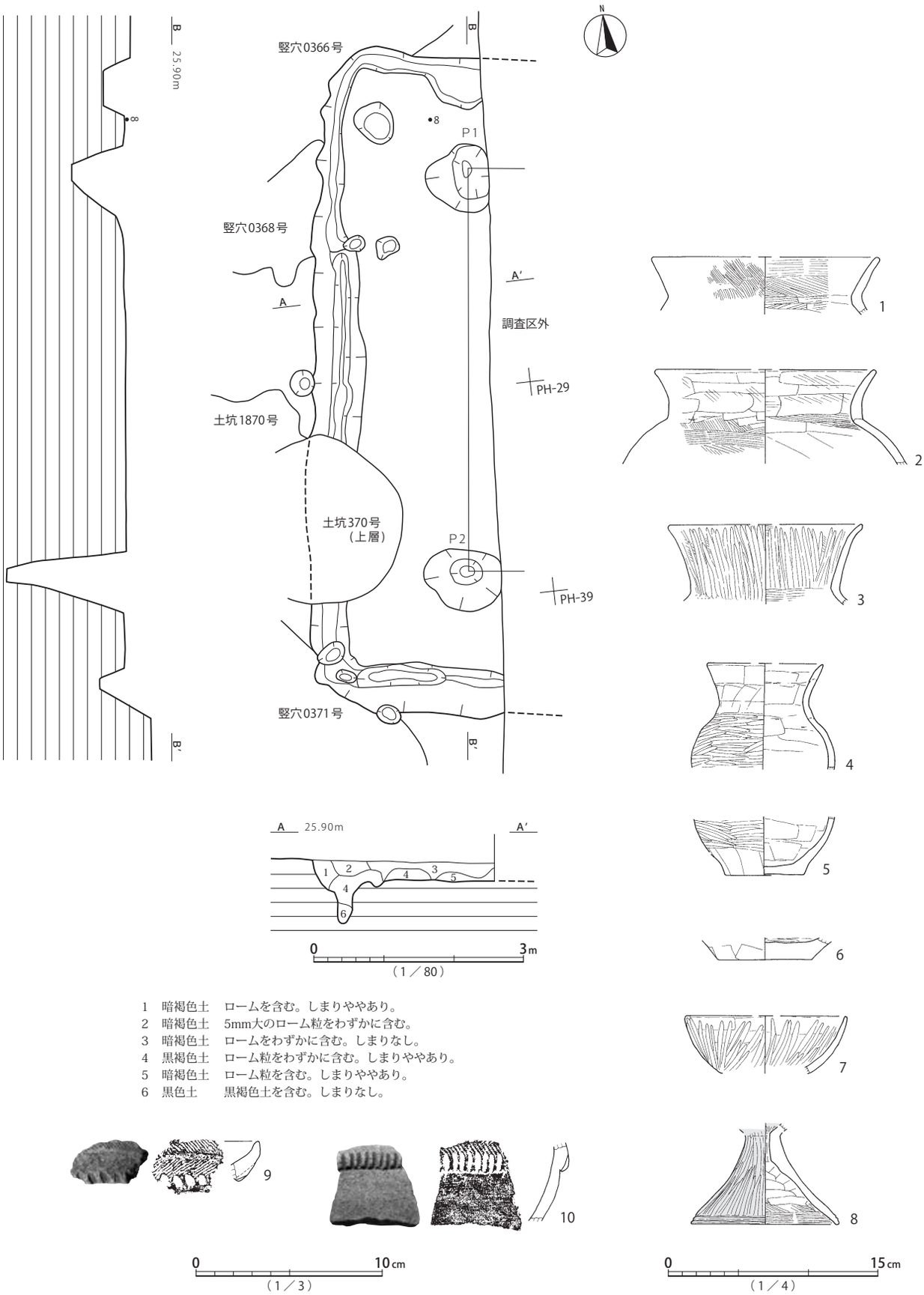
竪穴0371号　（Fig.305・306、PL.38・78・121・122・135）

PH−36を中心に位置する。北東辺壁で竪穴0369号・土坑370号（上層）・土坑1870号、南側で道路377号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0369号よりも新しく、370・377号よりも古い。1870号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

平面形態は方形を呈すが、南側を壊されるため、詳細は不明である。推定規模は6.87×6.93m、推定遺構下場面積は40.1㎡、確認面からの深さは0.25mを測る。主軸方位はN−43°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されているが、掘り込みは明確でない。P1〜4は主柱穴で、掘り方に段差をもち、柱の抜き取りが行われた可能性がある。P5は貯蔵穴である。壁周溝が検出されている。北東辺壁際の床面上からは、焼土の堆積が確認されている。

実測可能遺物は、1〜3は壺形土器、4は器種不明の底部、5は高杯形土器、6は甕形土器である。壺形土器の頸部は屈折し、直線的に開く口縁部高は低い。5はP5からの出土である。土器以外では7の敲石が出土している。

竪穴 0369号



1　暗褐色土　ロームを含む。しまりややあり。
2　暗褐色土　5mm大のローム粒をわずかに含む。
3　暗褐色土　ロームをわずかに含む。しまりなし。
4　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりややあり。
5　暗褐色土　ローム粒を含む。しまりややあり。
6　黒色土　　黒褐色土を含む。しまりなし。

Fig.304　竪穴0369号 遺構遺物

竪穴 0371 号

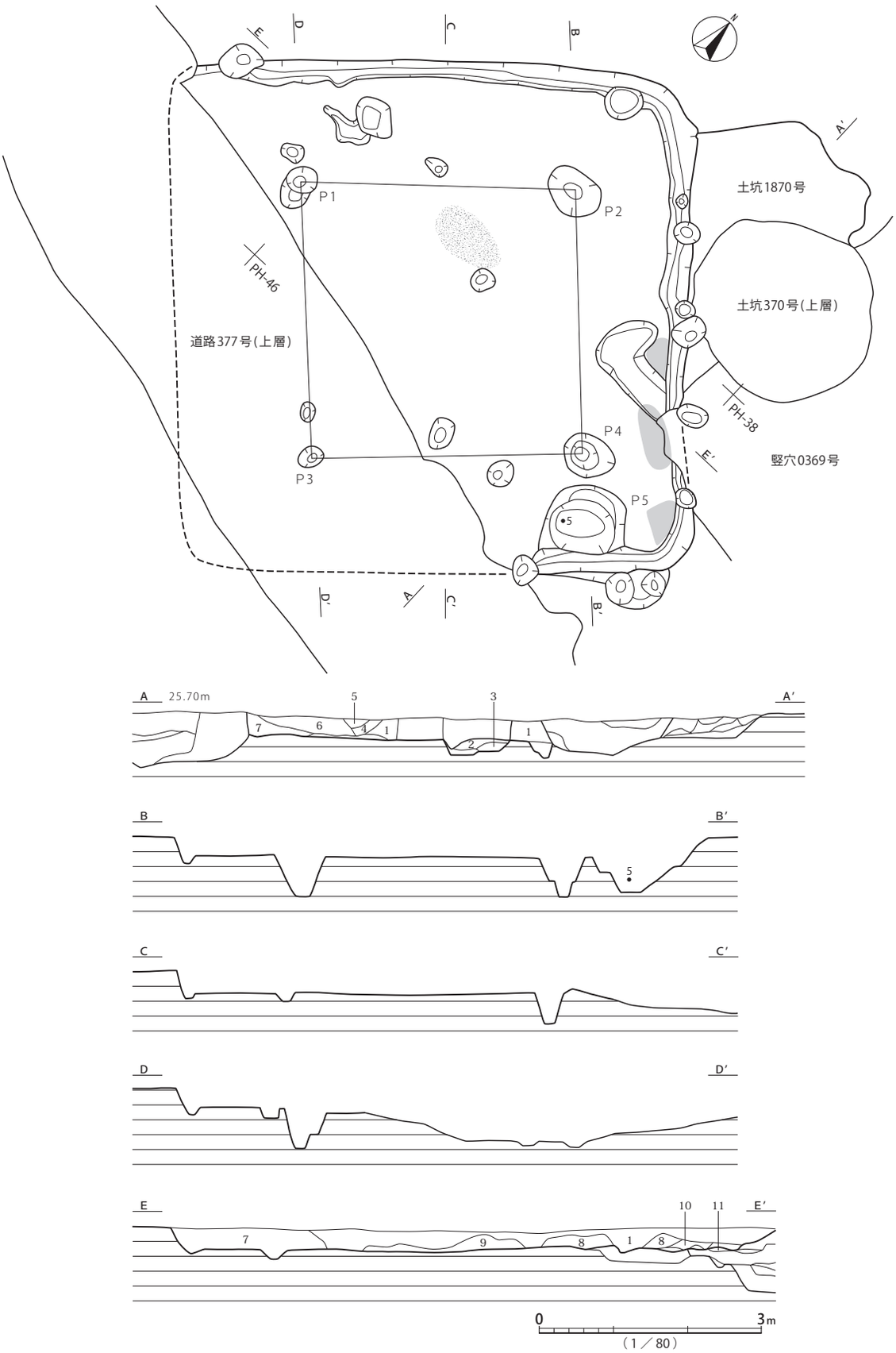


Fig.305　竪穴0371号(1) 遺構

竪穴0371号

1　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。粘性あり、しまりややあり。
2　明褐色土　ロームを含む。
3　暗褐色土　ロームブロックを含む。粘性あり、しまり強い。
4　明褐色土　ロームを含む。粘性あり、しまり強い。
5　暗褐色土　ロームを含む。粘性あり、しまり強い。
6　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまり強い。
7　暗褐色土　しまりややあり。
8　暗褐色土　5mm大のローム粒を含み、2cm大のロームブロックも部分的に混じる。しまり弱い。
9　黒褐色土　粘性あり、しまりやや弱い。
10　暗褐色土　焼土を含む。しまり強い。
11　黄褐色土　ハードロームを主体とする。貼床か。

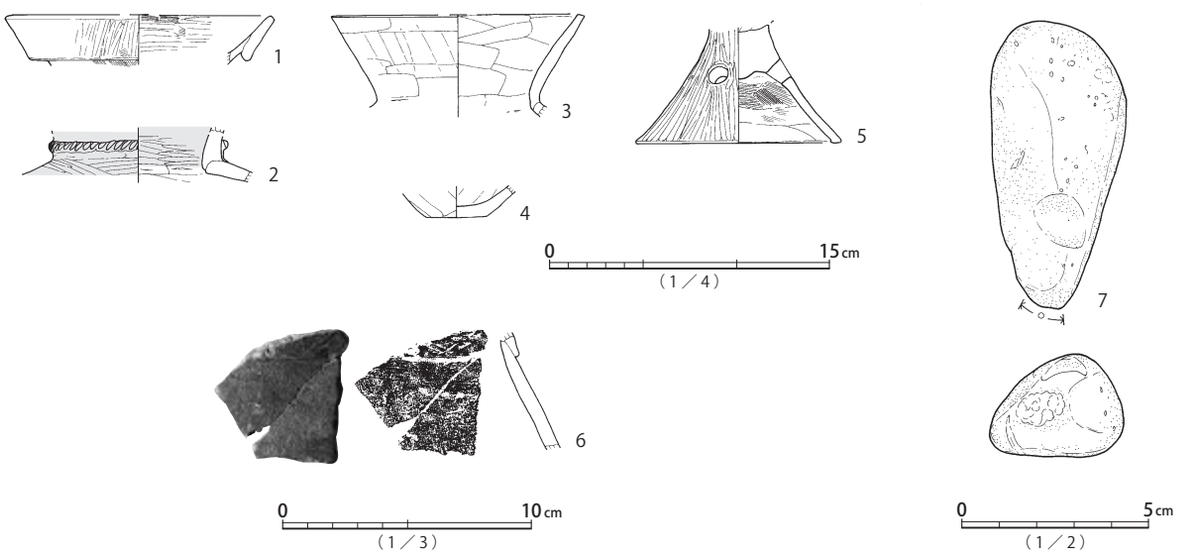


Fig.306　竪穴0371号(2) 遺物

古墳時代前期前葉の所産と思われる。

竪穴0390号　（Fig.307～309、PL.38・78・79・96・122）

PF−70を中心に位置する。南側で竪穴0391号と重複し、北側と西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が0391号よりも新しい。

平面形態は大型の方形を呈すと考えられるが、調査区外に延びる範囲が多く、詳細は不明である。推定規模は9.40×10.00m、推定遺構下場面積は79.6㎡、確認面からの深さは0.62mを測る。南辺壁を正面とした場合、主軸方位はN−18°−Wとなる。P1～3は主柱穴で、掘り方上部に拡張や段差が認められることから、柱の抜き取りや建て替えが行われた可能性がある。北辺側のP1と南辺側のP2・3とでは深度に差が認められ、南辺側が深く掘り込まれる。同様の形態は、規模をほぼ同じくする竪穴0369号においても認められる。南辺壁中央に位置するP4は貯蔵穴で、蓋受け状の方形の掘り込みをもつ。P3北側から検出された焼土範囲は、航空写真測量図面の等高線に乱れが確認されることから、浅い掘り込みをもつ炉跡の可能性があるが、明確でない。柱穴を伴う壁周溝が巡り、貯蔵穴両脇の間仕切り溝が接続する。南壁際からは貝層の分布が確認されているが、サンプルの所在は確認できず、内容物は不明である。覆土中にはロームブロックを多く含み、人為的に埋め戻された可能性がある。

実測可能遺物は、1・5・18～20は甕形土器、2は広口壺形土器、3・4・22～27は壺形土器、8は短頸壺形土器、9は椀形ないし高杯形土器、10は椀形土器、11は鉢形土器、12～16は高杯形土器、17は器台形土器である。6・7は甕形土器、21は台付甕形土器、28は椀形土器、29は器台形土器と思われる。20はタタキ整形が施され、24・27は同一個体である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0391号　（Fig.307～309、PL.38・132・135）

PF－80を中心に位置する。北側で竪穴0390号と重複する。新旧関係は、本遺構が0390号よりも古い。

平面形態は長楕円形を呈すと思われるが、北側を壊されるため、詳細は不明である。規模は副軸長4.79m、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN－39°－Wである。炉跡は検出されていないが、0390号との重複により壊されたものと思われる。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は壺形土器、3はミニチュア土器である。土器以外では4の磨石・敲石と5の打製石斧が出土している。

遺構平面形態から、弥生時代後期中葉の所産と思われる。

竪穴0396号　（Fig.310、PL.79・96・122）

OG－14を中心に位置する。北西辺壁の一部で溝2031号（上層）と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が2031号よりも古い。

平面形態は方形を呈すと考えられるが、北隅が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.17mを測る。北東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN－26°－Wとなる。壁周溝が検出されている。

実測可能遺物は、1・2・4は壺形土器、3・5は器種不明の底部である。壺形土器の頸部は明瞭に屈折するが、帯縄文装飾壺も含む。3・4は北隅壁際から検出され、覆土中からの出土である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0409号　（Fig.311、PL.38・79）

OG－19を中心に位置する。南隅で竪穴410号（上層）、東隅で掘立柱建物3221号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。遺構の東側半分は、昭和50年（1975）に実施した上総国分僧寺寺域確認調査ですでに調査されていたが、この範囲からの出土遺物は確認することができない。

平面形態は方形を呈し、規模は4.90×5.04m、推定遺構下場面積は21.5㎡、確認面からの深さは0.16mを測る。主軸方位はN－62°－Wである。炉跡は遺構中央やや北西寄りから検出されている。P1は貯蔵穴の可能性があるが、中軸線の左側に設ける例は一般的でない。壁周溝は遺構東側からのみ検出されているが、調査年次の境界付近と重なることから、西側では見落とされた可能性がある。主柱穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1は口縁部が内湾する直口縁壺形土器、2は高杯形土器である。1は口縁部と胴

竪穴 0390・0391 号

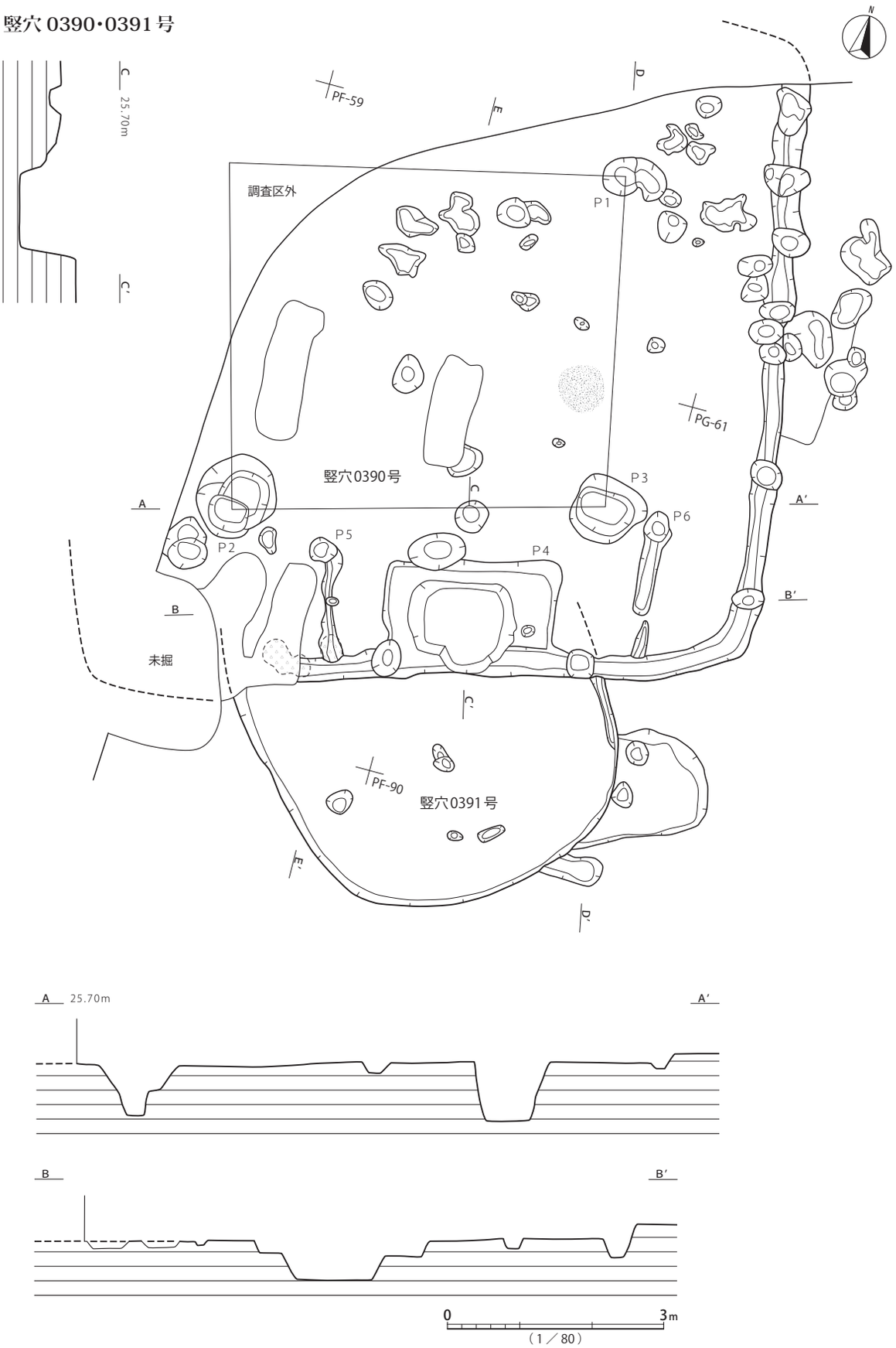
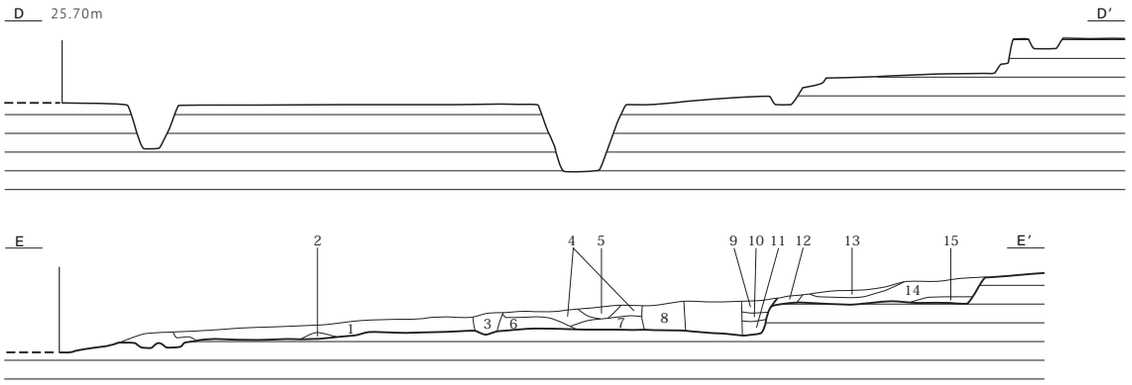


Fig.307　竪穴0390号(1) 遺構、竪穴0391号(1) 遺構

竪穴 0390・0391 号



0390号

1 暗褐色土 大小ロームブロックを多く含み、ロームも混じる。しまりややあり。
2 暗褐色土 ロームを多く含む、ローム粒も混じる。
3 暗褐色土 5cm大のロームブロックを含み、ロームも混じる。しまりややあり。
4 灰褐色土 2cm大のロームブロックを多く含み、ロームも混じる。しまり強い。
5 暗褐色土 ロームを少量含む。粒子細かく、しまり強い。
6 明褐色土 2～5cm大のロームブロックを含む。
7 明褐色土 2cm大のロームブロックを含み、ロームも混じる。しまりなし。
8 黒褐色土 3mm大のローム粒をまばらに含み、ロームも混じる。しまり強い。
9 黒褐色土 しまりなし。
10 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
11 暗褐色土 ローム粒を多く含み、ロームも混じる。粘性あり、しまりやや弱い。

0391号

12 暗褐色土 ローム粒をまばらに含み、ロームも混じる。しまり強い。
13 暗褐色土 3mm大のローム粒をまばらに含み、ロームも混じる。しまり強い。
14 暗褐色土 ロームを均等に多く含む。しまり強い。
15 暗褐色土 ロームを含む。しまり強い。

竪穴 0390 号

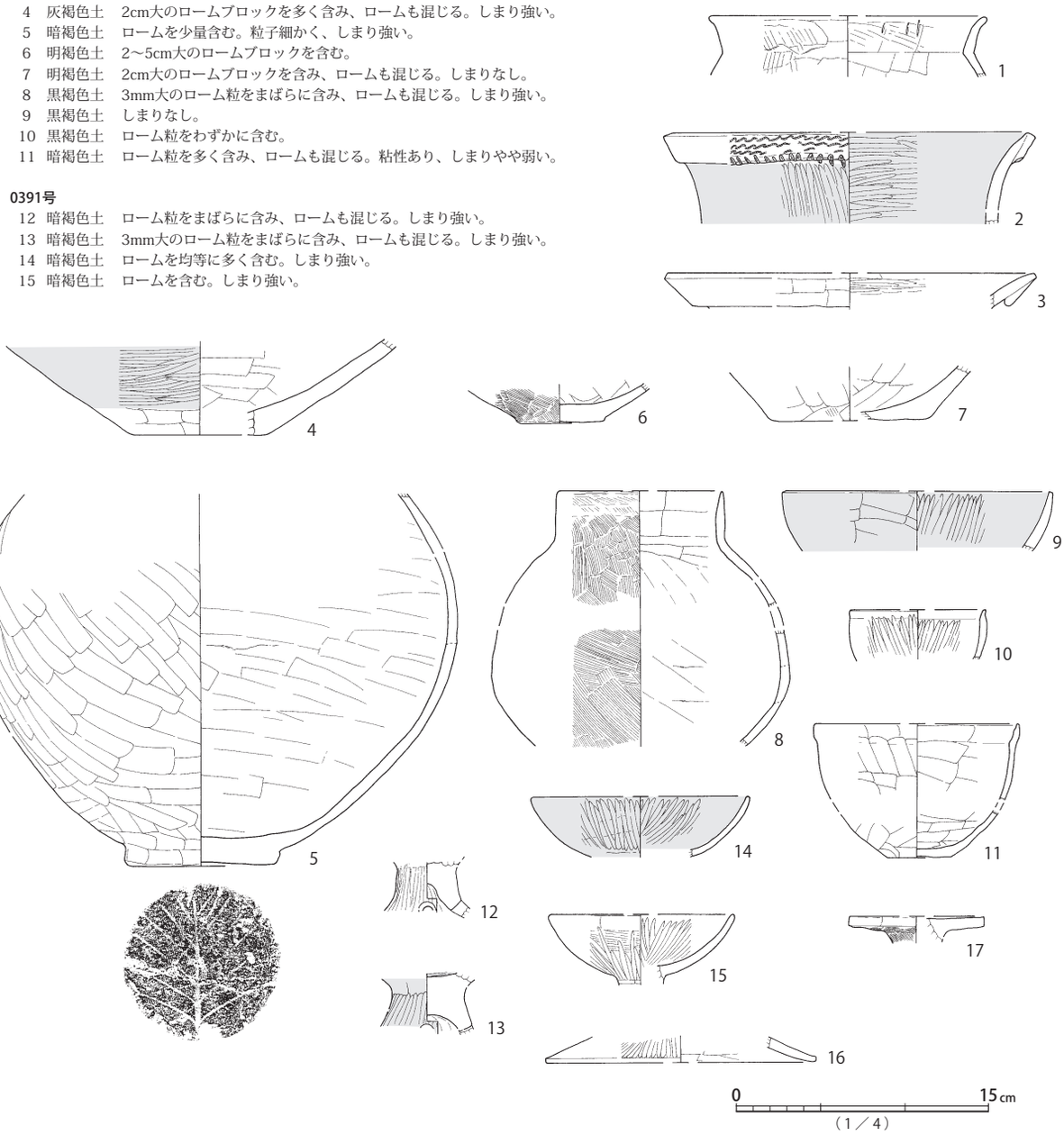
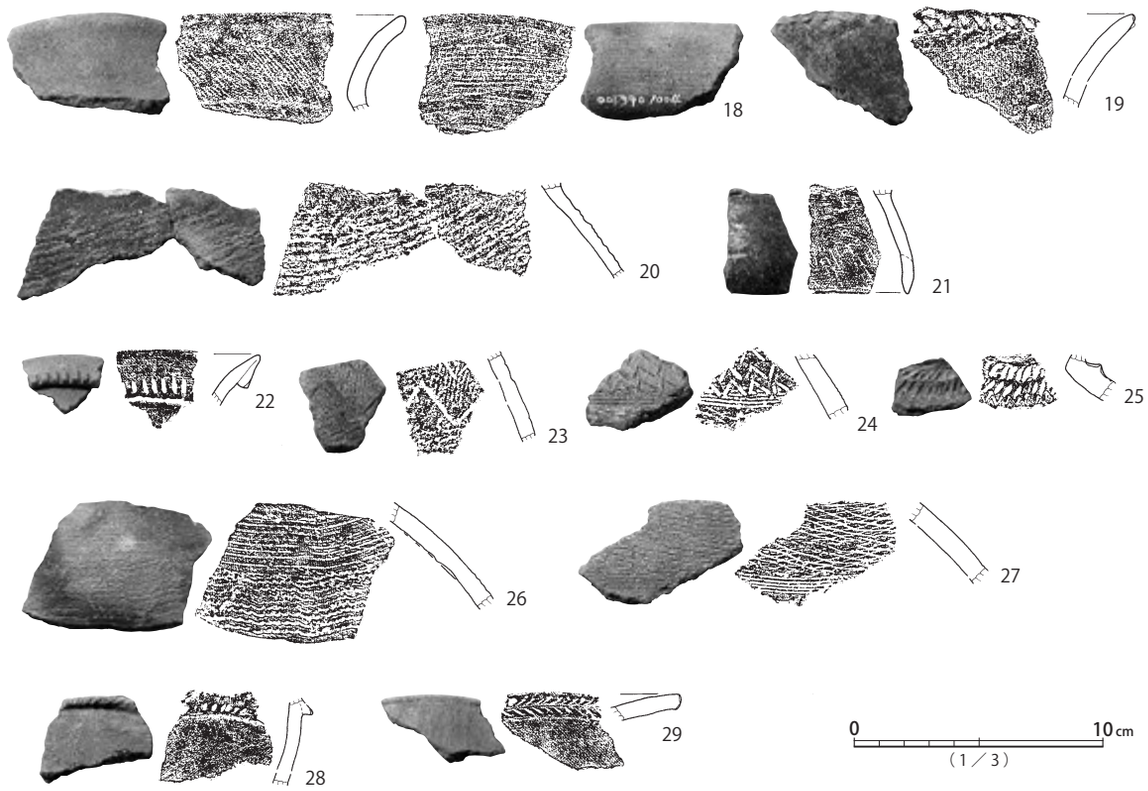


Fig.308 竪穴0390号(2) 遺構遺物、竪穴0391号(2) 遺構

竪穴 0390 号



竪穴 0391 号

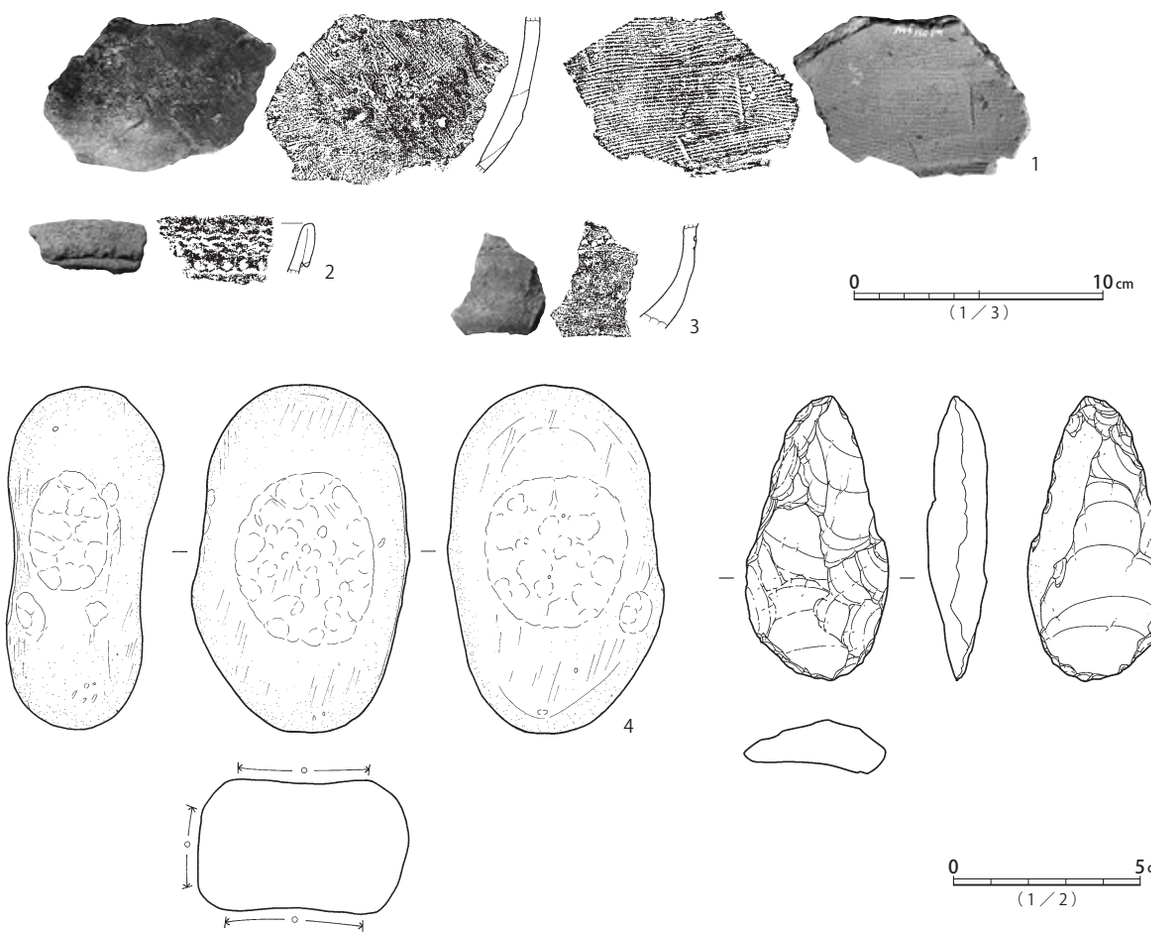
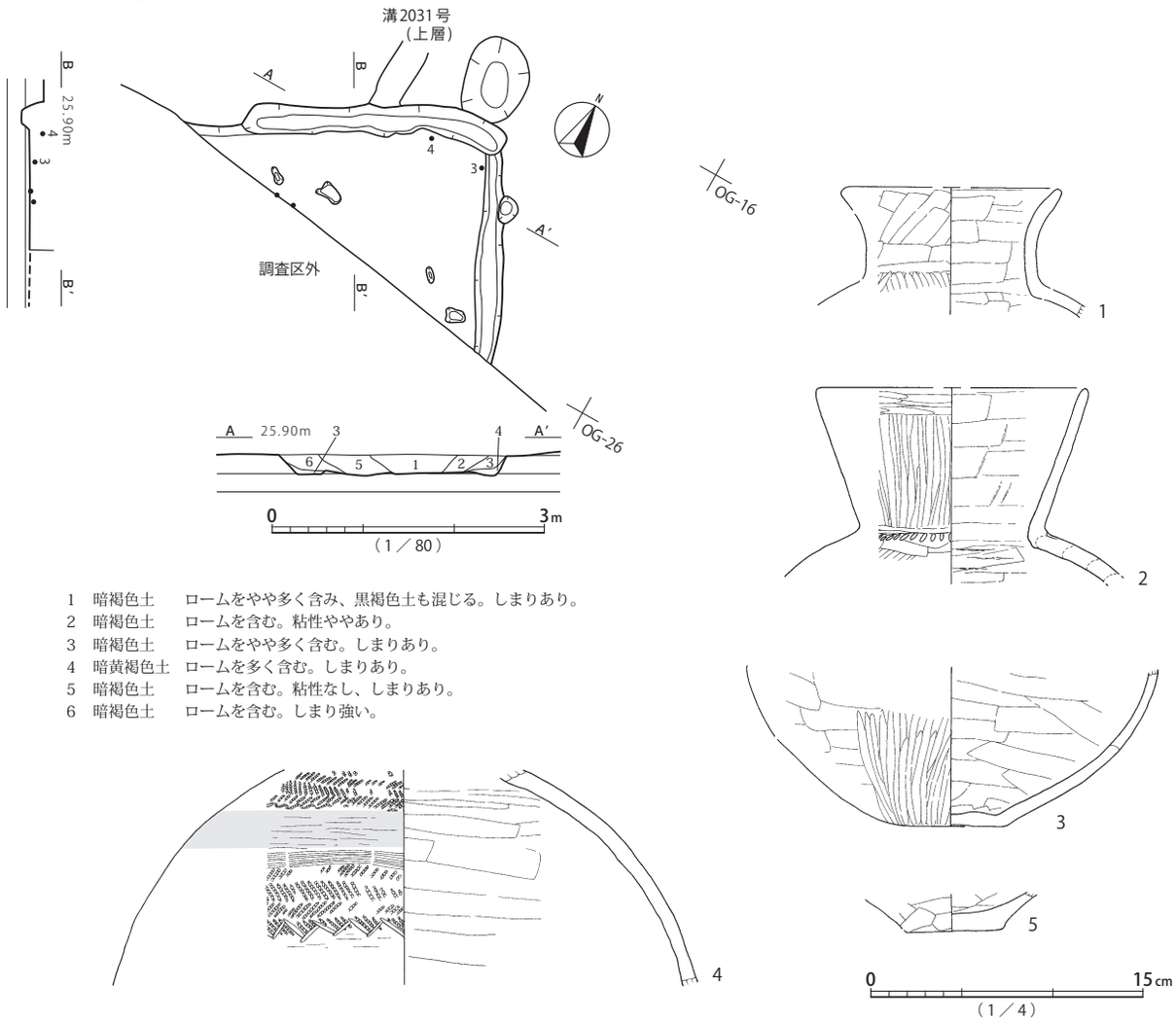


Fig.309　竪穴0390号(3) 遺物、竪穴0391号(3) 遺物

竪穴 0396 号



1　暗褐色土　　ロームをやや多く含み、黒褐色土も混じる。しまりあり。
2　暗褐色土　　ロームを含む。粘性ややあり。
3　暗褐色土　　ロームをやや多く含む。しまりあり。
4　暗黄褐色土　ロームを多く含む。しまりあり。
5　暗褐色土　　ロームを含む。粘性なし、しまりあり。
6　暗褐色土　　ロームを含む。しまり強い。

Fig.310　竪穴0396号 遺構遺物

部が接合しない。

弥生時代終末期後半の所産と思われる。

竪穴 0411 号　（Fig.312、PL.39・79）

OG−37を中心に位置する。西側で溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2020号よりも古い。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈すと考えられるが、上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝2020号）に大きく壊され、東隅が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.21mを測る。北東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−34°−Wとなる。部分的に壁周溝が検出されている。遺構範囲からは多数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1・3は壺形土器、2は甕形土器である。2は器面を薄く仕上げ、短い単位のハケ調整が施される。タタキ整形を模倣したものであろうか。3は網目状撚糸文を結節文で区画する。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でないが、弥生時代終末期の所産と思われる。

竪穴 0409 号

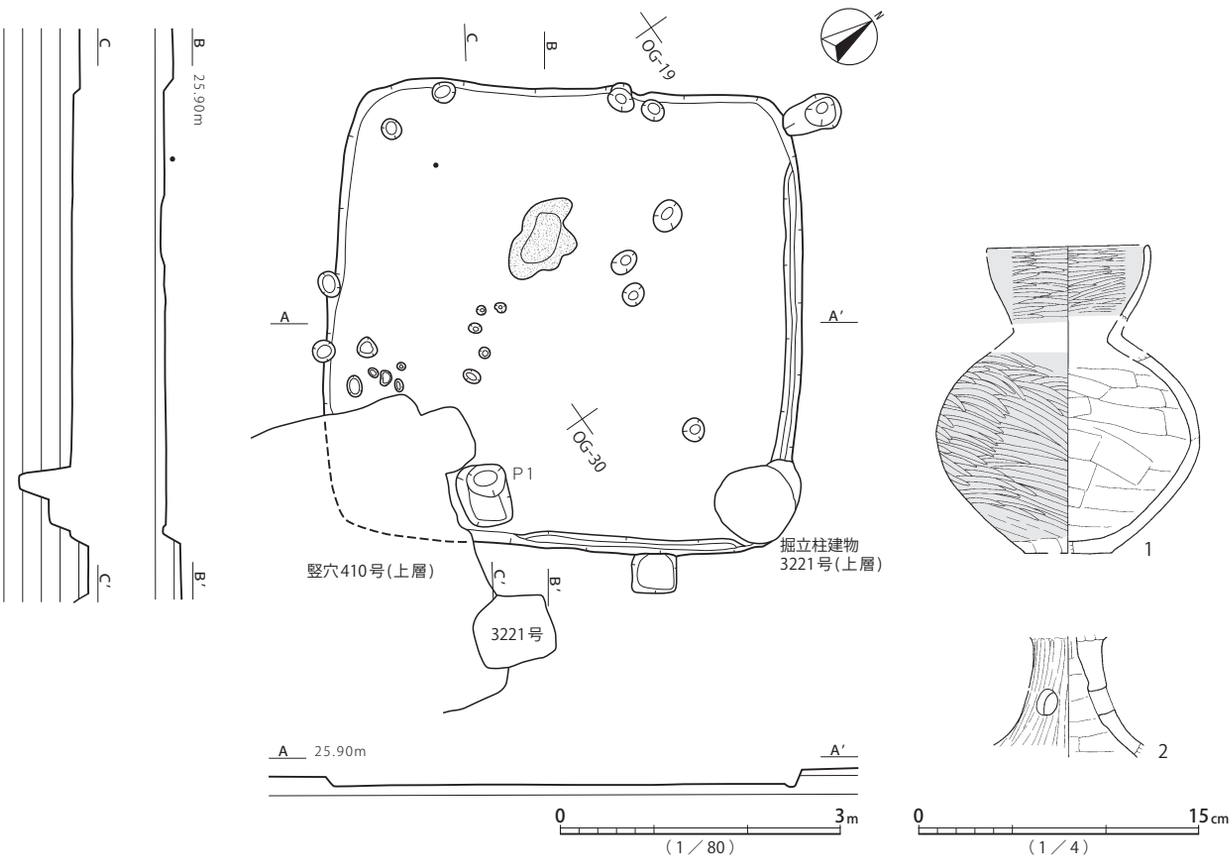


Fig.311　竪穴0409号 遺構遺物

竪穴0413号　（Fig.313、PL.39・79）

OG−48を中心に位置する。他遺構との重複はない。東辺壁付近は昭和50年（1975）に実施した上総国分僧寺寺域確認調査ですでに調査されていた。

平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、規模は3.86×4.06m、遺構下場面積は11.4㎡、確認面からの深さは0.40mを測る。主軸方位はN−2°−Wである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴であるが、P2のみ深い掘り込みをもつ。P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。

実測可能遺物は、1〜5は甕形土器、6は壺形土器、8は椀形土器である。7は小型の壺形土器であろうか。甕形土器は胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残すもので、口頸部多段は含まれない。

弥生時代後期後半の所産と思われる。

竪穴0414号　（Fig.314〜317、PL.39・79〜81・96・122・143）

OG−96を中心に位置する。中央で上総国分僧寺寺院地外郭溝の溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2020号よりも古い。

平面形態は大型の胴張隅丸長方形を呈し、規模は9.69×8.10m、推定遺構下場面積は64.4㎡、確認面からの深さは0.52mを測る。主軸方位はN−16°−Wである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間

竪穴 0411 号

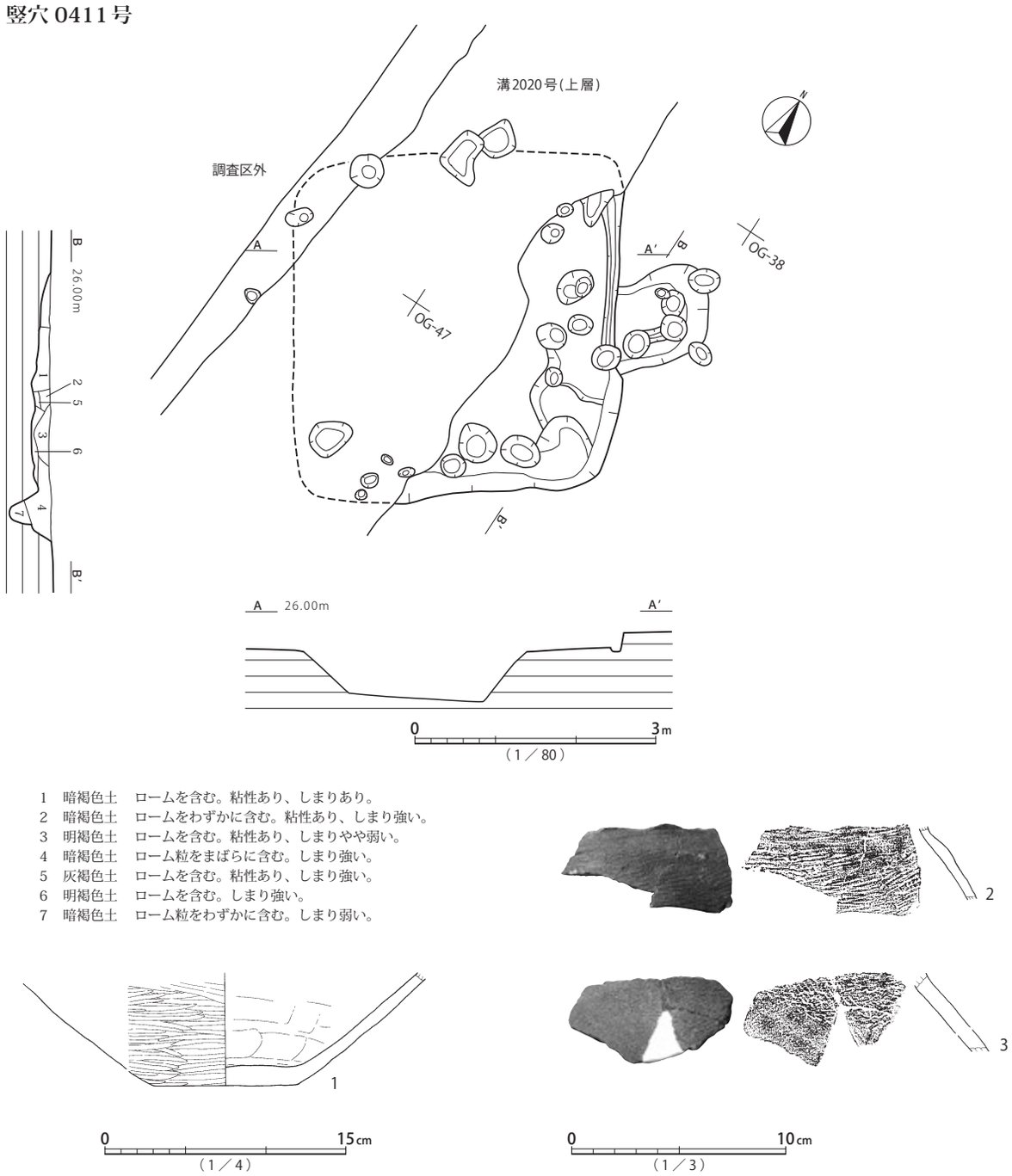


Fig.312　竪穴0411号 遺構遺物

から検出されている。P1～4は主柱穴で、掘り方は副軸方向に長い楕円形を呈す。P3は柱の抜き取りが行われた可能性がある。P5は出入口施設と思われるが、周辺にも柱穴状の掘り込みが多数検出されており、明確でない。南壁際のP6は貯蔵穴で、逆U字状の低い周堤帯で区画されている。壁周溝が検出されており、全周したものと考えられる。

実測可能遺物は、1～5・7・23・49～54は甕形土器、6は台付甕形土器、8～10・12～16・29・32・55～58は壺形土器、11は直口縁壺形土器、17は広口壺形土器、18～22・24・25・27・30は器種不明の底部、26・31・33は椀形土器、37～46は高杯形土器、47・48は器台形土器、59は椀形な

いし高杯形土器である。28・34・35はミニチュア土器で、34は壺形であるが、これ以外は器種が明確でない。5・7・53はタタキ整形で、7はタタキののちハケ調整を施す。15は胴部に大小2ヶ所の焼成後穿孔を施す。40は口縁部が屈折し、東海東部系の影響を受けたものであろうか。土器以外では36の土製勾玉が出土している。遺物は南東隅に集中し、床面付近から覆土中層にかけて2・15～17・33・37などが出土している。

弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

竪穴0415号　（Fig.318、PL.81・122）

OH−52を中心に位置する。遺構確認範囲では他遺構との重複はないが、東側は調査区外に延びる。

平面形態は小型の胴張隅丸方形を呈すと思われるが、西辺壁側が検出されたのみで、詳細は不明である。規模は長軸2.93m、確認面からの深さは0.30mを測る。西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−0°となる。壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2・11は甕形土器、3・4は器種不明の底部、5は台付甕形土器、6は高杯形土器、7は高杯ないし台付甕形土器、8は椀形土器、9は鉢形土器、10・12は壺形土器である。4は破損部割れ口が部分的に研磨される。砥石として利用したものであろうか。遺物は遺構中央寄りに集中し、覆土中層から下層にかけて1・6・7が出土している。2・10は出土高の記載がなく、垂直位置は不明である。

弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

竪穴0419号　（Fig.319・320、PL.39・81・122・123・135）

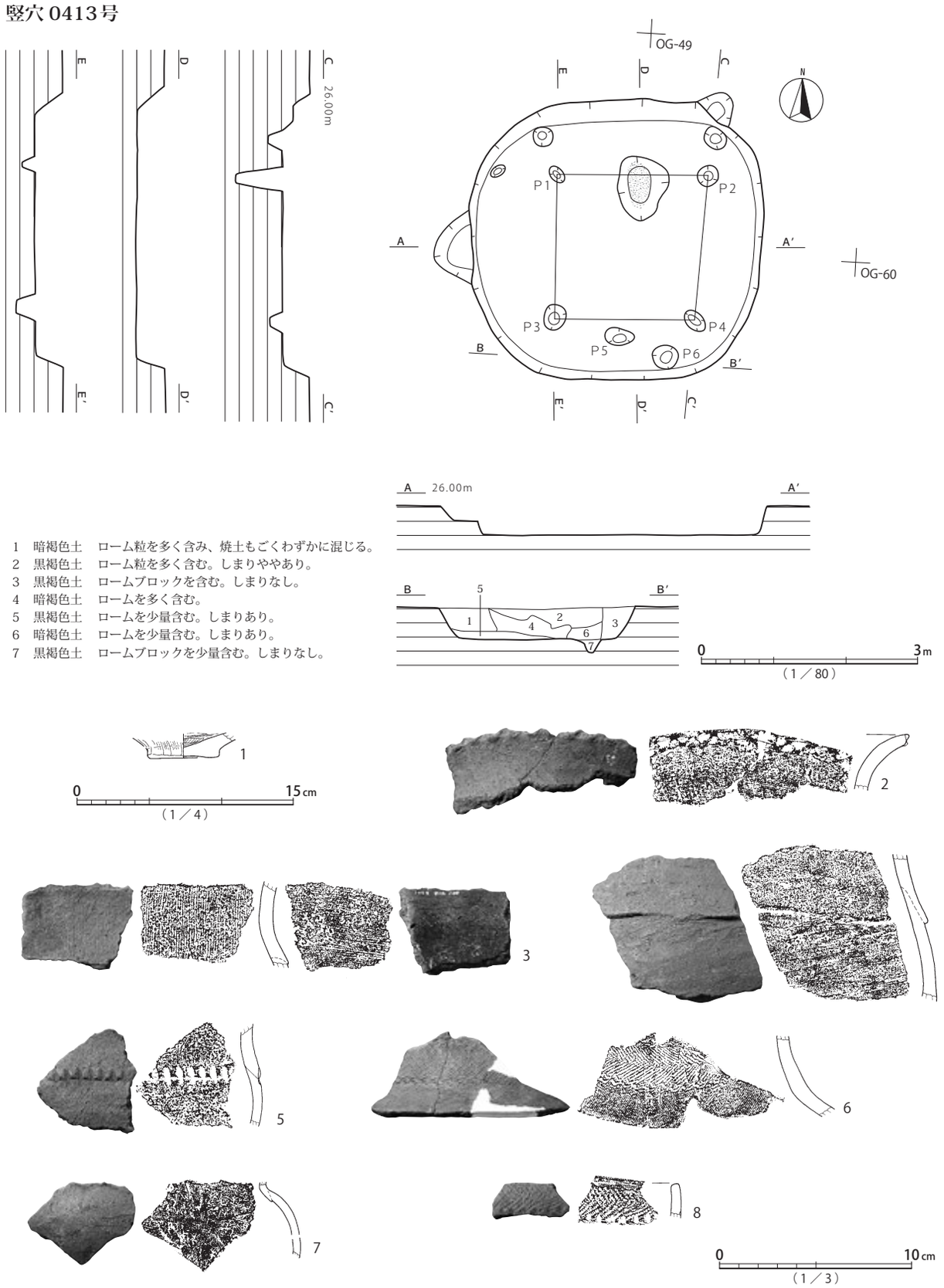
NG−48を中心に位置する。南西側で古墳0438号と重複し、北西隅は調査区外に延びる。また、壁が検出されないため図示していないが、北東隅で竪穴1863号と重複している。新旧関係は、本遺構が0438号よりも古い。1863号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がないが、1863号の平面形態が長楕円形を呈すと想定されることから、本遺構のほうが新しいと思われる。

平面形態は隅丸気味の長方形を呈し、推定規模は5.08×4.54m、推定遺構下場面積は17.2㎡、確認面からの深さは0.63mを測る。主軸方位はN−24°−Wである。炉跡は遺構中央やや北寄りから検出されている。P1～4は主柱穴であるが、P1は掘り込みが浅く、明確でない。竪穴の形態にあわせて、主軸方向の柱間を長くして配置する。P5は貯蔵穴である。壁周溝が巡り、全周したものと考えられる。覆土中にはローム粒やロームブロックを多く含み、人為的に埋め戻された可能性がある。

実測可能遺物は、1～3・10～14は甕形土器、4は器種不明の底部、5・6・17～19は壺形土器、7は直口縁壺形土器、8・9は高杯形土器、15・16は台付甕形土器である。1・2は口縁端部に明瞭な面をもち、2は頸部がくの字状に屈折する。3は5の字状有段口縁の北陸南西部系である。14はタタキ整形が施される。1・6は北西壁付近から検出され、1は覆土下層、6は覆土中層からの出土である。土器以外では、20・21の磨石・敲石が出土している。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴 0413号



1　暗褐色土　ローム粒を多く含み、焼土もごくわずかに混じる。
2　黒褐色土　ローム粒を多く含む。しまりややあり。
3　黒褐色土　ロームブロックを含む。しまりなし。
4　暗褐色土　ロームを多く含む。
5　黒褐色土　ロームを少量含む。しまりあり。
6　暗褐色土　ロームを少量含む。しまりあり。
7　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。しまりなし。

Fig.313　竪穴0413号 遺構遺物

竪穴 0414 号

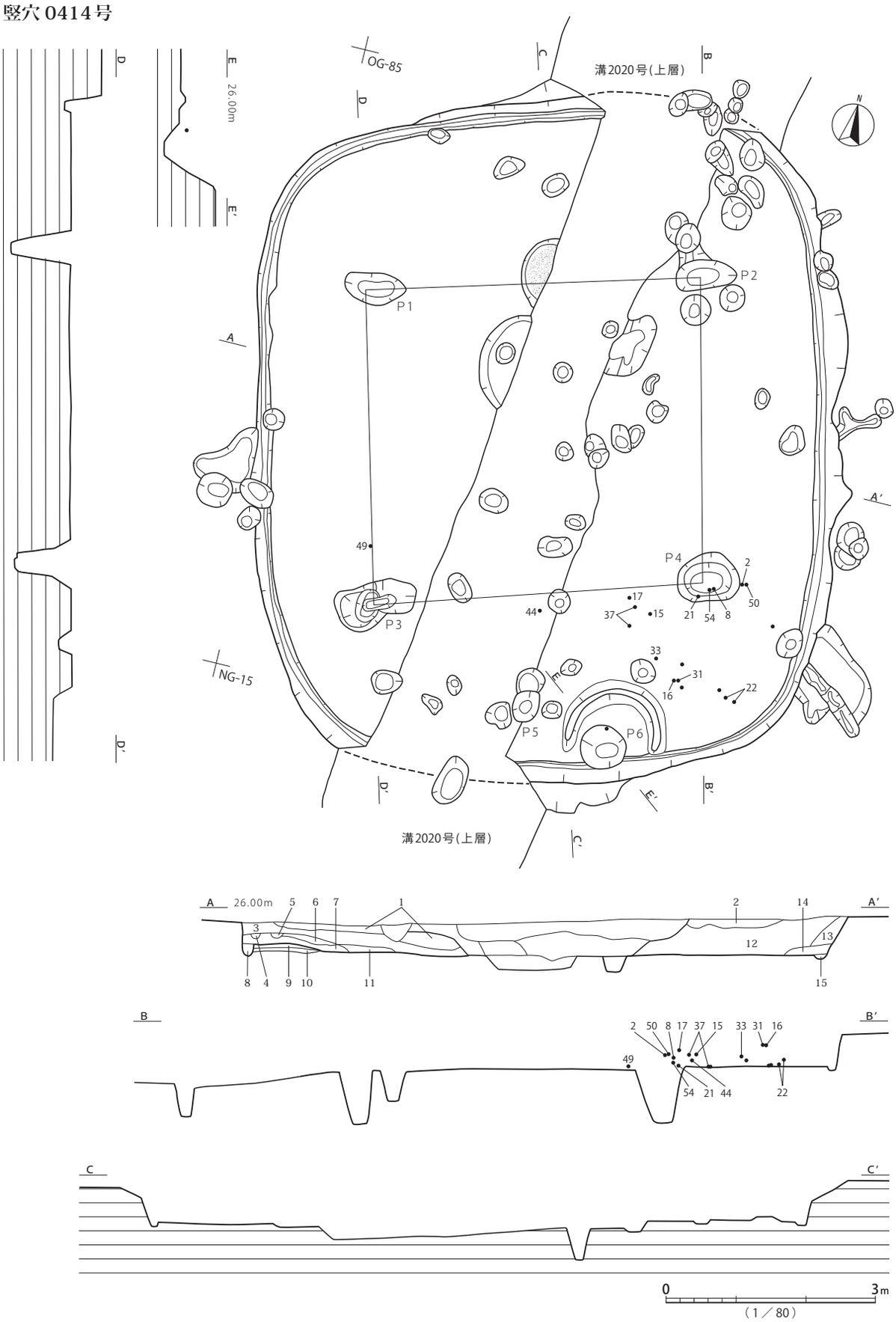


Fig.314　竪穴0414号(1) 遺構

竪穴 0414 号

1　暗褐色土　ローム粒を多量に含み、炭化物・焼土粒もわずかに混じる。粘性弱く、しまりあり。
2　暗褐色土　1層と同じ。やや褐色味が強い。
3　暗褐色土　ローム粒を少量含み、炭化物・焼土粒もごくわずかに混じる。しまりあり。
4　黄褐色土　ロームブロックからなる。
5　暗褐色土　ロームブロックを含む。しまりあり。
6　暗褐色土　ローム粒を多く含み、焼土もごくわずかに混じる。しまり強い。
7　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
8　黒色土　　ローム粒をわずかに含む。
9　黒褐色土　ローム粒を多量に含み、焼土もわずかに混じる。しまり強い。貼床。
10　黒褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む。しまり強い。貼床。
11　暗褐色土　ローム粒を多く含み、焼土粒もわずかに混じる。しまり強い。
12　黒褐色土　ロームをやや多く含み、炭化物・焼土もごく少量混じる。しまりあり。
13　暗褐色土　ロームを多量に含み、焼土もわずかに混じる。
14　暗褐色土　ロームを少量含む。
15　暗褐色土　ロームを多く含む。しまり強い。

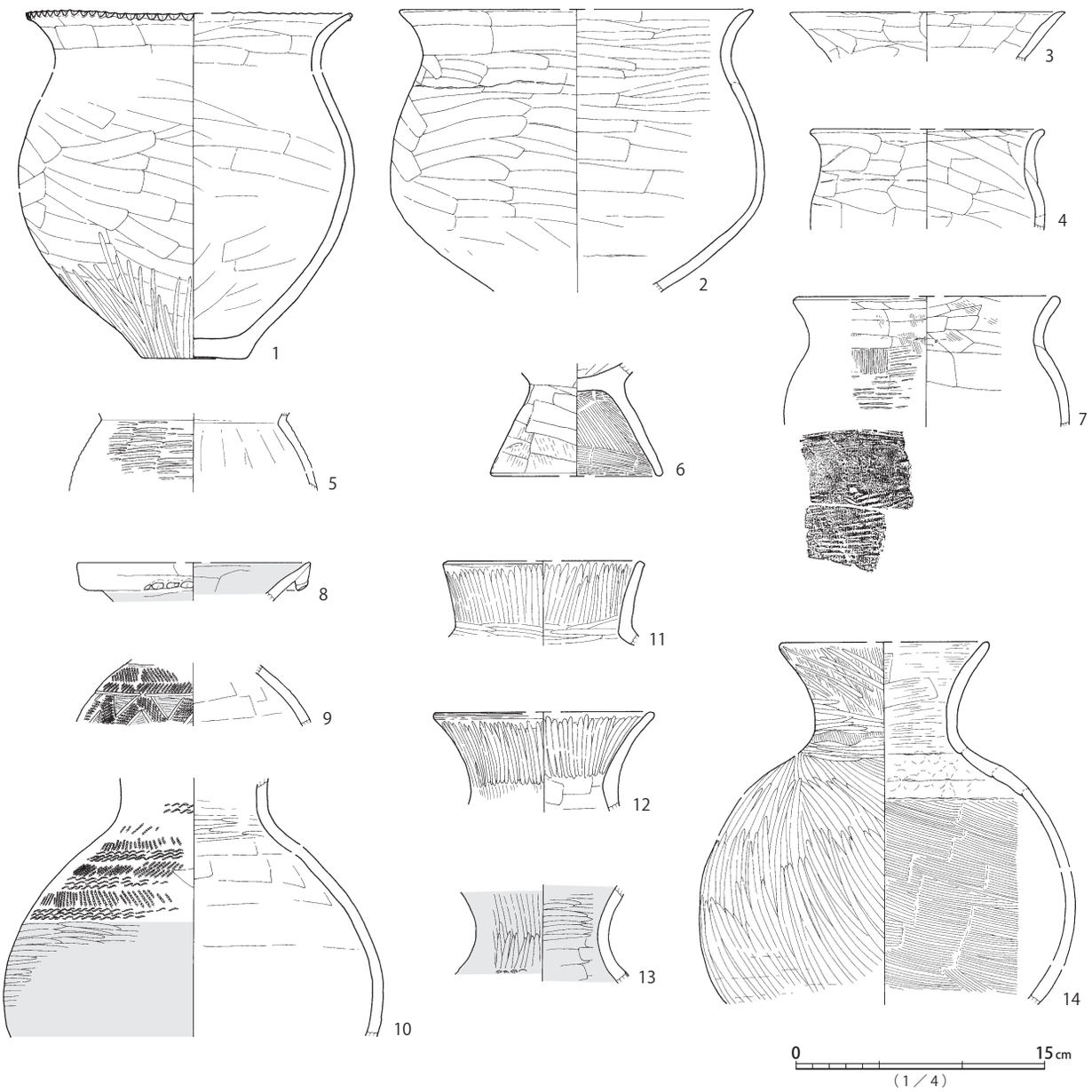


Fig.315　竪穴0414号(2) 遺物

竪穴 0414 号

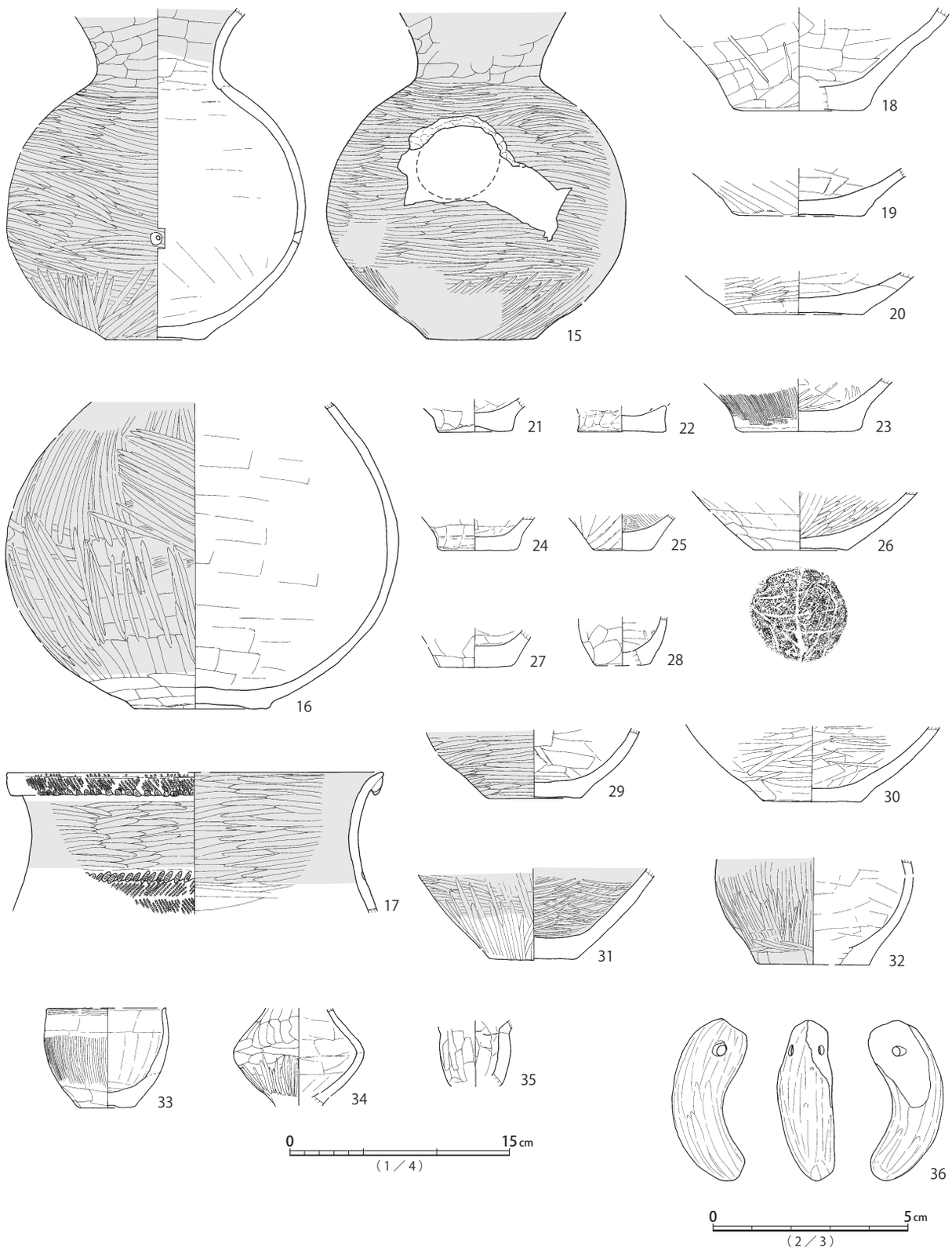


Fig.316　竪穴0414号(3) 遺物

竪穴 0414号

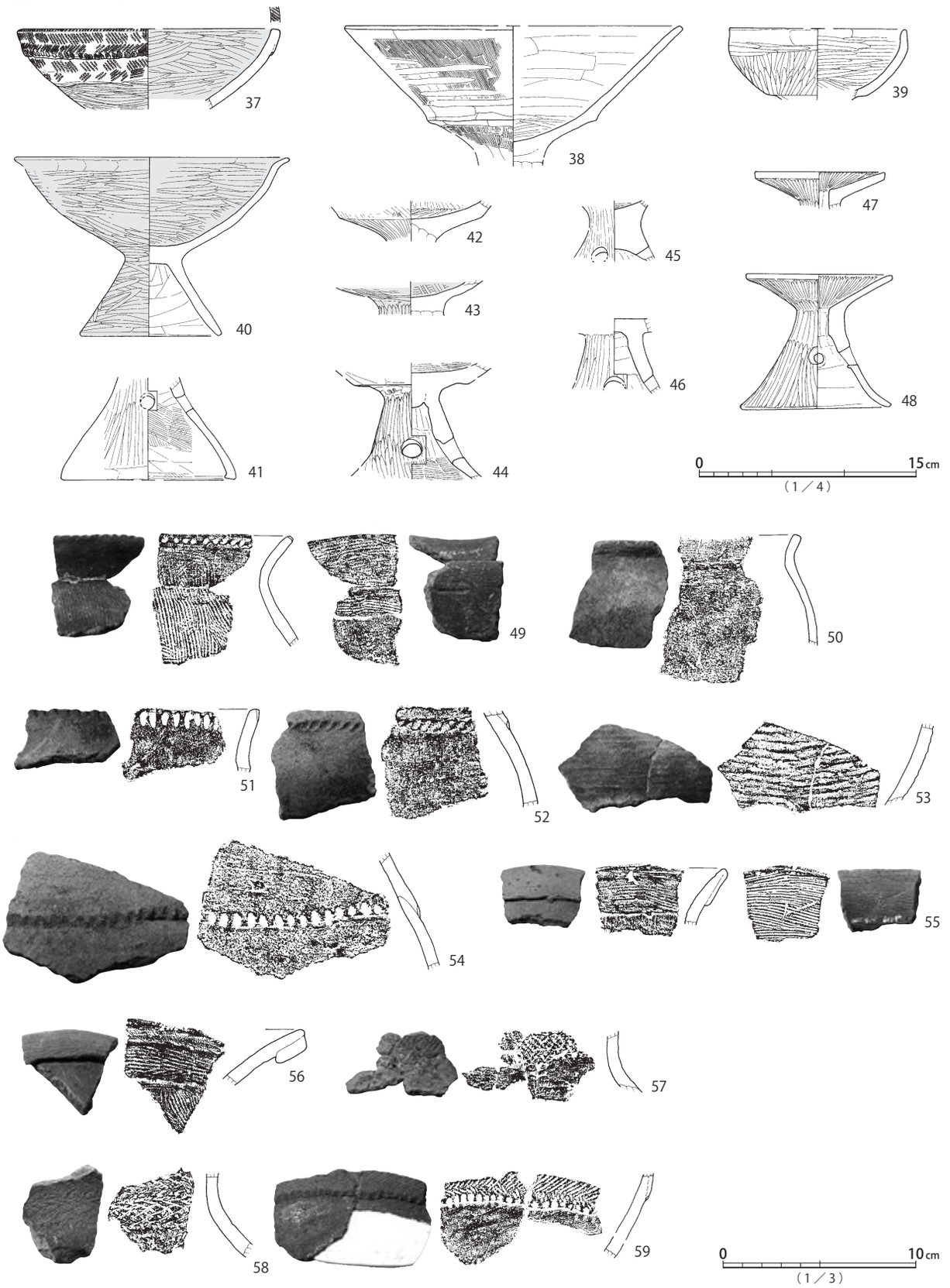
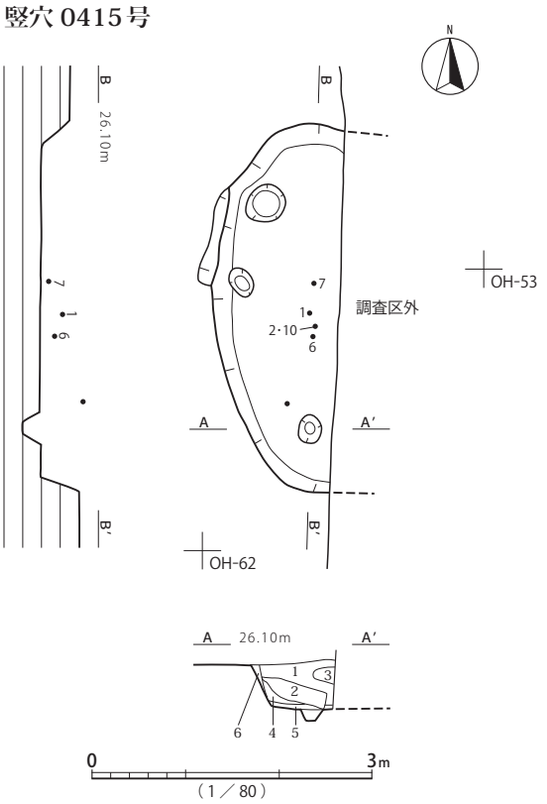
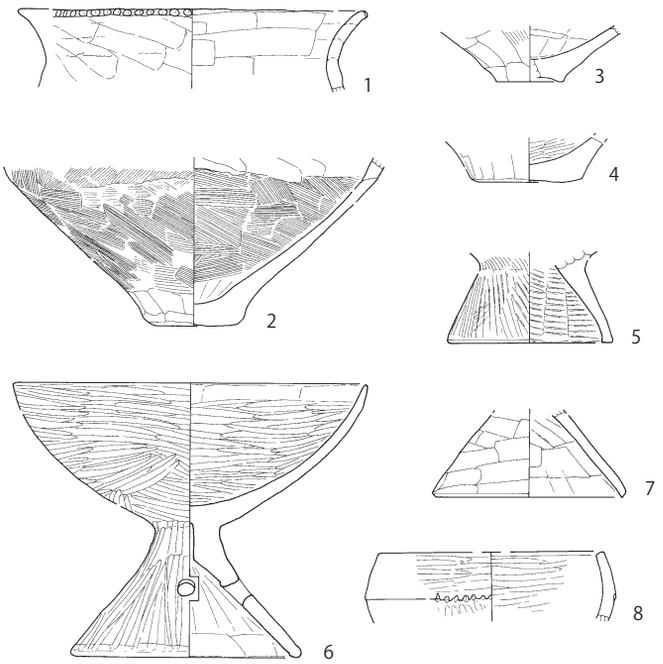


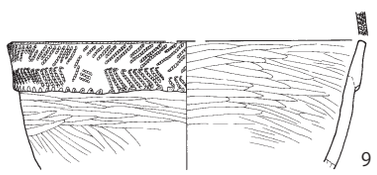
Fig.317　竪穴0414号(4) 遺物

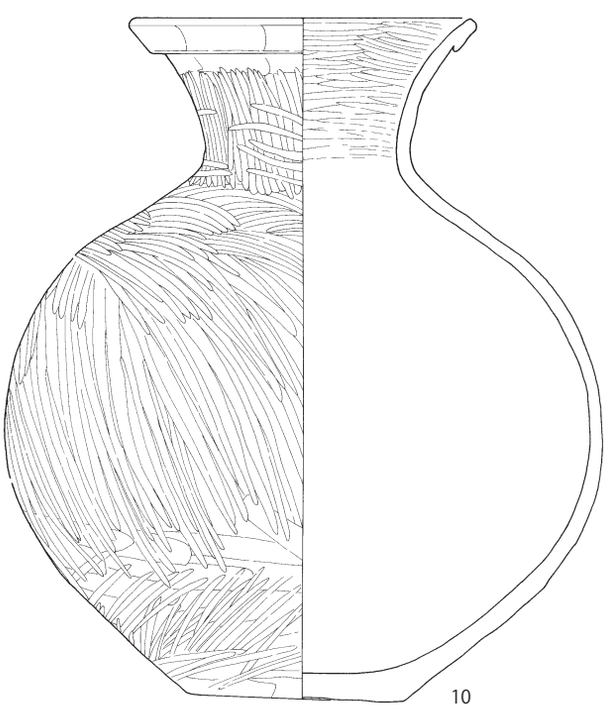
竪穴 0415 号

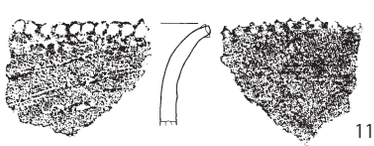


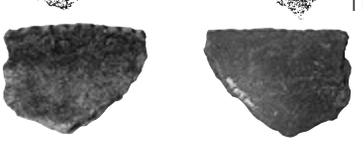
1　黒褐色土　ローム粒を少量含む。しまりなし。
2　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりなし。
3　暗褐色土　2cm大のロームブロックを多量に含む。粘性・しまりあり。
4　黒褐色土　ロームを少量含む。
5　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。粘性・しまりあり。
6　黄褐色土　ロームを主体とし、黒褐色土が混じる。しまりなし。

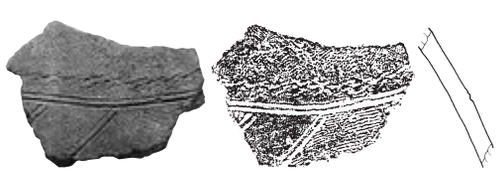










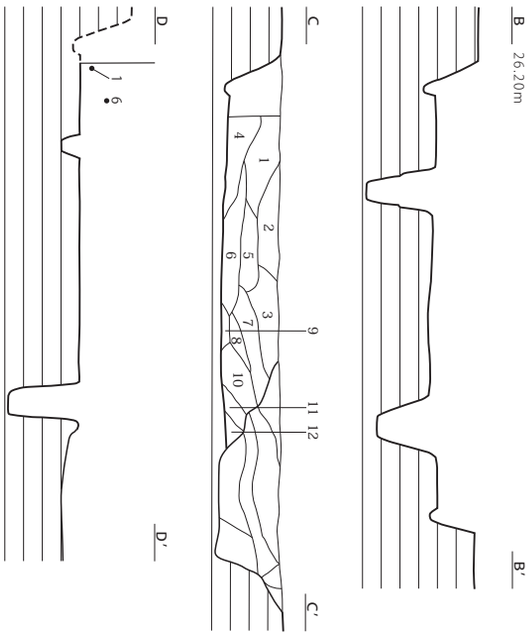


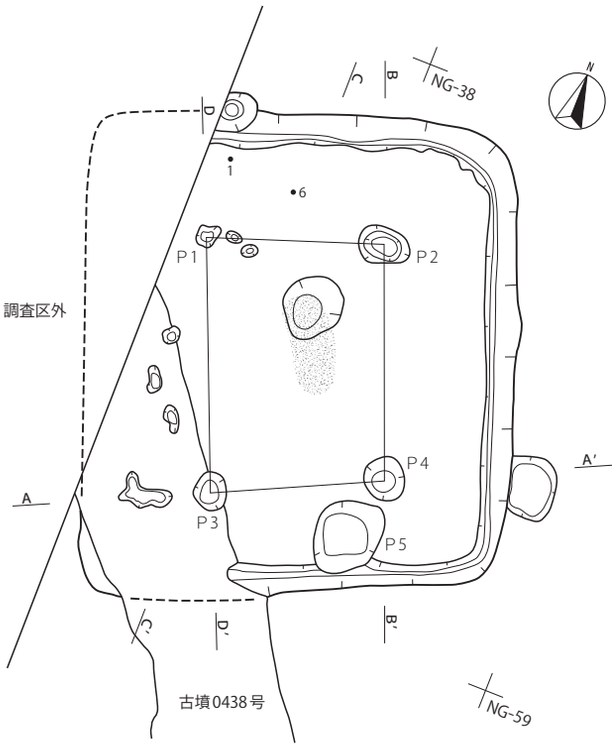
0　10cm
（1／3）

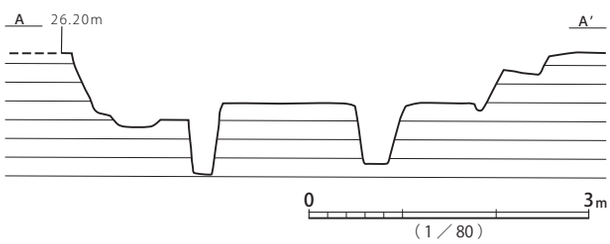
0　15cm
（1／4）

Fig.318　竪穴0415号 遺構遺物

竪穴 0419号







1　暗褐色土　ロームを多量に含み、2cm大のロームブロックも少量混じる。しまりなし。
2　黒褐色土　ローム粒を少量含む。しまりなし。
3　暗褐色土　ローム粒を含む。粘性あり、しまりやや弱い。
4　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまり強い。
5　暗褐色土　ローム粒を多く含む。部分的にしまりあり。
6　暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりややあり。
7　暗褐色土　ロームを多く含む。しまりやや弱い。
8　暗褐色土　1cm大のロームブロックを多く含む。しまりあり。
9　明褐色土　ロームを多く含む。しまり強い。
10　暗褐色土　ローム粒・3cm大のロームブロックを含む。しまりややあり。
11　暗褐色土　5mm大のローム粒を多く含む。しまり強い。
12　暗褐色土　ロームを含む。しまり強い。

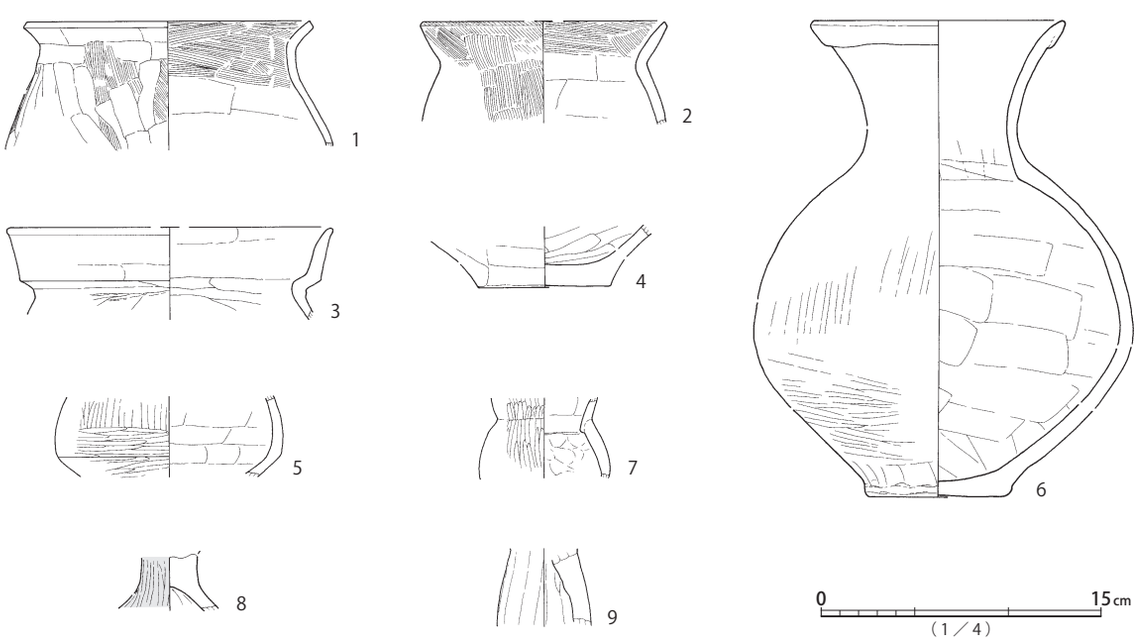


Fig.319　竪穴0419号(1) 遺構遺物

竪穴 0419 号

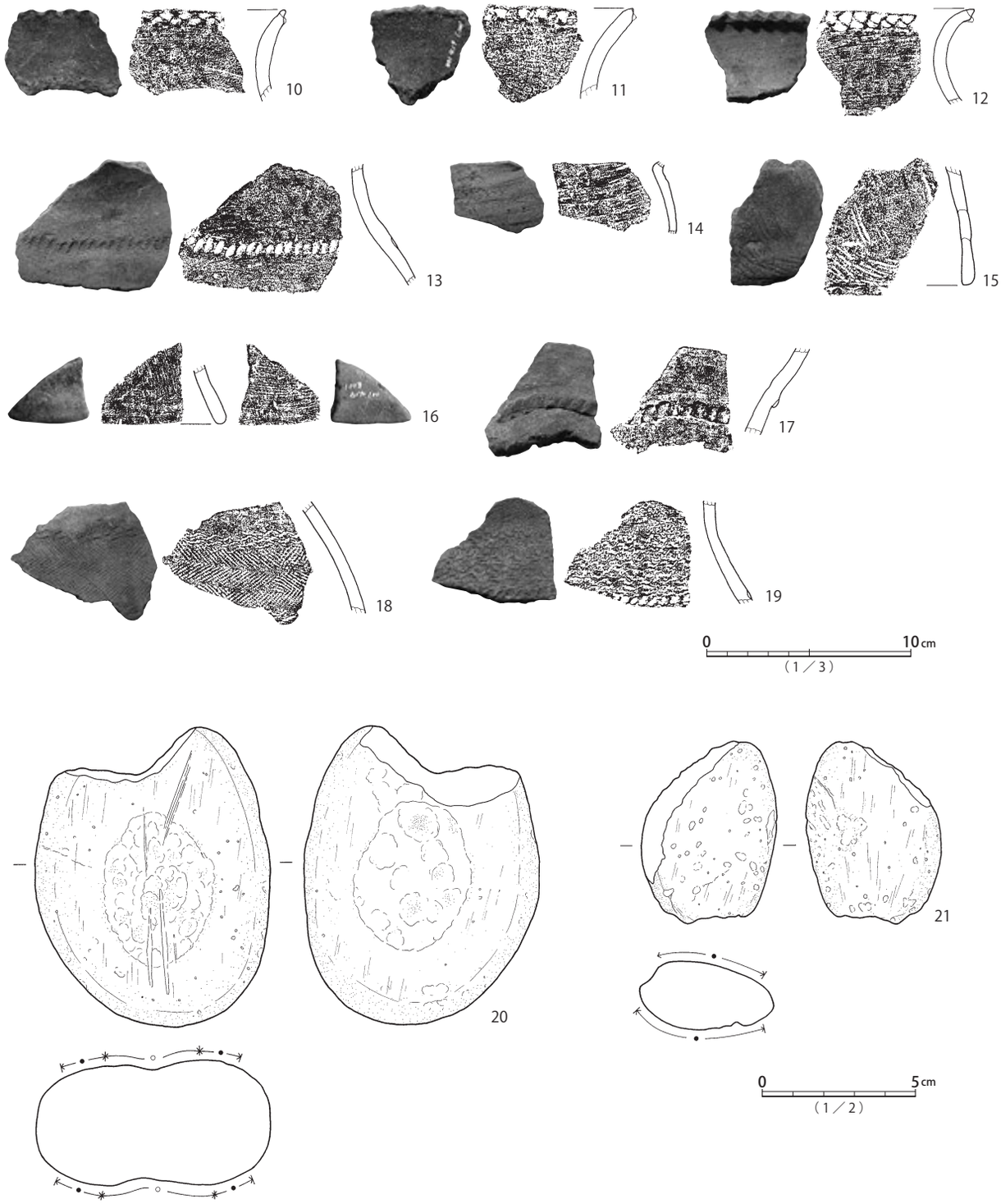


Fig.320　竪穴0419号(2) 遺物

竪穴0421号　（Fig.321、PL.81・123）

NH−42を中心に位置する。西辺壁で竪穴420号（上層）と重複し、東側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が420号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、部分的な検出のため、詳細は不明である。推定規模は一辺4.82m。確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位はN−11°−W程度と思われる。遺構確認範囲からは、炉跡や主柱穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2は壺形土器、3は大型の椀形土器、4は器種不明の底部、5〜8は高杯形土器、9は甕形土器である。

弥生時代後期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0430号　（Fig.321）

NG−70を中心に位置する。北側で竪穴420号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が420号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、南隅がわずかに検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.19mを測る。南西壁を基準とした場合、主軸方位はN−52°−W程度と思われる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴0434号　（Fig.322・323、PL.39・81・123・140）

NG−79を中心に位置する。北西側で竪穴0436号・土坑435号（上層）、南隅で竪穴0439号と重複する。新旧関係は、本遺構が435・0436号よりも古い。0439号との関係は、本遺構のほうが古いと思われるが、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は台形気味の胴張隅丸長方形を呈し、規模は7.42×6.70m、遺構下場面積は40.9㎡、確認面からの深さは0.47mを測る。主軸方位はN−50°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴で、竪穴0414号と同様に、掘り方は副軸方向に長い楕円形を呈す。P5は貯蔵穴である。壁周溝は、北東・南西辺壁からのみ検出されている。

実測可能遺物は、1・11は壺形土器、2は直口縁壺形土器、3・4・9・10は椀形土器、5は高杯形土器、6・7は器台形土器、8は甕形土器である。3・9は同一個体で、4も同一の可能性がある。土器以外では、12の砥石が出土している。

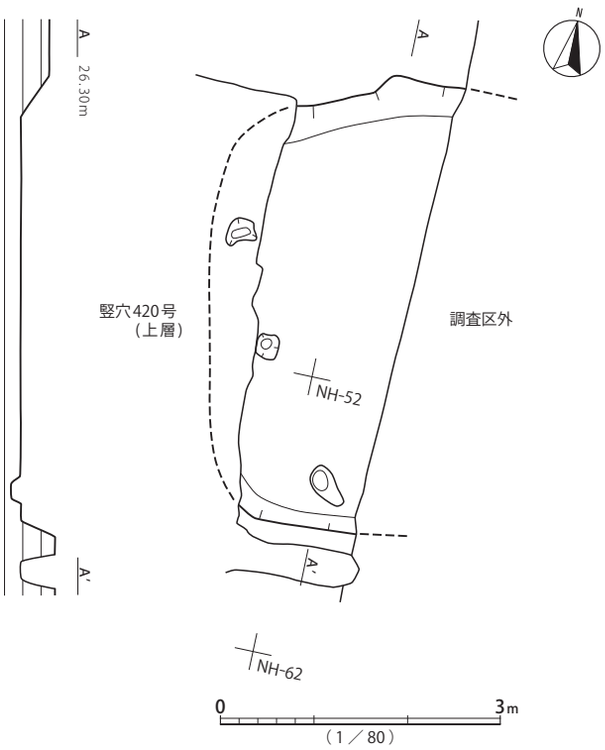
弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴0436号　（Fig.324・325、PL.39・81・82・96・123・135）

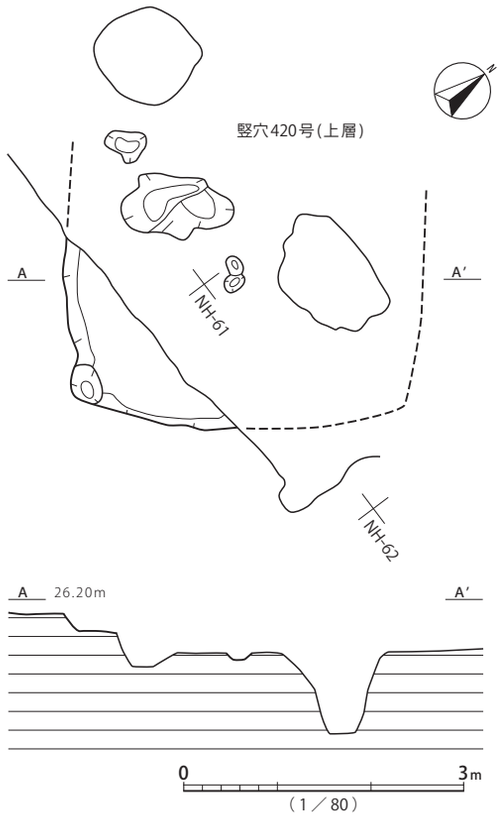
NG−77を中心に位置する。遺構中央で古墳0438号、南東隅で竪穴0434号・土坑435号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0434号よりも新しく、435・0438号よりも古い。

平面形態は横長の長方形を呈し、規模は6.71×7.70m、推定遺構下場面積は44.9㎡、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位はN−24°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されているが、掘り込みは明確でない。P1〜4は主柱穴で、竪穴の形態にあわせて、副軸方向の柱間を長くし

竪穴 0421号



竪穴 0430号



竪穴 0421号

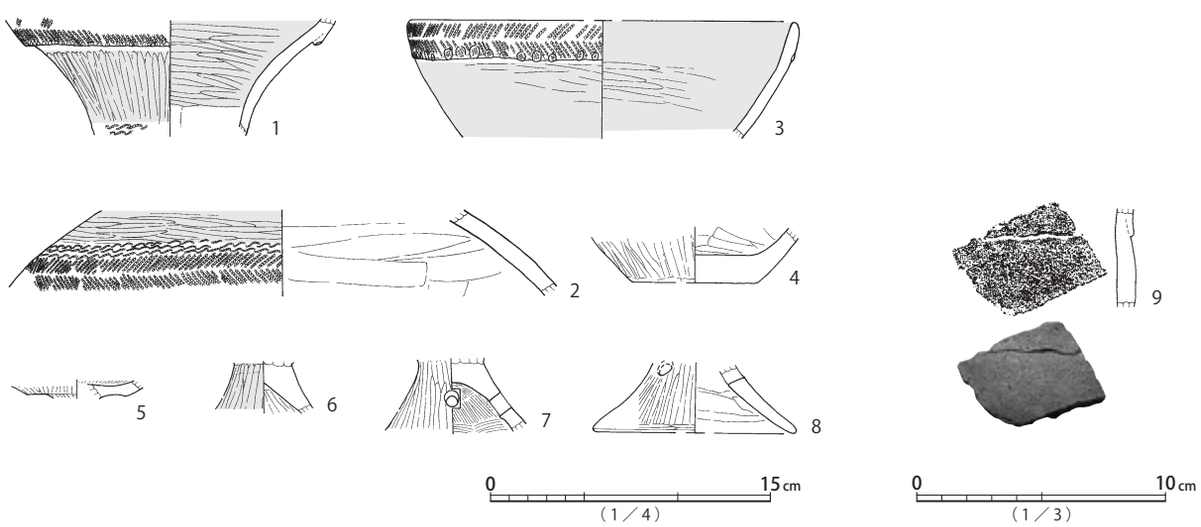
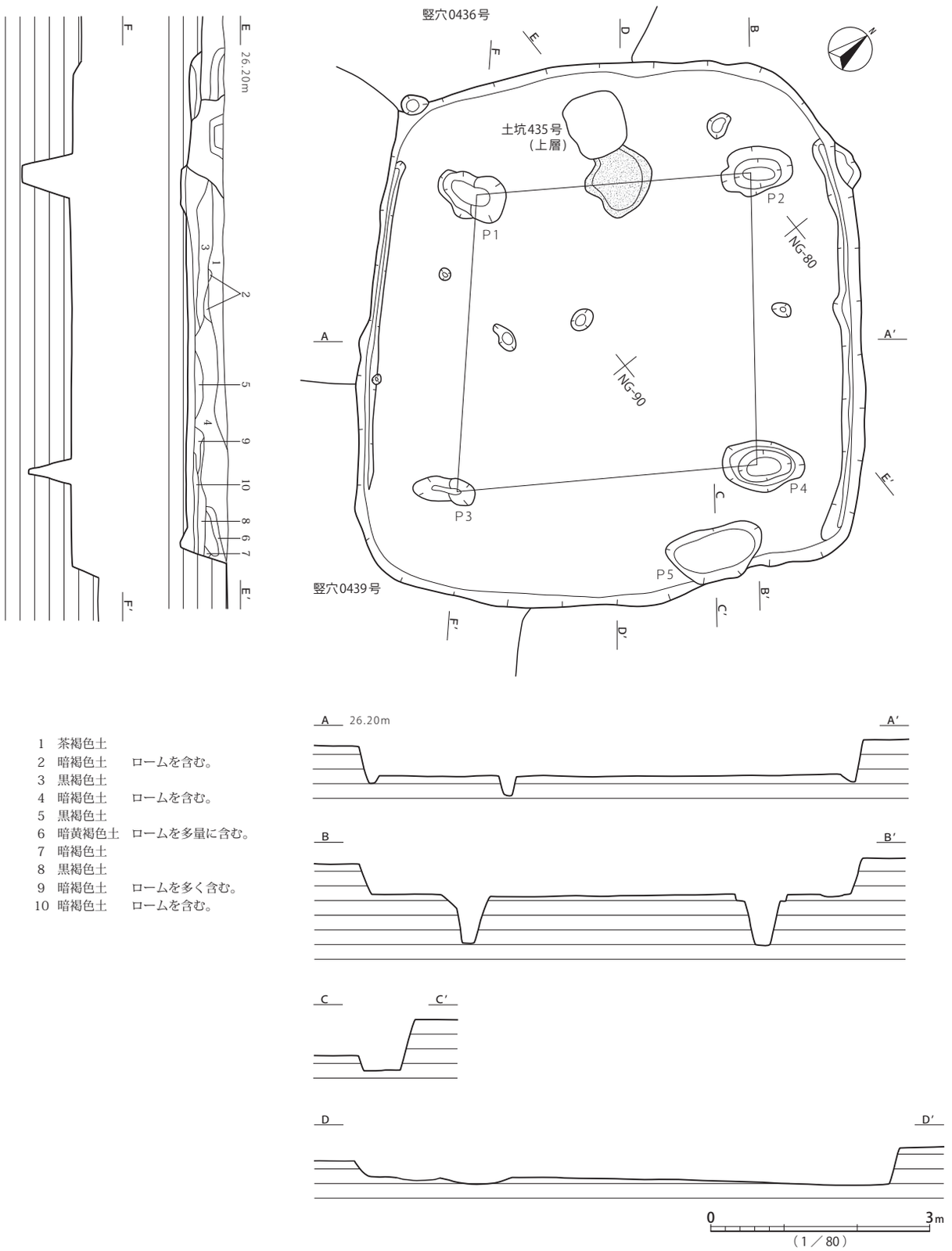


Fig.321　竪穴0421号 遺構遺物、竪穴0430号 遺構

て配置する。P5は出入口施設と考えられるが、深さ0.62mと主柱穴並みの掘り方をもつ。P6は貯蔵穴であろう。壁周溝が検出されており、ほぼ全周する。

実測可能遺物は、1～3・8・18・19は甕形土器、4・5は小型の壺形土器、6は大型の椀形土器、7・20は台付甕形土器、9・11は器種不明の底部、10はミニチュア土器、13～15・17は高杯形土器、16は器台形土器で、12は炉器台形土器と思われる。2・3・19はタタキ整形が施される。土器以外では、

竪穴 0434 号



1 茶褐色土
2 暗褐色土 ロームを含む。
3 黒褐色土
4 暗褐色土 ロームを含む。
5 黒褐色土
6 暗黄褐色土 ロームを多量に含む。
7 暗褐色土
8 黒褐色土
9 暗褐色土 ロームを多く含む。
10 暗褐色土 ロームを含む。

Fig.322 竪穴0434号(1) 遺構

竪穴 0434 号

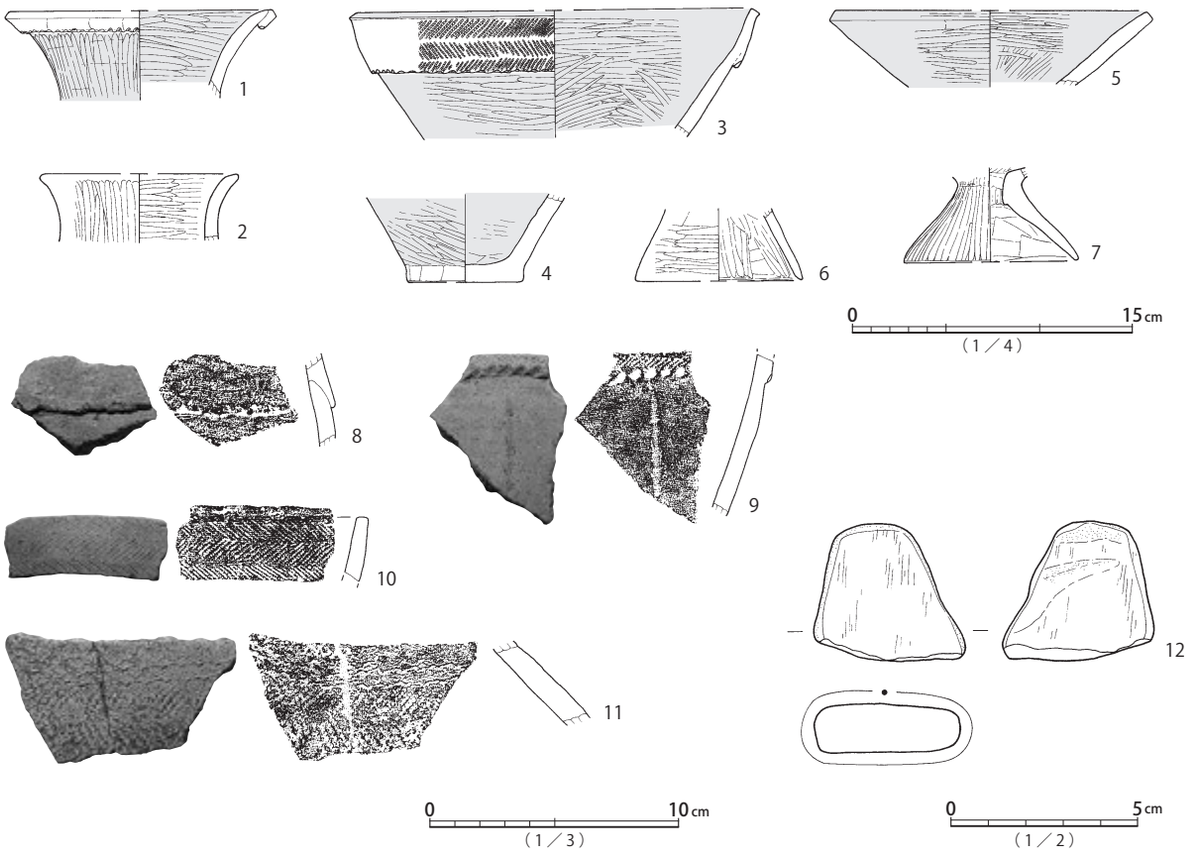


Fig.323　竪穴0434号(2) 遺物

21の磨石・敲石が出土している。

弥生時代終末期後半の所産と考えられるが、古墳時代前期前葉を含む可能性がある。

竪穴0439号　（Fig.326、PL.39・123）

NG−99を中心に位置する。北隅で竪穴0434号、西隅で土坑440号（上層）と重複し、南隅は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が440号よりも古い。0434号との関係は、本遺構のほうが新しいと思われるが、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態はやや横長の方形を呈し、規模は6.00×6.80m、推定遺構下場面積は33.6㎡、確認面からの深さは0.10mを測る。主軸方位はN−50°−Wである。炉跡は遺構中央やや北西寄りから検出されている。主柱穴は検出されていない。P1は貯蔵穴である。壁周溝が検出されており、全周するものと考えられる。炉跡北側からは焼土の堆積が確認されている。

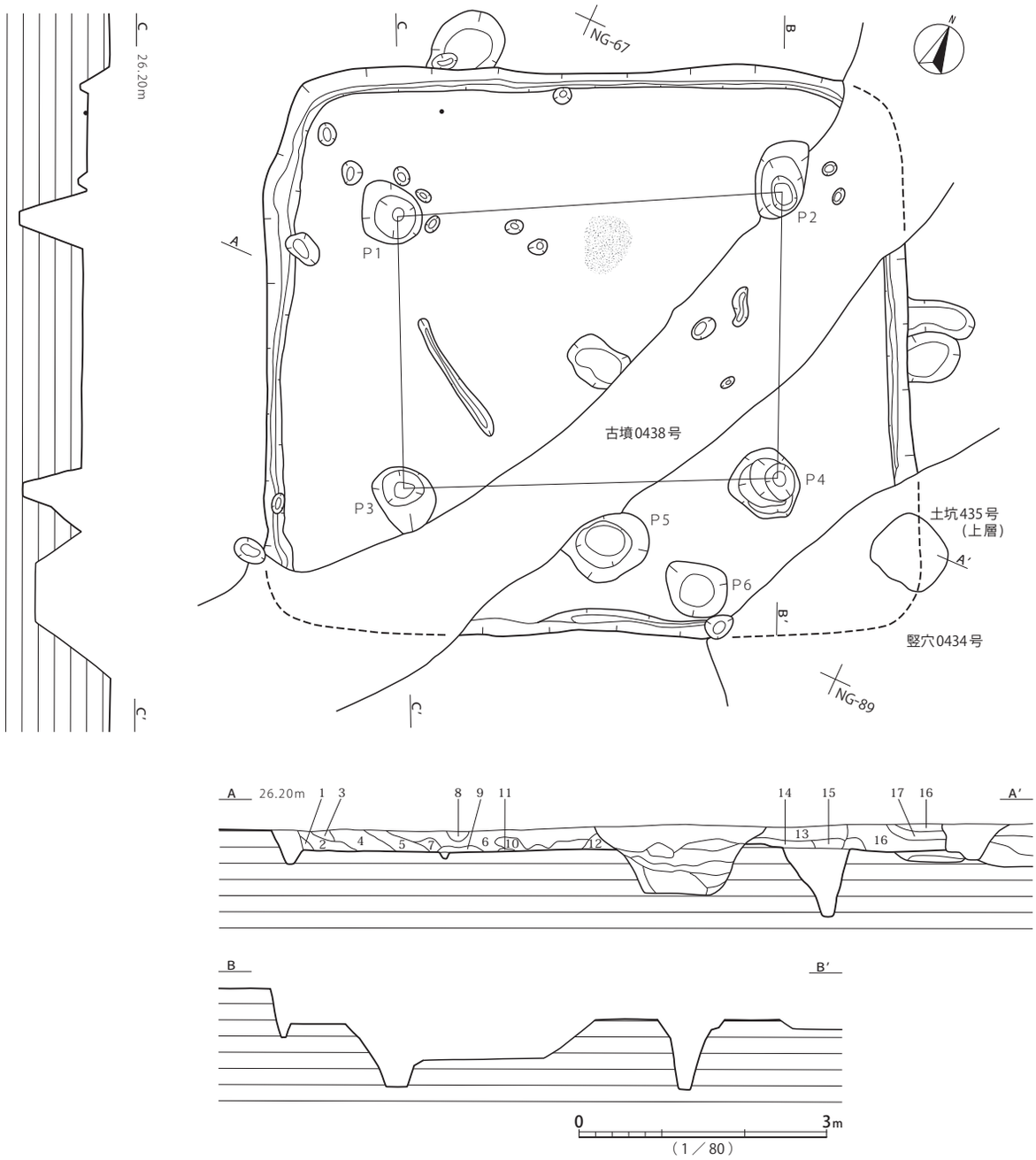
実測可能遺物は、3は椀形土器で、1は台付甕形土器、2は高杯形土器と思われる。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴0441号　（Fig.327〜329、PL.40・82・96・123・139）

NG−96を中心に位置する。北西側で古墳0438号、西側で竪穴0442号、北東側で竪穴1880号と

竪穴 0436 号



1 暗黄褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土 ロームを含む。
4 暗黄褐色土 ロームブロックを含む。
5 暗黄褐色土
6 褐色土
7 褐色土 ロームを含む。
8 暗褐色土
9 黒褐色土
10 暗褐色土
11 褐色土
12 黒褐色土
13 暗褐色土
14 暗褐色土 ロームを含む。
15 黒褐色土
16 暗黄褐色土
17 暗黄褐色土 暗褐色土を含む。

Fig.324 竪穴0436号(1) 遺構

竪穴 0436号

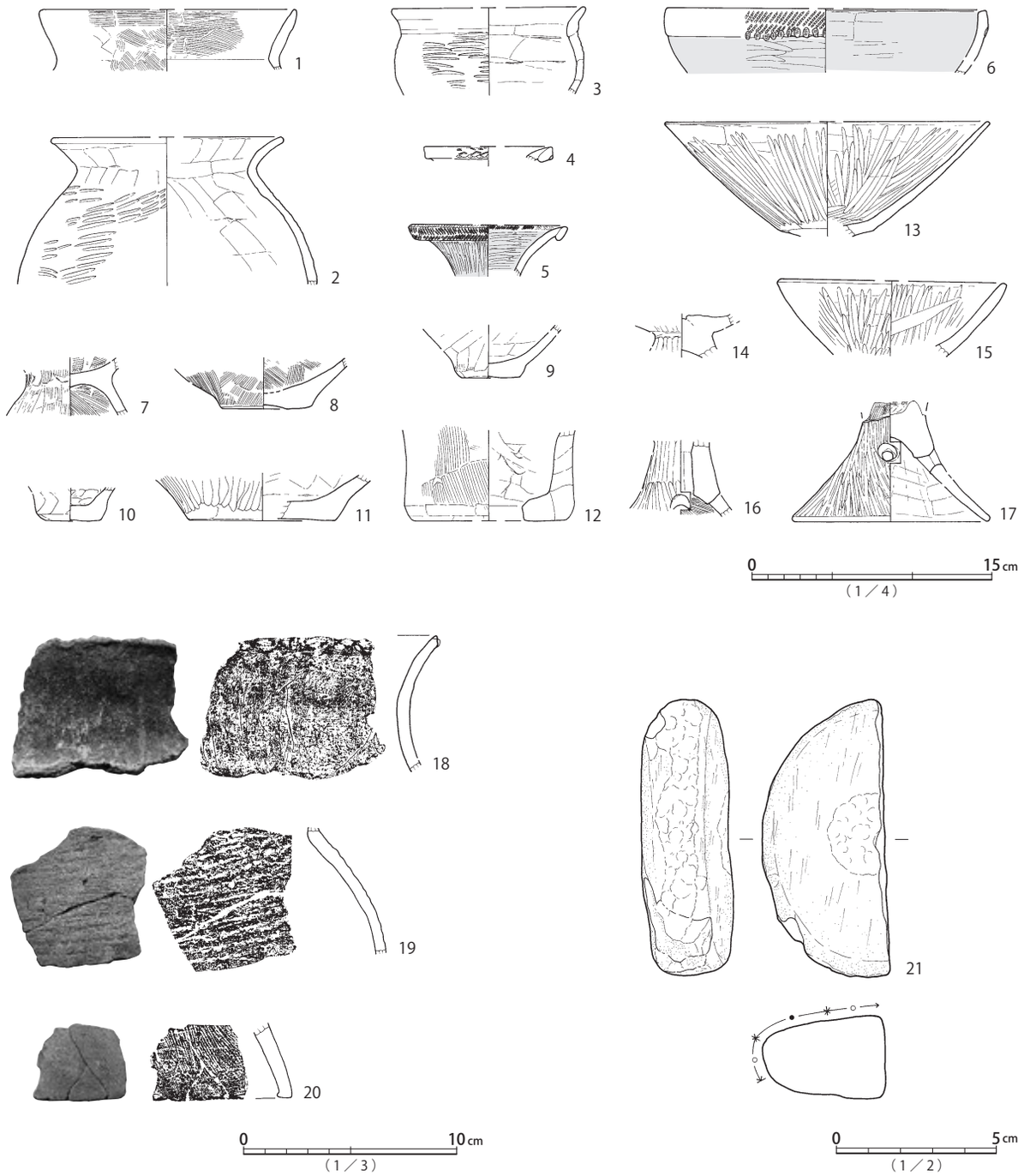


Fig.325　竪穴0436号(2) 遺物

重複する。新旧関係は、本遺構が0438・1880号よりも古い。0442号との関係は、遺構平面形態から本遺構のほうが古いと思われるが、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は6.15×5.88m、推定遺構下場面積は27.8㎡、確認面からの深さは0.76mを測る。主軸方位はN−58°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴で、P5は貯蔵穴であろう。壁周溝は北東辺壁の一部からのみ検出さ

竪穴 0439 号

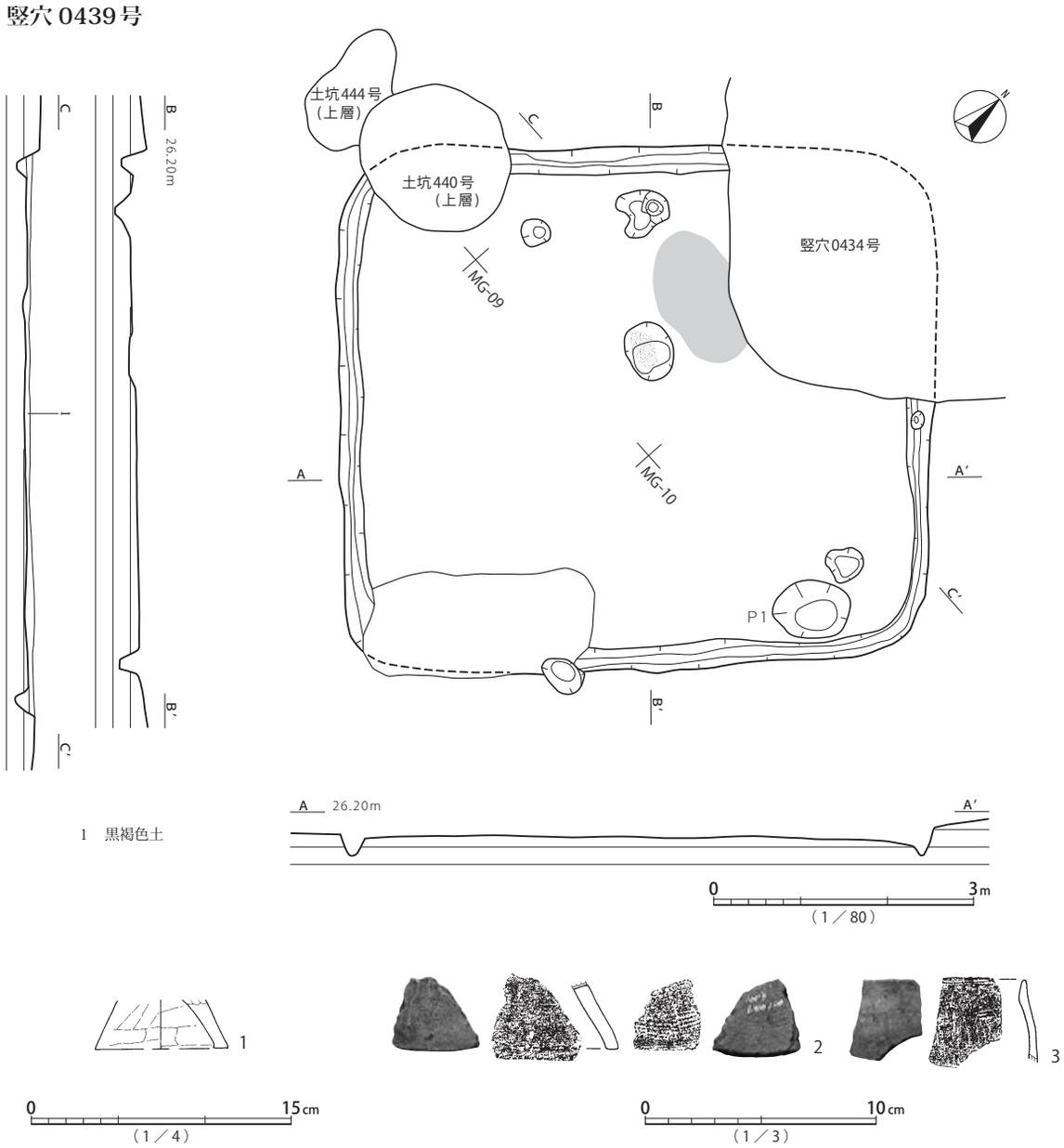


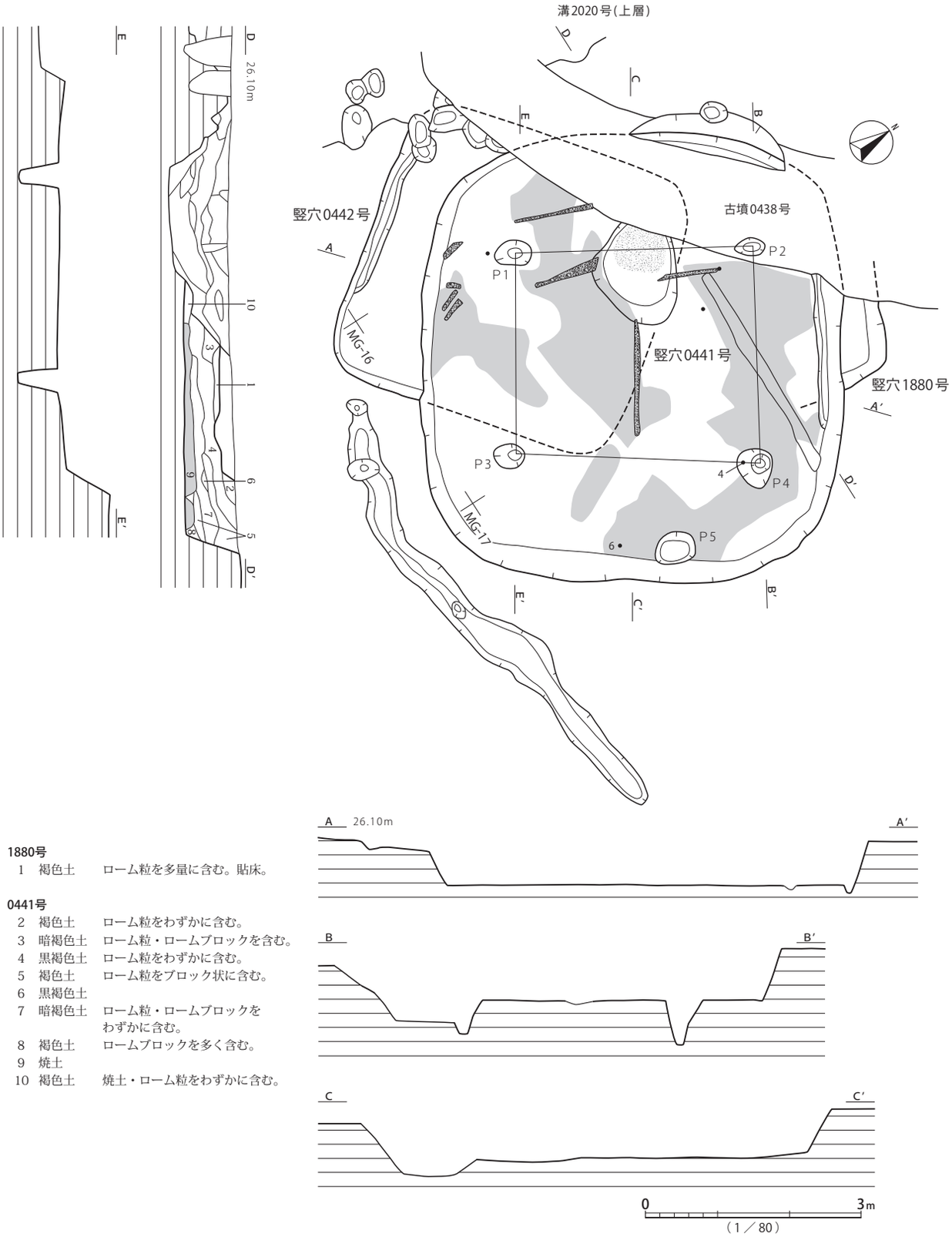
Fig.326　竪穴0439号 遺構遺物

れている。床面からは多量の焼土と炭化材の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

実測可能遺物は、1・2・10～13は甕形土器、3～5・7・14・15・17・18は壺形土器、6・16は広口壺形土器、8は直口縁壺形土器、9は高杯形土器である。このうち10～12は同一個体で、4・5も同一の可能性がある。1・2は頸部がくの字状に屈折し、口縁端部に明瞭な面をもつ。10～12は口縁端部と胴肩有段部に押捺を加える。13はタタキ整形が施される。4はP4の範囲、6は南東辺壁際から検出されるが、垂直位置は記録不備のため不明である。土器以外では19の石皿・凹石のほか、図示に至らない砥石と磨石・敲石が出土している。

弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴 0441・0442・1880号



1880号

1　褐色土　　ローム粒を多量に含む。貼床。

0441号

2　褐色土　　ローム粒をわずかに含む。
3　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。
4　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
5　褐色土　　ローム粒をブロック状に含む。
6　黒褐色土
7　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを
　　わずかに含む。
8　褐色土　　ロームブロックを多く含む。
9　焼土
10　褐色土　　焼土・ローム粒をわずかに含む。

Fig.327　竪穴0441号(1) 遺構、竪穴0442号 遺構、竪穴1880号 遺構

竪穴 0441 号

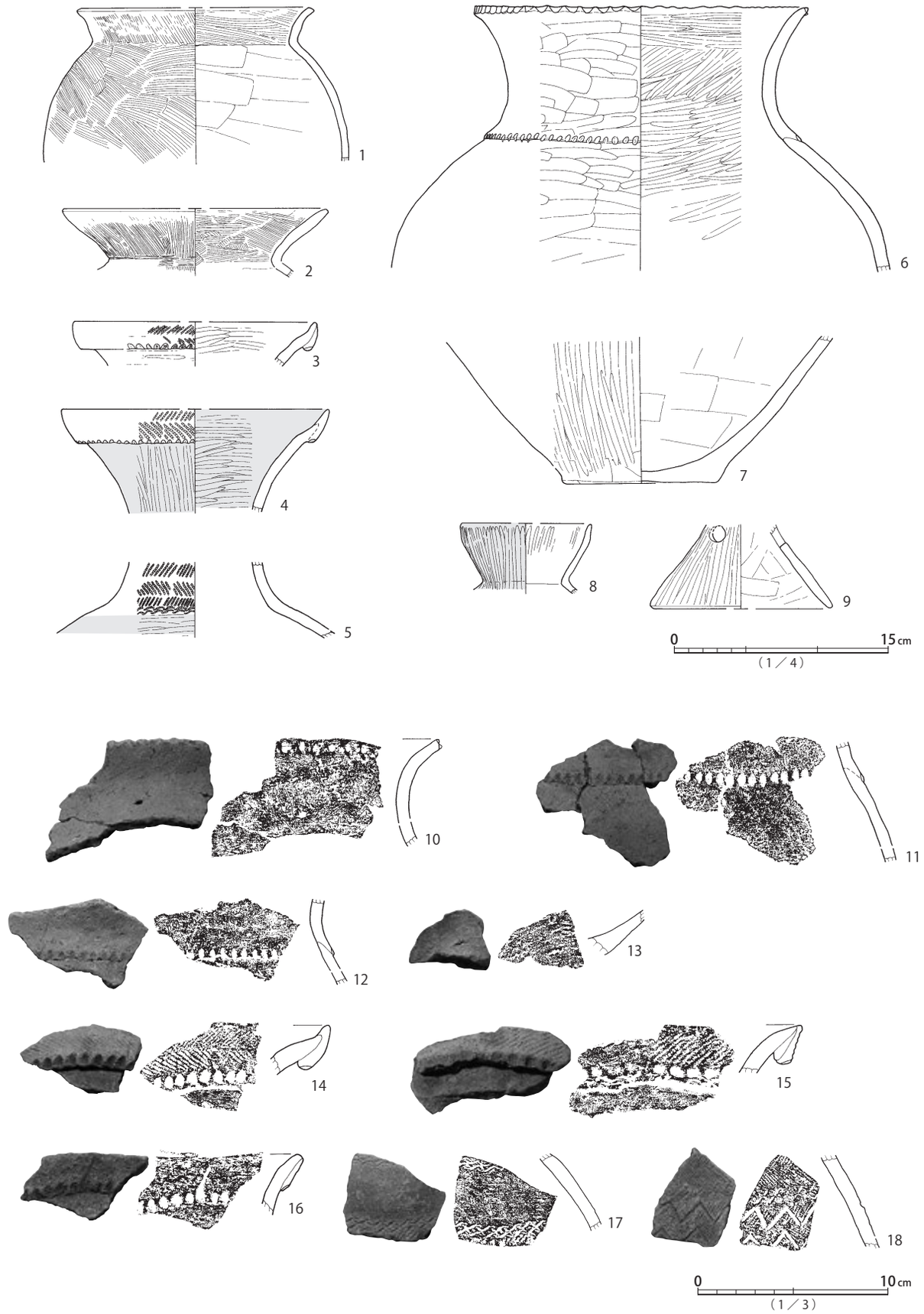


Fig.328　竪穴0441号(2) 遺物

竪穴 0441 号

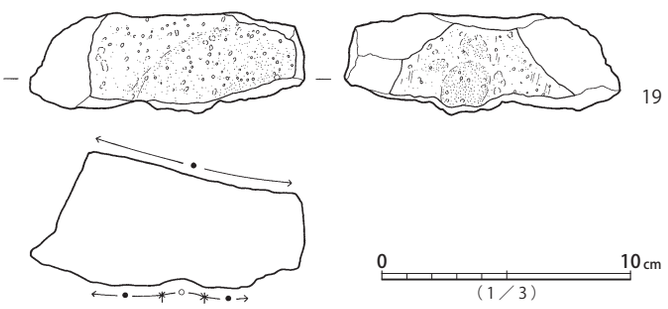


Fig.329　竪穴0441号(3) 遺物

竪穴0442号　（Fig.327、PL.40）

MG−06を中心に位置する。東側で竪穴0441号、北西側で古墳0438号と重複する。新旧関係は、本遺構が0441号よりも新しく、古墳0438号よりも古いと思われるが、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

平面形態は方形を呈すと思われるが。遺構南西側が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.09mを測る。南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−39°−Wとなる。壁周溝が巡るが、南隅では途切れている。遺構確認範囲からは炉跡や貯蔵穴、主柱穴などの屋内施設は検出されていないが、有無は明確でない。

出土遺物は検出されていないが、重複する竪穴0441号出土遺物のなかには本遺構のものが含まれる可能性がある。

古墳時代前期前葉の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴1880号　（Fig.327）

NG−97を中心に位置する。北西側で古墳0438号、南西側で竪穴0441号と重複する。新旧関係は、本遺構が0441号よりも新しく、0438号よりも古い。

平面形態は方形を呈すと思われるが、北東隅がわずかに検出されたのみで、詳細は不明である。重複する古墳0438号の周溝内側までは延びていないことから、小型の建物の可能性がある。確認面からの深さは0.17mを測る。炉跡や貯蔵穴、主柱穴などの屋内施設は検出されていないが、有無は明確でない。

出土遺物は検出されていないが、重複する竪穴0441号出土遺物のなかには本遺構の遺物が含まれる可能性がある。

竪穴0441号を壊して構築されることから、弥生時代終末期前半以降の所産で、古墳時代前期前葉と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0443号　（Fig.330〜332、PL.40・82・123・124・135）

MH−01を中心に位置する。南東側で竪穴1866号と重複し、東側は調査区外に延びる。断面図の一部が途切れることから新旧関係は明確でないが、わずかに掘り込みが深い竪穴1866号範囲からは、

本遺構に分布する焼土と炭化材の堆積が認められないことから、本遺構が1866号よりも古いと考えられる。

平面形態は長楕円形を呈し、推定規模は5.69×4.82m、推定遺構下場面積は20.2㎡、確認面からの深さは0.54mを測る。主軸方位はN−25°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜3は主柱穴である。床面からは焼土と炭化材の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

実測可能遺物は1・2・5・10〜12は甕形土器、3・4・6・13〜18は壺形土器、7は椀形ないし高杯形土器、8・9は高杯形土器、19は椀形土器である。土器以外では20の敲石と21の磨石が出土している。5は炉跡脇、20・21は南西辺壁中央付近から検出され、いずれも床面上からの出土である。4・6は竪穴1866号の範囲から検出されている。

遺物はすべて本遺構からの出土として取り上げられているが、重複する竪穴1866号の遺物を含む可能性がある。

弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴1866号　（Fig.330、PL.40）

MH−12を中心に位置する。北西側で竪穴0443号と重複し、東側は調査区外に延びる。断面図の一部が途切れることから新旧関係は明確でないが、本遺構が0443号よりも新しいと考えられる。

平面形態は小型の隅丸方形を呈すと考えられるが、遺構西側が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は2.92×3.12m、推定遺構下場面積は6.4㎡、確認面からの深さは0.56mを測る。南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−53°−Wとなる。遺構確認範囲からは、炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

弥生時代終末期前半以降の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

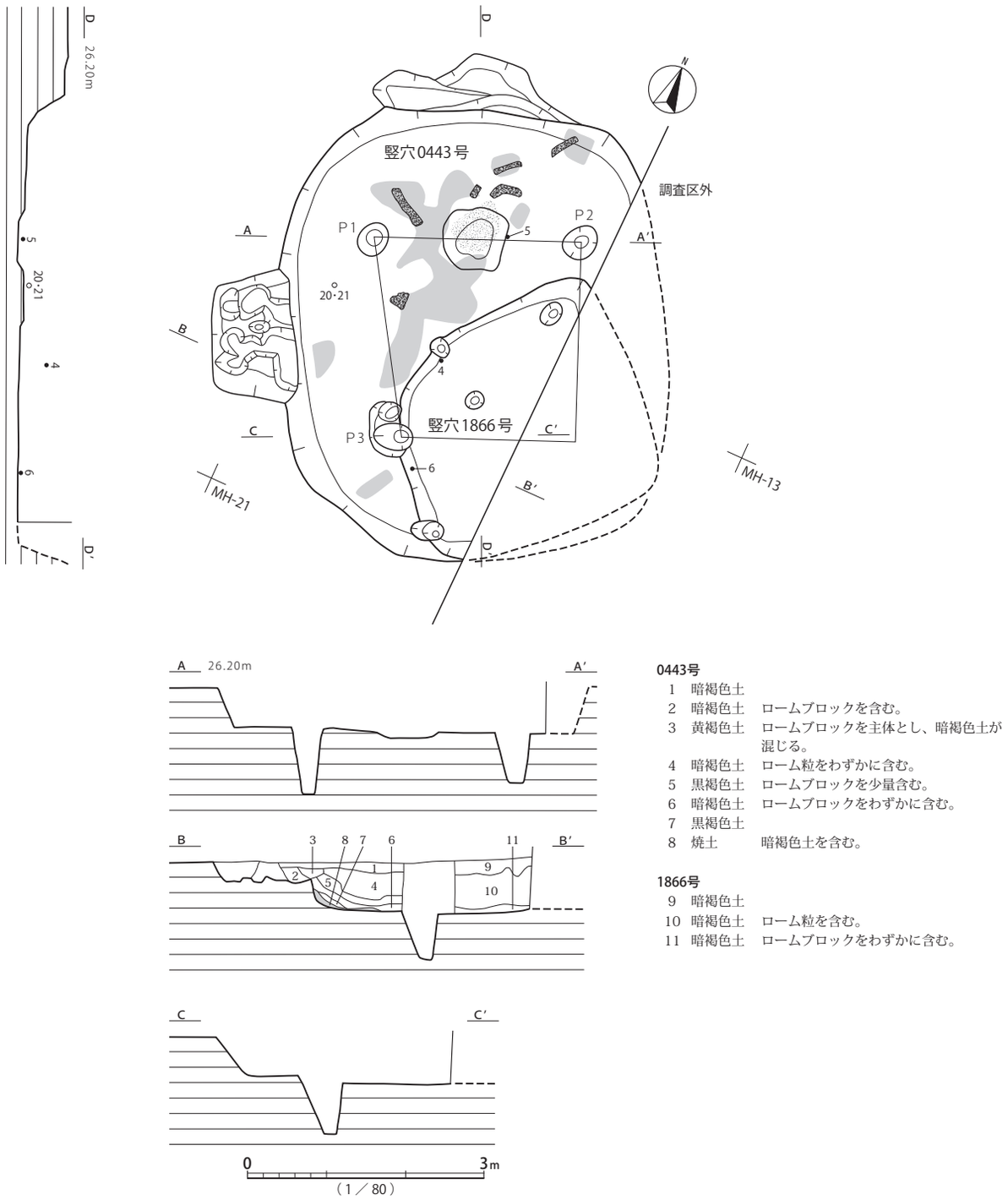
竪穴0447号　（Fig.333・334、PL.40・82・96・124・140）

NG−71を中心に位置する。北西側で竪穴446号（上層）と重複し、西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が446号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は南北軸長5.04m、確認面からの深さは0.35mを測る。炉跡は遺構中央西寄りから検出されている。P1は焼け面を伴う記録がなく、0.23mとやや深い掘り込みをもつことから、炉跡ではない。炉跡の位置から主軸方位はN−89°−Wと思われるが、真北を向く可能性もあり、明確でない。主柱穴や貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜5・19は甕形土器、6〜9・11・20・22は壺形土器、10・12・21は広口壺形土器、13・23は椀形土器、14は片口形土器、15は器種不明の小型土器底部、16〜18は高杯形土器である。7は肥厚する口縁端部に平坦面をもち、複合部下端に押捺を加える。東海東部大廓式の影響を受けたものであろう。19はタタキ整形が施され、5はヘラナデ前にタタキ整形が施された可能性がある。土器以外では24の両面が研磨される軽石が出土している。2・8は遺構南側から検出され、覆土中層からの出土。11・13はP1脇から検出されているが、垂直位置は床面よりも低くなってしまっており、明確でない。

竪穴 0443・1866号



0443号

1 暗褐色土
2 暗褐色土　ロームブロックを含む。
3 黄褐色土　ロームブロックを主体とし、暗褐色土が混じる。
4 暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
5 黒褐色土　ロームブロックを少量含む。
6 暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む。
7 黒褐色土
8 焼土　暗褐色土を含む。

1866号

9 暗褐色土
10 暗褐色土　ローム粒を含む。
11 暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む。

Fig.330　竪穴0443号(1) 遺構、竪穴1866号 遺構

弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

竪穴0448号　（Fig.335、PL.40・82・124・135）

MG−03を中心に位置する。西側で土坑449号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が449号

竪穴 0443 号

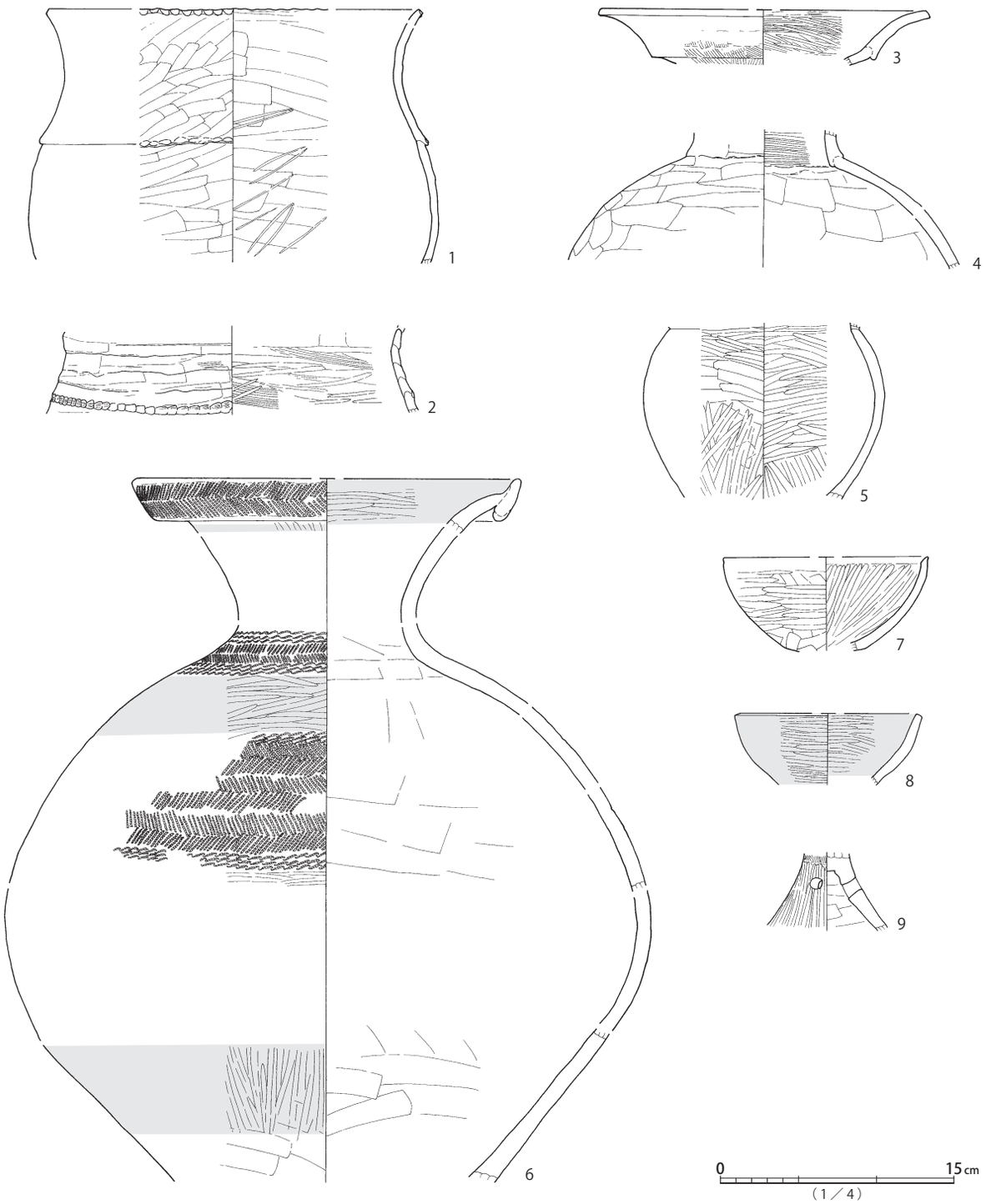
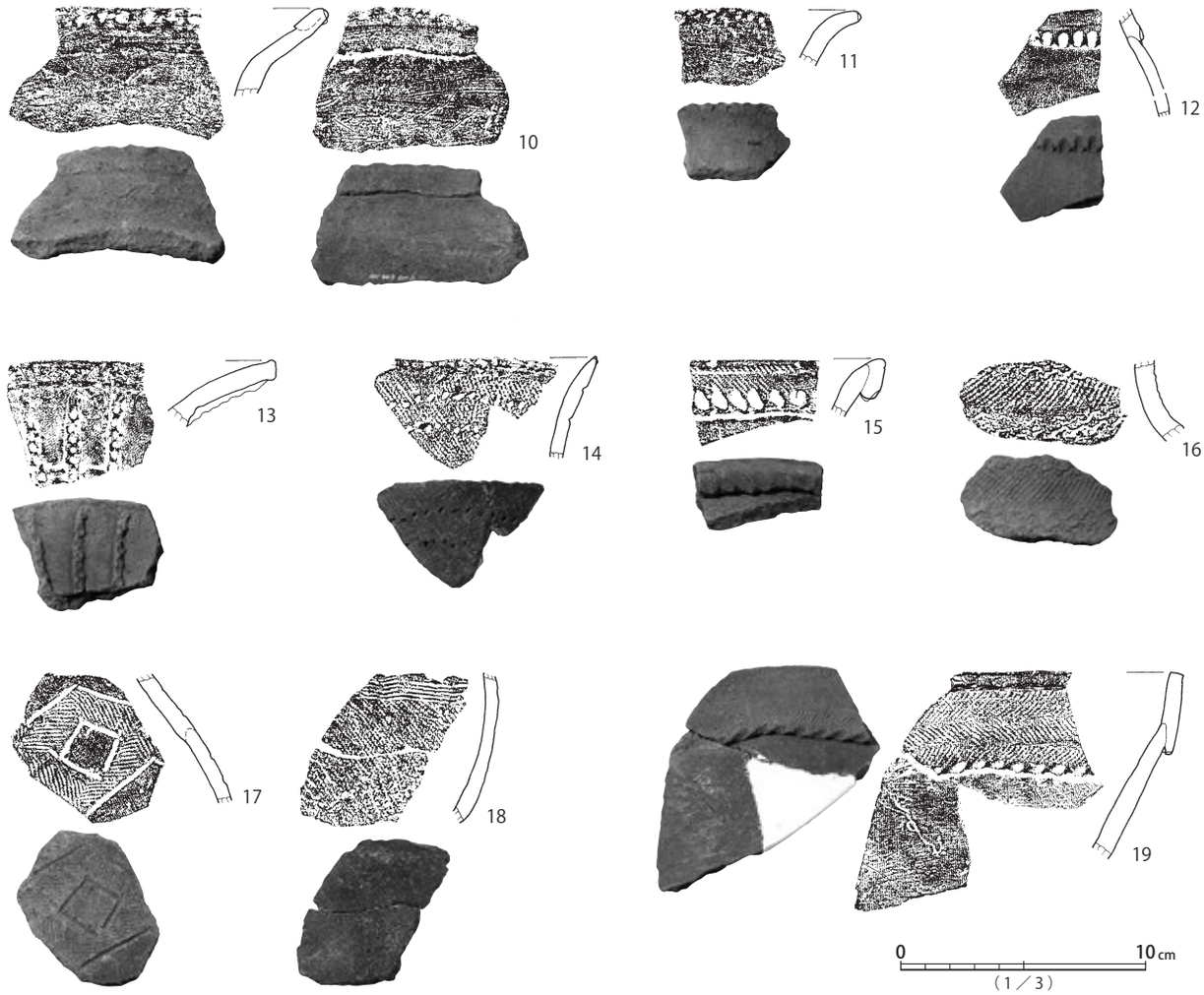


Fig.331　竪穴0443号(2) 遺物

よりも古い。

平面形態は小型の隅丸方形を呈し、規模は3.50×3.66m、遺構下場面積は9.3㎡、確認面からの深さは0.20mを測る。主軸方位はN−65°−Wである。炉跡は遺構中央わずかに西寄りから検出されている。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴である。壁周溝が巡るが、北東隅では途切れている。

竪穴 0443号



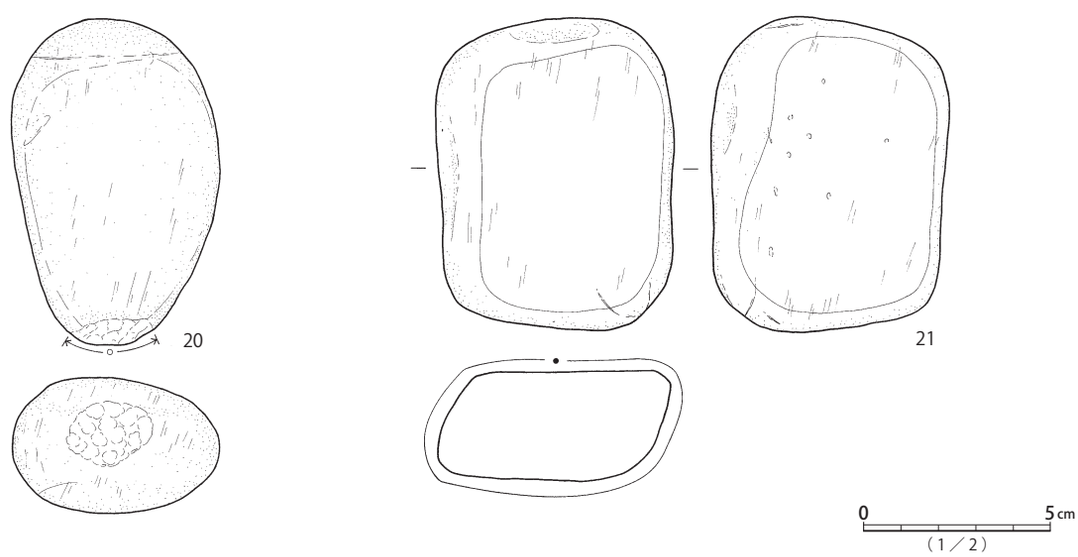


Fig.332　竪穴0443号(3) 遺物

竪穴 0447 号

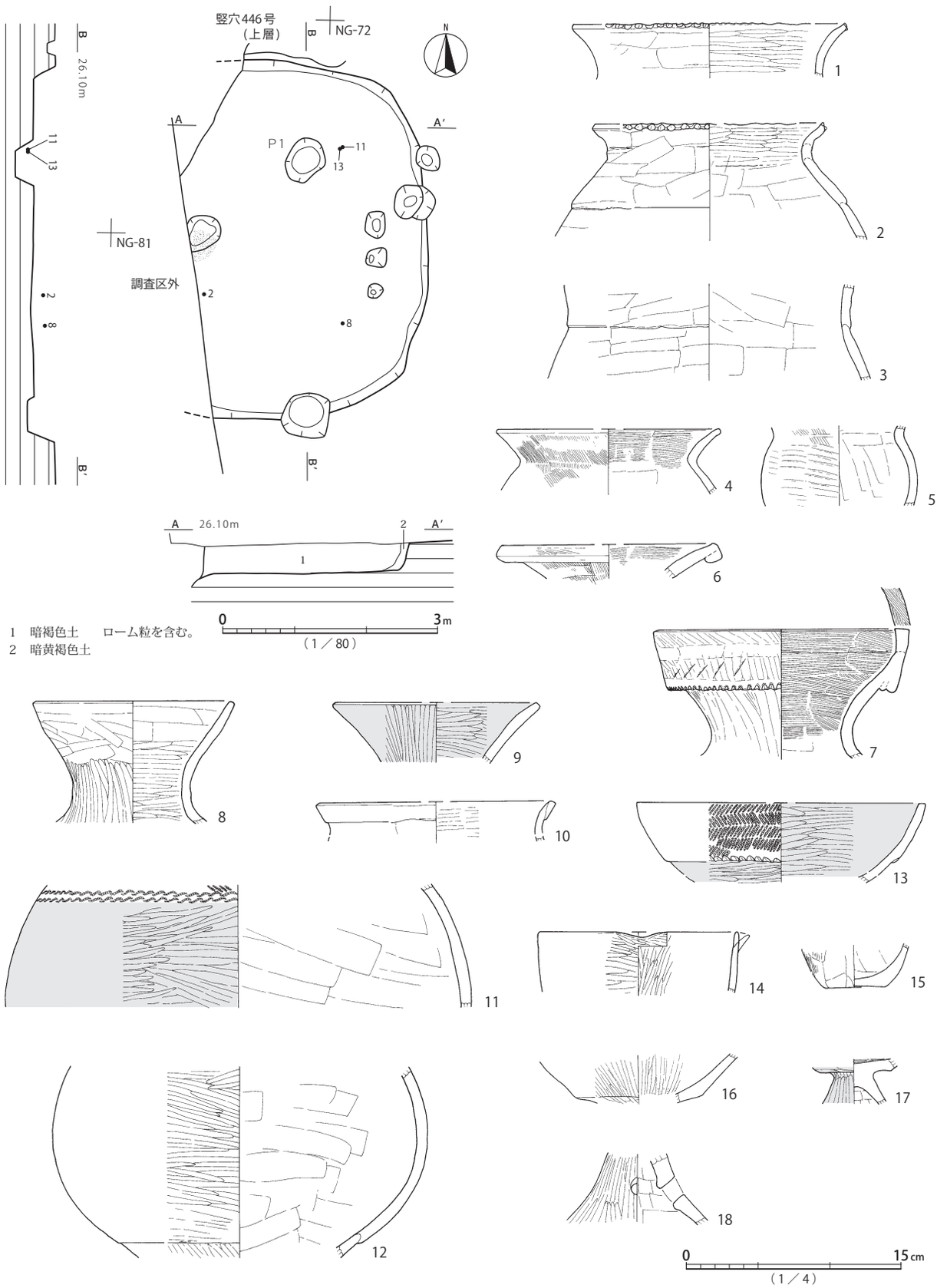


Fig.333　竪穴0447号(1) 遺構遺物

竪穴 0447 号

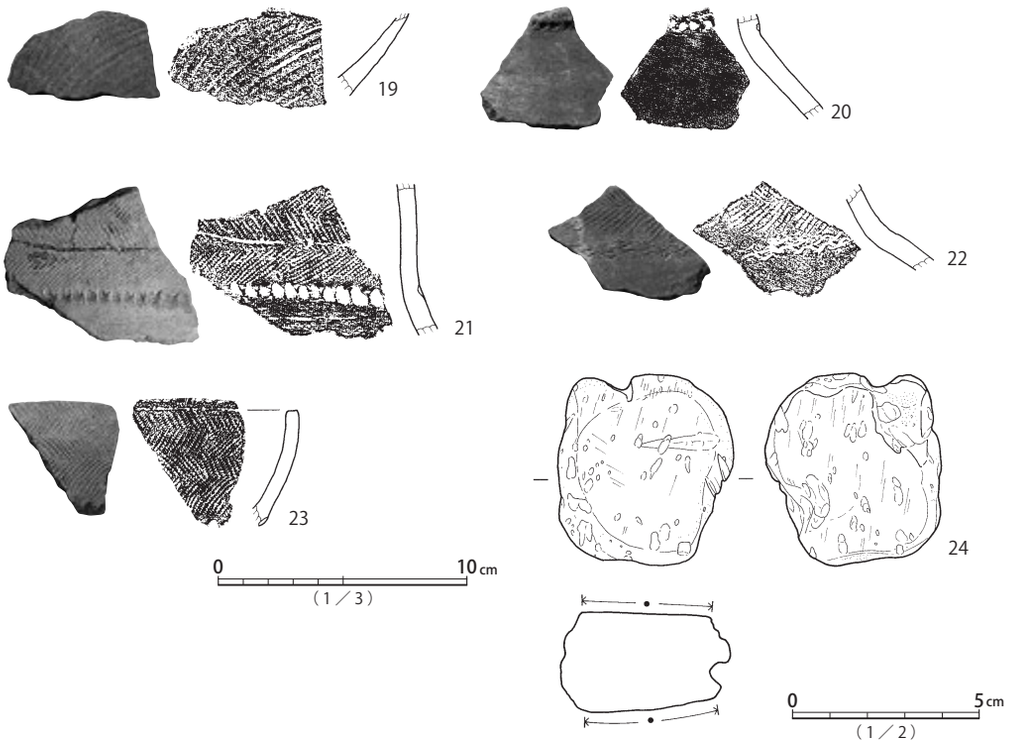


Fig.334　竪穴0447号(2) 遺物

実測可能遺物は、1は台付甕形土器、2は椀形土器、3・4は椀形ないし高杯形土器、5～7は甕形土器、8は壺形土器である。5は口頸部に多段の粘土紐積み上げ痕を残し、口縁端部に交互押捺を施す。6・7はタタキ整形を施す。土器以外では、9の敲石が出土している。1はP2脇から検出され、床面上からの出土である。

弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

竪穴0455号　（Fig.336、PL.40・124）

MG−28を中心に位置する。南隅で竪穴0458号、南西側で土坑（上層・遺構番号なし）と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は長方形を呈し、規模は4.06×4.65m、遺構下場面積は15.3㎡、確認面からの深さは0.04mを測る。北東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−34°−Wとなる。壁周溝が検出され、ほぼ全周する。炉跡や貯蔵穴は検出されていない。各隅付近から検出されている柱穴状の掘り込みは、本遺構に伴う可能性があるが、明確でない。

実測可能遺物は1のタタキ整形が施される甕形土器のみである。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴0456号　（Fig.337、PL.82・124）

MG−40を中心に位置する。東辺壁で竪穴457号（上層）、西辺壁で竪穴0458号と重複する。新旧

竪穴 0448号

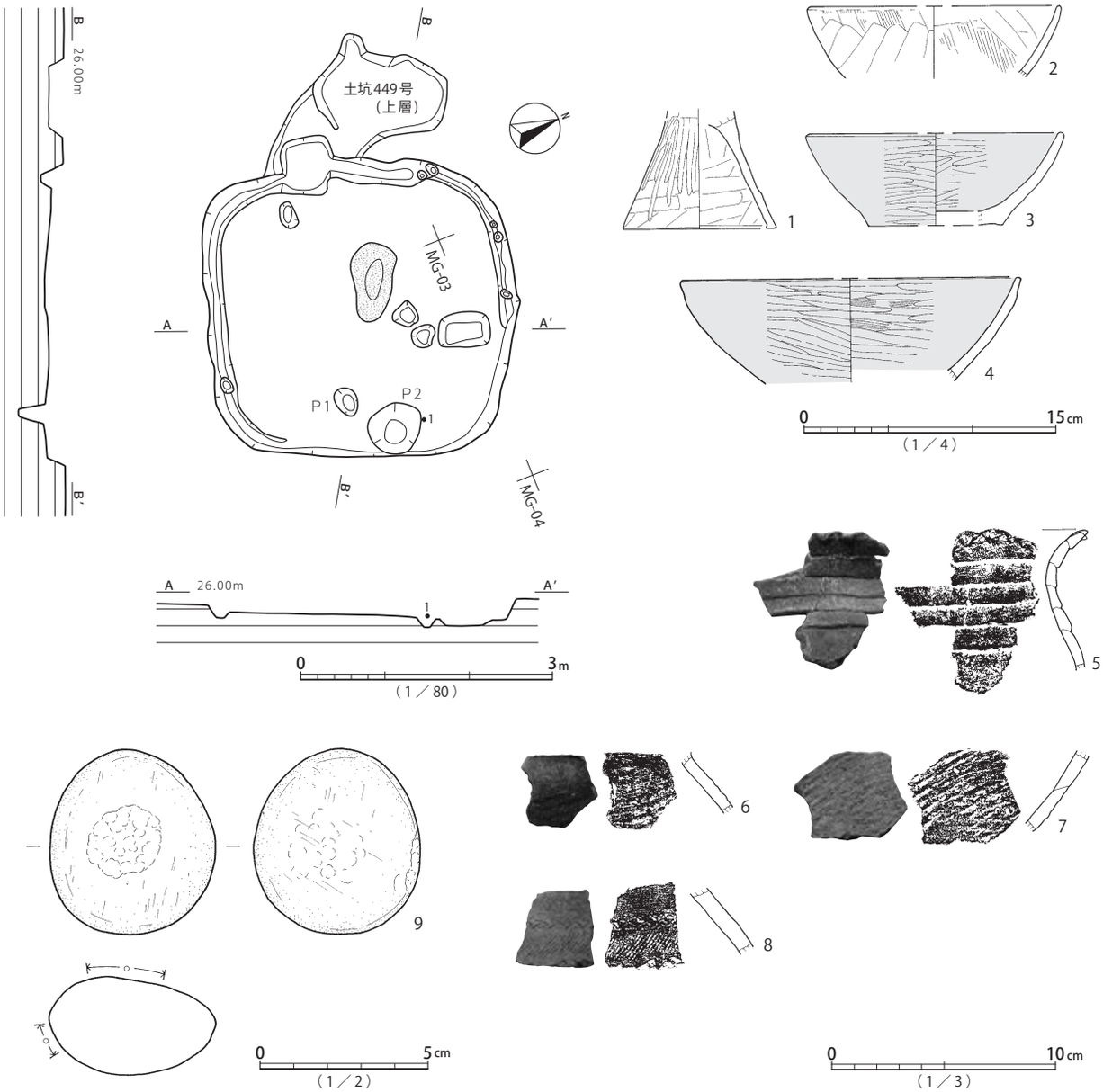


Fig.335　竪穴0448号 遺構遺物

関係は、本遺構が457号よりも古い。0458号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は、北側が隅丸方形、南側が楕円形を呈す。炉跡は中軸線上北寄りと中央の２ヶ所から検出されており、東西辺壁の途中で不自然に広がることから、２棟が重複している可能性があるが、断面図など記録上の根拠はない。１棟の建物と捉えた場合、規模は4.78×4.22m、遺構下場面積は16.5㎡、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位はN−6°−Wとなる。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴と思われる。主柱穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2・8〜11は甕形土器、3・12は台付甕形土器、4・6は器種不明の底部、5は椀形土器、7・16は高杯形土器、13は広口壺形土器、14・15は壺形土器である。1は頸部がくの字状

竪穴0455号

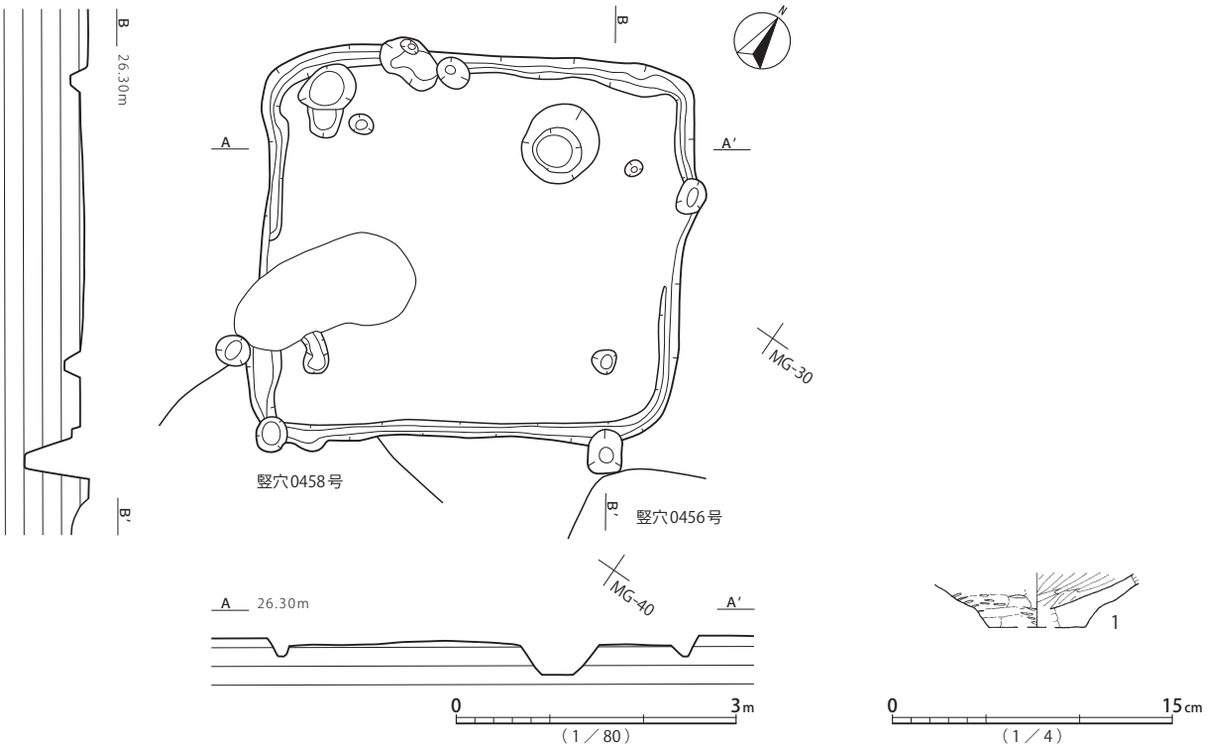


Fig.336　竪穴0455号 遺構遺物

に屈折し、10・11はタタキ整形が施される。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0458号　（Fig.338、PL.40・82）

MG−39を中心に位置する。北西隅で竪穴0455号、北東隅で竪穴0456号、南西側で竪穴0459号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈すと考えられるが、他遺構との重複が激しく、掘り込みも浅いことから、詳細は不明である。推定規模は4.73×4.80m、確認面からの深さは0.03mを測る。主軸方位はN−3°−Eである。炉跡は中軸線上北寄りから検出され、主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2は口唇部外面からの押捺を施す甕形土器である。

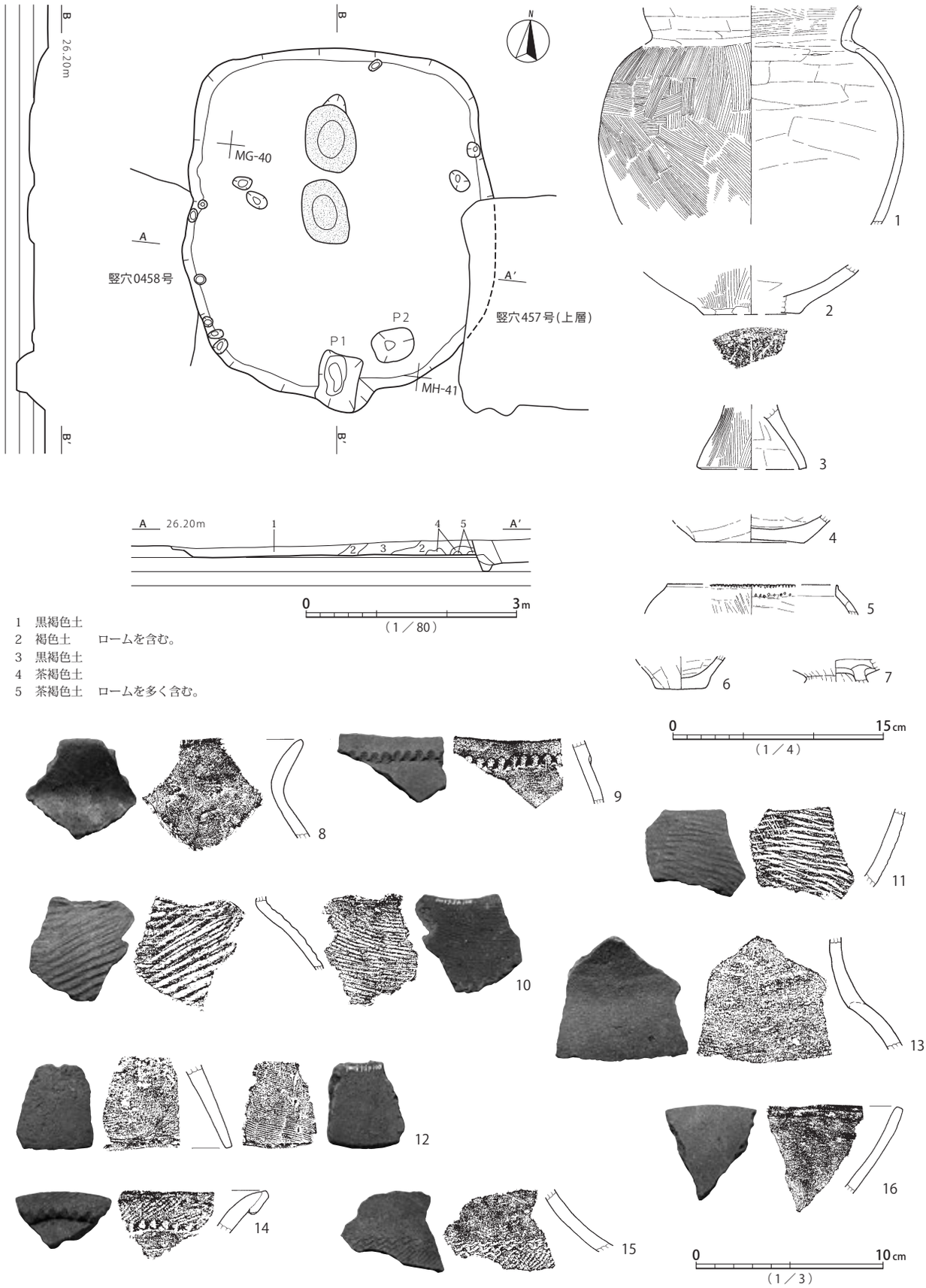
弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0459号　（Fig.338・339、PL.40・124・135）

MG−48を中心に位置する。北東側で竪穴0458号、北西辺壁で土坑460号（上層）、南西辺壁で竪穴0463号と重複するが、いずれも床面までは達していない。新旧関係は、本遺構が460号よりも古い。他遺構との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、規模は5.43×4.82m、遺構下場面積は20.6㎡、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位はN−53°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出

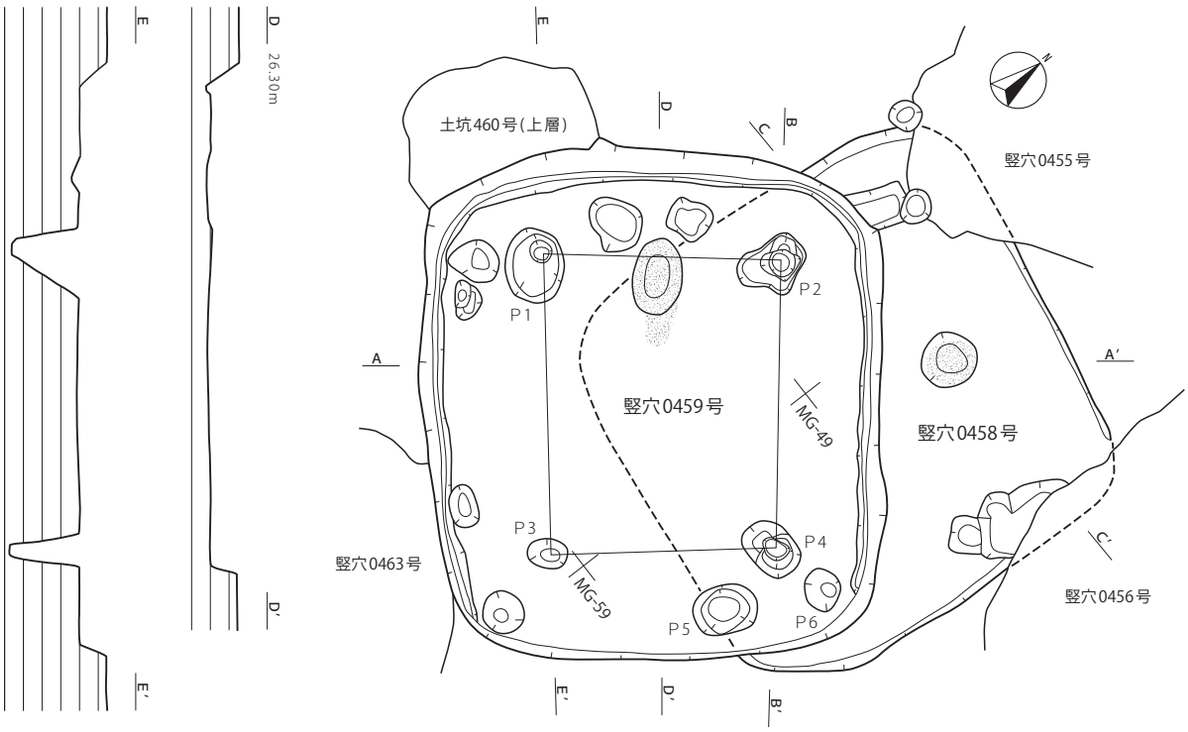
竪穴 0456 号



1　黒褐色土
2　褐色土　　ロームを含む。
3　黒褐色土
4　茶褐色土
5　茶褐色土　ロームを多く含む。

Fig.337　竪穴0456号 遺構遺物

竪穴 0458・0459 号



0459号

1　黒褐色土　ロームを含む。
2　褐色土
3　黒褐色土
4　暗褐色土
5　黄褐色土　ロームを主体とする。

竪穴 0458 号



Fig.338　竪穴0458号 遺構遺物、竪穴0459号(1) 遺構

竪穴 0459 号

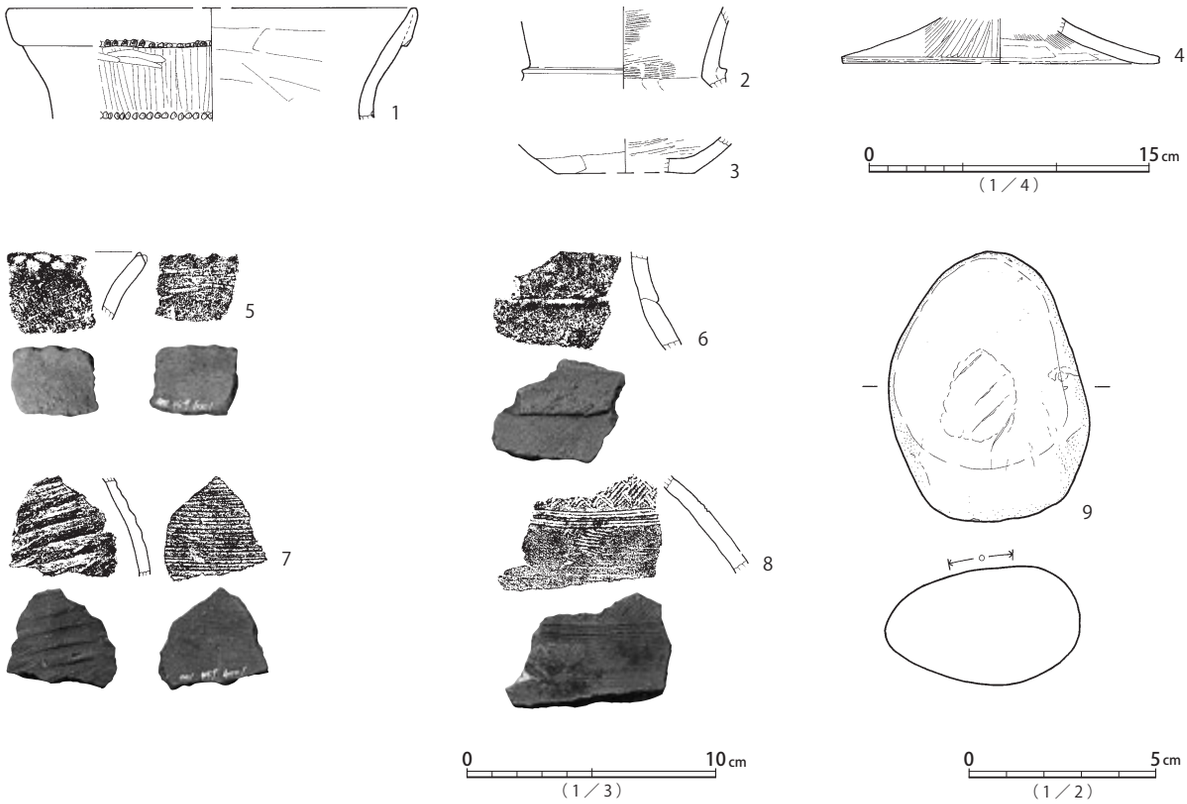


Fig.339　竪穴0459号(2) 遺物

されている。P1～4は主柱穴でP3以外は掘り方上部が広がり、柱の抜き取りが行われた可能性がある。P5・6はいずれも貯蔵穴であろう。北西・南西辺壁際からは柱穴状の掘り込みが検出されているが、写真を見る限りいずれも不明瞭で、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝が巡るが、出入口側となる南東辺壁際では途切れている。

実測可能遺物は、1は広口壺形土器、2・8は壺形土器、3は器種不明の底部、4は高杯形土器、5～7は甕形土器である。1は口頸部高が低く、複合部下端に布目痕を残す押捺、頸部に刺突文を施す。7はタタキ整形、8は帯縄文に鋸歯文を加え、櫛描横線文で区画する。土器以外では、9の敲石が出土している。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0461号　（Fig.340、PL.40・82・124）

MH−51を中心に位置する。南隅で竪穴0462号と重複し、東隅は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構のほうが新しいと思われるが、0462号が土層断面図中の重複部分まで延びてこない可能性があることから、明確でない。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は4.10×3.90m、推定遺構下場面積は13.2㎡、確認面からの深さは0.06mを測る。主軸方位はN−40°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されている。主柱穴は検出されず、東隅寄りから検出された掘り込みも、本遺構に伴うものかは明確でない。

竪穴 0461 号

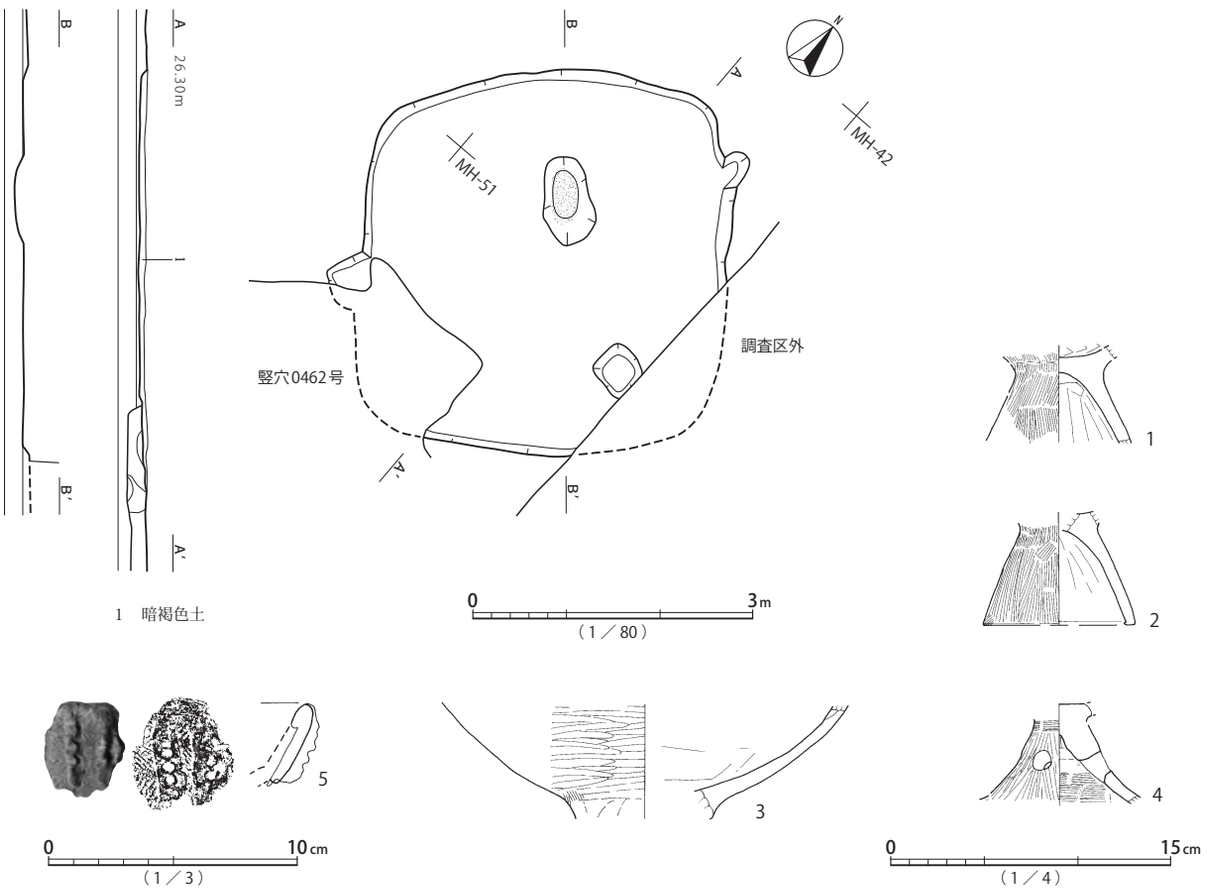


Fig.340　竪穴0461号 遺構遺物

実測可能遺物は、1・2は台付甕形土器、3・5は壺形土器、4は高杯形土器である。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

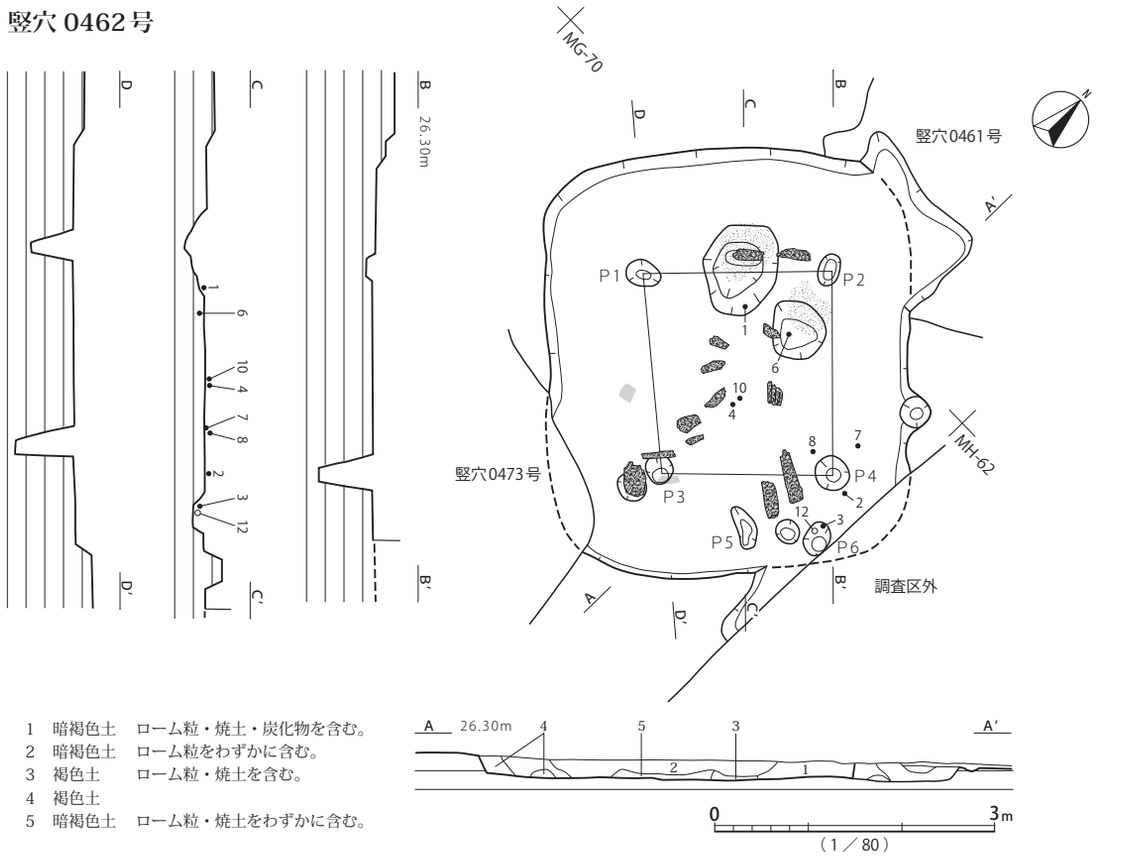
竪穴0462号　（Fig.341・342、PL.41・82・83・96・124・140）

MH−61を中心に位置する。北隅で竪穴0461号、南隅で竪穴0473号と重複し、東隅は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が0461号よりも古いと思われるが、0461号が土層断面図中の重複部分まで延びてこない可能性があることから、明確でない。0473号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが古いと考えられる。

平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は4.53×3.82m、推定遺構下場面積は14.8㎡、確認面からの深さは0.19mを測る。主軸方位はN−46°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りのP1・2間とP2南側の2ヶ所から検出されている。P1〜4は主柱穴であるが、P2は掘り込みが著しく浅い。P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。床面からは焼土と炭化材の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

実測可能遺物は、1〜4は甕形土器、5は器種不明の底部、6・7は壺形土器、8は椀形土器、9は高杯形土器、10は器台形土器である。11は有段脚の器台形土器であろうか。1は口頸部多段で、口唇

竪穴 0462 号



1　暗褐色土　ローム粒・焼土・炭化物を含む。
2　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
3　褐色土　ローム粒・焼土を含む。
4　褐色土
5　暗褐色土　ローム粒・焼土をわずかに含む。

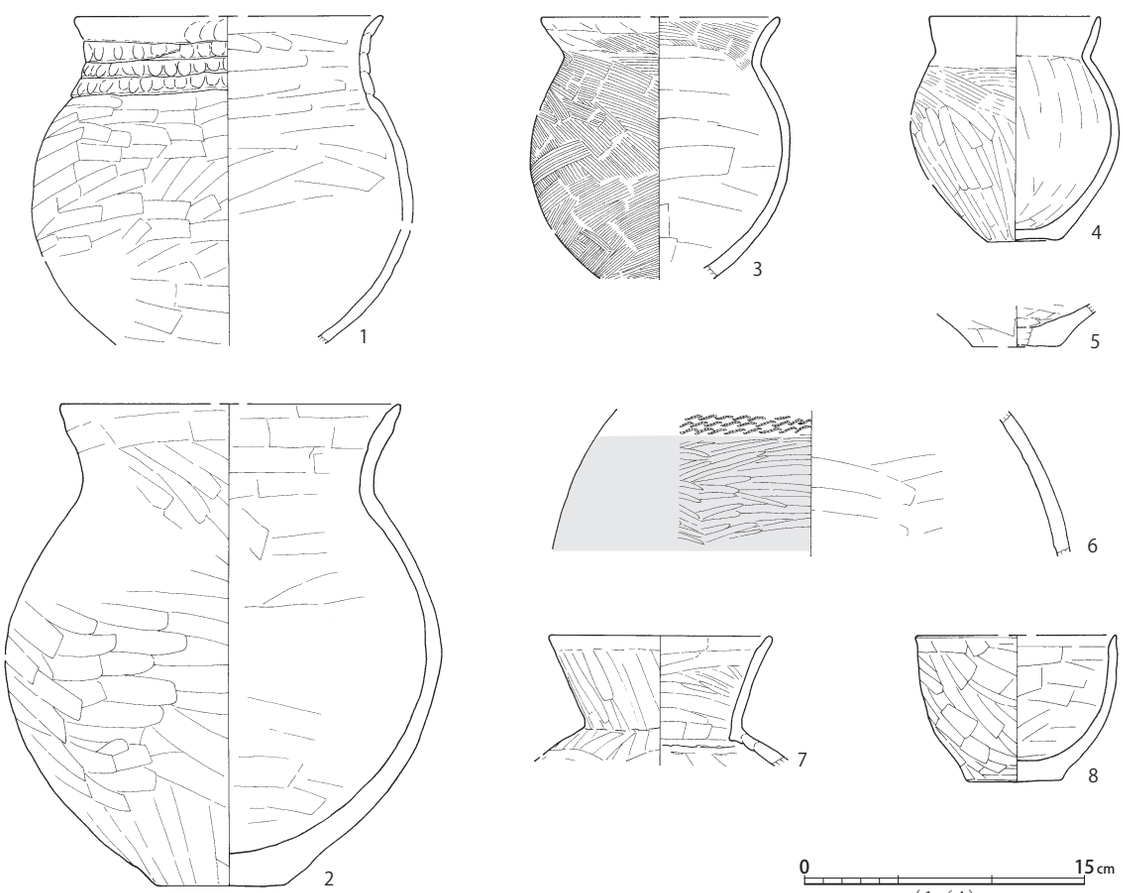


Fig.341　竪穴0462号(1) 遺構遺物

竪穴0462号

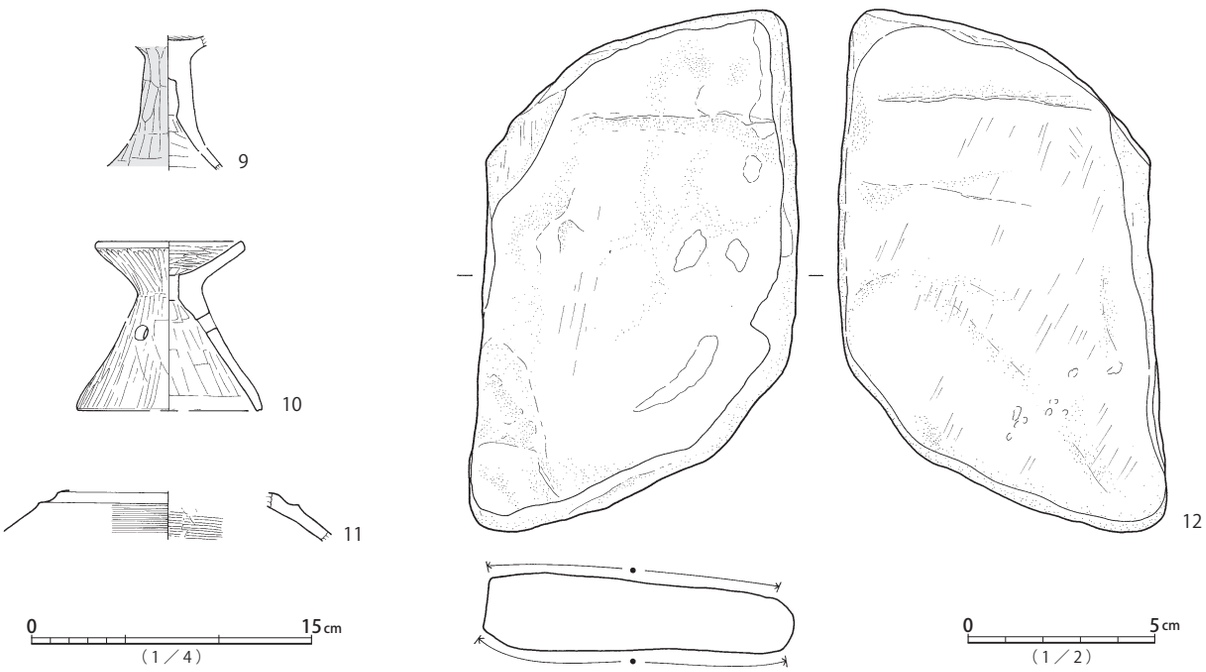


Fig.342　竪穴0462号(2) 遺物

部への押捺は省略される。3はハケ調整が施され、頸部は屈折傾向を示す。4は口縁部が内湾し、短頸壺形土器の可能性がある。11は小破片で、復元径は不確実であるが、段部に擬凹線が施され、北陸系と思われる。土器以外では、12の板状砥石が出土している。1・6は炉跡内、3・12はP6内からの出土。4・10は遺構中央、2・7・8はP4周辺から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

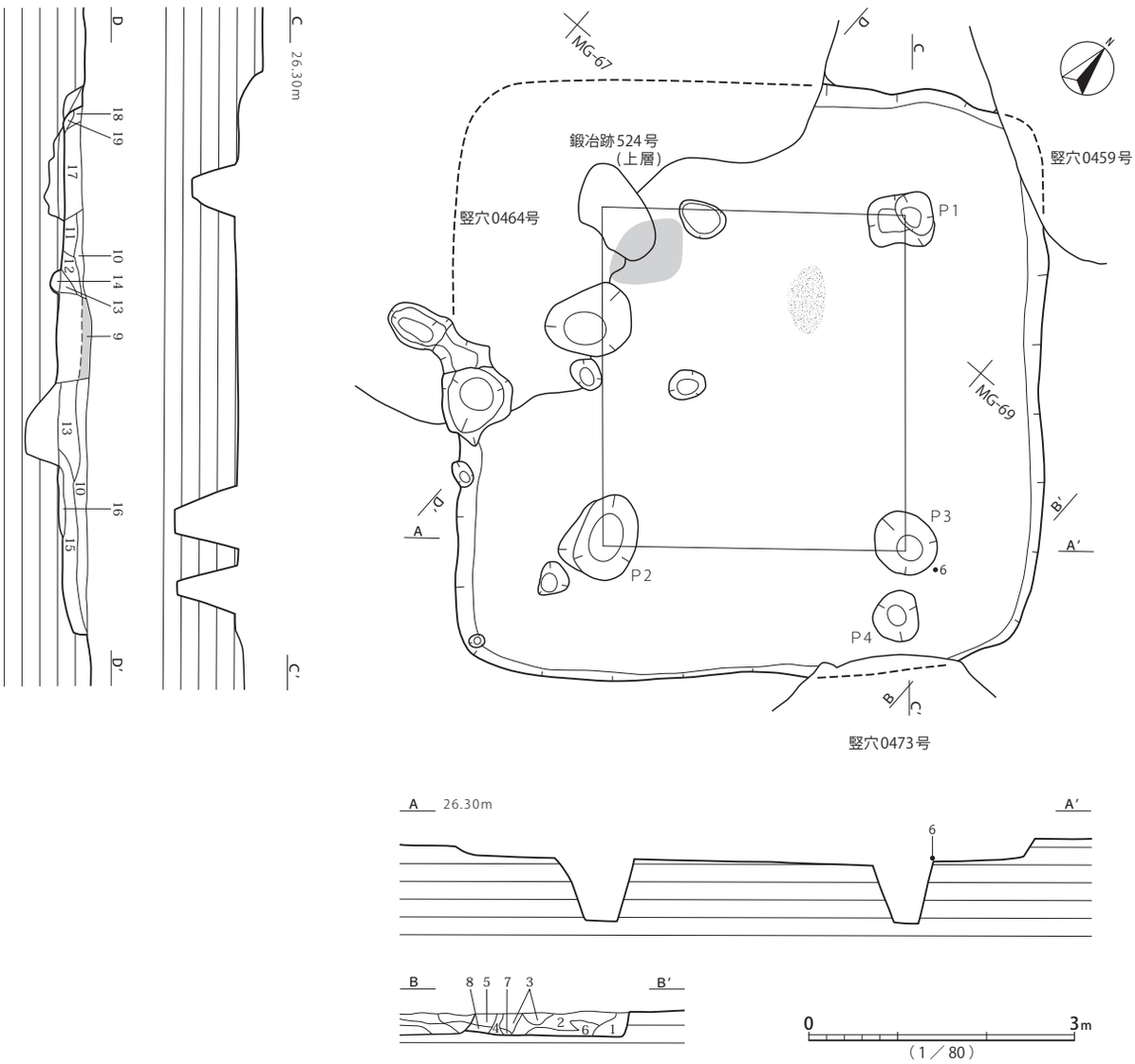
竪穴0463号　（Fig.343・344、PL.83・124・135）

MG−68を中心に位置する。北隅で竪穴0459号、西側で竪穴0464号・鍛冶跡524号（上層）、南東壁の一部で竪穴0473号と重複する。新旧関係は、本遺構が0473・524号よりも古い。0459・0464号との関係は、本遺構のほうが新しいと思われるが、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は方形を呈し、規模は6.40×6.48m、推定遺構下場面積は38.4㎡、確認面からの深さは0.29mを測る。主軸方位はN−40°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されているが、掘り込みは明確でない。P1〜3は主柱穴であるが、北西隅は鍛冶跡524号除去後の図面がなく、対応する柱穴の有無は不明である。P4は貯蔵穴である。覆土上層からは焼土の堆積が確認されているが、524号に伴う可能性が高い。

実測可能遺物は、1・11は壺形土器、2・8〜10は甕形土器、3・4は器種不明の底部、5・6は高杯形土器、7は器台形土器である。13は中空で焼成前穿孔を施し、頂部に平坦面をもつ。炉器台形土器であろうか。土器以外では、12の磨石が出土している。6はP3脇から検出され、床面上からの出土である。

竪穴 0463号



1　暗褐色土　ローム粒を多く含む。粘性なし、しまりあり。
2　黒褐色土　微小赤色粒・炭化粒・ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
3　黒褐色土　微小ローム粒・炭化物を含む。粘性・しまりなし。
4　黄褐色土　ロームを主体とし、黒色土が混じる。しまり強い。
5　黒褐色土　ローム粒をまばらに含む。粘性・しまりなし。
6　黒褐色土　ローム粒がブロック状に点在する。粘性・しまりなし。
7　黒褐色土　ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
8　暗褐色土　微小ローム粒を含む。粘性あり。
9　焼土
10　暗褐色土　ローム粒を均等にやや多く含む。しまりややあり。
11　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりやや弱い。
12　暗褐色土　細ローム粒を多く含む。しまり強い。
13　暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりやや弱い。
14　暗褐色土　ロームを含む。しまり強い。
15　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりやや弱い。
16　暗褐色土　ロームを含む。しまり強い。
17　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりややあり。
18　暗褐色土　ロームを少量含む。しまりやや弱い。
19　暗褐色土　黒褐色土を含む。しまりあり。

Fig.343　竪穴0463号(1) 遺構

竪穴 0463 号

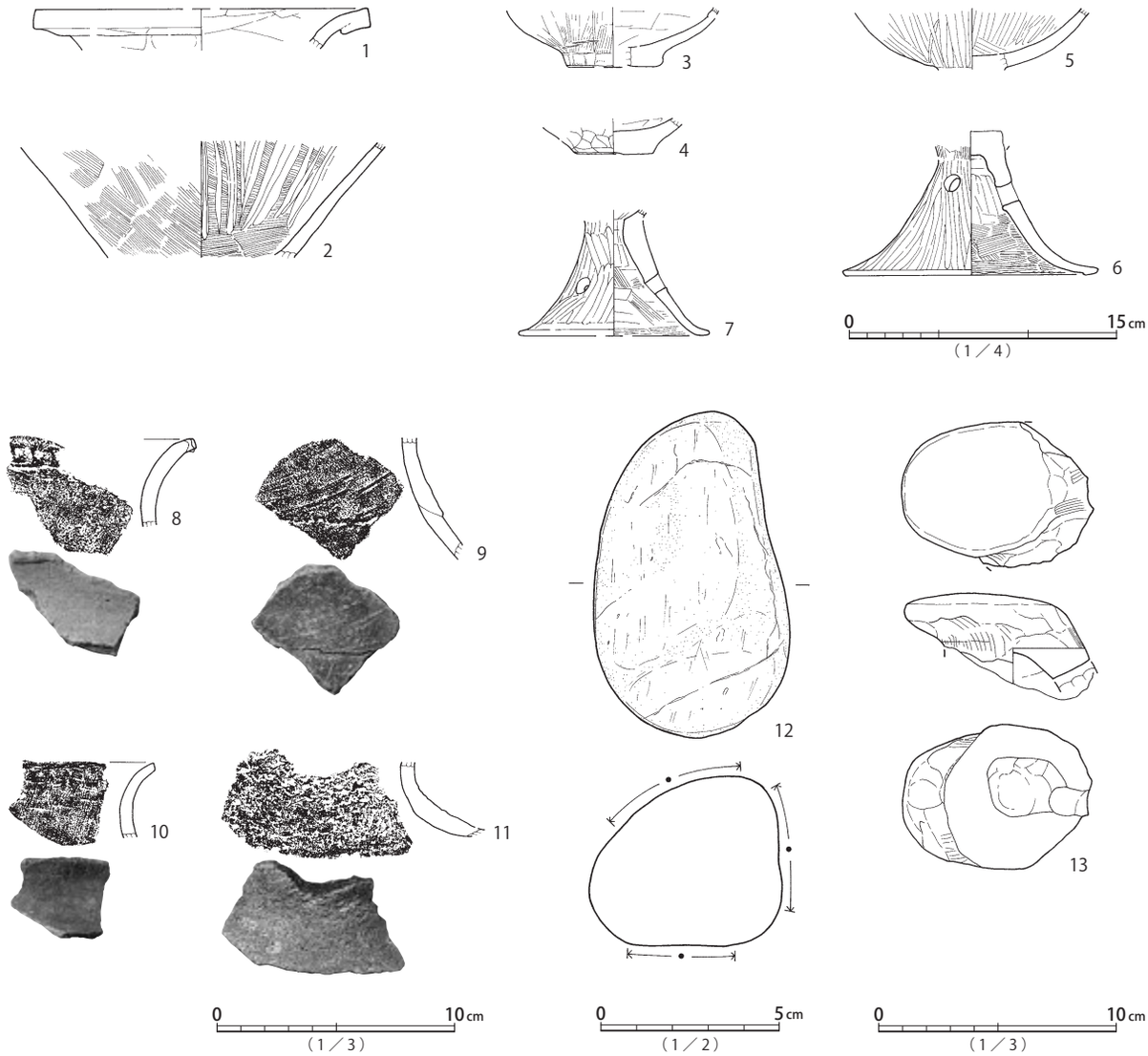


Fig.344　竪穴0463号(2) 遺物

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0464号　（Fig.345～347、PL.41・83・125・135・139～141）

MG−66を中心に位置する。南東隅で竪穴0463号・鍛冶跡524号（上層）、西側で竪穴0465号と重複する。新旧関係は、本遺構が0465・524号より古い。0463号との関係は、本遺構のほうが古いと思われるが、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、推定規模は8.16×6.71m、推定遺構下場面積は44.8㎡、確認面からの深さは0.40mを測る。主軸方位はN−16°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。P1～4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴である。壁周溝が巡り、P3と間仕切り溝で接続する。

実測可能遺物は、1・14～16・18は甕形土器、2・4は直口縁壺形土器、3は壺形のミニチュア土器、

5・6・17は壺形土器、7は台付甕形土器、8は器種不明の底部、9は椀形土器、10～12は高杯形土器、13は炉器台形土器である。1は頸部がくの字状に屈折し、口縁部は内湾気味となる。2はゆるく外反する長い口頸部をもつ。14・15は口縁端部に拡張面を持ち、庄内甕を祖形とするものであろう。18はタタキ整形が施される。土器以外では、19の砥石？、20の敲石、21の軽石、22の石皿・凹石が出土している。2はP3脇から検出され、床面上からの出土。16はP6底面からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0465号　（Fig.345・347、PL.41・83・125）

MG−65を中心に位置する。東側で竪穴0464号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、床面付近から確認された焼土と炭化材の堆積が0464号の範囲まで広がっていることから、本遺構のほうが新しいと考えられる。

平面形態は小型の方形を呈すと考えられるが、重複により遺構東側を検出することができていないため、詳細は不明である。規模は一辺3.52m、確認面からの深さは0.21mを測る。南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−42°−Wとなる。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。遺構範囲からは複数の柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものが含まれるかは明確でない。床面付近には焼土と炭化材の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。

実測可能遺物は、1・4～6は甕形土器、2は器種不明の底部、3は高杯形土器である。1・5の口縁部は大きく外反し、端部に拡張面をもつ。庄内甕を祖形とするものであろう。3は有稜高杯で、直線的に大きく開く、浅い杯部をもつ。6はタタキ整形が施される。重複する竪穴0464号の遺物が混在しているものと考えられ、明らかに本遺構に伴うのは、遺構中央付近から検出され、床面上から出土した3のみである。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0466号　（Fig.348、PL.41）

MG−63を中心に位置する。南側で竪穴0470号、中央で溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2020号よりも古い。0470号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

平面形態は小型の隅丸方形を呈すと思われるが、上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝2020号）により壊されるため、詳細は不明である。推定規模は3.85×3.56m、推定遺構下場面積は10.8㎡、確認面からの深さは0.37mを測る。主軸方位はN−38°−Wである。炉跡や主柱穴などの屋内施設は検出されていない。

弥生時代終末期の所産と思われるが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

竪穴0470号　（Fig.349、PL.41・84・125）

MG−84を中心に位置する。北隅で竪穴0466号、中央で溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2020号よりも古い。0466号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

竪穴 0464・0465 号

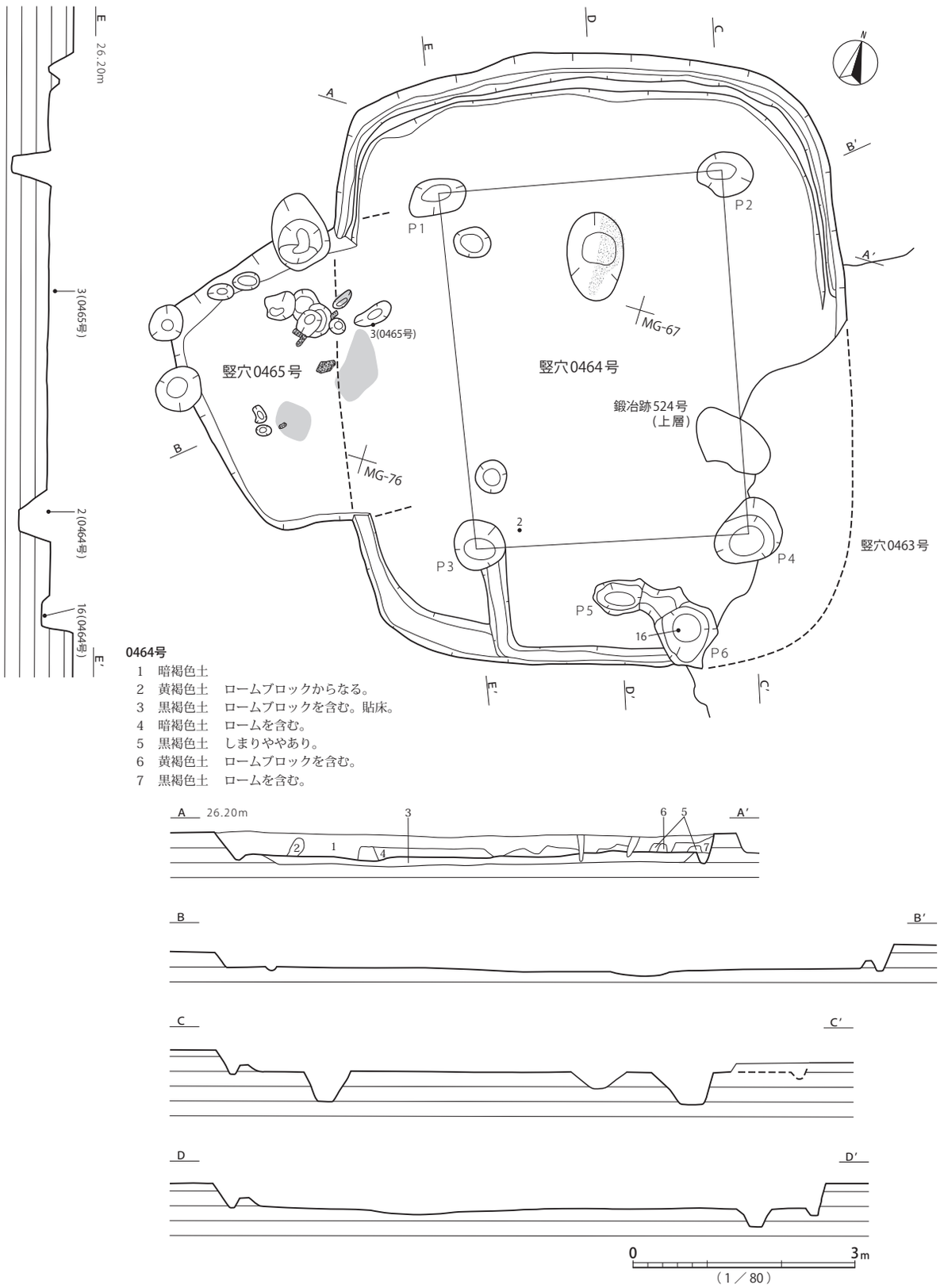
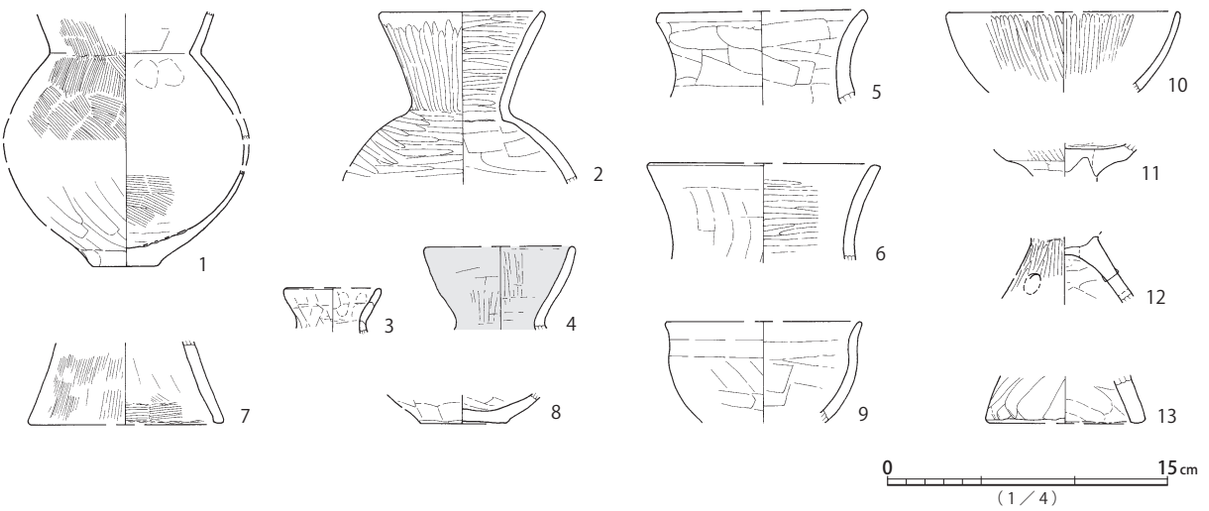
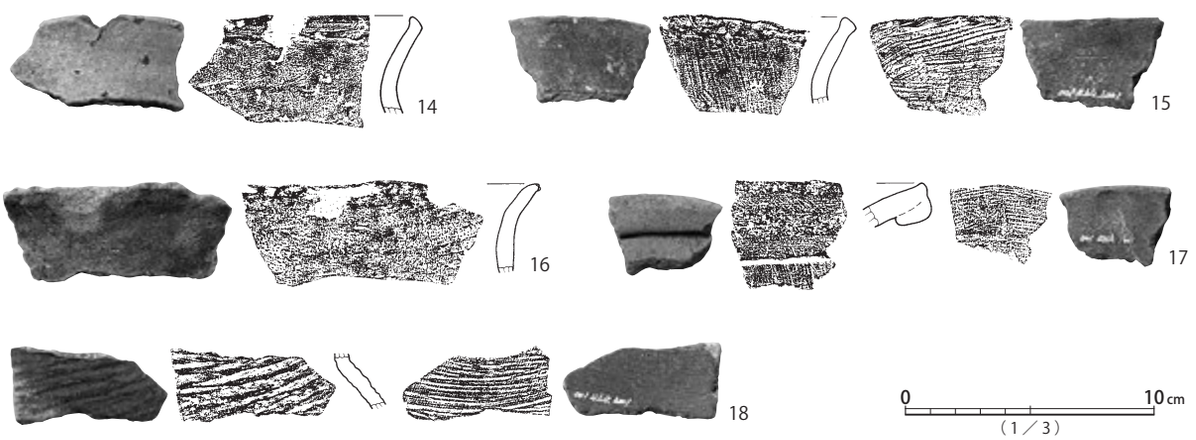


Fig.345 竪穴0464号(1) 遺構、竪穴0465号(1) 遺構

竪穴 0464 号





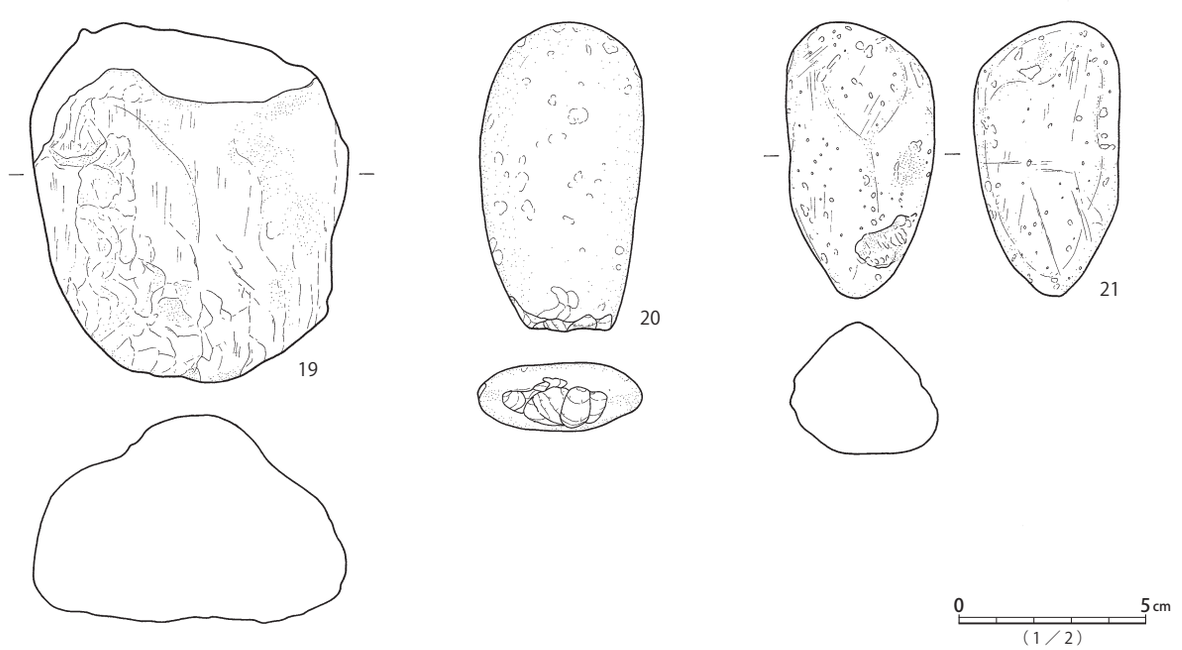
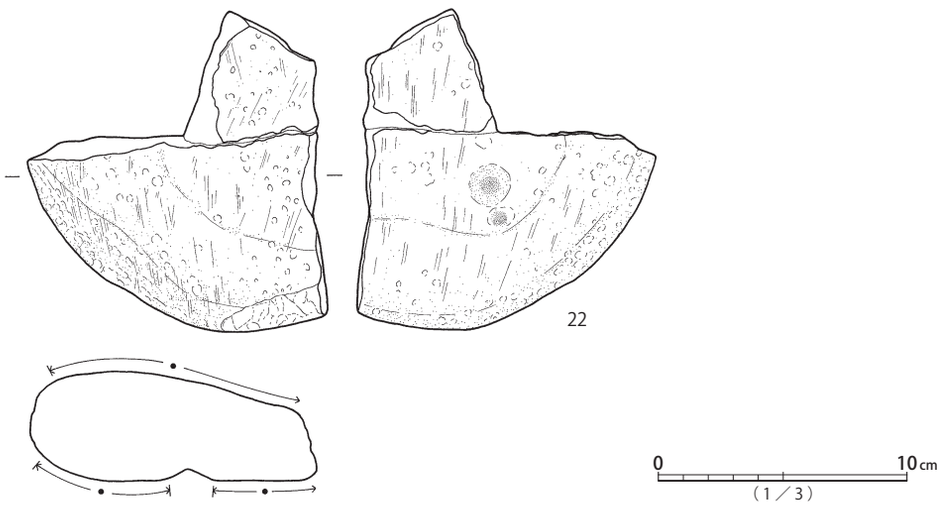


Fig.346　竪穴0464号(2) 遺物

竪穴 0464 号



竪穴 0465 号

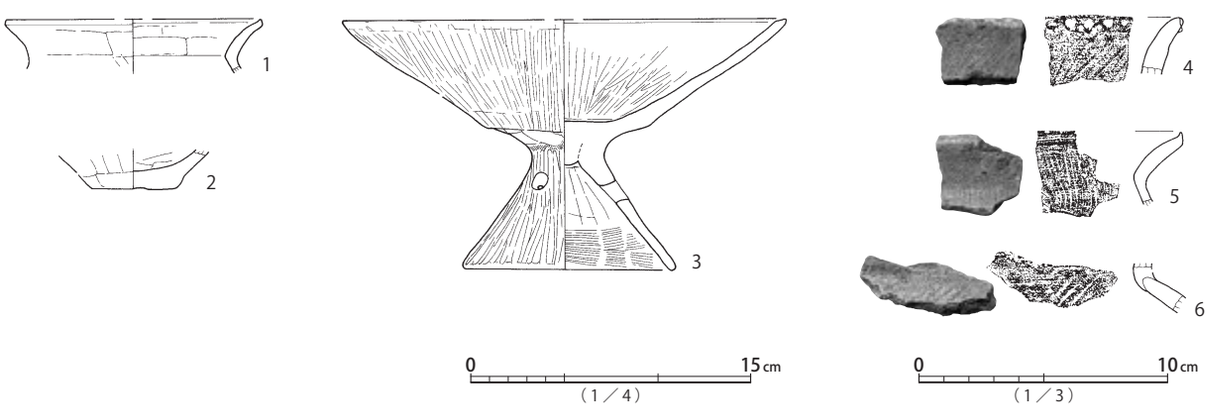


Fig.347　竪穴0464号(3) 遺物、竪穴0465号(2) 遺物

平面形態は胴張隅丸方形を呈すが、上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝2020号）により壊されるため、詳細は不明である。推定規模は4.91×5.13m、推定遺構下場面積は19.5㎡、確認面からの深さは0.20mを測る。主軸方位はN−50°−Wである。P1〜3は主柱穴と考えられるが、深さはそれぞれ異なる。P4は貯蔵穴で、方形の掘り込みをもつ。炉跡は検出されていないが、重複する2020号により壊された可能性が高い。

実測可能遺物は、1は小型の甕形土器、2・3・8は甕形土器、4・10・11は壺形土器、5は高杯形土器、6・7はミニチュア土器である。9は小型品で短頸壺形土器であろうか。甕形土器はいずれも単口縁で、1は胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残し、2は頸部がくの字状に屈折する。4は口縁部がゆるく外反する。8はタタキ整形が施される。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0472号　（Fig.350、PL.41・84・125・133）

MG−87を中心に位置する。南側で竪穴0474号と重複する。新旧関係は、本遺構が0474号よりも古い。

竪穴0466号

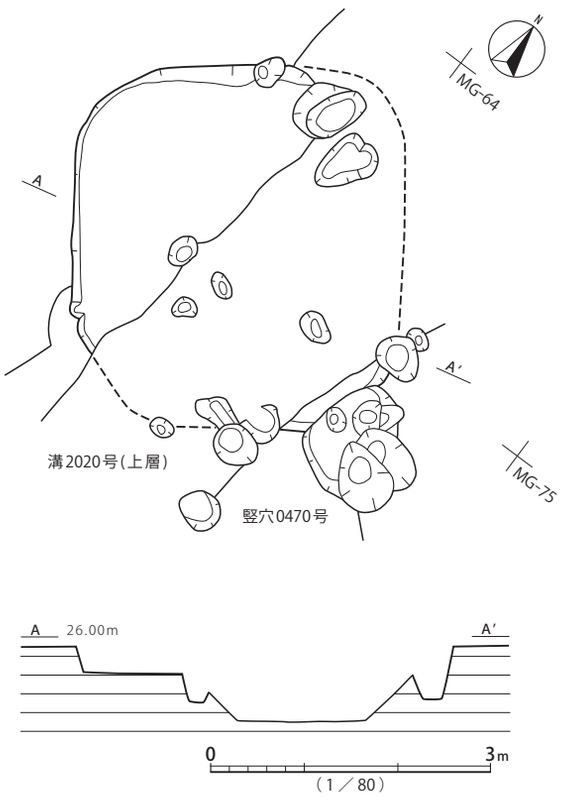


Fig.348　竪穴0466号 遺構

平面形態は小型で台形気味の隅丸方形を呈し、規模は3.30×3.58m、遺構下場面積は7.3㎡、確認面からの深さは0.20mを測る。主軸方位はN−75°−Wである。炉跡は中軸線上西寄りから検出されている。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴であろう。壁周溝が検出され、全周する。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は器種不明の底部、3〜7は椀形土器である。1はタタキ整形ののち、胴部にハケ、底部にヘラナデを加える。土器以外では、8の抉入柱状片刃石斧が出土している。炉跡付近を中心に遺物が検出されているが、垂直位置は記録不備のため不明である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0473号　（Fig.351〜353、PL.41・84・97・125・141）

MG−90を中心に位置する。北東隅で竪穴0462号、北西隅で竪穴0463号、東辺壁中央で土坑0525号と重複する。新旧関係は、本遺構が0462・0463号よりも新しい。0525号との関係は、断面図など記録上の根拠がなく、明確でない。

平面形態は方形を呈し、規模は6.74×6.64m、遺構下場面積は36.2㎡、確認面からの深さは0.11mを測る。炉跡は遺構中央東寄りから検出されている。中央北寄りからも浅い掘り込みをもつ焼土の堆積が確認されており、これも炉跡の可能性があるが、明確でない。P1は出入口施設であろうか。壁周溝が検出され、全周する。主柱穴と貯蔵穴は検出されていない。主軸方位は、東寄りの炉跡が奥壁側に位置するとした場合はN−91°−E、P1が出入口施設とした場合はN−1°−Eとなる。

竪穴 0470 号

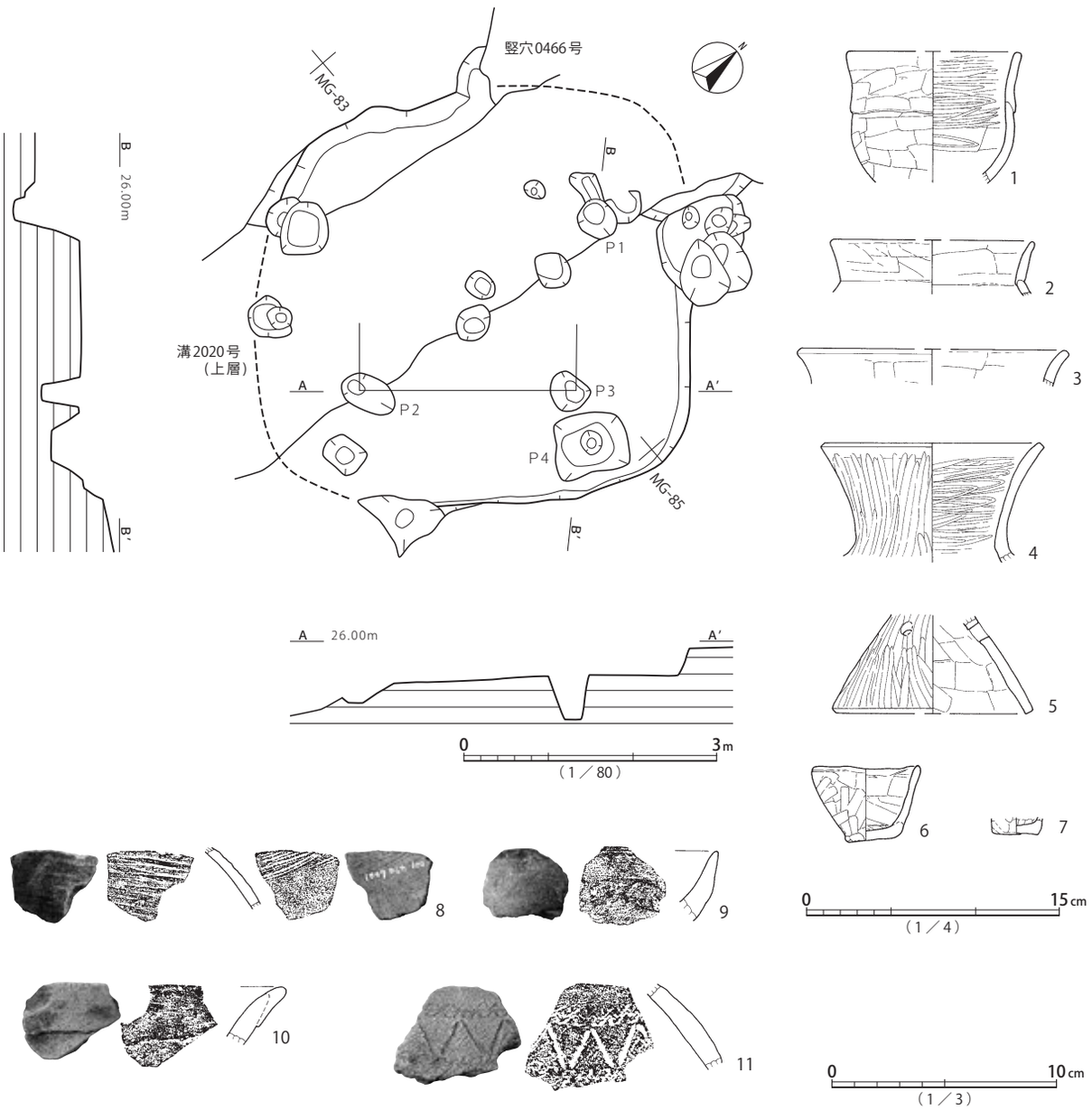
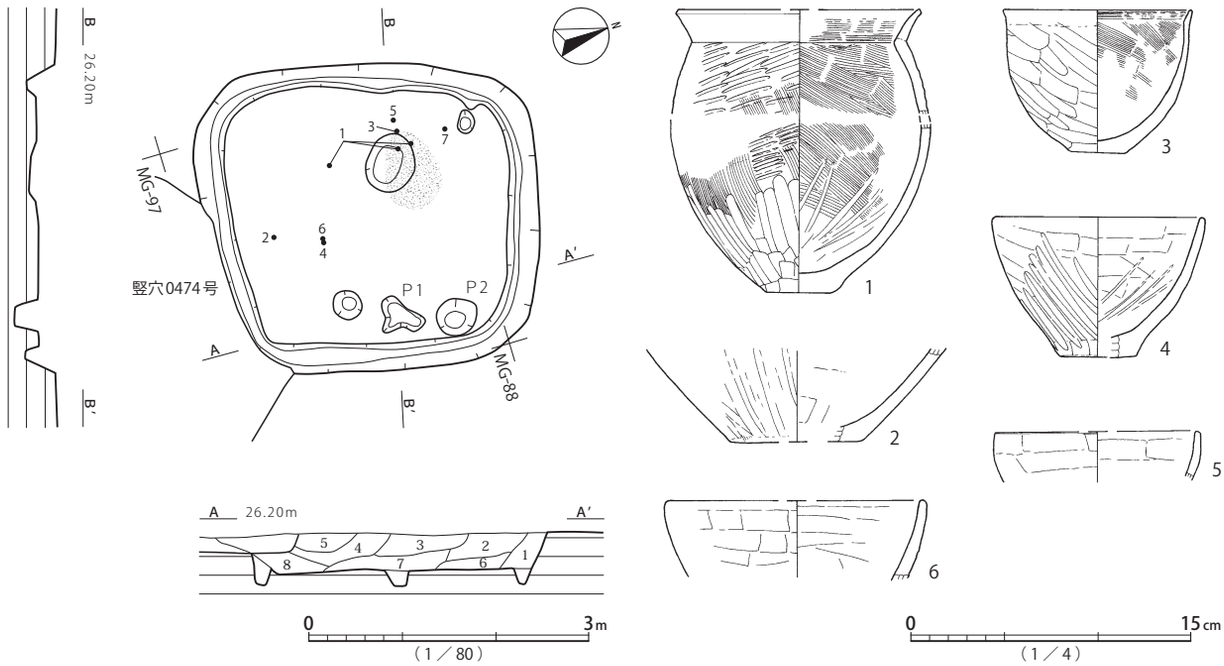


Fig.349　竪穴0470号 遺構遺物

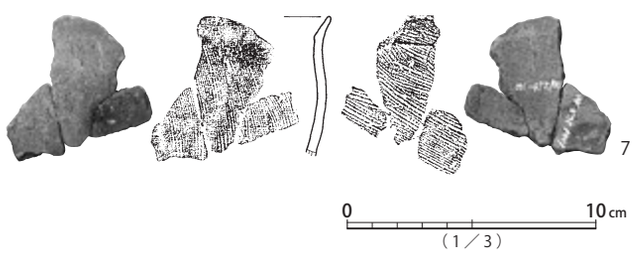
実測可能遺物は、1～11・13・14・29・31は甕形土器、12・23～26・36は高杯形土器、15～21・32～35は壺形土器、22は直口縁壺形土器、27は器台形土器、28は高杯形のミニチュア土器、30は台付甕形土器である。甕形土器はすべて単口縁で、頸部がくの字状に屈折する個体を含む。18はパレス壺で、拡張口縁端部に擬凹線文を施す。混入である。土器以外では37の軽石が出土しており、V字状の溝が認められる。1～6・9～11は南東隅からまとまって検出され、いずれも覆土中からの出土である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴 0472号



1　暗褐色土　ロームを含む。粘性・しまりややあり。
2　暗褐色土　3mm大のローム粒を含む。しまりなし。
3　暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
4　明褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
5　暗褐色土　ローム粒を少量含む。しまりあり。
6　暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
7　暗褐色土　黒色土をブロック状に含み、3mm大のローム粒も多く混じる。
8　明褐色土　ロームを含む。粘性・しまりあり。



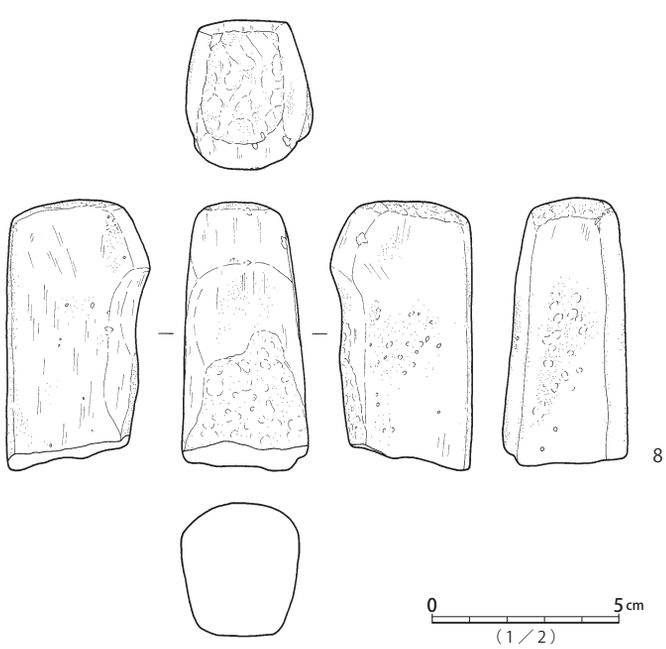
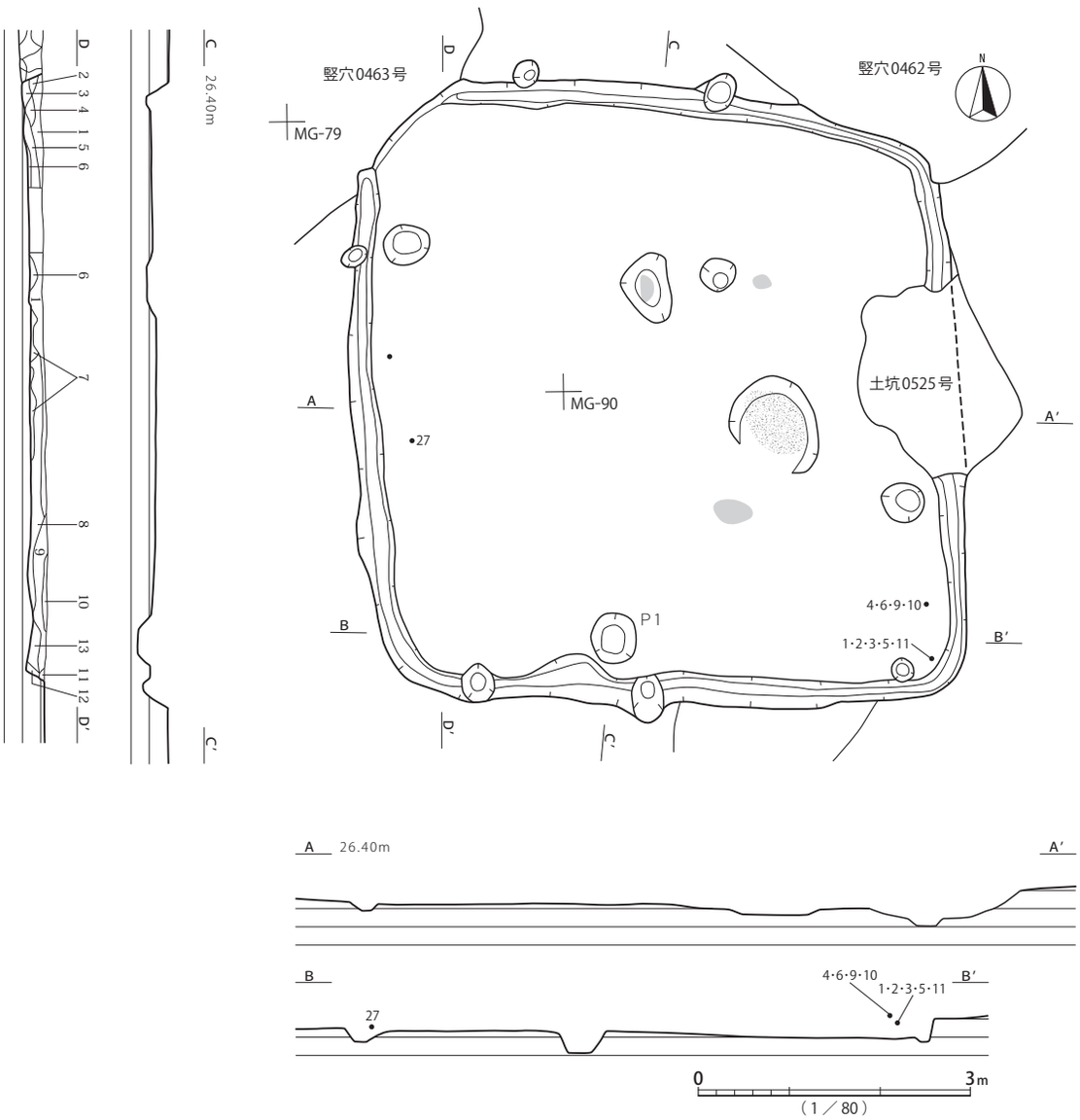


Fig.350　竪穴0472号 遺構遺物

竪穴 0473号



1　黒褐色土　ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
2　黒褐色土　ローム粒をまばらに含む。粘性・しまりなし。
3　暗褐色土　微小ローム粒を含む。粘性・しまり強い。
4　黒褐色土　ローム粒・焼土粒を含む。粘性・しまりなし。
5　黒褐色土　ローム粒を含む。粘性・しまりなし。
6　灰褐色土　ロームを含む。しまりあり。
7　暗褐色土　ロームを多く含む。しまりあり。
8　暗褐色土　ロームを多く含み、茶褐色に近い。しまりあり。
9　暗褐色土　ロームを少量含み、灰褐色に近い。しまりあり。
10　灰褐色土　ロームをわずかに含む。しまりややあり。
11　明褐色土　ロームを含む。
12　明褐色土　ロームを主体とする。
13　暗褐色土　ロームを含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。

Fig.351　竪穴0473号(1) 遺構

竪穴 0473 号

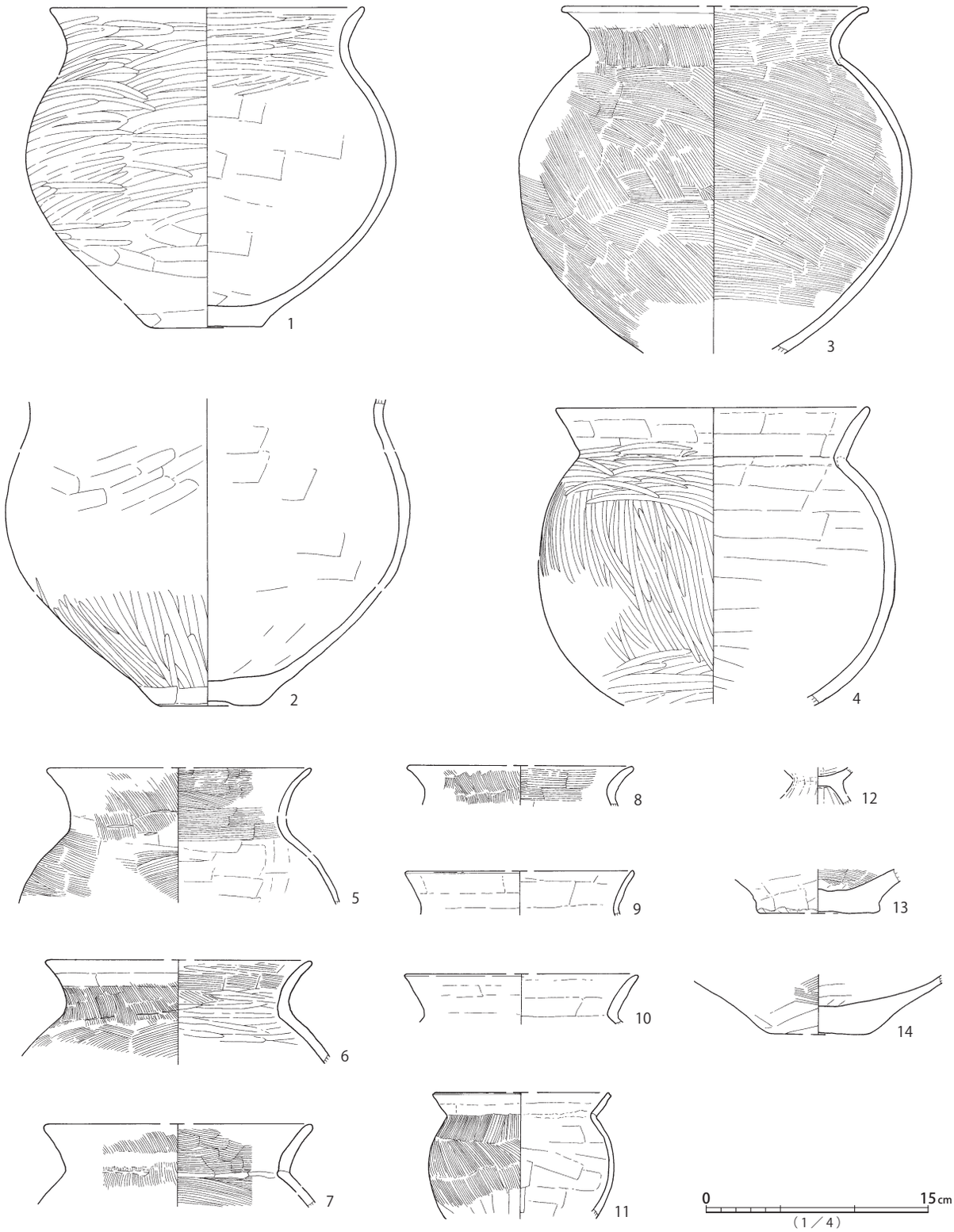


Fig.352　竪穴0473号(2) 遺物

竪穴 0473号

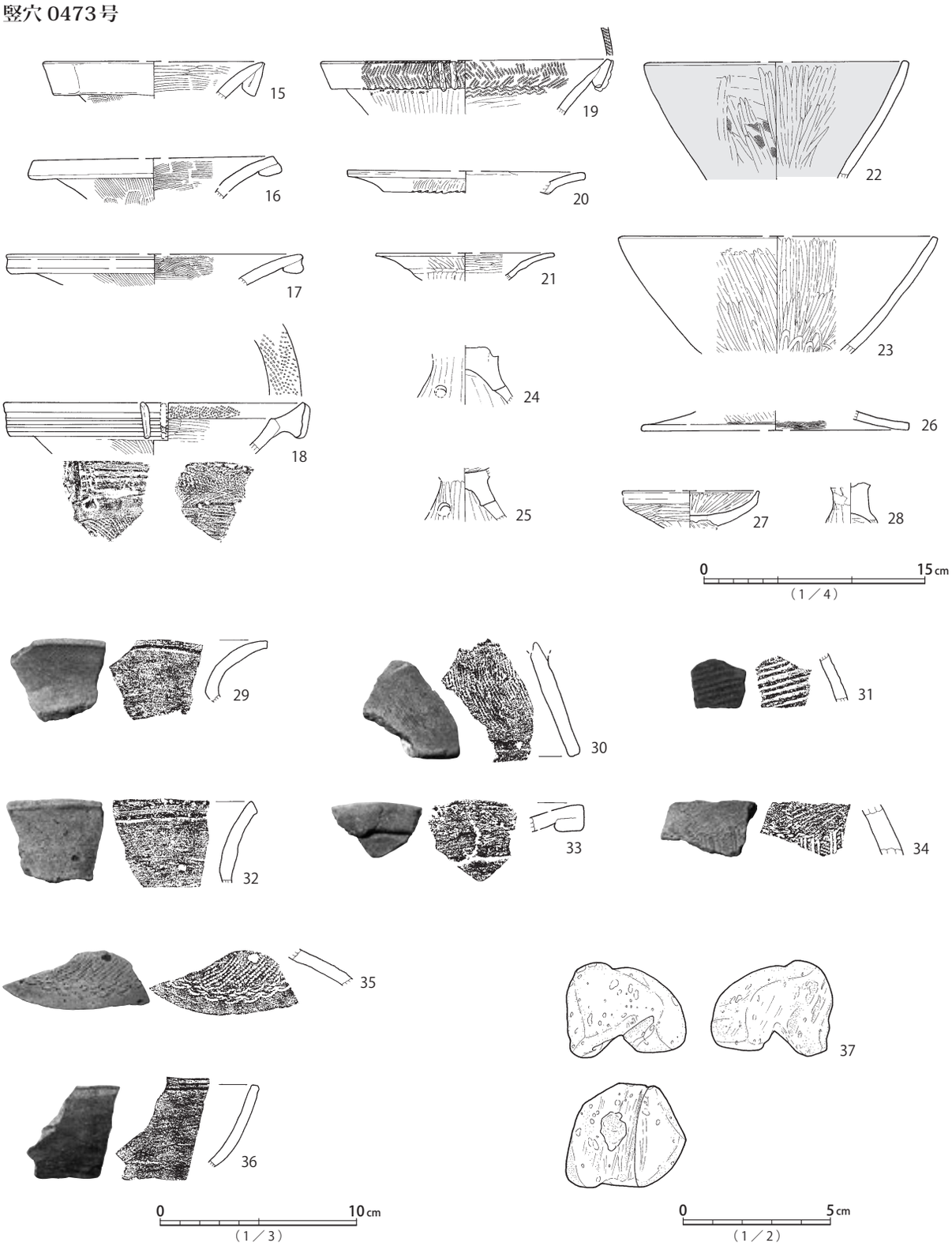


Fig.353　竪穴0473号(3) 遺物

竪穴0474号 （Fig.354・355、PL.125）

MG−97を中心に位置する。北隅で竪穴0472号、南西側で竪穴0475号、南東側で竪穴0476号と重複する。新旧関係は、本遺構が0472号よりも新しく、0476号よりも古い。0475号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、遺構平面形態と出土遺物の検討から、本遺構のほうが新しいと思われる。

平面形態は隅丸方形を呈すと思われるが、遺構北西側が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は一辺4.37m、確認面からの深さは0.18mを測る。北西辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−45°−Wとなる。北東壁寄りの床面には焼土が分布し、調査図面には炉跡との記載があるが、掘り込みは認められず、明確でない。主柱穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1・5〜7は壺形土器、2・8は高杯形土器、3は器種不明の底部、4は甕形土器である。

竪穴0472号との関係から弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0475号 （Fig.354・355、PL.41・84・125・126）

LG−07を中心に位置する。東側で竪穴0474・0476・0478号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、遺構平面形態と出土遺物の検討から、本遺構がいずれの遺構よりも古いと考えられる。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、規模は4.60×4.35m、推定遺構下場面積は14.6㎡、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−45°−Wである。炉跡は中軸線上北寄り、P1・2間から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設である。貯蔵穴は検出されていないが、竪穴0478号との重複により壊された可能性がある。

実測可能遺物は、1・2・12は甕形土器、3はS字状口縁甕形土器、4は器種不明の底部、5〜8・13〜17は壺形土器、9〜11・18は高杯形土器である。3は口縁段部がほぼ垂直に立ち上がり、段部に刺突文を施す。胴部外面には羽状のハケ調整が施され、S字甕A類新段階であろう。17は底部焼成前穿孔がなされる。

弥生時代終末期前半の所産と考えられる。

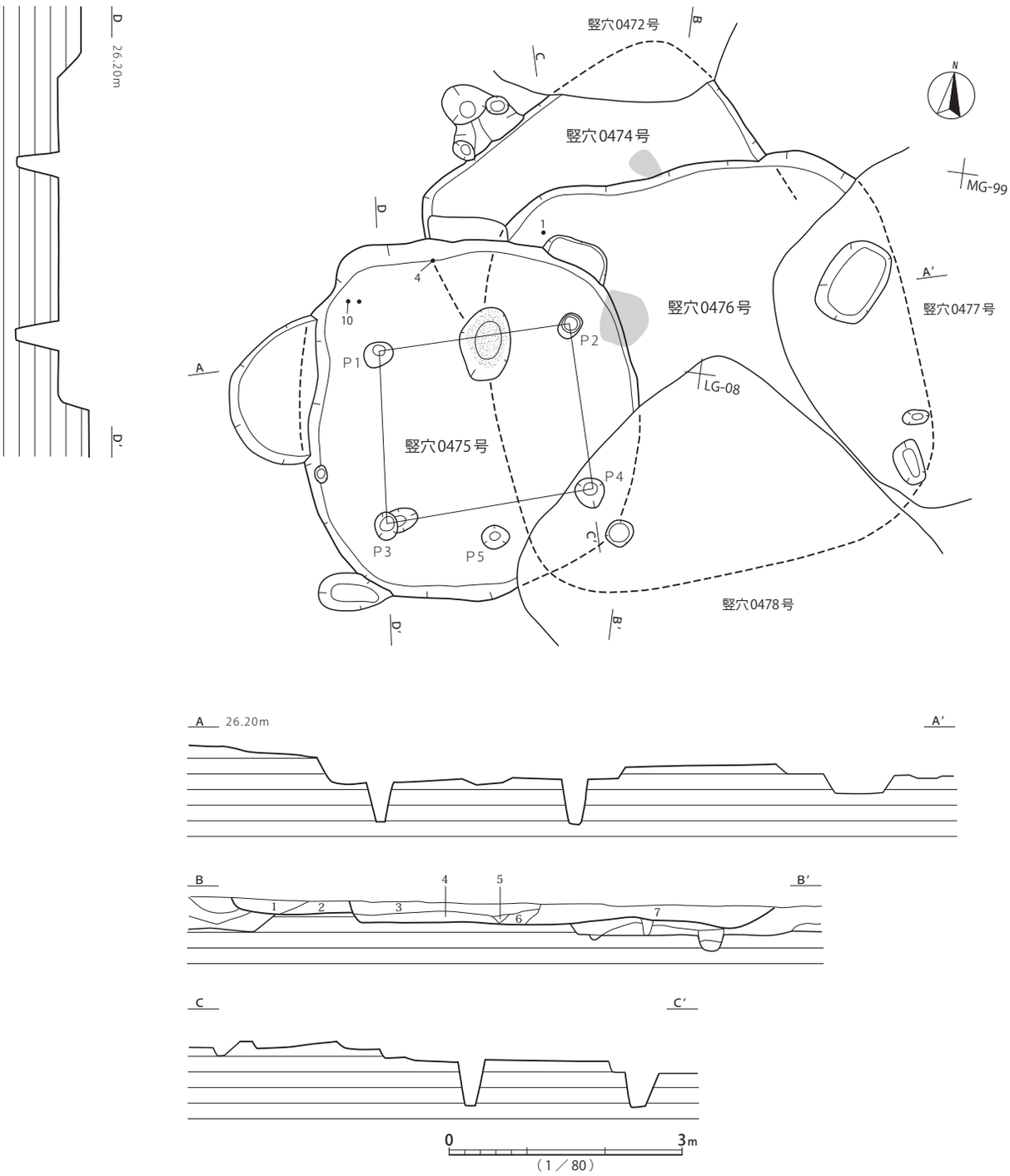
竪穴0476号 （Fig.354・355、PL.41・84）

MG−97を中心に位置する。北側で竪穴0474号、西側で竪穴0475号、東側で竪穴0477号、南側で竪穴0478号と重複する。新旧関係は、本遺構が0474・0478号よりも新しい。0475・0477号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構がいずれの遺構よりも新しいと考えられる。

平面形態は隅丸方形を呈すと思われるが、重複する他遺構に比べて掘り込みが浅く、北辺側以外は平面的に検出することができていないことから、詳細は不明である。確認面からの深さは0.28mを測る。北辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−55°−Wとなる。炉跡や主柱穴は検出されていない。床面からは、少量の焼土の堆積が確認されている。

実測可能遺物は1の甕形土器のみで、球形化した胴部と突出する小型の底部をもつ。調査時は竪穴0474号出土遺物として取り上げられていたものである。

竪穴 0474・0475・0476 号



0474号

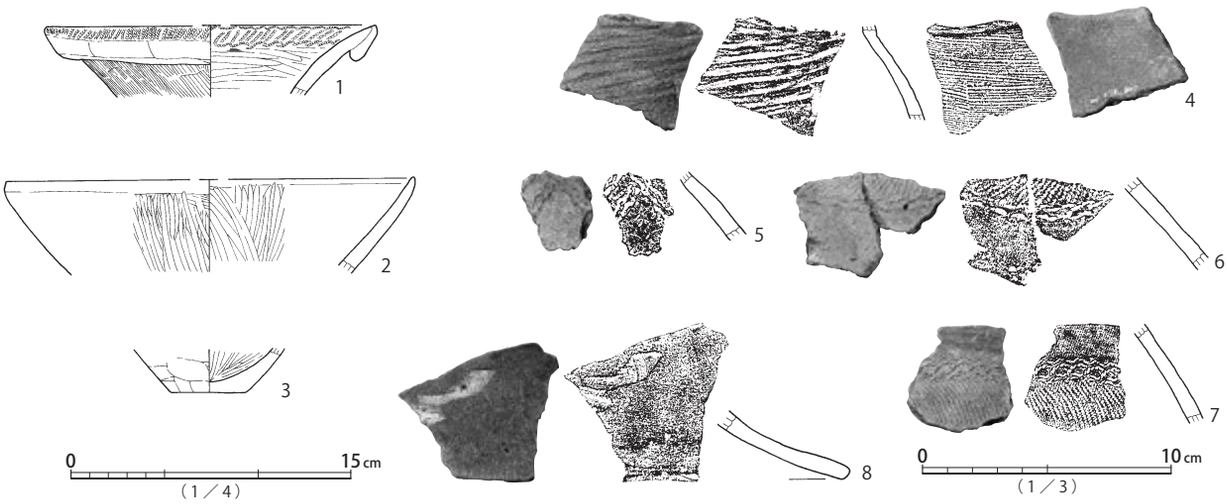
1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。粘性あり、しまりやや弱い。
2　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。粘性あり、しまりやや弱い。

0476号

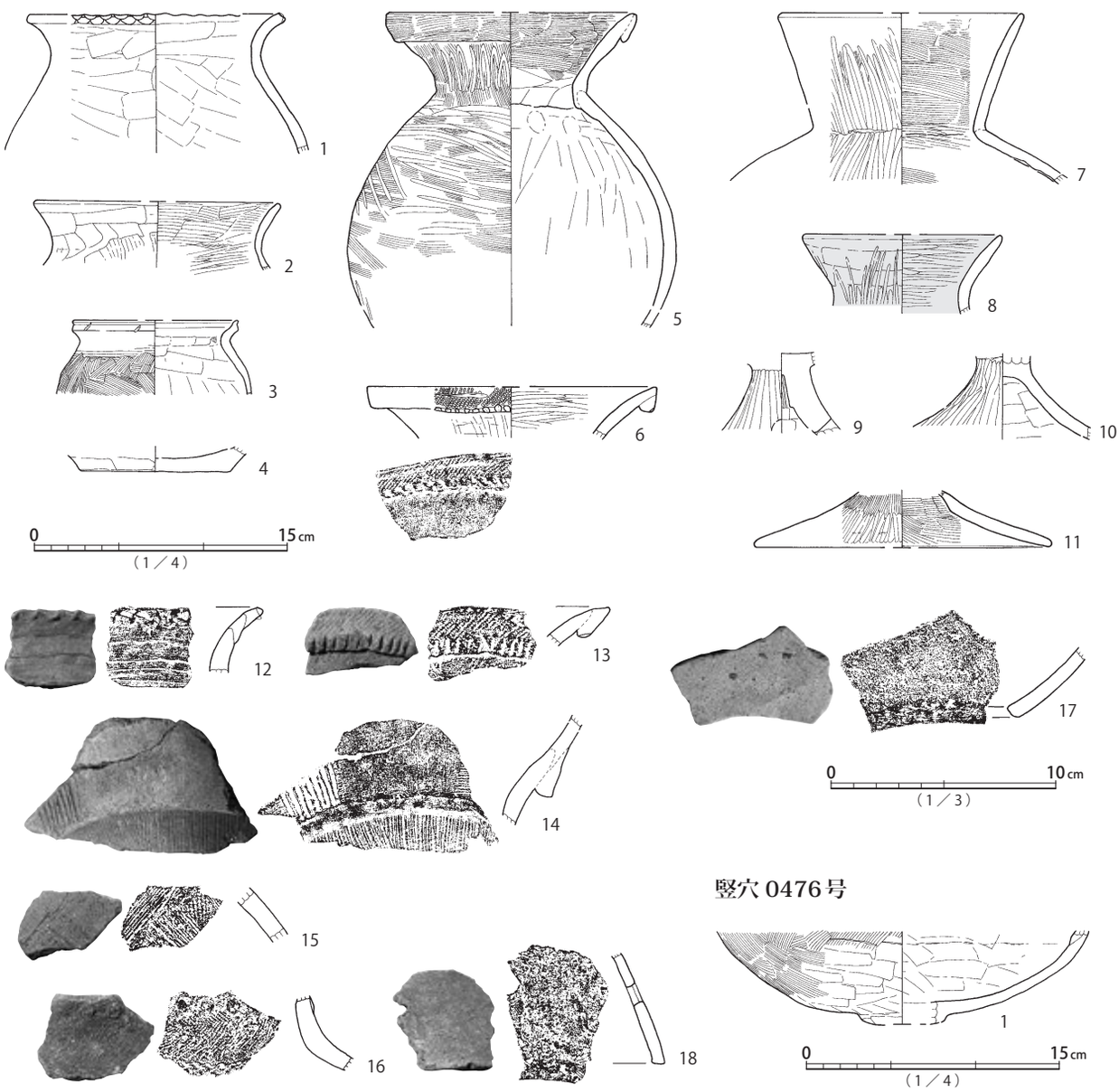
3　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。
4　暗褐色土　ローム粒を含む。粘性あり、しまりやや弱い。
5　暗褐色土　焼土をわずかに含む。
6　暗褐色土　焼土を含む。
7　暗褐色土　ローム粒を均等にやや多く含む。粘性あり、しまり弱い。

Fig.354　竪穴0474号(1) 遺構、竪穴0475号(1) 遺構、竪穴0476号(1) 遺構

竪穴 0474 号



竪穴 0475 号



竪穴 0476 号

Fig.355　竪穴0474号(2) 遺物、竪穴0475号(2) 遺物、竪穴0476号(2) 遺物

竪穴0478号との関係や、遺構平面形態から弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0477号　（Fig.356・357、PL.41・85・97・126）

MG−98を中心に位置する。西側で竪穴0476号・土坑487号（上層）、南東隅で竪穴0480号と重複する。新旧関係は、本遺構が487・0480号よりも古い。0476号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが古いと考えられる。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、推定規模は4.00×3.85m、推定遺構下場面積は12.9㎡、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位はN−43°−Wである。炉跡は検出されていないが、遺構中央北西寄りの浅い掘り込みによって壊された可能性がある。主柱穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜6・12・13は甕形土器、7はS字状口縁台付甕形土器、8は壺形土器、9・10は高杯形土器、11は器台形土器、14は椀形土器である。甕形土器の口縁端部への押捺は1方向のみとなるが、3・4は胴肩有段部下端に押捺を施す。7はS字甕B類、13はタタキ甕である。12はヘラ状工具等による細かなケズリが施され、タタキ痕を意識したものであろうか。2・14は北西辺壁寄り、5・8は遺構中央付近から検出されているが、垂直位置は記録不備のため不明である。

弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴0478号　（Fig.356・358、PL.41・85・126）

LG−08を中心に位置する。北西辺壁で竪穴0475号、北側で竪穴0476号、東側で竪穴0479号と重複する。新旧関係は、本遺構が0475号よりも新しく、0476号よりも古い。0479号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

平面形態は方形を呈し、規模は4.60×4.30m、遺構下場面積は14.7㎡、確認面からの深さは0.38mを測る。主軸方位はN−53°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。P2は貯蔵穴である。P1は出入口施設と思われるが、規模がやや大きいことから、貯蔵穴の可能性もある。壁周溝が検出され、全周する。主柱穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2・15〜17は甕形土器、3・4・18〜21は壺形土器、5〜7は器種不明の底部、8〜11・13・14は高杯形土器、12は器台形土器である。甕形土器の頸部はゆるく外反する。1は胴肩部に1段の粘土紐積み上げ痕を残し、段部以下はハケ調整を施す。2は口頸部が大きくすぼまり、壺形状の形態をとる。東隅から1・2・5・7がまとまって出土しているが、垂直位置は記録不備のため不明である。

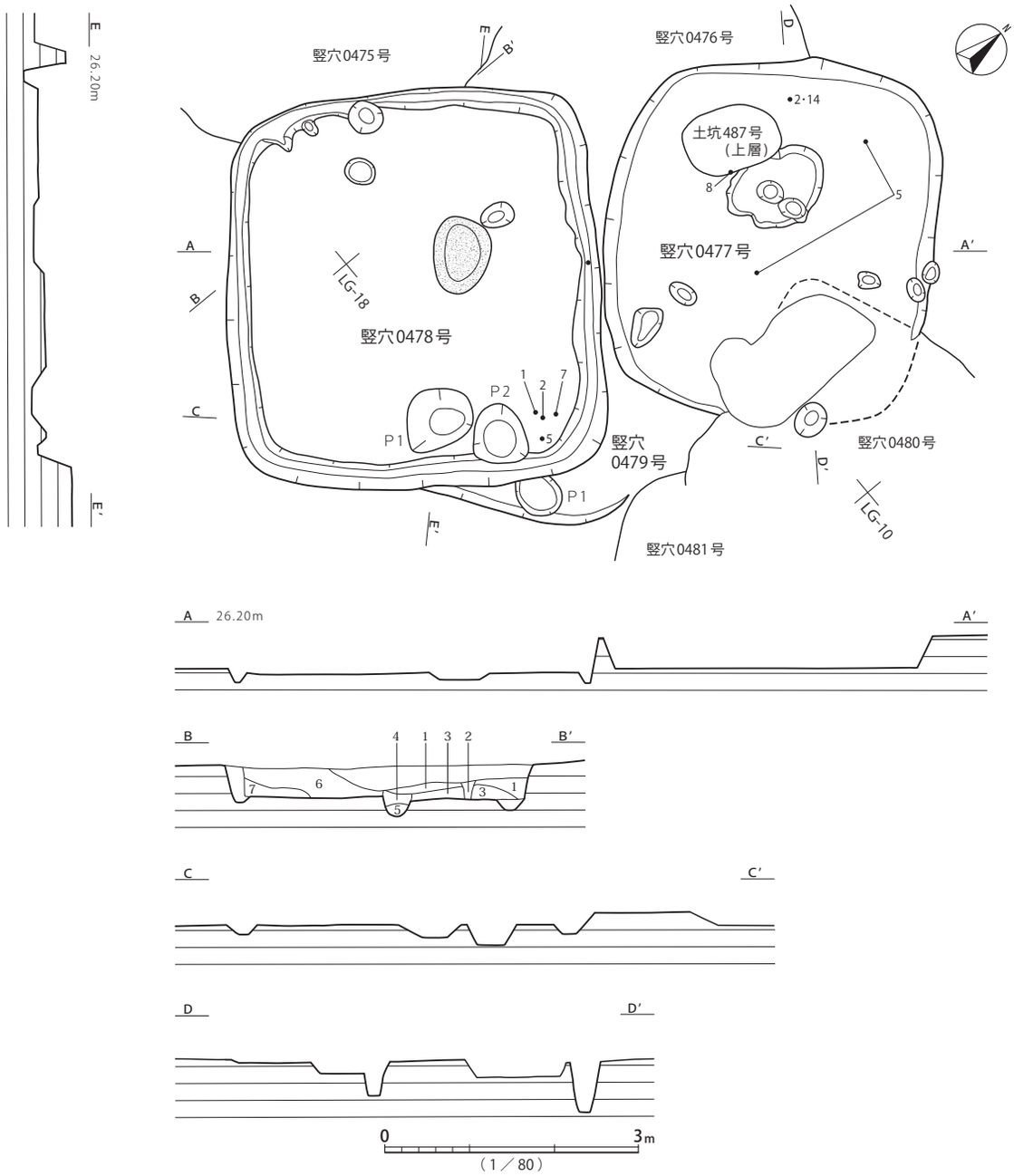
弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0479号　（Fig.356）

LG−09を中心に位置する。北側で竪穴0477号、西側で竪穴0478号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

南東壁の一部が検出されたのみで、平面形態や規模などの詳細は不明である。確認面からの深さは0.08mを測る。

竪穴 0477・0478・0479 号



0478号

1　暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
2　黒褐色土　しまりなし。
3　黒褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
4　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりややあり。
5　黒褐色土　ローム・2cm大のロームブロックを含む。
6　暗褐色土　ロームを含み、黒褐色土も混じる。しまりあり。
7　暗褐色土　3mm大のローム粒をわずかに含む。しまりややあり。

Fig.356　竪穴0477号(1) 遺構、竪穴0478号(1) 遺構、竪穴0479号 遺構

竪穴 0477 号

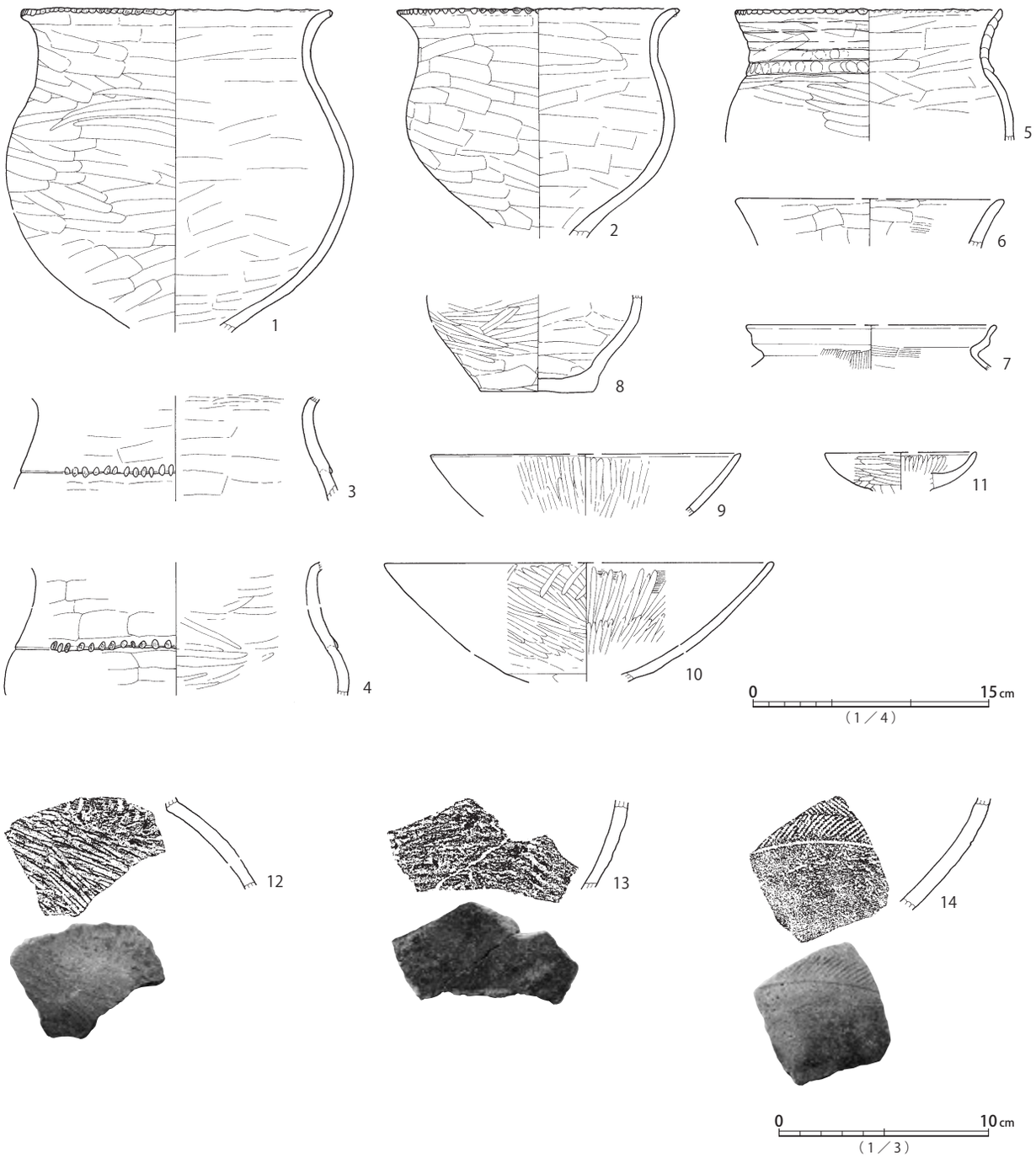


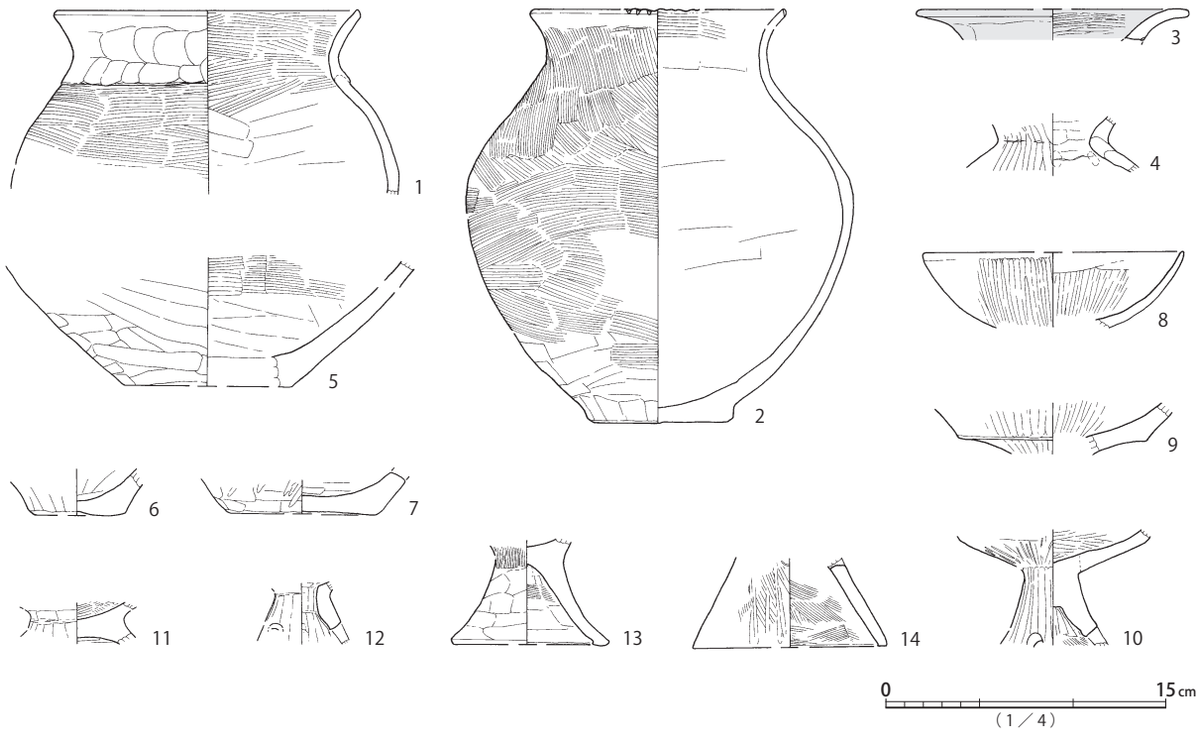
Fig.357　竪穴0477号(2) 遺物

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴 0480 号　（Fig.359・360、PL.41・85・97・126）

MG−99を中心に位置する。北西側で竪穴0477号と土坑（遺構番号なし）、南東側で竪穴0481号と重複する。新旧関係は、本遺構が0477・0481号よりも新しい。土坑との関係は、断面図など記録

竪穴 0478 号



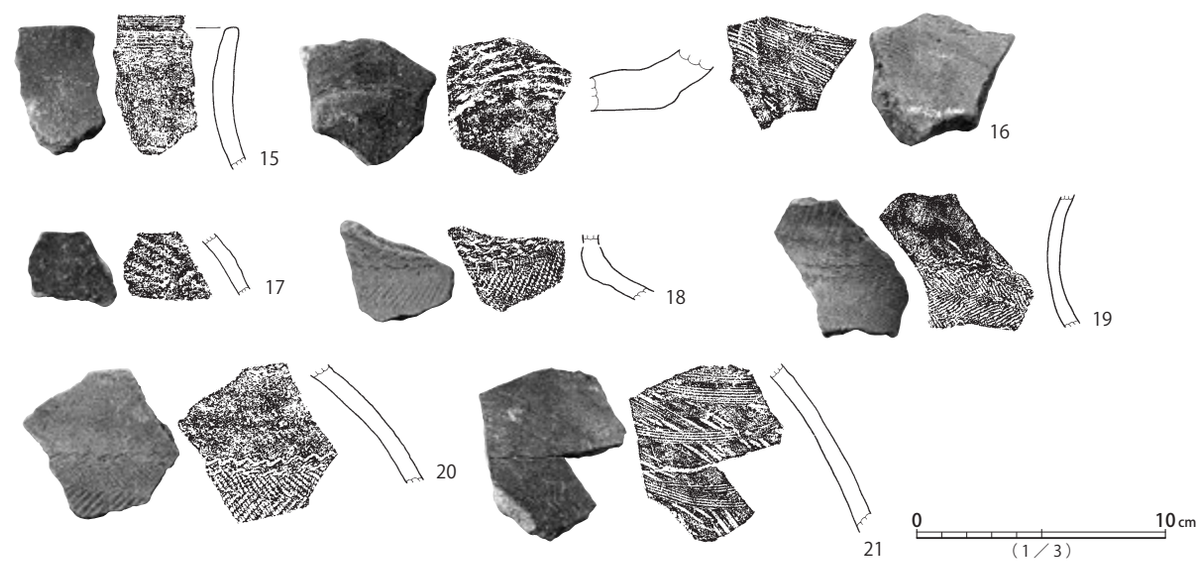


Fig.358　竪穴0478号(2) 遺物

上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

平面形態は小型の方形を呈し、規模は3.00×3.20m、推定遺構下場面積は6.7㎡、確認面からの深さは0.37mを測る。主軸方位はN−19°−Wである。調査図面に炉跡は記録されていなかったが、北東隅から検出された焼土範囲で浅い掘り込みが確認できたことから、炉跡の可能性を考え、写真からおよその位置を記した。壁周溝が検出され、部分的に途切れる。南東隅のP1は深さ0.58mを測るが、性格は不明である。

実測可能遺物は、1～4・8は甕形土器、5は大型の椀形土器、6は底部焼成後穿孔の転用甑形土器、7は壺形土器である。1は頸部がくの字状に屈折し、段をもつ。口縁部は直立気味に立ち上がり、胴部は球形化する。1・5は南東隅から検出されているが、垂直位置は記録不備のため不明である。

古墳時代前期前葉の所産と思われるが、弥生時代終末期後半の可能性もある。

竪穴0481号　（Fig.359～361、PL.42・85・97・126）

LG－10を中心に位置する。北西側で竪穴0480号、南側で竪穴0482・0483号と重複する。新旧関係は、本遺構が0480号よりも古い。0482・0483号との関係は、断面図など記録上の根拠はないが、出土遺物の検討から、本遺構が最も新しいと考えられる。

平面形態は隅丸方形を呈すと思われるが、他遺構との重複が激しく、詳細は不明である。推定規模は東西軸長4.60m、確認面からの深さは0.10mを測る。東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN－20°－Wとなる。P1～4は主柱穴で、P5は貯蔵穴であろう。炉跡は検出されていないが、竪穴0480号との重複により壊された可能性が高い。

実測可能遺物は、1～3・21～27・31は甕形土器、4～6・28・29は壺形土器、7～11は器種不明の底部、12～17・30は高杯形土器、18は器台形土器、19・20は炉器台形土器である。3は胴部上半をタタキ整形ののち、下半にハケ調整を加える。6は小型品で、口縁部に補修孔が認められる。

弥生時代終末期後半の所産と思われる。

竪穴0482号　（Fig.359・361、PL.42・86・97・127）

LH－11を中心に位置する。北西側で竪穴0481号、西側で竪穴0483号と重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、断面図では0483号を切るように見えるが、覆土最上層（1層）は0483号に伴う可能性があり、明確でない。0481号についても、断面図など記録上の根拠はないが、出土遺物の検討から、本遺構がいずれの遺構よりも古いと思われる。

平面形態は小型の胴張隅丸長方形を呈し、規模は3.90×3.50m、遺構下場面積は10.4㎡、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN－48°－Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されているが、掘り込みは明確でない。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴で、主柱穴と壁周溝は検出されない。

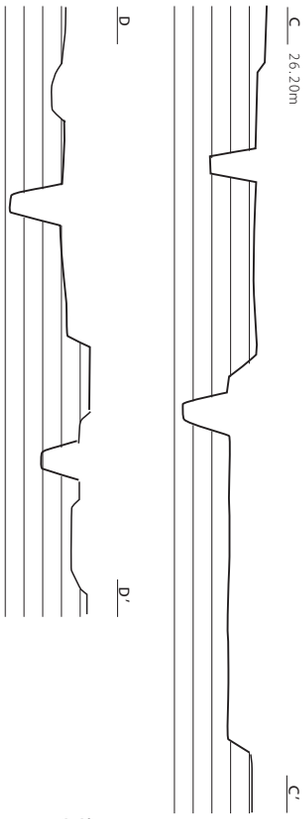
実測可能遺物は、1・4は甕形土器、2は壺形土器、3は高杯形土器、5・6は同一個体の手焙形土器である。1は胴肩部に1段の粘土積み上げ痕を残し、口縁端部と段部に押捺を加える。5は覆い部に綾杉文、平たく幅広の開口部周縁に2条の円形刺突文を施す。6は竪穴0481号出土遺物とされていたもので、体部中央に粘土紐を貼り付け、沈線を巡らせたのち、斜位の押し引き押捺を施す。浅黄橙色を呈し、搬入品と考えられる。1・2は南西壁寄りから検出されているが、垂直位置は記録不備のため不明である。

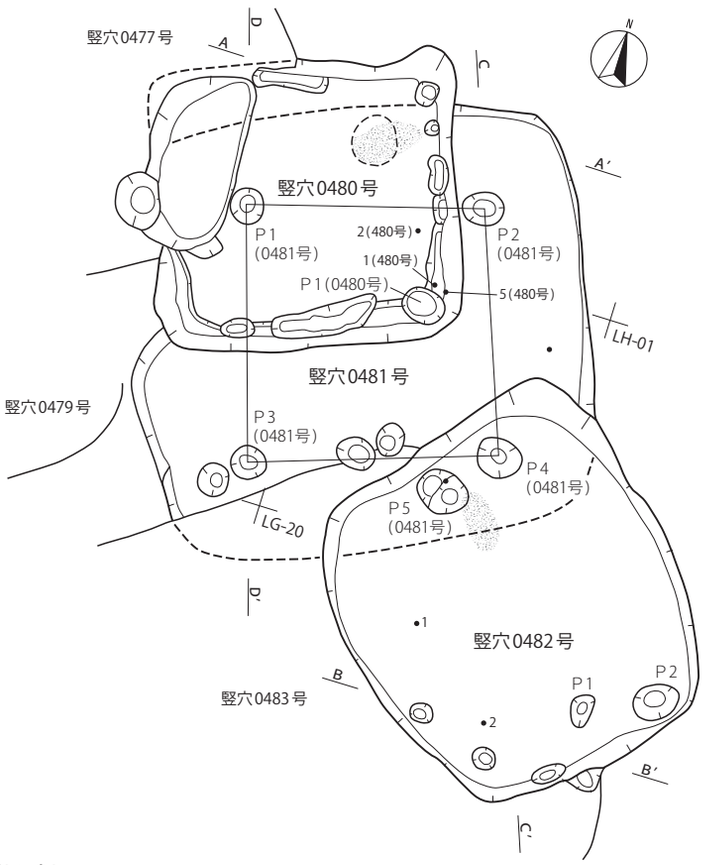
弥生時代終末期前半の所産と思われる。

竪穴0483号　（Fig.362・363、PL.42・86・127）

LG－20を中心に位置する。北東側で竪穴0481・0482号、南西側で竪穴0484号と重複する。新旧関係は、本遺構が竪穴0484号よりも新しい。0482号との関係は、断面図では本遺構を切っている

竪穴 0480・0481・0482 号

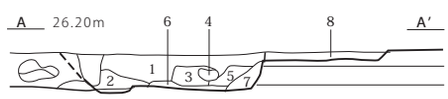


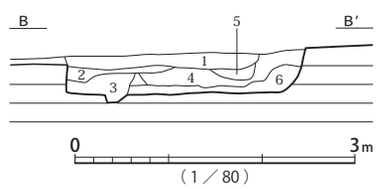


A-A'
0480号
1　褐色土　　ロームブロックをわずかに含む。
2　褐色土　　ローム粒を含む。しまりややあり。
3　褐色土　　ロームブロックを含む。
4　黒褐色土
5　暗褐色土
6　暗褐色土　ローム粒を含む。しまりややあり。
7　暗褐色土　ローム粒を含む。しまりなし。

0481号
8　暗褐色土　ローム粒を含む。

B-B'
0482号
1　暗褐色土　ローム粒を含む。0483号覆土か。
2　暗褐色土　ロームを含む。
3　黒色土　　ロームブロックをわずかに含む。
4　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックをわずかに含む。
5　暗褐色土　ロームブロックを含む。
6　黒褐色土





竪穴 0480 号

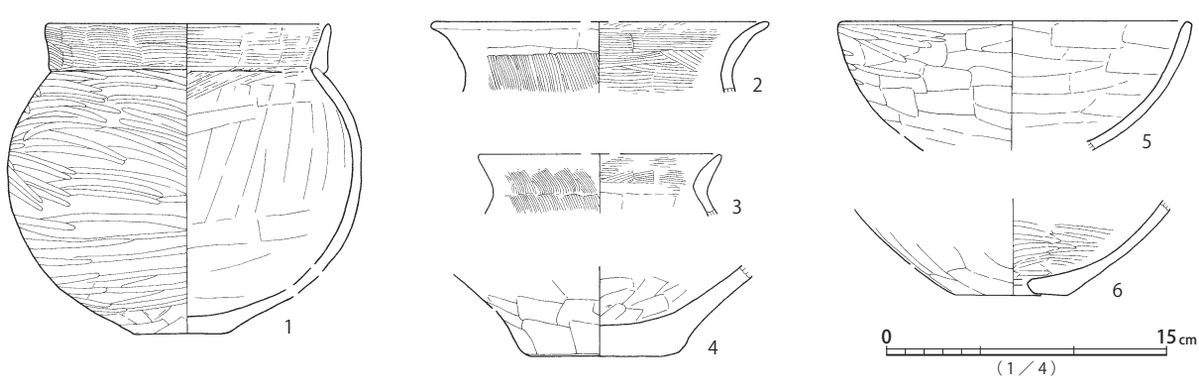
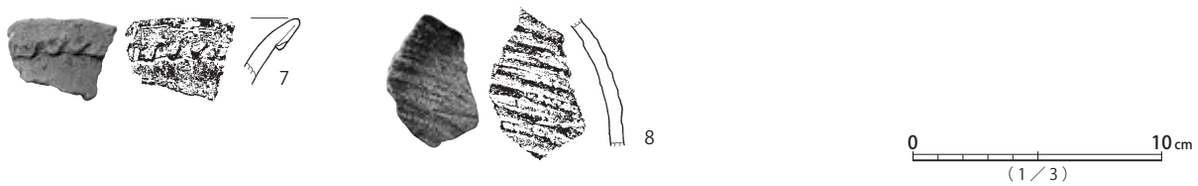
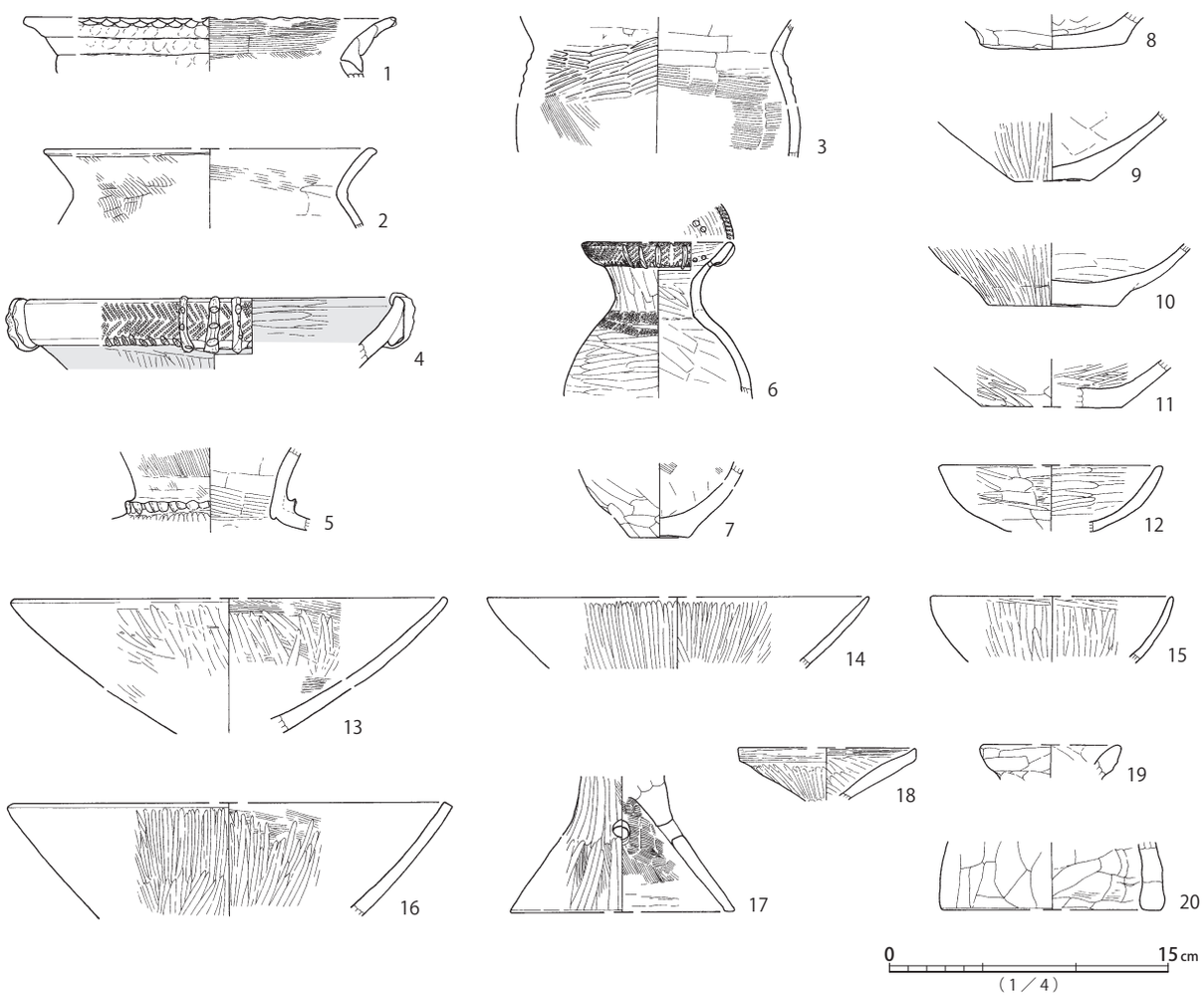


Fig.359　竪穴0480号(1) 遺構遺物、竪穴0481号(1) 遺構、竪穴0482号(1) 遺構

竪穴 0480 号



竪穴 0481 号



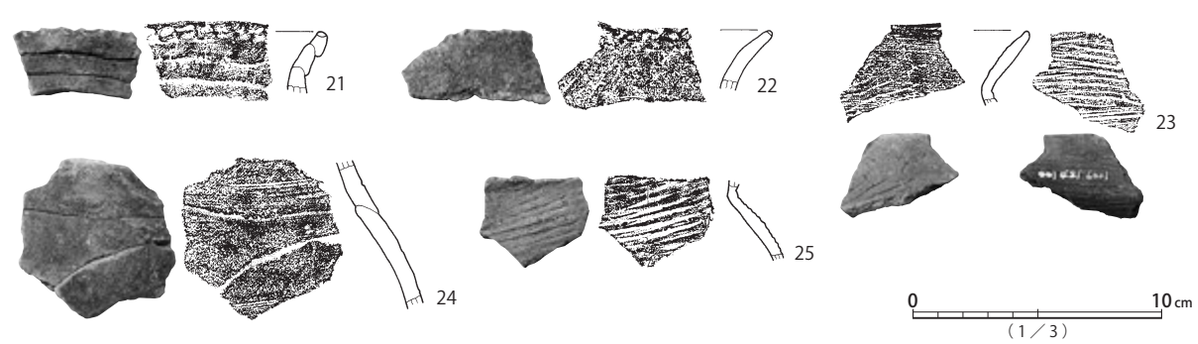
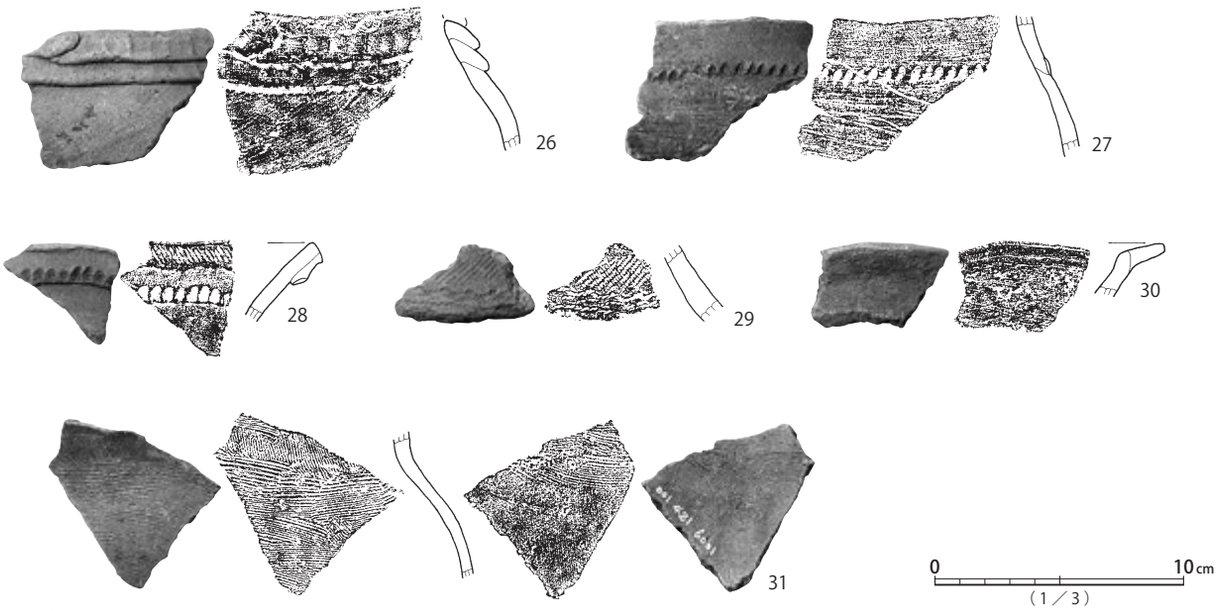


Fig.360　竪穴0480号(2) 遺物、竪穴0481号(2) 遺物

竪穴 0481 号



竪穴 0482 号

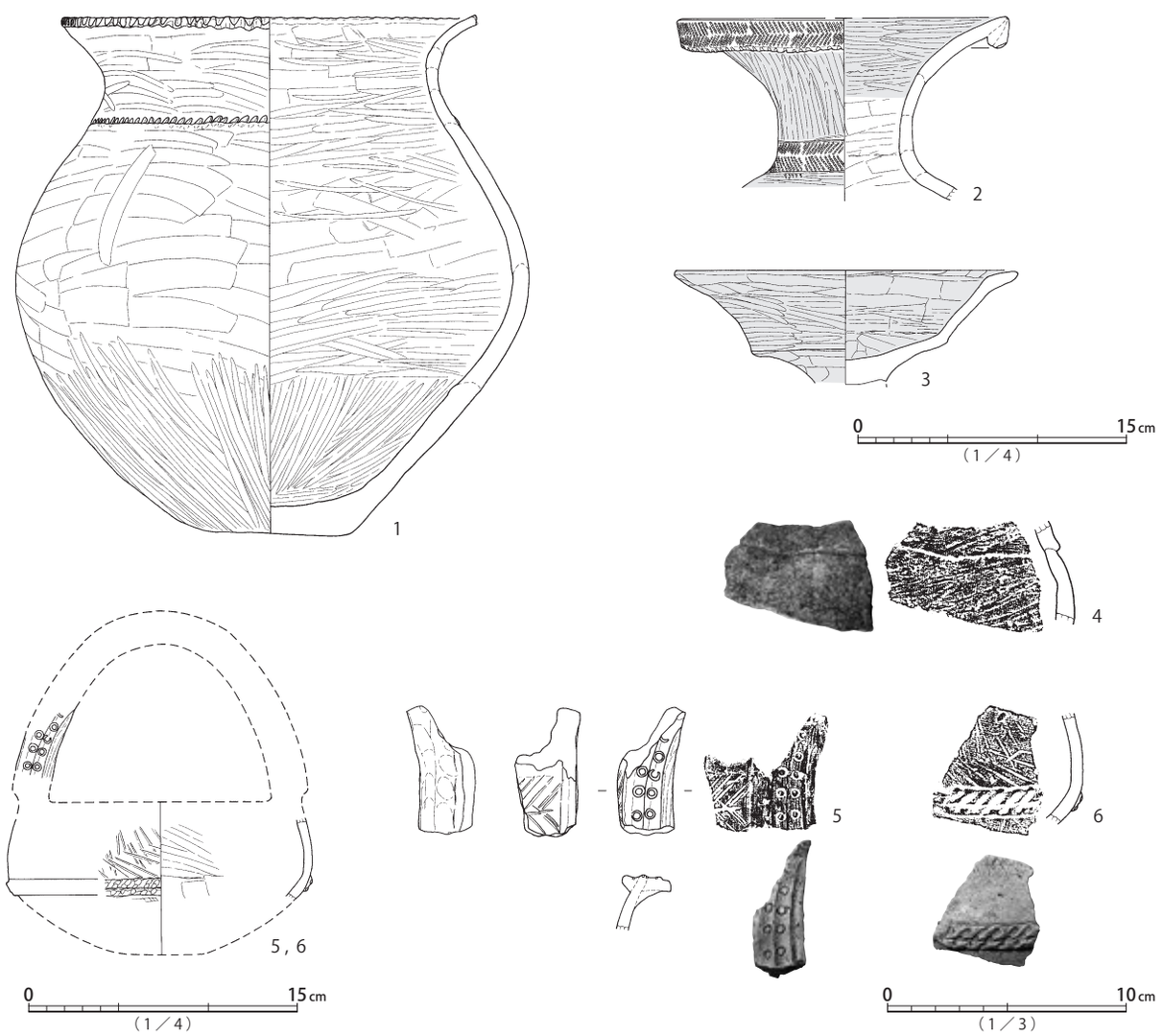


Fig.361　竪穴0481号(3) 遺物、竪穴0482号(2) 遺物

ように見えるが、0482号の覆土最上層は本遺構に伴う可能性があり、明確でない。0481号についても断面図など記録上の根拠はないが、出土遺物の検討から、本遺構が0481・0482号よりも新しいと思われる。

平面形態は長方形を呈すと思われるが、北東・南西辺壁が検出されないため、詳細は不明である。推定規模は6.80×5.10m、推定遺構下場面積は26.2㎡、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位は、長軸を基準とした場合はN−55°−E、短軸を基準とした場合はN−35°−Wとなる。壁周溝が検出されており、全周したものと思われる。北隅と南西側で検出されている落ち込みは、掘り方まで掘削したものであろう。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2・7・8は甕形土器、3・9・10は壺形土器、4は直口縁壺形土器、5は椀形土器、6は高杯形土器である。2はタタキ整形を施す。

弥生時代終末期後半の所産と思われる。

竪穴0484号　（Fig.362・363、PL.42・86・127）

LG−29を中心に位置する。北東側で竪穴0483号と重複する。新旧関係は、本遺構が竪穴0483号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すが、北東辺壁が検出されていないため、詳細は明確でない。推定規模は4.27×4.49m、推定遺構下場面積は15.0㎡、確認面からの深さは0.17mを測る。主軸方位はN−26°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されているが、掘り込みは確認できない。P1は貯蔵穴と考えられる。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1・9〜12は甕形土器、2は短頸壺形土器、3・6・17は椀形土器、4は器種不明の底部、5は直口縁壺形土器、7は器台形土器の器受部が独立した皿形土器、8・18は高杯形土器、13〜16は壺形土器である。1は口唇部にハケによる押捺を加える。2は全体に粗いつくりで、口縁部はわずかに内湾する。7の内面調整も粗い。18はパレス文様を施す。3・5・16はP1からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0486号　（Fig.364・365、PL.42・141）

LG−27を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整方形を呈すが、掘り込みが浅いため、明確でない。規模は4.24×4.32m、遺構下場面積は16.6㎡、確認面からの深さは0.07mを測る。主軸方位は、南西辺壁を基準とした場合はN−50°−W、北西辺壁を基準とした場合はN−40°−Eとなる。炉跡は遺構中央西寄りから検出されている。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

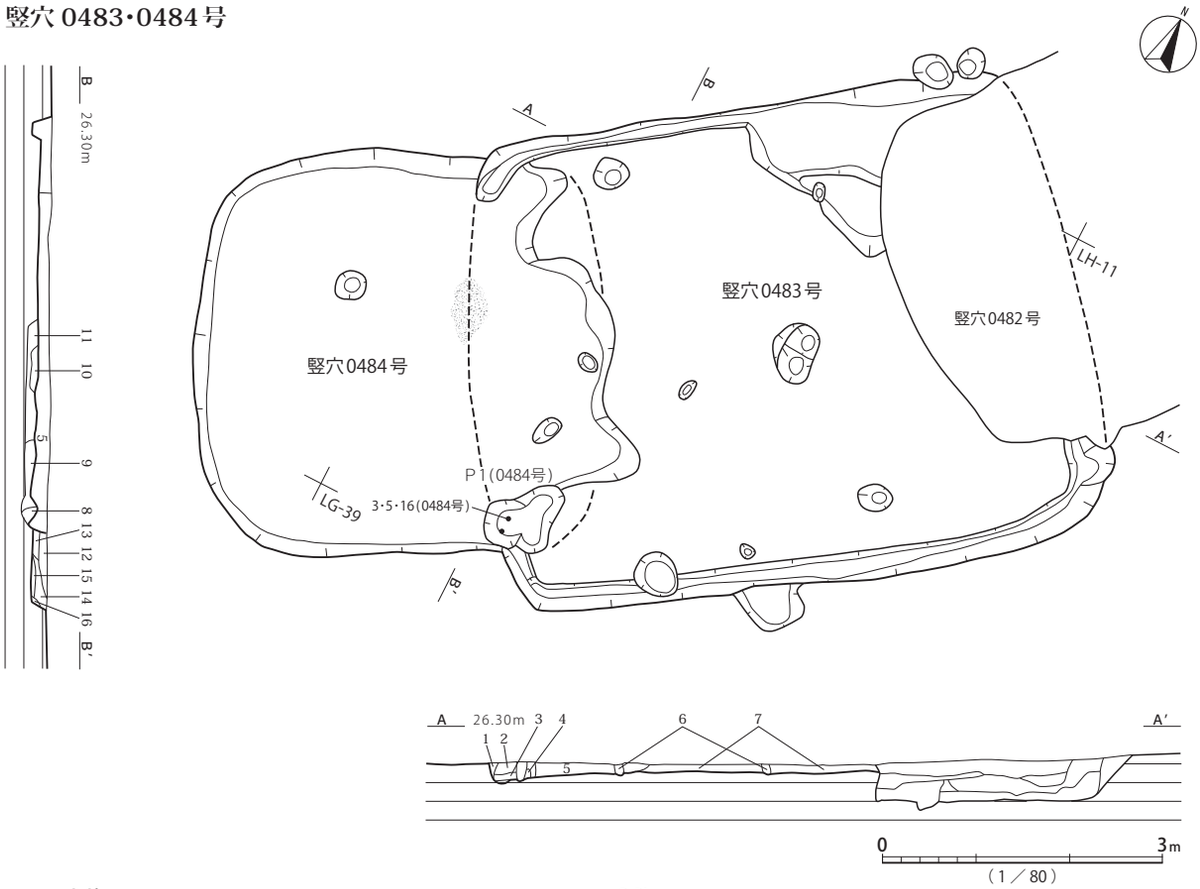
実測可能遺物は、1〜6は甕形土器である。1・3は口縁端部に押捺を加え、2は面取りされる。土器以外では、7の軽石が出土している。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0488号　（Fig.366〜368、PL.42・86・87・97・127・135）

LG−04を中心に位置する。南側で竪穴0490号、西側で溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、

竪穴 0483・0484 号



A-A'

0483号

1 褐色土
2 黒褐色土　ロームを含む。
3 黒褐色土　ローム粒を含む。
4 褐色土
5 暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
6　ロームブロック。
7 暗褐色土

B-B'

0483号

8 暗褐色土　ロームブロックを含む。しまりやや弱い。貼床。
9 暗褐色土　ロームブロックを含む。しまりあり。貼床。
10 暗褐色土　ロームブロックを含む。しまりやや弱い。貼床。
11 黒褐色土　ロームブロックを含む。しまりあり。貼床。

0484号

12 暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりやや弱い。
13 暗褐色土　ローム粒をまばらに含む。しまりやや弱い。
14 暗褐色土　ローム粒をまばらに含む。しまりあり。
15 暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまりあり。
16 暗褐色土　ロームを含む。

竪穴 0483 号

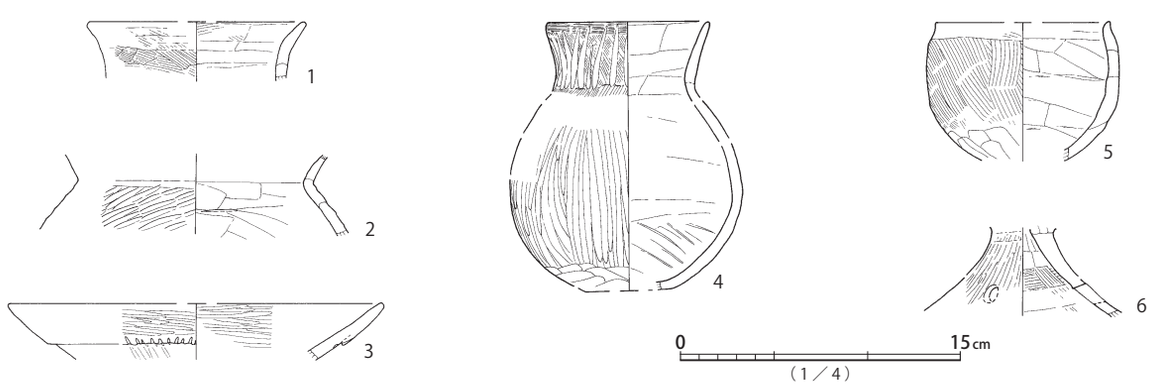
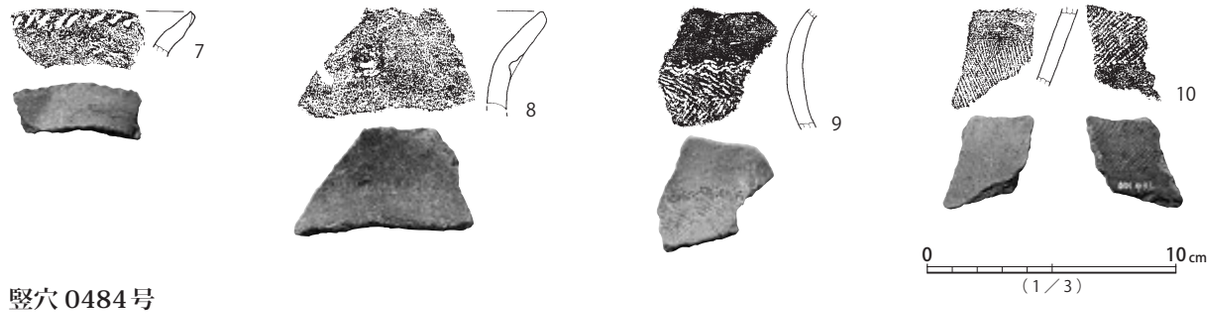
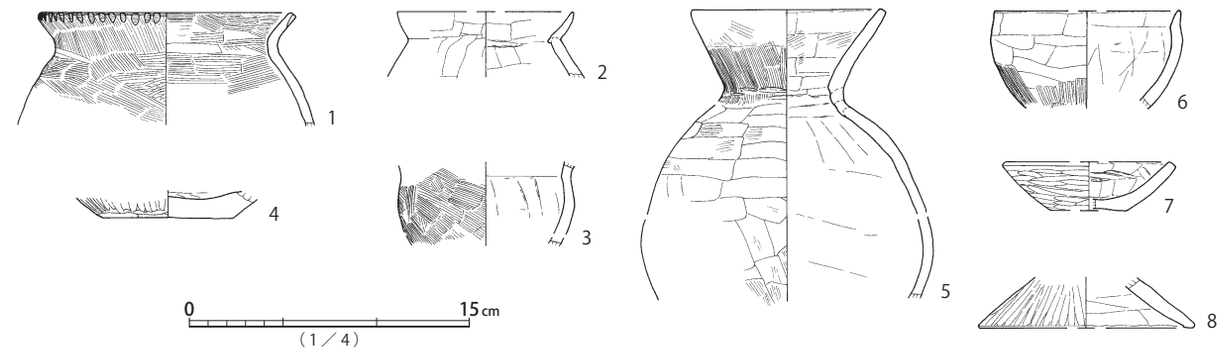


Fig.362　竪穴0483号(1) 遺構遺物、竪穴0484号(1) 遺構

竪穴 0483号



竪穴 0484号



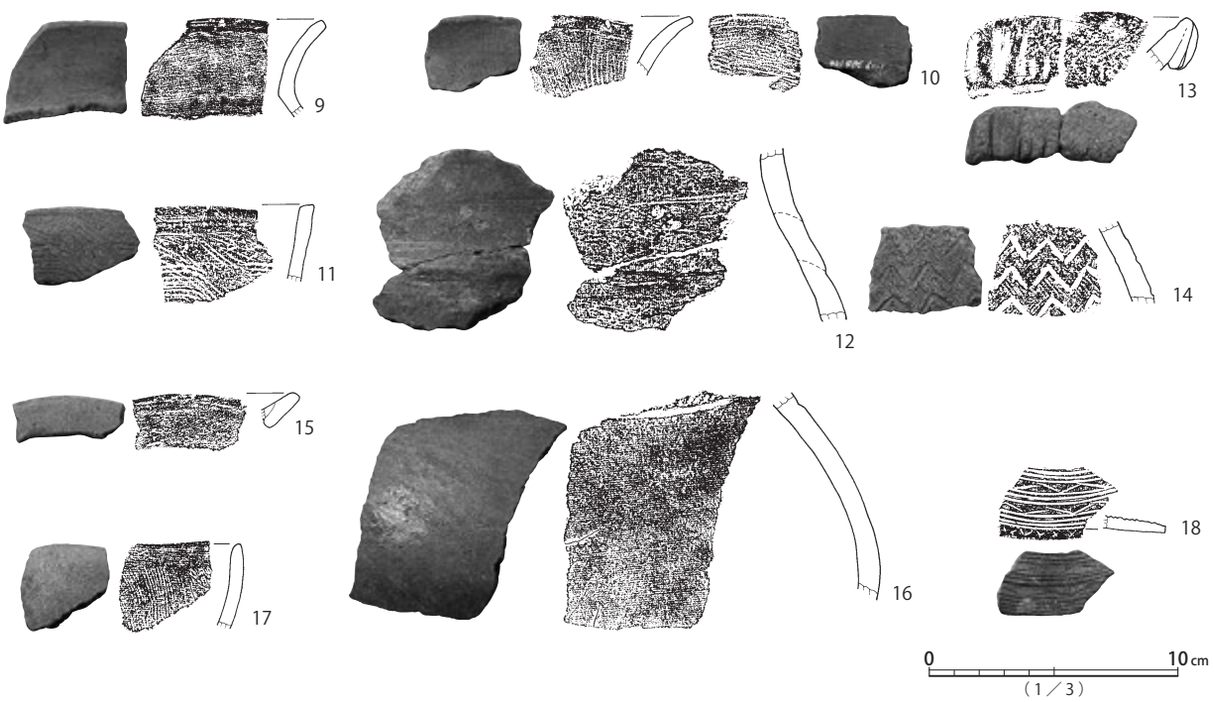


Fig.363　竪穴0483号(2) 遺物、竪穴0484号(2) 遺物

本遺構が0490・2020号よりも古い。

平面形態は長方形を呈し、推定規模は4.63×4.25m、推定遺構下場面積は15.2㎡、確認面からの深さは0.17mを測る。主軸方位はN−26°−Wである。炉跡は遺構中央北東寄りから検出されている。南東隅のP1は貯蔵穴と思われるが、明確でない。壁周溝は北東辺壁からのみ検出されている。主柱

竪穴 0486 号

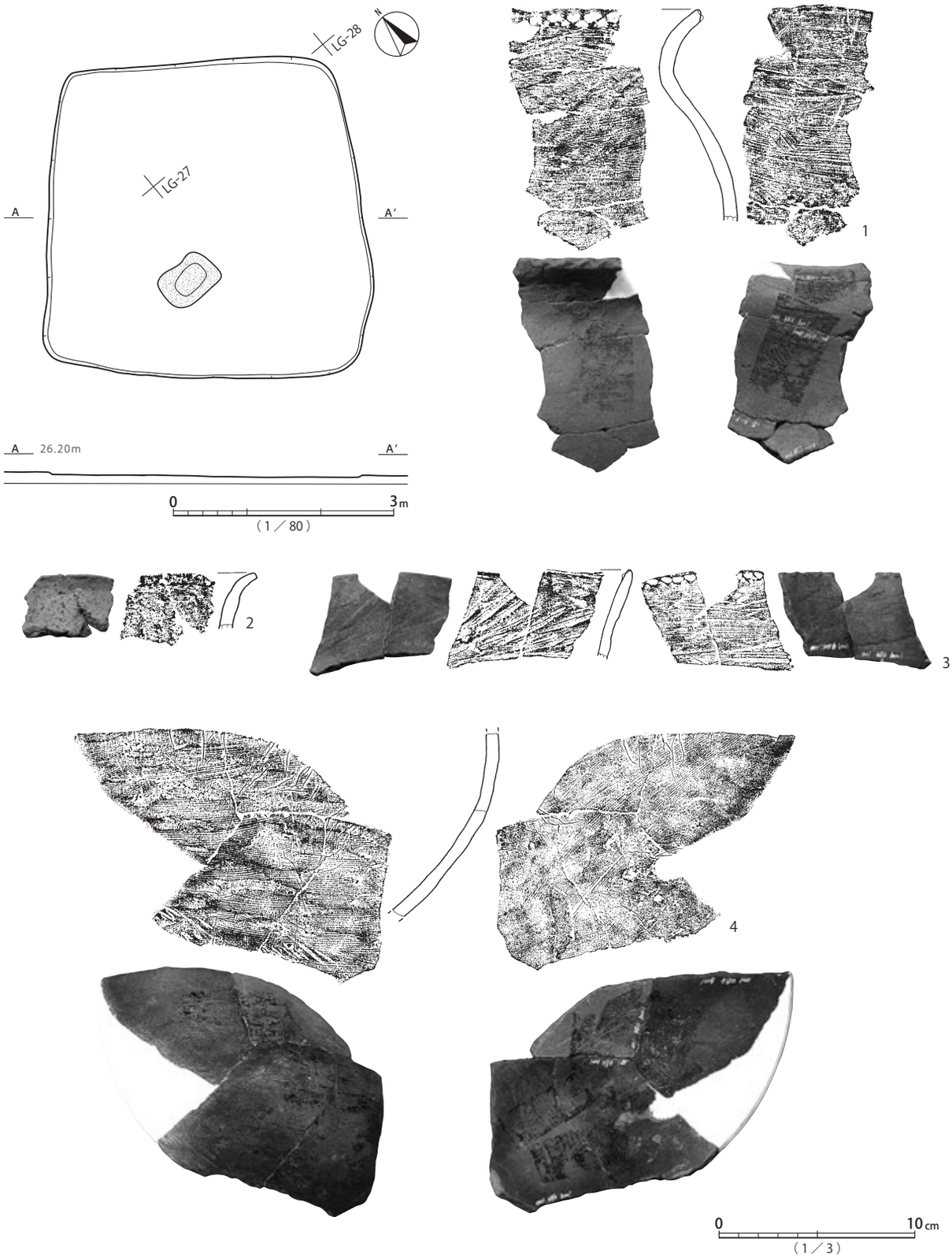


Fig.364　竪穴0486号(1) 遺構遺物

竪穴 0486 号

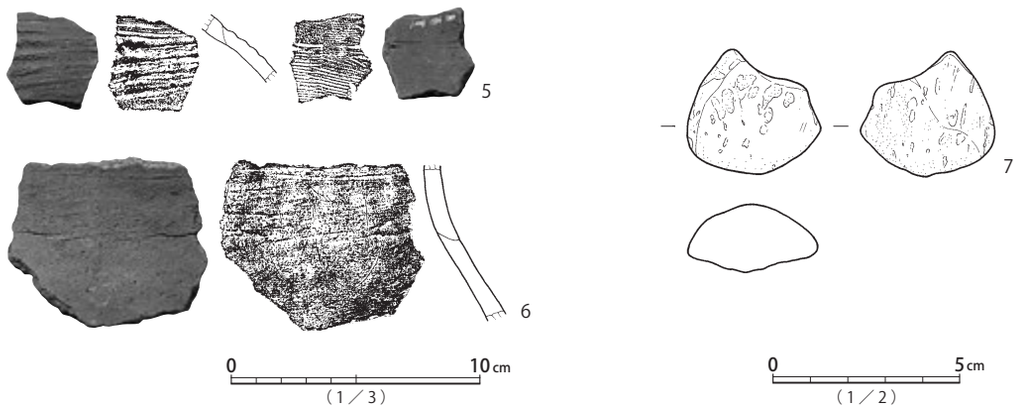


Fig.365　竪穴0486号(2) 遺物

穴は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜9・20・23・42〜45は甕形土器、10・12・13は直口縁壺形土器、11・30・46〜53は壺形土器、14・16・18・54・55は椀形土器、15・17は小型の壺形土器、19は台付甕形土器、21・24〜29は器種不明の底部、22は底部有孔の甑形土器、31〜38は高杯形土器、39・40は器台形土器である。3〜6・20・22・45はタタキ甕で、タタキののちにハケ調整を加える個体が多い。頸部はいずれもくの字状に屈折するが、口縁部は直線的に開くものと外反して開くものがある。9は5の字状有段口縁の北陸南西部系で、口縁部は外傾する。西辺部からの出土はごく少ない。31は口縁部が屈折し、東海東部系の影響を受けたものであろうか。土器以外では41の磨石・敲石が出土している。遺物は遺構北側からまとまって検出されており、出土状況から埋没過程で投棄されたものと思われる。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴 0489 号　（Fig.370、PL.42・127）

LG−02を中心に位置する。東隅で溝2020号（上層）と重複し、西側の大部分は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が溝2020号よりも古い。

平面形態は方形を呈すと考えられるが、東隅周辺がわずかに検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.40mを測る。主軸方位はN−36°−Wである。P1は主柱穴で、P2は貯蔵穴であろう。壁周溝が巡るが、南東辺壁際からは検出されていない。

実測可能遺物は1の壺形土器のみである。

古墳時代前期の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴0490号　（Fig.366、PL.42）

LG−24を中心に位置する。北側で竪穴0488号、南西側で竪穴0491号、西側で溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0488号より新しく、2020号よりも古い。0491号との関係は、遺構平面形態から、本遺構のほうが新しいと思われるが、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

竪穴 0488・0490・0491 号

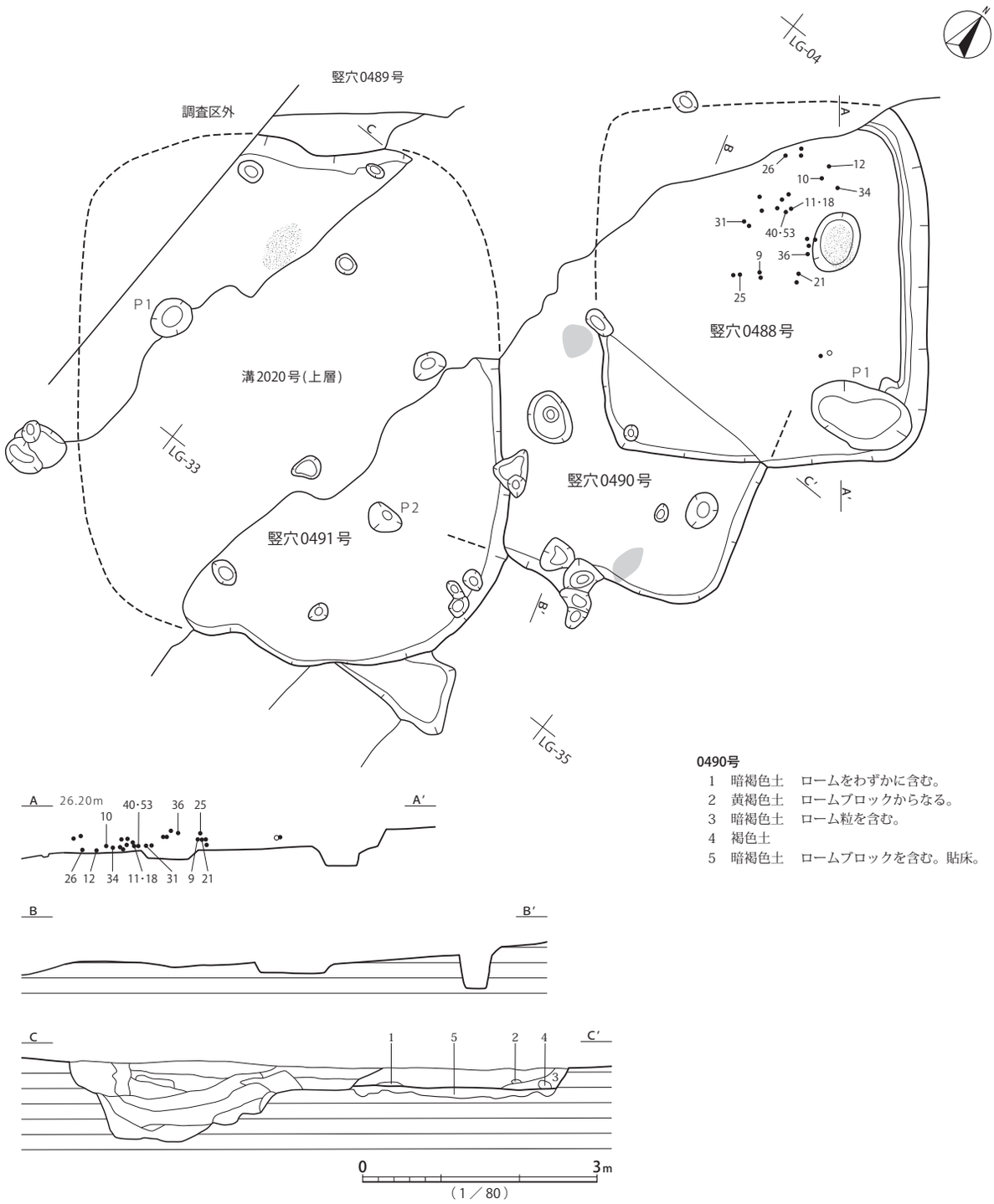


Fig.366　竪穴0488号(1) 遺構、竪穴0490号 遺構、竪穴0491号(1) 遺構

平面形態は方形を呈すと思われるが、遺構南東隅周辺が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.16mを測る。主軸方位はN−17°−Wである。床面からは焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。遺構確認範囲からは、炉跡や貯蔵穴、主柱穴などの屋内施設は検出されていない。

竪穴 0488 号

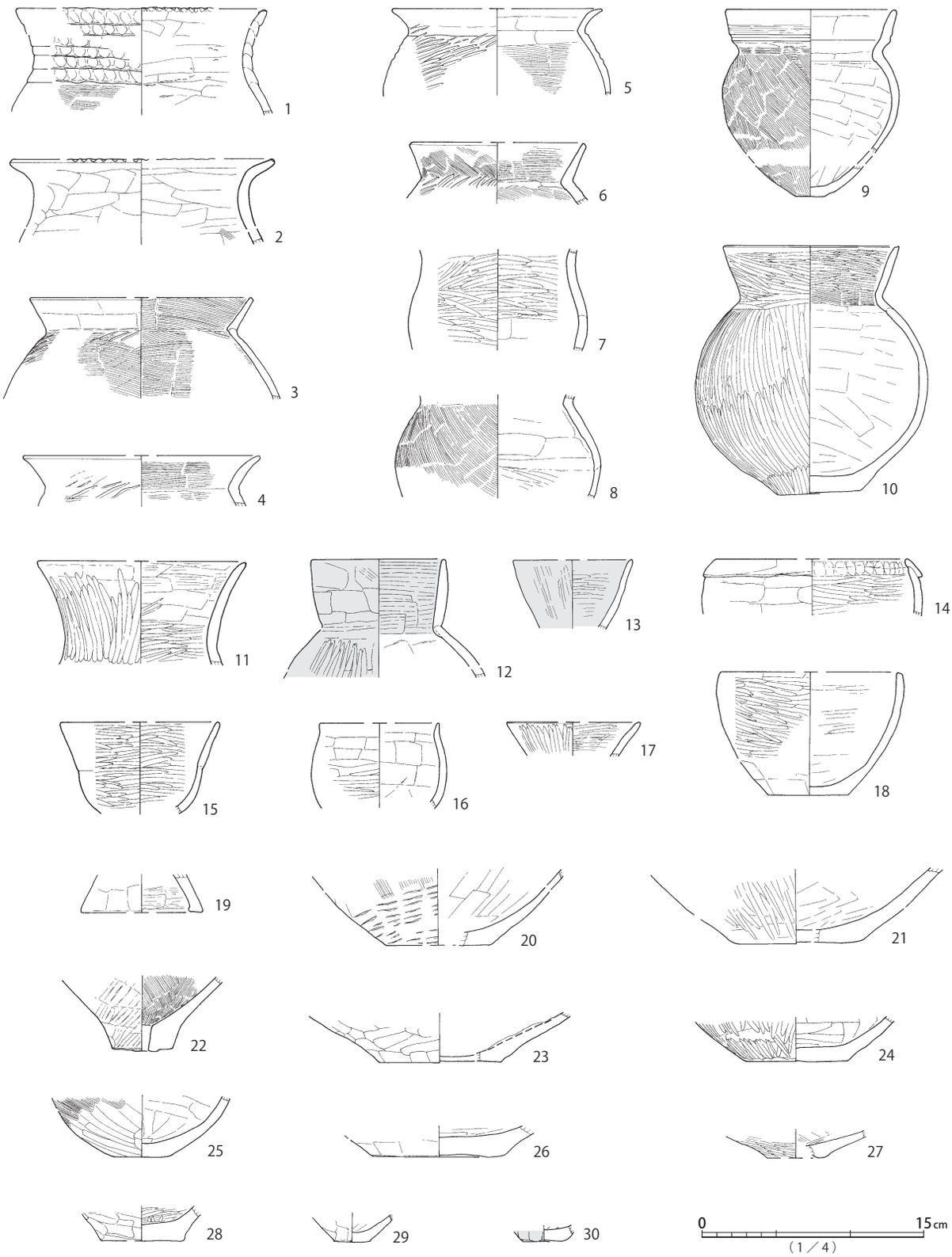


Fig.367　竪穴0488号(2) 遺物

竪穴 0488号

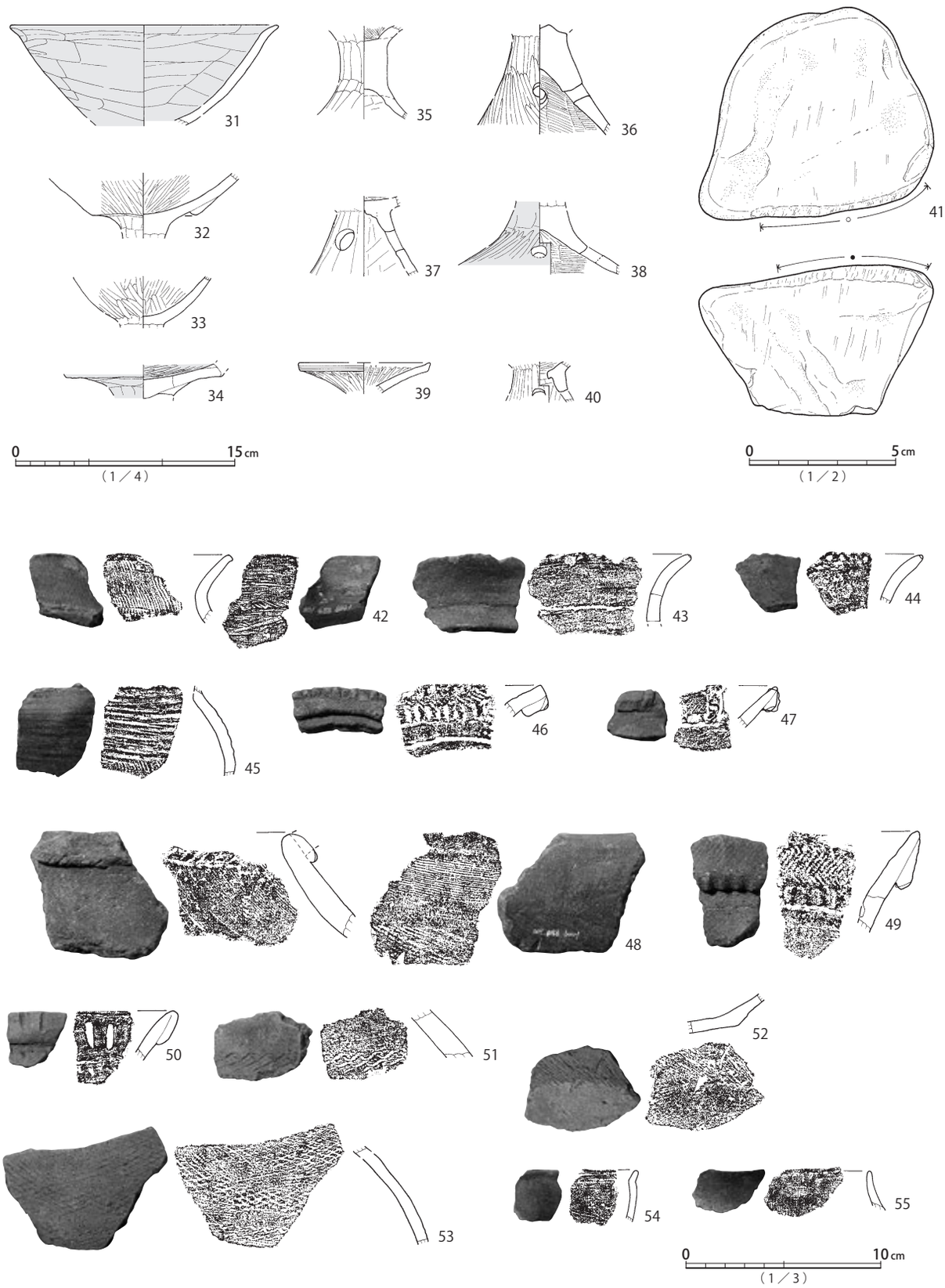


Fig.368　竪穴0488号(3) 遺物

竪穴 0491 号

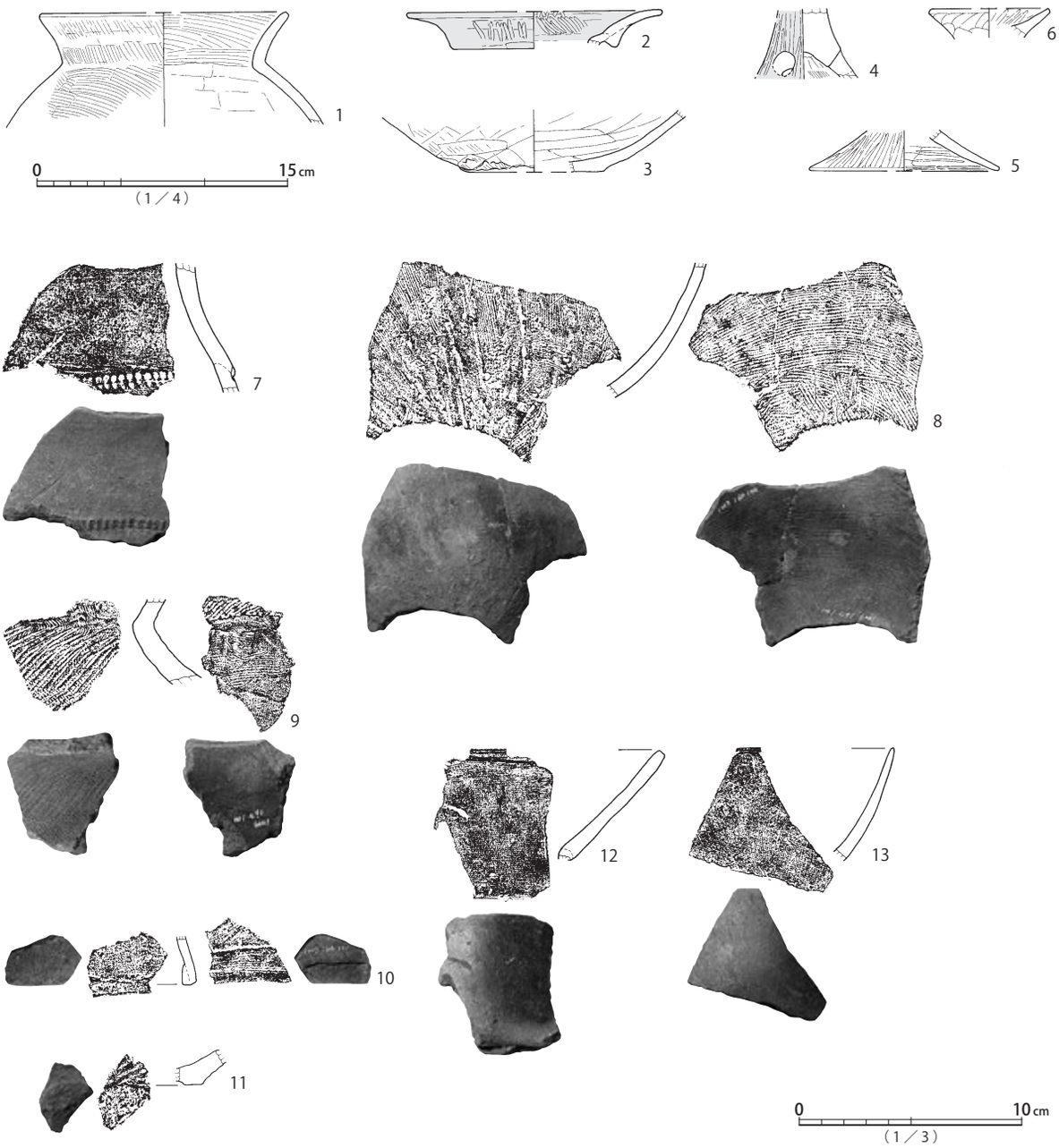


Fig.369　竪穴0491号(2) 遺物

遺構平面形態から、古墳時代前期の所産と思われるが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

竪穴0491号　（Fig.366・369、PL.42・87・127）

LG−23を中心に位置する。北東側で竪穴0490号、中央で溝2020号（上層）と重複し、北西隅は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が2020号よりも古い。0490号との関係は、遺構平面形態から、本遺構のほうが古いと思われるが、断面図などの記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

平面形態は胴張隅丸長方形ないし長楕円形を呈すと思われるが、遺構中央を上総国分僧寺寺院地外

郭溝（溝2020号）により大きく壊されるため、詳細は不明である。規模は主軸長6.49m、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位はN−38°−Wである。炉跡は北西辺壁寄りから検出されているが、掘り込みが認められず、明確でない。炉跡が中軸線上に位置した場合、副軸長は5.4m程度、床面積は29.0㎡程度になるものと考えられる。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1・3・7・8・11は甕形土器、2・9は壺形土器、4・5・12・13は高杯形土器、6は器台形土器、10は台付甕形土器である。10は裾部が折り返され、S字甕であろう。11は輪台状の底部でタタキ整形を施す。

遺構平面形態から、弥生時代後期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0492号　（Fig.371、PL.42・87・128・135・139）

LG−35を中心に位置する。南西辺壁で土坑状の掘り込みと重複する。新旧関係は、断面図などの記録上の根拠がないが、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は小型の長方形を呈し、推定規模は3.54×2.91m、推定遺構下場面積は8.8㎡、確認面からの深さは0.14mを測る。主軸方位はN−52°−Wである。遺構中央東寄りから検出された掘り込みは、炉跡の可能性があるが、明確でない。柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1・6は甕形土器、2・3は器種不明の底部、4は器台形土器、5は高杯形土器、7・9は壺形土器、8は短頸壺形土器である。土器以外では10の石皿片と11の磨石が出土している。1・2・4は北隅からの出土である。

弥生時代終末期の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0496号　（Fig.372、PL.43・87・97・128・132・135）

LH−51を中心に位置する。他遺構との重複はないが、東隅は調査区外に延びる。

平面形態は方形を呈し、規模は4.82×5.33m、推定遺構下場面積は20.8㎡、確認面からの深さは0.60mを測る。主軸方位はN−32°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されており、調査図面に記載がなかったため、断面図と写真から判断し、およその位置を記した。P1〜4は主柱穴で、P1は柱の抜き取りが行われた可能性がある。P5は出入口施設で、不整形のP6は貯蔵穴の可能性があるが、明確でない。南西壁際を中心に柱穴状の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。遺構西側からは焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。覆土中にはロームとロームブロックを多く含み、人為的に埋め戻されたものと思われる。

実測可能遺物は、1・3は甕形土器、2・4は壺形土器、5は高杯形土器である。1はタタキ甕で、胴部上半タタキ整形ののち、胴部下半にハケ調整とケズリ状のヘラナデを加える。土器以外では6の打製石斧と7の敲石が出土している。6は縄文時代の所産と思われる。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0500号　（Fig.373、PL.87）

LG−55を中心に位置する。南西隅で竪穴0501号と重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、断面図などの記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

竪穴 0489 号

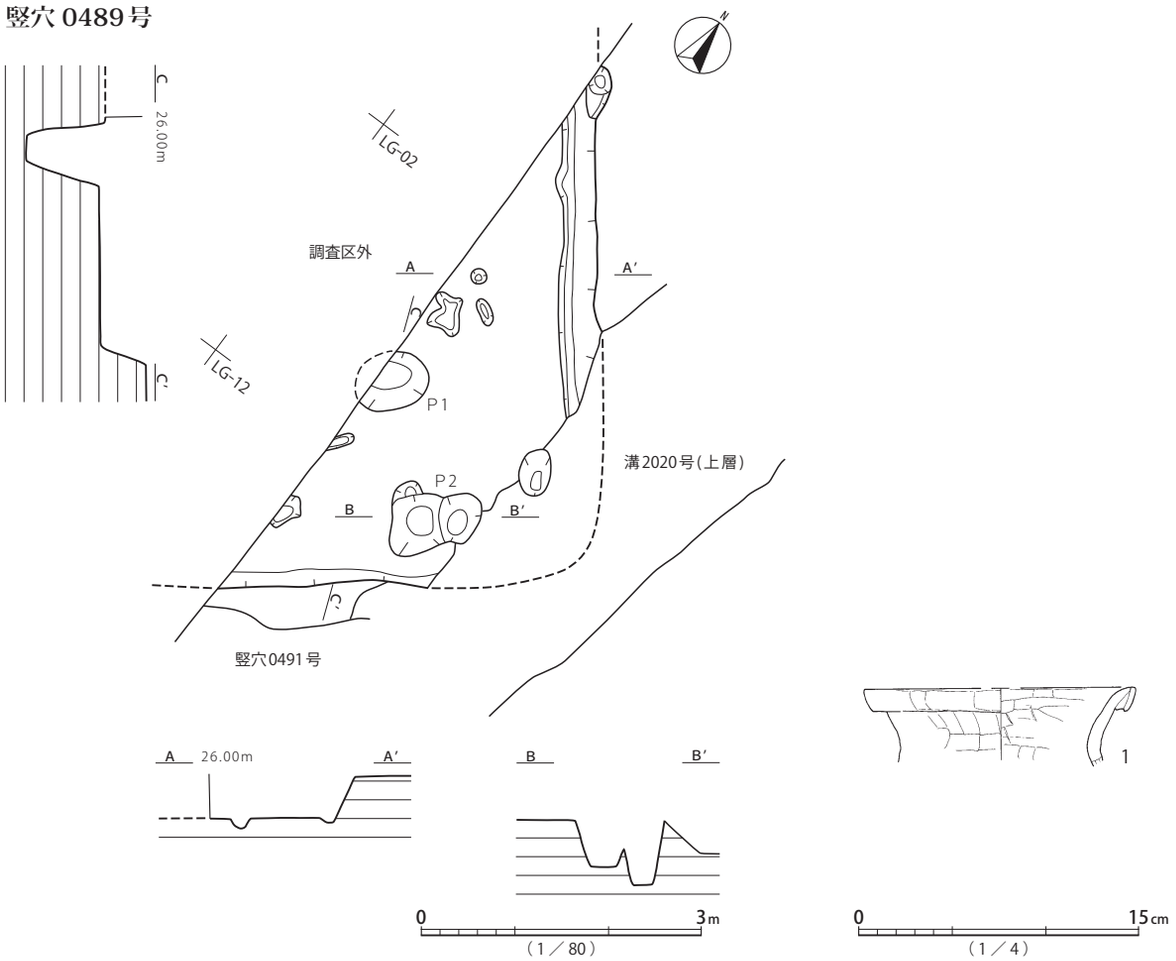


Fig.370　竪穴0489号 遺構遺物

平面形態は小型の長楕円形を呈し、規模は4.10×3.60m、遺構下場面積は11.8㎡、確認面からの深さは0.20mを測る。主軸方位はN−16°−Wである。炉跡は中軸線上北寄りから検出されている。P1は貯蔵穴と思われる。柱穴や壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は壺形土器、2は甕形土器である。1は口頸部が短く、口縁部は直線的に開く。2はタタキ甕で、重複する竪穴0501号6と同一個体の可能性が高い。

弥生時代終末期後半の所産と思われる。

竪穴0501号　（Fig.373、PL.43・128・141）

LG−64を中心に位置する。北東側で竪穴0500号、南東辺壁で土坑502号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が502号よりも古い。0500号との関係は、断面図などの記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は、やや胴の張る小型の隅丸方形を呈し、推定規模は3.45×3.25m、推定遺構下場面積は8.9㎡、確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方位はN−27°−Wである。炉跡は主軸線上北寄りから検出されている。貯蔵穴や明確な柱穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2は器種不明の底部、3・5・6は甕形土器、4は壺形土器である。3・5は口縁

竪穴 0492 号

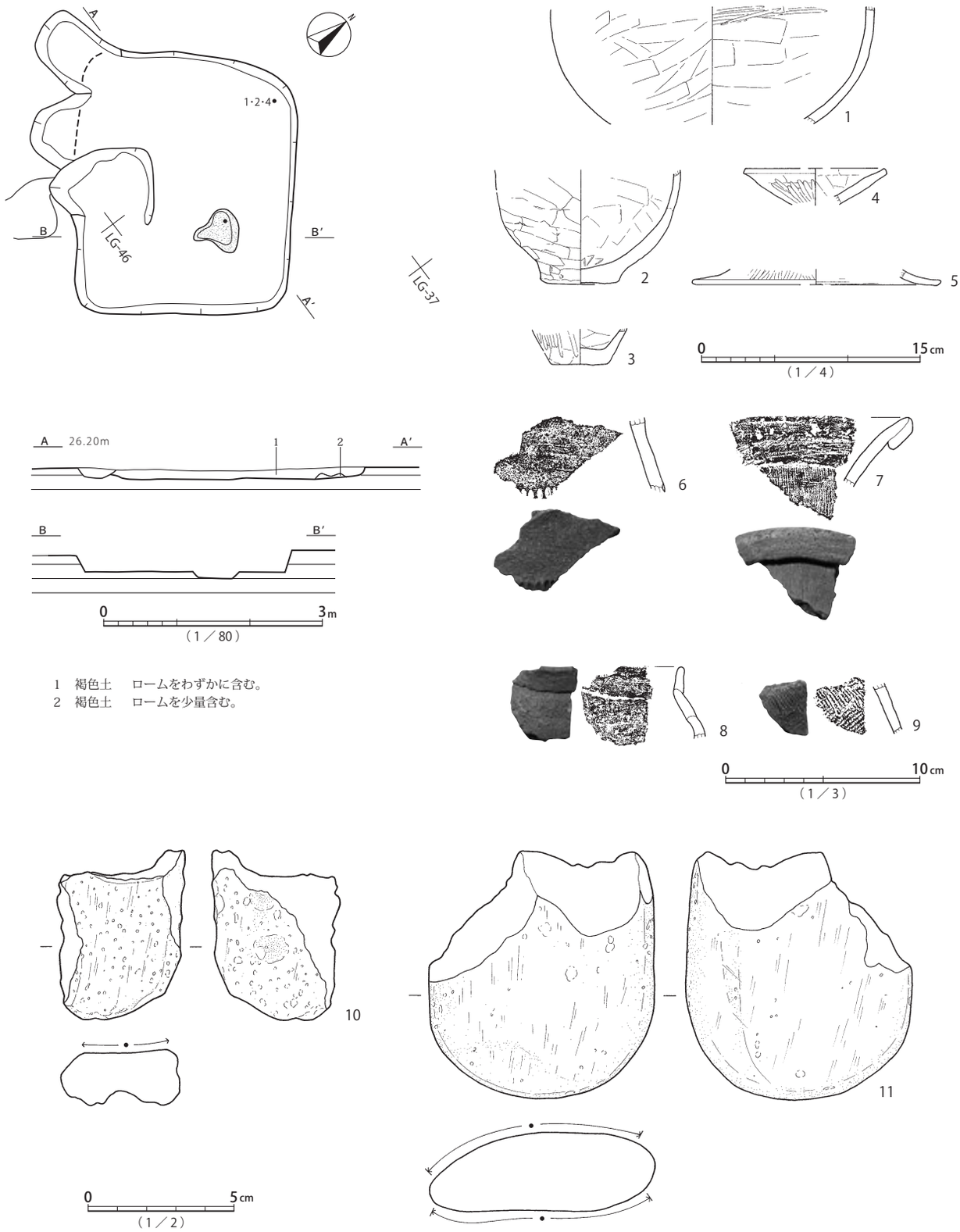
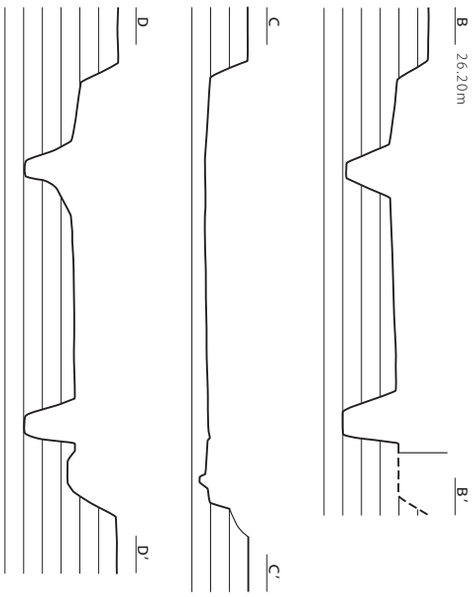
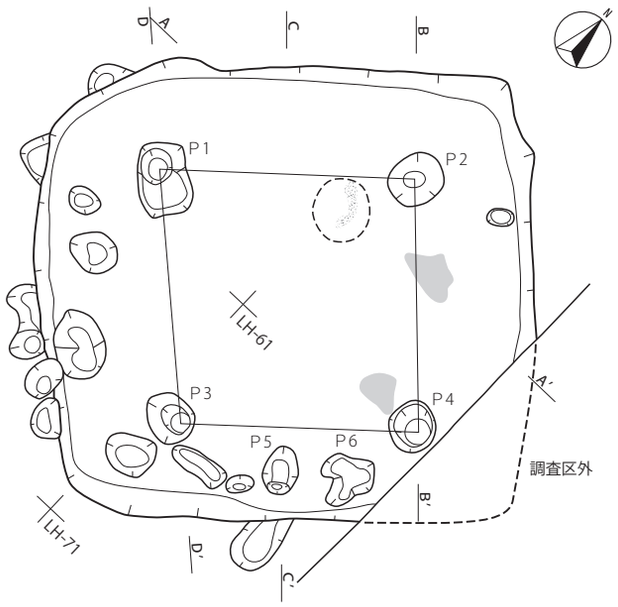


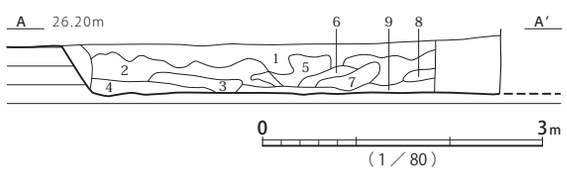
Fig.371 竪穴0492号 遺構遺物

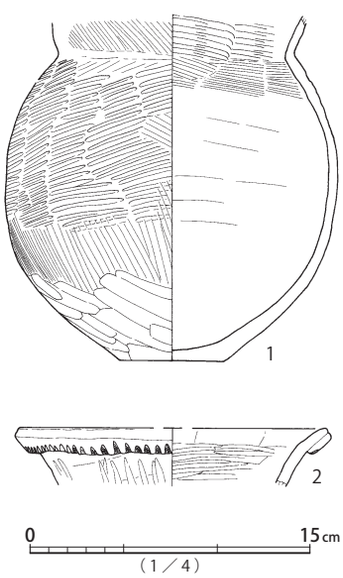
竪穴 0496号





1　暗褐色土　ロームブロックをわずかに含む。
2　黄褐色土　ロームブロックを主体とし、暗褐色土が混じる。
3　褐色土　ロームブロックを含み、焼土がわずかに混じる。
4　暗褐色土　ロームブロックを含み、焼土もわずかに混じる。
5　褐色土　ロームブロックを含む。
6　褐色土
7　黄褐色土　ロームブロックを含み、褐色土が混じる。
8　黄褐色土　ロームを主体とし、褐色土が混じる。
9　暗褐色土　ローム・焼土をわずかに含む。





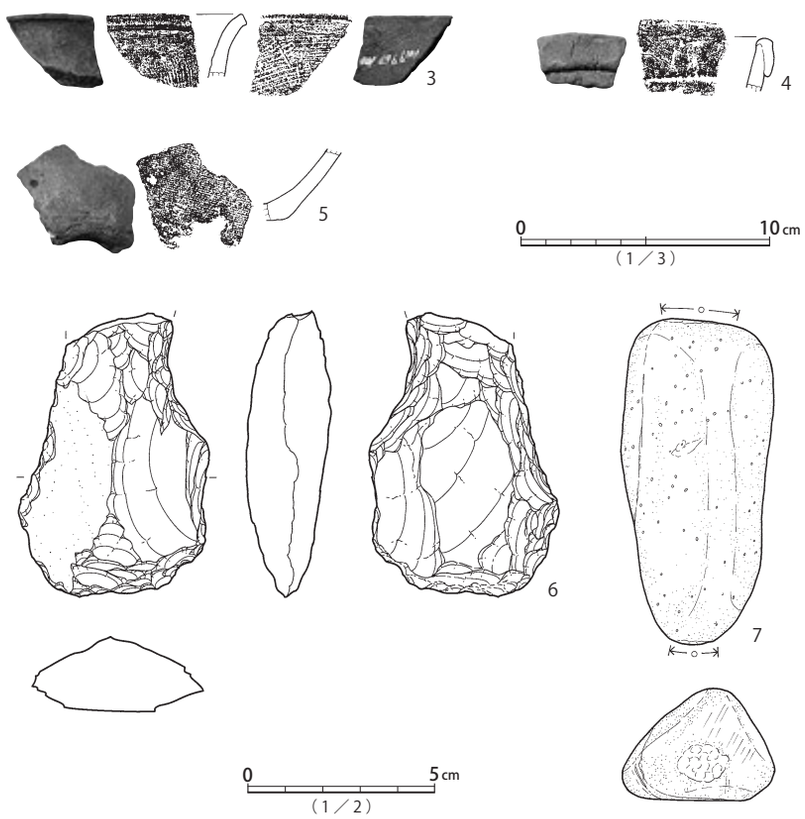


Fig.372　竪穴0496号 遺構遺物

端部に上方からの押捺を加え、同一個体の可能性がある。6はタタキ甕で、重複する竪穴0500号2と同一個体であろう。土器以外では、強い研磨痕を残す7の軽石が出土している。

弥生時代終末期の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0503号　（Fig.374、PL.43・87）

LG−53を中心に位置する。西側で溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2020号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すと考えられるが、西側を上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝2020号）に壊されるため、詳細は不明である。推定規模は4.29×4.02m、推定遺構下場面積は11.3㎡、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位はN−28°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されており、調査図面に記載がなかったが、写真から判断し、およその位置を記した。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は器種不明の底部、2・3は甕形土器、4は台付甕形土器、5・6は壺形土器である。2は口縁端部に交互押捺を加える。3はタタキ甕で、タタキ整形ののちハケ調整を加える。5は折返し状複合口縁で、複合部と口縁部内面に回転結節文区画の帯縄文を施す。

弥生時代後期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0504号　（Fig.375、PL.87・97）

LG−61を中心に位置する。東側で溝2020号（上層）とわずかに重複し、西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が溝2020号よりも古い。

平面形態は方形を呈すと思われるが、遺構南東隅がわずかに検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.11mを測る。東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−7°−Wとなる。南東隅からは不整形の掘り込みが検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1・2の甕形土器である。頸部はくの字状に屈折し、胴部は球形を呈す。いずれも不整形の掘り込み範囲からの出土である。

出土遺物が本遺構に伴うとすれば、古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

竪穴0507号　（Fig.376・377、PL.43・87・128・135・140）

KG−13を中心に位置する。東側で竪穴0509号・古墳0527号、西側で竪穴1755号（上層）・溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0527・1755・2020号よりも古い。0509号との関係は、遺構平面形態から本遺構のほうが新しいと思われるが、断面図などの記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

平面形態は隅丸方形を呈し、推定規模は4.64×4.40m、推定遺構下場面積は15.4㎡、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位はN−50°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。掘り込みは認められないが、調査メモと写真から炉跡と判断した。P1〜3は主柱穴と思われるが、東隅からは対応する柱穴は検出されていない。P4は貯蔵穴と思われるが、炉跡と同軸上に並び、出入口施設の可能性もある。壁周溝は南西壁の一部から検出されている。

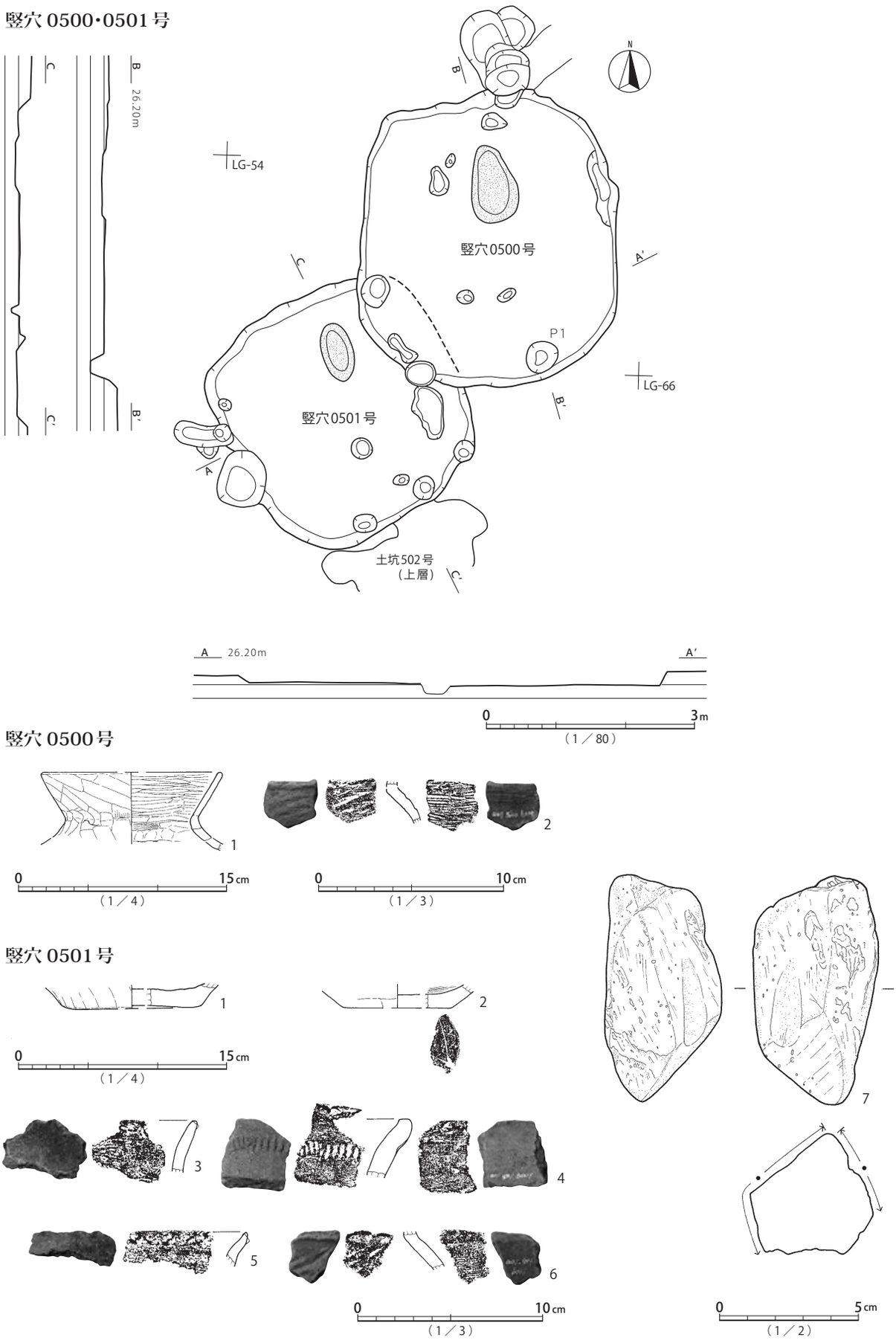
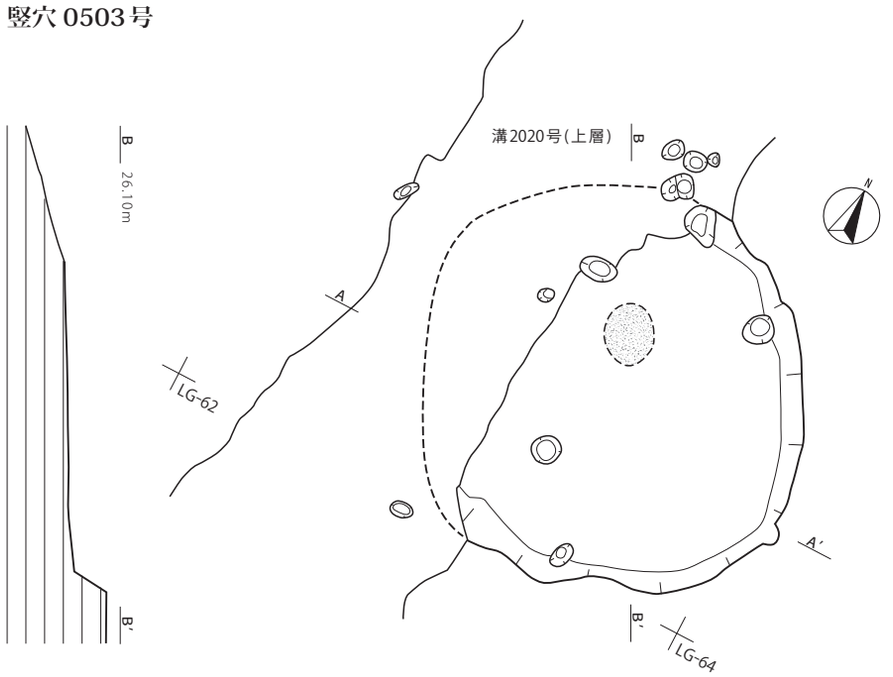
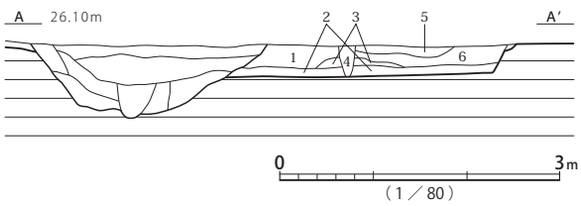


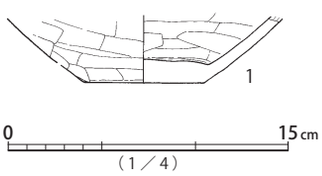
Fig.373　竪穴0500号 遺構遺物、竪穴0501号 遺構遺物

竪穴 0503 号





1　暗褐色土　しまりなし。
2　茶褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。しまりややあり。
3　褐色土　　ローム粒・ロームブロックを含む。
4　黒褐色土　しまりなし。
5　褐色土　　ロームブロックを含む。
6　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。



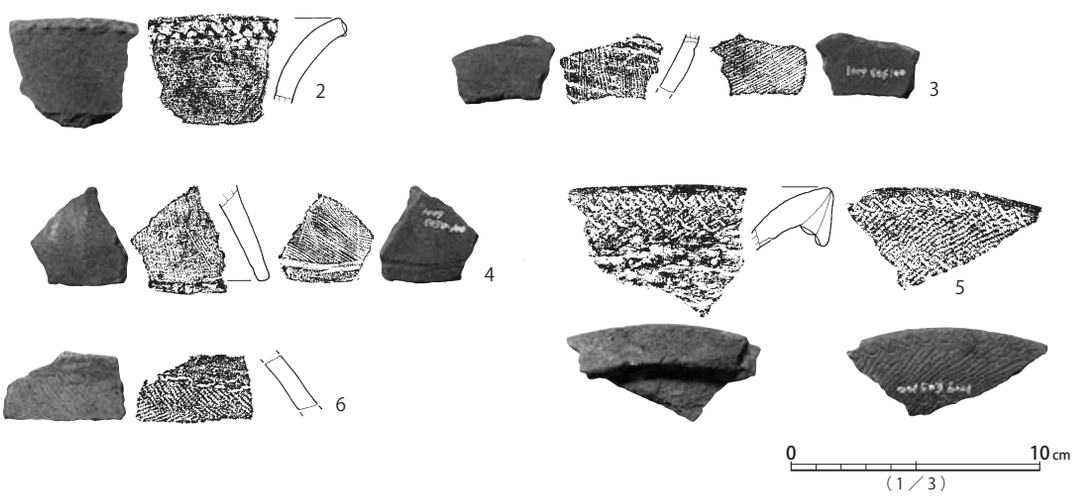


Fig.374　竪穴0503号 遺構遺物

竪穴 0504 号

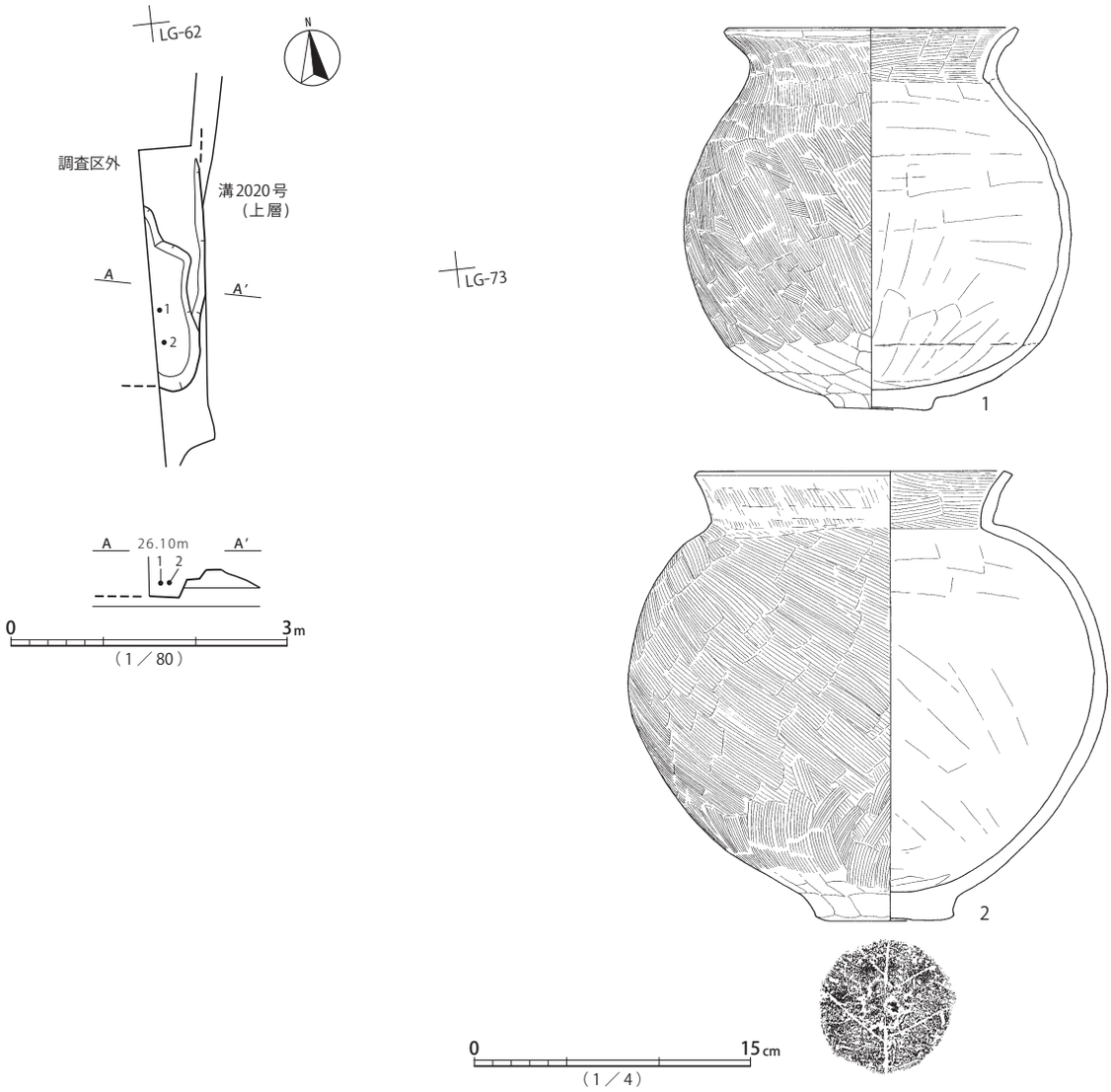


Fig.375　竪穴0504号 遺構遺物

実測可能遺物は、1～3・6は甕形土器、4・7～10は壺形土器、5は高杯形土器である。1は口縁部内面を折返し状にし、交互押捺を加える。3はタタキ整形、5はパレス文様が施される。土器以外では、11の砥石と12の敲石が出土している。2はP4からの出土である。

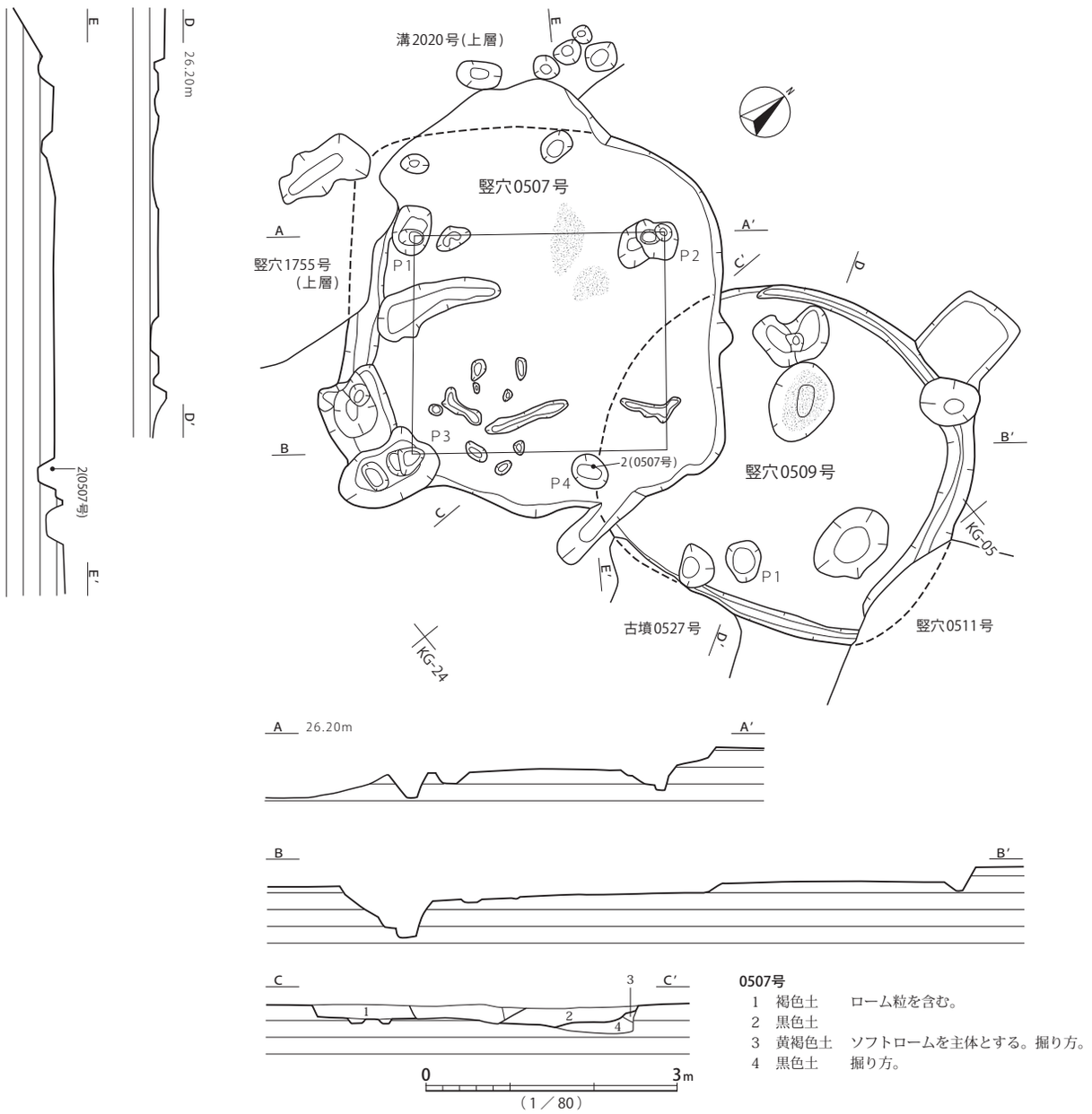
弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0509号　（Fig.376、PL.43）

KG−04を中心に位置する。西側で竪穴0507号、南東隅で竪穴0511号、北東側で竪穴0512号、南側で古墳0527号と重複する。新旧関係は、本遺構が0527号よりも古い。0507・0511・0512号についても、遺構平面形態から本遺構のほうが古いと思われるが、断面図などの記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

平面形態は楕円形を呈し、推定規模は3.97×4.34m、推定遺構下場面積は11.7㎡、確認面からの

竪穴 0507・0509 号



竪穴 0507 号

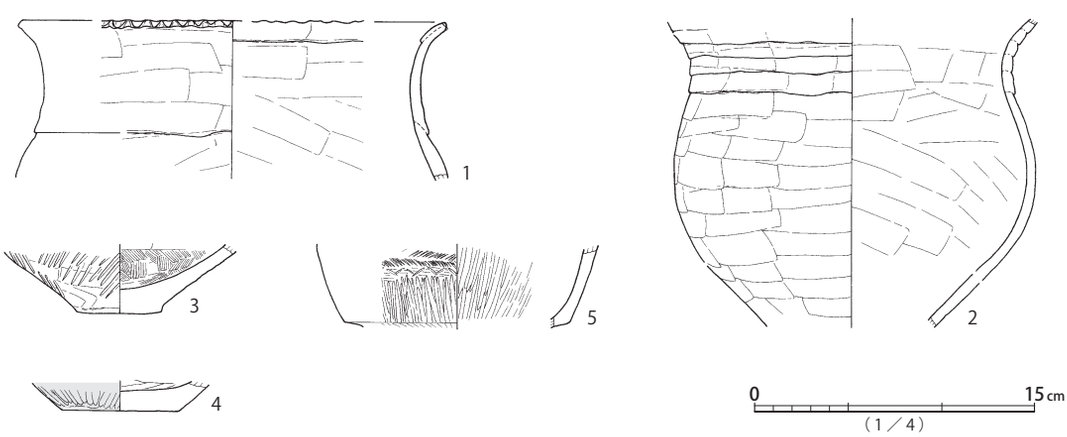


Fig.376 竪穴0507号(1) 遺構遺物、竪穴0509号 遺構

竪穴0507号

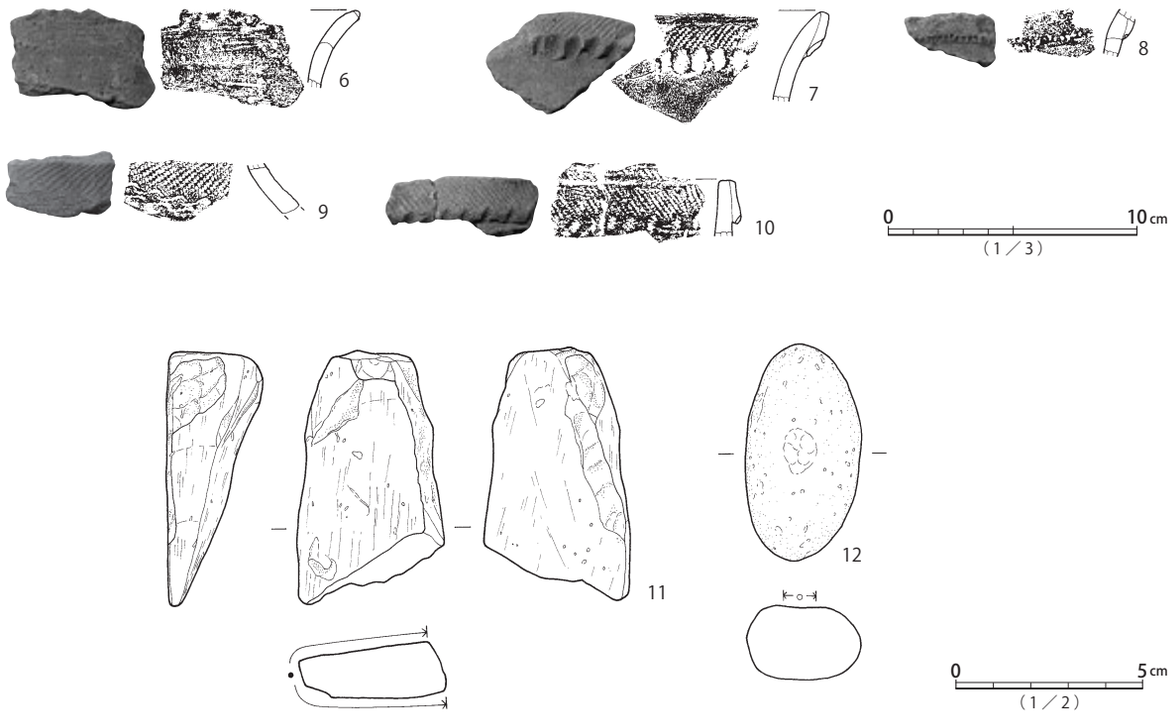


Fig.377　竪穴0507号(2) 遺物

深さは0.14mを測る。主軸方位はN−30°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。P1は出入口施設である。壁周溝が検出され、ほぼ全周したものと思われる。

遺構平面形態から、弥生時代後期後半の所産と思われるが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

竪穴0511号　（Fig.378、PL.43・87・128）

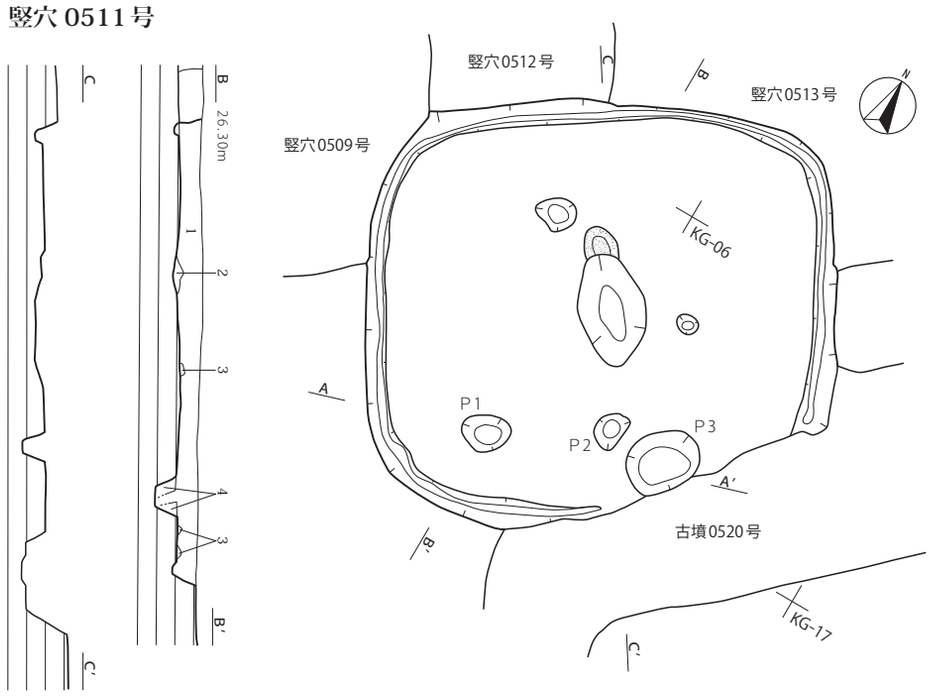
KG−05を中心に位置する。西側で竪穴0509・0512号、北側で竪穴0513号、南東隅で古墳0520号と重複する。新旧関係は、本遺構が0513号よりも新しく、古墳0520号よりも古い。0509・0512号との関係は、断面図などの記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でないが、0509号については、遺構平面形態から本遺構のほうが新しいと思われる。

平面形態はやや胴の張る隅丸方形を呈し、推定規模は4.49×5.00m、推定遺構下場面積は16.1㎡、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位はN−33°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されている。主柱穴は検出されていないが、P1には柱穴痕が認められ、本遺構に伴うものと考えられる。P2は出入口施設、P3は貯蔵穴である。壁周溝が検出され、全周したものと思われる。

実測可能遺物は、1・2は壺形土器、3・4は器種不明の底部、5・6は高杯形土器、7は椀形土器、8は甕形土器である。1は外面にハケ調整と粗いミガキ、内面にケズリ状のヘラナデを施す。5はやや深い椀形を呈す。8はタタキ整形が施される。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴0511号



1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
2　　ロームを含む。
3　　ロームを含む。
4　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを多く含む。

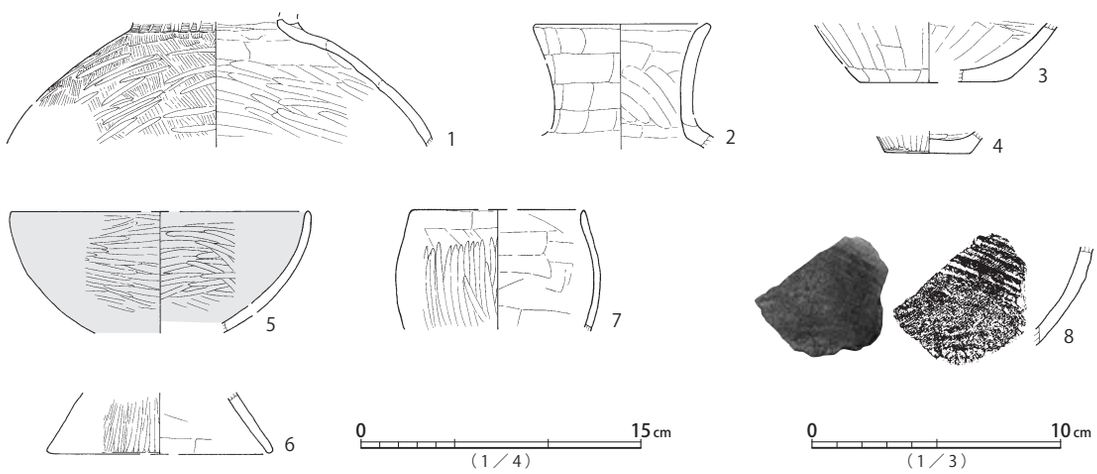


Fig.378　竪穴0511号 遺構遺物

竪穴0512号　（Fig.379）

LG−95を中心に位置する。南側で竪穴0511号、東側で竪穴0513・0514号と重複する。各遺構との新旧関係は、断面図などの記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈すと思われるが、北辺壁と西辺壁の一部が検出されたのみで、

詳細は不明である。掘り込みは浅く、確認面からの深さは0.05mである。北辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−24°−Wとなる。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測に至らない甕形土器の細片が出土したのみで、帰属時期は不明である。

竪穴0513号 （Fig.379、PL.43・87・128）

LG−95を中心に位置する。南側で竪穴0511号、西側で竪穴0512号、東側で竪穴0514号と重複する。新旧関係は、本遺構が竪穴0514号よりも古い。竪穴0511・0512号との関係は、断面図などの記録上の根拠がなく、出土遺物も少ないことから、明確でない。

平面形態は小型の胴張隅丸長方形を呈し、推定規模は3.94×3.20m、推定遺構下場面積は10.1㎡である。確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN−35°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されている。P1は貯蔵穴と思われるが、明確でない。

実測可能遺物は、1は台付甕形土器、2・4は高杯形土器、3は甕形土器である。3はハケ調整が施され、頸部はゆるく外反する。4はパレス文様であろう。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0514号 （Fig.379、PL.43・128）

LG−86を中心に位置する。南西側で竪穴0513号、北西隅で土坑0526号と重複する。新旧関係は、本遺構が0513号よりも新しい。0526号との関係は、断面図などの記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は隅丸方形を呈し、推定規模は4.37×4.60m、推定遺構下場面積は17.1㎡、確認面からの深さは0.13mを測る。北東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−38°−Wとなる。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は1の器台形土器のみである。

遺構平面形態と竪穴0513号との関係から、弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0521号 （Fig.380、PL.43・128）

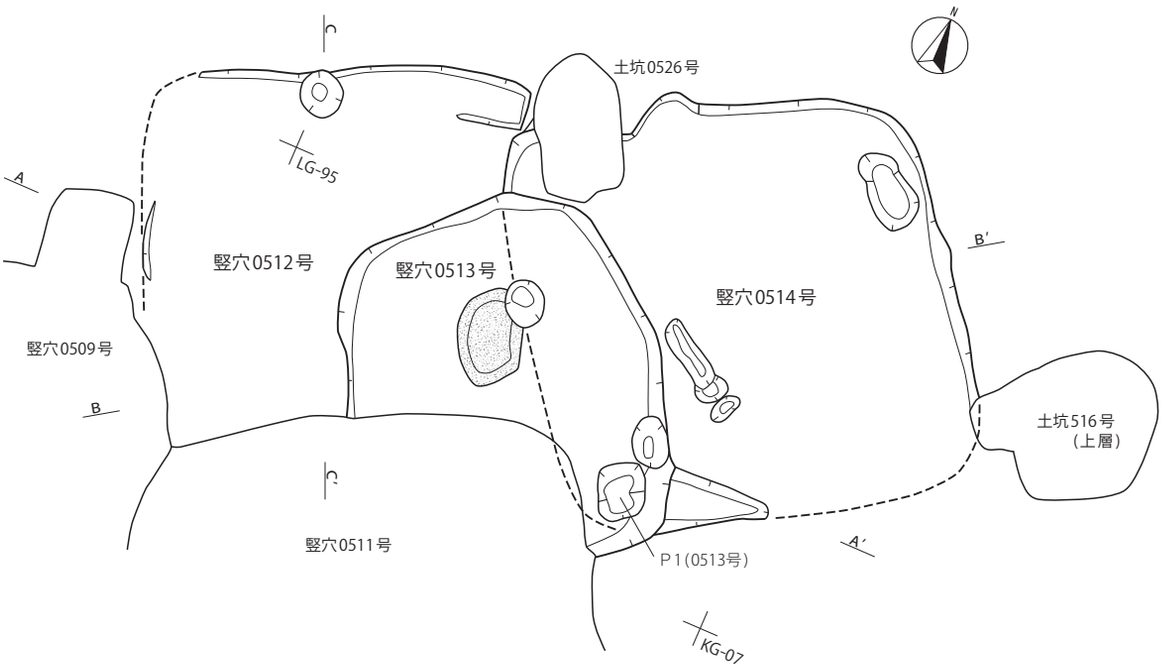
LH−91を中心に位置する。他遺構との重複はないが、東側は調査区外に延びる。

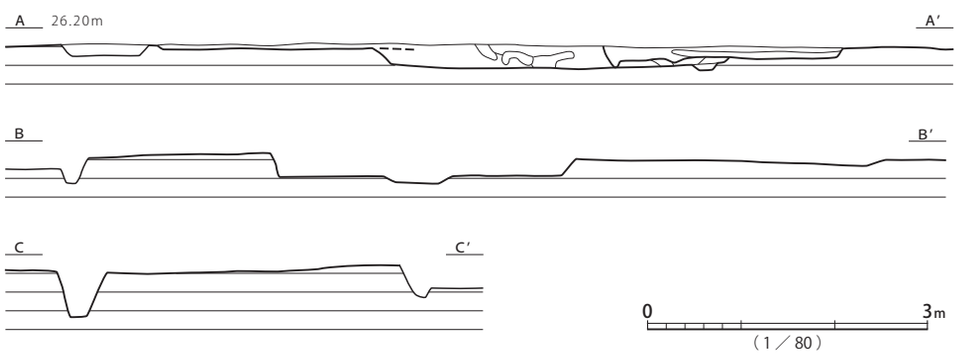
平面形態は胴張隅丸方形を呈し、推定規模は4.92×4.83m、推定遺構下場面積は19.3㎡、確認面からの深さは0.35mを測る。主軸方位はN−55°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄り、P1・2間から検出されている。P1〜3は主柱穴で、壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2は高杯形土器である。1は頸部が明瞭に屈折し、球形化した胴部をもつ。

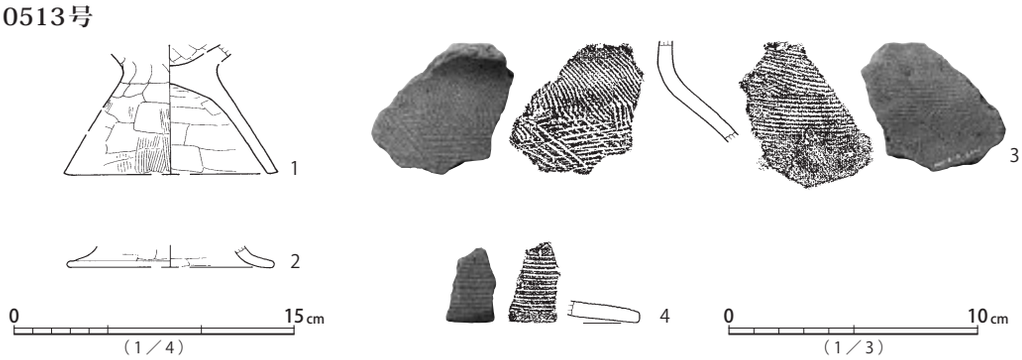
古墳時代前期前葉の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴 0512・0513・0514号





竪穴 0513号



竪穴 0514号

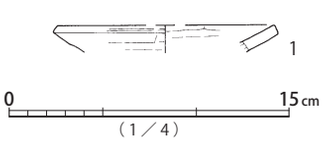


Fig.379　竪穴0512号 遺構、竪穴0513号 遺構遺物、竪穴0514号 遺構遺物

竪穴0521号

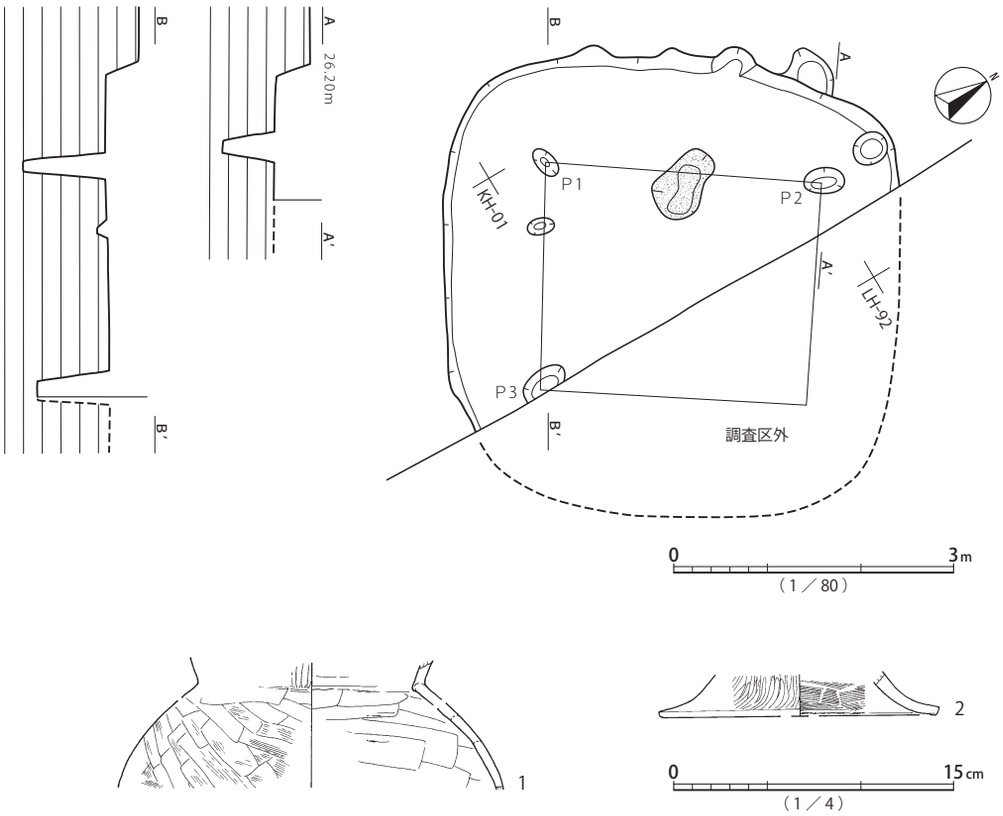


Fig.380　竪穴0521号 遺構遺物

竪穴0531号　（Fig.381、PL.44・128）

NG−11を中心に位置する。東側で古墳0530号、西側で溝532号（上層）、北側で竪穴537号（上層）と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が532・537号よりも古い。0530号との関係は、断面図などの記録上の根拠がないが、出土遺物の検討からは本遺構のほうが古いと思われる。

北東壁の一部が検出されたのみで、平面形態や規模などの詳細は不明である。確認面からの深さは0.14mを測る。P1・2は柱穴、P3は貯蔵穴の可能性があるが、いずれも本遺構に伴うものか明確でない。炉跡や壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は1の椀形ないし高杯形土器のみで、P3からの出土である。

弥生時代終末期の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

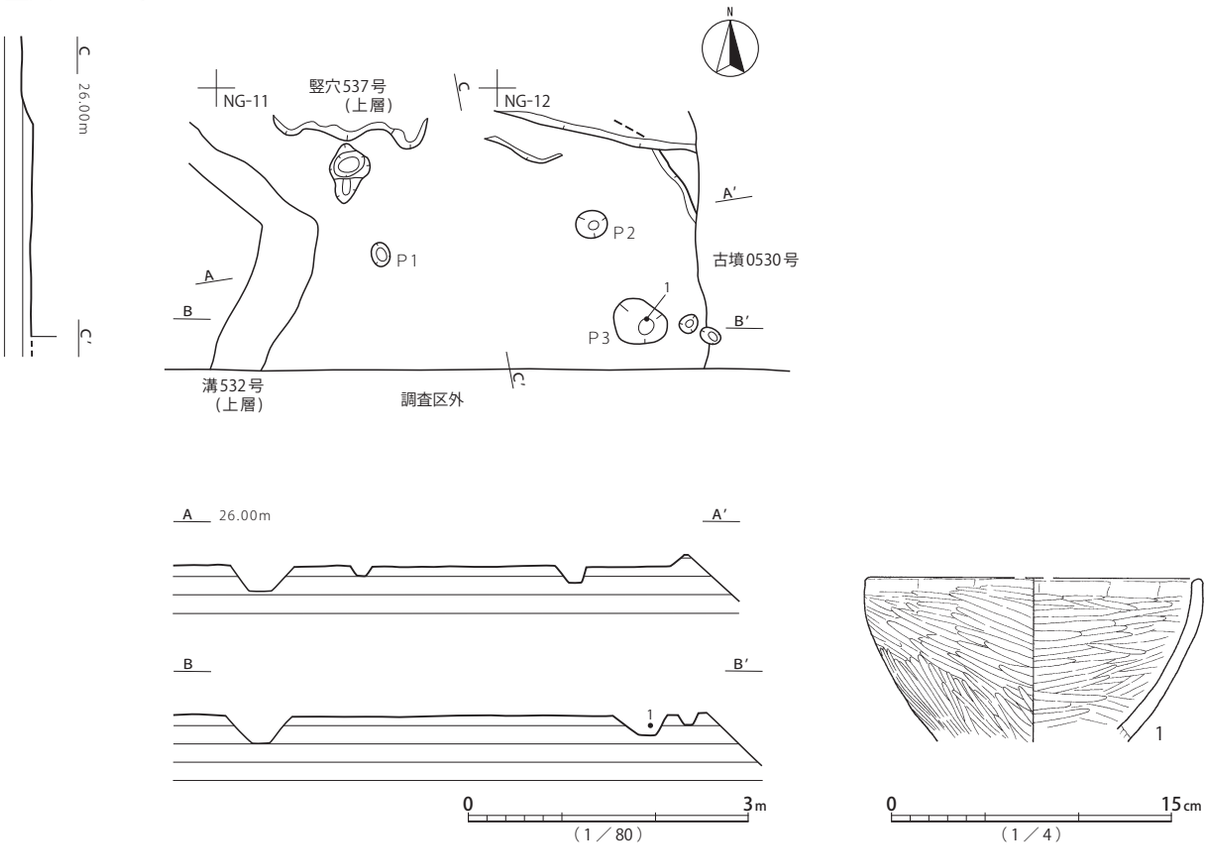
竪穴0533号　（Fig.381、PL.44）

NF−20を中心に位置する。南東側で竪穴1875号と重複し、西側と南側は調査区外に延びる。新旧関係は、断面図などの記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

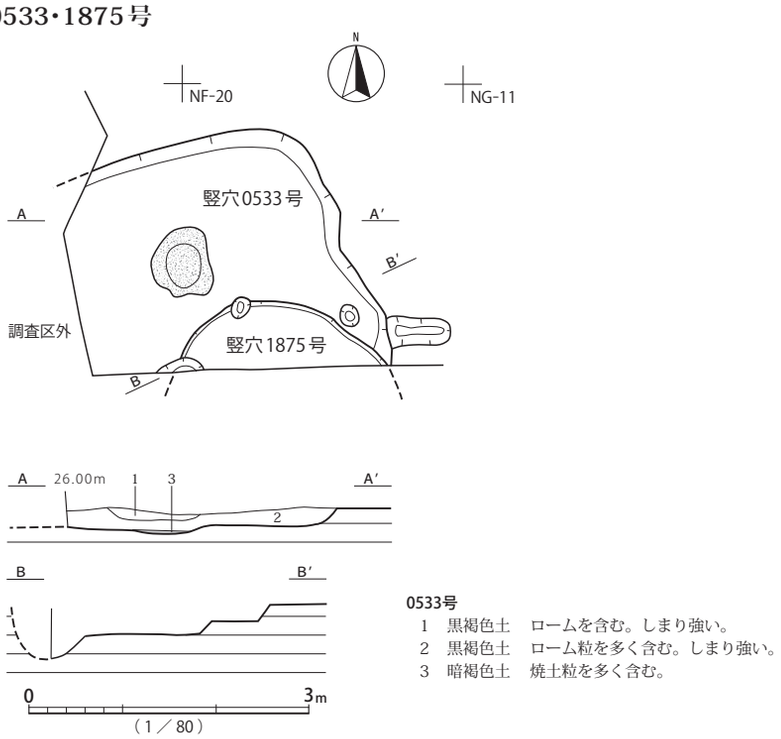
平面形態は隅丸方形を呈すと思われるが、遺構北東側が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN−23°−Wである。北西辺壁寄りから検出された炉跡が中軸線上に位置した場合、副軸長は3.5m程度となる。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴 0531号



竪穴 0533・1875号



0533号

1　黒褐色土　ロームを含む。しまり強い。
2　黒褐色土　ローム粒を多く含む。しまり強い。
3　暗褐色土　焼土粒を多く含む。

Fig.381　竪穴0531号 遺構遺物、竪穴0533号 遺構、竪穴1875号 遺構

竪穴1875号 （Fig.381、PL.44）

NF−20を中心に位置する。北側で竪穴0533号と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、断面図などの記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、北壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.17mを測る。壁周溝は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴0535号 （Fig.382、PL.44・87）

OF−89を中心に位置する。北東側で竪穴0536号と重複するが、床面までは達していない。西隅は調査区外に延びる。新旧関係は、断面図などの記録上の根拠がなく、不明である。

平面形態は小型の楕円形を呈し、規模は3.72×3.48m、推定遺構下場面積は10.1㎡、確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方位はN−50°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されている。主柱穴や貯蔵穴、出入口施設などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1・3は壺形土器、2は椀形ないし高杯形土器である。1は北東辺壁際から検出され、床面上からの出土である。

弥生時代終末期の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴0536号 （Fig.382、PL.44）

OF−90を中心に位置する。南西側で竪穴0535号、北東側で古墳0530号と重複する。新旧関係は、断面図などの記録上の根拠や出土遺物がなく明確でないが、0530号よりも本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は隅丸方形を呈すと思われるが、北東辺壁が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.20mを測る。北東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−62°−Wとなる。遺構確認範囲からは、炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1739号 （Fig.383、PL.44）

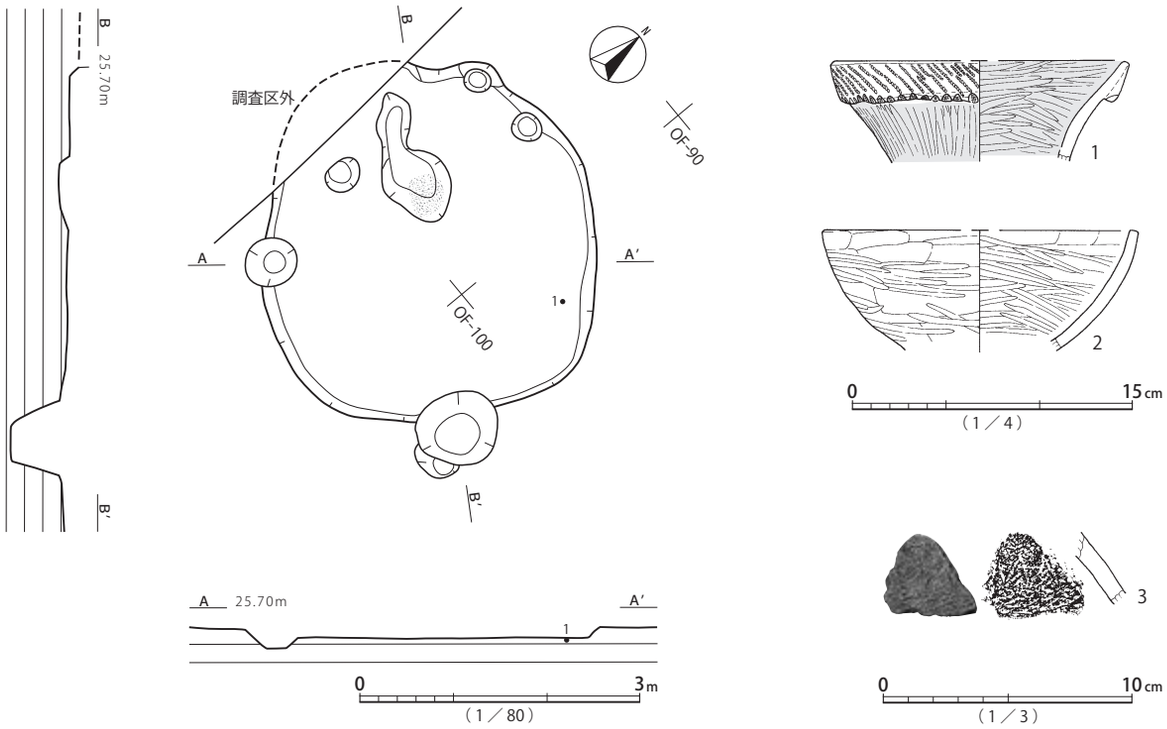
昭和50年（1975）に実施した上総国分僧寺寺域確認調査で、すでに本調査が行われていた遺構である。

PG−100を中心に位置する。北隅で竪穴406号（上層）、北東辺壁中央で掘立柱建物3220号（上層）と重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は方形を呈し、規模は5.18×5.20m、遺構下場面積は22.1㎡、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位はN−73°−Wである。P1〜4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴と思われる。壁周溝が検出され、全周する。炉跡は調査図面に記載がなかったが、写真から判断し、遺構中央から3ヶ所確認されていた焼土範囲のうち、西寄りのものを炉跡とした。写真ではP2脇と東側の焼土範囲から遺物が出土している状況が確認できるが、所在は不明である。

遺構平面形態から、古墳時代前期の所産と考えられるが、帰属時期は明確でない。

竪穴 0535 号



竪穴 0536 号

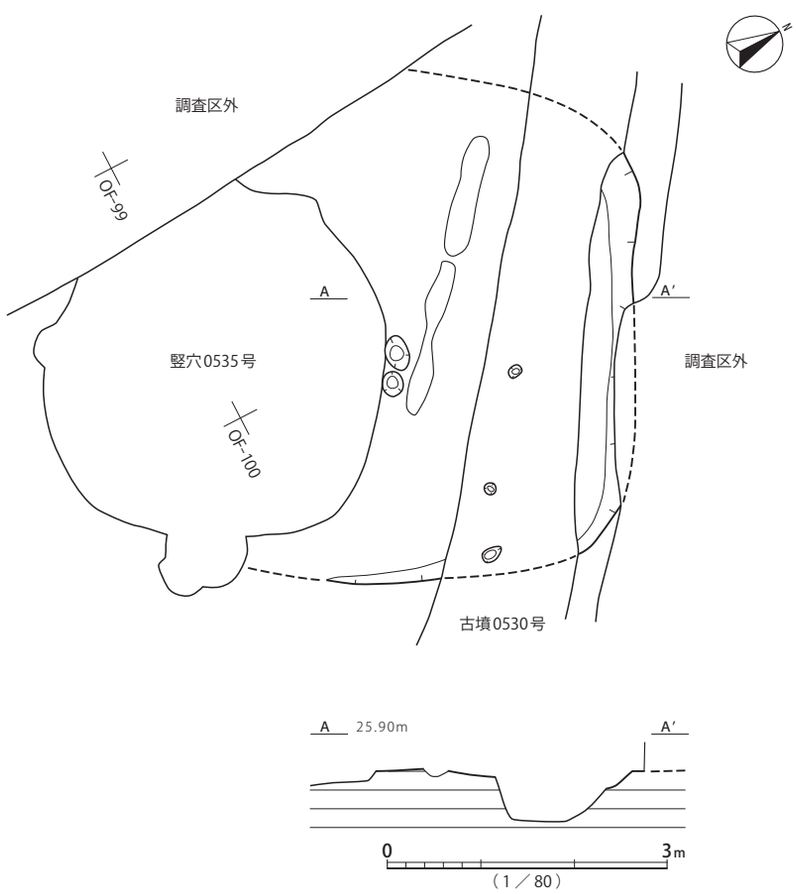


Fig.382　竪穴0535号 遺構遺物、竪穴0536号 遺構

竪穴1740号　（Fig.383）

昭和50年（1975）に実施した上総国分僧寺寺域確認調査で、すでに本調査が行われていた遺構である。

OH−23を中心に位置する。北西側で掘立柱建物跡3221号（上層）、東側で土坑（遺構番号なし）と重複し、南側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が3221号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、遺構北西側が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.06mを測る。北東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−36°−Wとなる。北西辺壁寄りから検出された焼土範囲は、炉跡の可能性があるが、明確でない。主柱穴や壁周溝は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1749号　（Fig.384、PL.87・88・128）

既刊の上総国分僧寺跡報告書で掲載済みであるが、遺構範囲からは下層遺物が出土し、上層遺構と判断する積極的な根拠に乏しいことから、再録するものである。

RI−22を中心に位置する。西側で土坑314号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が314号よりも古いと思われる。

平面形態は方形ないし隅丸方形を呈すと思われるが、北東辺壁と南東辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は4.75×5.03m、推定遺構下場面積は20.1㎡、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN−14°−Eである。遺構範囲からは焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。焼土範囲のうち、中軸線上北東辺壁寄りの部分からは掘り込みが確認されており、炉跡の可能性がある。明確な主柱穴や貯蔵穴は検出されていない。遺構範囲からは、多数の柱穴状の掘り込みが検出され、本遺構に伴うものを含む可能性があるが、明確でない。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2・3は器種不明の底部、4〜7は高杯形土器、8は器台形土器、9〜11は壺形土器、12は鉢形土器である。1は摘み上げ口縁を呈し、口唇部外面に面を持ち、口縁端部は鋭角になる。4は内湾して開く浅い杯部をもつ。12は小型丸底系であろう。4は南東隅の掘り込みからの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴1846号　（Fig.385）

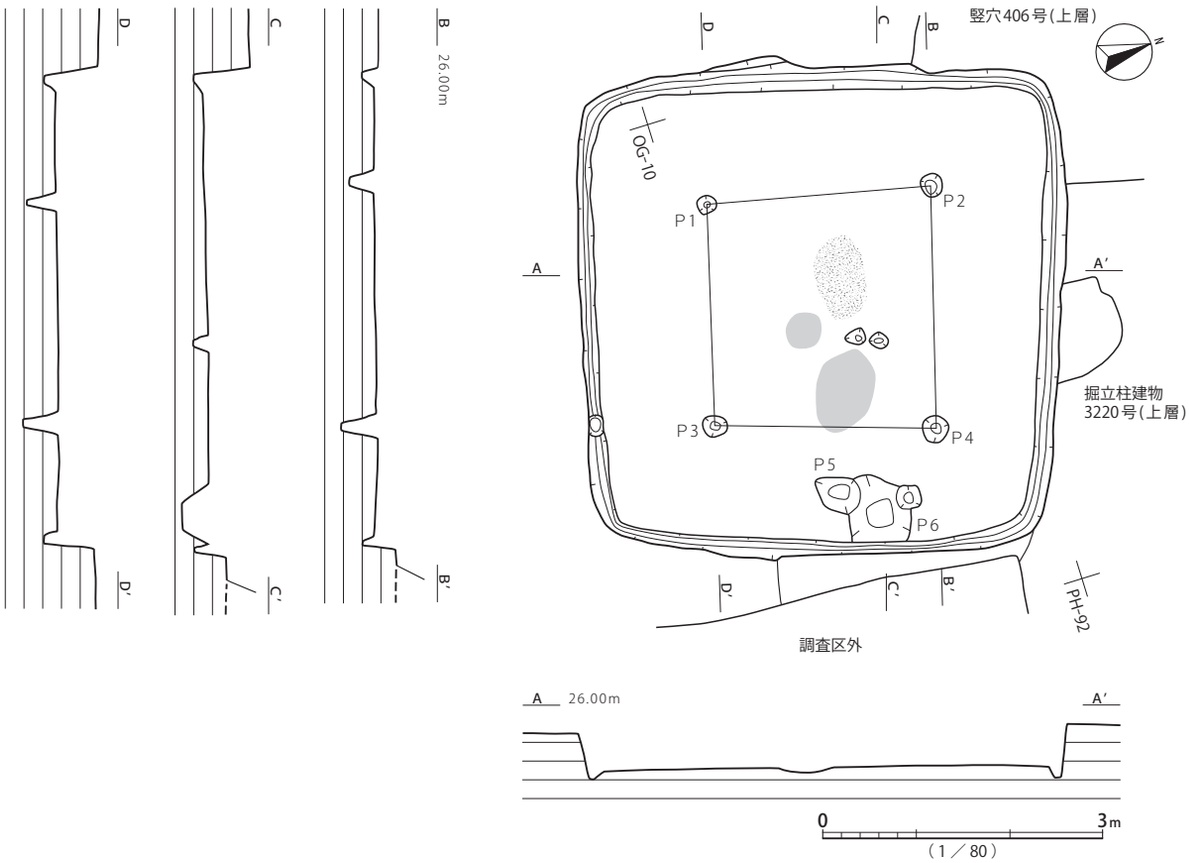
調査時は遺構として認識されていなかったが、壁周溝と思われる溝の存在から、整理作業段階で新規に追加したものである。

OH−81を中心に位置する。遺構中央で掘立柱建物跡3218号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3218号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、詳細は不明である。想定される遺構範囲には多数の柱穴状の掘り込みが存在し、本遺構に伴うものが含まれる可能性もあるが、明確でない。炉跡や貯蔵穴は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴 1739号



竪穴 1740号

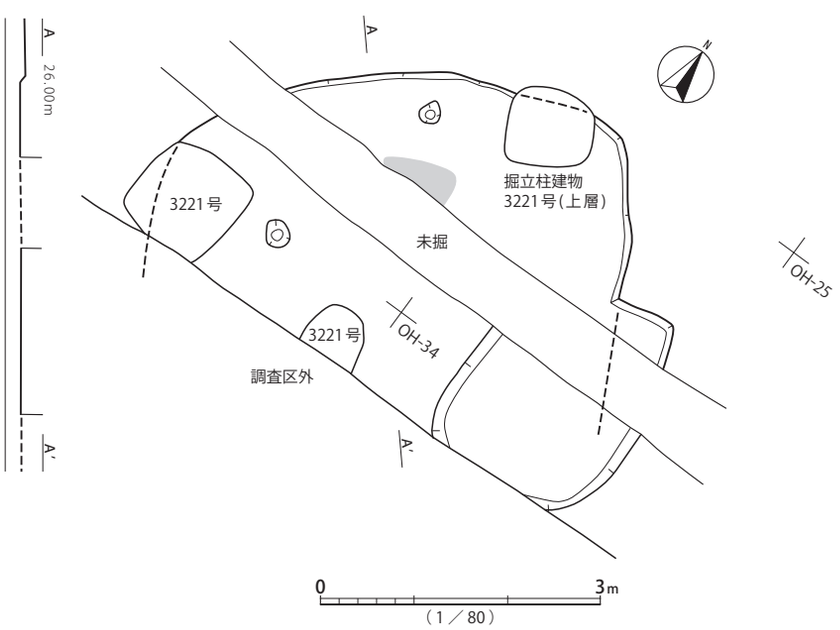
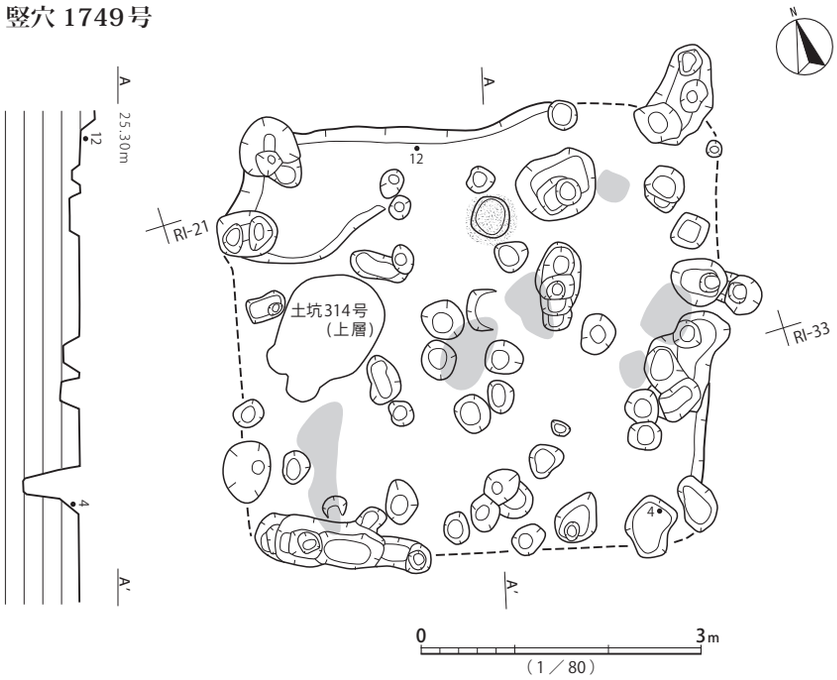
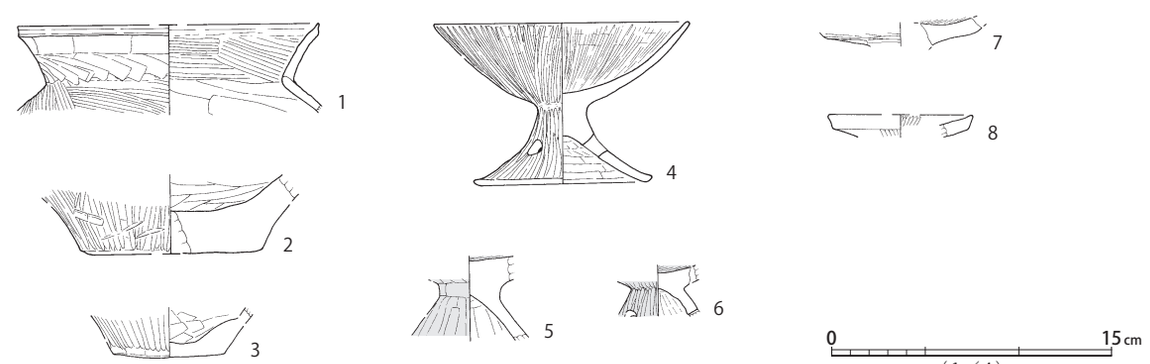


Fig.383　竪穴1739号 遺構、竪穴1740号 遺構

竪穴 1749号





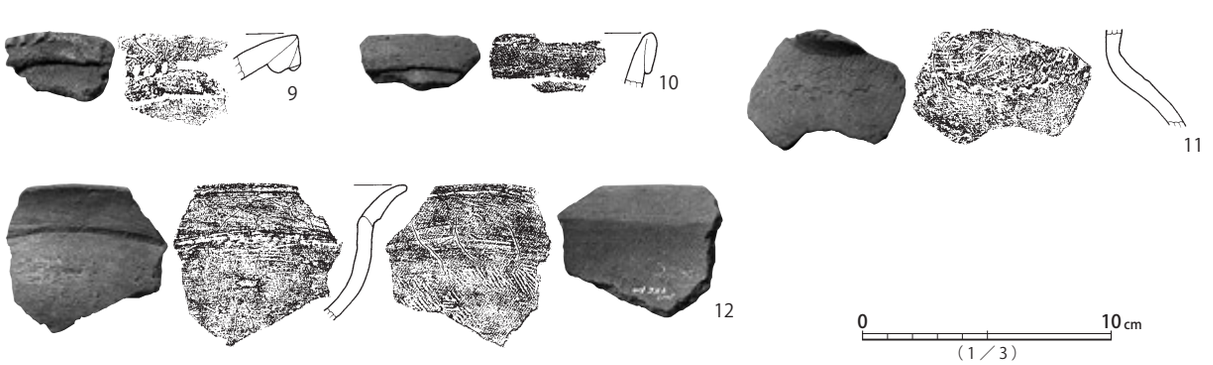


Fig.384　竪穴1749号 遺構遺物

竪穴 1846･1881 号

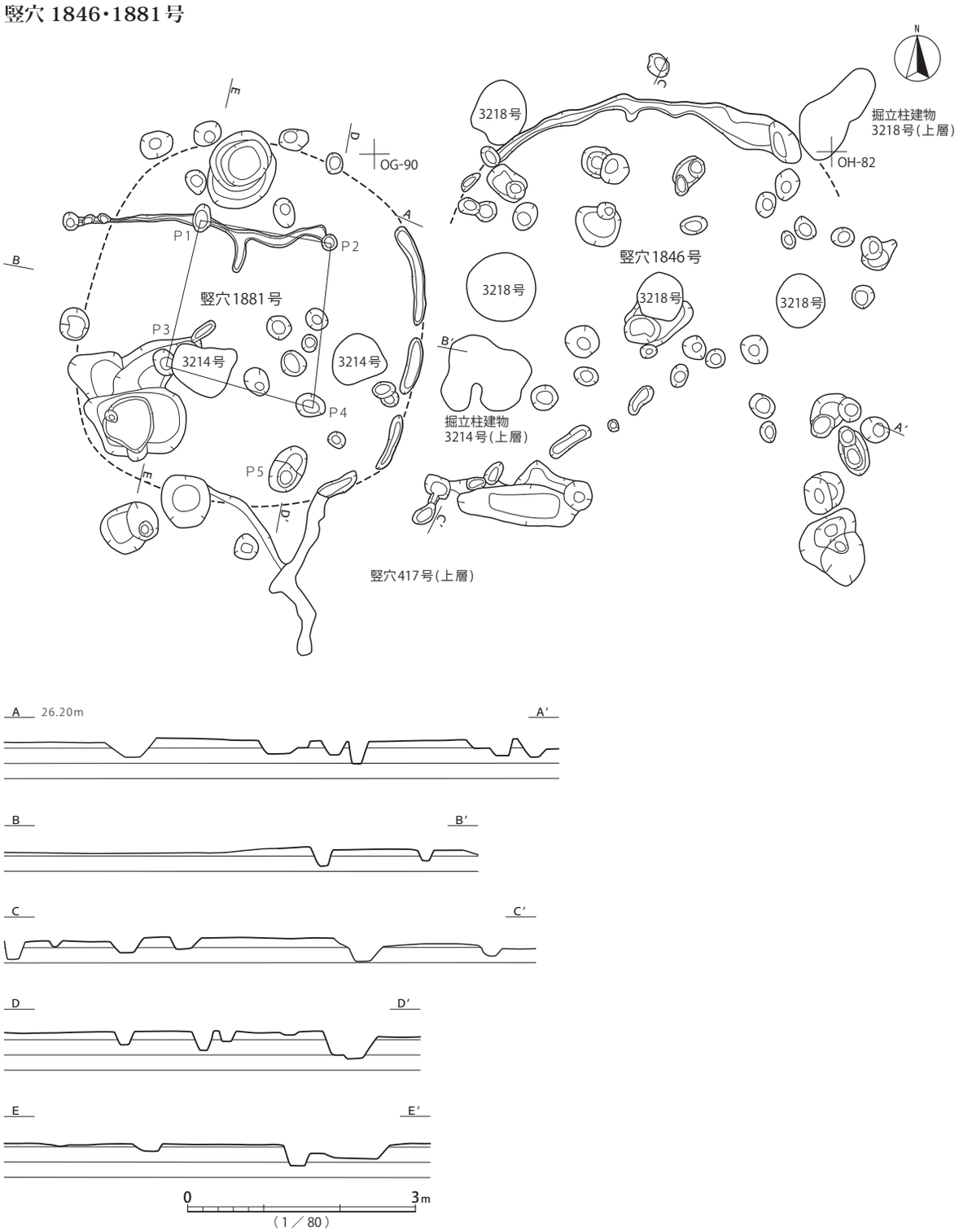


Fig.385　竪穴1846号 遺構、竪穴1881号 遺構

竪穴1863号　（Fig.386）

調査時は遺構として認識されていなかったが、壁周溝と思われる溝と壁の存在から、整理作業段階で新規に追加したものである。

NG−28を中心に位置する。南西側で竪穴0419号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の

根拠や出土遺物がないが、0419号の平面形態が方形を呈すことから、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は長楕円形を呈すと思われるが、北西側で壁周溝、南東側で壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。規模は主軸長7.20m、確認面からの深さは0.08mを測る。主軸方位はN−68°−Wである。推定される遺構範囲と配置から、P1〜4を主柱穴に想定したが、いずれも掘り込みが浅く、明確でない。炉跡や貯蔵穴は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1881号　（Fig.385）

調査時は遺構として認識されていなかったが、壁周溝と思われる溝の存在から、整理作業段階で新規に追加したものである。

OG−89を中心に位置する。遺構中央で掘立柱建物跡3214号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3214号よりも古い。

平面形態は楕円形を呈すと思われるが、詳細は不明である。東辺壁周溝を基準とした場合、主軸方位はN−13°−Eとなる。推定される遺構範囲と配置から、P1〜4を主柱穴、P5を貯蔵穴に想定したが、いずれも掘り込みが浅く、明確でない。炉跡は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

殿屋敷地区

竪穴0571号　（Fig.387・388、PL.2・45・88・97・128・135・141）

GH−69を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は小型の方形を呈し、規模は3.71×4.00m、遺構下場面積は11.7㎡、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位はN−40°−Wである。床面からは焼土と炭化材の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。炉跡は遺構中央北西寄りから検出された炭化物の分布範囲下付近に存在した可能性があるが、調査図面に記載がなく、不明である。壁周溝が検出され、全周する。主柱穴は検出されず、焼土下から検出されたP1は貯蔵穴の可能性がある。

実測可能遺物は、1〜5・8は甕形土器、6・7は台付甕形土器、9〜11は高杯形土器、12・13は器台形土器である。4はタタキ甕で、直線的に大きく開く口縁の端部は丸く、底部は輪台状となる。土器以外では14・15の磨石と16の軽石が出土している。1〜4・7・9・11〜13は北西辺壁寄り、5・6・10は遺構中央南寄り、15は南隅から検出され、いずれも床面上からの出土である。

大村は中台編年の基準資料としてこれらの土器を用いており、中台2−2式に位置付けている（大村2009）。弥生時代終末期後半の所産となろう。

竪穴0572号　（Fig.389、PL.45・46・88・128・133・143）

GH−45を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は胴張隅丸長方形を呈し、規模は4.24×3.83m、遺構下場面積は14.1㎡、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN−50°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出され、長軸を南北方向に設置する。P1は出入口施設、P2は貯蔵穴の可能性があるが、上層から掘り込まれた柱穴

竪穴 1863 号

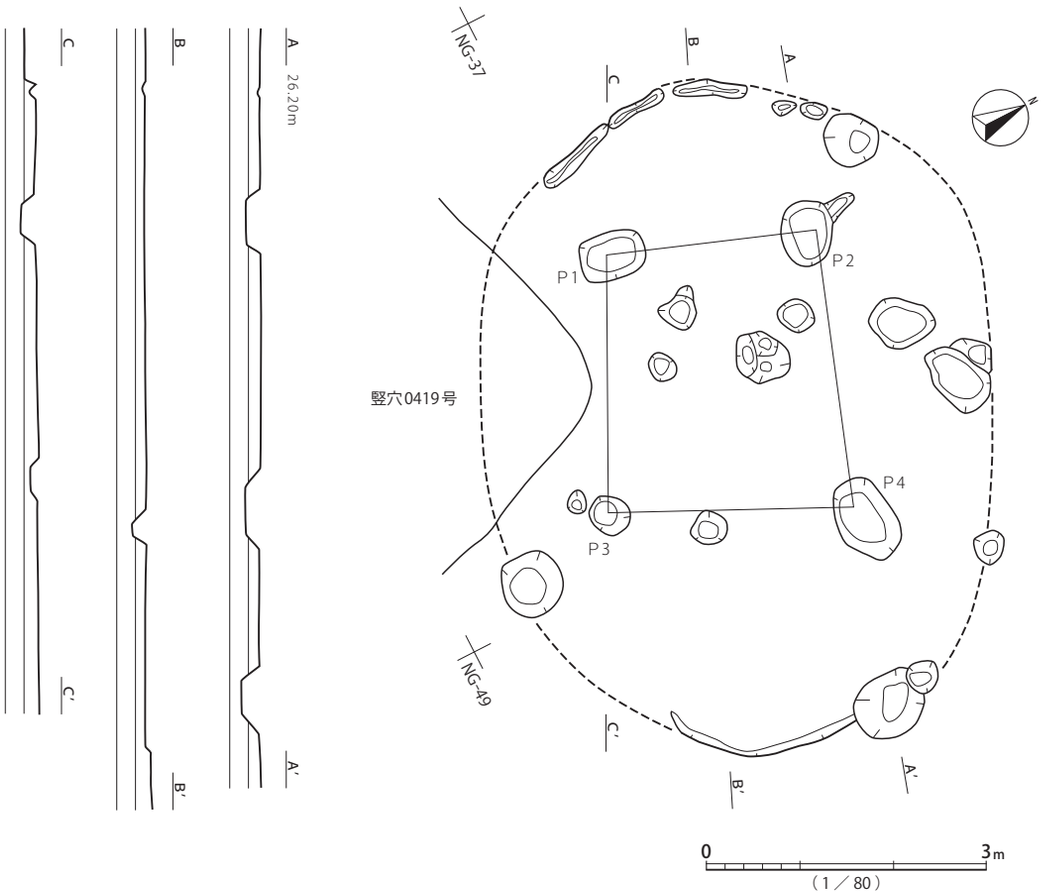


Fig.386　竪穴1863号 遺構

も複数認められることから、明確でない。主柱穴と壁周溝は検出されていない。床面からは焼土と炭化材の堆積が確認されているが、壁際にいわゆる三角堆積が認められることから、一定期間放置されたのち、上屋が焼け落ちたものと考えられる。調査図面にはカヤ類の灰層と記載される部分があり、屋根材と思われる。

実測可能遺物は、1は台付甕形のミニチュア土器、2は無文の壺形土器である。土器以外では3の磨製石斧と4の焼成粘土塊が出土している。4は凹レンズ状を呈す。1は東隅、2は炉跡付近、3は西隅から検出され、床面上からの出土。4は炉跡内からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴 0598 号　（Fig.390、PL.46・128・136）

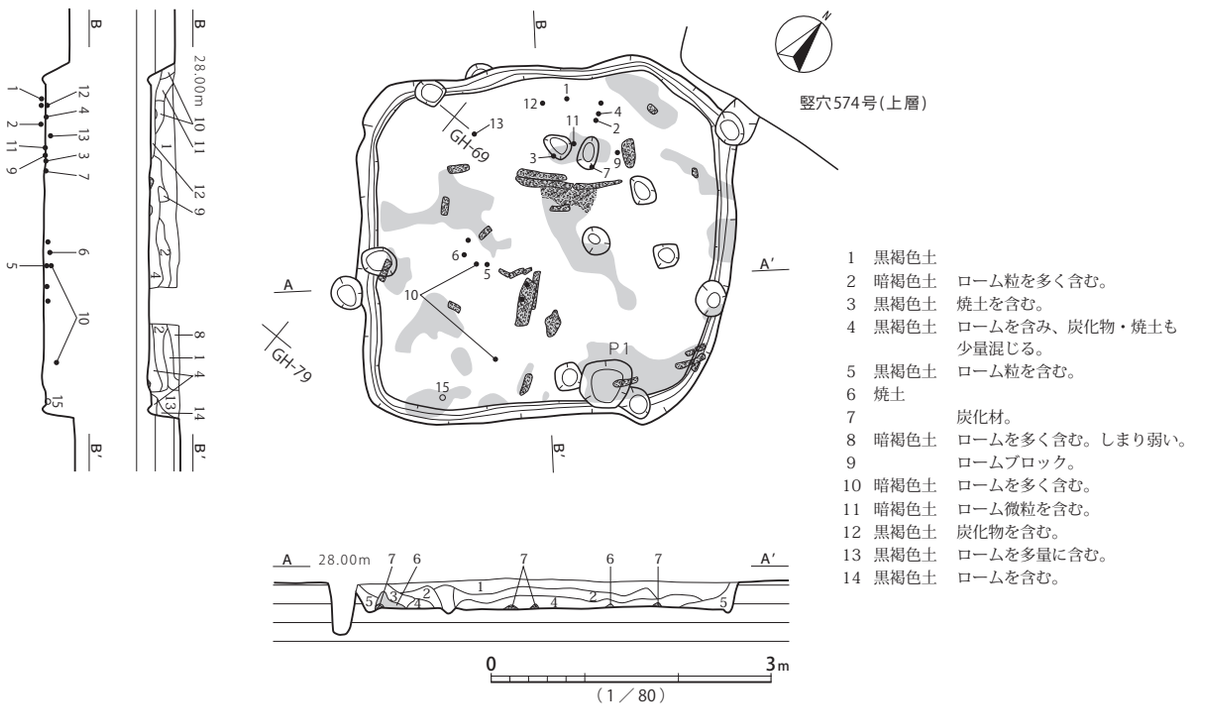
GH−64を中心に位置する。他遺構との重複はないが、遺構中央の一部は撹乱により壊される。

平面形態は小型の胴張隅丸長方形を呈し、推定規模は3.86×3.50m、推定遺構下場面積は11.2㎡、確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方位はN−51°−Wである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されているが、掘り込みは明確でない。主柱穴や貯蔵穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は1の甕形土器と2の磨石・敲石のみである。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴 0571 号



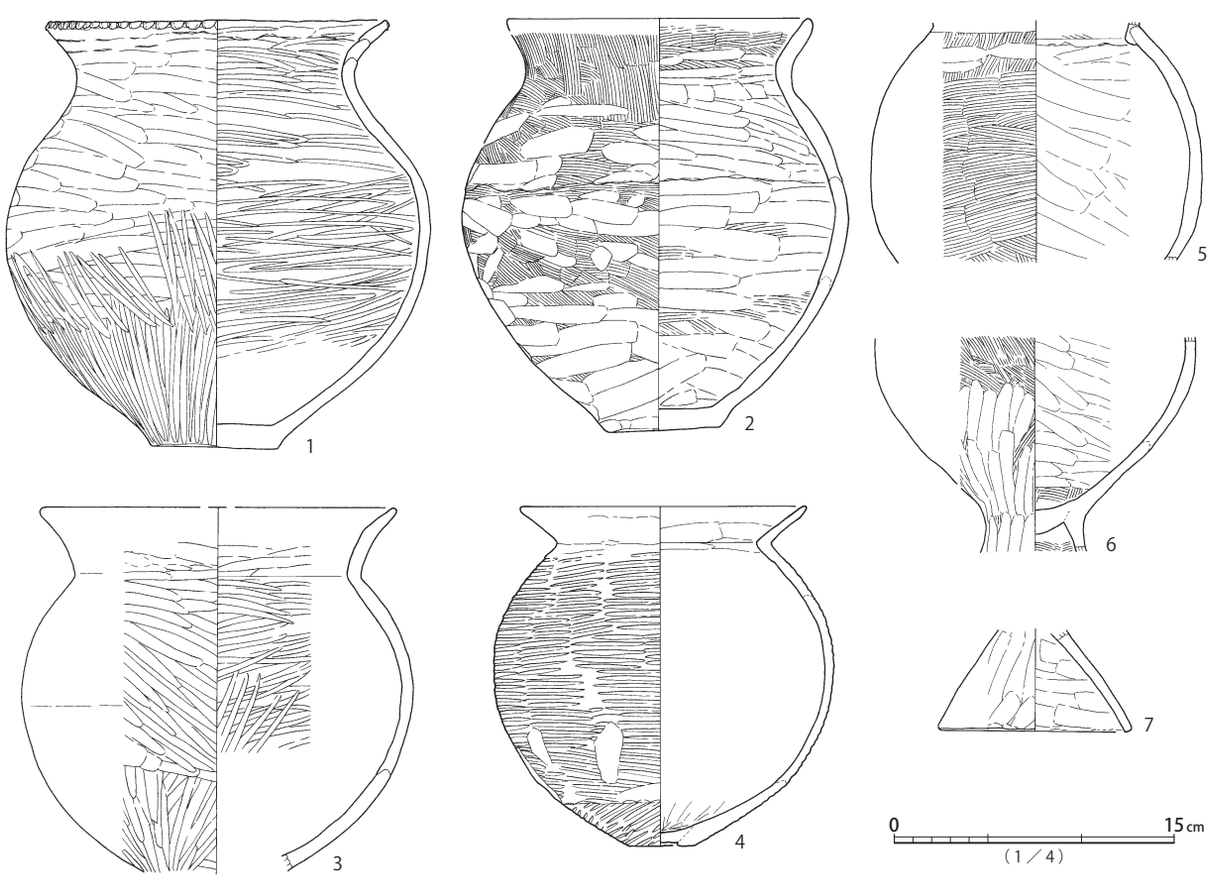


Fig.387 竪穴0571号(1) 遺構遺物

竪穴 0571 号

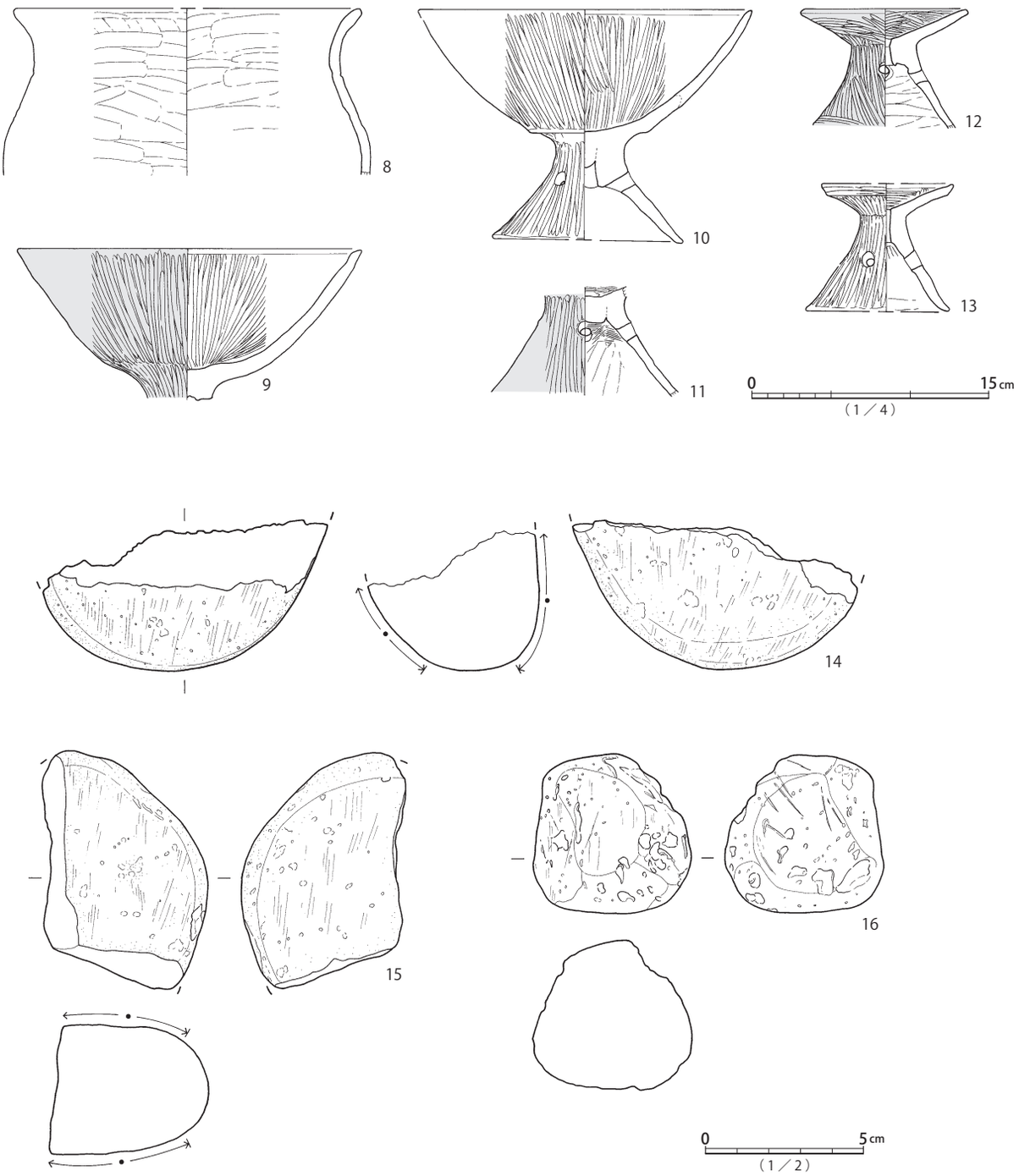


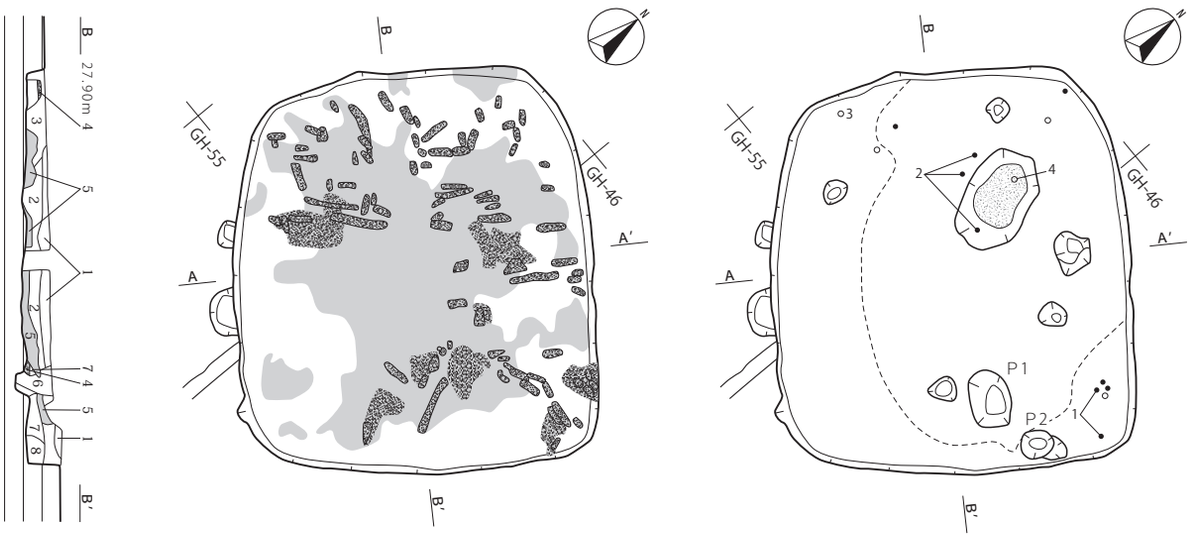
Fig.388　竪穴0571号(2) 遺物

竪穴0606号　（Fig.391、PL.46・128）

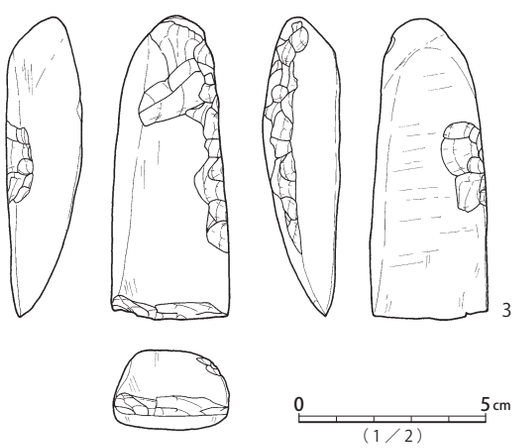
FH−17を中心に位置する。南東隅でピット630号（上層）、図示していないが中央で炉穴0605号と重複する。新旧関係は、本遺構が0605号よりも新しく、630号よりも古い。

平面形態は小型の長楕円形を呈し、規模は3.72×3.20m、遺構下場面積は9.7㎡、確認面からの深さは0.10mを測る。主軸方位はN−16°−Eである。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出さ

竪穴 0572号



1　暗褐色土　ロームを含む。
2　暗褐色土　黒色土・焼土を含む。
3　黒褐色土　ローム粒・焼土を含む。
4　炭化材。
5　焼土
6　黒褐色土　ローム・焼土を多く含む。中世柱穴の覆土。
7　暗褐色土　ロームを多く含む。
8　黒褐色土　ロームを多く含む。
9　黒褐色土　ロームを少量含む。
10　黄褐色土　ロームブロックからなる。
11　暗褐色土　ローム粒・焼土を含む。
12　暗褐色土　ロームを多量に含む。
13　黒褐色土
14　黒褐色土　ローム粒・焼土を含む。
15　黒褐色土　ローム粒・焼土を含み、黒色土も多く混じる。
中世柱穴の覆土か。



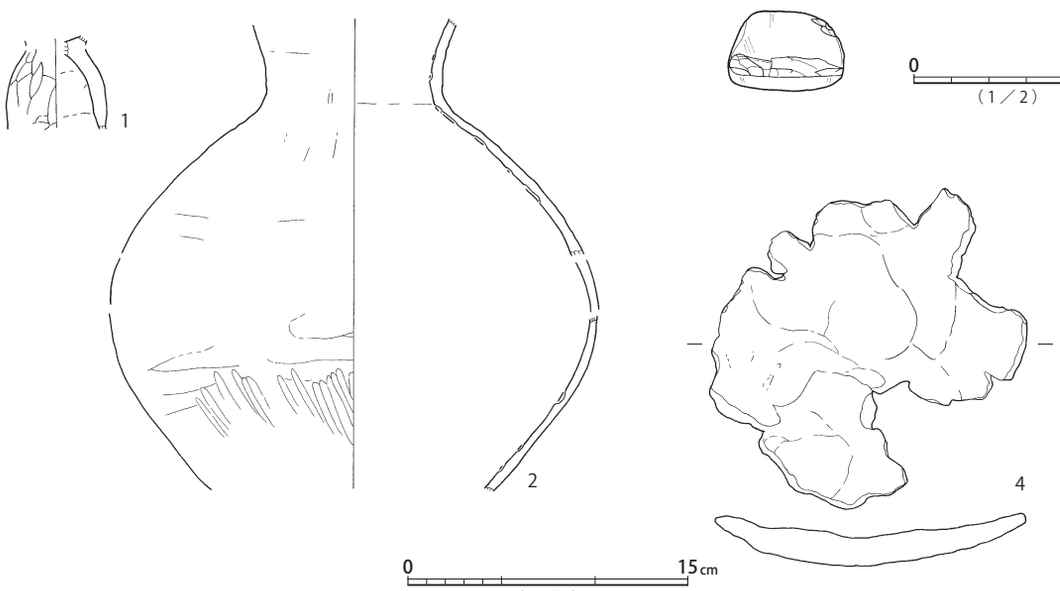


Fig.389　竪穴0572号 遺構遺物

竪穴0598号

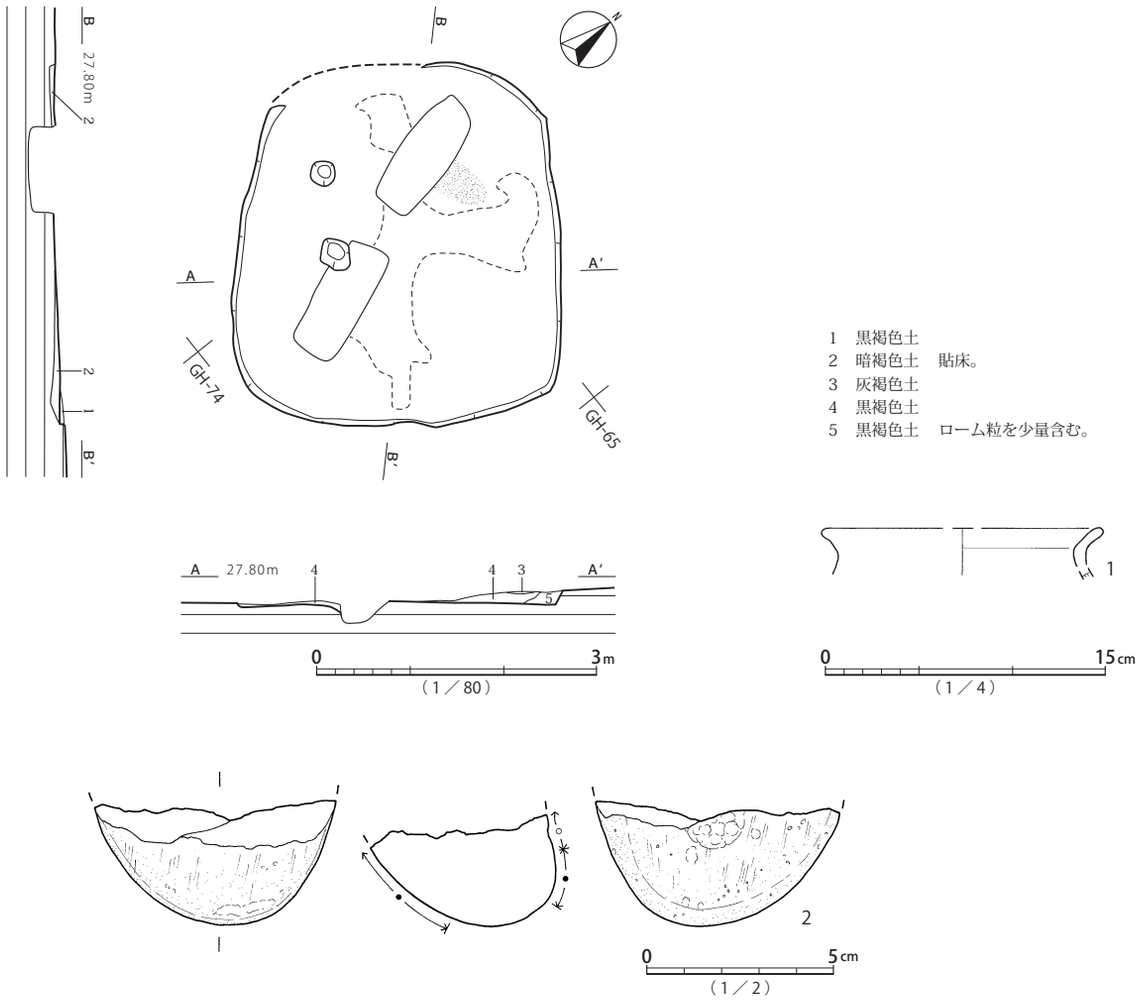


Fig.390 竪穴0598号 遺構遺物

れていない。

実測可能遺物は1の壺形土器のみである。頸部は屈折し、短い口縁部が直線的に立ち上がる。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴0609号 （Fig.392、PL.136）

HH−97を中心に位置する。北側で溝2070号（上層）、南隅で溝2072号（上層）と重複し、北東側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、遺構南東側が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは、記録不備のため明らかでない。南東辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−48°− Wとなる。遺構範囲からは柱穴状の掘り込みが複数検出されているが、本遺構に伴うものかは明確でない。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、実測可能遺物は1〜3の磨石類のみで、帰属時期は明確でない。

竪穴 0606 号

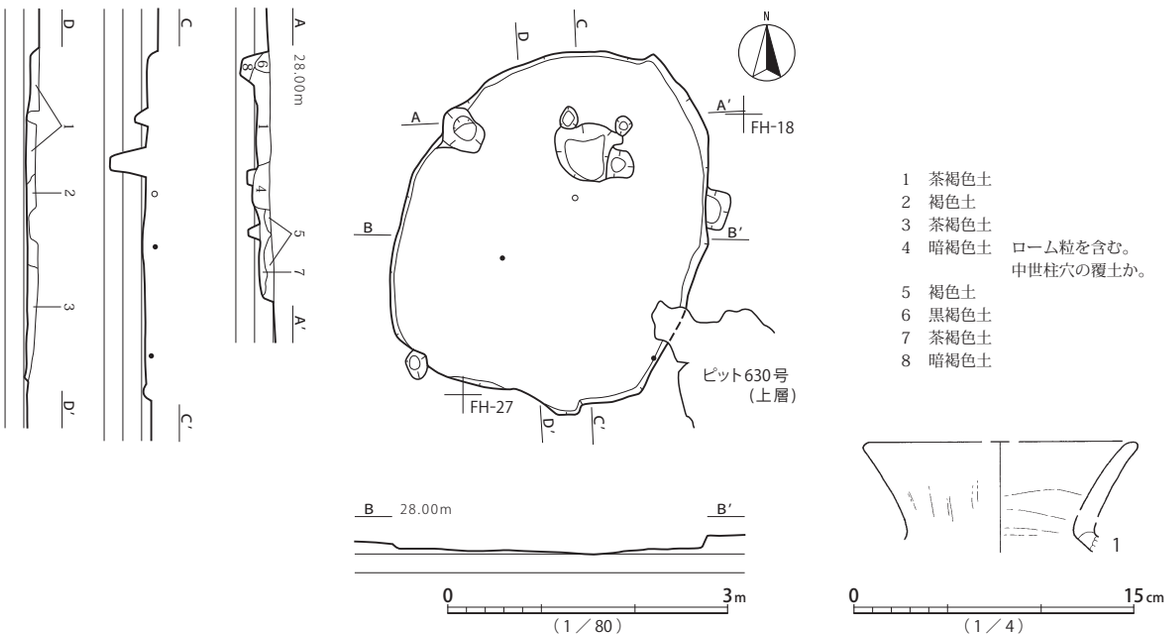


Fig.391　竪穴0606号 遺構遺物

竪穴0610号　（Fig.393、PL.128）

GH−01を中心に位置する。北東側で竪穴0611号、南東側で溝2070号（上層）と重複し、西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が0611号よりも新しく、2070号よりも古いと思われるが、0611号との関係は明確でない。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、遺構北隅がわずかに検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.20mを測る。北東辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−47°−Wとなる。遺構確認範囲からは、炉跡や主柱穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1・2は甕形土器である。1は外反する口縁の端部を摘み上げ、拡張面をもつ。

古墳時代前期の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴0611号　（Fig.393、PL.88・128）

GH−01を中心に位置する。南西側で竪穴0610号、南東側で溝2070号（上層）と重複し、一部は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が0610・2070号よりも古いと思われるが、0610号との関係は明確でない。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、遺構北隅が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.38mを測る。北西辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−37°−Wとなる。炉跡や主柱穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1〜3は甕形土器、4は台付甕形土器、5・6は器種不明の底部である。1は頸部がくの字状に屈折し、口縁端部はやや尖る。2は口縁部が大きく開き、端部に面をもつ。3は胴部タタキ整形ののち、口縁部側にハケ調整を加える。

竪穴0609号

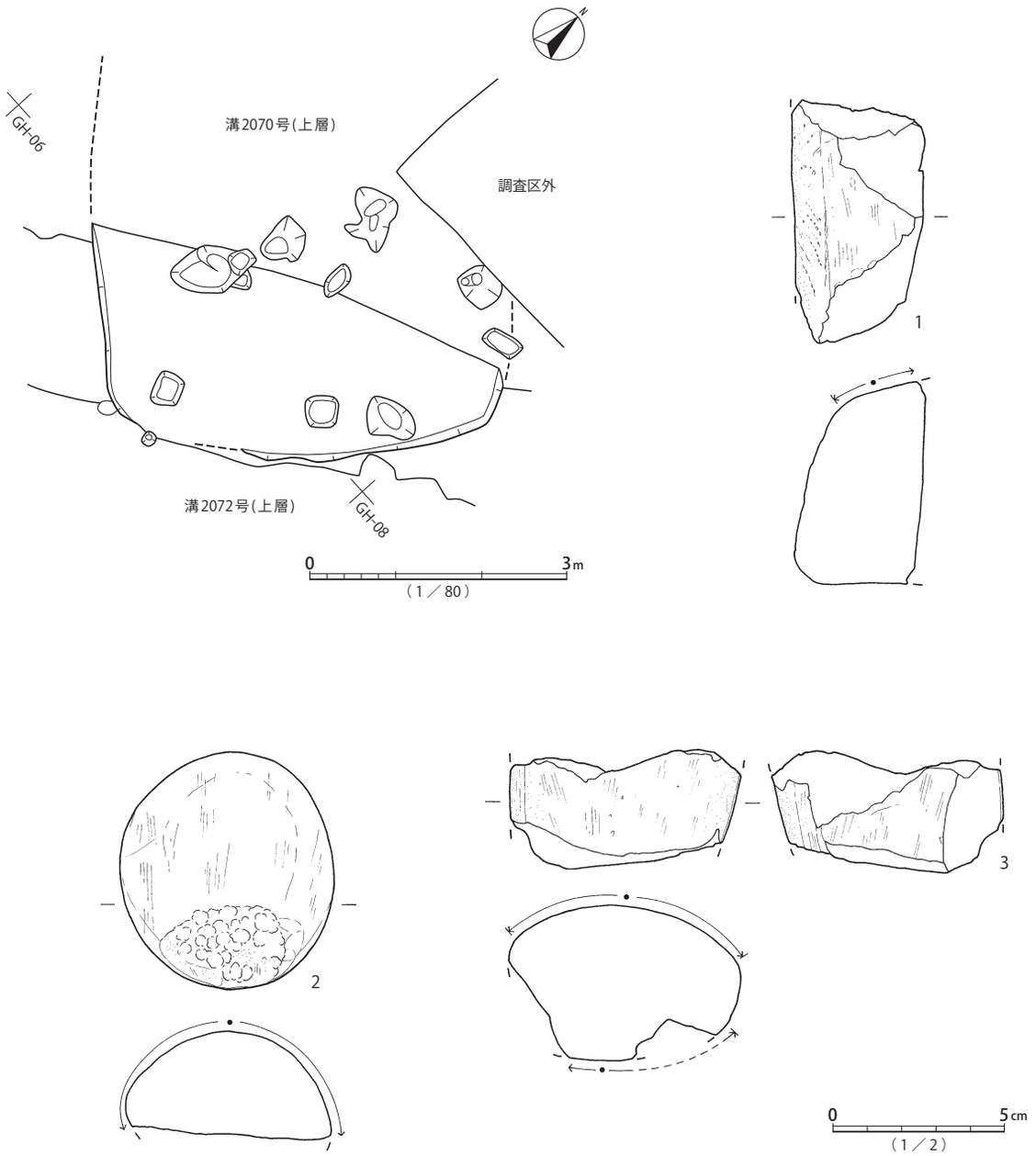


Fig.392　竪穴0609号 遺構遺物

古墳時代前期の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

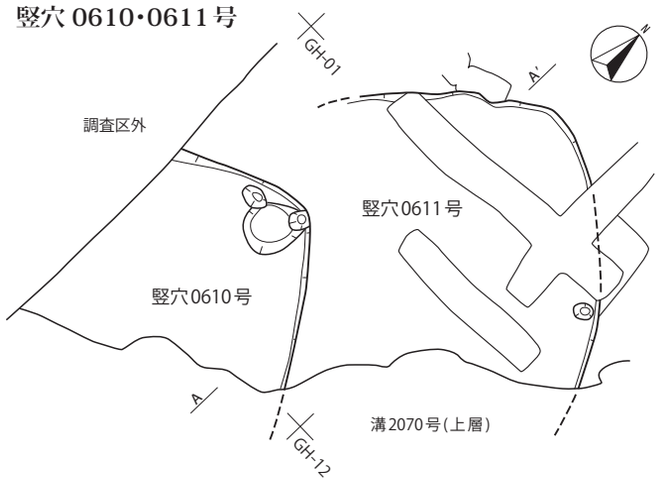
竪穴1843号　（Fig.393）

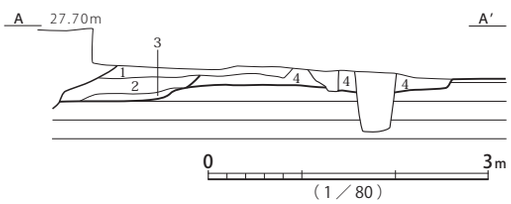
調査時は遺構として認識されていなかったが、整理作業段階で新規に追加したものである。

GH−10を中心に位置する。他遺構との重複はないが、東側は調査区外に延び、中央は撹乱により壊される。

平面形態は隅丸長方形を呈すと思われるが、遺構西隅が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは、記録不備のため明らかでない。北西辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の

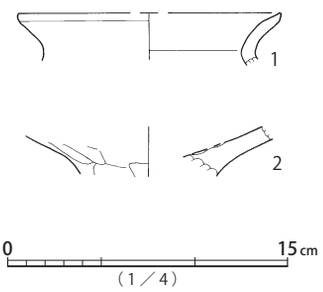
竪穴 0610･0611号



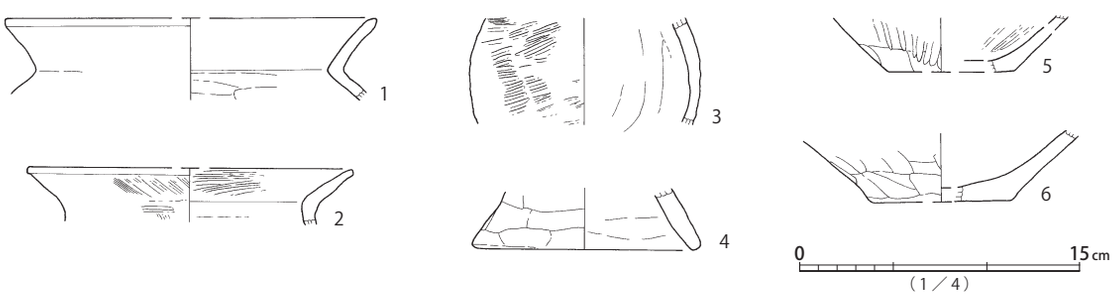


1　黒褐色土　ローム粒を多量に含む。
2　黒褐色土
3　黒褐色土　しまり強い。
4　黒褐色土　ローム粒を多く含む。

竪穴 0610号



竪穴 0611号



竪穴 1843号

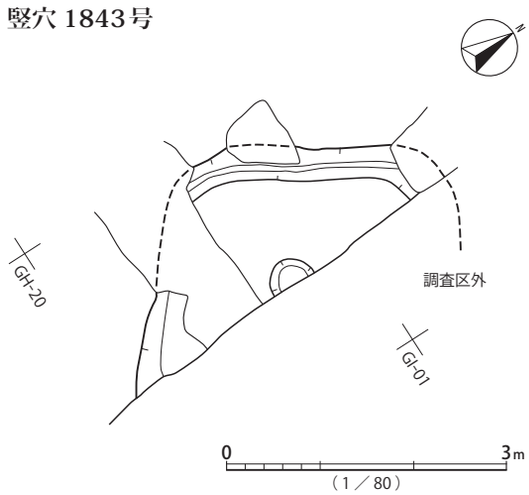


Fig.393　竪穴0610号 遺構遺物、竪穴0611号 遺構遺物、竪穴1843号 遺構

方位はN−57°−Wとなる。主柱穴は検出されていない。壁周溝は、北西辺壁際からのみ検出されている。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

東南部

竪穴0650号 （Fig.394、PL.47・89・128・129・136）

FM−50を中心に位置する。西側で掘立柱建物3053号（上層）、溝2077号（上層）と重複し、東側は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は方形を呈し、規模は4.19×4.13m、推定遺構下場面積は14.8㎡、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−30°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄りから検出されている。P1は貯蔵穴であろう。床面からは炭化材と少量の焼土の堆積が確認されており、火災に遭った可能性がある。主柱穴と壁周溝は検出されていない。

実測可能遺物は、1は広口壺形土器、2・7・8は甕形土器、3・6は直口縁壺形土器、4は壺形土器、5は器種不明の底部、9は椀形土器である。4は櫛描文と2条の刺突文を巡らす。6は直立する小振りの口縁部と球形の胴部をもつ。7・8はタタキ整形が施される。土器以外では10の敲石が出土している。

弥生時代終末期後半の所産と思われる。

竪穴0651号 （Fig.395、PL.47・89・129・132・136）

FM−59を中心に位置する。北側で道路2080号（上層）、南隅で溝2108号（上層）と重複し、北・東隅は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は小型の隅丸長方形を呈し、推定規模は3.83×3.28m、推定遺構下場面積は10.2㎡、確認面からの深さは0.19mを測る。主軸方位はN−51°−Wである。炉跡や主柱穴、壁周溝などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は、1は直口縁壺形土器、2・4は甕形土器、3は器種不明の底部である。2は底部輪台状を呈し、外面タタキ整形の可能性がある。4はタタキ整形ののち、ハケ調整が施される。土器以外では5の磨石と6の使用痕のある剥片が出土しており、6は混入であろう。

弥生時代終末期後半の所産と思われる。

竪穴 1073 号 （Fig.395）

HQ−01を中心に位置する。北側で竪穴1072号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が1072号よりも古い。

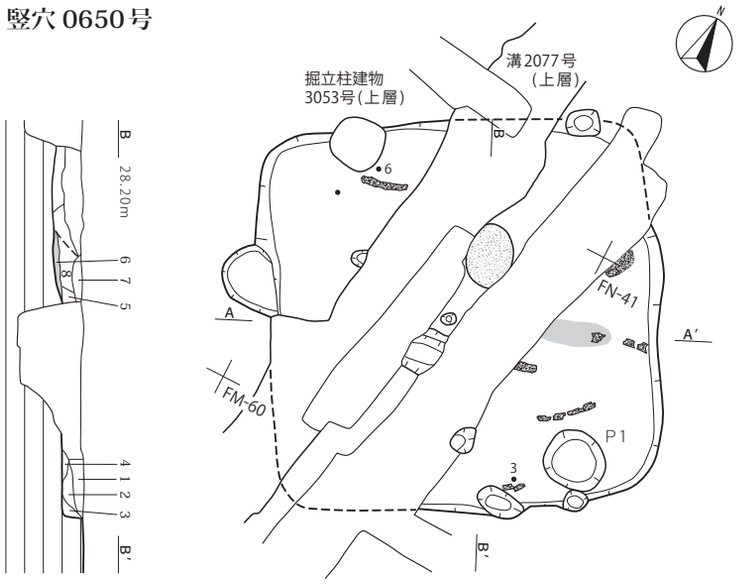
平面形態は楕円形を呈すと思われるが、遺構南側のごく一部が検出されたのみで、詳細は不明である。掘り込みは浅く、確認面からの深さは0.09mである。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

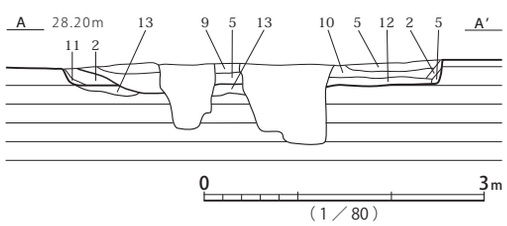
竪穴 1727 号 （Fig.396）

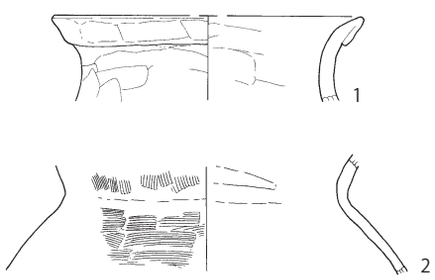
HQ−30を中心に位置する。西側で溝2044号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2044号

竪穴 0650号



1　暗褐色土　ロームブロックを含む。
2　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
3　黒褐色土　ローム粒を含む。
4　黒褐色土　炭化物を含む。
5　暗褐色土
6　焼土
7　褐色土
8　暗褐色土　ロームブロックを含む。
9　暗褐色土　ローム粒を含む。
10　褐色土　ソフトロームを含む。
11　暗褐色土　ロームブロックを含む。
12　暗褐色土　焼土粒を含む。
13　暗褐色土　ロームブロックを含む。貼床。





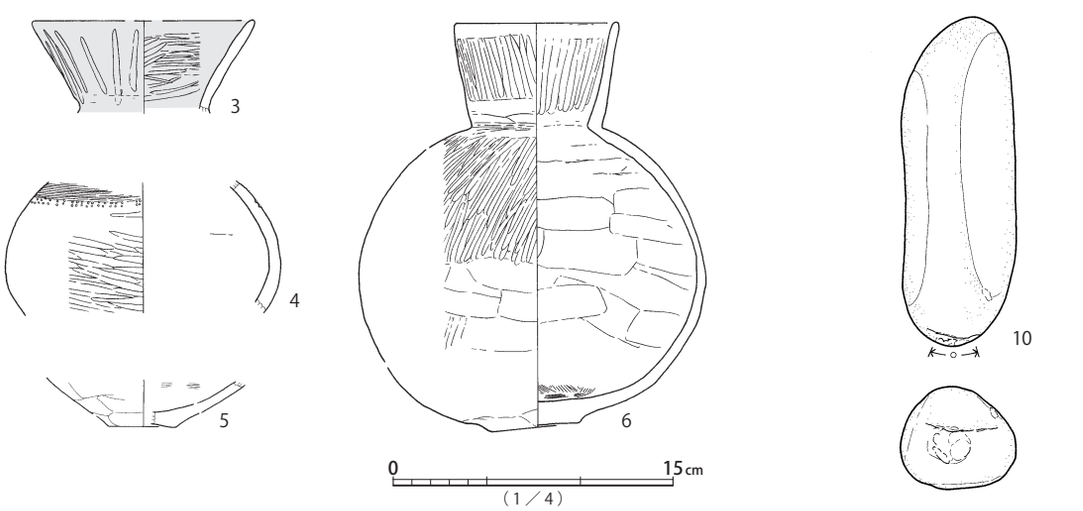
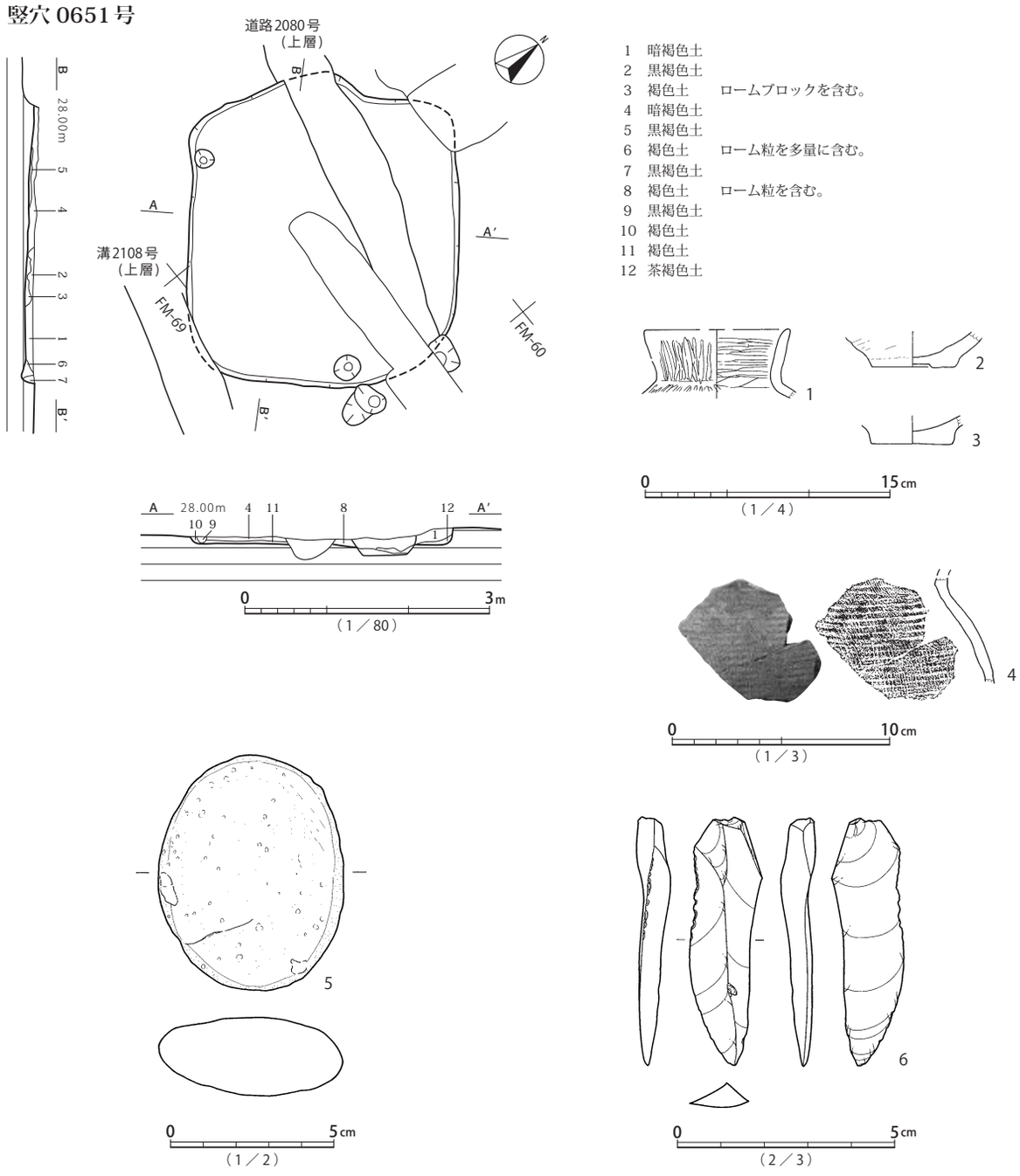




Fig.394　竪穴0650号 遺構遺物

竪穴 0651 号



竪穴 1073 号

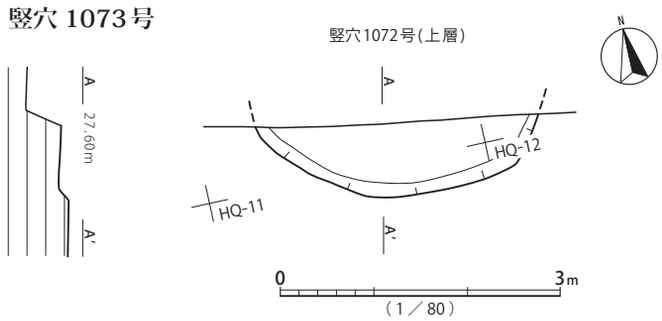


Fig.395　竪穴0651号 遺構遺物、竪穴1073号 遺構

よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、北東隅が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.22mを測る。北辺壁を基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−5°−Eとなる。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴 1844 号　（Fig.396）

EQ−19を中心に位置する。中央で溝2045号（上層）、北側で溝2115号（上層）と重複し、東側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形ないし長楕円形を呈すと思われるが、調査区境界に位置し、北側の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.17mを測る。主軸方向はほぼ真北を向くと思われる。炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていないが、上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝2045号）に遺構中央を大きく壊されているため、有無は明確でない。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

南辺部

竪穴 1165 号　（Fig.397・398、PL.47・89・129）

EL−15を中心に位置する。北隅で土坑1185号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が1185号よりも古い。

平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は4.03×3.34m、遺構下場面積は12.1㎡、確認面からの深さは0.41mを測る。主軸方位はN−45°−Eである。調査図面には炉跡や主柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は記録されていないが、写真では遺構中央北西寄りで床面が変色する部分を確認することができ、炉跡が存在した可能性がある。床面からは焼土と炭化材の堆積が確認されており、火災に遭った可能性が高い。

実測可能遺物は、1〜3・5〜7・9は甕形土器、8・17は台付甕形土器、10〜12は器種不明の底部、13は器種不明の胴部下半、14〜16は椀形土器、18・20は高杯形土器、19は器台形土器、21は壺形のミニチュア土器、22は広口壺形土器である。4は口縁部が内湾し、壺形土器であろう。甕形土器の頸部は屈折傾向が認められ、2・3の頸部内面にはケズリ状のヘラナデを施す。6はタタキ甕で、大きく開く口縁の端部は面取りされる。タタキ整形ののち、胴部下半にヘラナデを加える。4・6・9・18〜21など、遺構中央から南西壁寄りにかけて多数の遺物が検出されているが、いずれも焼土層よりも上の覆土中からの出土で、埋没過程の窪地に投棄されたものと思われる。

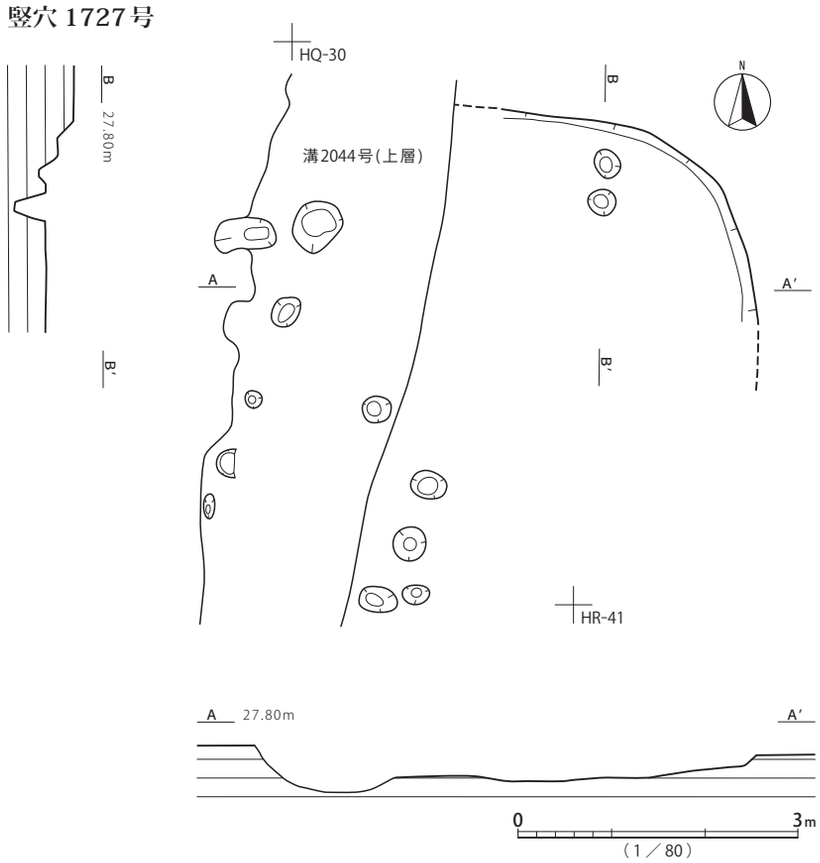
弥生時代終末期後半の所産と思われるが、古墳時代前期前葉の可能性もある。

竪穴1166号　（Fig.399、PL.48・89・97・129）

FL−81を中心に位置する。北隅で溝2138号（上層）と重複するが、床面までは達していない。新旧関係は、本遺構が2138号よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈し、規模は3.89×3.79m、遺構下場面積は13.1㎡、確認面からの深さは

竪穴 1727号



竪穴 1844号

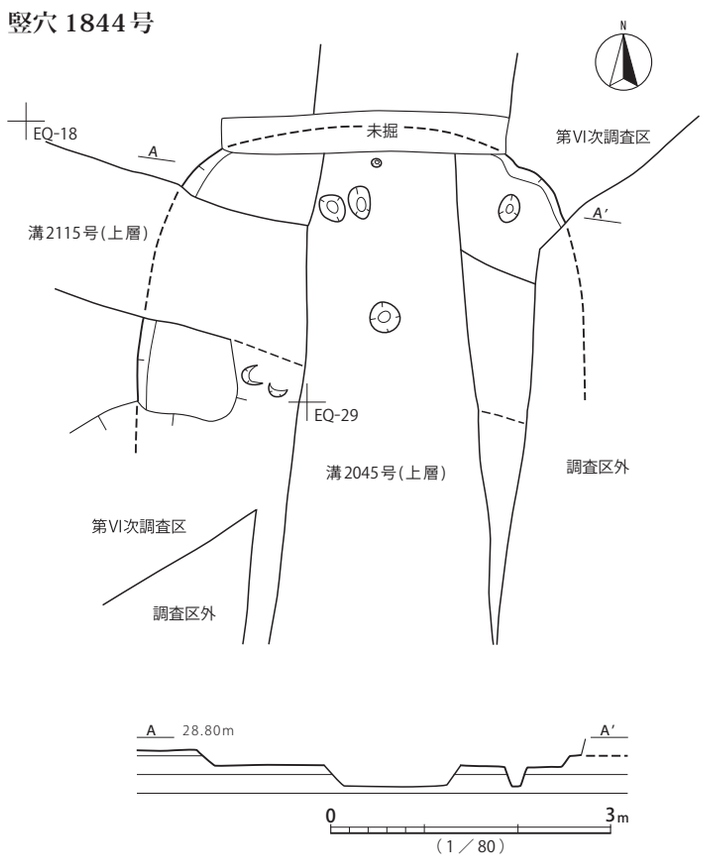
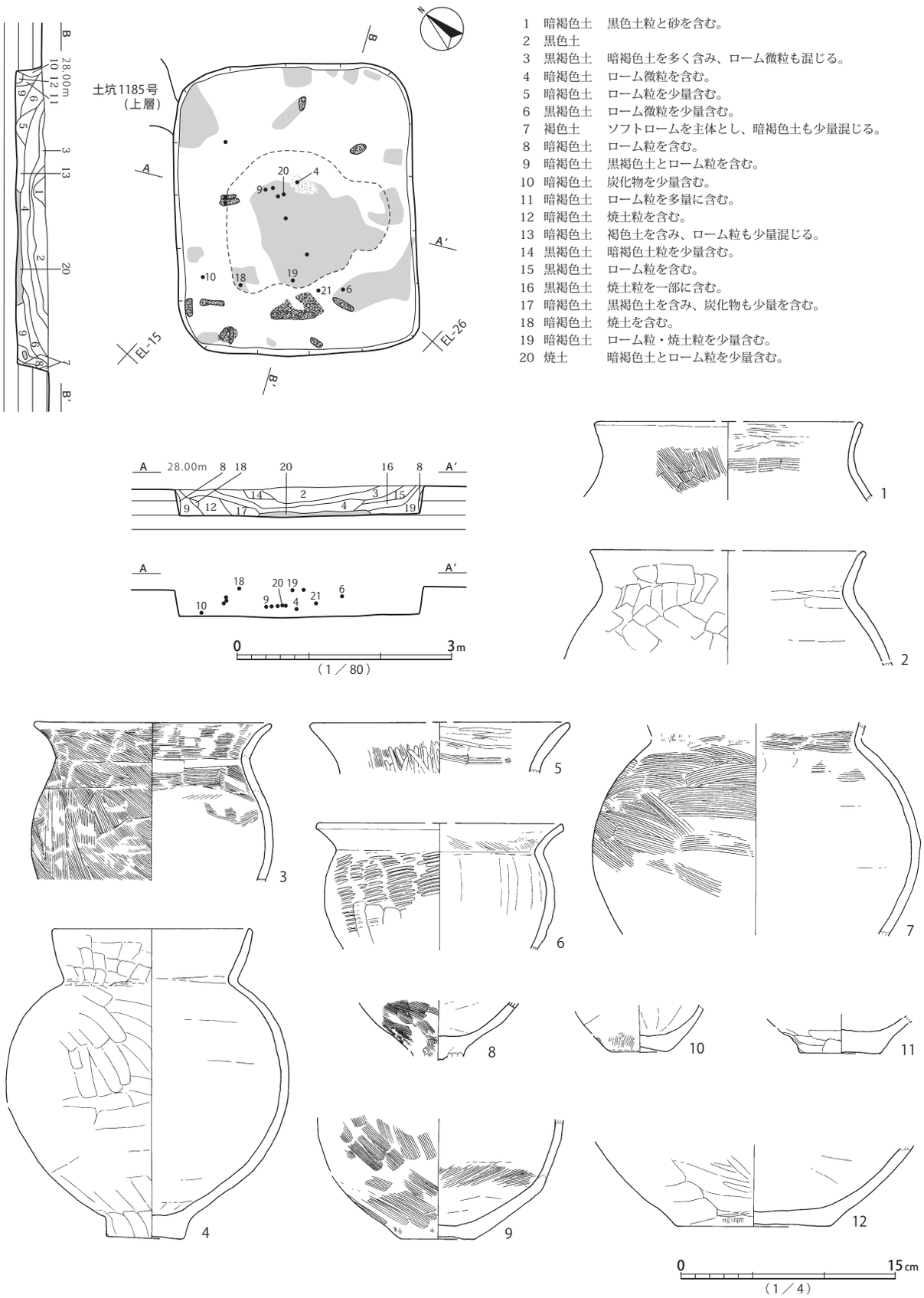


Fig.396　竪穴1727号 遺構、竪穴1844号 遺構

竪穴 1165号



1 暗褐色土 黒色土粒と砂を含む。
2 黒色土
3 黒褐色土 暗褐色土を多く含み、ローム微粒も混じる。
4 暗褐色土 ローム微粒を含む。
5 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
6 黒褐色土 ローム微粒を少量含む。
7 褐色土 ソフトロームを主体とし、暗褐色土も少量混じる。
8 暗褐色土 ローム粒を含む。
9 暗褐色土 黒褐色土とローム粒を含む。
10 暗褐色土 炭化物を少量含む。
11 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
12 暗褐色土 焼土粒を含む。
13 暗褐色土 褐色土を含み、ローム粒も少量混じる。
14 黒褐色土 暗褐色土粒を少量含む。
15 黒褐色土 ローム粒を含む。
16 黒褐色土 焼土粒を一部に含む。
17 暗褐色土 黒褐色土を含み、炭化物も少量を含む。
18 暗褐色土 焼土を含む。
19 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。
20 焼土 暗褐色土とローム粒を少量含む。

Fig.397 竪穴1165号(1) 遺構遺物

竪穴1165号

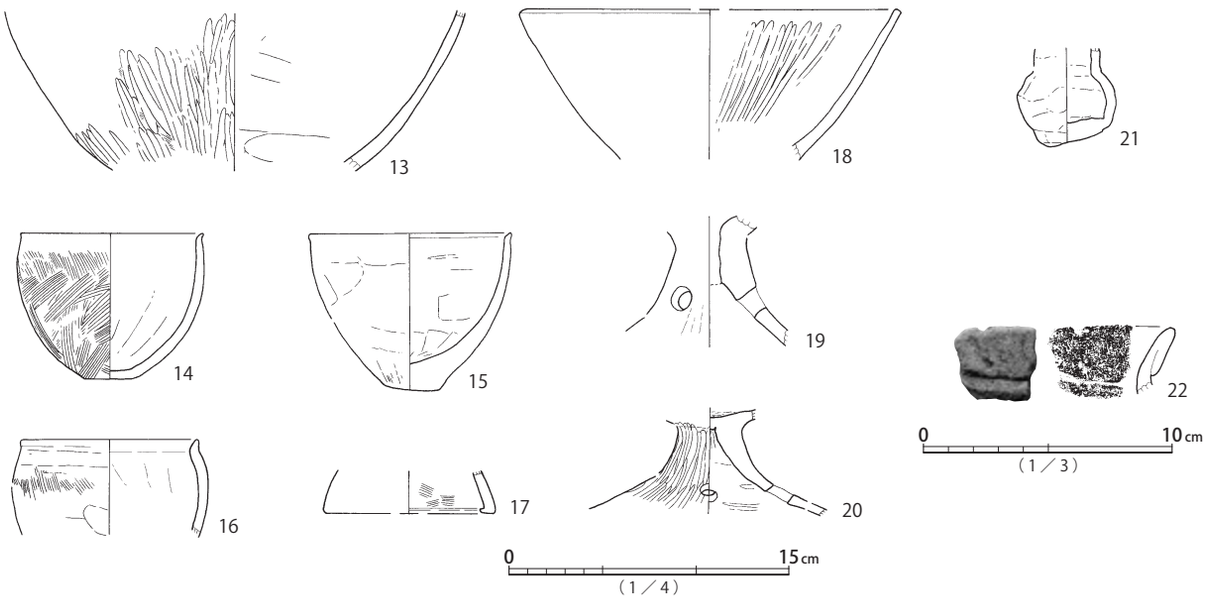


Fig.398　竪穴1165号(2) 遺物

0.45mを測る。主軸方位はN−19°−Wである。炉跡は中軸線上北西寄りから検出されている。P5は周辺床面が硬化することから出入口施設の可能性があるが、遺構範囲から検出されたP1〜4と同様に、本遺構に伴うものかは明確でない。

実測可能遺物は、1は小型の短頸壺形土器、2・7は高杯形土器、4・5は炉器台形土器、6は大型の椀形土器である。3は高杯形土器であろうか。5の脚台部には鋸歯文を5条垂下させる。3は南西隅付近から検出され、床面上からの出土。4〜6は炉内からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴1167号　（Fig.400、PL.48・90・129・142）

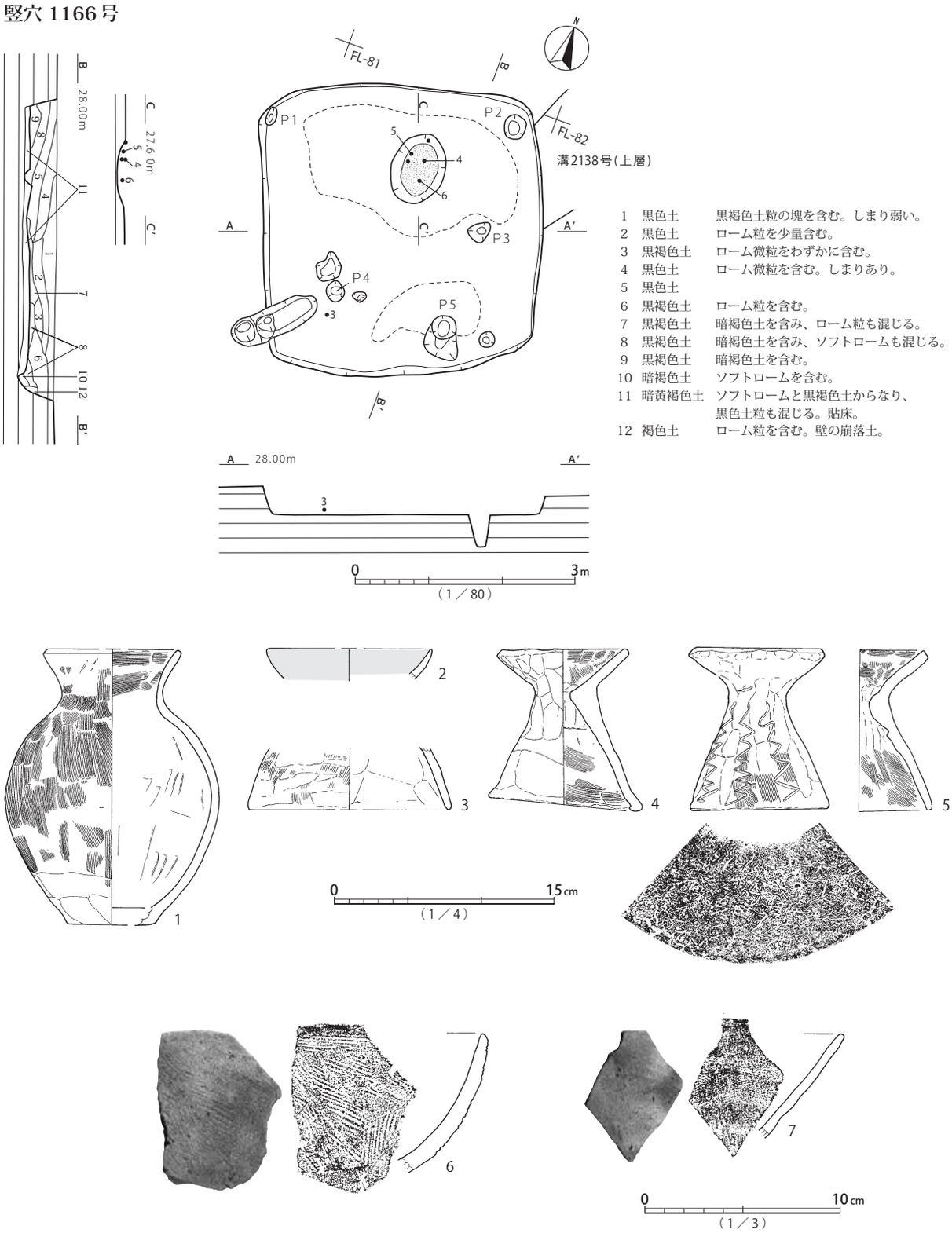
EM−11を中心に位置する。南隅で土坑1168号（上層）と竪穴1169号（上層）、北西側で竪穴1253号（上層）、北隅で溝2110号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈し、推定規模は5.00×4.71m、推定遺構下場面積は18.0㎡、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位はN−28°−Wである。炉跡は遺構中央北西寄り、P1・2間の内側から検出されている。P1〜4は主柱穴、P5は貯蔵穴である。北西辺壁際から検出されたP6は、本遺構に伴うものか明確でない。南東隅を中心に、床面上からは炭化材の分布が確認されており、火災に遭った可能性がある。壁周溝が検出され、部分的に途切れる。

実測可能遺物は、1は小型の壺形土器、2は直口縁壺形土器、3は壺形土器、4は椀形土器、5は器台形土器、6は高杯形土器、7・8は甕形土器である。6は杯部が椀形を呈し、口縁部が内湾する。土器以外では、焼成前に2ヶ所の未貫通穿孔を施す9の土製有孔丸玉が出土している。3・5・6は南東隅付近から検出され、いずれも床面上からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる。

竪穴 1166号



1 黒色土 黒褐色土粒の塊を含む。しまり弱い。
2 黒色土 ローム粒を少量含む。
3 黒褐色土 ローム微粒をわずかに含む。
4 黒色土 ローム微粒を含む。しまりあり。
5 黒色土
6 黒褐色土 ローム粒を含む。
7 黒褐色土 暗褐色土を含み、ローム粒も混じる。
8 黒褐色土 暗褐色土を含み、ソフトロームも混じる。
9 黒褐色土 暗褐色土を含む。
10 暗褐色土 ソフトロームを含む。
11 暗黄褐色土 ソフトロームと黒褐色土からなり、黒色土粒も混じる。貼床。
12 褐色土 ローム粒を含む。壁の崩落土。

Fig.399 竪穴1166号 遺構遺物

竪穴 1167号

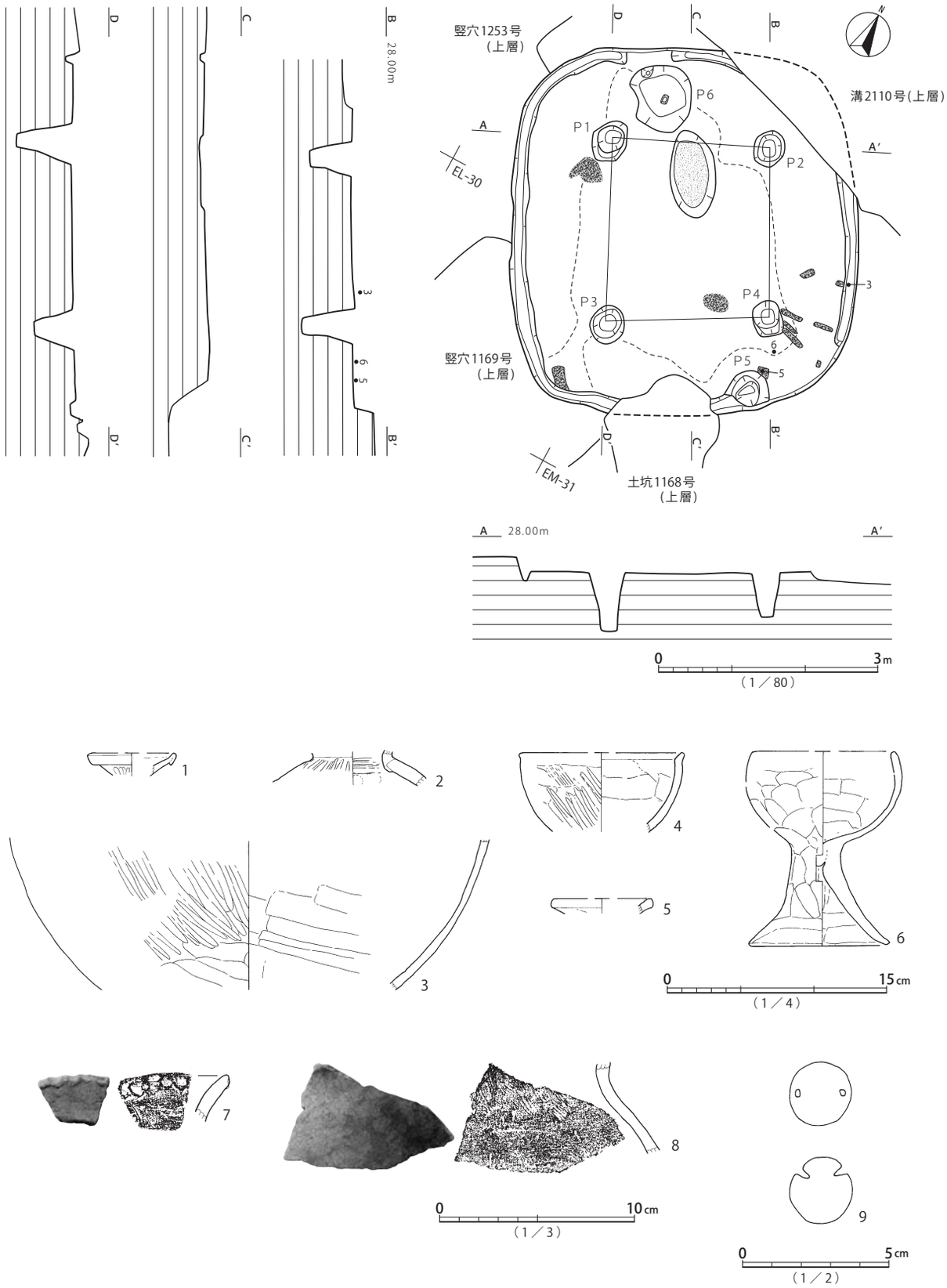


Fig.400　竪穴1167号 遺構遺物

竪穴1172号 （Fig.401、PL.48）

調査図面では、南北方向の短軸長が著しく短い隅丸長方形となっていたが、写真と明らかに異なっていたことから、整理作業段階で修正を行った。

EL−29を中心に位置する。南側で土坑1175・1210号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は隅丸長方形を呈し、図面修正後の推定規模は4.94×3.52m、推定遺構下場面積は13.0㎡、確認面からの深さは0.13mを測る。主軸方位はN−77°−Wである。炉跡や主柱穴は検出されておらず、遺構範囲から検出されている掘り込みも、本遺構に伴うものかは明確でない。壁周溝が検出され、両長軸辺壁際では途切れている。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1201・1206号 （Fig.402、PL.48・90・129）

EL−35を中心に位置する。竪穴1201号は、1206号を一部埋め戻して貼り床とし、規模をわずかに拡張したものと考えられる。南東側で竪穴1200号（上層）と重複し、北隅の一部は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構が1200号よりも古い。

竪穴1206号の平面形態は小型の胴張隅丸長方形を呈し、推定規模は3.47×3.03m、推定遺構下場面積は9.2㎡、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN−51°−Eである。炉跡は遺構中央北寄りから検出されている。主柱穴と貯蔵穴は検出されていない。

竪穴1201号の平面形態は小型の胴張長方形を呈し、推定規模は3.64×3.12m、推定遺構下場面積は10.3㎡、確認面からの深さは0.05mを測る。主軸方位はN−52°−Eである。炉跡は遺構中央北寄りから検出され、1206号よりもやや遺構中央寄りに設置している。主柱穴と貯蔵穴は検出されていない。

実測可能遺物は、竪穴1206号は1の小型の器台形土器のみで、竪穴1201号は1が甕形土器、2が小型の短頸壺形土器、3が器種不明の底部である。甕形土器は頸部がくの字状に屈折し、内面はケズリ状のヘラナデを施す。口縁部は大きく開き、端部は丸く収まる。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、古墳時代前期前葉の可能性もある。

竪穴1205号 （Fig.403、PL.129）

FK−87を中心に位置する。北隅で古墳1204号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠はないが、本遺構のほうが古いと考えられる。

平面形態は小型の不整隅丸方形を呈し、推定規模は3.15×3.06m、推定遺構下場面積は7.8㎡、確認面からの深さは0.19mを測る。主軸方位はN−19°−Eである。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は1の甕形土器のみである。ゆるく外反する口縁の端部は丸く収まり、内面はハケ調整ののちケズリ状のヘラナデを加える。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、古墳時代前期前葉の可能性もある。

竪穴1172号

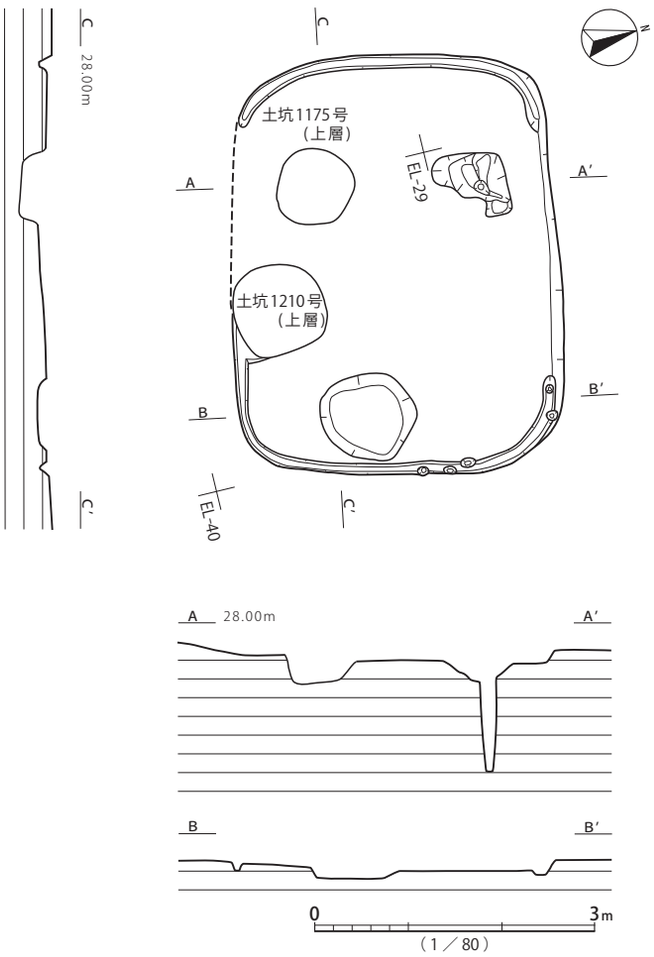


Fig.401　竪穴1172号 遺構

竪穴1214号　（Fig.403、PL.136）

EK−38を中心に位置する。他遺構との重複はないが、北西辺壁と遺構中央の各一部は撹乱により壊される。

平面形態は隅丸方形ないし胴張隅丸方形を呈すと思われるが、北西隅が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.22mを測る。南西辺壁を基準とした場合、主軸方位はN−21°−Wとなる。炉跡や柱穴、貯蔵穴などの屋内施設は検出されていない。

実測可能遺物は1の磨石・敲石のみで、帰属時期は不明である。

竪穴1215号　（Fig.404、PL.48・90）

EK−26を中心に位置する。西側で溝2132号（上層）と重複し、南東隅は撹乱により壊される。新旧関係は、本遺構のほうが2132号よりも古い。

平面形態は隅丸方形を呈すと考えられるが、遺構東側が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は4.68×4.28m、推定遺構下場面積は17.2㎡、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位はN−22°−Wである。P1〜3は主柱穴と思われるが、北西隅からは対応する柱穴を検出することが

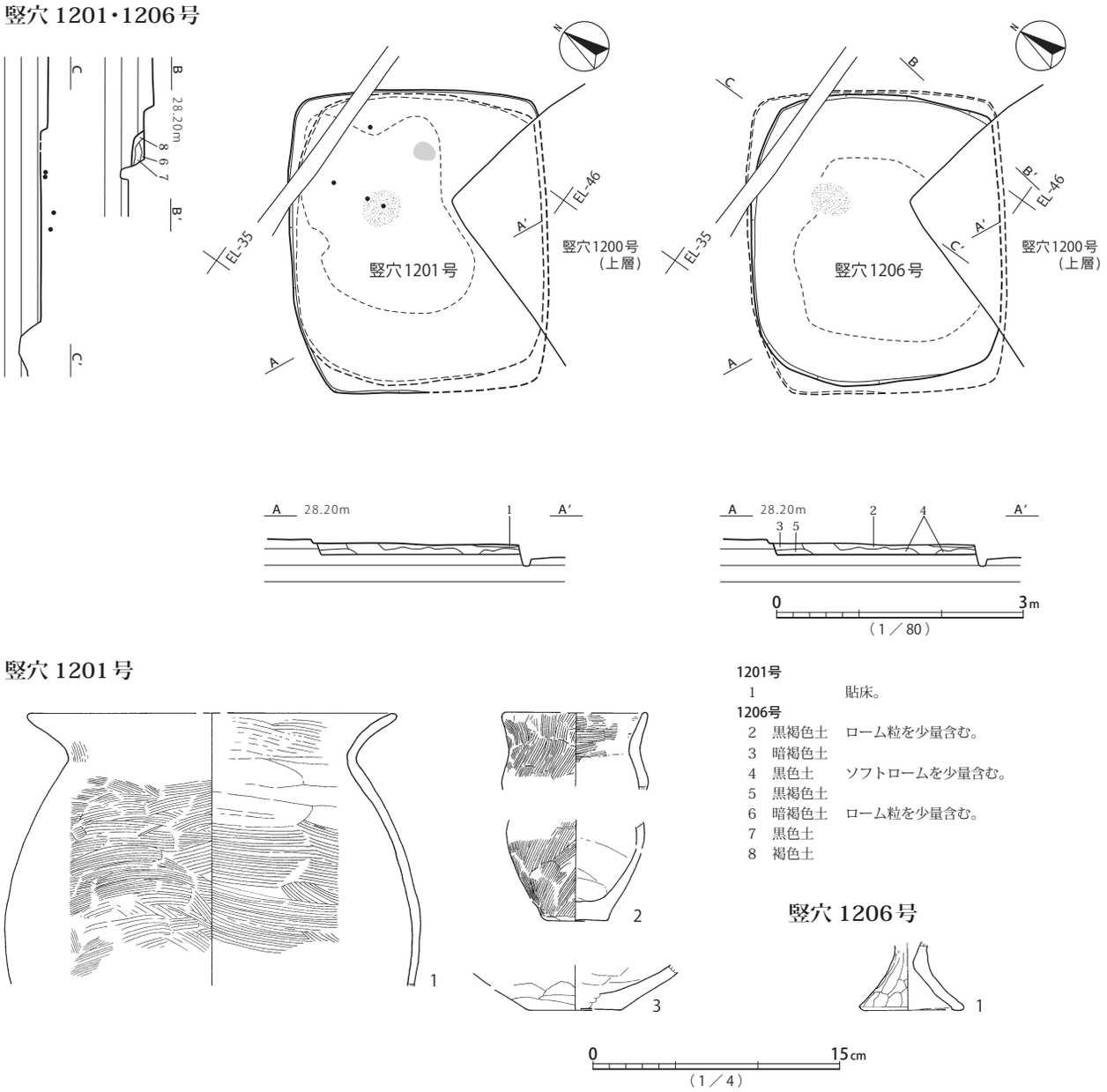


Fig.402　竪穴1201号 遺構遺物、竪穴1206号 遺構遺物

できていない。炉跡は検出されず、貯蔵穴は南東隅付近に所在した可能性があるが、撹乱のため不明である。

実測可能遺物は1の椀形土器のみである。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

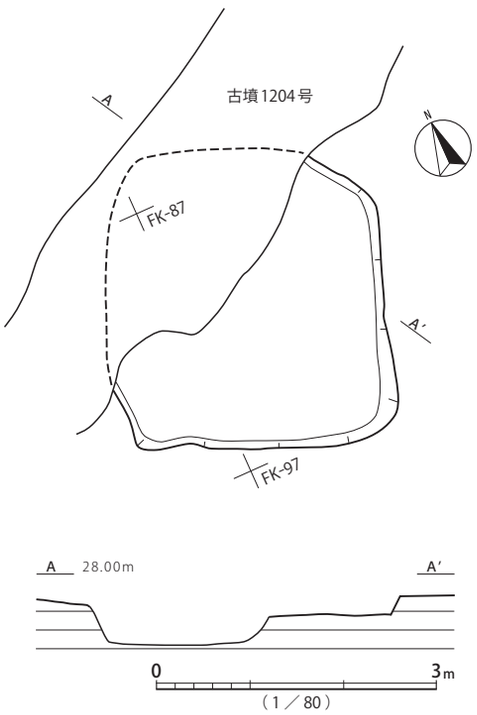
セ116・117地区

竪穴1756号　（Fig.405、PL.50）

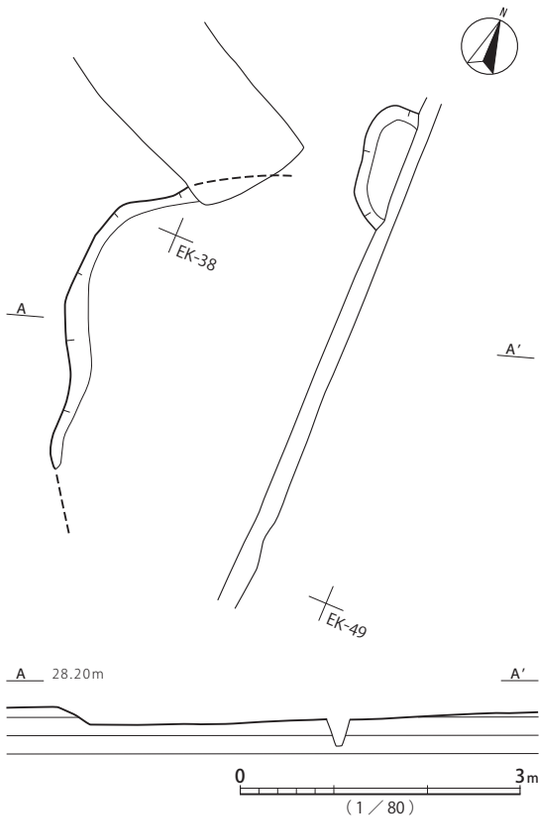
NH−04を中心に位置する。5トレンチ北東隅から検出された。

南西辺壁のごく一部が検出されたのみで、詳細は不明である。遺構確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−68°−Wとなる。

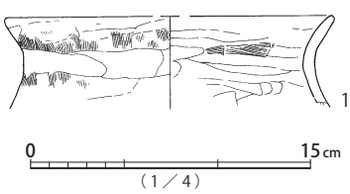
竪穴 1205号



竪穴 1214号



竪穴 1205号



竪穴 1214号

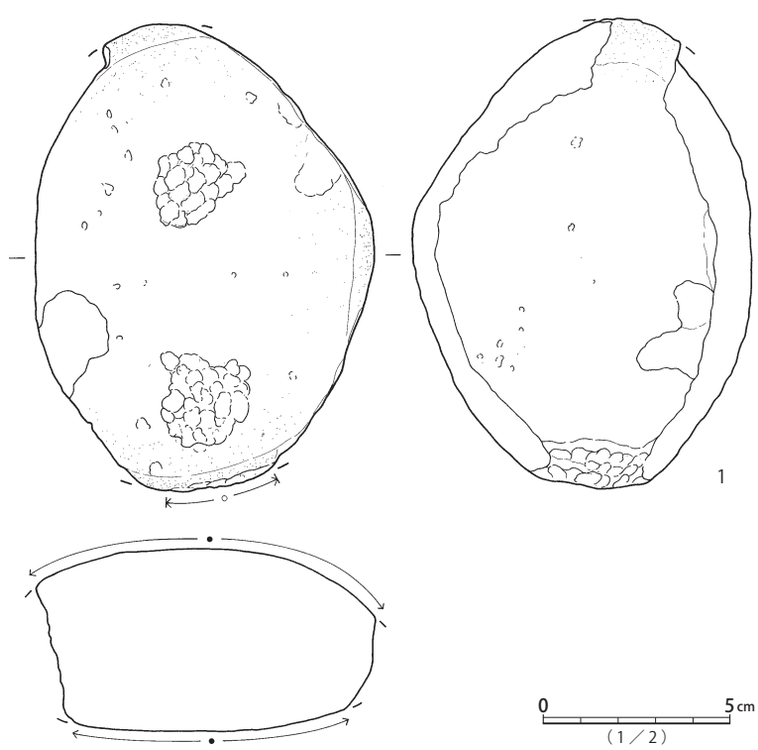


Fig.403　竪穴1205号 遺構遺物、竪穴1214号 遺構遺物

竪穴 1215号

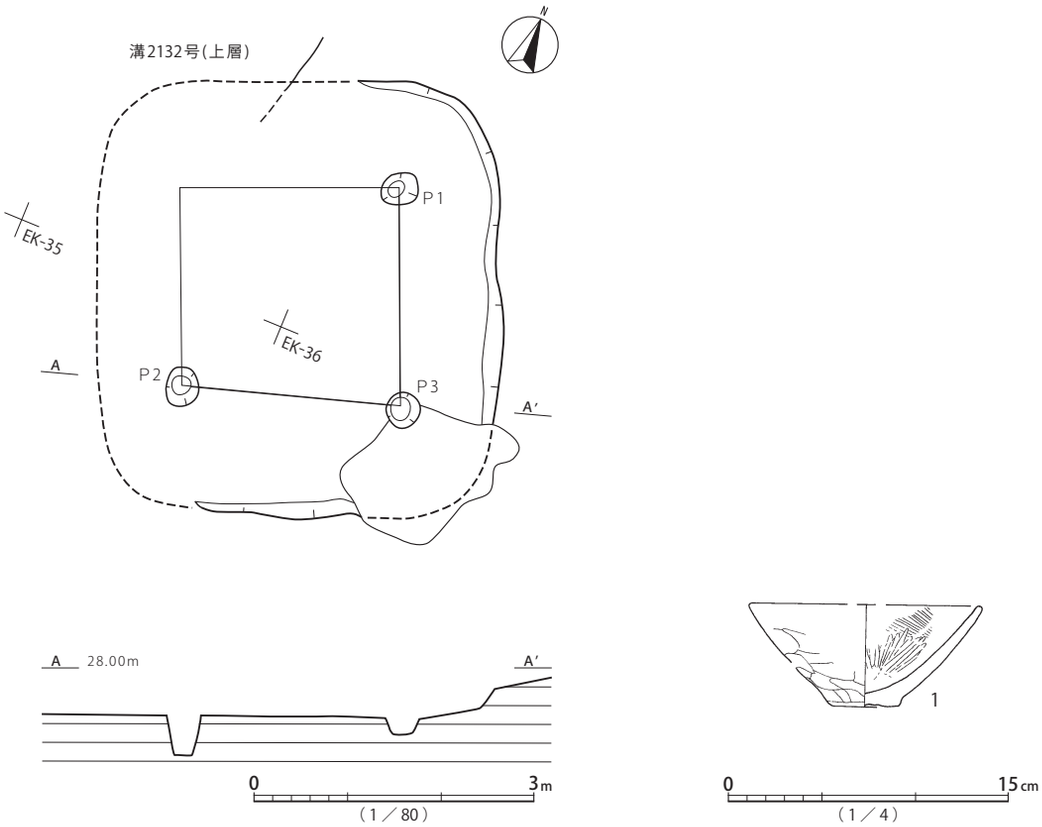


Fig.404　竪穴1215号 遺構遺物

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1757号　（Fig.405、PL.50・90・129）

NH−33を中心に位置する。5トレンチ南東側から検出され、掘立柱建物3200号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3200号よりも古い。

平面形態は方形を呈すと思われるが、北西側が検出されたのみで、詳細は不明である。遺構確認面における規模は一辺5.22mを測る。北西辺壁確認ラインを基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−40°−Wとなる。

実測可能遺物は、1は台付甕形土器、2は高杯形土器である。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴1758号　（Fig.405、PL.50）

OH−57を中心に位置する。OH−2トレンチから検出され、溝2238号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2238号よりも古い。

南東辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.73mを測る。遺構確認ラインを基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−38°−Wとなる。

サブトレンチ内からは複数の遺物が出土しているが、実測可能遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1759号 （Fig.405、PL.50）

OH−97を中心に位置する。OH−3トレンチから検出され、西側で溝2238号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2238号よりも古い。

南西辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。遺構確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−30°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1760号 （Fig.405、PL.50）

NH−07を中心に位置する。OH−3トレンチから検出され、西側で竪穴1761号・溝2238号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2238号よりも古い。1761号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

北辺壁のごく一部が検出されたのみで、詳細は不明である。遺構確認ラインを基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−16°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1761号 （Fig.405、PL.50）

NH−06を中心に位置する。OH−3トレンチから検出され、東側で竪穴1760号・溝2238号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2238号よりも古い。1760号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

北辺壁のごく一部が検出されたのみで、詳細は不明である。遺構確認ラインを基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−18°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1762号 （Fig.406）

NH−38を中心に位置する。6トレンチ西側から検出され、北西側で竪穴1879号、西側で溝2238号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2238号よりも古い。1879号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

直線的に延びる北東・南西辺壁の一部が検出されたのみで、竪穴1879号との境界も捉えられておらず、詳細は不明である。遺構確認面における規模は一辺4.41mを測る。北東辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−33°−Wとなる。

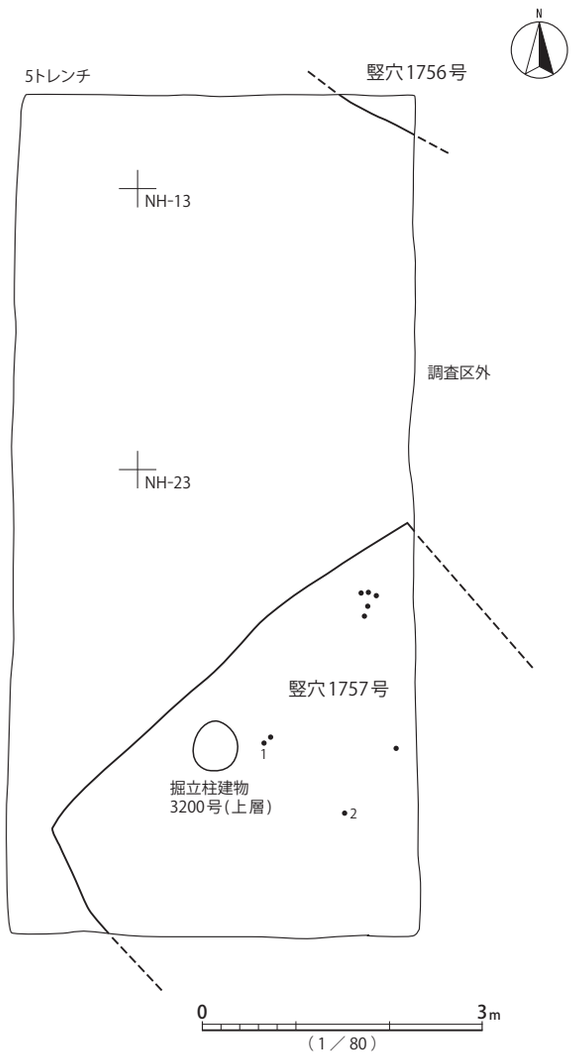
出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1879号 （Fig.406）

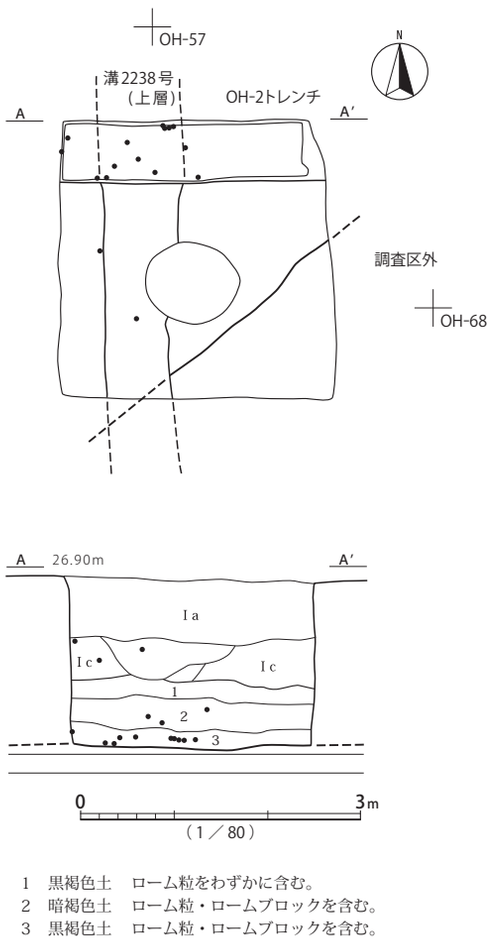
NH−37を中心に位置する。6トレンチ西隅から検出され、南東側で竪穴1762号、東側で溝2238号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2238号よりも古い。1762号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

南西辺壁のごく一部が検出されたのみで、竪穴1762号との境界も捉えられておらず、詳細は不明

竪穴 1756・1757号

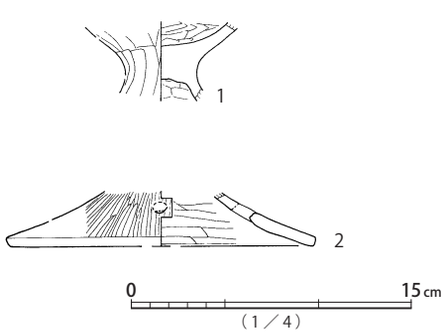


竪穴 1758号



1　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
2　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。
3　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。

竪穴 1757号



竪穴 1759・1760・1761号

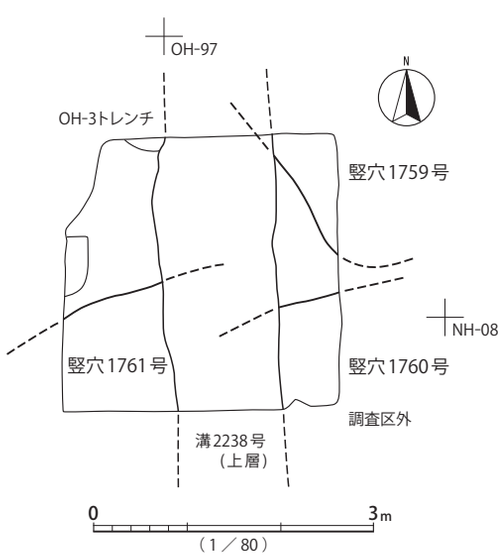


Fig.405　竪穴1756号 遺構、竪穴1757号 遺構遺物、竪穴1758号 遺構、竪穴1759号・1760号・1761号 遺構

である。遺構確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−40°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1766号 （Fig.406、PL.50）

MH−66を中心に位置する。4トレンチ中央から検出され、南隅の一部は、瓦を含み上層遺構と思われる不整形の掘り込みと重複する。

平面形態は方形を呈すと考えられるが、南隅が検出されたのみで、詳細は不明である。南西辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−53°−Wとなる。

実測可能遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1767号 （Fig.406、PL.50）

MH−77を中心に位置する。4トレンチ中央から検出され、北隅の一部は撹乱により壊される。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、北側が検出されたのみで、詳細は不明である。南側の調査区までは遺構が延びていないことから、破線で示した範囲に収まるものと思われる。北西辺壁確認ラインを基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−25°−Wとなる。

実測可能遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1768号 （Fig.407、PL.50・129）

MH−70を中心に位置する。4トレンチ東側から検出され、中央で土坑1774号（上層）、東側で溝2239号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、西側が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.43mを測る。南西辺壁確認ラインを基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−18°−Eとなる。炉跡はサブトレンチ内から検出され、遺構中央北寄りに位置するものと思われる。

サブトレンチ内からは複数の遺物が出土しているが、実測可能遺物は1の高杯形土器のみである。脚裾部はわずかに肥厚し、段部に刺突を加える。炉跡東側から検出され、床面上からの出土である。

弥生時代終末期後半の所産と思われるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

竪穴1876号 （Fig.407）

MH−90を中心に位置する。セ116調査区の北東隅から検出され、中央で溝2239号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2239号よりも古い。

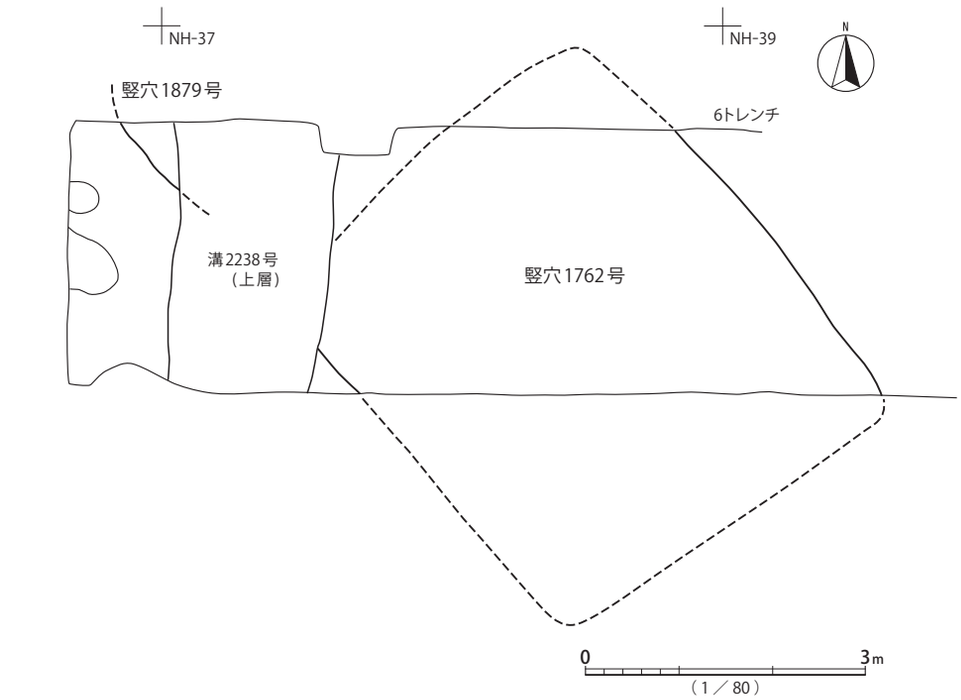
平面形態は方形を呈すと思われるが、南西・南東辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。南西辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−52°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1771号 （Fig.408）

MH−43を中心に位置する。MH−2トレンチ東側から検出され、西側で掘立柱建物3238号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が3238号よりも古い。

竪穴 1762・1879号



竪穴 1766・1767号

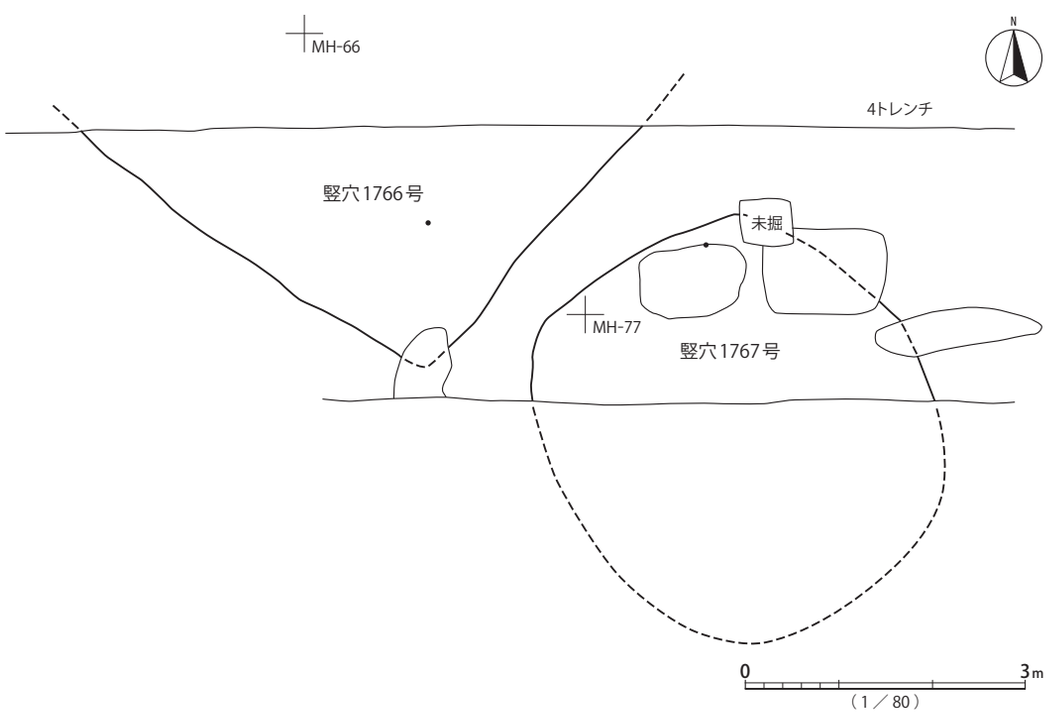
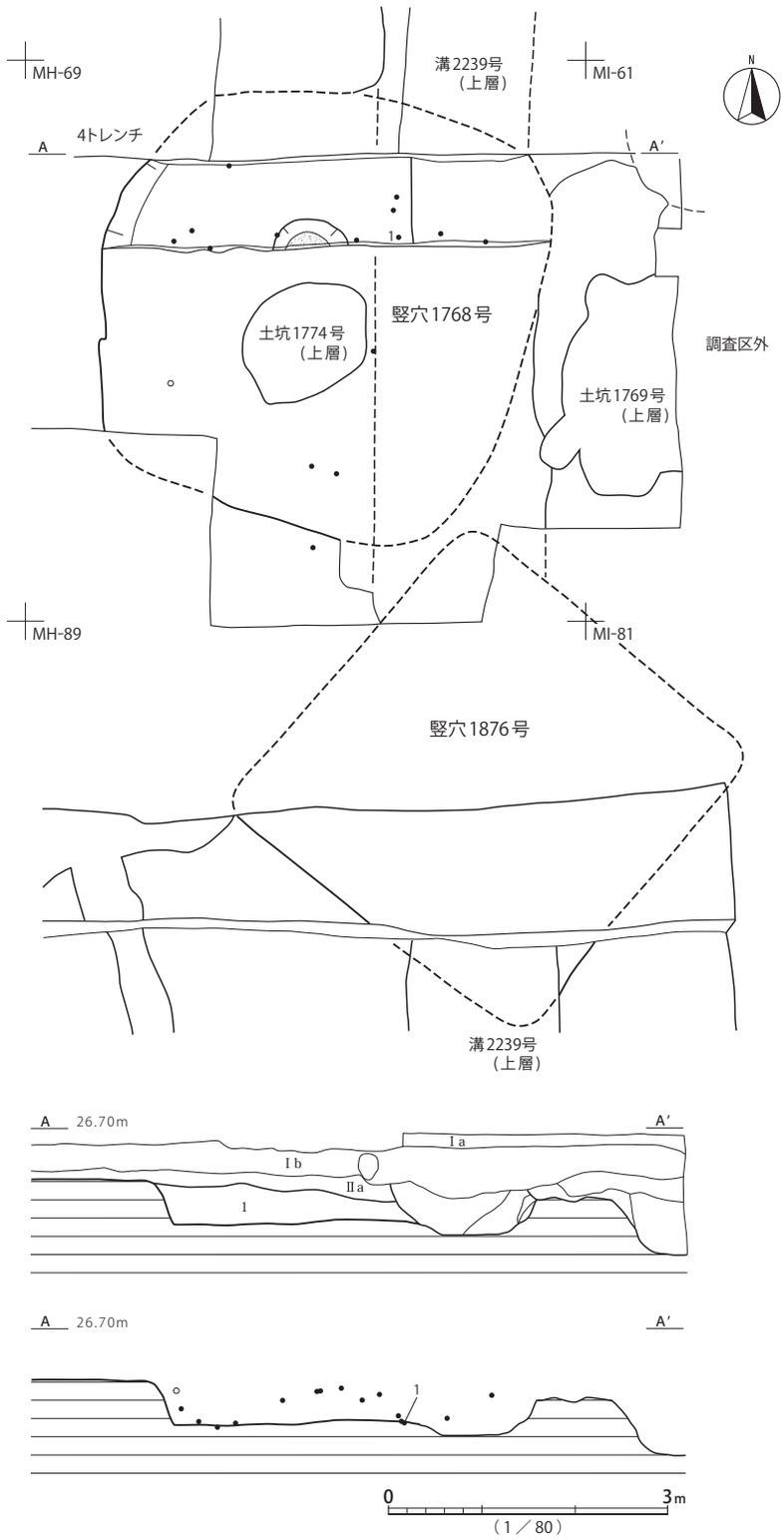
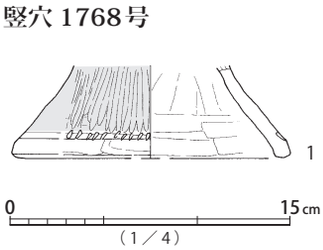


Fig.406　竪穴1762号 遺構、竪穴1879号 遺構、竪穴1766号 遺構、竪穴1767号 遺構

竪穴 1768・1876 号

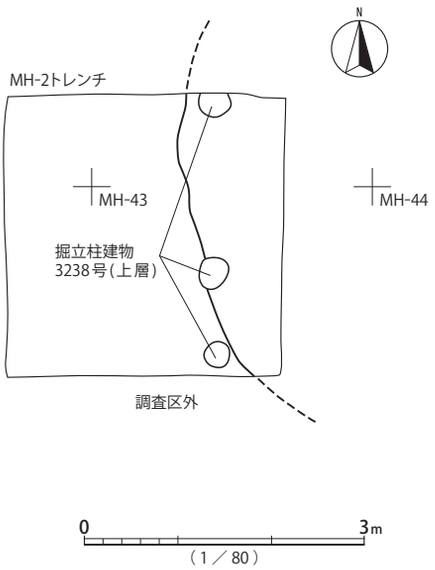




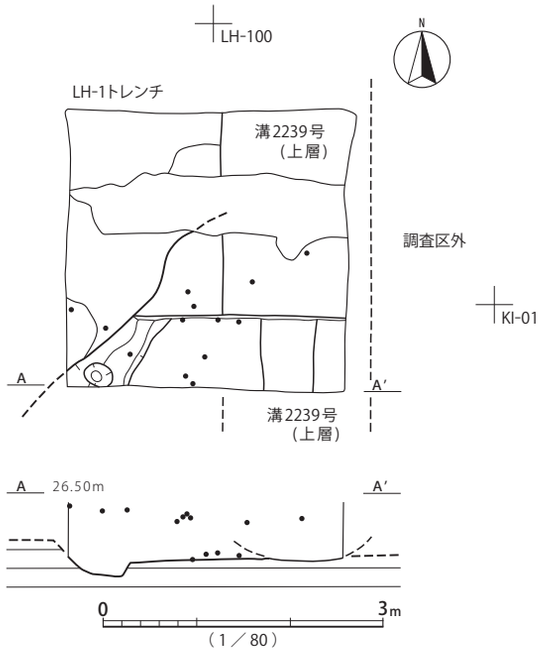
1　黒褐色土　ローム粒・ロームブロックを含む。

Fig.407　竪穴1768号 遺構遺物、竪穴1876号 遺構

竪穴 1771号



竪穴 1775号



竪穴 1775号

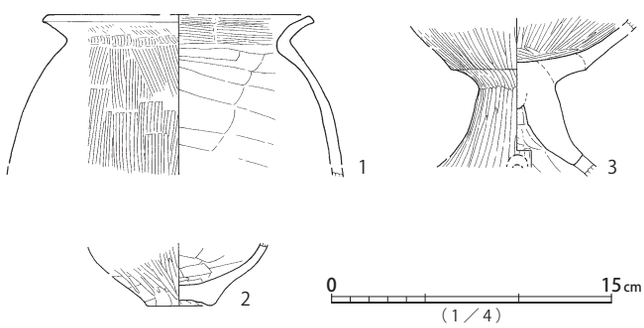


Fig.408　竪穴1771号 遺構、竪穴1775号 遺構遺物

平面形態は長楕円形を呈すと思われるが、西辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。西辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−14°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1775号　（Fig.408、PL.90）

KH−09を中心に位置する。LH−1トレンチ南側から検出され、東側で溝2239号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2239号よりも古い。

北西辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.21mを測る。北西辺壁確認ラインを基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−39°−Wとなる。サブトレンチ内からは幅広の壁周溝が検出されている。

実測可能遺物は、1は甕形土器、3は高杯形土器である。2は小型の壺形土器であろうか。1は頸部がくの字状に屈折し、内面はヘラナデを施す。口縁部は大きく外反し、端部は面取りされる。なお、

本遺構からはタタキ甕胴部破片が出土していると台帳に記載されていたが、遺物の所在を確認できていない。

古墳時代前期中葉の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

竪穴1776号 （Fig.409、PL.50）

KH−69を中心に位置する。KH−2トレンチ南西側から検出された。

北東辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。遺構確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−40°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1778号 （Fig.409）

LH−16を中心に位置する。セ116調査区の南側から検出され、北西辺壁で土坑1882・1883号と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも新しい。

平面形態は方形を呈すと思われるが、北隅が検出されたのみで、詳細は不明である。北東辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−30°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1779号 （Fig.409）

LH−18を中心に位置する。セ116調査区の南側から検出され、他遺構との重複はない。

平面形態は方形を呈すと思われるが、北隅の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。北東辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−44°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1780号 （Fig.409）

LH−20を中心に位置する。セ116調査区の南東隅から検出され、北東側で竪穴1781号、東側で溝2239号（上層）、西側で溝2405号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2239・2405号よりも古い。1781号との関係は明確でないが、本遺構のほうが古いと思われる。

平面形態は隅丸方形を呈すと思われるが、北隅と北西辺壁の各一部が検出されたのみで、詳細は不明である。北西辺壁確認ラインを基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−55°−Wとなる。

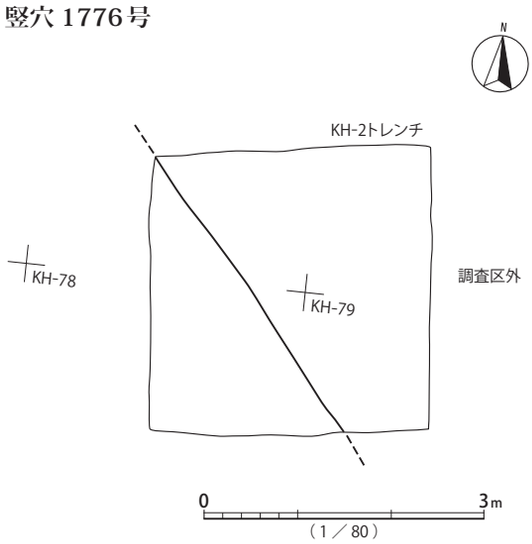
出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1781号 （Fig.409）

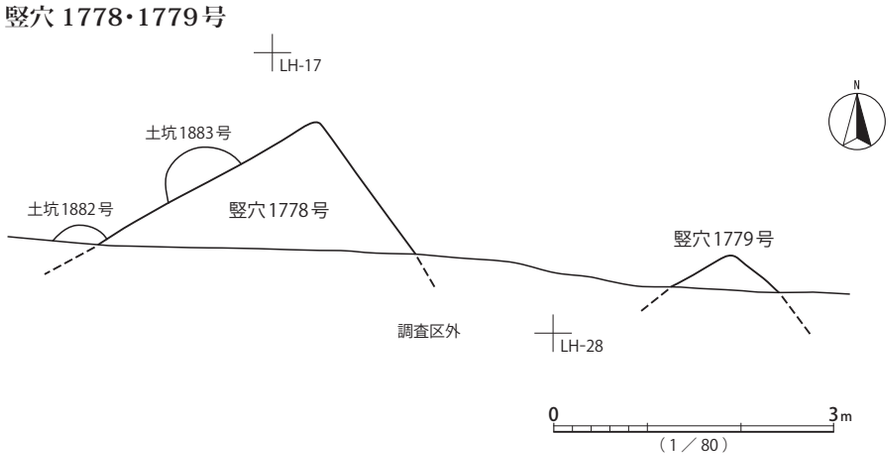
LH−20を中心に位置する。セ116調査区の南東隅から検出され、南西側で竪穴1780号、東側で溝2239号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2239号よりも古い。1780号との関係は明確でないが、本遺構のほうが新しいと思われる。

北西辺壁のごく一部が検出されたのみで詳細は不明であるが、溝2239号の東側までは遺構が延びていないことから、北隅で直角気味に折れて、方形の平面形態をとる可能性が考えられる。北西辺壁

竪穴 1776号



竪穴 1778・1779号



竪穴 1780・1781号

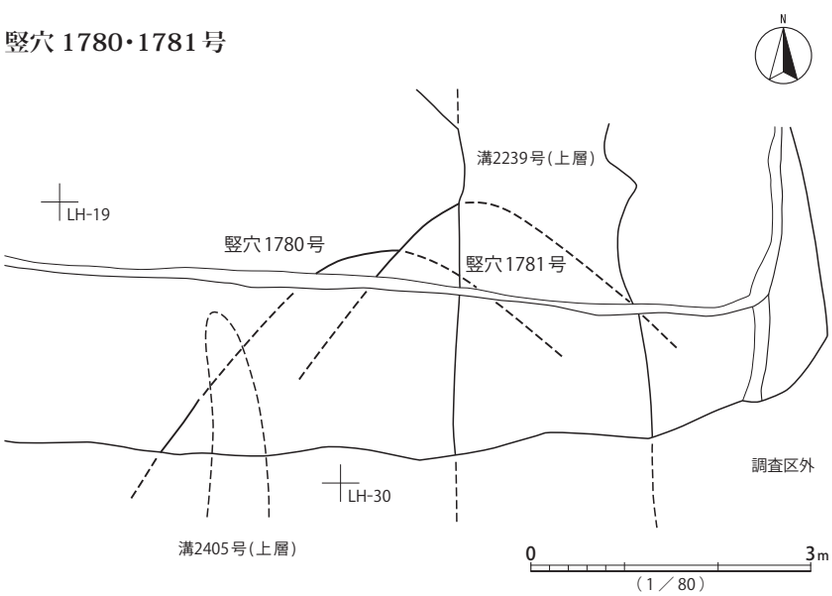


Fig.409　竪穴1776号 遺構、竪穴1778号・1779号 遺構、竪穴1780号・1781号 遺構

確認ラインを基準とした場合、これと直交する軸の方位はN−46°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1785号 （Fig.410）

MH−85を中心に位置する。セ116調査区の北西側から検出され、南隅で炉穴1786号と重複する。新旧関係は、本遺構が1786号よりも新しい。東側には南北方向の壁をもつ遺構が存在する可能性があるが、明確でない。

方形に近い平面形態を呈すと思われるが、南隅の一部が検出されたのみで、南東側は時期不明の土坑との重複や撹乱により、遺構範囲が明確でないことから、詳細は不明である。南西辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−40°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1792号 （Fig.410）

HH−58を中心に位置する。HH−4トレンチ南西隅から検出され、他遺構との重複はない。

北東辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。北東辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−40°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1794号 （Fig.410、PL.50）

IH−09を中心に位置する。IH−2トレンチ北側から検出され、南隅で溝2408号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が2408号よりも古い。

平面形態は胴張隅丸方形を呈すと思われるが、南側半分程度が検出されたのみで、詳細は不明である。推定規模は4.02×3.93m、推定遺構上場面積は13.4㎡を測る。主軸方位はN−44°−Wである。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1795号 （Fig.410）

JH−94を中心に位置する。IH−1トレンチ北側から検出され、南側で溝2408号（上層）、中央で塀3134号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。

東辺壁のごく一部が検出されたのみで詳細は不明であるが、溝2408号の南側までは遺構が延びていないことから、南東隅で直角気味に折れて、方形に近い平面形態を呈す可能性がある。

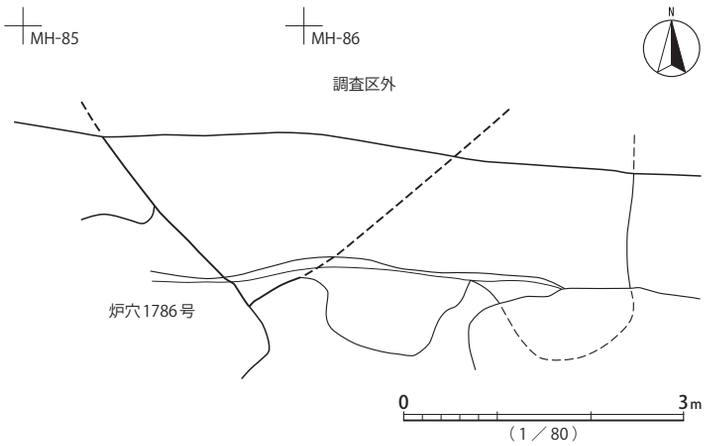
出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1831号 （Fig.411）

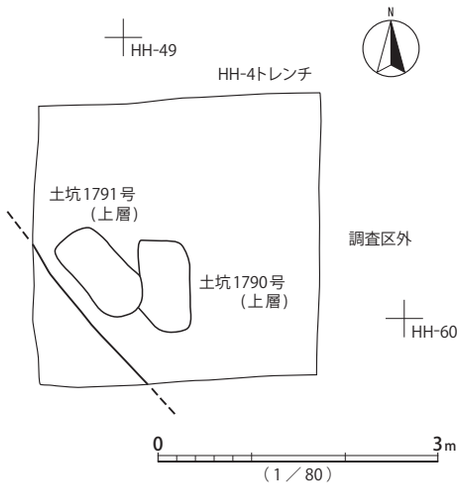
MH−94を中心に位置する。セ116調査区の北西側から検出され、南隅で掘立柱建物3449号（上層）と重複するものと思われる。新旧関係は、本遺構が3449号よりも古い。

平面形態は長方形を呈すと思われるが、南側は国分寺の参道建設工事によって削平されたため、詳細は不明である。南側で検出された溝状の掘り込みは、壁周溝ないし掘り方の痕跡と考えられ、推定

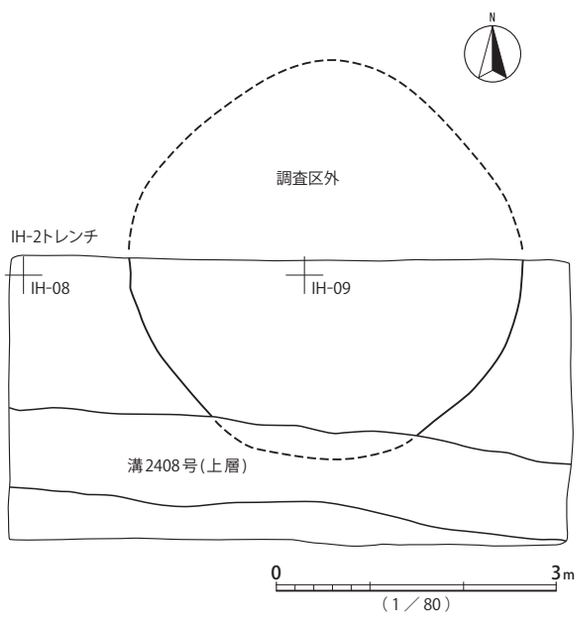
竪穴 1785号



竪穴 1792号



竪穴 1794号



竪穴 1795号

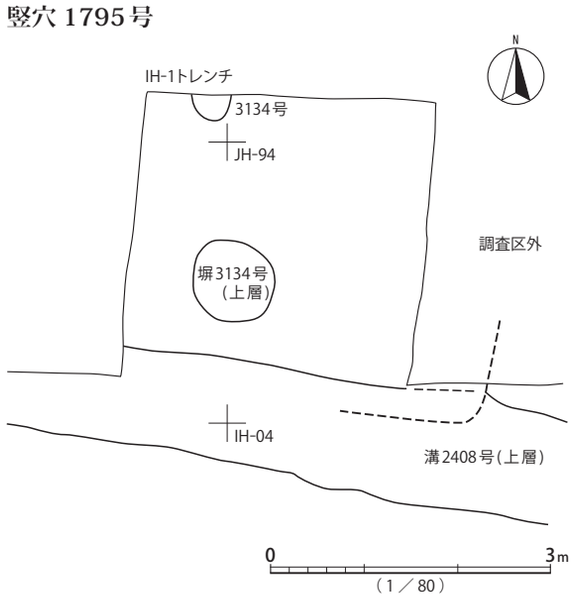


Fig.410　竪穴1785号 遺構、竪穴1792号 遺構、竪穴1794号 遺構、竪穴1795号 遺構

規模は副軸長3.59m、確認面からの深さは0.09m、推定遺構上場面積は14.3㎡を測る。北東辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−32°−Wとなる。

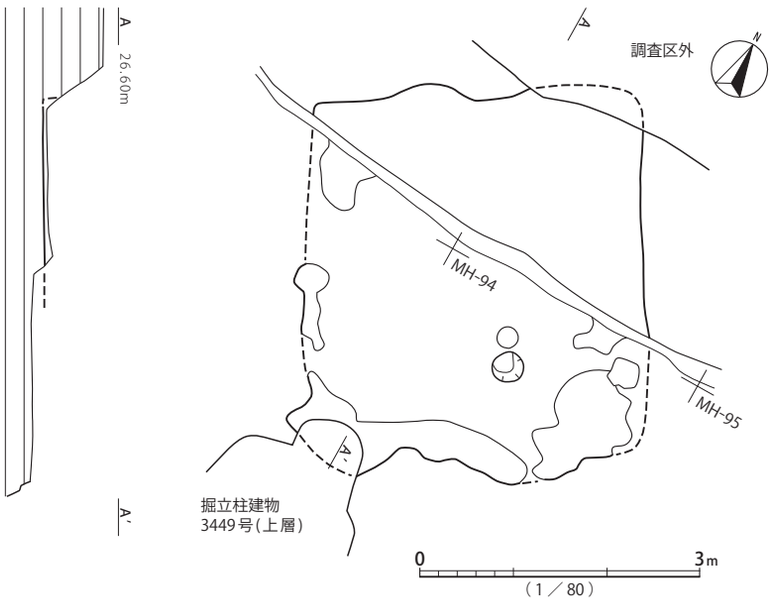
出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1878号　（Fig.411）

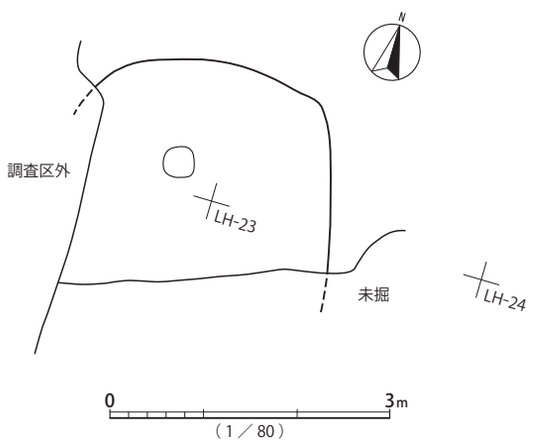
LH−23を中心に位置する。セ116調査区の西隅から検出され、北側で柱穴（遺構番号なし）と重複する。新旧関係は、本遺構が柱穴よりも古い。

平面形態は胴張隅丸（長）方形を呈すと思われるが、南側は掘削しておらず、西側は調査区外に延びるため、詳細は不明である。東辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−16°−Wとなる。

竪穴 1831 号



竪穴 1878 号



竪穴 1886 号

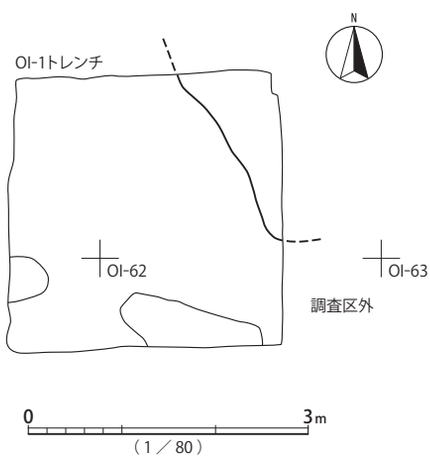


Fig.411　竪穴1831号 遺構、竪穴1878号 遺構、竪穴1886号 遺構

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

竪穴1886号　（Fig.411）

OI−52を中心に位置する。OI−1トレンチ北東隅から検出され、他遺構との重複はない。

南西辺壁の一部が検出されたのみで、詳細は不明である。南西辺壁確認ラインを基準とした場合、主軸方位はN−32°−Wとなる。

出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

第２節　掘立柱建物

西辺部

掘立柱建物3196号　（Fig.412、PL.44）

上総国分僧寺の付属施設に匹敵する規模であることから、上層遺構編で報告を行っているが、寺院地外郭溝の外側に位置すること、僧寺主要伽藍や寺院地外郭溝と軸向きが異なること、寺院地外郭溝埋没後（中世以降）の建物とするには柱掘り方がしっかりし過ぎていることから、国分僧寺創建期以前の可能性が高いと考え、再録することとした。

RG−47を中心に位置する。北西側で竪穴0266号、南東側で竪穴0273号と重複し、南西側は調査区外に延びる。新旧関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、明確でない。

現状規模は１間×３間で、梁間6.2m、桁行8.2m、面積50.8㎡を測る大型建物である。柱掘り方の平面形態は隅丸長方形ないし楕円形を呈し、1.60×1.00m程度のものが多い。確認面から底面までの深さは0.07〜0.87mで、ばらつきが大きい。主軸方位はN−42°−Wである。

梁間中央に位置するP3は柱壁面の外側に張り出し、独立（近接）棟持柱建物の構造をとる。土坑325号は上層遺構編で報告済みであるが、位置と掘り方の平面形態から本遺構に伴う屋内棟持柱の可能性がある。また、北東側に近接し、方形区画施設と考えられる溝2416号と軸を同じくすることから、同時期に機能し、本遺構が区画される対象のひとつであった可能性が高い。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、古墳時代前期前〜中葉の竪穴0266号と重複する。また、溝2416号は古墳時代前期前葉の竪穴0238・0265号と重複し、並行する２条の溝間に弥生時代後期後半の竪穴0269号が位置することから、弥生時代終末期ないし古墳時代前期中葉以降の時期と捉えられるが、本遺跡では前期中葉以降の遺構数は著しく減少することから、弥生時代終末期の所産である可能性が高い。

第３節　土　坑

北辺部

土坑1554号　（Fig.413）

TK−62を中心に位置する。南西隅で竪穴1590号、東側で溝2204号（上層）と重複するが、底面までは達していない。新旧関係は、本遺構が2204号よりも古い。1590号との関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がなく、不明である。

平面形態は楕円形を呈し、規模は1.36×1.21m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位はN−8°−Wである。

実測可能遺物は１の甕形土器のみである。外面にケズリ状のヘラナデを施す。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

土坑1559号　（Fig.413、PL.30・129）

SK−07を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整楕円形を呈し、規模は2.80×2.11m、確認面からの深さは0.84mを測る。主軸方位はN−43°−Wである。覆土中にはローム粒やロームブロックを多く含む層が認められ、人為的に埋

掘立柱建物 3196号

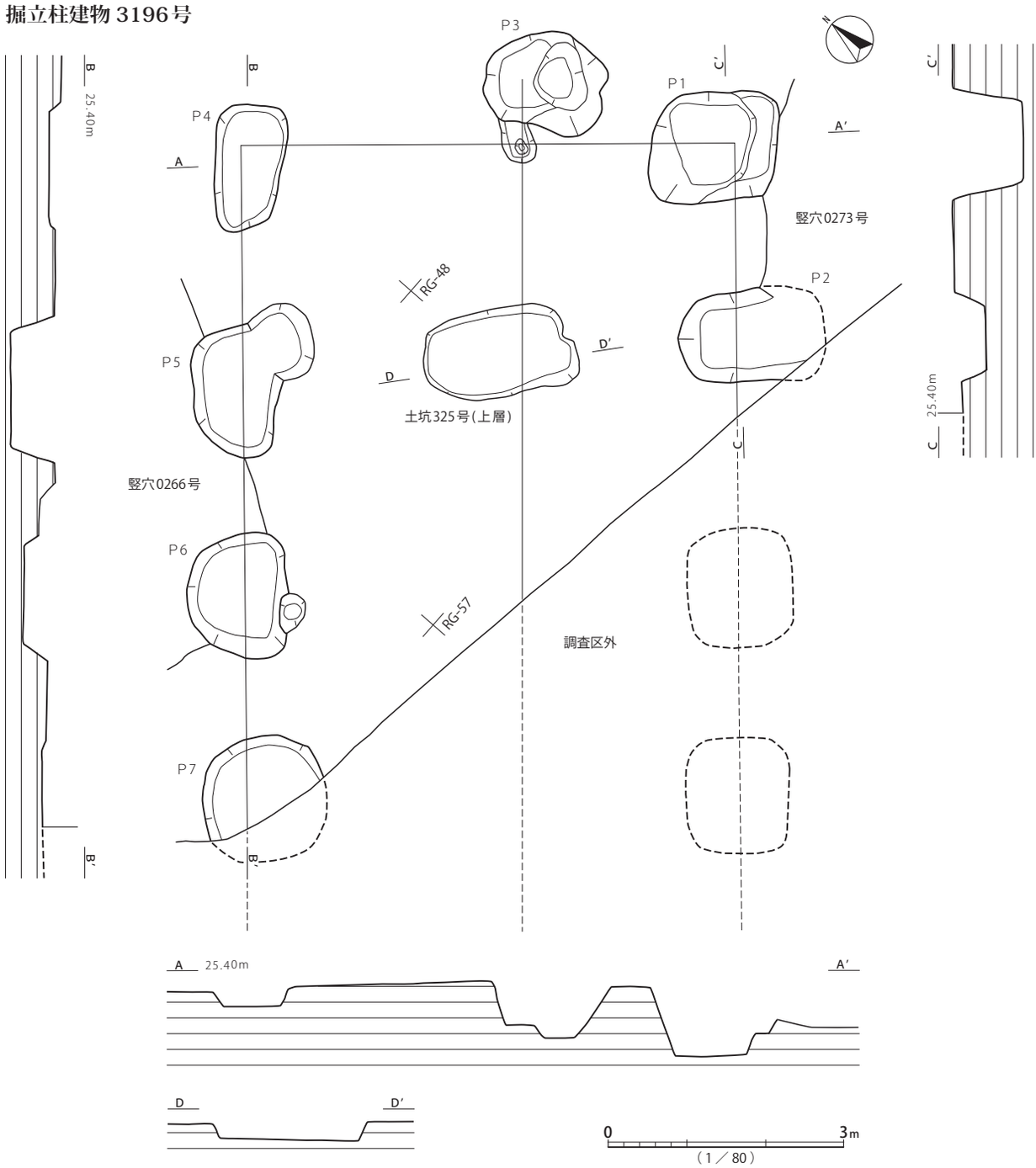


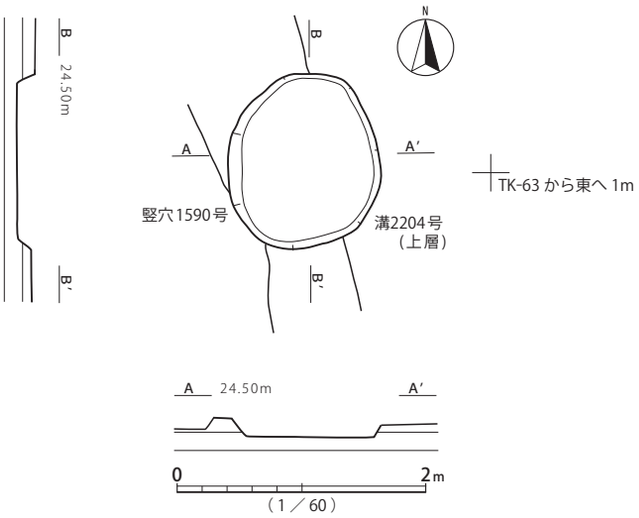
Fig.412　掘立柱建物3196号 遺構

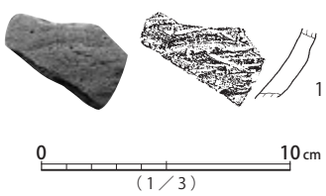
め戻された可能性がある。

実測可能遺物は1・2の壺形土器である。1は肩部に断面三角形の突帯を貼り付け、頂部に押捺を加える。2は折返し状複合口縁で、口縁端部に単節縄文を施し、下端に押捺を加える。

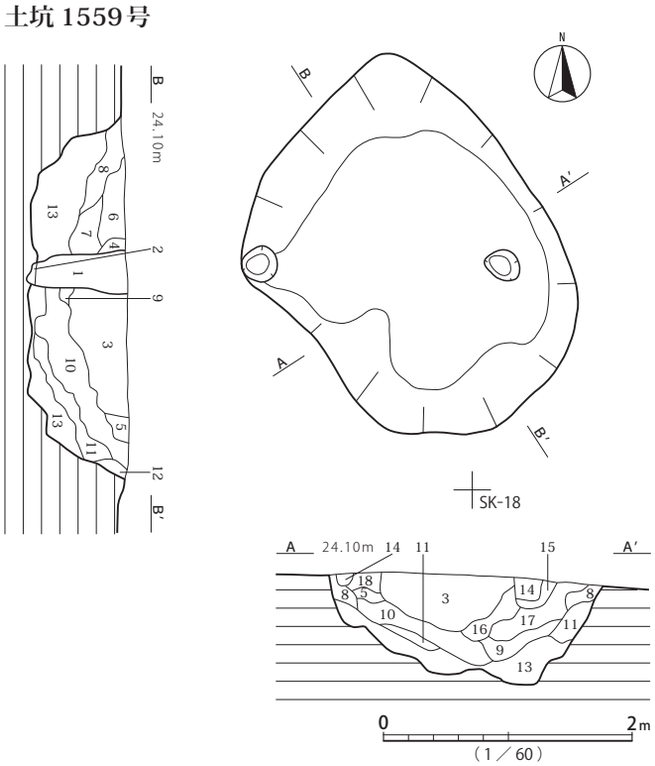
出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

土坑 1554号

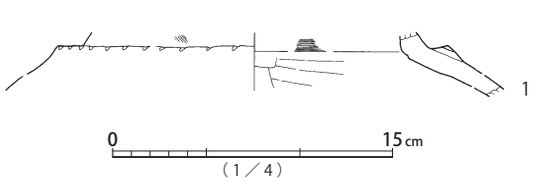




土坑 1559号



1	黒色土	上層ピット。
2	黒色土	ハードローム細粒を含む。上層ピット。
3	暗茶褐色土	ロームブロックとローム粒を多量に含む。
4	黒褐色土	ロームブロックを含む。
5	黒褐色土	ローム粒と黒色土を含む。
6	黒褐色土	
7	黒褐色土	ソフトロームブロックを含む。
8	暗褐色土	黒褐色土を含む。
9	黒色土	ロームブロックを含む。10層よりやや明るい。
10	黒色土	ロームブロックを少量含む。
11	褐色土	ロームブロックと黒色土を少量含む。
12	黄褐色土	
13	黄褐色土	ロームブロックを含む。
14	黒褐色土	
15	黒褐色土	ローム粒を含む。14層より明るい。しまりあり。
16	暗褐色土	ロームブロックを含む。
17	黒褐色土	ローム粒を含む。
18	暗褐色土	ローム粒を含む。



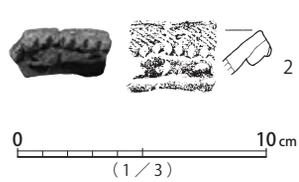


Fig.413　土坑1554号 遺構遺物、土坑1559号 遺構遺物

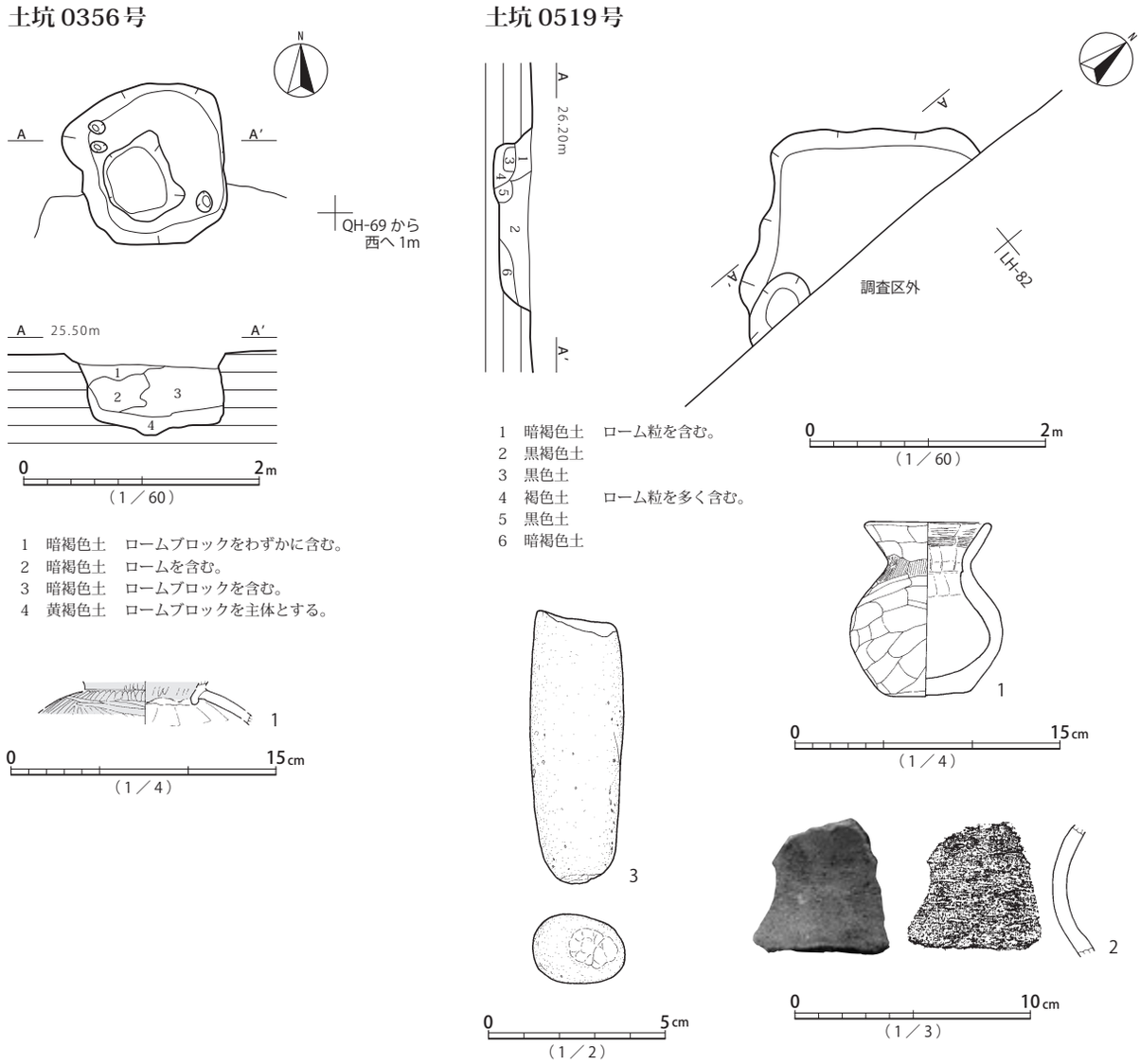


Fig.414　土坑0356号 遺構遺物、土坑0519号 遺構遺物

西辺部

土坑0356号　（Fig.414、PL.90）

QH−58を中心に位置する。他遺構との重複はないが、南側は撹乱により壊される。

平面形態は隅丸方形を呈し、底面をさらに1段掘り込む。規模は1.38×1.22m、確認面からの深さは0.30mを測る。覆土中にはロームブロックを多く含む層が認められ、人為的に埋め戻された可能性がある。

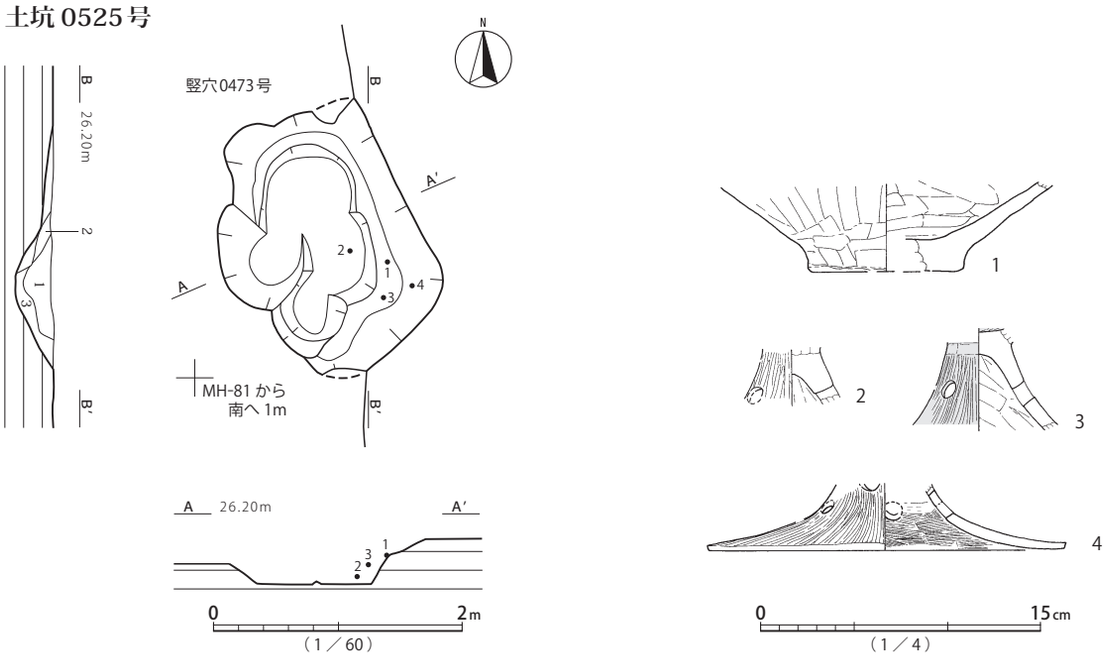
実測可能遺物は1の直口縁壺形土器のみで、外面と口縁部内面に赤彩を施す。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

土坑0519号　（Fig.414、PL.91・136）

LH−81を中心に位置する。他遺構との重複はないが、東側は調査区外に延びる。竪穴建物の可能性もあるが、北側の調査区境界で壁が曲がるように見られることから、土坑と判断した。

土坑0525号



1　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
2　暗褐色土　ロームを含む。
3　褐色土　　ロームを主体とし、暗褐色土が混じる。

Fig.415　土坑0525号 遺構遺物

平面形態は方形を呈すと思われるが、西隅が検出されたのみで、詳細は不明である。確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位はN−50°−Wと思われる。

実測可能遺物は、1は小型で完形の壺形土器、2は甕形土器である。1はハケ調整ののち、頸部を残してヘラナデを施す。2は口縁部がゆるく外反し、胴肩部には段部をもつものと思われる。土器以外では3の敲石が出土している。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

土坑0525号　（Fig.415、PL.90・91）

MH−81を中心に位置する。西側で竪穴0473号と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がなく、不明である。

平面形態は不整長楕円形を呈し、規模は2.06×1.54m、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位はN−21°−Wである。

実測可能遺物は、1は甕形土器、2〜4は高杯形土器である。4は開脚高杯で、裾端部を面取りする。焼成前に上下交互に3孔ずつ穿つ。

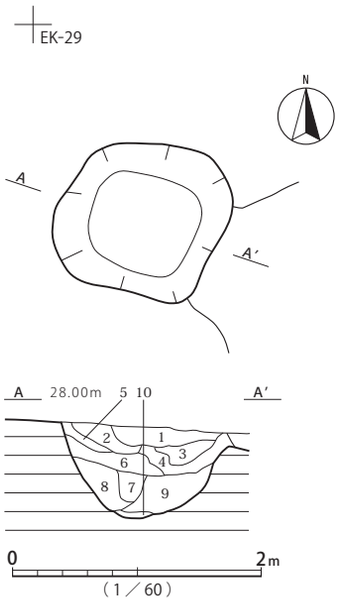
出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

南辺部

土坑1194号　（Fig.416、PL.48）

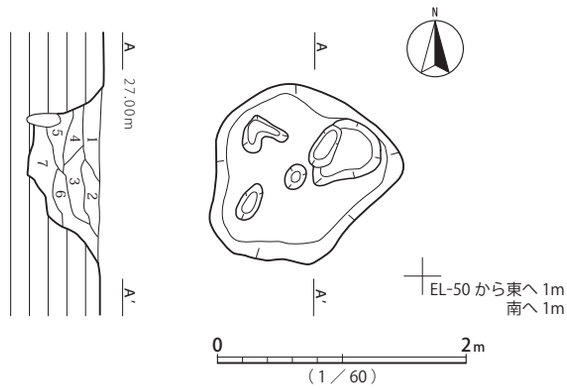
EK−29に位置する。他遺構との重複はないが、東側は撹乱により、一部壊される。

土坑 1194号



1　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。
3　黒色土　　ローム粒を含む。
4　黒褐色土　ローム粒を含む。
5　黒褐色土　ローム粒を少量含む。
6　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを少量含む。
7　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。
8　黒褐色土
9　黒褐色土　ロームブロックを含む。
10　暗褐色土　ロームブロックを含む。

土坑 1207号



1　黒褐色土　ローム粒を含む。
2　暗褐色土　ローム粒を含む。
3　褐色土　　黒褐色土・ロームブロックを少量含む。
4　黒褐色土
5　暗褐色土　ロームブロックを含む。
6　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。
7　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。

Fig.416　土坑1194号 遺構、土坑1207号 遺構

平面形態は隅丸方形を呈し、規模は1.29×1.21m、確認面からの深さは0.72mを測る。弥生～古墳時代の遺構と判断したが、出土遺物がないため根拠に乏しく、帰属時期は明確でない。

土坑1207号　（Fig.416）

EL−50を中心に位置する。他遺構との重複はない。

平面形態は不整楕円形を呈し、規模は1.49×1.28m、確認面からの深さは0.57mを測る。弥生～古墳時代の遺構と判断したが、出土遺物がないため根拠に乏しく、帰属時期は明確でない。

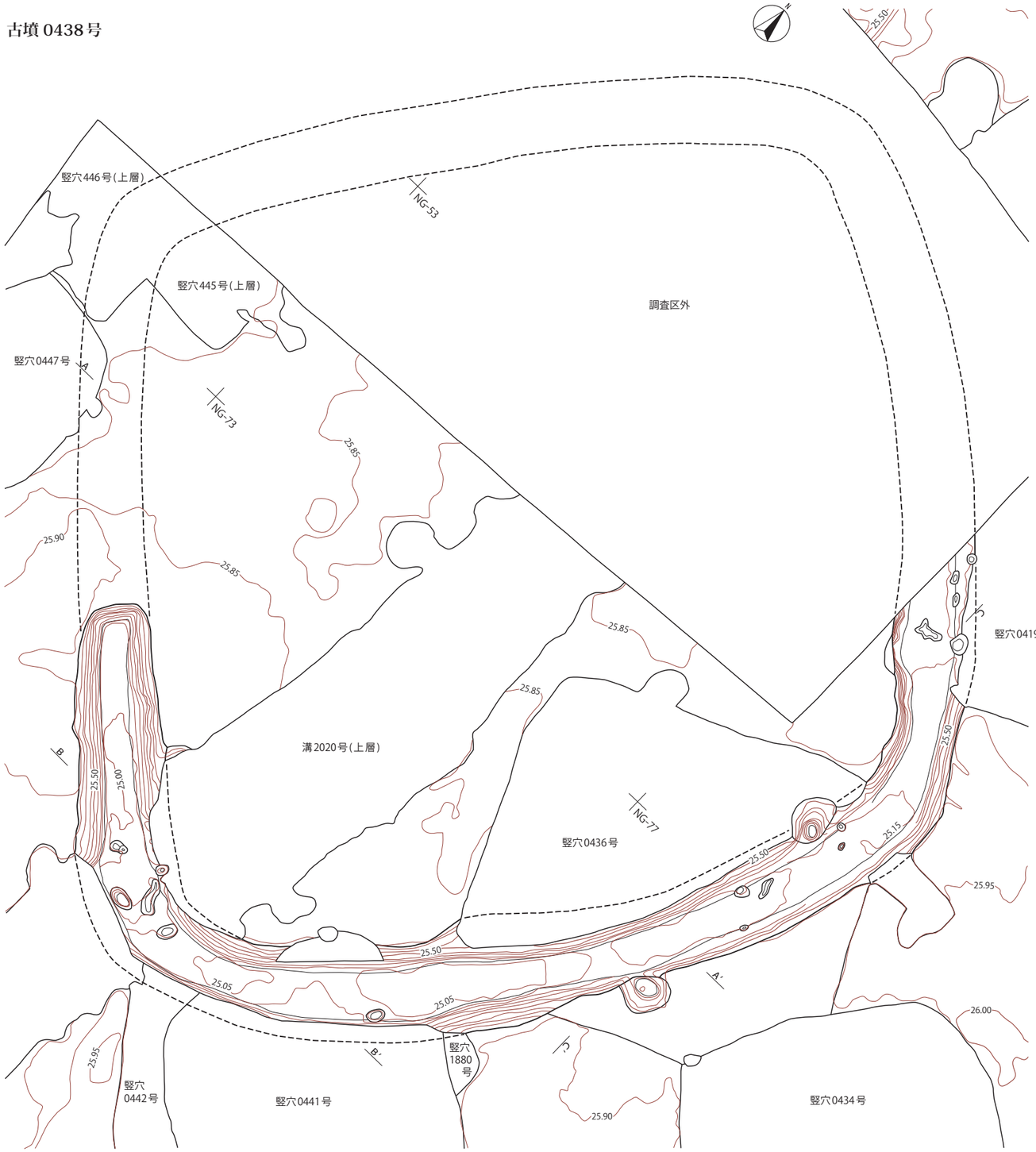
第4節　古　墳

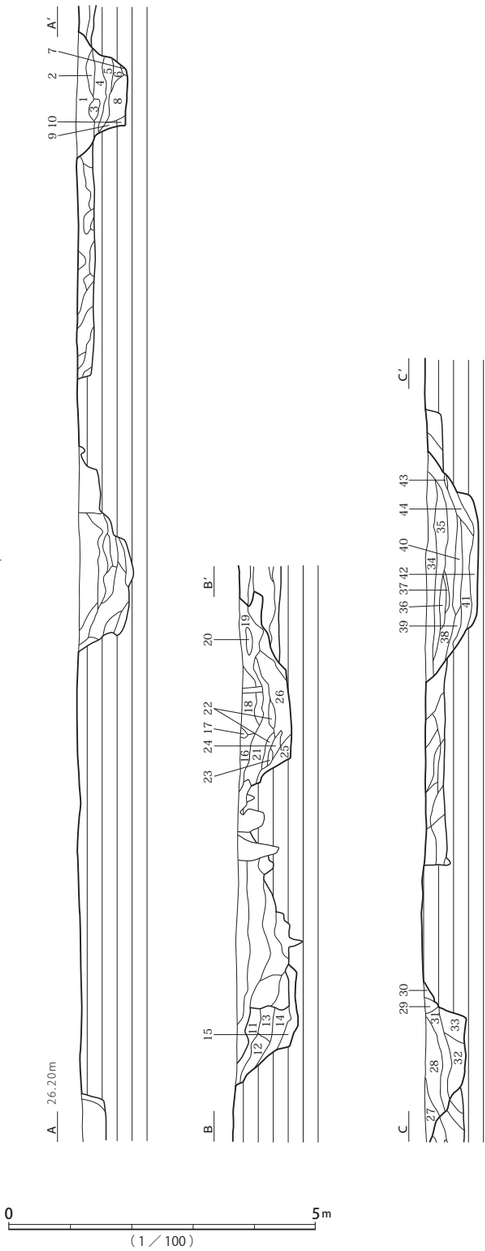
西辺部

古墳0438号　（Fig.417、PL.39・40）

NG−65を中心に位置する。北東辺で竪穴0419号、南東辺で竪穴0436・0441・0442・1880号、南隅で溝2020号（上層）と重複し、北側は調査区外に延びる。また、北西側には古墳0530号が近接する。新旧関係は、本遺構がすべての竪穴建物よりも新しく、溝2020号よりも古い。本遺構は中台2号墳として過去に公表されており、「全面調査に至らずに南側中央に土橋を設けた通路が存在するかは明言できないがこれも前期古墳であろう」（田中2000）と推定されている。

古墳 0438 号





1 明褐色土
2 褐色土 ロームブロックを含む。
3 暗褐色土 ロームブロックを含む。
4 褐色土 ロームを含む。
5 褐色土 ローム粒を多量に含む。
6 暗黄褐色土
7 暗褐色土
8 暗褐色土 ロームを多量に含む。
9 暗黄褐色土 ロームを含む。
10 暗褐色土 ロームを少量含む。
11 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
12 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
13 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
14 黒褐色土 2cm大のロームブロックを含む。
15 褐色土 ロームブロックを含む。
16 黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。
17 黒褐色土
18 褐色土 ロームをブロック状に含む。
19 黒褐色土 ローム粒を含む。
20 褐色土 ローム粒をブロック状に多く含む。
21 暗褐色土 ローム粒を含む。
22 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
23 茶褐色土
24 暗褐色土 ローム粒を含む。
25 褐色土 ローム粒を含む。
26 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含み、炭化粒も一部に混じる。
27 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性ややあり、しまりやや弱い。
28 暗褐色土 ローム粒をわずかに含み、黒褐色に近い。しまりあり。
29 暗褐色土 しまりなし。
30 暗褐色土 ロームを含む。粘性あり、しまりやや弱い。
31 暗褐色土 ローム粒・3cm大のロームブロックを含む。しまりあり。
32 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
33 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりやや弱い。
34 暗褐色土 3～5mm大のローム粒を多く含む。しまりあり。
35 暗褐色土 3～5cm大のロームブロック含む。しまりややあり。
36 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりややあり。
37 暗褐色土 ロームブロックを含む。
38 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりやや弱い。
39 暗褐色土 ローム粒を少量含む。しまりややあり。
40 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
41 暗褐色土 ローム粒・2～3cm大のロームブロックを含む。しまりややあり。
42 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりやや弱い。
43 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
44 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりあり。

Fig.417　古墳0438号 遺構

歪んだ隅丸方形を呈する方墳で、墳丘はすでに失われており、周溝のみ残存する。南西辺中央付近で周溝は途切れており、東隅にかけては、連続する周溝が検出されていない。墳丘規模は南西辺で15.1mを測り、周溝の上・下端幅は北東辺で1.17・0.68m、南東辺で1.60・1.03m、南西辺で1.60・0.67m、確認面からの深さは北東辺で0.64m、南東辺で0.76m、南西辺で0.94mとなる。周溝底面はほぼ平坦であるが、南側ほど掘り込みを深くする傾向が認められた。主軸方位はN−44°−Wである。

弥生時代終末期後半の所産と考えられる竪穴0419号を壊して築造されることから、これ以降の所産であることは確実であるが、出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

古墳0520号 （Fig.418〜420、PL.43・44・91・129・130）

KG−18を中心に位置する。西隅で竪穴0511号と重複し、南隅は調査区外に延びる。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構が0511号よりも新しいと考えられる。本遺構は中台1号墳として過去に公表されており、前期古墳と推定されている（田中2000）。

西辺部南端に位置する方墳で、墳丘はすでに失われており、全周すると思われる周溝のみ残存する。墳丘規模は北東辺で8.90m、北西辺で9.17mを測り、周溝の上・下端幅は北東辺で1.27・0.73m、南東辺で1.64・1.03m、南西辺で1.38・0.60m、北西辺で2.00・0.72m、確認面からの深さは北東辺で0.44m、南東辺で0.27m、南西辺で0.42m、北西辺で0.50mとなる。周溝底面はほぼ平坦であるが、北東辺北寄りと南西辺中央付近からは周溝内土坑が検出されている。埋葬施設での木棺の使用については、明らかでない。主軸方位はN−40°−Wである。

出土遺物は、1〜3・10・19〜27は甕形土器、4は内外面赤彩が施される短頸壺形土器、5は台付甕形土器、6〜9は壺形土器、11〜15は器種不明の底部、17・18は高杯形土器である。16は二重口縁壺形土器であろうか。3は頸部が明瞭に屈折し、口縁部は直線的に大きく開く。胴部は球形を呈し、ケズリ状のヘラナデが施される。口縁端部の面取りはさほど明瞭ではないが、非在地系の影響と考えられる。1・3・10・14・17は南西辺中央の周溝内土坑範囲から検出され、いずれも土坑底面から30〜45cmほど浮いた状態での出土である。被葬者を埋葬し、埋め戻した上に供献されたものと考えられる。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる。

古墳0527号 （Fig.421、PL.43）

KG−23を中心に位置する。北東隅で竪穴0507・0509号と重複し、南隅は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が0507号よりも新しい。0509号については、断面図など記録上の根拠や出土遺物がないが、本遺構のほうが新しいと考えられる。

隅丸方形を呈する方墳の可能性があるが、部分的な検出のため、遺構種を含めて詳細は明確でない。古墳とした場合、墳丘はすでに失われており、周溝のみ残存する。東辺溝の一部が検出されたのみで、北辺溝については、竪穴0507号の土層断面では確認されたものの、平面的に捉えることができなかった。墳丘規模は不明で、周溝規模は上端幅0.74〜1.40m、下端幅0.26〜1.05m、確認面からの深さは0.10〜0.20mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、主軸方位はN−6°−Wである。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

古墳 0520号

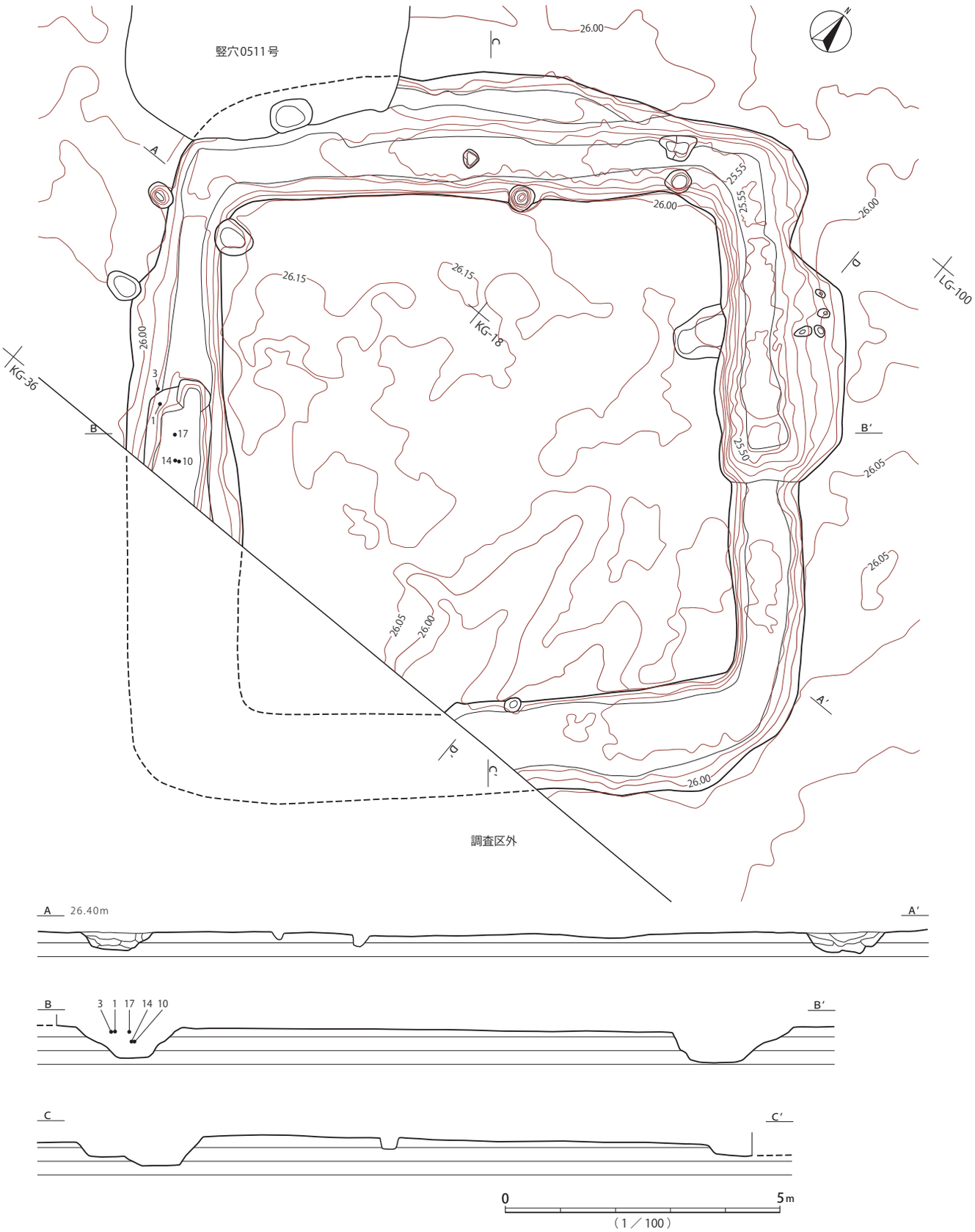
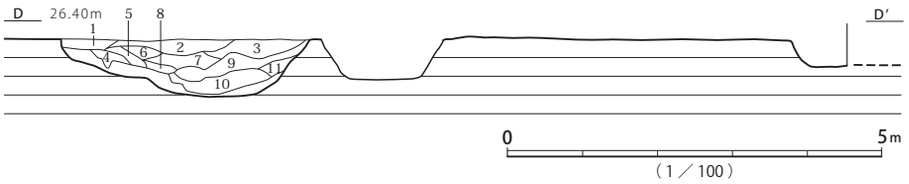


Fig.418　古墳0520号(1) 遺構

古墳 0520 号



1　灰褐色土　ローム粒を含む。しまり強い。
2　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。しまり強い。
3　暗褐色土　ローム粒を多く含み、やや茶褐色に近い。しまり強い。
4　暗褐色土　ロームを含む。粘性あり、しまりややあり。
5　暗褐色土　ローム粒を多く含み、やや灰褐色に近い。しまり強い。
6　暗褐色土　ローム粒を多く含み、茶褐色に近い。しまりややあり。
7　暗褐色土　ローム粒を多く含み、灰褐色に近い。色調やや明るい。しまり弱い。
8　暗褐色土　ローム粒を多く含み、やや黒っぽい。しまり強い。
9　暗褐色土　ローム粒を多く含み、砂質土も混じる。しまりやや弱い。
10　明褐色土　ローム・ロームブロックを含む。しまり強い。
11　暗褐色土　ロームを含む。しまり強い。

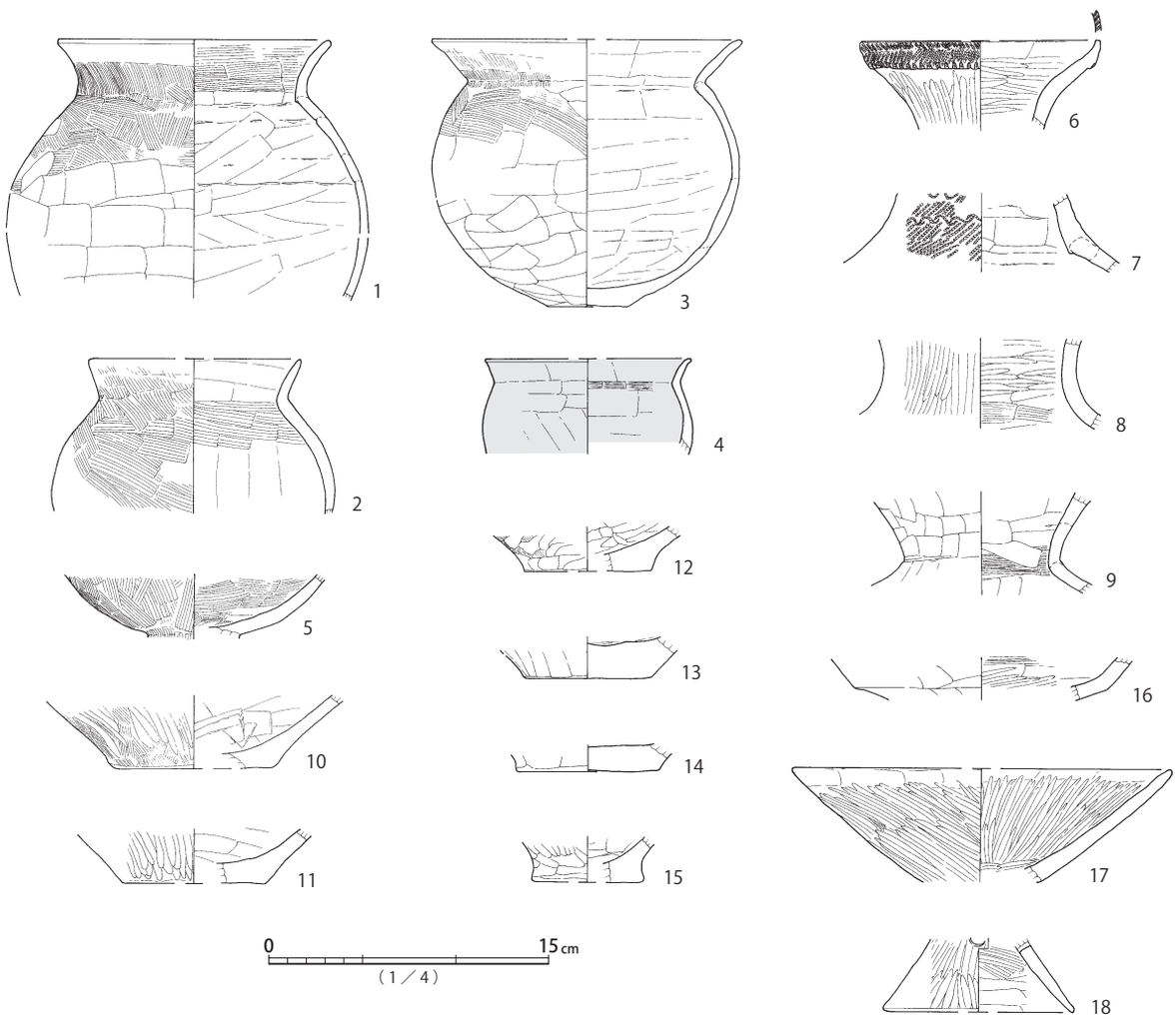


Fig.419　古墳0520号(2) 遺構遺物

古墳0520号

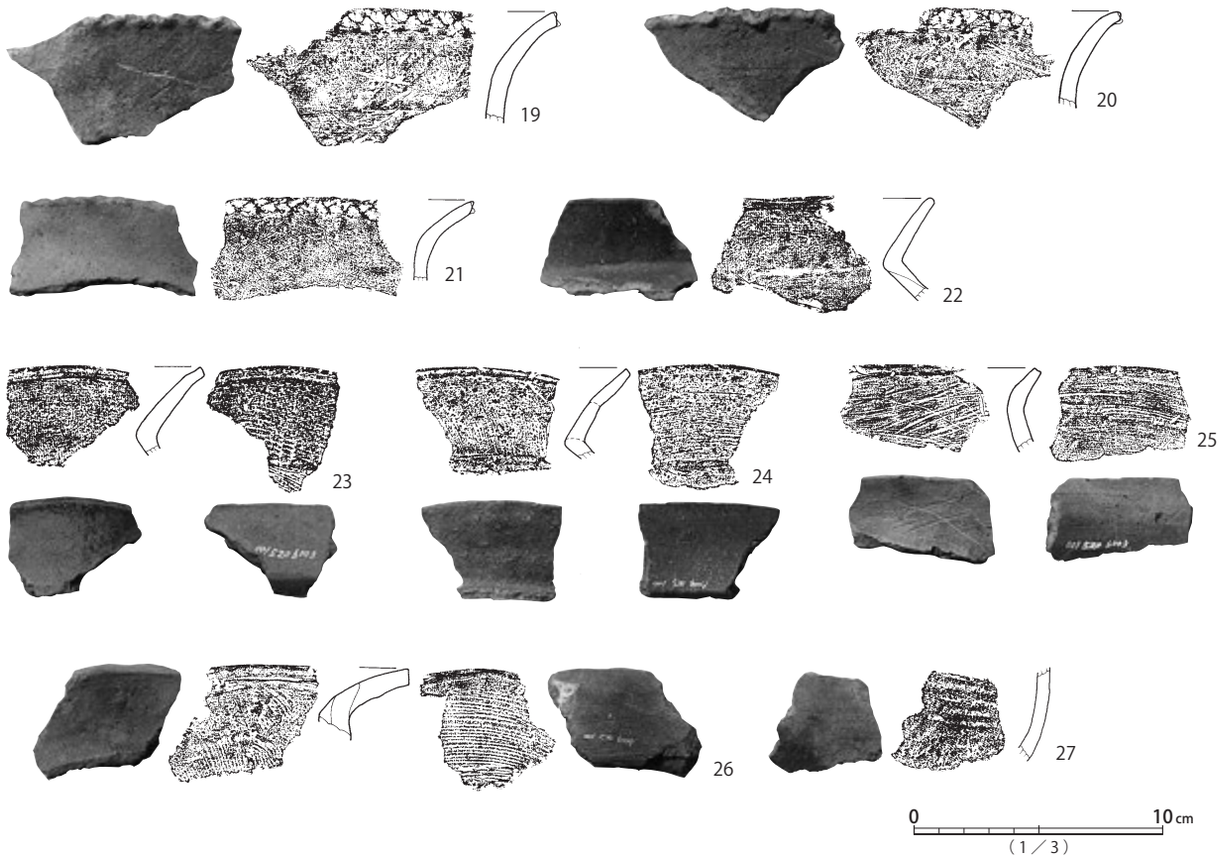


Fig.420　古墳0520号(3) 遺物

古墳0530号　（Fig.422・423、PL.44・91・130）

NF−20を中心に位置する。東隅で竪穴0531号、北東辺で竪穴0536号と重複し、西側と南側は調査区外に延びる。また、南東側には古墳0438号が近接する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも新しい。

調査区南端でゆるやかに屈曲しはじめており、隅丸方形を呈する方墳の可能性があるが、部分的な検出のため、遺構種を含めて詳細は明確でない。古墳とした場合、墳丘はすでに失われており、周溝のみ残存する。南側調査区の北西隅で南東溝の一部がかかる可能性が考えられるが、上層遺構の竪穴446号が位置することもあり、不明である。また、本遺構の南東溝と古墳0438号の北西溝は接していた可能性があり、調査区外に位置するために明確でないが、連なるように密着して築かれていたものと思われる。墳丘規模は不明で、周溝規模は上端幅1.08～2.58m、下端幅0.64～2.00m、確認面からの深さは0.40～0.73mを測る。周溝底面はほぼ平坦で、主軸方位はN−52°−Wである。

出土遺物は、1～3・7・8・22～26は甕形土器、4・5は台付甕形土器、6・12・27～29は壺形土器、9～11は器種不明の底部、13～17は高杯形土器、18～21は器台形土器、30・31は椀形土器である。甕形土器は頸部がくの字状に屈折し、1は口縁端部に明瞭な面取りを施す。6も頸部が屈折し、口縁部は直線的に開く。外面はハケののち、口唇部側にヘラナデを加える。13はやや内湾して立ち上がる浅い杯部をもつ。

古墳0527号

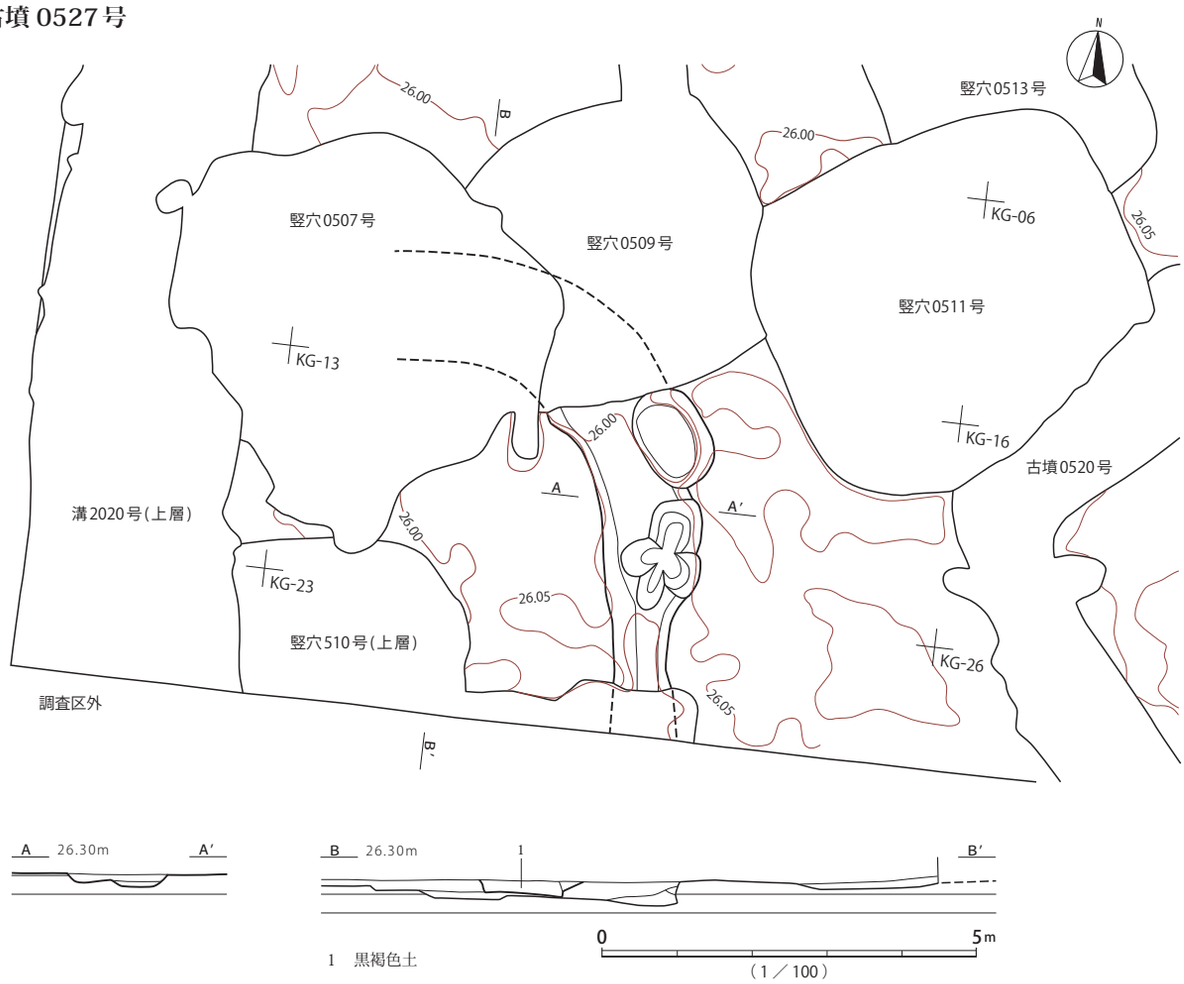


Fig.421　古墳0527号 遺構

古墳時代前期の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

古墳1845号　（Fig.424、PL.32）

TH−61を中心に位置する。東隅で竪穴0210号、南隅で竪穴0212号、西側で溝2021号（上層）、東側で溝2020号（上層）、北東側で古墳2025号と重複する。新旧関係は、本遺構が0210・0212・2025号よりも新しく、2020・2021号よりも古い。

周溝と思われる溝が2ヶ所検出され、接続して隅丸方形の方墳になるものと考えられるが、南西・南東溝のごく一部が検出されたのみで、遺構種を含めて詳細は明確でない。古墳とした場合、墳丘はすでに失われており、周溝のみ残存する。平面的には捉えることができなかったが、土層断面（A−A'）では本遺構の北東溝と古墳2025号の南西溝は接しており、連なるように密着して築かれていたものと考えられる。墳丘規模は不明で、周溝規模は上端幅1.00m、下端幅0.83mを測る。確認面からの深さは0.37mを測る。底面はほぼ平坦で、主軸方位はN−46°−W程度になるものと思われる。

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

古墳2022号　（Fig.425・426、PL.130）

SG−48を中心に位置する。南東隅で竪穴0230・0231号と溝2021号（上層）、東辺で竪穴0221号と重複し、西側は調査区外に延びる。新旧関係は、本遺構が0221号よりも新しく、2021号よりも古い。0230・0231号との関係は、断面図など記録上の根拠はないが、両遺構が0221号よりも古いことから、0221号を切って構築される本遺構のほうが新しいと考えられる。

南東隅でゆるやかに屈曲しはじめており、隅丸方形を呈する方墳の可能性があるが、部分的な検出のため、遺構種を含めて詳細は明確でない。古墳とした場合、墳丘はすでに失われており、周溝のみ残存する。平面的に確認されたのは南辺溝のみで、東辺溝は検出されていないが、竪穴0221号の土層断面に、本遺構に接続すると考えられる掘り込みが認められる。ただし、隣接する0220号の土層断面では確認することができず、溝がどこまで続くかは不明である。墳丘規模は不明で、周溝規模は上端幅0.98〜1.65m、下端幅は0.76〜1.38m、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位はN−0°である。

出土遺物は、1は甕形土器、2は広口壺形土器、3・4は器種不明の底部、5は壺形土器、6は高杯形土器である。

古墳時代前期前葉の所産と考えられる竪穴0221号を壊して築造されることから、これ以降の所産と考えられるが、出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

古墳2025号　（Fig.427・428、PL.32）

TH−43を中心に位置する。東隅で竪穴0206号、南隅で竪穴0210号と古墳1845号、中央で溝2020号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構が0210号よりも新しく、1845・2020号よりも古い。0206号との関係は、断面図など記録上の根拠はないが、本遺構のほうが新しいと考えられる。

西辺部北西隅に位置し、隅丸方形を呈する方墳の可能性があるが、部分的な検出のため、遺構種を含めて詳細は明確でない。南西・南東溝の南側では明瞭な掘り込みが検出されたが、これ以外ははっきりしない。南東辺中央で周溝が途切れるが、本来のものか、調査時に掘り残されたものかは判断がつかない。古墳とした場合、墳丘はすでに失われており、周溝のみ残存する。平面的には捉えることができなかったが、土層断面（C−C'）では本遺構の南西溝と古墳1845号の北東溝は接しており、連なるように密着して築かれていたものと考えられる。墳丘規模は明確でないが、北隅からわずかに検出された掘り込みが本遺構の北東溝と考えた場合、8.40mとなる。周溝の上・下端幅は、北東辺で1.95・1.56m、南東辺で0.83・0.59m、南西辺で1.08・0.73m、確認面からの深さは、北東辺は不明、南東辺で0.34m、南西辺で0.35mとなる。周溝底面はほぼ平坦で、主軸方位はN−61°−W程度になるものと思われる。

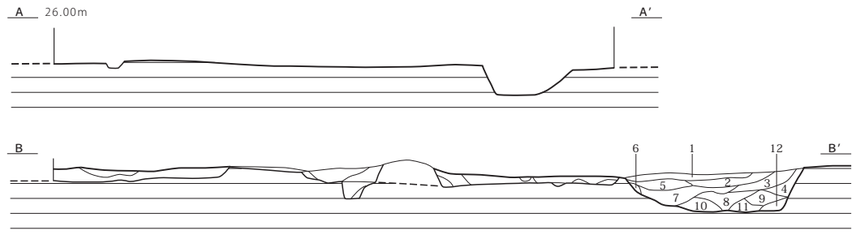
出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

東南部

古墳1726号　（Fig.429）

GP−94を中心に位置する。北側で竪穴872号（上層）、南側で竪穴867・887号（上層）と重複する。新旧関係は、断面図など記録上の根拠や出土遺物がないが、本遺構がいずれの遺構よりも古いと思わ

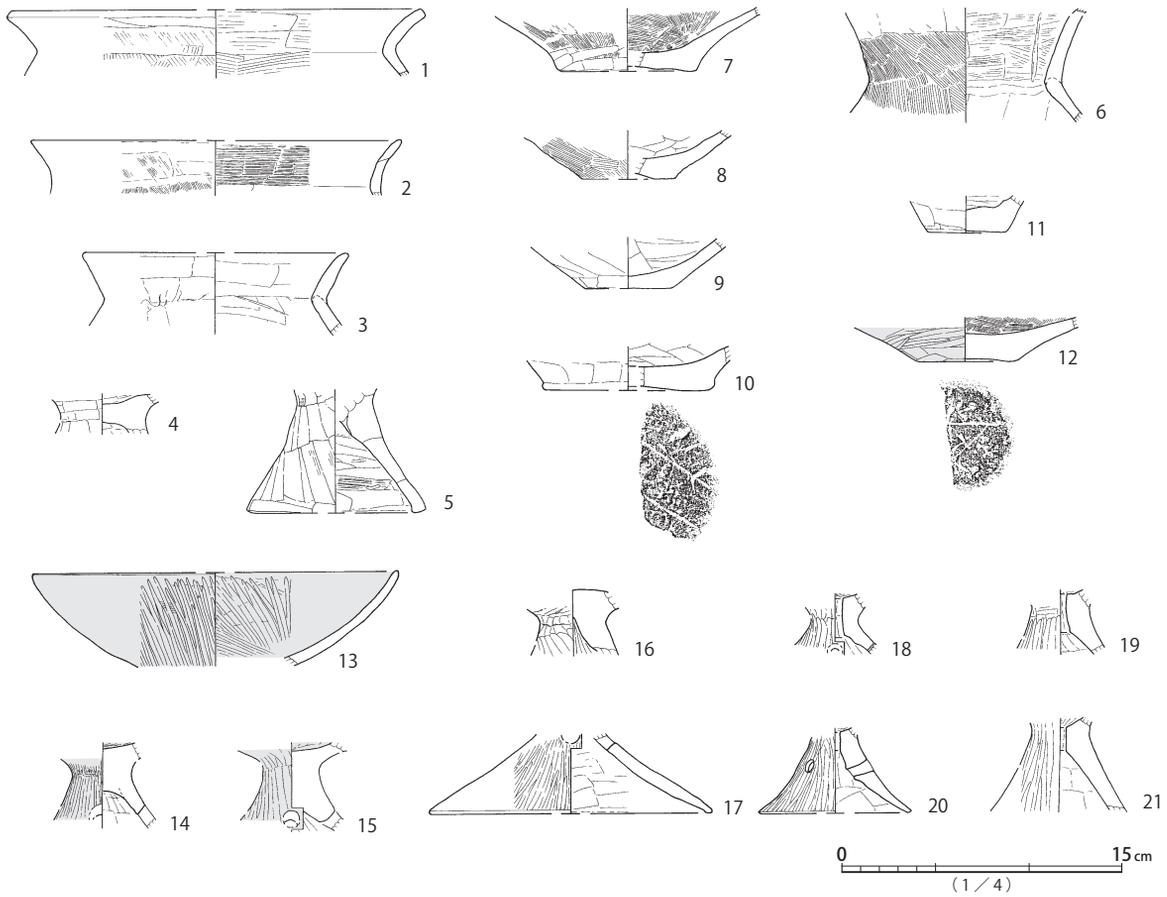
古墳 0530 号



1　黒褐色土　ローム粒を含む。粘性あり、しまりやや弱い。
2　暗褐色土　ロームを含む。しまりややあり。
3　暗褐色土　ローム・黒色土を含む。しまりやや弱い。
4　暗褐色土　ロームを多く含む。しまりあり。
5　暗褐色土　ローム粒を多く含み、2cm大のロームブロックも混じる。しまりややあり。
6　暗褐色土　ロームを含む。しまりなし。
7　黒褐色土　ロームを含む。しまりややあり。
8　黒褐色土　ロームを含む。しまりあり。
9　暗褐色土　ロームを多く含む。しまりあり。
10　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。しまりあり。
11　暗褐色土　5cm大のロームブロックを多く含む。しまりあり。
12　暗褐色土　ロームを含み、2cm大のロームブロックも混じる。しまりなし。

Fig.422　古墳0530号(1) 遺構

古墳 0530 号



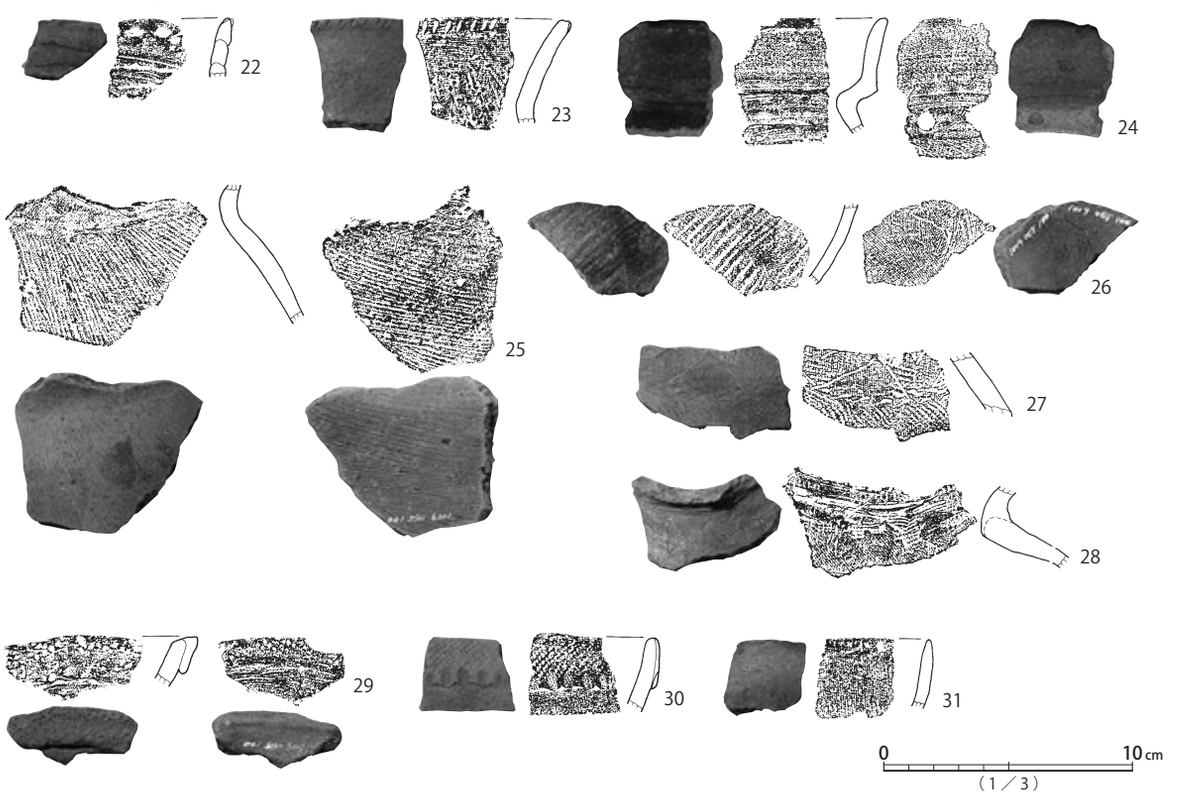
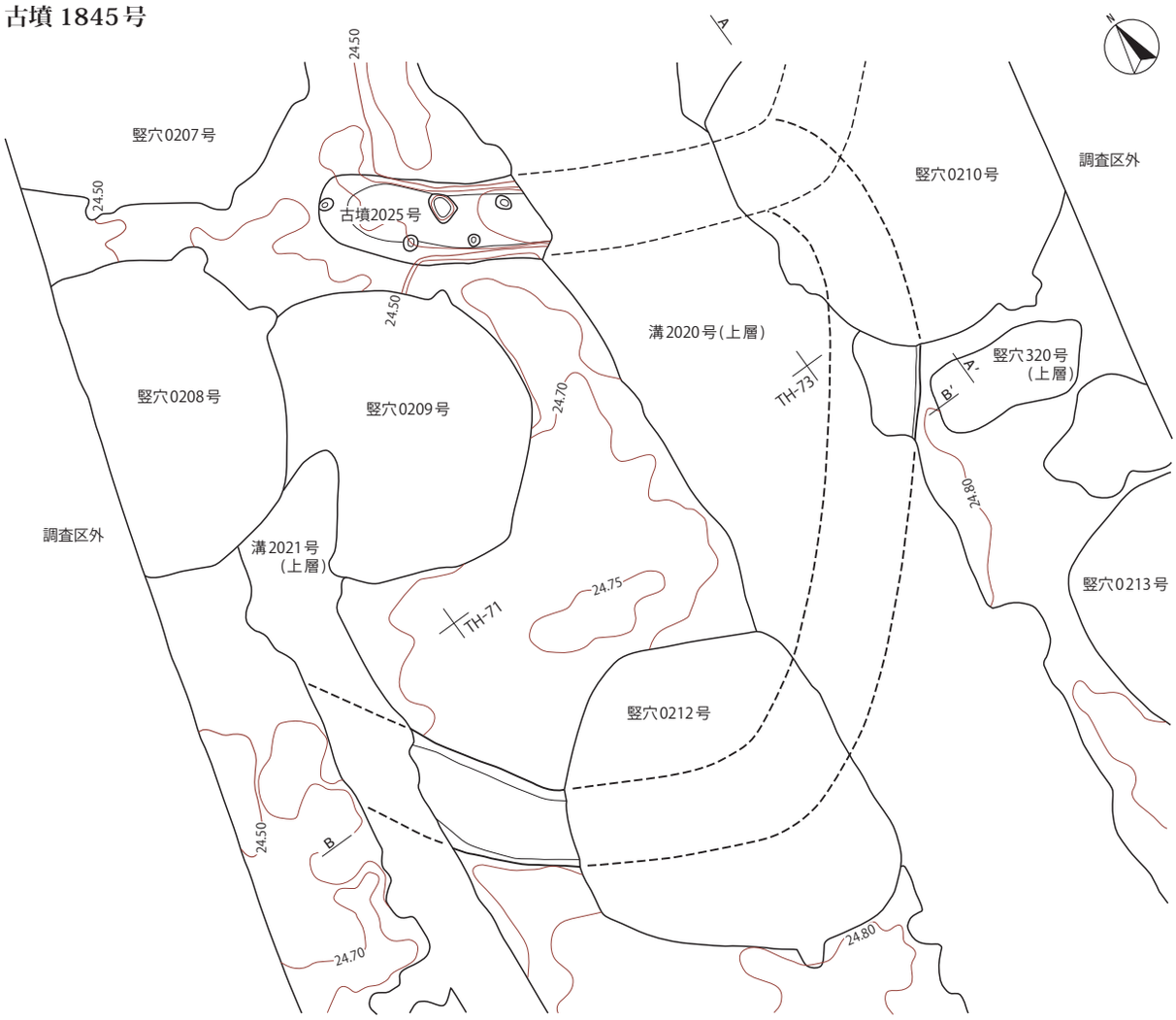
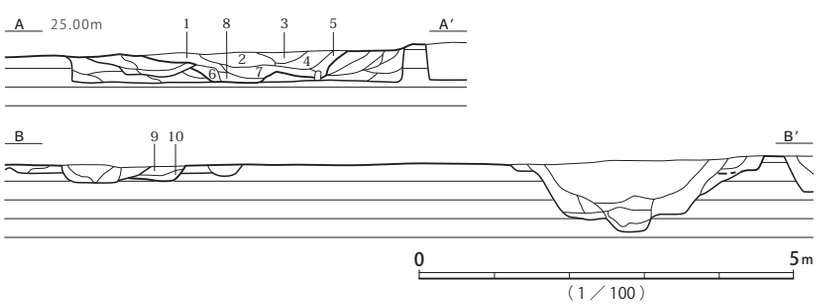


Fig.423　古墳0530号(2) 遺物

古墳 1845 号





1　黒色土　　ローム粒を少量含む。
2　黒色土　　ローム粒を少量含む。1層より明るい。
3　黒褐色土　ローム粒をわずかに含む。
4　黒褐色土　ローム粒を少量含む。粘性・しまりあり。
5　黒色土　　ローム粒を少量含む。粘性・しまりあり。
6　黒褐色土　ローム粒を多量に含む。
7　黒褐色土　ローム粒・焼土を多量に含む。しまりあり。
8　黒褐色土　ロームブロックをわずかに含む。しまりあり。
9　明褐色土　ロームブロックを含む。
10　暗褐色土

Fig.424　古墳1845号 遺構

古墳 2022 号

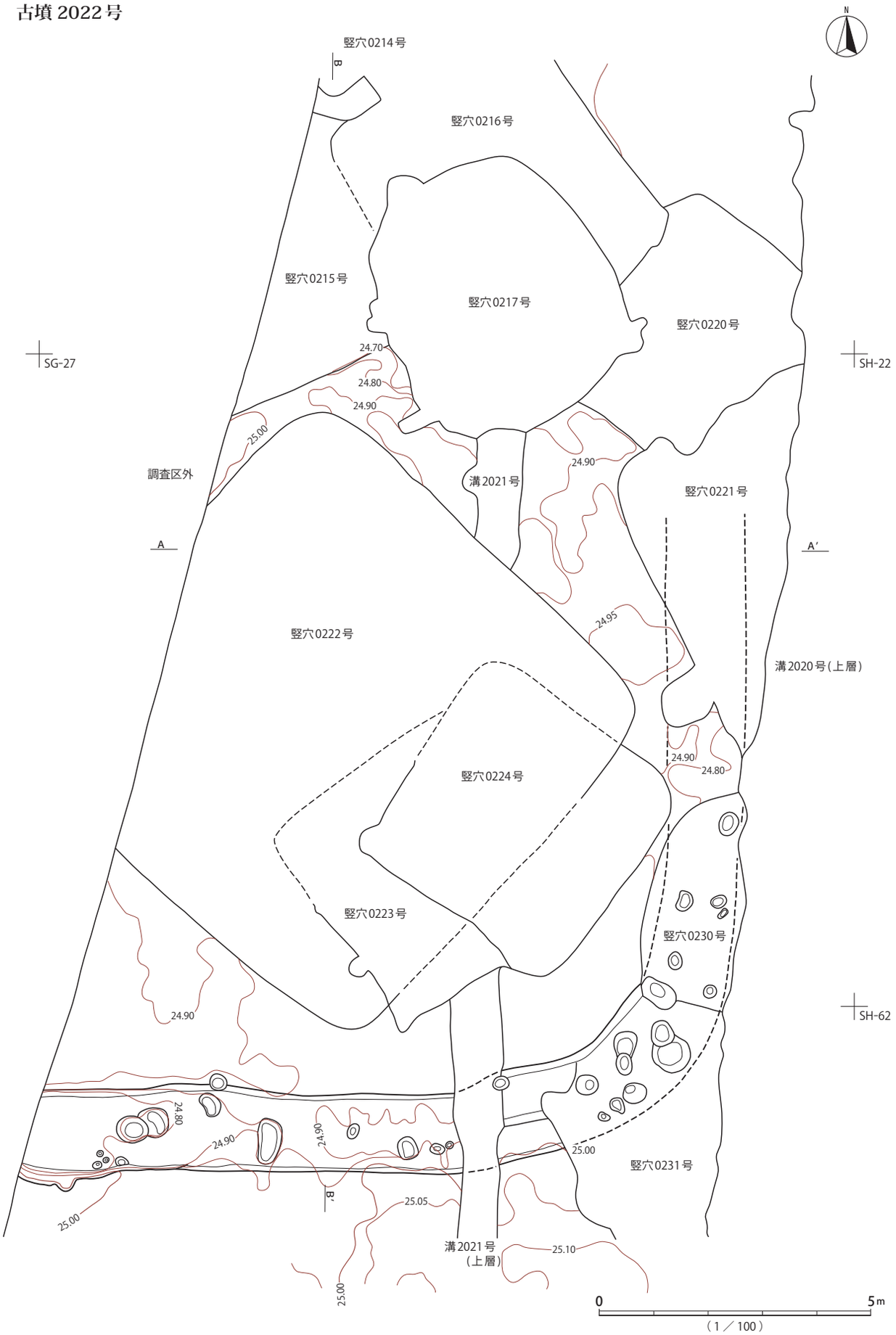


Fig.425　古墳2022号(1) 遺構

古墳 2022 号

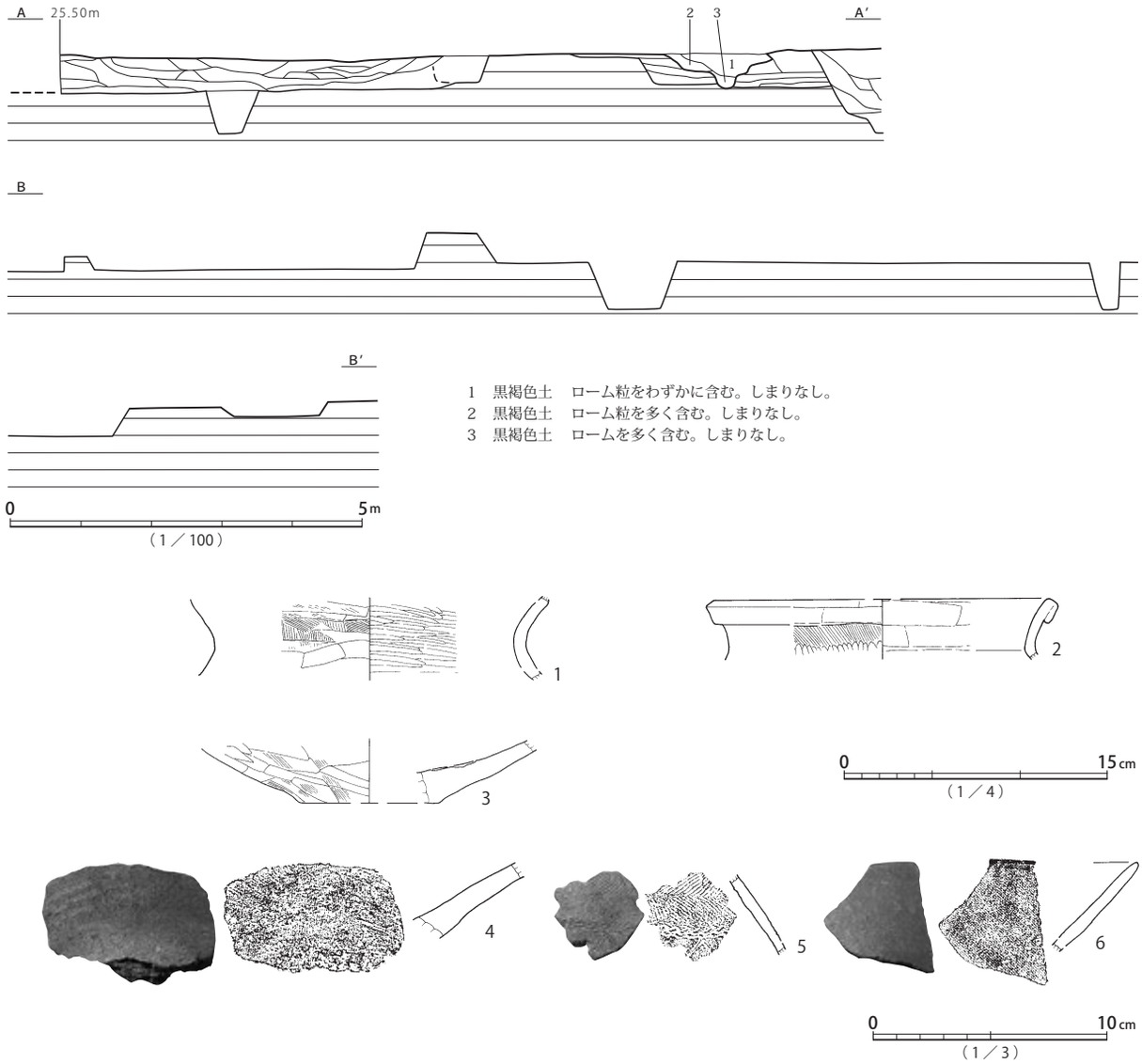


Fig.426　古墳2022号(2) 遺構遺物

れる。

小型の円墳の可能性があるが、遺構種を含めて詳細は明確でない。古墳とした場合、墳丘はすでに失われており、西側周溝のみ残存する。墳丘規模は径5.86m程度を測るものと思われる。周溝規模は上端幅0.15～0.44m、下端幅0.07～0.21mと狭く、確認面からの深さも0.06mしかない。周溝底面はほぼ平坦である。本遺構は荒久古墳群6号墳として過去に公表されており、古墳の可能性をもち、後期に築造されたものと推定されている（田中2000）。いっぽう、「墳丘中心に主体部状の落ち込みが全体図で判る」としているが、調査図面からは、この落ち込みを確認することができなかった。

周辺は弥生時代から古墳時代の遺構分布が極端に希薄な空閑地となっており、出土遺物もないことから、帰属時期は明確でない。

古墳 2025 号

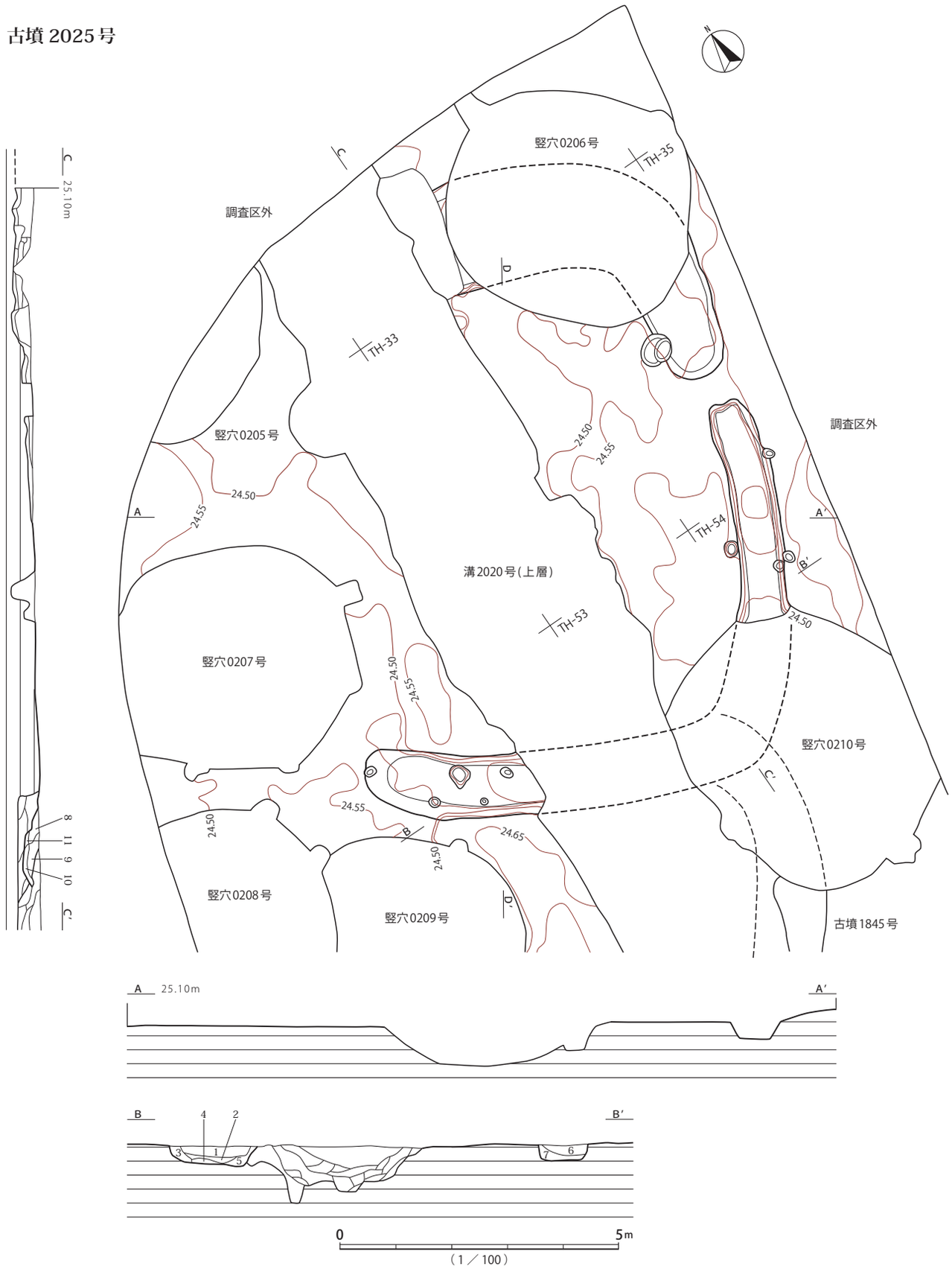
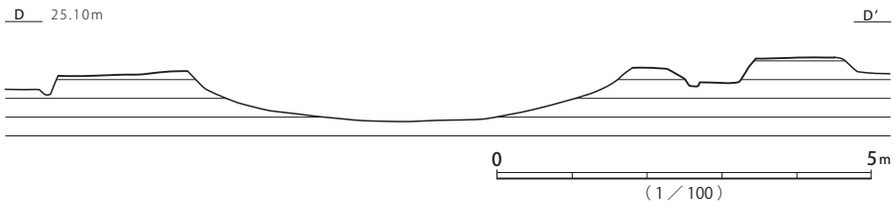


Fig.427　古墳2025号(1) 遺構

古墳2025号



1　暗褐色土　混入物なし。
2　暗褐色土　ローム粒をわずかに含む。
3　暗褐色土　混入物なし。しまりややあり。
4　暗褐色土　ロームを少量含む。しまりなし。
5　暗褐色土　ローム粒を多く含む。
6　黒褐色土　混入物少ない。しまりややあり。
7　暗褐色土　ローム粒・ロームブロックを多く含む。しまりやや弱い。
8　黒褐色土　ローム粒を多量に含む。粘性・しまりあり。
9　黒褐色土　ローム粒・小ロームブロックを少量含む。粘性・しまりあり。
10　黒褐色土　暗褐色土を含み、小ロームブロックも多く混じる。粘性・しまり強い。
11　黒色土　ローム粒を少量含む。しまりやや弱い。

Fig.428　古墳2025号(2) 遺構

南辺部

古墳1204号　（Fig.430～432、PL.48・49・91・97・130・136）

FK−66を中心に位置する。南東辺中央で竪穴1205号、北隅から南隅にかけて道路2411号（上層）と重複し、北西側には径22.9mの前期古墳とされる神門1号墳が近接する。新旧関係は、本遺構が2411号よりも古い。1205号との関係は、断面図など記録上の根拠がないが、出土遺物の検討から、本遺構のほうが新しいと考えられる。本遺構は神門2号墳として過去に公表されており、神門3～5号墳被葬者の首長権が他に完全に移った段階の前期古墳で、隣接する神門1号墳（円墳）からもう1段階新しいと推定されている（田中2000）。

南辺部のほぼ中央に位置する方墳で、やや隅丸気味を呈す。墳丘はすでに失われており、全周する周溝のみ残存する。墳丘規模は南東辺で9.64m、南西辺で9.54mを測り、周溝の上・下端幅は北東辺で1.86・1.27m、南東辺で1.75・1.40m、南西辺で1.56・1.28m、北西辺で1.00・0.81m、確認面からの深さは北東辺で0.78m、南東辺で0.66m、南西辺で0.48m、北西辺で0.24mとなる。周溝底面は北西から南西辺でやや凹凸をもつが、南東辺はほぼ平坦である。北東辺は中央付近がややくぼむが、周溝内土坑の存在は確認されていない。主軸方位はN−30°−Wである。

出土遺物は、1～3は甕形土器、4～9は壺形土器、10・11は器種不明の底部、12は椀形土器、13は椀ないし高杯形土器、14は高杯形土器である。3は外面ハケののち肩部にヘラナデを施し、ヘラ先等による波状文2条を3分の2周程巡らす。内面はヘラナデを施すが、肩部はケズリ状となる。5はほぼ完形で、口縁部内面を折返し状とする。肩部には2.5×1.8cmを測る焼成後の穿孔が施され、意図的なものかは明確でないが、頸部下には幅1cm・長さ5cmの櫛描文（5条）が認められる。10は底部がきれいに剥離しており、穿孔がなされた可能性がある。土器以外では15の磨石・敲石が出土している。1・3・5・7・11・13・14は出土地点が記録されたことを示す1000番台の注記が残るが、調査図面の所在が確認できないため、位置を特定することができない。また、写真（PL.49）では南西溝中央付近で頸部がくの字状に屈折する甕形土器、北東溝中央で脚裾部が大きく開く高杯形土器が出

古墳 1726号

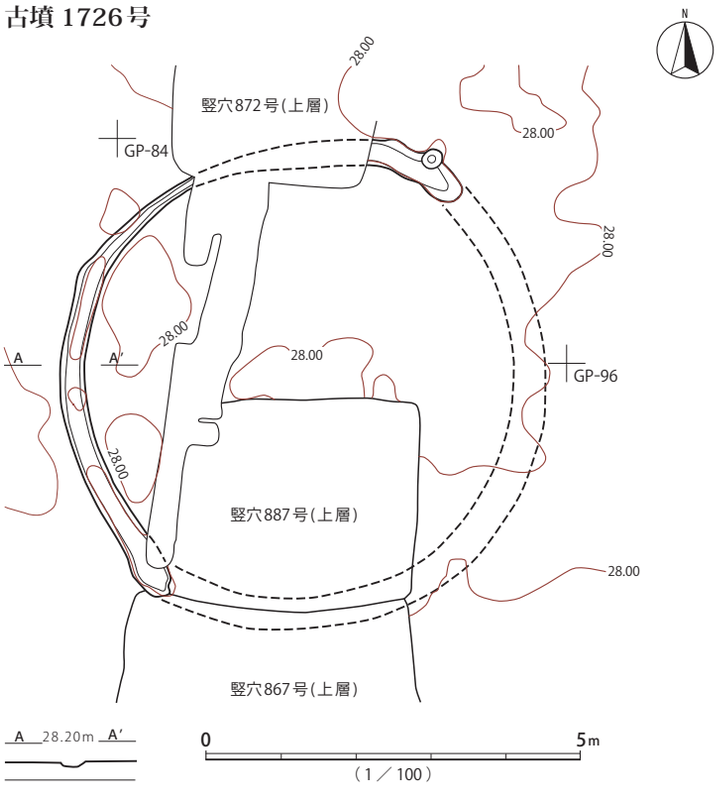


Fig.429　古墳1726号 遺構

土している状況が認められるが、これらの遺物の所在は確認できなかった。

弥生時代終末期の所産と思われるが、古墳時代前期の可能性もある。

セ116・117地区

古墳2406号　（Fig.433、PL.50・130）

IH−31を中心に位置し、セ117地区のIH−1・IH−4トレンチから検出された。IH−4トレンチで、土壙墓1787・1793号（上層）と重複する。新旧関係は、本遺構がいずれの遺構よりも古い。また、周溝内側にあたるIH−3・5、早大溝西−1トレンチからは、上総国分僧寺寺院地外郭溝の溝2020号や中近世の土壙墓群が検出されており、重複により壊されている部分が多いと考えられる。

円墳の可能性があるが、わずかな範囲での検出のため、遺構種を含めて詳細は明確でない。古墳とした場合、墳丘はすでに失われており、周溝のみ残存する。IH−5トレンチからは周溝が検出されていないため、墳丘規模は径17.7m程度を測るものと思われるが、この数値で復元したものを全体図にあてはめると、南西側に近接する神門3号墳周溝と重なってしまうことから、位置関係を含めて検討を要する。周溝規模は上端幅1.40〜2.12m、下端幅0.61〜1.03m、確認面からの深さは0.28〜0.34mを測る。周溝底面はほぼ平坦である。

実測可能遺物は1の甕形土器のみである。外面はタタキ整形、内面はハケ調整が施され、底部は輪台状となる。

出土遺物が少なく、帰属時期は明確でない。

古墳 1204 号

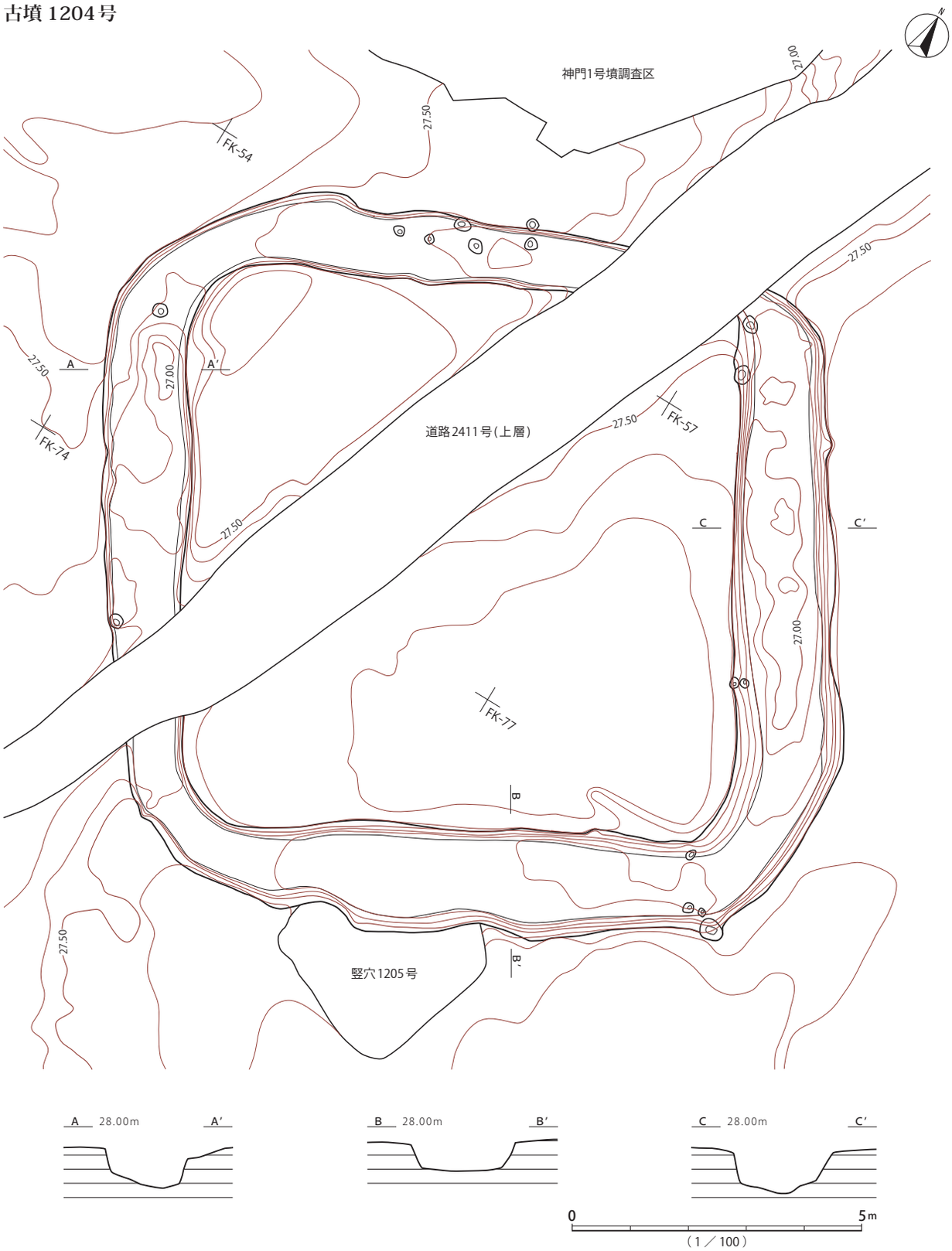


Fig.430　古墳1204号(1) 遺構

古墳 1204 号

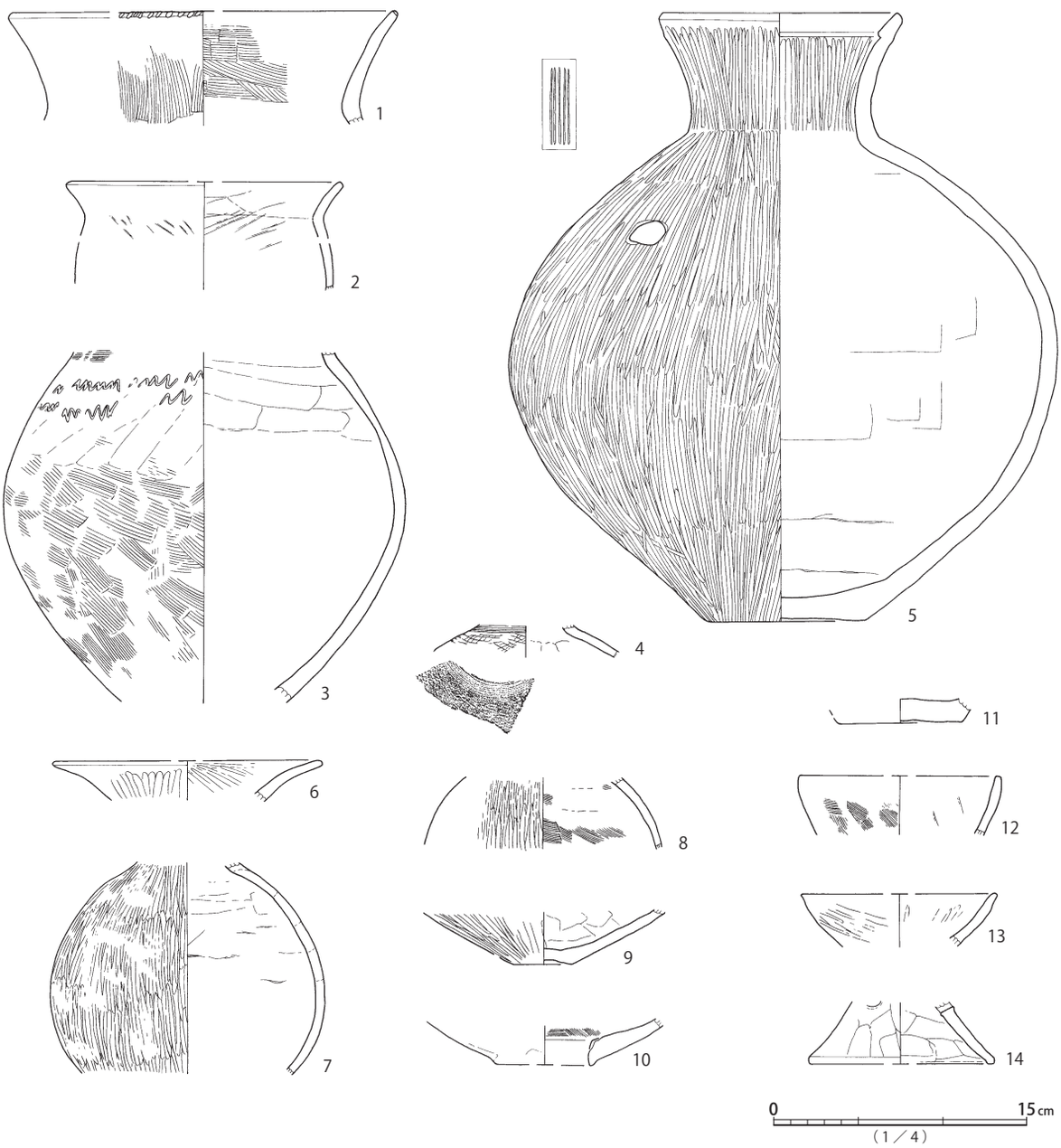


Fig.431　古墳1204号(2) 遺物

市教育委員会調査地区

古墳1884号　（Fig.434）

国分寺の鐘楼建設工事に先立ち、市原市教育委員会が実施した試掘調査で確認された遺構である。LI−58を中心に位置し、確認範囲内においては、他遺構との重複はない。

3本設定したトレンチのうち、2・3トレンチから検出されている。確認調査で終了しているため、詳細は不明であるが、隅丸方形を呈する方墳の可能性がある。古墳とした場合、墳丘はすでに失われており、周溝のみ残存する。墳丘規模は不明で、周溝規模は上端幅1.90〜2.20mを測る。主軸方位はN−40°−W程度になるものと思われる。

古墳1204号

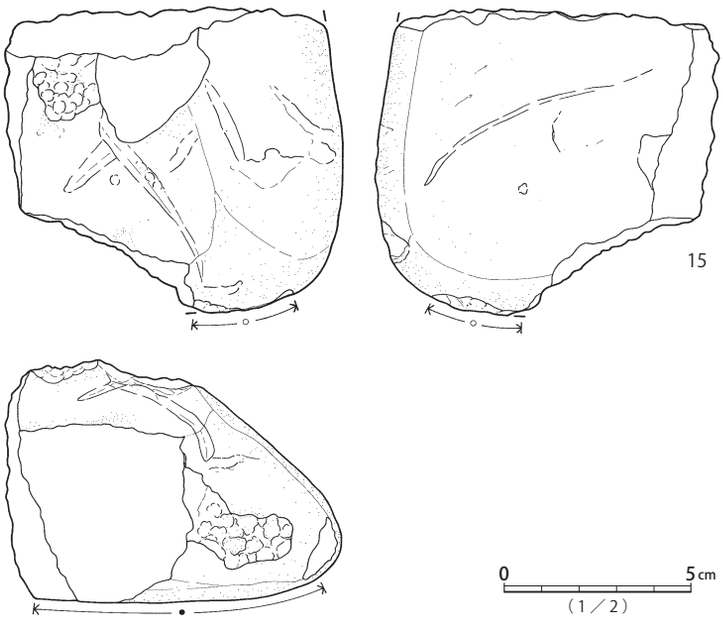


Fig.432　古墳1204号(3) 遺物

出土遺物がなく、帰属時期は明確でない。

第5節　溝

西辺部

溝2416号　（Fig.435）

SG・RG・RH・QHにまたがって位置する。北西側で竪穴0238号、中央で竪穴0265号と溝2020号（上層）、南東側で竪穴0274号、南東隅で土坑335号（上層）と重複し、北西側と南西側は調査区外に延びる。新旧関係は、断面図など記録上の根拠がないが、本遺構が335・2020号よりも古いと思われる。その他の遺構との関係は明確でない。

平行する2条の溝で構成され、北西から南東にN−41°−Wの軸で直線的に延び、RH−94グリッド内で南西に方向を変え、N−44°−Eの軸で調査区外に延びる。部分的に途切れるが、延長距離は外側溝で36.7m、内側溝で31.5m分が検出されている。溝幅0.23〜0.45m、確認面からの深さ0.16〜0.22mを測り、断面形態はなだらかなV字状を呈す。両溝の間隔は1.56〜1.69mを測るが、調査区北西側では間隔が広がり、外側の溝を直線で結ぶことができないことから、溝はつながらず、鉤の手状となる通路が存在したものと考えられる。両溝は近接した時期の所産と考えられるが、同時に存在したものかは、明確でない。

途中直角に方向を変えることから方形区画施設と考えられ、本遺構に近接し、主軸方位を同じくする掘立柱建物3196号が区画対象のひとつであった可能性が高い。出土遺物がなく、帰属時期は明確でないが、上総国分僧寺寺院地外郭溝（溝2020号）と重複関係にあり、有機質性の強い黒褐色の覆土が中近世遺構のものとは考えにくいことから、国分僧寺創建期以前であることは間違いない。古墳時代前期前葉と考えられる竪穴0238・0265号とも重複し、並行する2条の溝間には弥生時代後期後

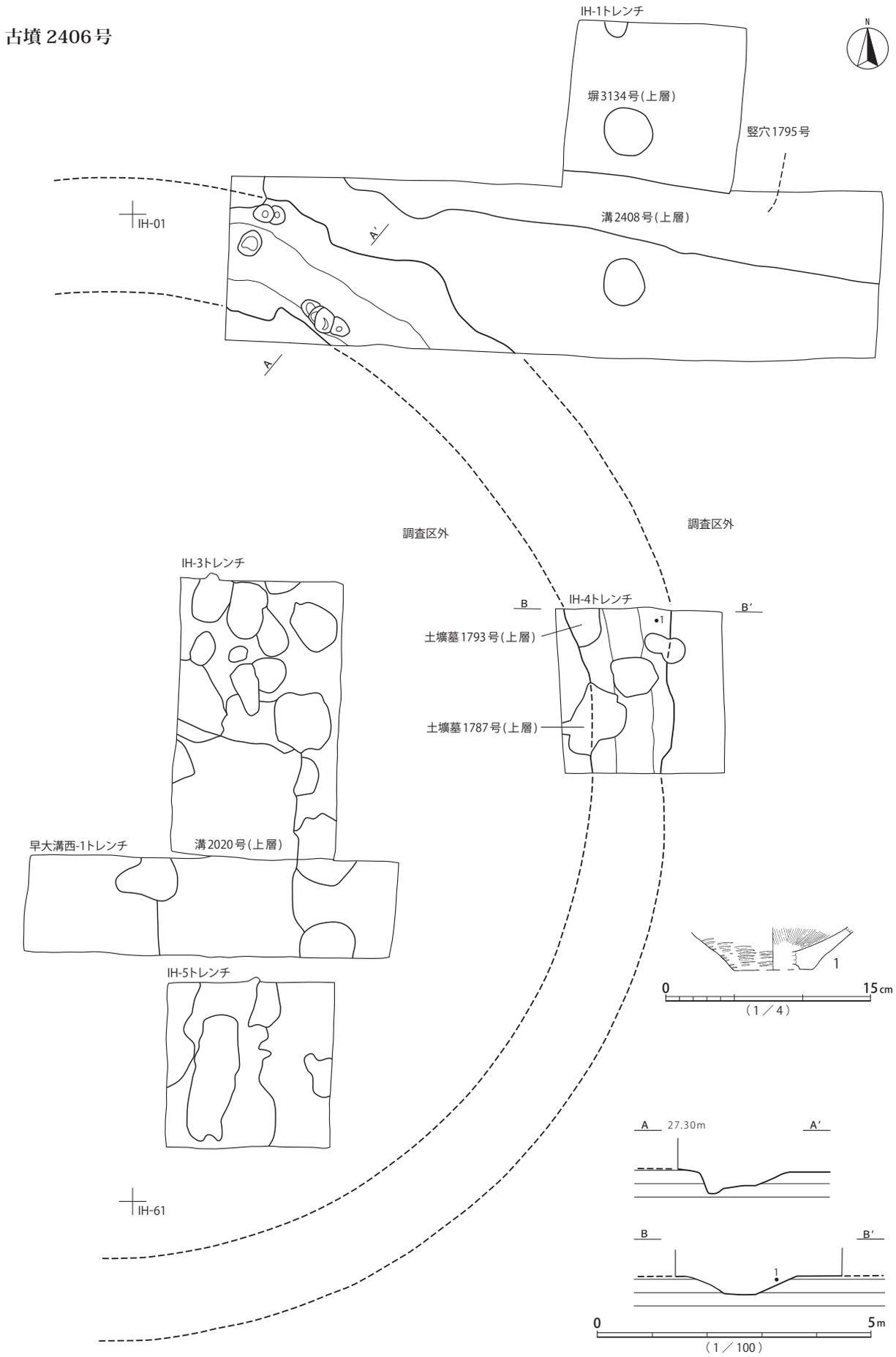


Fig.433　古墳2406号 遺構遺物

古墳 1884 号

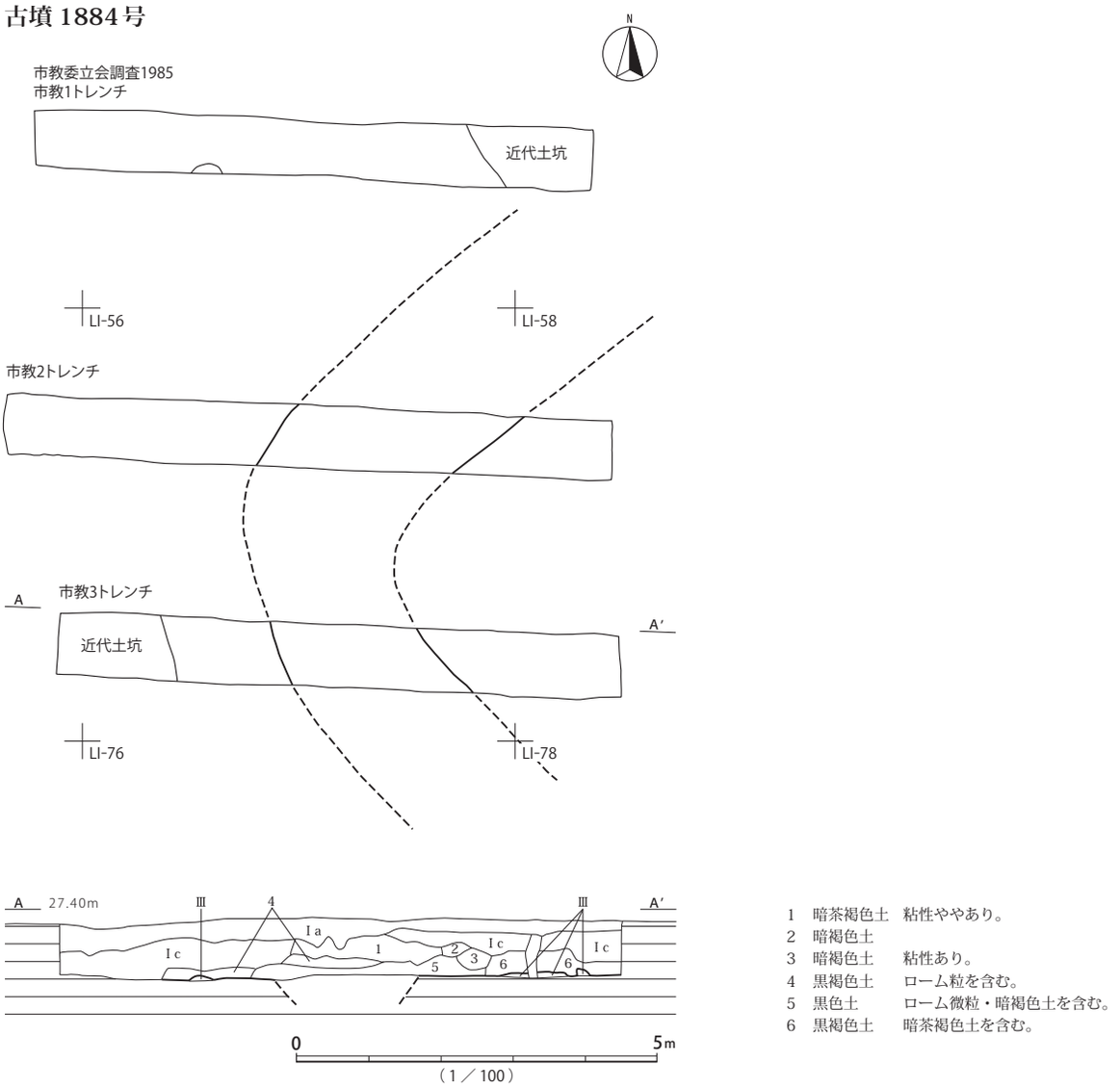


Fig.434 古墳1884号 遺構

半と思われる竪穴0269号が位置することから、これらの時期から外れる弥生時代終末期あるいは古墳時代前期前葉以降と考えられるが、本遺跡では前期前葉以降の遺構数は著しく減少することから、弥生時代終末期の所産である可能性が高い。

第6節 遺構外出土の遺物

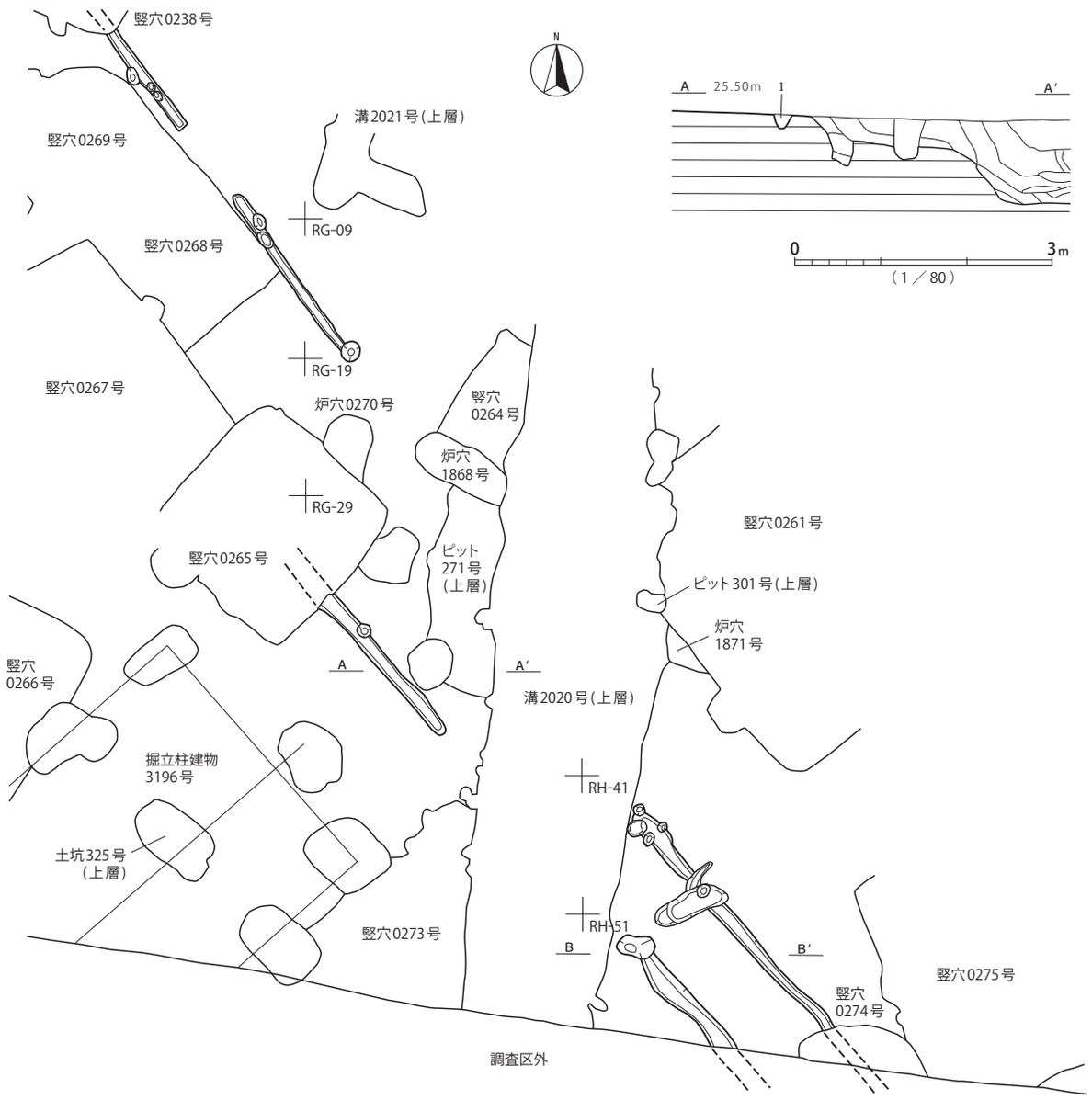
（1）土 器

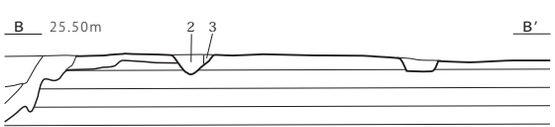
1 北辺部 （Fig.436・437、PL.92・97・131）

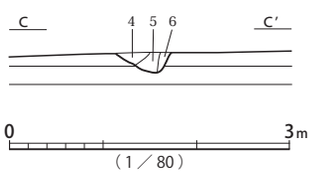
1～14・18～20・28～30・33は甕形土器、15～17・27・31・32・34は壺形土器、21は器種不明の底部、22・23は直口縁（長頸）壺形土器、24は高杯形土器、25は小型の鉢形土器、26は器台形土器、35・36は大型の椀形土器である。

2・3はタタキ甕で、タタキ整形ののちヘラナデが施される。2は口縁端部に面を持つ。3は摘み上げ口縁で、口唇部外面に面を持ち、口縁端部は鋭角になる。内面の頸部から胴部はヘラケズリが施され、

溝2416号







1　黒褐色土　ローム・黒色土を少量含む。粘性・しまりあり。
2　黒褐色土　しまりあり。
3　黒褐色土　暗褐色土を含む。
4　黒褐色土　ロームを多く含む。しまり強い。
5　黒褐色土　ロームを少量含む。しまり強い。
6　暗褐色土　ロームを含む。しまり強い。

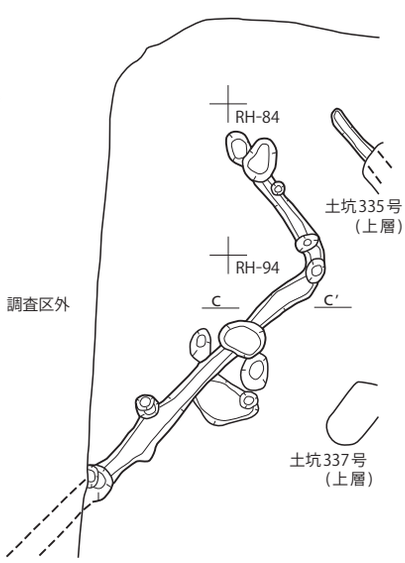


Fig.435　溝2416号 遺構

器面を薄く仕上げる。4はS字甕B類で、口唇部内面に面を持つ。33もS字甕で、同じSKグリッドからの出土で同一個体であろう。いずれも灰黄褐色ないしにぶい黄橙色を呈し、搬入品の可能性がある。5～13・28・29は5の字状有段口縁で、尖底ないし尖底気味の18・19も同類であろう。9・10は口縁部が大きく外傾し、口縁部と胴部の最大径がほぼ等しくなる。29には擬凹線が認められる。5・6・9・18は内面ヘラケズリ、10はケズリ状のヘラナデが施される。14・30は口縁端部を面取り拡張するもので、14の頸部内面は条線を残すヘラナデ、胴部内面はヘラケズリが施される。

16は口縁端部を面取り拡張し、外反する口唇部内面に面を持つ。頸部は強く屈折する。17は有段口縁で、直立する複合部の下端には押捺を加える。肩部には凸帯を貼り付け、押捺を加える。22・23は直立する長い口頸部と扁平気味の胴部をもつ。24は内外面赤彩で、口縁部に沈線文、杯部下位に櫛描文を施す。27は口縁端部に単節縄文、複合部に単節羽状縄文3段を施したのち、押捺を加える棒状浮文と4条の沈線文を交互に配置する。内面は屈折部に回転結節文を施す。31・32は複合口縁で、複合部に擬凹線文を施す。31は内面に櫛描波状文を加え、内外面に赤彩を施す。34は胴部に付加条1種を施す。

2　西辺部　（Fig.438・439、PL.92・93・97・131）

1～6・22～25は甕形土器、7～9は台付甕形土器、10～14・26～29は壺形土器、15・16は小型の鉢形土器、17～20は高杯形土器、21は結合器台形土器である。

2・3・6・22～24はタタキ甕で、2の口縁部は外反し、端部をわずかに摘み上げる。3は直線的に大きく開く口縁部をもち、タタキ整形痕はわずかに右下がりで、胴部内面はケズリ状のヘラナデが施される。4・5は口縁部が受口状を呈す。7～9・25はS字甕で、7・8は同一個体である。15は頸部、16は体部の内面に明瞭な段をもつ。17～19はいずれも有稜高杯で、17は深い杯部をもち、口縁部内面付近はハケ調整痕を残す。20の脚部は柱状を呈す。21は器受部に上下交互に透かし穴をもつ。結合部は鍔状を呈し、上下端にキザミを加える。26はパレス壺で拡張口縁部に擬凹線文を施し、棒状浮文を貼り付ける。口縁部内面には綾杉文を施す。

3　南辺部　（Fig.439、PL.93）

1～4は甕形土器、5は高杯形土器である。1はゆるく外反する頸部をもち、頸部内面はケズリ状のヘラナデを施す。5は脚部下半が内湾気味の円錐形を呈す。

4　セ116・117地区　（Fig.440、PL.93・131）

1～6は甕形土器、7は台付甕形土器、8・9は壺形土器、10は直口縁壺形土器、11は椀形土器、12～14は高杯形土器、15は皿形土器である。

2・5はタタキ甕で、内面はいずれもヘラナデを施す。3は小型で、口縁部が受口状を呈す。8は有段口縁である。9は頸部に凸帯を貼り付け、口縁部内面には櫛歯状工具刺突による綾杉文を施す。13は椀形の杯部をもち、脚部中央で屈折し、裾部は大きく開く。15は器台形土器の器受部が独立したような形態をもつ。

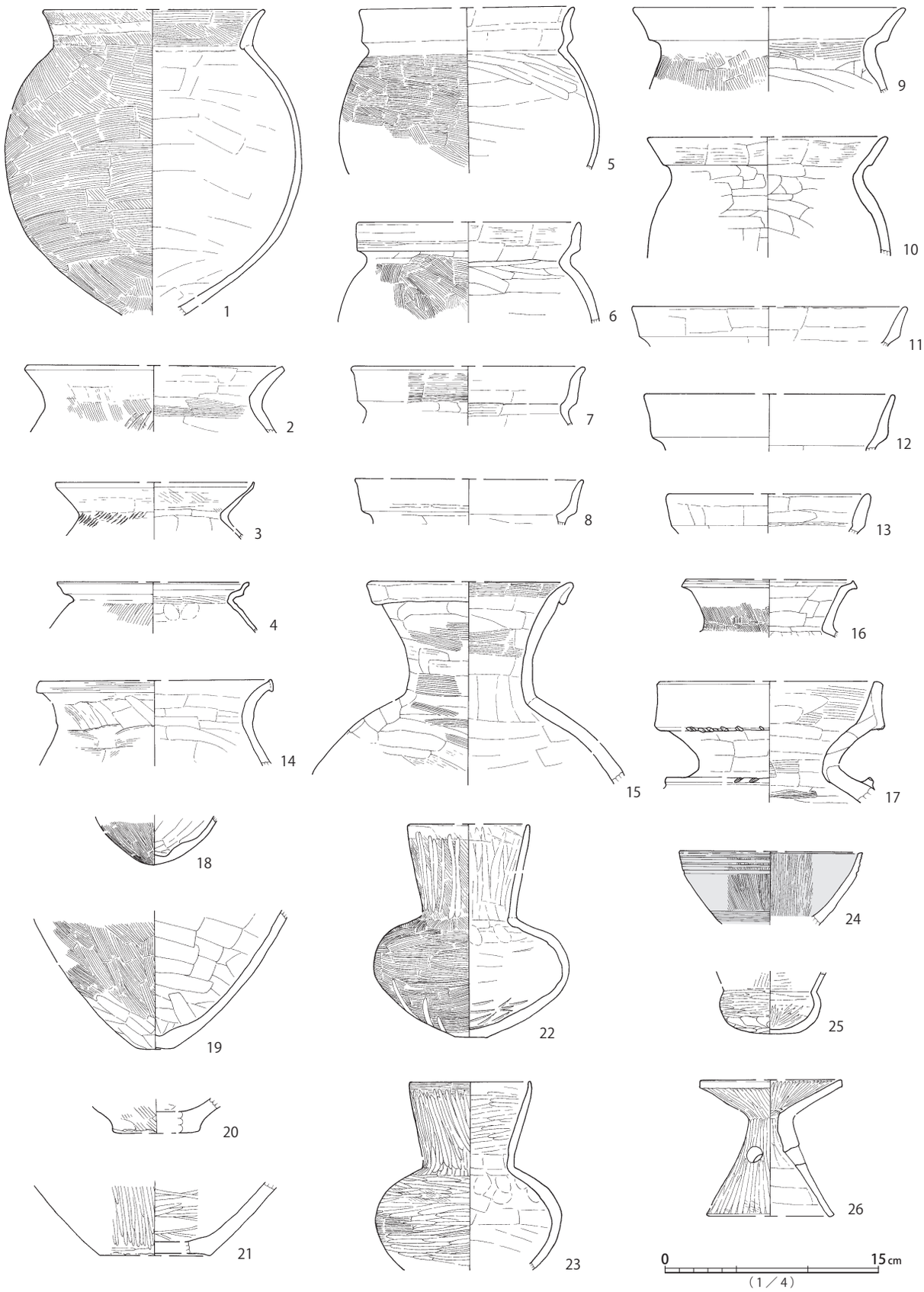


Fig.436　遺構外出土弥生土器・土師器 北辺部(1)

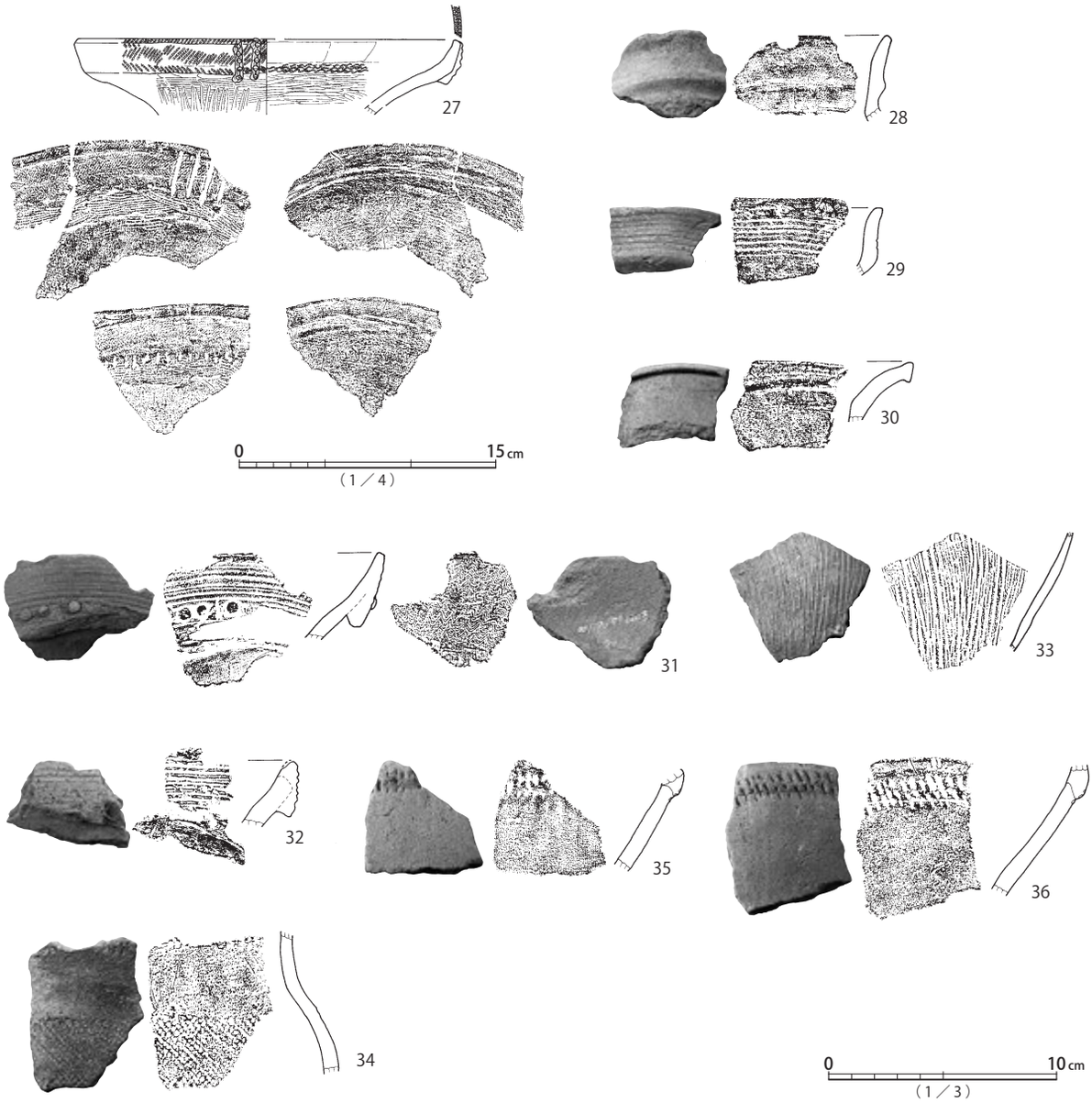


Fig.437　遺構外出土弥生土器・土師器 北辺部(2)

5　調査区不明　（Fig.440、PL.93・97・131）

1は甕形土器、2は壺形土器、3は高杯形土器、4は器台形土器である。すべて本遺跡からの出土と考えられるが、1・2・4は注記がない。3は寺域確認調査030トレンチからの出土とあるが、トレンチの場所を特定することができない。

1は5の字状有段口縁で、直立する複合部の下位に1条の沈線が巡る。頸部内面には屈折稜を残し、胴部内面はヘラケズリが施される。2は小型の二重口縁壺で、胴部ハケ調整ののち、上半はミガキ状、下半はケズリ状のヘラナデを施す。胴部下位には、径4mmの焼成前穿孔を加える。4は器受部径が脚部を上回り、北陸系器台として過去に公表されている（比田井1987）。比田井論文第4図47がこれにあたり、表土層中からの出土とされている。

6　調査区外　（Fig.454、PL.144）

発掘調査によって得られたものではないが、中台遺跡の範囲からの出土であることから、掲載することにした。当時上総国分寺台遺跡調査団調査員で、出土資料の収集に立ち会った浅利幸一（元市原市教育委員会学芸員）によれば、土地所有者が偶然発見したもので、完形土器が多量に出土したことから連絡が入ったという。出土した時期は記録がないためはっきりしないが、昭和55ないし56年頃のようである。出土地は現在の惣社4丁目11付近で、西辺部調査区中央付近の西側に隣接する。これらの土器群は1m程度の範囲からまとまって出土しており、出土状況から土師器焼成窯の存在を指摘された。

1・2は甕形土器、3～10は高杯形土器である。1・2は同一個体と考えられ、口縁端部は弱く面取りされ、頸部はくの字状となる。胴部と底部境界に接合痕を残し、屈折して立ち上がる。3～10はいずれも完形に近い状態で出土しており、遺存状態がよい。口縁部は大きく外反し、径の大きな杯底部をもつ。脚部は内湾気味の円錐形で、屈折して裾部に大きく開く。法量は、おおむね口径18～19cm・器高15～16cm・底径14.5～15.5cmの範囲にあり、規格化された形態を呈している。

（2）石製品　（Fig.441、PL.132）

滑石製の臼玉で、直径4mm・孔径1.5mm・厚さ1.5mmを測る。西辺部の溝2029号（上層）から検出されたもので、混入であろう。

（3）土製品　（Fig.441、PL.142）

有孔丸玉（土玉）で、全体をナデて整形する。直径35mm・孔径6.5mm・重量34.9gを測る。北辺部SL−93に位置する溝2229号（上層）から検出されたもので、混入であろう。

（4）骨角製品　（Fig.441、PL.143）

薄い板状を呈すヘラ状製品で、表裏に擦痕が残る。鈍く尖る先端部はわずかに外反し、裏面先端部にはスポンジ質を残す部分が認められる。素材は鹿角と考えられる。基部側は破損し、現存長59mm・幅8mm・厚さ4mmを測る。上総国分僧寺寺院地外郭溝である溝2020号（上層）で検出された貝層からの出土である。混入と考えたが、明確な根拠はない。

（5）石　器

ここでは調査区を分けずに、器種ごとに記載を行う。また、帰属時期が明確でないものが多いことから、縄文時代と考えられる資料を含め、遺構外出土の石器類はすべてここで報告を行うこととする。

1　石棒　（Fig.442、PL.132）

土坑250号（上層）からの出土で、混入である。現存長158mm、現存径32mmを測る。小型の石棒で、全体に丁寧な研磨が施される。石材は緑色片岩である。縄文時代後期の所産と思われるが、帰属時期は明確でない。

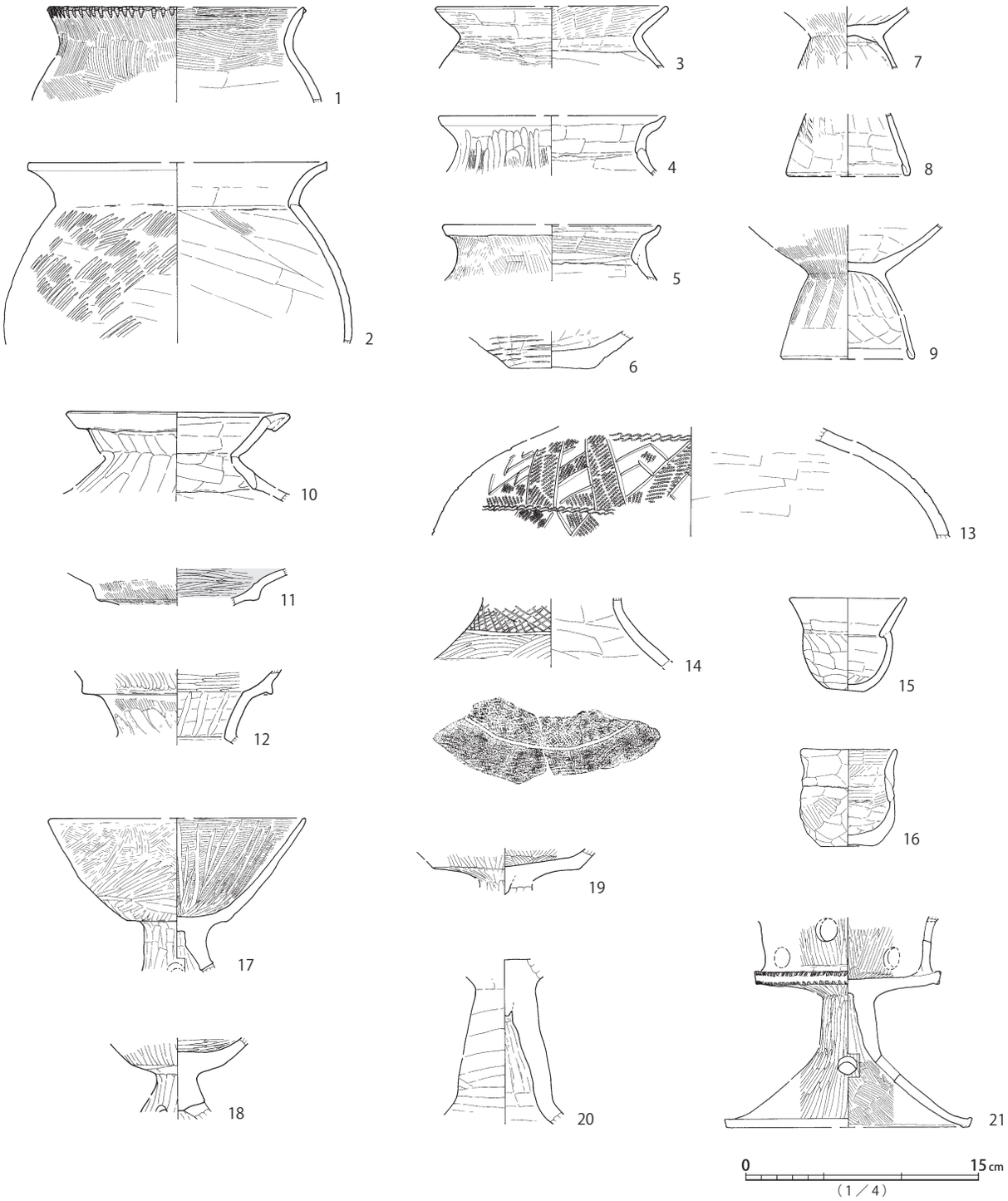
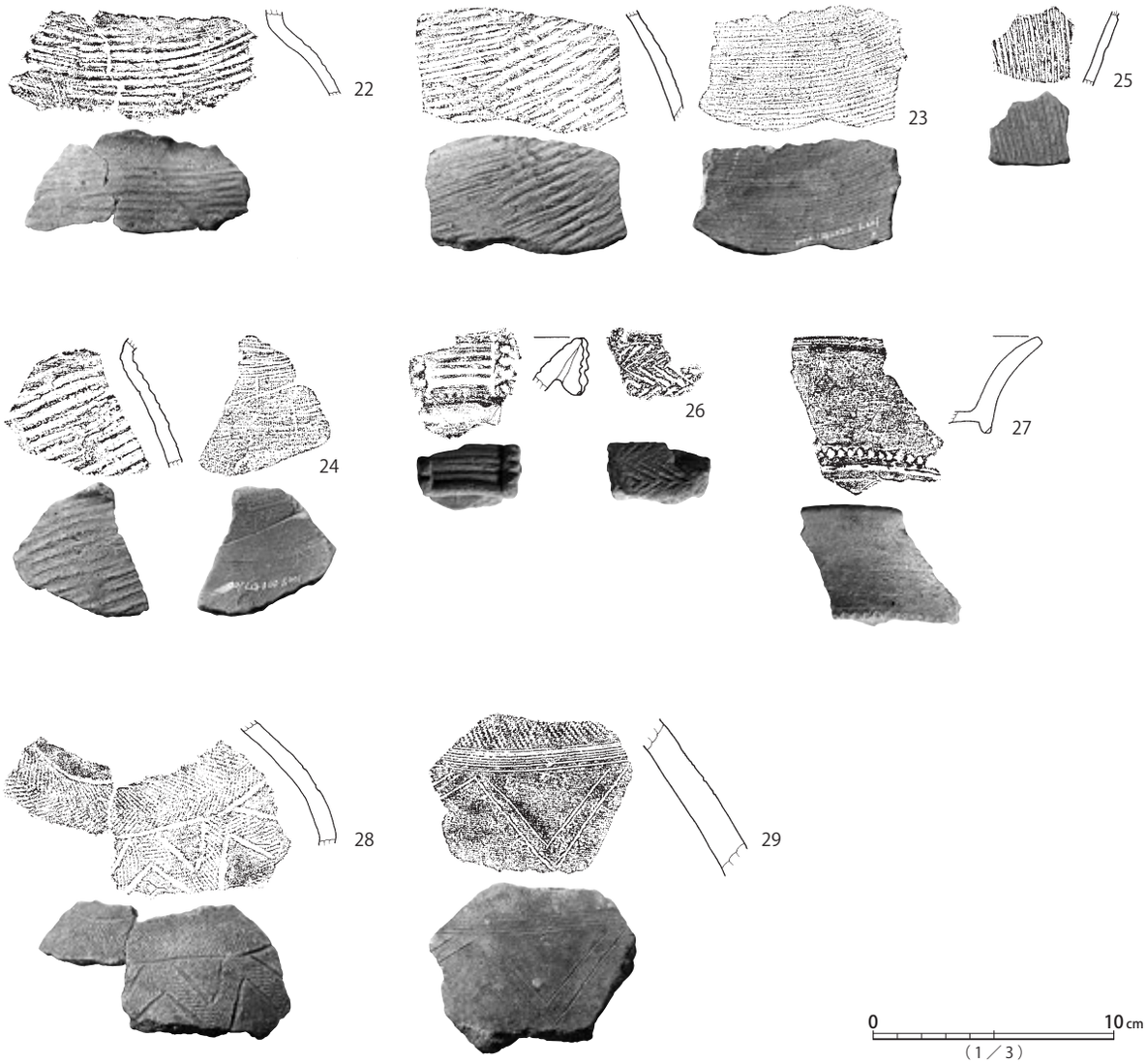


Fig.438　遺構外出土弥生土器・土師器 西辺部(1)

西辺部



南辺部

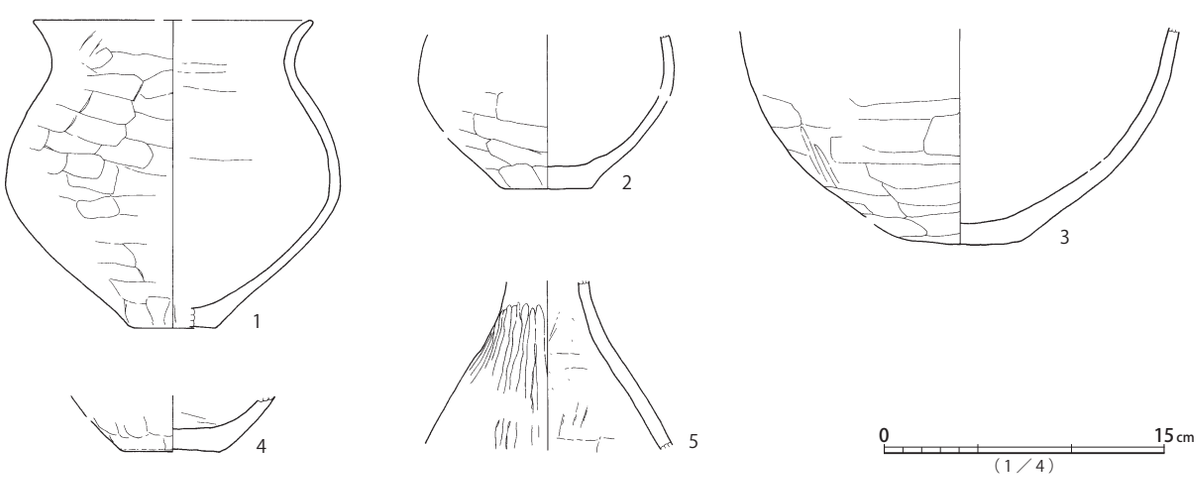
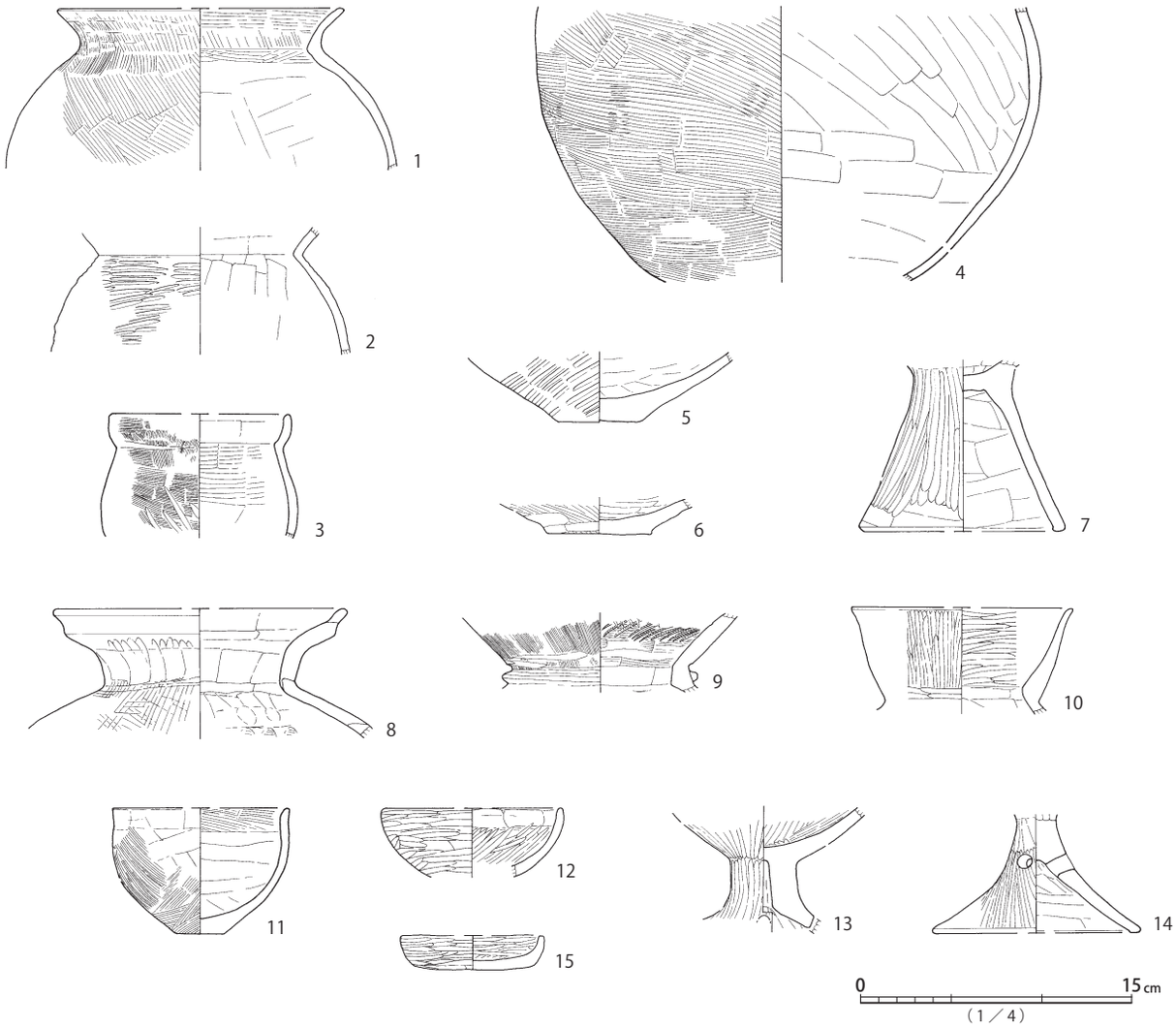


Fig.439　遺構外出土弥生土器・土師器 西辺部(2)、南辺部

セ 116･117地区



調査区不明

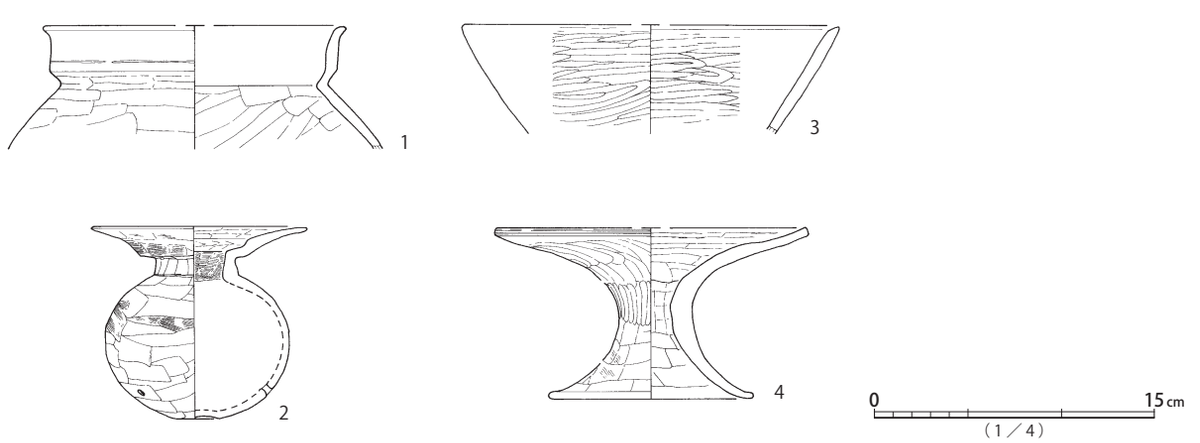


Fig.440　遺構外出土弥生土器･土師器 セ116･117地区、調査区不明

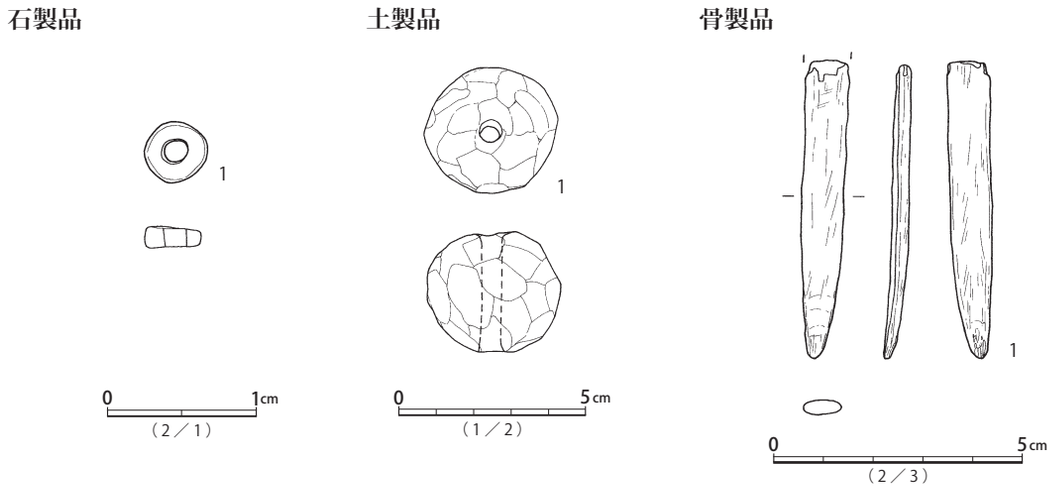


Fig.441　遺構外出土弥生・古墳時代 石製品・土製品・骨製品

2　石鏃　（Fig.442、PL.132）

掘立柱建物3065号（上層）ピット4からの出土で、混入である。凹基無茎石鏃で、裏面に素材の主剥離面を一部残し、先端部は鋭さを欠く。石材はチャートである。

3　尖頭器　（Fig.442、PL.132）

3は基部を欠き、全体形は不明である。周縁部では細かい調整を施すが、全体としては荒い。石材は黒曜石である。4は塀2138号（上層）からの出土で、混入である。有舌尖頭器で、先端部を欠くが、全体に入念な調整が施され、周縁部は鋸歯状となる。石材はガラス質安山岩である。

4　削器　（Fig.442、PL.132）

QO−11からの出土である。やや幅広で厚い剥片の上下と左側を折り取ったのち、右側縁を中心に表裏両面からの調整によって刃部を作りだす。石材は黒曜石である。

5　RF　（Fig.442、PL.132）

掘立柱建物3041号（上層）のP10から出土で、混入である。自然面を残す縦長剥片を素材とし、左側縁上部と右側縁に連続した調整痕が認められる。石材は黒曜石である。

6　掻器　（Fig.442、PL.132）

PL−44からの出土である。調整面打面をもつ厚手の剥片を用い、主剥離面側からの調整によって外湾する刃部を作りだす。石材は黒曜石である。

7　磨製石斧　（Fig.442・443、PL.132・133）

8〜13の6点出土している。8・9は小型の扁平片刃である。8は表面上端から左側面にかけて剥離痕、裏面に自然面を残し、未製品であろうか。10は基部と刃部を欠き、敲石に転用されている。10〜13は大型の蛤刃形と思われ、いずれも刃部を欠く。

磨製石斧のほかに、竪穴0496号から分銅形の打製石斧が出土している（Fig.372−6）。遺構出土遺物に含めて掲載しているが、混入である。

8　磨石類　（Fig.443〜451、PL.133〜139）

ほとんどの資料に研磨痕と敲打痕の両方が認められ、磨石と敲石の両機能をあわせもつ。遺跡全体で229点出土し、このうち109点が遺構外からのものである。229点のうち35点が被熱赤色化し、2点は被熱後の敲打痕が認められた。

109点のなかから、遺存状態の良い50点を抽出して図化した。14・21・25・29・34のように形が整えられるものは少なく、円礫と区別の付きにくいものがほとんどである。33・56・57のように縦長のものは、両端に敲打痕をもち、敲石としての機能がより強いと考えられる。66は磨石の一部に円錐形の凹みを付けるものである。

9　石皿・凹石　（Fig.450〜452、PL.139）

すべて破片資料である。石皿の一部に円錐形の凹みを付けるものがある。遺跡全体で39点が出土し、このうち30点が遺構外からのものである。39点のうち2点が、破損後に被熱赤色化する。

67〜69は縁辺部が直線的になっており、方形に近い形態をとるものと思われる。多孔質の石材が用いられる。64・70・71は楕円形を呈すものと考えられる。使い込まれて中央部が大きくくぼみ、70は特に摩耗が激しい。65は中央が研磨によりくぼむが、小型で磨石類に分類されるものかもしれない。

10　砥石　（Fig.452、PL.140）

研磨痕をもち、角柱状を呈すものが多い。73は台石状のもので、研磨部に線状痕が認められる。石材はシルト岩である。74・75は研磨痕が弱く、砥石としてよいものか疑問を残す。76・77は現代の砥石とほとんど違いが認められない。石材はいずれもデイサイトである。73は土坑516号（上層）、76・77は溝2070号（上層）から出土したもので、いずれも下層遺物の混入と考えたが、積極的な根拠はなく、帰属時期は明確でない。

11　軽石　（Fig.453、PL.140・141）

遺跡全体で32点が出土し、このうち16点が遺構外からのものである。82以外はすべて加工痕を残す。78・80・85には研磨痕とV字の溝が認められ、85で顕著である。79・81・84・86には金属器で削り取られたような平坦面が認められた。

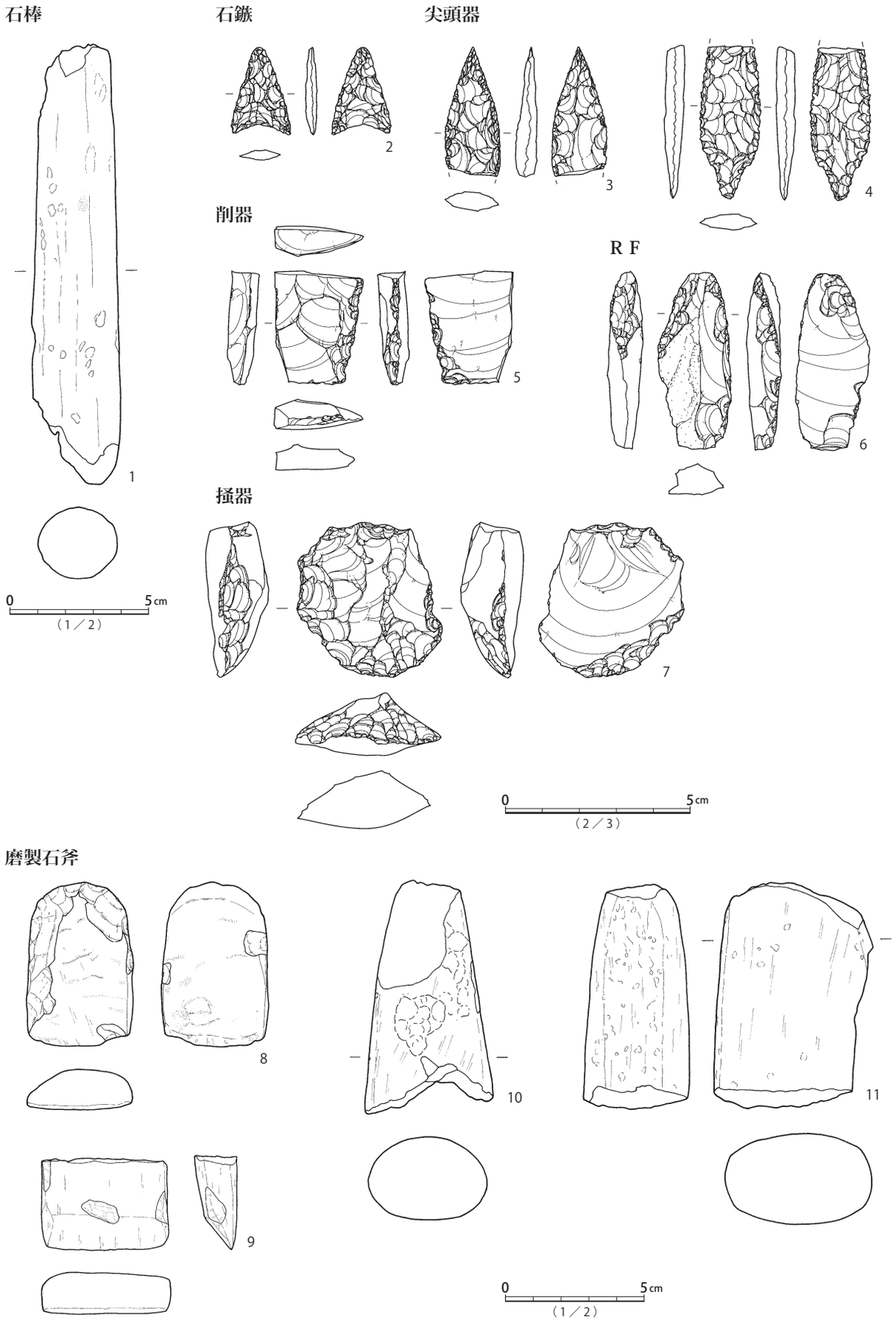
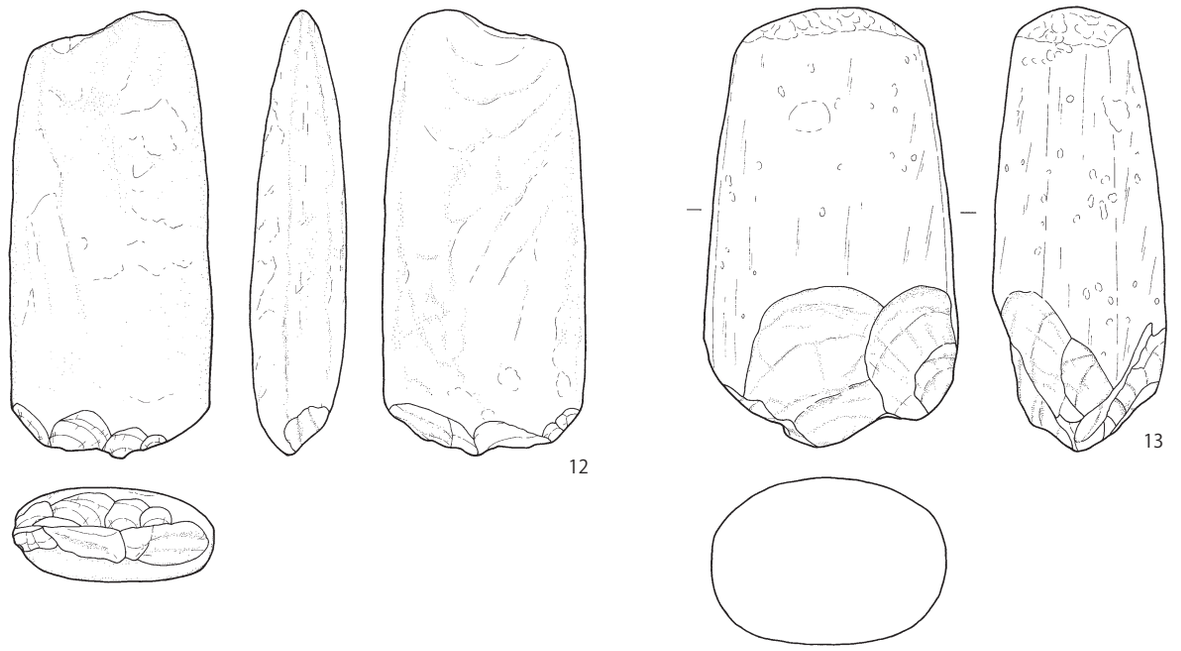


Fig.442　遺構外出土石器(1)

磨製石斧



磨石・敲石

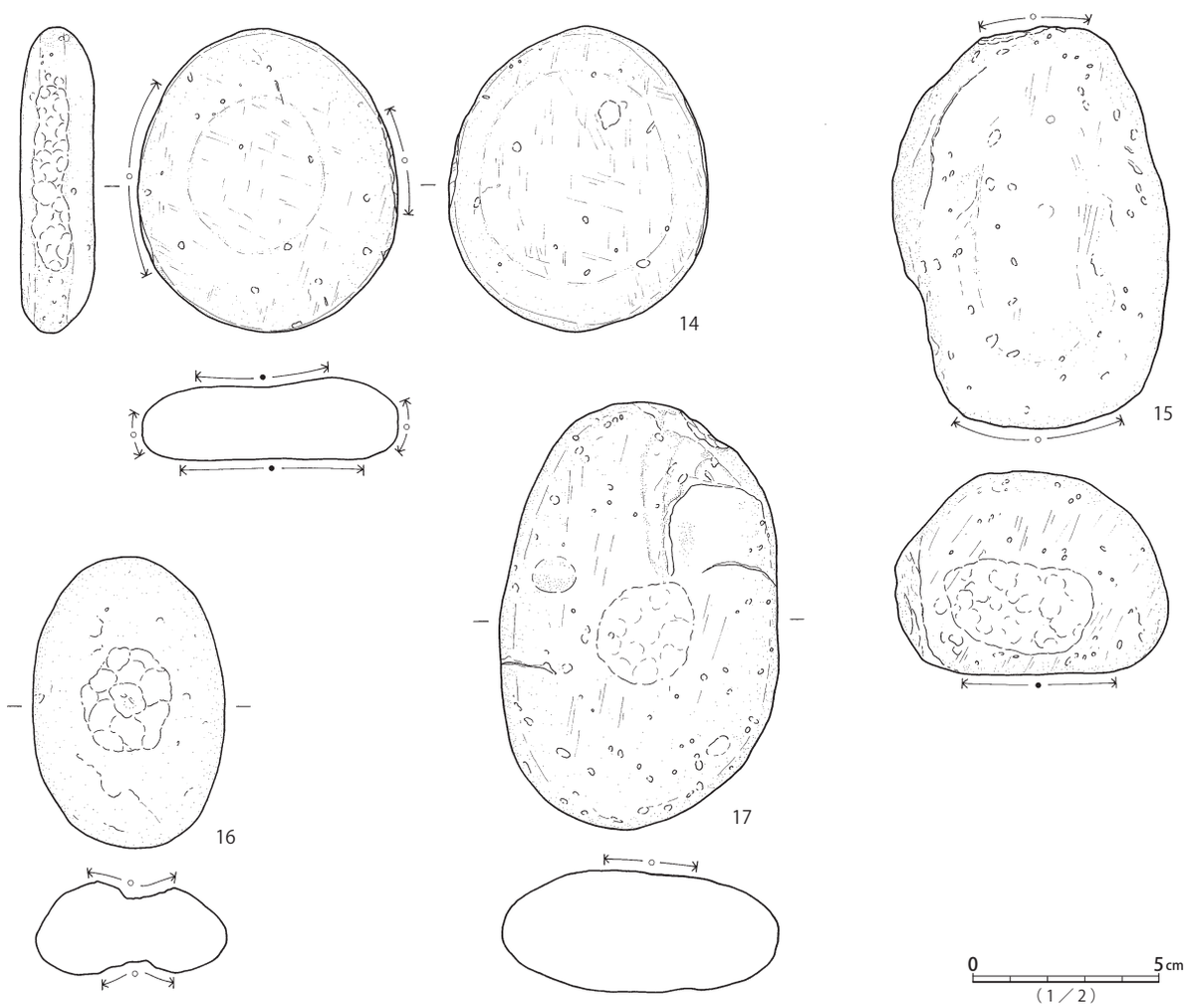


Fig.443　遺構外出土石器(2)

磨石・敲石

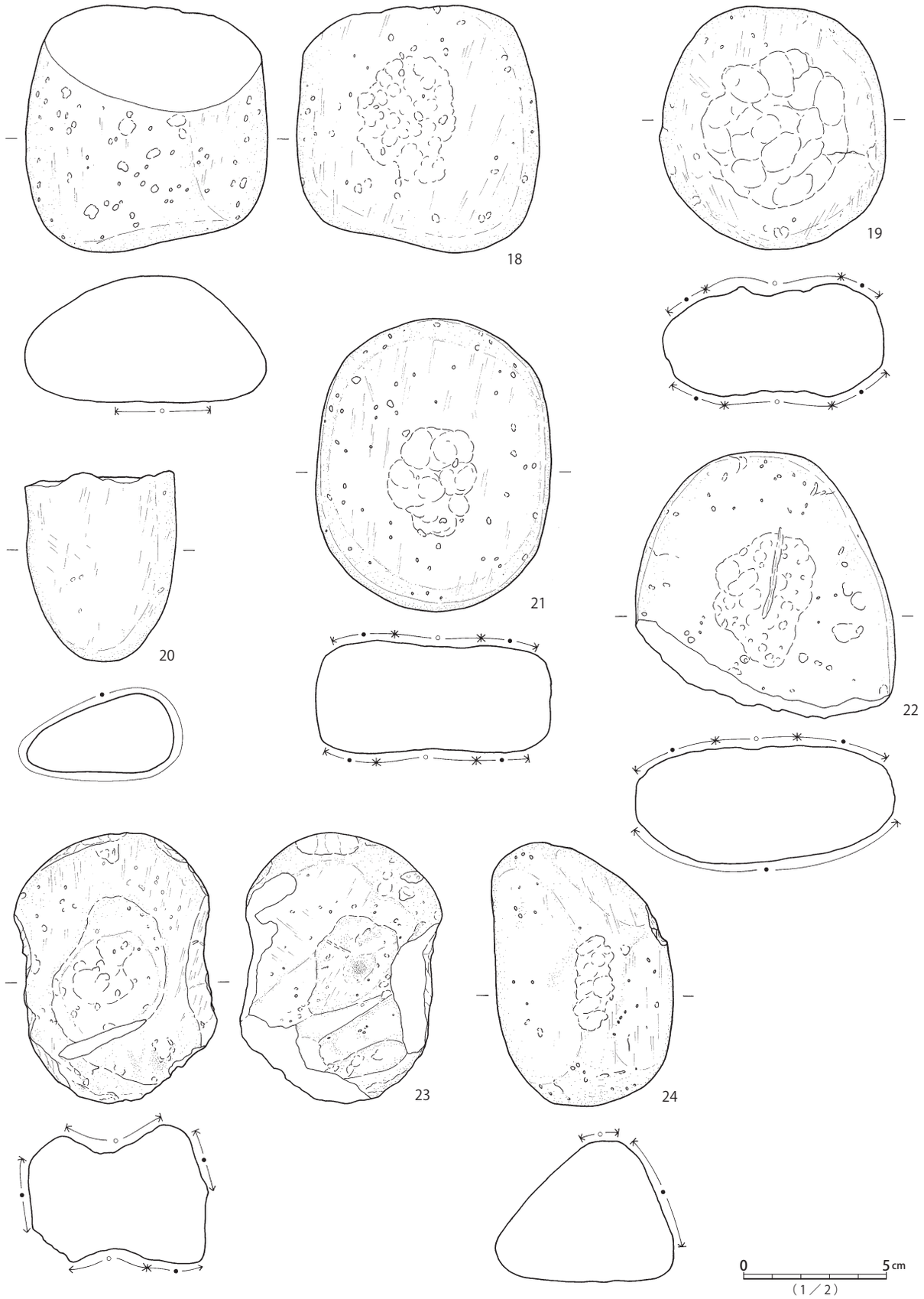


Fig.444　遺構外出土石器(3)

磨石･敲石

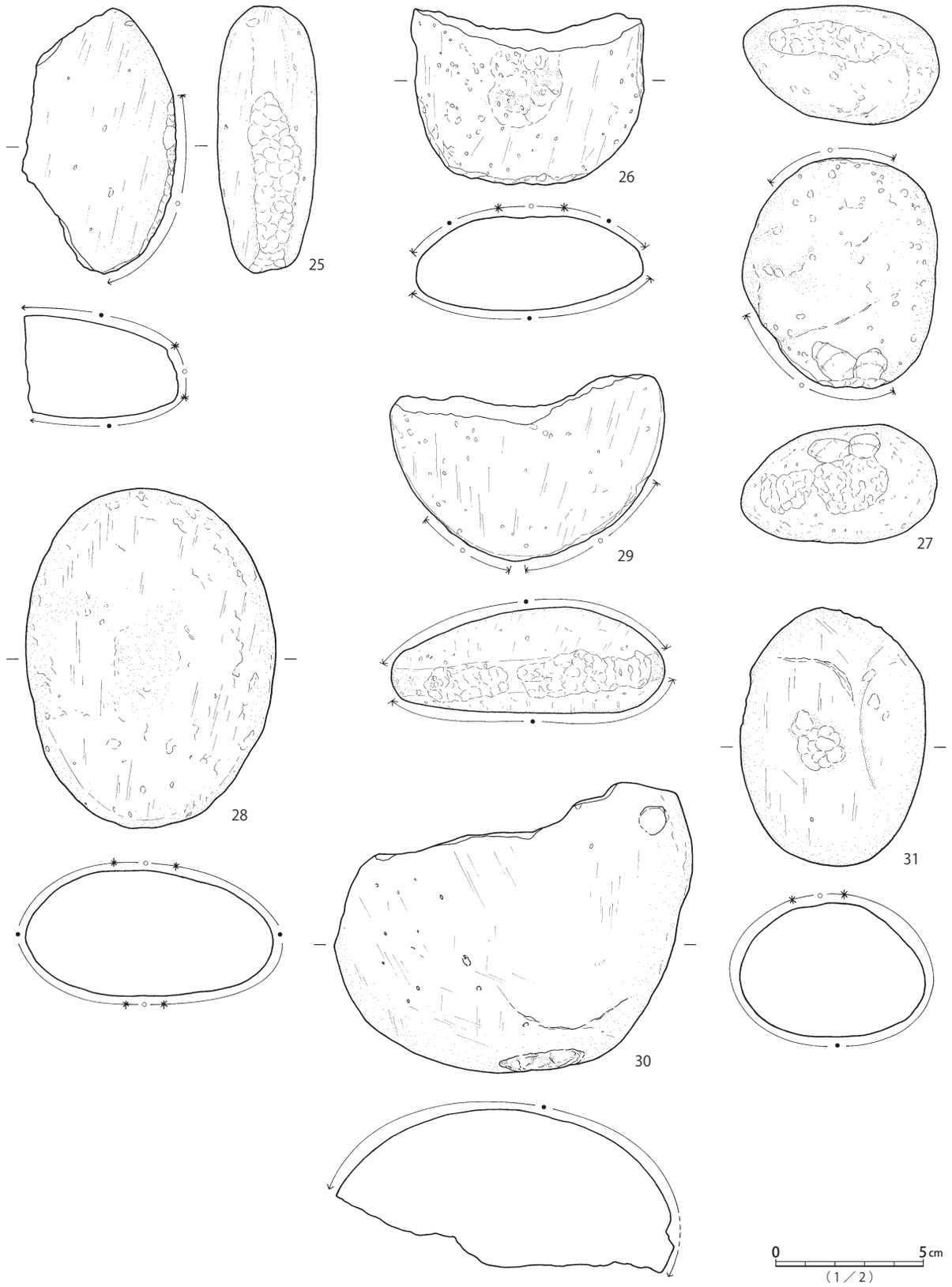


Fig.445　遺構外出土石器(4)

磨石・敲石

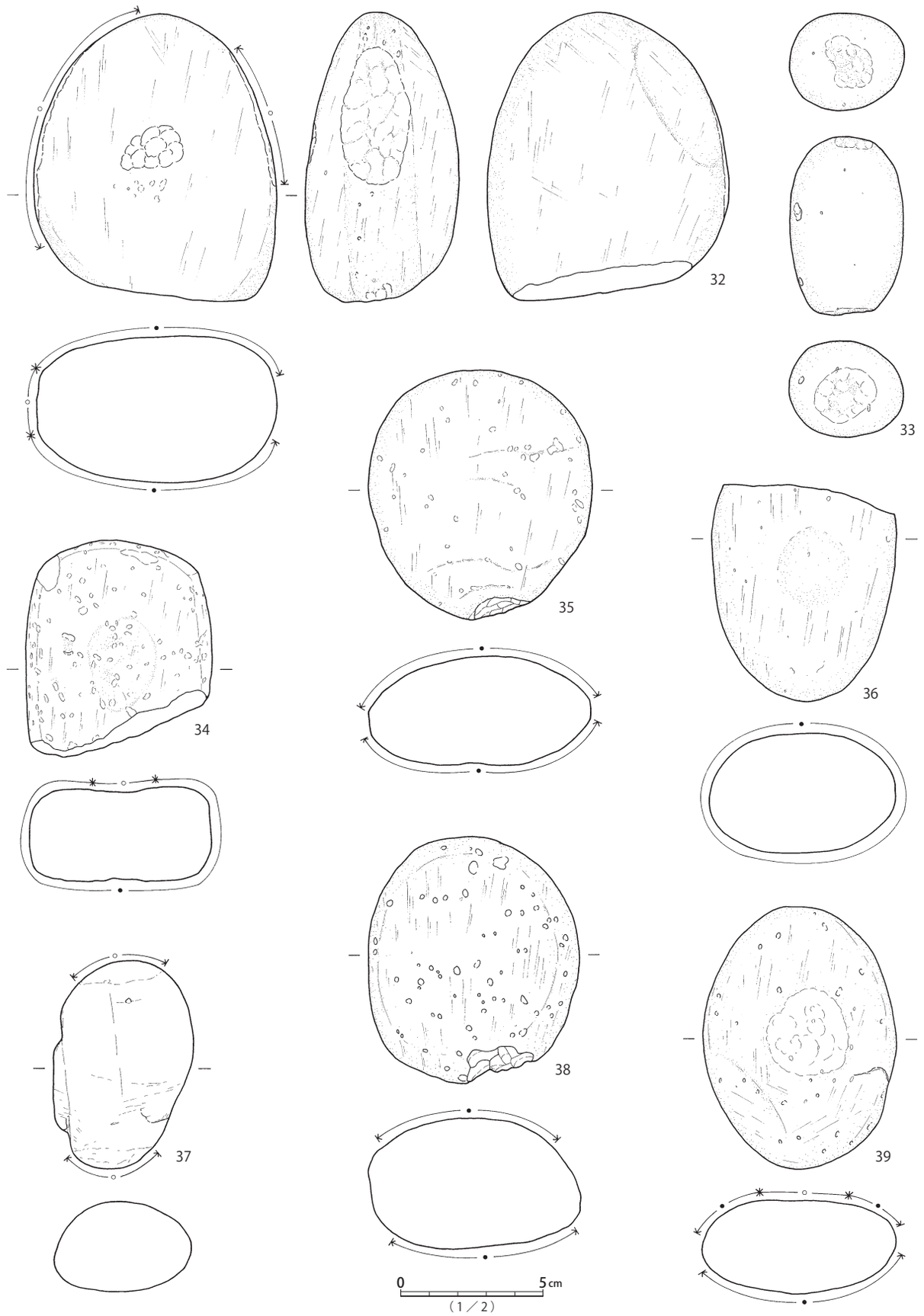


Fig.446　遺構外出土石器(5)

磨石・敲石

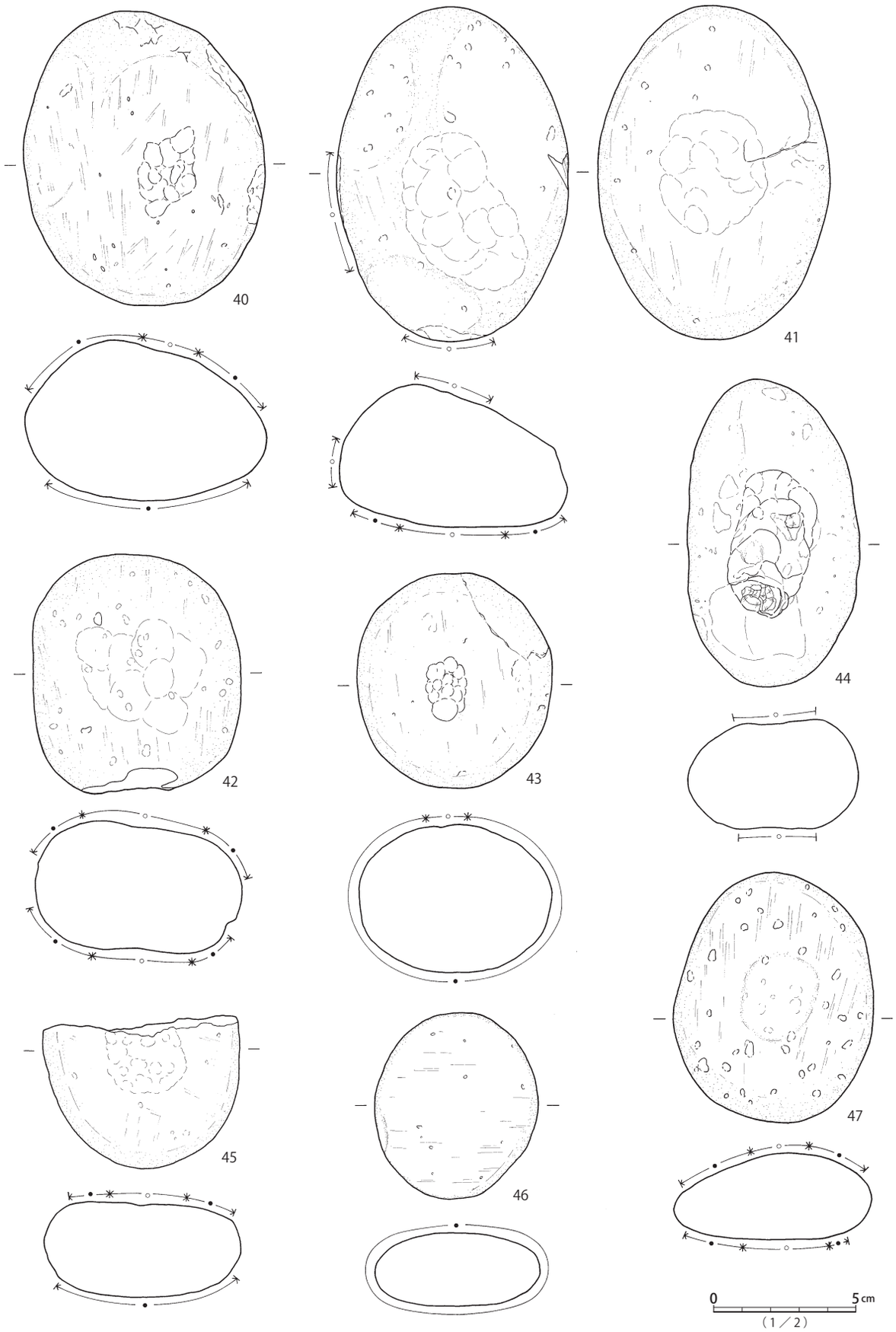


Fig.447　遺構外出土石器(6)

磨石・敲石

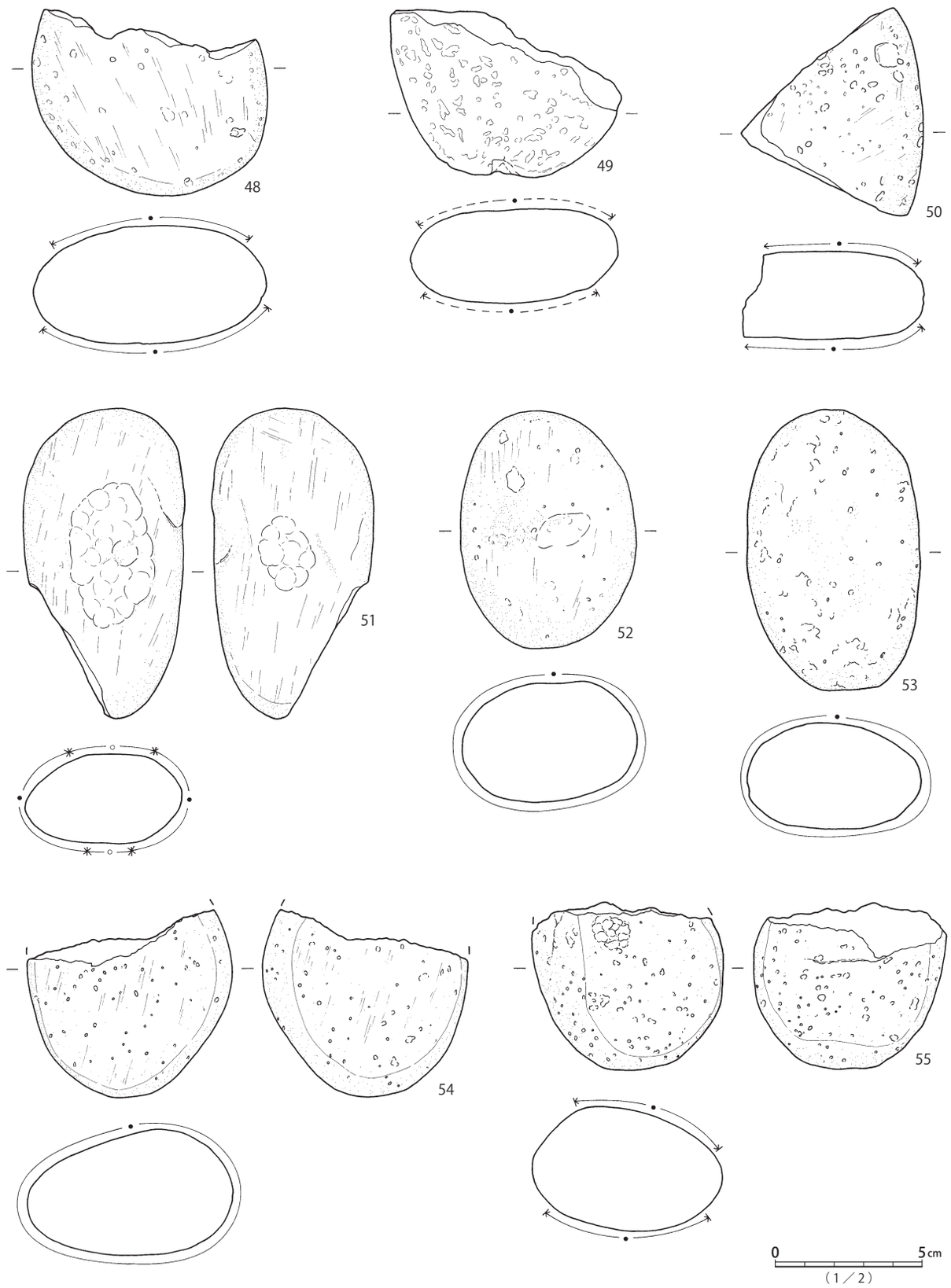


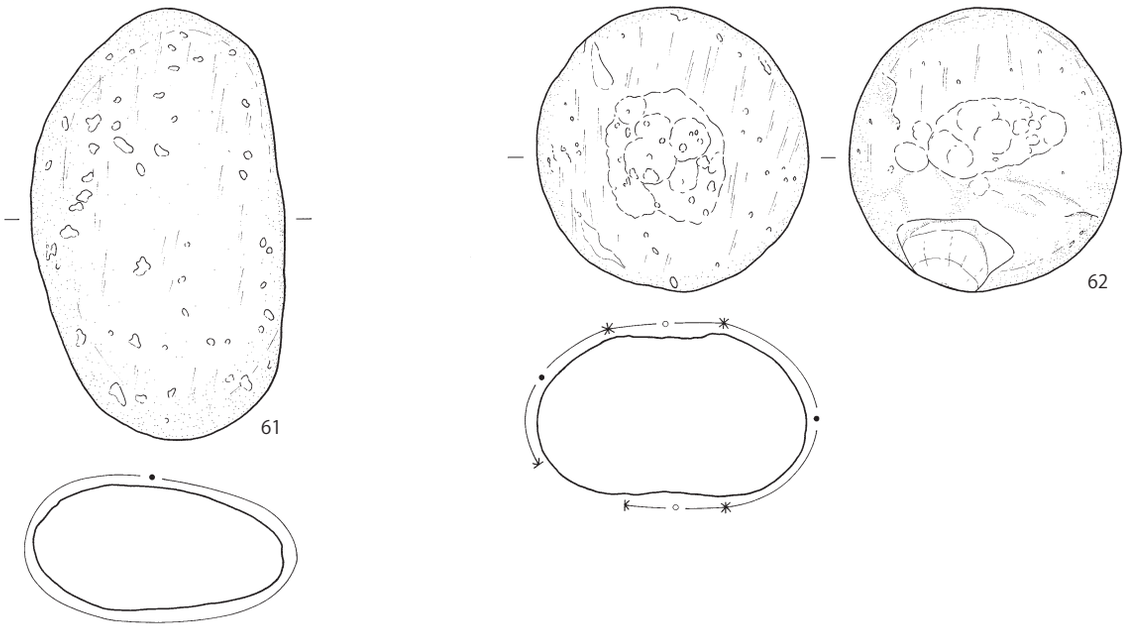
Fig.448　遺構外出土石器(7)

磨石･敲石



Fig.449　遺構外出土石器(8)

磨石・敲石



石皿・凹石

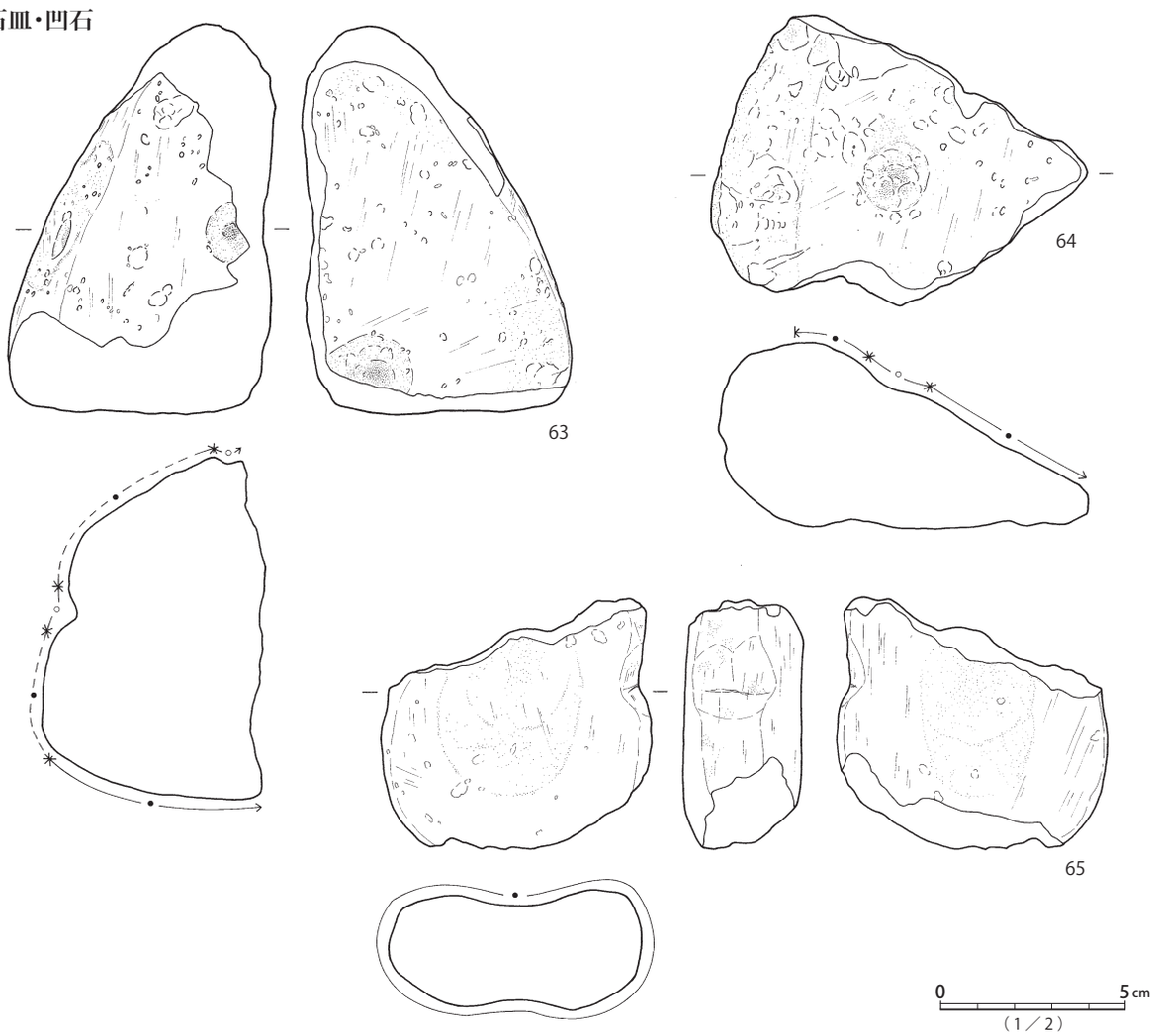
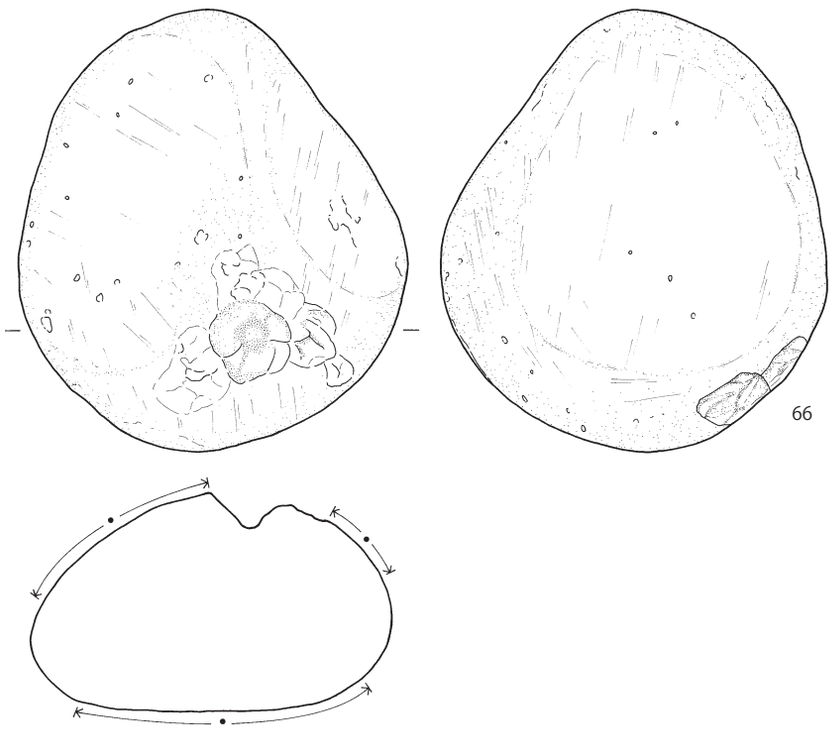
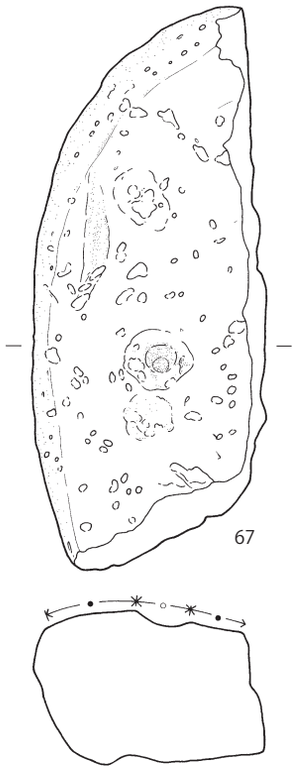


Fig.450　遺構外出土石器(9)

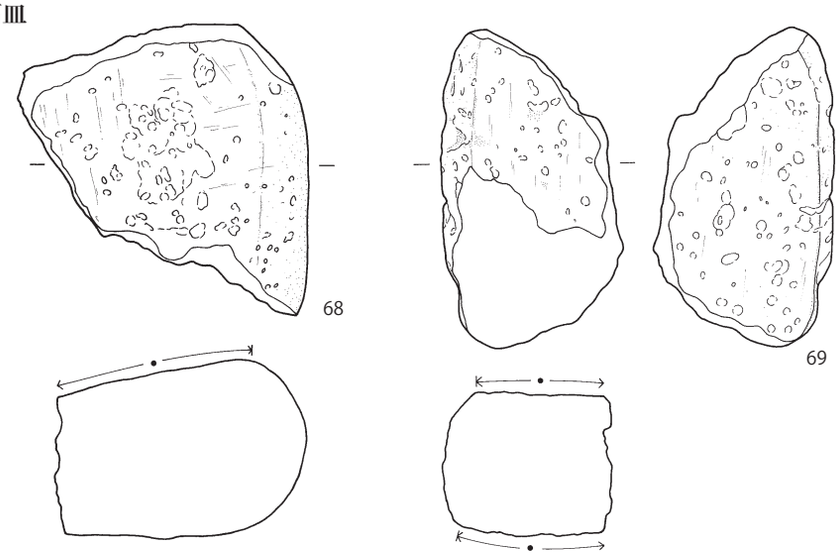
磨石・凹石



石皿・凹石



石皿



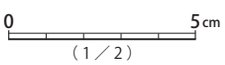


Fig.451　遺構外出土石器(10)

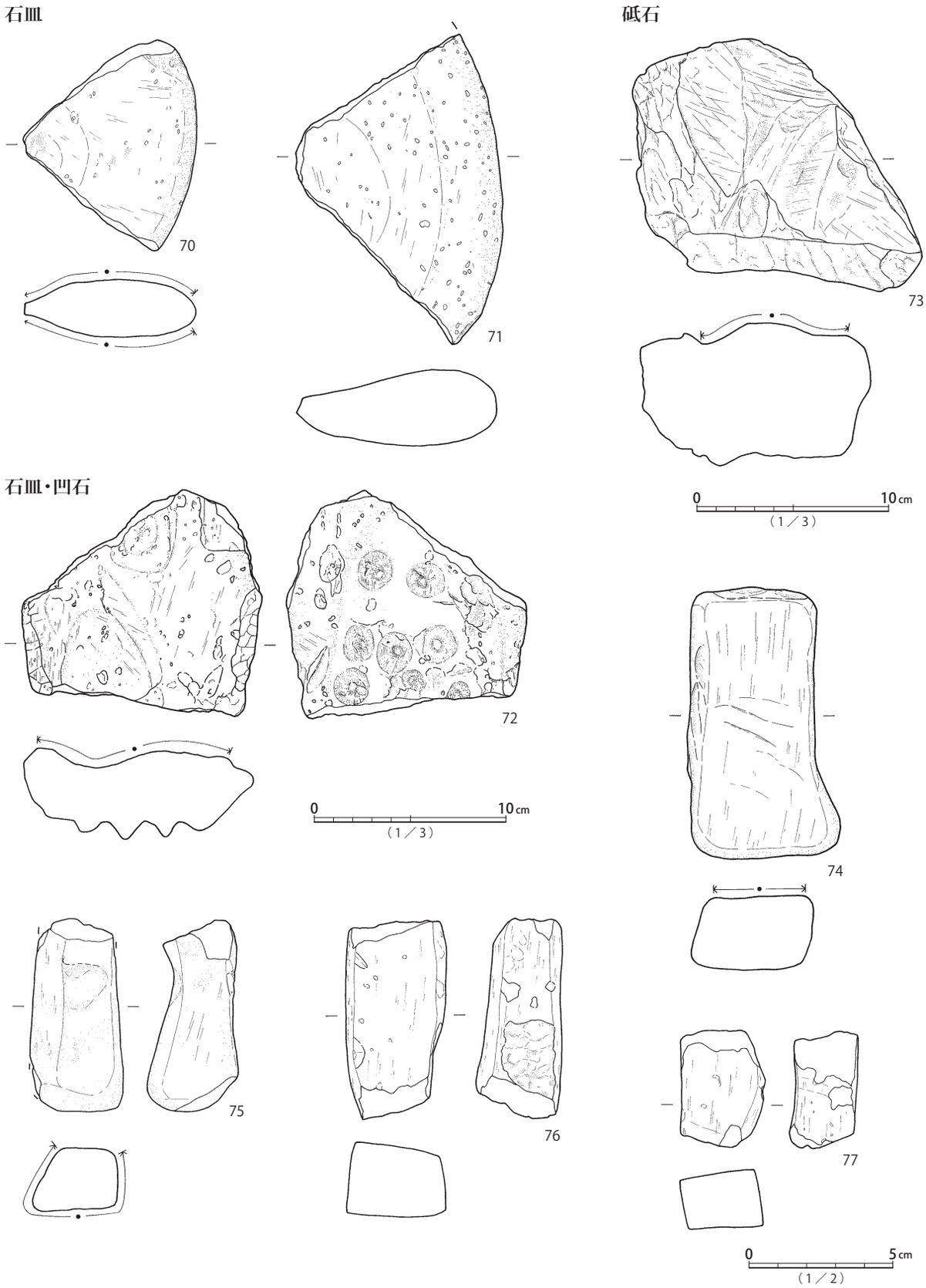


Fig.452　遺構外出土石器(11)

軽石

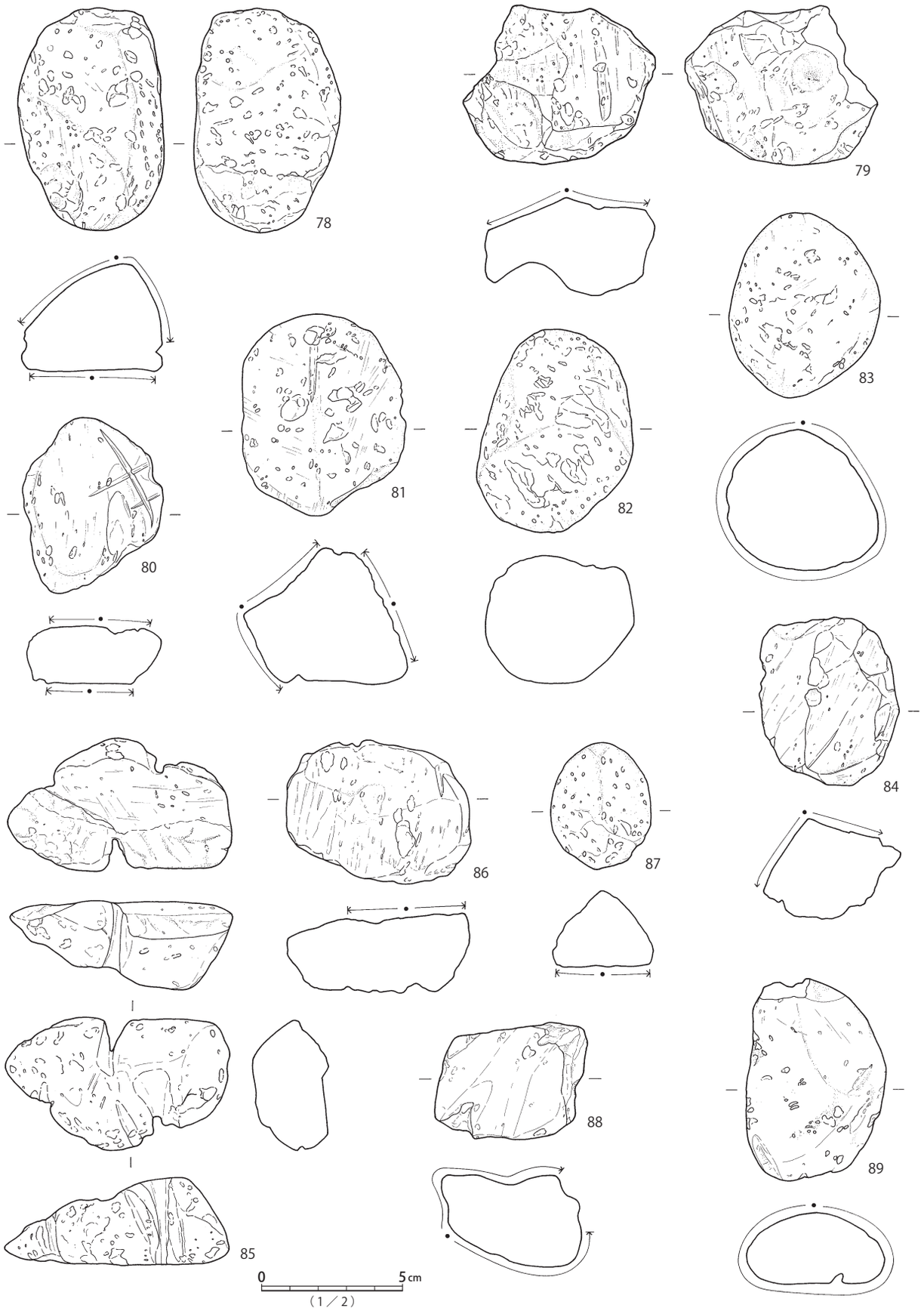
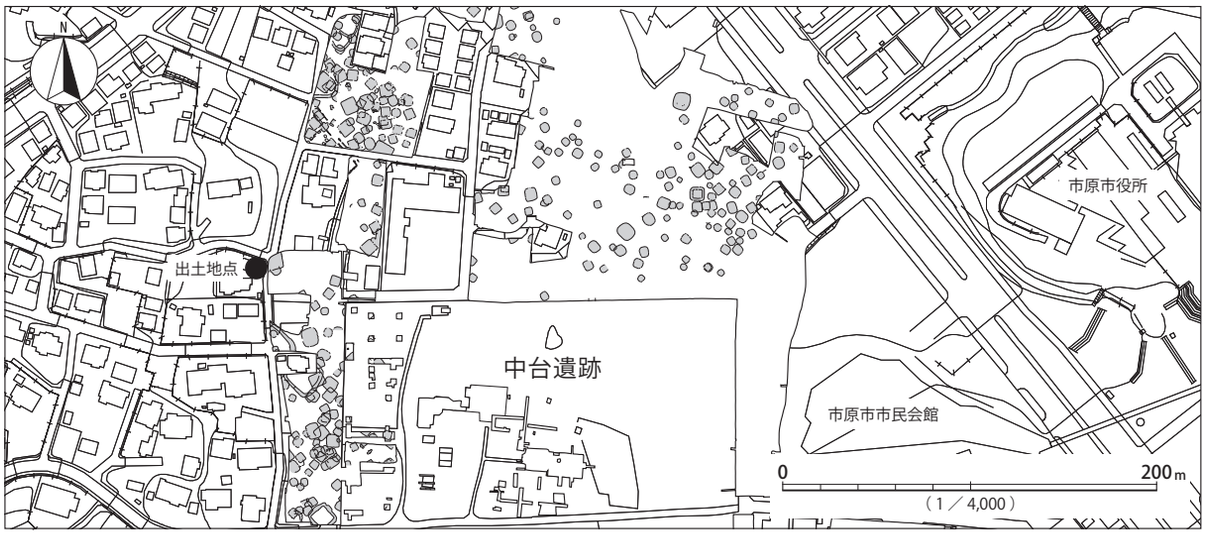


Fig.453　遺構外出土石器(12)



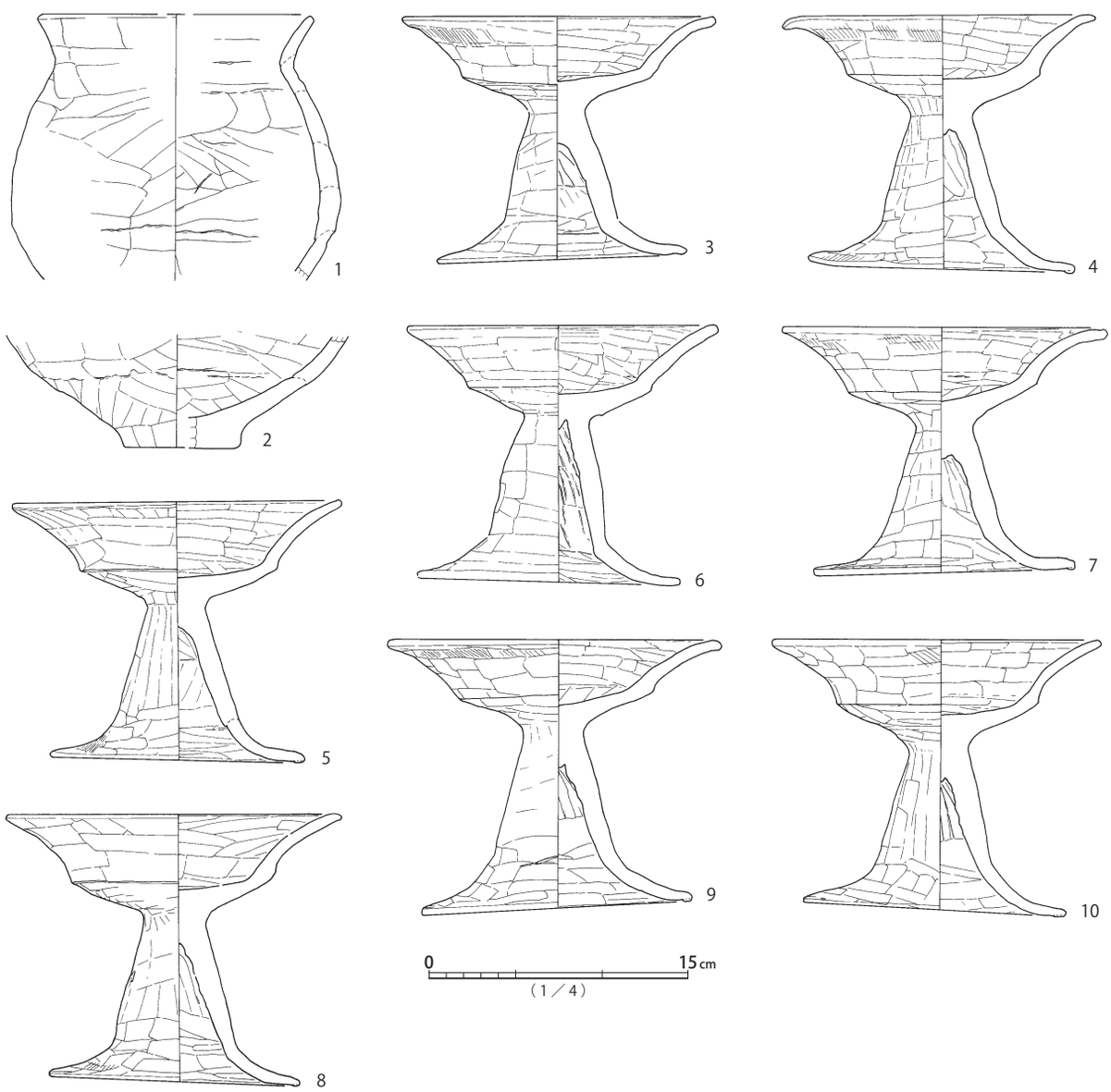


Fig.454　調査区外出土遺物と出土地点

第４章　貝層サンプルの分析

第１節　貝層の概要と分析方法

中台遺跡を含む上総国分僧寺跡からは、遺構覆土中などから大小の貝層ブロックが見つかっている。帰属時期が不明なものを含めると、その数は133ヶ所に及び、まとまりごとに全量が一括採取されている。これらの貝層サンプルは、10・4・1mmの各メッシュ寸法の試験用フルイを用いて、水洗選別作業を実施している。

水洗選別を行った貝層のうち、中台遺跡の範疇にあたる上総国分僧寺創建直前段階以前（縄文時代～古墳時代）に形成されたものは20ヶ所あるが、採取されたサンプル量があまりに少ないものは除外し、13ヶ所について分析を行った（Tab.14）。分析対象はすべて遺構内から採取された貝層で、遺構種ごとの内訳は、土坑1、竪穴建物12、地区ごとの内訳は北辺部2、西辺部10、東南部1、時期ごとの内訳は縄文時代早期後半1、弥生時代後期後半から古墳時代前期12である。

分析作業により抽出された資料には貝類と種子があり、陸産微小貝類については、大まかな分類の同定にとどめている。同定は、現生ならびに貝塚出土標本との比較により行った。貝類の集計は、腹足綱（巻貝）では軸部を完存するもの、二枚貝綱では殻頂部の残存するものを対象とした。二枚貝綱は左右殻の出土数量の多い方をもって出土個体数（最小個体数）とした。また、ハマグリ・シオフキ・アサリの3種についてはすべて殻長・殻高の計測を行った。なお、1点のみ検出された種子は炭化米で、西辺部の竪穴0282号から検出された。

第２節　分析結果

分析の結果、軟体動物の腹足綱５種、二枚貝綱９種の計14種（陸産微小貝類を除く）が同定された（Tab.15）。

Fig.455は、貝類組成をグラフで表示したものである。遺跡全体ではイボキサゴが94.8%を占め、イボキサゴ採集時の混獲と考えられるウミニナ・アラムシロを加えると96.6%に達する。これを除いた組成ではハマグリが57.2%と多く、シオフキの19.5%、アサリの15.1%が続き、これら以外に採集された貝類種はごく少量である。ほとんどが内湾砂泥底の干潟に生息する種で構成される。

縄文時代の貝層は、東南部の土坑0986号で唯一検出され、帰属時期は明確でないものの、周辺の炉穴群と同時期の早期後半と思われる。ハマグリが全体の97.8%を占め、これにシオフキとオキシジミがごく少量混じる。ハマグリを狙って採集・利用された貝層と考えられるが、現在整理作業を進めている天神台遺跡の早期貝層においても、イボキサゴはほとんど含まれないことから、国分寺台遺跡群周辺の貝類生息環境に起因する可能性も考えられる。

弥生時代の貝層は、後期後半のものが３ヶ所、終末期のものは、時期が明確でないが３ヶ所検出されている。いずれもごく小規模な貝層である。両時期を通じてイボキサゴが圧倒的な主体種で、これにウミニナ・アラムシロを加えると、後期後半の貝層では99.9%、終末期の貝層でも98.5%を占める。これらを除いた二枚貝は、両時期をあわせても、ハマグリが10点、アサリが５点、シオフキが４点、サルボウ・バカガイが各１点しか含まれない。

古墳時代の貝層は前期前葉を主体とし、帰属時期が明確でないものを含めて６ヶ所検出されてい

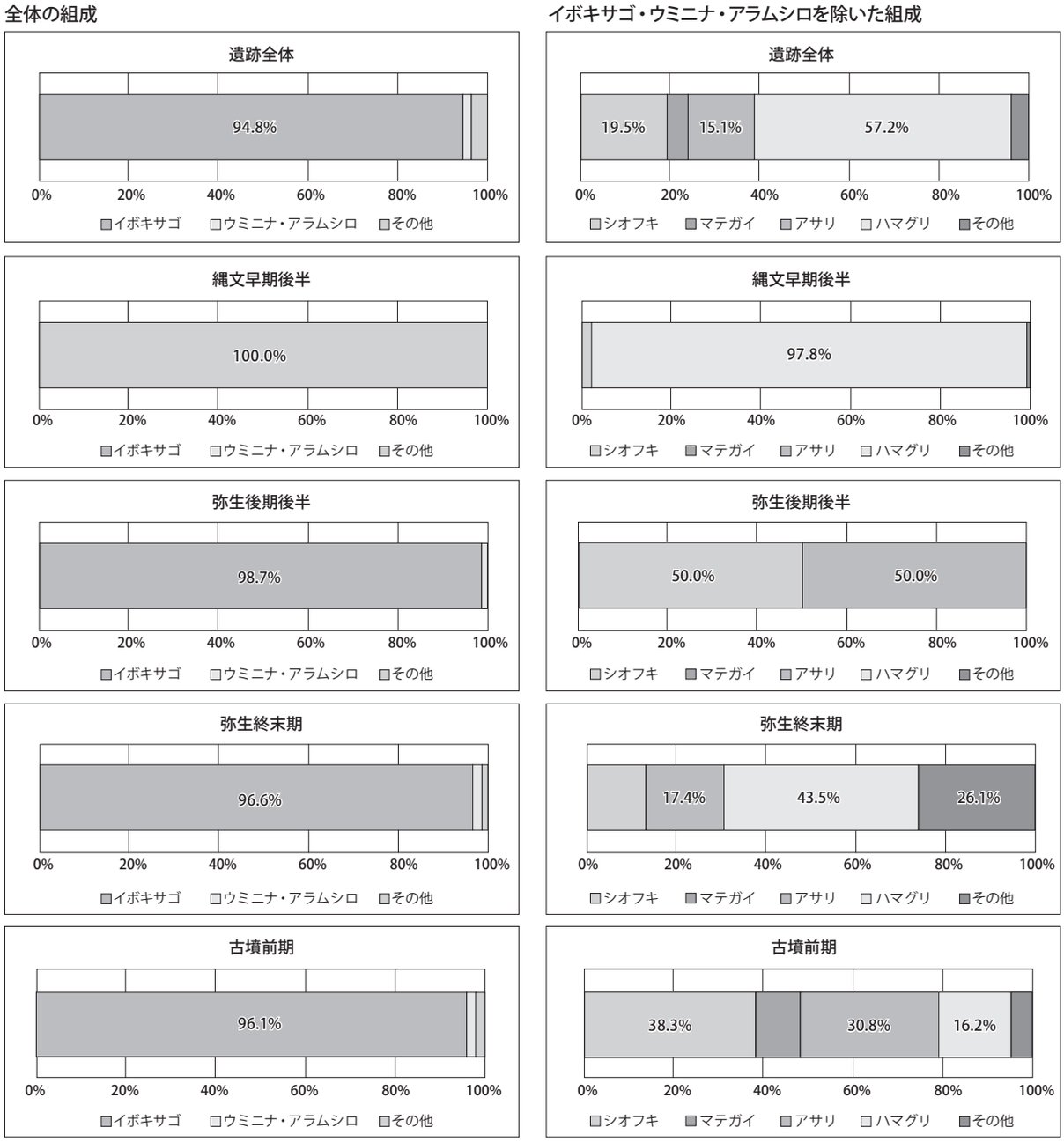


Fig.455　時期別貝類組成

る。竪穴0213・0226号など、比較的まとまった規模の貝層が形成されている。直前の弥生時代終末期と同様にイボキサゴが主体種となり、これにウミニナ・アラムシロを加えると全体の98.0%を占める。これを除いた組成では、シオフキが38.3%、アサリが30.8%、ハマグリが16.2%となる。竪穴0213・0226号ではシオフキとハマグリ、竪穴0239・0243号ではシオフキとアサリによる組み合わせとなっており、いずれにも含まれるシオフキの利用増加傾向が、この時期から認められる。いっぽう、竪穴0282号ではマテガイの割合が大きく、特徴的である。市内の貝塚ではマテガイが集中する貝層がまれにあり、この種を狙って採集した可能性が高い。

Fig.456は、主要二枚貝類の殻長計測値を時期別に集計し、2.5mm階級幅のヒストグラムで表示

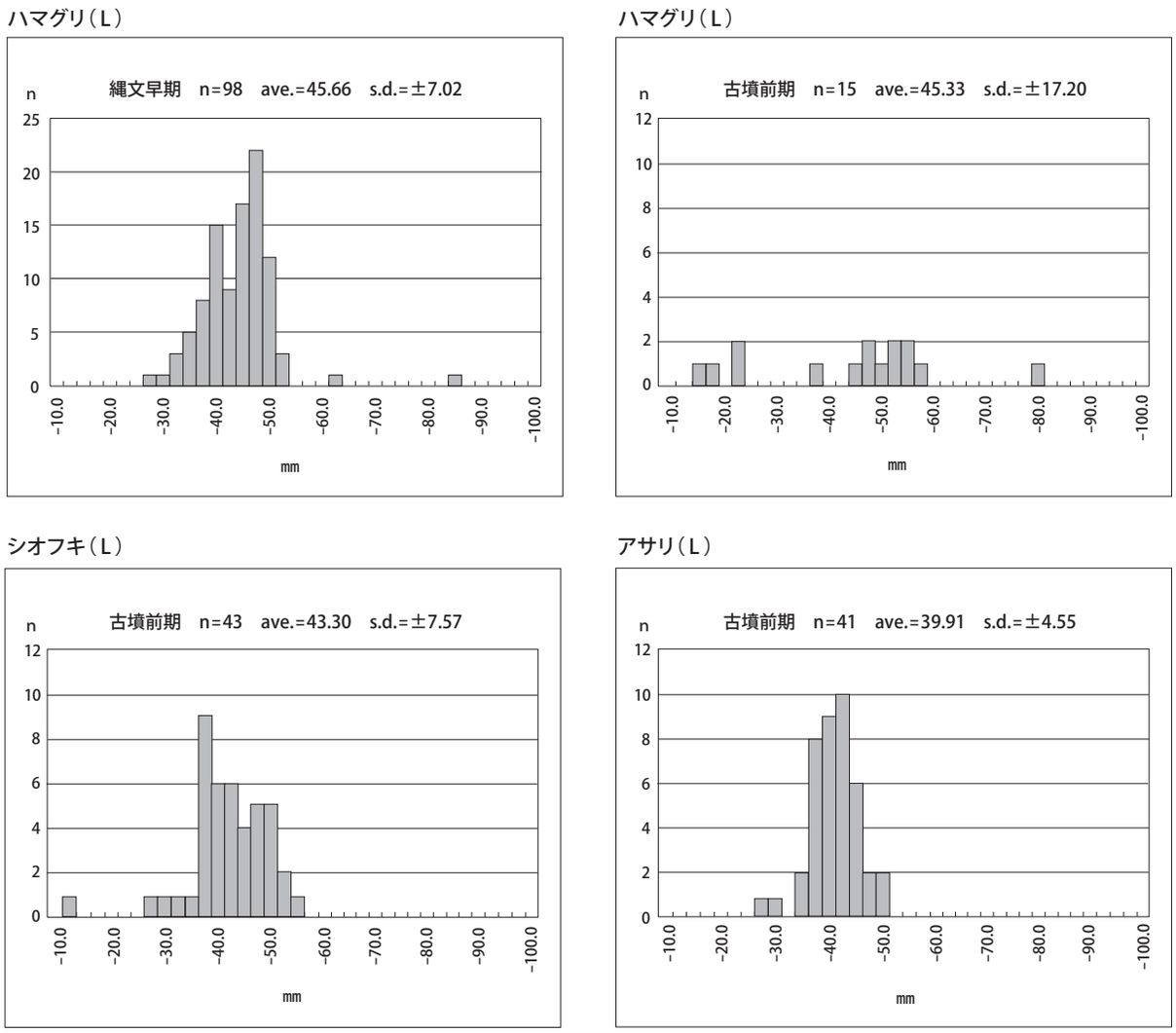


Fig.456　主要貝類殻長分布

したものである。縄文時代早期は、ハマグリのみ図化対象となった。最小個体数263のうち98点が計測され、45.0～47.5mm階級幅に大きなピークをもち、平均値は45.66mmであった。計測値が80mmを超える個体も認められるが、50mmを境に試料数が急激に減少している。

古墳時代前期は、ハマグリ・シオフキ・アサリの3種を図化対象としたが、ハマグリの試料数はごく少ない。最小個体数41のうち15点が計測された。50mm前後にまとまりをもつが、ばらつきが大きい。シオフキは最小個体数97のうち43点が計測され、35～50mmの階級幅にピークをもつ。平均値は43.30mmである。アサリは最小個体数78のうち41点が計測され、35～45mmの階級幅に大きなピークをもつ。平均値は39.91mmであった。シオフキ・アサリともに、この範囲から外れた大きさの試料数は少なく、似通った大きさの個体が多い。

微小貝類はいずれも陸産貝類で、大きく4つの分類群に分けられた（Tab.17）。このうち最も多いのはオカチョウジガイ類で、同定資料数42のうち27点を占め、これにヒメコハクガイ類とベッコウ類が次ぐ。黒住（1994）の分類によれば、ゴマガイ・オカチョウジガイ類・ベッコウ類は林縁生息種、ヒメコハクガイ類は開放地生息種とされており、周辺環境を想定する指標となりうる。

第5章　総　括

第1節　縄文時代早期の遺構分布

中台遺跡からは早期後半の炉穴群が64基検出された。西辺部の炉穴0270号のみ茅山下層式期の可能性があるが、基本的に条痕文土器前半期の野島式期と鵜ヶ島台式期で完結する。

炉穴の分布は、西辺部北西隅の谷頭部と神門3・4号墳に挟まれた小支谷谷頭部の大きく2地点に分けられる。Fig.457は、帰属時期が明確な炉穴と出土遺物の分布状況を示したものであるが、野島式期は養老川を臨む西側台地縁辺部に分布するのに対し、鵜ヶ島台式期は遺跡南側の谷に面した台地縁辺部のやや東寄りに分布しており、若干の移動の可能性が考えられる。

国分寺台遺跡群では、本遺跡の北東に位置する坊作遺跡（小出2002）から14基の炉穴群が検出され、田戸上層式期を中心に、田戸下層式から野島式前半期まで継続する。谷をはさんだ南側台地上に位置する東間部多遺跡（西田他1974）からは1棟の竪穴建物と79基の炉穴群が検出され、野島式期にはじまり鵜ヶ島台式期から茅山式期を主体とする。また、同じく南側台地上の天神台遺跡からは、鵜ヶ島台式期にはじまり茅山式期を主体とする248基の炉穴群と長台形のいわゆるロングハウスを含む17棟の竪穴建物が検出され、貝塚も形成されるなど、当該期の一大拠点集落となっている。

第2節　竪穴建物の規模と平面形態

中台遺跡からは350棟の竪穴建物が検出された。これらの遺構については、床面積の計測と平面形態の分類を行っていることから、各時期の様相を検討してみたい。集計に用いた計測値及び形態分類データは、Tab.4による。

（1）床面積

計測は、40分の1スケールの遺構平面図を用いて、デジタルプラニメーターにより行った。面積の計測は、遺構上場（確認面）と遺構下場（壁周溝は含まない）の両方で行ったが、ここでは下場面積（床面積）のみ扱う。推定値を含め、計測対象となった遺構数は230棟である。

遺跡全体の最小値は竪穴0059号の5.0㎡、最大値は竪穴0390号の79.6㎡（推定値）、平均値は18.6㎡であった。Fig.460左側は、5㎡階級幅でヒストグラム表示を行ったものである。10～15㎡の階級幅で大きなピークをもち、70棟が該当し、全体の約30%を占める。また、5～25㎡の階級幅では188棟が該当し、全体の81.7%に達する。いっぽう25㎡を超える竪穴建物は大きく数を減らし、35～50㎡の範囲でごく弱いピークが認められるものの、これを超える床面積の竪穴建物はさらに少ない。この結果から、おおむね10㎡以下が小型、10～30㎡が中型、30～50㎡が中大型、50㎡以上が大型に分類でき、7.5㎡・15㎡・42.5㎡・70㎡がそれぞれの型の中央値となる。

次に時期別の状況を見ていくことにする。床面積が計測された竪穴建物のうち、帰属時期が判明したものは、やや不確実なものを含めて222棟である。

弥生時代後期後半（中～後葉）の山田橋式期は、北辺部を中心に80棟が検出され、最小値は竪穴0064号の5.1㎡、最大値は竪穴1367号の53.7㎡、平均値は14.9㎡であった。5～10・10～15㎡の2つの階級幅で大きなピークをもち、これだけで53棟（66.3%）を占めることから、これが当該期の一般的な竪穴建物の規模と捉えることができよう。また、図示していないが、2.5㎡階級幅で再集計

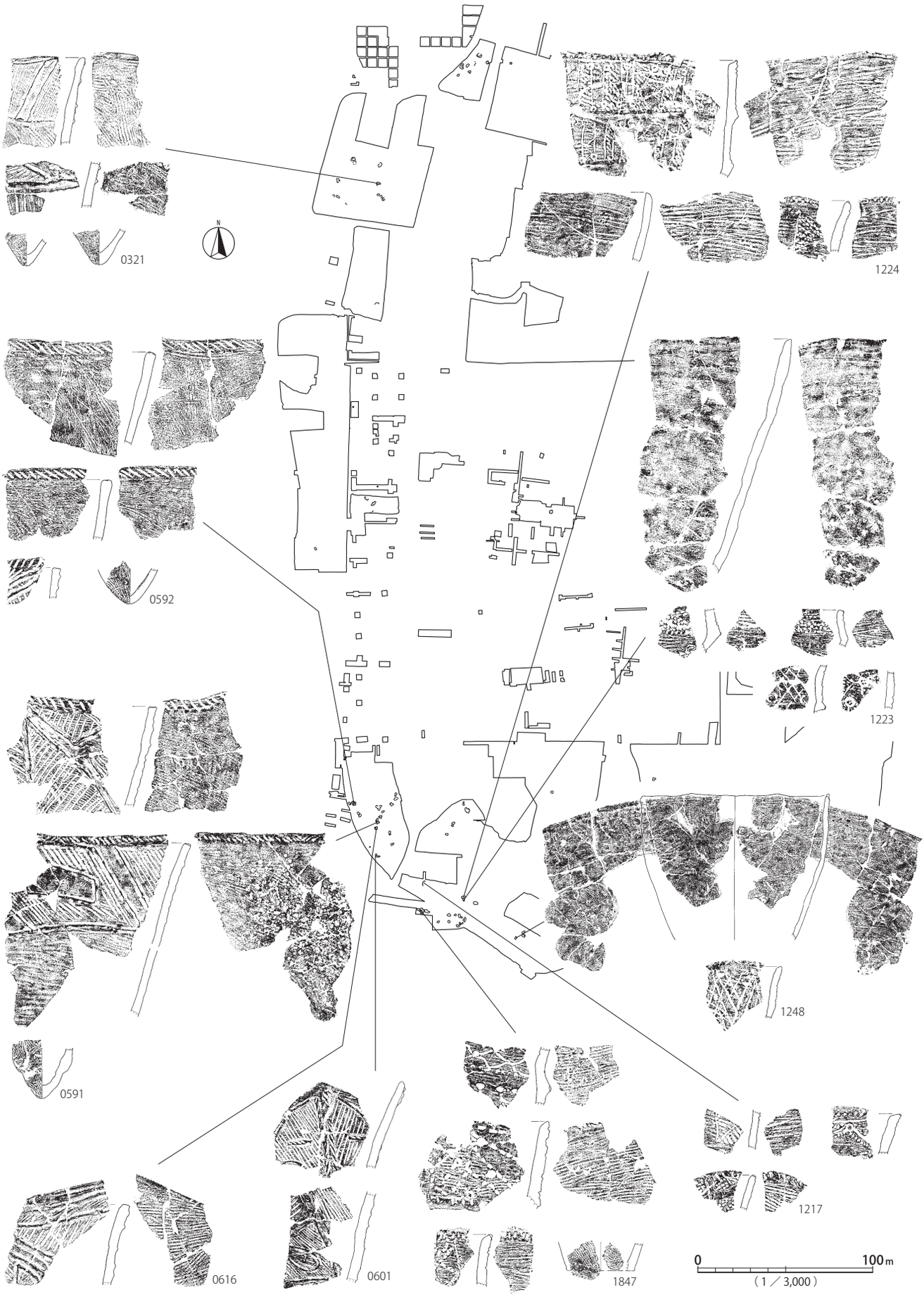


Fig.457　縄文 炉穴分布状況

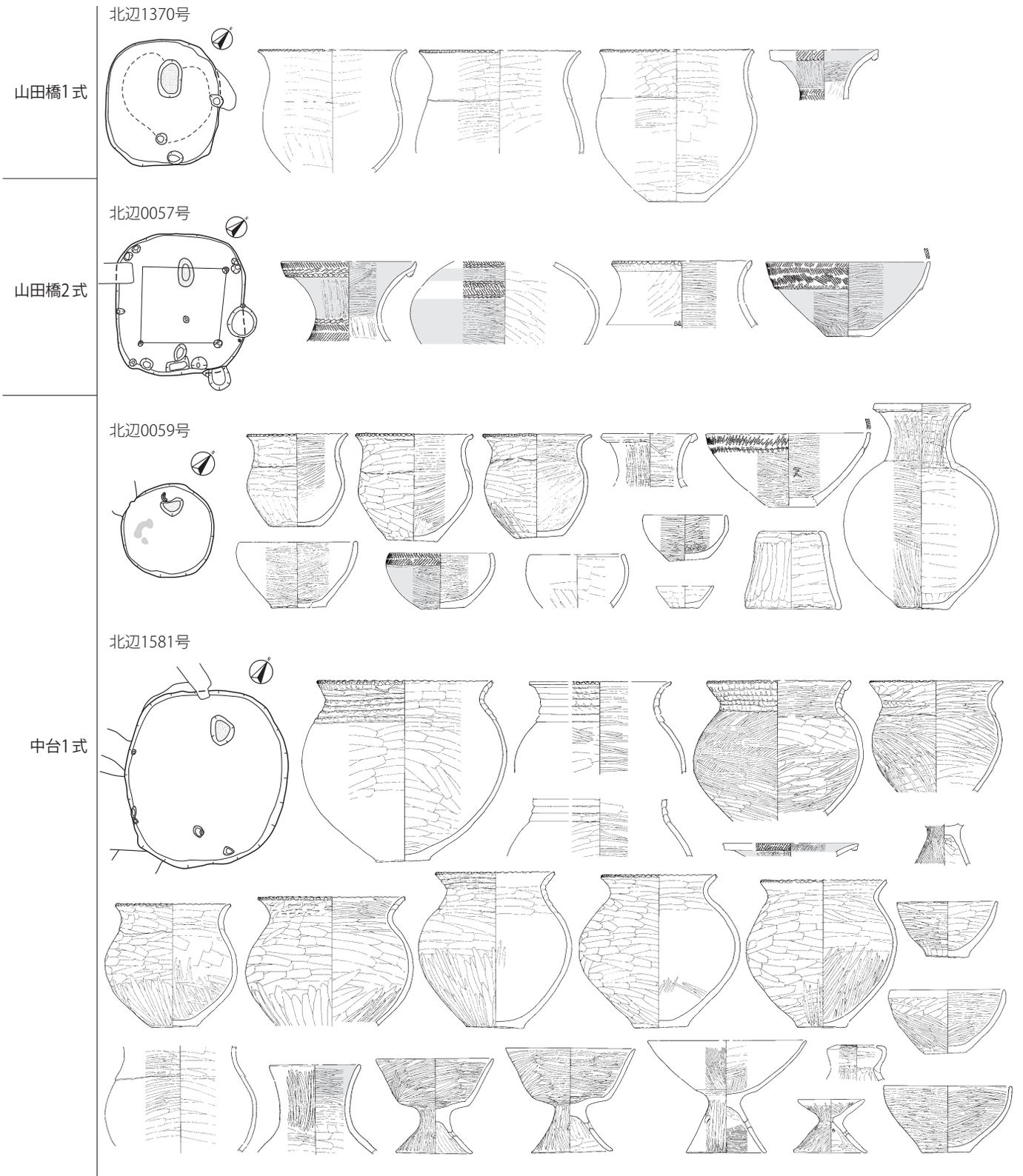


Fig.458　弥生後期～古墳前期の竪穴形態と出土土器(1)

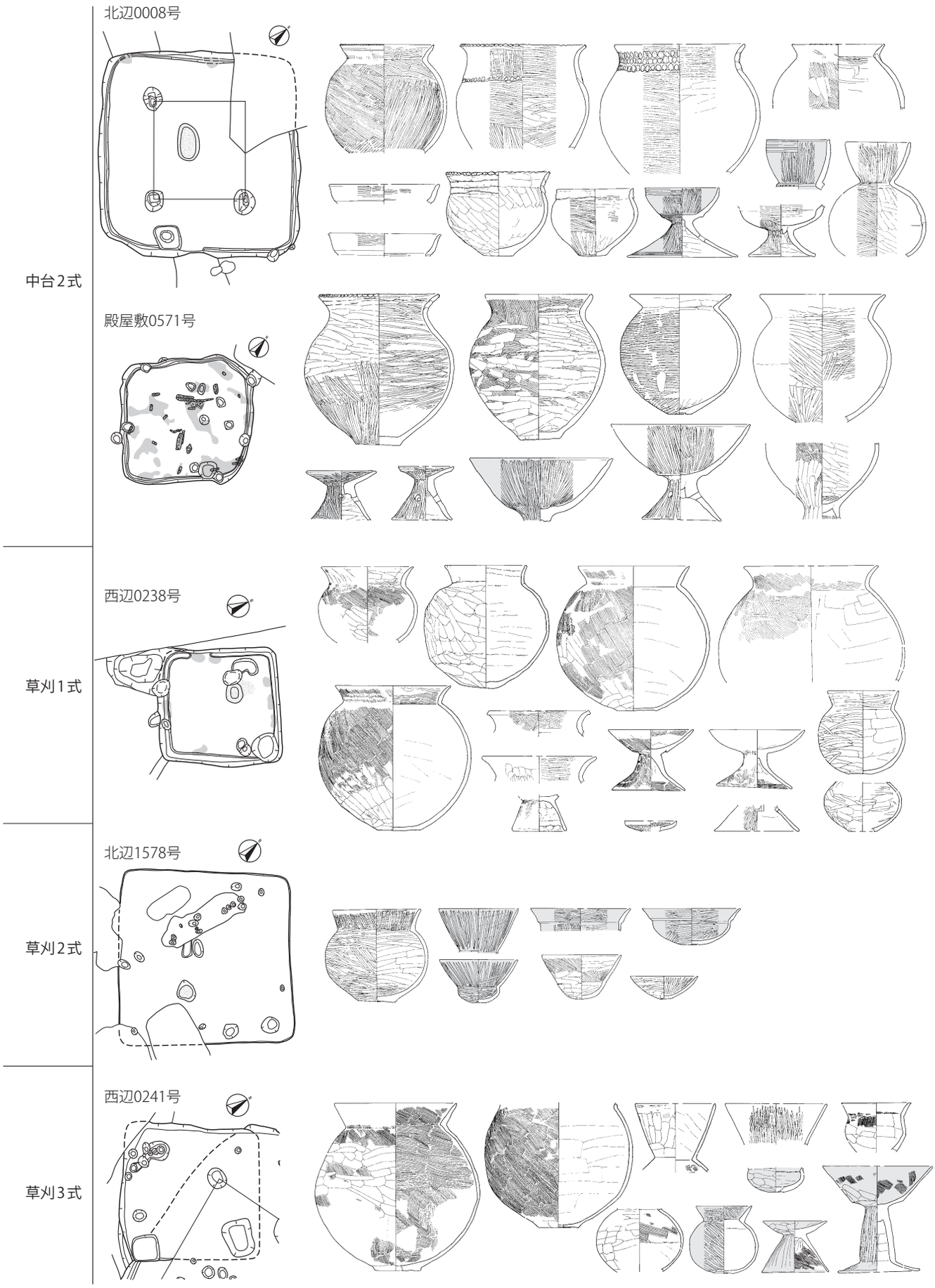


Fig.459　弥生後期～古墳前期の竪穴形態と出土土器(2)

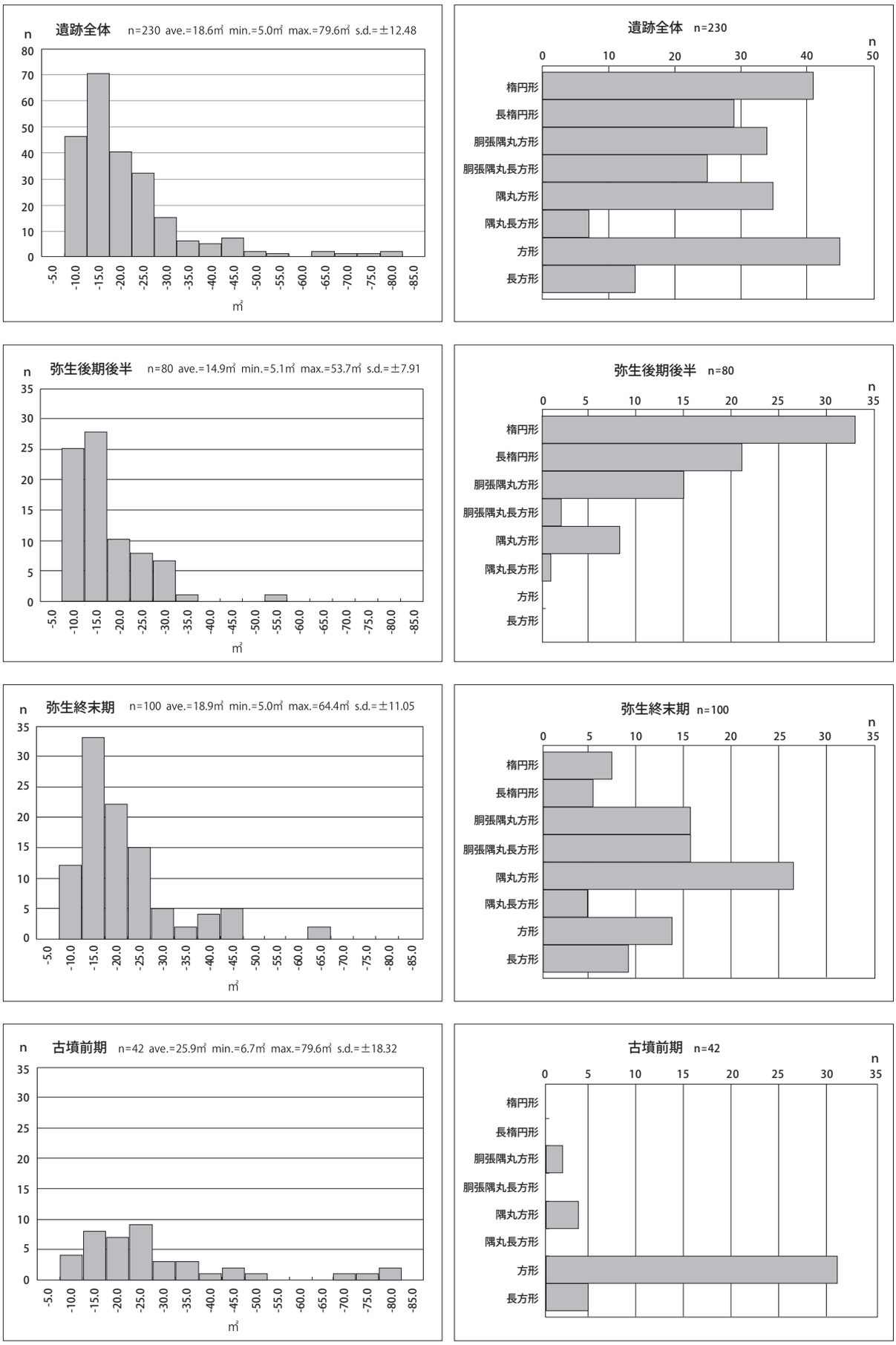


Fig.460　時期別遺構規模・平面形態分布

したところ、7.5～10㎡階級幅が19棟（23.8%）と最も多い。全体に小型の建物が多く、中型を含めた30㎡以下のもので78棟（97.5%）に達する。いっぽう、これを超える規模の竪穴建物はわずか2棟しかなく、この時期の最も大型の建物である竪穴1367号の、他遺構に対する際だった優位性がうかがわれる。

弥生時代終末期の中台式期は、北辺部と西辺部を中心に100棟が検出され、最小値は竪穴0059号の5.0㎡、最大値は竪穴0414号の64.4㎡（推定値）、平均値は18.9㎡で、全体としてはやや大型化する傾向が認められた。10～15㎡階級幅が33棟と最も多く、おおむね15㎡前後が一般的な規模と捉えられよう。40～45㎡階級幅でもごく小さなピークが認められ、中大型に分類した竪穴建物がこの時期から認められるようになる。いっぽう、離れ小島型で60～65㎡階級幅の大型建物が2棟（竪穴0106・0414号）あり、他の遺構とは明らかに区別される存在といえる。このうち竪穴0106号は終末期後半の中台2式期、竪穴0414号は終末期前半の中台1式期の所産と考えられるが、いずれも当該期の中核的な遺構と捉えられる。0106号は胴の張る崩れた形態となるが、隅丸横長方形で、炉を中央、長軸辺壁際に貯蔵穴を設けるなど、北陸地方と類似する平面形態をとり、出土遺物も北陸南西部系の有段口縁甕を多数含む。0414号は、胴部焼成後穿孔の赤彩壺やミニチュア土器、土製勾玉などの祭祀的色合いを示す遺物が出土している。

古墳時代前期の草刈式期は、西辺部北側を中心に42棟が検出され、最小値は竪穴0480号の6.7㎡（推定値）、最大値は竪穴0390号の79.6㎡（推定値）、平均値は25.9㎡である。これまで多かった10～15㎡階級幅に加えて、20～25㎡階級幅にピークをもつのが特徴である。後述する竪穴平面形態の方形化も床面積拡大に影響しているものと思われるが、中型が2分された可能性も考えられる。25㎡以上の規模を測る遺構は少なく、緩やかに減少する。いっぽう、大型は65～80㎡階級幅に分布し、全体的な大型化傾向がうかがわれる。

（2）平面形態

平面形態の分類は、「楕円形・胴張隅丸方形・隅丸方形・方形」の4区分により行った。また、主軸長が副軸長に対して110%以上ないし90%以下となるものは、それぞれの区分に「長」を加え、全部で8分類とした。ただし、壁や隅部の角度、曲線半径などを数値化したものではないため、感覚的な要素が強く、分類に迷うものも存在する。

Fig.460右側は、形態分類ごとの遺構数を時期別に集計したものである。弥生時代後期後半（中～後葉）の山田橋式期は、80棟のうち楕円形33、長楕円形21、胴張隅丸方形15、胴張隅丸長方形2で、楕円形タイプだけで全体の67.5%、これに胴張隅丸方形タイプを加えると全体の88.8%に達する。なお、ここでは図示していないが、山田橋1式期（全31棟）における楕円形タイプと胴張隅丸方形の内訳は、それぞれ22棟（70.9%）と7棟（22.6%）となるのに対し、山田橋2式期（全20棟）では、それぞれ8棟（40%）と12棟（60%）に逆転しており、大枠では円形を基調としながらも、方形気味に形態が変化しつつある傾向が認められた。

弥生時代終末期の中台式期は、100棟のうち隅丸方形27、隅丸長方形5、胴張隅丸方形16、胴張隅丸長方形16で、隅丸方形タイプと胴張隅丸方形タイプとが拮抗する。また、後期後半段階には見られなかった方形タイプがあらわれ、かなりの割合を占めるようになる。なお、ここでは図示してい

ないが、中台式期のうち終末期前半の中台1式期（全28棟）における楕円形・胴張隅丸方形タイプと隅丸方形・方形タイプの内訳は、それぞれ23棟（82%）と5棟（18%）で、円形傾向が依然として残るのに対し、終末期後半の中台2式期（全60棟）では、それぞれ17棟（28.3%）と43棟（71.6%）に逆転しており、方形化の傾向がこの時期に大きく進んだ状況がうかがわれる。

古墳時代前期の草刈式期は、42棟のうち方形が31と圧倒的に多く、これに長方形の5を加えた方形タイプで、全体の85.7%に達する。隅丸方形は草刈1式期を中心に若干残るが、楕円形は全く認められなくなる。

大村（2010）によれば、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物の平面形態については、円形・楕円（小判）形＞隅丸胴張（長）方形＞隅丸（長）方形＞方形へと変化し、中台式期に各辺の直線化、長軸短軸長の一致が急速に進行し、草刈2式期に方形化が完成するとされる。Fig.458・459には各時期設定の基準となる竪穴建物の平面図と出土土器を示したが、今回の検討でもこの傾向を追認するかたちとなった。なお、各平面形態ともに大小さまざまな規模があり、遺構規模と形態との相関関係は認められなかった。

第3節　外来系土器の分布状況

中台遺跡からは、畿内系・北陸系を中心とする外来系土器が多量に出土している。このなかには複数の器種が含まれるが、ここでは出土数の多い甕形土器（一部壺・鉢を含む）に絞り、タタキ甕と受口系甕とに分けて、出土状況を示した（Fig.461・462）。なお、混入の可能性が高い土器についても、出土位置はそのままにしているため、遺構の時期と齟齬が生じている場合がある。また、受口系甕としたものには、S字甕や有段口縁甕を含めている。

以下、各系統の遺跡内における分布の傾向を見ていくことにしたい。

（1）タタキ甕

胴部外面にタタキ整形を施す畿内系は、遺跡全体で75点出土している。このうち器形復元されたのは30点で、胴部内面にヘラケズリを施すものは認められず、胴部外面のタタキ整形の上からハケ調整を施すものが14点含まれる。地区別では北辺部が11点、西辺部が54点、殿屋敷地区が2点、東南部が4点、南辺部が1点、セ116・117地区が2点、セ118地区（薬師堂地区）が1点で、圧倒的に西辺部からの出土が多く、西辺部のなかでも南側に集中する傾向が認められた。いっぽう、やや離れた北辺部東側にも分布が認められ、台付甕が含まれるという特徴がある。

タタキ甕は胴部破片資料の割合が多く、口縁部形態だけでは判別が困難なために個体数がつかみづらく、量的な比較は難しい。しかし、竪穴0332号2（Fig.296）のように、胴部外面のタタキや内面のケズリは認められないものの、大きく外反する口縁の端部を摘み上げて拡張面をつくるなど、庄内甕の影響を受けたと考えられる個体や、竪穴0571号4（Fig.387）のような、輪台状の底部も複数検出されていることから、畿内系の影響は強く感じられる。ただし、その影響は甕形土器に限定され、他器種を伴わないことから、集団単位での移住というイメージは想定しづらい。畿内地域との積極的な交流のなかで発生した、ひとつの要素と捉えておきたい。

波及元や第Ⅴ様式系タタキ甕の時期の特定は非常に難しいが、共伴する在地系土器との対比から、本遺跡におけるタタキ甕の波及は、中台2式期が中心と考えられる。おおむね庄内式中段階から新段

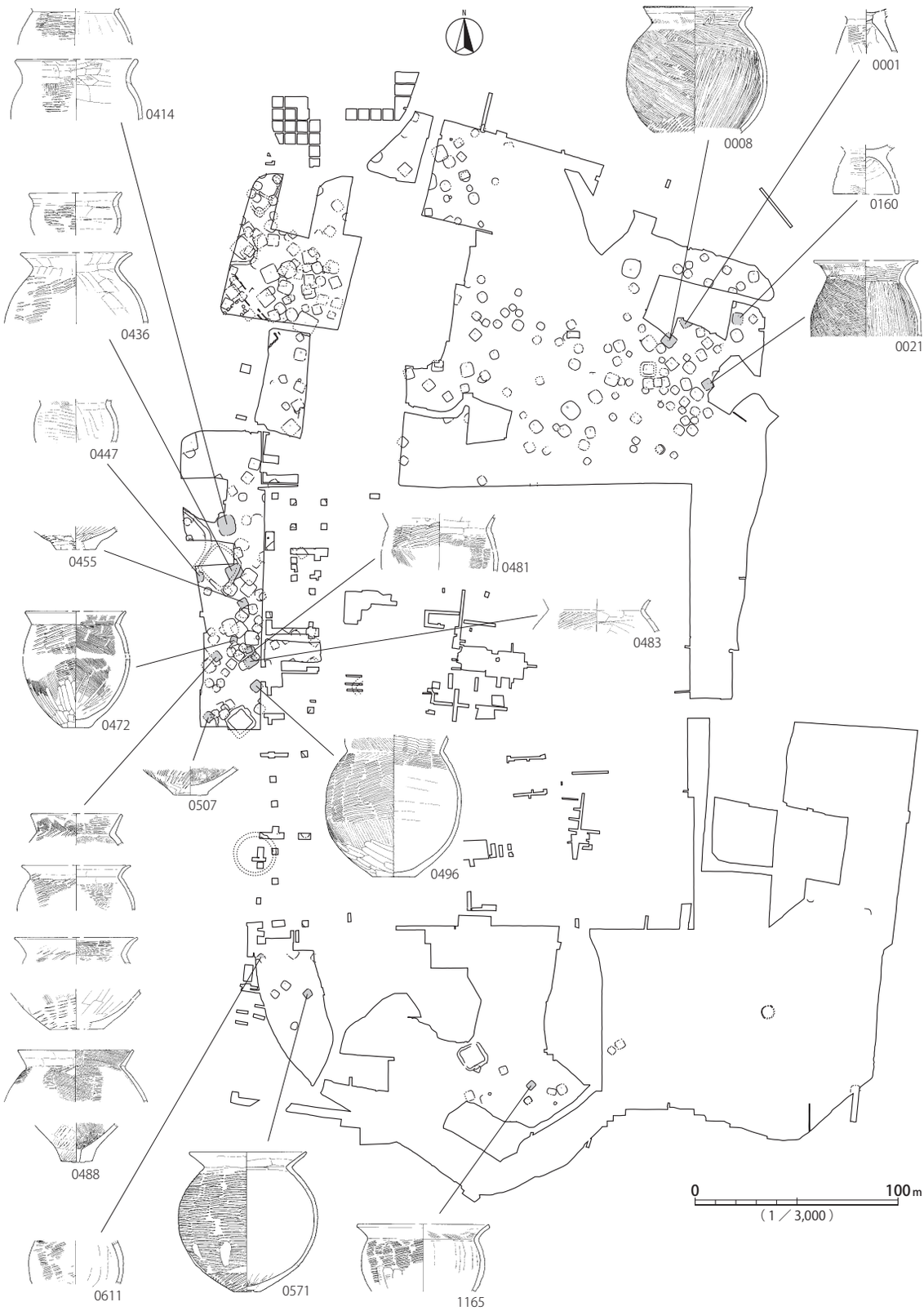


Fig.461　外来系土器分布状況（タタキ甕）

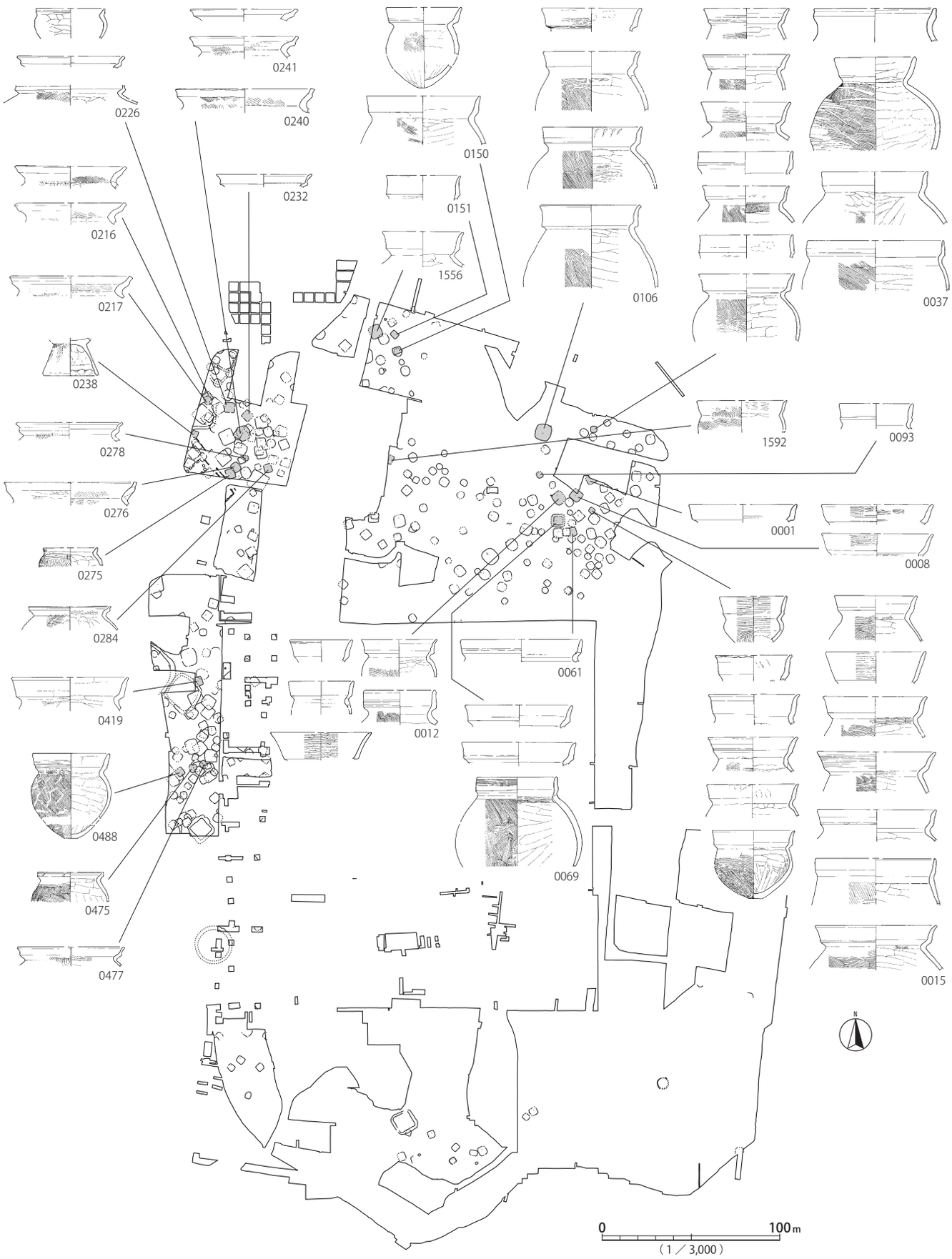


Fig.462　外来系土器分布状況(受口系甕)

階に併行するものと考えておきたい。

周辺では、谷を挟んだ南側台地上に位置する蛇谷遺跡や同一台地上東側の南中台遺跡から検出されており、特に蛇谷遺跡では、台地西側縁辺部の方形周溝墓に出土が集中する。

（2）有段口縁甕

口縁部形態が「5の字状」を呈す北陸南西部系は、遺跡全体で74点出土し、このうち61点が器形復元された。地区別では北辺部が69点、西辺部が4点、出土地不明が1点で、圧倒的に北辺部からの出土が多い。また、北辺部のなかでも東側に集中し、ひとつの遺構からまとまって出土する傾向が認められた。複合部に浅い条線や単沈線を残す個体は認められるが、複数条の擬凹線文として認識できるのは北辺部遺構外29（Fig.437）のみで、これも小片である。内面ヘラケズリを施す個体が、全体の3割程度含まれる。竪穴0069・0106・0150号のように複合部が直立気味になるものと、竪穴0015・0037号のように複合部が外傾し、頸部内面にケズリ残し面やハケ調整を残すものとがあり、ある程度の時間幅が想定される。前者については、南中台遺跡と時期的にほぼ共通するものと思われる。いっぽう、口頸部がくの字状に外反し、端部に面取りを施す北陸北東部系が、竪穴0012・0015号から出土しているが、出土量はごく少ない。

本遺跡における有段口縁甕の波及は、中台1式後半期を含む可能性があるが、中心は中台2式期段階と考えられる。大村は「中台遺跡15・37号住居跡例については、漆6群、長泉寺1期を含む」（大村2009）とする。いっぽう田嶋は、変容により時期特定が難しいとしながらも、竪穴0015・0037号出土遺物は漆町5群、竪穴0008号出土遺物は漆町6群まで下る可能性が高い（田嶋2011）としており、おおむね漆町5群から6群に併行するものと考えておきたい。

周辺では、近接する南中台遺跡から検出されており、SI12・13からはまとまって出土している。特にSI13は、各器種がセットの状態で出土しているほか、隅丸長方形（横長）の平面形態を呈し、床面積70.86㎡を測る大型建物で、蓋受け状の段部をもつ貯蔵穴を長辺壁際に設置する北陸地方の竪穴形態に酷似する（大村2010）ことから、「直接的に人々が移民してきたことをしめす有力な証拠」（比田井1987）であり、「集落内最大規模であることから、首長居宅と考えることができる」（大村2009）とする。本遺跡では、やや崩れた形態に変容しているものの、竪穴0106号が同様の特徴をもつものと考えられる。特に0106号は、同時期の遺構で最大級の規模を測ることから、北辺部集落の中核的な建物と捉えられ、南中台遺跡SI13同様の性格をもつと考えられる。

（3）S字状口縁甕

口縁部形態がS字状を呈す東海西部系は、遺跡全体で32点出土しているが、同一の遺構・グリッドから出土している破片資料には、同一個体に由来する資料も多く、実数はそれほど多くはない。このうち18点が器形復元され、8点は台部である。地区別では北辺部が7点、西辺部が25点で、西辺部からの出土が多い。また、西辺部のなかでも北側に集中する傾向が認められた。竪穴0275号4（Fig.281）や竪穴0278号1（Fig.285）など、色調が黄橙色からにぶい黄褐色を呈し、胎土から搬入品の可能性が考えられる資料を5点含む。A類（新段階）も認められるが、屈曲する口縁の端部を面取りするB類が最も多く、一部C類（古段階）を含む可能性がある。

本遺跡におけるS字甕の波及は、大きく中台1式期と草刈1式期を中心とする2時期に分かれるものと思われ、おおむね前者は廻間I式後半、後者は廻間II式後半～III式1段階に相当するものと考えられる。

周辺では、西辺部北西隅の谷を挟んだ北側に位置する長平台遺跡10号竪穴住居跡からS字甕A類が2点のほか、くの字甕、パレススタイル壺（搬入品）が出土しており、これらは廻間I式期後半と併行し、「おおむね中台1式の上限を画す」（大村2009）とされる。この遺構について大村は、同時期における平面形態と炉・貯蔵穴位置の検討から、出土土器とあわせて、東海地方西部からの移住者の存在を想定する（大村2010）。なお、長平台遺跡288・289号方形周溝墓からは、搬入品に加えて在地産模倣パレススタイル壺の出土が知られており、288号は廻間I式期後半に位置付けられ、神門5号墳に先行する（小橋2006）。このほかに、蛇谷遺跡71・79号住居跡からはB類が出土しており、79号出土S字甕については、伴出土器から中台2−2式新相に比定されている（大村2009）。

（4）受口状口縁甕

口縁部形態が受口状を呈すもので、遺跡全体から12点出土し、このうち11点が器形復元された。北辺部の1点以外はすべて西辺部からの出土で、西辺部のなかでも北側に集中し、S字状口縁甕と分布域が重複する傾向が認められる。竪穴0037号8（Fig.102）は、丸く屈曲する頸部に直立する口縁の端部を面取りすることから近江系と思われるが、主体となるのは、竪穴0216号3・4（Fig.224）のように、丸く屈曲する頸部から斜め上方に延びる口縁の端部を面取りするタイプで、頸部内面に面をもち、ハケ調整を加えるものが多い。これらの近江系とは異なる特徴をもつ受口系甕には、尾張（美濃）と伊勢・三河とがあり、尾張（美濃）系は廻間I式前半、伊勢・三河系は廻間I式後半からII式前半に関東地方へ波及した（比田井2000）とされる。濃尾平野で見られる受口系甕は、廻間I式期前半に盛行し、I式期内で終焉する（赤塚1990）ことから、本遺跡から出土した受口状口縁甕は尾張（美濃）以外に出自を求めるのが妥当であろう。

比田井氏の教示によれば、近江の受口甕やS字甕と異なり、明確な決まりごとをもって製作されたものでないことから分類しづらいものの、いずれも三河系ないし伊勢・三河系のものとされた。これらの受口甕は、比田井編年古墳前期I段階古相を中心とし、前述のとおり廻間I式後半からII式前半とされることから、中台1式から2式前半期に相当するものと考えられ、長平台遺跡と時期的に接点をもつと思われる。なお比田井は、伊勢・三河系の受口状口縁甕は単独ではなく、タタキ甕に代表される畿内系土器の東進と関連して関東へやってきたとし、尾張（美濃）と対峙する北陸・近江・畿内・伊賀・伊勢・三河といった多国籍なまとまりが進出した（比田井2000）とする。

第4節　弥生時代後期から古墳時代前期の遺構変遷

遺構の変遷は、弥生時代後期後半（山田橋式期）・弥生時代終末期（中台式期）・古墳時代前期（草刈式期）の3期区分によるが、より詳細な時期決定を行った遺構については、スクリーントーンによる表示を行った。なお、文中で触れる周辺遺跡との位置関係については、Fig.466を参照されたい。

（1）弥生時代後期後半

縄文時代早期以降、中台遺跡に再び集落が形成されるのがこの時期である。



Fig.463　中台遺跡の変遷 弥生後期

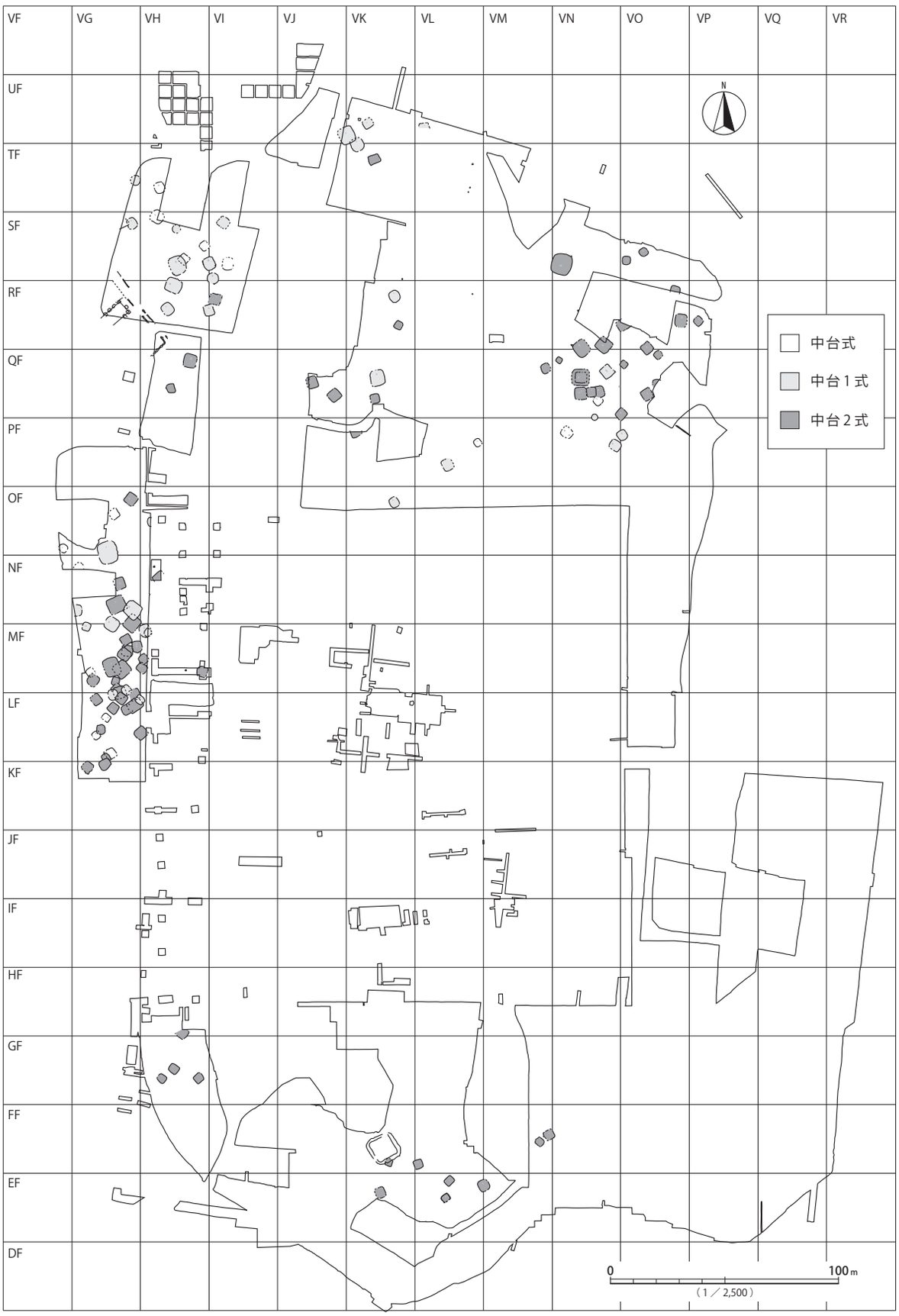


Fig.464　中台遺跡の変遷 弥生終末期

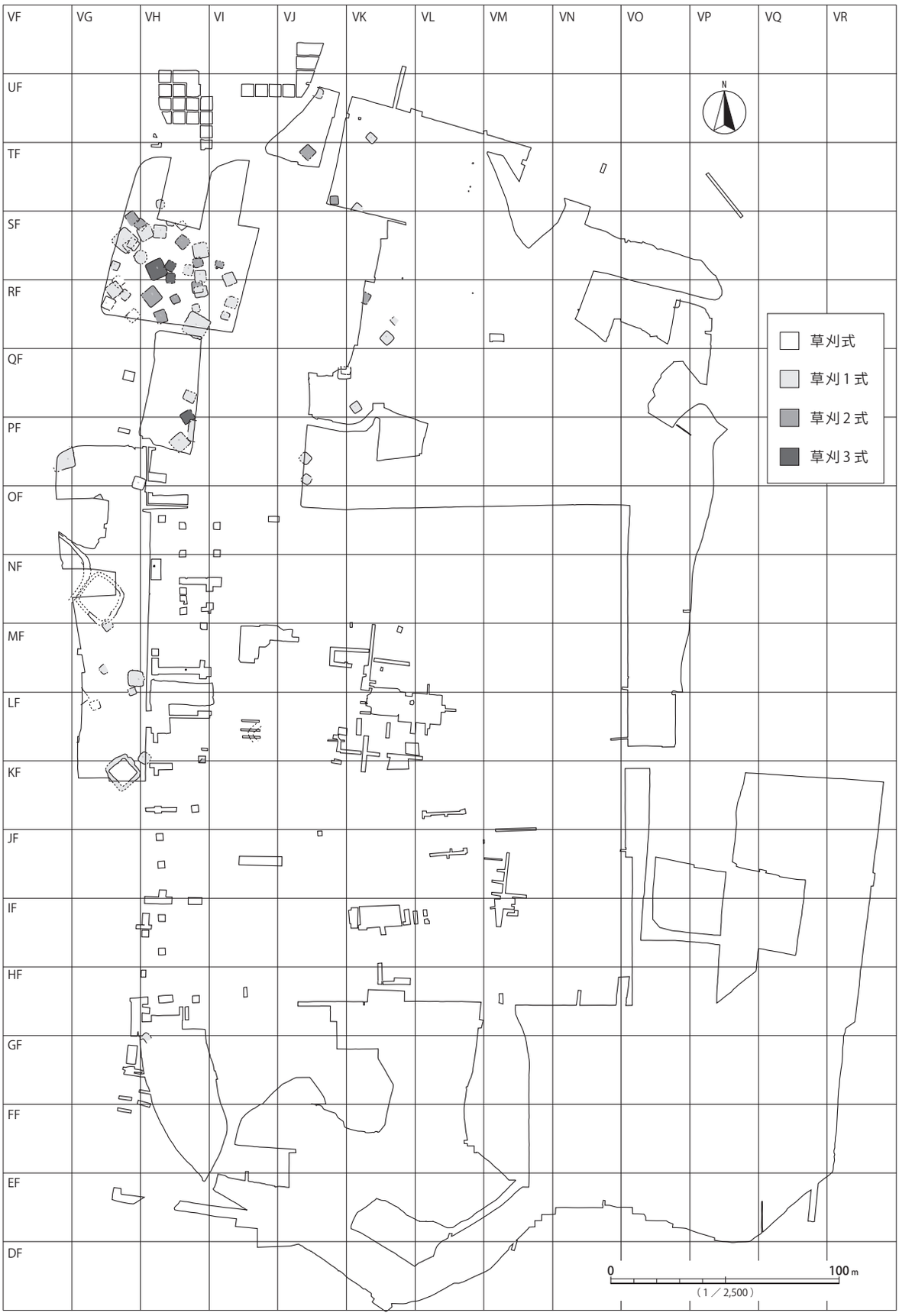


Fig.465　中台遺跡の変遷 古墳前期

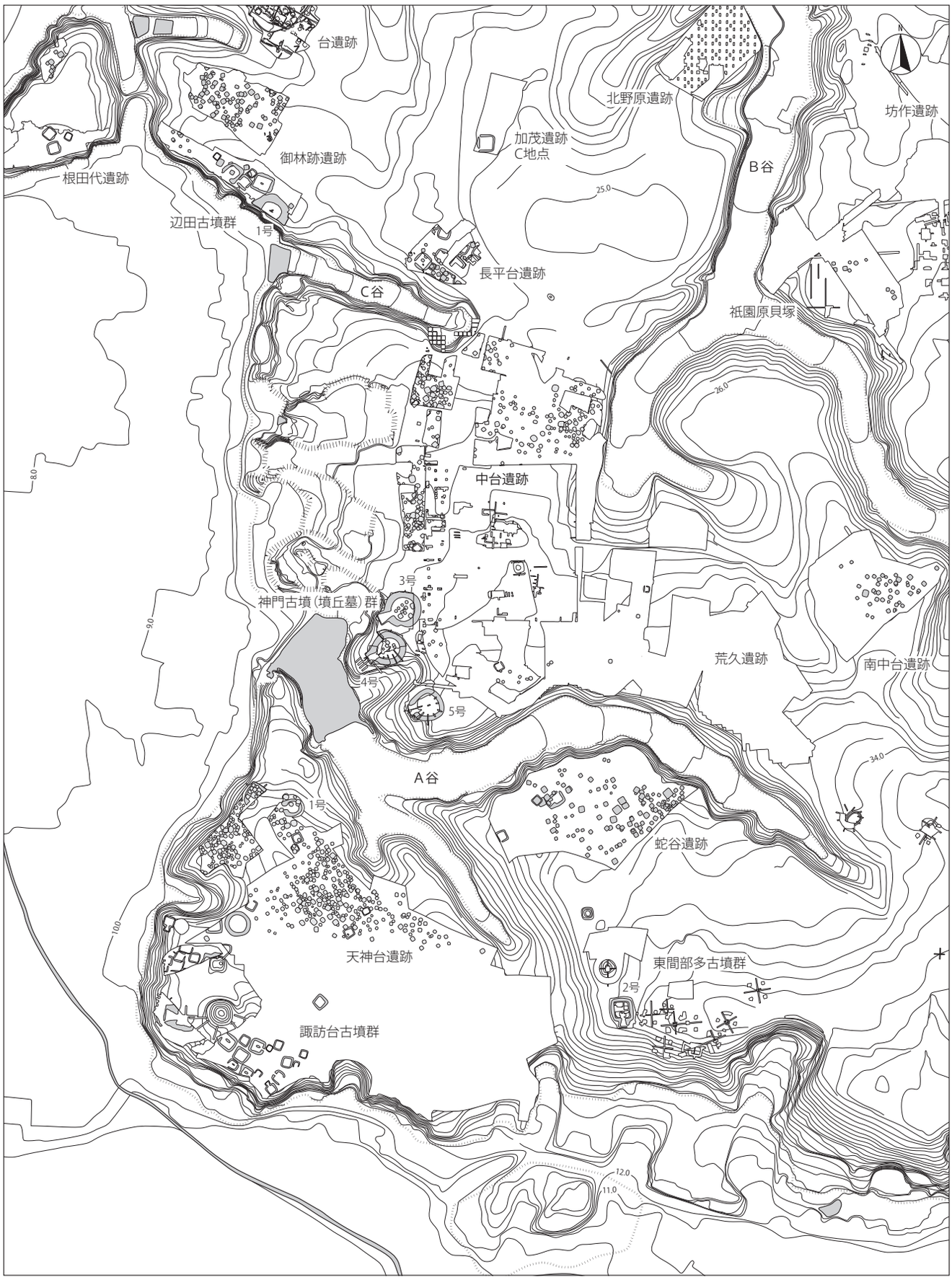


Fig.466　中台遺跡周辺の遺跡群

竪穴建物は、帰属時期が明確でないものを含め、104棟が検出されている。現在史跡として保存されている、遺跡中央の上総国分僧寺伽藍地部分の状況については明確でないが、遺跡南側にあたる殿屋敷・南辺部・東南部の各地区からは遺構が検出されていないことから、集落範囲は伽藍地部分の北側で収まるものと考えられる。

後期中葉の山田橋1式期には、いくつかの小さなまとまりをもちながらも、北辺部と西辺部北側の広い範囲に分散し、散漫な展開を示す。いっぽう、後期後葉の山田橋2式期には、遺構は北辺部南東側の比較的狭い範囲に集中し、より大きなまとまりに集約されていく傾向を伺うことができる。このなかには、他の竪穴建物を圧倒する規模を有する竪穴1367号が含まれており、その際だった優位性から、集落を率いたリーダーの居宅と考えられる。

（2）弥生時代終末期

検出された遺構数が最も多く、中台遺跡の中心となる時期である。竪穴建物は、帰属時期が明確でないものを含め、120棟が検出されており、棟持柱をもつ掘立柱建物（掘立3196号）と方形区画施設（溝2416号）、古墳1204号もこの時期の所産と考えられる。北辺部東側と西辺部で遺構の集中が認められるが、遺跡南側の殿屋敷地区・南辺部にも、数棟規模の小さな竪穴建物群が展開する。

終末期前半の中台1式期には西辺部北側と西辺部南側で遺構の集中が認められるが、それほど大きなまとまりには至っていない。西辺部北側からは伊勢・三河系とされる受口状口縁甕が特徴的に出土しているが、C谷谷頭部を挟んだ北側には東海西部系土器が多量に出土する長平台遺跡が位置し、時期的に接点をもつことから、密接な関連をもつと考えられる。なお、西辺部北側からはS字甕も出土しているが、多くは古墳時代前期前葉の草刈1式期の所産と考えられ、後述する古墳時代前期集落の動態のなかで捉えられよう。

終末期後半の中台2式期には北辺部東側と西辺部南側で大きなまとまりをもった竪穴建物群が形成される。両地点は時期的な接点をもちつつも、大きな流れとしては北辺部東側から西辺部南側に移動したものと考えられる。このうち北辺部東側の竪穴建物群からは北陸南西部系の有段口縁甕が多量に出土し、竪穴0106号のように北陸地方の竪穴平面形態の特徴をもち、直接的な人々の移住を想起させる遺構を含む。この区域はB谷左岸にあたるが、B谷から南東に分岐する支谷奥部には南中台遺跡が位置し、本遺跡同様に北陸南西部系の特徴をもつ各器種そろいの土器と竪穴建物が検出されている。南中台遺跡のほうがやや先行すると思われるが、時期的な接点をもち、密接な関連をもつ集落と考えられる。

西辺部南側の竪穴建物群からは畿内系のタタキ甕が多量に出土しているが、遺跡南側のA谷に面した小規模な竪穴建物群、さらにA谷を挟んだ南側台地上に位置する蛇谷遺跡からも出土しており、神門古墳（墳丘墓）群を取り囲むようにタタキ甕をもつ集団が存在する。また、A谷を挟んだ南西側には、神門と同系譜の墳形をもつ諏訪台1号墳が位置しており、これも関連する可能性が高い。

以上のことから、A谷沿いに畿内系、B谷沿いに北陸南西部系、C谷沿いに東海西部系というように、地域的・文化的アイデンティティーを同じくする集団が、同一の谷筋の近接した場所にそれぞれの集落を形成していたものと考えられる。またいっぽうでは、北辺部0008号では北陸系・畿内系・東海系・在地系の特徴を持つ土器が、西辺部0488号からは畿内系に混じって北陸系の土器が出土しており、

各集団間で密接な関係をもっていた痕跡も残されており、神門古墳（墳丘墓）群の出土遺物から想定された「葬送儀礼には広域からの人々の参画したさま」（田中1991）の下地となる様相を、集落においても垣間見ることができる。神門古墳（墳丘墓）群や祭祀的要素の強い方形区画施設の形成に関しても、外来系の人々の存在やさまざまな地域との交流が、直接的あるいは間接的に大きく影響していたことは間違いないであろう。また、その成立基盤として中心的な役割を担ったのは、西辺部南側の集団であった可能性が高いと思われる。

（3）古墳時代前期

竪穴建物は、帰属時期が明確でないものを含め、69棟が検出されており、古墳もこの時期が中心と考えられる。竪穴建物は西辺部北側に移動し、弥生時代終末期に竪穴建物が集中していた西辺部南側には方墳からなる墓域が形成される。

前期前葉の草刈1式期は41棟の竪穴建物が検出されており、前期でも中心となる時期である。このなかには竪穴0282・0390号のように、推定床面積が80㎡に近い大型建物が存在する。古墳については、部分的な検出のものが多く、溝の掘り込みや方形墳としての形態も不明瞭であることから、古墳520号以外は、不確実な要素を含む。いっぽう、この時期の竪穴建物は方形区画施設を壊して構築されているものと考えられ、前期前葉段階にはすでに機能を失っていたものと考えられる。

前期中葉の草刈2式期以降急速に遺構数を減らしており、蛇谷遺跡でも同様の傾向が認められる。前葉からの集落の継続性は乏しくなり、前期後葉の草刈3式期をもって、中台遺跡からは人々の生活の痕跡が見られなくなる。

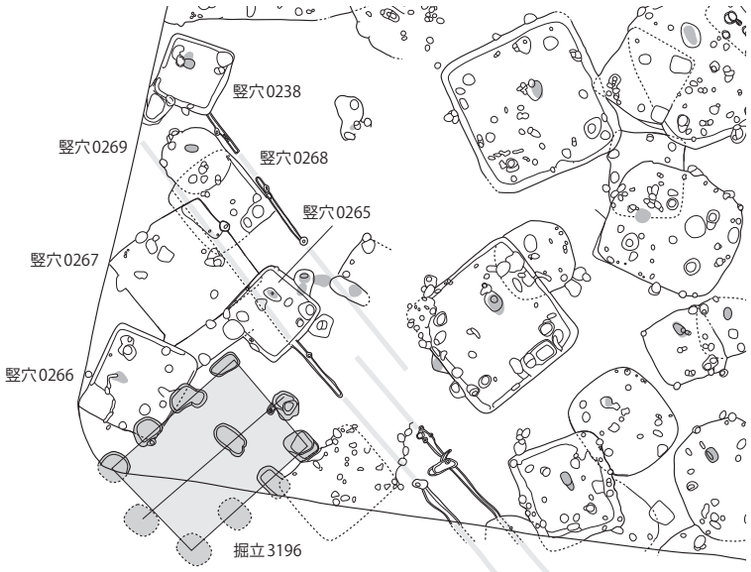
第5節　方形区画と近接棟持柱建物

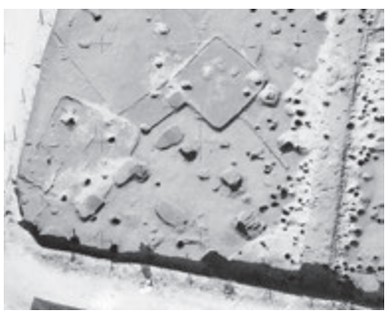
（1）遺構の時期

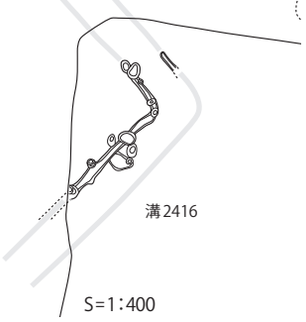
中台遺跡からは、並行する2条の浅い溝（溝2416号）からなる方形区画と、これに囲まれたと考えられる棟持柱をもつ掘立柱建物跡（掘立柱建物3196号）が検出された。

棟持柱とは「建物の妻側側面から離れて柱を立て切妻屋根先端の棟木を地面から直接支持する」もので、「妻側柱筋から外に大きくはなれた位置に棟持柱を立てる独立棟持柱建築遺構」と「妻側中央柱が柱筋に接するかあるいは柱1～2本分外側にずれて棟持柱を立てる近接棟持柱建物遺構」とに分けられる（宮本1991）。独立棟持柱建物の起源については、縄文晩期の新潟や北陸地方に系譜を求める考えもあるが（小林2004）、限られた地域内に一般的な建物として存在していることから、不明な点も多く、その評価は定まっていない。弥生時代の独立棟持柱建物に関しては、前期に出現し、中期後半になると一気に事例が増加。古墳時代は前・中期に顕著で、後期には減少する（広瀬1998）。いっぽう方形区画には、柵や溝によるものと本格的な濠をめぐらすものとがあり、東日本では、前者は弥生時代後期終末（庄内（古））、後者は古墳時代前期初頭（庄内（新））に出現する（鈴木2003）。

掘立柱建物3196号の場合、梁間中央に位置する棟持柱は、妻側側面から柱1本分程度（0.8m）外側に張り出しており、宮本の分類に従えば、「近接棟持柱建物」となろう。南側が調査区外に延びるため、もう一方の棟持柱の有無は明確でない。規模についても同様であるが、現状確認されている1間×3間で収まったとしても、50.84㎡（梁間6.2m・桁行8.2m）を測り、すでに大型建物と分類する



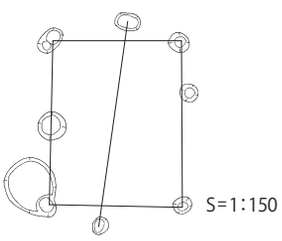




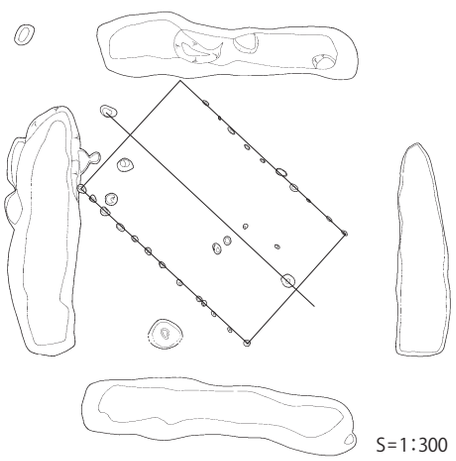
中台遺跡（弥生終末・古墳初頭）



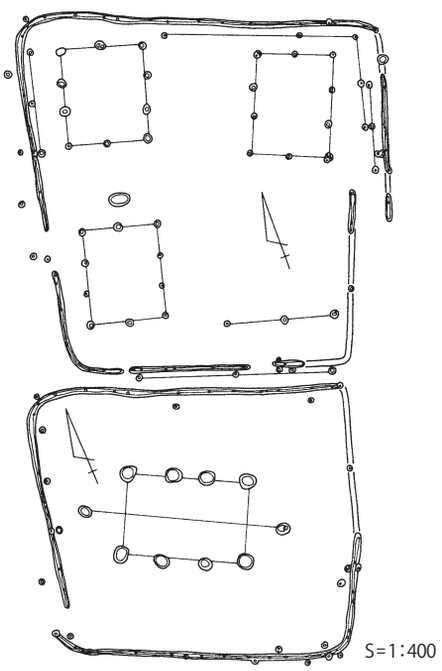
静岡県大平遺跡全体図



東金市道庭遺跡（弥生中期後半）



君津市常代遺跡（弥生中期中葉）



大平遺跡2号居館（古墳初頭）

Fig.467　中台遺跡と各地の方形区画・大型建物

に足る面積を有している。また、土坑325号は上層遺構編で報告したものであるが、位置と掘り方の平面形態から本遺構に伴う可能性があり、屋内棟持柱と考えられる。

溝2416号は、溝幅0.23～0.45m、確認面からの深さ0.16～0.22mを測り、断面形態はなだらかなV字状を呈している。重複する上総国分僧寺の造営に伴う整地や中・近世の撹乱によって、遺構検出面が当時の生活面よりも下がっていた可能性が高いとしても、大規模な掘り込みをもつ方形区画溝に復元することはできない。溝底部には柱痕跡も認められないことから、垣根や簡易な塀程度の施設と想定しておくのが妥当であろう。直線的に延びる溝にもかかわらず、外側溝の北東辺は直線で結ぶことができないが、この部分だけが曲線になるとは考えにくいことから、鉤の手状に空く通路の存在が想定される。また、並行する2条の溝は、近接した時期の所産とは思われるが、時間差をもち、同時存在はしない可能性も考えられる。これらと同様の特徴をもつ方形区画は、静岡県浜松市大平遺跡で確認されている（鈴木1992）。大平遺跡は庄内式新段階の方形区画をもつ集落跡で、集落内部が7ブロックに区画され、政治・祭祀的空間、首長一族の居住空間、倉庫空間、従者の居住空間が想定されている（鈴木2003）。

近接棟持柱建物（掘立柱建物3196号）と方形区画（溝2416号）の帰属時期は、出土遺物がないために明確でないが、3196号は古墳時代前期前～中葉の竪穴建物、2416号は弥生時代後期後半と古墳時代前期前葉の竪穴建物とそれぞれ重複することから、この間の弥生時代終末期の所産と考えるのが妥当であろう。ただし、重複関係から古墳時代前期前葉段階にはその機能が失われていたものと考えられ、存続期間は極めて短かった可能性が高い。

（2）遺構の性格

独立棟持柱建物の機能について宮本は、遺構数の希少性や神社建築との類似性、弥生土器や銅鐸に描かれていることから、のちの神殿につながる祭殿建築と考え、近接棟持柱建物についても、集落内での位置関係を勘案する必要はあるが、両面棟持柱に限っては独立棟持柱建物と同様に祭式儀礼のための象徴性を与えることは可能とする（宮本1996）。広瀬はこの考えを積極的に推し進め、独立棟持柱建物を「神殿」と見なしている（広瀬1998）。また、設楽は独立棟持柱建物を存在域から類型化し、竪穴住居群中に存在し、首長に独占されていない段階には、穀物倉庫や集会所という多機能な性格をもち、弥生時代後期後半から古墳時代になると、小型化して溝や柵に囲まれるなど、首長居館に取り込まれて秘儀的色彩を帯びてくる、という時期別の様相を想定している（設楽2009）。千葉県内では君津市常代遺跡（甲斐他1996）と東金市道庭遺跡（有沢他1983）で独立棟持柱建物の存在が知られている（広瀬1998・設楽2009）が、これらは弥生時代中期中葉ないし後半の所産である。南関東ではこの頃に盛行したのち、後期にはいったん見られなくなり、終末期から古墳時代初頭に再び出現する。小林は弥生時代中期後葉以降の様相が南関東と近畿でほぼ連動することを指摘し、近畿地域社会を軸としたシンボルコントロールの存在を想定（小林2004）しており、方形区画施設の形成に西辺部南側を中心としたタタキ甕を多く残した人々が深くかかわったとする考え方とも矛盾しない。

本遺跡から検出された近接棟持柱建物（掘立柱建物3196号）は、垣根や簡易な塀と考えられる方形区画（溝2416号）によって区切られている。いずれも調査区外に延び、区画施設のごく一部が検出されたに過ぎないことから、内部に首長居館とされるような大型竪穴建物や倉庫群などの諸施設が

伴っていたのかどうかを判断することはできない。しかし、これらの施設は弥生時代終末期に機能していた可能性が高く、同時期の集落域と考えられる竪穴建物群は区画外に存在することから、非日常的な空間を確立するための施設と考えるのが妥当であろう。この時期、県内の手賀沼水系では、タタキ甕などの外来系土器が多く出土する柏市戸張一番割遺跡や呼塚遺跡などで方形環濠が現れるが、いずれも区画内に一般集落域を取り込んでおり、本遺跡の方形区画とは性格が異なると考えられる。

近接棟持柱建物が祭殿であり、方形区画施設が祭事を執り行う空間であったとするならば、それらを司る首長の存在が不可欠である。このような施設を率いるにふさわしい人物には、神門古墳（墳丘墓）群の被葬者を対応させるのが最も自然であろう。そこには、西辺部南側の集団を母体としながらも、各地域に出自をもつ集団から共立されたリーダーの存在が浮かび上がる。

近接棟持柱建物を伴う方形区画施設は、田中が想定した「単なる大型竪穴住居址の枠を超えた区画域と建物群」（田中1991）に相当する可能性が極めて高いと考えられるが、この時期の棟持柱をもつ祭祀的な建物は一世代しか存続しないのが一般的で、囲繞施設内に首長居宅を構成するしないにかかわらず、首長の代替わりとともに廃絶、新設される（広瀬1998）ことから、神門古墳（墳丘墓）群の被葬者のうちの、いずれかが残した施設と捉えられよう。そして、被葬者の謎を解くカギとなる首長居館をはじめとする中心施設は、未調査区域に存在するものと考えられる。

引用・参考文献

赤塚次郎　1990　『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1997　『西上免遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

浅利幸一　1989　「神門3号墳」『市原市文化財センター年報（昭和62年度）』

浅利幸一　2005　『市原市加茂遺跡A・B地点』上総国分寺台遺跡調査報告XV　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会

有沢　要・石本俊則・小高春雄　1983　『道庭遺跡』道庭遺跡調査会

市毛　勲・須田　勉・新田栄治　1977　『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅳ　上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会

大村　直　2004　『市原市山田橋大山台遺跡』財団法人市原市文化財センター

大村　直　2005　『市原市根田代遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告XIII　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会

大村　直　2009　『市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点』上総国分寺台遺跡調査報告XX　市原市教育委員会

大村　直　2010　「土器の移動と移住」『房総の考古学』史館終刊記念　株式会社六一書房

忍澤成視　1999　『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告V　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会

甲斐博幸他　1996　『常代遺跡群』財団法人君津郡市文化財センター

川村浩司　1994　「関東南部における北陸系土器の様相について」『庄内式土器研究』VI　庄内式土器研究会

菊池健一　1990　「一つの甕から−弥生時代後期から古墳時代はじめにかけての叩き甕について−」『史館』第22号　史館同人

木對和紀　2004　『市原市御林跡遺跡・辺田古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告XII　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会

木對和紀　2008　『市原市御林跡遺跡II』上総国分寺台遺跡調査報告XVIII　市原市教育委員会

黒住耐二　1994　「柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体」『上高津貝塚A地点』土浦市教育委員会

小出紳夫　2002　『坊作遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告VI　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会

小橋健司　2004　『市原市山倉古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告XI　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会

小橋健司　2006　『市原市長平台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告XVI　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会

小林青樹　2004　「弥生時代の祭場　東海以東」『季刊考古学』第86号　雄山閣

櫻井敦史　2009　『上総国分僧寺跡I』上総国分寺台遺跡調査報告XIX　市原市教育委員会

設楽博己　2009　「独立棟持柱建物と祖霊祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集

鈴木敏則　1992　『佐鳴湖西岸遺跡群 本文編Ⅰ』財団法人浜松市文化協会
鈴木敏則　2003　「東海・関東における大型建物・方形区画の出現と展開」『日本考古学協会　2003年滋賀大会資料集』日本考古学協会2003年滋賀大会実行委員会
鈴木敏則　2004　「第3節　有力集落の変遷」『梶子遺跡X』財団法人浜松市文化協会
須田　勉　1979　「国分僧寺北辺部の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団
須田　勉　1981　『上総国分僧寺跡−寺域東南部における調査−』上総国分寺台遺跡調査団
須田　勉・浅利幸一　1982　『上総国分僧寺跡−寺域北辺部における調査−』上総国分寺台遺跡調査団
高城大輔　2012　「古墳出現期における濠を巡らすムラ〜手賀沼水系を中心として〜」『ムラから村へ−掘りおこす土地の歴史−』第7回千葉県北西部地区文化財発表会配布資料
高橋康男　2002　『市原市向原台遺跡・東向原台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅶ　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
田嶋明人　2011　「古墳確立期土器の広域編年　東日本を対象とした検討（その4）」『西相模考古』第20号　西相模考古学研究会
田中新史・宮本敬一　1974　「国分寺周辺の環境および遺跡」『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ　上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
田中新史　1977　「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第63号　早稲田大学考古学会
田中新史　1984　「出現黄古墳の理解と展望　−東国神門5号墳の調査と関連して−」『古代』第77号　早稲田大学考古学会
田中新史　1991　「神門三・四・五号墳と古墳の出現」『歴博フォーラム・邪馬台国時代の東日本』国立歴史民俗博物館
田中新史　2000　『上総市原台の光芒　市原古墳群調査と上総国分寺台遺跡調査団』市原古墳群刊行会
鶴岡英一・忍澤成視　2007　『市原市西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告XVII　市原市教育委員会
西田道世・鷹野光行・米田耕之助　1974　「東間部多遺跡」『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ　上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
早野浩二　2000　「S字甕の履歴（1）−伊勢湾沿岸地域における出現から定着まで−」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
半田堅三　2003　『市原市台遺跡B地点』上総国分寺台遺跡調査報告X　財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
比田井克仁　1987　「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第63号　早稲田大学考古学会
比田井克仁　2000　「受け口状口縁甕考」『西相模考古』第9号　西相模考古学研究会
比田井克仁　2003　「土器移動の類型と原理」『法政考古学』第30集　法政考古学会
広瀬和雄　1998　「クラから神殿へ−古代カミ観念に関する一試論」『先史日本の住居とその周辺』同成社
西川修一　1991　「関東のタタキ甕」『神奈川考古』第27号　神奈川考古同人会
西村正衛　1984　『石器時代における利根川下流域の研究−貝塚を中心として−』早稲田大学出版部
宮本長次郎　1996　『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
山田隆一　2004　「弥生時代の祭場　近畿−大型建物の変遷とその性格について−」『季刊考古学』第86号　雄山閣

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちはらしなかでいせき
書　名	市原市中台遺跡
副書名	上総国分寺台遺跡調査報告
巻　次	XXII
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	鶴岡英一・櫻井敦史
編集機関	市原市教育委員会（市原市埋蔵文化財調査センター）
所在地	〒290−0011　千葉県市原市能満1489番地　TEL 0436（41）9000
発行年月日	2013年（平成25年）1月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
なかでいせき 中台遺跡	ちばけんいちはらしそうじゃ 千葉県市原市惣社 4丁目6番地他	12219	745	35° 29′ 52″	140° 6′ 38″	1966～1968 1974～ 19751227 19780105～ 19790331 19790501～ 19800331 19800501～ 19810331 19810501～ 19820331 19820401～ 19830331 19830501～ 19840131 19890701～ 19891011 19900219～ 19900331 19900401～ 19900831	69,782	土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中台遺跡	集落跡	縄文時代	炉穴64基 土坑22基	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、石製品（石棒・臼玉）、土製品（土器片錘・土器円盤・勾玉・土玉・紡錘車）、鉄鎌・ヘラ状角製品	神門古墳（墳丘墓）群の母村と捉えうる、弥生時代終末期（古墳時代早期）を中心とする集落。北陸系・畿内系を中心とする外来系土器が多量に出土した。掘立柱建物は棟持柱を伴い、方形区画施設とともに首長居館に関連する可能性がある。
		弥生時代後期中葉～古墳時代前期	竪穴建物350棟 掘立柱建物1棟 土坑8基 古墳（墳墓）　2基 古墳（墳墓）？9基 方形区画溝2条		

要約	遺跡は上総国分僧寺跡と同一地に位置し、僧寺創建以前に形成された遺構群を対象とする。弥生時代後期中葉から古墳時代前期にかけての遺構が検出されるが、中心は弥生時代終末期（古墳時代早期）である。遺構からは北陸系・畿内系などの外来系土器が多量に出土し、遠距離間交流の拠点として注目される。棟持柱付建物を伴う方形区画施設は、神門3～5号墳被葬者のいずれかが残したものと思われ、外来系集団の存在や各地域との交流の影響が背景にあったものと考えられる。方形区画施設は、古墳時代前期前葉にはすでに機能を失っており、前期後葉をもって遺跡から人々の生活の痕跡が見られなくなる。

印刷製本仕様

仕様ソフト・ファイル形式

ＯＳ　Microsoft Windows7 SP1

編集・レイアウト　Adobe InDesign CS3（5.0.4）

挿図レイアウト・トレース　Adobe Illustrator CS3（13.0.3）

全体図作成　PlugX−Shape 4.0（Adobe Illustratorプラグイン）

画像・レタッチ　Adobe Photoshop CS2（9.0.2）・CS3（10.0.1）・CS5.1（12.1）

データ内容（画像解像度等）

挿図（遺構図）　デジタルトレース

挿図（遺物図）　アナログトレース（モノクロ２階調1200ppi）

写真図版　350〜400ppi（グレースケール・CMYKカラー）

使用フォント　小塚Open Type Pro

印刷仕様

本　文　AMスクリーン 175線（本文内挿図・写真を含む）

写真図版　FMスクリーン 20μ

用　紙

表　紙　紀州の色上質（肌色）、表紙マットPP加工　四六判超厚口

見返し　ニューパールカラーRE（クリーム）　A判64.0kg

扉・中身　琥珀　A判46.5kg

写真図版　ニューエイジ　A判70.5kg

ＰＤＦ

印刷物のPDF（1.4）は、Adobe Acrobat 8によるPDF設定の「標準」を基本とする。写真図版遺物RGB版PDF（1.4）については画像をバイキュービックダウンサンプル300ppi、圧縮自動（JPEG）、画質最高とし、撮影時のICCプロファイル（AdobeRGB 1998）を埋め込む。アンシャープマスク処理は行っていない。制作時モニタ設定は、色温度5000K、ガンマ値2.0である。閲覧環境によって、色調は変化する

閲覧のためには、Adobe Acrobat Reader5.0以降（無償版）、ないしAdobe Acrobat（製品版）が必要である。

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第24集

上総国分寺台遺跡調査報告XXII

市原市中台遺跡

平成25年1月18日　発行

編集発行　市原市教育委員会
埋蔵文化財調査センター
市原市能満1489番地
TEL 0436（41）9000

印　刷　株式会社弘報社印刷
千葉市緑区古市場町474−268
ちば印刷団地内
TEL 043（268）2371